

三木市

吉田住吉山遺跡群

吉田住吉山遺跡・吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・高男寺本丸遺跡

— 主要地方道三木三田線住宅宅地関連公共事業施設等総合整備促進事業に伴う発掘調査報告書 —

〔本文・図版編〕

2011 (平成23) 年3月

兵庫県教育委員会

三 木 市

吉田住吉山遺跡群

吉田住吉山遺跡・吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・高男寺本丸遺跡

— 主要地方道三木三田線住宅宅地関連公共事業施設等総合整備促進事業に伴う発掘調査報告書 —

[本文・図版編]

2011（平成23）年3月

兵庫県教育委員会



遺跡遠景 西上空から



遺跡近景 東上空から



遺跡全景 西上空から



遺跡全景 南西上空から



遺跡俯瞰（上が東）



主郭全景 北西から



主郭全景 東から



主郭 SK11 北から



主郭 SK10 南から



主郭 SK47 南から



主郭 SK57 東から



主郭 集石6 南から



主郭 鍛冶炉2・3 北から



土壘1 集石10 北から



土壘1 集石13・14 北から



土塁1 金属工房1 南から



土塁1 金属工房1・炉1等 西から



土塁・空堀 全景 南西から



土塁・空堀 全景 南から



帯曲輪3 全景 南西から



帯曲輪2 全景 東から



帯曲輪1 全景 東から



堀切 全景 南から



谷東 北部 南西から



谷東・谷西 南部 西から



西曲輪1・2、帯曲輪4 全景 北東から



西曲輪1・2、帯曲輪4 全景 北東から



中世の土器



土師器 皿



土師器 鍋・鉢



須恵器



備前焼甕 (8)



備前焼・瀬戸美濃焼



丹波焼



丹波焼刻画（198）



輸入磁器



短刀・小刀



鉄鏃



小札



漆塗小札 (M21)

朱漆塗不明武具 (M45)



鉄釘



五徳 (M351)



銅製飾金具 (M408) 藁状繊維付着状況 (最下段)



銅製飾金具 (M409・M411)



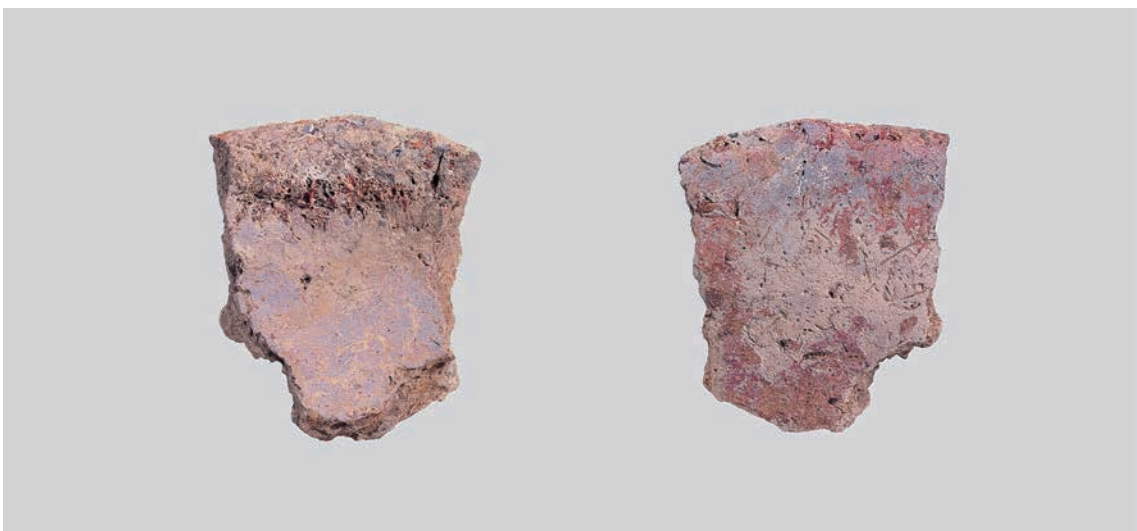
緡銭 (M442~M496)



銅塊 (M413)



銅塊 (M414)・銅板 (M415)・銅滴 (M416)



トリベ (227)



石硯 (S1)



温石 (S4)



石硯刻銘 (S1)



吉田住吉山古墳群

全景（上が東）



全景 東から



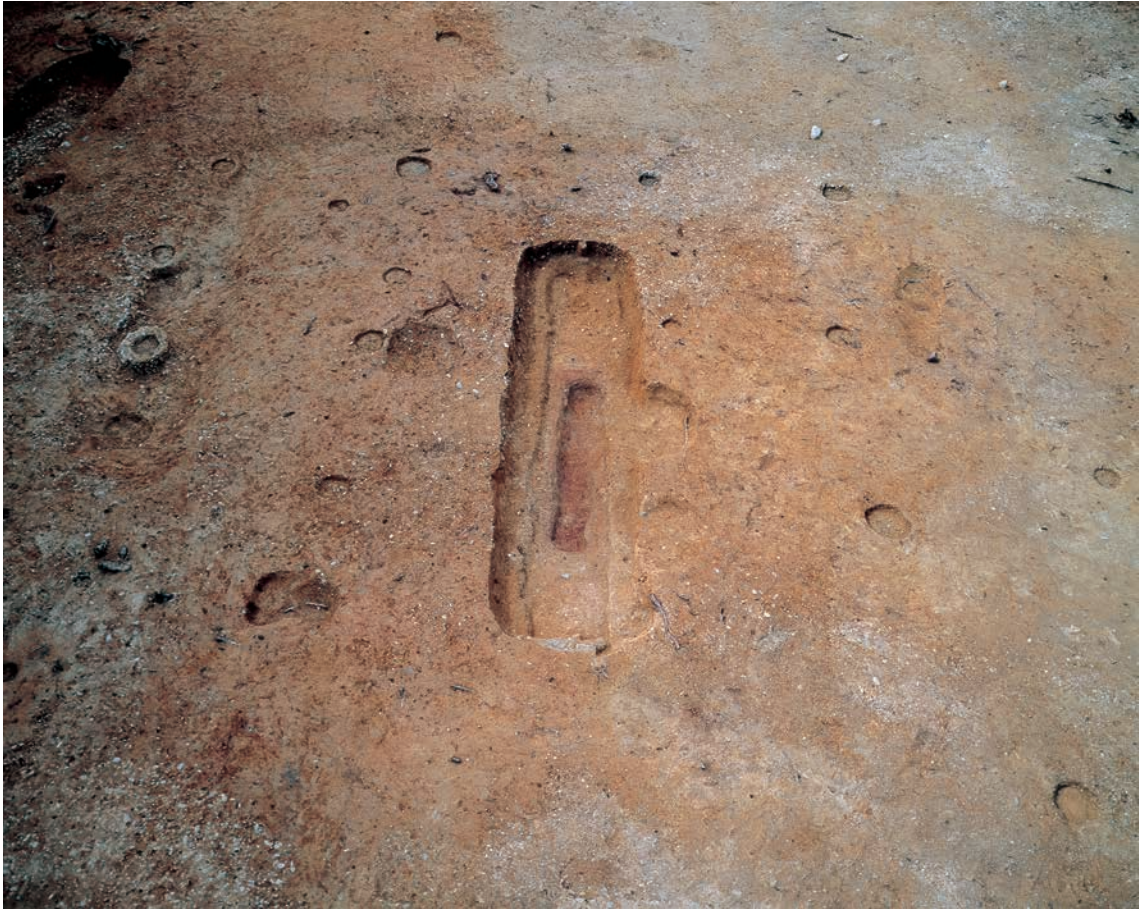
全景 西から



全景 西から



全景 北西から



吉田住吉山1号墳 全景 東から



吉田住吉山1号墳 埋葬施設 北から



吉田住吉山2号墳 全景 東から



吉田住吉山2号墳 周溝出土 須恵器 甕 (401)



吉田住吉山3号墳 石棺 蓋石状況 北から



吉田住吉山3号墳 石棺 北から



吉田住吉山4号墳 全景 南から



吉田住吉山4号墳 埋葬施設 南から



吉田住吉山5号墳 北石棺 北から



吉田住吉山5号墳 土師器 壺 (402)



吉田住吉山7号墳 北埋葬施設 東小口遺物出土状況 西から



吉田住吉山7号墳 南埋葬施設 東小口遺物出土状況 西から



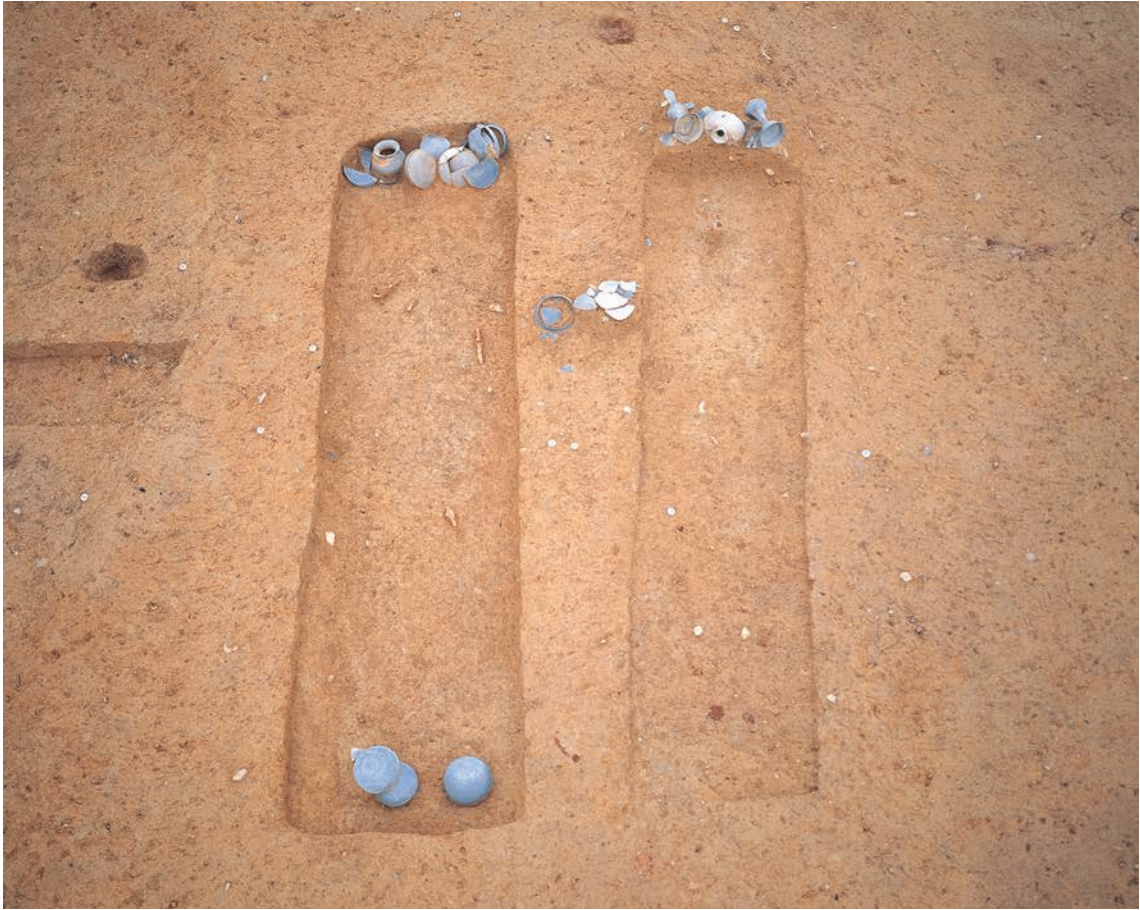
吉田住吉山7号墳 埋葬施設 出土遺物



吉田住吉山7号墳 周溝 出土遺物



吉田住吉山7号墳 周溝 須恵器 坏蓋 (421) 粘土紐巻き上げ状況



吉田住吉山9号墳 埋葬施設 西から



吉田住吉山9号墳 周溝他 出土遺物



吉田住吉山9号墳 南埋葬施設 東小口 須恵器 出土状況 東から



吉田住吉山9号墳 南埋葬施設 東小口 出土遺物



吉田住吉山9号墳 北埋葬施設 西小口 出土遺物



吉田住吉山9号墳 北埋葬施設 出土遺物



吉田1号墳 埋葬施設 西から



吉田1号墳 埋葬施設 出土遺物



吉田32号墳 全景 北から



吉田32号墳 出土遺物 (607・604)



吉田古墳群 SX02



吉田古墳群 SX02 出土遺物 (610・608・609)



吉田住吉山遺跡 SK93 遺物出土状況 北西から



吉田住吉山遺跡 出土 弥生土器 (701・703)

例 言

1. 本書は、三木市志染町に所在する吉田住吉山遺跡群（吉田住吉山遺跡・吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・高男寺本丸遺跡）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は主要地方道三木三田線住宅地関連公共事業施設等総合整備促進事業に先立つもので、兵庫県北播磨県民局三木土木事務所からの依頼を受け、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。発掘調査は、平成14年度に吉田古墳群の、平成15年度に吉田住吉山遺跡・吉田古墳群・吉田住吉山古墳群・高男寺本丸遺跡の、平成16年度に吉田住吉山遺跡の調査を実施した。
3. 本発掘調査は、平成14年度が兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館）山田清朝・小川弦太が、平成15年度は同山田清朝・篠宮 正・池田征弘が、平成16年度は山田清朝が、それぞれ担当した。
発掘調査は、平成14年度と平成15年度は株式会社 星村建設が、平成16年度は株式会社 高階が、それぞれ請負い、実施した。
4. 調査後の空中写真の撮影および図化は、平成14年度が株式会社中庭測量コンサルタントに、平成15年度が株式会社 日建技術コンサルタントに、平成16年度が株式会社アコードに、それぞれ委託して行った。
5. 整理作業は、平成20年度から兵庫県立考古博物館および魚住分館にて実施した。
6. 遺物写真の撮影は、兵庫県教育委員会が谷口フォト株式会社に委託して行った。
7. 調査は、国家水準点をもとに3級基準点を設置しておこなった。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に位置する。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書で使用した遺構番号は、遺跡ごとに呼称した。また、各遺構は以下のように呼称した。
掘立柱建物跡→SB、柱穴→P、土坑→SK、溝→SD、
10. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
11. 本書の編集は栗山美奈の補助を得て、吉田住吉山遺跡（城跡）を池田が、吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・吉田住吉山遺跡（弥生時代）を篠宮が、高男寺本丸遺跡を山田が担当し、最終的に山田が全体のとりまとめを行った。各執筆分担は、目次に示すとおりである。
12. 本報告にかかわる遺物・写真・遺構図等は兵庫県立考古博物館に保管している。
13. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々・機関等の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。
青木哲哉・稲原昭嘉・市沢 哲・大谷博志・大道和人・垣内 光次郎・神崎 勝・久保智康・小網 豊
小林基伸・酒井元樹・佐藤寛介・佐藤竜馬・多田暢久・千種 浩・津野 仁・中村大介・西岡誠司
東 和幸・松村正和・真鍋成史・宮田逸民・宮本 博・村田修三・森下大輔・安田 滋
性海寺・鹿児島県歴史資料センター黎明館・鹿児島神宮・奈良県立橿原考古学研究所

吉田住吉山遺跡群 目次

第1章 遺跡を取り巻く環境	(山田)
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	5
第3節 吉田住吉山遺跡について	8
第2章 調査の経緯	(山田)
第1節 調査の起因	12
第2節 分布調査・確認調査	14
第3節 本発掘調査	16
第4節 整理作業	20
第3章 吉田住吉山遺跡群の調査	
第1節 調査の概要	(山田) 21
第2節 城跡の調査(吉田住吉山遺跡)	(池田) 22
第3節 古墳群の調査(吉田住吉山古墳群・吉田古墳群)	(篠宮) 90
第4節 集落跡の調査(吉田住吉山遺跡)	(篠宮) 110
第4章 高男寺本丸遺跡の調査	(山田) 116
第5章 吉田住吉山遺跡出土遺物の自然科学分析	
第1節 炭化材の樹種同定	120
第2節 植物遺体同定	124
第3節 土器の胎土分析	127
第4節 吉田住吉山遺跡出土須恵器の産地問題	141
第5節 岩石肉眼鑑定	146
第6節 石材の蛍光X線分析	149
第7節 吉田住吉山遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	155
第8節 吉田住吉山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査	159
第9節 吉田住吉山遺跡出土銅関連遺物の金属学的調査	182
第10節 吉田住吉山遺跡から出土した貝類遺存体	189
第11節 吉田住吉山遺跡出土中世遺物の蛍光X線分析	(岡本) 194
第12節 吉田住吉山遺跡群出土赤色顔料の蛍光X線分析	(岡本) 198
第6章 まとめ	
第1節 弥生時代	(篠宮) 206
第2節 古墳時代	(篠宮) 208
第3節 中世	(池田) 220
第4節 総括	(山田) 258

付 表

- 付表 1 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器一覽表(1)～(11)
 - 付表 2 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器個体度数数量表(1)～(14)
 - 付表 3 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器地区別個体度数数量表
 - 付表 4 吉田住吉山遺跡（城跡）出土鉄製品一覽表(1)～(11)
 - 付表 5 吉田住吉山遺跡（城跡）出土銅製品一覽表
 - 付表 6 吉田住吉山遺跡（城跡）出土銅錢一覽表(1)～(3)
 - 付表 7 吉田住吉山遺跡（城跡）出土石製品一覽表
 - 付表 8 吉田住吉山古墳群・吉田住吉山遺跡（弥生）出土土器一覽表(1)～(4)
 - 付表 9 吉田住吉山古墳群出土鉄製品一覽表
 - 付表 10 吉田住吉山古墳群出土玉類一覽表
 - 付表 11 吉田住吉山遺跡出土石器一覽表
- 報告抄録

図 版

付 図

- 付図 1 吉田住吉山遺跡（城跡）全体図
- 付図 2 中世遺物出土位置図
- 付図 3 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・吉田住吉山遺跡（弥生）全体図
- 付図 4 弥生・古墳遺物出土位置図

挿 図 目 次

第 1 図	三木市の位置	1	第 32 図	S K 10～S K 13 配置図	31
第 2 図	遺跡の位置	1	第 33 図	S K 11 の検出作業	32
第 3 図	三木市の地理的位置	2	第 34 図	S K 35～S K 38 配置図	36
第 4 図	東上空からみた調査地	2	第 35 図	集石の検出	40
第 5 図	調査位置図	3	第 36 図	主郭 集石他配置図	41
第 6 図	調査地周辺の地形環境	4	第 37 図	集石 2～集石 4 配置図	42
第 7 図	主要周辺遺跡	6	第 38 図	鍛冶炉 2・鍛冶炉 3 配置図	45
第 8 図	三木城付城(1)	8	第 39 図	五徳復元図	49
第 9 図	三木城付城(2)	9	第 40 図	接合小札 (M31～M36) の個別外形	51
第 10 図	播磨鑑	10	第 41 図	丹波焼刻画拓影	52
第 11 図	吉田古墳群 (21 号墳～24 号墳)	10	第 42 図	土塁 1 上層平面図	53
第 12 図	調査地と 吉田古墳群・吉田住吉山古墳群	11	第 43 図	土塁 1 下層平面図	54
第 13 図	工事中の吉田住吉山遺跡群	12	第 44 図	土塁・空堀群の調査	60
第 14 図	工事計画と埋蔵文化財包蔵地(1)	12	第 45 図	土塁・空堀群遺構配置図	61
第 15 図	竣工後の吉田住吉山遺跡群遠景 (東から)	13	第 46 図	土塁・空堀群断面図	62
第 16 図	竣工後の吉田住吉山遺跡群近景 (南西から)	13	第 47 図	帯曲輪 3 遺構配置図	65
第 17 図	工事計画と埋蔵文化財包蔵地(2)	13	第 48 図	帯曲輪 2 遺構配置図	67
第 18 図	吉田住吉山遺跡 確認調査位置図	15	第 49 図	帯曲輪 1 遺構配置図	69
第 19 図	吉田住吉山遺跡群年度別調査位置図	17	第 50 図	東斜面遺構配置図	72
第 20 図	現地説明会	18	第 51 図	掘切の検出(1)	73
第 21 図	小学生の体験発掘	19	第 52 図	掘切の検出(2)	73
第 22 図	吉田住吉山遺跡 説明板	19	第 53 図	掘切遺構配置図	74
第 23 図	調査前の土塁・空堀	21	第 54 図	石硯刻銘拓影・积文	77
第 24 図	土器の取上げ	21	第 55 図	谷東・谷西北部遺構配置図	78
第 25 図	調査区外に見られる段状遺構	21	第 56 図	谷東・谷西南部遺構配置図	79
第 26 図	城跡全体図	22	第 57 図	通路 1	82
第 27 図	全体地区割図	23	第 58 図	西帯曲輪 1・2 帯曲輪 4 遺構配置図	87
第 28 図	ブロック配置図	24	第 59 図	谷西南端部・帯曲輪 5 遺構配置図	88
第 29 図	主郭の調査	26	第 60 図	吉田住吉山古墳群・吉田古墳群	90
第 30 図	主郭 掘立柱建物跡・ピット位置図	27	第 61 図	3 号墳の調査	92
第 31 図	主郭 土坑位置図	30	第 62 図	3 号墳北石棺 棺材の取上げ	93
			第 63 図	4 号墳の調査	94
			第 64 図	5 号墳 北棺の調査	95
			第 65 図	9 号墳 北棺の調査	102

第 66 図	吉田住吉山 9 号墳 下層棺	103	第 99 図	FeO-TiO ₂ 二元平衡状態図	169
第 67 図	吉田住吉山古墳群包含層出土土器	105	第 100 図	鍛冶滓の顕微鏡組織	173
第 68 図	吉田 1 号墳の調査	106	第 101 図	鍛冶滓の顕微鏡組織	174
第 69 図	吉田住吉山古墳群表採土器	108	第 102 図	鍛冶滓の顕微鏡組織	175
第 70 図	S X02 の実測	108	第 103 図	鉄塊系遺物の顕微鏡組織	176
第 71 図	弥生時代の遺構	110	第 104 図	鉄素材の顕微鏡組織	177
第 72 図	高男寺本丸遺跡調査位置図	116	第 105 図	鉄素材の顕微鏡組織	178
第 73 図	高男寺本丸遺跡 基本土層図	117	第 106 図	鑄造鉄器片の顕微鏡組織	179
第 74 図	S D03 の検出	118	第 107 図	鉄釘の顕微鏡組織	180
第 75 図	炭化材(1)	122	第 108 図	鉄釘の顕微鏡組織	181
第 76 図	炭化材(2)	123	第 109 図	銅塊の顕微鏡組織	
第 77 図	大型植物遺体・植物珪酸体	126		EMPA 調査結果	186
第 78 図	各粒度階における 鋳物・岩石出現頻度(1)	132	第 110 図	青銅鍋の顕微鏡組織	187
第 79 図	胎土中の粒径組成(1)	132	第 111 図	青銅鍋のEMPA 調査結果	188
第 80 図	各粒度階における 鋳物・岩石出現頻度(2)	133	第 112 図	アカニシ	193
第 81 図	胎土中の粒径組成(2)	133	第 113 図	銅銭の銅錫鉛比	196
第 82 図	各粒度階における 鋳物・岩石出現頻度(3)	134	第 114 図	分析試料と蛍光 X 線スペクトル図 (1)	199
第 83 図	胎土中の粒径組成(3)	134	第 115 図	分析試料と蛍光 X 線スペクトル図 (2)	200
第 84 図	碎屑物・基質・孔隙の割合	135	第 116 図	分析試料と蛍光 X 線スペクトル図 (3)	201
第 85 図	胎土薄片(1)	137	第 117 図	分析試料と蛍光 X 線スペクトル図 (4)	202
第 86 図	胎土薄片(2)	138	第 118 図	分析試料と蛍光 X 線スペクトル図 (5)	203
第 87 図	胎土薄片(3)	139	第 119 図	分析試料と蛍光 X 線スペクトル図 (6)	204
第 88 図	胎土薄片(4)	140	第 120 図	分析試料と蛍光 X 線スペクトル図 (7)	205
第 89 図	吉田住吉山遺跡 出土須恵器の両分布図	144	第 121 図	吉田住吉山 9 号墳北棺出土 類似刀子	209
第 90 図	吉田住吉山遺跡 出土中世陶器の両分布図	145	第 122 図	吉田住吉山古墳・吉田古墳の変遷	211
第 91 図	石材(1)	147	第 123 図	S X02 土器棺復元	212
第 92 図	石材(2)	148	第 124 図	墓壇に土器を埋置する埋葬施設	215
第 93 図	サヌカイトの産地推定判別図(1)	151	第 125 図	吉田住吉山群の棺長と埋葬頭位	216
第 94 図	サヌカイトの産地推定判別図(2)	152	第 126 図	土師器皿の分類	220
第 95 図	黒曜石の産地推定判別図(1)	153	第 127 図	土師器皿A1aのへら状痕跡	221
第 96 図	黒曜石の産地推定判別図(2)	154			
第 97 図	[参考]暦年較正年代グラフ	158			
第 98 図	Fe-O 系平衡状態図	168			

第128図	土師器皿の法量	221	第142図	刀類	235
第129図	土師器鍋の分類	223	第143図	鉄鏃	237
第130図	その他の土師器	224	第144図	小札	239
第131図	須恵器碗の分類	225	第145図	枝菊文をもつ飾金具	241
第132図	須恵器鉢の分類	225	第146図	装着側のカーブ	242
第133図	須恵器 播鉢	226	第147図	鉄釘の分類	243
第134図	須恵器甕の分類	227	第148図	釘の長さ	243
第135図	その他の須恵器	228	第149図	釘の断面	244
第136図	瓦質土器	228	第150図	金属製品生産関連の遺物	246
第137図	備前焼	229	第151図	遺構の変遷	248
第138図	丹波焼	230	第152図	丹生山攻め関連地図	253
第139図	丹波焼壺の人物刻画	231	第153図	石硯の刻銘	254
第140図	瀬戸美濃焼	232	第154図	主郭より丹生山を望む	255
第141図	輸入磁器	232			

表 目 次

第1表	主要周辺遺跡	6	第18表	供試材の化学組成	171
第2表	主郭ピット一覧表	29	第19表	出土遺物の調査結果のまとめ	172
第3表	土塁1ピット一覧	56	第20表	供試材の科学組成	185
第4表	谷東ピット一覧	80	第21表	種名表	189
第5表	谷西ピット一覧	83	第22表	貝類一覧(1)	191
第6表	高男寺本丸遺跡出土土器一覧	119	第23表	貝類一覧(2)	192
第7表	樹種同定結果	120	第24表	銅製品・銅素材の成分比率	194
第8表	胎土分析試料一覧および胎土分類	127	第25表	銅銭の成分比率	196
第9表	薄片観察結果(1)	129	第26表	羽口・トリベの成分比率	197
第10表	薄片観察結果(2)	130	第27表	赤色顔料の成分比率	197
第11表	薄片観察結果(3)	131	第28表	赤色顔料分析資料一覧	199
第12表	分析資料一覧	143	第29表	吉田住吉山古墳群・吉田古墳群一覧	218
第13表	石材資料一覧	146	第30表	中世土器個体数数量表	234
第14表	サヌカイト原石採取地と判別群名称	149	第31表	釘の出土地区	244
第15表	黒曜石原石採取地と判別群名称	149	第32表	銅銭の種類	244
第16表	出土石器の産地推定結果	150	第33表	中世の志染(1)	251
第17表	供試材の履歴と調査項目	170	第34表	中世の志染(2)	252

巻首図版目次

巻首図版 1

遺跡遠景 西上空から

遺跡近景 東上空から

巻首図版 2

遺跡全景 西上空から

遺跡全景 南西上空から

巻首図版 3

遺跡俯瞰（上が東）

巻首図版 4

主郭全景 北西から

主郭全景 東から

巻首図版 5

主郭 SK11 北から

主郭 SK10 南から

巻首図版 6

主郭 SK47 南から

主郭 SK57 東から

巻首図版 7

主郭 集石6 南から

主郭 鍛冶炉2・3 北から

巻首図版 8

土塁1 集石10 北から

土塁1 集石13・14 北から

巻首図版 9

土塁1 金属工房1 南から

土塁1 金属工房1・炉1等 西から

巻首図版 10

土塁・空堀 全景 南西から

土塁・空堀 全景 南から

巻首図版 11

帯曲輪3 全景 南西から

帯曲輪2 全景 東から

巻首図版 12

帯曲輪1 全景 東から

堀切 全景 南から

巻首図版 13

谷東 北部 南西から

谷東・谷西 南部 西から

巻首図版 14

西曲輪1・2、帯曲輪4 全景 北東から

西曲輪1・2、帯曲輪4 全景 北東から

巻首図版 15

中世の土器

巻首図版 16

土師器 皿 土師器 鍋・鉢

巻首図版 17

須恵器 備前焼甕(8)

巻首図版 18

備前焼・瀬戸美濃焼 丹波焼

巻首図版 19

丹波焼刻画(198) 輸入磁器

巻首図版 20

短刀・小刀 鉄鏃

巻首図版 21

小札

漆塗小札 (M21)

朱漆塗不明武具 (M45)

巻首図版 22

鉄釘 五徳 (M351)

巻首図版 23

銅製飾金具 (M408)

藁状繊維付着状況(最下段)

巻首図版 24

銅製飾金具 (M409・M411)

縉銭 (M442~M496)

巻首図版 25

銅塊 (M413)

銅塊 (M414)・銅板 (M415)・銅滴 (M416)

トリベ(227)

卷首図版 26

石硯(S1) 温石(S4) 石硯刻銘(S1)

卷首図版 27

全景 (上が東)

卷首図版 28

全景 東から

全景 西から

卷首図版 29

全景 西から

全景 北西から

卷首図版 30

吉田住吉山 1 号墳 全景 東から

吉田住吉山 1 号墳 埋葬施設 北から

卷首図版 31

吉田住吉山 2 号墳 全景 東から

吉田住吉山 2 号墳 周溝出土 須恵器 甕(401)

卷首図版 32

吉田住吉山 3 号墳 石棺 蓋石状況 北から

吉田住吉山 3 号墳 石棺 北から

卷首図版 33

吉田住吉山 4 号墳 全景 南から

吉田住吉山 4 号墳 埋葬施設 南から

卷首図版 34

吉田住吉山 5 号墳 北石棺 北から

吉田住吉山 5 号墳 土師器 壺(402)

卷首図版 35

吉田住吉山 7 号墳 北埋葬施設

東小口遺物出土状況 西から

吉田住吉山 7 号墳 南埋葬施設

東小口遺物出土状況 西から

吉田住吉山 7 号墳 埋葬施設 出土遺物

卷首図版 36

吉田住吉山 7 号墳 周溝 出土遺物

吉田住吉山 7 号墳 周溝 須恵器 坏蓋(421)

粘土紐巻き上げ状況

卷首図版 37

吉田住吉山 9 号墳 埋葬施設 西から

吉田住吉山 9 号墳 周溝他 出土遺物

卷首図版 38

吉田住吉山 9 号墳 南埋葬施設 東小口

須恵器 出土状況 東から

吉田住吉山 9 号墳 南埋葬施設 東小口

出土遺物

卷首図版 39

吉田住吉山 9 号墳 北埋葬施設

西小口 出土遺物

吉田住吉山 9 号墳 北埋葬施設 出土遺物

卷首図版 40

吉田 1 号墳 埋葬施設 西から

吉田 1 号墳 埋葬施設 出土遺物

卷首図版 41

吉田 3 2 号墳 全景 北から

吉田 3 2 号墳 出土遺物(607・604)

卷首図版 42

吉田古墳群 S X02

吉田古墳群 S X02 出土遺物(610・608・609)

卷首図版 43

吉田住吉山遺跡 S K93 遺物出土状況

北西から

吉田住吉山遺跡 出土 弥生土器(701・703)

図版目次

図版 1	吉田住吉山遺跡	遺跡	全体図	図版 17	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 31	
図版 2	吉田住吉山遺跡	遺跡	横断図	図版 18	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 32	
図版 3	吉田住吉山遺跡	遺構	地区割図	図版 19	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 33・S K 34・S K 39・S K 40・S K 42	
図版 4	吉田住吉山遺跡	遺構	全体図	図版 20	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 35・S K 36・S K 37・S K 38・S K 41・ S K 43・S K 44・S K 45	
図版 5	吉田住吉山遺跡	遺物	遺物出土位置	図版 21	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 46・S K 54	
図版 6	吉田住吉山遺跡	主郭	遺構	全体図	図版 22	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 47
図版 7	吉田住吉山遺跡	主郭	遺構	平面図（西半部）	図版 23	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 48・S K 49・S K 50・S K 51・S K 52・ S K 53・S K 60・S K 62
図版 8	吉田住吉山遺跡	主郭	遺構	平面図（東半部）	図版 24	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 55・S K 56・S K 57・S K 58・S K 59・ S K 61
図版 9	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S B 01	図版 25	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	集石 1
図版 10	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 01・S K 02・S K 04	図版 26	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	集石 3
図版 11	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 03・S K 05・S K 06・S K 07・S K 08	図版 27	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	集石 2・集石 4
図版 12	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 09・S K 10・S K 11	図版 28	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	集石 5・集石 6
図版 13	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 12・S K 13・S K 14・S K 20	図版 29	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	集石 7・焼土 1・焼土 3・焼土 4
図版 14	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 15・S K 16・S K 17・S K 18・S K 19・ S K 21・S K 23	図版 30	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	鍛冶炉 1・鍛冶炉 2・鍛冶炉 3・S D 01
図版 15	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 22・S K 24・S K 25・S K 27	図版 31	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	炉 1・炉 2
図版 16	吉田住吉山遺跡	遺構	主郭	S K 26・S K 28・S K 29・S K 30					

- 図版 32 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
吉田住吉山 6 号墳周溝中世遺物出土位置
- 図版 33 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
吉田住吉山 2 号墳周溝中世遺物出土位置
- 図版 34 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
吉田住吉山 5 号墳周溝中世遺物出土位置
- 図版 35 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
吉田住吉山 4 号墳周溝中世遺物出土位置
- 図版 36 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
土塁 1 東側中世遺物出土位置
- 図版 37 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
土塁 1 東側中世遺物出土位置断面
- 図版 38 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
平面図 (上層)
- 図版 39 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
平面図 (下層)
- 図版 40 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
土塁 1 断面
- 図版 41 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
土塁 1 断面
- 図版 42 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
S K 63・集石 10・集石 9
- 図版 43 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
集石 8・集石 12・集石 11
- 図版 44 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
集石 13
- 図版 45 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
集石 14
- 図版 46 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
金属工房 1
- 図版 47 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
金属工房 1 遺物出土位置
- 図版 48 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
全体図
- 図版 49 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
断面図
- 図版 50 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
S K 64
- 図版 51 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
吉田住吉山 7 号墳周溝中世遺物出土位置
- 図版 52 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
吉田住吉山 8 号墳周溝中世遺物出土位置
- 図版 53 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 3
全体図
- 図版 54 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 3
断面図
- 図版 55 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 3
水溜め
- 図版 56 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 3
土堤
- 図版 57 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 3
中世遺物出土位置
- 図版 58 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 2
全体図
- 図版 59 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 2
断面図
- 図版 60 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 2
土橋
- 図版 61 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 2
中世遺物出土位置
- 図版 62 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 1
全体図
- 図版 63 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 1
断面図・S K 65・S K 66
- 図版 64 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 1
集石 15・集石 16
- 図版 65 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 1
中世遺物出土位置
- 図版 66 吉田住吉山遺跡 遺構 東斜面
全体図
- 図版 67 吉田住吉山遺跡 遺構 東斜面
焼土 5・段状遺構 1・段状遺構 2
- 図版 68 吉田住吉山遺跡 遺構 堀切
全体図
- 図版 69 吉田住吉山遺跡 遺構 堀切
断面図

- 図版 70 吉田住吉山遺跡 遺構 堀切
中世遺物出土位置 S K 11 出土土器 (7・8)
S K 10 出土土器 (9~12)
- 図版 71 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東・谷西
北部平面図 S K 13 出土土器 (13)
- 図版 72 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東・谷西
南部平面図 S K 10 出土土器 (14)
S K 21 出土土器 (15~17)
- 図版 73 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東
段状遺構 3 S K 23 出土土器 (18・19)
S K 29 出土土器 (20)
- 図版 74 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東
段状遺構 4 S K 30 出土土器 (21)
S K 32 出土土器 (22~26)
- 図版 75 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東
S K 67・S K 68 図版 86 吉田住吉山遺跡 遺物 主郭
S K 10 出土土器 (14)
S K 21 出土土器 (15~17)
- 図版 76 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東
S K 69・S K 70・S K 71・S K 72 S K 23 出土土器 (18・19)
S K 29 出土土器 (20)
- 図版 77 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東
S K 73 S K 30 出土土器 (21)
S K 32 出土土器 (22~26)
- 図版 78 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東・谷西
通路 1 図版 87 吉田住吉山遺跡 遺物 主郭
S K 33 出土土器 (27)
- 図版 79 吉田住吉山遺跡 遺構 谷西
S K 75 S K 34 出土土器 (28)
S K 35 出土土器 (29)
- 図版 80 吉田住吉山遺跡 遺構 谷西
S K 76・S K 77・S K 78 S K 41 出土土器 (30・31)
S K 45 出土土器 (32・33)
- 図版 81 吉田住吉山遺跡 遺構 谷西・帯曲輪 5
谷西南端部・帯曲輪 5 平面図 断面図 S K 46 出土土器 (34)
S K 54 出土土器 (35~38)
- 図版 82 吉田住吉山遺跡 遺構
西帯曲輪 1・2 帯曲輪 4 S K 47 出土土器 (39~62)
S K 60 出土土器 (63)
- 平面図 S K 62 出土土器 (64)
S K 61 出土土器 (65)
- 図版 83 吉田住吉山遺跡 遺構
西帯曲輪 1・2 帯曲輪 4 S K 57 出土土器 (66~72)
- 断面図 図版 88 吉田住吉山遺跡 遺物 主郭
集石 1 出土土器 (73~75)
- 図版 84 吉田住吉山遺跡 遺構
西帯曲輪 1・2 帯曲輪 4 集石 3 出土土器 (76~95)
集石 2 出土土器 (96~98)
- 段状遺構 5・S K 79・S K 80 集石 6 出土土器 (99~101)
集石 7 出土土器 (102)
- 図版 85 吉田住吉山遺跡 遺物 主郭
S B 01 出土土器 (1~3) 焼土 1 出土土器 (103)
- P 012 出土土器 (4) 焼土 2 出土土器 (104~106)
- P 056 出土土器 (5) 焼土 4 出土土器 (108)
- S K 04 出土土器 (6) 鍛冶炉 1 出土土器 (109・110)
- 炉 1 出土土器 (111~113)
- S D 01 出土土器 (114~122)
- 図版 89 吉田住吉山遺跡 遺物 主郭
6号墳周溝(東) 出土土器 (123)
- 6号墳周溝(南) 出土土器 (124~135)

- 2号墳周溝(北)出土土器(136)
- 2号墳周溝(南)出土土器(137・138)
- 2号墳周溝(西)出土土器(139~142)
- 図版90 吉田住吉山遺跡 遺物 主郭
- 5号墳周溝(西)出土土器(143~147)
- 5号墳周溝(南)出土土器(148~155)
- 1号墳周溝(南)出土土器(156)
- 4号墳周溝(南)出土土器(157)
- 4号墳周溝(西)出土土器(158)
- 土壘1東側出土土器(159~170)
- 図版91 吉田住吉山遺跡 遺物 主郭
- 包含層出土土器(171~200)
- 図版92 吉田住吉山遺跡 遺物 土壘1
- 土壘1出土土器(201~214)
- 集石9出土土器(215・216)
- 集石10出土土器(217)
- 集石13出土土器(218~220)
- 集石14出土土器(221・222)
- 焼土4出土土器(223)
- 金属工房1出土土器(224~228)
- 図版93 吉田住吉山遺跡 遺物 土壘・空堀
- 土壘2 7号周溝(南)出土土器
(229~232)
- 土壘2 盛土出土土器(233)
- 土壘3 8号墳南側(234~236)
- S K64出土土器(237~241)
- 図版94 吉田住吉山遺跡 遺物 遺物
- 土壘・空堀 帶曲輪3・2
- 土壘5出土土器(242~244)
- 空堀1出土土器(245)
- 空堀2出土土器(246)
- 空堀3出土土器(247・248)
- 帶曲輪3 斜面出土土器(249)
- 帶曲輪3 横堀出土土器(250~253)
- 帶曲輪3 水溜め出土土器(254~256)
- 帶曲輪2 斜面出土土器(257~260)
- 図版95 吉田住吉山遺跡 遺物
- 帶曲輪2・1 東斜面
- 帶曲輪2 横堀出土土器(261~277)
- 帶曲輪2 平坦部出土土器(278・279)
- 帶曲輪1 斜面出土土器(280)
- 帶曲輪1 横堀出土土器(281~290)
- 東斜面 段状遺構1出土土器(291)
- 東斜面 包含層出土土器(292~295)
- 図版96 吉田住吉山遺跡 遺物 堀切
- 堀切 埋土出土土器(296~339)
- 図版97 吉田住吉山遺跡 遺物 堀切
- 堀切 埋土出土土器(340~352)
- 図版98 吉田住吉山遺跡遺物 谷東
- 段状遺構3出土土器(353~355)
- 段状遺構4出土土器(356~358)
- S K67出土土器(359~361)
- S K68出土土器(362)
- S K71出土土器(363)
- 通路1出土土器(364・365)
- 包含層出土土器(366~375)
- 図版99 吉田住吉山遺跡遺物
- 谷西 西帶曲輪2 帶曲輪4・5
- 谷西 S K75出土土器(376)
- 谷西 S K78出土土器(377)
- 谷西 包含層出土土器(378・379)
- 西曲輪2 S K80出土土器(380~383)
- 西曲輪2 平坦部出土土器(384~389)
- 帶曲輪4 平坦部出土土器(390~394)
- 帶曲輪5 平坦部出土土器(395)
- 図版100 吉田住吉山遺跡
- 主郭 2号墳周溝出土鉄製品(M4)
- 主郭 5号墳周溝出土鉄製品(M5)
- 主郭 土壘1東側出土鉄製品(M9)
- 土壘1 金属工房1出土鉄製品(M3)
- 土壘1 9号周溝出土鉄製品(M8)
- 堀切出土鉄製品(M2・M6・M7)
- 包含層出土鉄製品(M1)
- 図版101 吉田住吉山遺跡
- 主郭 5号墳周溝出土鉄製品
(M11・M12・M18)

- 主郭 6号墳周溝出土鉄製品 (M10)
土塁1 金属工房1出土鉄製品 (M13)
土塁1 P111出土鉄製品 (M14)
堀切出土鉄製品 (M15・M16・M17)
- 図版102 吉田住吉山遺跡
主郭 S D01出土鉄製品 (M19・M21)
土塁1 金属工房1出土鉄製品 (M20)
包含層出土鉄製品 (M22・M45)
主郭 土塁1東側出土鉄製品 (M29～M37)
主郭 5号墳周溝出土鉄製品 (M23～M28)
堀切出土鉄製品 (M38～M40)
谷西 S K76—P1出土鉄製品
(M42～M44)
谷西 P124出土鉄製品 (M41)
- 図版103 吉田住吉山遺跡 主郭
P072出土鉄製品 (M46)
P069出土鉄製品 (M47)
S K14出土鉄製品 (M48)
S K23出土鉄製品 (M49・M50)
S K29出土鉄製品 (M51～M54)
S K47出土鉄製品 (M55～M59)
S K60出土鉄製品 (M60)
S K62出土鉄製品 (M61)
S K55出土鉄製品 (M62)
集石1出土鉄製品 (M63・M64)
集石3出土鉄製品 (M65・M66)
焼土2出土鉄製品 (M67)
焼土1出土鉄製品 (M68・M69)
鍛冶炉1出土鉄製品 (M70～M75)
炉2出土鉄製品 (M76)
- 図版104 吉田住吉山遺跡 主郭
S D01出土鉄製品 (M77～M101)
- 図版105 吉田住吉山遺跡 主郭
6号墳周溝出土鉄製品 (M102～M117)
2号墳周溝出土鉄製品 (M118～M126)
- 図版106 吉田住吉山遺跡 主郭
5号墳周溝(西)出土鉄製品 (M127～M155)
- 図版107 吉田住吉山遺跡 主郭
5号墳周溝(東)出土鉄製品 (M156・M157)
5号墳周溝(南)出土鉄製品 (M158～M178)
4号墳周溝(西)出土鉄製品 (M179)
- 図版108 吉田住吉山遺跡 主郭
土塁1東側出土鉄製品 (M180～M193)
包含層出土鉄製品 (M194～M204)
- 図版109 吉田住吉山遺跡 土塁1
土塁1出土鉄製品 (M205～M226)
- 図版110 吉田住吉山遺跡 土塁1
集石9出土鉄製品 (M227～M230)
集石10出土鉄製品 (M231・M232)
集石13出土鉄製品 (M233・M234)
焼土4出土鉄製品 (M235～M238)
金属工房1出土鉄製品 (M239～M253)
- 図版111 吉田住吉山遺跡 土塁・空堀
土塁2出土鉄製品 (M254～M258)
土塁3出土鉄製品 (M259～M265)
土塁5出土鉄製品 (M266～M269)
空堀3出土鉄製品 (M270)
- 図版112 吉田住吉山遺跡
帶曲輪3・帶曲輪1・東斜面
帶曲輪3 横堀出土鉄製品 (M271～M273)
帶曲輪2 横堀出土鉄製品 (M274～M289)
帶曲輪1 斜面出土鉄製品 (M290)
帶曲輪1 横堀出土鉄製品 (M291～M293)
東斜面 包含層出土鉄製品 (M294)
- 図版113 吉田住吉山遺跡 堀切・谷東
堀切埋土出土鉄製品 (M295～M308)
谷東 P117出土鉄製品 (M309)
谷東 S K67出土鉄製品 (M310)
谷東 S K72出土鉄製品 (M311)
谷東 S K73出土鉄製品 (M312)
谷東 包含層出土鉄製品 (M313～M317)
- 図版114 吉田住吉山遺跡 谷西・西帶曲輪2
谷西 S K77出土鉄製品 (M318～M320)
谷西 包含層出土鉄製品 (M321・M322)
西曲輪2 S K80出土鉄製品
(M323～M328)

- 西曲輪 2 吉田 1 号墳墳裾出土鉄製品
(M329~M331)
- 西曲輪 2 平坦部出土鉄製品
(M332~M338)
- 帶曲輪 4 平坦部出土鉄製品 (M339)
- 図版 115 吉田住吉山遺跡
- 主郭 S K 23 出土鉄製品 (M341)
- 主郭 包含層出土鉄製品 (M340)
- 主郭 土塁 1 東側出土鉄製品 (M342)
- 主郭 P 021 出土鉄製品 (M343)
- 主郭 2 号周溝出土鉄製品 (M344)
- 堀切 堀切出土鉄製品 (M345・M347)
- 谷東 S K 67 出土鉄製品 (M346)
- 図版 116 吉田住吉山遺跡
- 主郭 S K 23 出土鉄製品 (M348)
- 主郭 4 号周溝出土鉄製品 (M349)
- 主郭 4 号周溝出土鉄製品 (M351)
- 土塁・空堀 空堀 1 出土鉄製品 (M350)
- 図版 117 吉田住吉山遺跡
- 帶曲輪 2 横堀出土鉄製品 (M352)
- 谷東 包含層出土鉄製品 (M353)
- 西曲輪 2 平坦部出土鉄製品 (M354)
- 土塁 1 金属工房 1 出土鉄製品
(M355・M362・M366)
- 主郭 土塁 1 東側出土鉄製品 (M356・M368)
- 堀切 堀切出土鉄製品 (M357・M369~M372)
- 主郭 2 号周溝出土鉄製品 (M358)
- 主郭 5 号周溝出土鉄製品
(M359・M363・M365)
- 主郭 包含層出土鉄製品 (M360)
- 主郭 S K 11 出土鉄製品 (M361)
- 土塁 1 土塁 1 出土鉄製品 (M364)
- 土塁・空堀 空堀 1 出土鉄製品 (M367)
- 図版 118 吉田住吉山遺跡
- 堀切 堀切出土鉄製品
(M373・M374・M388~M3390)
- 土塁・空堀 3・7 号墳周溝出土鉄製品
(M375)
- 主郭 焼土 1 出土鉄製品 (M376)
- 土塁 1 集石 14 出土鉄製品 (M377)
- 主郭 炉 1 出土鉄製品 (M378)
- 主郭 土塁 1 東側出土鉄製品 (M379)
- 主郭 包含層出土鉄製品 (M380~M383)
- 帶曲輪 3 斜面出土鉄製品 (M384)
- 帶曲輪 2 斜面出土鉄製品 (M385)
- 帶曲輪 1 斜面出土鉄製品 (M386・M387)
- 図版 119 吉田住吉山遺跡
- 主郭 5 号周溝出土鉄製品 (M393)
- 主郭 6 号周溝出土鉄製品
(M392・M398・M399)
- 主郭 包含層出土鉄製品 (M394・M400)
- 主郭 S K 29 出土鉄製品 (M396)
- 主郭 S K 56 出土鉄製品 (M397)
- 土塁 1 金属工房 1 出土鉄製品
(M395・M401~M405)
- 土塁 1 土塁 1 出土鉄製品 (M406)
- 堀切 堀切出土鉄製品 (M407)
- 図版 120 吉田住吉山遺跡
- 主郭 S K 17 出土銅製品 (M409)
- 主郭 焼土 1 出土銅製品 (M410)
- 堀切 堀切出土銅製品 (M408・M411)
- 帶曲輪 1 斜面出土銅製品 (M412)
- 図版 121 吉田住吉山遺跡
- 主郭 5 号周溝出土銅製品 (M413)
- 土塁 1 金属工房 1 出土銅製品
(M414~M416)
- 図版 122 吉田住吉山遺跡
- 主郭 4 号周溝出土銅銭 (M418~M437)
- 主郭 土塁 1 東側出土銅銭 (M438~M440)
- 図版 123 吉田住吉山遺跡
- 土塁 1 土塁 1 出土銅銭 (M441・M497)
- 土塁 1 9 号周溝出土銅銭 (M442~M496)
- 土塁 1 集石 14 出土銅銭 (M498・M499)
- 土塁 1 焼土 4 周辺出土銅銭 (M500)
- 土塁・空堀 空堀 1 出土銅銭 (M501)
- 帶曲輪 2 斜面出土銅銭 (M502)

- 堀切 堀切出土銅錢 (M503~M505)
- 谷西 包含層出土銅錢 (M506~M510)
- 西帶曲輪 1 斜面出土銅錢 (M511)
- 図版 124 吉田住吉山遺跡 遺物
堀切 堀切出土石硯 (S1・S2)
- 図版 125 吉田住吉山遺跡 遺物
谷西 包含層出土石鍋 (S3)
主郭 2号墳周溝 (西) 出土温石 (S4)
主郭 6号墳周溝 (南) 出土砥石 (S5)
堀切出土砥石 (S6)
谷東 包含層出土砥石 (S7)
主郭 炉 2 出土砥石 (S8)
土塁 1 金属工房 1 出土金床石 (S9)
- 図版 126 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群 遺構
全体図
- 図版 127 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群 遺構
全体図 (西半)
- 図版 128 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群 遺構
全体図 (東半)
- 図版 129 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群 遺物
古墳時代・弥生時代出土土器分布
- 図版 130 吉田住吉山 1 号墳 遺構
墳丘
- 図版 131 吉田住吉山 1 号墳 遺構
埋葬施設
- 図版 132 吉田住吉山 2 号墳 遺構
墳丘
- 図版 133 吉田住吉山 2 号墳 遺構・遺物
周溝土層断面・土器 (401)
- 図版 134 吉田住吉山 3 号墳 遺構
墳丘・周溝土層断面
- 図版 135 吉田住吉山 3 号墳 遺構
南石棺 蓋石検出状況
- 図版 136 吉田住吉山 3 号墳 遺構
南石棺 埋葬施設
- 図版 137 吉田住吉山 3 号墳 遺構
北石棺 蓋石・被覆粘土検出状況
- 図版 138 吉田住吉山 3 号墳 遺構
- 北石棺 埋葬施設
- 図版 139 吉田住吉山 4 号墳 遺構
墳丘・土層断面
- 図版 140 吉田住吉山 4 号墳 遺構
埋葬施設
- 図版 141 吉田住吉山 5 号墳 遺構
墳丘
- 図版 142 吉田住吉山 5 号墳 遺構
土層断面
- 図版 143 吉田住吉山 5 号墳 遺構
埋葬施設
- 図版 144 吉田住吉山 5 号墳 遺構・遺物
埋葬施設・土器 (402・403)
- 図版 145 吉田住吉山 6 号墳 遺構
墳丘・周溝土層断面
- 図版 146 吉田住吉山 6 号墳 遺物
出土土器 (404~407)
- 図版 147 吉田住吉山 7 号墳 遺構
墳丘
- 図版 148 吉田住吉山 7 号墳 遺構
土層断面
- 図版 149 吉田住吉山 7 号墳 遺構
埋葬施設
- 図版 150 吉田住吉山 7 号墳 遺構
埋葬施設
- 図版 151 吉田住吉山 7 号墳 遺物
土器 (408~426)
金属器 (M601~M606)・玉 (J1~J7)
- 図版 152 吉田住吉山 7 号墳 遺物
土器 (427~445)
- 図版 153 吉田住吉山 7 号墳 遺物
土器拓影 (408~410・413・414・418~424・
426・432・433・435・437~439・443)
- 図版 154 吉田住吉山 8 号墳 遺構
墳丘・土層断面
- 図版 155 吉田住吉山 9 号墳 遺構
墳丘
- 図版 156 吉田住吉山 9 号墳 遺構

- 土層断面
- 図版 157 吉田住吉山 9 号墳 遺構
埋葬施設
- 図版 158 吉田住吉山 9 号墳 遺構
埋葬施設土器出土状況・下層埋葬施設
- 図版 159 吉田住吉山 9 号墳 遺物
土器 (446~475)
- 図版 160 吉田住吉山 9 号墳 遺物
土器拓影 (446~449・453~466・468~473)
- 図版 161 吉田住吉山 9 号墳 遺物
金属器 (M607~M614) 玉 (J8)
- 図版 162 吉田住吉山 9 号墳 遺物
土器 (476~491)
土器拓影 (476・483・488)
- 図版 163 吉田住吉山 10 号墳 遺構
墳丘・土層断面・埋葬施設
- 図版 164 吉田 1 号墳 遺構
墳丘・土層断面
- 図版 165 吉田 1 号墳 遺構
埋葬施設
- 図版 166 吉田 1 号墳 遺物
土器 (601~603) 金属器 (M701~M703)
- 図版 167 吉田 32 号墳 遺構
墳丘・土層断面 土器 (604~607)
- 図版 168 第 3 次調査区 遺構
全体図
- 図版 169 第 3 次調査区 遺構
S X 01・S X 02
- 図版 170 第 3 次調査区 遺物
土器 (608~611)
- 図版 171 吉田住吉山遺跡 弥生 遺構
全体図 (西半)
- 図版 172 吉田住吉山遺跡 弥生 遺構
全体図 (東半)
- 図版 173 吉田住吉山遺跡 弥生 遺構
S K 91・S K 93
- 図版 174 吉田住吉山遺跡 弥生 遺構
S K 94・S K 95・S K 96・S K 97
- 図版 175 吉田住吉山遺跡 弥生 遺物
土器 (701~724)
- 図版 176 吉田住吉山遺跡 縄文・弥生 遺物
石器 (S11~S19)
- 図版 177 吉田住吉山遺跡 縄文・弥生 遺物
石器 (S20~S28)
- 図版 178 高男寺本丸遺跡 遺構
平面図 S D 03 断面
- 図版 179 高男寺本丸遺跡 遺物
土器 (1~13)

写真図版目次〔写真図版編〕

写真図版 1 吉田住吉山遺跡 主郭 土塁・空堀	S K10 南から
調査前全景 西から 全景 西から	S K10～S K13 西から
写真図版 2 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭	写真図版 11 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
調査前全景 北西から	S K14 南から
全景 北西から	S K20 東から
写真図版 3 遺構 吉田住吉山遺跡遺構 主郭	S K18 西から
調査前全景 北東から	写真図版 12 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
全景 東から	S K15 北から
写真図版 4 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭	S K16 北東から
土塁・空堀	S K19 西から
全景 西から	写真図版 13 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
全景 北西から	S K17 北から
写真図版 5 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭	S K17 覆輪出土状況 北から
全景 南西から	S K21 南西から
全景 北西から	写真図版 14 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
写真図版 6 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭	S K23 西から
全景 東から	S K24 北から
西端部 北東から	写真図版 15 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
写真図版 7 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭	S K27 北西から
S B01 西から	S K29 南から
S B01-P 1 北から	S K31・S K32 西から
S B01-P 8 北から	写真図版 16 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
S B01-P 10 北から	S K31 北から
S B01-P 13 北から	S K32 北西から
P 012 北から	S K32 断面 北西から
P 021 北から	写真図版 17 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
写真図版 8 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭	S K33 北から
S K04 東から	S K33 断面 西から
S K03 南から	S K34 断面 西から
S K05・S K06 東から	写真図版 18 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
写真図版 9 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭	S K39・S K40 南から
S K11 土器出土状況上面 北から	S K42 南から
S K11 土器出土状況下面 東から	S K35～S K38 南東から
写真図版 10 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭	写真図版 19 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭

- S K35 南から
 S K36 東から
 S K37 西から
 写真図版 20 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 S K38 西から
 S K41 断面 東から
 S K44 断面 東から
 写真図版 21 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 S K45 断面 南から
 S K40 断面 東から
 S K47 西から
 写真図版 22 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 S K47 上面遺物 出土状況 南から
 S K47 下面遺物 出土状況 南から
 写真図版 23 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 S K48 断面 南から
 S K53 断面 東から
 S K52 断面 東から
 写真図版 24 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 S K62 断面 東から
 S K57 東から
 S K58 断面 東から
 写真図版 25 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 集石 1 東から
 集石 3 南から
 写真図版 26 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 集石 2 西から
 集石 4 東から
 写真図版 27 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 集石 5・6 南から
 集石 6 南から
 写真図版 28 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 集石 6 断面 南から
 集石 5 南西から
 集石 7 北東から
 写真図版 29 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 焼土 3 南から
 鍛冶炉 1 南西から
 鍛冶炉 1 焼土 北西から
 写真図版 30 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 鍛冶炉 2・3 北から
 鍛冶炉 2 西から
 鍛冶炉 3 北から
 鍛冶炉 2 断面 西から
 鍛冶炉 3 断面 西から
 写真図版 31 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 炉 1・2 東から
 炉 1 東から
 写真図版 32 吉田住吉山遺跡 遺構 主郭
 6号墳周溝 備前焼出土状況 北から
 2号墳周溝 丹波焼出土状況 南東から
 5号墳周溝 五徳出土状況 北から
 写真図版 33 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 全景 北西から
 土塁 1 南側横断面 南から
 写真図版 34 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 土塁 1 北側横断面 南から
 土塁 1 北端部縦断面 東から
 写真図版 35 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 土塁 1 南端部縦断面 東から
 土塁 1 中部縦断面 東から
 土塁 1 中部縦断面 東から
 写真図版 36 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 P105 東から
 P109 東から
 P107 東から
 P108 東から
 集石 9 東から
 写真図版 37 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 集石 10 北から
 集石 10 貝出土状況 東から
 集石 10 貝出土状況 北から
 集石 12 東から
 写真図版 38 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 集石 13・14 北から
 集石 14 南から

- 写真図版 39 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 金属工房 1 南から
 金属工房 1 床面炭層 東から
- 写真図版 40 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 金属工房 1・炉 1 等検出状況 西から
 金属工房 1・炉 1 等完掘状況 西から
 金属工房 1・炉 1 西から
- 写真図版 41 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 金属工房 1・炉 1 断面 西から
 金属工房 1 P1 断面 東から
 金属工房 1 P2 断面 東から
 金属工房 1 P3 断面 東から
 金属工房 1 P4 断面 西から
 金属工房 1 P5 断面 東から
 金属工房 1 P6 断面 西から
- 写真図版 42 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 金属工房 1 炉 2 東から
 金属工房 1 炉 2 断面 西から
 金属工房 1 炭層銅製品 南から
- 写真図版 43 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁 1
 土師器鍋出土状況 東から
 緡銭出土状況 北から
 貝出土状況 東から
- 写真図版 44 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 調査前全景 南西から
 全景 南西から
- 写真図版 45 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 調査前全景 北から
 全景 北から
- 写真図版 46 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 土塁 2 付近調査前 南から
 土塁 2 付近 南から
- 写真図版 47 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 全景 西から
 全景 北西から
- 写真図版 48 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 全景 南から
 全景 南西から
- 写真図版 49 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 北部 東から
 土塁 4 南から
- 写真図版 50 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 土塁 2 南側断面 南から
 土塁 2 北側断面 南から
- 写真図版 51 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 土塁 3 南側断面 南から
 土塁 3 北側断面 南から
- 写真図版 52 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 S K64 西から
 土塁 3 断面・S K64 西から
- 写真図版 53 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 土塁 5 断面 南から
 空堀 1 北から
- 写真図版 54 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 空堀 1 屈曲部 西から
 空堀 1 中央盛り上り 南東から
- 写真図版 55 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 空堀 1 北側土層断面北から
 空堀 1 南側土層断面 南から
- 写真図版 56 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 空堀 4 北西から
 空堀 4 南側土層断面 南から
- 写真図版 57 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 空堀 2 南側土層断面 南から
 空堀 2 北側土層断面 南から
- 写真図版 58 吉田住吉山遺跡 遺構 土塁・空堀
 空堀 3 中央盛り上がり 北東から
 空堀 3 土層断面 南から
- 写真図版 59 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 3
 全景 南西から
 平坦部 南西から
- 写真図版 60 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 3
 平坦部土層断面 南西から
 横堀土層断面 南西から
 盛土断面 南西から
- 写真図版 61 吉田住吉山遺跡 遺構 帶曲輪 3

- 水溜 西から
土堤 南から
土堤断面 南から
- 写真図版 62 吉田住吉山遺跡 遺構 帯曲輪 2
調査前全景 西から
調査前全景 東から
全景 西から
全景 東から
- 写真図版 63 吉田住吉山遺跡 遺構 帯曲輪 2
全景 東から
全景 西から
- 写真図版 64 吉田住吉山遺跡 遺構 帯曲輪 2
横堀土層断面 東から
土橋 東から
土橋 南から
- 写真図版 65 吉田住吉山遺跡 遺構 帯曲輪 2
土橋断面 西から
土橋下層横堀 鉄器出土状況 北西から
盛土断面 南東から
- 写真図版 66 吉田住吉山遺跡 遺構 帯曲輪 1
調査前全景 北から
全景 北から
- 写真図版 67 吉田住吉山遺跡 遺構 帯曲輪 1
全景 北から
東側土層断面 北から
- 写真図版 68 吉田住吉山遺跡 遺構 帯曲輪 1
北東側土層断面 西から
集石 15 西から
- 写真図版 69 吉田住吉山遺跡 遺構
帯曲輪 1・東斜面
集石 16 西から
段状遺構 1 南から
- 写真図版 70 吉田住吉山遺跡 遺構 堀切
調査前全景 北西から
全景 北東から
- 写真図版 71 吉田住吉山遺跡 遺構 堀切
調査前全景 南から
全景 南から
- 写真図版 72 吉田住吉山遺跡 遺構 堀切
土層断面 南から
東側丘陵部断面 南から
- 写真図版 73 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東・谷西
北部 南東から
北部 南西から
- 写真図版 74 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東・谷西
南部 東から
南部 西から
- 写真図版 75 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東
段状遺構 3 北から
段状遺構 4 北から
- 写真図版 76 吉田住吉山遺跡 遺構 谷東
S K 67 南から
S K 70 西から
S K 73 南東から
- 写真図版 77 吉田住吉山遺跡 遺構 谷西
通路 西から
通路 東から
- 写真図版 78 吉田住吉山遺跡 遺構 谷西
S K 75 北西から
S K 77 南から
S K 78 西から
- 写真図版 79 吉田住吉山遺跡 遺構
西曲輪 1・2、帯曲輪 4
全景 北東から
全景 北東から
- 写真図版 80 吉田住吉山遺跡 遺構 西曲輪 1
全景 南東から
西部 南西から
- 写真図版 81 吉田住吉山遺跡 遺構 帯曲輪 4
横堀 北から
段状遺構 5・S K 79 北から
段状遺構 5・S K 79 西から
- 写真図版 82 吉田住吉山遺跡 遺物
S B 01 出土土器 (1~3)
P 012 出土土器 (4)
P 056 出土土器 (5)

- S K04 出土土器 (6)
- S K11 出土土器 (7・8)
- S K10 出土土器 (9~12)
- S K13 出土土器 (13)
- 写真図版 83 吉田住吉山遺跡 遺物
- S K10 出土土器 (14)
- S K21 出土土器 (15・16)
- S K32 出土土器 (26)
- 写真図版 84 吉田住吉山遺跡 遺物
- S K21 出土土器 (17)
- S K23 出土土器 (18・19)
- S K29 出土土器 (20)
- S K30 出土土器 (21)
- S K32 出土土器 (22~25)
- S K33 出土土器 (27)
- S K35 出土土器 (29)
- S K46 出土土器 (34)
- S K47 出土土器 (62)
- S K60 出土土器 (63)
- S K62 出土土器 (64)
- S K61 出土土器 (65)
- S K57 出土土器 (72)
- 写真図版 85 吉田住吉山遺跡 遺物
- S K34 出土土器 (28)
- S K41 出土土器 (30・31)
- S K45 出土土器 (32・33)
- S K54 出土土器 (35~38)
- S K47 出土土器 (39~43)
- 写真図版 86 吉田住吉山遺跡 遺物
- S K47 出土土器 (44~53)
- 写真図版 87 吉田住吉山遺跡 遺物
- S K47 出土土器 (54~61)
- S K57 出土土器 (66~71)
- 写真図版 88 吉田住吉山遺跡 遺物
- 集石 1 出土土器 (73~75)
- 集石 3 出土土器 (80・84・86・87・89)
- 集石 6 出土土器 (99・100)
- 集石 7 出土土器 (102)
- 焼土 1 出土土器 (103)
- 焼土 2 出土土器 (104・105)
- 鍛冶炉 1 出土土器 (109・110)
- 炉 1 出土土器 (111~113)
- 写真図版 89 吉田住吉山遺跡 遺物
- 集石 3 出土土器
(76~79・81~83・85・88・90~93)
- 写真図版 90 吉田住吉山遺跡 遺物
- 集石 3 出土土器 (94・95)
- 集石 2 出土土器 (96~98)
- 集石 6 出土土器 (101)
- 焼土 2 出土土器 (106)
- 焼土 3 出土土器 (107)
- 写真図版 91 吉田住吉山遺跡 遺物
- 焼土 3 出土土器 (108)
- S D01 出土土器 (114~122)
- 6号墳周溝(東)出土土器 (123)
- 6号墳周溝(南)出土土器 (134)
- 2号墳周溝(北)出土土器 (136)
- 2号墳周溝(南)出土土器 (137・138)
- 2号墳周溝(西)出土土器 (140・141)
- 写真図版 92 吉田住吉山遺跡 遺物
- 6号墳周溝(南)出土土器 (124~133・135)
- 2号墳周溝(西)出土土器 (139・142)
- 写真図版 93 吉田住吉山遺跡 遺物
- 5号墳周溝(西)出土土器 (147)
- 5号墳周溝(南)出土土器
(150~152・154・155)
- 4号墳周溝(南)出土土器 (157)
- 土塁 1 東側出土土器 (160・162・165~170)
- 写真図版 94 吉田住吉山遺跡 遺物
- 5号墳周溝(西)出土土器 (143~146)
- 5号墳周溝(南)出土土器 (148~149・153)
- 1号墳周溝(南)出土土器 (156)
- 4号墳周溝(西)出土土器 (158)
- 写真図版 95 吉田住吉山遺跡 遺物
- 土塁 1 東側出土土器 (159・161・163・164)
- 包含層出土土器

- (171~174・176・177・179・180)
- 写真図版 96 吉田住吉山遺跡 遺物
包含層出土土器 (175・178・181~193・196)
- 写真図版 97 吉田住吉山遺跡 遺物
包含層出土土器 (194・195・197~200)
- 写真図版 98 吉田住吉山遺跡 遺物
土壘 1 出土土器
(201~204・206~208・211・212・214)
集石 13 出土土器 (218~220)
金属工房 1 出土土器 (224~226・228)
- 写真図版 99 吉田住吉山遺跡 遺物
土壘 1 出土土器 (205・209・210・213)
集石 9 出土土器 (215・216)
集石 10 出土土器 (217)
集石 13 出土土器 (221)
集石 14 出土土器 (222)
焼土 4 出土土器 (223)
金属工房 1 出土土器 (227)
- 写真図版 100 吉田住吉山遺跡 遺物
土壘 2 7号周溝(南)出土土器
(229~232)
土壘 2 盛土出土土器 (233)
土壘 3 8号墳南側 (236)
S K 64 出土土器 (237~241)
- 写真図版 101 吉田住吉山遺跡 遺物
土壘 3 8号墳南側 (234・235)
- 写真図版 102 吉田住吉山遺跡 遺物
土壘 5 出土土器 (242~244)
空堀 1 出土土器 (245)
空堀 2 出土土器 (246)
空堀 3 出土土器 (247・248)
- 写真図版 103 吉田住吉山遺跡 遺物
帶曲輪 3 斜面出土土器 (249)
帶曲輪 3 横堀出土土器 (250~253)
帶曲輪 3 水溜め出土土器 (254~256)
帶曲輪 2 斜面出土土器 (257~260)
- 写真図版 104 吉田住吉山遺跡 遺物
帶曲輪 2 横堀出土土器 (261~276)
- 写真図版 105 吉田住吉山遺跡 遺物
帶曲輪 2 横堀出土土器 (277)
帶曲輪 2 平坦部出土土器 (278・279)
帶曲輪 1 斜面出土土器 (280)
帶曲輪 1 横堀出土土器 (281~287)
東斜面 包含層出土土器 (292~294)
- 写真図版 106 吉田住吉山遺跡 遺物
帶曲輪 1 横堀出土土器 (288~290)
東斜面 段状遺構 1 出土土器 (291)
東斜面 包含層出土土器 (295)
堀切 埋土出土土器 (296~305)
- 写真図版 107 吉田住吉山遺跡 遺物
堀切 埋土出土土器 (306~321)
- 写真図版 108 吉田住吉山遺跡 遺物
堀切 埋土出土土器 (322~334)
- 写真図版 109 吉田住吉山遺跡 遺物
堀切 埋土出土土器 (336~344)
- 写真図版 110 吉田住吉山遺跡 遺物
堀切 埋土出土土器 (345~352)
- 写真図版 111 吉田住吉山遺跡 遺物
段状遺構 3 出土土器 (353~355)
段状遺構 4 出土土器 (356~358)
S K 67 出土土器 (359~361)
S K 68 出土土器 (362)
通路 1 出土土器 (364・365)
- 写真図版 112 吉田住吉山遺跡 遺物
S K 71 出土土器 (363)
包含層出土土器 (366~375)
西曲輪 2 S K 80 出土土器 (380・382)
西曲輪 2 平坦部出土土器 (384)
- 写真図版 113 吉田住吉山遺跡 遺物
谷西 S K 75 出土土器 (376)
谷西 S K 78 出土土器 (377)
谷西 包含層出土土器 (378・379・381・383)
西曲輪 2 平坦部出土土器 (385~387)
帶曲輪 4 平坦部出土土器 (388)
- 写真図版 114 吉田住吉山遺跡 遺物
西曲輪 2 平坦部出土土器 (389)

- 帶曲輪 4 平坦部出土土器 (390~394)
- 帶曲輪 5 出土土器 (395・396)
- 写真図版 115 吉田住吉山遺跡 遺物
- 包含層出土鉄製品 (M1)
- 堀切出土鉄製品 (M2・M6・M7)
- 土塁 1 金属工房 1 出土鉄製品 (M3)
- 主郭 2号墳周溝出土鉄製品 (M4)
- 主郭 5号墳周溝出土鉄製品 (M5)
- 土塁 1 9号周溝出土鉄製品 (M8)
- 主郭 土塁 1 東側出土鉄製品 (M9)
- 写真図版 116 吉田住吉山遺跡 遺物
- 主郭 6号墳周溝出土鉄製品 (M10)
- 主郭 5号墳周溝出土鉄製品 (M11・M12)
- 土塁 1 金属工房 1 出土鉄製品 (M13)
- 土塁 1 P 111 出土鉄製品 (M14)
- 堀切出土鉄製品 (M15・M16・M17)
- 写真図版 117 吉田住吉山遺跡 遺物
- 主郭 5号墳周溝出土鉄製品 (M18)
- 主郭 S D 01 出土鉄製品 (M19)
- 土塁 1 金属工房 1 出土鉄製品 (M20)
- 写真図版 118 吉田住吉山遺跡 遺物
- 包含層出土鉄製品 (M22)
- 主郭 2号墳周溝出土鉄製品 (M23)
- 主郭 5号墳周溝出土鉄製品 (M24~M28)
- 主郭 土塁 1 東側出土鉄製品 (M37)
- 堀切出土鉄製品 (M38~M40)
- 谷西 P 124 出土鉄製品 (M41)
- 谷西 S K 76-P 1 出土鉄製品
(M42・M43)
- 写真図版 119 吉田住吉山遺跡 遺物
- 主郭 S D 01 出土鉄製品 (M21)
- 主郭 土塁 1 東側出土鉄製品 (M29~M36)
- 谷西 S K 76-P 1 出土鉄製品 (M44)
- 包含層出土鉄製品 (M45)
- P 072 出土鉄製品 (M46)
- P 069 出土鉄製品 (M47)
- S K 14 出土鉄製品 (M48)
- S K 23 出土鉄製品 (M49・M50)
- S K 29 出土鉄製品 (M51~M54)
- S K 47 出土鉄製品 (M55~M59)
- S K 60 出土鉄製品 (M60)
- S K 62 出土鉄製品 (M61)
- S K 55 出土鉄製品 (M62)
- 集石 1 出土鉄製品 (M63・M64)
- 集石 3 出土鉄製品 (M65・M66)
- 集石 2 出土鉄製品 (M67)
- 焼土 1 出土鉄製品 (M68・M69)
- 鍛冶炉 1 出土鉄製品 (M70~M75)
- 炉 2 出土鉄製品 (M76)
- 写真図版 120 吉田住吉山遺跡 遺物
- S D 01 出土鉄製品 (M77~M101)
- 6号墳周溝出土鉄製品 (M102~M117)
- 2号墳周溝出土鉄製品 (M118~M126)
- 写真図版 121 吉田住吉山遺跡 遺物
- 5号墳周溝 (西) 出土鉄製品 (M127~M155)
- 5号墳周溝 (東) 出土鉄製品 (M156・M157)
- 5号墳周溝 (南) 出土鉄製品 (M158~M178)
- 4号墳周溝 (西) 出土鉄製品 (M179)
- 写真図版 122 吉田住吉山遺跡 遺物
- 土塁 1 東側出土鉄製品 (M180~M193)
- 包含層出土鉄製品 (M194~M204)
- 土塁 1 出土鉄製品 (M205~M226)
- 写真図版 123 吉田住吉山遺跡 遺物
- 集石 9 出土鉄製品 (M227~M230)
- 集石 10 出土鉄製品 (M231・M232)
- 集石 13 出土鉄製品 (M233・M234)
- 焼土 4 出土鉄製品 (M235~M238)
- 金属工房 1 出土鉄製品 (M239~M253)
- 土塁 2 出土鉄製品 (M254~M258)
- 土塁 3 出土鉄製品 (M259~M256)
- 土塁 5 出土鉄製品 (M266~M269)
- 空堀 3 出土鉄製品 (M270)
- 帶曲輪 3 横堀出土鉄製品 (M271~M273)
- 写真図版 124 吉田住吉山遺跡 遺物
- 帶曲輪 2 横堀出土鉄製品 (M274~M289)
- 帶曲輪 1 斜面出土鉄製品 (M290)

- 帶曲輪 1 横堀出土鉄製品 (M291~M293)
 東斜面 包含層出土鉄製品 (M294)
 堀切埋土出土鉄製品 (M295~M308)
 谷東 P 117 出土鉄製品 (M309)
 谷東 S K 67 出土鉄製品 (M310)
 谷東 S K 72 出土鉄製品 (M311)
 谷東 S K 73 出土鉄製品 (M312)
 谷東 包含層出土鉄製品 (M313~M317)
 写真図版 125 吉田住吉山遺跡 遺物
 谷西 S K 77 出土鉄製品 (M318~M320)
 谷西 包含層出土鉄製品 (M321・M322)
 西曲輪 2 S K 80 出土鉄製品
 (M323~M328)
 西曲輪 2 吉田 1 号墳墳裾出土鉄製品
 (M329~M331)
 西曲輪 2 平坦部出土鉄製品
 (M332~M338)
 帶曲輪 4 平坦部出土鉄製品 (M339)
 主郭 S K 23 出土鉄製品 (M341)
 主郭 包含層出土鉄製品 (M340)
 主郭 土塁 1 東側出土鉄製品 (M342)
 主郭 P 021 出土鉄製品 (M343)
 写真図版 126 吉田住吉山遺跡 遺物
 主郭 2 号墳周溝出土鉄製品 (M344)
 堀切 堀切出土鉄製品 (M345・M347)
 谷東 S K 67 出土鉄製品 (M346)
 主郭 S K 24 出土鉄製品 (M348)
 写真図版 127 吉田住吉山遺跡 遺物
 主郭 4 号墳周溝出土鉄製品 (M349)
 土塁・空堀 空堀 1 出土鉄製品 (M350)
 帶曲輪 2 横堀出土鉄製品 (M352)
 谷東 包含層出土鉄製品 (M353)
 西曲輪 2 平坦部出土鉄製品 (M354)
 土塁 1 金属工房 1 出土鉄製品
 (M355・M362)
 主郭 土塁 1 東側出土鉄製品 (M356)
 堀切 堀切出土鉄製品 (M357)
 主郭 2 号墳周溝出土鉄製品 (M358)
 主郭 5 号墳周溝出土鉄製品
 (M351・M359・M363・M365)
 主郭 包含層出土鉄製品 (M360)
 主郭 S K 11 出土鉄製品 (M361)
 土塁 1 土塁 1 出土鉄製品 (M364)
 写真図版 128 吉田住吉山遺跡 遺物
 土塁 1 金属工房 1 出土鉄製品 (M366)
 堀切 堀切出土鉄製品 (M369~M371)
 土塁 2 土塁 2 出土鉄製品 (M372)
 土塁・空堀 空堀 1 出土鉄製品 (M367)
 堀切 堀切出土鉄製品
 (M373・M374・M388~M390)
 土塁・空堀 空堀 3・7 号墳周溝出土
 鉄製品 (M375)
 主郭 焼土 1 出土鉄製品 (M376)
 土塁 1 集石 14 出土鉄製品 (M377)
 主郭 炉 1 出土鉄製品 (M378)
 主郭 土塁 1 東側出土鉄製品 (M368・M379)
 主郭 包含層出土鉄製品 (M380~M383)
 帶曲輪 3 斜面出土鉄製品 (M384)
 帶曲輪 2 斜面出土鉄製品 (M385)
 帶曲輪 1 斜面出土鉄製品 (M386・M387)
 写真図版 129 吉田住吉山遺跡 遺物
 主郭 5 号墳周溝出土鉄製品 (M393)
 主郭 6 号墳周溝出土鉄製品
 (M392・M398・M399)
 主郭 包含層出土鉄製品 (M394・M400)
 主郭 S K 29 出土鉄製品 (M396)
 主郭 S K 56 出土鉄製品 (M397)
 土塁 1 金属工房 1 出土鉄製品
 (M395・M401~M405)
 土塁 1 土塁 1 出土鉄製品 (M406)
 堀切 堀切出土鉄製品 (M407)
 写真図版 130 吉田住吉山遺跡 遺物
 堀切 堀切出土銅製品 (M408)
 写真図版 131 吉田住吉山遺跡 遺物
 堀切 堀切出土銅製品 (M408)
 写真図版 132 吉田住吉山遺跡 遺物

- 主郭 SK17 出土銅製品 (M409) 埋葬施設 東から
- 主郭 焼土1 出土銅製品 (M410) 埋葬施設 土層断面 西から
- 堀切 堀切出土銅製品 (M411) 写真図版 141 吉田住吉山1号墳
- 帯曲輪1 斜面出土銅製品 (M412) 埋葬施設 棺床粘土断面 南西から
- 主郭 5号墳周溝出土銅製品 (M413) 埋葬施設 棺掘形 南から
- 土塁1 金属工房1 出土銅製品 (M414~M416) 写真図版 142 吉田住吉山2号墳
全景 東から
- 写真図版 133 吉田住吉山遺跡 遺物 全景 北東から
- 主郭 4号墳周溝出土銅銭 (M418~M428) 写真図版 143 吉田住吉山2号墳
- 写真図版 134 吉田住吉山遺跡 遺物 周溝(西) 土層断面 南から
- 主郭 4号墳周溝出土銅銭 (M429~M437) 周溝(西) 遺物出土状況 西から
- 主郭 土塁1 東側出土銅銭 (M438~M440) 写真図版 144 吉田住吉山2号墳
- 土塁1 土塁1 出土銅銭 (M441) 須恵器 甕 (401)
- 写真図版 135 吉田住吉山遺跡 遺物 須恵器 甕底 (401)
- 土塁1 9号墳周溝出土銅銭 (M442~M496) 写真図版 145 吉田住吉山3号墳
- 写真図版 136 吉田住吉山遺跡 遺物 墳丘 土層断面 北から
- 土塁1 土塁1 出土銅銭 (M497) 全景 北から
- 土塁1 集石14 出土銅銭 (M498・M499) 写真図版 146 吉田住吉山3号墳
- 土塁1 焼土4 周辺出土銅銭 (M500) 南石棺 開棺状況 北から
- 土塁・空堀 空堀1 出土銅銭 (M501) 北石棺 開棺状況 北から
- 帯曲輪2 斜面出土銅銭 (M502) 写真図版 147 吉田住吉山3号墳
- 堀切 堀切出土銅銭 (M503~M505) 石棺 被覆粘土状況 西から
- 谷西 包含層出土銅銭 (M506~M510) 石棺 蓋石状況 西から
- 西帯曲輪1 斜面出土銅銭 (M511) 石棺 西から
- 写真図版 137 吉田住吉山遺跡 遺物 写真図版 148 吉田住吉山3号墳
- 堀切 堀切出土石硯 (S1・S2) 石棺 被覆粘土状況 北から
- 写真図版 138 吉田住吉山遺跡 遺物 石棺 蓋石状況 北から
- 谷西 包含層出土石鍋 (S3) 石棺 北から
- 主郭 2号墳周溝(西) 出土温石 (S4) 写真図版 149 吉田住吉山3号墳
- 主郭 6号墳周溝(南) 出土砥石 (S5) 石棺 南西から
- 堀切出土砥石 (S6) 石棺 北西から
- 谷東 包含層出土砥石 (S7) 写真図版 150 吉田住吉山3号墳
- 主郭 炉2 出土砥石 (S8) 石棺・掘形 西から
- 土塁1 金属工房1 出土金床石 (S9) 石棺・掘形 北から
- 写真図版 139 吉田住吉山1号墳 写真図版 151 吉田住吉山3号墳
- 全景 北から 掘形 西から
- 埋葬施設 南から 石棺側板(展開) 西から
- 写真図版 140 吉田住吉山1号墳 写真図版 152 吉田住吉山4号墳

- 全景 西から
 周溝(南) 土層断面 東から
 周溝(西) 土層断面 南から
 写真図版 153 吉田住吉山 4 号墳
 全景 南から
 全景 南西から
 写真図版 154 吉田住吉山 4 号墳
 埋葬施設 南から
 埋葬施設 土層断面 南から
 写真図版 155 吉田住吉山 4 号墳
 埋葬施設 棺床 南から
 埋葬施設 棺床 土層断面 西から
 写真図版 156 吉田住吉山 4 号墳
 埋葬施設 棺床粘土断面 南東から
 埋葬施設 掘形 南東から
 写真図版 157 吉田住吉山 4 号墳
 埋葬施設 掘形 南から
 埋葬施設 棺床粘土断面 南から
 写真図版 158 吉田住吉山 5・1 号墳
 5・1 号墳 南東から
 5 号墳周溝(南) 土層断面 西から
 5 号墳周溝(西) 土層断面 南から
 写真図版 159 吉田住吉山 5・4 号墳
 5・4 号墳 西から
 5 号墳 南から
 写真図版 160 吉田住吉山 5 号墳
 石棺 北から
 石棺・掘形 北から
 写真図版 161 吉田住吉山 5 号墳
 北石棺 東小口 北西から
 北石棺 東小口 南西から
 北石棺 西小口 南東から
 北石棺 西小口 北東から
 北石棺 側面 北から
 北石棺 側面 南から
 写真図版 162 吉田住吉山 5 号墳
 北石棺 西から
 北石棺 土器出土状況 南東から
 写真図版 163 吉田住吉山 5 号墳
 北石棺 土器出土状況 西から
 土師器 壺 (402)
 写真図版 164 吉田住吉山 6・5・4 号墳
 6・5・4 号墳 全景 西から
 6 号墳 全景 南東から
 写真図版 165 吉田住吉山 6 号墳
 周溝(南) 土層断面 南東から
 周溝(東) 土層断面 南から
 写真図版 166 吉田住吉山 6 号墳
 周溝(西) 土層断面 南から
 須恵器 無蓋高坏 (405)
 須恵器 坏H身(404) 須恵器 甕(406・407)
 写真図版 167 吉田住吉山 7・8 号墳 全景
 7・8 号墳 全景 南から
 7 号墳 全景 西から
 写真図版 168 吉田住吉山 7 号墳
 周溝(西) 土層断面 南から
 周溝(南) 土層断面 西から
 周溝(東) 土層断面 南から
 写真図版 169 吉田住吉山 7 号墳
 埋葬施設 西から
 埋葬施設 北から
 写真図版 170 吉田住吉山 7 号墳
 南埋葬施設 北から
 南埋葬施設東小口 遺物出土状況
 西から
 写真図版 171 吉田住吉山 7 号墳
 北埋葬施設 北から
 北埋葬施設 鉄器出土状況 北から
 北埋葬施設東小口 遺物出土状況
 西から
 写真図版 172 吉田住吉山 7 号墳
 墳丘(南北) 土層断面 東から
 墳丘(東西) 土層断面 南から
 写真図版 173 吉田住吉山 7 号墳
 出土須恵器 (408~414・417・420~423)
 写真図版 174 吉田住吉山 7 号墳

- 出土須恵器
(418・425・430～432・435・437～439
・443)
- 写真図版 175 吉田住吉山 7 号墳
出土須恵器
(415・419・427～429・433・434・440～
442・445)
- 写真図版 176 吉田住吉山 7 号墳
出土玉類 (J1～J7)
出土鉄製品 (M601～M606)
- 写真図版 177 吉田住吉山 7 号墳
出土須恵器拓影 (408～410・413)
- 写真図版 178 吉田住吉山 7 号墳
出土須恵器拓影 (414・418～422)
- 写真図版 179 吉田住吉山 7 号墳
出土須恵器拓影 (423・424・426・433)
- 写真図版 180 吉田住吉山 7 号墳
出土須恵器拓影
(432・435・437～439・443)
- 写真図版 181 吉田住吉山 8 号墳
全景 西から
周溝(南) 土層断面 東から
周溝(北) 土層断面 東から
- 写真図版 182 吉田住吉山 9 号墳
全景 北東から
埋葬施設 南から
- 写真図版 183 吉田住吉山 9 号墳
埋葬施設 西から
埋葬施設 北から
- 写真図版 184 吉田住吉山 9 号墳
北埋葬施設東小口 須恵器出土状況
西から
北埋葬施設西小口 須恵器出土状況
東から
- 写真図版 185 吉田住吉山 9 号墳
北埋葬施設 鍬出土状況 北から
北埋葬施設 刀子出土状況 北東から
北埋葬施設 刀子出土状況 北から
- 写真図版 186 吉田住吉山 9 号墳
南埋葬施設東小口 須恵器出土状況
東から
南埋葬施設東小口 須恵器出土状況
西から
- 写真図版 187 吉田住吉山 9 号墳
埋葬施設 北から
下層埋葬施設 検出状況 北から
下層埋葬施設 北から
- 写真図版 188 吉田住吉山 9 号墳
出土須恵器 (446～451)
- 写真図版 189 吉田住吉山 9 号墳
出土須恵器 (452～460)
- 写真図版 190 吉田住吉山 9 号墳
出土須恵器 (461～471)
- 写真図版 191 吉田住吉山 9 号墳
出土鉄製品 (M607～M614)
出土玉類 (J8)
- 写真図版 192 吉田住吉山 9 号墳
出土須恵器 (480～484・490)
- 写真図版 193 吉田住吉山 9 号墳
出土須恵器
(472～474・477～479・485～488・491)
- 写真図版 194 吉田住吉山 9 号墳
出土須恵器拓影 (446～449・453・454)
- 写真図版 195 吉田住吉山 9 号墳
出土須恵器拓影 (455～460)
- 写真図版 196 吉田住吉山 9 号墳
出土須恵器拓影 (461～466)
- 写真図版 197 吉田住吉山 9 号墳
出土須恵器拓影 (468～472・474)
- 写真図版 198 吉田住吉山 9 号墳
出土須恵器拓影
(473・476・480・483・488)
- 写真図版 199 吉田住吉山 10 号墳
検出状況 全景 西から
全景 北から
- 写真図版 200 包含層

- 出土須恵器
(492～495・497・498・500・501)
- 写真図版 201 吉田1号墳
全景 南東から
埋葬施設 南から
棺埋土断面 西から
棺床粘土断面 西から
- 写真図版 202 吉田1号墳
鉄刀2 出土状況 南から
鉄刀2 出土状況 西から
鉄刀1 出土状況 西から
- 写真図版 203 吉田1号墳
出土土師器 (601・602)
出土鉄製品 (M701～M703)
- 写真図版 204 吉田32号墳
全景 北から
南断面 東から
北断面 東から
出土遺物 蓋 (604)・甕 (607)
- 写真図版 205 第3次調査区
全景 北から
S X 01 北から
- 写真図版 206 第3次調査
S X 02 検出状況(1) 西から
S X 02 検出状況(2) 西から
S X 02 検出状況(3) 西から
- 写真図版 207 第3次調査
S X 02 下層 須恵器 出土状況
南から
S X 02 下層 須恵器蓋 出土状況
南から
- 写真図版 208 第3次調査
出土須恵器 (608～611)
- 写真図版 209 吉田住吉山遺跡 弥生時代遺構
全景 北西から
S K 91・S K 93 完掘状況 西から
- 写真図版 210 吉田住吉山遺跡 弥生時代遺構
S K 91 石 東から
S K 91 南から
S K 91 北から
- 写真図版 211 吉田住吉山遺跡 弥生時代遺構
S K 93 遺物出土状況 北から
S K 93 遺物出土状況 北東から
- 写真図版 212 吉田住吉山遺跡 弥生時代遺構
S K 90 遺物出土状況 北から
S K 97 遺物出土状況 北から
- 写真図版 213 吉田住吉山遺跡 弥生時代遺物
出土土器 (701～704・706～708)
- 写真図版 214 吉田住吉山遺跡 弥生時代遺物
出土土器 (705・709～715・717～724)
- 写真図版 215 吉田住吉山遺跡
縄文・弥生時代遺物
出土石器
(S11～S14・S16～S18・S20～S22)
- 写真図版 216 吉田住吉山遺跡
縄文・弥生時代遺物
出土石器 (S15・S23～S28)
- 写真図版 217 吉田住吉山遺跡
縄文・弥生時代遺物
出土石器 (S19)

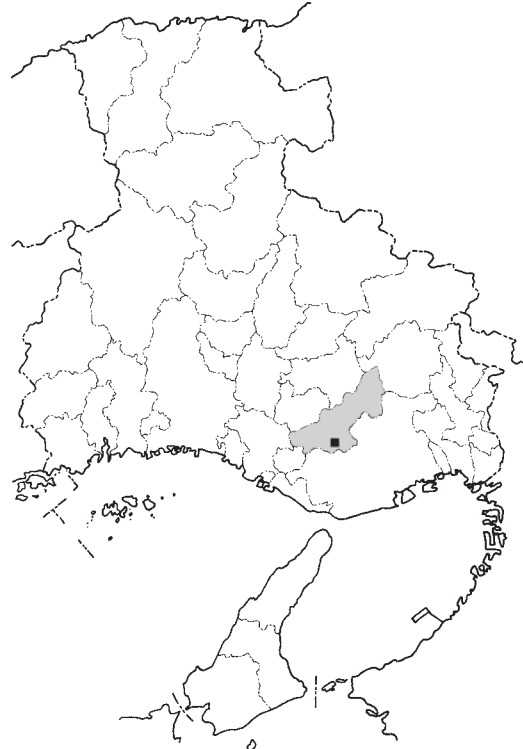
第1章 遺跡を取りまく環境

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置

吉田住吉山遺跡群（吉田住吉山遺跡・吉田住吉山古墳群・吉田古墳群）は、三木市志染町吉田字住吉山・同細目字西脇に所在する。また、高男寺本丸遺跡は、同市志染町高男寺に所在する。これらの遺跡の所在する三木市は、兵庫県中央部の内陸部に位置する都市である（第1図）。

三木市は、昭和29年に三木町・別所村・細川村・口吉川村・志染村が合併して、旧の三木市が形成されてきた。さらに、平成17年に、いわゆる平成の大合併により、美囊郡吉川町を併せ、現在の三木市となっている（第3図）。市域の面積は176.58km²、人口は約8.2万人（平成22年1月現在、三木市ホームページによる）である。市域は、南側から東側にかけて神戸市と、北東側を三田市と、北西側を加東市と、西側を小野市と、南西側を加古川市・稲美町と、それぞれ接している（第3図）。なお、以下の記述については、旧の三木市域を中心にみていく。



第1図 三木市の位置



第2図 遺跡の位置



第3図 三木市の地理的位置

三木市は、室町時代に三木城が築城され、ここを中心とした城下町として発展してきた。その後、江戸時代になると、鍛冶が盛んとなり、刃物の町として栄えてきた。「三木の刃物」として全国的に有名である。また、三木と有馬温泉を結ぶ街道は、羽柴秀吉の三木城攻めの頃整備され、「湯の山街道」として、重要な内陸交通として機能していた。

近年においては、神戸のベッドタウンとして神戸電鉄粟生線を中心に開発が進んできている。また農業では、ぶどうに代表される果樹栽培や、日本を代表する酒米「山田錦」の生産が盛んである。数々のゴルフ場や「大規模年金保養基地（通称グリーンピア三木）」「三木山森林公園」といったスポーツ・保養・研修施設も充実している。

また近年においては、志染町に「県立三木総合防災公園」・「ひょうご情報公園都市」が建設され、防災・情報の拠点として位置付けられ、インフラが整備されてきている。これに伴い、山陽自動車道を中心とした道路網も整備されてきている。

吉田住吉山遺跡群・高男寺本丸遺跡は、上記の防災・情報の拠点として整備されてきた志染町（吉田住吉山遺跡群は志染町細目・吉田、高男寺本丸遺跡は志染町高男寺）に所在する（後述）。そして、調査の契機となったのも、上記施設へのアクセスの向上を目指した事業に基づくものである。



第4図 東上空からみた調査地

2. 地形的環境

兵庫県の中央部を南北に流れる加古川は、多くの河川を支流としている。その一つが美囊川である。美囊川は、三木市別所町正法寺において加古川と合流するが、ここが加古川中流域と下流域の境となっている。同時に、この合流地点が三木市・小野市・加古川市の市境となっている。合流地点より東側が三木市にあたり、この中心部を美囊川が流れている。美囊川は神戸市北区大沢町を源とし、小さな蛇行を繰り返しながら南下し、途中志染川と合流し、加古川へと繋がっている。また、志染川は、神戸市北区山田町を源とし、小さな蛇行を繰り返しながら西流し、志染町御坂で淡河川と合流後、三木市久留美で美囊川に合流している。そして、美囊川と志染川の合流地点の西側に、三木市の中心部が開けている。

美囊川・志染川・淡河川によって谷底平野が形成され、主に稲作農地として開発されてきた。一方、これらの谷底平野の周囲には山陵地が広がっている。左記に紹介した、ゴルフ・「大規模年金保養基地（通称グリーンピア三木）」・「三木山森林公園」・「県立三木総合防災公園」・「ひょうご情報公園都市」は、いずれもこれらの丘陵上に開発されたものである。

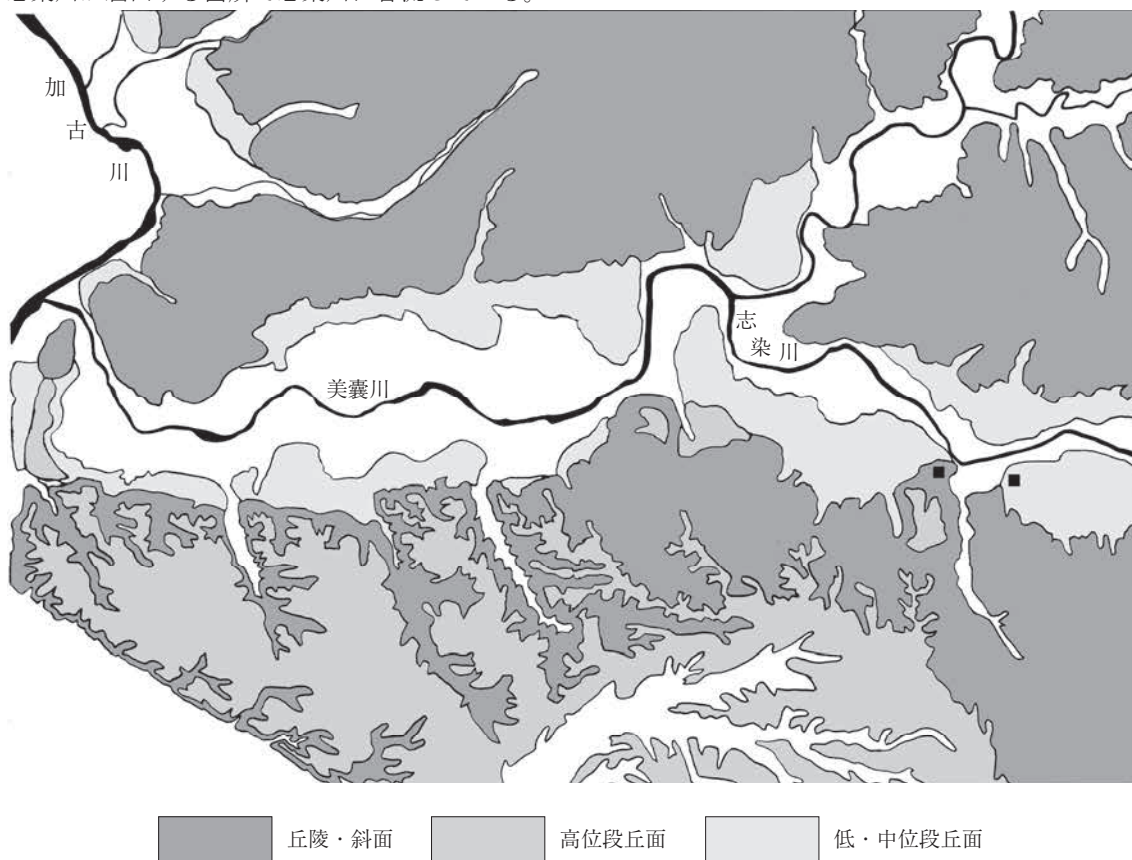


第5図 調査位置図

第1章 遺跡を取りまく環境

谷底平野は、上記の河川により明瞭な段丘面が形成されている。氾濫原面との境は明瞭な段丘崖によって区別されている。多いところで4面の段丘面が形成されている(第6図)。

さらに、調査地を北限とした南側一帯は、高位段丘面が形成されている。吉田住吉山遺跡群は、この高位段丘面が北側に突き出した一角に所在する。吉田住吉山遺跡群が立地する高位段丘面は、志染川の南側に形成された段丘面で、巨視的には東西方向に広がっている。微視的にみると、志染川に向かって小規模な谷が形成されている。この結果、これらの小谷に挟まれた段丘面が、志染川に向かって尾根上に張り出す状況となっている。この尾根状の張り出しの一つに、吉田住吉山遺跡群が立地している。吉田住吉山遺跡群が立地する小尾根は南西―北東方向にのび、その北東端は志染川と接し、顕著な段丘崖となっている。西流する志染川がこの段丘崖で北側に屈曲している。また、東側は南北方向に細目川が流れ、志染川が屈曲する箇所志染川に合流している。



第6図 調査地周辺の地形環境

一方、高男寺本丸遺跡は、志染川によって形成された中位段丘面上に立地する。中位段丘面上でも最も高位の段丘面上に立地している。ただし、調査地は当段丘面上の西端にあたり、調査地の西側は段丘崖となっている。

なお、吉田住吉山遺跡群の西側から南西側にかけては、道路により高位段丘面が途切れている。この箇所は、道路建設に伴いカットされたもので、当所は南西側から段丘面が連続していたものと考えられる。

[参考文献]

兵庫県土木部『兵庫の地質―兵庫県地質図(1:100,000) 1996

加古川市『加古川市史 第四巻』1996

第2節 歴史的環境

1. はじめに

調査地周辺をはじめ、三木市内には多くの遺跡が周知され、調査も多数行われている。特に、平成時代以降、山陽自動車道建設に伴い、集落跡・古墳・窯跡・城跡等の遺跡が調査によって明らかとなってきている。本節では、調査地の所在する志染町を中心に、発掘調査が行われた遺跡を中心にみていくことにする(第7図)。

2. 旧石器時代

周辺には、当該期の遺跡は周知されていない。

3. 縄文時代

窟屋1号墳(8)の墳丘内から、中期と後期の土器が出土している⁽¹⁾。後期については、中津式・福田KⅡ式・広瀬土壙40段階の土器が出土している。ただし、いずれも遺構に伴うものではなく、周囲に当該期の遺跡の存在を想定させる資料である。

4. 弥生時代

吉田1号墓(16)・吉田南遺跡(15)・細目有田遺跡(4)・井上中合遺跡(9)が周知されている。

吉田1号墓は、以前吉田遺跡として報告されていた遺跡である。吉田古墳群中に位置し、工事中に庄内併行期の土器が明らかとなっている⁽²⁾。

吉田南遺跡は、圃場整備に伴いグリッドによる確認調査が行われている。調査の結果、後期の溝状遺構を検出するとともに、完形に近い壺などが出土している⁽³⁾。

細目有田遺跡では、圃場整備事業に伴い確認調査が行われ、後期末～古墳時代初頭にかけての住居跡が2棟確認されている。

井上中合遺跡では、弥生時代の柱穴・土坑・溝が発掘調査により明らかとなっている。

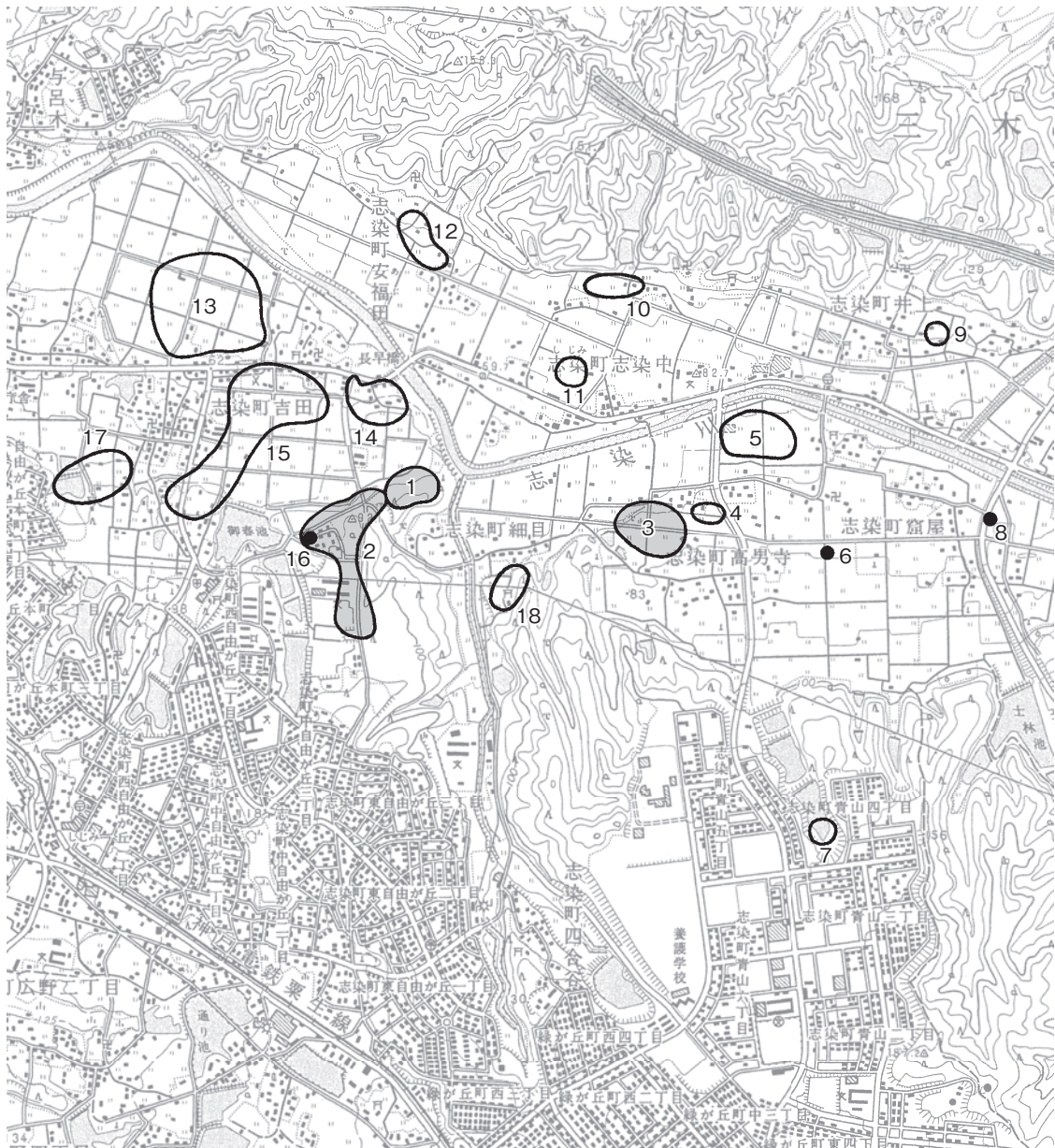
5. 古墳時代

吉田古墳群(2)・窟屋1号墳⁽¹⁾(8)・窟屋奄扇坂ノ坂古墳(6)・細目古墳群(18)・東吉田遺跡(14)・志染中梨木遺跡(11)・窟屋藤木遺跡(5)が周知されている。このほか、当地一帯は、『播磨風土記』にある「縮見屯倉」の遺称地であることも、当地の歴史を考える上で見逃すことのできない。

吉田古墳群は、円墳31基が周知されており(第12図)、そのうちの1基を今回調査している。昭和35年度には吉田10号墳～15号墳の6基が発掘調査され、吉田10号墳については木棺直葬からなる2基の主体部が明らかとなっている⁽³⁾。さらに、吉田16号墳についても1981年度に発掘調査が行われ、木棺直葬を主体とする円墳であることが明らかとなっている。

窟屋1号墳は、横穴式石室を主体とする6世紀後半の円墳である。金銅製単鳳環頭太刀柄頭が出土して注目された古墳で、被葬者は「縮見屯倉」の管理者が想定されている⁽¹⁾。

窟屋奄扇坂ノ坂古墳は、県営圃場整備事業に伴い調査が行われている。調査の結果、古墳時代後期の横穴式石室を主体とする円墳であることが明らかとなっている⁽²⁾。



第7図 主要周辺遺跡

第1表 主要周辺遺跡

No.	遺跡名	県遺跡番号	No.	遺跡名	県遺跡番号
1	吉田住吉山遺跡群	160613	10	志染中中谷遺跡	160661
2	吉田古墳群	160615~160645	11	志染中梨木遺跡	160659
3	高男寺本丸遺跡	160655	12	安福田蔵町散布地	160658
4	細目有田遺跡	160654	13	吉田中ノ坪遺跡	160607
5	窟屋藤木遺跡	160668	14	東吉田遺跡	160647・160648
6	窟屋奄扇坂ノ坂古墳	160672	15	吉田南遺跡	160608~160611
7	高男寺廃寺跡	160656	16	吉田1号墓	160646
8	窟屋1号墳	160675	17	宿原窠跡群	160600~160605
9	井上中合遺跡	160665	18	細目古墳群	160649~160651

細目古墳群は、3基の円墳からなる古墳群である。発掘調査はなされていないが、2号墳は横穴式石室を主体とし、2号墳もしくは3号墳からは朱文鏡が出土した記録が残っている。

東吉田遺跡は、圃場整備に伴い確認調査が行われ、住居跡が検出されている⁽⁴⁾。住居跡内からは、須恵器の器台が出土している。

志染中梨木遺跡も、県営圃場整備事業に伴い調査が行われている⁽²⁾。古墳時代後期の集落跡が明らかとなり、カマドを伴う竪穴住居跡3棟と掘立柱建物跡が検出されている。

窟屋藤木遺跡については、1984・85年度に確認調査が行われ、竪穴住居跡が確認されている。

この他、安福田蔵町散布地(12)は、調査は行なわれていないが、その字名から「縮見屯倉」跡の可能性が考えられている。

6. 奈良時代～平安時代前半

志染中中谷遺跡(10)が周知されている。

志染中中谷遺跡は、県営圃場整備に伴う調査が行われ、溝状遺構から多くの須恵器が出土している⁽²⁾。また、包含層からは唐草文軒平瓦・墨書土器・漆塗土器が出土しており、近くに「屯倉」に相当する遺跡が存在するものと推定されている。

7. 平安時代後半～鎌倉時代

宿原窯跡群(17)・東吉田遺跡(14)が周知されている。

宿原窯跡群については、宿原5号窯跡の調査が行われ、灰原が確認されている。須恵器と瓦を焼いた瓦陶兼業窯であることが明らかとなっている。須恵器では椀・小皿・捏鉢・甕が、瓦類では軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦が出土している⁽⁴⁾。なお、当遺跡については、平成17年度に「吉田西向遺跡」として本発掘調査が行われている。本報告の調査と同じ事業に起因するもので、本書と同年度に報告書が刊行される予定である⁽⁵⁾。

東吉田遺跡については、圃場整備に伴い確認調査が行われている。調査の結果、当該期の柱穴などが確認されている。

8. 室町時代

高男寺廃寺跡(7)が周知されている。宅地造成に伴い確認調査が行われている⁽⁴⁾。調査の結果、石組の溝が明らかとなるとともに、「貞和二季」の銘がある軒平瓦や巴文軒丸瓦などが出土している。

〔註〕

(1)池田征弘『窟屋1号墳―(主)平野三木線緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告書―』兵庫県教育委員会 2009

(2)松村正和『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ 昭和60年度～平成6年度』三木市教育委員会 2000

(3)三木市『三木市史』1970

(4)三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財調査概報―昭和50年度～昭和59年度―』1986

(5)山田清朝『吉田西向遺跡』兵庫県教育委員会 2011



- | | | | |
|---------------------------|----------|---------------|--------------|
| 1. 和田村四合谷村ノ口
【吉田住吉山遺跡】 | 4. 鳥町村河原 | 8. 跡部村山ノ下 | 12. 細川荘中村 西村 |
| 2. 三木城 | 5. 大村山ノ上 | 9. 久留美村大家内容上 | 13. 平井村中村間ノ山 |
| 3. (和田) | 6. 平田山ノ上 | 10. 久留美村慈眼寺山上 | 14. 平井山ノ上 |
| | 7. 加佐村ノ上 | 11. 久留美村山上 | |

第8図 三木城付城



- | | | | |
|----------------|-----------------|--------------|----------------|
| 15. 奥呂木村上野 | 19. 中島町八幡谷ノ上明石道 | 23. 宿原村ノ上 | 27. (明石道峯構) |
| 16. 安福田村ノ上 | 20. 三谷ノ上 | 24. 高男寺村 | 28. (小林八幡神社付城) |
| 17. 這田村 法界寺山ノ上 | 21. 二位谷奥 | 25. (大塚城) | |
| 18. 羽場山上 | 22. 大塚町上君ヶ峰 | 26. (シクノ谷峯構) | () 内は鑑未掲載 |

第9図 三木城付城(2)

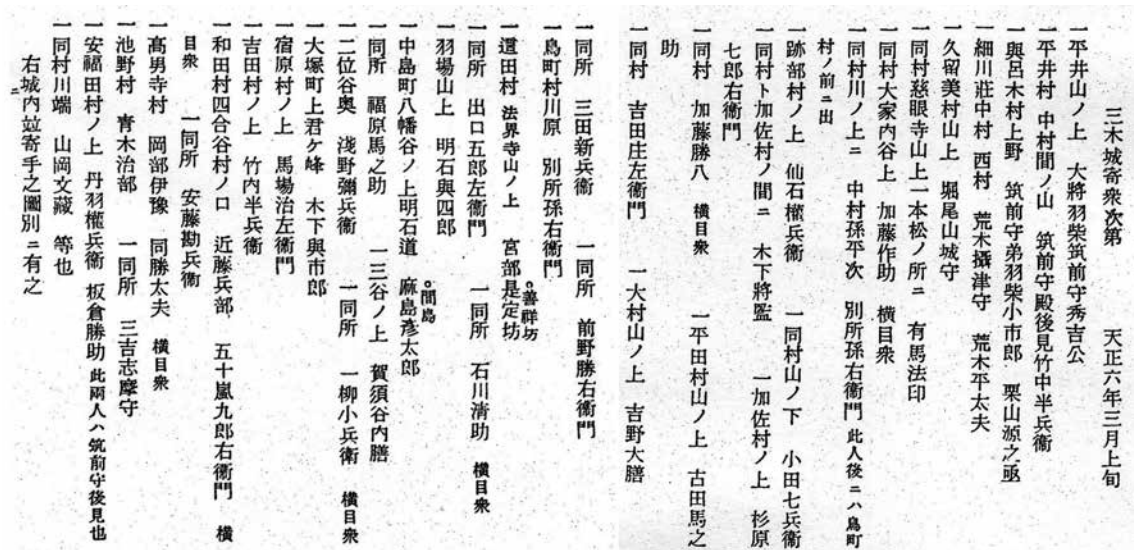
第3節 吉田住吉山遺跡について

1. 遺跡周知の経緯

本書で報告する段丘面上一帯には、以前から吉田古墳群（1号墳～31号墳）が周知されていた⁽¹⁾（第11図）。特に、調査予定地内には吉田1号墳が周知されていた。その後、当該古墳群が立地する段丘面一帯が、踏査の結果、平坦面・堀・土塁の存在から城跡であると認識されるようになってきた⁽²⁾。所在する地名から判断して、羽柴秀吉による三木城攻めに関連する付城の可能性が考えられ、『播磨鑑』の記述（第10図）から、「吉田村ノ上」に該当する城跡と判断されるに至った⁽³⁾。

その後、当地南側の谷の小字名が「四合谷」であり、調査地がその谷の口にあたることから、「和田村四合谷村ノ口」に該当するものと考えられるに至った。このように、本遺跡は三木城に伴う付城であるという考えを前提に、『播磨鑑』の記述と地元の地名をもとに名づけられたものであった。

このため、当初は、「和田村四合谷村ノ口付城跡」と称し、調査を進めていった。



第10図 播磨鑑

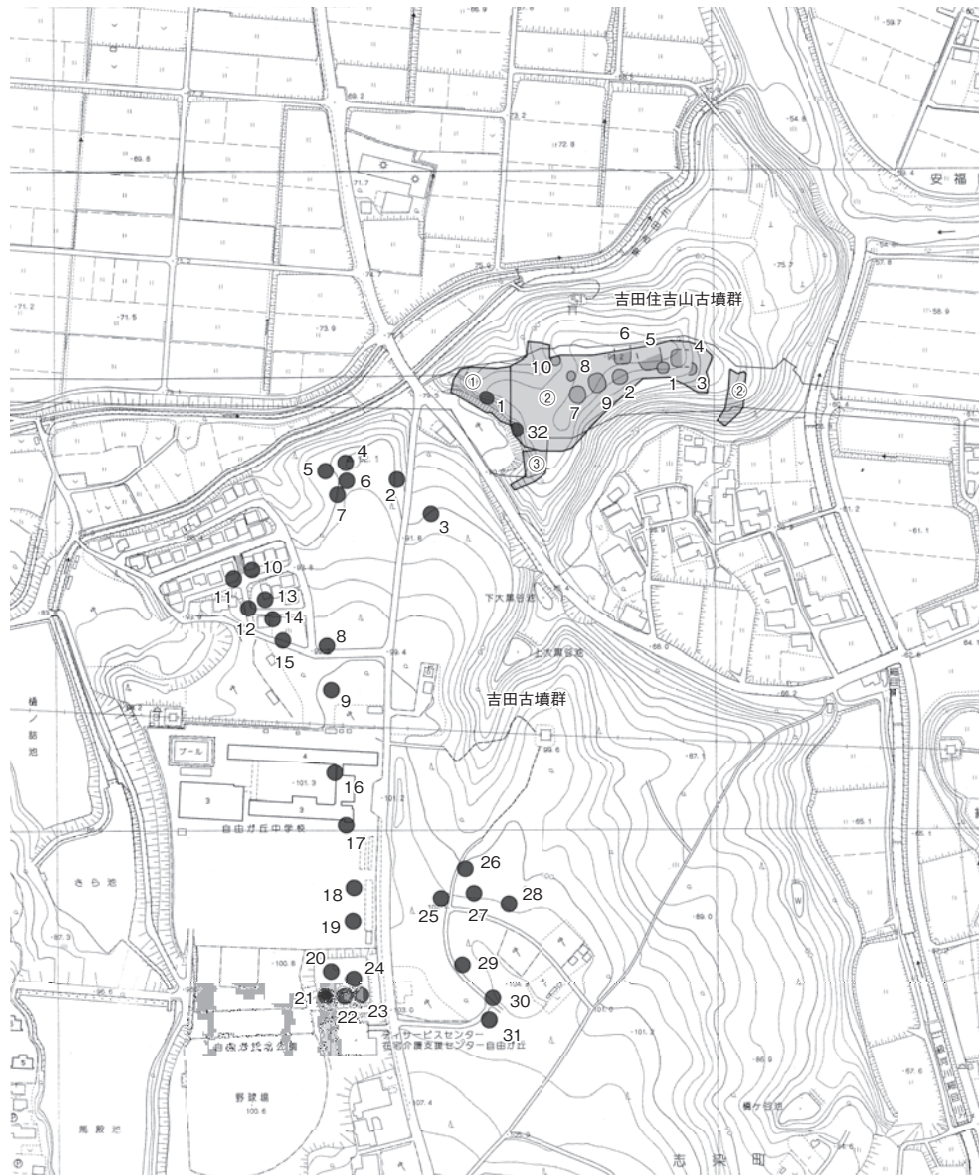
2. 遺跡名の変更・追加

ところが、調査の結果、城郭遺構以外に集落跡や古墳群が明らかとなった。また、城郭に関連する遺構も検出されたが、その時期は三木城攻めの時期ではなく、南北朝時代まで遡ることが明らかとなった。また、弥生時代まで遡る遺構も少なからず検出されている。以上から、三木市教育委員会と協議の上、集落跡と城郭遺構については遺跡名を「吉田住吉山遺跡」と名付けた。

この他、調査の結果、周知されていた「吉田1号墳」以外にも、新たに11基の古墳が明らかとなった（第60図）。これらの古墳は、吉田1号墳の南東側に1基と、調査地内の小さな谷を隔てた東側に10基が分布するものである。そこで、後者の10基の古墳については立地上「吉田1号墳」とは異なるこ



第11図 吉田古墳群（21号墳～24号墳）



第12図 調査地と吉田古墳群・吉田住吉山古墳群

とから、当地の小字地名をとり「吉田住吉山古墳群」と名付けた。そして、検出した10基の古墳を、吉田住吉山1号墳～吉田住吉山10号墳とした。また、吉田1号墳の南東側で明らかとなった古墳については、吉田1号墳を含む吉田古墳群の範囲内にあることから、当該古墳群の1基と判断するにいたった。そして、吉田古墳群中の32番目の古墳として、「吉田32号墳」と呼称することにした。

以上から、調査地は弥生時代の集落と南北朝時代の城郭遺構を中心とした「吉田住吉山遺跡」と、吉田住吉山古墳群・吉田古墳群から構成される古墳群からなるものである。そして本書では、これらの遺跡を総称して、「吉田住吉山遺跡群」と呼称することにする。

〔註〕

- (1) 三木市教育委員会『三木市遺跡分布地図 三木市内遺跡詳細分布調査報告書』平成13年
- (2) ちなみに、1982年兵庫県教育委員会刊行の『兵庫県の中世城館・荘園遺跡－兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告』においては、掲載されていない。
- (3) 宮田逸民「織田政権と三木城包囲網－秀吉による「三木の干殺し」の検証」『歴史と神戸』169 1991

第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

1. 工事の概要

兵庫県は、三木市志染町吉田字住吉山・細目字西脇において主要地方道三木三田線住宅地関連公共施設等総合整備促進事業を計画した。当該事業は、三木市志染町に建設された県立三木総合防災公園と、三木市街とを結ぶ交通路の整備を目的としたものである。合せて、既存の主要地方道三木三田線が、集落内を通り比較的狭小であることによる交通安全上の理由から、新たにバイパスが必要であった。

以上から、三木市街から県立三木総合防災公園へのアクセス道路として、同公園と山陽自動車道三木東インターチェンジを結ぶ主要地方道平野三木線に取り付く道路として、新たに建設されることになったものである(第14図・第17図)。区間は、三木市恵比須から同市志染町窟屋までをほぼ直線的に結ぶ、約4.5kmである。なお、この区間の工事は、新設区間と拡幅区間からなる。

また、上記事業に合せて、県道志染土山線の一部についても整備されることとなった。



第13図 工事中の吉田住吉山遺跡群



第14図 工事計画と埋蔵文化財包蔵地(1)

2. 工事と埋蔵文化財の調査

上記事業予定地の多くは、以前に圃場整備に伴う分布調査・確認調査が行われ、埋蔵文化財の包蔵地はすでに周知されていた。しかし、今回の事業に伴う工事予定地内に埋蔵文化財が実際に包蔵されているのかについて、再度、分布調査・確認調査を実施した。

対象となったのは、西から、宿原窯跡群（吉田西向遺跡）・和田村四合谷村ノ口付城跡・高男寺本丸遺跡・吉田古墳群・細目有田遺跡の5遺跡である。この結果、細目有田遺跡を除く4遺跡について、本発掘調査を実施することになった（第14図・17図）。本書はの中で、和田村四合谷村ノ口付城跡（調査後、吉田住吉山遺跡に改称）・高男寺本丸遺跡・吉田住吉山古墳群・吉田古墳群の調査成果に対する報告である。

なお、取り扱いの詳細については、次節を参照されたい。



第15図 竣工後の吉田住吉山遺跡群遠景（東から）



第16図 竣工後の吉田住吉山遺跡群近景（南西から）



第17図 工事計画と埋蔵文化財包蔵地(2)

第2節 分布調査・確認調査

1. 分布調査

計2次にわたって行われている。

第1次調査 遺跡調査番号：200373

調査地 三木市志染町吉田～窟屋

調査期間 平成13年3月6日

調査概要 三木三田線道路改良事業に伴う調査として行った。この結果、和田村四合谷村ノ口付城跡・高男寺本丸遺跡・吉田古墳群・細目有田遺跡を確認することができた。

第2次調査 遺跡調査番号：2003220

調査地 三木市宿原～志染町吉田

調査期間 平成15年11月27日

調査概要 三木三田線住宅宅地関連公共施設等総合整備促進事業と県道志染土山線歩道設置事業に伴う事業予定地内について実施した。調査の結果、遺物を採集し、埋蔵文化財が包蔵される可能性が考えられるに至った。

2. 確認調査

確認調査は、細目有田遺跡・高男寺本丸遺跡・吉田遺跡群・吉田西向遺跡を対象とした。

(1) 細目有田遺跡

2次にわたって確認調査が行われている。

第1次調査：遺跡調査番号 2002207

調査地 三木市志染町細目字有田

調査期間 平成14年12月18日

調査担当 山田清朝・小川弦太

調査概要 2m×1.5mのトレンチを7箇所を設定し、調査を行った。調査の結果、埋蔵文化財の包蔵を確認することはできなかった。

第2次調査：遺跡調査番号 2002235

調査地 三木市志染町細目字有田

調査期間 平成15年2月13日

調査担当 山田清朝

調査概要 2m×1mのトレンチを4箇所を設定し、調査を行った。調査の結果、埋蔵文化財の包蔵を確認することはできなかった。

(2) 高男寺本丸遺跡：遺跡調査番号 2002208

調査地 三木市志染町高男寺字本丸

調査期間 平成14年12月18日・19日

調査担当 山田清朝・小川弦太

調査概要 調査地は、高男寺本丸遺跡として周知されている範囲内である。2m×1.5mのトレンチを18箇所を設定し、調査を行った。調査の結果、調査対象地の南西部において埋蔵

文化財の包蔵を確認することができた。以上から、埋蔵文化財の包蔵を確認した地域について、本発掘調査を実施することとなった。これが、本書で報告する高男寺本丸遺跡の調査である。

(3) 吉田住吉山遺跡群：遺跡調査番号 2001223

調査地 三木市志染町吉田字住吉山

調査期間 平成14年 2月4日～15日

調査担当 村上泰樹

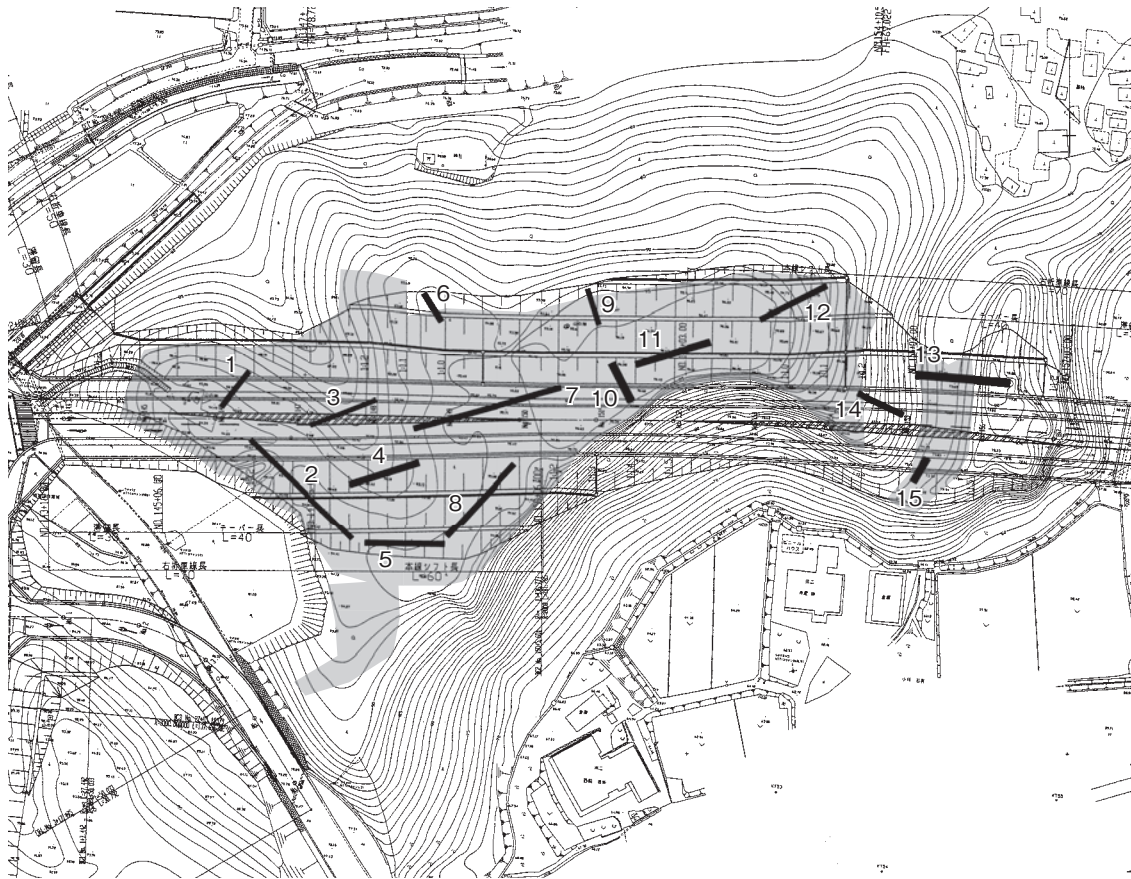
調査概要 調査地は、吉田1号墳・和田村四合谷村ノ口付城跡として周知されている範囲内である。幅50cm～1m、長さ6～40mのトレンチを15箇所を設定し、調査を行った(第18図)。調査の結果、調査対象地の全域において埋蔵文化財の包蔵を確認することができた。

特に土塁・堀・曲輪など城跡に関連する遺構が良好な状態で残っていることが明らかとなった。以上から、埋蔵文化財の包蔵を確認した地域について、本発掘調査を実施することとなった。これが、本書で報告する吉田住吉山遺跡群の調査である。

この他、同事業に伴い今回報告する地区の西側でも本発掘調査が行われている。詳しくは、「吉田西向遺跡」の本報告を参照されたい。

3. 小結

以上から、西から吉田西向遺跡・吉田住吉山遺跡群・高男寺本丸遺跡について、本発掘調査を実施した。このうち、吉田住吉山遺跡群と高男寺本丸遺跡の調査成果をまとめたのが、本書である。また、吉田西向遺跡については、本書と同年度に刊行されている。



第18図 吉田住吉山遺跡 確認調査位置図

第3節 本発掘調査

1. 調査の概要

調査地は、吉田住吉山遺跡群と高男寺本丸遺跡の、大きく2地点からなる。吉田住吉山遺跡と吉田住吉山古墳群については、調査時には和田村四合谷村ノ口付城跡として周知されていた遺跡である。また、吉田古墳群については以前から周知されていた古墳群である。

2. 吉田住吉山遺跡群の調査

調査は、平成14年度から16年度の3箇年にわたって行われた。3次の調査概要は以下の通りである。

第1次調査	遺跡調査番号：2002169
調査地	三木市志染町吉田字住吉山
調査期間	平成14年12月19日～平成15年3月14日
調査概要	<p>北播磨県民局三木土木事務所からの依頼により、(主)三木三田線(仮称：志染バイパス)住宅宅地関連公共施設等総合整備促進事業に伴う調査として実施した。</p> <p>調査は、吉田1号墳を対象として実施した。しかし、墳丘の周囲に横堀等、中世の遺構の存在が明らかとなった。これらの遺構については、本報告では「吉田住吉山遺跡」として報告する。調査面積は1379㎡である。</p>
調査体制	調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝・小川弦太 調査補助員 西村美緒・中久保辰夫・河内香奈美・前田結城 室内作業員 五百蔵道代・酒井純子・丹治敦子・習田都起子
第2次調査	遺跡調査番号：2003007(吉田住吉山遺跡群)・2003008(高男寺本丸遺跡)
調査地	三木市志染町吉田字住吉山・志染町高男寺
調査期間	平成15年6月23日～平成16年12月16日(吉田住吉山遺跡・吉田住吉山古墳群) 平成15年10月20日～平成16年10月29日(高男寺本丸遺跡)
調査概要	<p>北播磨県民局三木土木事務所からの依頼により、(主)三木三田線(仮称：志染バイパス)住宅宅地関連公共施設等総合整備促進事業に伴う調査として実施した。調査地は、吉田住吉山遺跡群と高男寺本丸遺跡の大きく2遺跡の調査を実施した。</p> <p>吉田住吉山遺跡群は、第1次調査の東側を対象とした。調査地は、第1次調査に隣接する地区と、その東側の堀を中心とした、2地区からなる。</p> <p>本遺跡は、三木城攻めに伴う付城の一つとして「和田村四合谷村ノ口付城跡」と称されており、当初はこの遺跡名で調査を開始した。ところが、調査が進むにつれて、弥生時代・古墳時代・南北朝時代の遺構・遺物が明らかとなった。そこで、新たに吉田住吉山遺跡・吉田住吉山古墳群と遺跡名を変更し、総称して吉田住吉山遺跡群と呼称することとなったものである(第1章第3節)。調査面積は、7951㎡である。</p> <p>調査は、主郭と土塁を除く地区では表土層を中心に重機で掘削し、以下を人力で進めていった。主郭については全て人力により調査を進めていった(第19図)。調査成果の記録に</p>

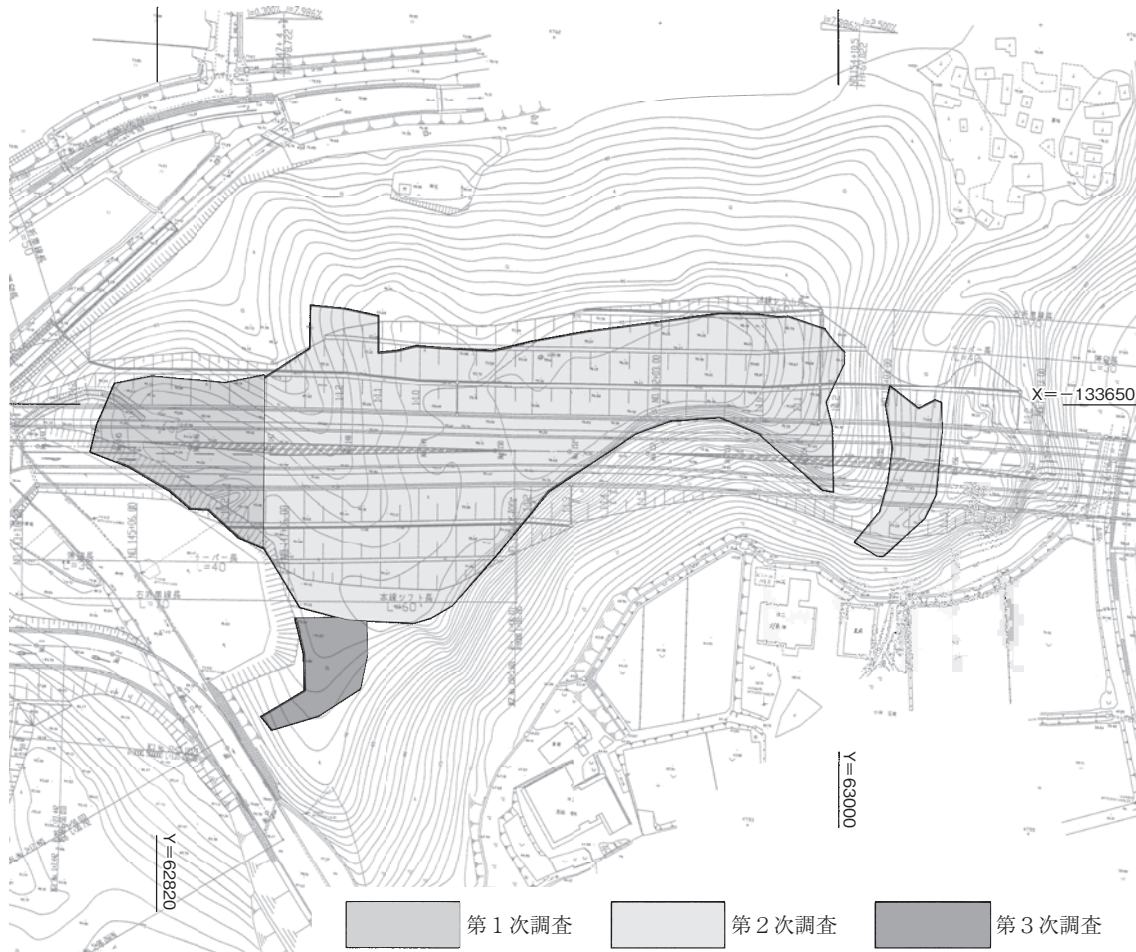
あたっては、調査前を含め、吉田住吉山遺跡の調査終了後、吉田住吉山古墳群・吉田古墳群の調査終了後の、計3回小型ヘリコプターによる空中写真撮影を行うとともに、この写真をもとに図化を行った。

また、調査中において、青木哲哉先生には地形環境について、村田修三先生には城郭遺構について、現地へ来ていただき、御教示を得た。

高男寺本丸遺跡の調査は、道路拡幅に伴うもので、既存の道路の拡幅部を調査対象とした。調査面積はわずか119㎡である。

調査体制 調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝・篠宮 正・池田征弘
 調査補助員 森崎由起子・柴田妃三光・松井利可子・中久保辰夫・高原孝明
 室内作業員 五百蔵道代・菊島昌子・藤田由美・酒井純子・丹治敦子・習田都起子

第3次調査 遺跡調査番号：2004099
調査地 三木市志染町吉田字住吉山
調査期間 平成16年9月1日～10月7日（吉田住吉山遺跡・吉田古墳群）
調査概要 北播磨県民局三木土木事務所からの依頼により、（主）三木三田線（仮称：志染バイパス）県単道路改良事業に伴う調査として実施した。調査は、吉田住吉山遺跡と吉田古墳群



第19図 吉田住吉山遺跡群年度別調査位置図

第2章 調査の経緯

を対象とし、第2次調査の南西部を対象とした。調査は、表土層を中心に重機により掘削し、以下を人力により調査を進めていった。調査終了後、小型ヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、これをもとに図化を行った。調査面積は463 m²である。

また、村田修三先生には現地に来ていただき、調査成果についての評価・御指導をいただいた。

調査体制 調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝
調査補助員 森崎由起子
室内作業員 五百蔵道代・藤田由美・酒井純子・丹治敦子・習田都起子

3. 高男寺本丸遺跡の調査

高男寺本丸遺跡についても、三木城に伴う付城と考えられていた遺跡で、確認調査の結果、一部で埋蔵文化財の包蔵が明らかとなった。以上から、本発掘調査を実施した。調査対象面積119 m²とわずかなであったため、短期間の調査であった。調査体制は以下の通りである。

調査番号 2003008
調査地 三木市志染町高男寺
調査期間 平成15年10月20日～10月29日
調査体制 調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝
調査補助員 森崎由起子
室内作業員 五百蔵道代・藤田由美・酒井純子・丹治敦子・習田都起子
調査概要 吉田住吉山遺跡群同様、(主)三木三田線(仮称:志染バイパス)県単道路改良事業に伴う調査として実施した。調査は、吉田住吉山遺跡群の調査と平行して行われた。調査は、耕作土を重機により掘削し、以下を人力により調査を進めていった。調査終了後、調査員および調査補助員により図化が行われ、記録の保存に努めた。調査面積は119 m²である。

4. 普及・啓蒙

吉田住吉山遺跡の調査が一段落した10月18日と、吉田住吉山古墳群・吉田古墳群の調査が一段落した11月16日に、一般市民を対象とした現地説明会を実施した(第20図)。10月18日の現地説明会では約300名、11月16日の現地説明会では約85名の参加が得られた。

また、普及活動として、10月31日に三木市立自由が丘東小学校6年生57名が、発掘体験を実施した。主郭において、表土層下の土壌層を掘削し、土師器をはじめとした多くの土器を発掘した(第21図)。さらに、トライアルウィークの一貫で、11月10日～14日の5日間、地元三木市立自由が丘中学校3名が発掘体験等を行った。



第20図 現地説明会

なお、調査終了後、現地の保存を望む意見が一部から出された。土木事務所等と保存の可能性を検討したが、工事計画の変更は無理との結論に至った。このため、現地に遺跡説明の看板を建てることとなった。現在、調査地の北西隅に、看板が建てられている(第22図)。



第21図 小学生の体験発掘

吉田住吉山遺跡

当地は志染バイパスの建設に先立って平成十四(一六)年度に行われた発掘調査により発見された南北朝時代(十四世紀)の城跡です。その後、羽柴秀吉の三木城攻め(一五七八(一五八〇))の際にも、敵城を包囲する付城の一つとして利用されました。

城の構造

城跡は五輪を加工して築かれています。中央の主郭は東西三〇m、南北五〇mの広い平面をとり出し、そこからは南北に土塁や東西に土塁が伸び、跡跡などが残っています。主郭の東側から北側にかけては幅の狭い平川(堀)と、堀を設け、西側は土塁と堀、東側は堀で防壁しています。

様々な出土品

城跡からは大量の土器(甕や青磁・備前焼、須恵器といった土器・陶磁器)に加えて、銅の部品(小銃)などが出土しました。堀切から出土した銅には「嘉暦二年(一三二七)」と考えられる年号、手文と、「明(石部性福寺福智院)の僧侶の名前?」などが刻まれています。性海寺は神戸市西区に現存しており、数百年の時を超えてつながりは興味深いものです。

駆けぬける人々

主郭を取り囲む堀切や堀切のようないくつかの堀切は、南北朝時代の城にはほとんど無いと推定されています。文献史料によると、明(一三九九)・赤松氏を中心とする北朝方が、南朝方の拠点である丹生寺(神戸市北区)を攻撃するために「志染陣跡」に集結し、周辺の城郭を攻めたとされています。こうした状況がこの遺跡を埋め、土を築かれています。

巨大な堀切

土塁東側は急斜面で、そのまま断面V字形の堀切に連なっています。この堀切は幅は二四m、深さ四mに及び巨大なもので、調査範囲外の北側で東へ折れ曲がっています。この堀切の跡跡は道路の切り通しの北面で見ることが出来ます。

空堀出土の模(裏面)

空堀の西側は五重の上段と四重の堀が設けられ、非常に堅牢な守りになっています。特に主郭西側の土塁は堀に比べて一四ほど高く北端を削り取っています。これらの土塁を削り取った城郭遺跡は三木城跡に面しているため、秀吉がここに付城(相田村四合谷村ノ口付城)を築いた時に手が加えられた可能性が考えられます。

空堀出土の模(裏面)

堀切

吉田住吉山遺跡と丹生山

三木市教育委員会 資料提供: 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

第22図 吉田住吉山遺跡 説明板

第2章 調査の経緯

第4節 整理作業

はじめに 整理作業は、平成19年度から22年度の4箇年で兵庫県立考古博物館にて実施した。各年度の整理作業の概要・体制等は以下の通りである。なお、土器の水洗については、一部調査現場事務所にて発掘調査と平行して行い、他については兵庫県立考古博物館魚住分館にて実施している。

平成19年度

整理概要 魚住分館で土器の水洗作業・ネーミング作業を実施した。その後、考古博物館で接合・補強を実施した。

整理体制 調査班 山田清朝・篠宮 正・池田征弘
嘱託員 早川亜紀子・伊藤ミネ子・家光和子・岡井とし子・的場美幸・小谷桂加

平成20年度

整理概要 土器・石製品・玉類の実測、土器の復元、金属製品の保存処理を実施した。

整理体制 整理保存班 篠宮 正
調査班 山田清朝・池田征弘
嘱託員 栗山美奈・川村由紀・友久伸子・前山三枝子・島田留里・佐伯純子・大西美緒・島村順子・宮野正子・又江立子・荒木由美子・嶺岡美見・藤池かづさ・小谷桂加

平成21年度

整理概要 金属製品の実測、土器・石製品・玉類・金属製品の写真撮影、金属製品の保存処理を実施した。併せて、原稿の執筆を行なった。

この他、炭化材の樹種同定・植物遺体の同定・土器の胎土分析・岩石肉眼鑑定・石材の蛍光X線分析をパリノ・サーヴェイ株式会社、出土鍛冶関連遺物及び銅製品の金属学的調査を(株)九州テクノリサーチ・TACセンターに、放射性炭素年代(AMS測定)を(株)加速器分析研究所に、土器の胎土分析を三辻利一先生に、貝類の同定を丸山真史氏に依頼し、報告を得た。この結果は、第5章にまとめてある。

整理体制 整理保存班 菱田淳子・篠宮 正
調査班 山田清朝・池田征弘
嘱託員 栗山美奈・川村由紀

平成22年度

整理概要 トレース・レイアウトを実施した。

さらに、銅製品の蛍光X線分析、赤色顔料の分析を整理保存課岡本一秀が当博物館保存処理室及び樞原考古学研究所で行った。合せて、原稿の執筆・編集作業を経て、刊行へと至った。

整理体制 整理保存課 篠宮 正・山本 誠
調査課 山田清朝・池田征弘
嘱託員 栗山美奈・川村由紀

第3章 吉田住吉山遺跡群の調査

第1節 調査の概要

1. 調査経過

調査は3箇年にわたって実施された。この詳細は、前章で報告した通りである。これは、対象面積が広いこと、単年度での調査が困難なことによるものである。基本的に調査区は連続するもので、調査方法等は一貫するものである。したがって、本報告では、3箇年分を一括した形で報告することにする。このため、平面図・遺構番号・出土遺物については、3箇年分をまとめた形で報告する。

2. 調査の手順

調査地は、当初雑木林であった。その後、工事範囲について伐開を行った。この段階で、主郭・土塁・空堀を明確に確認できる状況であった(第23図)。このため、上記の地区においては、表土層下で遺構・遺物が検出されることが予想された。また、重機による遺構の破壊が予想される状況であった。

以上から、これらの地区においては、表土掘削の段階から全て人力により調査を進めていった。一方、他の地区においては、表土層を中心に重機により掘削し、以下を人力により調査を進めていった。



第23図 調査前の土塁・空堀

3. 遺物の取上げ・取り扱い

遺構検出の出土土器の取上げにあたっては、土器と認識できたもの1点1点に番号を付けていった。そして、土器片ごとに、その出土した平面的位置及びそのレベルを記録し(第24図)、ドットマップを作成していった。これは、金属製品・石製品についても同様である。



第24図 土器の取上げ

一方、調査成果については、小型ヘリコプターにより空中写真撮影を行い、これをもとに図化を行った。この成果と、先のドットマップを重ね合わせ、平面的に遺構と一致する遺物、及びこれと接合関係にある遺物については、その遺構に伴う遺物と認定していった。

また、北側調査区外においても、段状遺構が明確に観察されたことから(第25図)、平板測量により可能な限り図化を試みた。この成果は、図版3を参照されたい。



第25図 調査区外に見られる段状遺構

第2節 城跡の調査（吉田住吉山遺跡）

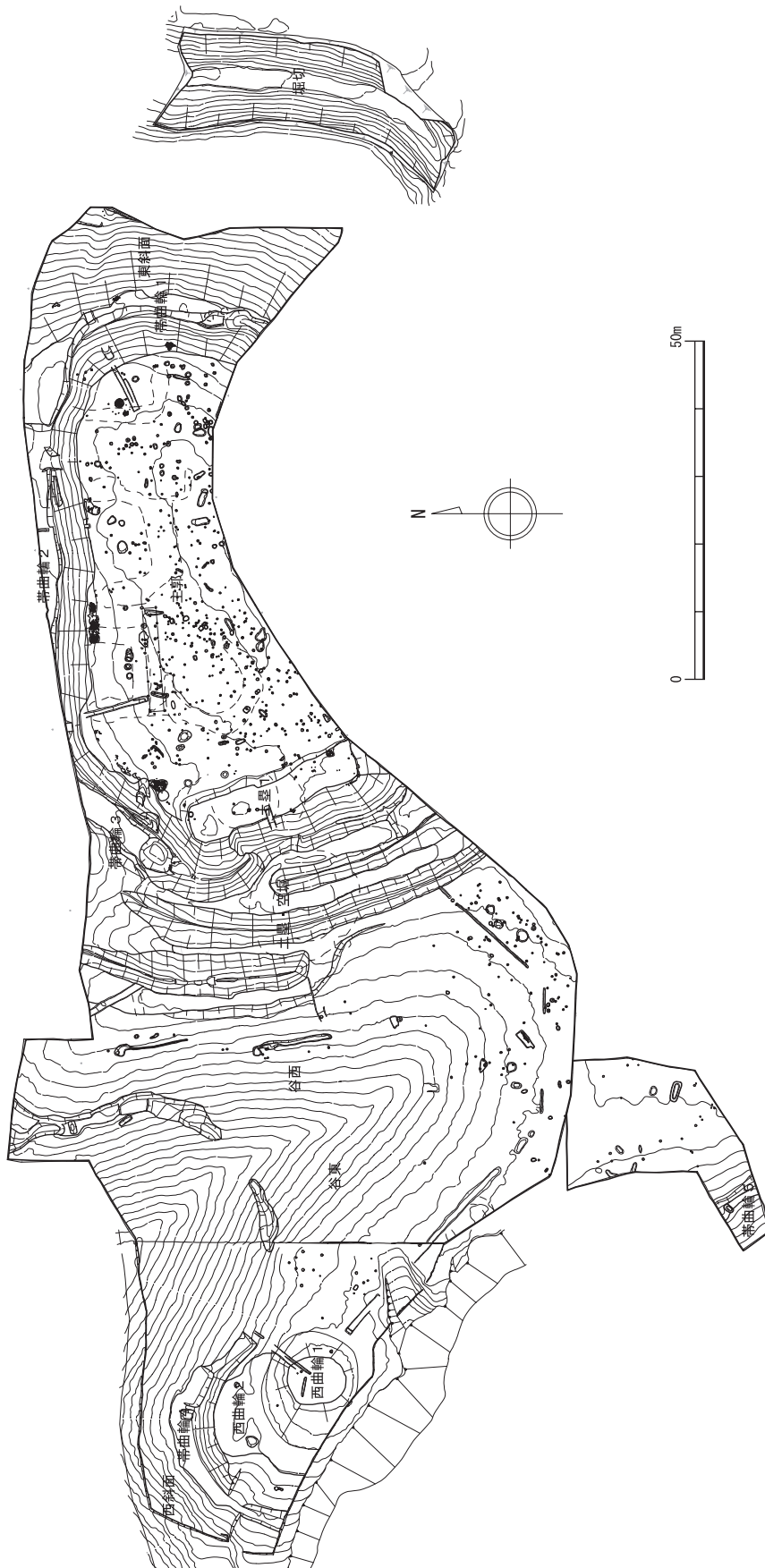
1. 城跡の概要

(1) 城跡の遺構

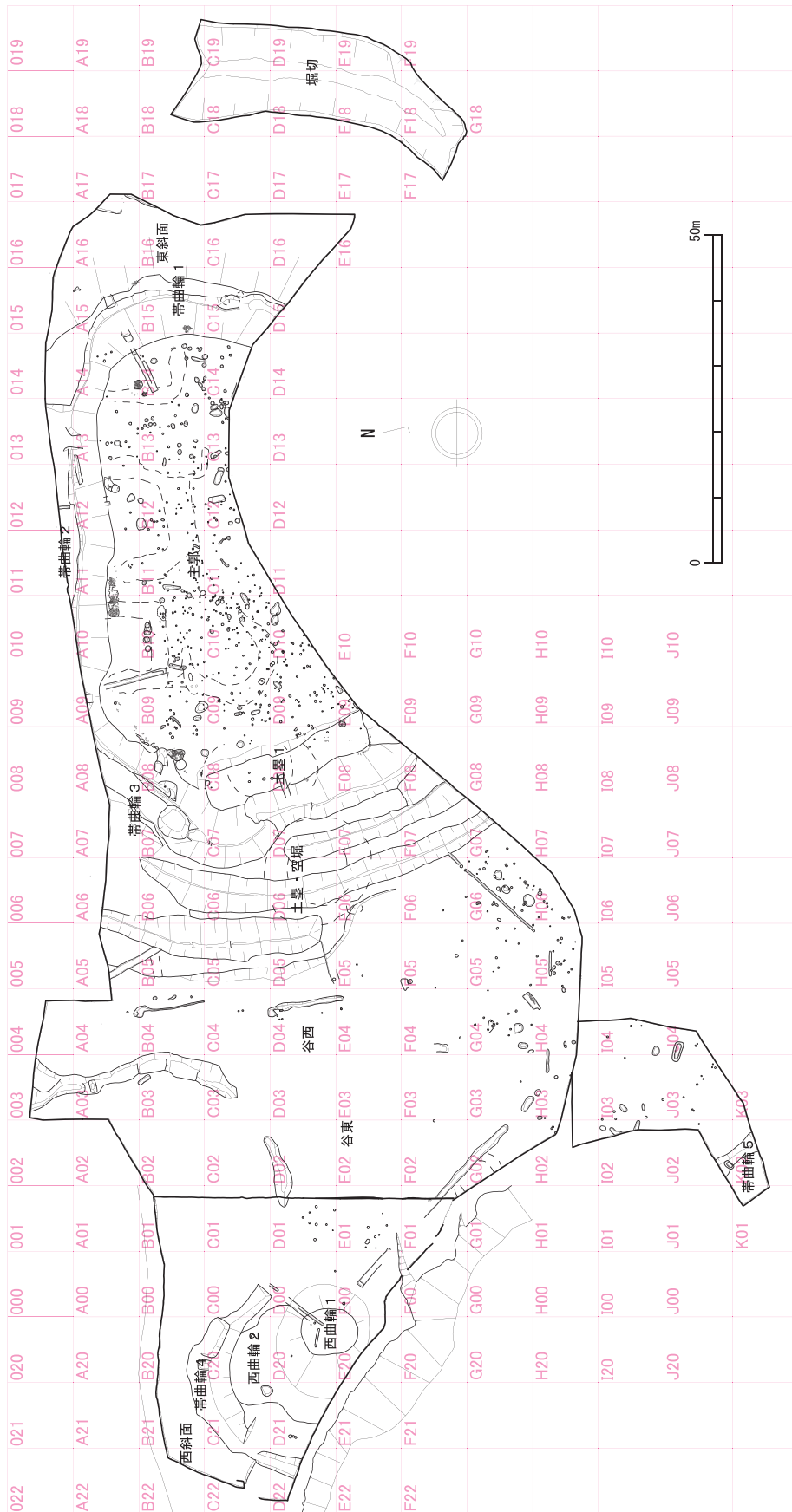
城跡は志染川南岸に広がる丘陵の一部が北東方向に突出し、丘陵本体と谷を隔てて独立丘陵化した部分に設けられている（第26図）。東側には細目川、北側には東吉田川が流れ、北東側に突出した部分は志染川に面している。南側は現状では崖面であり、西側の一部は採土により大きく削り取られている。丘陵部の東西は320m、南北は350mを計る。北側水田部（標高約73m）と城内の最高所（標高約97m）



第26図 城跡全体図



第27図 全体地区割図



第28図 ブロック配置図

との比高は24mである。城跡内部は大きく主郭を中心とする主要部とその西側の部分に分かれる。さらに主要部の北側の調査範囲外にも曲輪などが存在する（図版1～4）。

主要部 主郭は独立丘陵東部尾根上の平坦部に設けられている。主郭の西端には土塁1が設けられ、さらに土塁1の西側には4基の土塁（土塁2～5）と4基の空堀（空堀1～4）が設けられ守りを固めている（土塁・空堀）。主郭の北及び西には帯曲輪が廻らされている。帯曲輪は帯曲輪2の東西に設けられた土堤、土橋により3つに区切られている（帯曲輪1～3）。帯曲輪1の東側約10mは斜面（東斜面）となり、その東側に逆L字形の巨大な堀切が設けられている。堀切の東側は東向きの斜面が続き、細目川に臨む崖面に至る。

西部 土塁・空堀の西側は北西側から谷が入りこみ、細い尾根が谷を南から回り込んで延びている。谷の中心を境に谷東・谷西と地区を分ける。谷東の北側の斜面部では段状遺構が検出され、その東側には帯曲輪9と堅堀に連なる通路が谷を隔てて谷西まで延びている。谷筋からの進入を阻む機能も果たしているものと思われる。谷東・谷西南部の尾根上では中世のピット・土坑がわずかに検出されている。

谷を回り込んで北西方向へ延びる尾根の先端部では吉田1号墳の墳頂部を利用した西曲輪1、吉田1号墳墳裾の北西に広がる西曲輪2、それを取り囲むように設けられた帯曲輪4と曲輪が3段に渡って設けられている。城跡の西部は採土により大きく削られており分からなくなっているが、谷西南端部の西側の急斜面でわずかに帯曲輪（帯曲輪5）の存在を確認することができた。

北部 帯曲輪2の北側には、雛壇状に曲輪が広がっている。やや幅の広い帯曲輪が1段（帯曲輪6）とその下にやや幅の狭い帯曲輪が2段（帯曲輪7・8）ある。帯曲輪7・8は帯曲輪1北端から北東方向に延びる尾根を回り込むようであるが、残念ながら藪の繁茂が激しく詳細は確認できなかった。その他、小規模な平坦面を数カ所確認できる。北東に延びる尾根の先端より先は墓地や田地として利用されている平坦な部分が広がっている。

土塁・空堀の北側にも帯曲輪6と同標高の帯曲輪（帯曲輪9）が廻り、谷東通路の北端部に連なっている。その下には明瞭な曲輪の存在は確認できないが、現在神社の存在する平坦面付近に曲輪が存在した可能性がある。その西側には谷東通路の北端部に連なって堅堀が入り、雛壇状の遺構群への西からの進入を阻んでいる。

本発掘調査を行った範囲内については主郭、土塁1、土塁・空堀、帯曲輪1、帯曲輪2、帯曲輪3、東斜面、堀切、谷東、谷西、西曲輪1、西曲輪2、帯曲輪4、帯曲輪5、西斜面の15地区に分けて報告を行う（第27図）。なお、各地区内の位置を示すために10m×10mのブロックを第28図の通り設定する。

（2）城跡の出土遺物

城跡内からは多量の遺物が出土している。土器には土師器、須恵器、瓦質土器、国産陶磁器、輸入磁器などがあり、とりわけ土師器皿が極めて多い。14世紀頃のもものが大半で、その他の時期のものは非常に少ない。土器については以下のような「口縁部計測法」により係数作業を行った。器種・器形の分類を行った後、18°ずつ放射状に20分割された分度器をあてて、残存度数を数えた。本文中には主なものしか示さないが、詳細は出土土器個体度数数量表（付表2）を参照されたい。なお、遺構の項目では小さな破片を含めての遺物の種類を示し、遺物の項目では図示したもののみ解説を加える。

金属製品には鉄製品、銅製品がある。鉄製品には約430点に及ぶ釘の他、短刀・鎌・小札などの武器・

武具、鍋・五徳・火打金などの生活用具、斧・鎌などの農耕具、鉄塊・鉄滓などの鍛冶関連遺物などがある。銅製品には武器・武具の飾金具や銅塊・銅滴などの金工関連遺物などがある。銅銭も緡銭を含め95枚出土している。

石製品には硯、温石、石鍋、砥石などがある。特に硯には紀年銘をもつもの(S1)があり注目される。

自然遺物には貝、炭化物などがある。貝についてはすべてアカニシである(第5章第10節)。炭化物については一部、樹種鑑定(第5章第1節)・C14年代測定(第5章第7節)を行った。

2. 調査の成果

(1) 主郭

東西約70m、南北約40mで、標高96.7~94.2mに位置する平坦面である。面積は約2000㎡である。北側と東側には帯曲輪1~3が取り巻き、南側は現状では崖面である。土塁1は主郭の西端に位置しているが、報告の都合上独立の地区として別に取り上げ、土塁1の裾より東側を主郭として取り扱う。

主郭内では掘立柱建物跡1棟、ピット約400基、土坑約70基、集石7基、焼土3基、鍛冶炉3基、炉2基、溝1条が検出された。また城跡以前に存在した吉田住吉山古墳群の周溝は中世の段階には埋まりきっておらず、周溝の上層に多量の中世の遺物が堆積していた。



第29図 主郭の調査

掘立柱建物跡

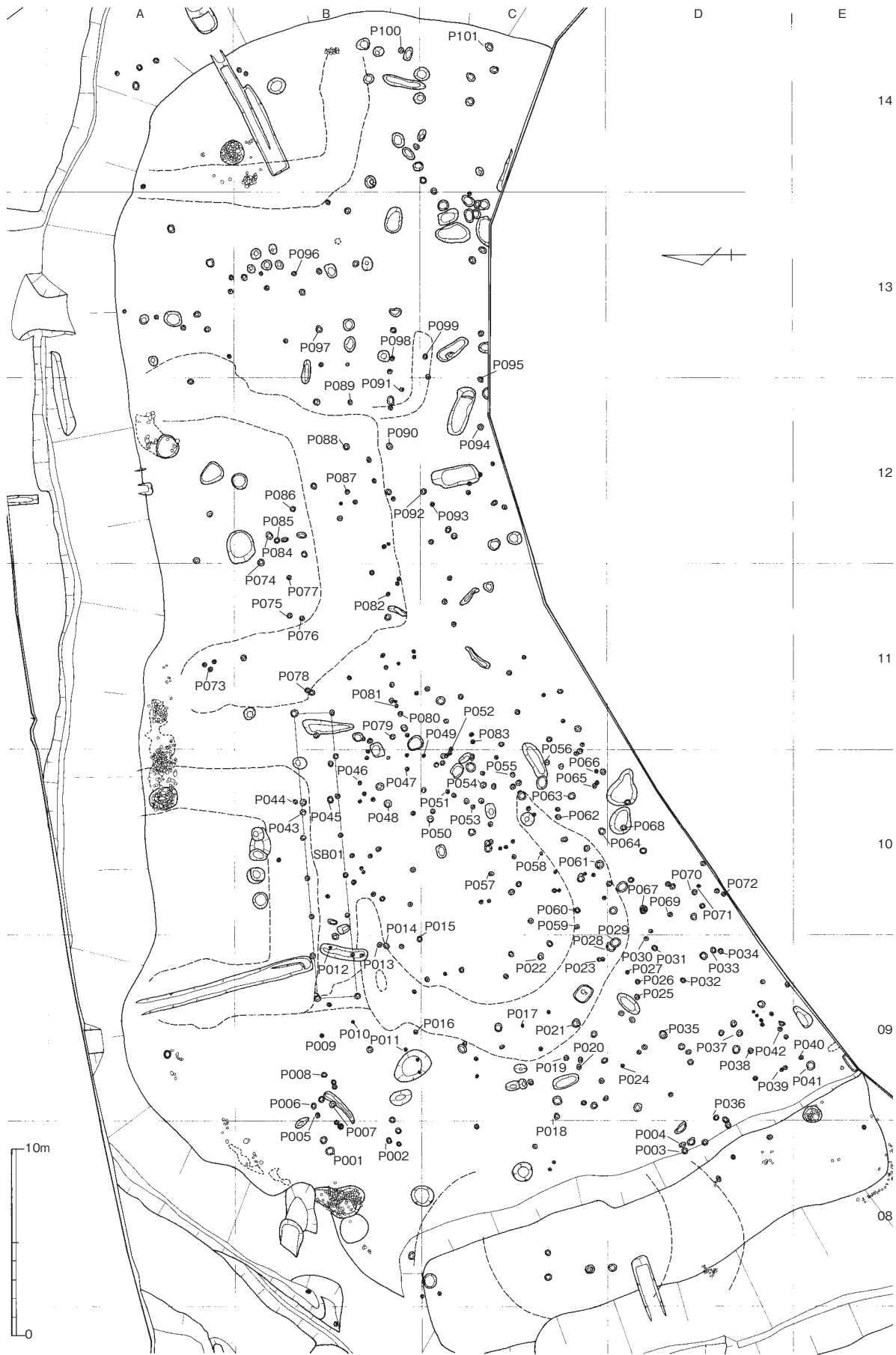
建物跡が復元できたのは1棟のみである。少なくとも中世のある段階までは、主郭内に多く存在した古墳の溝は埋まりきっておらず、起伏のある状態であったことを考えると、大きな建物が存在した可能性はあまりない。古墳の墳丘の位置に建物が存在し、後に墳丘とともに削平されたとも考えられる。また、砦・陣所という性格上簡易な建物しか存在しなかったのかもしれない。

S B01

遺構(図版9 写真図版7) B-09・10・11ブロックで検出された(第30図)。6号墳周溝と2号墳周溝の間のわずかな平坦地に設けられたかに見える。規模は桁行7間(15.3m)、梁行1間(2.0m)で、東西に細長い。面積は30.6㎡で、桁行の柱間は平均2.2mである。建物の主軸方位は6.5°Eである。柱穴はSK14で壊されている部分を除けば全て残っている。柱穴の直径は38~19cmで、深さは65~15cmである。

柱穴の埋土からは土師器皿A1(2・3)・皿A2・鍋(1)が出土している。P1から出土したコナラ材の炭化物のC14年代は1295AD-1400AD(95.4%)である。

遺物(図版85、写真図版82) 1は土師器鍋である。P9から出土した。2は土師器皿A1aである。P14から出土した。3は土師器皿A1である。口縁部に粘土紐の接合痕が認められる。P14から出土した。



第30図 主郭 掘立柱建物跡・ピット位置図

ピット

ピットは約400基検出された(第30図)。そのうち遺物が出土しているのは99基(遺構内のものを除く)である。遺物の出土したピットを中心に第2表に直径、深さ、出土遺物の種類を示す。

遺物(図版85・103・115、写真図版82・119・125) 4は土師器皿A1aである。口縁部の屈曲は弱い。P012から出土した。5は土師器皿A1bである。口縁部に煤が付着している。P056から出土した。M47は鉄釘A2である。完形で全長2.9cmと短い。P072から出土した。M46は鉄釘A4である。P069から出土した。M343は鉄斧である。装着部が逆凹字形である。長10.1cm、刃部の幅5.3cmである。

土坑

土坑は約70基検出された。主郭のほぼ全面で検出されているが、甕を据え付けたと考えられるSK10～SK13のように用途を推定できる土坑はほとんどない。以下に遺物が出土したものを中心に報告を行う(第31図)。

SK01

遺構(図版10) D-08ブロック東北部で検出された土坑である。平面は不整楕円形で、長74cm、幅30cm、深さ6cmである。埋土上層から土師器皿A1、須恵器甕などが出土している。

SK02

遺構(図版10) A-09ブロック南西部の主郭北端で検出された土坑である。平面は楕円形で、長43cm、幅36cm、深さ14cmである。埋土から土師器鍋が出土している。

SK03

遺構(図版11、写真図版8) B-09ブロック南東部で検出された土坑である。SB01と切れあっているが、前後関係はわからない。平面は長楕円形で、長260cm、幅63cm、深さ22cmである。埋土から土師器皿A1・皿A2が出土している。坑内ではピットが2基検出されているが、土坑に関係するものかどうかはわからない。北側のピット(P012)は直径15cm、検出面からの深さ14cmで、埋土から土師器皿A1(4)・鍋が出土している。南側のピットは直径15cm、坑底からの深さ17cmで、埋土から遺物は出土していない。

SK04

遺構(図版10、写真図版8) B-09ブロック南西部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長200cm、幅150cm、深さ11cmである。坑内で検出されたピットは深さが5cm以下で、土坑に関係するものかどうかはわからない。埋土から土師器皿A1・鍋、須恵器鉢(6)が出土している。

遺物(図版85、写真図版82) 6は須恵器鉢である。小型の鉢である。口縁端部は丸味をもち、内側に内彎させている。

SK05

遺構(図版11、写真図版8) C-09ブロック南西部で検出された土坑である。SK06と切れあって

第2表 主郭ピット一覧表

遺構名	グリット	直径 (cm)	深さ (cm)	遺物	遺構名	グリット	直径 (cm)	深さ (cm)	遺物
P001	B-08	38	58	土師器皿A2	P051	C-10	16	14	土師器皿A1、鉄滓
P002	B-08	24	35	土師器皿A1	P052	C-11	17	12	土師器皿・鍋
P003	D-08	27	9	土師器皿A・鍋	P053	C-10	25	24	土師器皿A・鍋、鉄滓
P004	D-08	24	5	須恵器甕、焼土塊	P054	C-10	31	33	土師器皿A1
P005	B-09	22	8	土師器皿A	P055	C-10	22	4	土師器皿A
P006	B-09	24	9	土師器皿A1・皿B	P056	C-10	22	11	土師器皿A1 (5)
P007	B-09	26	11	土師器鍋	P057	C-10	20	6	焼土塊
P008	B-09	25	19	土師器皿A、備前焼甕	P058	C-10	10	4	土師器皿A1
P009	B-09	20	69	土師器皿A	P059	C-10	21	15	土師器皿A
P010	B-09	12	13	土師器皿A	P060	C-10	25	25	土師器皿A1・鍋
P011	B-09	16	12	土師器皿A	P061	C-10	42	87	土師器皿A
P012	B-09	15	14	土師器皿A1 (4)・鍋	P062	C-10	26	32	土師器鍋
P013	B-09	22	24	土師器鍋	P063	C-10	32	21	土師器皿A
P014	B-09	25	31	土師器鍋	P064	C-10	34	14	須恵器鉢
P015	B-09	24	22	須恵器鉢・甕	P065	C-10	20	12	土師器鍋
P016	B-09	19	22	土師器皿A2・皿B・鍋、炭	P066	C-10	15	10	土師器皿A
P017	C-09	10	14	土師器皿A	P067	D-10	39	25	土師器皿A1、焼土塊
P018	C-09	28	22	須恵器鉢・甕	P068	D-10	26	13	
P019	C-09	23	26	土師器皿A1	P069	D-10	22	25	釘 (M47)
P020	C-09	23	11	土師器皿A2	P070	D-10	25	8	土師器皿A
P021	C-09	40	26	鉄斧 (M343)	P071	D-10	15	6	土師器皿A
P022	C-09	32	12	土師器皿A、焼土塊	P072	D-10	21	12	土師器皿A2、釘 (M46)
P023	C-09	18	10	土師器皿A1	P073	A-11	21	39	備前焼甕
P024	D-09	13	16	土師器皿A2	P074	B-12	32	18	土師器皿A1
P025	D-09	24	8	土師器皿A	P075	B-11	28	23	土師器皿A1
P026	D-09	26	9	土師器皿A1	P076	B-11	19	26	土師器皿A1
P027	D-09	14	24	土師器皿A1	P077	B-11	21	14	土師器皿
P028	D-09	51	16	土師器皿A1・A2	P078	B-11	22	22	土師器皿A1
P029	D-09	47	19	土師器皿A	P079	B-11	25	14	土師器鍋
P030	D-09	18	23	土師器皿A2・鍋	P080	B-11	17	16	土師器皿
P031	D-09	27	21	土師器皿A1	P081	B-11	14	12	土師器鍋
P032	D-09	23	19	土師器皿A1	P082	B-11	18	10	土師器皿
P033	D-09	27	20	土師器皿A1・皿B	P083	C-11	17	17	土師器皿
P034	D-09	25	18	土師器皿B	P084	B-12	35	20	土師器皿A1
P035	D-09	42	5	土師器皿A、須恵器碗	P085	B-12	28	22	土師器皿A
P036	D-09	25	20	土師器皿A、釘	P086	B-12	26	23	土師器皿A
P037	D-09	31	55	土師器皿A	P087	B-12	23	9	
P038	D-09	23	13	土師器皿A	P088	B-12	29	23	土師器皿A、須恵器甕
P039	D-09	12	14	土師器皿A1・鍋、 須恵器鉢・甕	P089	B-12	21	18	土師器皿A1
					P090	B-12	28	36	土師器皿A1・皿A2
P040	E-09	20	11	土師器皿A	P091	C-13	22	39	土師器皿A1
P041	E-09	43	14	土師器皿A・鍋	P092	C-12	26	27	土師器皿A1・皿A2
P042	D-09	20	18	土師器皿A1	P093	C-12	16	21	土師器皿A、須恵器甕
P043	B-10	28	35	土師器皿A1	P094	C-12	26	14	土師器皿A1
P044	B-10	20	22	土師器皿A1	P095	C-12	24	26	土師器皿A1・皿A2
P045	B-10	30	11	土師器皿A1	P096	B-13	20	19	土師器皿A
P046	B-10	16	15	土師器皿A1・鍋	P097	B-13	33	28	丹波焼甕
P047	B-10	16	13	土師器皿A1	P098	B-13	22	24	須恵器碗
P048	B-10	35	36	土師器不明	P099	C-13	22	9	土師器皿A1・鍋
P049	C-10	15	3	土師器皿A	P100	B-14	26	5	土師器鍋
P050	C-10	33	11	土師器皿A1	P101	C-14	40	24	土師器皿A1・皿A2



第31図 主郭 土坑位置図

いるが、前後関係はわからない。平面は楕円形で、長 75 cm 以上、幅 46 cm、深さ 12 cm である。埋土から土師器皿 A・須恵器碗が出土している。

S K06

遺構（図版 11、写真図版 8） C-09 ブロック南西部で検出された土坑である。S K05 と切れあっているが、前後関係はわからない。平面は楕円形で、長 53 cm、幅 40 cm、深さ 12 cm である。埋土から土師器皿 A1・皿 A2 が出土している。

S K07

遺構（図版 11） C-09 ブロック南西部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 68 cm、幅 48 cm で、中央の直径 20 cm 程度の部分が 2 段掘り状に深くなっている。深さは 35 cm である。柱状のものを立てた跡の可能性も考えられる。埋土から土師器皿 A1・焼土塊が出土している。

S K08

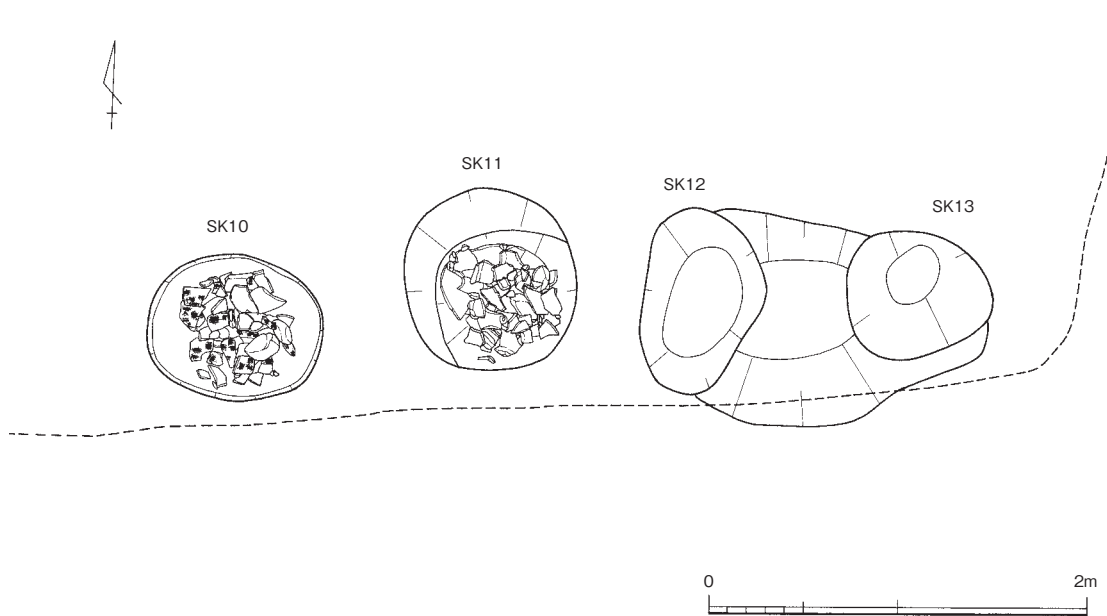
遺構（図版 11） C-09 ブロック南西部で検出された土坑である。平面は長楕円形で、長 143 cm、幅 63 cm、深さ 30 cm である。埋土から土師器皿 A1 が出土している。

S K09

遺構（図版 12） D-09 ブロック北東部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 148 cm、幅 68 cm、深さ 10 cm である。埋土から土師器皿 A1 が出土している。

S K10

遺構（図版 12、写真図版 10） B-10 ブロック北西部で検出された土坑である。この土坑は 5 号墳周溝（南）の北肩に 4 基並んだ内の西端のものである（第 32 図）。平面は楕円形で、長 92 cm、幅 77 cm、深



第32図 SK10～SK13配置図

さ 13 cmである。埋土からは土師器皿 A1 (9)・A2 (10~12)、須恵器捏鉢・甕 (14)、備前焼甕 (8) が出土している。特にこの土坑及びその周辺から須恵器甕 (14) の破片が多く出土していることから、この甕がこの土坑に据えられていたものと考えられる。

遺物 (図版 85・86、写真図版 82・83) 9は土師器皿 A1b である。10~12は土師器皿 A2a である。14は須恵器甕である。SK10を中心に周辺からも破片が出土している (図版 32)。口縁端面の外縁がやや垂下している。外面のタタキは矢羽根状で、内面は同心円当具痕をナデ消している。底部外面にはリング状にタタキが消され、平行タタキ状の痕跡が残る部分がある。製作時に何らかの台に置いた時の痕跡と思われる。底部内面には粘土紐の接合痕が残る。

SK11

遺構 (図版 12、写真図版 9) B-10 ブロック北西部で検出された土坑である。この土坑は5号墳周溝 (南) の北肩に4基 (SK10~SK13) 並んだ内の西から2番目のものである (第32図)。このうち西側の2基から甕の破片が多く出土していることから、甕を据え付けた穴と考えられる。平面は円形で、直径 90 cm、深さ 34 cmである。埋土の下半からは備前焼甕 (8)、須恵器甕 (14)、環状鉄製品 (M361) が出土し、特に備前焼甕の破片が多く出土している (第33



第33図 SK11の検出作業

図)。底部の破片は含まれていないことから、据えられたままの状態ではないがこの穴に据え付けられていたものであろう。その他、埋土からは土師器皿 A1 (7)・A2・鍋、須恵器捏鉢が出土している。

遺物 (図版 85・117、写真図版 82・127) 7は土師器皿 A1b である。口縁部はほとんど外反しない。8は備前焼甕である。SK11を中心に周辺からも破片が出土している (図版 32)。口縁部は玉縁状で、体部は内外面ともハケメ及び板ナデである。製作時の胎土の乾燥の度合いによって異なっているようである。乗岡編年中世2b期と考えられる。M361は環状鉄製品である。短い管状の製品で、外径は直径 3.5 cmである。全体に木質が付着している。

SK12

遺構 (図版 13、写真図版 10) B-10 ブロック北西部で検出された土坑である。この土坑は5号墳周溝 (南) の北肩に4基並んだ内の東から2番目のものである。東隣のSK13との間も検出面より 25 cmほど掘り下げられ、連結している。平面は楕円形で、長 98 cm、幅 65 cm、深さ 28 cmである。埋土からは土師器皿 A1・A2、須恵器捏鉢・甕、備前焼甕 (8) が出土している。備前焼片はSK11出土のものに接合した。

SK13

遺構 (図版 13、写真図版 10) B-10 ブロック北西部で検出された土坑である。この土坑は5号墳周溝 (南) の北肩に4基並んだ内の東端のものである。西隣のSK12と連結している。平面は楕円形で、長 75 cm、幅 70 cm、深さ 30 cmである。埋土からは土師器皿 A1 (13)・A2・鍋、備前焼甕 (8) が出土している。備前焼の破片はSK11出土のものに接合した。

遺物 (図版 85、写真図版 82) 13は土師器皿 A1a である。

SK14

遺構（図版 13、写真図版 11） B-10 ブロック北東部で検出された土坑である。SB01 のピットを切っている。平面は楕円形で、長 77 cm、幅 65 cm、深さ 19 cm である。埋土からは土師器鍋、鉄釘（M48）が出土している。

遺物（図版 103、写真図版 119） M48 は鉄釘 A1 である。完形で、全長 8.4 cm である。

SK15

遺構（図版 14、写真図版 12） C-10 ブロック北東部で検出された土坑である。SK16 の北隣に位置している。平面は方形で、長 67 cm、幅 61 cm、深さ 9 cm である。埋土の上層は炭層で、埋土から土師器皿 A・鍋、焼土塊が出土している。

SK16

遺構（図版 14、写真図版 12） C-10 ブロック北東部で検出された土坑である。SK15 の南隣に位置している。平面は円形で、直径 56 cm、深さ 5 cm である。埋土から土師器皿 A1・鍋が出土している。

SK17

遺構（写真図版 13） C-10 ブロック東北部で検出された土坑である。SK16 の東隣に位置している。平面は不整楕円形で、長 29 cm、幅 19 cm、深さ 3 cm である。埋土から土師器皿 A、金銅製覆輪（M409）が出土している。

遺物（図版 120、写真図版 132） M409 は金銅製覆輪である。断面半円形の破片である。幅 6 mm で、側面から見ると左端がカーブしながら下に曲がっているようである。凸面側に鍍金がなされている。

SK18

遺構（図版 14、写真図版 11） C-10 ブロック北東部で検出された土坑である。鍛冶炉 2 の南西隣に位置している。平面は楕円形で、長 80 cm、幅 53 cm、深さ 19 cm である。埋土から土師器皿 A1 が出土している。

SK19

遺構（図版 14、写真図版 12） C-10 ブロック南東部で検出された土坑である。平面は隅丸方形で、長 70 cm、幅 66 cm、深さ 47 cm である。坑内のやや北よりに直径 20 cm の柱根の痕跡が認められた。埋土から土師器皿 A などが出土している。

SK20

遺構（図版 13、写真図版 11） C-10 ブロック東南部で検出された土坑である。平面は長楕円形で、長 217 cm、幅 71 cm、深さ 8 cm である。埋土から土師器皿 A が出土している。

SK21

遺構（図版 14、写真図版 13） D-10 ブロック西北部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長

60 cm、幅 53 cm、深さ 10 cmである。床面から土師器皿 A 1 (15)・鍋 (16)、埋土から須恵器鉢 (17)、焼土塊が出土している。

遺物 (図版 86、写真図版 83) 15 は土師器皿 A1b である。16 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は無文当具痕の後ナデが施されている。体部外面にはススが付着し、内面にもコゲ付きが認められる。17 は須恵器鉢である。

S K 22

遺構 (図版 15) D-10 ブロック北東部で検出された土坑である。S K 23 の西隣に位置している。平面は不整楕円形で、長 164 cm、幅 118 cm、深さ 13 cmである。埋土から土師器皿 A の破片が出土している。坑内で検出されたピット P 068 はこの土坑に関係するものかは分からない。

S K 23

遺構 (図版 14、写真図版 14) D-10 ブロック北東部で検出された土坑である。S K 22 の東隣に位置している。平面は不整形で、長 212 cm、幅 156 cm、深さ 9 cmである。埋土から土師器皿 A 1 (19)・鍋 (18)、鉄釘 (M49・50)、煽り止め (M341)、焼土塊が出土している。埋土上層の溜まりの部分から出土したものが多。

遺物 (図版 86・103・115、写真図版 84・119・125) 19 は土師器皿 A1b である。18 は土師器羽釜である。鏝が退化した羽釜形のものである。体部内面はヨコハケ、体部外面はナデが施されている。長谷川編年 VII 期で、16 世紀のものである (長谷川 2007)。M49・M50 は鉄釘である。M49 は頭部の平たく延ばされた部分が折損している。M341 は煽り止めである。

S K 24

遺構 (図版 15、写真図版 14) B-11 ブロック北西部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 70 cm、幅 62 cm、深さ 23 cmである。埋土から径 20 cm 以下の礫とともに鉄鍋 (M348) が出土している。

遺物 (図版 116、写真図版 126) M348 は鉄鍋である。口縁部は受け口状に屈曲し、端部が内外に拡張して、端面が水平になっている。口径は 40.2 cm で復元してあるが、土圧によりやや押しつぶされている可能性もあり、他の出土例から見るともう少し口径が小さいかもしれない (五十川 1992)。

S K 25

遺構 (図版 15) B-11 ブロック西部で検出された土坑である。平面は溝状で、長 275 cm、幅 70 cm、深さ 12 cm である。埋土から土師器鍋が出土している。

S K 26

遺構 (図版 16) C-11 ブロック北東部で検出された土坑である。S K 27 の北側に位置している。平面は溝状で、長 125 cm、幅 28 cm、深さ 6 cm である。埋土から土師器皿 A 1 が出土している。

S K 27

遺構 (図版 15、写真図版 15) C-11 ブロック北東部で検出された土坑である。S K 26 の南側に位置

している。平面は不整楕円形で、長 61 cm、幅 58 cm、深さ 24 cm である。埋土から拳大の焼土塊・炭が多く出土している。

S K28

遺構（図版 16） A-12 ブロック南部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 138 cm、幅 94 cm、深さ 7 cm である。埋土には炭を多く含み、土師器皿 A1・A2・B・鍋、焼土塊が出土している。土師器皿 A1 : 4.5 個体、A2 : 6.9 個体など比較的多くの土器が出土しているが、細片のみで図化は行っていない。

S K29

遺構（図版 16、写真図版 15） B-12 ブロック北西部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 181 cm、幅 145 cm、深さ 13 cm である。埋土から皿 A1 (20)・A2、鉄釘 (M51~54)、鉄滓 (M396)、焼土塊、炭が出土している。

遺物（図版 86・103・119、写真図版 84・119・129） 20 は土師器皿 A1a である。M51~54 は鉄釘である。M51・52 は頭部が A4 類である。M396 は鉄滓である。金属学的分析によると鍛錬鍛冶滓と判定された（第 5 章第 8 節）。

S K30

遺構（図版 16） B-12 ブロック北部で検出された土坑である。平面は円形で、直径 80 cm、深さ 11 cm である。埋土から時期不明の土器 (21) が出土している。

遺物（図版 86、写真図版 84） 21 は時期不明の土器で、焼成は土師質である。突帯状に膨らんだ部分の上に、ギザギザ状の文様に見える部分がある。

S K31

遺構（図版 17、写真図版 15・16） C-12 ブロックで検出された土坑である。S K32 の西側に位置している。平面は長方形で、長 260 cm、幅 98 cm、深さ 28 cm である。北側 40 cm は段状になっている。埋土上層から皿 A1 が出土している。

S K32

遺構（図版 18、写真図版 15・16） C-12 ブロック東部で検出された土坑である。S K31 の東側に位置している。平面は長方形で、長 270 cm、幅 93 cm、深さ 20 cm である。床面で検出された径 15 cm の礫の下から土師器皿 B (26)、遺構上の窪みの部分と思われる部分から土師器皿 A1 (22・23)・A2 (25)・鍋、焼土塊が出土している。土師器皿 A1 : 5.7 個体、土師器皿 A2 : 7.6 個体など比較的量は多い。

遺物（図版 86、写真図版 84） 22・23 は土師器皿 A1a である。22 の口縁部内面にはへら状の工具痕が認められる。24・25 は土師器皿 A2a である。26 は土師器皿 B2 である。底部は厚く、口縁部はつまみ出す程度である。底部は回転糸切りである。

S K33

遺構（図版 19、写真図版 17） A-13 ブロック南西部で検出された土坑である。S K34 の北側に位置

している。平面は楕円形で、長 59 cm、幅 43 cm、深さ 10 cm である。埋土には炭が詰まっており、土坑内床面から土師器皿 A1 (27)、イヌシデ材の炭化物が出土している。炭化物の C14 年代は 1278AD - 1326AD (45.2%)・1343AD - 1394AD (50.2%) である (第5章第1節・第7節)。

遺物 (図版 87、写真図版 84) 27 は土師器皿 A1a である。口縁部に粘土の接合痕が認められる。

S K34

遺構 (図版 19、写真図版 17) A-13 ブロック南西部で検出された土坑である。S K33 の南側に位置している。平面は楕円形で、長 95 cm、幅 80 cm、深さ 12 cm である。遺構上面では炭層が薄く広がり、炭層の下の埋土から土師器皿 A1 (28)、須恵器甕が出土している。炭層中の炭化物にはマツツバキ材があり、炭化物の C14 年代は 1296AD - 1405AD (95.4%) である (第5章第1節・第7節)。

遺物 (図版 87、写真図版 85) 28 は土師器皿 A1a である。口縁部にススが付着している。

S K35

遺構 (図版 20、写真図版 18・19) B-13 ブロック北東部で検出された土坑である。この土坑と近接して S K35~S K38 などが検出されている (第34図)。平面は不整形円で、直径 40 cm、深さ 12 cm である。埋土の上層には径 10 cm 以下の礫とともに焼土が多く含まれていた。埋土から土師器皿 A・鍋・羽釜 (29) が出土している。

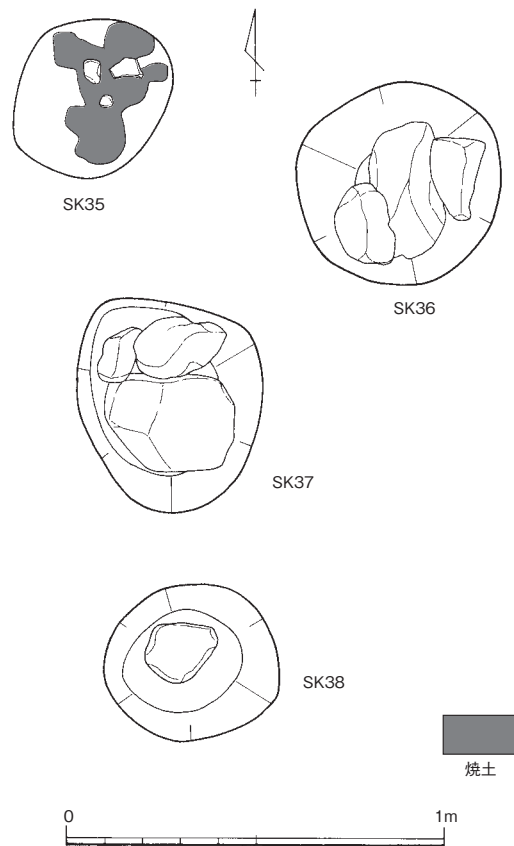
遺物 (図版 87、写真図版 84) 29 は土師器羽釜である。口縁部は直立し、端面は水平である。体部外面は平行タタキ、体部内面はハケ後ナデが施されている。

S K36

遺構 (図版 20、写真図版 19) B-13 ブロック北東部で検出された土坑である。S K35・S K37 の東側に位置している。平面は円形で、直径 55 cm、深さ 20 cm である。坑内には長 30~20 cm の石が 3 個入れられている。埋土から土師器皿 A1・皿 B・鍋が出土している。

S K37

遺構 (図版 20、写真図版 19) B-13 ブロック北東部で検出された土坑である。S K35 の南側、S K38 の北側に位置している。平面は不整形楕円形で、長 55 cm、幅 50 cm、深さ 10 cm である。坑内の検出面のレベルの位置で長 35 cm の平たい石と長 25~15 cm の石が 2 個検出されている。埋土から丹波焼甕、焼土塊が出土している。



第34図 SK35~SK38 配置図

S K38

遺構（図版 20、写真図版 20） B-13 ブロック北東部で検出された土坑である。S K37 の南側に位置している。平面は楕円形で、長 47 cm、幅 41 cm、深さ 12 cm である。S K37 と同様に坑内の検出面のレベルの位置で長 20 cm の平たい石が検出されている。埋土から土師器皿 A1・鍋、焼土塊が出土している。

S K39

遺構（図版 19、写真図版 18） B-13 ブロック南西部で検出された土坑である。S K40 の西側に位置している。平面は楕円形で、長 77 cm、幅 58 cm、深さ 15 cm である。埋土から土師器皿 A1 が出土している。

S K40

遺構（図版 19、写真図版 18） B-13 ブロック南西部で検出された土坑である。S K39 の東側に位置している。平面は楕円形で、長 65 cm、幅 56 cm、深さ 9 cm である。埋土から土師器皿 A が出土している。

S K41

遺構（図版 20、写真図版 20） B-13 ブロック中央部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 80 cm、幅 52 cm、深さ 7 cm である。埋土から土師器皿 A1（30・31）が出土している。

遺物（図版 87、写真図版 85） 30・31 は土師器皿 A1a である。典型的なものに比べて口縁部のヨコナデの幅が狭く、外反も弱い。

S K42

遺構（図版 19、写真図版 18） B-13 ブロック南西部で検出された土坑である。平面は円形で、直径 62 cm、深さ 14 cm である。埋土から土師器皿 A が出土している。

S K43

遺構（図版 20） B-13 ブロック南西部で検出された土坑である。平面は不整楕円形で、長 63 cm、幅 40 cm、深さ 10 cm である。埋土から土師器皿 A1、須恵器甕が出土している。

S K44

遺構（図版 20、写真図版 20） B-13 ブロック南東部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 75 cm、幅 57 cm、深さ 10 cm である。埋土から須恵器鉢・甕が出土している。

S K45

遺構（図版 20、写真図版 21） B-13 ブロック南東部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 140 cm、幅 92 cm、深さ 12 cm である。埋土から土師器皿 A1（32・33）・鍋が出土している。

遺物（図版 87、写真図版 85） 32・33 は土師器皿 A1a である。

S K46

遺構（図版 21、写真図版 21） C-13 ブロック西部で検出された土坑である。平面は隅丸長方形で、

第3章 吉田住吉山遺跡群の調査

北小口側がやや幅が広い。長 180 cm、中央部の幅 65 cm、深さ 6 cm である。西壁沿いの窪んだ部分はこの遺構に属するものかは分からない。埋土から土師器鍋 (34) が出土している。

遺物 (図版 87、写真図版 84) 34 は土師器鍋である。口縁部は受け口状に内彎し、端面は水平である。体部外面は平行タタキ、体部内面はハケが施されている。

S K47

遺構 (図版 22、写真図版 21・22) C-13 ブロック東部で検出された土坑である。S K54 の北側、S K48 の西側に位置している。平面は不整楕円形で、長 190 cm、幅 110 cm、深さ 6 cm である。土坑内の北部の埋土中層以下から遺物がまとまって出土している。出土した遺物には土師器皿 A1 (39~53)・A2 (54~61)・鍋、須恵器鉢 (62)・甕、鉄釘 (M55~59)、鉄片、焼土塊、炭化物が出土している。土師器皿の出土量は多く、土師器皿 A1 は 22.9 個体、土師器皿 A2 は 10.1 個体である。炭化物にはクヌギ材のものがあ、炭化物の C14 年代は 1299AD-1370AD (65.2%)、1380AD-1417AD (30.2%) である (第 5 章 第 1 節・第 7 節)。

遺物 (図版 87・103、写真図版 85・86・119) 39~50 は土師器皿 A1a である。46 は口縁部内面にヘラ先の当たったような工具痕が認められる。51~53 は土師器皿 A1b である。54~60 は土師器 A2a である。61 は土師器皿 A2c である。いわゆるへそ皿である。62 は須恵器鉢である。口縁端部外縁が外方へ拡張している。M55~M59 は鉄釘である。M55・M56 は頭部が A1 類、M57・M58 は頭部が A2 類である。

S K48

遺構 (図版 23、写真図版 23) C-13 ブロック東部で検出された土坑である。S K47 の東側に位置している。平面は不整長方形で、長 110 cm、幅 66 cm、深さ 10 cm である。埋土から土師器皿 A1 が出土している。

S K49

遺構 (図版 23) C-13 ブロック東部で検出された土坑である。南側の S K51 を切っている。平面は楕円形で、長 75 cm、幅 45 cm、深さ 5 cm である。埋土から土師器皿 A1・A2 が出土している。

S K50

遺構 (図版 23) C-13 ブロック東部で検出された土坑である。南側の S K53 に切られている。平面は楕円形で、長 72 cm 以上、幅 54 cm、深さ 7 cm である。埋土から土師器皿 A1・B が出土している。

S K51

遺構 (図版 23) C-13 ブロック東部で検出された土坑である。北側の S K49 に切られている。平面は不整円形で、直径 45 cm、深さ 5 cm である。埋土から土師器皿 A1・B が出土している。

S K52

遺構 (図版 23、写真図版 23) C-13 ブロック東部で検出された土坑である。北側の S K53 に切られている。平面は円形で、直径 55 cm、深さ 7 cm である。埋土から土師器皿 A1 が出土している。

S K53

遺構（図版 23、写真図版 23） C-13 ブロック東部で検出された土坑である。北側の S K50 と南側の S K52 を切っている。平面は楕円形で、長 40 cm、幅 33 cm、深さ 9 cm である。埋土から土師器皿 A1 が出土している。

S K54

遺構（図版 21） C-13 ブロック東部で検出された土坑である。この周辺では S K47～S K52 などの土坑が密集して検出されている。平面は不整楕円形で、西端が 1 段窪んでいる。長 160 cm、幅 75 cm 以上、深さ 6 cm、西端窪みの深さ 20 cm である。埋土上層から土師器皿 A1（35～38）・A2・B・鍋、焼土塊が出土している。土師器皿 A1 : 7.7 個体、A2 : 1.9 個体である。

遺物（図版 87、写真図版 85） 35～37 は土師器皿 A1a、38 は土師器皿 A1b である。

S K55

遺構（図版 24） B-14 ブロック北部中央で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 97 cm、幅 84 cm、深さ 10cm である。埋土から土師器皿 A1・A2、鉄釘（M62）が出土している。

遺物（図版 103、写真図版 119） M62 は鉄釘 A2 類である。

S K56

遺構（図版 24） B-14 ブロック南東部で検出された土坑である。平面は円形で、直径 53 cm、深さ 16 cm である。埋土から鉄滓（M397）が出土している。

遺物（図版 119、写真図版 129） M397 は鉄滓である。金属学的分析により鍛錬鍛冶滓と判定された（第 5 章第 8 節）。

S K57

遺構（図版 24、写真図版 24） B-14 ブロック南東部で検出された土坑である。平面は円形で、直径 65 cm、深さ 28 cm である。埋土上層から土師器皿 A1（66～70）・A2（71）・鍋、青磁鉢（72）が出土している。

遺物（図版 87、写真図版 84・87） 66～68 は土師器皿 A1a である。69・70 は土師器皿 A1b である。70 は口縁部にススが付着している。71 は土師器皿 A2a である。72 は龍泉窯系の青磁鉢である。口縁部は水平方向に広がっている。体部外面に鎬蓮弁文をもっている。

S K58

遺構（図版 24、写真図版 24） B-14 ブロック南西部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 56 cm、幅 52 cm、深さ 6 cm である。埋土から土師器皿 A が出土している。

S K59

遺構（図版 24） B-14 ブロック南西部で検出された土坑である。S K60 の南西、S K58 の北東に位

置している。平面は楕円形で、長94cm、幅41cm、深さ8cmである。埋土から土師器皿A1が出土している。

S K60

遺構 (図版 23) B-14 ブロック南西部で検出された土坑である。S K59 の北東に位置している。平面は円形で、長 88 cm、幅 62 cm、深さ 26 cmである。埋土から土師器皿 A1 (63)・A2・鍋、鉄釘 (M60)、焼土塊が出土している。

遺物 (図版 87・103、写真図版 84・119) 63 は土師器皿 A1a である。M60 は鉄釘 A-3 である。ほぼ完形で長 6.1 cm である。

S K61

遺構 (図版 24) B-14 ブロック南東部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 74 cm、幅 39 cm、深さ 13 cm である。埋土から土師器皿 A1 (65)・鍋が出土している。

遺物 (図版 87、写真図版 84) 65 は土師器皿 A1a である。

S K62

遺構 (図版 23、写真図版 24) B-14 ブロック南東部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 85 cm、幅 74 cm、深さ 12 cm である。埋土から土師器皿 A1 (64)、鉄釘 (M61) が出土している。

遺物 (図版 87・103、写真図版 84・119) 64 は土師器皿 A1 である。M61 は鉄釘 A2 類である。先端付近に炭が付着している。

集石

集石は7基検出された。主郭の北縁で4基、西縁付近で3基検出され(第35図)、中央付近では検出されていない(第36図)。

集石 1

遺構 (図版 25、写真図版 25) B-08 ブロック中央部で検出された集石である。主郭の北縁、焼土2の東隣に位置している。長 280 cm、幅 170 cm、深さ 20 cm の浅い掘り込みの中に、径 25 cm 以下の礫が薄く敷き並べられている。

ほぼ礫の直上面から土師器皿 A1 (73)・A2 (74)・鍋 (75)、須恵器碗、鉄釘 (M63・64)、炭化物などが出土している。土師器皿 A1 は 3.6 個体、土師器皿 A2 は 4.05 個体である。炭化物はアカガシ材で、C14 年代は 1292AD - 1402AD (95.4%) である (第5章第1節・第7節)。

遺物 (図版 88・103、写真図版 88・119) 73 は土師器皿 A1a である。74 は土師器皿 A2a である。75 は土師器鍋である。体部外面には平行タタキ、体部内面には無文当て具痕の後板ナデが施されている。M63 は鉄釘 A2 である。M64 は鉄釘 A3 である。



第35図 集石の検出



第36図 主郭 集石他配置図

集石 2

遺構 (図版 27、写真図版 26) A-10 ブロック東部で検出された集石である。主郭の北縁、集石 3 の西隣に位置している。長 150 cm、幅 120 cm、深さ 15 cm の範囲で、浅い掘り込みの中に、径 35 cm 以下の礫が薄く敷き並べられている。集石上から土師器皿 A1 (96)・A2 (97・98)・鍋、須恵器鉢、焼土塊などが出土している。

遺物 (図版 88、写真図版 90) 96 は土師器皿 A1a である。97・98 は土師器皿 A2a である。

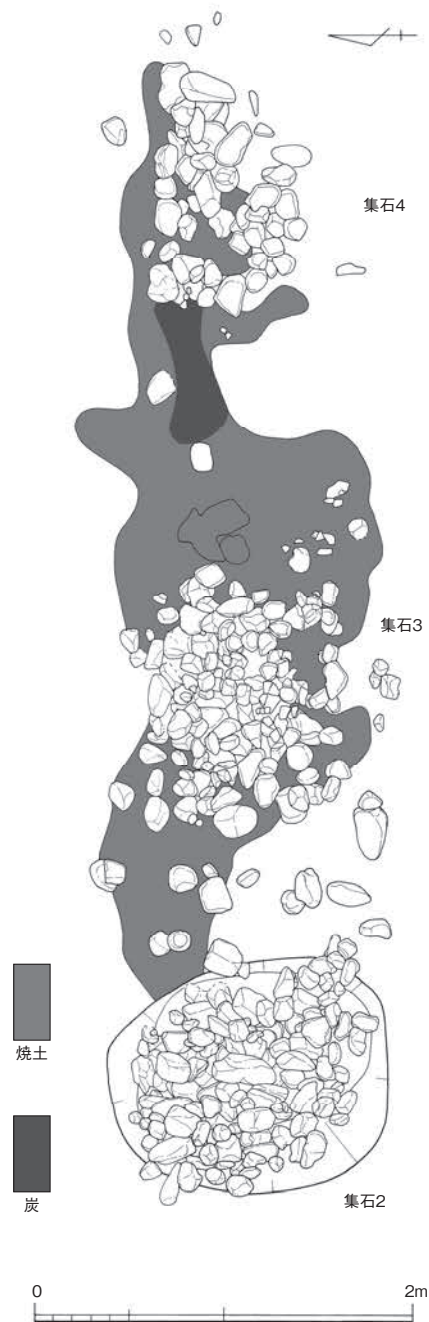
集石 3

遺構 (図版 26、写真図版 25) A-10・A-11 ブロックにかけて検出された集石である。主郭の北縁、集石 2 の東隣、集石 4 の西隣に位置している (第 37 図)。東西 150 cm、南北 100 cm の範囲で、地面に直接径 25 cm 以下の礫が薄く敷き並べられている。集石の東西には焼土が広がり、一部は集石を覆い込んでいる。集石上から土師器皿 A1 (76～83・94・95)・A2 (84～92)・鍋 (93)、備前焼甕、鉄釘 (M65・M66) などが出土している。土師器皿 A1 は 5.35 個体、土師器皿 A2 は 5.5 個体である。

遺物 (図版 88・103、写真図版 89・119) 76・77 は土師器皿 A1a である。78～83 は土師器皿 A1b である。84～92 は土師器皿 A2a である。93 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面上半は斜め方向のナデ、体部内面下半はナデが施されている。外面にススは付着していない。94・95 は土師器皿 A1b で、接合した破片が集石 3 及び集石 2 から出土している。M65・66 は鉄釘 A2 である。

集石 4

遺構 (図版 27、写真図版 26) A-11 ブロック西部で検出された集石である。主郭の北縁、集石 3 の東隣に位置している。東西 130 cm、南北 80 cm 範囲で、浅い掘り込みの中に、径 35 cm 以下の礫が薄く敷き並べられている。集石の北から西にかけては焼土が広がり、一部は集石を覆い込んでいる。また集石の西側には炭層が広がり、集石上からも炭化材が検出されている。この遺構に伴って土器などの遺物は出土していない。



第37図 集石2～集石4配置図

集石5

遺構（図版 28、写真図版 27・28） B-14 ブロック北西部で検出された集石である。主郭の西端付近、集石 6 の西側に位置している。東西 60 cm、南北 90 cm 範囲で、径 25 cm 以下の礫が薄く敷き並べられ、下部に深さ 8 cm の浅い掘り込みをもっている。集石直上から土師器皿 A1・A2・B・鍋が出土している。

集石6

遺構（図版 28、写真図版 27・28） A-14 ブロック南西部・B-14 ブロック北西部で検出された集石である。主郭の西端付近、集石 5 の東側に位置している。直径 130 cm、深さ 45 cm の円形土坑の中に、径 30 cm の礫がぎっしり詰められている。集石直上から土師器皿 A1・A2・B・鍋、須恵器鉢・甕、焼土塊が出土している。土師器皿 A1 は 4.6 個体、土師器皿 A2 は 0.65 個体である。また、集石 5 を含めた周囲からも遺物が集中的に出土しており、土師器皿 A1（99～101）・A2・B・鍋、丹波焼甕、鉄釘、鉄滓、焼土塊が出土している。土師器皿 A1 は 9.55 個体、土師器皿 A2 は 1.4 個体であるが、細片化したものが多い。

遺物（図版 88、写真図版 88） 99 は土師器皿 A1a である。100 は土師器皿 A1c である。99・100 は集石 6 上から出土した。101 は土師器皿 A1b である。集石 6 の周辺から出土した。

集石7

遺構（図版 29、写真図版 28） B-14 ブロック東部で検出された集石である。主郭の西縁に位置している。南北 75cm、東西 50 cm の範囲で、石が薄く敷き並べられている。下部には深さ 10 cm の浅い掘り込みが伴っている。集石上から土師器皿 A1（102）・A2・鍋、須恵器碗が出土している。

遺物（図版 88、写真図版 88） 102 は土師器皿 A1a である。

焼土

焼土は粘質土が被熱を受けて酸化し、硬化した部分である。主郭北縁部と南縁部で 4 基検出された（第 36 図）。

焼土1

遺構（図版 29） B-08 ブロック北東部で検出された焼土である。主郭北辺に沿って検出された。長 390 cm、幅 50 cm の範囲で、一部途切れるが被熱を受けた酸化層の土が広がっている。焼土上から土師器皿 A1・A2・鍋、須恵器碗・鉢、備前焼底部（103）、鉄釘（M68・69）、棒状鉄製品（M376）、銅製縁金具（M410）、焼土塊などが出土している。

遺物（図版 88・103・118・120、写真図版 88・119・132・128） 103 は備前焼底部である。内面はナデ、体部外面及び底部外面はヘラケズリが施されている。播鉢の底部か。M68 は鉄釘 A2 で、完形である。先端は渦巻き状に曲がっている。全長は 4.7 cm である。M69 は鉄釘 B である。M376 棒状鉄製品である。断面は直径 0.5 cm の円形で、両端は折損している。M410 は銅製縁金具である。断面は凹字形で、両端が折損している。刀剣拵の柄の兜金の可能性を考えておきたい。

焼土2

遺構 B-08 ブロック中央部で検出された焼土である。主郭の北縁で、集石 1 の西側に位置している。

直径 150 cm の円形の範囲で、被熱を受けた酸化層の土が薄く広がっている。焼土上から土師器皿 A1 (104)・A2 (105)・鍋 (106)、須恵器鉢・甕、鉄釘 (M67)、炭化物が出土している。土師器皿 A1 が 8.45 個体、土師器皿 A2 が 7.4 個体である。

遺物 (図版 88・103、写真図版 88・119)

104 は土師器皿 A1a である。105 は土師器皿 A2b である。106 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデが施されている。口縁部内面及び外面にはススが付着している。M67 は鉄釘の先端部である。先端に炭化物が付着している。

焼土 3

遺構 (図版 29、写真図版 29) E-09 ブロック中央部で検出された焼土である。主郭の南縁に位置している。南北 60 以上 cm、東西 37 cm の範囲で、被熱を受けた酸化層の土が広がっている。焼土上から炉壁片 (107) が出土している。

遺物 (写真図版 90)

107 は炉壁片と思われる。長 7 cm 以下の破片が 50 点以上あり、細かく砕けている。粘土の接合痕に沿って剥離したのもも多い。ハケメやナデを施した表面の部分や芯材の痕跡と思われる部分も存在するが、原形は不明である。胎土には径 1.5 cm 以下の小礫を含むが、藁痕などは認められない。

焼土 4

遺構 (図版 29) A-13 ブロック西部で検出された焼土である。主郭の北縁に位置している。長 30 cm、幅 24 cm の範囲で、被熱を受けた酸化層の土が広がっている。焼土上からは土師器皿 A1、焼土の脇から土師器鍋 (108) が出土している。

遺物 (図版 88、写真図版 91)

108 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は無文当具痕の後板ナデが施されている。外面はススが付着している。

鍛冶炉

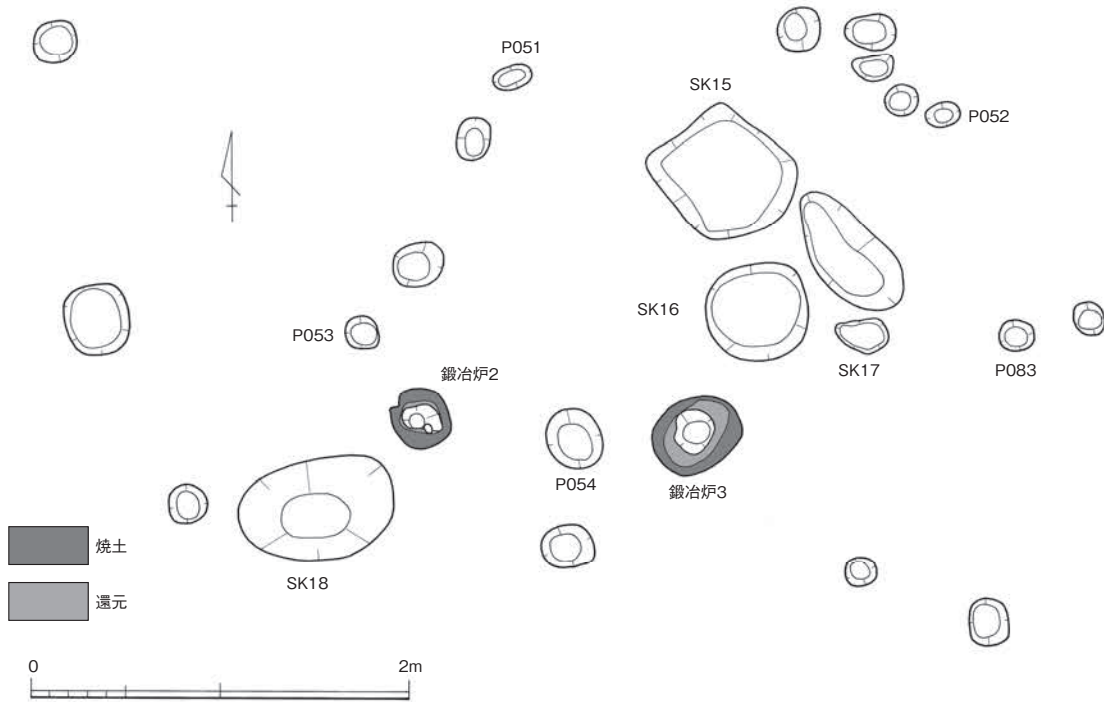
被熱面と鉄滓の出土のあるものを鍛冶炉と考えた。主郭南東部で 3 基検出された (第 36 図)。

鍛冶炉 1

遺構 (図版 30、写真図版 29) C-09 ブロック南東部で検出された鍛冶炉である。長 100 cm、幅 80 cm、深さ 5 cm の平面長方形の土坑の中央に焼土が広がっている。焼土の下層の土 (2 層) には炭が多く含まれている。土坑内から土師器皿 A1 (109・110)・鍋、須恵器碗、鉄釘 (M70～M75)、鉄片、鉄滓の小片が出土している。

遺物 (図版 88・103、写真図版 88・119)

109 は土師器皿 A1a である。110 は土師器皿 A1b である。M70 は鉄釘 A1、M71 は鉄釘 A2 である。M72～74 は鉄釘 B である。M72 は先端が円形に曲がっているが、完形である。全長は 7.5 cm である。



第38図 鍛冶炉2・鍛冶炉3配置図

鍛冶炉2

遺構（図版30、写真図版30） C-09ブロック北東部で検出された鍛冶炉である。P054を挟んで東側には鍛冶炉3があり、南西にはSK18が存在する（第38図）。長22cm、幅16cmの平面楕円形の範囲に貼り付けた粘土が還元されている。この部分の中央は深さ3cmほど窪んでいる。還元部の周囲10cm程度の地山は被熱により酸化している。炉内から鉄滓の小片が出土している。

鍛冶炉3

遺構（図版30、写真図版30） C-09ブロック北東部で検出された鍛冶炉である。P054を挟んで西側には鍛冶炉2があり、北東にはSK16が存在する（第38図）。長40cm、幅26cmの平面楕円形の範囲に貼り付けた粘土が還元されている。この部分の中央は深さ5cmほど窪んでいる。還元部の周囲7cm程度の粘土と地山は被熱により酸化している。炉内から土師器皿A1、鉄滓の小片が出土している。

炉

カマド状の遺構である。主郭北縁で2基検出された（第36図）。

炉1・2

遺構（図版31、写真図版31） A-12ブロック中央部で検出された炉である。主郭の北縁に位置している。炉1は東西130cm、南北115cmの平面楕円形で、深さは30cmである。南北西壁が被熱を受けて酸化しており、東側に口をもつカマド状の施設と考えられる。炉1の北東側は焼土が広がっており（炉2）、一部炉1と同様な焼け方をした部分がある（断面Aの9層）ことから炉1に先立つ炉が存在したものと考えられる。炉1からは土師器皿A1（111・112）・A2（113）・B、鉄片（M378）が出土している。炉2からは土師器皿A1・鍋、須恵器甕、丹波焼甕、鉄釘（M76）、砥石（S8）が出土している。

遺物（図版88・103・118・125、写真図版88・119・128・138） 111は土師器皿A1aである。112は

土師器皿 A1 b である。113 は土師器皿 A2a である。M378 は鉄片である。鑄鉄の破片と思われ、炭化物が付着している。M76 は鉄釘 A2 である。S8 は砥石である。表面のみが砥面で、その他は剥離・折損である。石材は粘板岩である。

溝

曲輪間は堀のような溝状の遺構で区切られているが、主郭内を区切るような溝は検出されていない。城跡以前に築かれた吉田住吉山古墳群の周溝は中世段階においては完全に埋没していない部分が多く、浅い溝状を呈していたと考えられる。明瞭に溝として掘られたのは2号墳周溝に溜まった水を6号墳周溝を通して北側に流すために掘られたSD01のみである(第36図)。また、土壘1の東裾付近(土壘1東側)も明瞭に掘削されているわけではないが、排水できるようにくぼんでいる。

SD01

遺構(図版30) B-09ブロック東部に位置する溝である。2号墳周溝の北と6号墳周溝の南西隅を連結している。長2.5m、幅210~87cm、深さ10cmである。埋土から土師器皿A1(114~118)・A2(119~122)・鍋、須恵器碗・鉢・甕、鉄鏃(M19)、小札(M21)、鉄釘(M77~M101)、鉄片、焼土塊などが出土している。土師器皿A1は22.25個体、土師器皿A2は18.4個体、鉄釘34点と狭い範囲ながら多くの遺物が出土している。

遺物(図版88・102・104、写真図版91・117・119・120) 114~116は土師器皿A1a、117・118は土師器皿A1b、119~122は土師器皿A2aである。M19は雁又式の鉄鏃である。ほぼ完形で、全長14.05cm、鏃身長7.55cmである。刃は内側のみしか付かない。鏃身部の下端が丸く膨らんでいる。M21は三日本小札である。長6.5cm、幅3.2cmである。表裏両面とも右側約3分の1の範囲に表面に塗られた漆膜が残存している。漆膜の保護のためサビを残したままにしているため、縁の折り返しの有無は不詳である。上の緘孔と下列の緘孔の間隔、毛立孔と下緘孔の1列目の間隔、下緘孔の3列目と4列目の間隔が狭い。緘孔・毛立孔の孔径はやや大きい。M77は鉄釘A1である。M78~91は鉄釘A2である。M84はほぼ完形で全長8.1cmである。M91は完形で全長7.2cmである。M92・93は鉄釘A3である。M92は完形で全長7.8cmである。M94は鉄釘Bである。ほぼ完形で全長4.7cmである。M95・96は鉄釘Cである。M97~101は頭部を欠損した鉄釘である。M83・85・91・93・96・99など炭化物が多く付着したものが多い。

6号墳周溝

遺構(図版32、写真図版32) 主郭北西部に位置する吉田住吉山6号墳の周溝である。周溝埋土の最上層から中世の遺物が多く出土していることから、少なくとも深さ10cm程度は窪んでいたと考えられる。この窪んだ部分から土師器皿A1(124~129)・A2(130~133)・B・鍋・土錘(134)、須恵器碗(135)・鉢・甕、備前焼甕・播鉢(123)、鉄鏃(M10)、鉄釘(M102~M117)、火打金、鉄塊(M392)、鉄滓(M398・399)、銅銭(M417)、砥石(S05)、焼土塊、炭化物など多量の遺物が出土している。土師器皿が多く、皿A1が47.9個体、A2が25.45個体に及ぶ。そのうちの約7割が周溝(南)から出土している。鉄釘も26点出土している。

遺物(図版89・101・105・119・125、写真図版91・116・120・129・133・138) 123、M10、M103、M399は周溝(東)、124~135、M104~M116は周溝(南)、M102、M392、M398は周溝(西)から出土し、M117、M417は箇所が特定できない。

123 は備前焼播鉢である。口縁はやや肥厚し、口縁端部外縁がやや突出している。内面に播目は存在するが、端に1条しか確認できない。乗岡編年中世3b期（15世紀前葉）に相当するものと思われる。124～129は土師器皿A1aである。130～133は土師器皿A2aである。131は口縁部にススが付着している。134は土師器土鉢である。径は1.5cm、孔径は0.5cm、重量は8.69gである。135は須恵器碗である。底部は糸切りで、底部の周囲は手持ちヘラケズリが施されている。M10は鉄鏃である。サビ膨れにより先端の形状は不明瞭であるが、鑿形と考えられる。茎に近づくに従って太くなり、断面が円形となる。鏃身長は9.4cmである。M102は鉄釘A3である。M103～M107は鉄釘A2である。M103はほぼ完形で全長8.0cmである。M108・M109は鉄釘A3である。M108は完形で、先端が渦巻き状に曲がっている。全長6.9cmである。M110は鉄釘Bである。M111～M113は鉄釘Cである。M113は頭部が将棋の駒の上部のように尖っている。M114～M117は頭部を欠損している。M392は鉄塊である。金属学的分析によると鉄素材または鍛造鉄器の未製品と推定された。重量は36.33gである。M398・399は鉄滓である。M398は椀形鍛冶滓の破片である。破面には径6mm以下の気泡が見え、小礫や須恵器の破片が巻き込まれている。M399は椀形鍛冶滓の破片である。金属学的分析により鍛錬鍛冶滓に分類された（第5章第8節）。M417は天禧通宝と考えられる。S5は砥石である。長方形で下端は欠損している。厚さは1.3cmと薄い。表裏が砥面として使用されている。石材は粘板岩である。

2号墳周溝

遺構（図版33、写真図版32） 主郭南西部に位置する吉田住吉山2号墳の周溝である。検出面より高い位置ではあるが溝の上部に遺物の集中していることが認められることから、中世の段階においても深さ20cm程度は窪んでいたと考えられる。この窪んだ部分から土師器皿A1（137・138）・A2（139）・B・鍋、須恵器碗・鉢（136・140・141）・甕（142）、丹波焼甕、備前焼甕、小刀（M4）、小札（M23）、鉄釘（M118～M126）、鉄鎌（M344）、環状鉄製品（M358）、温石（S05）、焼土塊、炭化物など多量の遺物が出土している。土師器皿が多く、皿A1が25.7個体、A2が4.95個体に及ぶ。

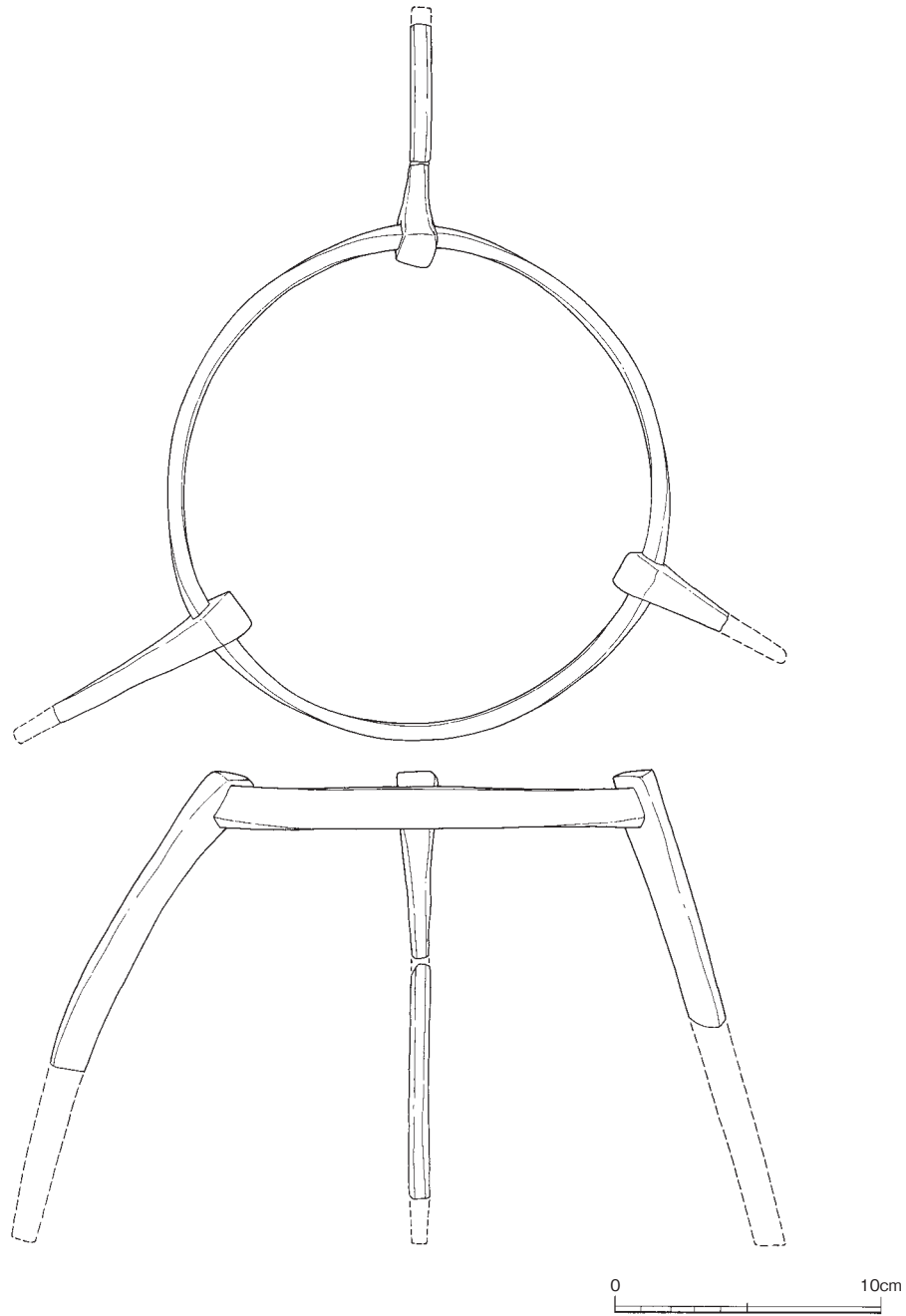
遺物（図版89・100・102・105・115・117・125、写真図版91・92・115・118・120・126・127・138） 136、M118・M119は周溝（北）、137・138、M10・M140・M358は周溝（南）、139～142、M120・M121、S05は周溝（西）から出土し、M4・M123～M126・M344は箇所が特定できない。

136は須恵器鉢である。137・138は土師器皿A1aである。139は土師器皿A2aである。140は小型の須恵器鉢である。口縁部はほとんど肥厚せず、わずかに内彎する。141は須恵器鉢である。体部内面には仕上げナデが認められる。142は須恵器甕である。口縁部はあまり拡張せず、外端を外側につまみ出す程度である。体部はやや胴長で、外面に平行タタキが施され、内面には同心円当具痕が残る。十瓶山窯の製品の可能性がある。M4は小刀である。刀身の幅は1.8cmで、関は両関である。茎には目釘孔を一つもつ。茎に柄の木質が付着し、関の上0.4cmの所で直線的に切れるようである。M23は小札である。上下両端を欠き、型式は不明である。幅は2.15cmである。M118～M126は鉄釘である。頭部はM120・M123がA2、M121がBである。M344は鉄鎌である。刃部の多くと柄の先端を欠く。刃部は折り返されている。M358は環状鉄製品である。断面径0.5cmの円柱を一部隙間を空けて径3.0cmの円形に曲げている。S4は温石である。平面は長方形で、下端は欠損している。中央やや上よりに径1.0cmの孔が穿たれている。下端の欠損部付近にも径0.5cmの孔が穿たれている。長10.8cm、幅9.15cm、厚2.65cm、重量550.1gである。石材は滑石片岩である。

5号墳周溝

遺構 (図版 34、写真図版 32) 主郭中央北よりに位置する吉田住吉山5号墳の周溝である。周溝直上や周溝埋土の上層から中世の遺物が多く出土している。北側周溝では明瞭に少なくとも20cmほどの窪みが存在したと思われる。この窪んだ部分から土師器皿A1(143・144)・A2(148～151)・B(145・146)・鍋、須恵器碗・鉢(152・153)・甕、丹波焼甕、備前焼甕、青磁碗(154・155)、小刀(M5)、鉄鏃(M11～M13)、小札(M24～M28)、鉄釘(M127～M178)、五徳(M351)、環状鉄製品(M359)、管状鉄製品(M363)、球状鉄製品(M365)、鉄塊(M393)、銅塊(M413)、焼土塊、炭化物など多量の遺物が出土している。土師器皿が多く、皿A1が40.65個体、A2が23.7個体に及ぶ。うち64%が南側で出土している。鉄釘も74点出土している。

遺物 (図版 90・100～102・106・107・116・117・119・121、写真図版 93・94・115・116・118・121・127・129・132) 143～147、M5・M11・M12・M127～M155・M393は周溝(西)、M156・M157・M359は周溝(東)、148～155、M13・M24～M28・M158～M178・M351・M363・M365・M413は周溝(南)から出土し、143・144は土師器皿A1aである。145・146は土師器皿B1である。底部は摩滅しているが、わずかに糸切りの痕跡を確認できる。147は龍泉窯系の青磁碗である。鎬蓮弁文碗で、釉色はやや青みがかった。148～151は土師器皿A2aである。152は須恵器鉢である。口縁部の外端部が肥厚している。153は須恵器鉢である。口縁部は肥厚し、やや内側へ巻き込み気味になっている。体部内面には4条程度を1単位にヘラ描きで沈線を引き、見込みにも7条前後の沈線を交差させて挿目を入れている。体部外面には指頭痕が多く見られる。154・155は龍泉窯系の青磁碗である。154は蓮弁に鎬は認められない。釉色はやや緑がかっている。155は劃花文碗である。M5は小刀である。刀身の幅は1.8cmで、関は両関と考えられる。茎には目釘孔を一つもつ。茎に柄の木質が付着し、関部まで及んでいる。M11・M12は鉄鏃である。先端は鑿形であるが、茎に近づくにしたがってスカート状に広がり、断面も円形になる。鏃身長はM11が10.5cm、M12が11.4cmである。M13は先端が鎬のない三角形で、腸袂をもつ。茎に近づくにしたがってスカート状に広がり、断面はサビ膨れにより不明瞭であるが円形になるものと思われる。鏃身長は6.6cmとやや短い。M24～M28は小札である。M24は三目小札である。下部を欠く。幅は2.5cmである。左端が折り返されている。上の緘孔と下列の緘孔の間隔は狭い。毛立孔と下緘孔の間隔と下緘孔の2列目と3列目の間隔が広い。緘孔・毛立孔と下緘孔の孔径はほぼ等しい。M25は下と左端が折り返されている。毛立孔と下緘孔の間隔と下緘孔は2列目と3列目の間隔がやや広い。表面に有機物が付着している。折り返しがあることと縁から孔までの間隔が狭いことから三目札と考えられる。M26は基石頭伊予札である。緘孔・毛立孔の孔径はやや大きく、縁の折り返しは認められない。長6.75cm、幅3.0cmである。M27は頭部を欠く、下緘孔の配列が基石頭伊予札と同様である。幅2.9cmである。M28は頭部と尻部を欠く、幅2.45cmである。表面に有機物が付着している。M127～M178は鉄釘である。頭部はA2が18点、A3が7点、A4が2点、Bが4点、Cが3点である。完形及び完形に近いものが9点ある。M168は幅1.4cm、厚0.9cmと大型である。M351は五徳である。上部の環状部は完存しているが、脚の取り付け位置の箇所ではずれて、形がゆがんでいる。復元すると径19cmである(第39図)。脚は3脚で、下端までは残存していない。環状部に巻き付けて取り付けられている。高さは16cm以上である。M359は環状鉄製品である。断面径0.7cm前後の円柱を一部隙間を空けて径3.2cmの円形に曲げている。M363は管状鉄製品である。径1.0cm、長4.3cmで、縦方向に合わせ目が認められる。表面に有機物が付着している。M365は球状鉄製品で、直径3.0cmである。内部は中空であるが、表面の内側に棒状のものを曲げたものが入っているよ



第39図 五徳復元図

うに見える。M393 は鉄塊である。表面は滑らかで、重量は 123.55g である。M413 は銅塊である。右側縁は円弧状を呈し、左側面は気泡が大きく膨らんだかのように窪んでいる。重量は 204.02g である。成分分析によると銅が 93% で、ほぼ純銅である（第 5 章第 9 節）。

1号墳周溝

遺構 主郭南東部位置する吉田住吉山 1号墳の周溝である。他の古墳にくらべて周溝の溝上・溝埋土から出土した中世の遺物は少なく、中世段階に溝が窪んでいた可能性は低い。土師器皿A1・B（156）、丹波焼甕が出土している。

遺物（図版 90、写真図版 94） 156 は土師器皿 B1 である。底部は糸切りである。

4号墳周溝

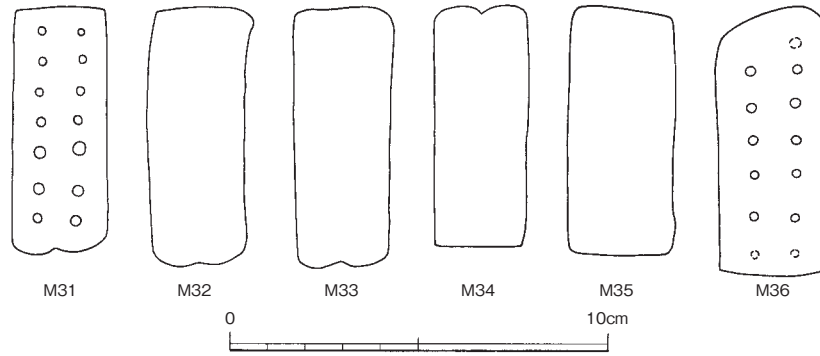
遺構 (図版 35) 主郭北東部位置する吉田住吉山4号墳の周溝である。集石5が4号墳の周溝上に設けられていることから、周溝南西部は中世段階には埋没していたと考えられる。周溝(南)東端部では周溝埋土上層から、周溝(西)北端部では周溝上で比較的土器が集中していることから中世段階においてわずかに窪んでいたと推定される。土師器皿 A1 (157)・A2・B・鍋 (158)、須恵器碗・鉢・甕、丹波焼甕、鉄釘 (M179)、鉄鍋 (M349)、銅銭 (M418~437)、焼土塊などが出土している。土師器皿 A1 は 8.3 個体、土師器皿 A2 は 1.1 個体である。

遺物 (図版 90・107・116・122、写真図版 93・94・121・127・133・134) 157 は周溝(南)、158、M179・M349・M418~M437 は周溝(西)から出土したものである。157 は土師器皿 A1a である。158 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は板ナデが施されている。外面にはススが付着している。M179 は鉄釘 C である。ほぼ完形で全長 5.9 cm である。M349 は鉄鍋である。口縁端部の破片である。内縁側が拡張している。M418~M437 は銅銭である。M418 は太平通寶 (976 年初鑄) である。M419・M420 は咸平元寶 (998 年初鑄) であるが、M420 は銭文が崩れており、島銭と考えられる。M421 は祥符元寶 (1009 年初鑄) である。M422・M423 は天禧通寶 (1017 年初鑄) である。M422 は「禧通」の 2 字が崩れている。M424~M429 は皇宋通寶 (1038 年初鑄) である。M424~M426 は真書体で、M424・M425 は皇の字が大きい。M427~M429 は篆書体である。M429 は宋の字が乱れている。M430・M431 は熙寧元寶 (1068 年初鑄) である。篆書体である。M432・M433 は元豊通寶 (1078 年初鑄) である。M432 は行書体、M433 は篆書体である。M434・M435 は元祐通寶 (1086 年初鑄) である。M434 は行書体、M435 は篆書体である。M436 は淳熙元寶 (1174 年初鑄) である。背面の孔の上に「柒」の字が書かれているものと思われる。M437 は右側に「元」の字がくことから慶元通寶 (1195 年初鑄)、景定元寶 (1260 年初鑄)、咸淳元寶 (1265 年初鑄) のいずれかと考えられ、上の字の左端がノの字状に見えることから、慶元通寶もしくは咸淳元寶の可能性が高い。

土壘 1 東側

遺構 (図版 36・37) 主郭の西端、土壘 1 の東裾部は幅 3 m 弱、深さ 20 cm 程度ゆるやかに窪み、集石 1 の方向に向かって延びている。もともとその中央部は吉田住吉山 9 号墳の東側周溝の部分でもあった。溝としてしっかりと掘削されているわけではないが、北側への排水の機能を果たしていたものと思われる。この窪んだ部分からは土師器皿 A1 (159・160)・A2・B (161・162)・鍋 (163・164)・羽釜・羽口 (165)、須恵器碗・鉢・甕 (166)、備前焼甕・播鉢 (167)、丹波焼甕・壺 (168)、瀬戸美濃焼水注 (169)、青磁鉢 (170)、瓦質土器風炉、小刀 (M9)、小札 (M29~M37)、鉄釘 (M180~M193)、鍵状鉄製品 (M342)、板状鉄製品 (M356・M 368)、鉄片 (M379)、鉄滓、銅銭 (M438~M 440)、焼土塊など遺物が出土している。土師器皿 A1 は 17.65 個体、土師器皿 A2 は 3.1 個体、土師器鍋は 2.0 個体である。

遺物 (図版 90・100・102・108・115・117・118・122、写真図版 93・95・115・118・122・125・127・128・134) 159 は土師器皿 A1a である。160 は土師器皿 A1c である。161・162 は土師器皿 B2 である。163・164 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は板ナデが施されている。163 は口縁部外面と体部外面下半にススが付着している。164 は体部内面に当具痕が残り、体部外面下半にススが付着している。165 は土師器羽口の先端部である。復元径は 7.6 cm、孔径は 2.6 cm である。先端 1.7 cm は融解し、3 cm までは還元、4.1 cm までは酸化している。166 は須恵器甕である。口縁部は拡張せず、体部



第40図 接合小札（M31～M36）の個別外形

外面には平行タタキが施されている。167 は備前焼播鉢である。体部はやや丸味をもち、口縁部は矩形でやや肥厚気味である。乗岡編年中世3a期（14世紀中葉～後葉）と考えられる。168 は丹波焼壺の底部である。底部内外面ともナデが施され、自然釉が付着している。図化は行っていないが、肩部の破片も出土している。外面は褐色～赤褐色で、内底面には暗オリーブ色の自然釉が掛かっている。169 は瀬戸美濃焼水注である。肩部に1条の凹線が廻り、凹線上に穿孔がなされている。注口が貼り付けられていたと考えられるが、剥離している。表面の灰釉もほとんど禿げている。170 は龍泉窯系の青磁鉢である。体部外面に鑄蓮弁文をもつ。畳付きのみ露胎である。釉色は緑味を帯びている。M9 は小刀である。先端に近い部分で、刀身幅 1.25 cmである。M29～M37 は小札である。これらは1箇所までまとまって出土した。おそらく一つに束ねられていたものと考えられる。M29・M30 はサビにより接合している。天地を逆にして重ねられている。いずれも基石頭伊予札である。幅は 2.7 cmである。M31～M36 もサビにより接合している。天地はそろえられていない。並孔本小札 2枚（M35・M36）、基石頭伊予札 4枚（M31～M34）がある（第40図）。本小札は幅 2.9 cm、伊予札は幅 2.7～2.55 cmである。M37 は基石頭伊予札である。緘孔・毛立孔の孔径はやや大きく、縁の折り返しは認められない。幅は 2.7 cmである。M180～M193 は鉄釘である。M180 は鉄釘 A1、M181～M188 は鉄釘 A2、M189～M191 は鉄釘 A3、M192 は鉄釘 B、M193 は鉄釘 Cである。M182 は完形で全長 6.6 cm、M185 はほぼ完形で全長 6.2 cmである。M342 は鏈状鉄製品である。先端 3 cmをL字状に折り曲げている。根本は環状になり、煽り止めの環状部と組み合わせられている。M356 は方形透かしのある板状鉄製品である。幅は 2.1 cm、透かしの1辺は 0.6 cmである。M368 は板状鉄製品である。長細い板状の製品であるが、両端を欠損している。幅 1.3 cmである。M379 は鉄片である。金属学的分析により铸造鉄器片と判定された。M438～M440 は銅銭である。M438・M439 は接合している。M438 は咸平元宝（998年初鑄）、M439 は皇宋通寶（1038年初鑄）である。M440 は寛永通寶（1636年初鑄）である。

包含層

遺構 主郭は尾根上に存在することから検出面上の堆積層はあまりなく、表土とその下の土壌化層がわずかに存在するのみであった。しかしながら、主郭内での盛んな活動を示すかのように遺構外からも多量の遺物が出土している。土師器皿 A1（171～182）・A2（183～186）・B（187・188）・灯明皿（189）・鍋（190）・羽釜・土錘（191）・羽口（192・193）、須恵器碗（196）・鉢（194・195）・甕、備前焼甕・播鉢（197）、丹波焼甕（199）・壺（198）、青磁碗（200）、小札（M22）、不明製品（M45）、鉄釘（M194～M204）、煽り止め（M340）、環状鉄製品（M360）、棒状鉄製品、鉄片（M380～M383）、鉄塊（M394）、鉄滓（M400）、

焼土塊など遺物が出土している。土師器皿 A1 は 70.8 個体と多く、土師器皿 A2 は 19.45 個体、土師器鍋 2.65 個体である。

遺物 (図版 91・102・108・115・117~119、写真図版 95・96・97・118・119・122・125・128・129) 171~178 は土師器皿 A1a である。171 は口縁部内面にヘラ先で押さえたような工具痕が残る。172 は口縁部内面に口縁部内面にヘラ先で押さえたような工具痕が 2 段にわたり、口縁部外面のヨコナデの下端部にもヘラ先が当たったような工具痕が残る。173 は口縁部外面のヨコナデの下端部にもヘラ先が当たったような工具痕が残る。175 は口縁部にススが付着している。

179~182 は土師器皿 A1b である。183~186 は土師器皿 A2 である。187・188 は土師器皿 B1 である。189 は土師器灯明皿である。口縁の一部が突起上に高くされ、その部分にのみススが付着している。底部内面の外縁~口縁部外面はヨコナデ、底部内面中央及び体部外面~底部外面はナデが施されている。口縁部外面には粘土紐の接合痕が認められる。器壁は他の土師皿に比べて薄い。190 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は当て具痕後板ナデが施されている。191 は土師器土錘である。径は 1.5 cm、孔径は 0.55 cm である。192・193 は土師器羽口である。先端部の破片で表面が融解している。193 の孔径は 2.8 cm である。194 は須恵器鉢である。195 は小型の須恵器鉢である。196 は須恵器碗である。底部は回転糸切りで、底部の縁は手持ちヘラケズリが施されている。器高は 3.0 cm と低い。197 は備前焼播鉢の底部である。底部外面には砂と板状圧痕が付着している。198 は丹波焼壺である。肩部からやや上の破片で、表面は褐色であるがかなり禿げている。外面に人物と思われる絵が刻画されている (第 41 図)。顔の目より下の部分と着物の襟元付近が描かれているように見える。横に広がった鼻、舟形の口、勢いよく外反する口髭・顎髭などが表現されている。199 は丹波焼甕である。口縁部は短く外反し、拡張した端部の下端が本体に引っ付いている。内外面とも回転ナデあるいは板ナデが施されている。色調は赤褐色である。200 は龍泉窯系の青磁碗である。体部の小破片で、文様は鎬蓮弁文である。M22 は小札である。上部を欠く。下と左右両端が折り返されている。下緘孔は 2 列目と 3 列目の間隔が広い。幅 3.5 cm と広く、並孔本小札の可能性が高いと思われる。M45 は不明鉄製品である。上端が斜めに切り落とされた板状の製品で、中央に長楕円形の透かしが入っている。表面に漆と朱が確認できことから、武具・馬具などの用途を考えておきたい。M194~M204 は鉄釘である。M202 は鉄釘 A1、M194・M196~M198



第41図 丹波焼刻画拓影

は鉄釘 A2、M195・M199・M200 は鉄釘 A3、M201 は鉄釘 A4、M203 は鉄釘 B、M204 は鉄釘 C である。M340 は煽り止めである。環状部が開いてしまっている。M360 は環状鉄製品である。直径は 5.3 cm で、本体の断面は 0.8 cm の円形である。接合部は確認できない。M380～M383 は鉄片である。板状の破片で、側面はすべて破面である。铸铁片である可能性が高い。M394 は鉄塊である。重量は 26.78 g である。金属学的分析により鉄塊系遺物と判定された。M400 は鉄滓である。上面は平滑で、横に薄く広がったような形をしている。表面には 1.0 mm 以下の気泡がやや見られる。重量は 50.15 g である。



第42図 土塁1上層平面図

(2) 土塁1

土塁1は主郭の西側に隣接し、西側の土塁・空堀とともに主郭を防御する土塁である。空間的には主郭に含まれる面が強いが、報告の都合上独立の地区として取り扱う。土塁1は構築の過程で大きく上層と下層に分かれる(第42図・第43図)。上層土塁上ではピット・土坑・集石、下層土塁上ではピット、集石、金属工房が検出されている。下層土塁の北側はテラス状を呈しており、ピット、集石、焼土が検出されている。この部分は吉田住吉山9号墳の周溝が少し埋められた部分であるが、北東部はややその



第43図 土塁1下層平面図

名残を残している。厳密に言えば主郭と同一の平坦面であるが、上層土塁に覆われた部分であることから土塁1に含めて報告する。

土塁1

土塁1は下層土塁とその上にさらに土を盛り上げた上層土塁とに分かれる。主郭の西側に隣接し、西側には空堀1が存在する。

土塁1上層

遺構（図版38・40・41、写真図版33～35） 表土と土壌下層を除いた時の形状の段階である。上面の規模は南北が13.1m、東西が3.0～2.3mである。土塁南部の最高所は標高96.83mで、城跡中最も高所である。土塁北部の最高所は標高96.55mである。土塁の中央部はやや低く、南部の最高所より約0.5m低い。主郭内との比高差は北部で約1m、南部で約0.6mである。西側の空堀1との比高差は北部で約3.5m、南部で約2.9mである。北部は幅約3.0mと広く、空堀1もこの部分が西側へやや張り出しているため、檜台状に広く見える。この段階の土塁の構築は下層土塁の北側に大きく盛土をして拡張し、下層土塁上では20～30cm程度盛り上げた程度である。土塁上ではピット、土坑、集石、土塁北東隅の斜面でピットを検出している。出土遺物については盛土から出土したものが多く、下層出土のものとは別がしがたいため、下層の項目で述べる。

土塁1下層

遺構（図版39～41、写真図版33～35） 当初の土塁である。南北11.5m、北部の幅3.4mである。上層土塁より北側が短く、北側にテラスが取り巻くようになっている。主郭内との比高差は北部で約0.5m、南部ではほとんどない。北側テラスとの比高差は約1.0mである。西側の空堀1との比高差は北部で約2.0m、南部で約2.3mである。土塁北部は9号墳の墳丘を利用し、墳丘の北側約3mまでの範囲に約1mの盛土を行っている。土塁南部では9号墳南周溝を埋めている。遺物の出土状況からみると、空堀1に面した部分はきっちり埋められていたが、主郭に面した側は9号墳の南周溝の部分がわずかに窪んでいたようである（図版36）。周溝の南側では盛土の厚さは30cm程度である。土塁上は平坦で、北端部で金属工房が検出され、中・南部では集石が多く見られる。ピットはわずかである。

土塁1から出土した遺物は盛土から出土したものが多く、個別に上層・下層に分別することはできなかった。土師器皿A1（201～207）・A2（208）・鍋（209）・羽釜・羽口、須恵器碗（210）・鉢（211～213）・甕、丹波焼甕（214）、備前焼甕・播鉢、小刀（M8）、鉄釘（M205～M226）、管状鉄製品（M364）、鉄滓（M406）、銅銭（M441～M497）、焼土塊、アカニシなどが出土している。土師器皿A1は18個体、土師器皿A2は2.7個体、土師器鍋は2.95個体出土し、鉄釘も35点に及ぶ。

遺物（図版92・100・109・117・119・123、写真図版98・99・122・127・129・134～136） 201～207は土師器皿A1aである。207は器高が1.8cmと低い。208は土師器皿A2aである。209は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は当具痕後ナデが施されている。外面はススが付着している。210は須恵器碗で、見込みに浅い窪みをもつ。口縁部が内側に巻き込むような形態である。211・212は須恵器鉢である。213は小型の須恵器鉢である。214は丹波焼甕である。口縁部内面が凹線にくぼみ、端部上縁がやや拡張し、下縁は垂下しない。表面は灰色である。M8は小刀である。刀身幅1.6cmである。目釘孔

をもつが、目釘孔の部分のやその下部の断面は三角形である。刀の先端のみを再利用したものかもしれない。レントゲン写真によると目釘孔の下1cmの所に孔を金属で埋めたような痕跡が認められる。M205～M226は鉄釘である。頭部の形態はM214・M221がA1類、M205・M207・M210～M213・M215・M216・M222～M224がA2類、M223がA3類、M206・M208・M209・M217・M218がC類である。M206・M225は完形である。M364は管状鉄製品である。両端は折損している。断面は直径0.55cmの円形で、孔径は0.2cmである。M406は鉄滓である。上面はやや平坦で、下面は凹凸が大きい。表面に径1.5mm以下の気泡が認められる。M441～M497は銅銭である。M441は皇宋通寶（1038年初鑄）である。M442～M496は1箇所出土し、本来は1つの緡銭であったと考えられる。M442～M462は21枚接合している。孔内には藁状の紐が残存している。表面に見えるM442は大観通寶（1107年初鑄）、M462は元豊通寶（1078年初鑄）である。元豊通寶は篆書体である。M463～M481は19枚接合している。表面に見えるM463は元豊通寶（1078年初鑄）で、書体は篆書体である。M481は背面しか確認できない。M482～M490は9枚接合している。表面に見えるM482は太平通寶（976年初鑄）、M490は背面しか確認できないが、孔の上に「三」の字が認められる。孔上に数字の背文をもつことから嘉泰通寶（1201年初鑄）以降の南宋銭と考えられる。M491は淳化元寶（990年初鑄）で、書体は草書体である。M492・M493は接合している。M492は景德元寶（1004年初鑄）で、M493は背面しか確認できない。M494は祥符元寶（1009年初鑄）である。M495・M496は皇宋通寶（1038年初鑄）で、書体は真書体である。M497は嘉祐通寶（1056年初鑄）で、書体は真書体である。

ピット

上層で検出されたピットは土塁上で10基程度検出されている。北半部で検出されたピットは深さ55～35cmとしっかりと掘られたものが多い（P108～P103・P107）。下層では土塁上で10基程度のピットが検出されている。中部付近で多く検出されている。金属工房1の西のP111から鉄鏝（M14）が出土している。下層土塁北側のテラス状の部分でも25基程度のピットが検出されている。遺物を出土したものを中心に第3表に直径、深さ、出土遺物の種類を示す。

第3表 土塁1ピット一覧

遺構名	グリッド	直径 (cm)	深さ (cm)	遺物
P102	B-08	32	13	土師器皿B・鍋
P103	C-08	13	44	
P104	C-08	14	43	
P105	C-08	32	38	土師器不明
P106	C-08	24	7	
P107	C-08	28	55	
P108	D-08	41	35	
P109	C-08	30	48	
P110	C-08	40	39	土師器皿A1、須恵器甕
P111	C-08	25	-	鉄鏝（M14）
P112	D-08	26	36	土師器鍋
P113	D-08	20	40	土師器皿B

遺物（図版101、写真図版116） M14は鉄鏝である。先端は鑿形であるが、茎に近づくにしたがってスカート状に広がり、断面も円形になる。鏝身長は11.2cmである。

土坑

検出された土坑は上層土塁北端のSK63のみである。

SK63

遺構（図版42） C-08ブロック北西部で検出された土坑である。上層土塁上で検出された。平面は楕円形で、長74cm、幅64cm、深さ14cmである。埋土から土師器皿A1・鍋、須恵器甕が出土している。

集石

上層土塁では土塁南端部で1基、下層土塁では土塁南半部で4基、北側テラス部で2基検出された。

集石 8

遺構 (図版 43) E-09 ブロック北西部で検出された集石である。上層土塁の南東隅に位置している。長 100 cm、幅 95 cm、深さ 5 cm の浅い土坑の中に、径 20 cm 以下の礫がまばらに敷き並べられている。土坑内から土師器皿 A、須恵器鉢が出土している。

集石 9

遺構 (図版 42、写真図版 36) B-08 ブロック南西部で検出された集石である。下層土塁北側のテラス部の東部に位置している。東西 200 cm、南北 200 cm の範囲で、径 20 cm 以下の礫が平坦な地面の上に 2 段程度の重なりをもって敷き並べられている。礫の上面などから土師器皿 A1 (215)・A2・B・鍋 (216)、須恵器甕、金床石、焼土塊が出土している。

遺物 (図版 92、写真図版 99) 215 は土師器皿 B1 と考えられる。底部は摩滅している。216 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は板ナデが施されている。口縁端部外面と体部外面にススが付着している。

集石 10

遺構 (図版 42、写真図版 37) C-07 ブロック北東部で検出された集石である。下層土塁北側のテラス部の北西隅に位置している。東西 110 cm、南北 50 cm の範囲で、径 20 cm 以下の礫が平坦な地面の上に薄く敷き並べられている。礫の集中部の東西から土師器皿 A1・鍋 (217)、須恵器碗・鉢、鉄釘 (M231・M232)、アカニシが出土している。アカニシは特に多く、11 点 (A1～A11) 出土している (第 5 章第 10 節)。

遺物 (図版 92・110、写真図版 92・123) 217 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデが施されている。外面はススが付着している。M231・M232 は鉄釘である。M231 はほぼ完形で、全長 8.2 cm である。頭部の形態は B 類である。

集石 11

遺構 (図版 43) D-08 ブロック北西部で検出された集石である。下層土塁上の中部に位置している。大きく北側の部分と南側の部分に分かれている。北側の部分は東西 50 cm、南北 60 cm の範囲で、径 25 cm 以下の礫が平坦な地面の上に薄く敷き並べられている。中央の径 20 cm の範囲には石が並べられていない。南側の部分は東西 120 cm、南北 60 cm の長細い範囲に、径 20 cm 以下の礫が平坦な地面の上に薄く敷き並べられている。遺構に伴って土器などの遺物は出土していない。

集石 12

遺構 (図版 43、写真図版 37) D-08 ブロック南西部で検出された集石である。下層土塁上中部の西端に位置している。東西 90 cm、南北 100 cm の範囲で、径 15 cm 以下の礫が平坦な地面の上に薄く敷き並べられている。南部の中央の径約 40 cm の円形の範囲には石が並べられていない。遺構に伴って土器などの遺物は出土しておらず、集石の 40 cm 南東側でアカニシが出土している。

集石 13

遺構 (図版 44、写真図版 38) D-08 ブロック北西部で検出された集石である。下層土塁上の中部に位置している。南北 450 cm、南北 250 cm の範囲で、径 25 cm 以下の礫が平坦な地面の上に粗塊して敷き並べられている。部分的に炭が散布するところが見られる。集石上から土師器皿 A1・鍋 (219)・羽釜 (220)、須恵器碗・鉢 (218)・甕、鉄釘 (M233・M234)、鉄片、アカニシが出土している。

遺物 (図版 92・110、写真図版 98・123) 219 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデが施されている。220 は土師器羽釜である。口縁部は上方へ短く立ち上がり、鏝も短い。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデが施されている。体部外面はススが施されている。M233・M 234 は鉄釘 A2 である。

集石 14

遺構 (図版 45、写真図版 38) E-08 ブロック中央部で検出された集石である。下層土塁上の南西隅に位置している。南北 400 cm、南北 250 cm の範囲で、径 25 cm 以下の礫が平坦な地面の上に敷き並べられている。石は北東部の東西 120 cm、南北 90 cm の楕円形の範囲の部分と空堀 1 に面する西端の部分に集中している。集石上から土師器皿 A1 (221)・A2・鍋、須恵器鉢 (222)・甕、備前焼甕、鉄釘、鉄片 (M377)、銅銭 (M498・M499)、アカニシが出土している。

遺物 (図版 92・118・123、写真図版 99・128・136) 221 は土師器皿 A1a である。222 は須恵器鉢である。体部内面は仕上げナデが施され、底部内面～体部内面下半は使用により摩滅している。体部外面には指頭痕が認められる。M377 は鉄片である。周囲はすべて破面で、厚さは 0.4 cm である。金属学的分析により鑄造鉄器片と判定された。M498・M499 は元豊通寶 (1078年初鑄) である。書体は篆書体である。M499 は径が大きく、折二銭と考えられる。

その他の遺構

下層土塁の北側テラス部で焼土 1 箇所、下層土塁北端で金属工房 1 基を検出した。

焼土 4

遺構 A-07・08、B-07・08 ブロックにかけて検出された焼土である。下層土塁北側のテラス部に位置している。東西 2 つの箇所に分かれており、西側は南北 2.4m、東西 1.0m、東側は南北 1.3m、東西 1.3 m の範囲が被熱を受けている。焼土上からは土師器皿 A1・鍋 (223)、鉄釘 (M235～M238)、銅銭 (M500)、アカニシが出土している。

遺物 (図版 92・110、写真図版 99・123・136) 223 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面はハケ後ナデが施されている。外面にはススが付着している。M235・M237・M238 は鉄釘 A2 である。表面に炭化物・木質が多く付着している。M236 は鉄釘 A3 である。M500 は銅銭であるが、表面の錆化が著しいため銭文は不明である。

金属工房 1

遺構 (図版 46・47、写真図版 39～42) B-08 ブロックで検出された金属工房である。下層土塁の北端部に位置している。下層土塁を深い所で約 50 cm 掘りくぼめて、平坦面を造りだしている。東西 370

cm、南北 360 cm で、壁はなだらかである。使用期間中に整地が行われ（横断面 3 層）、整地土上面には炭層（横断面 2 層）が広がっていた。工房内では炉 2 基（炉 1・炉 2）とピット 6 基が検出された。ピットは検出されているが、屋根を支える柱穴のようなものは検出されていない。炉 1 は工房南部中央に位置している。直径 15 cm、深さ 4 cm の円形土坑で、その北から東にかけての周囲が赤く酸化して焼けている。土坑の内部には炭と細片化した鉄滓（M402・404・405）が詰まっており、鉄釘（M240～M242・M244・M245・M249・M252～M253）、銅滴（M416）、羽口（226）、トリベ（227）などが出土している。炉 2 は工房北端中央に位置している。南北 48 cm、東西 42 cm の範囲が赤く酸化して焼けており、その中央の直径約 30 cm 程度の範囲が青く還元している。ピットは炉 1 の東西に 3 基 1 組で南北に 1 列ずつ並んでいる。2 列は平行ではなく、南側に向かってややハの字形に開いている。西列は長 90 cm、東列は長 100 cm である。ピットの直径は 20～14 cm で、深さは 13～4 cm と浅い。ピットの埋土には炭が多く含まれていた。金属加工に関わる遺構と考えられるが、用途はよく分からない。炉 1 以外の埋土からは土師器皿 A1（224・225）・A2・鍋、須恵器鉢（227）、短刀（M3）、鉄鏃（M13・M20）、鉄釘（M239・M246～M248・M250）、鉄製座金具（M355）、環状鉄製品（M362）、板状鉄製品（M366）、鉄片、鉄塊（M395）、鉄滓（M401～M405）、銅塊（M414）、銅板（M415）、金床石（S9）が出土している。

遺物（図版 92・100～102・110・117・119・121・125、写真図版 98・99・115～117・123・129・132・138） 224・225 は土師器皿 A1a である。224 は内面に赤色顔料のようなものが付着している。226 は土師器羽口である。復元径は 9.0 cm、復元孔径は 3.0 cm である。227 は土師器トリベである。浅い碗形の器形で、口径 8.0 cm、器高 3.2 cm である。口縁部内外面は融解し、体部外面上半が還元して灰色を、底部内面は還元してやや紫色を帯びた灰色を呈している。外面の表面には赤色の付着物がついている。228 は小型の須恵鉢である。M3 は短刀である。刀身幅は 2.7 cm である。関は両関でやや斜角である。茎の目釘孔は一つである。M13・M20 は鉄鏃である。M13 は先端を欠損しているが、他の出土品から見て先端は鑿形である可能性が高い。M20 は雁又式の鉄鏃である。鏃身部は鏃のある両羽で、茎との境に断面径 1.2 cm の円形の膨らみをもっている。M239～M253 は鉄釘である。M239・M240 は鉄釘 A1、M241～M244 は鉄釘 C である。他の遺構などに比べて A2 類や曲がったものが少なく、未使用品や製作途中のものが多いようである。M355 は四葉形の座金具である。中央の孔は平面楕円形で、長 0.6 cm、幅 0.4 cm である。M362 は環状鉄製品である。環の断面は長方形で、側面から見ると左端は矩形であるが、右端は斜めに切り落とされたような形態をしている。M366 は板状鉄製品である。長 17.9 cm 以上、幅 1.65 cm、厚 0.5 cm の細長い板状である。先端は円頭形である。片面に木質、炭が付着している。M395 は鉄塊である。重量は 63.13g である。金属学的分析により鉄素材と判定された（第 5 章第 8 節）。M401～M405 は鉄滓である。M401～M404 金属学的分析により鍛錬鍛冶滓と判定された。M405 は炉 1 及びその周辺から出土した多量の鉄滓細片である（鉄釘破片を含む）。M414 は銅塊である。平面は一部欠けた半円形で、厚さ 0.6 cm の板状である。重量は 11.33g である。左辺や下辺の縁はせり上がったようになっており、切り取って使用したのと考えられる。M415 は銅板である。幅 0.8 cm、長約 9 cm の細長い銅板が折りたたまれている。使用後の余りを、再利用のために押しつぶしたのと考えられる。M416 は銅滴である。直径約 1 cm の球状で、重量は 1.46g である。S9 は金床石と考えられる。上面は平坦で、研磨されたかのように滑らかである。強い被熱を受けており、そのため割れたと考えられる。

(3) 土塁・空堀

土塁1の西側は谷との間に複数の土塁・空堀を南北に並べて守りを強固にしている(第45図・第46図)。土塁1から西端の土塁5までの距離は28mにわたる。土塁・空堀を単純に並列させるのではなく、土塁が接合し、空堀を途切れさせるなど、やや複雑な構造をとっている。土塁1の西側には空堀1が位置する。空堀1の西側は南半部のみ土塁4が設けられ、北端部は土塁2に接合している。土塁4に沿ってその西側に空堀4が掘られている。空堀4と空堀1の北半部の西側には土塁2が南北に長く設けられている。土塁2の西側に沿



第44図 土塁・空堀群の調査

って空堀2が設けられている。空堀2の西側には土塁3が南北に長く設けられている。土塁3の北半部の西側に沿って空堀3が設けられている。空堀3の西側には土塁5が設けられ、南端部は土塁3に接合している。

土塁上ではピットなどの遺構は検出されていない。土塁3の下層で平安時代後期の土坑(SK64)が検出され、土塁3北部周辺で経筒などが出土していることから城跡以前に経塚が存在していた可能性がある。土塁・空堀の構築にあたっては既に存在していた吉田住吉山7・8号墳を破壊している。

土塁

土塁は4基検出された。東より土塁4・2・3・5と並んでいる。

土塁4

遺構(図版48・49、写真図版49) 空堀1南半部の西側、空堀4の東側に位置している。調査区南端部から北側へ伸び、途中で西側へ曲がり、土塁2に接合している。長さ26m、上面の幅2~3mで、土塁頂部と空堀1との比高差は1.4m、空堀4との比高差は1.0mである。南端部6mの部分は40cmほど低く下げられている。土塁は地山削り出しで、吉田住吉山7号墳の東周溝を埋める程度である。7号墳の東周溝の埋土とその上面から土師器皿A1・皿B・鍋、須恵器碗、鉄片が出土している。

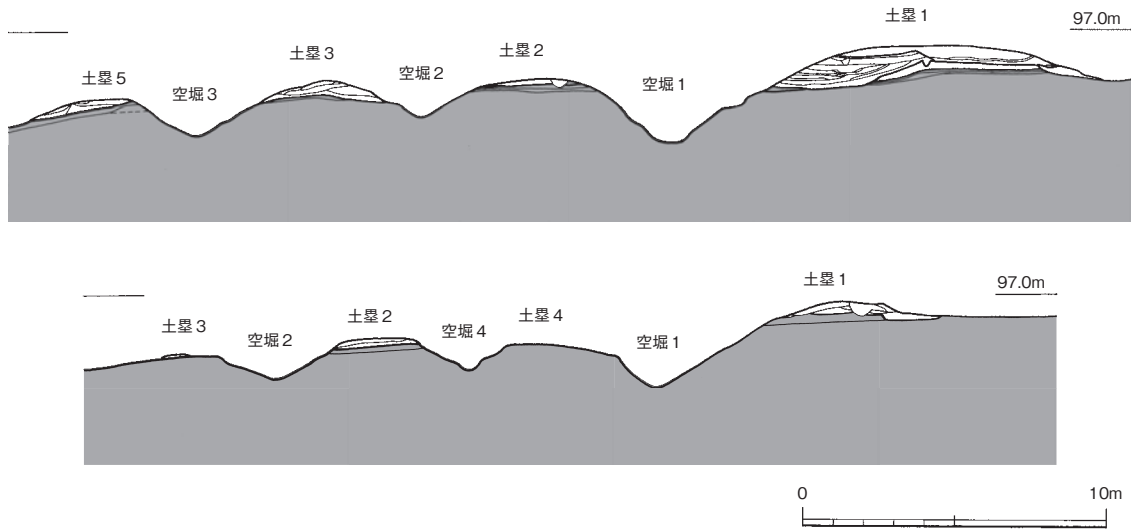
土塁2

遺構(図版48・49・51、写真図版50) 空堀1北半部・空堀4の西側、空堀2の東側に位置している。調査区南端部から北へ長く伸びるが、調査区北端までは及んでいない。やや西へ張り出した弧状を呈している。中程で土塁4が東から接合している。長さ52m、上面の幅3~0.8mで、土塁頂部と空堀1との比高差は2.2m、空堀4との比高差は1.3m、空堀2との比高差は1.5mである。土塁は吉田住吉山7号墳の墳丘を削平し、周溝を埋めて築き、全体的な土塁の盛土は20~30cm程度である。7号墳の周溝の埋土を含む土塁盛土から土師器皿A1(229)・鍋・鉢(230)、須恵器碗(233)・鉢(231・232)、鉄釘(M254~M258)、板状鉄製品(M372)が出土している。特に7号墳南周溝上から出土したものが多い。

遺物(図版93・111・117、写真図版100・123・128) 229~232は7号墳南周溝埋土あるいは周溝上の土塁盛土から出土したものである。233は土塁北端部の盛土から出土したものである。229は土師器皿



第45図 土塁・空堀群遺構配置図



第46図 土壘・空堀群断面図

A1aである。230は土師器鉢である。鋭く突き出た片口をもっている。底部は回転糸切りである。231は須恵器鉢である。232は須恵器鉢である。233須恵器碗である。器高は3.5cmと低く、底部の縁に手持ちへラケズリが施されている。M254～M258は鉄釘である。M254～M256は頭部がA2類である。M255・M256は完形で、M255は長7.5cm、M256は長7.6cmである。M254・M258は木質が多く付着している。M372は板状鉄製品である。断面は薄い三角形を呈し、上端が曲げられている。幅は2.0cmである。

土壘3

遺構 (図版48・49・52、写真図版51・52) 空堀2の西側、空堀3の東側に位置している。明瞭に土壘として成形されているのは8号墳墳丘の部分から南側約30mの部分である。その南側は空堀2に沿って幅約2mの平坦面が続いている。土壘南部で土壘5が西から接合している。土壘上面の幅は1.9～1.0mで、土壘頂部と空堀2との比高差は1.2m、空堀3との比高差は2.1mである。土壘は吉田住吉山8号墳の墳丘を削平し、吉田住吉山8号墳の周溝を埋めて築き、土壘の盛土は厚い所で50cm程度である。8号墳の周溝の埋土を含む土壘盛土から土師器皿A1・鍋(236)、須恵器碗・甕(234・235)、鉄釘(M259～M264)が出土している。特に8号墳南側の土壘盛土下層から須恵器甕(234・235)などがまとめて出土し、この部分をはさむ空堀2・3から須恵器経筒(248)が出土していることから、8号墳の墳丘上に経塚が存在した可能性が考えられる(図版52)。土壘3南部の盛土の下からSK64が検出されている。

遺物 (図版93・111、写真図版100・101・123) 234・235は須恵器甕である。234は下半のみ出土している。外面は平行タタキ後体部のみ矢羽根状のタタキが施されている。底部と体部の境に台に置いたときに付いたような痕跡が残っている。内面は板ナデが施されるが、粘土紐の接合痕が認められる。235は口縁部が短く、拡張しない。体部は球形で、器壁が厚い。底部外面は平行タタキ、体部外面は矢羽根状のタタキ、底部内面～体部内面は板ナデが施され、体部内面上端のみ同心円当具痕を残している。236は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は無文当具痕後ナデが施されている。外面にはスス、底部内面にはコゲが付着している。M259～M264は鉄釘である。頭部の形状はM260・M261がA2類、M262がA3類、M263・M264がB類である。

土塁5

遺構（図版48・49、写真図版53） 空堀3の西側に位置し、西側は谷に面している。明瞭に土塁として成形されているのは空堀3南部の西側に沿いに約25m伸び、南端部で東側に曲がり、土塁3に接合している。土塁の北側には盛土はなく幅2～3mの平坦面が続いている。土塁上面の幅は3～1.5mで、土塁頂部と空堀3との比高差は1.4mである。土塁の盛土はおおむね20cm程度である。土塁盛土から土師器皿A1（242・243）・A2・B・鍋（244）、須恵器甕、鉄釘（M266～269）が出土している。

遺物（図版94・111、写真図版102・123） 242 土師器皿A1aである。243は土師器皿A1bである。244は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は無文当具痕後ナゲが施されている。M266～M269は鉄釘である。頭部の形状はM266がA2類、M268がA3類、M267がB類である。M266・M268はほぼ完形で、長さはM266が5.6cm、M268が8.2cmである。

空堀

空堀は4条検出された。東より空堀1・4・2・3と並んでいる。

空堀1

遺構（図版48・49、写真図版53～55） 土塁1の西側、土塁4と土塁2の北半の東側に位置している。堀は土塁1に沿ってまっすぐに北側へ伸び、土塁1北端部に沿う部分のみクランクさせて、西側へ突出させている。北端は帯曲輪3南端の水溜りに連なっている。断面はV字形で、中部の長さ8mほどがその南北の部分に比べて50cmほど浅く掘り残されている（写真図版54）。長さ34mで、幅は南部で7.5m、中部で5.5m、北部で8.5mである。深さは南部で土塁1との比高差2.9m、土塁4との比高差1.4m、中部で土塁1との比高差2.2m、土塁4との比高差1.3m、北部で土塁1との比高差3.5m、土塁2との比高差2.2mである。埋土から土師器皿A1・A2・鍋、須恵器碗（245）・鉢、丹波焼甕、鉄釘、鉄鍋（M350）、板状鉄製品（M367）、銅銭（M501）が出土している。

遺物（図版94・116・117・123、写真図版102・127・128・136） 245は須恵器碗である。底部の周囲は手持ちヘラケズリが施されている。器高は3.1cmと低い。M350は鉄鍋の口縁部である。口縁部は受け口状で、端面は内傾している。M367は板状鉄製品である。幅1.4cm、厚0.4cmの長細い製品で、両端を欠損している。M501は寛永通寶（1636年初鑄）である。

空堀4

遺構（図版48・49、写真図版56） 土塁4の西側、土塁2の南半の東側に位置している。土塁4に沿ってほぼ直線で、南端部のみやや東側に曲がっている。断面はV字形で、長さ27m、幅3mである。深さは土塁4との比高差1.0m、土塁2との比高差1.3mである。埋土から土師器皿A1・鉢、須恵器鉢が出土している。

空堀2

遺構（図版48・49、写真図版57） 土塁2の西側、土塁3東側に位置している。堀は南端から西側へ張り出す弧状を呈し、調査区の北端にまでは及んでいない。断面はV字形で、長さ27m、幅6～2.6mである。深さは土塁2との比高差1.5m、土塁3との比高差1.2mである。埋土から土師器皿A1・A2・鍋

(246)、須恵器鉢・甕・経筒 (248)、丹波焼甕が出土している。

遺物 (図版 94、写真図版 102) 246 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデが施されている。

空堀 3

遺構 (図版 48・49、写真図版 58) 土塁 3 の西側、土塁 5 東側に位置している。堀は北端から南側へ延びるが、中程までしか延びない。西側へ張り出す弧状を呈している。中部の長さ 5.8mほどがその北の部分に比べて 90 cm、南の部分に比べて 60 cmほど浅く掘り残されている (写真図版 58)。断面は V 字形で、長さ 34m、幅 6～2.8m である。深さは北部で土塁 3 との比高差 2.0m、土塁 5 との比高差 1.5m、中部で土塁 3 との比高差 1.5m、土塁 5 との比高差 0.6m、南部で土塁 3 との比高差 1.8m、土塁 5 との比高差 1.2m である。埋土から土師器皿 A1 (247)・鍋、須恵器甕・経筒 (248)、丹波焼甕、棒状鉄製品 (M375) が出土している。

遺物 (図版 94・118、写真図版 102・128) 247 は土師器皿 A1a である。248 は須恵器経筒である。空堀 2、谷西包含層から出土した破片と接合した。口縁～体部上位と底部の破片のみが出土している。口縁部は短く上方へ立ち上がり、肩部にヘラ記号が記されている。底部にはやや分かりにくい木葉痕が付いている。M375 は棒状鉄製品である。断面は径 0.45 cm の円形である。下端は折損している。

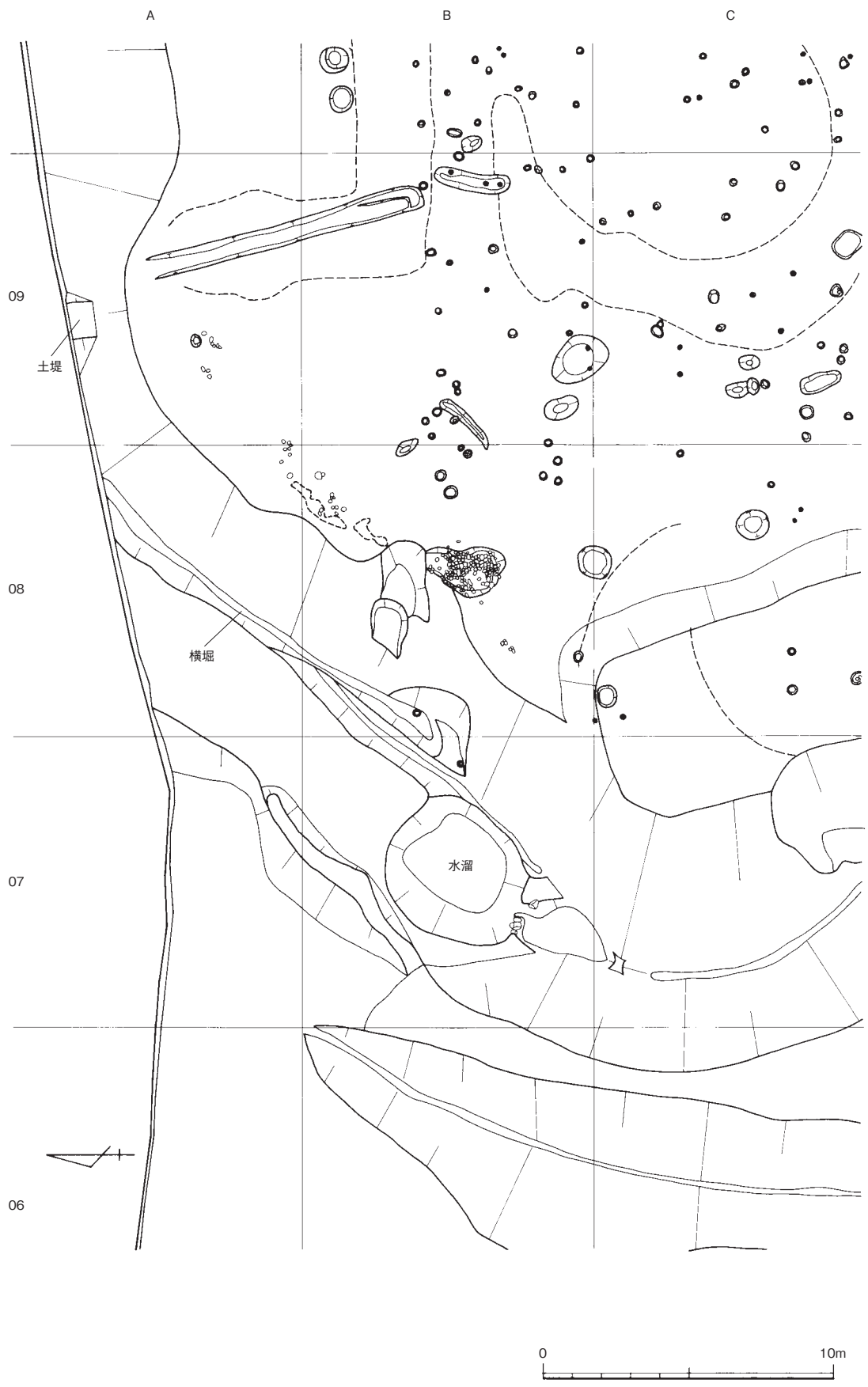
その他の遺構

土塁上ではピットなどの遺構は検出されておらず、土塁下層でも土塁 3 の下層で平安時代後期の土坑 (SK64) が検出されたのみである。土塁 3 北部周辺で経筒などが出土していることから城跡以前に経塚が存在していた可能性があるが、遺構としては確認できない。

SK64

遺構 (図版 50、写真図版 52) E-06 ブロック北西部で検出された土坑である。土塁 3 の盛土の下層で検出された。平面は不整長方形で、長 230 cm、幅 190 cm、深さ 16 cm である。土坑中央の検出面上に薄く炭層が広がり、その北部から土師器皿 B2 が 4 点 (238～241) 出土している。土坑上面 (おそらく土塁 3 の盛土) から土師器皿 A1 (237)、鉄釘 (M265) が出土している。

遺物 (図版 93・111、写真図版 100・123) 237 は土師器皿 A1a である。238 は土師器皿 B2 である。12 世紀後半頃のものである。M265 は鉄釘 A2 である。表面に木質が付着している。



第47図 帯曲輪3遺構配置図

(4) 帯曲輪 3

主郭の西北側の1段低い部分に位置する帯曲輪である(第47図)。主郭下の斜面の部分も含む。

帯曲輪 3

主郭側の斜面を削り、谷側を埋めて平坦面を造り出している。主郭との比高差は1.8mである。東側に位置する帯曲輪2との間は土堤状の遺構で区切られている。南西の隅には水溜が設けられ、その南側には空堀1が続いている。曲輪の長さは30m、平坦部の幅は4mである。平坦部と斜面の境には横堀が掘られている。なお、帯曲輪3の北部は調査区外である。

横堀

遺構(図版53・54、写真図版60) 平坦部と斜面の境に位置している。おそらく当初は土堤の下を通過して、帯曲輪2の横堀に続いていたと考えられる。西端は水溜に接続しているが、斜面側に造り替えが行われている。平坦部からの深さは50~60cm程度である。帯曲輪3の中では横堀埋土及びその上部に溜まった遺物が多い(図版57)。土師器皿A1(250・251)・A2・B・鍋(252)・羽釜(253)・鉢、須恵器碗・鉢・甕、備前焼甕、鉄釘(M271~M273)が出土している。

遺物(図版94・112、写真図版103・123) 250は土師器皿A1aである。251は土師器皿A1cである。252は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデが施されている。253は土師器羽釜である。鏝は低い。M271~M273は鉄釘である。頭部の形態はM271・M272がA2、M273がA3である。M271はほぼ完形で、長8.3cmである。

水溜

遺構(図版55、写真図版61) 帯曲輪3の西南端に位置し、空堀1に接続している。南北に2つの土坑が連なっている。南側の土坑は南北350cm、東西180cm、深さ20cmである。北端部に径40cm以下の礫が4つ並べられている。北側の土坑は南北500cm、東西450cm、深さ57cmである。北側の土坑に比べて底の高さが30cm低い。埋土から土師器皿A1(254)・鍋(255)、瓦質土器風炉(256)が出土している。

遺物(図版94、写真図版103) 254は土師器皿A1cである。255は土師器鍋である。体部内外面はナデが施されている。256は瓦質土器風炉である。口縁部は短く上方に立ち上がり、体部は球形である。口縁部外面に珠文体をもち、体部に窓の上端がわずかに残っている。

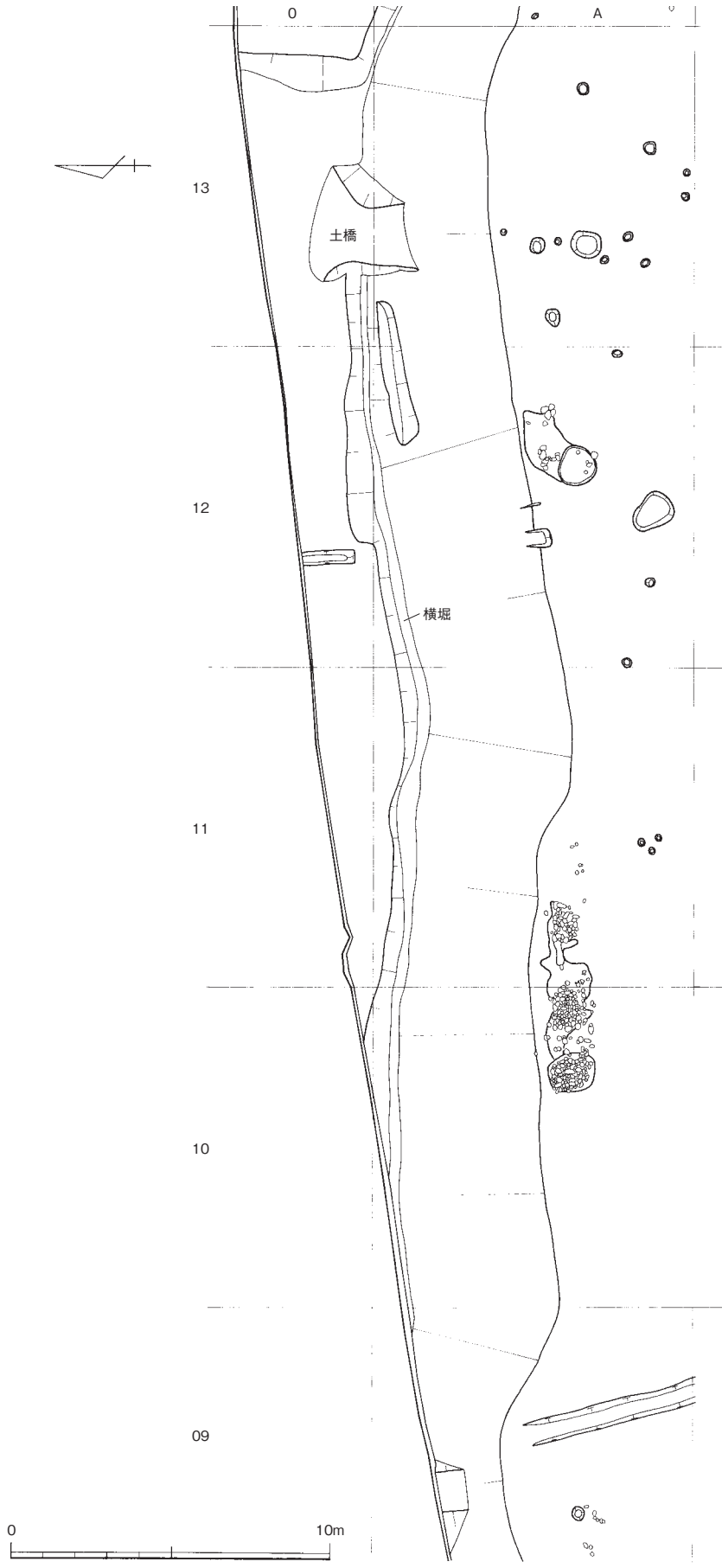
土堤

遺構(図版56、写真図版61) 帯曲輪3の東端、帯曲輪2との境に位置している。斜面に対して直角に北側へ突き出した堤状の盛土で、北側は調査区外である。上面の幅120cm、高さ30cmである。帯曲輪2の土橋と類似するが、主郭の平坦面よりかなり低い位置から始まっている。遺構に伴って遺物は出土していない。

斜面・平坦部

遺構(図版53・54、写真図版59・60) 各部の遺構の状況は地区の項目で述べた通りである。斜面から土師器皿A1・A2・B(249)・鍋、備前焼甕が、平坦部から須恵器甕、備前焼甕が出土している。

遺物(図版94、写真図版103) 249は土師器皿B1である。斜面から出土した。



第48図 帯曲輪2遺構配置図

(5) 帯曲輪 2

主郭の北側の1段低い部分に位置する帯曲輪である(第48図)。主郭下の斜面の部分も含む。

帯曲輪 2

主郭側の斜面を削り、谷側を埋めて平坦面を造り出している。主郭との比高差は3~2.5mである。西側に位置する帯曲輪3との間は土堤状の遺構で区切られている。東側に位置する帯曲輪1との境は土橋付近としておく。曲輪の長さは40mで、平坦部の幅は4m程と考えられる。平坦部と斜面の境には横堀が掘られている。なお、帯曲輪2の北部は調査区外である。

横堀

遺構(図版58・59、写真図版62・64) 平坦部と斜面の境に位置している。当初は帯曲輪3の横堀に引き続き、土橋の下を通って、さらに帯曲輪1の横堀に続いていたと考えられる。平坦部からの深さは50~60cm程度である。土橋の断面でみると当初は横堀の外側に土塁上の盛土(図版60の5・6層)が存在したものと考えられ、土塁頂部からの深さは75cmである。この部分の埋土最下層には炭・焼土が多く含まれていた。

帯曲輪2の中では堀埋土及びその上部に溜まった遺物が多く(図版61)、土師器皿A1は33.1個体に及ぶ。土師器皿A1(261~275)・A2・B(276)・鍋・羽口、須恵器鉢・甕(277)、備前焼甕、鉄釘(M274~289)、火打金(M352)が出土している。

遺物(図版95・112・116、写真図版104・105・124・127) 261~271は土師器皿A1aである。272~275は土師器皿A1bである。273は口縁にススが付着している。276は土師器皿B1である。277は須恵器甕である。口径は59cmで、大型である。口縁端部外縁が垂下している。体部外面は矢羽根状のタタキ、体部内面は板ナデが施されている。M274~M289は鉄釘である。頭部の形態はM274~M276・M281~M287がA2類、M288がA3類、M277がB類、M278・M279・M289がC類である。これらのうちM281~M289は土橋下層の横堀最下層から出土したものである。完形は5点あるが、いずれもL字形に曲がっている。M352は火打金である。上部に透かしを有するが、やや文様は未消化である。紐孔の上は宝珠状に尖り、下部の厚さは0.5cmである。

土橋

遺構(図版60、写真図版64・65) 帯曲輪2の東端で、帯曲輪1との境に位置している。斜面に対して直角に北側へ突き出した堤状の盛土で、上面の長3.0m、幅3.5mである。横堀を埋めて築かれている。比較的斜面の緩やか部分に設けられ、帯曲輪間を区切るとともに、主郭への登り口の役割も果たしていたと考えたい。土師器皿A1、須恵器甕、備前焼甕、鉄釘、焼土塊が出土している。

斜面・平坦部

遺構(図版58・59、写真図版63) 各部の遺構の状況は概要の項目で述べた通りである。斜面から土師器皿A1(257)・A2・B(258~260)・鍋・鉢、須恵器碗・鉢・甕、丹波焼甕・壺、鉄釘、鉄片(M385)、銅銭(M502)、焼土塊が、平坦部から土師器皿A1(278)・A2・鍋・鉢、須恵器碗(279)・甕、丹波焼甕、備前焼甕が出土している。横堀には及ばないが斜面部での遺物の出土量も少なくなく、土師器皿A1は

9.6 個体に及ぶ。

遺物（図版 94・118・123、写真図版 103・105・128・136） 257～260、M502、M385 は斜面から、278・279 は平坦部から出土したものである。257・278 は土師器皿 A1a である。口縁部外面下端にヘラ先が当たったような圧痕が認められる。258 は土師器皿 B1 である。259・260 は土師器皿 B2 である。279 は須恵器碗である。底部に凹みを持ち、切り離しは回転糸切りである。M385 は鉄片である。周囲は全て破面で、鑄鉄片と思われる。M502 は元豊通寶（1078年初鑄）である。書体は篆書体である。



第49図 帯曲輪1 遺構配置図

(6) 帯曲輪 1

主郭の北東隅から東側を取り巻く1段低い部分に位置する帯曲輪である(第49図)。主郭下の斜面の部分も含む。帯曲輪平坦部で土坑2基、斜面上端と平坦部で集石が検出されている。

帯曲輪 1

西側に位置する帯曲輪2とは土橋で区切られ、南端は調査区外である。主郭側の斜面を削り、平坦面を造り出している。谷側の盛土はあまりよく確認できなかった。東側中央部は吉田住吉山3号墳の墳丘を少し削平して利用している。主郭との比高差は北東隅で1.9m、西側中央で2.9m、南端で3.5mある。曲輪の長さは48mで、南に向かって低くなり、北東部と南端部の比高差は3.1mもある。平坦部の幅は尾根が伸びる北東隅では9m程と推定され、西側では2.4~1mと狭くなっている。平坦部と斜面の境には横堀が掘られている。

横堀

遺構(図版62・63、写真図版67・68) 平坦部と斜面の境に位置している。当初は帯曲輪2の横堀に引き続いたと考えられる。平坦部からの堀の深さは30~60cm程度である。南端部では堀の幅を広げ、階段状に南へ下がっている。帯曲輪1の中では堀埋土及びその上部に溜まった遺物が多く(図版65)、土師器皿A1は23.95個体、土師器皿A2は4.45個体である。土師器皿A1(281~284)・A2(285)・B(286・287)・鍋(288)、須恵器鉢(289・290)・甕、丹波焼甕、鉄釘(M291~293)、焼土塊が出土している。

遺物(図版95・112、写真図版105・124) 281~283は土師器皿A1aである。284は土師器皿A1bである。285は土師器皿A2aである。286・287は土師器皿B1である。287は器高1.8cmと低い。288は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面はハケ後ナデが施されている。289・290は須恵器鉢である。体部内面は斜め方向の仕上げナデが施されている。M291~M293は鉄釘である。頭部の形態はM291がA1、M291がA2である。

斜面・平坦部

遺構(図版62・63) 各部の遺構の状況は概要の項目で述べた通りである。斜面から土師器皿A1・A2・B・鉢、須恵器鉢・甕、瀬戸美濃焼皿(280)、鉄釘(M290)、鉄片(M386・387)が、平坦部から土師器皿A1、須恵器碗が出土している。横堀には及ばないが斜面部での遺物の出土量も少なくなく、土師器皿A1は10.25個体に及ぶ。

遺物(図版95・112・118、写真図版105・124・128) 280、M290・M386は斜面から出土したものである。280は瀬戸美濃焼皿である。口縁部の端面は凹線状で、内面に卸目がわずかに残る。表面に灰釉がかかっている。M290は鉄釘A2である。M386・M387は鉄片である。M386は厚さ0.4cmの板状の部分から厚さ0.5cmの棒状の部分が反り上がるように見える。

土坑

土坑は帯曲輪1南部の平坦部で2基検出された。

SK65

遺構（図版 63） C-15 ブロック中央部で検出された土坑である。吉田住吉山 3 号墳南側に積んだ平坦部の盛土の下層から検出された。平面は不整楕円形で、長 145 cm、幅 125 cm、深さ 18 cm である。埋土から土師器皿 A1 が出土している。

S K66

遺構（図版 63） C-15 ブロック中央部で検出された土坑である。吉田住吉山 3 号墳南側に積んだ平坦部の盛土の下層から検出された。平面は楕円形で、長 110 cm、幅 92 cm、深さ 24 cm である。埋土から土師器皿 A1 が出土している。

集石

集石は斜面上部（集石 15）と西側平坦部（集石 16）で検出された。

集石 15

遺構（図版 64、写真図版 68） B-15 ブロック南西部で検出された集石である。主郭に近い斜面の上端付近に位置している。東西 120 cm、南北 150 cm の三角形に近い範囲で、径 25 cm 以下の礫が斜面上で平坦になるように薄く敷き並べられている。礫の上面などから土師器皿 A、須恵器碗・鉢が出土している。

集石 16

遺構（図版 64、写真図版 69） A-15 ブロック南東部で検出された集石である。西側平坦部の東斜面際に位置している。東西 68 cm、南北 130 cm の長細い範囲で、径 30 cm 以下の礫が薄く敷き並べられている。遺構に伴って遺物は出土していない。

（7）東斜面

帯曲輪 1 の東側に位置する斜面である。東側には堀切が位置する（第 50 図）。帯曲輪 1 と堀切の間は最短で約 10m である。北部で段状遺構 2 基と焼土 1 基を検出した。

段状遺構

段状遺構は東斜面の調査区北東隅で 2 基検出した。

段状遺構 1

遺構（図版 67、写真図版 69） A-16 ブロック東部で検出された段状遺構である。東斜面の北東隅に位置し、堀切の西端に近い。斜面を削り、幅約 80 cm の平坦面を造り出している。長さは 380 cm 以上で、北端は調査区外である。埋土から須恵器鉢（291）が出土している。

遺物（図版 95、写真図版 106） 291 は須恵器鉢の底部である。底部は回転糸切りである。

段状遺構 2

遺構（図版 67） B-16 ブロック東北部から A-17 ブロック西南部にかけて検出された段状遺構である。



第50図 東斜面遺構配置図

東斜面の北東隅に位置し、堀切の西端に近い。斜面を削り、平坦面を削り出しているが、北・東側が調査区外であるため、規模は不明である。長さ 540 cm 以上、幅 25 cm 以上の平坦面を造り出している。遺構に伴って遺物は出土していない。

焼土

焼土は東斜面北部で 1 基検出されている。

焼土 5

遺構 (図版 67) A-15 ブロック 東北部で検出された焼土である。東斜面の北西部に位置し、焼土の部分のみ傾斜がゆるやかになっている。中央の焼土部は長さ 42 cm、幅 25 cm の平面楕円形で、南北両脇に炭と焼土が散らばっている。焼土の上面から土師器皿 A1 が出土している。

包含層

遺構 斜面であることから上方に位置する帯曲輪 1 や主郭から流れてきた土が数十 cm 程度堆積している。その中に土師器皿 A1 (292)・A2 (293)・B・鍋、須恵器碗 (294)・鉢 (295)・甕、丹波焼甕、鉄釘 (M294)、焼土塊が含まれていた。土師器 A1 は 3.95 個体で、それほど多くない。

遺物 (図版 95・112、写真図版 105・124) 292 は土師器皿 A1a である。293 は土師器 A2a である。294 は須恵器碗である。底部には手持ちヘラケズリが施され、器高は 3.2 cm と低い。295 は須恵器鉢である。M294 は鉄釘である。

(8) 堀切

東斜面の東側は巨大な堀切が設けられている。堀切の東側には狭い丘陵部が残る。堀切北半部は調査区外であり、本発掘調査を行ったのは南半部の下部のみである。

堀切

遺構 (図版 68～70、写真図版 70～72) 吉田住吉山遺跡の東端部に位置する。西側は、吉田住吉山遺跡本体が立地する段丘面下に位置し、東側は、細目川にあたる。調査前の状況においても堀状をなしていた。東斜面の東側を南北に区切り、北東に延びる尾根の手前で、東側へ直角に折れる。総延長 85 m で、南北に延びる部分が長 60 m、東西に延びる部分が長 25 m である。



第51図 堀切の検出(1)



第52図 堀切の検出(2)



第53図 堀切遺構配置図

堀切横断面はV字形に近く、東側の立ち上がりのほうの傾斜がやや急になっている。その角度は、約35°である。検出面からの深さは、中央部で2.60mを測る。底部は幅約1.80mの平坦面をなす。底部の標高は70.60mを測り、東斜面側からの深さ約16m、段丘面上との比高は26mにおよぶ。なお、調査では、西側斜面からの掘削の起点を明らかにすることはできなかった。また、東側については、本来なら土塁が存在するものであるが、調査以前に工事に伴い削平されていた。ただし、調査前地形図の東斜面から堀切部への傾斜変換点から考慮すると最大幅は33mで、東側丘陵部側からの深さ約9mとなる（図版69）。

堀切内は、堀切の東西両側からの流入土によって埋没していた（図版69）。人為的に埋められた層は認められなかった。なお、調査の都合上、表土層については重機により掘削したため、土層断面図からは除外されている。

遺物は、6層～8層中から出土している。より下層からは、全く出土していない。左記の層の下層の多くは、土壌化が認められた。このため、ある程度埋没した段階で、遺物が流入もしくは廃棄されたものと考えられる。

遺物は堆積土の中・上層から大量に出土している。土師器皿A1(296～326)・A2(327～334)・B(335)・鍋(336・337)、瓦質土器風炉(338・339)、須恵器碗(340・341)・小皿(342)・鉢(343・344)・甕(345)、瀬戸美濃焼碗(346)、丹波焼甕・壺(347・348)、備前焼甕、白磁皿(350)、青磁碗(351)・鉢(352)、肥前系施釉陶器皿(349)、短刀(M2)、小刀(M6・M7)、鉄鏃(M15～M17)、小札(M38～M40)、鉄釘(M295～M308)、鉄鎌(M345・M347)、板状鉄製品(M357・M369～M371・M373・M374)、鉄片(M388～M390)、鉄滓(M407)、銅製飾金具(M408・M411)、銅銭(M503～M505)、石硯(S1・S2)、砥石(S6)、アカニシなどが出土している。土師器皿A1が201.65個体、土師器皿A2が54.1個体と多く、アカニシも41点に及んでいる（第5章）。遺物量が非常に多く、遺物の残存状況もそれほど悪いものではないことから、単に堀切の両側から投棄・転落したものだけではなく、堀切底部で使用されたものも多く含まれているものと思われる。

遺物（図版96・97・100～102・113・115・117～120・123～125、写真図版106～110・115・116・118・124・126～132・136～138）296～314は土師器皿A1aである。300は口縁部外面に粘土紐接合痕、306は口縁部外面下端にヘラ先状の圧痕が認められる。315～326は土師器皿A1bである。315は口縁部外面に粘土紐の接合痕が認められる。319は口縁部にススが付着している。327～334は土師器皿A2aである。330・333は口縁部外面に粘土紐の接合痕が認められる。335は土師器皿B1である。336は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は無文当具痕後ナデが施されている。337は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は板ナデ及びびナデが施されている。体部外面にはスス、底部内面にはコゲが付着している。338・339は瓦質土器風炉である。338は内彎する口縁部の部分である。339は胴部の珠文帯の部分である。340・341は須恵器碗である。340は底部内面に凹みをもたず、器高は4.4cmである。341は底部に周囲に手持ちヘラケズリが施されている。器高は3.6cmである。342は須恵器小皿である。343は須恵器鉢である。344は須恵器鉢である。345は須恵器甕である。口縁部は短く外反し、端部は拡張しない。体部外面は矢羽根状のタタキが施され、口縁部外面には平行タタキ痕が残存している。体部内面下半は板ナデが施され、上半は同心円当具痕が残っている。346は瀬戸美濃焼碗である。内外面とも灰釉が施されている。347・348は丹波焼壺である。口縁部は外反し、端部は丸味を帯びている。暗赤褐色の表面にオリブ灰色の釉が掛かっている。348は小さめ底部から大きく膨らむ器形である。体部外面は不定方向の板ナデ、内面は不定方向のナデが施されている。外面は暗赤褐色で、釉が垂れて

いる。349 は肥前系施釉陶器鉢である。内面は刷毛目文で、砂目が認められる。高台は露胎である。肥前IV期と考えられる。350 は白磁皿である。器壁は薄く、口縁端部がわずかに外側に膨らんでいる。釉色はやや青みを帯びている。351 は龍泉窯系の青磁碗である。文様は鎬蓮弁文である。352 は龍泉窯系の青磁鉢である。口縁部は水平に外側へ折れ、端部が反り上がる。外面は無文で、暈付きのみ露胎である。釉色は緑味を帯びている。

M2 は短刀である。刀身に反りはなく、刀身幅は 2.8 cm である。関は両関で直角である。茎の目釘孔は 1 箇所である。茎から関部を越えて刀身部にかけて柄の木質が付着していることから呑口形式の拵えと考えられる。M6・M7 は小刀である。M6 は刀身幅 1.8 cm で、関は直角であるが、峰側しか確認できない。M7 は刀身幅 1.85 cm で、関は無関である。茎長は 10.6 cm で、目釘孔は 2 つである。M15～M17 は鉄鏃である。先端は鑿形であるが、茎に近づくにしたがってスカート状に広がり、断面も円形になる。鏃身長は M15 が 9.6 cm、M16 が 9.8 cm で、M17 はサビブクレにより先端を欠くが 9.6 cm である。M38～M40 は小札である。M38・M40 は碁石頭伊予札で、縁の折り返しは認められない。M38 は緘孔・毛立孔の孔径がやや大きい。幅は M38 が 2.45 cm、M39 が 2.6 cm、M40 が 2.4 cm である。M295～M308 は鉄釘である。頭部の形状は M299・M300・M301・M303・M304・M307 が A2 類 M295・M305・M308 が A3 類で、M296～M298・M302 は A 類であるが、頭部の薄くタタキ延ばした部分が剥離したものである。M345・M347 は鉄鎌である。M345 は 2 つ折りに折りたたまれている。刃部の半分と茎の先端部を欠いている。M347 は茎の部分で、端部は鉤状に曲がっている。M357・M369～M371・M373・M374 は板状鉄製品である。M357 は上端の折損部に目釘孔状の孔が認められ、下端部が曲げられている。M369～M371 は細長い板状である。M369 は幅 1.0 cm で、両端は折損している。M370 は幅 1.05 cm で、下端を欠損している。M371 は幅 0.5 cm で、両端を欠損している。M373・M374 は幅の広い板状の製品である。M388～M390 は鉄片である。M407 は鉄滓である。全体的に凹凸が大きい。下部は気泡が膨れて破裂しているが、表面には気泡は認められない。重量は 45.83 g である。M408 は銅製飾金具である。平面は長 8.6 cm、幅 4.8 cm の楕円形で、縁部の厚さ 0.5 cm、本体の厚さ 0.15 cm である。左上部が一部欠損している。下面から見るとかなり強く弧状に曲がっている。文様は枝菊文が透彫りされている。左下から枝が分かれて伸び、その先に花、蕾、葉が連なっている。花はいずれも八重菊で、中央に直径 1.8 cm の花が置かれ、左右に花が 1 つずつ重なっている。その他上に 1 つ、左に 2 つ、右に 3 つ花が配されている。右の一つのみ萼を表に見せている。花は中央の薬の部分が直径 0.4 cm で、内部は縦横に細かく沈線で割っている。一番上の花卉は 21 弁で、長さは 0.5 cm である。花卉内は匙状にくぼんでいる。葉の部分は葉脈を浮かして表現している。側面部も文様が細かく彫られ、蕾の薬の内部まで表現されている。表面・側面は金が貼られている。裏面には縁の内側に薄い銅板を嵌め、銅板の中央からは先割れ鋌が突き出ている。鋌は中心の菊花の裏に蟬付けされているのであろう。蛍光 X 線分析によると本体・銅板とも純銅で、金層からは水銀は検出されなかった。出土時には表・裏両面に藁状の繊維（稲の藁、刳など）が多く付着していた（第 5 章）。形状・文様からすると甲冑の飾金具と考えられる。M411 は銅製飾金具である。強く U 字形に折り曲げられており、当初の形は不明である。幅 0.7 cm、厚さ 0.2 cm で、断面は下面がややくぼむ蒲鉾形である。表面には左上がりの振文が入れている。振文という点では刀装具の栗形にあるが、やや華奢である。サイズ的には双脚の足金物の可能性があるが、類例は存在しない。M503～M505 は銅銭である。M503 は天聖元宝（1023 年初鑄）で、書体は篆書体である。M504 は元豊通宝（1078 年初鑄）で、書体は篆書体である。M505 は銹化のため銭文は不明である。S1・S2 は石硯である。S1 は長 13.4 cm、幅 8.5 の平面長方形で

あるが、わずかに海側が狭くなっている。長軸側・短軸側の断面ともわずかに逆台形を呈している。縁の上端はすべて欠損している。硯面はよく擦られている。側面は研磨されているが、裏面は幅4mmの鑿痕を残している。色調は暗赤褐色(2.5YR3/2)で、石材は赤間石と考えられる(注1)。裏面には刻銘がある(第54図)。□暦二年は丁卯の干支から嘉暦2年(1327)と限定できる。播磨国明石郡の性海寺は現在も神戸市西区押部谷町に現存し、子院の福智院と龍華院によって現在管理されている。行基開基の伝承をもち、白河院政期に東大寺の如元上人により再興されたとされる真言宗の古刹である。鎌倉期以降の文書や南北朝・室町期の仏画などを伝えている。大の下には2文字程度存在するが未解読である。寺院の坊名などが記されていたことが想定される。光王九郎は硯の所有者である(注2)。S2は長13.85cm、幅9.55cmで、S1よりやや大きい。厚さは2.2cmである。その他の形態・技法的な特徴はS1と同様である。色調は暗赤灰色(2.5YR3/1)で、石材は赤間石と考えられる。S6は砥石である。長細い長方形を呈するが、上下とも欠損している。中央部は使用により細くなっている。断面は長方形で、4面とも砥面として使用されているが、下面はあまり使用されていない。石材は流紋岩である。

注1 石川県埋蔵文化財センター垣内光次郎氏の御教示による。

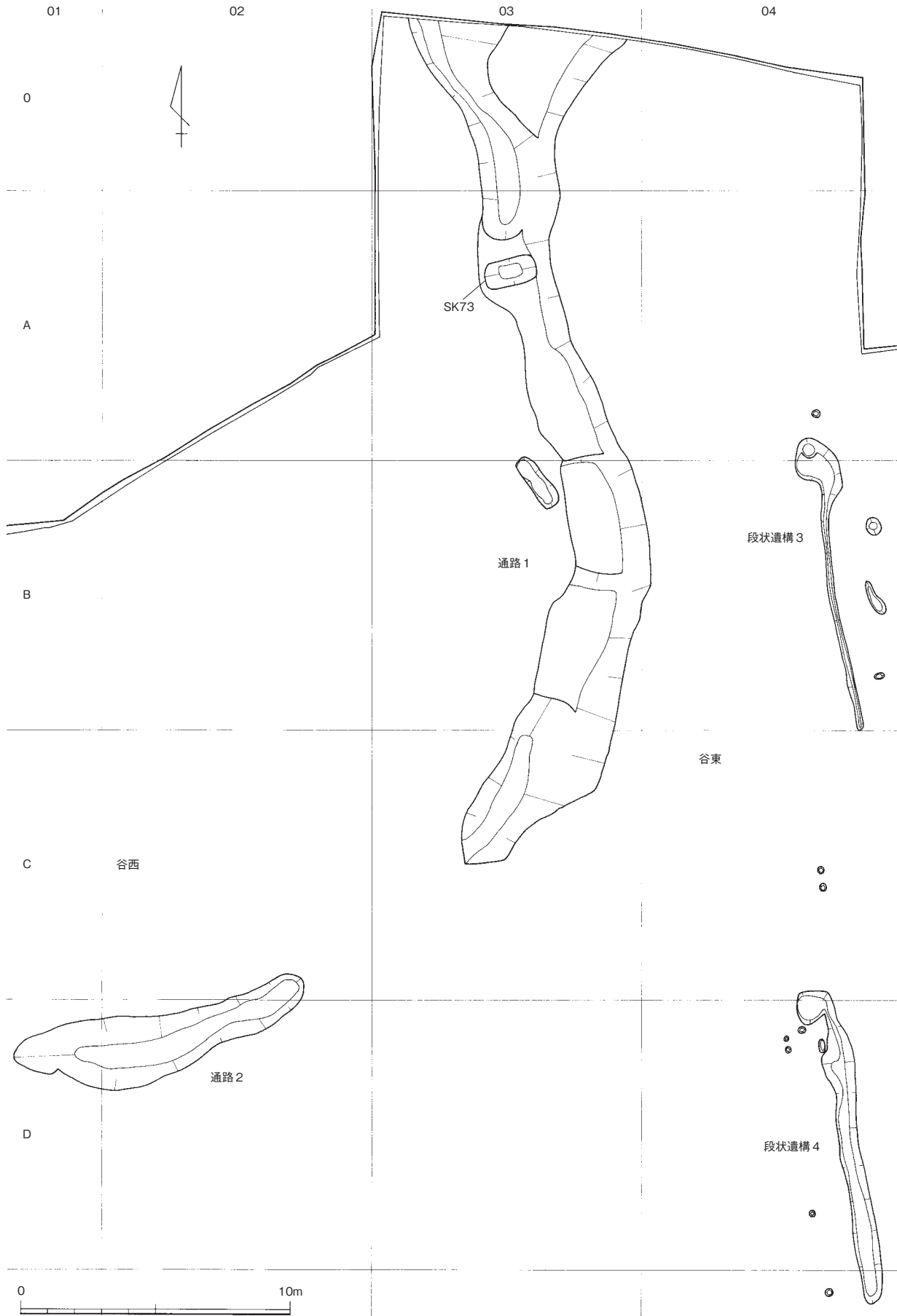
注2 刻銘の釈読については大手前大学小林基伸氏・神戸大学市沢哲氏の御教示を得た。



硯主光王九郎也
 性海寺福智院大□□□
 □播広國明石郡
 □曆二年丁卯三月十九日
 (嘉) (磨)



第54図 石硯刻銘拓影・釈文



第55図 谷東・谷西北部遺構配置図



第56図 谷東・谷西南部遺構配置図

(9) 谷東

土塁・空堀の西側は谷が北側から入り込み、尾根が南から谷を取り巻くように回り込んでいる。このうち、谷底の延長線上より東側を谷東地区とする。北部の谷の斜面では段状遺構、土坑、通路などが検出され、南部の尾根部ではピット、土坑が検出されている（第55・56図）。尾根部の南側は崖面となっている。

ピット

ピットは約50基検出された。そのうち遺物が出土しているのは10基（遺構内のものを除く）である。尾根部のごく狭い範囲に限られている。遺物の出土したピットを中心に第4表に直径、深さ、出土遺物の種類を示す。

遺物（図版113、写真図版124） M309は鉄釘A3である。完形で全長10.0cmである。P117から出土したものである。

第4表 谷東ピット一覧

遺構名	グリッド	直径 (cm)	深さ (cm)	遺物
P114	F-06	44	7	土師器皿A
P115	G-06	29	21	土師器皿A
P116	F-06	21	13	土師器皿A
P117	G-06	22	13	鉄釘(M309)
P118	G-06	27	12	土師器皿A
P119	G-06	24	5	土師器皿A
P120	G-06	28	44	土師器皿A1
P121	G-06	26	33	土師器皿A1
P122	G-06	22	20	土師器不明
P123	H-06	20	36	土師器不明

段状遺構

北部の谷斜面に2基設けられている。

段状遺構3

遺構（図版73、写真図版75） A-04・B-04ブロックにかけて検出された段状遺構である。土塁5より5m西側、通路1より7m東側に位置している。等高線と平行に細い溝状の遺構が検出されている。平坦部は流出して溝のみがかろうじて残存したものである。長さは10.8mで、溝の幅は12cm、深さは3cmである。北端部のみ土坑状に幅165cmと太くなっている。北端部にはピットがあり、直径70cm、深さ15cmである。埋土から土師器皿A1（353・354）・A2、須恵器鉢（355）が出土している。

遺物（図版98、写真図版111） 353・354は土師器皿A1aである。355は須恵器鉢である。口縁部は上方へ拡張している。

段状遺構4

遺構（図版74、写真図版75） C-04・D-04・E-04ブロックにかけて検出された段状遺構である。土塁5より4m西側、谷底より13m東側に位置している。等高線と平行に溝状の遺構が検出された段状遺構である。長さは11.8mで、溝の幅は90~70cmで、この部分を含めて比較的平坦な部分が造り出されている。北端部のみ幅140cmと土坑状に太くなっている。溝の前面にはピットが5基程度存在するが、いずれも深さ10cm程度の浅いものである。埋土から土師器皿A2（356）・鍋（357）、須恵器鉢（358）・甕、丹波焼甕が出土している。

遺物（図版98、写真図版111） 356は土師器皿A2aである。357は土師器鍋である。358は須恵器鉢である。内面は使用により摩滅している。

土坑

土坑は北部の谷斜面部で2基、南部の尾根上で5基検出された。

S K67

遺構（図版 75、写真図版 76） G-06 ブロック南西部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 190 cm、幅 163 cm、深さ 19 cm である。埋土の上層には炭・焼土塊を多く含んでいる。埋土から土師器皿 A1（359）・A2（360）・鍋、須恵器鉢（361）、鉄釘（M310）、鉄鎌（M346）が出土している。

遺物（図版 98・113・115、写真図版 111・124・126） 359 は土師器皿 A1a である。360 は土師器皿 A2a である。361 は須恵器鉢である。M310 は鉄釘 A2 である。M346 は鉄鎌である。ほぼ完形で、茎部の先端が鉤状に曲がっている。

S K68

遺構（図版 75） G-06 ブロック東部で検出された土坑である。平面は不整楕円形で、長 137 cm、幅 125 cm、深さ 14 cm である。埋土から土師器蛸壺（362）が出土している。

遺物（図版 98、写真図版 111） 362 は土師器蛸壺である。底部は回転糸切りで、体部外面下端に指オサエ状の窪みが認められる。

S K69

遺構（図版 76） G-06 ブロック中央部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 56 cm、幅 49 cm、深さ 5 cm である。埋土から土師器皿 A1、須恵器鉢が出土している。

S K70

遺構（図版 76、写真図版 76） H-06 ブロック北部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 67 cm、幅 60 cm、深さ 20 cm である。埋土の上層には炭・焼土塊を多く含んでいる。埋土から須恵器甕が出土している。

S K71

遺構（図版 76） G-06 ブロック西部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長 69 cm、幅 30 cm、深さ 10 cm である。土坑北端部から須恵器鉢（363）、埋土から土師器皿 A1 が出土している。

遺物（図版 98、写真図版 112） 363 は須恵器鉢である。使用により内面は摩滅している。

S K72

遺構（図版 76） F-05 ブロック北西部で検出された土坑である。平面は隅丸長方形で、長 64 cm、幅 70 cm、深さ 25 cm である。埋土から鉄釘（M311）が出土している。

遺物（図版 113、写真図版 124） M311 は鉄釘 A1 である。

S K73

遺構（図版 77、写真図版 76） A-03 ブロック北部で検出された土坑である。通路 1 上で検出された。

第3章 吉田住吉山遺跡群の調査

平面は長方形で、長 190 cm、幅 105 cm、深さ 60 cm である。土層からみると通路 1 使用時には埋没していたようである。埋土から土師器皿 A・鍋・鉄釘 (M312) が出土している。

遺物 (図版 113、写真図版 124) M312 は鉄釘 B である。

通路 1

遺構 (図版 78、写真図版 77) 谷部斜面北部で検出された。斜面を削って、階段状に造り出し、南端部は溝状になっている。北端部も溝状になって調査区外へ延び、堅堀に連なっていると思われる。この部分の東側の平坦面は北側に廻る帯曲輪 9 の平坦面に連なっているものと思われる。中ほどの階段状の段差のあるところまでは北側から等高線にそって設けられ、そこから南側は 20~30 cm ほどの段差を付けながら斜めに下がるが、谷底までは及んでいない。調査区内で検出された長さは 33m、平坦面の幅は 1.5~2.3m である。埋土から土師器皿 A1 (364)・鍋 (365)、須恵器鉢・甕、丹波焼甕が出土している。



第57図 通路 1

遺物 (図版 98、写真図版 111) 364 は土師器皿 A1a である。365 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面はナデが施されている。

包含層

遺構 南部の尾根部では堆積土はほとんどないが、北部の谷部では 1 m 以上の土が堆積した部分もある。ただし、遺物は南部の尾根部や谷南部から出土したものが多い。土師器皿 A1 (366~369)・A2 (370)・鍋・蛸壺 (371)、須恵器鉢 (372・373)・甕・経筒 (248)、備前焼甕 (374)、丹波焼甕 (375)、短刀 (M1)、鉄釘 (M313~317)、鉾留金具 (M353)、砥石 (S7) が出土している。土師器皿 A1 は 9.8 個体である。

遺物 (図版 98・100・113・117・125、写真図版 112・115・124・127・138) 366~369 は土師器皿 A1a である。370 は土師器皿 A2a である。371 は土師器蛸壺である。口縁部は内彎し、端部は丸味を帯びている。372 は須恵器鉢である。373 は須恵器鉢の底部である。374 は備前焼甕である。体部外面は板ナデ、体部内面はヨコハケ、底部内面はナデ、底部外面はハケが施されている。375 は丹波焼甕である。体部内外面は回転ナデ、底部外面は不調整である。外面の色調は赤褐色である。M1 は短刀である。反りはなく、刀身長 19.7 cm (曲りを復元して)、刀身幅 2.7 cm である。茎には目釘孔を 1 つもつ。関は直角の両関である。M313~M317 は鉄釘である。頭部の形状は M313・M315・M316 が A2 類、M317 が A3 類、M314 が A4 類である。M353 は鉾留金具である。長 3.85 cm、幅 2.4 cm の小判形の座金具に、先端が 1.5 cm の円形に薄くつぶされた鉾が差し込まれている。鉾頭は叩きつぶされている。S7 は砥石である。表面及び左側面のみが残存するのみである。いずれも砥面として使用されている。

(10) 谷西

谷底とその延長線上より西側を谷西地区とする。北部は谷の西斜面で、南部は尾根部である。尾根は南側から西へ回り込むが、南部に向かっても広がっている。西側は西へ回り込む尾根先端部の西曲輪1・2、帯曲輪4と南西部の斜面に設けられた帯曲輪5に隣接している。尾根の東側は土採りにより破壊されており、南側は北側の谷部では通路、南部の尾根部ではピット・土坑が検出されている（第55・56図）。ただし、中世の遺物が出土しているピット・土坑は尾根の西側へ回り込んだ部分や南側へ延びた部分では見つかっておらず、南部の尾根頂部からやや北側へ下がったところに比較的集中している。

ピット

ピットは約60基検出された。ほとんど尾根部に位置し、そのうち遺物が出土しているのは4基（遺構内のものを除く）のみである。遺物の出土したピットを第5表に直径、深さ、出土遺物の種類を示す。

遺物（図版102、写真図版118） M41は小札である。三ツ目札で、左縁、下縁が折り返されている。左下隅の孔には鋳状のものが詰まっている。幅は2.6cmである。P124から出土したものである。

第5表 谷西ピット一覧

遺構名	グリッド	直径 (cm)	深さ (cm)	遺物
P124	G-04	30	20	土師器皿A、須恵器甕、小札(M41)
P125	G-04	21	19	須恵器甕
P126	H-03	17	10	土師器不明
P127	H-02	29	26	須恵器甕

土坑

土坑は南部の尾根上で4基検出された。

SK75

遺構（図版79、写真図版78） G-04ブロック南東部からH-04ブロック北東部にかけて検出された土坑である。平面は長方形で、長280cm、幅116cm、深さ8cmである。南西隅が40cmほど突出している。土坑内の南寄りに長20cm以下の礫が長200cm、幅40cmの範囲で並べられている。埋土から土師器皿A・鍋(376)、丹波焼甕が出土している。

遺物（図版99、写真図版113） 376は土師器鍋である。

SK76

遺構（図版80） G-04ブロック南西部で検出された土坑である。平面は不正楕円形で、長170cm、幅145cm、深さ7cmである。床面付近に炭が多くみられた。床面北西部にはピットが1基(P1)存在する。直径20cmで、深さ12cmである。P1埋土からは丹波焼甕、小札(M42～M44)、土坑埋土からは丹波焼甕が出土している。

遺物（図版102、写真図版118・119） M42～M44は小札である。頭部が弧状に円味をもつ。幅2列14孔であるが、伊予札と異なり緘孔・毛立孔と下緘孔の孔径はほぼ等しい。縁の折り返しは認められない。出土時には有機物が表面に多く付着していた(M44の裏面のみ出土状況のまま残してある)。伊予札の仲間として円頭伊予札と呼称する。

SK77

遺構 (図版 80、写真図版 78) G-04 ブロック南西部で検出された土坑である。平面は楕円形で、長さ 90 cm、幅 43 cm、深さ 2 cm である。土坑内北端の床面では径 15 cm 以下の礫とともに鉄釘 (M319) が出土している。その他、埋土から土師器皿 A1、丹波焼甕、鉄釘 (M318) が出土している。

遺物 (図版 114、写真図版 125) M318・M319 は鉄釘 A2 である。ほぼ完形で、全長は M318 が 8.0 cm、M319 が 7.1 cm である。

SK78

遺構 (図版 80、写真図版 78) G-04 ブロック北部で検出された土坑である。平面は三角形で、東西 210 cm、南北 110 cm、深さ 10 cm である。埋土上層には炭を多く含んでいる。床面からはピットが 5 基検出されている。深さは 10 cm 程度のものが多いが、中央の P2 は深さ 37 cm である。土坑埋土から土師器皿 A1 (377)、須恵器甕、鉄釘が出土している。P1 埋土から土師器皿 A1・鍋が出土している。

遺物 (図版 99、写真図版 113) 377 は土師器皿 A1a である。

通路 2

遺構 (図版 78、写真図版 77) 谷部斜面北部で検出された。谷東地区の通路の延長上に位置している。断面は溝状で、斜面を斜めに駆け上がっている。低い部分は谷底まで及ばず、高い部分はほぼ帯曲輪 4 と同じくらいの高さにまで及んでいる。延長 11m、最大幅 2.7m、深さ 0.5m である。遺構に伴って遺物は出土していない。

包含層

遺構 南部の尾根部では堆積土はほとんどないか土壌化層を削り込んでも表土からの深さは 40 cm 程度である。北部の谷部では 1 m 以上の土が堆積した部分もある。これらの堆積土から出土した遺物は非常に少なく、土師器皿 A1 が 0.5 個体である。土師器皿 A1・A2・B・鍋 (378)・鉢、須恵器鉢・甕、丹波焼甕、備前焼甕 (379)、青磁碗、鉄釘 (M321・M322)、銅銭 (M506～M510)、石鍋 (S3) が出土している。

遺物 (図版 99・114・123・125、写真図版 113・125・136・138) 378 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、体部内面は無文当具痕後ナデが施されている。379 は備前焼甕である。体部外面はタテハケ、体部内面は横方向のナデ、底部外面はナデ、底部内面は横方向のナデ後ユビオサエが施されている。M321・M322 は鉄釘である。頭部の形状は M321 が A2 類、M322 が B 類である。M506～M510 は銅銭である。M506 は淳化元寶 (990 年初鑄) である。書体は草書である。M507～M510 は接合している。M507 は元豊通寶 (1078 年初鑄) である。書体は行書である。M508～M510 は接合のため銭文は不明である。S3 は石鍋である。内面は平滑に仕上げられ、体部外面にはノミ痕を残している。鏝の断面が不等辺台形で、木戸分類Ⅲ-c 類もしくは d 類と考えられる (木戸 1995)。

(11) 西曲輪 1

谷を西側に回り込む尾根の先端部に位置する曲輪のうち、最も高所（標高 94.36m）に位置する曲輪である（第 58 図）。土塁 1 から直線距離 85m、尾根部を経由すると 130m 離れている。南西端は土採りにより破壊されている。

西曲輪 1

遺構（図版 82、写真図版 80） 曲輪の平坦面は南北 8.6m、東西 7.0m の平面楕円形である。南東側の谷西地区の尾根部より約 50 cm 高く、北西側の西曲輪 2 より 1.8m 高い。城中の最高所の土塁 1 よりは約 2.5m 低い。この曲輪は吉田 1 号墳の墳丘を利用したものと考えられる。曲輪の平坦面上からは遺物が出土しておらず、周囲の斜面から土師器皿 A1・B・鍋、須恵器甕、丹波焼甕、備前焼甕、鉄釘、銅銭（M511）などがわずかに出土している。

遺物（図版 123、写真図版 136） M511 は寛永通寶（1636 年初鑄）である。

(12) 西曲輪 2

谷を西側に回り込む尾根の先端部に位置する曲輪のうち、西曲輪 1 の北西側の下に位置する曲輪である。南西部は土採りにより破壊されている。曲輪の平坦面で、土坑が 1 基検出されている（第 58 図）。

西曲輪 2

遺構（図版 82、写真図版 79） 西曲輪 1 の北側から西側にかけて広がる曲輪である。検出できた平坦面の延長は 14m で、幅は西側では 4 m 程度であるが、北側は北へ出っ張るように広がり、幅は 7 m に及んでいる。西曲輪 1 より 1.8m 低く、帯曲輪 4 より 2.5m 高い。曲輪は吉田 1 号墳の墳裾部を利用しているものと思われる。北側へ出っ張った部分の西端で土坑が 1 基検出されている。平坦面上からは土師器皿 A1・A2・B（384）・鍋・鉢（385）、須恵器碗（386）・鉢（387）・甕（388・389）、備前甕、鉄釘（M329～M338）、鉾留金具（M354）などが出土している。M391 の鉄片は西曲輪 1 もしくは 2 から出土したものである。特に土師器皿 A1 が 0.8 個体に対して、土師器皿 B が 2.4 個体と多いことが他の地区と異なっている。

遺物（図版 99・114・117・118、写真図版 112～114・125・127・128） 384 は土師器皿 B2 である。385 は土師器鉢である。口縁部は外反し、端部は丸味をもっている。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヨコハケが施されている。386 は須恵器碗である。387 は須恵器鉢である。体部内面は使用により摩滅している。388・389 は須恵器甕である。体部外面は矢羽根状のタタキ、体部内面はナデが施されている。388 は口縁部が拡張せず、389 は口縁端部外縁が垂下している。M329～M338 は鉄釘である。頭部の形状は M329 が A1 類、M332 が A3 類、M334・M335 が B 類である。M354 は鉾留金具である。座金具は幅 1.3 cm、下端が円頭形で、上端は欠損している。本体より引きはがされたのかサバ折りに反り返っている。鉾の一部が残存している。M391 は鉄片である。

その他の遺構

曲輪の平坦面で、土坑が 1 基検出されているのみである。

SK80

遺構 (図版 84) C-21 ブロック南東部で検出された土坑である。平面は不整楕円形で、長 188 cm、幅 160 cm、深さ 22 cm である。土坑及びその周辺から集中して遺物が出土している。土師器皿 A1 (380)・A2・B(381)・鍋、須恵器鉢・鉢(382)・甕、備前焼甕、青磁碗(383)、鉄釘 (M323~M328)、焼土塊が出土している。

遺物 (図版 99・114、写真図版 112・125) 380 は土師器皿 A1a である。381 は土師器皿 B1 である。382 は須恵器鉢である。383 は龍泉窯系の青磁碗である。文様は鎬蓮弁文である。高台は細く、畳付きが露胎である。釉色はやや青みを帯びている。M323~M328 は鉄釘である。頭部の形状は M323~M325 が A2 類、M326 が A3 類、M327 が C 類である。M328 は頭部がサビブクレにより不明である。M326 は完形で、全長 10.5 cm である。

(13) 帯曲輪 4

谷を西側に回り込む尾根の先端部に位置する曲輪のうち、西曲輪 2 の北西側の下の最下段に位置する曲輪である。南西部は土採りにより破壊されている。曲輪の平坦面で、段状遺構 1 基、土坑 1 基、横堀 1 条が検出されている (第 58 図)。

帯曲輪 4

遺構 (図版 82、写真図版 81) 西曲輪 2 の北側から西側にかけて広がる曲輪である。検出できた平坦面の延長は 28m で、幅は 2m 程度のところが多く、北側で最大幅 3.3m を測る。西曲輪 2 より 2.5m 低い。古墳を利用した西曲輪 1・2 と異なり、斜面を大きく削って平坦面を造成している。西側は平坦面ではなく、堀状 (横堀) にされている。曲輪の北部では段状遺構 1 基と土坑 1 基が検出されている。平坦面上からは土師器皿 A1・B (390~393)・鍋・鉢、須恵器鉢・甕 (394)、鉄釘 (M339) などが出土している。

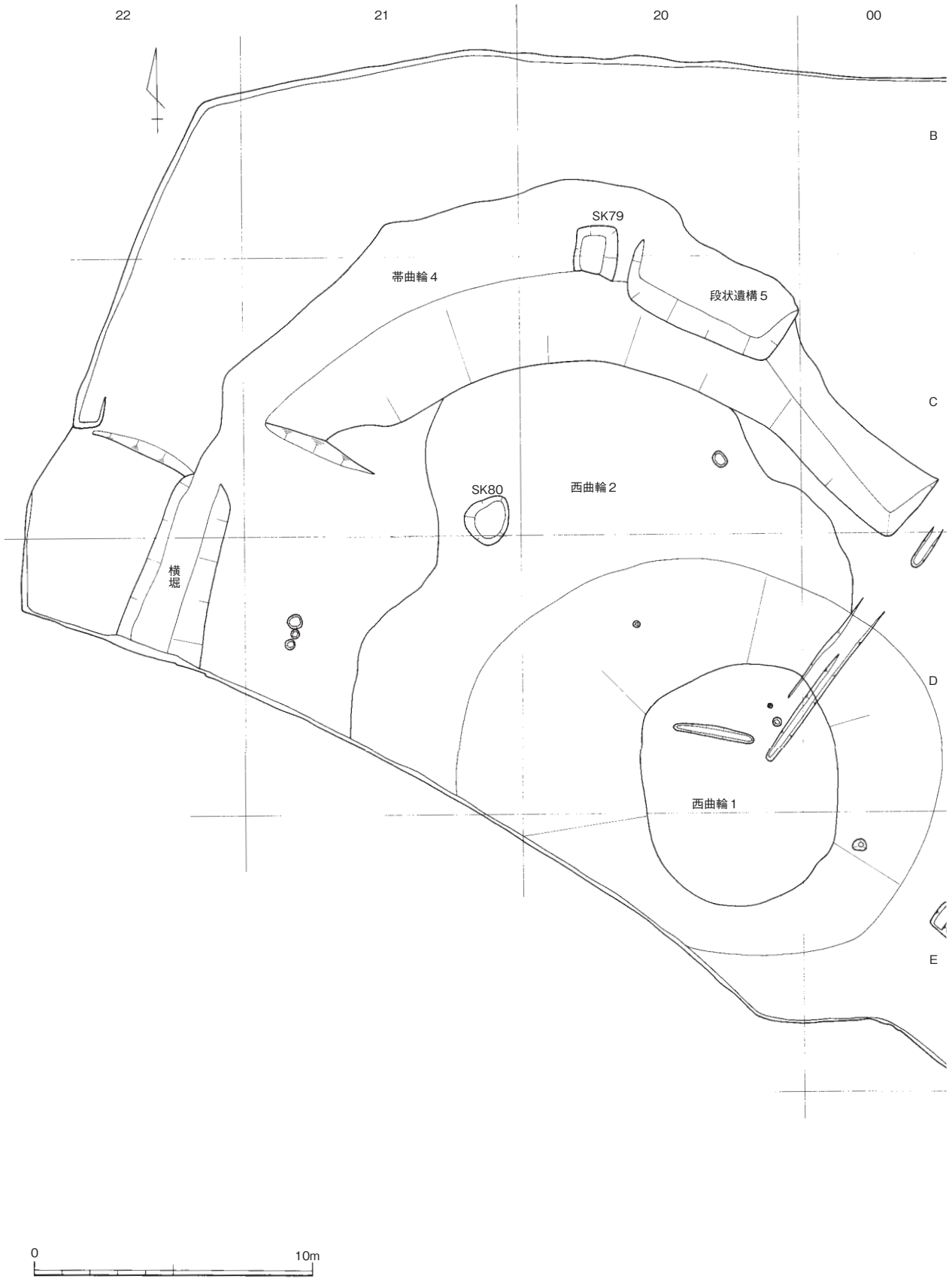
遺物 (図版 99・114、写真図版 114・125) 390~393 は土師器皿 B である。394 は須恵器甕である。口縁端部上縁がやや上に拡張している。体部外面は矢羽根状のタタキ、体部内面は同心円当具痕が施されている。M339 は鉄釘 A2 である。

その他の遺構

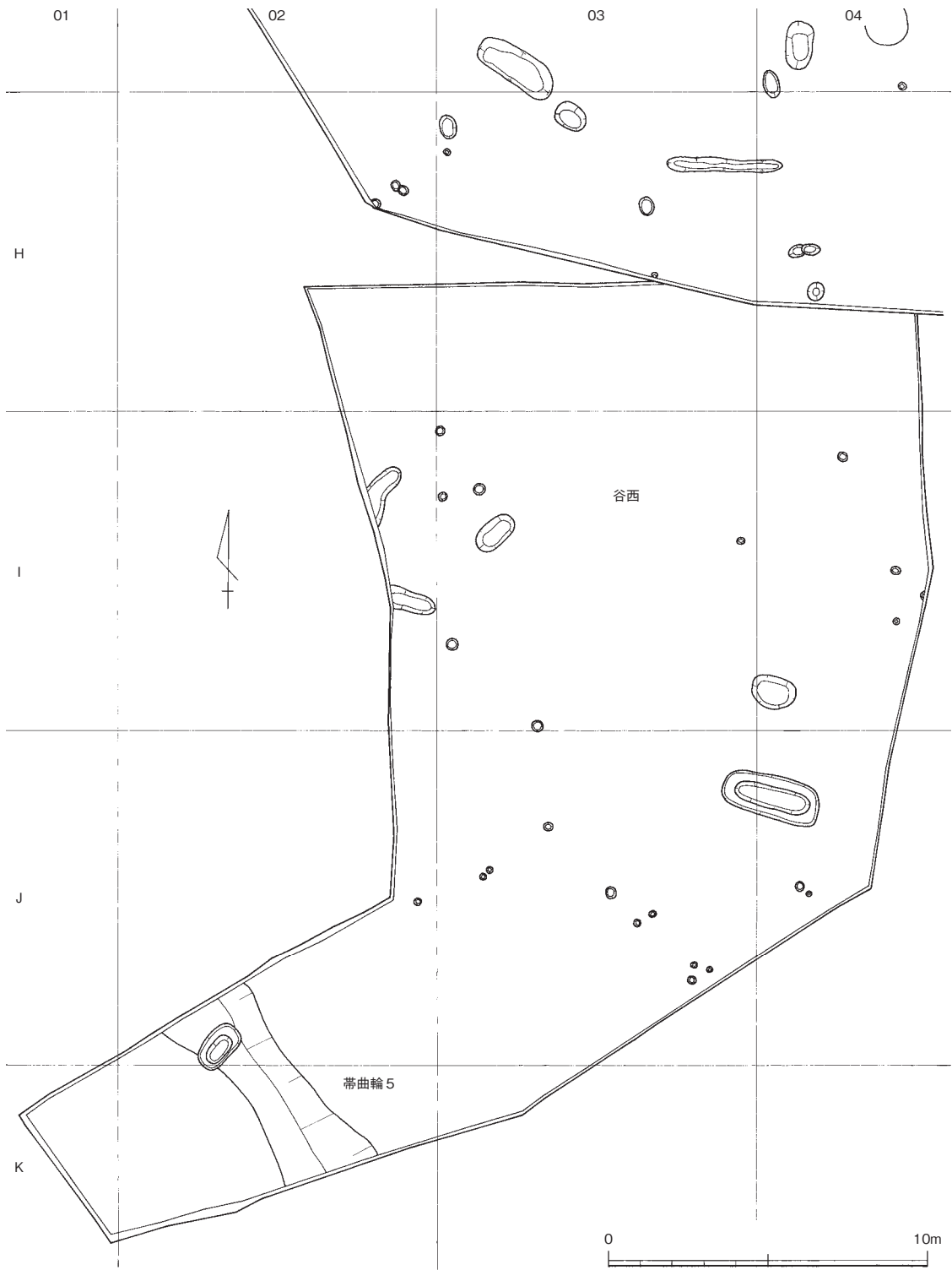
曲輪の北部では段状遺構 1 基と土坑 1 基、西端では横堀が検出されている。

段状遺構 5

遺構 (図版 84、写真図版 81) B-20 ブロック南西部から C-20 ブロック北西部にかけて検出された段状遺構である。SK79 の東側に隣接する。平面的には長方形をなすが、北側については、底部と帯曲輪 4 のレベルが一致し、検出できなかった。南側斜面をカットする形で掘られている。長軸方向で 6m を測り、カット面からの深さは 70cm を測る。帯曲輪 4 を検出した結果明らかとなった遺構で、遺構内の埋没状況を十分に観察することはできなかったが、南側から流れ込んだ土砂が堆積していた。平坦面上からは土師器鉢、須恵器鉢・甕が出土している。



第58図 西帯曲輪 1・2 帯曲輪 4 遺構配置図



第59図 谷西南端部・帯曲輪5遺構配置図

SK79

遺構（図版 84、写真図版 81） B-20 ブロック南西部から C-20 ブロック北西部にかけて検出された土坑である。段状遺構 5 の西側に隣接する。平面形は長方形をなし、南北方向に主軸をとる。主軸方向で 1.70m、その直交方向で 1.60m を測る。横断面は逆台形をなし、帯曲輪のレベルからの深さは 32 cm である。遺構内には、南側斜面側から流れ込んだ土砂が堆積していた。遺構に伴って遺物は出土していない。

横堀

遺構（図版 82・83、写真図版 81） C-22 ブロックから D-22 にかけて検出された堀である。南側は土採りにより破壊されている。帯曲輪 4 の平坦面に引き続いて、南北方向に堀が掘られている。断面はゆるい U 字形で、最大幅 3.2m、山側の肩からの深さは 1.2m である。埋土からは土師器皿 B・鍋、須恵器甕が出土している。

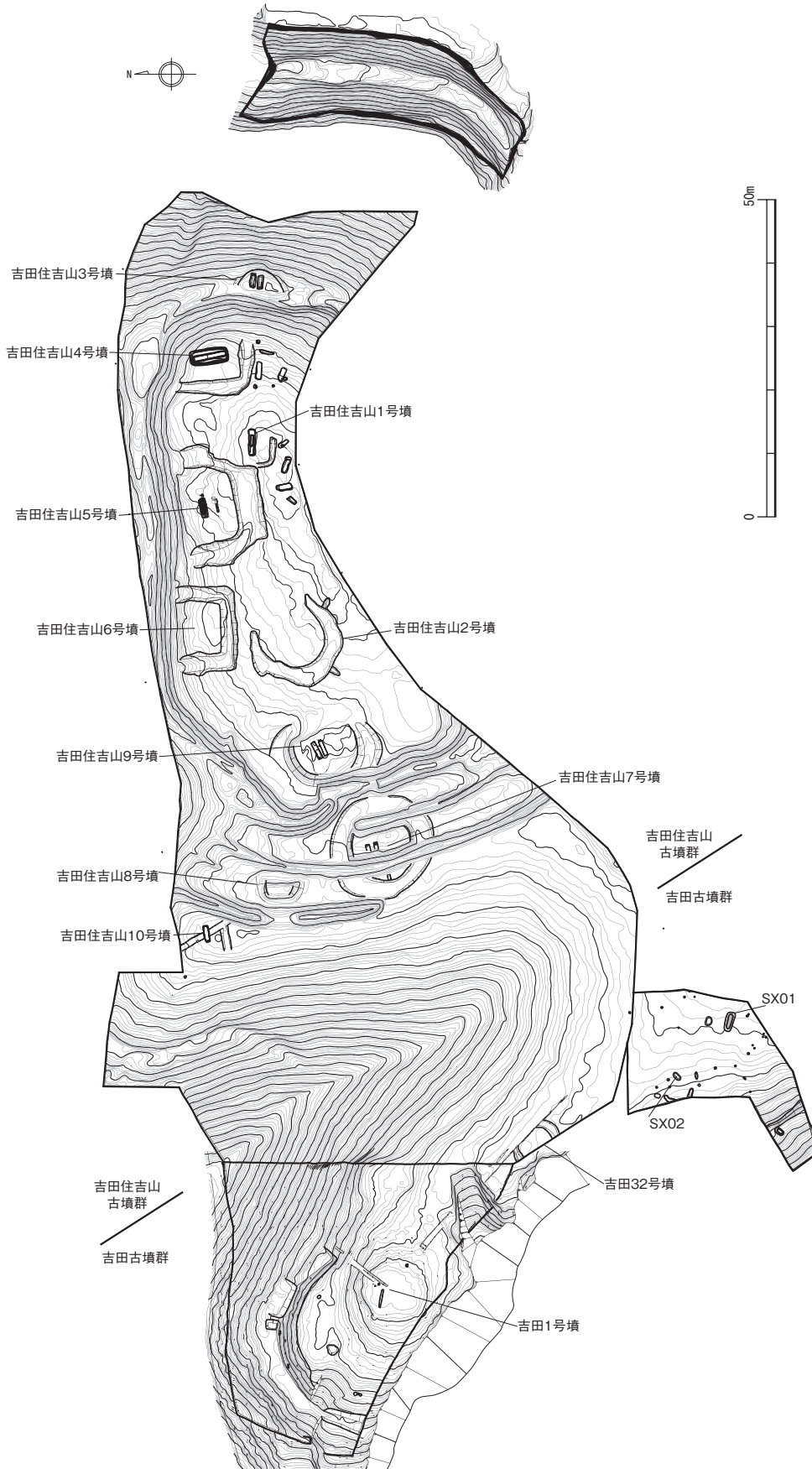
(14) 帯曲輪 5

谷西地区南端部の西側斜面に設けられた帯曲輪である。北側は土採りにより破壊され、南側は調査区外である。調査できたのは幅 6 m 程度である。

帯曲輪 5

遺構（図版 81） 谷西地区の尾根が南部に広がる部分の西側は斜面となっており、その斜面の途中の標高 91.5m の部分に平坦面を形成している。平坦面は山側の地山を削って形成され、平坦面の幅は 1～2 m、山側の壁の高さは約 1 m である。谷西南端部の最高所からは 3.8m 低い。平坦面上からは土師器皿・羽釜（395）が出土している。土採りにより分からなくなっているが、帯曲輪 4 に接続していたものと思われる。

遺物（図版 99、写真図版 114） 395 は土師器羽釜である。口縁部は内彎し、端部外面が窪んでいる。鏝は短い。



第60図 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群

第3節 古墳群の調査（吉田住吉山古墳群・吉田古墳群）

1. 古墳の概要

古墳は吉田住吉山遺跡の山城の下層から見つかっている。吉田1号墳を除いて、その痕跡は全くなかった。平成13年度の確認調査において、古墳時代の遺物が出土したことから古墳の存在が想定された。当初から古墳として調査を実施した吉田1号墳を除いて、吉田住吉山遺跡の城跡の調査途中に新たに確認したものである。したがって三木市教育委員会と古墳の名称を検討した。この結果、地形の主郭を中心とした谷（A-01-I-06を結ぶ谷）の東側を吉田住吉山古墳群、谷の西側を吉田古墳群と呼称した。吉田住吉山古墳群は今回の発掘調査で、すべて新たに発見された古墳であり、吉田住吉山1号墳～吉田住吉山10号墳と命名した。

吉田古墳群は今回調査を実施した吉田1号墳をはじめとして、発掘調査前までは31基の古墳で構成される古墳群であった。今回の発掘調査で新たに1基が見つかったことから吉田32号墳と命名した。

古墳時代以降、特に中世の山城の造成にあたって地形および古墳そのものが大きく改変されている。

2. 吉田住吉山古墳群(図版126～129)

吉田住吉古墳群は吉田古墳群の東側に谷を挟んで位置する。平成15年度の第2次調査で発掘調査を実施した。吉田住吉山遺跡の山城の主郭部分の下層から10基の古墳を検出した。このため古墳の改変が著しく、古墳の全容が明らかにできないものが多い。

吉田住吉山1号墳(図版130・131 写真図版139～141)

(1) 概要

丘陵の南東部の最高所に立地する。標高は96.6m～96.2mを測る。4号墳の南西部、5号墳の南東部のB-12・B-13・C-12・C-13ブロックに位置し、山城の主郭造成時に改変を受けていると考えられる。

(2) 墳丘

墳丘は表土直下で検出したため、盛土は遺存していない。周溝は南西側のみL字形に存在している。南側で幅1.0m、深さ0.15m、西側で幅0.7m、深さ0.1mを測る。北西に隣接する吉田住吉山5号墳の周溝は1号墳に規制されて一部屈曲している。周溝と埋葬施設を総合的に考えると南北7m程度、東西8m程度の方墳である。墳丘の南北軸は北から西へ2°振っている。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は墳丘のほぼ中央部に位置し、東西主軸を持つ木棺である。木棺の主軸は北から東へ88°振っている。墓壇は二段墓壇で、上段は長さ4.2m×幅1.1m、深さ0.3mの規模を測る。長軸方向の中央部分は幅60cm、深さ5cm程度下がっており、両側は幅10cm前後、深さ3cm前後の溝状の痕跡が残る。これは両側に根太をかまして蓋板を乗せていた痕跡であると考えられる。東端には粘土の塊が存在した。この中央部分からやや東に寄って木棺を安置するために下段の墓壇を掘り下げている。長さ1.8m×幅0.4m、深さ0.15mを測る。中央部に厚さ5cm前後の粘土床が残り、割竹木棺の痕跡が存在した。棺の規模は長さ1.7m×幅0.3mを測る。棺底の標高は96.2mを測り、東側がやや高い。赤色顔料が一面に残っていた。

棺内から遺物は出土しなかった。

第3章 吉田住吉山遺跡群の調査

(4) 小結

吉田住吉山 1 号墳は丘陵最高所に立地しており、埋葬施設を中心と仮定すると南北 7m 程度×東西 8m 程度の方墳である。埋葬施設は長さ 4.2m×幅 1.1m、深さ 0.3m の墓壇に赤色顔料を塗った長さ 1.7m×幅 0.3m の南北主軸の割竹形木棺であり、墓壇の長さいっぱいに蓋をかけている。木棺内からは遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、立地と墳形が方墳であること、および埋葬施設が割竹形木棺であることから古墳時代前期に位置付けられる。

吉田住吉山 2 号墳 (図版 132・133 写真図版 142～144)

(1) 概要

丘陵の中央部分の平坦地に立地している。標高は 96.4m～95.8m を測る。吉田住吉山 6 号墳の南側、吉田住吉山 9 号墳の東側の B-09・B-10・C-09・C-10・D-09・D-10 ブロックに位置している。盛土や埋葬施設は山城の主郭造成時の削平により検出できず、周溝のみ残存していた。

(2) 墳丘

墳丘は山城造成時に削平されているため、盛土は一切残存していない。地形に沿って北側に傾斜している。検出した遺構は周溝のみであり、北東部分では検出できなかった。直径 10.8m を測る円墳である。周溝の幅は西側部分で最大 3.3m、深さは最深 0.1m を測る。西側の周溝の底で須恵器の甕 401、1 個体分が小片になって散乱していた。このほかに中世の遺物が周溝部分から出土している。

(3) 埋葬施設

後世の削平により全く痕跡をとどめていない。

(4) 遺物

須恵器甕 401 が出土した。中型の短頸甕で体部はやや肩の張った球形である。口頸部は外反し口縁端部が上方に拡張し、外面に面を作る。体部はタタキ仕上げで調整し、内面の同心円当て具は底部と体部側面とでは大きく異なる。

(5) 小結

吉田住吉山 2 号墳は丘陵中央部に立地する直径 10.8m を測る円墳である。埋葬施設は削平により残っていなかった。立地と周溝から出土した須恵器から考えると古墳時代後期に位置付けられる。

吉田住吉山 3 号墳 (図版 134～138 写真図版 145～151)

(1) 概要

丘陵の東斜面に立地している。標高は 92.0m～91.4m を測る。4 号墳の南東部の B-15・B-16・C-15・D-16 ブロックに位置している。墳丘は山城の帯曲輪 1 の造成時に削平および改変を受けている。

(2) 墳丘

南北に周溝がかろうじて検出できたため、半円形墳を呈する。周溝は南側で幅 2.2m、深さ 0.1m を測り、北側は幅 3m 程度、深さ 0.3m を測る。墳丘の規模は西側で南北 9.0m、石棺中央部分で南北 8.0m を測る。東西方向は



第61図 3号墳の調査

5m程度に推定できる。盛土は棺から0.25m程度行っており、棺底部は基盤層である。墳丘の中心は南石棺の位置である。埋葬施設の山側に存在する溝は山城の曲輪に伴うものである。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は東西主軸の組合せ式箱式石棺が2基並列している。南側に位置するものを南石棺、北側に位置するものを北石棺と呼称した。南石棺は墳丘の中心に位置する。

I：南石棺

墓壙は長さ2.1m×幅0.83mの隅丸長方形である。蓋石は板状の6石で構成しており、いずれも長方形を基調としているが、東端の1石は頂を東側に向けた五角形である。中央の2石の蓋石は中央部で折れて石棺内に落ち込んでいた。東側部分を中心に被覆粘土の痕跡が残るが、蓋石には粘土の被覆は残存していなかった。

棺身は両側石とも板状の2石を用い、小口は板状の1石を用い、小口石は側石に挟まれている。内法は長さ1.56mで東小口の幅0.4m、西小口の幅0.35m、深さ0.3mを測る。棺底の標高は91.55mを測り、西側がやや高い。石棺構築時に粘土で棺材を固定した土層が明瞭である。石棺の主軸は北から西へ82°振っている。石棺内面および蓋石内面には赤色顔料が塗られている。石材は黒雲母花崗岩を用いており、脆い。

石棺内は開棺時には蓋石の隙間から土が流入しており、最大5cm程度の隙間が空いているのみであった。最下層の堆積土には赤色顔料が多量に含まれていた。

石棺内には遺骸および遺物は出土しなかった。掘形からも遺物は出土しなかった。

II：北石棺

墓壙は長さ2.2m×幅0.95mの隅丸長方形である。蓋石は板状の8石で構成しており、いずれも長方形を基調としている。蓋石の東側半分部分と石の隙間を中心に約5cmの被覆粘土の痕跡が残る。

棺身は両側石とも板状の3石を用い、小口は板状の1石を用い、小口石は側石に挟まれている。内法は長さ1.5m、幅0.23m、深さ0.2mを測る。棺底の標高は91.6mを測り、西側がやや高い。石棺構築時に粘土で棺材を固定した土層が明瞭である。石棺の主軸は北から西へ86°振っている。石棺内面および蓋石内面には赤色顔料が塗られている。石材は黒雲母花崗岩を用いており、脆い。

石棺内は開棺時には蓋石の隙間から土が流入しており、最大15cm程度の隙間が空いているのみであった。最下層の堆積土には赤色顔料が多量に含まれていた。

石棺内には遺骸および遺物は出土しなかった。掘形からも遺物は出土しなかった。



第62図 3号墳北石棺 棺材の取上げ

(4) 小結

吉田住吉山3号墳は丘陵の東斜面に立地するが、山城造成時の改変が大きく、墳形ははっきりしないが丘陵斜面の尾根を利用した半円形の墳丘が想定できる。埋葬施設は東西主軸の組合せ式箱式石棺を2基並列させている。両石棺内はともに赤色顔料を塗布している。遺骸は残っていないが、北石棺は西側からのみ水銀朱を検出したため頭部は西に推定できる。なお、遺物が出土しておらず、時期は不明である。

吉田住吉山4号墳(図版139・140 写真図版152～157・159・164)

(1)概要

丘陵の北東隅の先端に立地している。標高は96.0m～94.5m前後を測る。吉田住吉山1号墳の北東部、吉田住吉山5号墳の東側に位置している。A-13・A-14・B-13・B-14ブロックに位置する。墳丘北辺と東辺は帯曲輪1形成時に改変されている可能性が高い。特に墳丘の北東隅は丸く改変されている可能性が高い。なお、墳頂部から北東部斜面にかけては確認調査のトレンチで攪乱を受けていた。古墳上面には山城に伴う遺構が存在していた。



第63図 4号墳の調査

(2)墳丘

墳丘は南西部側が基盤層のみで作られており、東側から北側にかけて盛土を行っている。墓壇基底部分すべて基盤層部分まで掘り込んでいる。西側から南側にかけてL字形の丘陵を切る周溝を検出した。周溝は西側が長さ10.6m、幅2.5m～1.6mを測る。南側は長さ7.0m、幅2.6m～1.7mを測る。深さは西側で最大0.3m、南側で0.4mを測り、周溝底は南西隅が高く、西側は北に、南側は東に傾斜している。

墳丘は方墳で埋葬施設を中心に考えると、東西9.0m、南北11.0m程度の規模に復原できる。墳丘の南北軸は北から西へ5°振っている。

(3)埋葬施設

埋葬施設は、ほぼ中央部に位置し、南北主軸の割竹形木棺である。木棺の主軸は北から西へ11°振っている。墓壇は二段墓壇で、長さ6.0m×幅2.5m、深さ0.65mで、断面形は逆台形を呈する。基底部の中央に長さ5.0m×幅0.9m、深さ0.38mの断面形U字形の掘り込みを行う。この掘形に厚さ10cmの粘土質のシルト質極細砂の棺床を作り、長さ4.9m×直径0.6mの割竹形木棺の痕跡が残る。棺底の標高は94.95mを測り、北側が僅かに高い。木棺は痕跡のみで全く遺存していなかった。全面に赤色顔料(水銀朱)が残り、特に中央部分が濃く残っていた。このことから木棺内に塗布されていたものと考えられる。

棺内から遺骸や遺物は出土しなかった。

(4)小結

吉田住吉山4号墳は丘陵縁辺部に立地しており、埋葬施設を中心と仮定すると南北11.0m×東西9.0mを測る方墳である。埋葬施設は長さ6.0m×幅2.5m、深さ0.65mの墓壇に赤色顔料(水銀朱)を塗った長さ4.9m×直径0.6mの南北主軸の割竹形木棺である。木棺内からは遺物が出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、立地と墳形が方墳であること、および埋葬施設が割竹形木棺であることを考慮して古墳時代前期に位置付けられる。

吉田住吉山5号墳(図版141～144 写真図版158～164)

(1)概要

丘陵の北辺に立地している。標高は96.3m～95.1mを測る。吉田4号墳と5号墳の間、住吉山1号墳の北西に周溝を接して位置する。A-11・A-12・A-13・B-11・B-12ブロックに位置する。墳丘は山城の主郭形成時に削平されており、墳丘北辺も帯郭形成時に改変されている可能性が高い。古墳上面には山城に伴う遺構が存在していた。

(2) 墳丘

墳丘は東西 13.9m×南北 9.5m 以上の方形を呈し、地形と同様に北に向って傾斜している。墳丘の南北軸は北から西へ 9° 振っている。盛土は遺存していない。北側は自然地形の斜面を利用している。周溝の外側はコ字形ではなく、南西隅の外側は斜めになっており、南東隅は吉田住吉山 1 号墳の墳丘に規制されて、矩状を呈している。周溝は南側で幅 4.2m～4.5m、深さ 0.3m、東側で幅 3.5m 前後、深さ 0.15m、西側で幅 3.5m～4.0m、深さ 0.4m を測る。南西隅の幅は 2.8m、南東隅の幅は 1.7m と狭い。周溝底部の最高所は吉田住吉山 1 号墳と接している南東隅で、周溝底部は地形と同様に北に向って傾斜している。

周溝からは山城に伴う遺物が多量に出土したほか、南溝の東部において弥生時代後期の土器が出土している。

遺物は土師器鉢が出土している。土師器鉢 403 は口縁部のみで、内弯している。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は、ほぼ中央部に東西主軸の石棺が 2 基並列している。北側に位置するものを北石棺、南側に位置するものを南石棺と呼称した。後世の削平で北石棺の蓋石および南棺のほとんどが失われており、木の根が石棺の石に影響を及ぼしている。

I：北石棺

墓壇は長方形で、長さ 3.1m×南北 1.0m、検出面からの深さは 0.3m を測る。墓壇の東側寄りに組合せ式石棺を設置している。石棺の主軸は北から東へ 80° 振っている。石棺の蓋石は完全に削平されていたが、側石・小口石および底石は遺存していた。棺中央部は山城の柱穴により攪乱を受けている。石棺周囲には敷石を敷いている。側石は南側・北側ともに 3 石を用い、両側共に西端の 1 石が長大である。小口石は基本的には 1 石であるが、隙間を埋めるため小石を片側に埋めている。底石は小形の石をモザ



第64図 5号墳 北棺の調査

イク状に敷き詰めており、側石との隙間などは粘土を充填している。側石・東小口石ともに 10cm～15cm 前後の厚みのある板石で、西小口石と底石は 5cm 前後と薄い。石材はシルト岩を使用している。内法は長さ 1.95m×幅 0.5m～0.45m、深さ 0.15m を測る。棺底の標高は 96.0m～96.1m を測り、東側がやや高い。

石棺内からは赤色顔料の小さな塊が出土した以外は遺骸・遺物ともに出土しなかった。

墓壇内の西小口部分の石棺外には土師器の壺を埋置している。土器埋置部分のみ墓壇底より 5cm 掘り下がっている。

墓壇内から出土した土師器直口壺 402 は球形の体部で、底部は尖り気味の丸底である。口頸部は直線的に外傾し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。体部外面はタタキ調整後、下半部は縦方向の細かいミガキを、中央部は横方向の細かいミガキを行う。上半部は摩滅が著しく、かろうじて縦ハケ調整が残る。内面は横ハケ調整を行う。口頸部は摩滅が著しいが縦方向のミガキを行う。

II：南石棺

南石棺は大きく削平を受けており、かろうじて南側石と東小口石部分の最下部のみを検出した。墓壇は石棺材が残存している部分のみ存在しており、石の形に合わせた掘り込みを行っている。石棺は南側石の東側部分の 3 石が 2.05m、東小口部分の 1 石が 0.45m を測る。小口部分は外側にもう 1 石存在し、

二重構造である。石棺の全長および底石の有無は不明である。石棺の主軸は北から東へ78°振っている。石材は砂岩を使用している。

(4)小結

吉田住吉山5号墳は丘陵縁辺に立地する東西13.9m×南北9.5m以上の方墳で、埋葬施設は東西主軸の2基の組合せ式石棺である。北石棺の墓壇の西小口側には土師器壺を埋置していた。この土師器壺は布留式に位置付けられることから、吉田住吉山5号墳は古墳時代前期に位置付けられる。古墳時代前期の墓壇内に土器を埋置しているもののうち、遺骸が遺存している例では土器を脚部側に埋置している。このため、吉田住吉山5号墳北棺は頭部が東側に位置していたことが推測できる。

吉田住吉山6号墳(図版145・146 写真図版164~166)

(1)概要

丘陵の北辺に立地している。標高は95.6m~94.3m前後を測る。2号墳の北側、5号墳の西側のA-09・A-10・B-09・B-10ブロックに位置している。墳丘は山城の主郭形成時に削平されており、墳丘北辺も帯郭形成時に改変されている可能性が高い。なお、西溝は確認調査のトレンチで攪乱を受けていた。古墳上面には山城に伴う遺構が存在していた。

(2)墳丘

墳丘は東西9.5m×南北8m以上の方形を呈し、地形と同様に北に向って傾斜している。墳丘の南北軸は北から西へ2°振っている。盛土は墳丘南部の地形高所において0.15m遺存していた。北側は自然地形の斜面を利用している。周溝はコ字形を呈し、南側で幅2.5m、深さ0.4m、東側で幅2.4m~2.6m、深さ0.2m、西側で幅2.7m~3.0m、深さ0.2mを測る。周溝底部は地形と同様に北に向って傾斜している。

周溝からは古墳時代の須恵器坏身・高坏・壺・甕のほかの中世の土器も出土している。

須恵器坏身404は底部を欠く。受け部は水平に短く伸びる。立ち上がりは内傾し、口縁端部は内面が内傾し段を作る。右回転ロクロである。須恵器無蓋高坏405は坏底部から口縁部にかけては丸く作り、口縁部は直線的に外方に開く。脚部は欠けている。左回転ロクロである。

須恵器壺406は肩の張った体部に外傾する口頸部を持つ。体部の最大径部に沈線を巡らし、肩部にはへら記号様の沈線が描かれる。頸部はカキ目仕上げを行い、口縁端部は肥厚して丸く作る。須恵器甕407はやや肩の張った球形の体部に直立気味に外反する頸部を持つ。体部外面は格子タタキで仕上げ、内面は同心円当具の痕跡を残すが底部付近と中央部付近はナゲ調整を行う。頸部は中央部に鋭い突帯を付け、直下に櫛描波状文を巡らす。口縁端部は丸く作り、直下に突帯を巡らす。

(3)埋葬施設

埋葬施設は後世の削平のため検出できなかった。

(4)小結

吉田住吉山6号墳は丘陵縁辺に立地する東西9.5m×南北8m以上の方墳で、埋葬施設は削平により遺存しない。周溝から出土した須恵器は甕407の5世紀後半から無蓋高坏405の7世紀前半までと幅があるが、隣の5号墳との関係や遺物の大きさから考えて、吉田住吉山6号墳は5世紀後半に位置付けたい。

吉田住吉山7号墳(図版147～153 写真図版167～180)

(1) 概要

丘陵西側の平坦地から斜面にかけての傾斜変換点に立地している。標高は95.9m～94.7mを測る。9号墳の南西側、8号墳の南東側のC-06・D-06・D-07・E-06・E-07ブロックに位置している。墳丘の東側は山城の土塁1と空堀4で、中心部は土塁2で、西側は空堀2と土塁3で改変および削平を受けている。

(2) 墳丘

土塁2に存在する南棺より僅か南側に中心を持つ直径11.3mの円墳である。空堀2や空堀4の掘削により墳丘の一部や埋葬施設の一部は失われていた。墳丘は旧表土に約30cm明褐色系の盛土を行っている。周溝は北側で幅3.0m、深さ0.6m、南側で幅3.6m、深さ0.5m、西側で幅3.0m、深さ0.7m、東側で幅2.3m、深さ0.2mを測る。

墳丘からは須恵器坏蓋、周溝からは須恵器蓋坏・短頸壺・壺・提瓶・甕が出土した。

墳丘から出土した遺物には須恵器坏蓋がある。須恵器坏蓋415は天井部が扁平で、口縁端部には内傾する段を持つ。天井部と口縁部の境は浅い沈線で区切る。左回転ロクロで、ケズリ残しのある天井部には板痕跡が残る。

北側から東側にかけての周溝からは須恵器蓋坏・短頸壺・壺・甕が出土した。須恵器坏蓋417・419・420～423は口縁端部内面に段を作る。417・419・420は天井部がやや丸く、421～423はやや扁平である。天井部と口縁部の境は417・420・421が僅かな稜を作り、419・422・423は沈線を巡らす。417・420・421・423は右回転ロクロ、419・422は左回転ロクロである。418・421～423は内面に同心円置台痕跡、420は布目痕跡が残る。このうち421は白色の粘土紐の痕跡が外面および断面に残っており、粘土紐巻上げの製作技法が復原できる良好な資料である。

坏身416・418・424～426は底部がやや丸く、回転ケズリを行う。受け部は418・426が水平に短く伸び、416・424・425は外上方に短く伸びる。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く仕上げる。424～426は右回転ロクロ、418は左回転ロクロである。418・424・426には内面に同心円置台痕跡が残る。

短頸壺427は肩の張った扁球形の体部に底部は回転ケズリを行う。肩部にはカキ目調整を行い、沈線を1条巡らす。口頸部は欠損している。右回転ロクロである。壺428は球形の体部に短く直立する口頸部を持つがほとんど残っていない。体部はタタキ仕上げで、底部はカキ目調整を行う。頸部は櫛列点文を施文する。甕429は肩の張った体部に外反する短い口頸部を持つ。口縁端部は上下に拡張し面を作り、下方に突帯を付ける。

南側の周溝からは須恵器蓋坏・短頸壺が出土した。須恵器坏蓋430・431は口縁端部内面に段を作る。430は天井部がやや丸く、431は扁平である。天井部と口縁部の境は430が僅かな段を作り、431は明瞭な境がない。430は右回転ロクロ、431は左回転ロクロである。短頸壺432・433は扁球形の体部に短く内傾する口頸部が付く。口縁端部は丸く仕上げる。433は体部から口頸部までカキ目調整を行う。432は右回転ロクロで、内面には同心円置台痕跡が残る。

西側の周溝からは須恵器蓋坏・壺・提瓶が出土した。須恵器坏蓋434～436は口縁端部内面に段を作る。436は天井部がやや丸く、434・435はやや扁平である。天井部と口縁部の境は434が段を作り、434・435は明瞭な境がない。434は右回転ロクロ、435・436は左回転ロクロである。435・436には内面に同心円置台痕跡が残る。

坏身 437~443 は底部がやや丸く、回転ケズリを行う。受け部は 437・438・440~443 が水平に短く伸び、439 は外上方に短く伸びる。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く仕上げる。439~442 は右回転ロクロ、443 は左回転ロクロである。437~439 には内面に同心円置台痕跡が残り、440・442 には置台痕跡が残る。443 の内面には粘土滓が付着しており、受け部には重ね焼の蓋が融着している。439 には赤色顔料が付着している。

壺 444 は底部と口頸部を欠く。体部の器壁は厚く、下半部は回転ケズリで仕上げる。右回転ロクロである。提瓶 445 の体部成形時の底部は平坦であり、上方を丸く作り、円板で閉塞する。体部はカキ目調整を行う。肩部の把手は環状で一對である。体部の扁平率は 62.5% である。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は墳丘の北側に寄っており、東西方向に主軸を持ち並列する 2 基の木棺を確認した。南側に位置するものを南棺、北側に位置するものを北棺と呼称した。南棺・北棺とも墓壇の底は旧表土以下に掘り込んでいる。

I : 南棺

南棺は中心からやや北側に位置する木棺であり、空堀 2 により西半分が切られている。主軸は北から東に 79° 振っている。

墓壇は長さ 1.23m 以上×幅 0.9m を測る。木棺は腐朽して遺存していなかったが、土層の違いから棺痕跡が判断できた。長さ 1.0m 以上×幅 0.65m を測る。棺底の標高は 95.70m を測る。

木棺内からは須恵器蓋坏と玉類が出土した。

木棺内の東端の中央部分から須恵器蓋坏 2 組が並んで出土した。出土位置から枕と考えられる。玉類は須恵器蓋坏の西側 20cm 以内からまとまって出土しているため、着装した状態が想定できる。

以上のような位置関係から考えて須恵器蓋坏を枕とし、頸部に頸飾りを着装していたと考えられる。須恵器の蓋坏には枕とした蓋 408 と身 409、蓋 410 と身 411 の 2 組と棺内からの坏身 412 の 1 点がある。坏蓋 408・410 は天井部がやや丸く、沈線で天井部と口縁部の境を作る。口縁端部には内傾する段を作る。408 は右回転ロクロ、410 は左回転ロクロで、いずれも内面に同心円置台痕跡が残る。坏身 409・411 は底部が歪んでおり、受け部が外上方に短く伸びる。立ち上がりは内傾し、409 は薄く仕上げ、411 は口縁端部に内傾する段を作る。412 は底部が丸く、受け部は外上方に短く伸び、立ち上がりは内傾する。口縁端部は丸く仕上げる。409・411 は右回転ロクロ、412 は左回転ロクロで、409 は内面に同心円置台痕跡が、412 は無文置台痕跡が残る。

玉には埋木製の有稜棗玉 6 点とガラス製の小玉 1 点がある。有稜棗玉 J1~J6 は断面形が円形で、中央部に稜を作る。いずれもにぶい黒色を呈しており、表面には木目が認められる。平滑に仕上げられているが、J6 には節が残る。J2 は縦半分が、J3 は約 1/3 を欠損しているほか、J1 は縦半分に割れている。穿孔は両面穿孔である。ガラス製小玉 J7 は水色を呈する。

II : 北棺

北棺は北半部の中心に位置する木棺であり、空堀 2 により西半分が切られている。主軸は北から東に 77° 振っている。

墓壇は長さ 0.85m 以上×幅 0.7m を測る。木棺は腐朽して遺存していなかったが、土層の違いから棺痕跡が判断できた。長さ 0.85m 以上×幅 0.53m を測る。棺底の標高は 95.65m を測る。

木棺内の東端部分には須恵器蓋坏が蓋を北側、身を南側にし、いずれも口縁部を下にして、接して出

土した。身の南東部分には底面より13cm浮いて直径15cmの赤色顔料の丸い痕跡が存在した。以上のような位置関係から考えると須恵器蓋坏を枕とし、頭部に塗られた赤色顔料の痕跡が残っていたと考えられる。

頭部南側の棺外からは鉄鍬の塊が鍬身を東に向けて出土した。北棺からは枕とした須恵器蓋坏と棺外から鉄鍬が出土した。

須恵器蓋坏には蓋と身がある。坏蓋 413 は天井部がやや丸く、口縁部と天井部の境には沈線を巡らす。口縁端部は外方に開き内面には内傾する段を持つ。坏身 414 は底部が丸く、受け部は外上方に短く伸び、立ち上がりは内傾する。口縁端部は内側のやや下がった所に、段の痕跡を残す。いずれも右回転クランクで、内面に同心円置台痕跡が残る。

鉄鍬M601～M606には無頸鍬と短頸鍬と長頸鍬がある。短頸鍬M601は頸部を欠損しており、鍬身は長さ4.3cm、幅2.8cmの長三角で、重拵である。鍬身中央部には0.3cmの穿孔がある。短頸鍬M602・M603は頸部を欠損している。鍬身長4.2cm・4.8cmで腸拵がある。長頸鍬M604～M606は鍬身長9.1cm～8.2cm、頸部長6.6cm～6.0cmを測る。茎部は0.5cm程度残り、欠損しているが、木質が残っている。

(5) 小結

吉田住吉山7号墳は丘陵西側傾斜変換点に立地している直径11.3mの円墳である。埋葬施設は東西に主軸を持つ木棺2基で、頭位は須恵器の枕から考えて東である。吉田住吉山7号墳の時期は枕に使われていた須恵器から6世紀中葉に位置付けられる。

吉田住吉山8号墳(図版154 写真図版181)

(1) 概要

丘陵西側の平坦地から斜面にかけての傾斜変換点に立地している。標高は95.4m～94.6mを測る。7号墳の北西側、10号墳の南東側のB-05・B-06・C-05・C-06ブロックに位置している。墳丘の東側は山城の空堀2で、中心部は土塁3で、西側は空堀3で改変および削平を受けている。

(2) 墳丘

空堀2に中心がある円墳である。かろうじて墳丘の一部が土塁3に残っている。推定直径7.5mである。墳丘の盛土は0.6m程度あるが、木の根の攪乱で変色している。周溝は南側に残っているほか、東側に僅かに残っていた。北側は周溝が存在していない。南側の周溝は幅2.7m、深さ0.4mを測る。東側は1.8m、深さ0.3mを測る。

遺物は周溝から須恵器が出土しているが図化できなかった。

(3) 埋葬施設

埋葬施設は空堀2と木の根の影響で検出できなかった。

(4) 小結

吉田住吉山8号墳は丘陵の傾斜変換点に立地する直径7.5mを測る円墳である。埋葬施設は削平により残っていなかった。立地と周溝から出土した須恵器から古墳時代後期に位置付けられる。

吉田住吉山9号墳(図版 155~162 写真図版 182~198)

(1) 概要

丘陵の平坦地に立地している。標高は96.1m~94.9mを測る。2号墳の西側、7号墳の北西側のC-07・C-08・D-07・D-08ブロックに位置している。墳丘の東側は山城の主郭の造成で、中央部は土塁1の造成で、西側は空堀1により改変および削平を受けている。

(2) 墳丘

土塁1にある南棺を中心とした直径12.6mの円墳である。主郭の成形と空堀1の掘削のため、東側部分と西側部分の墳丘は失われていた。墳丘は旧表土に中心部分で約10cm、北側の墳裾部分で約20cmの黄褐色系の盛土を行っている。周溝は南側と北東側の一部で検出した。南側の周溝は幅約3.5m、深さ0.35m、北東側の周溝は幅約3m、深さ0.3mを測る。

墳丘から須恵器蓋坏・短頸壺と鉄器の刀子と鍬が、周溝から須恵器蓋坏・短頸壺・広口壺・直口壺・平底瓶・横瓶・短頸甕が出土した。

墳丘から出土した須恵器には蓋坏・短頸壺がある。須恵器坏蓋487は天井部が扁平であり、天井部と口縁部の境は僅かな稜を作る。口縁端部内面には段を作る。左回転ロクロで、天井部に布目痕跡が付着する。内面には同心円置台痕跡が残る。坏身488・489は底部がやや扁平で、回転ケズリを行う。受け部は489が水平に短く伸び、488は外上方に短く伸びる。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く仕上げる。いずれも左回転ロクロである。488の底部のケズリ残し部分には板痕跡が残り、内面には同心円置台痕跡が残る。短頸壺490は肩の張った体部に短く内傾する口頸部が付く。口縁端部は丸く仕上げる。右回転ロクロである。肩部には直径約10.5cmの蓋の重ね焼痕跡が残る。

墳丘から出土した鉄器には刀子と鍬がある。刀子M611は全長11.2cm以上、刀身長7.4cm以上、茎長3.8cmを測る。刀身部は刃元幅1.1cm、厚0.4cmを測る。関は両関で茎は幅1.0cm、厚0.5cmを測り、関部に鹿角様の木質とは異なる物質が付着する。柄には木質が遺存する。鍬M612~M614はいずれも頸部あるいは茎部を欠損している。短頸鍬で鍬身は腸挟を持つ。鍬身は5.7cm~6.3cmを測る。M612は頸部長4.2cmを測り、関部で屈折している。鍬身には斜めに木質が付着する。

北西側から北側にかけての周溝からは須恵器蓋坏・短頸壺・広口壺・直口壺・平底瓶・横瓶・短頸甕が出土した。須恵器坏蓋476・477は口縁端部内面に段を作る。476は天井部がやや丸く、477は扁平である。天井部と口縁部の境は476が稜を作り、477は明瞭な境がない。いずれも右回転ロクロで、同心円置台痕跡が残る。坏身478は底部の回転ケズリと体部の境で稜を作る。受け部は水平に短く伸び、立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く仕上げる。左回転ロクロである。

短頸壺479は肩の張った扁球形の体部に底部は回転ケズリを行う。口頸部を欠く。右回転ロクロで、無文置台痕跡が残る。広口壺480・481は肩の張った球形の体部に短く外反する口頸部が付く。480は口縁端部を拡張し、丸く収める。481は口縁端部を肥厚させ、段を作る。480は体部から頸部にかけてカキ目調整で仕上げる。480は左回転ロクロである。直口壺482は丸底気味の平底の壺で、体部は肩に稜を作る。口頸部を欠いている。体部は回転ナデ成形で、底部は回転ケズリを行う。左回転ロクロで、無文置台痕跡が残る。

平底瓶483は肩部が丸く、体部はカキ目調整を行う。平底を呈し、手持ちケズリを行う。内面にはカキ目調整痕跡が残る。口頸部を欠いている。横瓶484の体部成形時の底部は平坦であり、上方を丸く作り円板で閉塞する。体部は回転成形を行い、カキ目調整で仕上げる。口頸部は頸部が短く外反し、口縁

端部は拡張して丸く仕上げる。

短頸甕 485・486 は中形の甕である。485 の体部は肩が張らず、頸部は外傾する。口縁端部は上下に拡張し、丸い面を作る。486 の体部は肩が張り、頸部は外反する。口縁端部は上下に拡張して丸く仕上げ、下端に突帯を巡らす。

(3) 埋葬施設

9号墳の埋葬施設は東西方向に主軸を持つ2基の木棺が並列する。南側に位置するものを南棺、北側に位置するものを北棺と呼称した。また南棺と北棺の間からは須恵器が集中して出土しており、南北の埋葬施設の小口部分の遺物である須恵器の出土状況や墳丘が中世に削平されていたことから考えて中央部分にもう1基木棺が存在していた可能性があり、中央棺と呼称した。南棺・北棺とも墓壇の底は旧表土以下に掘り込んでいる。古墳の全ての盛土を除去した後、北棺の北西方向で検出した木棺を下層棺と呼称した。

I：南棺

南棺は墳丘の中心に位置する木棺である。主軸は北から東に66°振っている。墓壇は長さ2.78m×幅0.6mを測る。木棺は腐朽して遺存していなかったが、土層の違いから棺痕跡が確認できた。長さ2.45m×幅0.6mを測る。棺底の標高は96.1mを測る。

棺内の東端から30cmの場所から水晶製の切子玉が出土した。また、東小口の棺外には須恵器を副葬している。切子玉の出土位置が頸部であるとする東側が頭位である。

棺内からは玉が出土した。玉J8は水晶製の切子玉で断面形状は六角形で、穿孔は片面である。にぶい黒色を呈する。

南棺東小口からは須恵器蓋坏2組、無蓋高坏2点と提瓶1点が出土した。下部には蓋坏を置き、上部には提瓶を中心に両側に無蓋高坏を置いている。提瓶と無蓋高坏は口縁部が棺内側に傾いている。

須恵器坏蓋446・448は天井部がやや丸く、天井部と口縁部の境は僅かな稜を作る。口縁端部内面には段を作る。須恵器坏身447・449は底部がやや丸く、回転ケズリを行う。受け部は外上方に短く伸びる。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く仕上げる。446～449はいずれも右回転ロクロで、内面に同心円置台痕跡を残す。

須恵器無蓋高坏450・451は坏体部に櫛描列点文を施文する。脚部は長脚2段で450は脚部に三方向の未貫通の線状透かしを持つ。451は三方に頂部が鋭角の直角三角形の透かしをあげ、上段のみ面取りを行う。脚部はカキ目調整を行う。須恵器提瓶452の体部成形時の底部は平坦であり、上方を丸く作り、円板で閉塞する。体部はカキ目調整を行う。口頸部は短く外反し、口縁端部は拡張して外方に段を作る。肩部の把手は環状で一对である。体部の扁平率は62.5%である。

II：北棺

北棺は南棺の北側に位置する木棺である。主軸は北から東に62°振っている。墓壇は長さ2.9m×幅0.7mを測る。木棺は腐朽して遺存していなかったが、土層の違いから棺痕跡が判断できた。長さ2.25m×幅0.7mを測る。棺底の標高は95.9mを測る。

棺内からは鉄器が出土したほか、南東隅部分に赤色顔料の広がりを確認した。鉄器はいずれも棺底から出土した。東半部からは刀子3点、西半部から鎌1点が出土した。刀子M607・M608はいずれも柄部を東に、刃部が西に向いた状態で出土した。刀子M609は刃部の中央で二つに折られた状態で重なって出土した。鎌M610は鎌身部を北東に茎部を南西に向いた状態で出土した。

第3章 吉田住吉山遺跡群の調査

棺内に柄をつけた状態で副葬しているとすれば、80cm以内であると考えられる。赤色顔料は南東隅部分の南北30cm、東西25cmの範囲の棺底部に広がっていた。

刀子 M607 は全長 7.8cm、刀身長 3.8cm、茎長 4.0cm を測る。刀身部は刃元幅 1.3cm、厚 0.3cm を測る。関は両関で茎は幅 0.8cm、厚 0.4cm を測り、柄の木質が遺存する。刀子 M608 は全長 14.9cm、刀身長 8.3cm、茎長 6.6cm を測る。刀身部は刃元幅 1.7cm、厚 0.5cm を測る。関は両関で茎は幅 1.2cm、厚 0.6cm を測り、柄の木質が遺存する。刀子 M609 は茎尻が大きく湾曲している。鋒を欠き、刃部の半分ほどは遺存状況が悪い。全長 16.8cm 以上、刀身長 13.2cm 以上、茎長 5.0cm を測る。刀身部は刃元幅 1.1cm、厚 0.4cm を測る。関部分には鑷が存在するが、刀身の遺存状況が悪いため、関の形状は不明である。茎は幅 1.0cm、厚 0.4cm を測り、柄の木質が遺存する。

鏃 M610 は三角形鏃で全長 12.7cm、鏃身長 7.7cm、茎長 5.0cm を測る。鏃身部は最大幅 3.4cm、厚 0.3cm を測る。茎部は幅 0.6cm、厚 0.4cm を測り、縦方向に柄の木質が遺存し、横および斜め方向に巻かれた樹皮が認められる。

北棺東小口からは、須恵器蓋坏 5 組、坏身 1 点、高坏蓋 1 点、壺 1 点の 13 点が出土した。南側部分では蓋坏 3 組と坏身 1 点、中央部分では高坏蓋と蓋坏 1 組、北側部分では蓋坏 1 組とその上に壺を置いている。

須恵器坏蓋 453・455・457・459・461 は口縁端部内面に段を作る。453・455・461 は天井部がやや丸く、457・459 はやや扁平である。天井部と口縁部の境は 457・459・461 が僅かな稜を作り、453・455 は明瞭な境がない。いずれも右回転ロクロで、455・457・459・461 の内面には同心円置台痕跡が残る。457 には赤色顔料が付着している。

坏身 454・456・458・460・462・463 は底部がやや丸く、回転ケズリを行う。受け部は水平に短く伸びる。立ち上がりは内傾し、口縁端部は 456・458・460・462 が丸く仕上げ、454 は内面に段の痕跡が残る。463 は段を作る。いずれも右回転ロクロで、454 の内面には布目置台痕跡が、そのほかの内面には同心円置台痕跡が残る。463 には赤色顔料が付着している。

高坏蓋 464 は天井部が丸く、天井部と口縁部の境には沈線を巡らす。口縁部は大きく開き、口縁端部内面に段を作る。天井部外面は回転ケズリを行い、中央部の窪んだ偏平な摘みを貼り付ける。天井部の自然釉の状況から窯詰の状況が復原できる。赤色顔料が付着している。

広口壺 465 は肩の張った扁球形の体部に短く外傾する口頸部が付く。口縁端部は拡張し、丸い面を作る。右回転ロクロで、底部には板痕跡が残る。

北棺西小口からは、須恵器蓋坏が 3 組出土した。北側からは 2 組上下に重なって出土し、南側からは 1 組出土した。

須恵器坏蓋 466・468・470 は口縁端部内面に段を作る。470 は天井部がやや丸く、466・468 はやや扁平である。天井部と口縁部の境は 468 が僅かな稜を作り、466・470 は微かな沈線を巡らす。470 は口縁部が短い。いずれも右回転ロクロで、470 の内面には同心円置台痕跡が残る。いずれも赤色顔料が付着している。

須恵器坏身 467・469・471 は底部がやや丸く、回転ケ



第65図 9号墳 北棺の調査

ズリを行う。受け部は水平に短く伸びる。立ち上がりは内傾し、口縁端部は471が丸く仕上げ、469は内面に段の痕跡が残り、467は段を作る。いずれも右回転ロクロで、469・471の内面には同心円置台痕跡が残る。469には赤色顔料が付着している。

Ⅲ：中央棺

南棺と北棺の中央部分から複数の須恵器がまとめて出土しており、別の棺の存在を想定したが、確認できなかったため棺の規模は不明である。もし埋葬施設で東小口部に須恵器を埋置したと仮定するとやや西側に偏って存在していたと考えられる。須恵器のレベルは僅かに下である。

須恵器坏蓋472・474・475と坏身473がある。472・473は組合せで出土している。

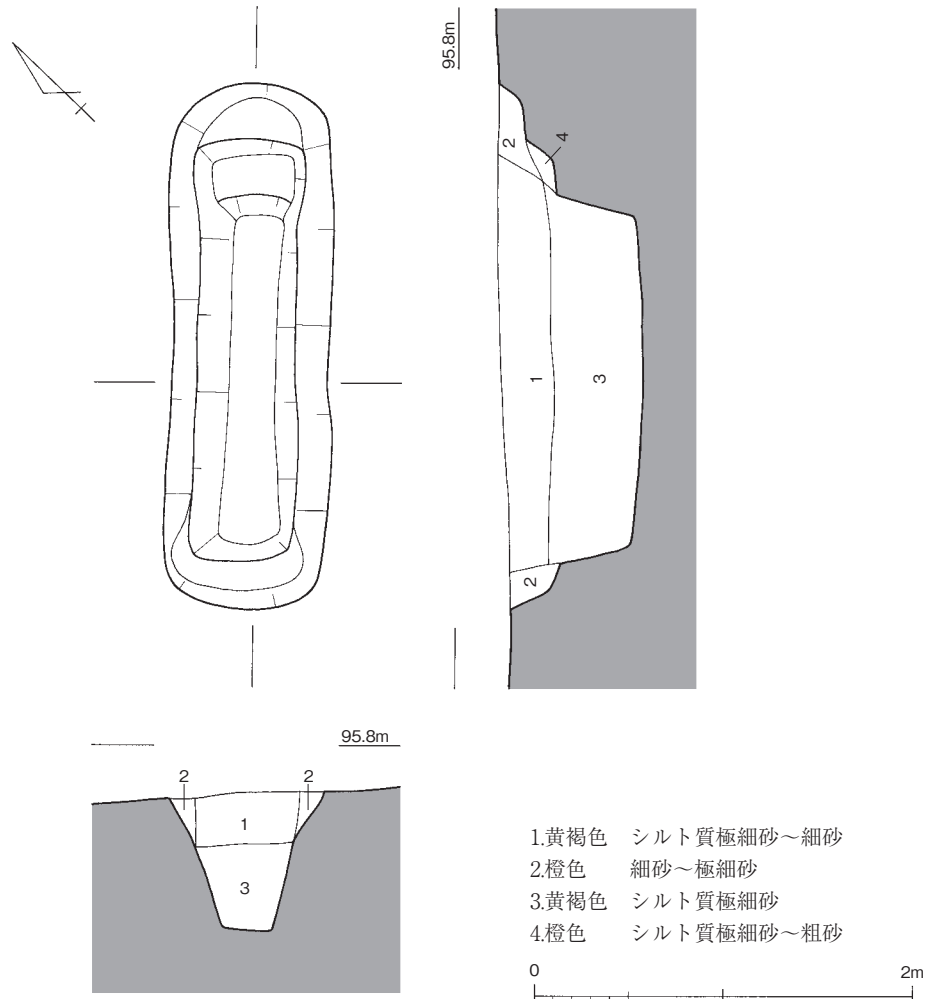
須恵器坏蓋472・474・475は口縁端部内面に段を作る。天井部はやや扁平で、天井部と口縁部の境には僅かな段を作る。いずれも左回転ロクロで、472・474の内面には同心円置台痕跡が残る。

須恵器坏蓋473は底部がやや丸く、回転ケズリを行う。受け部はやや上方に短く伸びる。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く仕上げる。左回転ロクロで、内面には同心円置台痕跡が残る。

Ⅳ：下層棺

すべての盛土を撤去した後、北棺の北西部分で検出した埋葬施設で、東西主軸の木棺直葬である。墓壙は長さ2.75m×幅0.85m、深さ0.75mを測る。棺痕跡は検出面で長さ2.2m×幅0.55m、底部で長さ1.7m×幅0.25mを測る。主軸は北から東へ46°振っている。

遺物は埋土から土師器碗が出土したのみである。



第66図 吉田住吉山9号墳 下層棺

第3章 吉田住吉山遺跡群の調査

遺物

土師器鉢 491 は口縁部から体部の破片で直線的に開く。

(4)小結

吉田住吉山 9 号墳は丘陵西側傾斜変換点に立地している直径 12.6m の円墳である。埋葬施設は東西に主軸を持つ木棺 2 基で、頭位は遺物の出土状況から東である。小口部分の棺外には須恵器が副葬されていた。北棺の東小口部分の須恵器および西小口部分の須恵器には赤色顔料が付着していることから、木棺に赤色顔料が塗布されていた可能性が高い。時期は須恵器から 6 世紀中葉に位置付けられる。

吉田住吉山 10 号墳 (図版 163 写真図版 199)

(1)概要

丘陵の北西隅の先端に立地している。標高は 94.5m～94.0m を測る。吉田住吉山 8 号墳の北西部の A-04・A-05・B-04・B-05 ブロックに位置している。墳丘の北辺の一部は調査区外で、墳丘は山城の土塁 5 により、東辺は空堀 3 造成時に改変および削平されている可能性が高い。なお、墳丘中心部は確認調査のトレンチにより攪乱を受けていた。

(2)墳丘

墳丘は表土直下で検出したため山城の造成で削平されている可能性が高い。盛土は存在していない。斜面に立地しているため、南側の周溝と埋葬施設しか検出できなかった。

埋葬施設を中心に復原すると南北 5m×東西 7m 程度の方墳となる。南周溝は幅 1.2m、深さ 0.15m を測る。現状の墳丘の高さは 0.5m 程度である。墳丘および周溝からは遺物は出土しなかった。

(3)埋葬施設

埋葬施設は東西主軸の木棺直葬である。墓壇は長さ 2.65m×幅 0.7m、深さ 0.4m を測る。棺痕跡は長さ 1.9m×幅 0.7m で、西側に偏っている。主軸は北から東へ 81° 振っている。

埋葬施設から遺物は出土していない。

(4)小結

吉田住吉山 10 号墳は丘陵先端部に立地する南北 5m×東西 7m 程度の方墳である。埋葬施設は東西主軸の木棺直葬である。遺物が出土していないため古墳の時期は不明であるが、立地から古墳時代前期と考えられる。

吉田住吉山古墳群の遺物 (写真図版 200)

吉田住吉山古墳群は中世の山城により、大きく改変されていることは先に述べた。ここでは本来古墳に伴っていたと考えられる遺物であるが、古墳には伴わず遊離して出土した遺物のうちから主要なものを取り上げた。出土分布状況は図版 129 に図示したとおりである。

(1)B-08・B-09 ブロック

須恵器坏蓋 492 は天井部が丸く、口縁部と天井部の境には稜を巡らす。口縁部は直立し、口縁端部は内傾する段を持つ。左回転ロクロである。須恵器坏身 493 は底部が扁平で、受け部は外水平方向に短く伸びる。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く作る。右回転ロクロである。須恵器提瓶 494 の体部成形時の底部は平坦であり、上方を丸く作りカキ目調整を行う。口頸部は短く外反し、口縁端部は拡張して丸く仕上げる。把手は鉤状で肩部に一对ある。体部の扁平率は 62.5% である。

(2)E-06 ブロック

須恵器坏身 495 は底部がやや扁平で、受け部は外上方に伸びる。立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸く作る。左回転ロクロである。須恵器短頸壺 496 は肩の張った体部に、短く内弯しながら立ち上がる口頸部が付く。口縁端部は内傾し、面を作る。体部はカキ目調整する。肩部には自然釉による直径約 10cm の重ね焼の蓋の痕跡が残る。

(3)E-09 ブロック

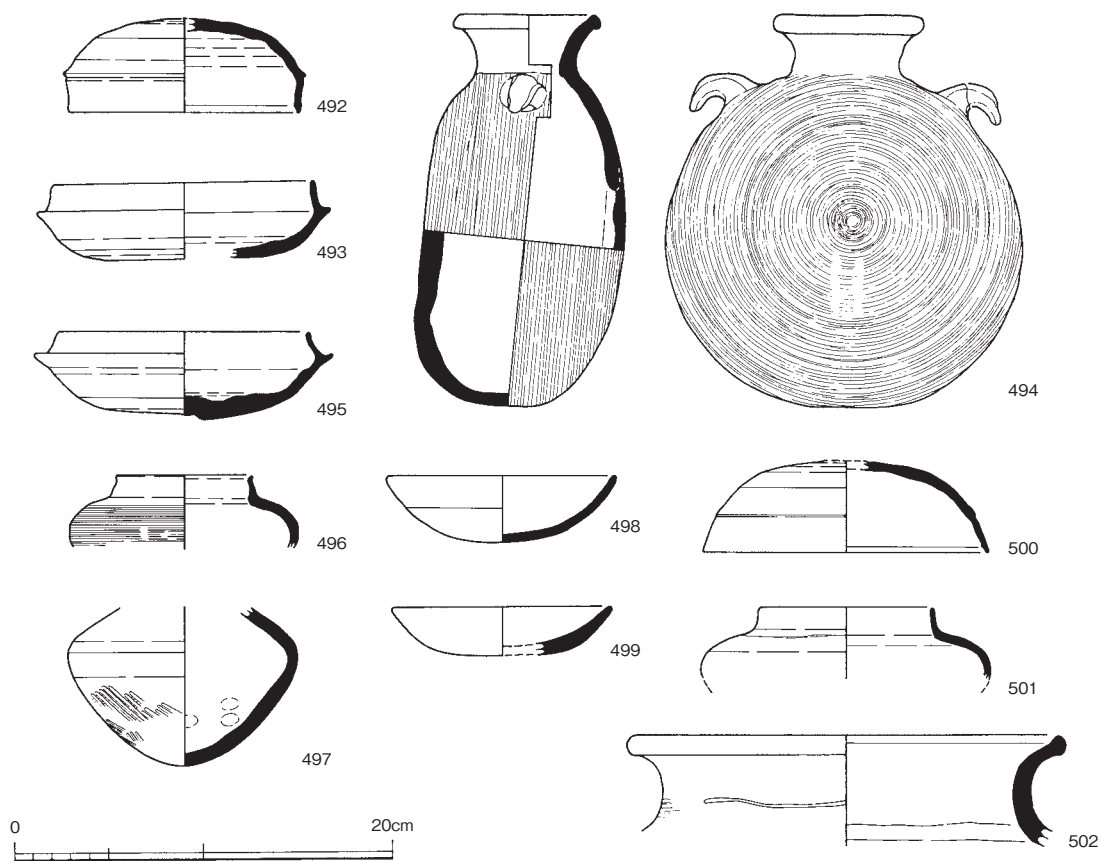
須恵器壺 497 は肩の張った扁球形を呈し、体部下半をタタキ仕上げする。口頸部と体部全体が残っていないため、甕の可能性もある。

(4)C-04・C-05 ブロック

土師器椀 498・499 は浅い半球形である。

(5)不明

須恵器坏蓋 500 は天井部が丸く、口縁部と天井部の境には僅かに溝を巡らす。口縁部は外傾し、口縁端部には内傾する段を作る。右回転ロクロで、内面には同心円置台痕跡が残る。須恵器短頸壺 501 は肩の張った体部に短く立ち上がる口頸部が付く。口縁端部は丸く作る。肩部には自然釉による直径約 10cm の重ね焼の蓋の痕跡が残る。須恵器甕 502 は口頸部が外反し、口縁端部は肥厚する。



第67図 吉田住吉山古墳群包含層出土土器

3. 吉田古墳群(図版 126・127)

吉田古墳群は吉田住吉山古墳群の谷を挟んで西側に位置する。平成12年度の調査時において谷西地区と呼称した部分(A-01とI-06を結ぶ谷)より西側に位置する古墳群である。

吉田住吉山古墳群と同様に古墳時代以降、特に中世の山城の造成にあたって地形および古墳が大きく改変されている。さらに古墳群の南西部は近年の土取りにより大きく削平されており、当初の地形を保っていない。

この事業による発掘調査は、事業者の都合により、平成14年度から平成16年度の3箇年に分割して実施した。第1次調査では調査区の西端に位置する吉田1号墳の調査を実施した。第2次調査では吉田住吉山古墳群と同時期に調査を実施し、新たに吉田32号墳を発見した。第3次調査では南東側部分で463㎡の調査を実施し、古墳時代と室町時代の遺構・遺物を検出したが、ここでは古墳時代の遺物について記述する。

吉田1号墳(図版 164～166 写真図版 201～203)

(1)概要

吉田1号墳は、今回報告する調査地点の最西端に位置しており、吉田32号墳の北西側のD-20・D-00・E-20・E-00ブロックに位置している。丘陵頂部の西端に立地しており、標高は94.3m前後を測る。南西部は調査区外であるとともに、近年の土取りで削平を受けていた。墳丘は山城の西曲輪1および西曲輪2、帯曲輪4で改変および削平されている。

(2)墳丘

墳丘は西曲輪1で大きく改変され、表土直下で検出した。埋葬施設部分まで削平を受けているため、形態および規模は明らかではない。現状では直径11mの円墳に復原できる。盛土は上下2層の約0.45mが存在する。

(3)埋葬施設

埋葬施設は西曲輪1の北寄りの表土直下で東西に主軸を持つ木棺を検出した。主軸は北から西へ78°振っている。検出面で長さ3.4m×最大幅0.6m、深さ7cmの棺掘形に長さ3.2m×幅0.35mのU字形の棺痕跡を残す。厚さ3cm前後のシルト質極細砂を棺床としており、全体に赤色顔料が付着している。棺内から遺物は出土していない。

(4)遺物

遺物には鉄器と土器があり、すべて墳丘外から出土している。鉄器には鉋1点と大刀2点があり、吉田1号墳の埋葬施設の北側約23mから出土している。鉋M701と大刀M703は赤色顔料を間に挟んで出土している。大刀M703は鋒を西に向け赤色顔料の散布を挟んで0.7m北側に、刃部を北に向け直交して出土した。

鉋M701は全長16.6cm、刃長6.3cm、柄部10.3cmを測る。柄部は幅1.1cm、厚さ0.5cmを測り、横および斜めに巻かれた樹皮が認められる。刃部は約25°屈折するが錆により錆は明瞭ではない。

大刀M702は調査の際、折れ曲がったが当初の形態に戻して実測している。全長81.4cm、刀身長64.2cm、茎長17.2cmを測る。刀身部は幅3.2cm、厚0.8cmを測る



第68図 吉田1号墳の調査

直刃である。関は片関で、茎口幅 2.7cm を測る。茎は幅 2.0cm、厚 0.7cm で目釘孔が 2 箇所あり、目釘孔間は 5.8cm を測る。刀身部には僅かに木質が存在するが、茎部には存在しない。

大刀 M703 は鋒の先端を欠く。全長 68.6cm 以上、刀身長 55.0cm 以上、茎長 13.6cm を測る。刀身部は幅 2.5cm、厚 0.6cm を測る直刃である。茎口幅 2.5cm を測る。茎は幅 2.0cm、厚 0.5cm で目釘孔が 2 箇所あり、目釘孔間は 2.7cm を測る。刀身部および茎部には木質が存在する。関部分には柄縁装具が遺存し、柄縁装具の幅は 2.5cm～3.0cm を測る。

土器には土師器と弥生土器と須恵器がある。土師器小型丸底壺 601 は半球形の体部をタタキ仕上げしており、口頸部は直線的に大きく開く。弥生土器壺 602 は底部の破片で平底である。底部内面には熾溜黒斑が存在する。須恵器壺類 603 は底部の破片で底部側面は手持ちケズリを行っている。

(5) 小結

吉田 1 号墳は丘陵頂部に立地する古墳であるが、山城の西曲輪 1 で大きく改変されている。墳形は現状では円墳で、埋葬施設は割竹形木棺である。遺物は出土していない。立地と埋葬施設から考えて古墳時代前期に位置付けられる。

なお、吉田 1 号墳の北側 23m の地点からは赤色顔料の痕跡と鉄器がまとまって出土しており、完全に削平された別古墳の存在が推定できる。

吉田 32 号墳(図版 167 写真図版 204)

(1) 概要

丘陵尾根部に立地しており、標高は 94.4m 前後を測る。吉田 1 号墳の南東側の F-01・F-02・G-01・G-02 ブロックに位置している。南西部分は調査区外であるとともに、近年の土取りで削平を受けている。盛土や埋葬施設は後世に削平されており、周溝のみ残存していた。なお、北東部は確認調査のトレンチによる攪乱を受けていた。

(2) 墳丘

墳丘は山城造成時に削平されているため、盛土は一切残存していない。検出した遺構は周溝のみである。直径 6.4m を測る円墳である。周溝は南東側部分で最大幅 1.6m、深さ最深 0.18m、北西側部分で最大幅 1.3m、深さ最深 0.2m を測る。北東部の周溝は幅 0.7m 程度、深さ 0.1m を測る。

東側の周溝内から須恵器の甕 607 が小片となって出土した。この他に須恵器高坏脚部が出土している。周溝部分から須恵器高坏蓋・高坏・甕が出土した。甕は小片となり散乱していた。

高坏蓋 604 は丸い天井部に頂部が窪んだ摘みが付く。口縁部は直立し、天井部との境に稜が巡る。口縁端部内面には段が付く。高坏 605・606 は脚裾の一部であり、長方形透かしの痕跡が存在するが、孔数は不明である。甕 607 は体部がやや肩の張った球形で、外面にはタタキ痕跡が残り、内面には同心円当具痕跡が残る。口頸部は短く外反し、口縁端部に面を作る。

(3) 埋葬施設

後世の削平により全く痕跡をとどめていない。

(4) 採集の遺物

須恵器坏 612・613 は吉田 32 号墳の西側の近年土取りした崖下で採集した。いずれも完形品で 612 の底部は回転ケズリ、613 の底部は手持ちケズリを行っている。吉田 32 号墳に伴うものではなく別の古墳もしくは遺構に伴うと考えられる。

(5) 小結

吉田 32 号墳は丘陵尾根部に立地する直径 6.4m を測る円墳である。埋葬施設は削平により残っていなかった。立地と周溝あるいは周溝から出土した須恵器から考えて、5 世紀後半に位置付けられる。

第3次調査区

(図版 168～170・写真図版 205～208)

(1) 概要

第3次調査区では丘陵の尾根部分から西斜面に立地する部分の調査を行っている。調査においては土坑や柱穴を検出したが時期を特定できるものは少ない。ここでは古墳時代の墓と考えられる遺構 S X 01 と S X 02 について記述する。

(2) S X 01

丘陵頂部からやや下った、南西向き斜面に立地している。標高は 95.2m 前後を測る。吉田 32 号墳の南東側の J-03・J-04 ブロックに位置している。S X 01 の周囲には区画する溝などは存在しない。

掘形の平面形は隅丸長方形である。規模は検出面で長さ 1.6m、幅は東側で 0.68m、西側で 0.55m、深さ最大 0.15m を測る。主軸は北から西へ 75° 振っている。内側に棺痕跡が残る。棺痕跡は長さ 1.2m、幅は東側で 0.4m、西側で 0.3m を測る。

遺物は棺内・掘形内からも出土していない。

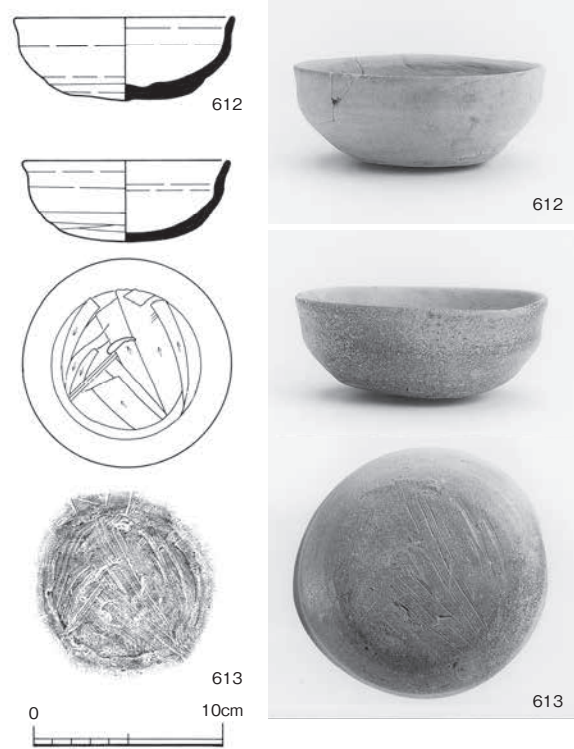
(3) S X 02

丘陵頂部からやや下った、南西向き斜面に立地している。標高は 94.5m 前後を測る。吉田 32 号墳の南東側、墓 S X 01 の北東側の I-02 ブロックに位置している。S X 02 の周囲には区画する溝などは存在しない。削平などを考慮しても斜面に立地するため、当初から周溝は存在していなかったと考えられる。

掘形の平面形は楕円形である。規模は検出面で長さ 1.15m×幅 0.75m、深さ 0.3m を測る。主軸は北から東へ 16° 振っている。掘形底付近は長さ 0.85m×幅 0.4m を測る。断面形態は北側に偏って深く、南側が浅くなっている。掘形内の深くなった北端底には、須恵器鉢が内面を南側に向けて出土している。掘形全体に須恵器甕が砕けた状態で出土しており、検出面付近では甕内面を下方に向けるものが多く、底面付近は甕内面が上方を向いている。

以上のような状況から、掘形内に須恵器甕を身とし、須恵器鉢を蓋とした土器棺を埋葬施設とする土器棺墓が存在すると考えられる。遺骸や須恵器以外の遺物は出土していない。

遺物には須恵器鉢 2 点と甕 1 点がある。須恵器鉢 608



第69図 吉田住吉山古墳群表探土器



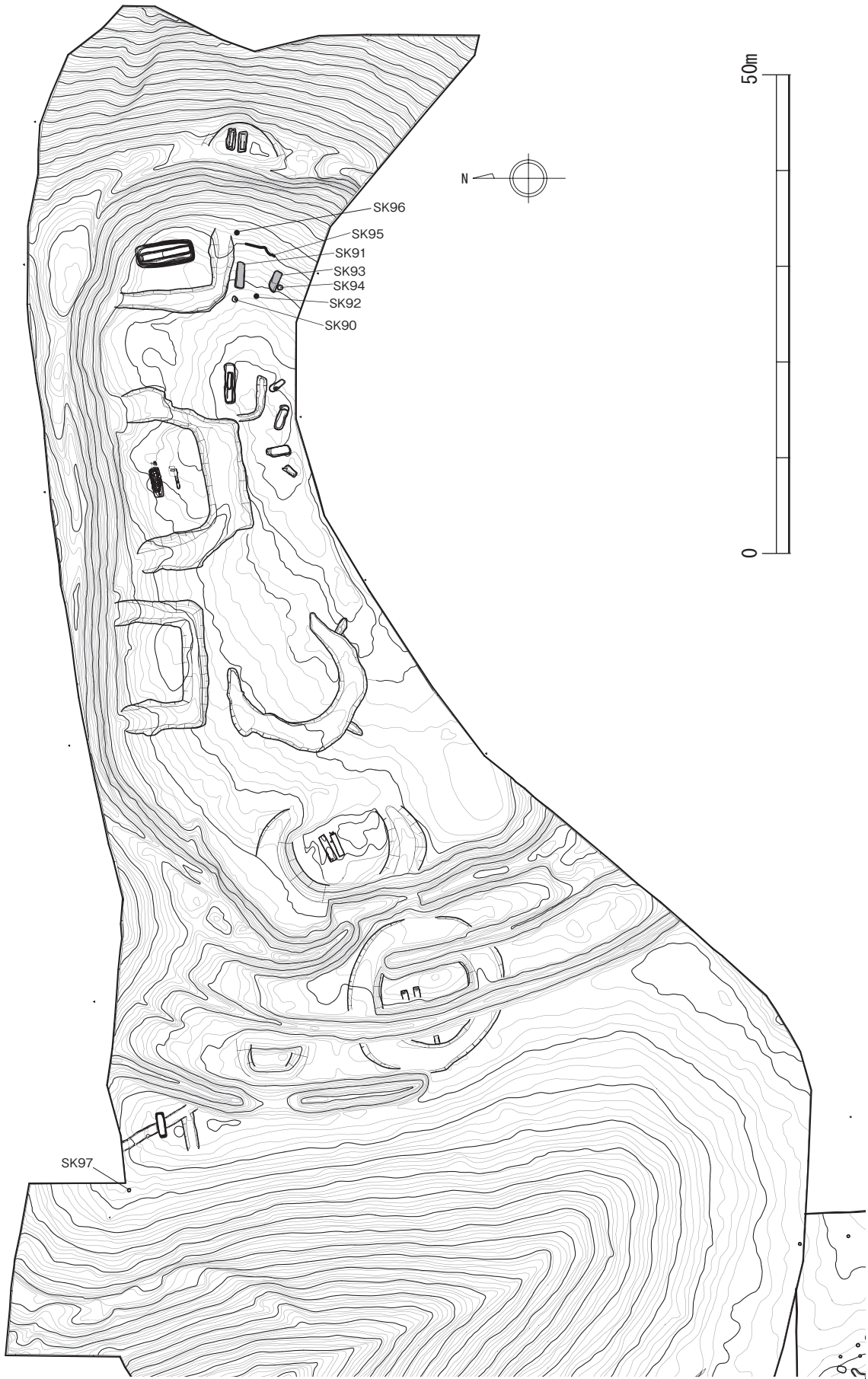
第70図 SX02の実測

・609は蓋として図化を行った。608が完形で、609は底部のみの破片であるが、法量・製作技法や胎土などは同一である。口径28.5cm、高さ10cmを測り、丸底である。タタキ仕上げをしているが最終的にカキ目調整を行っている。609の底部内面には同心円当具の痕跡が残る。甕610は体部全体が遺存しており、頸部は一部残存しているのみで、無文である。体部は高さ82cm、最大径40cmを測る。体部上端部の内径は28cmを測り、蓋の直径と同一である。底部には焼成時の円形の痕跡が残る。

第3次調査の遺構に伴わない遺物として土師器壺611がある。手づくねの壺で口縁端部を欠く。

4. 小結

第3次調査区では、木棺墓や土器棺墓を調査した。山城造成時に墳丘が削平された可能性もあるが、傾斜地の標高の高い側に区画溝が存在しないため、当初から区画を持たない墓域であったと考えられる。周囲には土坑が5基ほど存在しており、同様に土壙墓の可能性が高い。第3次調査区周辺は吉田古墳群の中の区画溝を持たない墓域であると考えられる。



第71図 弥生時代の遺構

第4節 吉田住吉山遺跡（弥生時代以前）の調査

1. 遺跡の概要

吉田住吉山遺跡のうち古墳時代より前の時代の遺構について取り上げる。したがって、遺物が出土しているものに限る。特に吉田住吉山1号墳の東側、吉田住吉山4号墳の南側部分で弥生土器を伴った土坑が集中していたほか、北西部でも遺構を検出した。主郭を中心に弥生土器やサヌカイトが出土している。

2. 調査の成果

S K 90

遺構

丘陵東斜面の標高 96.2m の地点に立地している。吉田住吉山 4 号墳の周溝南西角の南側で、B-14 ブロックに位置している。直径 0.6m の円形を呈し、深さは 0.13m を測る。弥生土器鉢が出土している。

遺物

弥生土器鉢 706・707 は底部の破片で平底を呈し、中央部は指で押えて窪ませている。体部外面は 706 がタタキ調整の後、縦方向のミガキを行い、707 はタタキ仕上げを行っている。706 の内面はミガキを行っている。

S K 91

遺構

丘陵東斜面の標高 95.8m～96.1m の地点に立地している。吉田住吉山 4 号墳の周溝の西側で、S K 90 の東側の B-14 ブロックに位置している。平面形は長方形を呈し、東西 2.85m、南北 0.8m、深さ最大 0.25m を測る。断面は逆台形で、底面は斜面に立地するがほぼ平坦である。西寄りの地点から石が直立した状態で出土した。遺物は弥生土器の小片が出土した。

S K 92

遺構

丘陵東斜面の標高 96.2m の地点に立地している。S K 90 の南側の C-14 ブロックに位置している。直径 0.35m の円形を呈し、深さ 0.1m を測る。弥生土器壺が出土した。

遺物

弥生土器壺 708 は底部のみが残る。底部は平底で、体部外面は摩滅のため不明である。内面はハケ調整を行う。

S K 93

遺構

丘陵東斜面の標高 95.8m～96.05m の地点に立地している。S K 92 の南東側の C-14 ブロックに位置している。東西 2.2m、南北 0.85m の隅丸長方形で、深さは最大 0.2m を測る。断面観察で中央部のやや東側で焼土や炭を多量に含む一段深い部分があるため、東西 2 つの土坑に分かれる可能性が高い。遺物が西側部分で弥生土器の壺と鉢がまとまって出土したことから別の土坑の可能性が高い。

遺物

弥生土器広口壺 703 は、最大径が体部中央にある扁球形を呈し、底部を欠いている。頸部は直立し、口縁部は大きく外反し、口縁端部は僅かに垂下して面を作る。口縁端面は櫛描波状文を施文した上に円

形浮文を貼り付ける。体部外面はハケ調整の後、斜めミガキを行い、内面下半部は横ハケ調整を行う。内面上半部はナデ調整を行うが、粘土紐接合痕跡が残る。体部上半部には覆接触黒斑が存在する。鉢 704 は底部のみが残る。底部は中央部を指で押さえた平底で、周囲は木葉の圧痕が残る。体部外面はタタキ仕上げ、内面はハケ工具の端部が放射状に残る。

SK94

遺構

丘陵東斜面の標高 95.95m の地点に立地している。SK93の南側の C-14 ブロックに隣接している。東西 0.6m、南北 0.5m の楕円形で、深さは 0.2m を測る。上層には直径 0.25m 深さ 0.05m の範囲に灰黄褐色の粘土が堆積していた。その下層からは弥生土器の壺体部の破片が出土した。

SK95

丘陵東斜面の標高 95.3m 前後の地点に立地している。B-14 ブロックの SK91 の東側に位置している。

遺構

南北 2.35m、東西 0.4m～0.53m、深さ 0.1m を測る南北主軸の溝状を呈す土坑である。断面は U 字形である。全体に土器の破片が散布しており、特に南側に集中している。弥生土器の広口壺と高坏が出土した。

遺物

弥生土器広口壺 701 は口縁端部を欠く。最大径が体部中央にある球形で、底部は平底である。口頸部は直立気味に外反し、口縁端部は欠損している。体部外面の下半部は斜め方向のミガキを行い、上半部はハケ調整を行う。内面はハケ調整を行うが、粘土紐接合痕跡が一部残る。体部下半部には接地黒斑が存在し、対する内面には熾溜黒斑が存在することからやや立ち気味に焼成したことがわかる。高坏 702 は脚部を欠き、坏部のみである。椀形で口縁部外面に二条の沈線を巡らす。内外ともに下半部は縦ミガキを行い、口縁部付近は横ミガキを行う。

SK96

遺構

丘陵東斜面の標高 95.3m 地点に立地している。SK95 の東側の B-14 ブロックに位置している。東西 0.7m、南北 0.6m の楕円形で、深さは 0.1m を測る。

SK97

遺構

丘陵西斜面の標高 93.7m の地点に立地している。吉田住吉山 10 号墳の北西の A-04 ブロックに位置する。表土直下で検出したが、土坑下部には土器が貼り付いているのみで大きく削平を受けていた。検出面での直径は 0.35m で、深さは 0.1m を測る。底面に貼り付いた土器は内面を上部に向けているため、本来は埋置されたものと考えられ、土器棺としての機能が考えられる。

遺物

弥生土器壺 705 は体部のみが残る球形の壺で底部を欠いている。全体に残りが悪い。外面はタタキ調整の後、ミガキを行っている。内面は底部付近が縦ハケ、中央部以上が横ハケ調整を施し、上部は粘土紐接合痕跡が残る。

3. 遺構に伴わない土器

丘陵南東部

丘陵南東部の弥生時代の遺構が密集している付近（B-14・C-13・C-14ブロック）からは壺711・712、甕718、鉢709・710・713・722が出土した。壺711は底部を厚く作り、体部外面は縦方向のミガキを行う。壺712は大形の壺の底部で内面は横方向のケズリを行う。甕718は底部の破片で、平底である。体部外面はタタキ調整を行う。鉢709は外反口縁鉢の底部の破片で、平底である。体部外面はタタキで仕上げ、内面はケズリの後、ミガキを行う。鉢710は底部が窪む平底で、外面に段を作っている。接地黒斑が存在する。鉢713は直口鉢の底部の破片で、底部は平底で中央部は若干窪む。体部は直線的に伸び外面は横方向のタタキで仕上げる。内面はハケ工具の端部が放射状に残る。鉢722は外反口縁鉢の体部上半部から口縁部にかけての破片で、注口を作る。口縁端部は上方に突出させて面を作る。外面は縦方向のハケ後、横方向のミガキを行う。内面は縦ハケ調整の後、下部は縦方向、上部は横方向のミガキを行う。

丘陵東斜面

丘陵東斜面のB-15・C-15ブロックからは弥生土器甕714・715、器台721、鉢723、高坏724が出土した。甕714は底部の破片で中央部が窪む。内外ともに摩滅のため調整は不明である。器台721は口縁部の一部で大きく開き、口縁端面には擬凹線を施文する。内面は横方向のミガキで仕上げる。鉢723は外反口縁鉢の体部上半から口縁部にかけての破片で、口縁端部には面を作る。外面はタタキの後、縦ハケ調整を行う。内面は横方向のミガキを行う。高坏724は有稜高坏の口縁部の破片で外傾し、内面には横方向のミガキが残る。

丘陵東谷部

丘陵東側の谷部底からは弥生土器鉢717が出土した。底部の破片で中央部が窪み、周縁は木葉の圧痕が残る。体部外面はタタキの痕跡が残る。内面はハケ工具の端部が放射状に残る。

吉田住吉山5号墳南周溝東部

吉田住吉山5号墳南周溝東部からは弥生土器壺719・720、甕716が出土した。壺719・720は底部の中央が僅かに窪み、体部は大きく開く。甕716は平底で中央部が窪む。体部外面はタタキ調整を行い、内面は縦方向のケズリを行う。

4. 遺構に伴わない石器

吉田住吉山遺跡では37点の石器が出土している。すべて後世の遺構内あるいは堆積土中から出土したもので、本来の時期を明確に示すことはできない。出土した石器は姫島産黒曜石の1点（S28）を除き、すべてサヌカイト製の打製石器である。サヌカイトの原産地については10点について科学的な分析を行っており、二上山産と判定されたものが3点、讃岐産が5点、不明が2点となっている（第5章第6節参照）。分析では原産地のデータに岩屋が抜けており、不明の2点が岩屋の可能性のあるのか気になるところである。

石鏃（S11）

S11は凹基式石鏃で左右の対称性は良い。調整剥離は丁寧で両面とも全面に及ぶ。基部は最終段階で一撃で深く抉っている。先端をわずかに欠損する。

削器 (S12～S19)

側縁に連続した調整剥離が加えられたものを削器とした。S19だけが他の石器に比して突出して大型であるが、他は最大長が5cm以下の小型品である。

小型品の中では、S12が比較的丁寧な平坦剥離を一側縁に施しており、摘み部が折れた縦型の石匙であったのかもしれない。なお、この資料では腹面側右側縁にみられる剥離痕は腹面に切られているように見受けられ、表裏両面から調整剥離を施したのではないと考えられる。また、腹面の剥離状況などから素材はバイポーラーの剥片であった可能性が高い。

S13もS12と同じくバイポーラーの剥片を素材とした削器で、一側縁に小さな調整剥離を連続させている。S14では横長剥片の末端に円弧状の刃部を作るが、調整剥離はやや鋸歯状となる。S15は折れがあって、2cmにも満たない小さな石器であるが、腹面の打面側に調整剥離を施して凸状に仕上げる。S16は剥離時に縦折れした剥片の一側縁に粗雑な調整剥離を施す。打面は点状である。S17も同じく縦折れした剥片を素材とする。剥片剥離は自然面を打面として、小さな円礫を輪切りにするような形で行われている。得られた剥片の末端に両面から調整剥離が施されている。S18は縦横直交して折れた板状剥片に急角度の調整剥離を施して弧状の刃部を作り出している。

S19は金山産と考えてよい風化面をもつサヌカイトである。自然面の状況から20cm×20cm程度の礫を石理に沿って輪切りにするような感じで剥片剥離が行われていると考えられる。この剥片は輪切りにされたものではなく、礫の中程で薄く剥がれているが、背面の剥離痕は、この剥片の前には反対側から輪切り状態の剥離が行われたことを物語っている。S19の素材剥片は打面側が厚く、末端に向かって徐々に薄くなる。打面側は階段状のやや粗い調整加工で厚さを落とし、薄くなった末端側は連続する平坦剥離によって、凸刃と凹刃を複合させたゆるやかに弯曲する刃部を作り出している。刃部加工はまず腹面側に、その後、背面側に行われている。刃部の長さは17.7cmとなる。

楔形石器 (S20～S22)

S20は典型的な楔形石器と呼ぶもので、一側縁には截断面が認められる。右面には素材剥片の主剥離面が大きく残るが、この剥片も両極剥離によって得られたものである。S21ではS20よりもやや厚みのある板状の素材が利用されている。S22は素材面を大きく残し、両極剥離による面と考えられるのは素材剥片の腹面に残る1面だけである。素材剥片を得る際には自然面の角付近を打撃しているため、打面は点状である。実測したサヌカイトでは唯一産地分析を行ったもので、讃岐産と判定されている。微細な剥離痕のある剥片 (S23～S26、S28)

剥片の一部に調整剥離とも使用痕とも区別が付きにくい小剥離が認められるものである。いずれも素材剥片には小さな打面が残る。横長剥片と縦長剥片の両者があるが、すべて打面をもつ。

S28は唯一の黒曜石である。蛍光X線分析では姫島産と判定された。乳灰白色をしており、肉眼的にも姫島産の特徴を有する。

剥片 (S27)

S27は自然面打面をもつ横長剥片で、背面もすべて自然面で覆われている。小型の円礫が素材となっており、経験的には岩屋産と考えられるような資料である。

これらの石器の帰属時期については、共伴土器などから明らかにすることはできない。出土している土器は弥生時代後期以降のものであり、中期以前や縄文土器などはまったく出土していない。そこで、石器の形態や剥片剥離技術などから若干のアプローチを試みたい。

まず、S11の石鏃については抉りの比較的深い凹基式であり、縄文時代の石鏃と考えるとよいであろう。S12も縦型の石匙とすれば整った形となり、縄文時代として齷齪は無い。S28の姫島産黒曜石も当地域の弥生時代では基本的に使用されない石材なので、縄文時代の石器としてよいであろう。その他の石器のうちS19を除くといずれも小型で、非定型的な石器であるので時期の判断は難しい。

そこで、原石産地と剥片剥離技術に注目して検討を加えてみる。第16表には産地分析を行ったサヌカイトで打面の形状を示しており、讃岐と判定された5点のうち2点が平坦打面をもつ剥片である。弥生時代の剥片剥離技術を畿内の二上山産サヌカイト流通圏と東部瀬戸内の讃岐（金山）産サヌカイトの流通圏で比較した場合、二上山産サヌカイトでは明確な打面をもった剥片が剥離されるのに対して、讃岐（金山）産サヌカイトでは打面がハジケて残っていなかったり、打面付近が潰れて線状打面となっていたりすることがほとんどである。実際、播磨地域の讃岐（金山）産サヌカイトで明瞭な平坦打面を有する剥片を目にすることは極めて希である。但し、明石川流域の弥生Ⅳ期に属する頭高山遺跡では、二上山産サヌカイトの占める割合が金山（讃岐）産より高く（藁科・東村・丸山1989年）金山産サヌカイトの剥片の中にも打面を有するものが散見される。（注1）

（注1）神戸市教育委員会のご配慮で資料を実見させていただいた。

実測した資料にもS23～S27のように打面が残るものが多く認められるが、S23～S26は風化面が滑らかで肉眼では二上山産かと思われるものである。打面が残っていることに齷齪はない。また、S17やS27のように小さな円礫を素材としたものは淡路産サヌカイトである可能性がある。原石が小円礫なので、自然面を打面とした剥離がしばしば行われる。

このように見てゆくと、打面の状況という剥片剥離技術の一部だけを検討したに過ぎないが、播磨地域の弥生時代石器とは一線を画するような石器であると考えられる。したがって、これらの小型石器類も縄文時代あるいはそれ以前に属する可能性が高い。ただし、風化がそれほどには進んでいないことから、旧石器時代まで遡ることはないであろう。

なお、サヌカイトの科学的分析では讃岐産のほうがやや多くを占めるが、判別された石器をもとに、未同定の石器を判別を試みたところ、二上山産と讃岐産がほぼ同数であった。

最後に残ったS19については、風化面に縞状の模様が観察され、明らかに讃岐（金山）産サヌカイトの特徴を有する。このような大型の刃器は弥生時代の大型打製石包丁が最も技術形態学的に類似する。縄文時代に存在しないとは言い切れないものの、これのみ、弥生時代中期以前の石器である可能性を指摘しておきたい。

以上のことから、吉田住吉山遺跡出土の石器はS19の大型削器を除いて、縄文時代に属する石器と考えておきたい。また、もし弥生時代を想定するならば、弥生Ⅳ期と考えるのが妥当であろう。

5. 小結

吉田住吉山遺跡の弥生時代の遺構は吉田住吉山遺跡の山城や吉田住吉山古墳群の造成による大きな改変を受けている。弥生時代の遺構を検出したのは、丘陵南東部のB-14・C-13・C-14ブロックと丘陵西斜面のA-04ブロックのみの2箇所である。検出した遺構は丘陵南東部で土坑（SK90～SK96）のみであり、丘陵西斜面では土器棺墓（SK97）がある。いずれも遺物の特徴から弥生時代後期中葉である。

第4章 高男寺本丸遺跡

第1節 遺跡の概要

1. 高男寺本丸遺跡

当遺跡は、以前から周知されていた遺跡である。吉田住吉山遺跡と同様、三木城攻めに伴う付け城があったと言われている遺跡である。昭和58年には、圃場整備に伴い、確認調査が実施されている。この調査では、鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出されている。遺物としては、左巴文軒丸瓦・羽釜片・天禧通宝・招聖通宝などが出土している。



第72図 高男寺本丸遺跡調査位置図

2. 遺跡の地理的環境

高男寺本丸遺跡は、志染町字高男寺に位置する。四合谷川の東側に位置し、吉田住吉山遺跡群の東750mにあたる。調査地は、吉田住吉山遺跡群と同様の高位段丘面上に立地し、調査地の西側から北側は段丘崖に近接している。北側低位段丘面との比高は約15mである。段丘下北側には志染川が流れている。また、調査地の南西側には、段丘面を刻む谷地形が認められる。

高男寺本丸遺跡

第2節 調査の成果

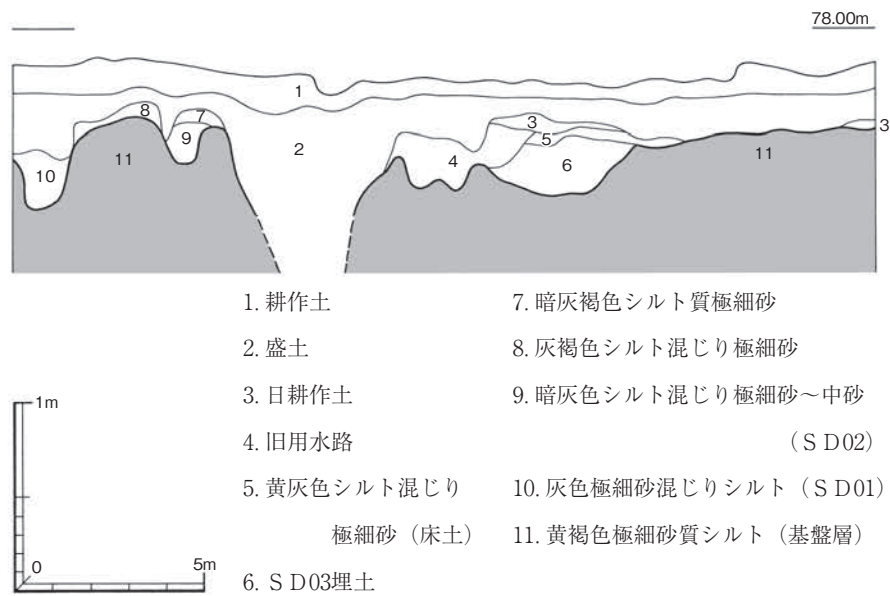
1. 調査の概要

調査地は、道路の拡幅に関わる箇所を対象とした。このため、調査区は、幅 1.5m ～ 4m と狭いトレンチ状をなす。また、以前に圃場整備が行われているため、遺構面も部分的にその影響を受けていた。つまり、圃場整備に伴う盛土層下が遺構検出面となっていた。調査は、盛土層下ま重機により掘削し、以下を人力により進めていった。

2. 基本土層

当地は、すでに圃場整備が行われた地区である。このため、基本的には盛土に覆われていた。盛土層の下層には、旧耕作土が部分的に認められた。その下層は、基盤層の黄褐色極細砂質シルトで、この上面で遺構を検出している。検出面の標高は、東端部で77.50m、西端部で77.35mである。

なお、調査区に中央部は、谷状をなし、現地表面した2mまで掘削したが、その底部まで検出できなかった。



第73図 高男寺本丸遺跡 基本土層図

3. 調査成果

調査では、溝状遺構を3条 (S D01～S D03) 検出した (図版 178)。

S D01

調査区西端部で検出した。ほぼ南北方向にのびる直線的な溝であるが、検出できたのはわずか1.75mである。検出した範囲では直線的である。検出面における幅は2.70mを測り、横断面は逆台形をなす。最深部における検出面からの深さは、60cmである。埋土は灰色極細砂混じりシルト1層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

遺構内からは須恵器の捏鉢 (1) が出土している。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

SD02

調査区西半部で検出した。南西-北東方向にのびる直線的な溝で、検出した長さは1.80mである。検出した範囲では直線的である。検出面における幅は1.40mを測り、横断面は皿形をなす。最深部における検出面からの深さは、40cmである。埋土は暗灰色シルト混じり極細砂～中砂1層が堆積していた。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

遺構内からは須恵器の捏鉢(2)と土師器の埴(3)が出土している。3については、播丹型埴に分類されるもので、口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。体部内面はハケ調整により仕上げられている。

SD03

調査区東半部で検出した。北西-南東方向にのびる直線的な溝で、検出した長さは約20mである。検出した範囲では直線的である。検出面における幅は2.00mを測り、横断面は皿形をなす。最深部における検出面からの深さは、60cmである。埋土は、上から灰色シルト質極細砂、淡褐色極細砂混じり暗灰色シルトの2層が堆積していた。その層相から判断して、2層とも人為的に埋められたものと考えられる。



第74図 SD03の検出

遺構内からは須恵器・土師器・丹波焼が出土している(図版179 第6表)。

須恵器は、蓋(4)が出土している。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。経筒等の蓋の可能性が考えられる。

土師器は、皿が2点(5～7)出土している。5は、小皿に分類されるもので、轆轤成形により仕上げられている。底部はヘラにより切り離され、体部から口縁部にかけては回転ナデ調整により仕上げられている。6と7は大型の皿で、口縁部から体部にかけて残存する。手づくね成形によるもので、内外面とも基本的にナデ調整により仕上げられている。最後に口縁部内外面が弱い横ナデ調整が加えられている。また、7の体部内外面はユビオサエ痕が顕著に認められる。

丹波焼は壺(8)と甕(9～13)が出土している。壺は8の1個体で、口縁部から体部にかけて残存する。口縁部は頸部に対して折り返され、端部を肥厚させずに収められている。体部内面はナデ調整を基本とし、頸部付近にわずかに横方向のハケ調整が認められる。口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。外面全面と口縁部内面にかけて釉が掛けられている。

甕は、9～13の5個体が出土している。9～11は、ほぼ同タイプに分類されるもので、口縁部はN字口縁が退化した形態となっている。基本的に内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。ただし、法量的には異なり、9に対して10・11は大型である。12は、大型の甕で、口縁端部は断面楕円形の玉縁をなす。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

これらの土器から、12の丹波焼甕を除いては、14世紀代に位置付けられる。12は、15世紀代に位置

付けられるものである。よって、当溝が埋められたのは15世紀代と位置付けることができる。

4. まとめ

調査で検出した遺構は、3条の溝に限られる。いずれも、出土土器から、南北朝期を中心とした時期に位置付けられるものである。調査範囲が限られているため、これらの遺構の機能については、明らかにすることは困難である。

[註]

三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財調査概報-昭和50年度～昭和59年度-』 1986

第6表 高男寺本丸遺跡出土土器一覧

No.	種別	器種	出土遺構	法量 (cm)		残存状況	焼成	色調
				口径	残存高			
1	須恵器	捏鉢	S D01	34.00	4.05	口縁部わずか	普通	黄灰～灰白
2	須恵器	捏鉢	S D02	32.80	5.55	口縁部1/20	普通	灰白
3	土師器	埴	S D02	21.80	4.70	口縁部1/8	良好	にぶい橙
4	須恵器	蓋	S D03	12.10	2.20	口縁部1/8	良好	灰白
5	土師器	皿	S D03	7.50	5.00	1/2		灰白
6	土師器	皿	S D03	14.00	2.70	口縁部1/8		浅黄橙
7	土師器	皿	S D03	13.00	2.40	口縁部1/10		浅黄橙
8	丹波焼	壺	S D03	12.60	7.60	口縁部1/8		灰～オリーブ灰
9	丹波焼	甕	S D03	42.80	6.70	口縁部1/12		灰赤～灰褐
10	丹波焼	甕	S D03	30.40	6.20	口縁部1/6	良好	灰褐
11	丹波焼	甕	S D03	28.60	9.90	口縁部1/14	良好	灰褐～にぶい褐
12	丹波焼	甕	S D03	47.00	10.00	口縁部1/16	良好	にぶい赤褐
13	丹波焼	甕	S D03	31.60	6.30	口縁部1/12	良好	灰褐

第5章 吉田住吉山遺跡出土遺物の自然科学分析

第1節 炭化材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、主郭地区の土坑および集石から出土した炭化材6点(資料No.1~No.6)である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称と特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にす。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にす。

3. 結果

樹種同定結果を第7表に示す。炭化材は、針葉樹1分類群(マツ属複維管束亜属)と広葉樹5分類群(クマシデ属イヌシデ節・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・ナツツバキ属)

第7表 樹種同定結果

資料No.	地区	遺構	樹種
1	主郭	SK33	クマシデ属イヌシデ節
2	主郭	SK34	ナツツバキ属
3	主郭	SK47	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	主郭	SK93	マツ属複維管束亜属
5	主郭	集石1	コナラ属アカガシ亜属
6	主郭	SB01P1	コナラ属コナラ亜属コナラ節

に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急~やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

- ・クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus* subgen. *Euarpinus*) カバノキ科

散孔材で、道管は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状~交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高のもの集合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの複合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のもの複合放射組

織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ナツツバキ属 (*Stewartia*) ツバキ科

散孔材で、横断面では楕円形、ほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-20細胞高。

4. 考察

土坑および集石から出土した炭化材は、炭化していることから、燃料材など、人間活動に伴う利用によって火を受けていることが推定される。これらの炭化材には、6分類群が認められ、各土坑・集石によって樹種が異なる結果となった。

針葉樹の複雑管束亜属は、二次林などに生育し、木材は比較的強度が高く、建築・土木に利用される他、松脂を多く含むことから薪炭材としてもよく利用される。落葉広葉樹のクヌギ節、コナラ節、イヌシデ節は、二次林を構成し、木材は比較的硬で強度が高く、古くから薪炭材としてよく利用される種類である。ナツツバキ属は、山地の落葉広葉樹林等に分布し、木材は比較的硬で強度が高い材質を有する。常緑広葉樹のアカガシ亜属は、暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)の主構成種の一つであり、木材は硬で強度が高く、薪炭材としても有用とされる。

これらの種類は、現在の本地域に分布する種類であり、遺跡周辺に生育していた樹木を利用したことが推定される。

島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p.

Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].

林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

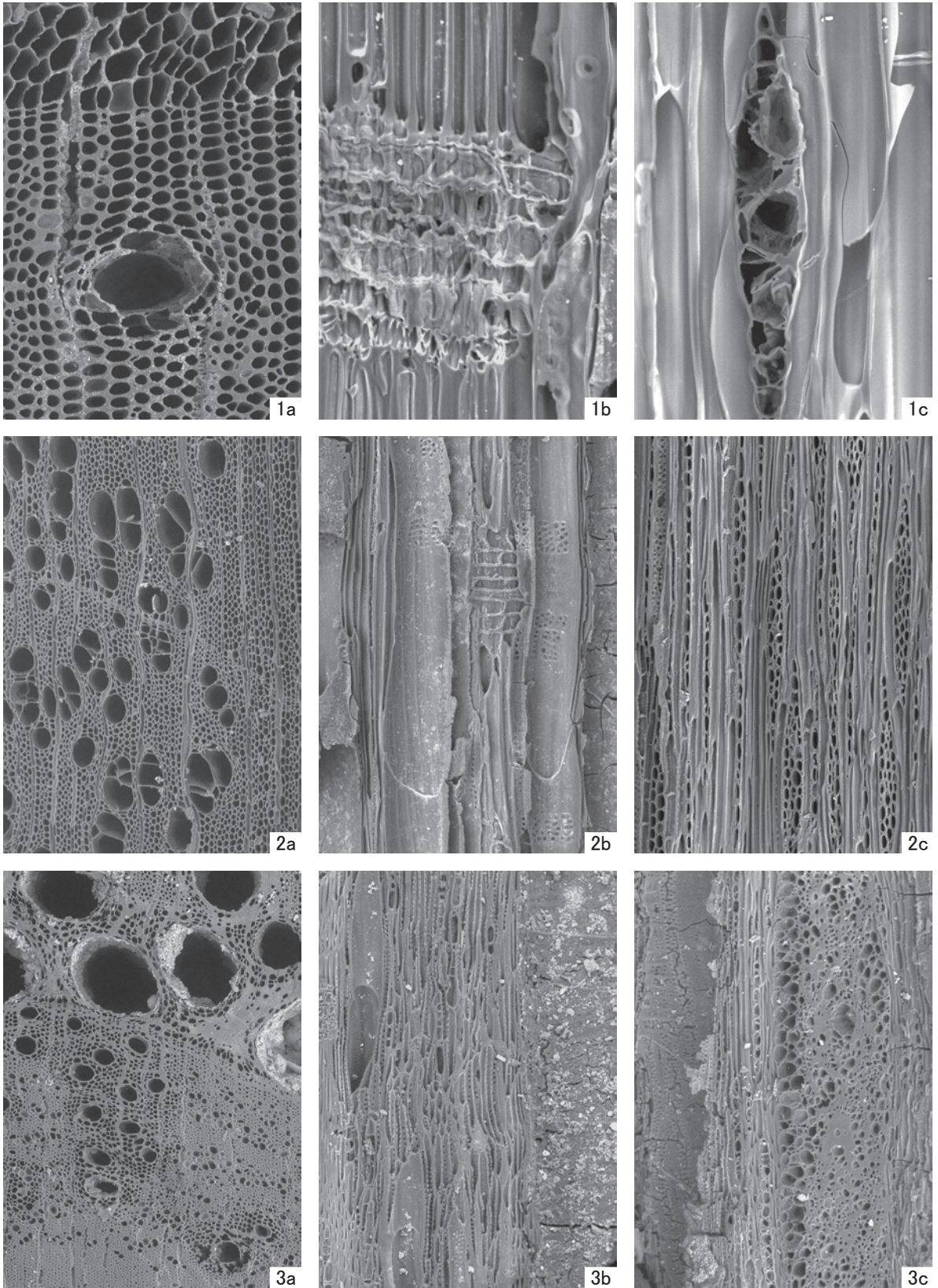
伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

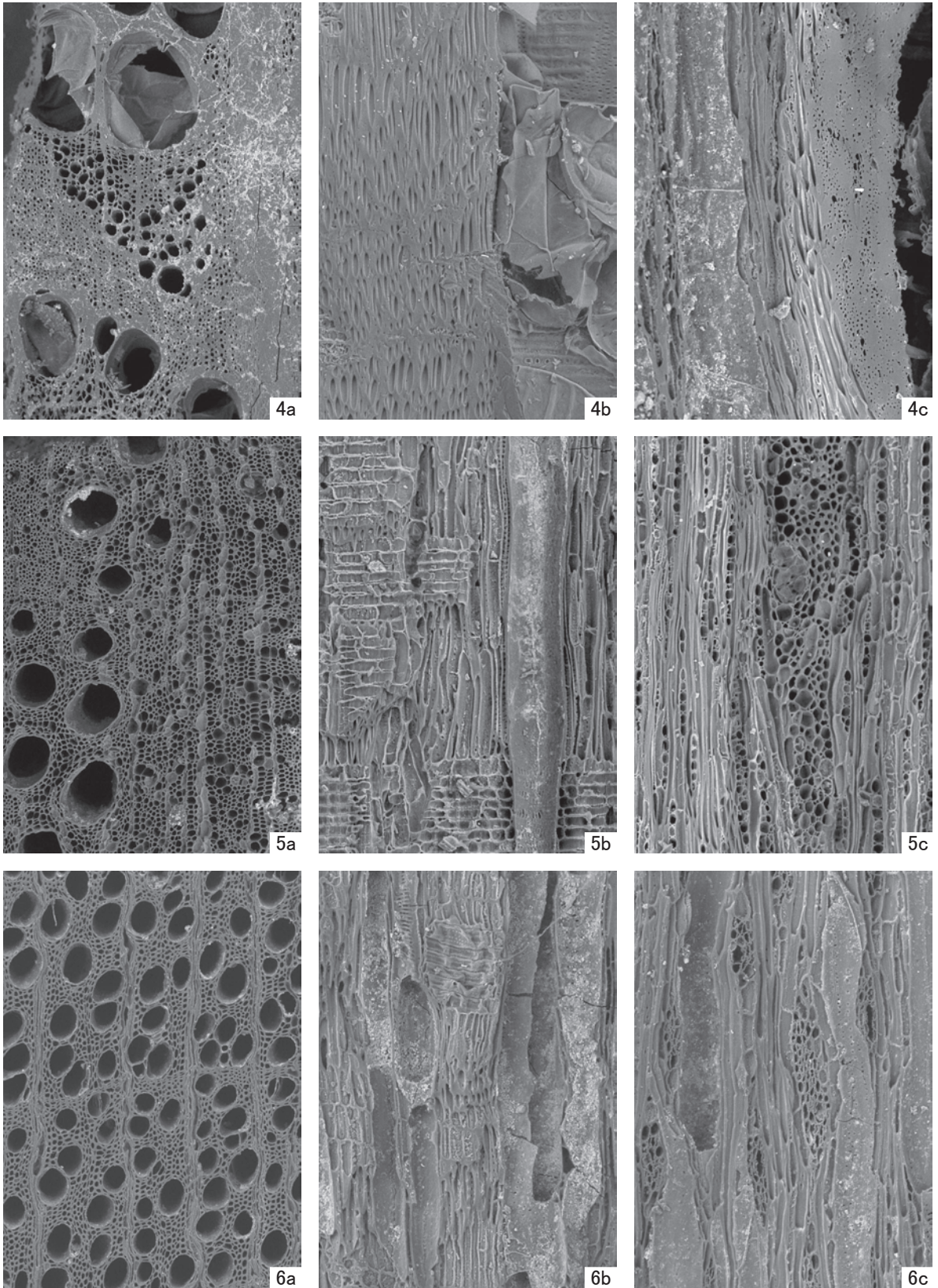
伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.



1. マツ属複維管束亜属(資料No.4)
 2. クマシデ属イヌシデ節(資料No.1)
 3. コナラ属コナラ亜属クスギ節(資料No.3)
 a:木口,b:柁目,c:板目

200 μ m:2-3a
 200 μ m:1a,2-3b,c
 100 μ m:1b,c

第75図 炭化材(1)



4.コナラ属コナラ亜属コナラ節(資料No.6)
 5.コナラ属アカガン亜属(資料No.5)
 6.ナツツバキ属(資料No.2)
 a:木口,b:柱目,c:板目

200 μ m:a
 200 μ m:b,c

第76図 炭化材(2)

第2節 植物遺体同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、「No. 102 植物繊維 2003007」と表記された植物遺体1点である2箱のプラスチックケースに収められていることから、分析の便宜上、確認される植物遺体が少量の試料をNo. 102-1、多量の試料をNo. 102-2と枝番号を付した。試料の概観を第77図に示す。この試料は銅製飾金具（M408）の表面に付着して出土したものである。

2. 分析方法

試料の概観を写真記録後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や葉などの大型植物遺体を抽出する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等の図鑑との対照から、大型植物遺体の種類と部位を同定する。分析後は、抽出物を種類別に容器に入れて保管する。

また、同時にイネ科植物の葉部に似た部分を抽出し、灰像分析にかけた。抽出した試料は、観察の障害となる有機物を取り除くために、過酸化水素水で漂白する。これを400倍の光学顕微鏡下で観察し、イネ科葉部(葉身と葉鞘)に由来した珪化組織片の有無を調べる。

3. 結果

(1) 実体顕微鏡観察

各試料からは、単子葉類に由来すると考えられる植物片が多く確認されたため、一部を光学顕微鏡下の観察による植物珪酸体や珪化組織片の確認を実施した。No. 102-1は、中空で節を持つ特徴が確認されるイネ科の稈1個と、種類の特定に至らない双子葉類の葉1個が検出された。No. 102-2は、針葉樹のヒノキの枝条1個、栽培種のイネの穎が50個検出・同定されたほか、イネ科の稈1個、種類の特定に至らない双子葉類の葉3個、炭化材1個が検出された。いずれの大型植物遺体も、表面に淡緑褐色、膜状の付着物が確認された。以下に、同定された分類群の形態的特徴を記す。

・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

枝条が検出された。灰褐色、4枚の鱗片状の葉が十字対生して茎を包む。枝条は長さ3.5mm、幅2mm程度。葉は径1.5-2.5mm程度、側部は楕円形で先は内曲し、面部は菱形で鈍頭-鋭尖頭。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎(果)が検出された。淡-灰褐色、長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度のやや偏平な長楕円体。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、共に舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲穂を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

(2) 灰像分析

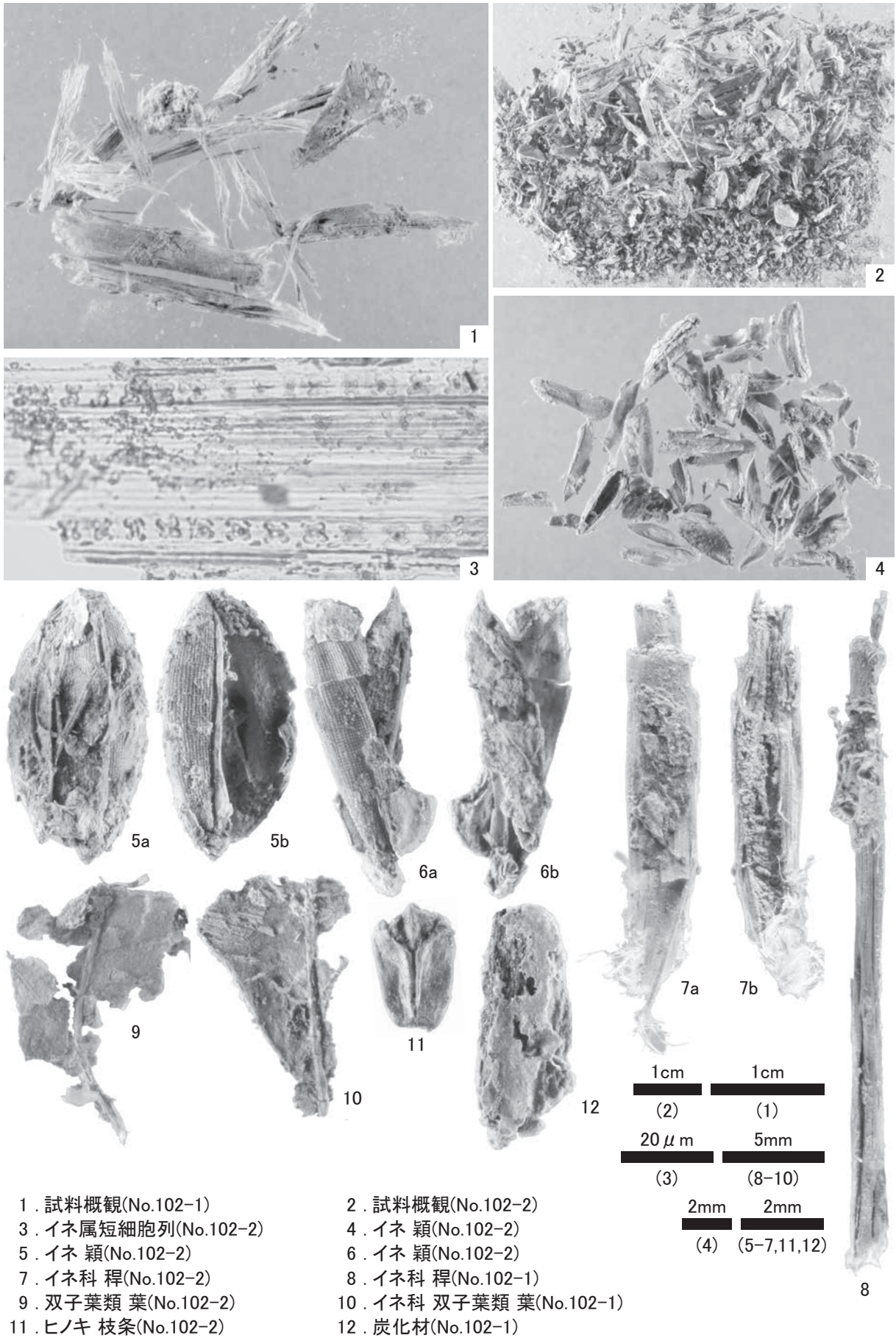
No. 102-1では、イネ属の機動細胞珪酸体を1個体、イネ属と思われる珪化組織片が複数個体認められた。No. 102-2では、イネ属の短細胞珪酸体が複数個体認められた。これらの結果から抽出した植物遺体はイネ属の葉部であったと判断される。

4. 考察

植物遺体試料 No. 102 からは、針葉樹のヒノキの枝条 1 個、栽培種のイネの穎が 50 個、草本のイネ科の稈が 2 個、双子葉類の葉が 4 個確認された。さらに、イネ属の機動細胞珪酸体および短細胞珪酸体が確認され、イネ属と思われる珪化組織片も確認されたことからイネ属の葉部も混在している。ヒノキ、イネ科、双子葉類は、周辺植生に由来すると考えられる。植物質食糧のイネは、穎がほぼ完形の状態で確認されたことから、食用前の稲籾の状態であったことが推定されるが、用途については、出土状況を確認し、総合的に検討する余地がある。

石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.



- 1. 試料概観(No.102-1)
- 2. 試料概観(No.102-2)
- 3. イネ属短細胞列(No.102-2)
- 4. イネ 穎(No.102-2)
- 5. イネ 穎(No.102-2)
- 6. イネ 穎(No.102-2)
- 7. イネ科 稈(No.102-2)
- 8. イネ科 稈(No.102-1)
- 9. 双子葉類 葉(No.102-2)
- 10. イネ科 双子葉類 葉(No.102-1)
- 11. ヒノキ 枝条(No.102-2)
- 12. 炭化材(No.102-1)

第77図 大型植物遺体・植物珪酸体

第3節 土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、吉田住吉山遺跡から出土した土器片 15 点である。内訳は、弥生土器 5 点、古墳時代の土師器 1 点、中世の土師器 9 点である。弥生土器は高坏や壺であり、古墳時代の土師器は壺、中世の土師器は皿や鍋などである。各試料の資料 No.、器種、時期、出土遺構などは一覧表にして第 8 表に示す。

第 8 表 胎土分析試料一覧および胎土分類

資料 No.	報告 No.	種別	器種	時期	出土地区	遺構	調査番号	胎土	
								鉱物・岩石	碎屑物
1	702	弥生土器	高坏	弥生	主郭	SK95	2003007	K1	II
2	724	弥生土器	壺	弥生	3号墳南側盛土の下層	包含層	2003007	K1	II
3	722	弥生土器	鉢	弥生	主郭	包含層	2003007	K2	II
4	705	弥生土器	壺	弥生	谷東	SK97	2003007	K1	II
5	701	弥生土器	壺	弥生	主郭	SK95	2003007	K1	II
6	402	土師器	壺	古墳	主郭	5号墳北棺	2003007	K1	II
7	250	土師器	皿A	中世	帯曲輪3	横堀	2003007	K2	I
8	206	土師器	皿A	中世	土塁	土塁1盛土	2003007	K2	I
9	156	土師器	皿B	中世	主郭	1号墳周溝(南)	2003007	K1	II
10	30	土師器	皿A	中世	主郭	SK41	2003007	K2	I
11	178	土師器	皿A	中世	主郭	B-14包含層	2003007	K2	I
12	286	土師器	皿	中世	帯曲輪1	横堀	2003007	K1	II
13	163	土師器	鍋	中世	主郭	土塁1東側	2003007	K1	II
14	158	土師器	鍋	中世	主郭	4号墳周溝(西)	2003007	K1	II
15	336	土師器	鍋	中世	堀切	堀切	2003007	K1	II

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

観察結果を第8表～第10表、第78図～第84図に示す。今回の試料は、全体的に砂粒の量が少ないために、組成が明瞭ではないが、出現傾向は把握される。鉱物片および岩石片の組成をみると、全試料ともに鉱物片は石英と斜長石を主体とし、岩石片はほとんどの試料でチャート・頁岩・砂岩のいずれかの堆積岩類と凝灰岩および流紋岩・デイサイトにより構成されている。試料によっては花崗岩類やホルンフェルスなどが微量～極めて微量含まれる。また、火山ガラスを比較的多く含む試料も認められる。火山ガラスは、平板状を呈するいわゆるバブル型の形態を示す。

これまでに兵庫県下各地における弥生土器～土師器の胎土分析で認められている鉱物・岩石組成については、共通する特徴を見出し、現在はA類からJ類までの分類が設定されている。そのうち、A類の特徴は、岩石片の種類構成が主にチャートや頁岩、砂岩などの堆積岩類と凝灰岩・流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類などの深成岩類の3者からなることであった。今回の試料の組成は、試料によっては花崗岩類も含まれることから、A類に分類しても良いが、今回の試料と同様に花崗岩類の出現傾向が不良の組成は、加古川下流域に分布する坂元Ⅱ遺跡、大中遺跡および溝之口遺跡から出土した弥生土器や土師器にも比較的多く認められている。これらの分析例では、それに相当する組成はA類に分類したが、ここではA類とはせずに新たな分類としてK類を設定する。後述するように、このような花崗岩類の出現傾向は、志染川水系流域の地質学的背景を反映していると考えられるからである。なお、火山ガラスを比較的多く含む組成をK2類とし、基本的な組成はK1類とする。K2類に分類される試料は、仮資料No. 3、7、8、10、11の5点であり、他の10点はK1類に分類される。

胎土中の砂の粒径組成(第79・81・83図)では、計数された砂粒の数量自体が小さいために、ヒストグラムで表された組成は不安定(計数量が増えれば組成が変化する可能性のあること)であり、ここでは胎土の特性としての分類は行わない。その中で、砂粒の計数量の多い試料をみると、弥生土器の鉢である資料No. 3と壺の資料No. 4は、細粒砂と極細粒砂をモードとし、中世の土師器の埴である資料No. 15は中粒砂と細粒砂をモードとしている。すなわち、後者の土器の方が、含まれる砂はやや粗粒傾向であることを示しており、器種の違いあるいは時代の違いによる材質の違いが現れている。

各試料の碎屑物・基質・孔隙の割合(第84図)をみると、資料No. 7、8、10、11の4点は、10%前後の値を示し、他の試料が15～20%の値を示すことに比べて有意に低いと言える。ここでは碎屑物の少ない4点をI類とし、他の試料をII類とする。

以上述べた試料の胎土分類をまとめて第8表に併記する。

第9表 薄片観察結果(1)

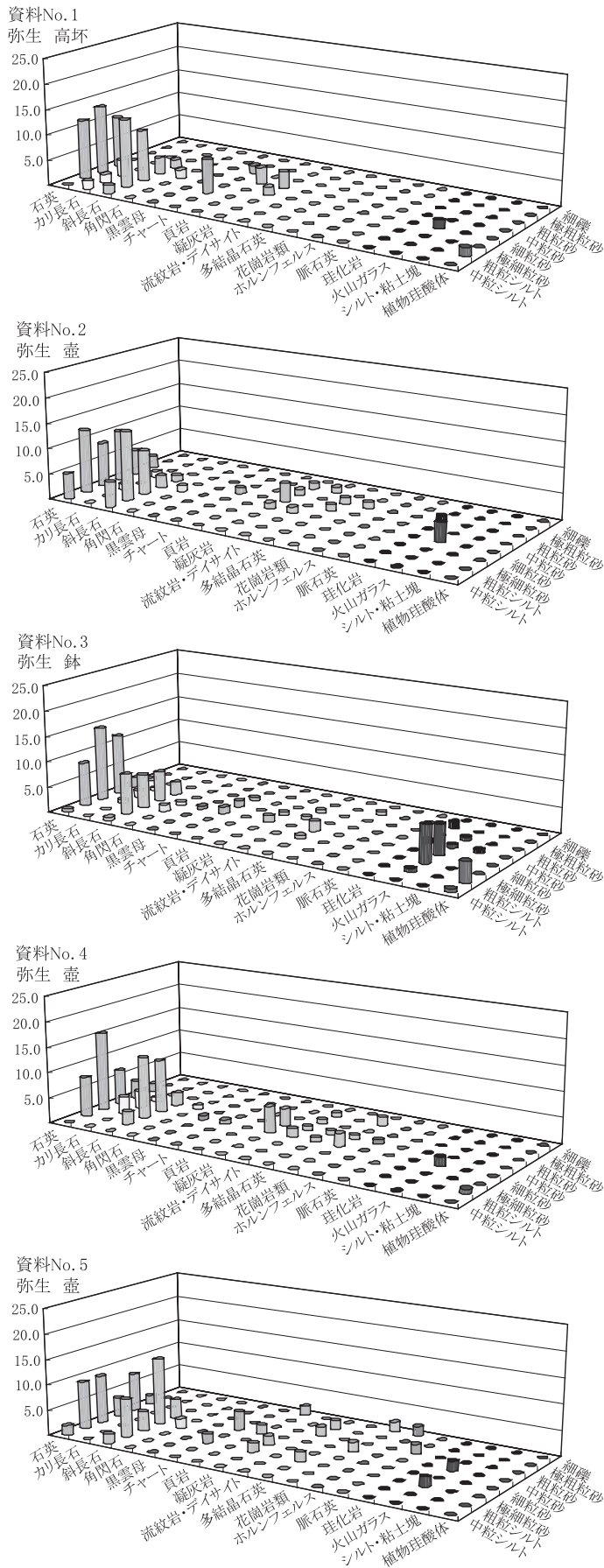
資料 No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計								
		鉱物片							岩石片							その他											
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	ホルンフェルス		脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	酸化鉄結核	シルト・粘土塊	植物片	植物珪酸体
1	細礫																										0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂								1																		1
	中粒砂			1						2		2															5
	細粒砂	6		2	1							1							1		1						12
	極細粒砂	8	2	6						4													3				23
	粗粒シルト	7	1	8																					1	17	
	中粒シルト		1	1																							2
	基質																										305
孔隙																										8	
2	細礫																										0
	極粗粒砂											1	1														2
	粗粒砂	2										1		1	1					1							6
	中粒砂	4	1	1					1			3		1									3				11
	細粒砂	8		2	1							1	1														16
	極細粒砂	7	1	7																							15
	粗粒シルト	10		11																							21
	中粒シルト	4		4					1																		9
	基質																										423
孔隙																										11	
3	細礫																										0
	極粗粒砂														1						2						3
	粗粒砂	1							1			1									1	1					4
	中粒砂	3	1	4					2			1	1							1	1		1				15
	細粒砂	18	2	9	1			1	2			2		3							9						47
	極細粒砂	22	1	10	2									1							11						47
	粗粒シルト	13		12		1															1				6	33	
	中粒シルト	1		1																					1	3	
	基質																										797
孔隙																										44	
4	細礫																										0
	極粗粒砂										1		1		2	1											5
	粗粒砂	2											1												1	4	
	中粒砂	4	1	3	1							4	1	1	1		1									17	
	細粒砂	8	4	12				1	1			6	2	1	3						2					40	
	極細粒砂	18	4	14																						36	
	粗粒シルト	9		3																					1	13	
	中粒シルト																									0	
	基質																										517
孔隙																										21	
5	細礫									1					1		1									3	
	極粗粒砂												1													1	
	粗粒砂	1											1						1							3	
	中粒砂	4		2					2	1	1				1						1					12	
	細粒砂	2		7	1								1													11	
	極細粒砂	5		2					1	1			1	1							1					12	
	粗粒シルト	5		4																						9	
	中粒シルト	1		1																						2	
	基質																										251
孔隙																										9	

第10表 薄片観察結果(2)

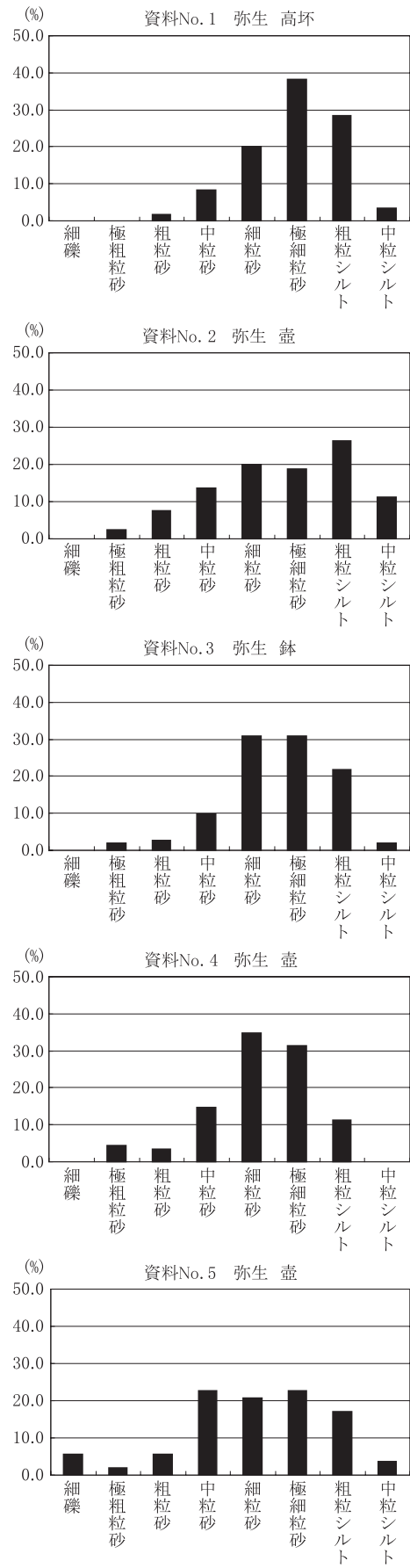
資料 No.	砂粒 区分	砂粒の種類構成																	合計								
		鉱物片							岩石片							その他											
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	ホルンフェルス		脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	酸化鉄結核	シルト・粘土塊	植物片	植物珪酸体
6	細礫																										0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂											1	1														2
	中粒砂	1		1						1	1	1															5
	細粒砂	5		1														1									7
	極細粒砂	4		8	1																						13
	粗粒シルト	6	1	2																					1	10	
	中粒シルト	1																									1
	基質																									194	
孔隙																									6		
7	細礫																										0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂										1							1									2
	中粒砂																					2					2
	細粒砂	3		1																		1					5
	極細粒砂			2			1															3					6
	粗粒シルト			3																		2			2		7
	中粒シルト																										0
	基質																									186	
孔隙																									18		
8	細礫																										0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂																										0
	中粒砂	1		1										1								6					9
	細粒砂	2		4	1								1									8					16
	極細粒砂	1	1	2																		6			1		11
	粗粒シルト	1	1	6																					2		10
	中粒シルト			1																					1		2
	基質																									399	
孔隙																									7		
9	細礫																										0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂							1																			1
	中粒砂	4	1					2			1	1	1		1			1	1								13
	細粒砂	3	1	3				2		2		1	1					2	1								16
	極細粒砂	3	1	7		1					3											1					16
	粗粒シルト	2	2	6		1																					11
	中粒シルト	1																									1
	基質																									242	
孔隙																									10		
10	細礫																										0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂																										0
	中粒砂																										0
	細粒砂												1														1
	極細粒砂								1																		1
	粗粒シルト	2	2	5																		1			3		13
	中粒シルト			1																							1
基質																									290		
孔隙																									3		

第11表 薄片観察結果(3)

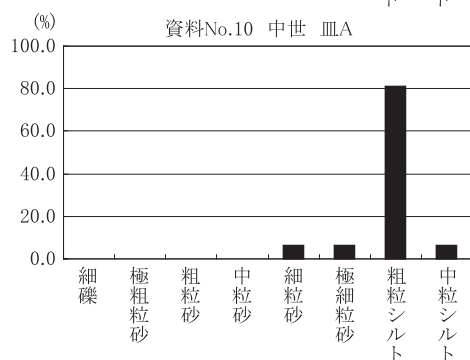
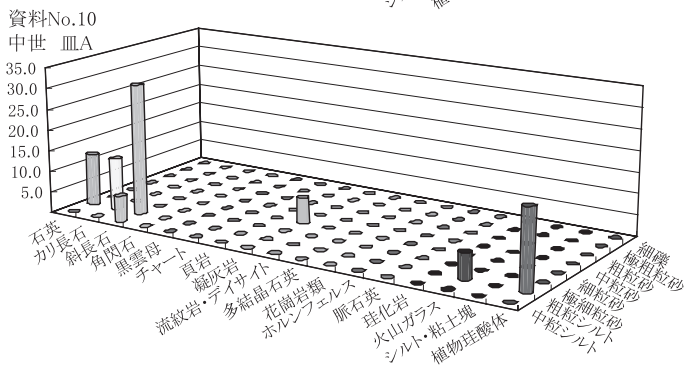
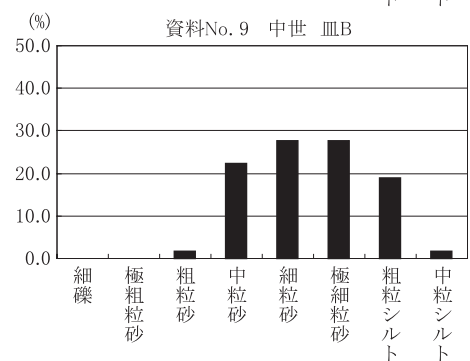
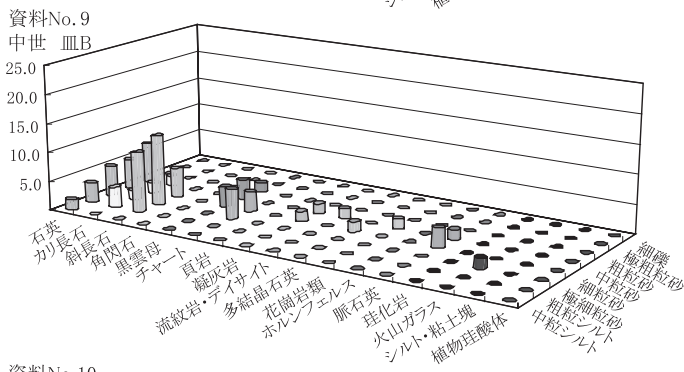
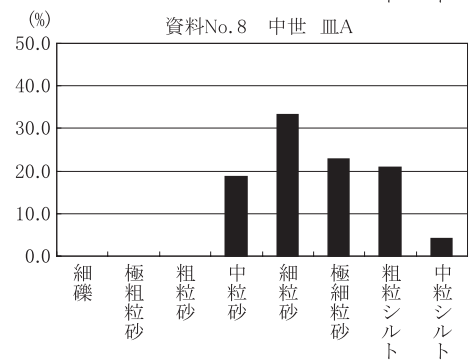
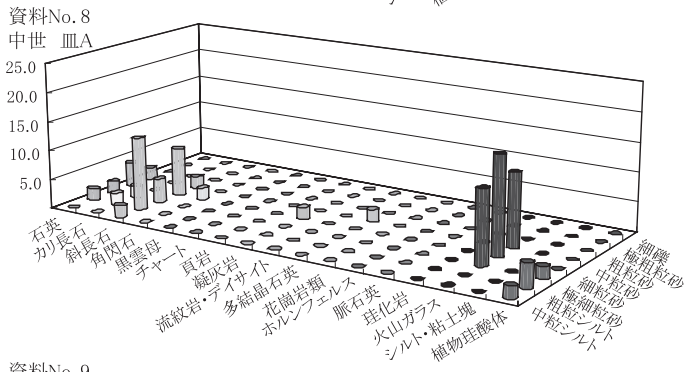
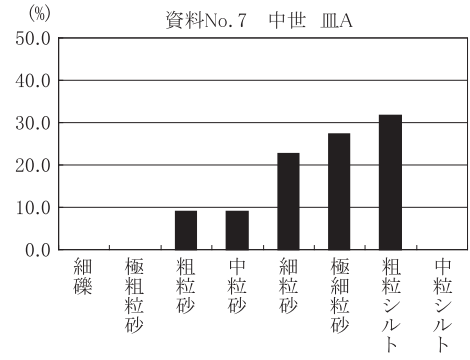
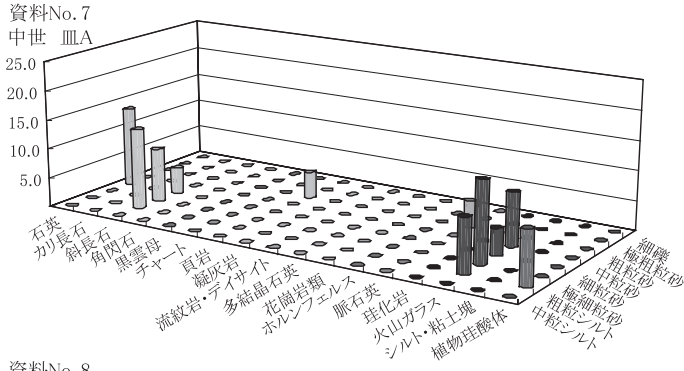
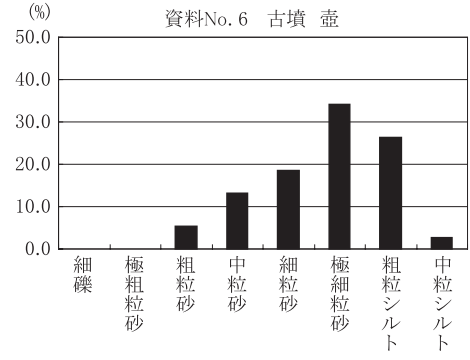
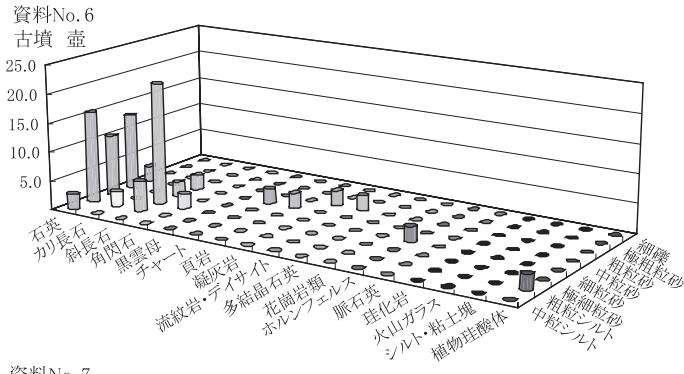
資料 No.	砂粒 区分	砂粒の種類構成																	合計								
		鉱物片							岩石片							その他											
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	ホルンフェルス		脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	酸化鉄結核	シルト・粘土塊	植物片	植物珪酸体
11	細礫																										0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂				1																	1					2
	中粒砂																					2					2
	細粒砂			1	1								1									10					13
	極細粒砂			3																		14					17
	粗粒シルト	1		1																		7			2	11	
	中粒シルト																										0
	基質																										330
孔隙																										21	
12	細礫																										0
	極粗粒砂												1											1			2
	粗粒砂	3							1				1												1		5
	中粒砂	5							3				1	1				2							1		13
	細粒砂	8		2					2					6													18
	極細粒砂	8		2																							10
	粗粒シルト	9		5																						1	15
	中粒シルト	3		1																							4
	基質																										371
孔隙																										18	
13	細礫																										0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂		1							2				1								1	1				6
	中粒砂	2		2					1			1	1	1								1					8
	細粒砂	3		5									1	1													10
	極細粒砂	1		8						1																	10
	粗粒シルト	6		1						1																	8
	中粒シルト	1																									1
	基質																										223
孔隙																										3	
14	細礫																										0
	極粗粒砂												1					1			1						3
	粗粒砂	4		1					1			3	1	5			1	2		1							19
	中粒砂	6							2			2	2	2			3				1	1					18
	細粒砂	5		12					4			2		1				1			1	1					26
	極細粒砂	9	2	3						5				1								4					24
	粗粒シルト	7	1	1																					2	11	
	中粒シルト	4		1																							5
	基質																										403
孔隙																										2	
15	細礫																										0
	極粗粒砂																										0
	粗粒砂	10	1						1				2									1					15
	中粒砂	23	4	1					4	1		1	1	4	1					1	1	1	1	1			44
	細粒砂	30	4	3					2			1		4	1				1					1			47
	極細粒砂	5	1	2						1																	9
	粗粒シルト	7	4	4						2																2	19
中粒シルト	3																									3	
基質																										589	
孔隙																										21	



第78図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)

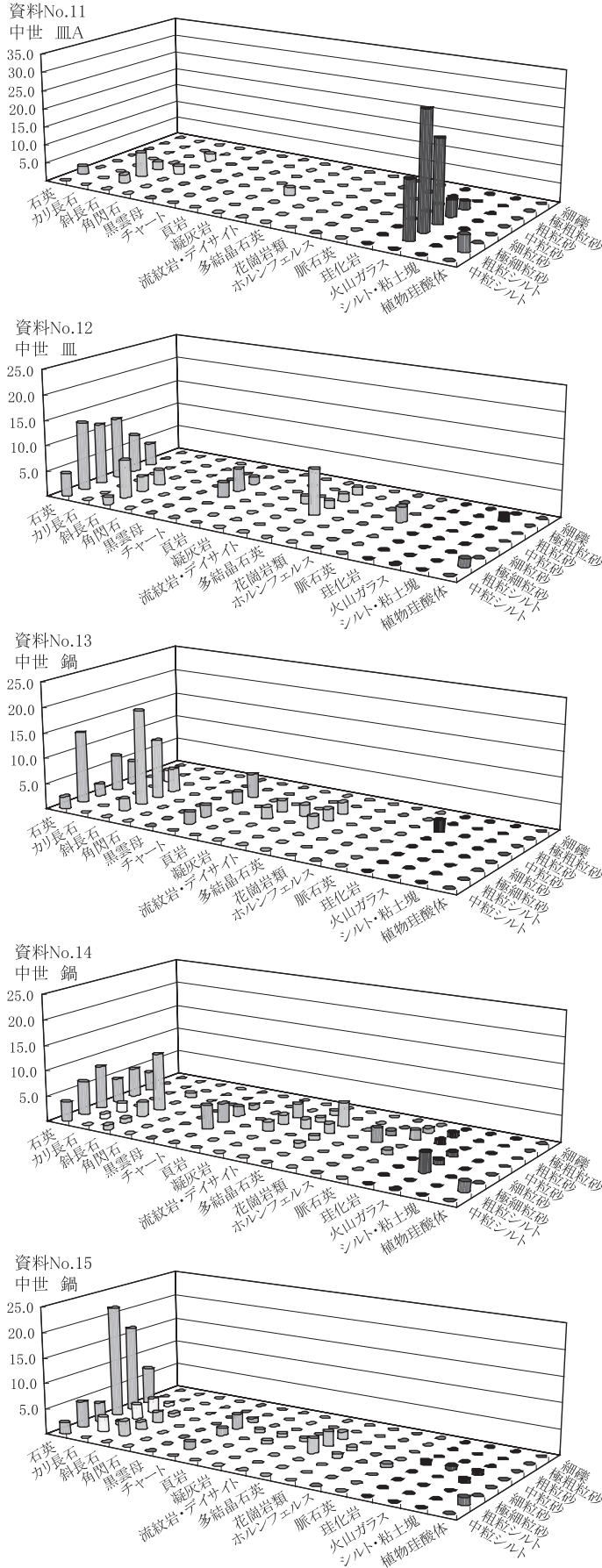


第79図 胎土中の粒径組成(1)

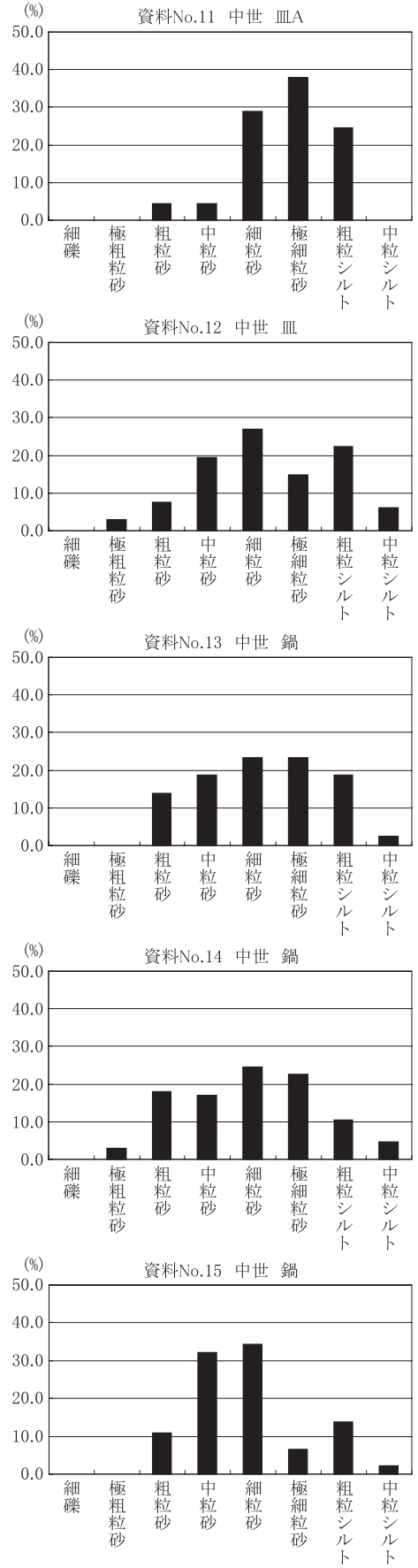


第80図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)

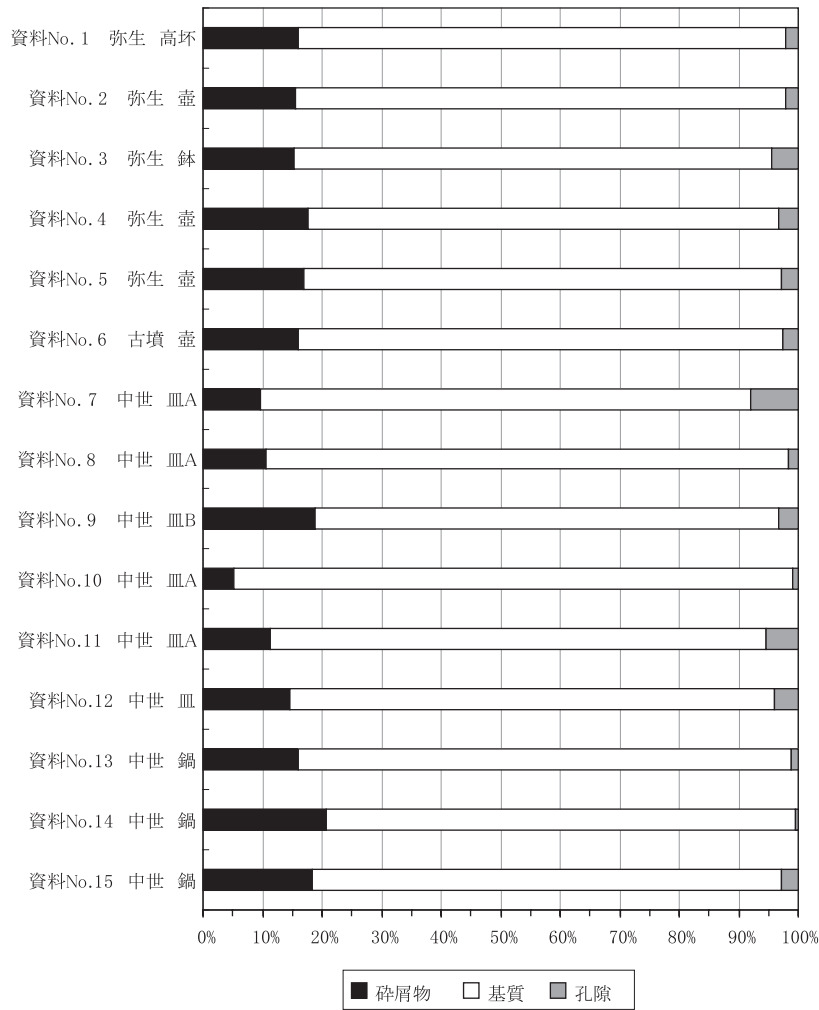
第81図 胎土中の粒径組成(2)



第82図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)



第83図 胎土中の粒径組成(3)



第84図 碎屑物・基質・孔隙の割合

4. 考察

吉田住吉山遺跡の位置する志染川流域および周辺地域の地質については、藤田・笠間(1983)に詳しい。その地質記載に従えば、遺跡の位置する丘陵尾根は第四紀前期更新世の海成粘土層や砂層・礫層および火山灰層からなる大阪層群上部層により構成されており、丘陵背後の平坦面は高位段丘とされ、大阪層群上部層の堆積面に相当するとされている。また、段丘を構成する礫層は、チャートおよび流紋岩類の礫が主体であると記載されている。また、吉田住吉山遺跡から見て志染川対岸の山地は新第三紀中新世の砂岩・泥岩・礫岩・凝灰岩からなる神戸層群が分布し、その上流域には神戸層群の背後に中生代白亜紀の流紋岩やデイサイト質の溶岩および火砕岩(凝灰岩)からなる有馬層群が広く分布している。志染川支流の山田川流域にも神戸層群と有馬層群が分布しているが、それらに加えて中生代ジュラ紀のチャート・砂岩・頁岩からなる丹波帯も分布している。さらに山田川の水源地は中生代白亜紀の六甲花崗岩の縁辺に達している。

このような志染川および山田川流域の地質学的背景は、今回K類とした胎土の鉱物・岩石組成と整合している。このことは、吉田住吉山遺跡から出土した弥生土器も古墳時代の土師器も中世の土師器も全て遺跡周辺域で作られた可能性のあることを示唆している。ただし、結果の項で述べたように、K類の組成は、加古川下流域に分布する遺跡から出土した弥生土器や土師器にも多く認められており、かつ猪木(1981)や河田ほか(1986)および日本の地質「近畿地方」編集委員会編(1987)などの記載により、加

第5章 吉田住吉山遺跡出土遺物の自然科学分析

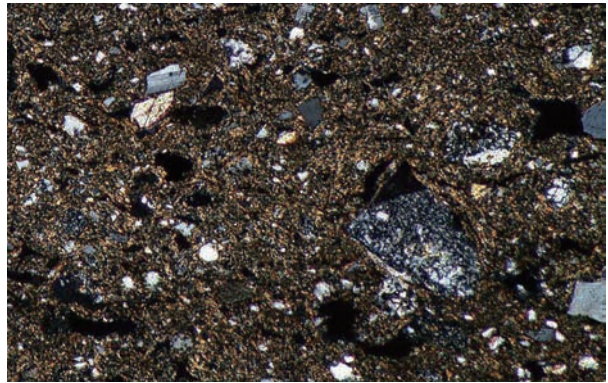
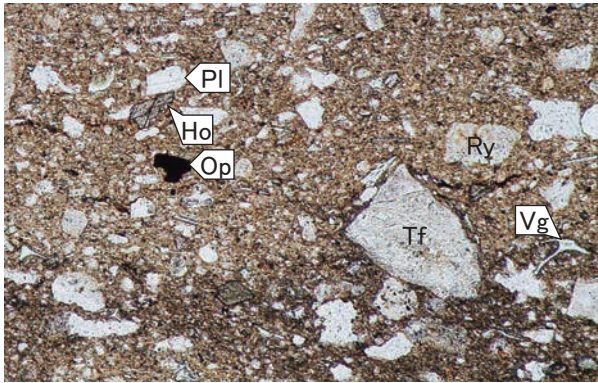
古川下流域の地質学的背景ともよく一致している。したがって、志染川を下った先である加古川下流域の地域で作られた土器が、吉田住吉山遺跡まで持ち込まれている可能性もあると考えられる。

なお、K2類の特徴である火山ガラスは、おそらく大阪層群中に狭在する火山灰層に由来すると考えられるから、火山ガラス自体は地域性を特定するものとはならない。しかし、K2類に分類された試料を見ると、弥生土器では唯一の鉢が唯一 K2類に分類され、中世の土師器では皿 A に対応した。おそらく、これらの器種においては、他の器種とは異なる製作事情(製作者か製作地あるいは材質の拘りなど)があった可能性が高いと考えられる。特に中世の皿 A については、碎屑物の量比も他の試料とは有意な差が認められており、中世の土師器においては今後も注目すべき器種であると言える。

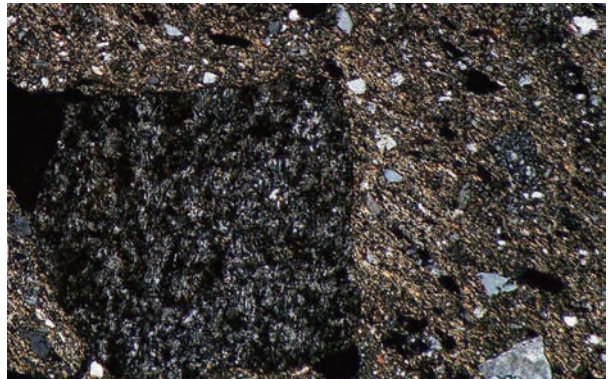
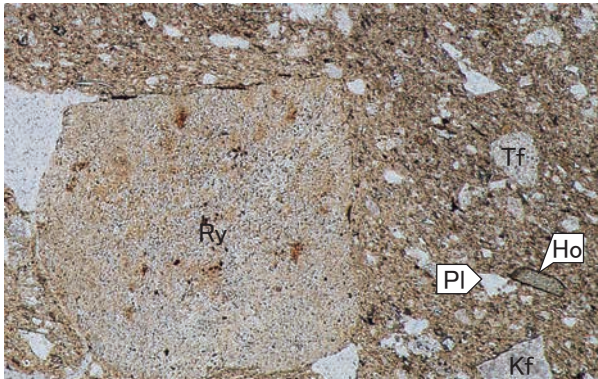
今後の課題とされる加古川水系流域内におけるより詳細な地域性を土器胎土の特性の中に見出すためには、各地域における土器の分析事例を蓄積することと、各所の自然堆積物の分析事例も得ていくことが必要であると考えられる。こうした検討を重ねていくことにより、胎土の示す地域性が、より詳細な範囲を示すこととなれば、今回の分析では把握することのできなかつた弥生時代、古墳時代、中世の各時期における土器の製作や使用に係わる違いも検出される可能性がある。

引用文献

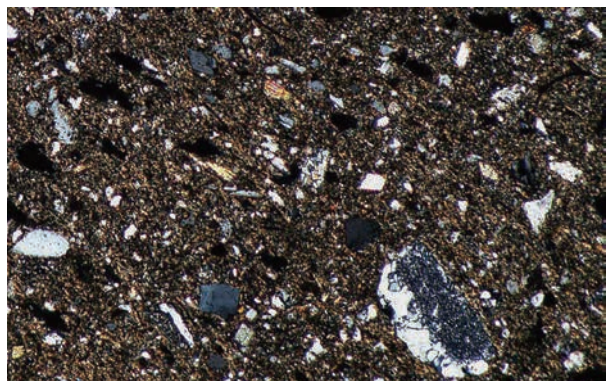
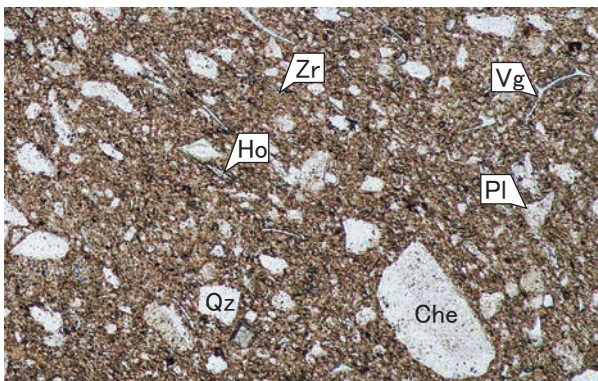
- 猪木幸男, 1981, 20 万分の 1 地質図幅 姫路. 地質調査所.
- 河田清雄・宮村 学・吉田史郎, 1986, 20 万分の 1 地質図幅 京都及大阪. 地質調査所.
- 松田 順一郎・三輪 若葉・別所 秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察 —岩石学的・堆積学的による—. 日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集, 120-121.
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会, 1987, 日本の地質 6 近畿地方. 共立出版, 297p.
- 藤田和夫・笠間太郎, 1983, 神戸地域の地質. 地域地質研究報告(5 万分の 1 図幅), 地質調査所, 115p.



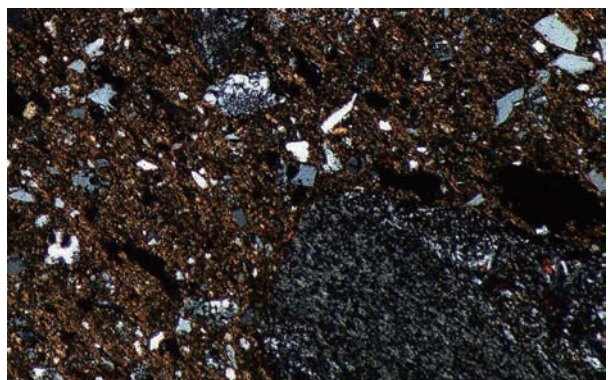
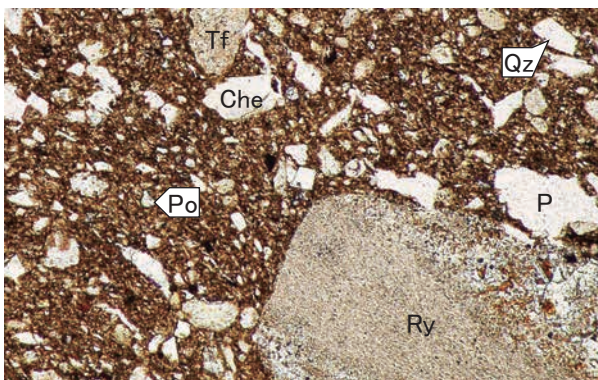
1.資料No.01(報告No.702 弥生土器 高坏 弥生 主郭 SK95 2003007)



2.資料No.02(報告No.724 弥生土器 壺 弥生 包含層 2003007)



3.資料No.03(報告No.722 弥生土器 鉢 弥生 包含層 2003007)



4資料No.04(報告No.705 弥生土器 壺 弥生 谷東 SK97 2003007)

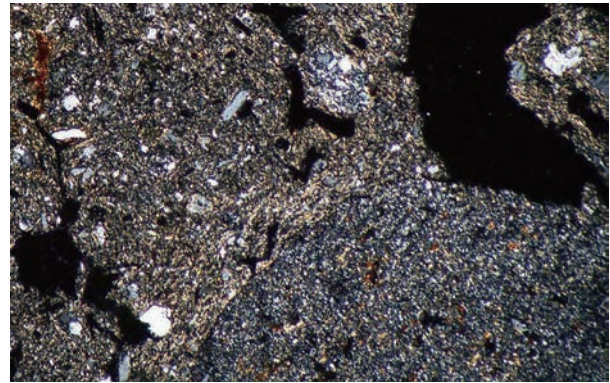
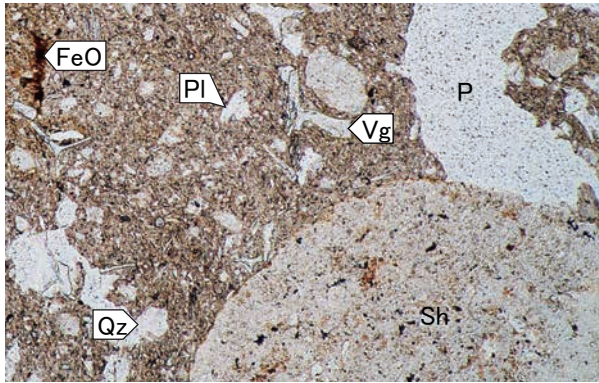
Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. Op:不透明鉱物.

Che:チャート. Tf:凝灰岩. Ry:流紋岩. Vg:火山ガラス. P:孔隙.

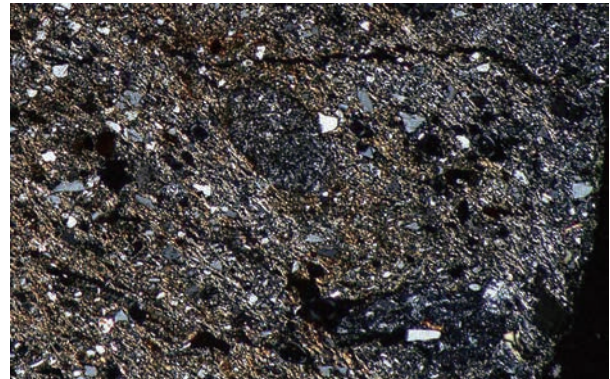
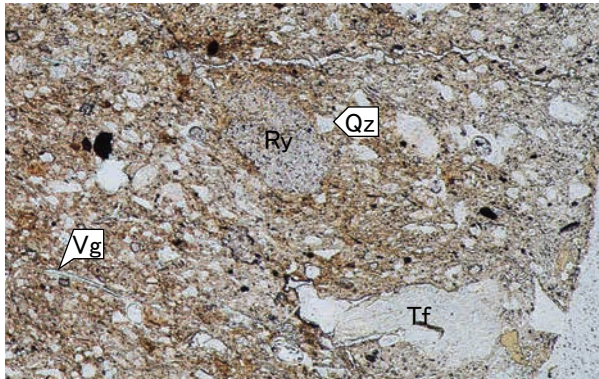
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第85図 胎土薄片(1)

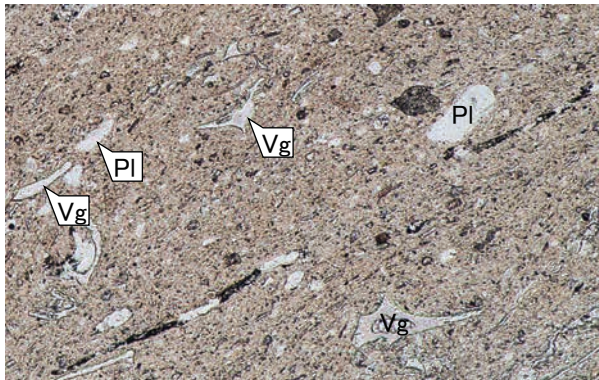
0.5mm



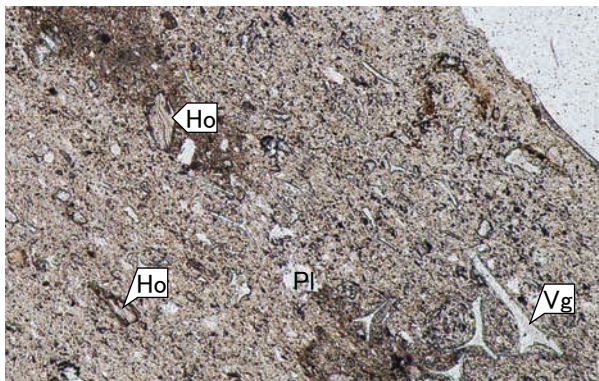
5.資料No.05(報告No.701 弥生土器 壺 弥生 主郭 SK95 2003007)



6.資料No.06(報告No.401 土師器 壺 古墳 主郭 5号墳北棺 2003007)



7.資料No.07(報告No.250 土師器 皿A 中世 帯曲輪3 2003007)

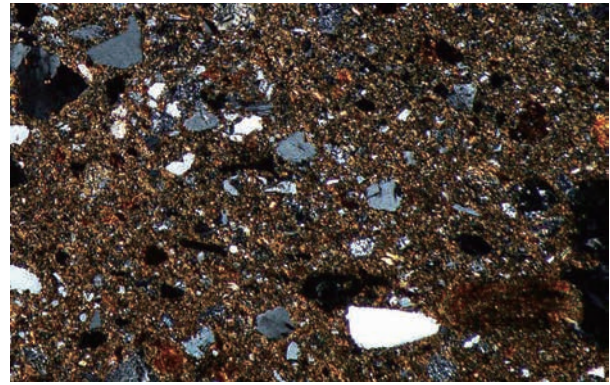
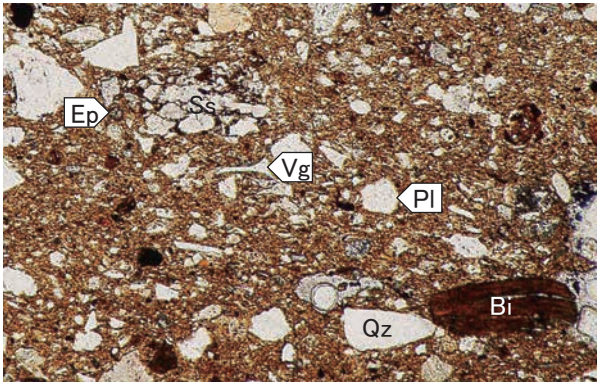


8.資料No.08(報告No.206 土師器 皿A 中世 土壘1 土壘1盛土 2003007)

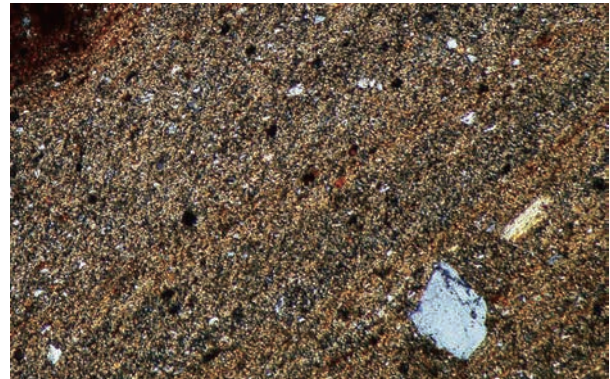
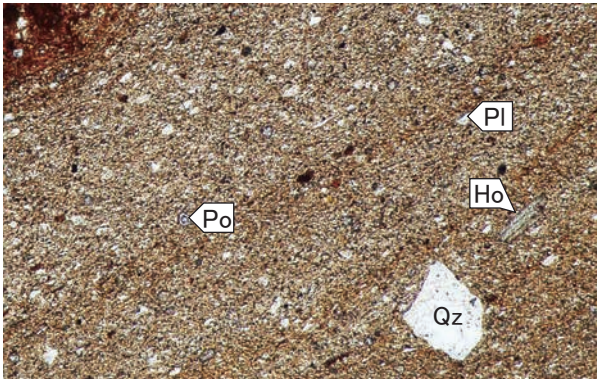
Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Sh:頁岩. Tf:凝灰岩. Ry:流紋岩. Vg:火山ガラス.
P:孔隙.

0.5mm

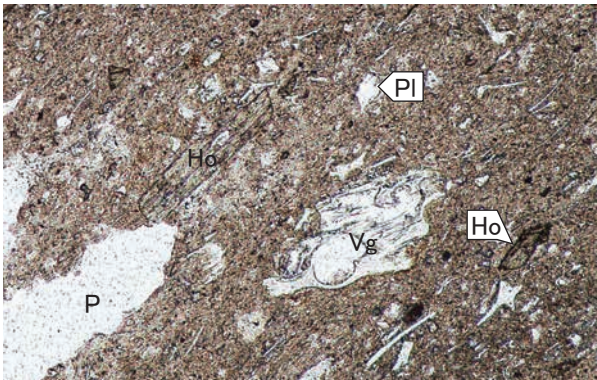
FeO:酸化鉄. 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



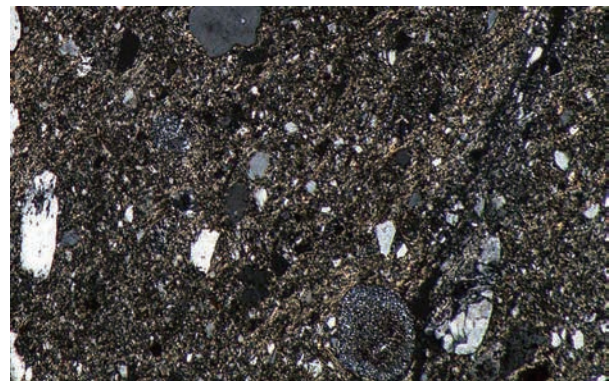
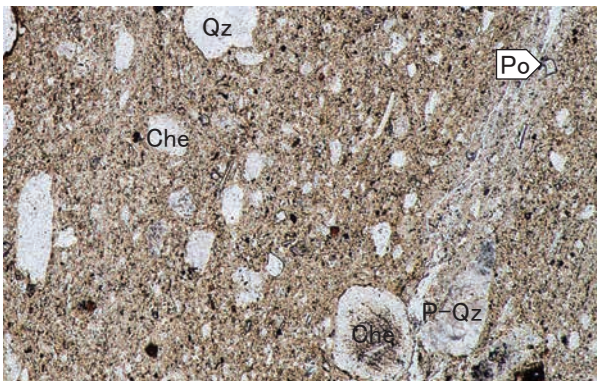
9.資料No.09(報告No.156 土師器 皿B 中世 主郭 1号墳周溝(南) 2003007)



10.資料No.10(報告No.30 土師器 皿A 中世 主郭 SK41 2003007)



11.資料No.11(報告No.178 土師器 皿A 中世 主郭 B-14包含層 2003007)



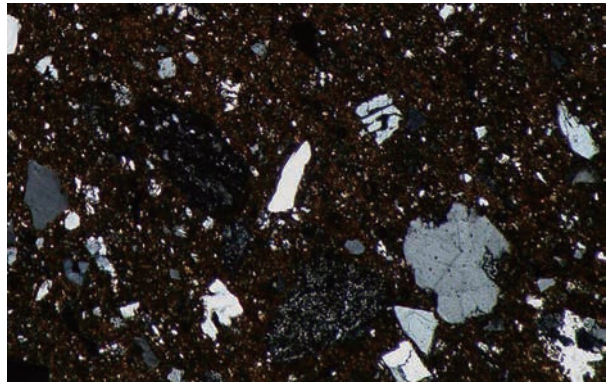
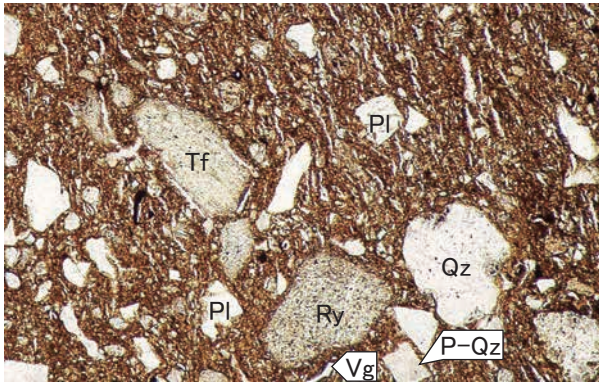
12.資料No.12(報告No.286 土師器 皿 中世 帯曲輪1 2003007)

Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Ep:緑レン石. Bi:黒雲母. Che:チャート. Ss:砂岩.
P-Qz:多結晶石英. Vg:火山ガラス. Po:植物珪酸体.

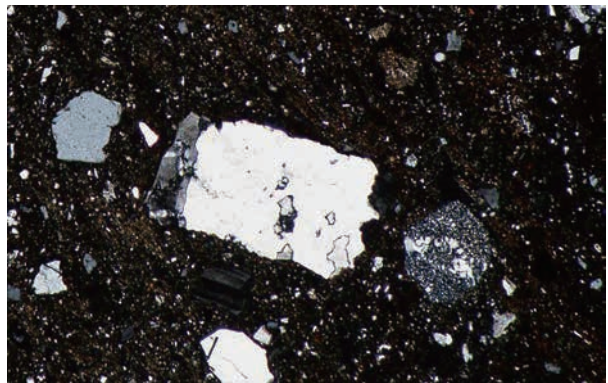
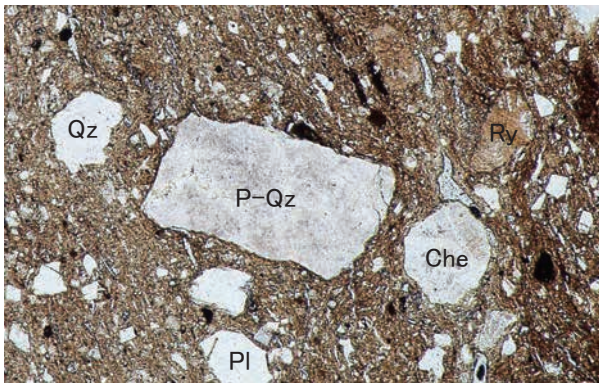
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

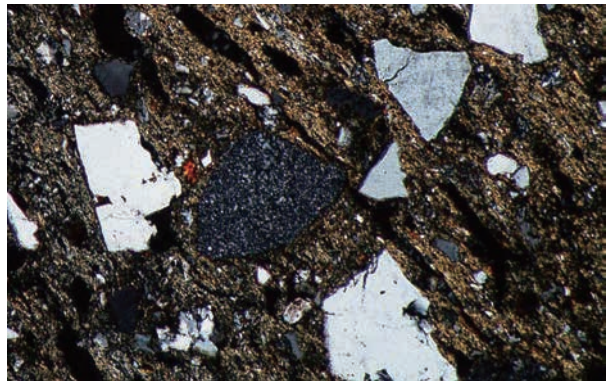
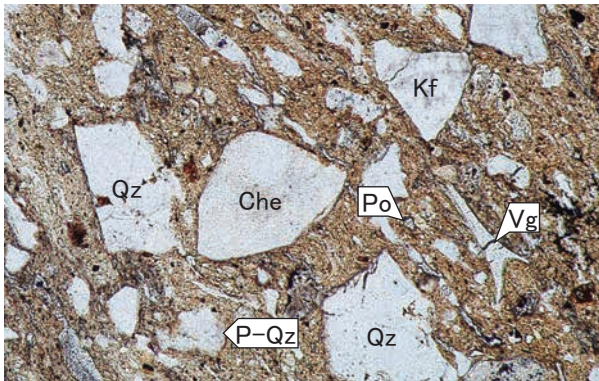
第87図 胎土薄片(3)



13.資料No.13(報告No.163 土師器 鍋 中世 土壘1 主郭 土壘1東側 2003007)



14.資料No.14(報告No.158 土師器 鍋 中世 主郭 4号墳周溝(西) 2003007)



15.資料No.15(報告No.336 土師器 鍋 中世 堀切 2003007)

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Che:チャート. Tf:凝灰岩. Ry:流紋岩.

P-Qz:多結晶石英. Vg:火山ガラス. Po:植物珪酸体.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

第88図 胎土薄片(4)

0.5mm

第4節 吉田住吉山遺跡出土須恵器の産地問題

三辻利一（大阪大谷大学）

1. はじめに

粘土は岩石が一旦溶解した溶液中から、粘土鉱物が再結晶してできたものである。したがって、シリカ (SiO_2) とアルミナ (Al_2O_3) が主体となる。ただ、真正溶液から粘土鉱物が再結晶したものであれば、粘土鉱物の化学式は $\text{SiO}_2 \cdot m\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot n\text{H}_2\text{O}$ (粘土の理論的化学式) で表示されるはずである。しかし現実に自然界に産する粘土や、それを素材とした土器の蛍光X線スペクトルやガンマ線スペクトルをみると、岩石同様、殆どすべての元素が観測される。このことはシリカとアルミナは真正溶液から再結晶したのもではなく、コロイド溶液から再結晶したものであることを示す。もちろん、コロイド粒子は母岩を構成した鉱物の微粒子と考えられる。これらのコロイド粒子が粘土鉱物の集合体である粘土中に包含されることになったと推定される。これらの鉱物微粒子の化学特性が粘土の化学特性を支配していると考えられる。このように考えると、母岩の化学特性と粘土の化学特性、したがって、窯跡出土須恵器の化学特性は互いに関係があることが理解できる。どの程度に関係するかは実験データから示されることになる。

須恵器の産地問題の研究は粘土からではなく、製品の須恵器から出発した。そのために、生産地である窯跡出土須恵器がまとまるのか、さらに、各地の窯間で地域差があるのかどうかは実験データを出してみなければわからない。このデータを出すためには長い年月を要するだろう。こうした考え方で、全国各地の窯跡出土須恵器を長い年月をかけて分析されることになった。もし、この研究を粘土から出発させると、粘土の地下における分布、不均質性などに関する情報をえることが非常に難しい。研究は挫折する可能性が大きいので、通常、元素分析による土器の産地問題の研究は製品の土器から出発させる。

窯跡出土須恵器 (粘土) に見られる地域差は岩石ほど大きくはないので、一旦、地域差を K-Ca、Rb-Sr の両分布図上に表示しなければならない。その上で、統計計算がなされる。産地推定の原点はまず、両分布図にある。両分布図上で消費地遺跡出土須恵器は窯跡に対応させることになる。本報告でも、吉田住吉山遺跡出土須恵器、中世陶器を両分布図上で窯跡に対応させて、産地候補を探ってみた。

2. 実験法

分析装置、及び、分析法と分析値の表示法は従来の方法と同じであるので、ここでは説明を割愛する。

3. 分析結果

分析データは第12表にまとめてある。この結果に基づいて両分布図を作成した。

まず、須恵器の分析結果は第89図に示してある。多くの須恵器は両分布図で神野大林領域によく対応する。神野大林窯群または、その周辺の窯群が産地の有力候補の一つであることが確かである。神出窯群の須恵器もこの領域の近くに分布するが、神出窯群の須恵器の化学特性はまだ十分に出されていないので、今回は神出領域との対応を検討しなかった。この他に産地候補がなければ、神野大林窯群が産地と決まる。第89図をよく点検すると、両分布図で神野領域に対応しないのは、No.10、No.12、No.20、No.22、No.23、No.30の6点である。これらの須恵器は神野大林窯群の製品ではない可能性が高い。神出窯群の製品でもないかと推定されている。

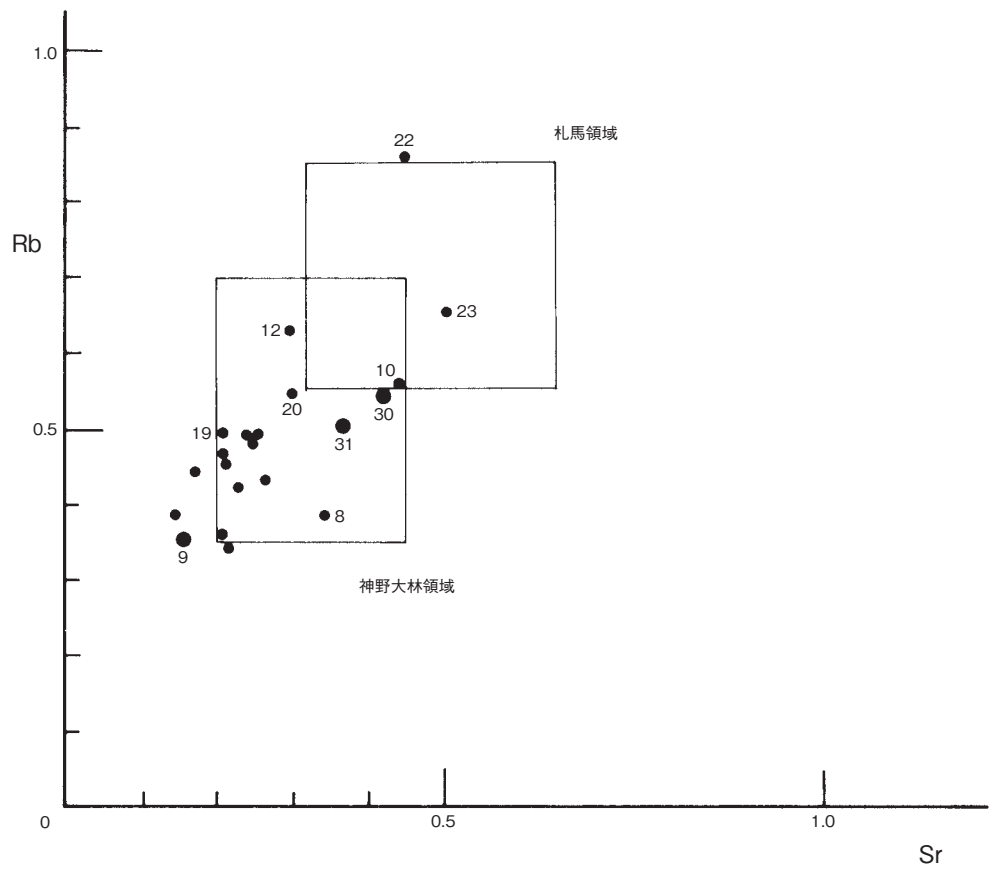
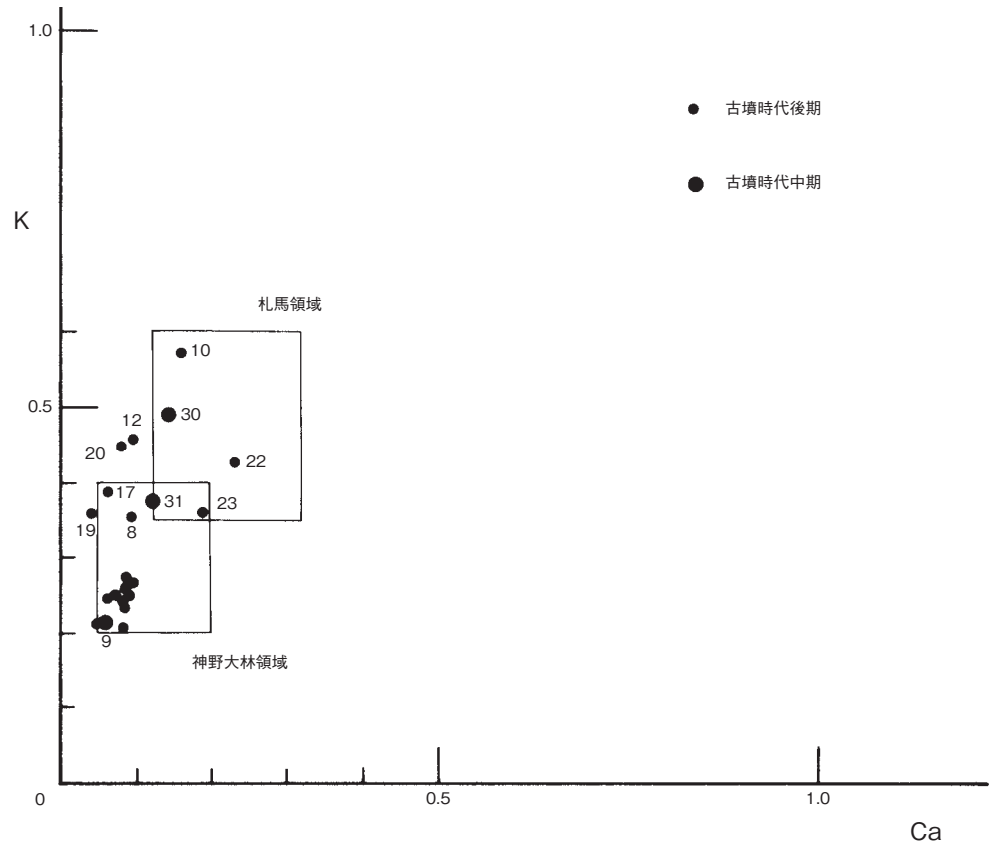
そのうち、No.22、No.23は全因子で類似しており、同じ生産地の製品とみられる。第89図では札幌領域に対応するので、札幌窯群が産地候補の一つに考えられる。土器型式でも検討してみることが必要である。また、No.10とNo.30も全因子で類似しており、同じ生産地の製品である可能性が高い。さらに、No.12、No.20も両分布図で近接して分布するが、Fe、Na因子でも類似しており、同じ生産地の製品とみられる。その産地は目下のところ不明である。これらの須恵器は土器型式でも互いに類似しているものと推察される。

中世陶器の分析結果は第90図に示されている。No.1は肉眼観察で備前陶器と推察されているが、筆者の手元にある備前陶器の分布領域は第90図に示す位置にあり、No.1はこれに対応しない。ただ、古い窯跡から出土する備前陶器の分析データは筆者の手元にはなく、古備前との対応はできない。したがって、今回はNo.1が備前陶器であるかどうかの判断はしなかった。ただ、No.1は胎土からみれば、他の6点の須恵器とは全く異なっており、別産地の製品である。また、CaとSrの量が多いところから、兵庫県内の製品ではない可能性が高い。一方、今回分析した他の6点の試料は両分布図ではまとまって分布しており、さらに、Fe、Na因子でも類似するところから、同じ生産地の製品とみられる。したがって、土器型式でも類似するものと推察される。その産地は目下のところ、不明であるが、Ca、Srの量が比較的少ない点から、このような化学特性をもつ兵庫県内で作られた製品である可能性が高い。これに対して、No.1は全く異なる胎土であり、別産地の製品である。

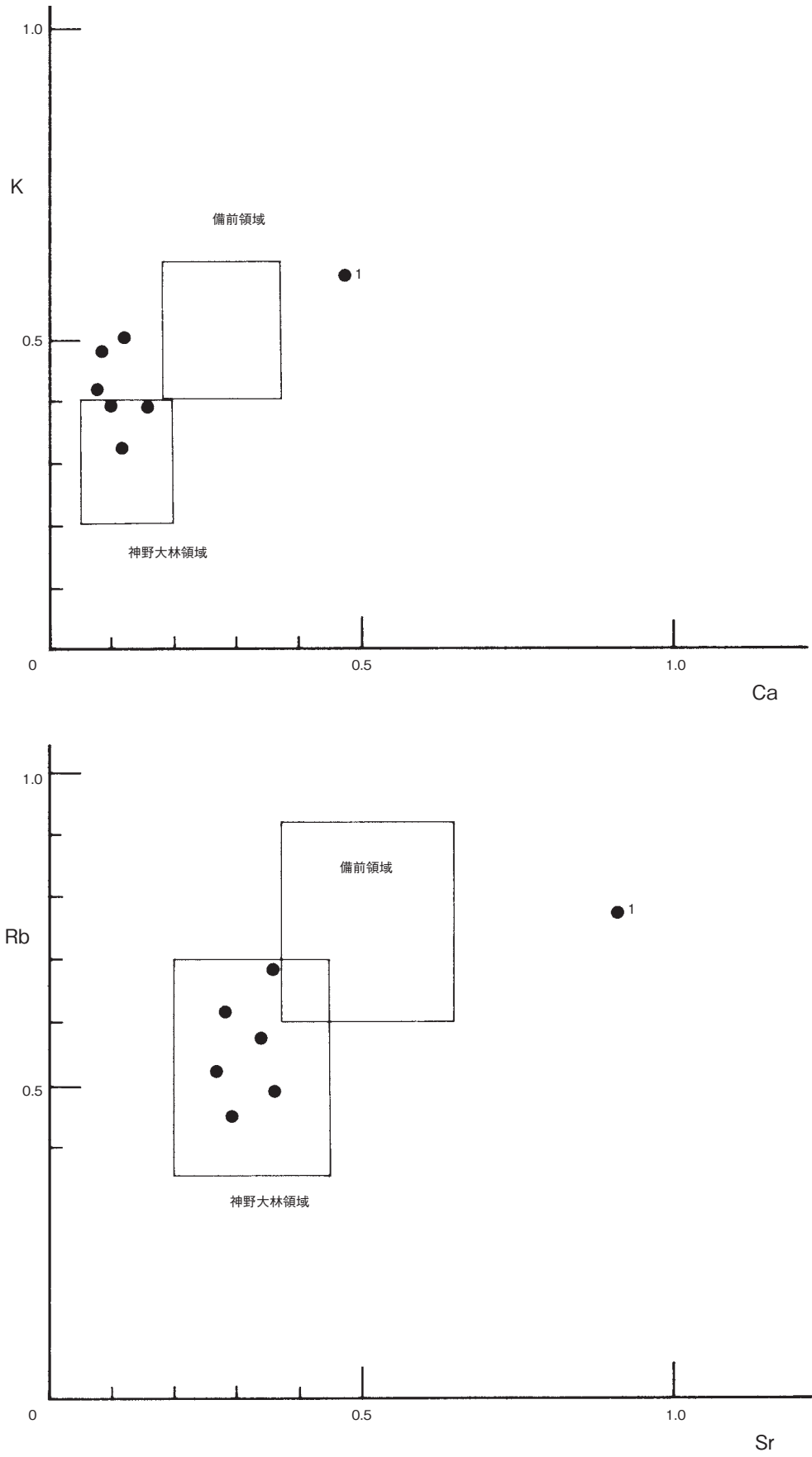
六古窯の中世陶器の化学特性はすでに出されているが、他の生産地の中世陶器の化学特性は出されておらず、今後の研究の課題である。2群間判別分析法をつかった中世陶器の産地推定においても、二つの母集団を如何にして選択するかについても現時点では決まっていない。当面、両分布図を作成して、消費地遺跡から出土する中世陶器の生産地を定性的に模索する研究が続くであろう。ただ、中世陶器に関しても、須恵器と同様、長石系因子を中核にした2群間判別分析法が適用され、その生産と供給問題の研究が推進されるであろう。そのデータが集積されると、中世陶器を通して、中世を考察するときに来るであろう。

第12表 分析資料一覧

資料番号	報告No.	三辻研No.	種別	器種	時期	遺構	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	8	22-311	備前焼	甕	中世	SK409	0.595	0.474	1.72	0.768	0.908	0.276
2	14	22-312	須恵器	甕	中世	SK662	0.385	0.155	2.03	0.686	0.361	0.152
3	142	22-313	須恵器	甕	中世	吉田住吉山2号墳周溝(西)	0.318	0.111	1.55	0.446	0.291	0.068
4	222	22-314	須恵器	鉢	中世	集石671	0.378	0.098	2.01	0.518	0.273	0.175
5	232	22-315	須恵器	鉢	中世	吉田住吉山7号墳周溝(南)	0.502	0.115	1.99	0.582	0.335	0.191
6	233	22-316	須恵器	碗	中世	土壘2盛土	0.517	0.077	2.15	0.489	0.364	0.159
7	277	22-317	須恵器	甕	中世	帯郭 横堀	0.478	0.085	1.46	0.621	0.287	0.101
8	406	22-318	須恵器	壺	古墳後期	吉田住吉山6号墳周溝(南)	0.345	0.095	2.07	0.379	0.343	0.124
9	407	22-319	須恵器	甕	古墳中期	吉田住吉山6号墳周溝(南)	0.208	0.054	1.74	0.353	0.155	0.035
10	401	22-320	須恵器	甕	古墳後期	吉田住吉山2号墳周溝	0.574	0.157	2.42	0.555	0.441	0.318
11	436	22-321	須恵器	坏H蓋	古墳後期	吉田住吉山9号墳棺中央	0.262	0.093	2.39	0.434	0.258	0.093
12	481	22-322	須恵器	壺	古墳後期	吉田住吉山9号墳周溝(北)	0.459	0.091	2.29	0.634	0.289	0.176
13	482	22-323	須恵器	壺	古墳後期	吉田住吉山9号墳周溝(北)	0.205	0.044	2.33	0.385	0.143	0.040
14	483	22-324	須恵器	壺	古墳後期	吉田住吉山9号墳周溝(北)	0.249	0.065	2.15	0.464	0.201	0.057
15	484	22-325	須恵器	横瓶	古墳後期	吉田住吉山9号墳周溝(北西)	0.265	0.090	2.00	0.484	0.245	0.088
16	486	22-326	須恵器	甕	古墳後期	吉田住吉山9号墳周溝(北西)	0.246	0.058	2.14	0.444	0.165	0.055
17	487	22-327	須恵器	坏H蓋	古墳後期	吉田住吉山9号墳墳丘	0.387	0.060	3.06	0.489	0.243	0.147
18	488	22-328	須恵器	坏H身	古墳後期	吉田住吉山9号墳墳丘	0.225	0.079	2.52	0.352	0.209	0.067
19	490	22-329	須恵器	短頸壺	古墳後期	吉田住吉山9号墳墳丘	0.355	0.042	2.21	0.494	0.205	0.083
20	423	22-330	須恵器	坏H蓋	古墳後期	吉田住吉山7号墳周溝(東)	0.448	0.074	2.70	0.547	0.302	0.218
21	426	22-331	須恵器	坏H身	古墳後期	吉田住吉山7号墳周溝(東)	0.197	0.081	2.45	0.337	0.223	0.065
22	428	22-332	須恵器	甕	古墳後期	吉田住吉山7号墳周溝(東)	0.431	0.229	2.15	0.860	0.446	0.200
23	429	22-333	須恵器	甕	古墳後期	吉田住吉山7号墳周溝(東)	0.358	0.194	2.06	0.650	0.499	0.113
24	431	22-334	須恵器	坏H身	古墳後期	吉田住吉山7号墳周溝(南)	0.237	0.079	2.13	0.419	0.226	0.071
25	434	22-335	須恵器	坏H蓋	古墳後期	吉田住吉山7号墳周溝(西)	0.259	0.092	2.11	0.488	0.249	0.074
26	445	22-336	須恵器	提瓶	古墳後期	吉田住吉山7号墳周溝(西)	0.254	0.089	2.35	0.450	0.206	0.074
27	492	22-337	須恵器	坏H蓋	古墳	吉田住吉山古墳群包含層	0.269	0.029	2.51	0.367	0.173	0.068
28	495	22-338	須恵器	坏H身	古墳	吉田住吉山古墳群包含層	0.501	0.143	2.46	0.596	0.317	0.196
29	497	22-339	須恵器	小型甕	古墳	吉田住吉山古墳群包含層	0.334	0.100	2.37	0.332	0.344	0.136
30	604	22-340	須恵器	高坏蓋	古墳中期	吉田32号墳	0.494	0.146	2.57	0.537	0.416	0.255
31	607	22-341	須恵器	甕	古墳中期	吉田32号墳	0.374	0.121	2.71	0.496	0.372	0.191
32	610	22-342	須恵器	甕	古墳	吉田古墳群SX02	0.208	0.046	1.54	0.333	0.193	0.068



第89図 吉田住吉山遺跡出土須恵器の兩分布図



第90図 吉田住吉山遺跡出土中世陶器の両分布図

第5節 岩石肉眼鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、吉田住吉山古墳群の古墳から出土した石棺材4点と吉田住吉山遺跡から出土した砥石3点、温石1点および硯1点の合計9点である(第12表)。試料には、順にNo.1~No.9間での番号が付されている。各試料の実測番号、部位などは一覧にして表4に示す。

2. 分析方法

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。個々の石材の正確な岩石名は、薄片作製観察、X線回折試験、全岩化学組成分析等を併用することにより調べることができるが、今回の鑑定では石材の種類を把握することを目的としているため、肉眼観察のみに留めている。

3. 結果

肉眼観察の結果を表4に併記する。石棺材4点のうち、3号墳の2点は黒雲母花崗岩に同定された。風化により、表面はマサ土化している。5号墳の石棺材はシルト岩と砂岩に同定された。3点の砥石のうち、2点は粘板岩であり、1点は流紋岩であった。また、温石は滑石片岩である。硯は粘板岩に同定された。

第12表 石材資料一覧

No.	報告番号	種類	古墳名	部位など	遺跡調査番号	年月日	岩石名
1		石棺材	吉田住吉山3号墳北棺	側石	2003007	20031212	黒雲母花崗岩
2		石棺材	吉田住吉山3号墳南棺	側石	2003007	20031212	黒雲母花崗岩
3		石棺材	吉田住吉山5号墳北棺	側石	2003007	20031212	シルト岩
4		石棺材	吉田住吉山5号墳南棺	側石	2003007	20031212	砂岩
5	S8	砥石	吉田住吉山遺跡	SK263	2003007	20031107	粘板岩
6	S5	砥石	吉田住吉山遺跡	6号墳周溝(南)	2003007	20031031	粘板岩
7	S6	砥石	吉田住吉山遺跡	堀切	2003007	20031106	流紋岩
8	S4	温石	吉田住吉山遺跡	2号墳周溝(西)	2003007	20030724	滑石片岩
9	S2	硯	吉田住吉山遺跡	堀切	2003007	20031104	粘板岩

4. 考察

石棺材に使用されている黒雲母花崗岩、シルト岩および砂岩は、神戸地域の地質図幅(藤田・笠間, 1983)に基づくと、いずれも志染川水系の地質に認められる石材である。黒雲母花崗岩は志染川最上流部に分布する後期白亜紀の六甲花崗岩に由来し、シルト岩および砂岩は始新統~暁新統の神戸層群に由来すると推測される。したがって、石棺材の石材には、志染川水系の河床礫や、遺跡周辺の段丘堆積物中の礫などが利用されたものと考えられる。

砥石や硯に使用されている粘板岩の由来となる地質としては、兵庫県および京都府においては二畳系~ジュラ系の丹波帯、石炭系上月層、二畳系三日月層などが挙げられる。硯や砥石の用材としては、京都市の鳴滝石などが優黒色で細粒緻密質な良質石材として知られているが、観察した石材は淡褐色~赤

褐色を呈し、やや粗い岩質を示す粘板岩であり、これらとは異なる岩相を示す。志染川上流部には、丹波帯が小規模に分布するほか、加西市にも粘板岩を含む古生層が分布しているため、遠方の産地を想定するよりも近隣地域より入手された石材とみるのが自然である。

砥石に使用されている流紋岩は、兵庫県下に広く分布する白亜系～古第三系の相生層群や有馬層群に由来する石材と推定される。相生層群や有馬層群の分布は広範であり、産地の特定はきわめて困難であるが、志染川最上流部にも有馬層群金剛童子溶岩の流紋岩も存在するため、在地性石材との比較も重要と思われる。

温石として使用されている滑石片岩の産地としては養父市周辺が考えられる。養父市周辺には古生界の丹後-但馬帯に属する超塩基性岩の関宮岩体が分布し、それに伴って滑石が産出する(山田, 1959)。この滑石は蛇紋岩の熱水交代作用により形成されたものであり、岩体東端部に位置する聖長鉱山では現在でも滑石の採掘が行われている。滑石はモース硬度1のきわめて軟質な鉱物であり、河川下流域においては採取できない鉱物である。そのため、温石に使用された滑石片岩は、原産地やそれにごく近い地域より採取されたものと推測することが可能である。

藤田和夫・笠間太郎, 1983, 神戸地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 地質調査所, 115p.
 山田正春, 1959, 兵庫県関宮地区クロム鉄鉱鉱床調査報告. 地質調査所月報, 10, 979-994.



1.No.1 石棺材 吉田住吉山3号墳北棺
 黒雲母花崗岩



2.No.2 石棺材 吉田住吉山3号墳南棺
 黒雲母花崗岩

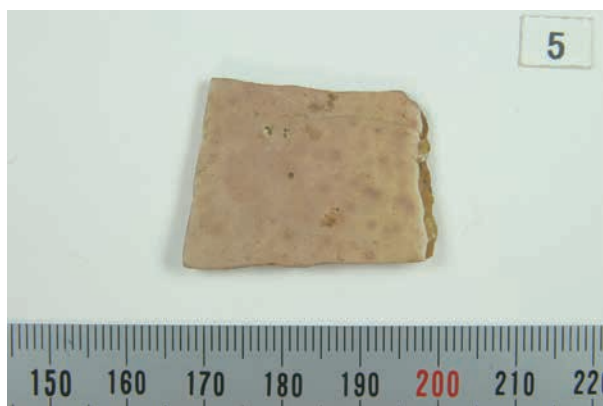


3.No.3 石棺材 吉田住吉山5号墳北棺
 シルト岩



4.No.4 石棺材 吉田住吉山5号墳南棺
 砂岩

第91図 石材(1)



5.No.5 砥石 吉田住吉山遺跡 粘板岩



6.No.6 砥石 吉田住吉山遺跡 粘板岩



7.No.7 砥石 吉田住吉山遺跡 流紋岩



8.No.8 温石 吉田住吉山遺跡 滑石片岩



9.No.9 硯 吉田住吉山遺跡 粘板岩

第92図 石材(2)

第6節 石材の蛍光X線分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料と方法

分析対象資料は吉田住吉山遺跡より出土した弥生時代のサヌカイト 10 点および黒曜石 1 点である。黒曜石は超音波洗浄を行った。サヌカイトは風化著しく、厚い風化層に覆われていたため、サンドブラストを用いて一部新鮮な面を表出させ、測定箇所とした。

分析装置は、(株)セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lを使用した。装置の仕様は、X線管はRhターゲット、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間 300sec、照射径 10mm、電流 1~63μA (デッドタイムが 20%未満になるよう設定)、電圧 50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 2004 など)。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps ; counts per second)について、以下に示す指標値を計算する。

$$1). Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$$

$$2). Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$$

$$3). Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$$

$$4). \log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$$

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸 Rb 分率-縦軸 Mn 強度×100/Fe 強度の判別図と横軸 Sr 分率-縦軸 log(Fe 強度/K 強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土試料のデータを照合して、産地を推定するものである。原石試料は、採取原石を割って

第14表 サヌカイト原石採取地と判別群名称

エリア	判別群	原石採取地(試料点数)
二上山	春日山	春日山みかん畑内(10)
讃岐	国分台1	自衛隊演習場付近(5)、神谷神社前(13)、高産霊神社谷(12)、国分台下みかん畑(5)、蓮光寺(10)
	国分台2	
	赤子谷・法印谷	赤子谷第1地点(5)、赤子谷第2地点(5)、法印谷(10)
	金山	北峰道路脇(10)、金山南麓(10)
	城山	城山南側(5)、城山北側(5)
	雄山・雌山	雄山(5)、雌山(5)
	双子山	双子山南嶺(10)

第15表 黒曜石原石採取地と判別群名称

都道府県	エリア	判別群	記号	原石採取地
北海道	白滝	八号沢群	STHG	赤石山山頂・八号沢露頭・八号沢・黒曜の沢・幌加林道(36)
		黒曜の沢群	STKY	
	赤井川	曲川群	AIMK	曲川・土木川(12)
青森	木造	出来島群	KDDK	出来島海岸(10)
	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜(7)、八森山公園(8)
秋田	男鹿	金ヶ崎群	OGKS	金ヶ崎温泉(10)
		脇本群	OGWM	脇本海岸(4)
岩手	北上川	北上折居2群	KKO2	北上川(9)
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前(10)
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	湯ノ倉(40)
		根岸群	SMNG	根岸(40)
	仙台	秋保1群	SDA1	土蔵(18)
		秋保2群	SDA2	
塩釜	塩竈群	SGSG	塩竈(10)	
新潟	新発田	板山群	SBIY	板山牧場(10)
	新津	金津群	NTKT	金津(7)
栃木	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢(22)
		七尋沢群	THNH	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)
長野	和田(WD)	鷹山群	WDTY	鷹山(20)、東餅屋(20)
		小深沢群	WDKB	小深沢(18)
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋西(11)
	和田(WO)	ブドウ沢群	WOBD	ブドウ沢(20)
		牧ヶ沢群	WOMS	牧ヶ沢下(20)
		高松沢群	WOTM	高松沢(19)
諏訪	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台(35)、星ヶ塔(20)	
蓼科	冷山群	TSTY	冷山(20)、麦草峠(20)、麦草峠東(20)	
神奈川	箱根	芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯(20)
		烟宿群	HNHJ	烟宿(51)
		鍛冶屋群	HNKJ	鍛冶屋(20)
静岡		上多賀群	HNKT	上多賀(20)
	天城	柏峠群	AGKT	柏峠(20)
東京	神津島	恩馳島群	KZOB	恩馳島(27)
		砂糠崎群	KZSN	砂糠崎(20)
島根	隠岐	久見群	OKHM	久見パースライト中(6)、久見採掘現場(5)
		箕浦群	OKMU	箕浦海岸(3)、加茂(4)、岸浜(3)
大分	姫島	観音崎群	HSKN	姫島(20)

第5章 吉田住吉山遺跡出土遺物の自然科学分析

新鮮な面を表出させた上で産地推定対象試料と同様の条件で測定した。サヌカイトについても同様の方法でサヌカイト原石を測定し、判別図法を適用した。第14表にサヌカイト、第15表に黒曜石の各原石採取地とそれぞれの試料点数を示す。

2. 分析結果

(1) サヌカイト

第93図・第94図に、サヌカイト原石の判別図と遺跡出土試料をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

判別図では、讃岐エリアに属する原石は一部を除き非常に近接しており重複部分も多く、明確な区別は難しい。しかし、二上山エリアの原石と讃岐エリアの原石は明確にプロットされる位置が異なり、十分に区別可能である。

遺跡出土試料のうち、3点が春日山の範囲、4点が国分台1の範囲、1点が金山と赤子谷・法印谷の重複域にプロットされた。分析No.3、No.6は、合致する判別群が無く、産地不明であった。産地不明の両者は、互いに近い位置にプロットされることから、比較した原石以外でかつ同一の産地のものである可能性が考えられる。第16表に産地推定結果を示す。比較対象となる原石産地が少ないため、他の産地の可能性が無いとは言い切れないが、少なくとも判別図の一致しなかった産地のサヌカイトでないといえる。

(2) 黒曜石

第95図・第96図に、黒曜石原石の判別図に分析No.2をプロットした図を示す。第95図では姫島エリア観音崎群 HSKN の範囲にプロットされたが、第96図ではやや下方にプロットされた。これは遺物の風化による影響と考えられ(望月, 1999)、HSKN に属する可能性が高い。また、肉眼観察においても姫島産特有の乳灰白色の外観を呈している。第16表に産地推定結果を示す。

3. まとめ

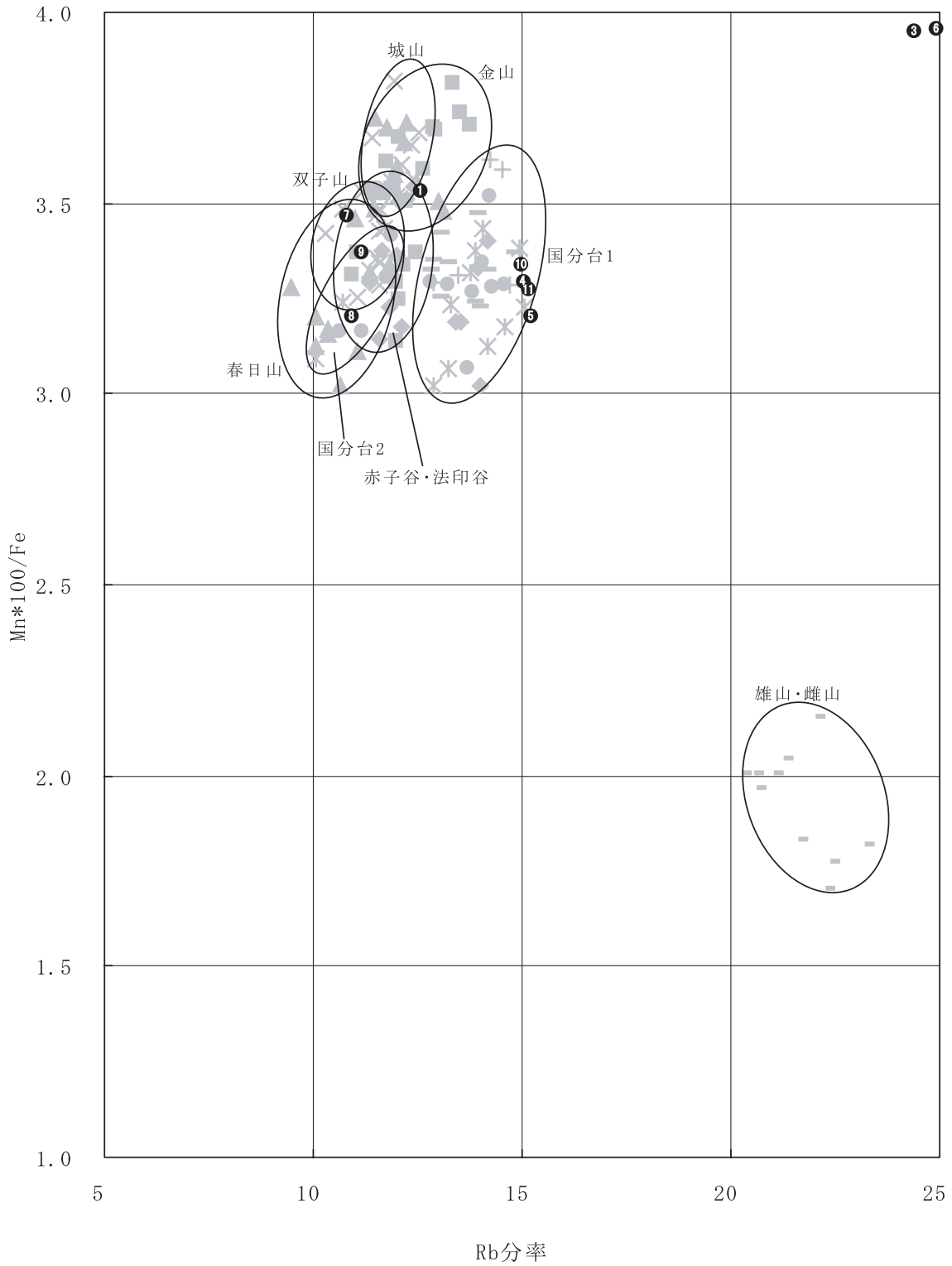
今回分析調査を実施した吉田住吉山遺跡より出土したサヌカイトおよび黒曜石の産地は、サヌカイト資料10点のうち、3点が二上山産、5点が讃岐地方産の可能性が高いと推定され、2点は産地を特定することができなかった。黒曜石資料1点は姫島産の可能性が高いと推定される。

第16表 出土石器の産地推定結果

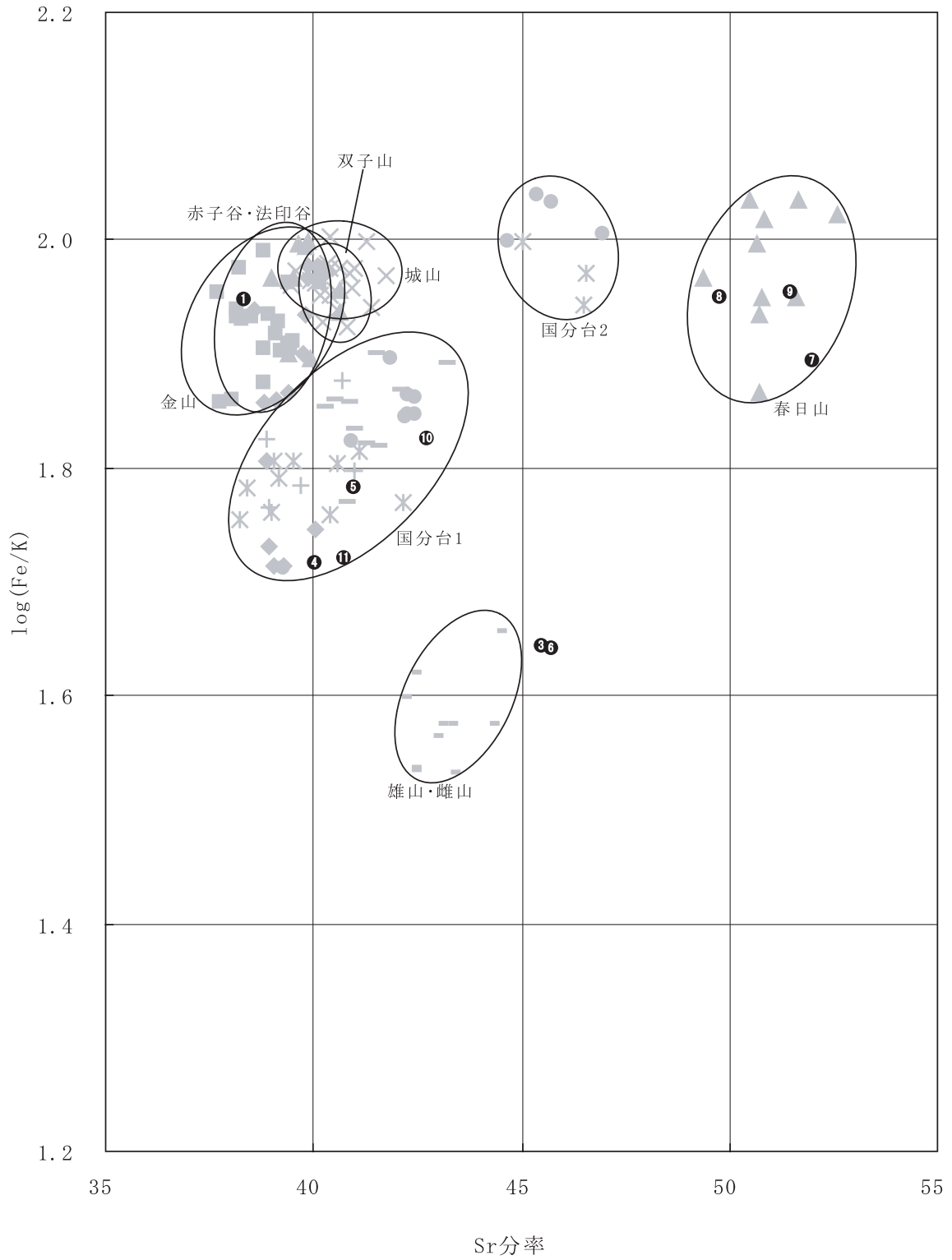
分析No.	報告No.	種別	判別群	エリア	打面の状態
1	S22	サヌカイト	金山or赤子谷・法印谷	讃岐	点状(自然面)
2	S28	黒曜石	HSKN?	姫島	
3	S29	サヌカイト	?	不明	欠・小円礫素材
4	S30	サヌカイト	国分台1	讃岐	平坦
5	S31	サヌカイト	国分台1	讃岐	線状
6	S32	サヌカイト	?	不明	欠
7	S33	サヌカイト	春日山	二上山	点状
8	S34	サヌカイト	春日山	二上山	平坦
9	S35	サヌカイト	春日山	二上山	欠
10	S36	サヌカイト	国分台1	讃岐	欠
11	S37	サヌカイト	国分台1	讃岐	平坦

望月明彦, 1999, 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2 一上和田城山遺跡篇一」:172-179, 大和市教育委員会.

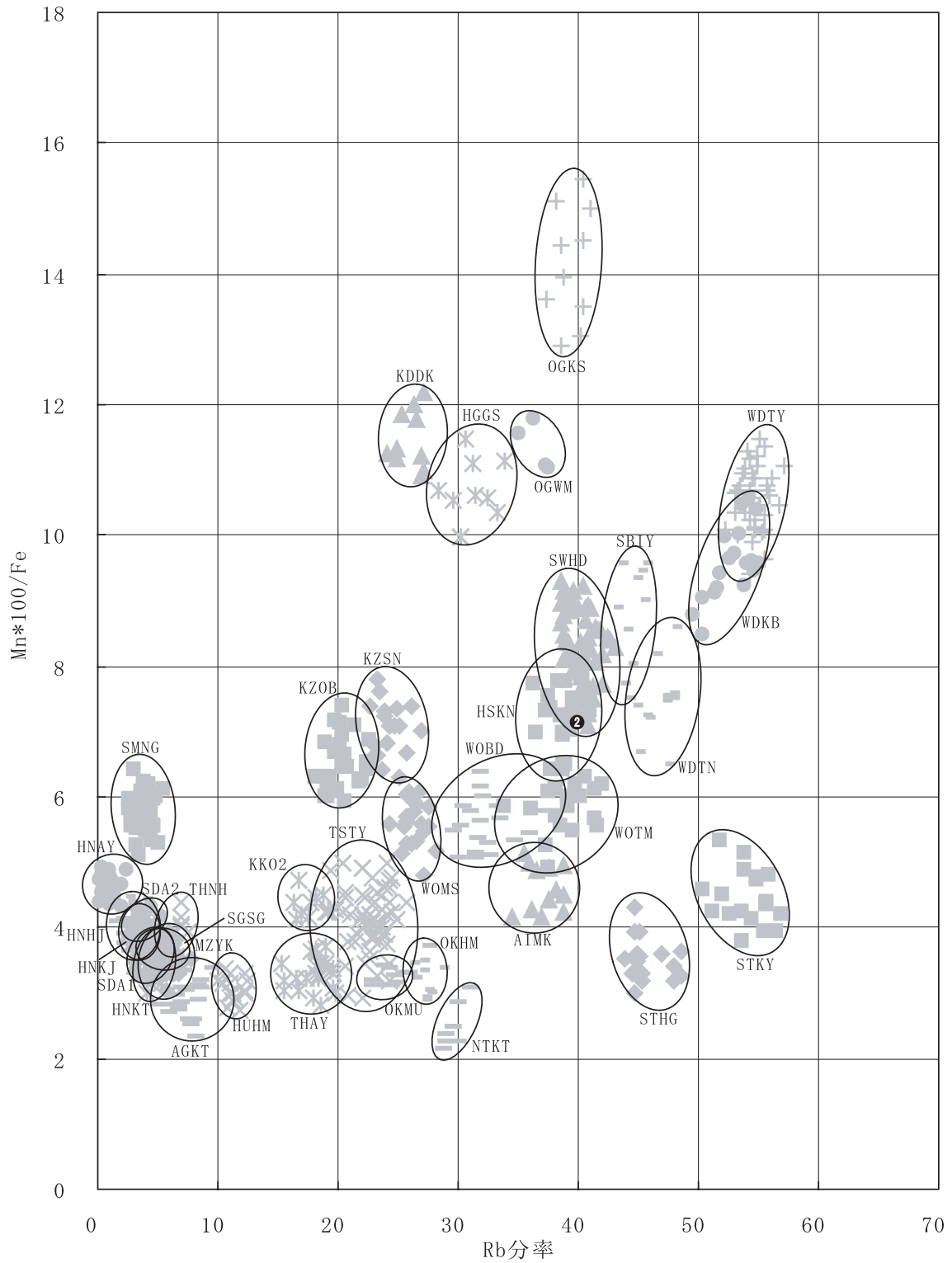
望月明彦, 2004, 用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定. かながわ考古学財団調査報告 167 用田大河内遺跡, 511-517, 財団法人かながわ考古学財団.



第93図 サヌカイトの産地推定判別図(1)



第94図 サヌカイトの産地推定判別図(2)



第95図 黒曜石の産地推定判別図(1)

第7節 吉田住吉山遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1. 測定対象試料

吉田住吉山遺跡は、兵庫県三木市志染町吉田（北緯 34° 47' 46"、東経 135° 0' 42"）に所在する。測定対象試料は、S K33 出土木炭（1：IAAA-91196）、S K34 出土木炭（2：IAAA-91197）、S K47 出土木炭（3：IAAA-91198）、S K93 出土木炭（4：IAAA-91199）、集石1 出土木炭（5：IAAA-91200）、S B01・P1 出土木炭（6：IAAA-91201）、集石10 出土貝殻（7：IAAA-91202）、堀切出土貝殻（8：IAAA-91203）、合計8点である。

2. 測定の意義

遺構の年代を特定する。

3. 化学処理工程

（1）炭化物の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

（2）貝殻の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い根・土等の表面的な不純物を取り除き、超純水に浸し、超音波洗浄を行なう。
- 2) 試料の表面を1Nの塩酸を用いてエッチング処理（Edg）する。その後、超純水で中性になるまで希釈し、80℃で乾燥する。なお、試料が特に少量の場合、塩酸の処理を行わない場合がある（Non）。
- 3) 試料を真空下でリン酸と反応させ、二酸化炭素を発生させる。以下（1）4）以降に同じ。

4. 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- （1）年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- （2）¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）

として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (%) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal10データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。なお、海洋試料については暦年較正年代を算出していない。

6. 測定結果

^{14}C 年代は、1が $650 \pm 30\text{yrBP}$ 、2が $610 \pm 30\text{yrBP}$ 、3が $580 \pm 30\text{yrBP}$ 、4が $1960 \pm 30\text{yrBP}$ 、5が $620 \pm 30\text{yrBP}$ 、6が $620 \pm 30\text{yrBP}$ 、7が $1010 \pm 30\text{yrBP}$ 、8が $1040 \pm 30\text{yrBP}$ である。4が弥生時代後期、7、8が古代、1~3、5、6が鎌倉～室町時代頃の年代を示した。

炭素含有率は、木炭が70%以上、貝殻が90%以上の十分な値であり、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-91196	1	遺構:SK33	木炭	AAA	-25.59 ± 0.69	650 ± 30	92.17 ± 0.37
IAAA-91197	2	遺構:SK34	木炭	AAA	-26.86 ± 0.69	610 ± 30	92.71 ± 0.35
IAAA-91198	3	遺構:SK47	木炭	AAA	-27.10 ± 0.80	580 ± 30	92.98 ± 0.37
IAAA-91199	4	遺構:SK93	木炭	AAA	-26.10 ± 0.48	1,960 ± 30	78.32 ± 0.32
IAAA-91200	5	遺構:集石1	木炭	AAA	-25.95 ± 0.63	620 ± 30	92.59 ± 0.38
IAAA-91201	6	遺構:SB01 P1	木炭	AAA	-26.51 ± 0.49	620 ± 30	92.63 ± 0.33
IAAA-91202	7	遺構:集石10	貝殻	Edg	2.26 ± 0.77	1,010 ± 30	88.16 ± 0.36
IAAA-91203	8	遺構:堀切 層位:中層	貝殻	Edg	1.35 ± 0.66	1,040 ± 30	87.91 ± 0.35

[#3138]

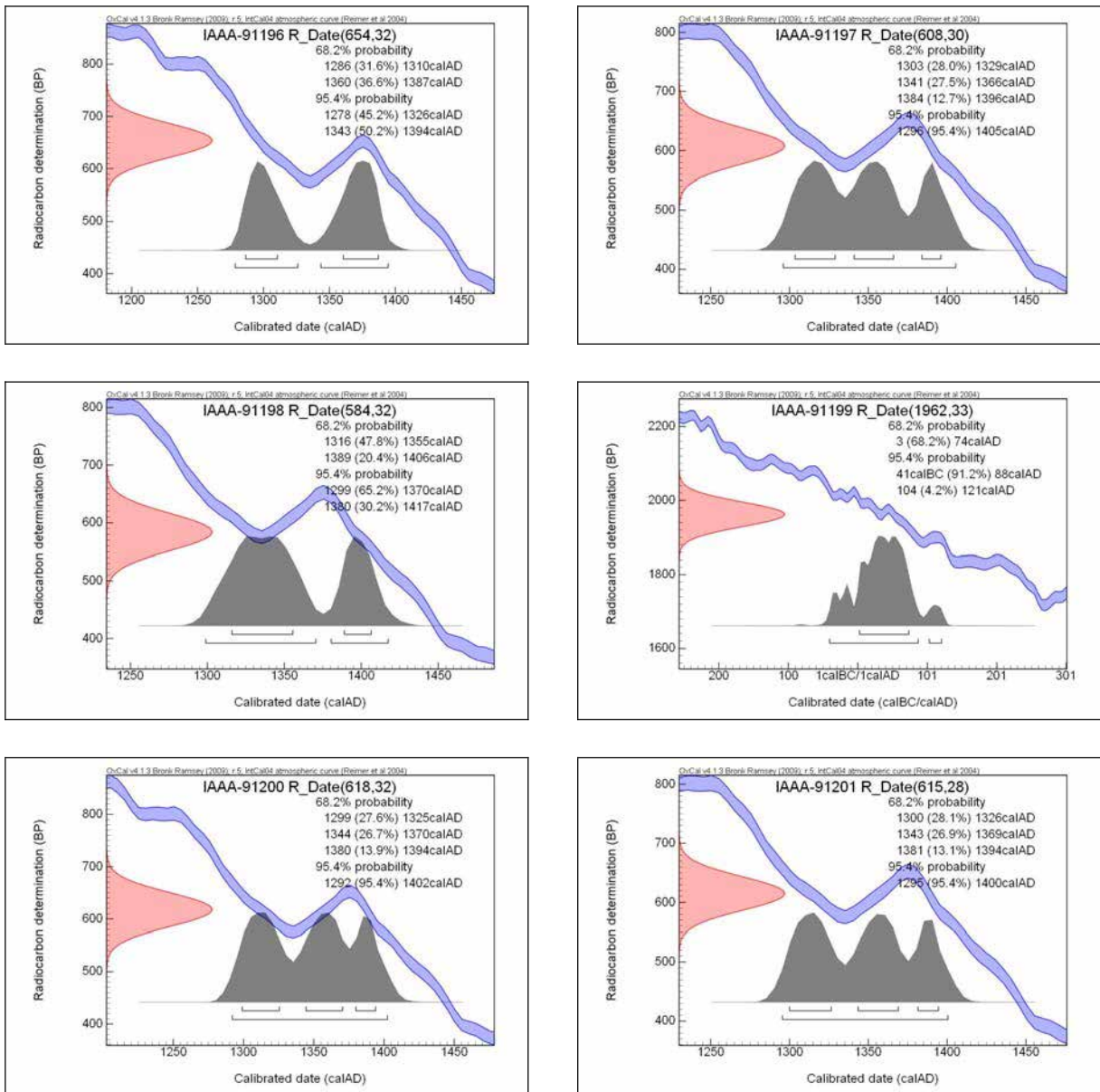
第7節 吉田住吉山遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

測定番号	δ ¹³ C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91196	660 ± 30	92.06 ± 0.35	654 ± 32	1286AD - 1310AD (31.6%) 1360AD - 1387AD (36.6%)	1278AD - 1326AD (45.2%) 1343AD - 1394AD (50.2%)
IAAA-91197	640 ± 30	92.35 ± 0.32	608 ± 30	1303AD - 1329AD (28.0%) 1341AD - 1366AD (27.5%) 1384AD - 1396AD (12.7%)	1296AD - 1405AD (95.4%)
IAAA-91198	620 ± 30	92.58 ± 0.34	584 ± 32	1316AD - 1355AD (47.8%) 1389AD - 1406AD (20.4%)	1299AD - 1370AD (65.2%) 1380AD - 1417AD (30.2%)
IAAA-91199	1,980 ± 30	78.15 ± 0.31	1,962 ± 33	3AD - 74AD (68.2%)	41BC - 88AD (91.2%) 104AD - 121AD (4.2%)
IAAA-91200	630 ± 30	92.41 ± 0.36	618 ± 32	1299AD - 1325AD (27.6%) 1344AD - 1370AD (26.7%) 1380AD - 1394AD (13.9%)	1292AD - 1402AD (95.4%)
IAAA-91201	640 ± 30	92.34 ± 0.32	615 ± 28	1300AD - 1326AD (28.1%) 1343AD - 1369AD (26.9%) 1381AD - 1394AD (13.1%)	1295AD - 1400AD (95.4%)
IAAA-91202	570 ± 30	93.16 ± 0.35	1,012 ±	2 3	
IAAA-91203	610 ± 30	92.72 ± 0.35	1,035 ±	2 3	

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第97図 [参考] 暦年較正年代グラフ

第8節 吉田住吉山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

1. いきさつ

吉田住吉山遺跡は兵庫県三木市志染町吉田字住吉山に所在する。以前より同地域は、和田村四合谷村ノ口付城跡として周知されていた（平成16年度より吉田住吉山遺跡と改称）。また室町時代と推定される主郭部や土塁下からは鍛冶炉が検出されており、鉄滓、鉄製品なども複数出土している。このため同地域での鉄器生産の実態を検討する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

2-1. 供試材

第17表に示す。鍛冶関連遺物8点、鉄製品6点、合計14点の調査を行った。

2-2. 調査項目

（1）肉眼観察

遺物の外観上の特徴を簡単に記載した。この所見をもとに分析資料採取位置を決定している。

（2）マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機を用いて低倍率で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

（3）顕微鏡組織

鉍滓の鉍物組成、金属部の組織観察や非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3μ と 1μ で鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、写真撮影を行った。なお金属鉄の調査では3%ナイトル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

（4）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

（5）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

鉄中非金属介在物の組成調査を目的とする。

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される物質ほど明るく、軽い元素で構成される物質ほど暗い色調で示される。これを利用して組成の違いを確認

後、定量分析を実施した。

(6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素 (SiO₂)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K₂O)、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化クロム (Cr₂O₃)、五酸化磷 (P₂O₅)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO₂) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

YSD-1 : 鍛冶滓 (M402)

(1) 肉眼観察 : 平面が不整長方形で 23 g と小型の鍛冶滓である。大きな破面はなく、ほぼ完形を呈し、滓の地の色調は黒灰色で、茶褐色の土砂が点々と固着する。表面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。また下面に 1 箇所小礫の噛み込みがみられる。

(2) 顕微鏡組織 : 第100図①~③に示す。上側 (①左上および②) は発達した淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) 主体で、非常に微細な白色樹枝状結晶ウスタイト (Wustite : FeO) が若干晶出する。一方下側 (①右下および③) では、比較的発達したウスタイト結晶が確認された。

(3) 化学組成分析 : 第 18 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 51.06% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.17%、酸化第一鉄 (FeO) 54.18%、酸化第二鉄 (Fe₂O₃) 12.55% の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 29.68% であるが、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は 1.99% と低値であった。主に製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は 0.23%、バナジウム (V) 0.02%、酸化マンガン (MnO) も 0.26% と低値であった。銅 (Cu) も <0.01% と低値である。

当鉄滓は鉄酸化物の割合が高く、製鉄原料の砂鉄起源の脈石鉱物 (TiO₂、V、MnO) の低減傾向が顕著であった。以上の特徴から、鉄素材の熱間加工に伴って生じた鍛錬鍛冶滓に分類される。

YSD-2 : 鍛冶滓 (M404)

(1) 肉眼観察 : 9.2 g とごく小型で完形の不定形鍛冶滓である。滓の地の色調は黒灰色で、茶褐色の土砂が点々と固着する。表面は比較的滑らかであるが、細かい木炭痕による凹凸が著しい。

(2) 顕微鏡組織 : 第100図④⑤に示す。発達した白色粒状結晶ウスタイト、および淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中のごく微細な青灰色部は錆化鉄である。

(3) EPMA 調査 : 第100図⑥に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。1 は白色樹枝状結晶内のごく微細な暗褐色結晶で、定量分析値は 54.7%FeO-42.4%Al₂O₃ であった。ヘーシナイト (Hercynite : FeO·Al₂O₃) に同定される。

白色樹枝状結晶には明暗 2 相が確認されるため、それぞれ定量値を測定した。2 の明色部の定量分析値は 97.4%FeO、3 の暗色部の定量分析値は 89.9%FeO-1.2%TiO₂ であった。ともにウスタイト (Wustite : FeO) に同定される。また色調差はチタン (TiO₂) の含有率を反映したものと推測される。

また 4 暗黒色 (素地) 定量分析値は 43.3%SiO₂-17.1%Al₂O₃-8.5%CaO-7.5%K₂O-23.0%FeO であった。

非晶質珪酸塩で、かなり鉄分 (FeO) の割合が高い。さらに5の淡灰色柱状結晶の定量分析値は70.8%FeO-1.1%MgO-27.2%SiO₂であった。ファヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) に同定される。

(4) 化学組成分析 : 第18表に示す。全鉄分 (Total Fe) は59.54%と高値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.14%、酸化第1鉄 (FeO) 56.55%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 22.08%の割合である。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) が17.32%で、塩基性成分 (CaO+MgO) は0.92%と低値であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.26%、バナジウム (V) が0.03%、酸化マンガン (MnO) 0.17%と低値であった。銅 (Cu) も<0.01%と低値である。

当鉄滓も製鉄原料の砂鉄起源の脈石鉱物 (TiO₂、V、MnO) の低減傾向が顕著であり、鍛錬鍛冶滓に分類される。

YSD-3 : 鍛冶滓 (M403)

(1) 肉眼観察 : 9.2gとごく小型で完形の不定形鍛冶滓である。やや偏平な形状であるが、上面に1箇所瘤状の錆化鉄部が突出する。また滓の地の色調は黒灰色で、表面は比較的滑らかである。

(2) 顕微鏡組織 : 第101図①②に示す。滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また鉄滓表面の付着土砂中には、ごく微細な鍛造剥片^(注1)が混在する。②はその拡大である。

(3) 化学組成分析 : 第18表に示す。全鉄分 (Total Fe) が64.68%と高値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.23%、酸化第1鉄 (FeO) 60.64%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 24.76%の割合である。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は9.95%で、塩基性成分 (CaO+MgO) も0.57%と低値であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) の二酸化チタン (TiO₂) は0.09%、バナジウム (V) <0.01%、酸化マンガン (MnO) 0.10%と非常に低い。銅 (Cu) も<0.01%と低値である。

当鉄滓も製鉄原料の砂鉄起源の脈石鉱物 (TiO₂、V、MnO) が非常に低減しており、鍛錬鍛冶滓に同定される。さらに表層に付着する土砂中には、鍛造剥片 (=鉄素材を熱間で鍛打加工した際に飛散した酸化膜片) も検出できた。ともに熱間での鍛打作業に伴う反応副生物である。

YSD-4 : 鍛冶滓 (ガラス質滓) (M401)

(1) 肉眼観察 : 平面は長方形で26g弱と小型で完形の鍛冶滓である。滓の地の色調は灰色で、表面はやや風化気味である。またやや軽い質感で、内部に石英・長石類などの大型の砂粒を多数含んでいるため、炉材粘土溶融物主体の滓と推測される。

(2) 顕微鏡組織 : 第101図③に示す。観察面の広い範囲が暗黒色ガラス質滓 (粘土溶融物) であったが、部分的に灰褐色多角形結晶マグネタイト (Magnetite : FeO·Fe₂O₃)、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。③はその拡大である。

(3) 化学組成分析 : 第18表に示す。全鉄分 (Total Fe) は14.64%と低値であった。金属鉄 (Metallic Fe) が0.13%、酸化第1鉄 (FeO) 11.78%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 7.65%の割合である。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は77.86%と高値であるが、塩基性成分 (CaO+MgO) は1.58%と低値であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.32%、バナジウム (V) 0.01%、酸化マンガン (MnO) が0.15%と低い。銅 (Cu) も<0.01%と低値である。

当資料は鉄酸化物の割合が低いため、赤熱鉄素材の目減り防止に粘土汁を塗布し、低温素延べを施し

第5章 吉田住吉山遺跡出土遺物の自然科学分析

た排出滓の可能性をもつ。更には羽口などの炉材粘土 (SiO_2 、 Al_2O_3 主成分) 起源の溶融物も配慮すべきであろう。

YSD-5: 鍛冶滓 (M396)

(1) 肉眼観察: 該品も基本的には平面が長方形から進展した 13.4g と小型で完形の鍛冶滓である。滓の地の色調は黒灰色で、茶褐色の土砂が点々と固着する。やや偏平な形状で、上面は平坦気味であるが、下面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。また下面に 1 個所小礫の噛み込みがみられる。

(2) 顕微鏡組織: 第101図④～⑥に示す。滓中には発達した淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中に点在するごく微細な明白色粒は金属鉄 (Metallic Fe)、青灰色部は鉄錆化物である。⑤⑥中央は金属鉄粒の拡大で、3%ナイタルで腐食した組織を示している。ともに亜共析 ($<0.77\%C$) 組織を呈しており、炭素含有量は 0.1%前後の軟鉄と推測される。

(3) 化学組成分析: 第 18 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 45.43%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.35%、酸化第 1 鉄 (FeO) 38.66%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 21.49%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 35.05%で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 1.38%と低値であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は 0.32%、バナジウム (V) 0.01%、酸化マンガン (MnO) が 0.17%と低い。銅 (Cu) も $<0.01\%$ と低値である。

当鉄滓も製鉄原料の砂鉄起源の脈石鉱物 (TiO_2 、V、MnO) の低減傾向が顕著で、鍛錬鍛冶滓に分類される。

YSD-6: 鍛冶滓 (M397)

(1) 肉眼観察: 平面が不整長方形形状を呈して 19.5g と小型の鍛冶滓である。大きな破面はなく、ほぼ完形の滓である。地の色調は黒灰色で、表面に茶褐色の土砂が広い範囲で固着する。また端部に 1 個所、茶褐色の錆化鉄部をもつ。偏平な形状で、表面には細かい木炭痕が散在する。また上面側に若干砂粒の噛み込みがみられる。

(2) 顕微鏡組織: 第102図①に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色盤状結晶ファヤライトが晶出する。

(3) EPMA 調査: 第102図②に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。6 の淡灰色盤状結晶の定量分析値は $66.0\%\text{FeO} - 1.6\%\text{MgO} - 31.4\%\text{SiO}_2$ であった。ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) に同定される。また 7 の暗黒色結晶の定量分析値は $16.9\%\text{K}_2\text{O} - 63.0\%\text{SiO}_2 - 24.9\%\text{Al}_2\text{O}_3$ であった。正長石 (Orthoclase: KAlSi_3O_8) と推定される。さらに 8 の白色樹枝状結晶の定量分析値は $96.3\%\text{FeO}$ であった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。

(4) 化学組成分析: 第 18 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 47.87%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.11%、酸化第 1 鉄 (FeO) 46.49%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 16.62%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 32.96%で、塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 1.26%と低値であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は 0.32%、バナジウム (V) $<0.01\%$ 、酸化マンガン (MnO) 0.19%と低値であった。銅 (Cu) も $<0.01\%$ と低値である。

当鉄滓も製鉄原料の砂鉄起源の脈石鉱物 (TiO_2 、V、MnO) の低減傾向が顕著で、鍛錬鍛冶滓に分類される。

YSD-7：鍛冶滓 (M399)

(1) 肉眼観察：平面が不整形三角形状で当遺跡出土鉄滓としては 88g と大型の椀形鍛冶滓破片である。滓の地の色調は黒灰色で、茶褐色の土砂が点々と固着する。やや偏平な形状で上面は平坦気味、下面には細かい木炭痕が散在する。また一部灰褐色の鍛冶炉床土が薄く固着する。

(2) 顕微鏡組織：第102図③～⑤に示す。淡灰色柱状結晶ファヤライトを基地として白色樹枝状結晶ウスタイトが局部的に集中して晶出する。

(3) 化学組成分析：第18表に示す。全鉄分 (Total Fe) 48.05%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.24%、酸化第1鉄 (FeO) 42.46%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 21.17%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は 31.51%で、塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 1.61%と低値であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は 0.18%、バナジウム (V) $< 0.01\%$ 、酸化マンガン (MnO) が 0.18%と低い。銅 (Cu) も $< 0.01\%$ と低値である。

当鉄滓も製鉄原料の砂鉄起源の脈石鉱物 (TiO_2 、V、MnO) の低減傾向が顕著で、鍛錬鍛冶滓に分類される。

YSD-8：鉄塊系遺物 (M394)

(1) 肉眼観察：27g と小型不定形の鉄塊系遺物である。表面の凹凸が著しく、一部小型の木炭破片が付着する。また特殊金属探知機の L (●) で反応があり、内部には金属鉄が残存する。

(2) マクロ組織：第103図①に示す。表層側に若干滓を付着するが、まとものよい鉄主体の遺物であった。鉄部は錆化が進むが、写真下側に不定形の金属鉄部が残存する。

(3) 顕微鏡組織：第103図②～④に示す。金属鉄部は 3%ナイトルで腐食したところ、亜共析組織～共析組織 ($C \leq 0.77\%$) が確認された。③は炭素含有量の比較的高い領域の拡大である。黒色層状のパーライト (Pearlite) 素地に白色針状のフェライト (Ferrite: α 鉄) が析出する。さらに粒状の燐化鉄共晶 ($\alpha + \text{Fe}_3\text{P}$) が点在する。一方④は低炭素域で、フェライトの面積率が高い。こうした金属組織から、当鉄塊は部位により 0.1～0.8%程度の炭素含有量のばらつきを持つ鋼と推定される。

また④の右側は滓部である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

(4) EPMA 調査：第103図⑤金属鉄部の反射電子像 (COMP) を示す。分析点 1 の粒状共晶組織は、特性 X 線像をみると燐 (P) に強い反応がある。定量分析値は 86.6%Fe-10.7%P であった。燐化鉄共晶 ($\alpha + \text{Fe}_3\text{P}$) に同定される。

もう 1 視野、第103図⑥に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。分析点 9 の淡灰色柱状結晶の定量分析値は 70.2%FeO-30.4% SiO_2 であった。ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) に同定される。また白色粒状結晶の定量分析値は 10 が 91.4%FeO、11 は 97.3%FeO であった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。

以上の調査の結果、付着滓にチタン (TiO_2) の影響がほとんどみられないことから、当資料は熱間での鍛冶処理途中、鍛打成形前の小鉄塊と推定される。また部位により炭素含有量のばらつきのある (C : 0.1～0.8%程度) 鋼で、若干燐 (P) の偏析が確認された。更に成分調整を施して鉄器製作に充当するのだろうか。

YSD-9：鉄素材 (M395)

(1) 肉眼観察：やや小型の鉄素材または未製品と推測される。表面の多くは錆化に伴う亀裂からの破面の可能性が高い。非常に緻密で重量感があり、特殊金属探知機の L (●) で反応があり、内部には金属鉄が良好に残存する。

(2) マクロ組織：第104図①に示す。若干滓が固着する、鉄主体の遺物であった。また外周から錆化が進んで、内部には金属鉄が残存する。金属鉄中には、鍛打に伴い細長く展伸した形状の非金属介在物が複数確認できた。この特徴から、当資料は粗く鍛打を施した段階の鉄素材または鍛造鉄器の未製品と推定される。

(3) 顕微鏡組織：第104図②～④に示す。金属鉄部の拡大である。3%ナイトルで腐食したところ、亜共析組織～共析組織 ($C \leq 0.77\%$) を残す。③は芯側の炭素含有量の比較的高い領域である。白色のフェライトが僅かに析出するが、ほぼ黒色層状のパーライト主体の組織であった。一方④は表層側の低炭素域である。特に表層部 (写真右側) はフェライトの面積率が高い。以上の金属組織から、当資料も部位により 0.1～0.8%程度の炭素含有量のばらつきを持つ鋼であるが、加熱処理により表層側は脱炭を受けている。

(4) EPMA 調査：第104図⑤中央に展伸状の非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。分析点 28 の素地部分の定量分析値は $48.6\%SiO_2 - 20.5\%Al_2O_3 - 8.4\%CaO - 4.5\%K_2O - 1.8\%Na_2O - 15.0\%FeO$ であった。非晶質珪酸塩で、鉄分 (FeO) をかなり固溶する。29 の淡灰色柱状結晶の定量分析値は $62.3\%FeO - 2.1\%MgO - 31.7\%SiO_2$ であった。ファヤライト (Fayalite: $2FeO \cdot SiO_2$) に同定される。

さらにもう 1 視野、付着滓部分の調査を実施した。Photo. 5⑥に反射電子像 (COMP) を示す。30 の白色粒状結晶の定量分析値は $90.9\%FeO$ であった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。また 31 の淡灰色結晶の定量分析値は $53.2\%FeO - 1.8\%CaO - 1.2\%MgO - 34.5\%SiO_2$ であった。ファヤライト (Fayalite: $2FeO \cdot SiO_2$) に同定される。

鉄中非金属介在物の形状から、当資料は粗く鍛打を施した段階の鉄素材または鍛造鉄器の未製品と推定される。なお非金属介在物、付着滓とも、その化学組成から熱間での鍛冶作業に伴う反応副生物と推定される。[このため当資料の始発原料の性状 (砂鉄または塊状の鉄鉱石) を検討することは困難であった。] また金属鉄部は、部位により炭素含有量のばらつきの大い (C: 0.1～0.8%程度) 鋼であった。

YSD-10：鉄素材 (M392)

(1) 肉眼観察：36.5g の小型の鉄素材または未製品と推測される。ただし表面には、一部小型の木炭痕のような凹部が残る。非常に緻密で重量感がある。特殊金属探知機の L (●) で反応があり、内部には金属鉄が良好に残存する。

(2) マクロ組織：第105図①に示す。表層に若干滓が固着しているが、まとまりのよい鉄主体の遺物であった。また金属鉄中には、鍛打に伴い細長く展伸した形状の非金属介在物が複数確認される。当資料も YSD-9 と同様、粗く鍛打を施した段階の鉄素材または鍛造鉄器の未製品と推定される。

(3) 顕微鏡組織：第105図②～④に示す。金属鉄部を 3%ナイトルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織から過共析組織 ($C > 0.77\%$) が確認された。③は低炭素域の拡大である。これに対して④は高炭素域で、パーライト素地に白色針状のセメントイト (Cementite: Fe_3C) が析出する。この金属組織から当資料は部位により炭素含有量のばらつきが大きく、0.1 以下～1.2%程度の

偏析のある鋼と判断される。

(4) EPMA 調査：第105図⑤中央に展伸状の非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。17 の定量分析値は $64.6\%SiO_2-13.1\%Al_2O_3-11.0\%CaO-4.6\%K_2O-1.3\%Na_2O-4.0\%FeO-2.0\%TiO_2$ であった。非晶質珪酸塩で、鉄分 (FeO)、チタン (TiO_2) を若干固溶する。

さらにもう 1 視野、付着滓部分の調査を実施した。Photo.6⑥に反射電子像 (COMP) を示す。12 の暗黒色素地部分の定量分析値は $39.6\%SiO_2-17.4\%Al_2O_3-12.2\%CaO-5.7\%K_2O-2.3\%Na_2O-22.2\%FeO$ であった。非晶質珪酸塩で、鉄分 (FeO) をかなり高い割合で含む。また 13 の淡灰色柱状結晶の定量分析値は $66.3\%FeO-1.6\%CaO-30.9\%SiO_2$ であった。ファヤライト (Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$) に同定される。14 の白色粒状結晶の定量分析値は $95.8\%FeO-1.0\%Al_2O_3$ であった。ウスタイト (Wustite : FeO) に同定される。

以上の調査結果から、当資料も YSD-9 と同様、粗く鍛打を施した段階の鉄素材または鍛造鉄器の未製品と推定される。また非金属介在物 (非晶質珪酸塩) には、ごく微量チタン (TiO_2) が固溶する。これが製鉄原料起源のものであれば、当資料の始発原料は砂鉄の可能性が高い。ただし羽口や鍛冶炉などの粘土や鍛接剤 (粘土汁など) にごく微量チタン (TiO_2) を含む鉱物が含まれていた可能性も無くはないため断定は難しい。

また金属鉄部は部位により炭素含有量のばらつきが大きく、0.1 以下～1.2%程度の偏析のある鋼と判断される。

YSD-11：铸造鉄器片 (M377)

(1) 肉眼観察：厚さ 2～4mm 程の薄板状の鉄器破片である。鉄鍋等の铸造鉄器の体部破片の可能性が高い。側面は全面破面で、表面には銹化に伴い亀甲状の割れが生じている。また特殊金属探知機での反応はみられなかった。

(2) マクロ組織：第106図①に示す。断面にはごく微細な気孔が若干点在するが、非常に緻密で湯流れのよい铸造鉄器の破片であった。また全体に銹化が進んでおり、金属鉄部は残存していないが、自然腐食による金属組織の痕跡が残存している。

(3) 顕微鏡組織：第106図②③に示す。銹化鉄部の拡大である。発達した白色板状のセメントイト、および蜂の巣状のレデブライト (Ledeburite) が確認された。過共晶組成白鉄組織 ($C > 4.26\%$) を呈する鉄製品といえる。

YSD-12：铸造鉄器片 (M379)

(1) 肉眼観察：厚さ 3mm 前後の薄板状の鉄器破片である。鉄器片 (YSD-11) と同様、鉄鍋等の铸造鉄器の体部破片の可能性が高い。YSD-11 と同様、特殊金属探知機での反応はみられなかった。

(2) マクロ組織：第106図④に示す。写真右上にやや大きな不定形の気孔 (鑄鬆) が存在する。また全体に銹化が進んでおり、金属鉄部は残存していないが、金属組織の痕跡が残存している。

(3) 顕微鏡組織：第106図⑤⑥に示す。銹化鉄部の拡大である。発達した白色板状のセメントイト、および蜂の巣状のレデブライトが確認された。やはり YSD-11 と同様に、過共晶組成白鉄組織 ($C > 4.26\%$) の鉄製品であった。

YSD-13：鉄釘（M249）

（1）肉眼観察：残存長 50mm 程の鉄釘の頭部～体部破片と推定される。土砂の付着により頭部の形状は判然としない。また体部側は破面で、横断面は 9×7mm 程の長方形を呈する。特殊金属探知機の L（●）で反応があり、内部には金属鉄が良好に残存する。

（2）マクロ組織：第107図①に示す。断面が方形に鍛打成形された鉄製品であるが、表層にはごく薄く滓が付着する。また芯部には金属鉄（白色～明灰色部）が残存する。3%ナイトルで腐食したところ、フェライト単相～亜共析組織が確認された。

（3）顕微鏡組織：第107図②～⑤に示す。②上層の暗灰色部は付着滓で、③はその拡大である。ごく微細な白色樹枝状結晶ウスタイト、発達した淡灰色盤状結晶ファヤライトが晶出する。この鉱物組成から出土鍛冶滓と同様、熱間での鍛打作業により生じたものと判断される。

また金属鉄部は②上側表層が低炭素域で、④はその拡大である。ほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が確認された。一方②下側はやや炭素含有量が高く、亜共析組織を呈し、⑤はその拡大である。以上の金属組織から、当資料は炭素含有量 0.1%以下～0.4%程度のばらつきのある鋼と推定される。

（4）EPMA 調査：第107図⑥中央に展伸状の非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。分析点 18 の定量分析値は 62.8%SiO₂ - 14.8%Al₂O₃ - 7.1%CaO - 1.1%MgO - 4.4%K₂O - 1.4%Na₂O - 2.4%FeO - 3.8%TiO₂ - 1.1%MnO であった。非晶質珪酸塩で、鉄分（FeO）、チタン（TiO₂）を若干固溶する。

さらにもう 1 視野、付着滓部分の調査を実施した。Photo. 8⑦に反射電子像（COMP）を示す。20 の淡灰色柱状結晶の定量分析値は 67.0%FeO - 31.1%SiO₂ であった。ファヤライト（Fayalite : 2FeO·SiO₂）に同定される。21 の暗黒色結晶の定量分析値は 21.5%K₂O - 59.8%SiO₂ - 23.8%Al₂O₃ であった。正長石（Orthoclase : KAlSi₃O₈）と推定される。また 22 の白色樹枝状結晶の定量分析値は 91.8%FeO であった。ウスタイト（Wustite : FeO）に同定される。

当資料は断面方形形状に鍛打成形された鍛造製品で、炭素含有量は 0.1%以下～0.4%程度のばらつきのある鋼と推定される。なお表層部に低炭素域がみられるのは、熱間での鍛打加工に伴い、脱炭した結果と考えられる。

また鉄中非金属介在物（非晶質珪酸塩）は、鉄素材（YSD-10）と同様、ごく微量チタン（TiO₂）が固溶する。これが製鉄原料起源のものであれば、当資料の始発原料は砂鉄の可能性が高い。ただし羽口や鍛冶炉など粘土や鍛接剤（粘土汁など）にごく微量チタン（TiO₂）を含む鉱物が含まれていた可能性も無くはないため、断定は難しい。

YSD-14：鉄釘（M245）

（1）肉眼観察：残存長 23mm 程の鉄釘の頭部～体部破片と推定される。鉄釘（YSD-13）より小型である。頭部は先端を曲げて作り出されている。体部側は破面で、横断面は 6×3mm 程の長方形を呈する。特殊金属探知機の L（●）で反応があり、内部には金属鉄が良好に残存する。

（2）マクロ組織：第108図①に示す。断面長方形形状に鍛打成形された鉄製品である。また外周から錆化が進行しているが、芯部に金属鉄（明灰色部）が残存する。

（3）顕微鏡組織：第108図②～⑤に示す。金属鉄部の拡大である。ベイナイト（Bainite : 微細なフェライト中に更に小さなセメンタイトが分散している組織）素地に白色針状のフェライトが析出する。

この金属組織から、金属鉄部は炭素含有量 0.1%前後の軟鉄と判断される。またごく小型の製品のため、鍛打成形後、やや速い速度で冷却したものと推測される。

(4) EPMA 調査：第108図⑥に展伸状非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。23 の素地部分の定量分析値は $62.7\%SiO_2 - 15.5\%Al_2O_3 - 3.8\%CaO - 5.3\%K_2O - 2.3\%FeO - 7.9\%TiO_2 - 1.9\%MnO$ であった。非晶質珪酸塩で、鉄分 (FeO)、チタン (TiO_2) を固溶する。また 24 の淡褐色片状結晶は特性 X 線像をみるとチタン (Ti) に強い反応がある。定量分析値は $81.8TiO_2 - 4.8\%FeO - 3.9\%Al_2O_3 - 3.3\%V_2O_3 - 1.0\%MgO$ であった。他の元素を微量固溶するが、ルチル (Rutile : TiO_2) に近い組成の結晶といえる。これは砂鉄を高温製錬した際に生じる晶癖といえる^(注2)。

さらにもう 1 視野、第108図⑦に非金属介在物の反射電子像 (COMP) を示す。26 の淡灰色微小結晶の定量分析値は $67.9\%FeO - 22.3\%SiO_2$ であった。ファヤライト (Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$) に同定される。さらに 27 の白色粒状結晶の定量分析値は $89.8\%FeO$ であった。ウスタイト (Wustite : FeO) に同定される。

当資料は断面方形に鍛打成形された鍛造製品で、炭素含有量は 0.1%前後の軟鉄と推定される。また非金属介在物中にはルチル (Rutile : TiO_2) を含むものがある。このことから当鉄器の始発原料は砂鉄を高温製錬してつくられたものと判断される。

4. まとめ

室町時代に推定される、吉田住吉山遺跡の出土鍛冶関連遺物を分析調査した。その結果、当遺跡ではある程度定形化された鉄素材または古鉄 (鍛造・铸造製品ないしその破片) を鍛冶原料として、主に熱間で鍛造鉄器の製作 (鍛錬鍛冶作業) が行われたものと推定される。詳細は以下の通りである。

〈1〉分析調査を実施した鉄滓 YSD-1~7 は、すべて鍛錬鍛冶滓に分類されて、鍛冶内容は成長ウスタイト晶出の高温沸し鍛接からファヤライト優先の低温素延べまでが想定される。いずれも製鉄原料の砂鉄起源の脈石鉱物 (TiO_2 、V、MnO) の低減傾向が顕著であった。〔ただし YSD-2 は EPMA 調査の結果、ごく微量チタン (TiO_2) の影響が確認されている。これが製鉄原料に起因するものであれば、鉄素材の始発原料は砂鉄の可能性が高い。〕

さらに鉄滓 YSD-3 の表層に付着した土砂中には、ごく微細な鍛造剥片が検出された。これは鉄素材を熱間で鍛打加工した際、表層に生じた薄膜状の鉄酸化物が飛散したものであり、やはり遺跡内での鍛錬鍛冶作業を裏付ける微細遺物といえる。

〈2〉YSD-8 は、付着滓の鉱物組成から、鍛冶処理途中、鍛打成形前の鉄塊系遺物と推定される。炭素含有量は部位により 0.1~0.8%のばらつきを持つ鋼であった。また内部に若干燐 (P) の偏析が認められた。なお燐 (P) は鍛冶作業時の鍛接不良や製品の脆化といった悪影響の要因となり得る元素であるが、当鉄塊の場合ごく微細な燐化鉄共晶 ($\alpha + Fe_3P$) が部分的に点在する状態であり、大きな弊害にはならぬものと推測される。

〈3〉YSD-9、10 は、粗い鍛打が施された鉄素材、または未製品と推定される。ともに内部に鍛打に伴い細長く展伸した非金属介在物が存在する。〔このうち YSD-9 は EPMA 調査の結果、ごく微量チタン (TiO_2) が検出された。これが製鉄原料に起因するものであれば、鉄素材の始発原料は砂鉄の可能性が高かろう。〕

またいずれも部位による炭素含有量のばらつきの大い鋼であった。YSD-9 の炭素含有量程度 0.1~0.8%程度、YSD-10 は 0.1%以下~1.2%程度と判断される。鍛造鉄器の製作には、このような鉄素材にさ

らに折り返し鍛錬を施した後、鍛打成形したものと推測される。

〈4〉 YSD-11、12 は、鉄鍋などの鑄造鉄器の破片である。鍛冶原料鉄（古鉄）として搬入された可能性も考えられる。ただし鑄鉄の下げ脱炭操業を裏付ける滓の特定は出来なかった。またともに過共晶組成白鑄鉄組織（ $C > 4.26\%$ ）の痕跡が確認された。鑄造製品としても炭素含有量の高い範疇に入る。

〈5〉 YSD-13、14 は棒状に鍛打加工された鍛造製品（鉄釘）であった。

また YSD-14 は非金属介在物中にルチル（Rutile : TiO_2 ）が内蔵される。これは砂鉄（含チタン鉄鉱）を高温製錬した際に生じる化合物であり、始発原料と製錬技術を反映する特徴として注目される。

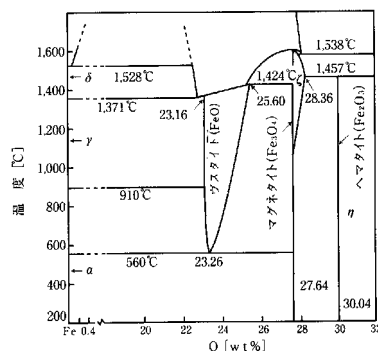
なおこれまでの分析調査結果から、兵庫県下では製鉄原料に日名倉山系グループの低チタン砂鉄（ TiO_2 :5%前後）を用いた遺跡と、大撫山系グループ高チタン砂鉄（ TiO_2 :最大20%前後）を用いた遺跡とに二分される^(注3)。YSD-14 の始発原料がこうした県内の製鉄遺跡と仮定した場合、後者の高チタン砂鉄を製鉄原料とする遺跡で生産された可能性がより高い。

（注）

（1）鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる^(注4)。

この鍛造剥片や粒状滓は極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶跡の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工房の調査に当たっては、鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗選別、秤量により分布状態を把握できれば、工房内の作業空間配置の手がかりとなりうる重要な遺物である^(注5)。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite : Fe_2O_3 ）、中間層マグネタイト（Magnetite : Fe_3O_4 ）、大部分は内層ウスタイト（Wustite : FeO ）の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は $1450^\circ C$ を越えると存在しなく、ウスタイト相は $570^\circ C$ 以上で生成されるのは $Fe-O$ 系平衡状態図から説明される^(注6)。



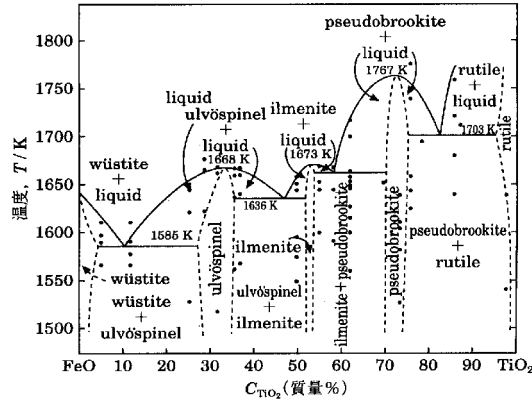
第98図 Fe-O系平衡状態図

鍛造剥片を王水（塩酸3：硝酸1）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite : Fe_2O_3 ）は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト（Magnetite : Fe_3O_4 ）は黄変する。内層のウスタイト（Wustite : FeO ）は黒変する。

鍛打作業前半段階ではウスタイト (Wustite : FeO) が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

(2) J.B. Mac chesney and A. Murau : American Mineralogist, 46 (1961), 572

[イルミナイト (Ilmenite : FeO·TiO₂)、シュードブルーカイト (Pseudobrookite : Fe₂O₃·TiO₂)、ルチル (Rutile : TiO₂) の晶出は FeO-TiO₂ 二元平衡状態図から高温化操業が推定される。]



FeO-TiO₂ 二元平衡状態図

第99図 FeO-TiO₂二元平衡状態図

- (3) - 1 大澤正己「生栖遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『生栖遺跡』兵庫県教育委員会 2005
- (3) - 2 大澤正己・鈴木瑞穂「小茅野後山遺跡 出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『小茅野後山遺跡』兵庫県教育委員会 2007
- (4) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘 年報 15』(平成3年度) 千葉県房総風土記の丘 1992
- (5) 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』(今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書 第13集) 福岡県教育委員会 1991
- (6) 森岡進ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1975

第17表 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	地区	出土位置	報告番号	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目					備考		
							大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折		EPMA 化学分析	耐火度
YSD-1	吉田	主郭	土塁1・金 属工房1	M402	鍛冶滓	室町時代	40×25×24	23.2	なし		○		○			
YSD-2	住吉山		土塁1・金 属工房1	M404	鍛冶滓			35×19×15	9.2	なし		○		○		
YSD-3			土塁1・金 属工房1	M403	鍛冶滓			30×21×16	9.2	なし		○		○		
YSD-4			土塁1・金 属工房1	M401	鍛冶滓			41×33×25	25.7	なし		○		○		
YSD-5			SK29	M396	鍛冶滓		49×29×14	13.4	なし		○		○			
YSD-6			SK56	M397	鍛冶滓		45×30×15	19.5	なし		○		○			
YSD-7			6号墳周溝 (東)	M399	鍛冶滓		71×60×25	87.9	なし		○		○			
YSD-8			5号墳墳丘	M394	鉄塊系遺物		48×21×19	26.9	L(●)	○	○		○			
YSD-9			土塁1・金 属工房1	M395	鉄素材		46×31×21	63.3	L(●)	○	○		○			
YSD-10			6号墳周溝 (西)	M392	鉄素材		42×24×17	36.5	L(●)	○	○		○			
YSD-11			集石14	M377	鑄造鉄器片		45×35×5	13.0	錆化(△)	○	○					
YSD-12			土塁1東側	M379	鑄造鉄器片		56×36×4	27.1	錆化(△)	○	○					
YSD-13			土塁1・金 属工房1	M249	鉄釘		50×12×11	20.1	L(●)	○	○		○			
YSD-14			土塁1・金 属工房1	M245	鉄釘		23×10×6	3.9	L(●)	○	○		○			

第18表 供試材の化学組織

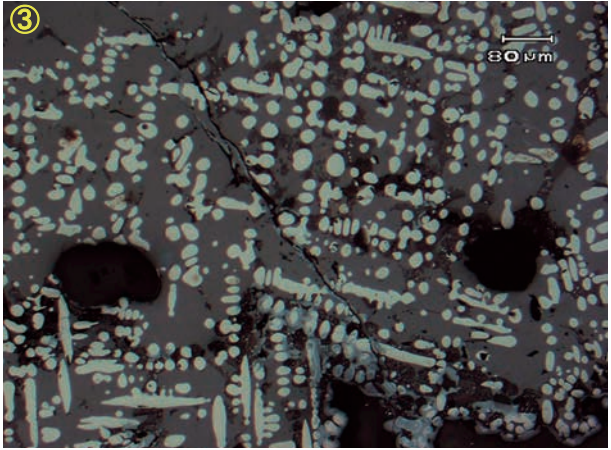
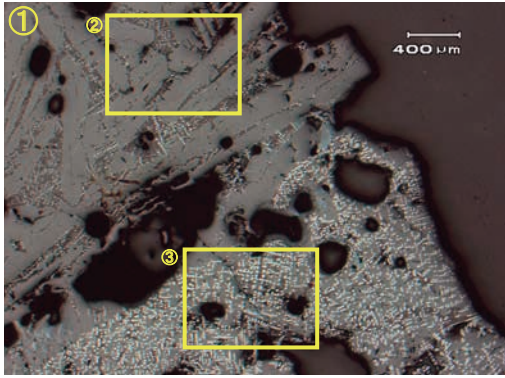
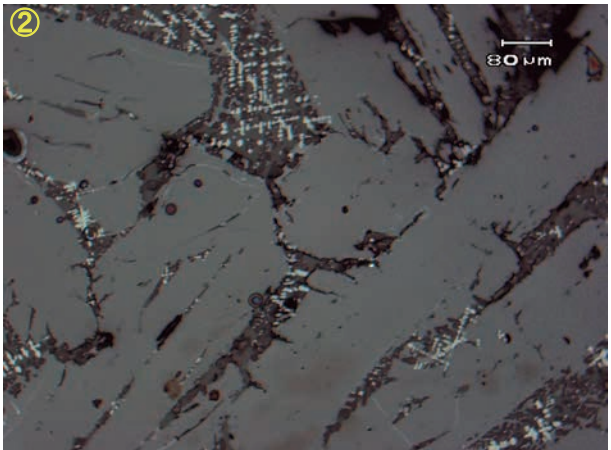
符号	遺跡名	地区	出土位置	遺物名称	推定年代	Σ *														注								
						全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガンを (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)		五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	遺澤成分 (Total Fe)	TiO ₂ Total Fe	
YSD-1	吉田	主郭	土器1・金 属工房1	鍛冶滓	室町時代	51.06	0.17	54.18	12.55	23.97	2.72	1.34	0.65	0.90	0.10	0.26	0.23	0.04	0.034	0.23	0.19	0.02	<0.01	0.03	29.68	0.581	0.005	
YSD-2	住吉山		土器1・金 属工房1	鍛冶滓		59.54	0.14	56.55	22.08	13.61	2.32	0.57	0.35	0.40	0.07	0.17	0.26	0.04	0.027	0.41	0.15	0.03	<0.01	0.05	17.32	0.291	0.004	
YSD-3			土器1・金 属工房1	鍛冶滓		64.68	0.23	60.64	24.76	8.13	1.06	0.33	0.24	0.15	0.04	0.10	0.09	0.03	0.041	0.40	0.28	<0.01	<0.01	0.02	9.95	0.154	0.001	
YSD-4			土器1・金 属工房1	鍛冶滓		14.64	0.13	11.78	7.65	64.61	7.94	1.11	0.47	3.21	0.52	0.15	0.32	0.04	0.013	0.30	0.04	0.01	<0.01	0.04	77.86	5.318	0.022	
YSD-5			SK29	鍛冶滓		45.43	0.35	38.66	21.49	29.54	3.31	0.77	0.61	0.73	0.09	0.17	0.32	0.03	0.064	0.15	0.36	0.01	<0.01	<0.01	0.03	35.05	0.772	0.007
YSD-6			SK56	鍛冶滓		47.87	0.11	46.49	16.62	28.58	2.55	0.74	0.52	0.53	0.04	0.19	0.32	0.03	0.072	0.17	0.26	<0.01	<0.01	0.01	32.96	0.689	0.007	
YSD-7			6号横溝(東)	鍛冶滓		48.05	0.24	42.46	21.17	24.92	3.11	0.96	0.65	1.78	0.09	0.18	0.18	0.02	0.072	0.21	0.22	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	31.51	0.656	0.004

第19表 出土遺物の調査結果のまとめ

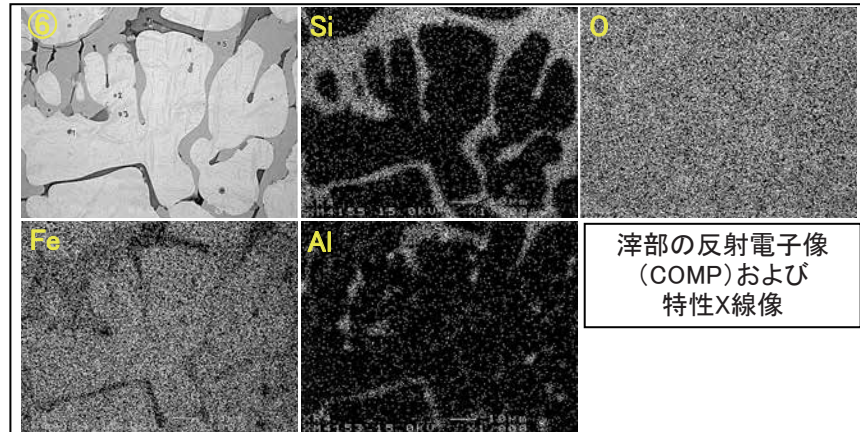
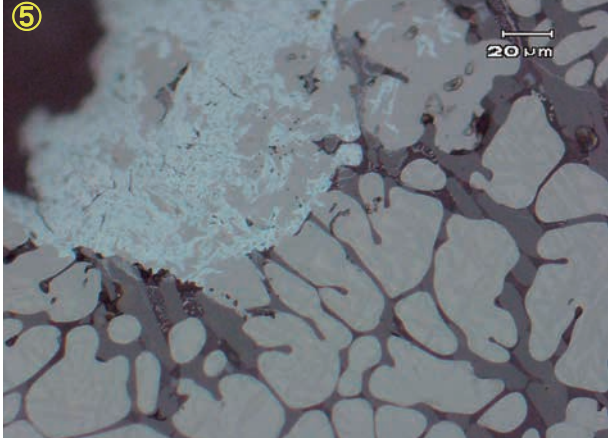
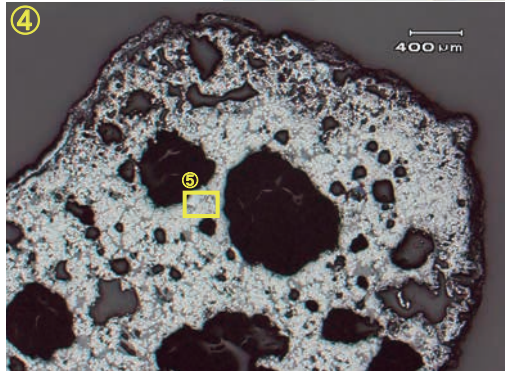
符号	遺跡名	地区	出土位置	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)						所見	
						Total Fe	Fe ₂ O ₃ 塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	造滓成分		Cu
YSD-1	吉田	主郭	土壘1・金属工房1	鍛冶滓	滓部:W+F	51.06	12.55	1.99	0.23	0.02	0.26	<0.1	鍛錬鍛冶滓
YSD-2	住吉山		土壘1・金属工房1	鍛冶滓	滓部:W(微細H)+F、錆化鉄	59.54	22.08	0.92	0.26	0.03	0.17	<0.1	高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓(始発原料:砂鉄の可能性あり)
YSD-3			土壘1・金属工房1	鍛冶滓	滓部:W+F、錆化鉄、鍛造剥片付着	64.68	24.76	0.57	0.09	<0.01	0.10	<0.1	鍛錬鍛冶滓
YSD-4			土壘1・金属工房1	鍛冶滓 (カラス質滓)	カラス質滓:F+M	14.64	7.65	1.58	0.32	0.01	0.15	<0.1	低温素延べ・鍛錬鍛冶滓[炉材粘土溶融物主体] 羽口溶融物も含む
YSD-5			SK29	鍛冶滓	滓部:F、微小金属鉄粒(亜共析組織)、錆化鉄	45.43	21.49	1.38	0.32	0.01	0.17	<0.1	鍛錬鍛冶滓
YSD-6			SK56	鍛冶滓	滓部:W+F、微小金属鉄	47.87	16.62	1.26	0.32	<0.01	0.19	<0.1	鍛錬鍛冶滓
YSD-7			6号墳周溝(東)	鍛冶滓	滓部:W+F、錆化鉄	48.05	21.17	1.61	0.18	<0.01	0.18	<0.1	鍛錬鍛冶滓
YSD-8			5号墳墳丘	鉄塊系遺物	滓部:W+F、金属鉄部、亜共析~共析組織(錆化鉄共晶)	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶処理途中、鍛打成形前の鉄塊系遺物、炭素含有量0.1~0.8%程度の鋼
YSD-9			土壘1・金属工房1	鉄素材	滓部:W+F、非金属介在物:F、金属鉄部、亜共析~共析組織	-	-	-	-	-	-	-	粗い鍛打を施した鉄素材または鍛造鉄器未製品、炭素含有量0.1~0.8%程度の鋼
YSD-10			6号墳周溝(西)	鉄素材	滓部:W+F、非金属介在物:非晶質珪酸塩、金属鉄部、エ7ト単相~過共析組織	-	-	-	-	-	-	-	粗い鍛打を施した鉄素材または鍛造鉄器未製品、炭素含有量0.1~1.2%程度の鋼
YSD-11			集石14	鑄造鉄器片	錆化鉄部:過共晶組成白鑄鉄組織痕跡	-	-	-	-	-	-	-	鉄鍋などの鑄造製品破片(鍛冶原料の可能性あり)
YSD-12			土壘1東側	鑄造鉄器片	錆化鉄部:過共晶組成白鑄鉄組織痕跡	-	-	-	-	-	-	-	鉄鍋などの鑄造製品破片(鍛冶原料の可能性あり)
YSD-13			土壘1・金属工房1	鉄釘	非金属介在物:非晶質珪酸塩(若干微量固溶)、金属鉄部、エ7ト単相~亜共析組織	-	-	-	-	-	-	-	鍛造製品、炭素含有量0.1%以下~0.4%程度の鋼(始発原料:砂鉄の可能性あり)
YSD-14			土壘1・金属工房1	鉄釘	非金属介在物:R、W+F、金属鉄部、針状エ7ト~ベイト	-	-	-	-	-	-	-	鍛造製品、炭素含有量0.1%前後の鋼(始発原料:砂鉄、高温鍛錬)

W:Wustite (FeO)、F:Fayalite (2FeO·SiO₂)、H:Hercynite (FeO·Al₂O₃)、M:Magnetite (FeO·Fe₂O₃)、R:Rutile (TiO₂)

YSD-1 鍛冶滓
 ①上側:ファヤライト、下側:ウスタイト・ファヤライト
 ②上側拡大
 ③下側拡大



YSD-2 鍛冶滓
 ④⑤滓部:ウスタイト・ファヤライト、青灰色部:錆化鉄

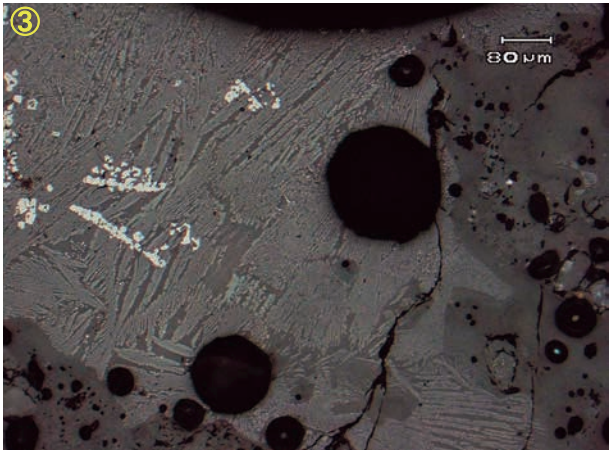
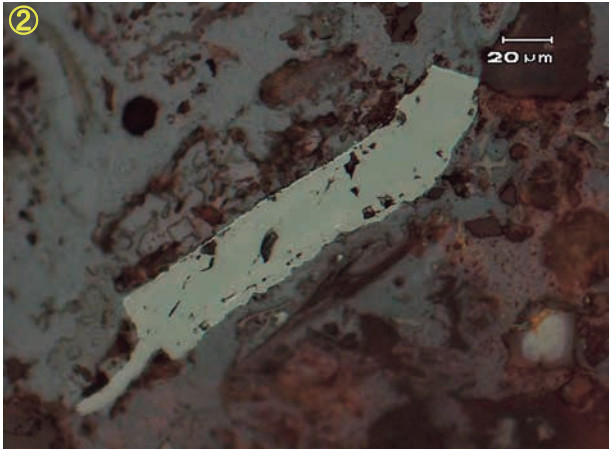
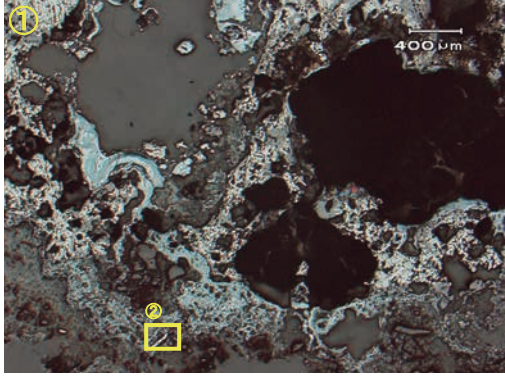


滓部の反射電子像 (COMP) および 特性X線像

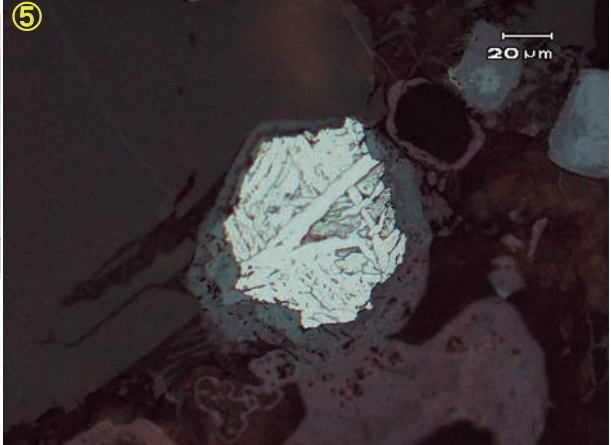
定量分析値					
Element	1	2	3	4	5
F	-	-	-	0.195	-
K ₂ O	-	-	-	7.526	-
Na ₂ O	-	-	0.006	0.335	-
CuO	0.053	-	-	0.007	0.077
MgO	0.344	0.069	0.112	0.106	1.079
CaO	-	-	-	8.537	0.732
Al ₂ O ₃	42.355	0.034	0.504	17.087	0.023
FeO	54.686	97.382	89.932	23.041	70.839
SiO ₂	0.198	0.311	0.209	43.317	27.194
TiO ₂	0.999	0.295	1.151	0.094	0.080
S	0.018	-	-	0.018	-
MnO	0.091	0.139	0.080	0.117	0.222
As ₂ O ₅	0.032	0.068	-	-	0.038
P ₂ O ₅	0.013	0.010	-	0.777	0.043
ZrO ₂	-	-	-	0.165	-
Cr ₂ O ₃	0.087	-	0.032	0.104	0.014
V ₂ O ₅	0.272	0.033	0.248	0.100	0.035
Total	99.148	98.341	92.274	101.444	100.376

第100図 鍛冶滓の顕微鏡組織

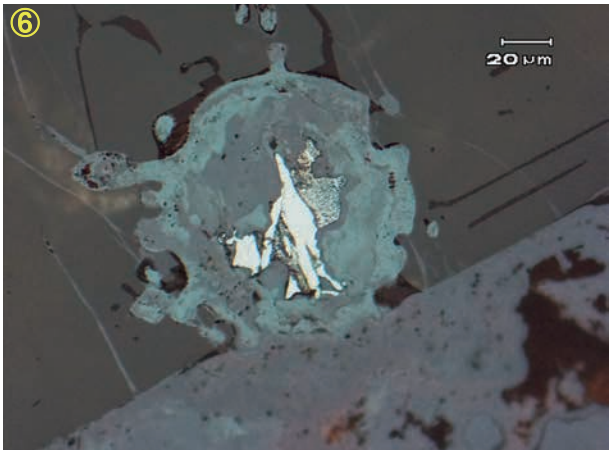
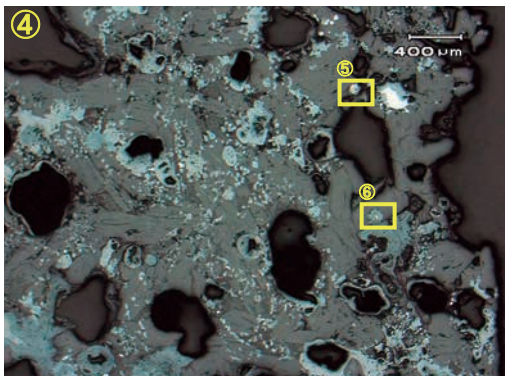
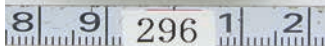
YSD-3 鍛冶滓
 ①滓部:ウスタイト・ファヤライト
 不定形青灰色部:錆化鉄、表層鍛造剥片付着
 ②鍛造剥片拡大



YSD-4 鍛冶滓
 ③ガラス質滓
 部分的にマグネタイト・ファヤライト晶出

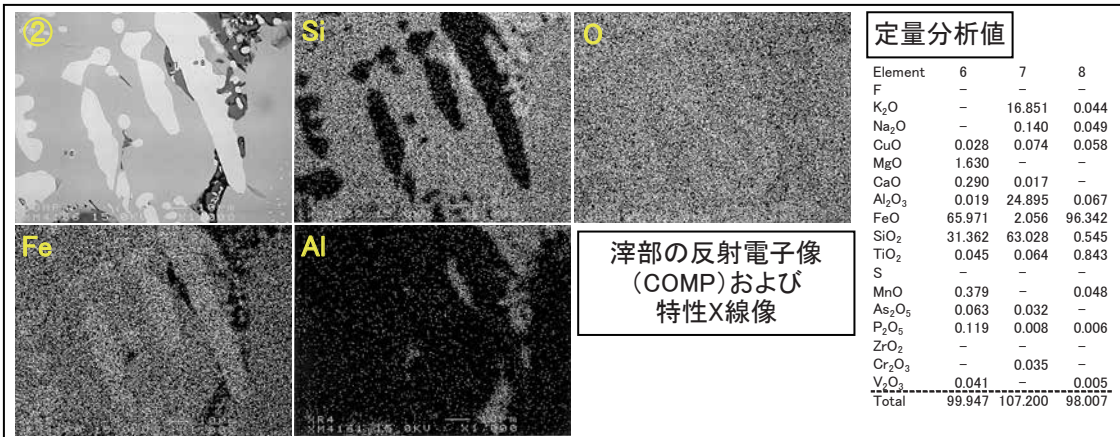
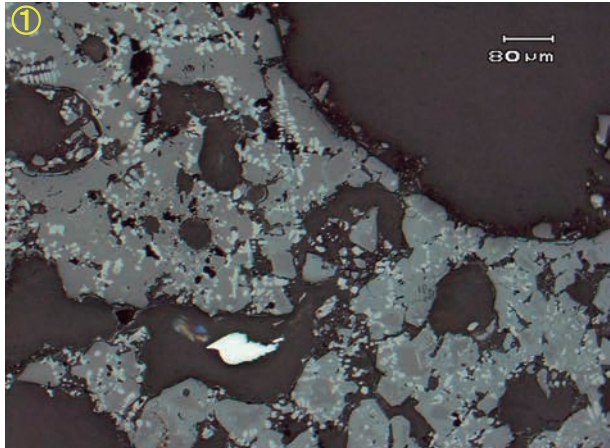


YSD-5 鍛冶滓
 ④滓部:ファヤライト
 微小金属鉄粒散在
 ⑤⑥金属鉄粒拡大、ナッチルetch 亜共析組織

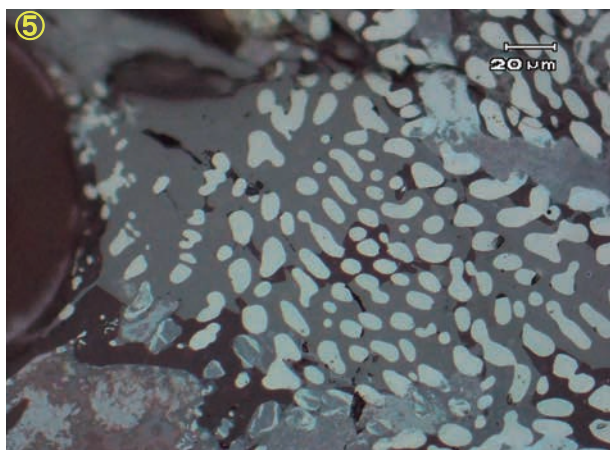
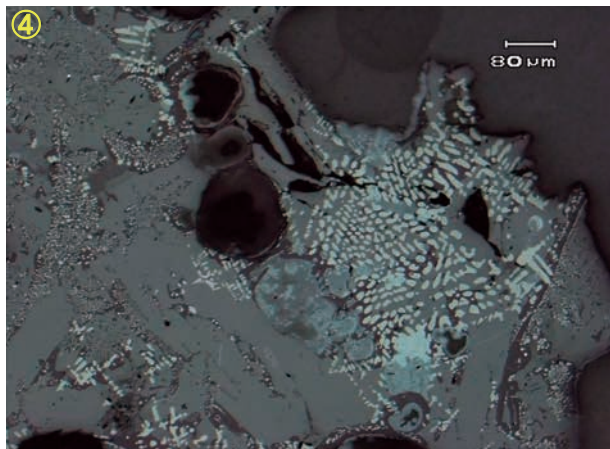
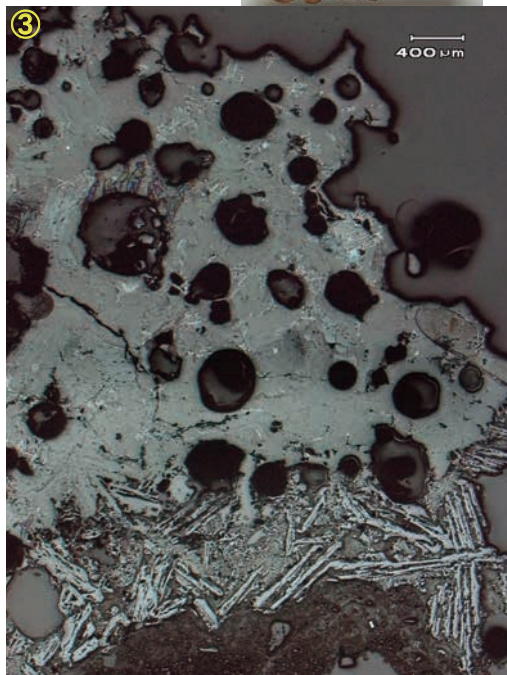


第101図 鍛冶滓の顕微鏡組織

YSD-6 鍛冶滓
①滓部:ウスタイト・ファヤライト
明白色部:金属鉄



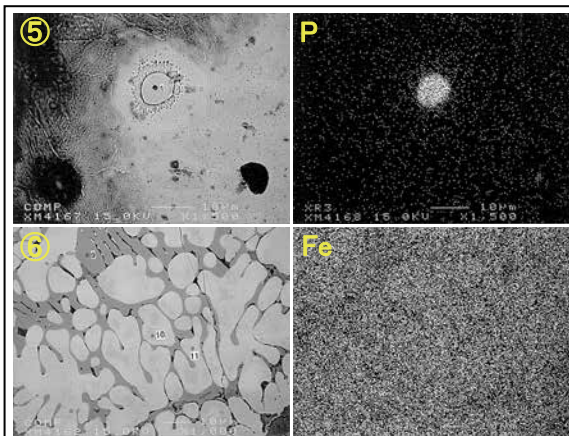
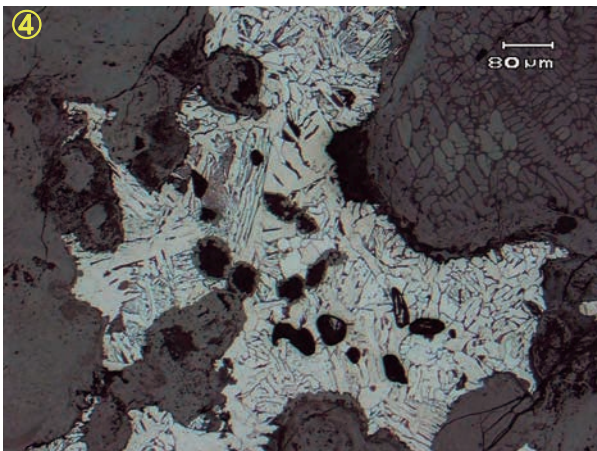
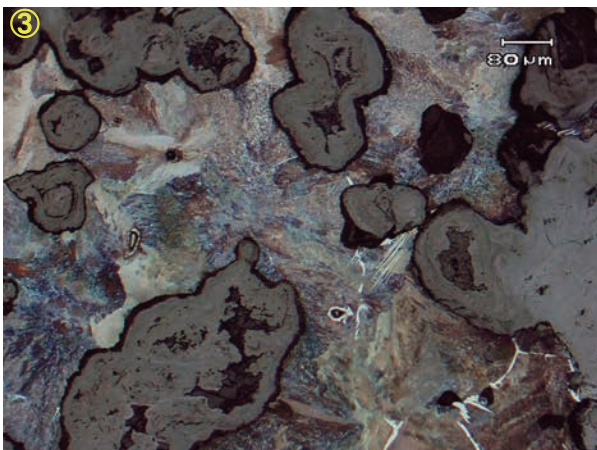
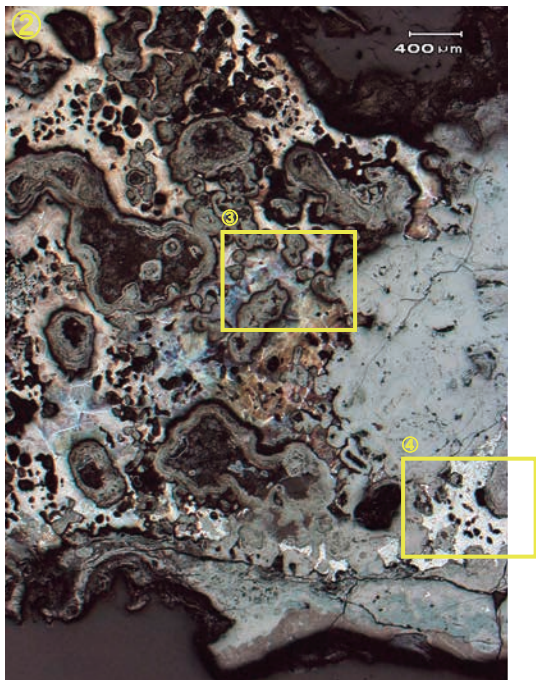
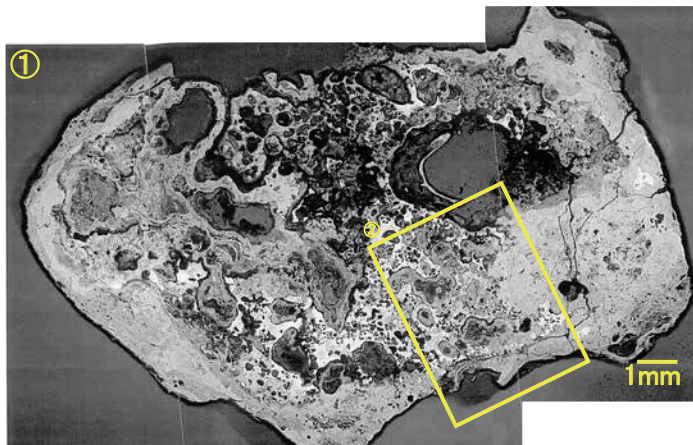
YSD-7 鍛冶滓
③~⑤滓部:ウスタイト・ファヤライト、青灰色部:錆化鉄



第102図 鍛冶滓の顕微鏡組織

YSD-8 鉄塊系遺物

- ①マクロ組織、金属鉄部:ナイタルetch
- ②金属鉄部:亜共析組織~共析組織、③金属鉄(高炭素域)拡大、燐化鉄共晶、④金属鉄(低炭素域)拡大、滓部:ウスタイト・ファヤライト



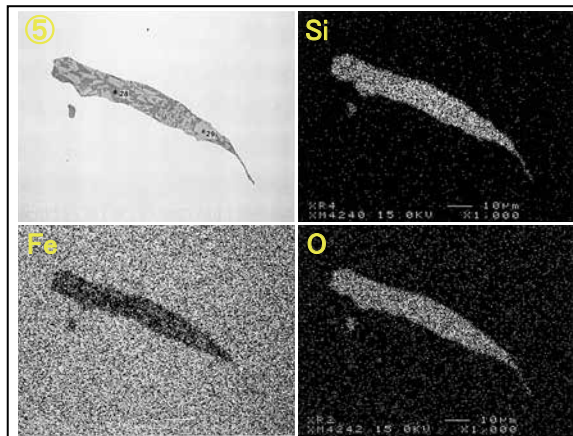
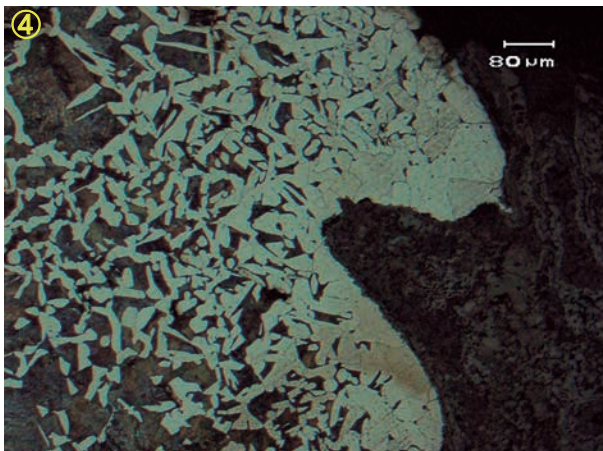
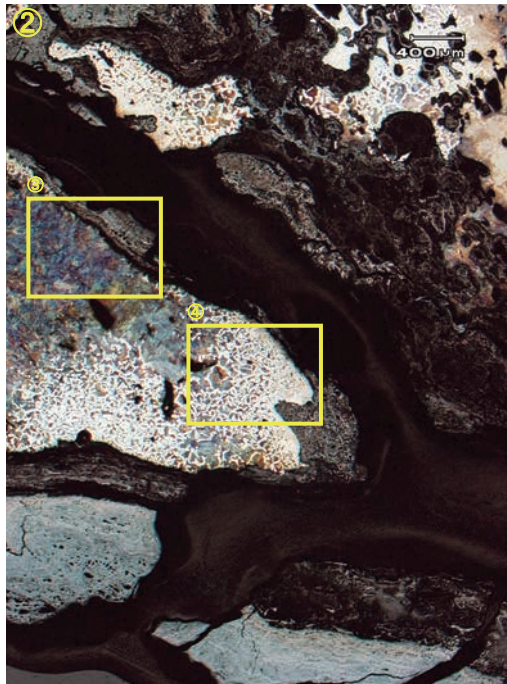
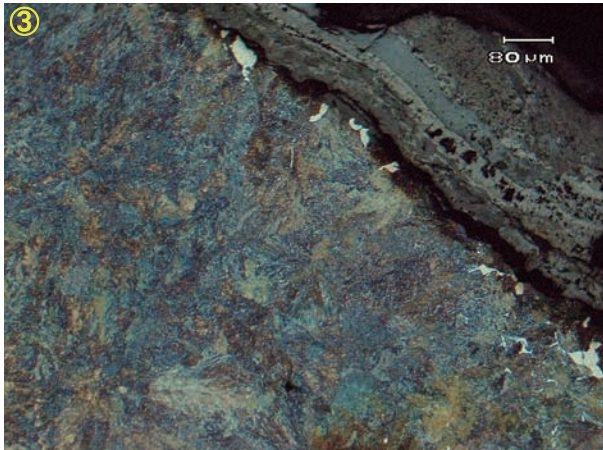
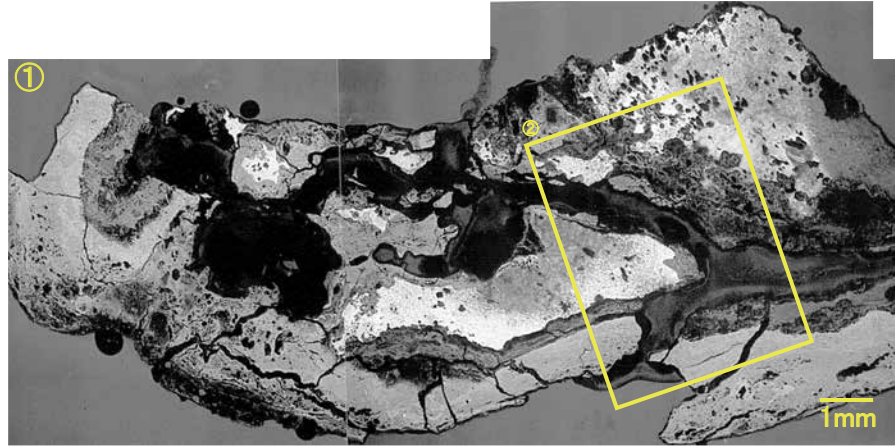
鉄中非金属介在物と滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

定量分析値

Element	1	Element	9	10	11
O	0.485	Na ₂ O	0.063	0.012	-
S	0.529	CuO	0.099	-	-
Sn	0.112	MgO	0.248	0.080	0.104
Cu	0.024	CaO	0.447	-	-
As	0.313	Al ₂ O ₃	0.019	0.063	-
P	10.713	FeO	70.179	91.382	97.311
Fe	86.567	SiO ₂	30.423	0.305	0.275
Total	98.743	TiO ₂	0.039	0.057	0.070
		S	-	-	0.012
		MnO	0.094	-	0.059
		As ₂ O ₅	-	0.043	-
		P ₂ O ₅	0.109	0.025	-
		ZrO ₂	0.030	-	0.057
		V ₂ O ₅	0.024	0.027	-
		Total	101.774	91.994	97.888

第103図 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

YSD-9 鉄素材
 ①マクロ組織、
 金属鉄部:ナイタルetch
 ②金属鉄部:亜共析組織
 ~共析組織、③金属鉄
 (高炭素域)拡大、燐化
 鉄共晶、④金属鉄(低炭
 素域)拡大、滓部:ウスタ
 イト・ファヤライト



定量分析値

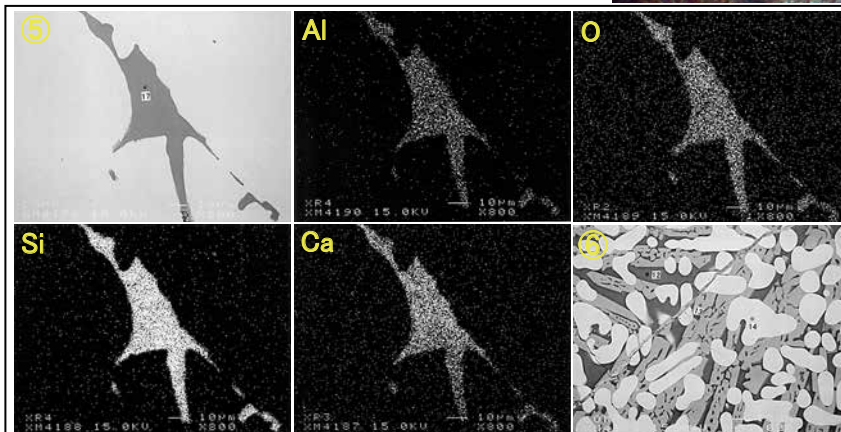
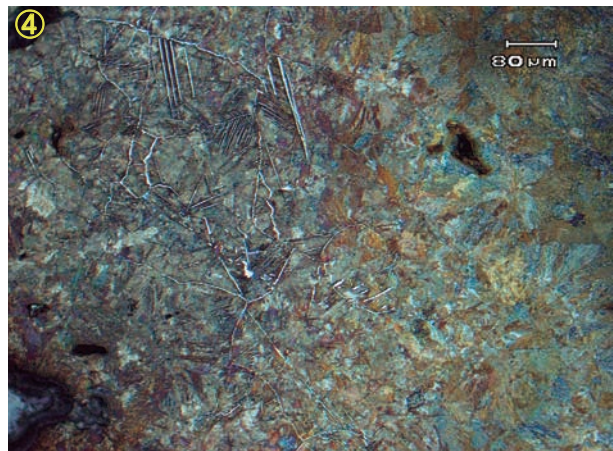
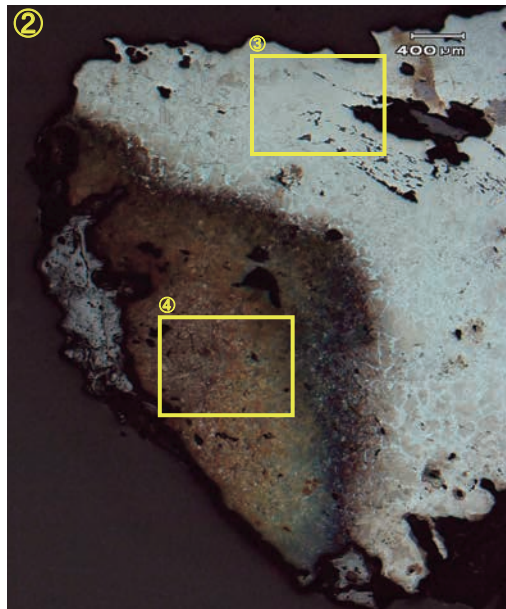
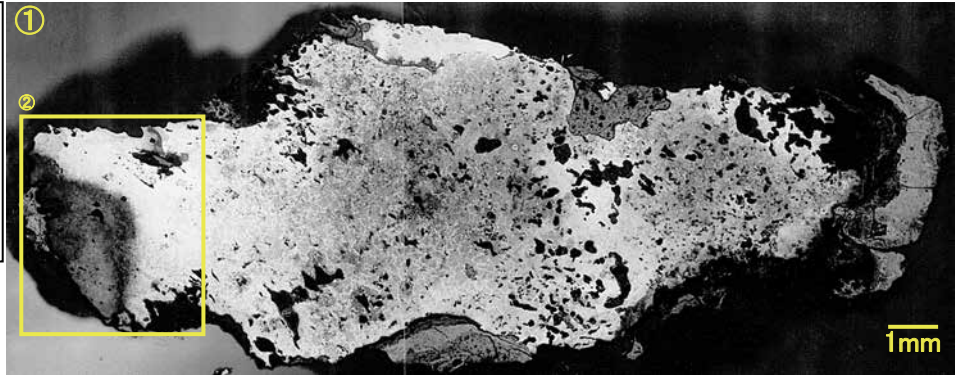
Element	28	29	Element	30	31
K ₂ O	4.519	0.008	K ₂ O	-	1.387
Na ₂ O	1.846	-	Na ₂ O	0.031	0.142
CuO	0.018	-	MgO	0.040	1.247
MgO	0.104	2.067	CaO	-	1.789
CaO	8.383	0.396	Al ₂ O ₃	0.475	0.170
Al ₂ O ₃	20.537	0.181	FeO	90.830	53.249
FeO	15.034	62.276	SiO ₂	0.527	34.491
SiO ₂	48.564	31.673	TiO ₂	0.058	0.042
TiO ₂	0.863	0.102	S	-	0.018
MnO	0.034	0.380	MnO	-	0.157
P ₂ O ₅	0.336	0.212	P ₂ O ₅	-	0.077
ZrO ₂	0.294	0.112	ZrO ₂	-	0.092
Cr ₂ O ₃	-	0.085	Cr ₂ O ₃	-	0.019
V ₂ O ₅	0.034	0.095	V ₂ O ₅	0.103	0.073
Total	100.566	97.587	Total	92.064	92.953

鉄中非金属介在物と滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第104図 鉄素材の顕微鏡組織

YSD-10 鉄素材

- ①マクロ組織、金属鉄部:ナイトルetch
- ②金属鉄部拡大、フェライト単相～過共析組織
- ③金属鉄(低炭素域)拡大
- ④金属鉄(高炭素域)拡大



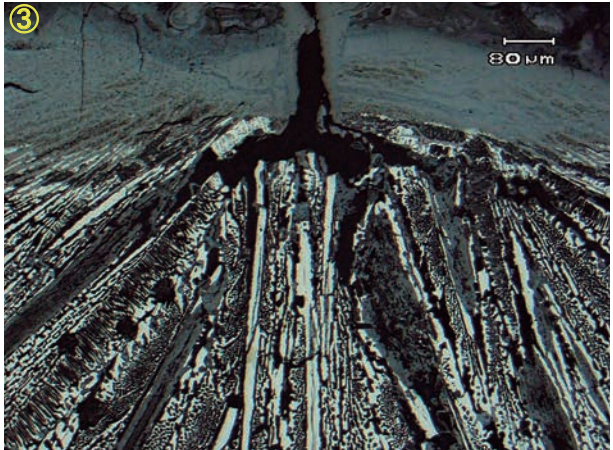
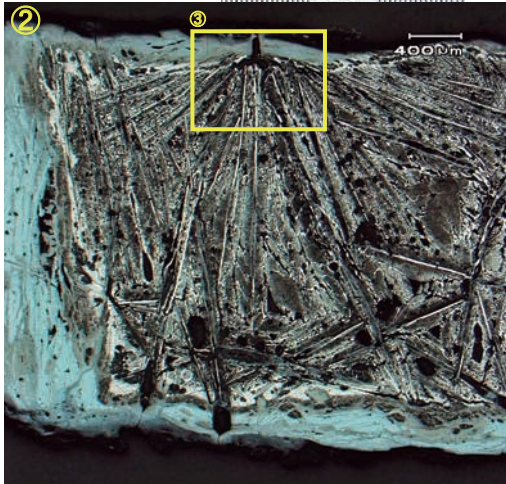
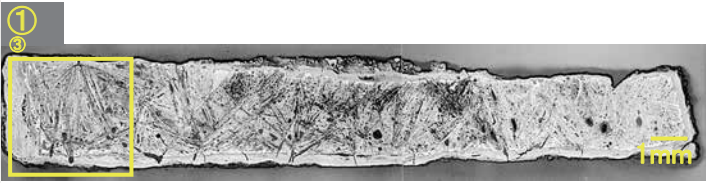
定量分析値

Element	12	13	14	Element	17
K ₂ O	5.724	0.015	0.003	F	0.150
Na ₂ O	2.316	0.005	0.079	K ₂ O	4.641
CuO	-	-	0.024	Na ₂ O	1.289
MgO	-	0.574	0.052	MgO	0.596
CaO	12.154	1.625	-	CaO	10.988
Al ₂ O ₃	17.352	0.333	1.010	Al ₂ O ₃	13.076
FeO	22.194	66.334	95.771	FeO	3.978
SiO ₂	39.608	30.916	0.318	SiO ₂	64.640
TiO ₂	0.397	0.151	0.951	TiO ₂	2.006
S	0.123	0.007	0.015	S	0.034
MnO	0.053	0.253	0.087	MnO	0.332
As ₂ O ₅	-	0.047	-	P ₂ O ₅	0.170
P ₂ O ₅	0.936	0.131	0.021	ZrO ₂	0.125
ZrO ₂	0.082	0.101	-	V ₂ O ₅	0.071
Cr ₂ O ₃	0.017	-	0.038	Total	101.962
V ₂ O ₅	-	-	0.071		
Total	100.956	100.492	98.440		

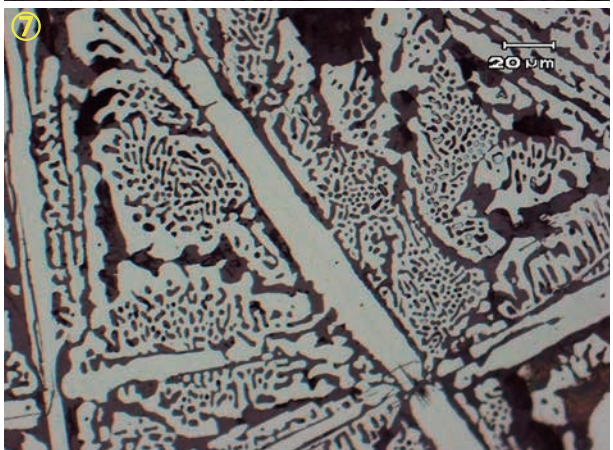
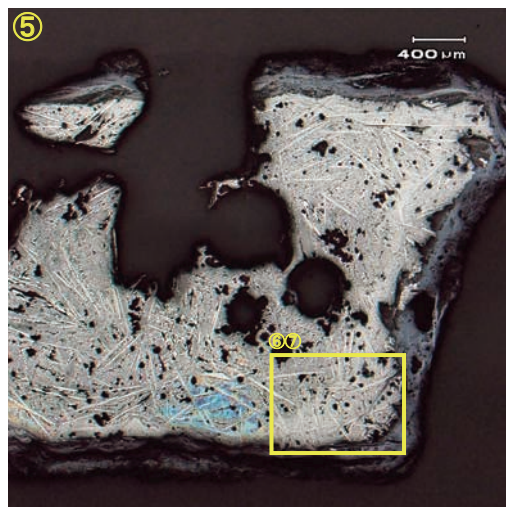
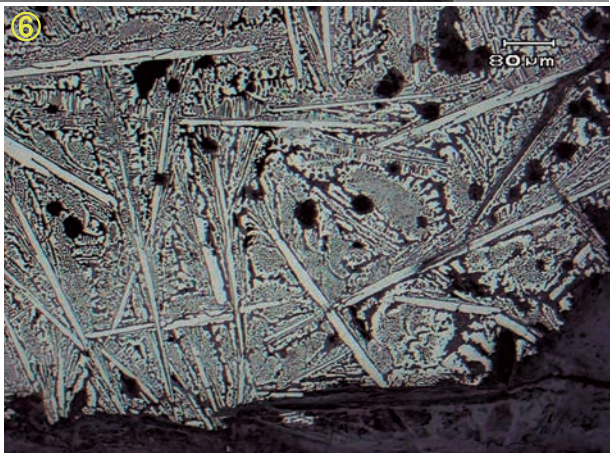
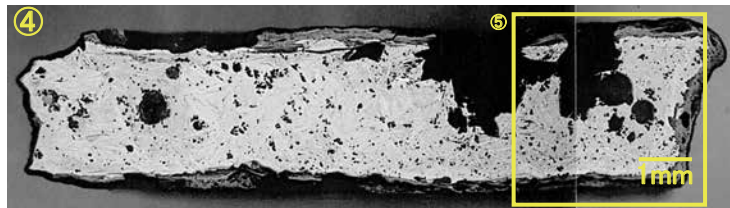
鉄中非金属介在物と滓部の反射電子像(COMP)および特性X線像

第105図 鉄素材の顕微鏡組織

YSD-11 鑄造鉄器片
 ①マクロ組織、
 ②③錆化鉄部拡大、
 過共晶組成白鑄鉄組織
 痕跡



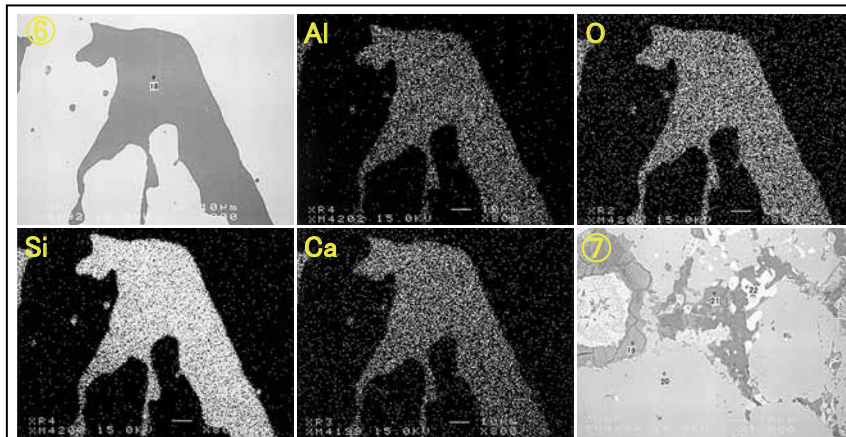
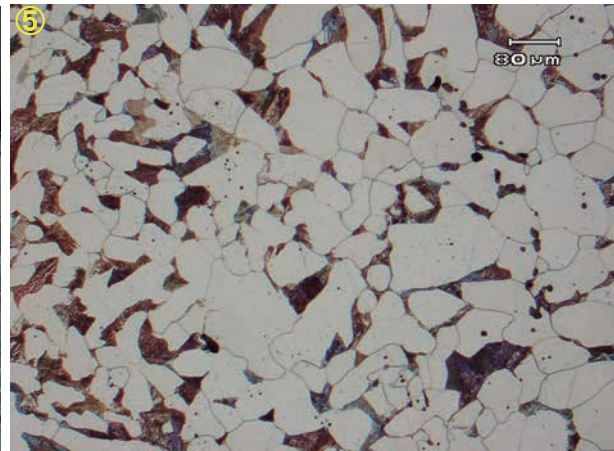
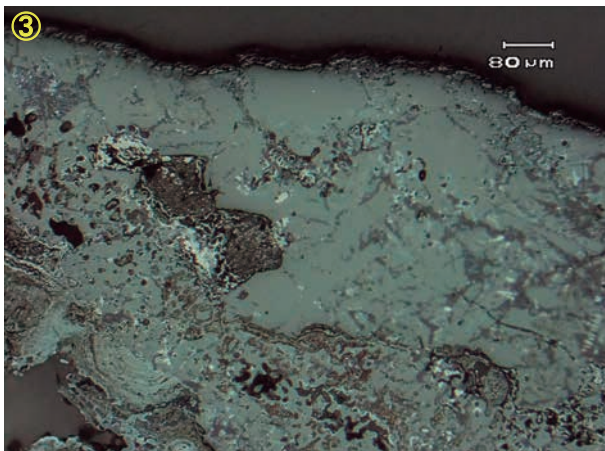
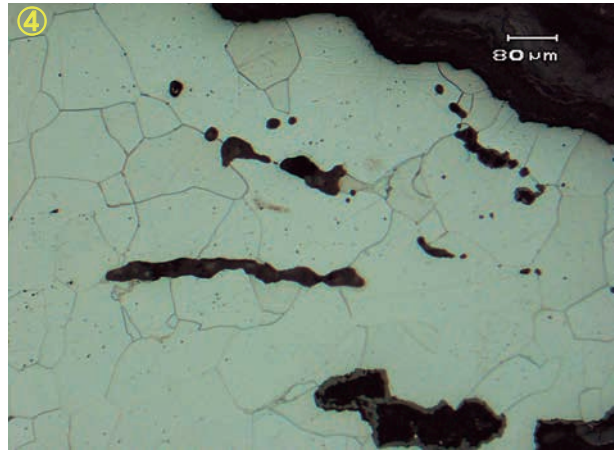
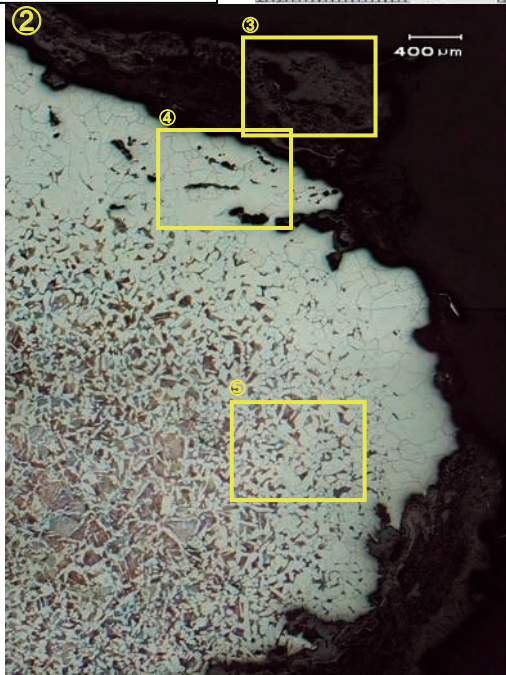
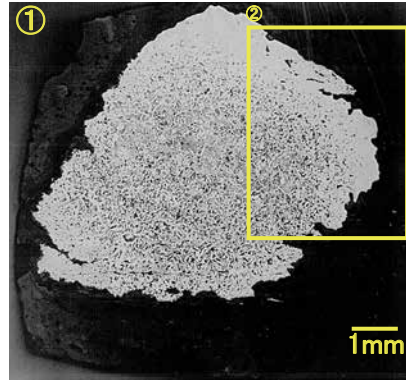
YSD-12 鑄造鉄器片
 ④マクロ組織、
 ⑤~⑦錆化鉄部拡大、
 過共晶組成白鑄鉄組織
 痕跡



第106図 鑄造鉄器片の顕微鏡組織

YSD-13 鉄釘

- ①マクロ組織、ナイトルetch
- ②金属鉄部:フェライト単相~亜共析組織、③附着滓部拡大、④⑤金属鉄部拡大

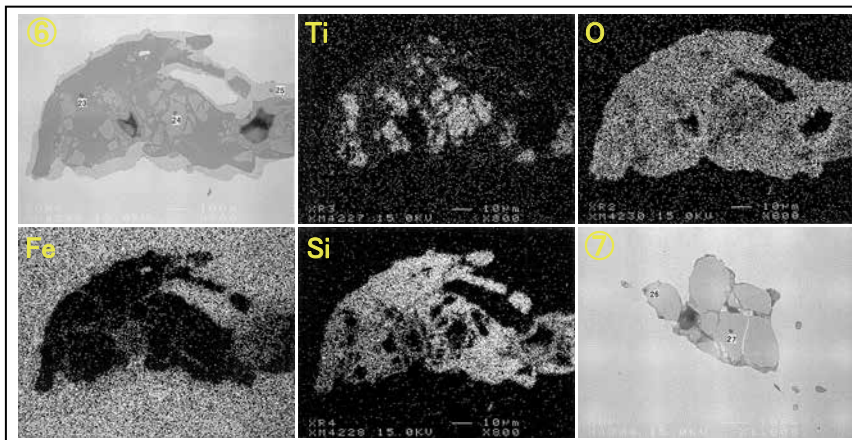
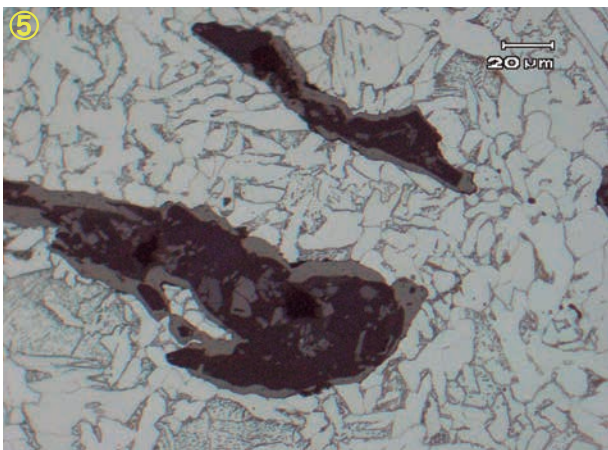
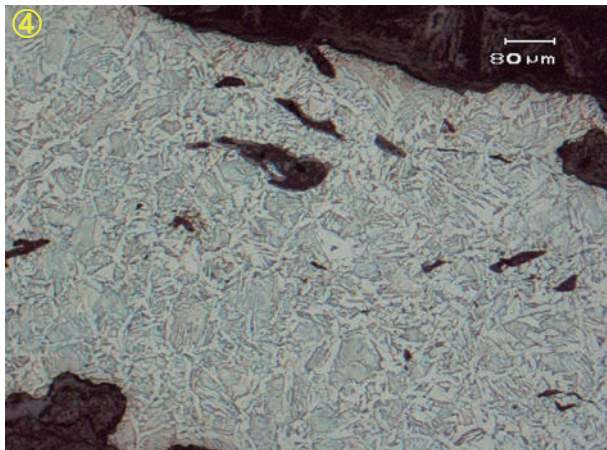
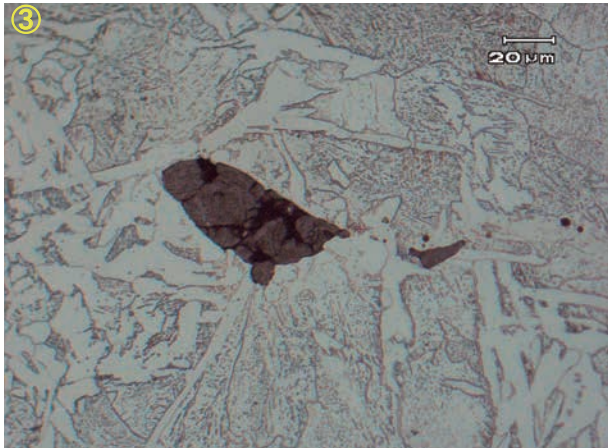
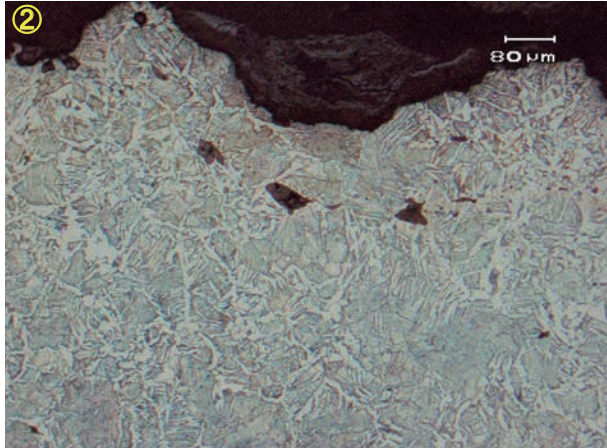
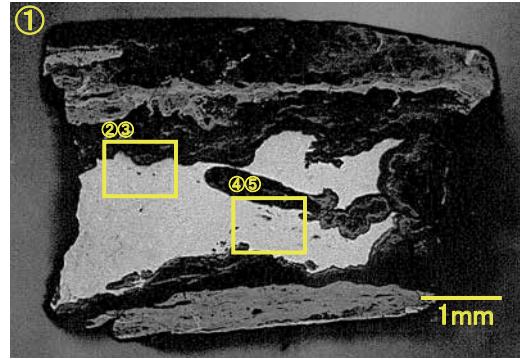


定量分析値					
Element	18	19	20	21	22
F	0.252	-	-	-	-
K ₂ O	4.402	0.428	-	21.541	0.128
Na ₂ O	1.429	0.576	-	0.090	-
CuO	-	-	-	0.026	0.034
MgO	1.089	0.030	0.948	-	0.041
CaO	7.089	0.067	0.521	0.010	-
Al ₂ O ₃	14.779	9.354	0.136	23.838	0.462
FeO	2.371	45.175	66.953	2.123	91.798
SiO ₂	62.769	32.593	31.087	59.845	1.279
TiO ₂	3.758	1.073	0.047	0.018	0.766
S	0.039	0.034	-	-	0.019
MnO	1.104	0.018	0.396	0.015	0.139
As ₂ O ₃	0.040	-	-	-	-
P ₂ O ₅	-	0.290	0.047	0.034	0.022
ZrO ₂	0.842	-	-	-	-
Cr ₂ O ₃	-	-	-	0.029	-
V ₂ O ₅	0.166	0.074	0.030	0.035	0.093
Total	100.023	89.712	100.165	107.604	94.781

鉄中非金属介在物と滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第107図 鉄釘の顕微鏡組織

YSD-14 鉄釘
 ①マクロ組織、ナイトルetch
 ②金属鉄部:フェライト単相
 ~亜共析組織、③附着
 滓部拡大、④⑤金属鉄
 部拡大



定量分析値					
Element	23	24	25	26	27
F	0.026	-	-	-	-
K ₂ O	5.312	0.051	0.002	1.045	-
Na ₂ O	0.303	0.004	-	0.191	-
CuO	-	-	0.099	-	0.041
MgO	0.313	1.020	0.048	1.207	0.072
CaO	3.813	0.071	-	1.346	-
Al ₂ O ₃	15.514	3.931	-	1.474	0.318
FeO	2.274	4.783	91.203	67.886	89.835
SiO ₂	62.685	0.260	0.041	22.331	0.107
TiO ₂	7.853	81.779	0.177	0.220	0.408
S	0.011	-	0.032	0.028	0.015
MnO	1.888	2.355	-	0.381	0.100
As ₂ O ₅	0.060	0.078	-	0.061	-
P ₂ O ₅	0.005	-	-	1.227	-
ZrO ₂	0.021	-	-	-	-
Cr ₂ O ₃	0.081	0.304	-	0.042	0.037
V ₂ O ₅	0.137	3.279	-	0.024	0.076
Total	100.285	97.915	91.602	97.463	91.009

鉄中非金属介在物と滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第108図 鉄釘の顕微鏡組織

第9節 吉田住吉山遺跡出土銅関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

1. いきさつ

吉田住吉山遺跡は兵庫県三木市志染町吉田字住吉山に所在する。同地域は以前より、和田村四合谷村ノ口付城跡として周知されていた（平成16年度より吉田住吉山遺跡と改称）。

調査地区内からは、室町時代と推定される埴埜、銅塊、銅または青銅製品などが出土している。そこで同地域での銅（青銅）製品生産の実態を検討する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

銅塊、青銅製品（小型鍋）計2点の調査を行った。

2-2. 調査項目

（1）肉眼観察

遺物の外観上の特徴を簡単に記載した。

（2）マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機を用いて低倍率で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

（3）顕微鏡組織

鋳滓の鋳物組成、金属部の組織観察や非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3μ と 1μ で鏡面研磨した。

観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、写真撮影を行った。なお銅（または銅合金）の腐食（Etching）には、酢酸・硝酸・アセトン混合液を用いた。

（4）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

（5）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

銅（または銅合金）組織の組成調査を目的とする。

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される物

質ほど明るく、軽い元素で構成される物質ほど暗い色調で示される。これを利用して組成の違いを確認後、定量分析を実施した。

(6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

銅 (Cu)、錫 (Sn)、鉛 (Pb)、亜鉛 (Zn)、鉄 (Fe)、砒素 (As)、アンチモン (Sb)、ビスマス (Bi)、セレン (Se)。ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) : 誘導結合プラズマ発光分光分析法。

3. 調査結果

WDA-1 : 銅塊 (M413)

(1) 肉眼観察 : 兵庫県立考古博物館が銅塊から試料採取後、分析用に送付された約 0.3g の小片の調査を実施した。供試材の表面は一部緑青が付着しているが、広い範囲で光沢のある赤褐色の金属部が確認される。また特殊金属探知機の L (●) で反応がみられる。

(2) マクロ組織 : 第109図①に示す。淡橙色部は金属銅 (Cu) である。試料の内部でも、結晶粒界に沿って、錆化が若干進んでいる。

(3) 顕微鏡組織 : 第109図②~④に示す。断面は酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食したところ、広い範囲で共晶状の初晶が確認された。さらに素地部分には③④に示したように大型の多角形結晶の粒界が現出する。また粒状の青灰色部は酸化銅 (Cu₂O) と推定される。

(4) EPMA 調査 : 第109図⑤に反射電子像 (COMP) を示す。粒状青灰色部の定量分析値は分析点 11 が 87.0%Cu-6.2%Bi-6.4%O、13 が 86.7%Cu-6.8%Bi-6.3%O と酷似する組成であった。酸化銅 (Cu₂O) で、かなりビスマス (Bi) が含まれる。

また 12 の素地部分の定量分析値は 101.0%Cu であった。ほぼ純銅 (Cu) に近い組成といえる。

(5) 化学組成分析 : 第20表に示す。分析用供試材を二分して、それぞれ測定を実施した (WDA-1-1, 2)。2回とも近似した値が得られている。銅 (Cu) が 93.8%、92.4%と高値であった。錫 (Sn) は <0.01%、<0.01%、鉛 (Pb) も 0.01%、0.01%と非常に低値であった。また亜鉛 (Zn) 0.07%、0.01%、ビスマス (Bi) <0.10%、<0.10%、セレン (Se) 0.05%、0.05%含まれる。これらは銅鉱石起源の微量元素と考えられる。一方、鉄 (Fe) は 0.03%、0.02%、砒素 (As) <0.01%、<0.01%、アンチモン (Sb) <0.01%、<0.01%と極めて低値であった。全体にほぼ純銅 (Cu) といえる組成である。総計が 94.0%、92.5%と若干低めなのは、錆化の影響と推定される。

以上の調査結果から、当試料はほぼ純銅 (Cu) の塊であることが明らかとなった。鑄造用原料の銅地金の可能性が高いと考えられる。

WDA-2 : 小型鍋破片 (M412)

(1) 肉眼観察 : 小型鍋 (青銅鑄物) の口縁部破片と推測される。表面は全体が緑青で覆われるが、特殊金属探知機の L (●) で反応があり、内部には金属が残存するものと判断される。側面の破面に沿って、ごく薄く分析用試料を切り出して、分析調査を実施した。

(2) マクロ組織 : 第110図①に示す。断面は酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食したところ、ほぼ全面樹枝状初晶が確認された。凝固組織の特徴といえる。

第5章 吉田住吉山遺跡出土遺物の自然科学分析

(3) 顕微鏡組織：第110図②～⑥に示す。淡橙色の素地部分では発達した多角形結晶が確認される。粒界には網目状白色の錫 (Sn) 含有率の高い相が点在する。また粒状、不定形の暗色部は鉛 (Pb) の酸化物で、さらに点在する粒状青灰色部は硫化銅と推定される。これら各相の組成に関しては EPMA 調査の項で詳述する。

(4) EPMA 調査：第111図①に反射電子像 (COMP) を示す。1 は反射顕微鏡下での網目状白色部で、特性 X 線像をみると、銅 (Cu)、錫 (Sn) に強い反応がある。定量分析値は 69.5%Cu-25.5%Sn であった。錫 (Sn) 含有率の高い青銅 (Cu-Sn 合金) といえる。また淡橙色多角形結晶の粒界付近にあたる、2 の定量分析値は 82.5%Cu-13.7%Sn、多角形結晶中央部の 3 の 94.2%Cu-4.8%Sn と、いずれも青銅 (Cu-Sn 合金) であった。部位により錫 (Sn) の偏析が確認される。

4 は反射顕微鏡下の粒状暗色部にあたる。特性 X 線像では鉛 (Pb) に強い反応があり、定量分析値は 97.7%Pb-9.0%Cu-1.5%O であった。鉛 (Pb) と銅 (Cu) は固溶しないため、銅 (Cu) は素地部分の影響を受けた可能性が高いと考えられる。この個所は鉛 (Pb) の銹化物と推定される。

5 および 6 は反射顕微鏡下の粒状青灰色部にあたる。特性 X 線像では硫黄 (S) に強い反応がみられる。定量分析値は 5 が 72.3%Cu-1.4%Sn-1.1%Pb-18.5%S、6 は 77.1%Cu-1.3%Pb-19.8%S であった。白鉛 (Cu_2S)^(注1) と推定される。また錫 (Sn)、鉛 (Pb) がごく微量検出された。

さらにもう 1 視野、第111図②に反射電子像 (COMP) を示す。7 は反射顕微鏡下で淡橙色多角形結晶の粒界部分、8 は中央部にあたる。定量分析値は 7 が 85.9%Cu-11.2%Sn、8 は 94.6%Cu-3.7%Sn であった。ともに青銅 (Cu-Sn 合金) であるが、粒界部の方がより錫 (Sn) 含有率が高い。また 9 は反射顕微鏡下の網目状白色部である。特性 X 線像では銅 (Cu)、錫 (Sn) に強い反応がある。定量分析値は 67.2%Cu-31.0%Sn であった。錫 (Sn) 含有率の高い青銅 (Cu-Sn 合金) 相であった。

10 は反射顕微鏡下の粒状暗色部にあたる。特性 X 線像では鉛 (Pb) に強い反応があり、定量分析値は 92.9%Pb-2.8%Cu-1.2%O であった。鉛 (Pb) と銅 (Cu) は固溶しないため、銅 (Cu) は素地部分の影響を受けた可能性が高いと考えられる。この個所は鉛 (Pb) の銹化物と推定される。

11 は反射顕微鏡下の粒状青灰色部にあたる。特性 X 線像では硫黄 (S) に強い反応がみられる。定量分析値は 76.6%Cu-1.1%Pb-20.3%S であった。白鉛 (Cu_2S) と推定される。また鉛 (Pb) がごく微量検出されたが、これは近接する鉛 (銹化物) 相の影響を受けた可能性が考えられる。

(5) 化学組成分析：第20表に示す。分析用供試材を二分して、それぞれ測定を実施した (WDA-2-1、2)。2 回とも近似した値が得られている。銅 (Cu) は 74.2%、76.1%であった。また錫 (Sn) は 12.8%、14.1%、鉛 (Pb) も 7.8%、7.4%と、ともに高めであった。亜鉛 (Zn) は <0.02%、<0.02%と低値である。さらに鉄 (Fe) は 0.04%、0.03%、砒素 (As) 0.23%、0.22%、アンチモン (Sb) が 0.12%、0.12%と微量含まれる。これは鉱石起源の不純物と推定される。

以上の調査結果から、当小型鍋は鉛青銅 (Cu-Sn-Pb 合金) 製品であることが明らかとなった。

4. まとめ

吉田住吉山遺跡出土銅塊・小型鍋破片を調査した結果、次の点が明らかになった。

〈1〉出土銅塊 (WDA-1) は、純銅 (Cu) に近い組成であった。また EPMA 調査や化学分析の結果、ビスマス (Bi)、セレン (Se) など、銅鉱石起源の微量元素が検出された。一方、しばしば国内産の銅 (または青銅) 製品に高い割合で含まれる、鉄 (Fe)、砒素 (As) などの元素は非常に低値で、よく精錬され

たものといえる。

当遺跡からは埴埜の口縁部破片等も出土していることを考慮すると、この銅塊（WDA-1）は銅（または青銅）鋳物の鋳造原料（銅地金）であった可能性が高いと考えられる。

（2）小型鍋破片（WDA-2）は、銅（Cu）に錫（Sn：7～8%程度）、鉛（Pb：13～14%程度）を加えた青銅（Cu-Sn-Pb合金）製品であった。またEPMAによる定性・定量分析では、銅塊（WDA-1）でみられたような、ビスマス（Bi）、セレン（Se）といった微量元素は確認されなかった。さらに化学分析では、鉄（Fe）、砒素（As）を微量含むことが確認された。これらの結果から青銅小鍋（WDA-2）は、銅塊（WDA-1）と同質の銅地金を鋳造原料として製作された可能性は極めて低いと考えられる。分析調査点数が限られているため、遺跡内で製作された可能性を完全に否定するものではないが、製品として持ち込まれた遺物の可能性があるといえよう。

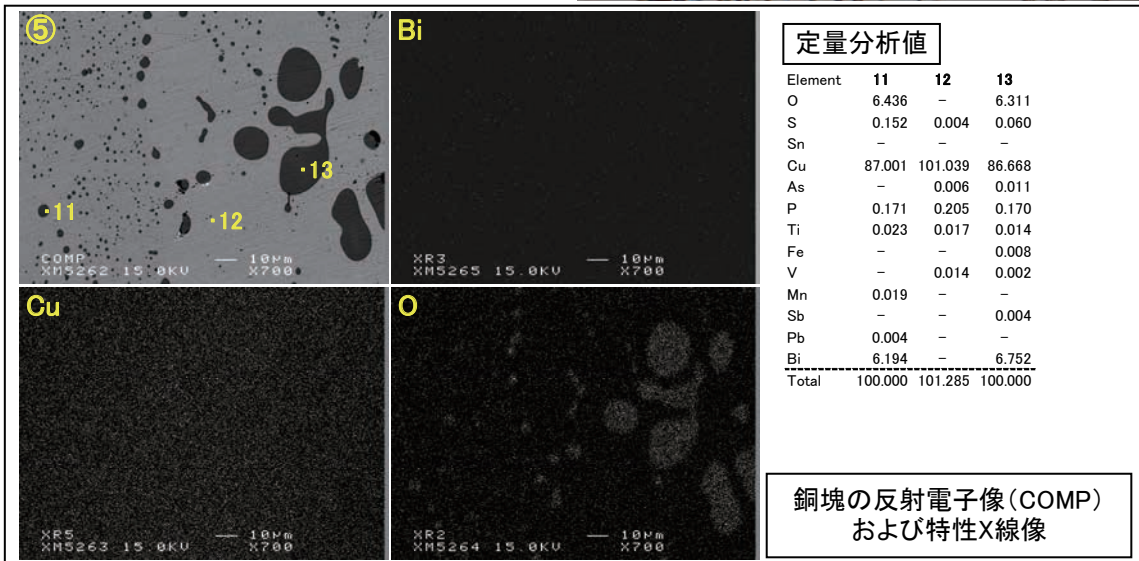
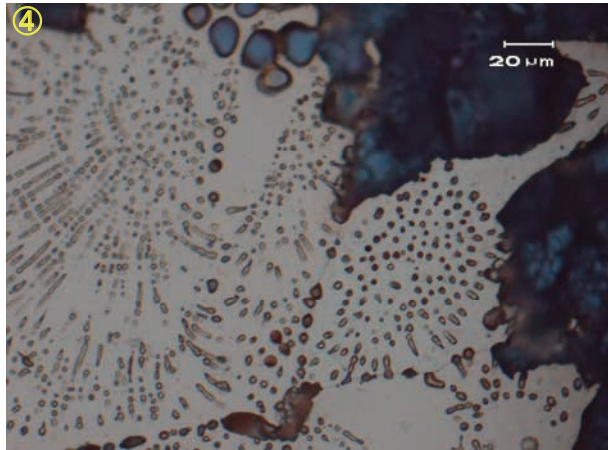
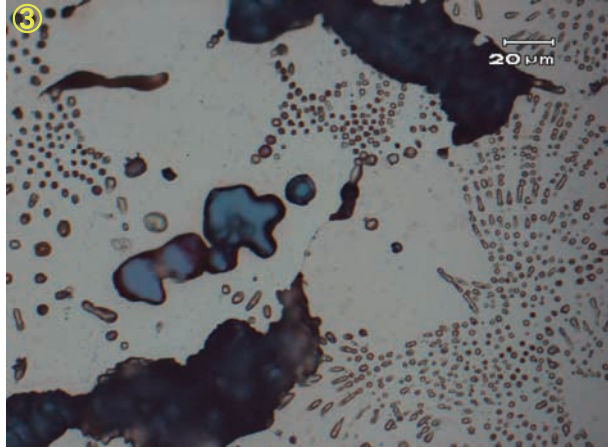
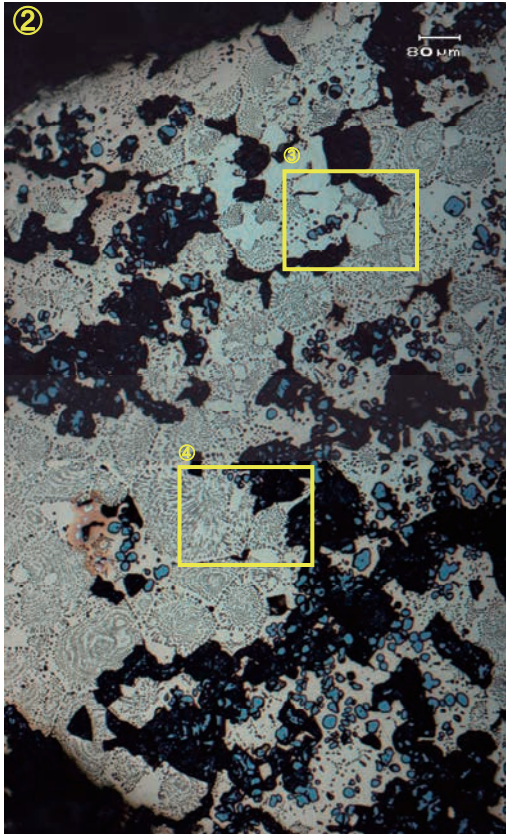
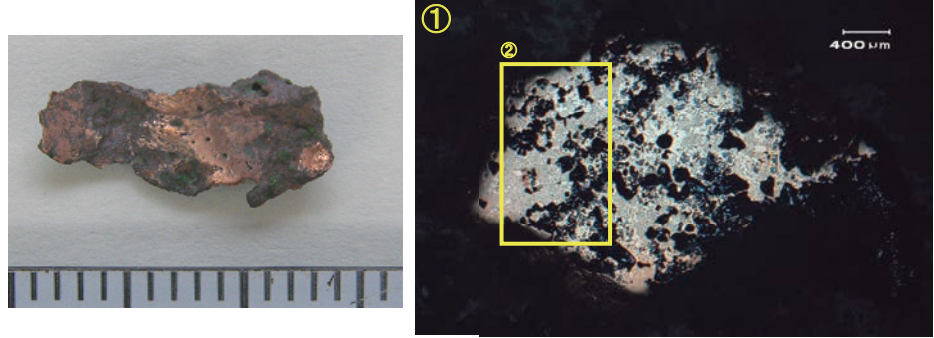
（1）伊藤尚『金属通論』1983 3-2-3 Cu製錬 の記載をもとに加筆

製錬中途の硫化銅と硫化鉄の混合物（ $x\text{Cu}_2\text{S}\cdot y\text{FeS}$ ）をマツト（鉞）、分離された滓をからみと呼ぶ。できた鉞はさらに酸化製錬され、まずFeSが除去される。次に残った Cu_2S （白鉞）が酸化されると銅（Cu）から硫黄（S）がとり除かれて金属銅が得られる。

第20表 供試材の科学組成

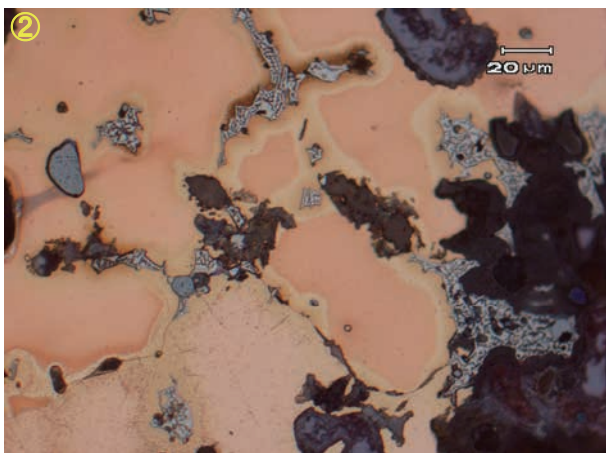
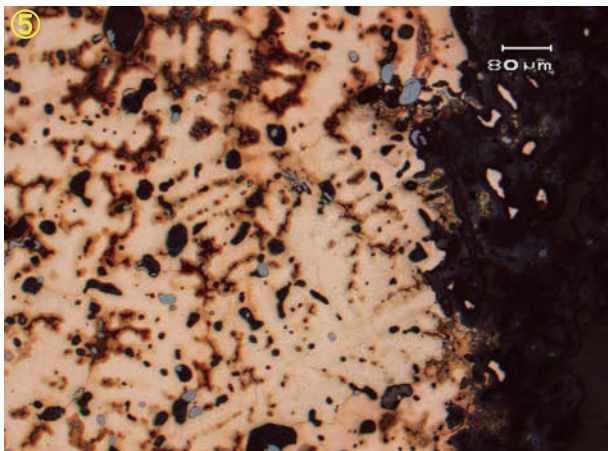
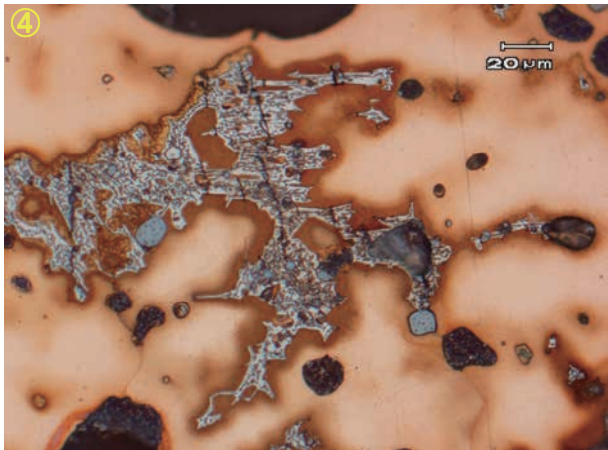
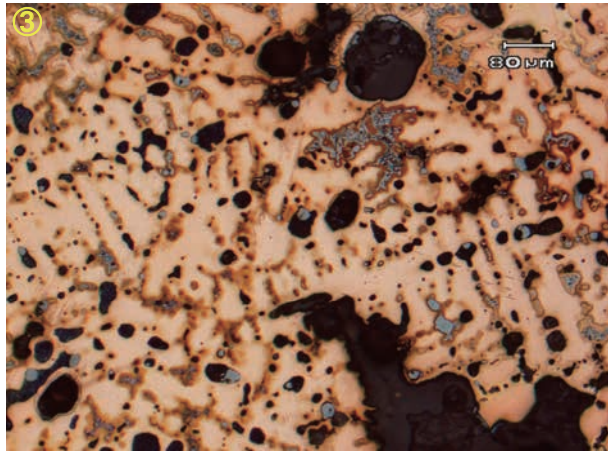
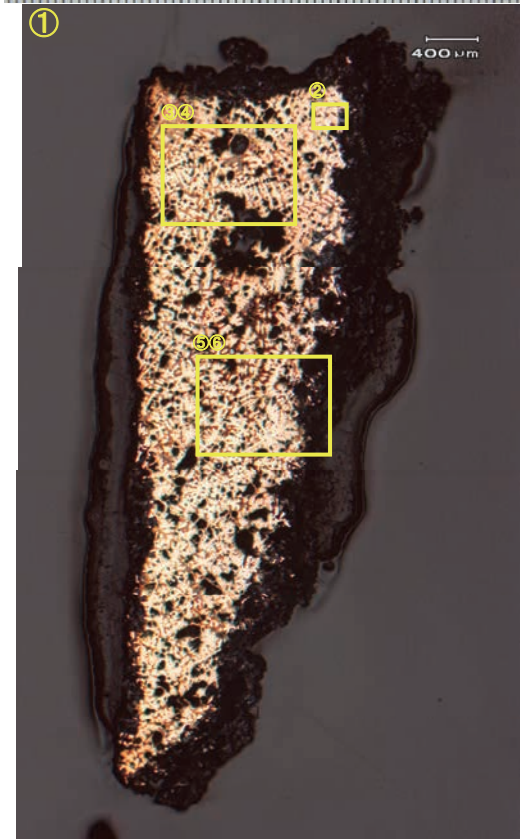
符号	遺物名称	推定年代	銅 (Cu)	鉛 (Pb)	錫 (Sn)	亜鉛 (Zn)	鉄 (Fe)	砒素 (As)	アンチモン (Sb)	ビスマス (Bi)	セレン (Se)
WDA-1-1	銅塊	中世後期	93.8	0.01	<0.01	0.07	0.03	<0.01	<0.01	<0.10	0.05
WDA-1-2			92.4	0.01	<0.01	0.01	0.02	<0.01	<0.01	<0.10	0.05
WDA-2-1	小型鍋		74.2	12.8	7.8	<0.02	0.04	0.23	0.12		
WDA-2-2			76.1	14.1	7.4	<0.02	0.03	0.22	0.12		

WDA-1 銅塊
 ①マクロ組織
 酢酸・硝酸・アセトンetch
 ②~④ ①の拡大
 素地部分:多角形結晶
 (Cu α 相)、
 粒状青灰色部:酸化銅

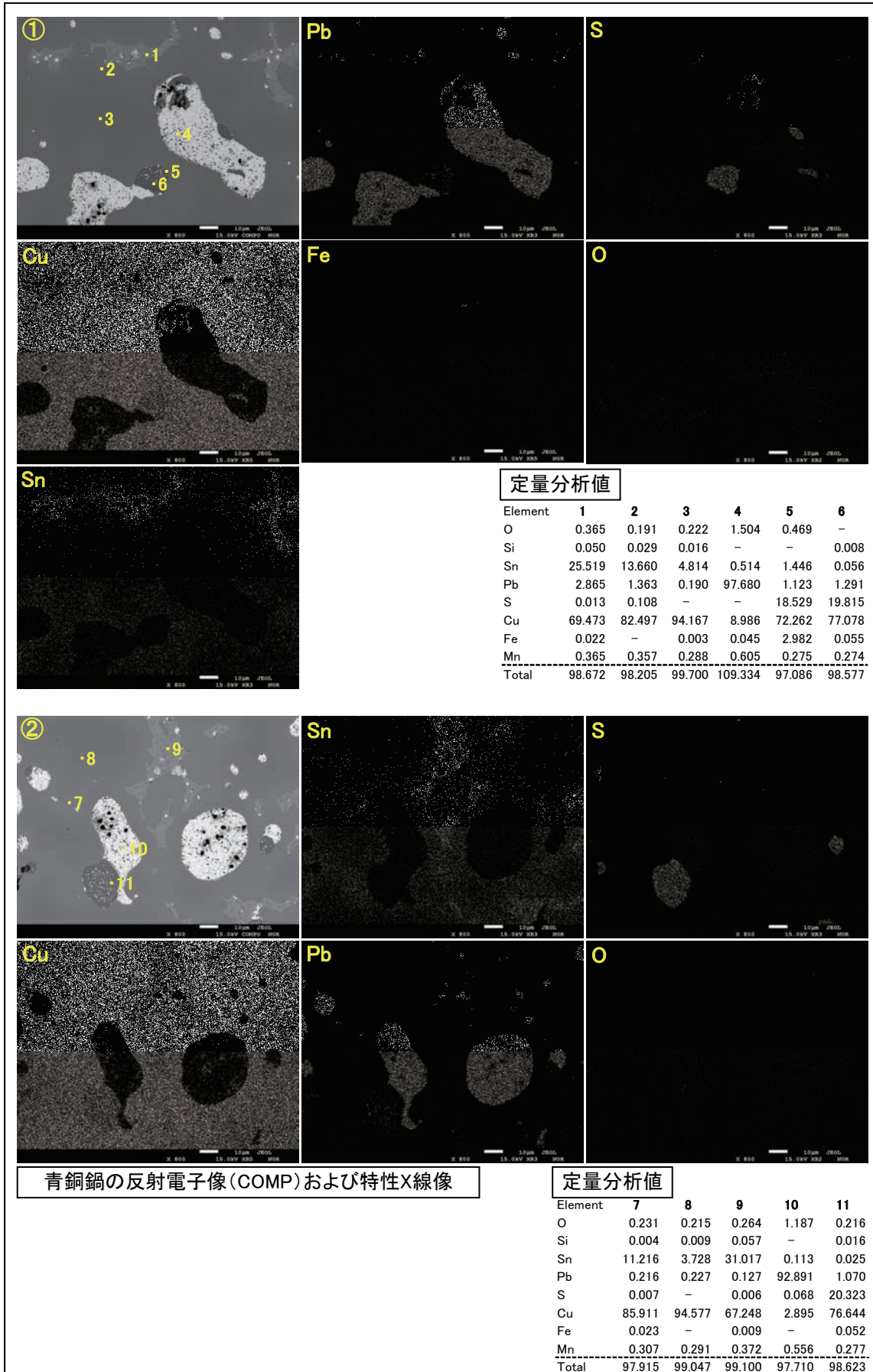


第109図 銅塊の顕微鏡組織・EMPA調査結果

WDA-2 青銅鍋
 ①マクロ組織
 酢酸・硝酸・アセトンetch
 ②~④ ①の拡大、素地
 部分:多角形結晶(Cu-Sn
 α 相)、網状白色部:高Sn
 相、粒状暗色部:Pb(銹化
 物)
 粒状青灰色部:硫化銅



第110図 青銅鍋の顕微鏡組織



第111図 青銅鍋のEMPA調査結果

第10節 吉田住吉山遺跡から出土した貝類遺存体

丸山真史（奈良文化財研究所・客員研究員）

1. 貝類遺存体の概要

貝類遺存体は、南北朝期に築かれた曲輪2、土塁1、堀切の3箇所から計61点が出土した。いずれも巻貝であり、種を同定したものはアカニシ55点である。また、種の同定が困難な小片が6点あったが、いずれもアカニシと思われる。地点別の出土量は、それぞれ帯曲輪2から1点、土塁1から17点、堀切から37点を数える（第22表・第23表）。出土したアカニシの大部分は殻口や殻体が大きく打ち割られており、殻軸だけが保存されたものが少なくない。そのため殻長や殻幅の計測はできなかったが、おおよそ殻長10cm前後の個体と推定される。

第21表 種名表

軟体動物門 Mollusca

腹足綱 Gastropoda

新腹足目 Neogastropoda

アッキガイ科 Muricidae

アカニシ *Rapana venosa*

2. 中世の貝類遺存体

貝類遺存体は全国的に中世遺跡から出土しており、都市・城館遺跡ではアワビ、サザエ、アカニシといった大型巻貝の出土が特徴的である（樋泉 2001）。その代表的な遺跡である鎌倉市街地の遺跡では、アカニシが大量に出土しており、ほとんどの殻は肉を取り出すために割られている（金子 1988）。広島県草戸千軒町遺跡では、アカガイ、アサリ、ハマグリ、アカニシなどが出土しており、大量のアカニシが投棄された井戸が検出され、ほとんどの殻が割られていることから、近辺でアカニシの剥き身作業が行われたと推定されている（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1995）。福岡県博多遺跡では、アカニシが出土しているほか、マガキを含むイタボガキ科が多いことを特徴としており、マガキの集積が検出されている（富岡・屋山 2008）。京都の平安京左京三条二坊十町跡では貝類の出土量は少ないが、室町時代の井戸からアカニシ、シジミ類、ハマグリといった貝類が出土している（丸山 2008）。福島県河股城跡ではアカニシのみが出土しているが2点と少数に留まる。宮城県瑞巖寺境内遺跡ではアカニシが比較的多いが、アサリが最も多く出土している（金子 2009）。

これらの中世遺跡では、東北から北部九州までアカニシを利用していることが窺えるが、特定の貝種が集積した遺構を除いて、一般的には複数種の貝類が出土する傾向が見られる。これに対して、当遺跡から出土した貝類遺存体はアカニシの1種だけであることを特徴としている。

3. アカニシの利用法

アカニシは北海道南部から台湾、中国沿岸の水深30m以浅の砂泥底に生息しており、大阪湾から瀬戸内でも捕獲できる。当地の環境から考えれば、南に位置する瀬戸内海沿岸の明石近郊から搬入された可能性が高いであろう。現代でもアカニシを食用にするが、一般家庭の食卓では馴染がなくなっている。アカニシの利用法は肉を食用とする以外に、容器や蛸壺のほか、染料として利用される。また、江戸時代の本草書にはアカニシの薬効が記載される。『和漢三才図会』に「蓼螺（あき）」という名称で「赤辛螺 殻内外正紅其殻焼灰入菓傳瘡腫妙或作藥鹽其法取辛螺殼鹽焼于炭火上采蘩蓼汁頻頻加入能焼調去火氣碎未塗牙齒甚佳含口洗目亦可」と記載される（和漢三才図会 1970）。「アカニシの殻の内外は赤く、焼

いて灰にしてから、薬に入れて腫瘡に使う。あるいは薬塩を作る。殻をとって塩を盛り、炭火の上で焼いて、薯蕷（はこべ）の汁を絶え間なく加えて火気とり、粉末にすると歯牙に効果がある。口に含むのも、目を洗うのにも使える。」と解釈される。さらに香料の研究では、合香（註）の配剤として甲香（日本では主にアカニシの蓋をすり潰したものを）を調合すると、「香」の匂いが良くなるという（山田 1976）。

出土したアカニシの大部分は殻軸だけが遺存しており、殻体が残っていても殻口や殻体が打ち割られている。アカニシを生食する際、殻口付近を打ち割りながら蓋を取り、貝柱を切って肉を取り出す。また、染料として利用する場合も、パープル腺を取り出すために殻体を打ち割る。一方、加熱すれば殻を割ることなく、肉を取り出せる。本資料に殻が打ち割られたものが多くあることを考えると、食用か染料としてアカニシを用いたと考えられる。しかし、曲輪、土塁、堀切といった軍事施設において、染物が行われたとは考えにくく、食用としたと考えるのが自然であろう。ただし、アカニシ1種のみが出土していることから、饗宴などのハレの場における食料残滓が廃棄されたものとは言い難い。

4. まとめ

当遺跡の貝類遺存体は、アカニシ1種のみが出土したことを特徴としている。アカニシは肉を賞味するだけでなく、容器、蛸壺、染料、薬用、香料などの多様な利用法がある。本資料の大部分は、殻が打ち割られていることから、アカニシを生食していたことが推測される。しかし、曲輪、土塁、堀切といった軍事施設に廃棄されたものであり、饗宴などハレの場の食材とは考えにくい。今後、中世の山城から出土する貝類の利用法は、出土した地点（施設）との関連などを併せ考えていく必要があるだろう。

〔註〕

香料は多種多様であるが、各種の香料を適当量配剤調合して用いることを中国では合香とよぶ。

〔参考文献〕

- 金子浩昌 1988 「中世遺跡における動物遺体」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会 pp. 407-436
- 金子浩昌 2009 「瑞巖寺境内遺跡の動物遺体」『瑞巖寺境内遺跡』（宗）瑞巖寺 pp. 147-181
- 樋泉岳二 2001 「食物」『日本の中世遺跡』小野正敏編 東京大学出版会 pp. 162-163
- 富岡直人・屋山洋 2008 「人と動物の関わりを博多遺跡群に探る」『市史研究ふくおか』第3号 福岡市博物館市史編さん室 pp. 151(8)-132(27)
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1995 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 丸山真史・松井章 2008 「動物遺存体について」『平安京左京三条二坊十町（堀河院）跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 pp. 146-155
- 山崎京美 2002 「河股城跡Ⅰ・Ⅱa区出土動物遺存体の同定」『川股城跡発掘調査報告書-国道114号川俣バイパス工事関連発掘調査-』第4分冊福島県北建設・福島県伊達郡川俣町教育委員会 pp1-6
- 山田憲太郎 1976 『東亜香料史研究』中央公論美術出版 pp. 168-218
- 和漢三才圖會刊行委員会 1970 『和漢三才圖會』上 東京美術

第22表 貝類一覧(1)

番号	コンテナ	台帳番号	地区	遺構	土層	大分類	小分類	部位	加工	備考
A1	貝5	2	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻口から前面まで欠損
A2	貝4	3	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻口部分的に欠損、殻長 殻体前面部打ち割り 109.16
A3	貝4	4	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻口から大きく欠損、殻体前 面打ち割り
A4	貝4	5	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻口から前面まで欠損
A5	貝5	6	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体		殻口部分的に欠損、 殻体前面部打ち割り
A6	貝5	7	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻口から前面まで欠損
A7	貝6	8	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻口と前面が大きく欠損
A8	貝6	9	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻口から前面まで欠損
A9	貝6	10	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻口から前面まで欠損
A10	貝6	11	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻口から前面まで欠損
A11	貝6	12	土壘1	集石10		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻体後面から前面まで欠損
A12	貝4	1	土壘1	集石12		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A13	貝2	17	土壘1	集石13		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A14	貝4	19	土壘1	集石14		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体		
A15	貝3	13	土壘1	焼土4		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A16	貝2	18	土壘1	焼土4		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体	打割	殻口と殻体後面から前面まで欠損
A17	貝4	14	土壘1	土壘1	盛土	腹足綱	アカニシ?	殻軸		
A18	貝4	15	土壘1	土壘1	盛土	腹足綱	アカニシ?	殻軸		
A19	貝4	16	土壘1	土壘1	盛土	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A20	貝6	-	帯曲輪 2	土橋	上層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A21	貝2	21	堀切	堀切	上層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A22	貝2	21	堀切	堀切	上層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A23	貝2	24	堀切	堀切	上層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A24	貝5	20	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体		
A25	貝5	20	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体		
A26	貝5	20	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体		
A27	貝5	20	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体		
A28	貝5	20	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体		
A29	貝5	20	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A30	貝5	20	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A31	貝5	20	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸		

第23表 貝類一覧(2)

番号	コンテナ	台帳番号	地区	遺構	土層	大分類	小分類	部位	加工	備考
A32	貝2	22	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A33	貝2	23	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A34	貝2	23	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A35	貝2	23	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A36	貝2	25	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻体		
A37	貝2	26	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A38	貝2	27	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ?	殻軸		
A39	貝2	28	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ?	殻軸		
A40	貝2	29	堀切	堀切	中層	腹足綱	アカニシ	殻軸		
A41	貝1	30	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A42	貝1	30	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A43	貝1	31	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A44	貝1	31	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A45	貝1	31	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A46	貝1	31	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A47	貝1	32	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体		
A48	貝1	33	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体		
A49	貝1	34	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸・殻体		
A50	貝1	35	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A51	貝1	35	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A52	貝1	35	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A53	貝1	35	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A54	貝3	37	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A55	貝3	38	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ?	殻軸		
A56	貝3	39	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A57	貝3	40	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻体		
A58	貝3	41	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		
A59	貝3	42	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ?	殻軸		
A60	貝3	43	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻体		
A61	貝3	44	堀切	堀切		腹足綱	アカニシ	殻軸		



第112図 アカニシ

第11節 吉田住吉山遺跡出土中世遺物の蛍光X線分析

1. はじめに

吉田住吉山遺跡から出土した銅製品4点、銅素材など2点、銅銭16点、羽口3点、トリベ1点と鉄製品1点に付着した赤色顔料について蛍光X線分析を行い、試料の成分を検討した。なお、一部の試料の分析にあたっては奈良県立橿原考古学研究所の協力を得た。

2. 試料の分析方法

試料の分析は以下の2種類の方法のいずれかでおこなった。

a：兵庫県立考古博物館が保有するスペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MIDEX-Mを用いて行った。分析の条件は電圧45kV、電流0.25mA、測定時間180秒、軽元素側は電圧19kV、電流0.3mA、測定時間300秒でコリメータ径は2.0mmで測定した。検出器はペルチェ冷却SDD（液体窒素不要）である。

b：奈良県立橿原考古学研究所が保有するスペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MIDEX-Mを用いて行った。分析の条件は電圧45kV、電流0.25mA、測定時間180秒、軽元素側は電圧19kV、電流0.3mA、測定時間300秒でコリメータ径は2.0mmで測定した。検出器はペルチェ冷却SDD（液体窒素不要）である。

3. 銅製品・銅素材（第24表）

銅製品4点（M408～411）、銅素材1点（M413）について分析をおこなった。

①飾金具（M408）

試料 本体部分で表面4箇所、本体の表面の金層部分1箇所、本体の裏側にはめ込まれた銅板の表（本体表から透けて見える部分）の表面2箇所、銅板の裏の表面2箇所の測定を行った。

結果 本体部分の材質については銅95.84～80.78%で、錫は1箇所でのみ0.01%、鉛は2箇所で0.123

第24表 銅製品・銅素材の成分比率

番号	種類	部位	分析	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Au	Hg	Pb	合計
M408	飾金具	本体 本体 本体 本体 金層 銅板表 銅板表 銅板裏 銅板裏	a	2.308	80.780	0.239	0.263	0.011		0.212		0.051	83.862
			a	0.970	81.170	0.177	0.412			1.435		0.123	84.287
			a	0.009	95.840	0.181	0.343			3.418			99.791
			a		82.910	0.033	0.217			1.679			84.838
			a		57.750	0.118	0.699			40.910			99.477
			a	0.385	83.430	0.119	0.509					0.034	84.477
			a	0.203	83.500	0.143	0.611						84.456
			a		90.130	0.065	0.667			0.016		0.242	91.119
			a		94.430	0.080	0.713			0.012		0.357	95.592
M409	覆輪		a	0.149	24.950	0.189	0.146			1.864	0.276		27.574
M410	縁金具		a	22.630	54.420	0.116				0.093			77.259
M411	飾金具		a	0.376	95.560		0.380	0.011	0.125	0.140		0.930	97.521
M413	銅塊		a		84.830		0.059						84.889
					84.780		0.067						84.847
					84.680		0.139						84.819
M416	銅滴		b	0.112	93.390	0.494	0.753	1.901			0.982	97.632	

分析a 兵庫県立考古博物館スペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MIDEX-M

分析c 奈良県立橿原考古学研究所スペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MIDEX-M

～0.051%検出され、錫・鉛がほとんど検出されないことから、純銅に近いと考えられる。その他の元素としては金 (3.42～0.21%)、銀 (0.41～0.22%)、砒素 (0.24～0.03%)、鉄 (2.31～0%) などが検出されている。金については部分的に表面の金層を検出したものと考えられる。

金層部分を測定した部分では銅 57.75%、金 40.91%、銀 0.70%、砒素 0.12%が検出された。水銀が検出されなかったことから、アマルガム鍍金かどうかは判別できない。

銅板については銅が表面で 83.50～83.43%、裏面で 94.43～90.13%、鉛が表面で 0.034～0%、裏面で 0.357～0.242%検出されている。鉛は極微量で、錫は検出されていないことから銅板についても材質はほぼ純銅と考えられる。その他の元素としては銀 (0.71～0.51%)、砒素 (0.14～0.07%)、鉄 (0.385～0%)、金 (0.016～0%) が検出され、なかでも銀がやや目立っている。銀については本体・金層・銅板で検出され、金層・銅板でわずかに強く反応している。地金の銅に含まれるものか、表面に付着したものがわずかに残存したものかはっきりしないが、飾金具の表面あるいは銅板に銀によって装飾を施した可能性が考えられるのではないだろうか。

②覆輪 (M409)

試料 本体部分のみ表面 1 箇所を測定を行った。

結果 銹化が激しいためか、検出できた元素量は少ない。銅が 24.95%、金が 1.86%、水銀が 0.276%、砒素が 0.19%、鉄が 0.15%、銀が 0.15%である。錫・鉛は検出されていないことから本体の材質はほぼ純銅と考えられる。金は覆輪表面の金が反応したものと考えられ、水銀はアマルガム鍍金に由来するものかもしれない。

③縁金具 (M410)

試料 本体部分のみ表面 1 箇所を測定を行った。

結果 銹化が進んでいるためか、検出できた元素量はやや少ない。銅が 54.42%、鉄が 22.63%、砒素が 0.12%、金が 0.09%である。錫・鉛は検出されていないことから地金の材質はほぼ純銅と考えられる。金はかつて表面が金で装飾されていたことを示すのかもしれない。

④飾金具 (M411)

試料 本体部分のみ表面 1 箇所を測定を行った。

結果 銅が 95.56%、鉛が 0.93%、銀 0.38%、鉄が 0.38%、金が 0.14%、アンチモンが 0.13%、錫が 0.01%検出された。錫・鉛は微量しか検出されていないことから地金の材質はほぼ純銅と考えられる。

⑤銅塊 (M413)

試料 本体より剥離した破片 1 点について表面の研磨を行い 3 箇所を測定を行った。その後、この試料については、九州テクノリサーチ・TAC センターに送り金属学的分析を行った。

結果 銅が 84.83～84.68%、銀が 0.14～0.06%検出された。錫・鉛は検出されていないことから地金の材質はほぼ純銅と考えられる。ただし、より精度の高い ICP 法によると銅が 93.8～92.4% (第 5 章第 9 節) であり、蛍光 X 線分析では十分成分を捉え切れていないのも事実である。

⑥銅滴 (M416)

試料 本体部分のみ表面 1 箇所を測定を行った。

結果 銅が 93.39%、錫が 1.90%、鉛が 0.93%、砒素が 0.49%、鉄が 0.11%検出された。錫がやや多いが、鉛は微量しか検出されていないことから、材質はほぼ純銅と考えられる。

第25表 銅銭の成分比率

番号	種類	初鑄年	分析	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Au	Pb	合計
M418	太平通寶	976	a	0.069	69.880		0.239	13.600	0.020	0.006	15.790	99.605
M419	咸平元寶	998	a	0.138	71.740		0.051	10.730		0.009	16.920	99.588
M420	咸平元寶	998	b	0.492	93.810	0.084	0.628				2.359	97.373
M422	天禧通寶	1017	a	0.678	95.530	1.124	0.826			0.011	1.717	99.886
M423	天禧通寶	1017	a	0.033	75.350		0.033	8.802		0.010	15.450	99.677
M424	皇宋通寶	1038	a	0.103	73.970		0.036	10.390	0.228	0.009	14.900	99.636
M426	皇宋通寶	1038	a	0.130	75.270		0.046	6.573	0.064	0.012	17.650	99.745
M427	皇宋通寶	1038	a	1.210	68.960	0.484	0.066	11.050	0.072	0.007	17.890	99.738
M428	皇宋通寶	1038	a	0.014	68.920		0.107	10.130		0.008	20.420	99.600
M496	皇宋通寶	1038	a	0.193	64.360		0.060	11.880	0.020	0.014	23.080	99.607
M430	熙寧元寶	1068	a	0.188	74.100		0.029	9.412		0.014	15.990	99.733
M431	熙寧元寶	1068	a	0.025	71.050		0.028	11.040		0.009	17.560	99.712
M432	元豐通寶	1078	a	0.180	70.840		0.009	11.790	0.021	0.006	16.820	99.665
M435	元祐通寶	1086	a	0.050	77.240		0.013	9.091	0.030	0.008	13.320	99.752
M434	元祐通寶	1086	a	0.095	69.510		0.515	10.310	0.030	0.013	19.640	100.113
M436	淳熙元寶	1174	a	1.708	66.930		0.094	3.724		0.021	27.130	99.607

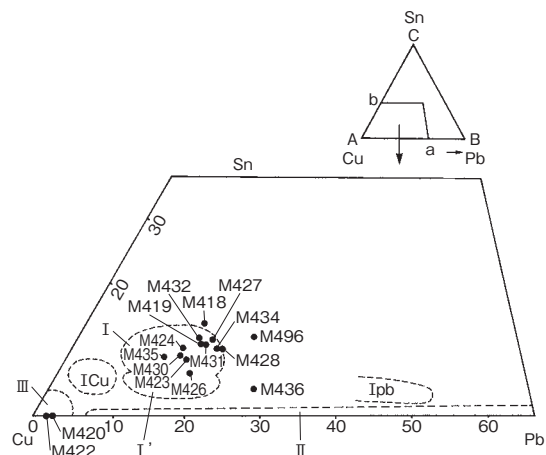
分析a 兵庫県立考古博物館スペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MIDEX-M

分析b 奈良県立橿原考古学研究所スペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MIDEX-M

4. 銅銭（第25表）

試料 地金の良好な個体 16 点を選択した。銭の種類は初鑄年 976 年から 1174 年に及ぶ宋銭 8 種類である。M420以外は裏面縁部の一部を研磨し、各 1 箇所測定を行った。

結果 主要元素は銅・錫・鉛であり、その他、鉄・アンチモン・砒素などが検出された。銅の比率から見てみるとM422の天禧通寶が95.53%、M420の咸平元寶が93.81%と高く、その他は77.24~66.36%の範囲に収まっている。次に多いのは鉛で10%台後半のものが多い。20%を越えるのはM496（皇宋通寶）、M436（淳熙元寶）、M428（皇宋通寶）で、M422の天禧通寶が1.717%、M420の咸平元寶が2.359%と極端に低い。錫は10%前後のものも多くM426皇宋通寶とM436の淳熙元寶が低く、M422の天禧通寶とM420の咸平元寶では錫は検出されなかった。銅・錫・鉛の主要三元素を佐々木稔氏などによって提示された三角ダイアグラム上にプロットすると（第113図）、その多くが中国公鑄銭とされるI領域に含まれ、M496の皇宋通寶とM436の淳熙元寶はやや鉛の比率が高い。M422の天禧通寶とM420の咸平元寶は国内の模鑄銭とされる領域IIIに含まれている（佐々木・西本2008）。M420の咸平元寶はその独特の書体から「島銭」と称される一群のもので、成分が領域IIIに含まれていることは注目される。



第113図 銅銭の銅錫鉛比

5. 羽口・トリベ（第26表）

試料 羽口（165・192・193）は先端の融解部について各 1 箇所、トリベ（227）の口縁部の融解部について 2 箇所の測定を行った。

結果 羽口は鉄、チタンなどが検出され、銅・鉛・錫などはごく微量しか検出されなかった。

第26表 羽口・トリベの成分比率

報告番号	種類	部位	分析	Ti	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Au	Hg	Pb	合計
165	羽口	融解部	b	0.800	90.950	0.139	0.005	0.018	0.035	0.030			0.016	91.993
192	羽口	融解部	b	0.794	1.785									2.579
193	羽口	融解部	b	0.860	5.214									6.074
227	トリベ	融解部	a	6.697	24.360	47.630		0.027					0.409	79.123
				9.740	51.150	13.530		0.046				0.282	74.748	

分析a 兵庫県立考古博物館スペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MIDEX-M

分析b 奈良県立橿原考古学研究所スペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MIDEX-M

トリベについては銅が多く検出された測定値のほうを見ると、銅 47.63%、鉄 24.36%、鉛 0.41%、銀 0.03%が検出されている。銅が多く検出され、鉛は含まれているが微量であることから、純銅質の製品が铸造されたことが推測される。

6. 鉄製品に付着した赤色顔料（第27表）

試料 不明鉄製品（M45）の表面に付着した赤色顔料について1箇所の測定を行った。

結果 水銀 2.38%検出されたことから赤色顔料は水銀朱と考えられる。

第27表 赤色顔料の成分比率

番号	種類	部位	分析	Ti	Fe	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Au	Hg	Pb	合計
M45	不明鉄製品	顔料	a	1.465	3.134		0.005		0.238			2.378	0.006	7.226

分析a 兵庫県立考古博物館スペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MIDEX-M

第12節 吉田住吉山遺跡群出土赤色顔料の蛍光X線分析

1. はじめに

吉田住吉山1号墳、3号墳、4号墳、5号墳、7号墳、9号墳と吉田1号墳の主体部から採取した赤色顔料について顕微鏡観察と蛍光X線分析を行い、顔料の種類を検討した。

2. 試料

試料は68試料あったが、顕微鏡による観察により第25表のとおり32試料に絞込み、分析をおこなった。

3. 試料の観察と分析（第114図～第120図）

実体顕微鏡による観察

最初に試料を実体顕微鏡で観察して、デジタルカメラで記録を取った。使用した装置は（株）ニコン製SMZ-1500である。

蛍光X線分析装置による分析

蛍光X線分析は、奈良県立橿原考古学研究所の協力を得て行った。使用した機器は、スペクトロ社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置MIDEX-Mである。分析の条件は電圧45kV、電流0.25mA、測定時間180秒でコリメータ径は2.0mmで測定した。検出器はペルチェ冷却SDD（液体窒素不要）である。また、3号墳の石材付着の試料（No.7・No.8）のと9号墳出土の須恵器付着の試料（No.22～No.24）については、日本電子（INNVEX）社製の携帯型蛍光X線分析装置 α -2000により分析を行った。分析の条件は合金モードまたは土壌モードで、管電圧は最大40kV、測定時間は各モード共200秒で分析径は14mmで測定した。

4. 結果

分析の結果、顔料が水銀朱である場合は、水銀のスペクトルのピークが検出されるため、明確に判断できるが、ベンガラの場合は顔料の主成分の鉄と土壌に含まれる鉄とが同じであるため、スペクトル図から断定することが難しい。そのため、顕微鏡による観察結果も含めて判断した。

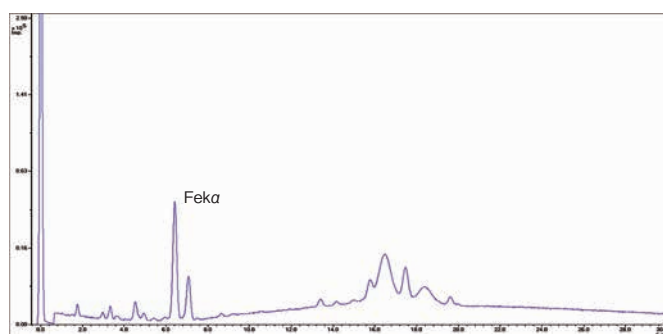
吉田住吉山1号墳から採取した試料（No.1～No.4）はベンガラの可能性が高く、3号墳北棺東側から採取した資料（No.5）はベンガラの可能性が高いが、西側から採取した資料（No.6）からはわずかに水銀朱が検出された。3号墳の石材に付着していた試料（No.7、No.8）はベンガラである可能性が高い。4号墳から採取した試料（No.9～No.10）は水銀朱、5号墳北棺から採取した試料（No.11～No.13）は水銀朱、7号墳北棺から採取した試料（No.14、No.15）はベンガラである可能性が高い。9号墳北棺東側から採取した試料（No.16）は水銀朱、9号墳の北棺西側と棺外、南棺から採取した資料（No.17～No.21）と、埋葬されていた須恵器に付着していた試料（No.22～No.24）はベンガラである可能性が高い。吉田1号墳から採取した試料（No.25～No.29）と吉田1号墳北方埋葬施設の刀周辺から採取した試料（No.31）は水銀朱であることが確認できた。

第28表 赤色顔料分析資料一覧

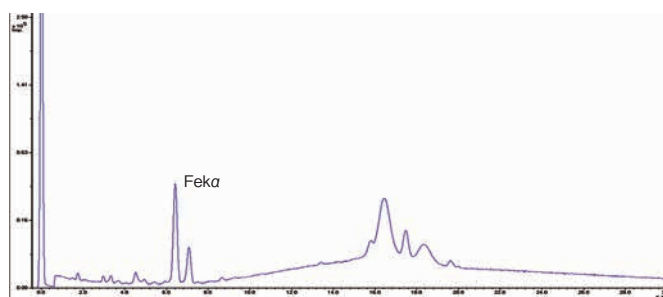
	遺構名	遺構②	位置	位置②	備考	備考②	結果
1	吉田住吉山1号墳		棺内	東	顔料サンプル		Fe
2	吉田住吉山1号墳		棺外	東	土壌サンプル		Fe
3	吉田住吉山1号墳		棺内	中央	顔料サンプル		Fe
4	吉田住吉山1号墳		棺内	西	顔料サンプル		Fe
5	吉田住吉山3号墳	北棺	棺内	東	土壌サンプル		Fe
6	吉田住吉山3号墳	北棺	棺内	西	土壌サンプル		Hg
7	吉田住吉山3号墳	北棺		北-①	横石サンプル		Fe
8	吉田住吉山3号墳	南棺		南-③	横石サンプル		Fe
9	吉田住吉山4号墳		棺内		土壌サンプル		Hg
10	吉田住吉山4号墳		棺内		下層土		Hg
11	吉田住吉山5号墳	北棺			赤色顔料サンプル		Hg
12	吉田住吉山5号墳	北棺			朱サンプル		Hg
13	吉田住吉山5号墳	北棺			土壌サンプル	A	Hg
14	吉田住吉山7号墳				顔料サンプル		Fe
15	吉田住吉山7号墳	北棺	棺内		朱サンプル	頭部	Fe
16	吉田住吉山9号墳	北棺		東側		頭部	Hg
17	吉田住吉山9号墳	北棺	棺底	西側			Fe
18	吉田住吉山9号墳	北棺	棺外	東側			Fe
19	吉田住吉山9号墳	南棺	棺底	東側			Fe
20	吉田住吉山9号墳	南棺	棺底	西側			Fe
21	吉田住吉山9号墳	南棺	棺外	東側			Fe
22	吉田住吉山9号墳	北棺		東小口	土器付着顔料	464	Fe
23	吉田住吉山9号墳	北埋葬		西小口	土器付着顔料	469	Fe
24	吉田住吉山9号墳	北埋葬		西小口	土器付着顔料	468	Fe
25	吉田1号墳	主体部1			土壌サンプル	1	Hg
26	吉田1号墳	主体部1			土壌サンプル	2	Hg
27	吉田1号墳	主体部1			顔料サンプル		Hg
28	吉田1号墳	主体部1	堀り方				Hg
29	吉田1号墳				顔料サンプル		Hg
30	吉田1号墳北方棺	鉄刀2				A	Fe
31	吉田1号墳北方棺	鉄刀2				B	Hg
32	吉田1号墳北方棺	鉄刀2				C	Fe



1



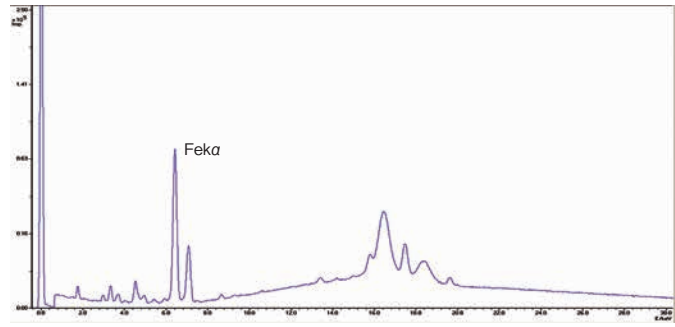
2



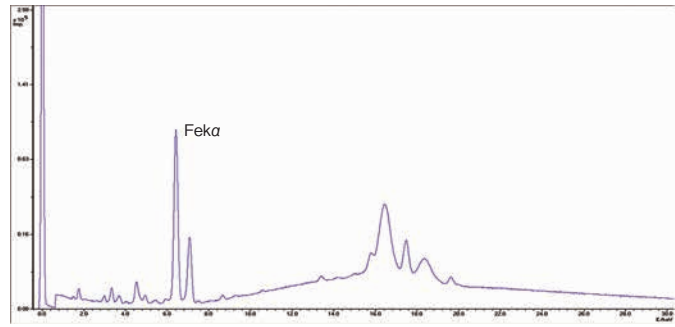
第114図 分析試料と蛍光X線スペクトル図(1)



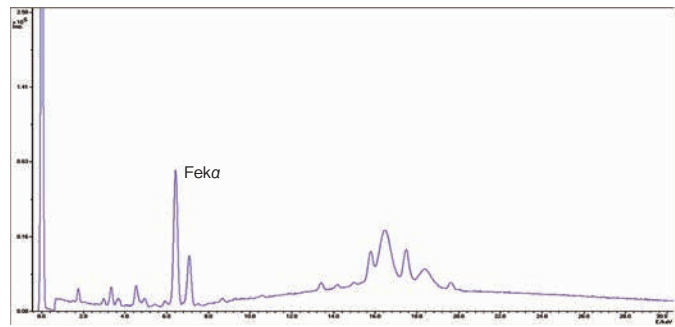
3



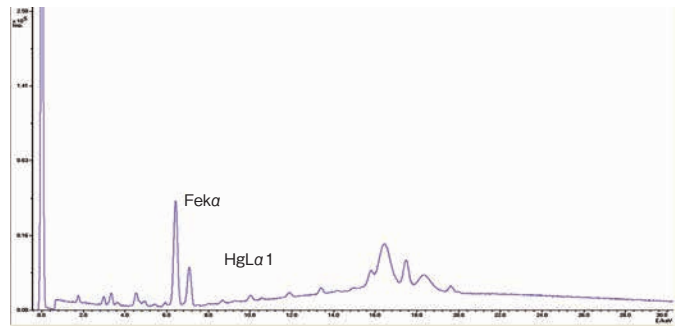
4



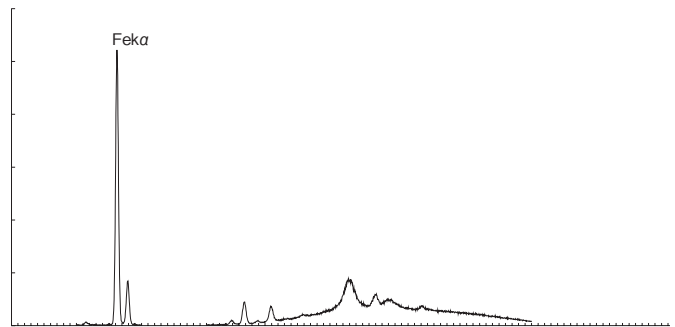
5



6



7

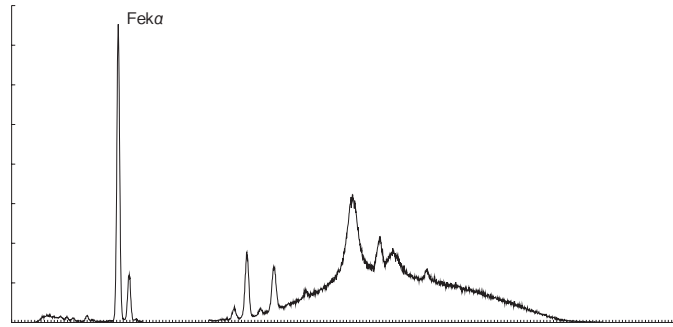


α -2000による測定 (参考)

第115図 分析試料と蛍光X線スペクトル図(2)



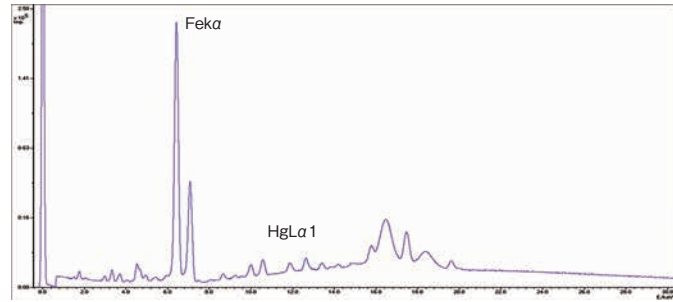
8



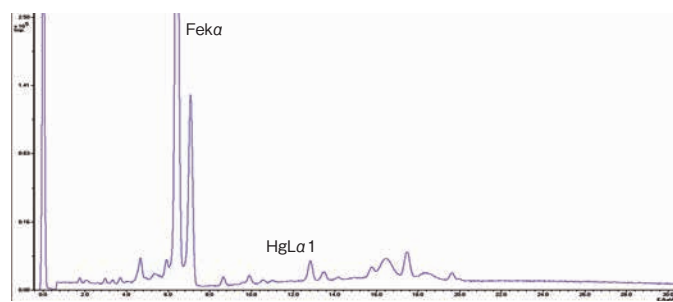
α -2000による測定 (参考)



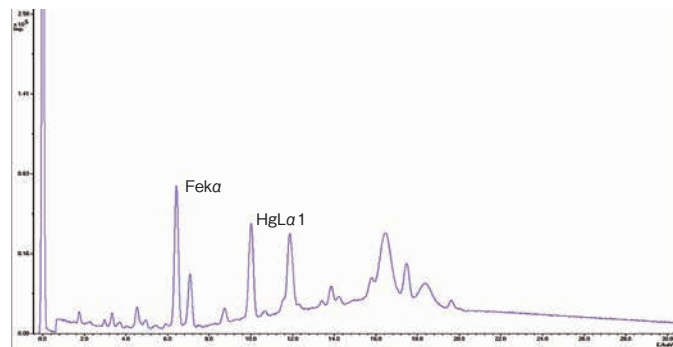
9



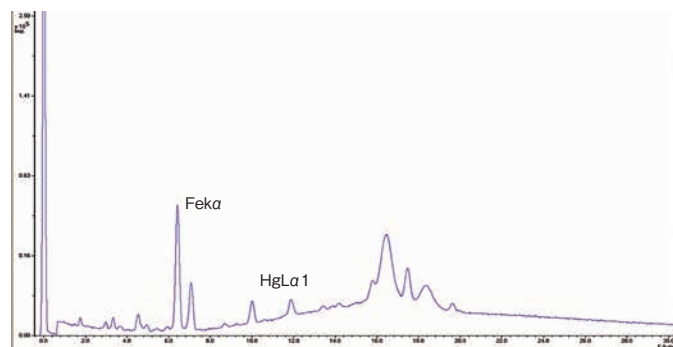
10



11



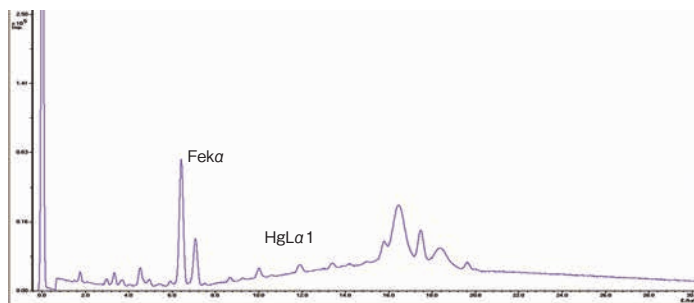
12



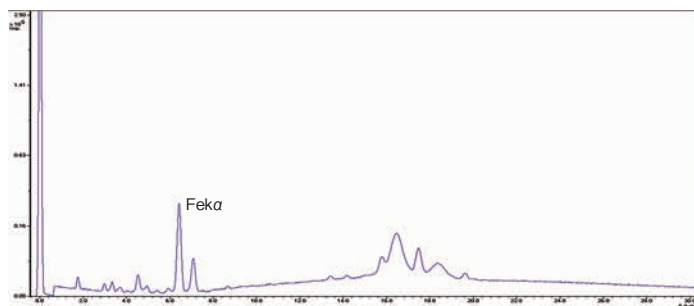
第116図 分析試料と蛍光X線スペクトル図(3)



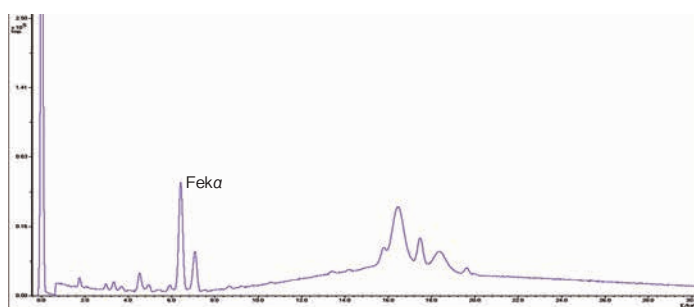
13



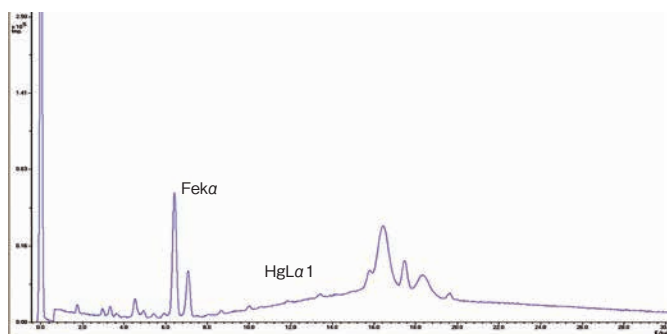
14



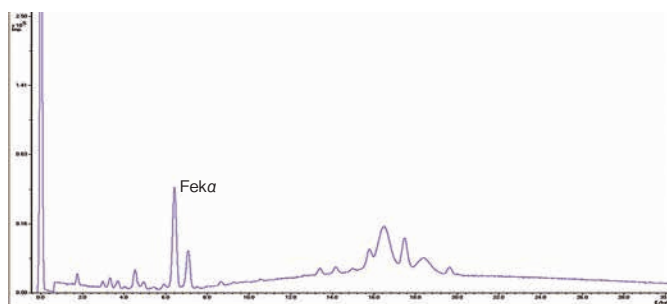
15



16



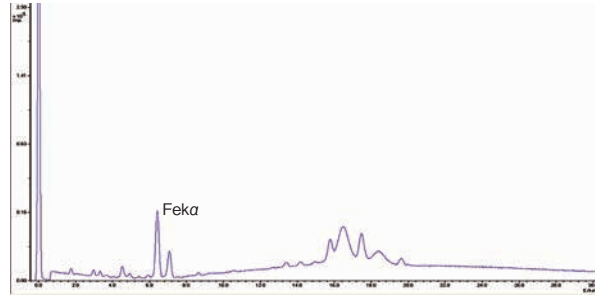
17



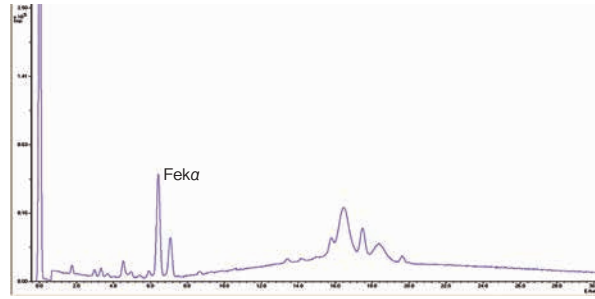
第117図 分析試料と蛍光X線スペクトル図(4)



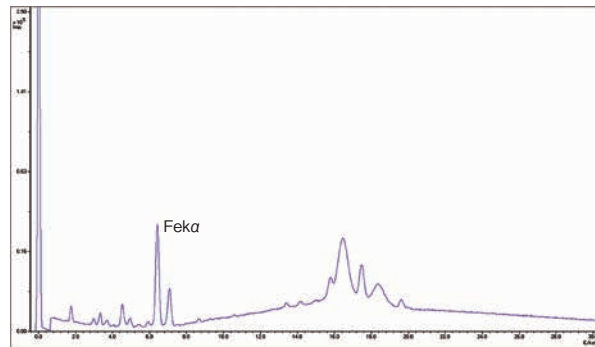
18



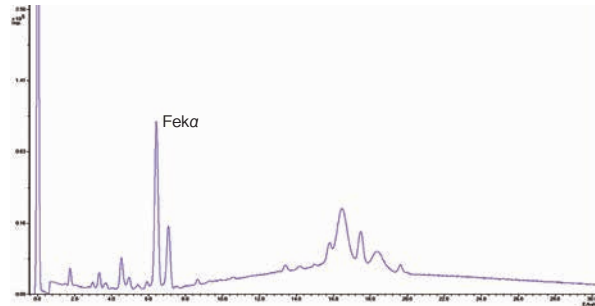
19



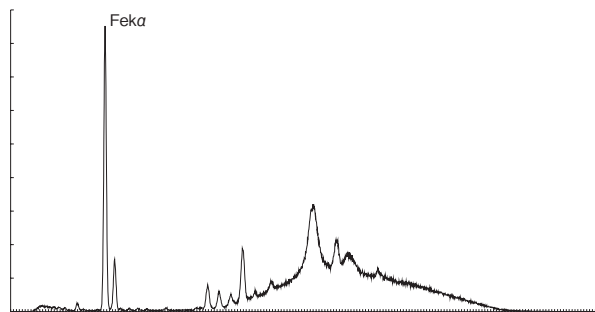
20



21



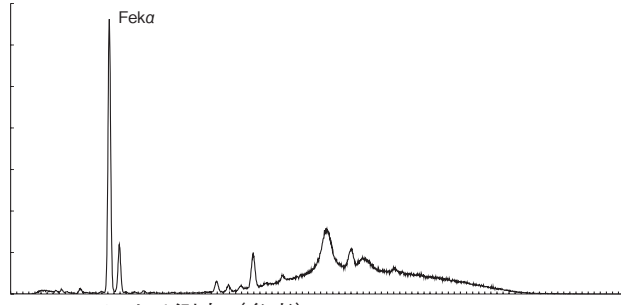
22



第118図 α -2000による測定(参考) 分析試料と蛍光X線スペクトル図(5)



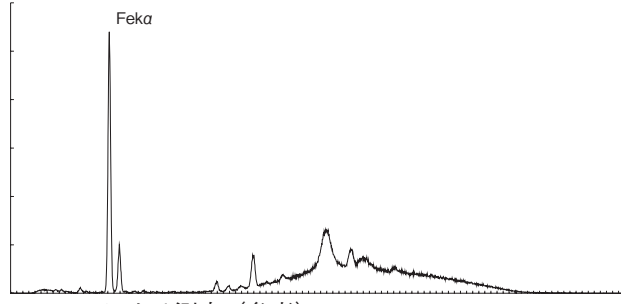
23



α-2000による測定 (参考)



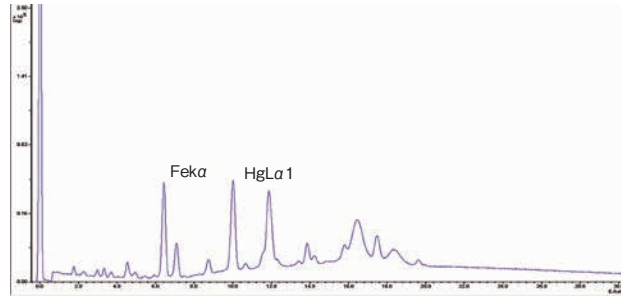
24



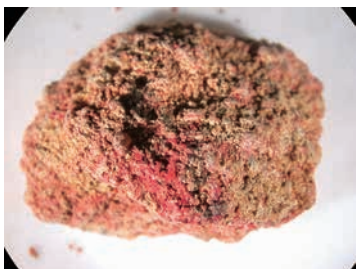
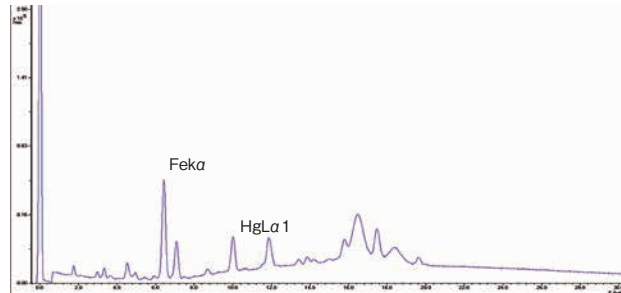
α-2000による測定 (参考)



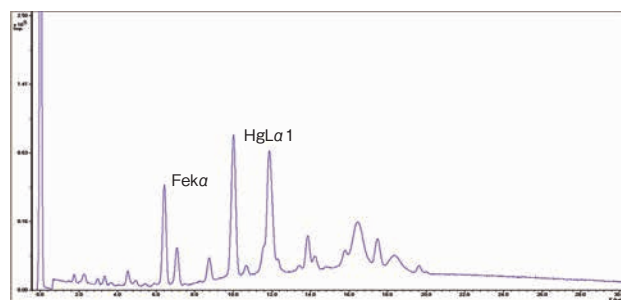
25



26



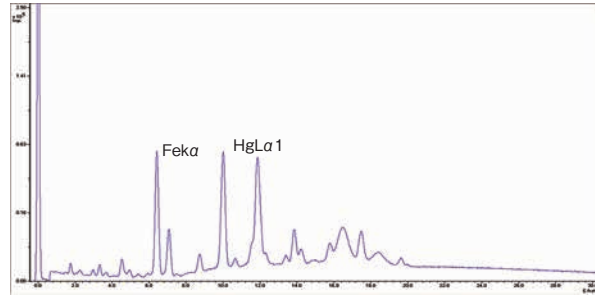
27



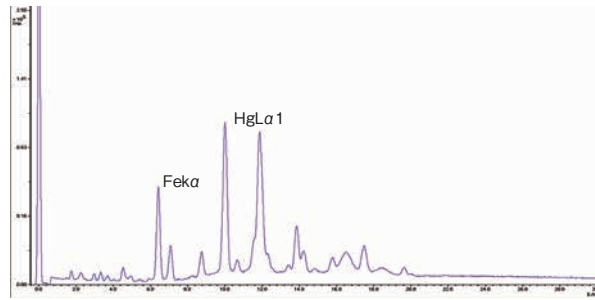
第119図 分析試料と蛍光X線スペクトル図(6)



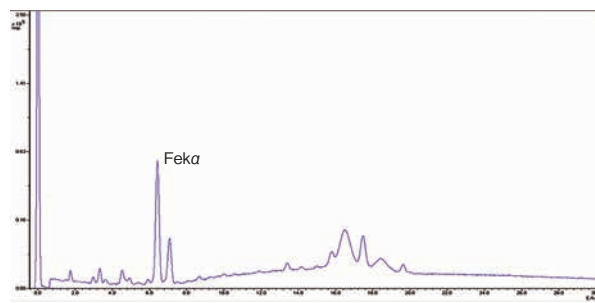
28



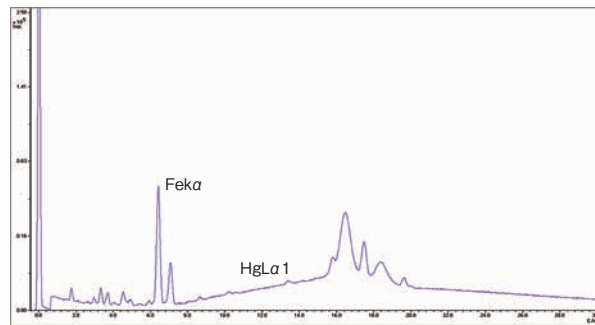
29



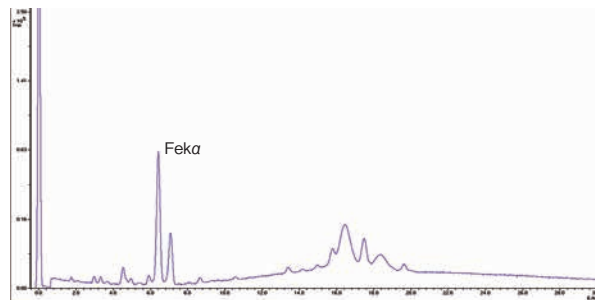
30



31



32



第120図 分析試料と蛍光X線スペクトル図(7)

第6章 まとめ

第1節 弥生時代および弥生時代以前

吉田住吉山遺跡の弥生時代および弥生時代以前の遺物には、弥生土器と石器がある。弥生土器の出土量は比較的少ない。このため遺構出土のものと同遺構から遊離したものとを併せて時期的な検討を行う。

1. 土器について

吉田住吉山遺跡から出土した弥生土器には壺・甕・鉢・高坏・器台がある。全容が把握できるものは壺(701・703)のみであり、広口壺gに分類したものである。V期初頭からの系譜を引くものであるが、体部最大径が体部中央にあり、内面調整が横ハケ調整であることからV-3期もしくはV-4期に位置付けられる。

鉢には外反口縁鉢と直口鉢があり、口縁部が残るもの(722・723)は外反口縁鉢cに分類したのみである。外反口縁鉢cはV-3期に出現する器種で庄内期まで継続するが、口縁端部にはしっかり面を作っており、V-3期もしくはV-4期に位置付けられる。底部(710)はしっかりした平底を作っている。

直口鉢の底部および甕の底部はしっかり平底を作っており、指で中央部を窪ませているものが多い。体部はタタキ調整を行っている。内面は716がケズリを行っている以外はハケ調整を行い、ハケ工具の端部が放射状に残る。

高坏には有稜高坏と椀形高坏がある。椀形高坏(702)は口縁部のみであるが、口縁部外面に二条の沈線を巡らし、V-3期もしくはV-4期の特徴を示す。

器台は口縁部の一部のみであるが口縁端部は擬凹線を巡らせ、しっかりと面を作っている。

以上の検討から弥生土器は後期中葉(V-3期もしくはV-4期)の極めて限られた時期に位置付けられることが判明した。

なお、一部の弥生土器はプレパラートを作製して胎土分析を実施した(第5章第4節)。その結果は「鉱物学的に見て吉田住吉山遺跡周辺で製作された」との結果が得られており、遠方から持ち込まれた土器は分析していないものも含めて存在していない。

2. 石器石材について

石器は第3章で報告しているとおり、縄文時代と弥生時代中期に位置付けられる。石器の石材はサヌカイトと黒曜石を分析した(第5章第6節)。サヌカイトは一部を抽出して分析した結果、二上山エリアと讃岐エリアが存在した。黒曜石は姫島産である事が判明した。

播磨地域では22を超える遺跡(地点)で69点以上の黒曜石が採集されている。時代は不明のものも存在するが、形状などから旧石器時代と縄文時代に位置付けられている。今回報告の黒曜石は、三木市では初めての出土である。発掘調査で出土したのは太子町東南遺跡の加工痕のある剥片に次いで2例目である。今まで播磨地域で出土したものおよび採集された黒曜石は、漆黒である特徴からすべてが隠岐産であるとされていた。

今回、播磨地域で初めて分析を行い、姫島産の黒曜石を確認した意義は大きい。石器素材に姫島産の黒曜石や二上山エリアと讃岐エリアのサヌカイトを使用していることから、縄文時代における広域な交流のひとつの証拠となる。

3. 遺構について

吉田住吉山遺跡の弥生時代の遺構は吉田住吉山遺跡の山城や吉田住吉山古墳群の造成による大きな改変はあるが、遺構の性格などの位置付けを行いたい。

弥生時代の遺構を検出したのは、丘陵南東部のB-14・C-13・C-14ブロックと丘陵西斜面のA-04ブロックのみの2箇所である。検出した遺構は丘陵南東部では土坑（SK90～SK96）のみであり、丘陵西斜面では土器棺墓（SK97）である。丘陵南東部では土坑が密集した状況を呈している。形態や遺物の入り方も多様であるが、SK91は土壙墓としての形態と墓標様の石から墓の要素を持っているものと考えられる。さらに古墳群の中でも初期に位置付けられる吉田住吉山4号墳や1号墳のすぐ近くに位置していることから、時間的間隔は少しあくが吉田住吉山古墳群に継続する弥生時代の墓であると考えられる。

なお、古墳時代や中世に大きく削平を受けてはいるが、傾斜地に堅穴住居を構築する場合、後世の削平を受けた場合でも標高の高い場所は掘り込みが深いため、痕跡が残る可能性が高い。それでも痕跡が存在していないということは、居住域としては利用されていなかったと考えられる。

中世には山城として利用されており、志染川に突出した眺望の良い立地であるため、高地性集落としての要素は十分持っている。しかし、高地性集落として利用されなかった以上、その理由を考えないといけない。この地は志染川沿いの東西のルートや志染から明石川に抜けるルートの要衝に位置することから、周辺のさらに条件の良い地点に高地性集落が形成されている可能性を指摘したい。

第2節 古墳時代

1. 遺物について

吉田住吉山古墳群と吉田古墳群から出土した遺物には土器類・鉄器・玉類がある。

これらの遺物は大きく分けて古墳の埋葬施設から出土したものと墳丘や周溝から出土したもの、遺構に伴わないものなどに分けられる。

(1) 土師器

土師器は吉田住吉山5号墳の埋葬施設と、吉田1号墳の遺構外から出土している。

吉田住吉山5号墳の墓壙からは、埋置された状態で丸底の直口壺402が出土している。直口壺は庄内式並行期から布留式期まで存在しているが、庄内式並行期のものは平底を呈しており、布留式期から丸底になる。本資料は丸底でありながら、タタキ整形した後、細いミガキで仕上げられており、布留式期の古段階の様相を呈している。

吉田1号墳からは小型丸底鉢601が墳丘外から遊離した状況で出土している。古墳には直接伴わないが、古墳の時期を決める上で重要であるため、検討することとする。小型丸底鉢は庄内式並行期から布留式期まで存在しているが、体部にタタキが明瞭に残ることから庄内式並行期新段階の様相を呈している。

(2) 須恵器

吉田住吉山古墳群および吉田古墳群の埋葬施設から出土した須恵器を検討することとする。埋葬施設から須恵器が出土したのは吉田住吉山7号墳と吉田住吉山9号墳と吉田古墳群SX02のみである。吉田住吉山7号墳の2棺では枕として使われており、吉田住吉山9号墳では小口部に副葬されていたものである。吉田古墳群SX02では土器棺として使われており、それぞれ使用状況が異なる。これら二古墳の位置付けと同一古墳のそれぞれの棺の位置付けの検討およびSX02について検討を行う。

吉田住吉山7号墳の須恵器蓋坏は南棺・北棺ともに、口径や立ち上がりなどはほぼ同じである。蓋は口縁部と天井部の境に段をもち、口縁端部の内面に段を作る。これに対して身の口縁端部の形状は、南棺が丸く仕上げるものと段をもつものがあり、北棺は形骸化した段をもつ。ただし底部のケズリの範囲が北棺の坏414が広いと、やや古い様相を示す。したがって、時期差は僅かではあるが北棺が古く、南棺が新しいと判断した。

吉田住吉山9号墳の須恵器蓋坏は南棺・北棺ともに、口径や立ち上がりなどほぼ同じである。蓋は口縁部と天井部の境に段をもち、口縁端部の内面に段を作る。これに対して身の口縁端部の形状は、南棺は丸く仕上げ、北棺は形骸化した段をもつものが多い。したがって、時期差は僅かではあるが北棺が古く、南棺が新しいと判断した。

吉田住吉山9号墳と吉田住吉山7号墳の須恵器の蓋坏の口径や立ち上がりなど類似する点が多いが、口縁部の仕上げ方などから、時期差は僅かではあるが7号墳が古く、9号墳が新しいと判断した。

以上、吉田住吉山9号墳と吉田住吉山7号墳の須恵器は神野大林1号窯に並行しTK10型式やMT85型式に位置付けられる。

吉田古墳群SX02は甕610を棺身とし、鉢608を蓋としている。甕610は口頸部を打ち欠いており、時期決定は難しい。鉢608・609は類例が少ないが、加古川市神野大林1号窯から出土している器台1527

とサイズや形態が同一であり、坏部の一部しか出土していないため、蓋の可能性を指摘していた。神野大林1号窯に並行する時期に位置付けられるが甕であるため詳細な位置付けは難しい。TK10型式からMT85型式まで幅がある。

周溝から須恵器が出土したのは吉田住吉山2号墳と吉田住吉山6号墳と吉田23号墳の3基である。

吉田住吉山2号墳の周溝からは甕が出土したのみである。甕からは時期が決められないが、吉田住吉山古墳群の埋葬施設や周溝などの遺構から遊離して出土した須恵器が吉田住吉山2号墳、吉田住吉山9号墳、吉田住吉山7号墳の周辺から多く出土しており、いずれかの古墳に伴うものと考えられる。提瓶494の把手は鈎状であり、吉田住吉山9号墳南棺東小口から出土している提瓶452や7号墳周溝から出土している提瓶445の把手は環状であるが、体部の扁平率から見ればほぼ同時期である。この提瓶は完全に削平を受けている吉田住吉山2号墳の埋葬施設や吉田住吉山9号墳の上層に存在した棺からの出土が想定できるが、吉田住吉山9号墳の周溝からは多量の須恵器が出土していることから、2号墳に所属する可能性が高い。従って吉田住吉山2号墳も、吉田住吉山7号墳や吉田住吉山9号墳とほぼ同時期に位置付けることができる。

吉田住吉山6号墳からは須恵器坏身・無蓋高坏・壺・甕が出土した。須恵器坏身・壺は6世紀代、無蓋高坏は7世紀初頭に位置付けられるが、甕は球形の体部に格子タタキや頸部の突帯など古相を示し、5世紀まで遡る。これは、甕などの大形土器は古いものが新しい時期まで残ることがあるためと考えられる。

吉田32号墳からは高坏蓋・高坏・甕が出土した。甕の詳細な時期は判明しない。高坏蓋は口径と天井部の作りからTK23型式に並行する。高坏は脚端部しか出土していないが、蓋と同時期の特徴を持っている。

吉田古墳群から採集した須恵器坏612・613は7世紀中葉に位置付けられ、今回調査を実施した古墳時代の須恵器の中で最も新しく位置付けられるものである。

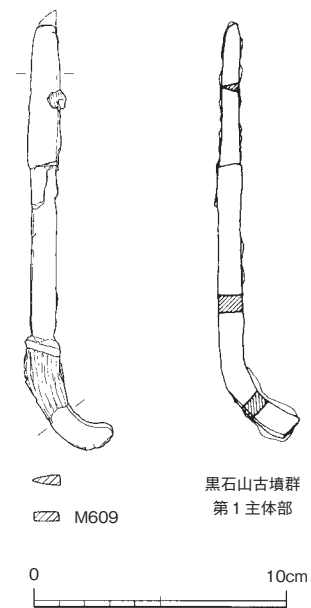
以上、吉田住吉山古墳群及び吉田古墳群から出土した須恵器は5世紀後半から7世紀中葉にかけてのものが存在する。

須恵器の科学的分析を三辻利一先生に依頼し、蛍光X線分析を実施した。分析の結果多くの須恵器は両分布図で神野大林領域とよく対応しており、時期の同時性も含めて加古川市神野大林窯跡の製品と考えられる。他に比較資料と合致しないものが多く、特定できなかった複数の生産地が推定されることから、吉田住吉山古墳群及び吉田古墳群は複数の須恵器生産地から供給されていることが判明した。

(3) 鉄器 (第121図)

鉄器は吉田住吉山7号墳北棺の棺外から鍬6点と吉田住吉山9号墳北棺から刀子3点と鍬1点が出土した。吉田1号墳の棺外からは鉋1点と大刀2点が出土した。

吉田住吉山9号墳北棺から出土した3点の刀子のうちの1点の柄は特異な形態を呈する。通常の刀子の柄は直柄であるが、M609は柄が大きく湾曲している。さらに、全長16.8cm以上、刀身長5.5cm以上、茎長



第121図 吉田住吉山9号墳北棺出土 類似刀子

第6章 まとめ

12.7cmを測り、刀身部に対して柄が非常に長い。類例には、加東市黒石山12号墳第1主体部から出土している刀子がある。全長16.3cm、刀身長5.5cmを測り、サイズも全体の形状も類似している。黒石山12号墳では蕨手刀子としているが、蕨手とは形状が異なるため、曲長柄刀子と呼称したい。なお、黒石山12号墳はTK23型式であり、吉田住吉山9号墳とは年代の開きが大きい、関連性を指摘したい。今後、類例を待って、系譜や意義付けを明らかにしたい。

(4) 玉

玉は吉田住吉山7号墳南棺と吉田住吉山9号墳南棺から出土した。7号墳南棺からは黒水晶の切子玉が、9号墳南棺からは埋木製有稜棗玉とガラス小玉が出土した。9号墳南棺から出土した埋木製の玉は断面形が円形であり、従来、棗玉と呼ばれたり、算盤玉と呼ばれたりとも名称が一定していない。本来、棗玉は棗の名前が付けられているとおり、中央部が膨らんだ縦長の形態をなすものである。また算盤玉は中央部に稜が付くものの、縦横の比率に近いものである。この有稜棗玉に類似したものに切子玉があり、断面形は六角形あるいは八角形のものが多い。埋木製の玉は有機質で軟らかいこともあり、切子玉の稜が取れたものだと説明しているものも見受けられる。しかし残りの良い今回出土の埋木製の玉は断面形が円形で中央部にしっかりとした稜を持つもので、本来の棗玉とも算盤玉とも異なる。したがって有稜棗玉と分類し、呼称したい。

これらの埋木製の玉は継体大王の動向を読み取れる可能性のある考古資料の一つとして注目している。

2. 古墳群について

(1) 遺構・遺物から見た古墳時代の土地利用

今回の発掘調査では、山城の削平を受けながらも吉田住吉山古墳群で10基、吉田古墳群で2基の古墳と2基の区画溝を持たない埋葬施設を検出した。中世や弥生時代の土坑や柱穴などの遺構が重複しており、遺構から遺物が出土していないため、時期の特定ができないものもあるが、埋土から古墳時代に特定できるものは存在しない。仮に、堅穴住居などの掘り込みの深い遺構が存在した場合、削平を受けていても、下部は遺存しているはずであるが、今回の発掘調査ではその痕跡が全く存在しなかった。また、遺構から遊離した遺物も須恵器の蓋坏や壺・提瓶などであり、通常の集落で見つかる土師器の甕は全く出土していない。

以上のことから、古墳時代の遺跡の性格は古墳を中心として、一部区画溝を伴わない墓を含めた墓域としての土地利用に限定される。

(2) 古墳の変遷（第122図）

吉田住吉山古墳群と吉田古墳群の変遷を見る。出土遺物と位置関係から、古墳群の変遷を第I期から第IV期までの4時期に区分した。

古墳第I期

第I期は吉田住吉山古墳群・吉田古墳群の造墓開始時期である。吉田住吉山4号墳の方墳と吉田1号墳が該当し、庄内式期に並行する。立地は丘陵の先端に位置する。

古墳第II期

第Ⅱ期は吉田住吉山5号墳の方墳が該当し、布留期古段階に並行する。吉田住吉山1号墳は吉田4号墳と吉田5号墳の間に位置し、吉田5号墳の周溝に影響を与えているため、この時期に位置付けた。吉田1号墳北方埋葬施設も年代がわかる遺物は出土していないが、棺に水銀朱を使用していることからこの時期に位置付けた。

古墳第Ⅲ期

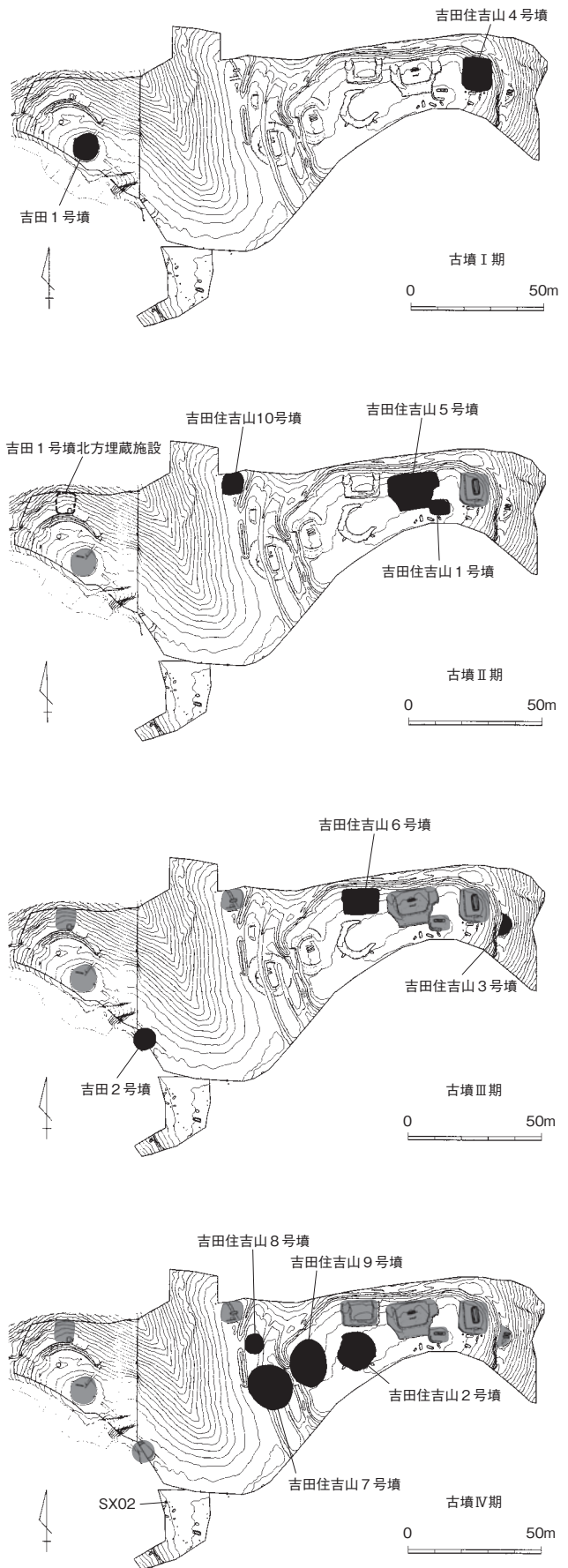
第Ⅲ期は吉田住吉山6号墳の方墳と吉田23号墳の円墳が該当し、陶邑編年のTK23型式前後に並行する。吉田住吉山3号墳も遺物は出土していないが、この時期に前後する可能性が高い。

古墳第Ⅳ期

第Ⅳ期は吉田住吉山9号墳・7号墳・2号墳が該当し、神野大林窯跡1号窯や陶邑編年のTK10・MT85形式前後に並行する。吉田住吉山8号墳からも遺物は出土していないが、立地や墳形などから、この時期に位置付けられる。

以上のように古墳を4時期に区分し、変遷をまとめた。古墳の立地は第Ⅰ期から第Ⅲ期までは丘陵の先端にあり、第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけてはやや奥まった場所に変化している。また古墳の形状は、古墳第Ⅰ期から古墳第Ⅱ期の古墳は墳形が不明な吉田1号墳を除いて、方墳のみである。古墳第Ⅳ期の古墳は円墳のみである。これらに間に位置する古墳第Ⅲ期の古墳は方墳と円墳の両方が存在する。古墳第Ⅲ期の中の詳細な時間差の中で方墳が古く、円墳が新しいかどうかは限られた資料の中では決められない。吉田住吉山古墳群および吉田古墳群の墳形は方墳から円墳への時間的変化が読み取れ、古墳第Ⅲ期に変化の画期が存在する。

このように吉田住吉山古墳群および吉田古墳群では、立地と墳丘形態など第Ⅲ期に大きな画期が認められる。



第122図 吉田住吉山古墳・吉田古墳の変遷

(3) 吉田住吉山古墳群の箱式石棺

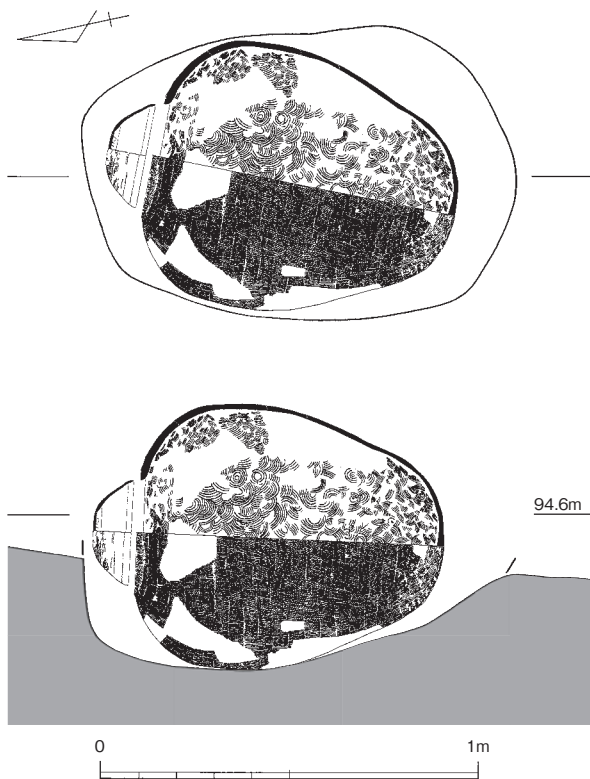
吉田住吉山古墳群からは3号墳と5号墳の2基の古墳で4基の箱式石棺を検出した。吉田住吉山5号墳は墓壇に布留式期の壺を埋納しているため、古墳の時期が古墳時代前期と特定できたが、吉田住吉山3号墳は遺物の出土がないため特定できなかった。赤色顔料の分析から棺内に使用された赤色顔料はベンガラであり、吉田住吉山1号墳や4号墳、吉田1号墳の水銀朱とは異なっている。したがって吉田住吉山3号墳は古墳時代中期以降に造墓したと推測できる。

吉田住吉山5号墳北棺の箱式石棺は天井石が削平を受けていたため不明であるが、棺底に板石を敷いており特異である。棺底に小石を敷詰めるものは兵庫県内では但馬地域に多くみられ、須恵器の甕を割って敷き詰めるものに西脇75号墳がある。

これらの箱式石棺は三木市の古墳を見る限り特異である。つまり、三木市の小規模な古墳では、横穴式石室を採用する古墳以前の埋葬施設としては木棺直葬墳がほとんどであり、箱式石棺を埋葬施設としているものは他に北山1号墳の前方部墳裾の1例だけである。この他に、発掘調査を実施していないが露呈しているものに新田山古墳群の2基と花尻5号墳の1基があるというが、現在は確認できない。

三木市内で発掘調査が行われた横穴式石室を採用する以前の古墳70基程度の中で、箱式石棺を埋葬施設とするものは、今回の吉田住吉山古墳群の4基を含めて5基のみであり、7%程度である。

このように箱式石棺を埋葬施設としない状況は隣接する明石川流域や三田市域でも同様であり、この周辺地域の特性と考えられる。この特性の中にあつて、箱式石棺を埋葬施設とした吉田住吉山古墳群3号墳と5号墳の2基の古墳は特異であり、その系譜や意義付けは今後の課題としたい。



第123図 SX02 土器棺復元

(4) 吉田古墳群土器棺SX02の復原(第123図)

土器棺SX02は平面形が楕円形の掘形で、断面形態は北側に偏って深く、南側が浅くなっている。ここから頸部を打ち欠いた大形の須恵器の甕を棺とし、須恵器の鉢を蓋とした土器棺が出土した。出土状況は先に詳述したとおり、須恵器の甕は砕けた状態で出土しているが、掘形底面に貼り付いた破片があり、復原が可能である。この状況を元に遺構と棺である土器を組み合わせて復原すると、第123図のように復原できる。これは地表面が削平されている可能性があるものの、検出面で長さ115cm×幅75cm、深さ30cmを測る墓壇に、高さ82cm、最大径70cmを測る頸部を打ち欠いた甕を身とし、高さ10cmの鉢を蓋とした棺がちょうど納まる。掘形の形状は甕上部の径が大きい形状や甕の体部の形状に合致している。蓋は、掘形底部に貼り付いた状態で出土しているが、この蓋の位置を元に甕

の状態を復原すると、約 40° の角度で底部が浮き上がった状態になり、掘形底面に貼り付いた甕と整合が取れなくなる。したがって、蓋は埋葬時点でずれ落ちた可能性が考慮できる。

この埋葬状態では甕の半分以上が検出面上部に突出することになり、復原自体の整合性が取れないように思えるが、蓋が完形で出土していることから、甕は頸部を打ち欠いて体部を球形のまま棺とした証であると考えられる。打ち欠いた甕の頸部の直径は 28cm、高さは 82cm であり、大人を埋葬するには口径が小さいことから小人を埋葬した可能性が高い。あるいは成人の改葬骨を埋葬した可能性もある。

吉田古墳群 S X 02 のような古墳時代後期の甕を転用した区画溝を伴わない土器棺は兵庫県内では類例がない。関連するものとして、古墳時代前期の大形の壺を墳丘内の土器棺としているものや、沢の浦 2 号墳の横穴石室から出土した須恵器の専用棺が存在する。しかし、いずれも墳丘内から出土しており今回の出土例とは時期も出土状況も異なる。奈良県石光山 17 号墳で小形の甕を利用した土器棺が周溝から出土している。系譜や意義付けなど今後の研究課題としたい。

(5) 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群の赤色顔料

今回発掘調査を実施した埋葬施設のうち、肉眼で赤色顔料の存在が認識できたものには、吉田住吉山 1 号墳の粘土床、吉田住吉山 3 号墳北石棺と 3 号墳南石棺の石棺内面および底面、吉田住吉山 4 号墳の粘土床、吉田住吉山 5 号墳北石棺推定頭部、吉田住吉山 7 号墳北棺の推定頭部、吉田住吉山 9 号墳北棺推定頭部、9 号墳北棺東小口須恵器、9 号墳北棺西小口須恵器、吉田 1 号墳粘土床、吉田 1 号墳北方埋葬施設の鉄刀 2 周辺の 11 箇所である。これらを、分析を目的とした比較資料とともにサンプリングを行い、主要なものについては蛍光 X 線分析を実施した。

結果は第 5 章第 12 節のとおりである。これによると、水銀朱を検出したものは、吉田住吉山 4 号墳粘土床、吉田住吉山 5 号墳北石棺頭部、吉田住吉山 9 号墳北棺頭部、吉田 1 号墳粘土床、吉田 1 号墳北 23m 地点鉄刀 2 周辺の 5 箇所である。他の 6 箇所の赤色顔料は顕微鏡観察を行った上、水銀イオンを検出していないため、ベンガラ (Fe_2O_3) であると考えられる。

この分析から、吉田住吉山 4 号墳と吉田 1 号墳の割竹形木棺の粘土床の表面は全面水銀朱であることが判明した。吉田住吉山 1 号墳の棺床はこれとは異なり、ベンガラであった。

吉田住吉山 5 号墳北石棺と吉田住吉山 9 号墳北棺からは推定頭部のみから水銀朱を検出したことから額に水銀朱を塗布していたことが推測できる。吉田住吉山 9 号墳北棺からは東西の小口に副葬された須恵器も含めて全体から赤色顔料を検出しているが水銀朱は検出できなかった。したがって、吉田住吉山 9 号墳北棺の木棺内面はベンガラによって赤色を塗布しており、遺骸の額にのみ水銀朱を塗布していたことが判明した。吉田 1 号墳北 23m 地点鉄刀 2 周辺から水銀朱を検出し、また大刀と鉈の位置関係から埋葬施設（吉田 1 号墳北方埋葬施設）が存在していたことが裏付けられた。

吉田住吉山 3 号墳の南北 2 基の石棺の内面にはベンガラを塗布していた。吉田住吉山 3 号墳の北棺内の西側からは水銀朱が微量検出されたことから、額に水銀朱を塗布していた可能性がある。吉田住吉山 7 号墳北棺の推定頭部はベンガラであり、吉田住吉山 9 号墳北棺との大きな違いが判明した。

以上、棺内の赤色顔料の使用状況を見ると、4 種類に分類可能である。

第 I 類は棺全体から水銀朱を検出したものである。吉田住吉山 4 号墳と吉田 1 号墳の割竹形木棺が該当する。粘土床全面から水銀朱を検出していることから、木棺の内面全体に水銀朱を塗布していたと考えられる。

第6章 まとめ

第Ⅱ類は棺内に赤色顔料の痕跡があり、推定頭部から水銀朱を検出したものである。吉田住吉山5号墳北石棺が該当する。石棺の内面には赤色顔料は塗布せず、額に水銀朱を塗布したと考えられる。

第Ⅲ類は棺内に赤色顔料の痕跡はあるが、ベンガラのみで、推定頭部から水銀朱を検出したものである。吉田住吉山9号墳北棺と吉田住吉山3号墳の北石棺が該当する。おそらく、木棺の内面全体にベンガラを塗布していたと考えられ、額には水銀朱を塗布していたと考えられる。

第Ⅳ類は、棺内に赤色顔料の痕跡はあるが、ベンガラのみで、推定頭部からも水銀朱を検出しないものである。吉田住吉山1号墳と吉田住吉山3号墳の南石棺と吉田住吉山9号墳北棺がある。おそらく、木棺あるいは石棺の内面全体にベンガラを塗布していたと考えられる。額にもベンガラを塗布していた可能性も考えられる。

第Ⅴ類は、棺に赤色顔料の痕跡は無く、推定頭部に赤色顔料の痕跡が存在するが、赤色顔料はベンガラである。吉田住吉山7号墳北棺が該当する。木棺には赤色顔料は塗布せず、額にベンガラを塗布したと考えられる。

以上、第Ⅰ類から第Ⅴ類の5類に分類したが、この分類は重複するものの、大きくは時間的な流れを表しているものと考えられる。

なお、吉田住吉山古墳群と吉田古墳群の棺における赤色顔料のあり方を検討してきたが、肉眼で赤色顔料を確認できなかった埋葬施設についても科学的分析を行い比較検討することが大事である。

(6) 埋葬頭位の復原と埋葬原理

今回、発掘調査を実施した吉田住吉山古墳群と吉田古墳群の埋葬施設の主軸を検討すると共に、埋葬頭位の復原を行った。発掘調査を行った埋葬施設の内、遺骸が遺存しているものはない。そこで、棺の形状や遺物の出土状況から埋葬頭位を推定し、検討を行うこととした。

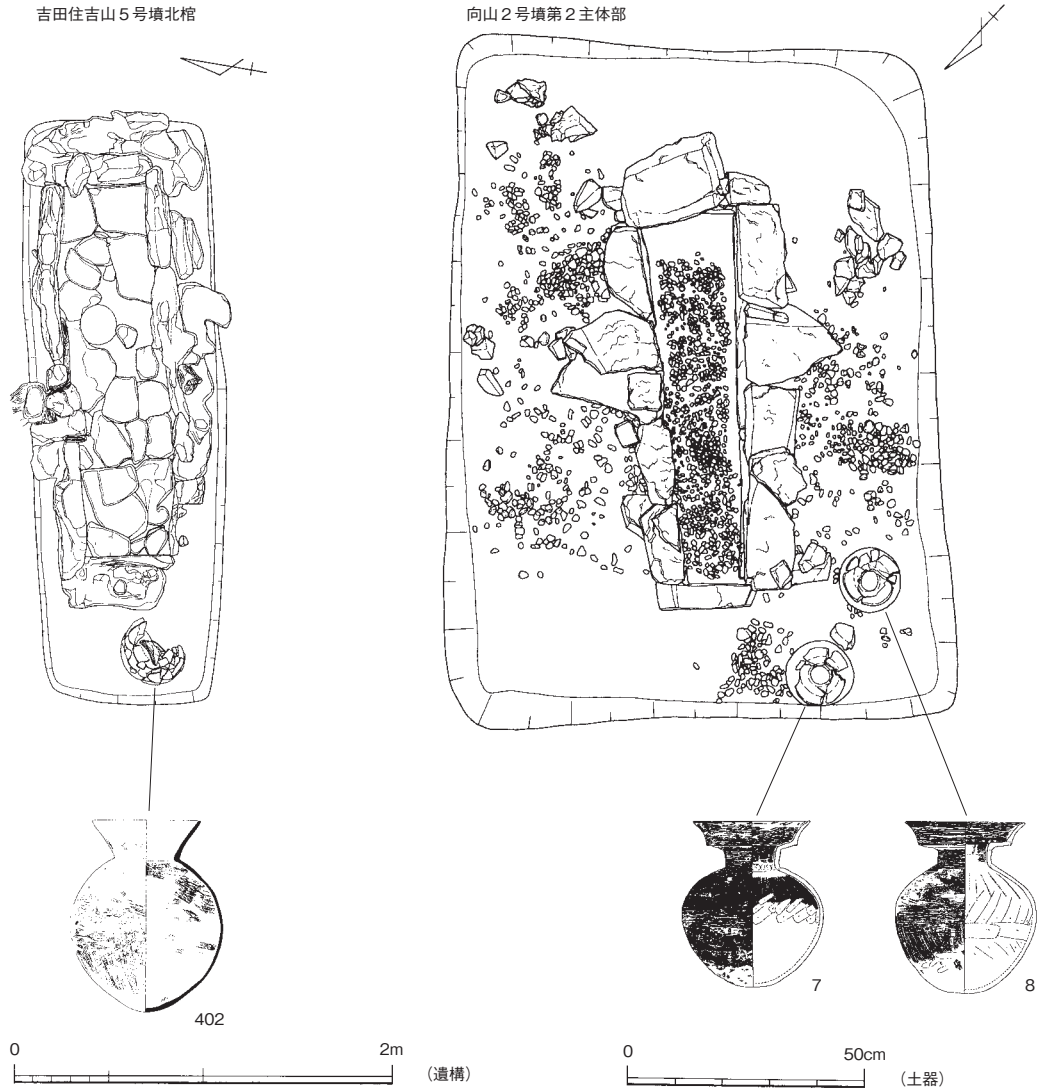
吉田住吉山3号墳の北石棺は東西主軸である。棺内の西側から水銀朱を検出したため西頭位に推定できる。

吉田住吉山4号墳の割竹形木棺は南北主軸である。割竹形木棺の内面には赤色顔料が塗布されていたが、中央やや北寄りの部分に、特に赤色の濃い部分があることから北頭位に推定できる。

吉田住吉山5号墳北石棺は東西主軸である。墓壇の西小口側には土師器の壺を埋置している。このように前期古墳で墓壇内に土器を埋置する例は多くはない。墓壇内に土器を埋置している例は、朝来市向山2号墳第2主体部にあり、人骨が残っていることから、土師器の壺は脚部側に埋置していることがわかる。また、赤色顔料の分析を行ったところ、推定頭部である東側から水銀朱を検出した。このため、吉田住吉山5号墳北棺は土師器の壺を埋置している西側が脚部であり、東側が頭部であると推定できる(第124図)。

吉田住吉山7号墳の南北2基の木棺はいずれも東西主軸である。いずれの棺も東端から須恵器の枕が出土している。北棺の東端の推定頭部からはベンガラを検出している。さらに、南棺からは玉類が須恵器坏を枕と仮定した場合の頸部付近から出土しており、南北2基の木棺は共に埋葬頭位が東であると考えられる。

吉田住吉山9号墳の南北2基の木棺はいずれも東西主軸である。東側小口部分を中心に須恵器を副葬しており、北棺の東端の推定頭部からは水銀朱を検出していることから、埋葬頭位は南北棺共に東と考えられる。



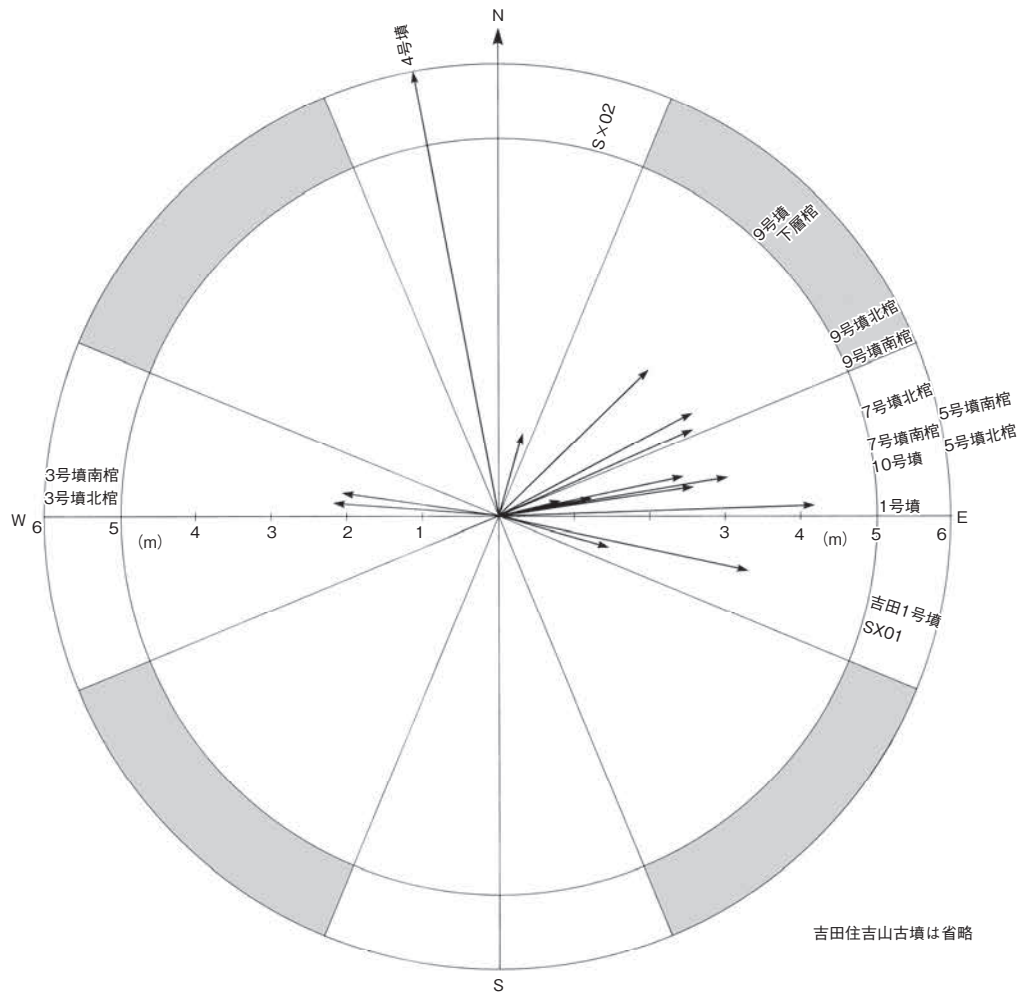
第124図 墓壇に土器を埋置する埋葬施設

吉田古墳群S X 02の土器棺は南北主軸である。土器棺の蓋部分が北であることから、埋葬頭位は北であると考えられる。

以上、埋葬頭位が復原できるものには、吉田住吉山3号墳北石棺、吉田住吉山5号墳北石棺、吉田住吉山7号墳の木棺2基、吉田住吉山9号墳の木棺2基、吉田古墳群S X 02がある。前述の検討により、埋葬頭位は南北主軸の吉田住吉山4号墳と吉田古墳群S X 02は北であり、東西主軸の棺は吉田住吉山3号墳北石棺の西を除き、すべて東であることが判明した。これを元に他の棺の埋葬頭位を東西主軸であれば東頭位、南北主軸であれば北頭位として第125図にまとめた。

埋葬頭位は吉田住吉山4号墳の木棺と吉田古墳群S X 02の土器棺とが北頭位であり、他のすべては、東を中心に北に28°から南に15°の範囲に頭位が収まる。北頭位の2棺は吉田古墳群S X 02の区画溝を持たない土器棺であるという特殊な埋葬施設であり、吉田住吉山4号墳の木棺は今回調査を行った古墳群の中で最も古く位置付けされるものであり、棺の規模も際立って大きい。

以上の検討によって、古墳群を形成し始めた当初、埋葬頭位は北であったが、次世代の吉田1号墳や吉田住吉山1号墳では東頭位に変わり、以後、長期にわたって東頭位を志向した様子が伺える。これら



第125 吉田住吉山群の棺長と埋葬頭位

の頭位の規則性は、吉田住吉山3号墳が丘陵の高位に頭部を向けて埋葬した他は、丘陵の先端や丘陵縁辺など、さまざまな地形に立地しているにもかかわらず、長期間にわたって規則性を保っていることから、何らかの埋葬原理が存在した可能性が高い。

吉田住吉山1号墳の北頭位から以後の東頭位に変化した要因は初期古墳の埋葬頭位が大和地域は北頭位優位であり、瀬戸内地域は東西主軸であるという論考によれば、大和地域的な埋葬形態から瀬戸内地域的な埋葬形態に変化した可能性がある。

このような、吉田住吉山古墳群および吉田古墳群の東頭位を志向した埋葬原理が、実際にあったのかどうかを、三木市内で調査が実施された古墳で検証してみたい。対象とする古墳は高木古墳群、大池7号墳、野々池沢9号墳、三木山1号墳、北山古墳群である。

高木古墳群は昭和38年・39年と平成7年・8年と平成9年の3回の発掘調査が行われている。高木古墳群は5世紀から6世紀にかけての4支群63基以上の古墳群であるとされている。

昭和38年・39年の発掘調査では27基の古墳の発掘調査が行われた。埋葬施設を検出した21古墳の21埋葬施設の主軸は南北方向が4基、東西方向が17基である。このうち報告書を見る限り4号墳と23号墳は棺構造や遺物の出土状況から東方位であることがわかる。平成7年・8年の発掘調査では、13基の古墳の発掘調査が行われた。埋葬施設を検出した3古墳の4基の木棺の主軸は南北方向が1基、東西

方向が3基であり、東西主軸の3基は遺骸が残っていなかったが玉の出土状況や大刀の配置からすべて東頭位である。平成9年の発掘調査では、12基の古墳の発掘調査が行われた。埋葬施設を検出した3古墳の6基の木棺の主軸はすべて東西方向であり、遺骸は残っていなかったが玉の出土状況や大刀の配置から頭位を確定できたものはすべて東頭位である。

以上のように、高木古墳群は52基の古墳の発掘調査が行われ、27基の古墳で31基の埋葬施設を検出している。南北方向の主軸が5基、東西方向の主軸が26基である。東西主軸のうち遺物などの出土状況から頭位を確定できる11基は、すべてが東頭位である。

大池7号墳は6世紀の木棺直葬墳であり、6基の木棺を検出している。いずれの木棺も東西方向を主軸としており、玉や赤色顔料の位置や大刀の配置から頭位を確定できた6基すべてが東頭位である。

野々池沢9号墳は6世紀の木棺直葬墳であり、3基の木棺を確認した。明確な2基の木棺はいずれも東西方向を主軸としており、遺骸は残っていなかったが須恵器の出土状況から見て、いずれも東頭位に推定できる。

三木山1号墳は6世紀の方墳で5基の埋葬施設を検出している。東西方向の主軸4基と南北方向の主軸1基であり、南北方向の主軸のものは最新段階に位置付けられている。東西方向の主軸を持つ4基の木棺は遺骸が残っていなかったが、遺物の出土状況からいずれも東頭位に推定できる。南北方向の主軸の1基は遺骸が残っていなかったが、遺物の出土状況から北頭位に推定できる。

北山古墳群の1号墳の箱式石棺は南北方向を主軸としているが、2号墳の埋葬施設は東西方向を主軸としており、遺骸は残っていなかったが大刀の配置から東頭位である。

以上、検討した47基の埋葬施設のうち、7基を除く40基が東西主軸である。このうち、遺物の出土状況などにより頭位が確定できるもの24基すべてが東頭位である。

以上のように吉田住吉山古墳群および吉田古墳群に限らず、志染川流域の高木古墳群、大池7号墳、野々池沢9号墳や三木山1号墳などでも同様の傾向が見受けられることが検証できた。三木市域の横穴石室導入以前においては、埋葬頭位は時代や立地にかかわらず東頭位に規制されていた可能性が高く、大きな領域で規制が行われていたことが考えられる。

(7) 吉田古墳群・吉田住吉山古墳群について

今回、吉田古墳群32基のうち吉田1号墳と吉田32号墳の2基と吉田住吉山古墳群10基の発掘調査を行った。これらは吉田1号墳を除いて新規に発見された古墳である。いずれも吉田住吉山遺跡の山城造成時に大きく改変を受けている。発掘調査以前は吉田1号墳も直径16mの円墳という『遺跡地図』の記載であったが、発掘調査を実施すると山城の西曲輪として改変が行われていたことが判明した。現地での発掘調査時点では、旧来の登録名称を尊重し、新規に発見した吉田32号墳の東側の谷を挟んで東側を新たに吉田住吉山古墳群として呼称した。しかし報告書作成に当たって検討した結果、大きく見れば、吉田古墳群と吉田住吉山古墳群は一連の古墳群であり、これらの古墳を再分類し直すと2つの支群に分類できる。一つは岡本道夫が吉田群集墳（吉田古墳群）の第1群と呼んだ古墳のうち、道路を挟んだ東側に位置する吉田1号墳を除いた2号墳から15号墳の14基の古墳と岡本道夫が第2群と呼んだ古墳16号墳から31号の15基の古墳をあわせた30基の古墳である。二つ目は今回発掘調査を行った吉田1号墳と吉田32号墳と吉田住吉山1号墳から10号墳の12基である。それぞれ仮に第1支群、第2支群と呼ぶことにする。第1支群と第2支群の間は吉田住吉山遺跡の山城西側を画する範囲と一致し、道

第29表 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群一覧

名称	墳丘規模	墳形	埋葬施設	長さ	方位	頭位	遺物
吉田住吉山1号墳	7m×8m	方墳	木棺	4.2m	N88° E	東	
吉田住吉山2号墳	直径10.8m	円墳	—				
吉田住吉山3号墳	9.0m	半円形墳	南石棺	2.1m	N82° W	(西)	
			北石棺	2.2m	N86° W	西	
吉田住吉山4号墳	9m×11m	方墳	割竹形木棺	6.0m	N11° W	北	
吉田住吉山5号墳	13.9m×9.5m	方墳	南石棺	2.5m+	N78° E	東	
			北石棺	3.1m	N80° E	東	土師器
吉田住吉山6号墳	9.5m×8m	方墳	—				
吉田住吉山7号墳	直径11.3m	円墳	南棺	1.23m+	N79° E	東	須恵器・玉
			北棺	0.85m+	N77° E	東	須恵器・鏃
吉田住吉山8号墳	直径7.5m	円墳	—				
吉田住吉山9号墳	直径12.6m	円墳	南棺	2.78m	N66° E	東	須恵器・玉
			北棺	2.9m	N62° E	東	須恵器・刀子・鏃
			下層棺	2.75m	N46° E		
吉田住吉山10号墳	7m×5m	方墳	木棺	2.65m	N81° E	東	
吉田1号墳		円墳?	割竹形木棺	3.4m	N78° W	東	
吉田1号墳北方埋葬施設	直径6.4m	?	?			東	大刀・鉞
吉田32号墳		円墳	—				
SX01	—		木棺	1.6m	N75° W	東	
SX02	—		土器棺	1.15m	N16° E	北	

路によって大きく隔てられている。立地は第1支群が高位段丘の北向き傾斜地、第2支群が高位段丘の独立丘陵であり、違いがある。

古墳の内容は、第1支群では10基の発掘調査が行われており、一部は発掘調査報告書が刊行されていないため詳細は不明な点が多い。吉田16号墳は直径14mの円墳、17号墳は16mの円墳である。未調査の古墳も直径22mから4.5mの円墳で埋葬施設は木棺直葬と推定されている。古墳の形態や埋葬施設から後期前半を中心とした古墳で構成されている支群であるといえよう。さらに古墳のまとまりがいくつか認められることから細分が可能である。

これに対して第2支群はほぼ全域の発掘調査が行われており、山城による改変があるものの、古墳時代前期から後期にかけての古墳群である。また墳形には、方墳と円墳があり、埋葬施設も割竹形木棺、箱形木棺、箱式石棺、土器棺があり、墳形・埋葬施設ともに多様な様相をもつ古墳群である。

以上のように、今回の発掘調査によって吉田古墳群・吉田住吉山古墳群は立地、墳形、埋葬施設などから2群に整理すべきであることが検証できた。

(8) 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群の母集落

吉田古墳群と吉田住吉山古墳群は古墳時代前期から古墳時代後期にかけての古墳群である。この古墳群の母体となった集落はどこに存在するのであろうか。これらの古墳群付近の古墳時代の集落には東吉田遺跡と吉田南遺跡と吉田中ノ坪遺跡と志染中梨木遺跡の四遺跡がある。東吉田遺跡は北北西方向300mの志染川左岸に立地する。古墳時代の竪穴住居が調査されている。吉田南遺跡は古墳群の西北西方向500mにある。古墳時代の竪穴住居が調査されている。吉田中ノ坪遺跡は古墳群の北西方向800mの志染川左岸に立地する。弥生時代から古墳時代の遺物が散布しているが、遺構は確認されていない。志染中梨木遺跡は志染川を挟んで北西方向に約600m離れている。古墳時代後期の竪穴住居6棟と掘立柱建物1棟が調査されている。

以上のように、古墳群の北側の眼下に広がる集落が候補となるが、これらの集落の調査は、主として圃場整備事業に伴って調査された遺跡であり、内容が断片的である。古墳の調査に比べて、集落の実態は明らかでない。今後の調査の進展に伴って、吉田古墳群と吉田住吉山古墳群と集落の関係が明らかになるであろう。

参考文献

- 篠宮 正「東播磨地域における弥生土器編年」『弥生土器集成と編年―播磨編一』大手前大学史学研究所 2007年
- 兵庫県教育委員会『神野大林窯跡群』兵庫県文化財調査報告第379冊 2010年
- 加東郡教育委員会『黒石山古墳群』加東郡埋蔵文化財報告7 1986年
- 高松雅文「継体大王の時代を読み解く」『継体大王の時代』大阪府立近つ飛鳥博物館 2010年
- 兵庫県教育委員会『向山古墳群 一乗寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡』兵庫県文化財調査報告第191冊 1999年
- 兵庫県教育委員会『沢の浦古墳群』兵庫県文化財調査報告第48冊 1987年
- 兵庫県教育委員会『大池7号墳』兵庫県文化財調査報告第137冊 1995年
- 三木市教育委員会『高木古墳群・高木多重土塁1』三木市文化研究資料第15集 2000年
- 三木市教育委員会『高木古墳群・高木多重土塁2』三木市文化研究資料第16集 2000年
- 三木市教育委員会『三木市高木古墳群発掘調査報告』 1966年
- 三木市教育委員会『野々池沢古墳群発掘調査報告』 1970年
- 岡本道夫・岡村覚二『三木市の古墳』三木市文化財保護委員会 1964年
- 三木市教育委員会『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ』三木市文化研究資料第14集 2000年

第3節 中世

1. 土器

出土した土器には土師器、須恵器、瓦質土器、国産陶磁器、輸入磁器などがある。

(1) 土師器

土師器には皿、鍋、羽釜、鉢、蛸壺、土錘、羽口、トリベなどがある。土師器は全土器の中で出土個体数が97.75%を占めている。

① 皿

皿の分類と特徴 (第126図)

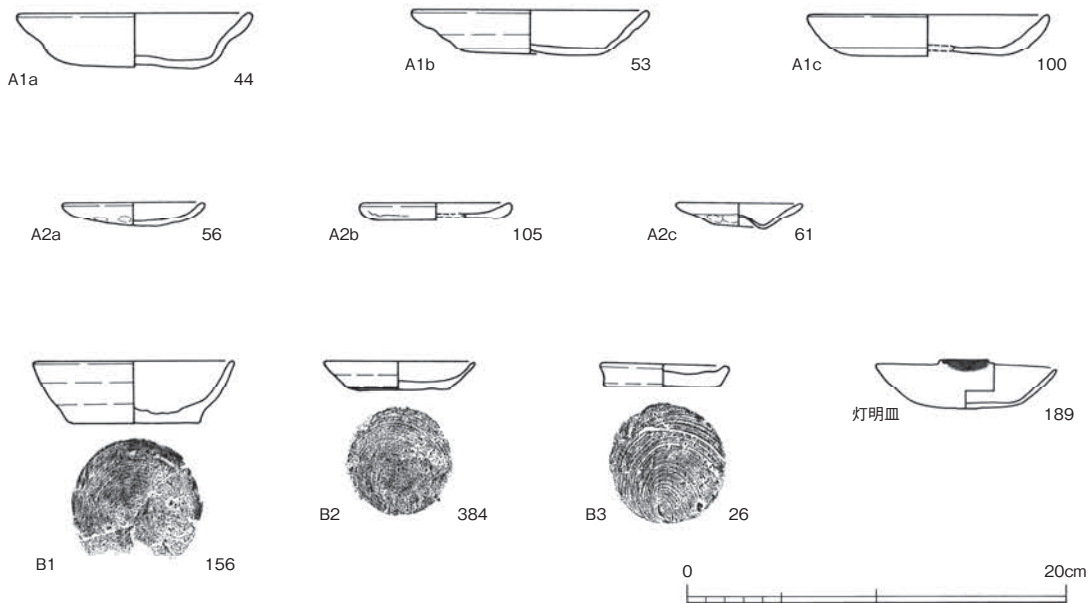
皿 A いわゆる手づくね土師器である。色調はやや白みがあったものが多い。

皿 A1 口径10 cm以上の大型のものである。

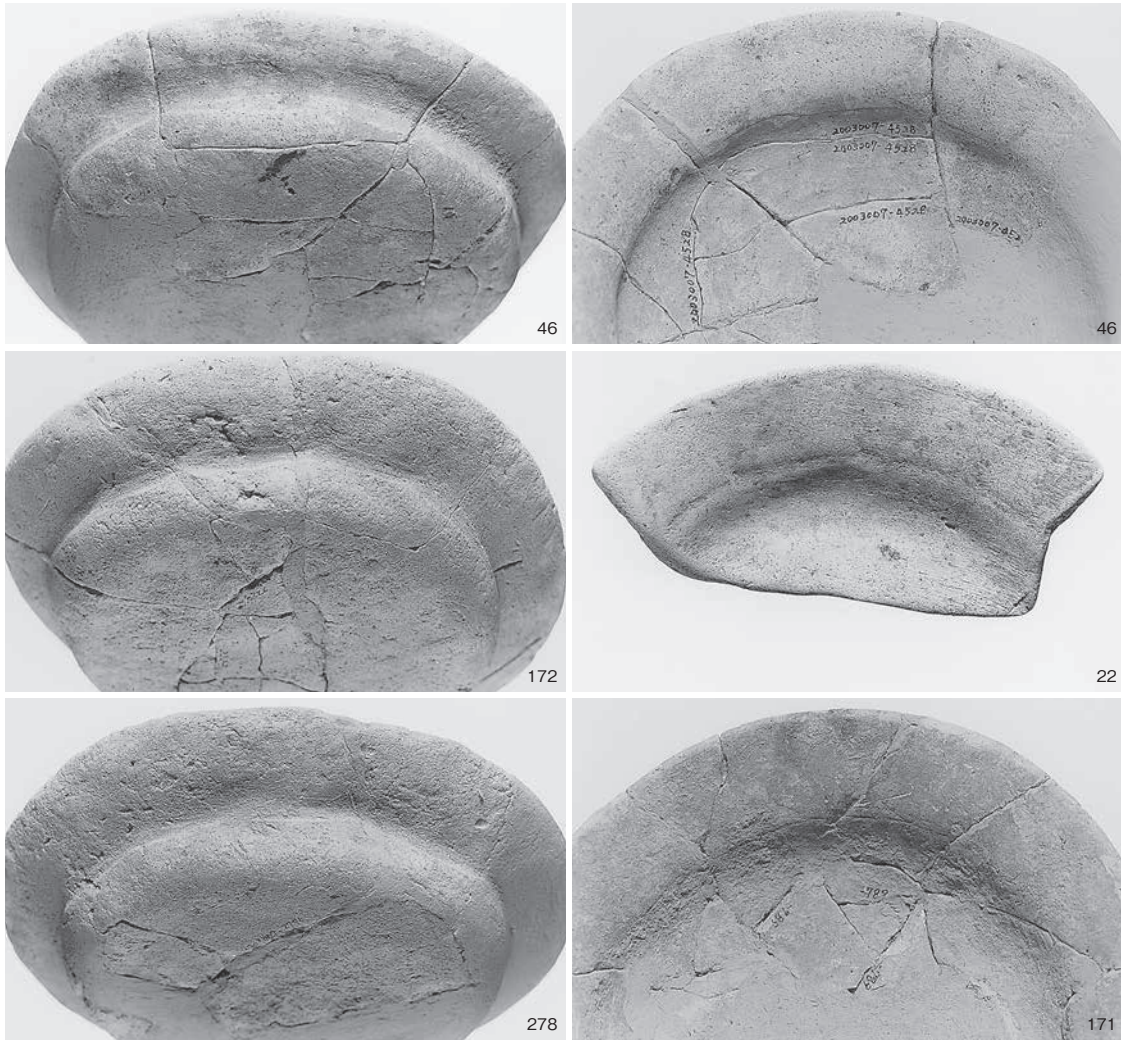
皿 A1a 底部外縁が丸味をもち、口縁部下端のヨコナデが強く、口縁部が外反する。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデである。底部外面は不調整で、指頭痕はそれほど付かない。内外面のヨコナデ下端にヘラ状の工具痕を残すものが認められる (第127図)。口縁部成形時の痕跡と考えられる。法量は口径13.4~10.6 cm、器高3.2~2.2 cmとばらつきがあり (第128図)、法量の平均値は口径12.3 cm、器高2.7 cmである。土師器皿 A1a の形態は体部の外反化した京都Ⅶ期 (13世紀後葉~14世紀中葉) の土師器皿 N と類似する (小森・上村 1996)。法量的には古型式 (13世紀後葉) が近い。

皿 A1b 底部が平坦なものが多く、口縁部はやや直線的である。口縁部外面のナデは多段で、ほとんどが2段である。下段のナデは表面を擦るような粗いヨコナデで、上段のナデから強く施されたものが多い。上段のナデが強い場合は A1a 類と似た口縁形状になる。口縁部内面はヨコナデ、底部内面はナデが施され、底部外面は不調整である。法量は口径13.4~10.6 cm、器高3.2~2.2 cmとばらつきがあり、法量の平均値は口径12.3 cm、器高2.6 cmである。

皿 A1c 口縁部が内弯するものである。出土数は非常に少ない (3、100、160、251)。



第126図 土師器皿の分類



外面のヘラ状痕跡

内面のヘラ状痕跡

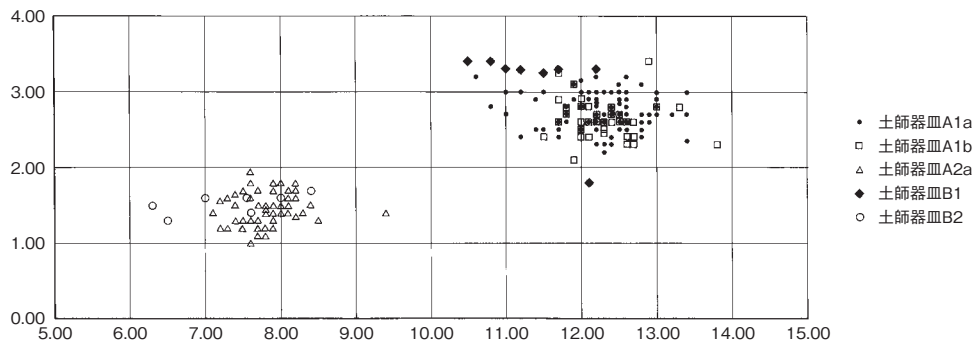
第127図 土師器皿A1aのヘラ状痕跡

皿 A2 口径 10 cm 以下の小型のもので、皿 A1a とほぼ同じである。

皿 A2a 内面はナデ、外面はナデ及びビユビオサエが施される。法量は口径 9.4~7.1 cm、器高 1.95~1.0 cm とばらつきがあり、法量の平均値は口径 7.8 cm、器高 1.4 cm である。

皿 A2b 口縁部内外面にヨコナデが施される。確認できたのは1点のみ (105) である。

皿 A2c いわゆるへそ皿である。確認できたのは1点のみ (61) である。へそ皿は京都でⅦ期



第128図 土師器皿の法量

第6章 まとめ

(13世紀後葉～14世紀中葉)以降に出現している(小森・上村1996)。

皿 B いわゆる回転台土師器で、確認できるかぎり底部の切り離しは回転糸切りである。色調は赤みがかかったものが多い。

皿 B1 口径10 cm以上の大型のものである。口径は12.2～10.5 cm、器高は3.3 cm前後のものが多い。内面及び口縁部外面は回転ナデが施されている。

皿 B2 口径10 cm以下の小型のものである。口径は8.4～6.3 cm、器高は1.5 cm前後のものが多い。口縁部が長く引き出されているものと、つまみ出す程度のものであるが、細分は行っていない。内面及び口縁部外面は回転ナデが施されている。土壘・空堀地区のSK64から出土したもの(238～240)は底部直上のナデの押さえが強く、12世紀後半頃のものと思われる。

灯明皿 口縁部に突起をもっている。突起部にススが付着している。灯明専用の特種品と考えられ、出土したのは1点(189)のみである。

皿の供伴関係

土器の総量が多いが、多種類の土器が土坑などから一括性の高い状況で出土しているものは極めて少ない。皿 A についてはSK47で土師器皿 A1a・皿 A1b・皿 A2a・皿 A2cが、SK57で土師器皿 A1a・皿 A1b、皿 A2aが供伴しており、皿 A1a・皿 A1b・皿 A2a・皿 A2cについてはある時間幅の中で供伴するものと思われる。皿 B については遺跡内で皿 A と供伴して出土したものは確認できなかった。

皿の胎土

皿 A1a (30・178・206・250) と皿 B1 (156・286) について胎土分析を行った(第5章第3節)。その結果、皿 A1a と皿 B1 では胎土が異なることが明らかとなった。いずれも花崗岩の少ない加古川下流域に特徴的な岩石組成であるが、皿 A1a にのみ火山ガラスが多く含まれている(K2類)。皿 A1a の色調がやや白味がかっているのはこのせいかもしれない。粒度組成も皿 A1a のほうが精良で、碎屑物も少ない。製作地の違いを予想させる結果である。

②鍋

鍋はいずれも甕形タイプ播丹型のものである(長谷川2007)。体部外面は平行タタキが施され、体部内面はナデもしくは板ナデが施され、ハケが施されているのは34・223のみである。上部に当具痕を残すものもある。口縁部内外面はヨコナデが施されている。体部外面にススが付着し、煮炊きに使われたものが多い。

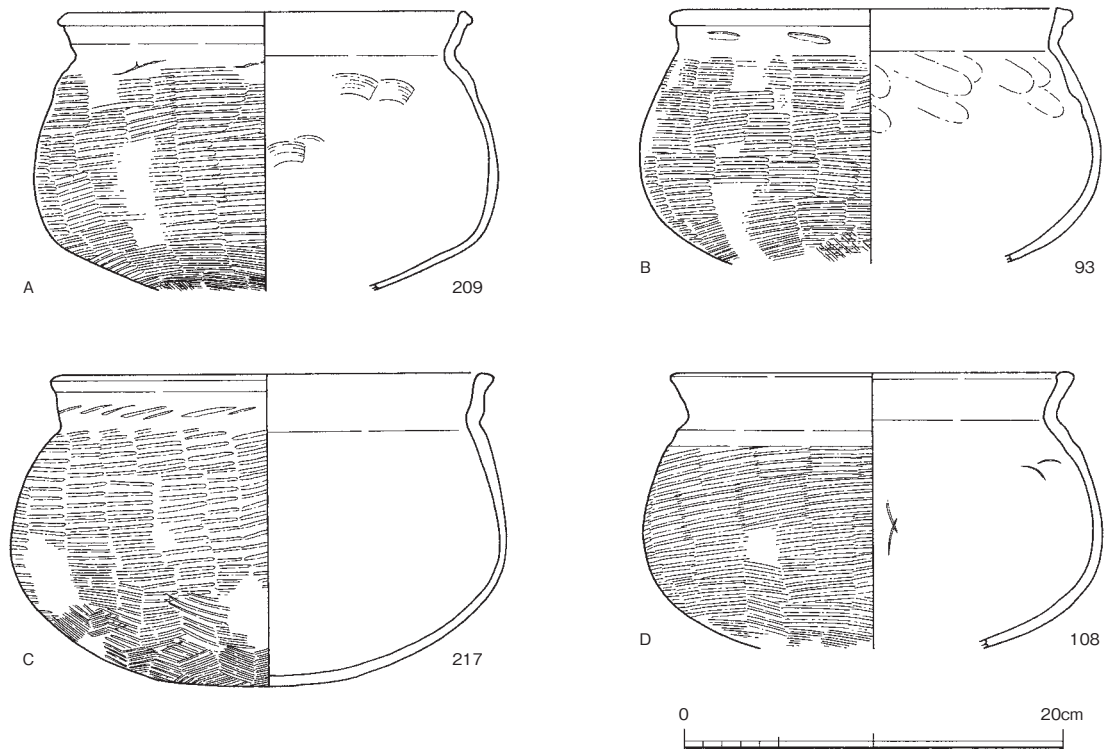
鍋の分類(第129図)

鍋 A (163・209・244・246・252・365・378) 口縁端部外縁が三角形に突出するもの。長谷川編年Ⅲ期(14世紀前半)に相当する。

鍋 B (75・93・158・236・288・337・357・376) 口縁端部外縁が丸く膨らむ。長谷川編年Ⅳ期(14世紀後半)に相当する。

鍋 C (16・106・164・190・217・223) 口縁部端部の拡張が不明瞭なもの。

鍋 D (1・34・108・216・219・336) 口縁部が内側に巻き込むもの。端面はほぼ水平である。長谷川編



第129図 土師器鍋の分類

年VI期（15世紀後半～16世紀初頭）に相当するが、後述するとおり、時期は少なくとも15世紀前半まで遡るものと考えられる。

鍋の胎土

A類（158）、B類（163）、D類（336）について胎土分析を行った（第5章第3節）。いずれも花崗岩の少ない加古川下流域に特徴的な岩石組成で、火山ガラスの含まれない土師器皿B1と共通の胎土であることが明らかとなった。

③その他（第130図）

その他の土師器には羽釜、鉢、蛸壺、土錘、羽口、トリベなどがある。羽口、トリベについては金属製品生産の項目で述べる。

羽釜（18・29・220・253・395）

出土しているのは7点でそのうちの5点を図化した。

395は口縁部が短く、内彎している。鏝も短い。長谷川編年羽釜形タイプ鉄製品模倣型IV期のものと考えられる。

220・29は口縁部が短く上方へ立ち上がるものである。体部外面は平行タタキが施され、長谷川編年羽釜形タイプ播磨型IV期のものと考えられる。

253は口縁端部が拡張し、鏝がかなり退化している。長谷川編年羽釜形タイプ播磨型VI期（15世紀後半～16世紀初頭）のものと考えられる。

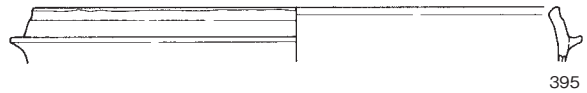
18は鏝が痕跡をとどめるにすぎない。長谷川編年羽釜形タイプ播磨型VII期（16世紀中葉～16世紀後半）のものと考えられる。

鉢 (385・230)

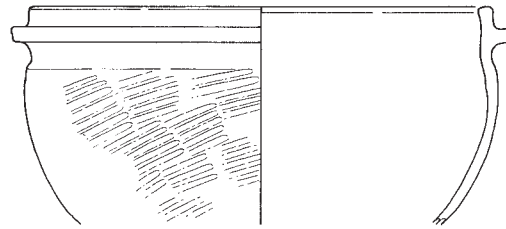
出土しているのは2点のみである。

385 は口縁部がハの字に開く鉢である。口縁部が外反し、直下が稜をなしている。三田城跡分類の播鉢B類で、1575年頃～1582年の年代が与えられている(西口2000)。

230 は口縁部直立するもので、片口を有している。



395

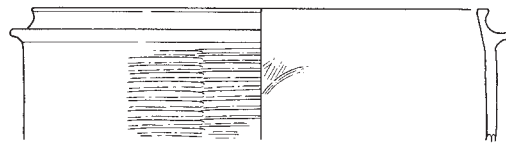


220

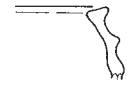
蛸壺 (371・362)

出土しているのは2点のみである。

371 は口縁部で、内彎し端部は丸味をもっている。362 は底部が回転糸切りで、体部外面下端に指頭圧痕が認められる。明石市で出土する蛸壺に同様な痕跡が認められる(注1)。



29



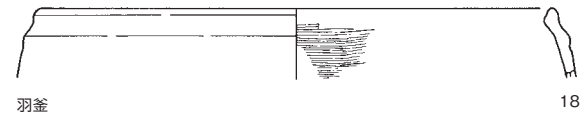
253

(2) 須恵器

須恵器には碗・鉢・甕・経筒などがある。

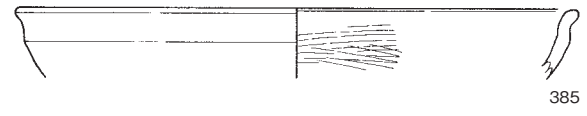
①碗

碗は平高台の突出はなくなり、底部は回転糸切りで切り離されている。体部外面以外は回転ナデが施され、見込みには仕上げナデが施されたものが多い。



羽釜

18



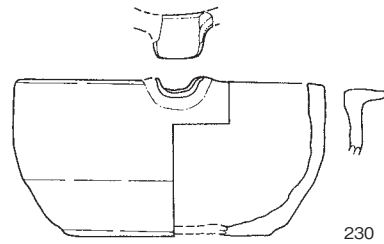
385

碗の分類と特徴(第131図)

碗A(210) 見込みに凹みの痕跡が認められるものである。出土しているのは1点のみである。器高は5.1cmで、12世紀前半のものと思われる。

碗B(340) 見込みに凹みをもたず、器高が高いものである。出土しているのは1点のみである。器高4.4cmで、12世紀後半のものと思われる。

碗C(135・196・233・245・294・341) 見込みに凹みをもたず、器高が低いものである。口径は15.6～15.0cm、器高は3.6～3.0cmである。底部の外周部に手持ちヘラケズリが施されるものも多く、294は全面手持ちヘラケズリが施されている。

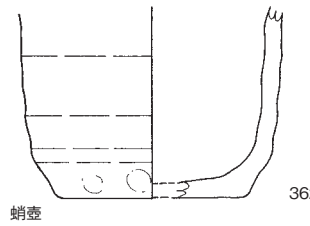


鉢

230



371

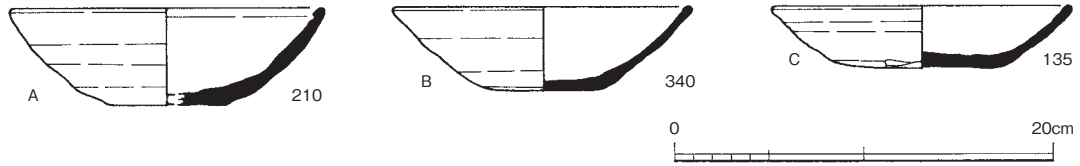


蛸壺

362



第130図 その他の土師器

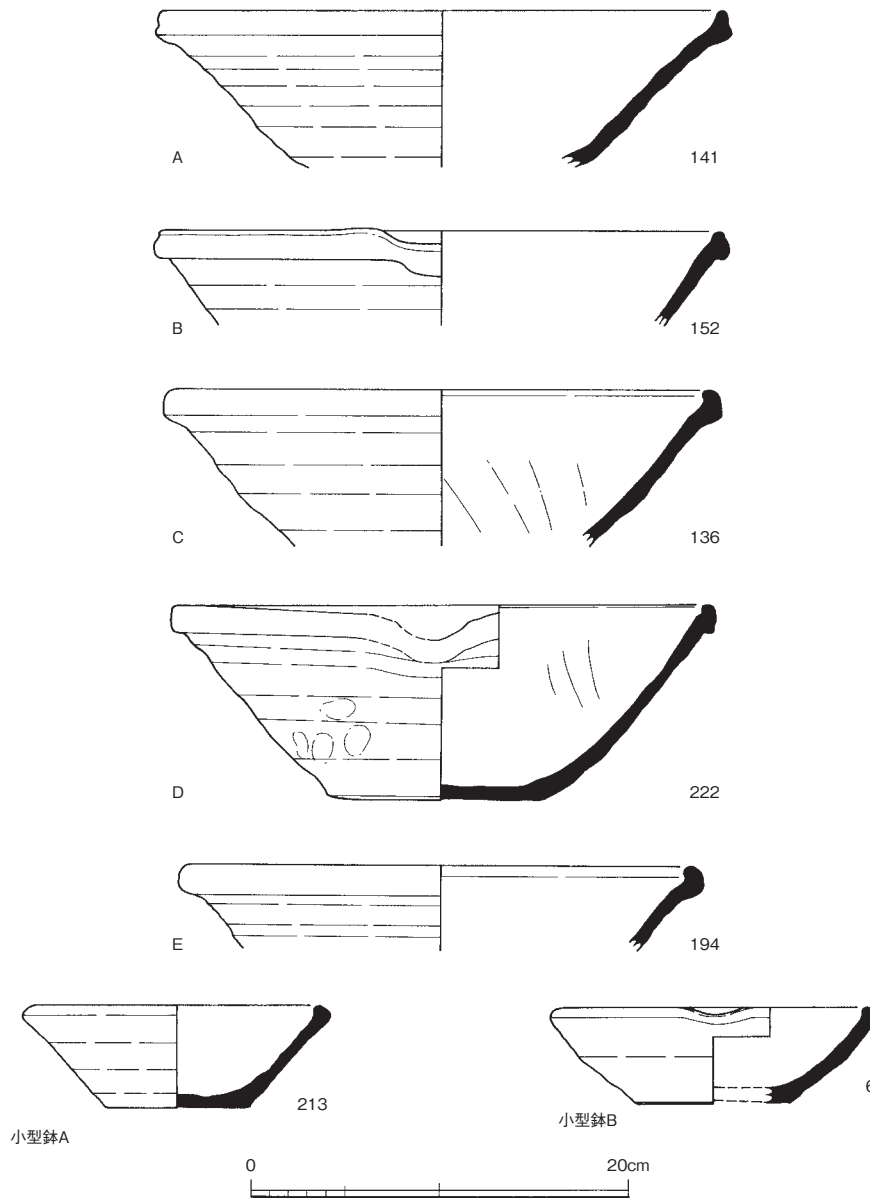


第131図 須恵器碗の分類

神出窯の神出東2号窯、刈屋谷池窯出土例に近い（妙見山麓遺跡調査会 2006、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998）。

②鉢

鉢は播目の入れられた 153 を除けば全て捏鉢である。口径 30 cm 程度のものと口径 16 cm 程度の小型のものがある。内面及び底部を除く外面は回転ナデが施され、体部内面には斜め方向の仕上げナデが施される。体部外面には仕上げナデが施された時に付いた指頭痕が見られるものがある。



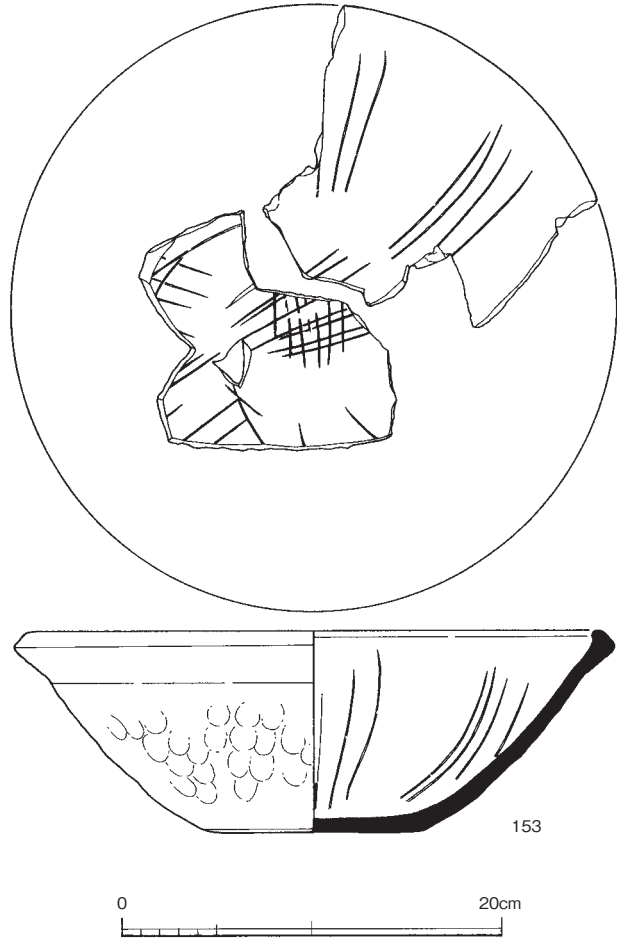
第132図 須恵器鉢の分類

鉢の分類と特徴（第132図）

鉢 A（141・355） 口縁部の端面は明瞭で、上方に拡張させるもの。12世紀後半のものと思われる。

鉢 B（17・152・358・361） 口縁端部外縁をずんぐり膨らませるもの。兵庫津分類D類に相当する（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004）。14世紀前半の時期が考えられる。

鉢 C（62・136・153・211・212・218・232・290・343・344・363・372・382・387） 口縁端部外縁をずんぐり膨らませ、上方に拡張するもの。端部を内側に巻き込んだ形態のものが多く認められる。兵庫津分類D類に相当する。14世紀前半の時期が考えられる。153は内面に1本引きの沈線を入れて播鉢としている（第133図）。明石市魚住窯跡群赤根川支群江井ヶ島地区に類例がある程度で非常に珍しい（明石市教育委員会2003）。



第133図 須恵器 播鉢

鉢 D（222・231・289・295） 口縁端部外縁が垂下するもの。兵庫津分類E類に相当する。14世紀後半の時期が考えられる。

鉢 E（194） 口縁端部を丸く内側へ折り曲げるもの。兵庫津分類のF類に相当する。14世紀後半から15世紀前半の時期が考えられる。

小型鉢 A（213・228・195） 口縁端部は矩形で、やや肥厚する。

小型鉢 B（6・140） 口縁端部は丸味をもつ。

③甕

142を除けば全て東播窯の製品と考えられる。東播窯の製品は体部に矢羽根状のタタキが施されている。

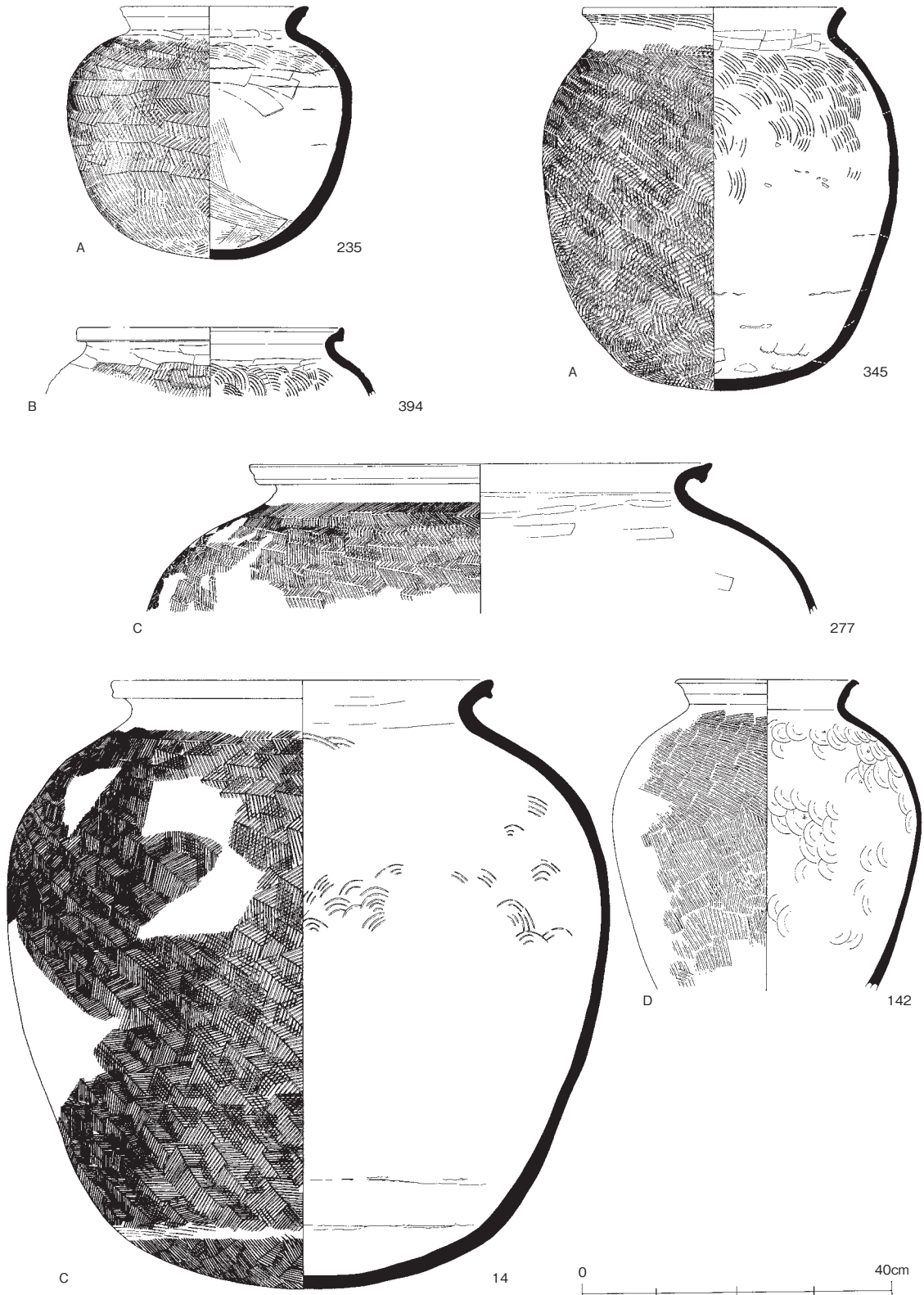
甕の分類と特徴（第134図）

甕 A（166・235・345・388） 口縁端部が拡張しないものである。口径が23.5～20.8cmの小型のもの（166・235・388）と33.2cmの中型のもの（345）がある。

甕 B（394） 口縁端部内縁を上につまみ挙げるものである。口径33.9cmで中型のものである。

甕 C（14・277・389） 口縁端部外縁を下に垂下させるものである。口径45.4cmの大型のもの（14）と口径59.0～54.4cmの特大的なもの（277・389）がある。

甕 D (142) 口縁端部外縁を横へ引き出すものである。体部外面に平行タタキが施されている。体部は胴部最大径が高い位置にあり、縦に長い器形である。東播磨には見られない形態で、十瓶山窯の製品である可能性があり、12世紀頃のものと考えられる。ただし、口縁部外面のタタキがきれいにナデ消されているのと肩部にタタキ直しが見られる点は典型的なものとはやや異なるようである（注2）。



第134図 須恵器甕の分類

第127図 須恵器甕の分類

④その他の須恵器 (第 135 図)

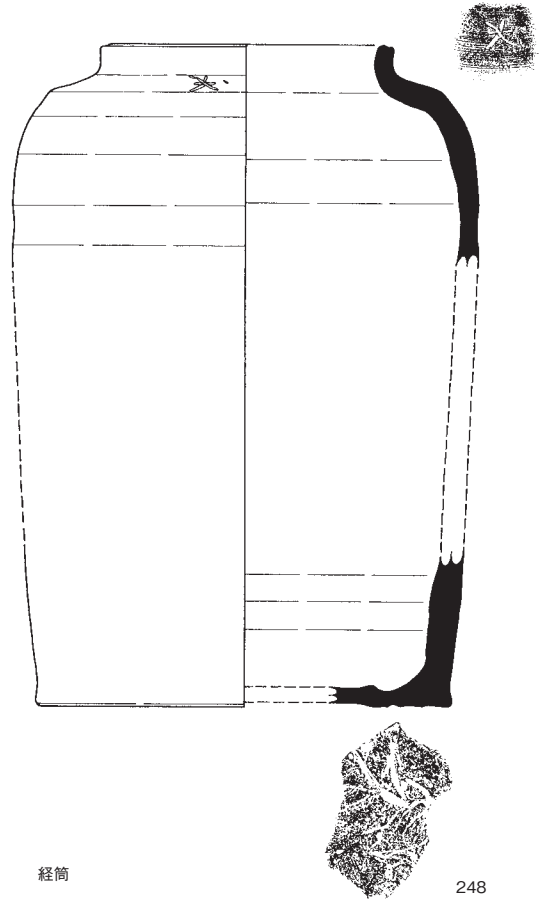
小皿 (342)

1点のみの出土である。底部の切り離しは回転糸切りである。器高は1.4cmで、12世紀後半頃のものである。



経筒 (248)

1点のみの出土である。底部に木葉の痕跡が認められることから経筒と考えられる(森内 1992)。口縁部が強く屈曲するものは加古川市二塚古墳経塚出土の陶製C経筒がある(森内 1996)。底径が21.7cmと大きいので外容器かもしれない。12世紀中頃のものと考えられる。



(3) 瓦質土器

出土した瓦質土器は3点のみで、いずれも風炉と考えられる(第136図)。

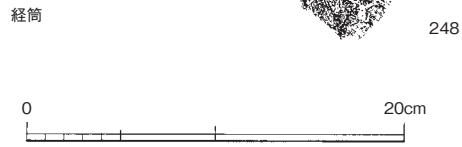
256は口縁部垂直に立つもので、口縁部外面に珠文が廻っている。立石分類のⅡ類に相当する(立石 2009)。

338は口縁部が内彎するもので、立石分類のⅢ類、水澤分類Ⅲ類に相当する(水澤 2009)。

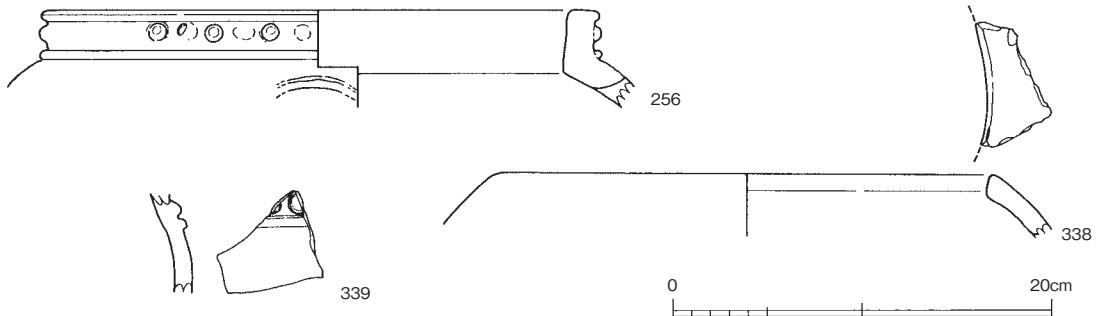
339は体部の破片で、外面に珠文が廻っている。

338と同じく堀切から出土したもので、338と同一個体かもしれない。そうすれば、水澤分類Ⅲc類に相当する。

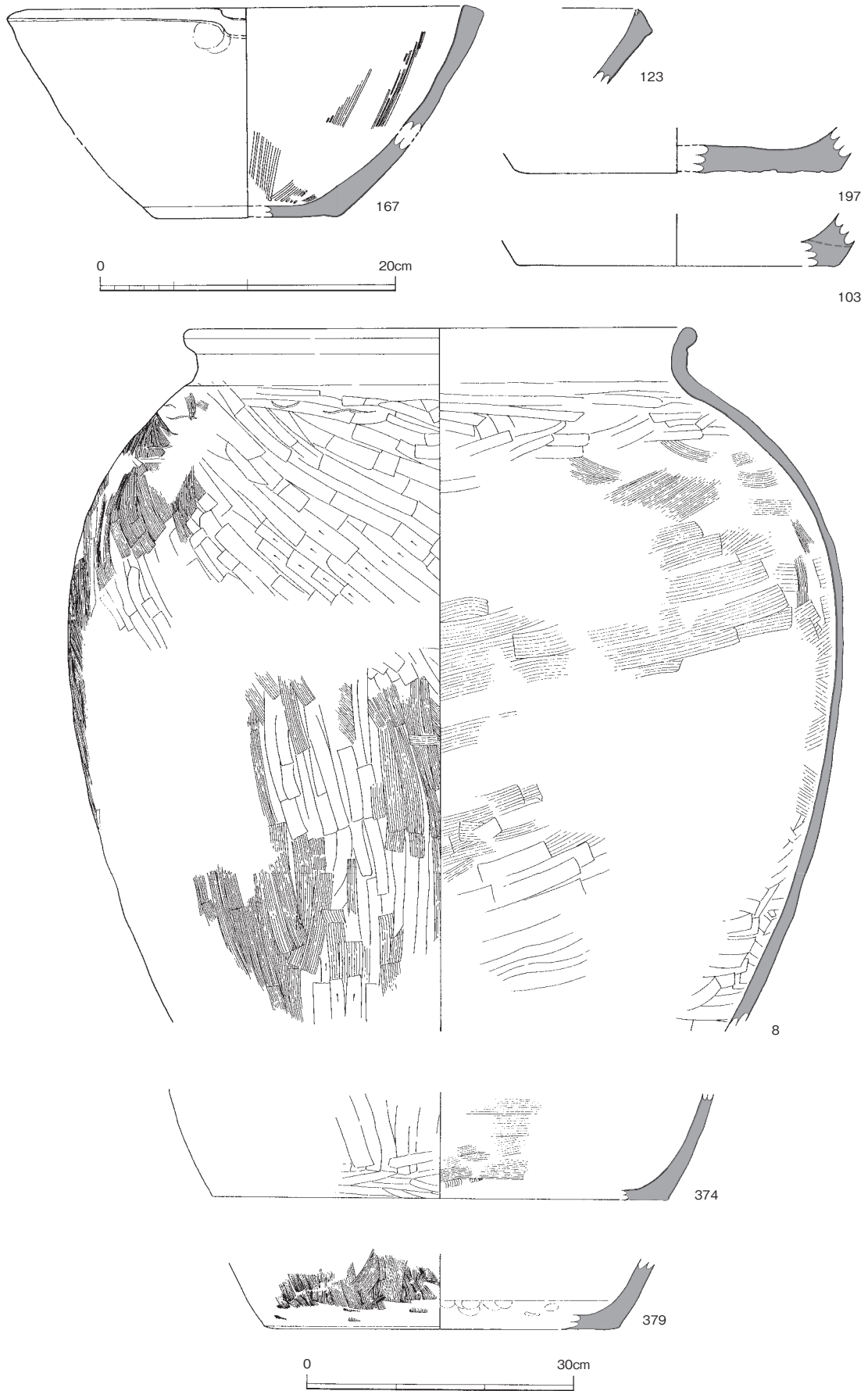
立石によると大和ではⅢ類が14世紀後半、Ⅱ類が15世紀前半に出現すると考えられている。水澤によるとⅢc類が14世紀第2～3四半期、珠文を有するものが15世紀前半以前と考えられている。



第135図 その他の須恵器



第136図 瓦質土器



第137図 備前焼

(4) 国産陶器

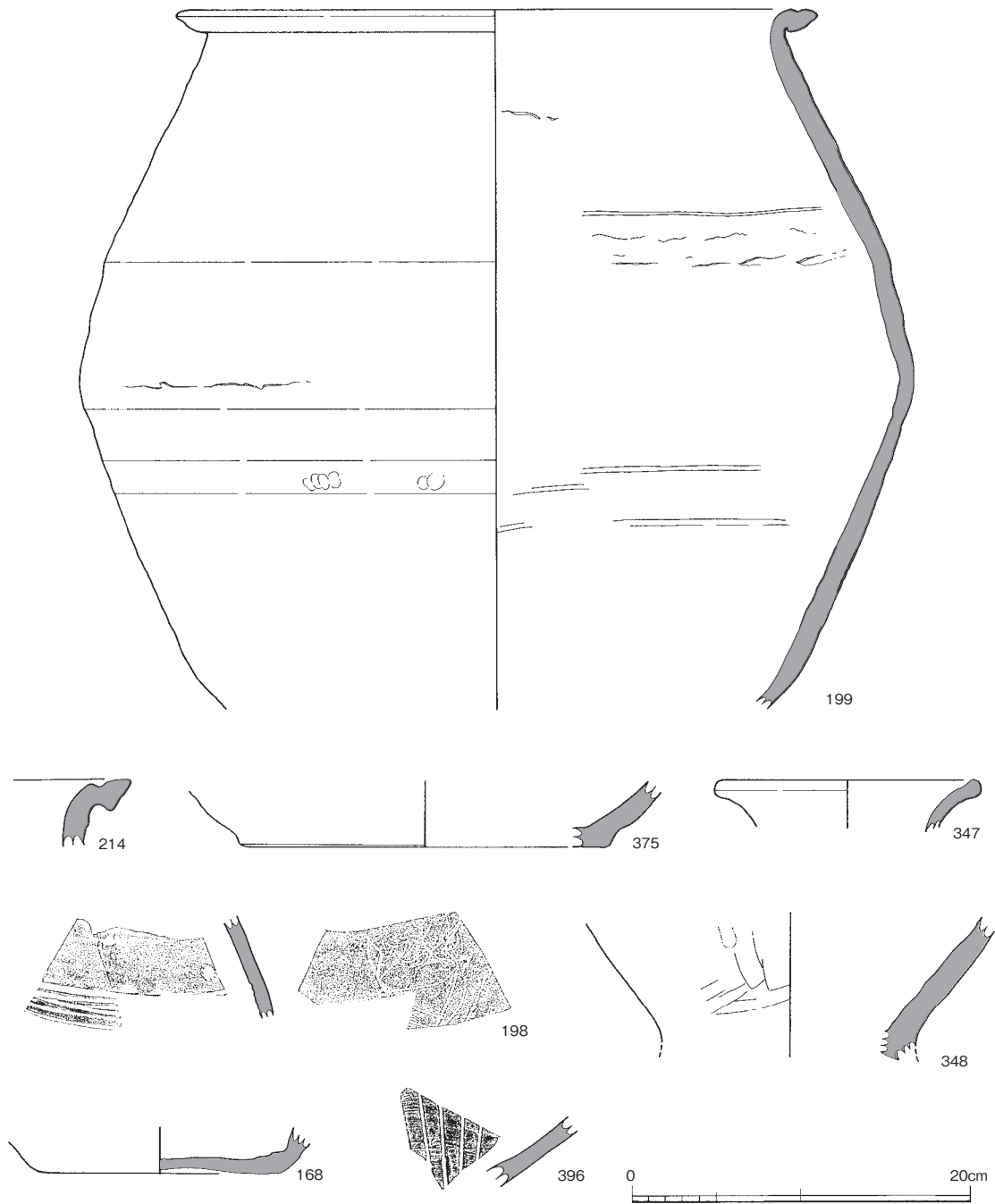
①備前焼 (第137図)

備前焼は播鉢と甕が出土している。

播鉢 (103・123・167・197)

4点出土しており、2点は底部のみである。167は備前焼播鉢である。体部はやや丸味をもち、口縁部は矩形でやや肥厚気味である。播目は1単位6本である。乗岡編年中世3a期(14世紀中葉～後葉)と考えられる(乗岡2005)。

123は備前焼播鉢である。口縁はやや肥厚し、口縁端部外縁がやや突出している。内面に播目は存在するが、端に1条しか確認できない。乗岡編年中世3b期(15世紀前葉)に相当するものと思われる。



第138図 丹波焼

甕 (8・374・379)

3点出土しており、2点は底部のみである。8は口縁部が玉縁状で、体部は内外面ともハケメ及び板ナデである。乗岡編年中世2b期(14世紀前葉)と考えられる。

②丹波焼 (138 図)

丹波焼は播鉢、甕、壺が出土している。

播鉢 (396)

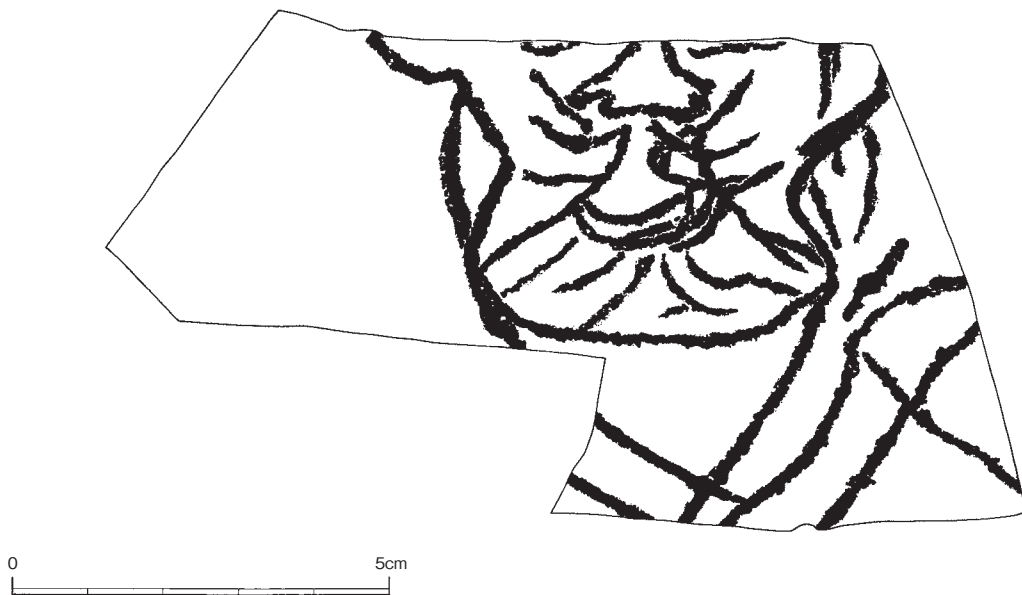
出土しているのは1点のみである。内面に1本引きの播目が認められる。

甕 (199・214・375)

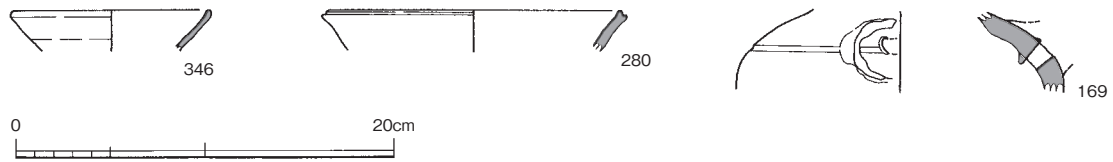
3点出土しており、1点は底部のみである。214は長谷川編年のⅢ期(13世紀後葉～14世紀前葉)の甕B1、199はⅣ期(14世紀中葉～後葉)の甕B1である(長谷川2005)。

壺 (168・198・347・348)

4点出土しているが小片が多く、詳細な時期は不明である。347は大きく開く口縁部で、端部は丸味をもっている。168は底部、348は底部付近の個体で、底部中央が凹んでいる。198は壺の肩部付近と思われ、人物が刻画されている(第139図)。刻画は髭面の男性の目の下から上半身が確認できる。丹波焼の刻画文は12世紀後半から14世紀前半にみられ、植物文・動物文・幾何学文などがあるが、人物文の類例は知られない(愛知県陶磁資料館・五島美術館1988)。中世の陶器に描かれた人物文としては加賀窯、常滑窯、美濃窯、備前窯などに類例があるけれども数点にすぎない。中世の人物文は簡略なものが多いが、本例は暦応5年(1342)銘をもつ備前焼甕(和歌山県白浜町長寿寺出土)に描かれた僧侶の絵と並ぶほど詳細に描かれている(内川2001、北野2005)。



第139図 丹波焼壺の人物刻画



第140図 瀬戸美濃焼

③瀬戸美濃焼（第140図）

ごく小さい破片が3点出土している。

346は口径が10.4cmで、表面は灰釉が施釉されている。古瀬戸中期様式（14世紀前半）の平底末広碗と考えられる（藤沢2008）。

280は卸皿で、表面は灰釉が施釉されている。口縁部に外傾する端面をもつことから古瀬戸中期様式（14世紀前半）と考えられる。

169は水注である。表面は灰釉が施釉されている。

（5）輸入磁器（第141図）

輸入磁器には青磁、白磁がある。

青磁（72・147・154・155・170・200・352・383）

いずれも龍泉窯系の青磁で、9点出土している。

155は龍泉窯系の劃花文碗で、森田・横田分類龍泉窯系碗Ⅰ-4類である（森田・横田1978）。

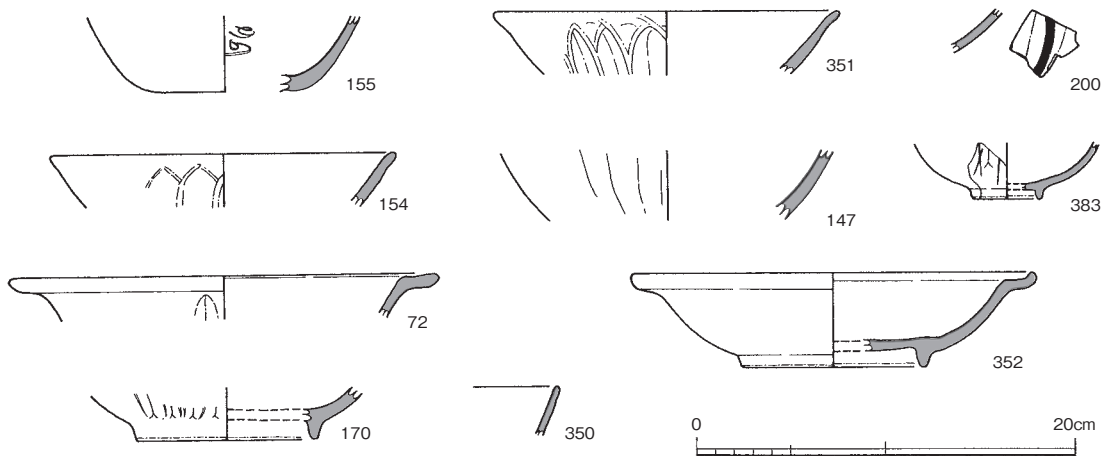
351・200は龍泉窯系の蓮弁文碗で、鐏のある森田・横田分類龍泉窯系碗Ⅰ-5・b類である。

154は龍泉窯系の蓮弁文碗で、鐏のない森田・横田分類龍泉窯系碗Ⅰ-5・a類である。

383は龍泉窯系の蓮弁文碗で、蓮弁には鐏がある。高台の先端が細く、畳付のみが露胎である。森田・横田分類龍泉窯系碗Ⅲ-2類である。147も龍泉窯系の蓮弁文碗である。蓮弁の凹凸は大きい、蓮弁端のヘラ彫り痕は認められない。釉色は青味を帯びている。高台部を欠いているが、森田・横田分類龍泉窯系碗Ⅲ-2類と思われる。

72・170は龍泉窯系の青磁鉢で、体部外面に鐏蓮弁文をもっている。72は口縁部が鋭く外反する森田・横田分類龍泉窯系杯Ⅲ-2類である。

352は龍泉窯系の青磁鉢で、体部外面は無文である。口縁部端部が直上に引き出される森田・横田分



第141図 輸入磁器

類龍泉窯系杯Ⅲ-3類である。

龍泉窯系碗Ⅰ-4類は山本編年D期(12世紀中頃～後半)、龍泉窯系碗Ⅰ-5・a・b類は山本編年E期(13世紀前後～前半)、龍泉窯系杯Ⅲ-2類・杯Ⅲ-2・3類はF期(13世紀中頃～14世紀初頭前後)の標識磁器である(大宰府市教育委員会 2000)。

白磁 (350)

白磁は1点しか出土していない。

350は白磁皿である。器壁は薄く、釉色は青味を帯びている。小破片で分類、年代はよく分からない。

(6) 土器の年代

今回出土した中世の土器はおおむね14世紀頃が大半でわずかにその時期を大きく離れるものが混じっている。14世紀前後のものをⅡ期、それより前をⅠ期、それより後をⅢ期とする。

①Ⅰ期の土器

出土した土器は土師器小皿(238～240)、須恵器碗A(210)・碗B(340)・鉢A(141・355)・小皿(374)・甕D(142)・経筒(248)がある。土師器の煮炊具は認められない。

須恵器碗Aが12世紀前半、須恵器経筒が12世紀中頃、土師器小皿、須恵器碗B・小皿が12世紀後半の時期と考えられる。須恵器の甕については甕Aの中に12世紀代のものが含まれている可能性があるが特定はできない。体部に矢羽根状のタタキをもつものは13世紀以降のものと考えられる。

②Ⅱ期の土器

出土した土器のほとんどはこの時期に属すものと考えられる。

外来系土器の年代

瓦質土器風炉が14世紀中葉から15世紀前半、備前焼が14世紀前葉(乗岡編年中世2b期)～15世紀前葉(3b期)、丹波焼が13世紀後葉～14世紀後葉(長谷川編年Ⅲ・Ⅳ期)、青磁は12世紀中頃～14世紀初頭(山本編年D～F期)、瀬戸美濃焼は14世紀前半(古瀬戸中期様式)と考えられる。青磁はやや古いものが含まれるが、14世紀前後に限られている。

在地土器のセット関係と年代

土器の総量は多いが、多種類の土器が土坑などから一括性の高い状況で出土しているものは極めて少ない。SK47で土師器皿A1a・皿A1b・皿A2a・皿A2c、須恵器鉢Cが、SK57で土師器皿A1a・皿A1b、皿A2a、青磁鉢が供伴している程度である。

近隣の他の遺跡でみると神戸市の石峯寺坊跡では瀬戸美濃焼折縁鉢(古瀬戸中期様式Ⅲ期)、瓦質土器火鉢(立石分類火鉢Ⅰ)などとともに土師器皿A1a・皿B1、土師器鍋皿B、須恵器鉢C・鉢Dなどが火災層から出土している。暦応2年(1339)の北朝軍による攻撃時(越前島津文書)の火災層と推定されている(神戸市教育委員会 2007)点が注目される。石峯寺にほど近い神戸市の東畑遺跡のSK25では土師器皿A1a・皿A2a・皿A2b・皿B2、須恵器碗C・鉢D、甕B・甕Cが供伴している(阪神文化財調査会 1999)。加東市の山国源ヶ坂遺跡の7区SE01では土師器皿A1a・皿A2a・皿B1、須恵器鉢C・鉢Dなどとともに長谷川編年Ⅳ期(14世紀中葉～後葉)の丹波甕が出土している(加東郡教育委員会 1990)。

第6章 まとめ

これらの遺跡での様相からみると吉田住吉山遺跡で出土している主要な型式と一致しているといえるであろう。このうち、須恵器鉢C・鉢Dは兵庫津分類D類（14世紀前半）、兵庫津分類E類（14世紀後半）に相当するが、兵庫津分類E類のうち上部への拡張が大きいものはあまり見られないことから、14世紀後半でも中葉頃のものが多いと思われる。また、長谷川編年IV期の基準資料として延元元年銘（1356）もつ丹波焼壺がある。これらのことからすると、14世紀中葉を中心とする時期が考えられよう。

神戸市の神出・南遺跡 8608T2 区土壌 8T2 はやや時期幅のある資料であるが、14世紀後半～15世紀前半頃の状況を示す資料と考えられている（妙見山麓遺跡調査会 1989）。土師器皿B1・皿B2・鍋A・鍋B・鍋C・鍋D・羽釜、須恵器碗C・鉢A・鉢C・鉢D・鉢E・甕A・甕B・甕Cなどが出土している。破片ながら鍋Dが出土しており、鍋Dの初源は長谷川編年の示す15世紀後半よりはさかのぼるものと考えておきたい。土師器皿Aが含まれていないのは須恵器産地であることによるのかもしれない。

Ⅱ期には14世紀中葉をピークに13世紀後葉から15世紀前半までの時期が含まれていると思われる。

③Ⅲ期の土器

確実にⅢ期に属する土器は少ない。

土師器羽釜は長谷川編年羽釜形タイプ播磨型のⅥ期（15世紀後半～16世紀初頭）のものと長谷川編年羽釜形タイプ播磨型Ⅶ期（16世紀中葉～16世紀後半）のものが出土している。

土師器鉢は三田城跡分類の播鉢B類（1575年頃～1582年）が出土している。

（7）土器の出土状況

土器については口縁部個体度数法による計数作業を行った。その結果、総個体数は978.25個体を数えた（第30表）。口縁部は破損しやすく、細片化して、発掘時に回収できていないものが多くなり、計数時にも切り捨てとなるものがあることから、実際にはこの数量の2倍から数倍の個体が存在するものと思われる。

器種ごとの状況

土師器が956.25個体（97.75%）、須恵器が19.4個体（1.98%）、陶磁器が2.4個体（0.25%）、その

第30表 中世土器個体数数量表

地区名	土師器					須恵器				陶磁器			その他	合計	割合
	皿A1	皿A2	皿B	鍋	その他	碗	鉢	甕	その他	丹波甕	備前甕	その他			
主郭	352.25	145.7	3.35	13.05	0.1	2.15	2.65	1.8	0	0.35	1	0.35	0	522.75	53.44
土塁1	25.3	4.95	0.6	5.85	0.4	1.1	2.05	0	0	0.1	0	0.05	0	40.4	4.13
土塁・空堀	8.3	1.1	2.45	1.15	0.75	0.85	0.35	0.1	0.1	0	0	0	0	15.15	1.55
帯曲輪3	4.6	0.6	0.15	0.35	0.05	0.1	0	0	0	0	0	0	0.1	5.95	0.61
帯曲輪2	46.15	1.35	0.3	0.4	0	0.15	0	0.55	0	0	0	0	0	48.9	5.00
帯曲輪1	35.5	5.9	0.2	0.4	0	0.1	0.6	0.1	0	0	0	0.15	0	42.95	4.39
東斜面	4.05	1.5	0	0.15	0	0.7	0.35	0	0	0	0	0	0	6.75	0.69
堀切	201.65	54.1	0.5	2.55	0	0.85	0.45	0.55	0.1	0	0	0.4	0.1	261.25	26.71
谷東	13.6	4.55	0	0.9	0.05	0	0.5	0	0	0	0	0	0	19.6	2.00
谷西	1.3	0.25	0	0.55	0	0	0.1	0.05	0	0	0	0	0	2.25	0.23
西曲輪1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00
西曲輪2	1.6	0.2	3.15	0.05	0	0.8	1.35	0.1	0	0	0	0	0	7.25	0.74
帯曲輪4	0.15	0	0.25	0.4	0	0	0.1	0.55	0	0	0	0	0	1.45	0.15
帯曲輪5	0	0	0	0	0.05	0	0	0	0	0	0	0	0	0.05	0.01
西斜面	0	0	0	0.2	0	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0.3	0.03
不明	1.7	1.5	0	0.05	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3.25	0.33
合計	696.15	221.7	10.95	26.05	1.4	6.9	8.5	3.8	0.2	0.45	1	0.95	0.2	978.25	
割合	71.16	22.66	1.12	2.66	0.14	0.71	0.87	0.39	0.02	0.05	0.10	0.10	0.02		

他が0.2個体(0.02%)で、圧倒的に土師器が多い。

土師器皿A1は696.15個体(71.16%)、土師器皿A2は221.7個体(22.66%)、皿Bは10.95個体(1.12%)、鍋は26.05個体(2.66%)である。土師器供膳具の中で糸切りの皿Bは圧倒的に少なく、小型の皿A2 1枚に対して大型の皿A1が約3枚の割合である。

各器種を機能ごとに分けてみると供膳具が936.65個体(95.75%)、調理具が36.15個体(3.70%)、貯蔵具が5.45個体(0.56%)となる。

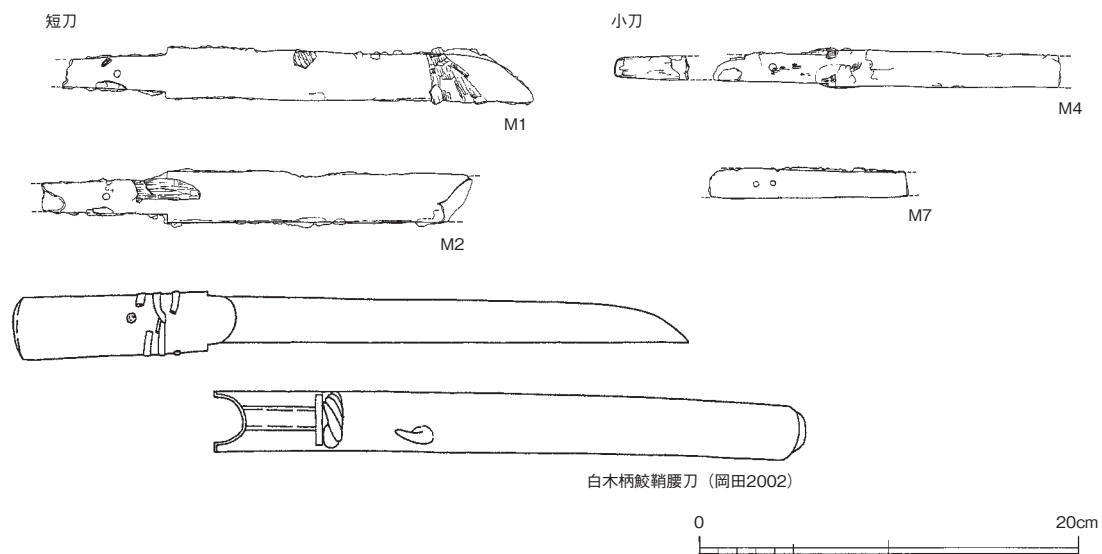
地区ごとの状況

最も多いのが主郭から522.75個体(53.44%)、次に多いのが堀切から261.25個体(26.71%)で、2地区で約8割を占めている。これに続くのが帯曲輪2(48.9個体:5.00%)、帯曲輪1(42.95個体:4.39%)、土塁1(40.4個体:4.13%)で、いずれも主郭に隣接する地区である。このように主郭を中心に城が利用された状況は図版5の遺物の分布からも見て取れる。主郭内では古墳の周溝の上層や土塁1東側、集石50・61付近、SK47付近に土器の集中箇所が見られ、帯曲輪1～3では横堀周辺に土器が集中している。

土塁・空堀地区より西側では土器の出土量はめっきり少なくなる。土塁・空堀地区から15.15個体(1.55%)、谷東地区から19.6個体(2.00%)で、その他の地区は10個体(1%)以下である。やや不思議なのは土塁・空堀地区で空堀内からの土器の出土が少ないことで、むしろ古墳周溝上の土塁盛土部分から出土したものが多く、土塁1を挟んで土塁1東側では24.45個体の土器が出土しているが、空堀1からは1.15個体の土器しか出土していない。空堀内は掘り直しが行われた可能性が高いものと思われる。

2. 金属製品

金属製品には鉄製品、銅製品がある。総数は約690点に及ぶ。鉄製品には約430点に及ぶ釘の他、短刀・鎌・小札などの武器・武具、鍋・五徳・火打金などの生活用具、斧・鎌などの農耕具、鉄塊・鉄滓などの鍛冶関連遺物などがある。銅製品には武器・武具の飾金具や銅塊・銅滴などの金工関連遺物などがある。銅銭も緡銭を含め95枚出土している。ここでは比較的数量がまとまって出土している武器・武



第142図 刀類

第6章 まとめ

具、釘、銅銭について取り上げ、鍛冶関連遺物や金工関連遺物については次項で取り上げる。

(1) 武器・武具

①刀類 (第142図)

刀類には太刀などの大型のものではなく、短刀以下の小型のもののみである。反りはなく直刀形式のものしかない。刀身が完存するものはほとんどないため、刀身幅が2 cm以上のものを短刀、2 cm未満のものを小刀と便宜的に分けておく。伝世刀においては刀身幅に対して刀身長はおおむね10倍に相当することから(渡邊2009)、おおむね刀身長20 cm以上を短刀、20 cm未満を小刀とすることになる。

短刀 (M1～M3)

3点出土している。刀身幅は2.8～2.7 cmで、やや太身である。関は両関で、M1・M2は刀身幅に対して茎幅が細い。M1の刀身の復元長は19.7 cmで、刀身幅に対してかなり短い。M2の関部には柄の木質が付着し、半月形の突出部の一部の可能性が考えられる。このような突出部は腰刀における呑口形式の拵の特徴である。呑口形式は14世紀前葉から中葉頃に合口形式に統一されるとされている(小笠原1994、三好2001)(注3)。

小刀 (M4～M9)

6点出土している。刀身幅は1.85～1.35 cmである。M4・M5が両関で、M7・M8は無関である。M4は柄の木質が関部の少し刃部側で直線的に切れることから、柄の拵が合口形式である可能性がある。

②鉄鏃 (第143図)

鉄鏃は11点出土している。先端の形状により鑿形、腸袂三角形、雁又の3型式に分ける。(注4)

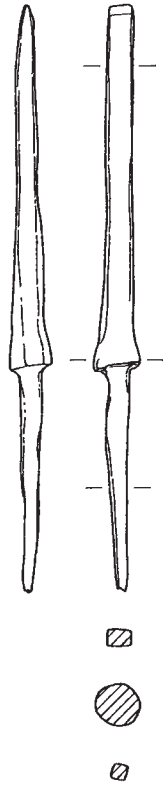
鑿形鏃 (M10～M17)

鏃の先端が鑿のような形をしており、茎部に向かって断面が円形になり、関部はスカート状に広がっている。鏃身長は11.4～9.6 cmで、茎長はほぼ完形のM15で5.9 cmである。このような型式(津野分類の鑿根I式)は征矢の主要形式で、11～12世紀に各地に広まり、戦国時代まで変化を示さず継続するとされている(津野1990)。大山祇神社(愛媛県)には同形式の矢が多く伝世されている。鏃身長は10.3～8.5 cmと吉田住吉山遺跡と近似する。鏃の先端が、先端部に向かって広がる黒漆塗篋征箭、先端と頸部の幅がほぼ等しい節影黒塗箭、先端部に向かって幅が狭くなる節影塗篋征箭・拭篋征箭に分けることができ、吉田住吉山遺跡ではM16の先端がやや狭い以外は先端と頸部の幅がほぼ等しいものである。拭篋征箭には「国益」の鐫銘があり、『雲知明集』の伊予国の一人鍛冶の部に「国益」の名が見えることから正中年中(1324～26)頃のものと考えられている(「重要文化財」編纂委員会1982)。矢に対して弓には正中2年(1325)、貞治2年(1363)の紀年銘をもつものがある。これらの弓箭具は鎌倉末期から南北朝期にかけてのものと考えられ、鑿形鏃の旧状を知る上で非常に参考になる。

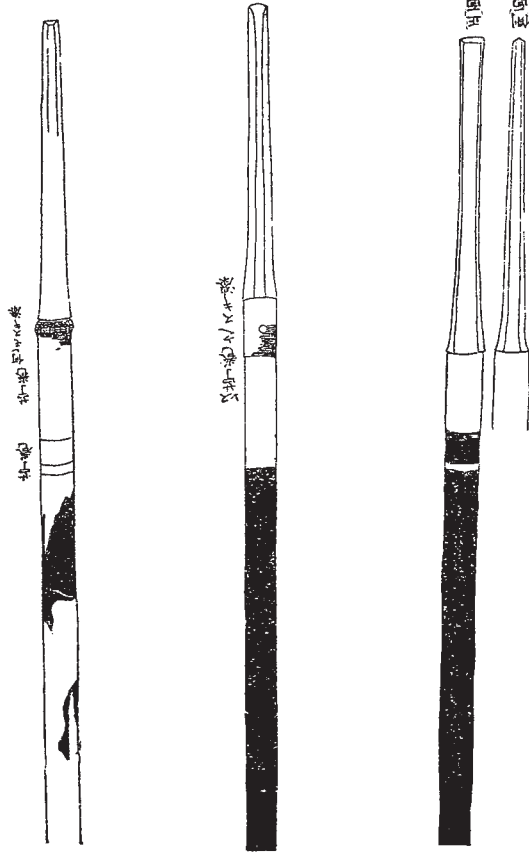
腸袂三角形鏃 (M18)

鏃の先端が腸袂のある三角形を呈している。鑿形鏃と同様に、関部はサビぶくれによりやや不明瞭であるがスカート状に広がっている。鏃身長は6.6 cmでやや短い。南北朝期頃では同型式の類例は出土品・伝世品を含めて知られない。

鑿形鍬

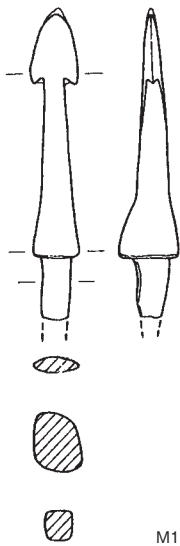


M15



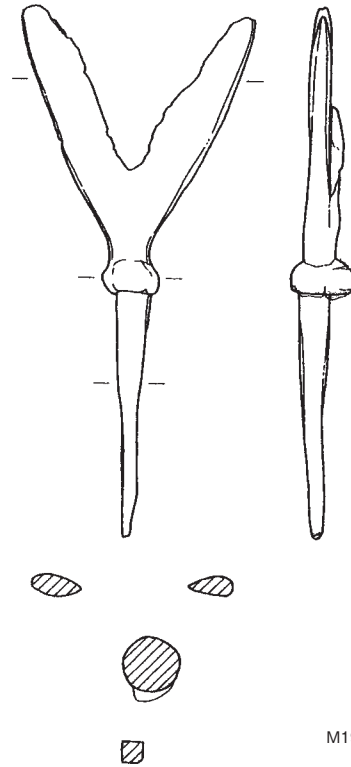
大山祇神社の鑿形族（『集古十種』）

腸扶三角形鍬



M18

雁又鍬



M19



第143図 鉄鍬

第6章 まとめ

雁又鍬 (M19・M20)

鍬の先端が二又に分かれたものである。内側に片刃が付くもの (M19) と、両刃のもの (M20) とがある。関部が丸く膨らんでいる。

③小札 (第 144 図)

小札は 24 点出土している。表面に塗られた漆が残存しているものは M21 のみで、M29～M36 のように複数の種類が束ねられた状態で出土しているものも存在していることから、補修用のストックであったものが多いように思われる。頭部の形状や孔の配列により並札、三目札、碁石頭伊予札、円頭伊予札に分けられる (山岸・宮崎 2006)。

並札 (M35・M36)

M35 は頭部の左肩が斜めに削がれている。孔は 2 列 13 孔である。接合しているためはっきりしないが、両側縁が捻り返されているようである。M35 は接合しているため孔の配列は不明である。長 7.2～6.6 cm、幅 2.9～2.8 cm である。長さから見ると鎌倉後・末期、幅から見ると鎌倉中期以前ものと同様である (山岸・宮崎 2006、金山 2006)。

三目札 (M21・M24・M25・M41)

並札と同様に頭部は左肩が斜めに削がれているが、孔は 3 列 21 孔である。長 6.5 cm、幅 2.9～2.5 cm である。右側縁、下縁に捻り返しが認められる。三目札はサイズの変化が少なく時期を特定することは難しい。

碁石頭伊予札 (M26・M29・M30～M34・M37・M38・M40)

頭部を中央から割り、その左右を丸く作ったものである。孔は 2 列 14 孔である。10 点出土している。長 6.95～6.4 cm、幅 2.8～2.3 cm である。碁石頭伊予札のなかではやや大型の部類に属している。伊予札は南北朝時代以降に普及し、胴丸・腹巻に使用されたものと考えられている。

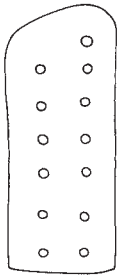
円頭伊予札 (M42～M44)

頭部中央が円く盛り上がるものである。孔は碁石頭伊予札と同様の 2 列 14 孔であるが、緘孔・毛立孔と下緘孔の孔径がほぼ等しい。類例は乏しく、青森県浪岡城跡 (浪岡町教育委員会 1984)、神戸市檀谷城跡 (神戸市教育委員会 2008) で出土しているのみである。檀谷城跡では博列建物跡から腹巻 13 領程度がつぶれた状態で出土している。博列建物跡は 1560 年代に建てられたものと考えられているが、鎧の小札には様々なタイプが混じっており、「仕返し」系のものが含まれていると考えられている。なかには円頭伊予札も使用されているようで、目測するかぎり、頭部の形態、サイズとも非常に類似している。檀谷城跡は距離的に吉田住吉山遺跡にも近く、在地領主の衣笠氏に伝世した可能性が考えられるであろう。

破片 (M22・M23・M27・M28・M39)

頭部を欠く破片で、幅 3.4～2.15 cm のものがある。M22 は幅 3.4 cm で、両側縁、下縁に捻り返しが認められる。幅 3 cm を越えるものは平安時代のもと考えられる。

並札



M36

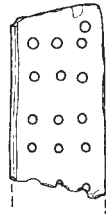
三目札



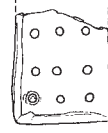
M35



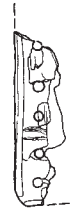
M21



M24

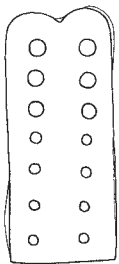


M41

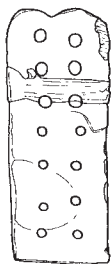


M25

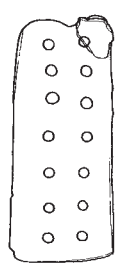
碁石頭伊予札



M26



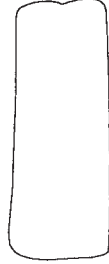
M29



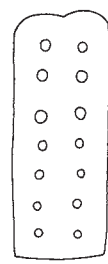
M30



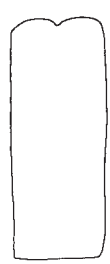
M32



M33

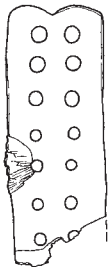


M31

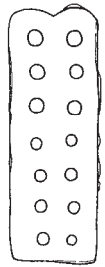


M34

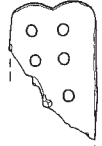
円頭伊予札



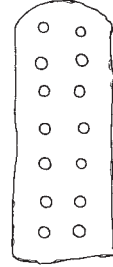
M37



M38



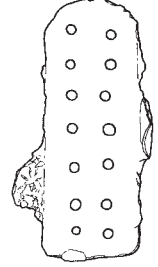
M40



M42

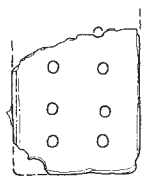


M43

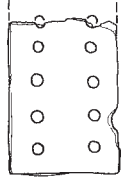


M44

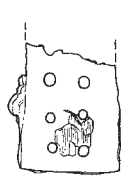
破片



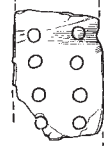
M22



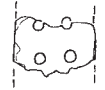
M28



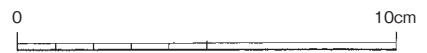
M39



M27



M23



第144図 小札

第6章 まとめ

④銅製飾金具

銅製の金具には甲冑の飾金具と考えられもの（M408・409）、刀装具の可能性のあるもの（M410・M411）である。ここでは枝菊文が透彫りされた飾金具（M408）について検討する（注5）。

形状

平面は横8.6cm、縦4.8cmの楕円形で、縁部の厚さ0.5cm、本体の厚さ0.15cmである。下面から見るとかなり強く弧状に曲がっている。裏面には縁の内側に薄い銅板を嵌め、銅板の中央からは先割れ鉾が突き出ている。鉾は中心の菊花の裏に蟻付けされているのであろう。甲冑の据文金物と考えられるが、同一形状の類例は存在しない。

平面的な形状に近いのは春日大社蔵牡丹金物赤糸威鎧の裾金物である。平面形が楕円形で、シコロ裾部のものは横8~7.8cm、縦4.8~4.63cm、草摺裾・袖裾部のものは横8.9~8.25cm、縦6.1~6.0cmであるようである（山岸1997）。シコロ裾と草摺裾の隅のものは弧状に曲がっている可能性があるが、確認はできていない。同様な金物をもつ櫛引八幡宮蔵赤糸威鎧をみるとそれほどカーブが強いようには思えない。

その他、候補となるのは鍬形台中央部、吹返に付けられた据物金物である（第145図）。豊原北島神社蔵色々威甲冑（南北朝時代）に付けられた枝菊文の据物金物は比較的大型で、鍬形台中央部のものが横5.0cm、縦4.2cm、吹返が縦横5.2cmである（注6）。鹿児島神社蔵紺糸威鎧（南北朝時代）に付けられた枝菊文の据物金物は典型的なタイプで、鍬形台中央部のものが縦横2.7cm、吹返が縦3.7cm、横3.9cmである（注7）。サイズの豊原北島神社例がやや近いが、鍬形台中央部の金物は鍬形台の平坦な面の上に取り付けられていることから彎曲せず、吹返の金物も横幅が狭いことから彎曲していない。

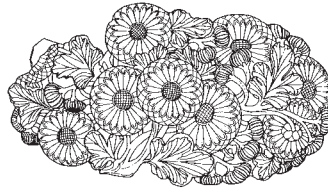
M408の装着部のカーブを宮内堀脇遺跡出土の鍬形台（室町時代）と比較すると非常に似通っていることから（第146図）、兜の眉庇のカーブに一致するものと思われる（兵庫県立考古博物館2009）。眉庇に張り付くように透かし彫りの金物に取り付けられているものに春日大社蔵牡丹金物赤糸威鎧（南北朝時代）や春日大社蔵歌絵金物紫糸妻取威鎧（鎌倉後期）がある。牡丹金物赤糸威鎧では横26cmの金物の中央に、横5.8cm、縦4.85cmの牡丹の花の金物が重ねられている（山岸1997）。歌絵金物紫糸妻取威鎧では鍬形台をもたず透かし彫りの金物と中央の菊重ねの金物のみをもっている。

装着部のカーブからすると吉田住吉山遺跡出土の飾金具の装着箇所は眉庇か吹返が候補に挙げられる。眉庇に付くと考えれば、眉庇に張り付くように付けられた金物もしくは鍬形台の上に取り付けられたか、直接眉庇の上に取り付けられた可能性が考えられる。歌絵金物紫糸妻取威鎧や牡丹金物赤糸威鎧に後続し、豊原北島神社蔵色々威甲冑を経て、鹿児島神社蔵紺糸威鎧に定式化する以前の型式を想定しておきたい。なお、櫛引八幡宮蔵赤糸威鎧のように鍬形台全体が拡大し、枝菊文が浮彫りされるものは、歌絵金物紫糸妻取威鎧や牡丹金物赤糸威鎧などから別に分かれて出てくる型式と考えておきたい。

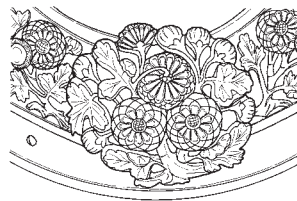
吹返に付いた可能性については、吹返の具体的な形状を知ることができなかったので判断はできていない。

文様

文様は枝菊文で、菊花はいずれも八重菊である。中央に花が3つ配されているが、他の花を含めて配置はランダムである。花は中央の萼の部分をおおく沈線で割り、一番上の花弁は長く、匙状にくぼめている。葉の部分は基本的に葉脈を浮かして表現している。八重菊が甲冑金物に採り入れられるのは歌絵



吉田住吉山遺跡



楕形台中央

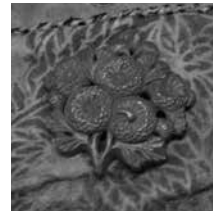


吹返

豊原北島神社蔵色々威甲冑



楕形台中央



吹返

鹿児島宮蔵紺糸威鎧
(写真提供 鹿児島県歴史資料センター黎明館)



櫛引八幡宮蔵赤糸威鎧楕形台

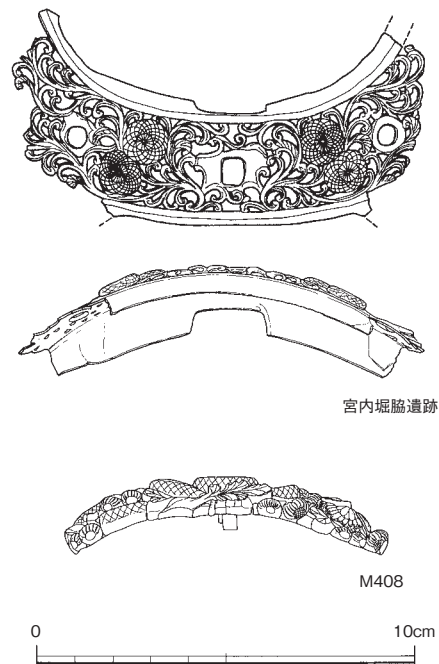
(縮尺 約1/2)

第145図 枝菊文をもつ飾金具

金物紫糸妻取威鎧の鎌倉後期頃で、本例と比較的近いのは櫛引八幡宮蔵赤糸威鎧の枝菊文である。ただし、この鎧については鎌倉末期とする説と南北朝末期とする説に分かれており評価が難しい（京都国立博物館 1987、山岸 1997）。吉田住吉山遺跡出土例が一番上の花卉が長く表現されていることからすると、文様的には古式で鎌倉期に近いものと考えられる。

製作技術

本体、銅板とも地金は蛍光X線分析の結果ほぼ純銅であることが明らかとなった。本体の表面には金が貼られているが、蛍光X線分析では水銀が検出されなかったことから箔押しの可能性が高まった。微量成分のうち銀については本体(0.41~0.22%)・金層(0.70%)・銅板(0.71~0.51%)で検出され、金層・銅板でわずかに強く反応している。地金の銅に含まれるものか、表面に付着したものがわずかに残存したものかはっきりしないが、飾金具の表面や銅板に銀によって装飾を施した可能性が考えられるのではないだろうか。春日大社蔵牡丹金物赤糸威鎧では焼損により現状でははっきりしないが文様を金と銀で塗り分けていたとされ、金具から透ける兜鉢上の地板に鍍銀が施されていたと考えられている。地板に鍍銀を施したものは春日大社蔵歌絵金物紫糸妻取威鎧・竹雀赤糸威鎧などにもみられる(山岸 1997)。据物金物の裏側に銅板をはめ込んだ類例は存在しないが、同様に考えることができるとすれば、銅板の用途を理解することができる。今後、分析箇所を増やして詳細に検討することが必要である。



第146図 装着側のカーブ

小結

このような飾金具の付いた鎧は奉納品として寺社に伝わったものしかなく、実際に戦場において使用されたかどうかはよく分からなかった。今回このようなものが戦陣の場から出土していることから、正中・嘉暦頃の悪党の行装として「引馬・唐櫃・弓箭・兵具ノ類ヒ、金銀ヲチリハメ、鎧・腹巻、テリカ、ヤク計也」と『峰相記』に記述されるように、実際に使用された状況を想起することができる。

(2) 釘

鉄釘は約 430 点出土している。

分類

分類は頭部の形状により分類を行う。

A 類 頭部を平たくタタキつぶすもの。

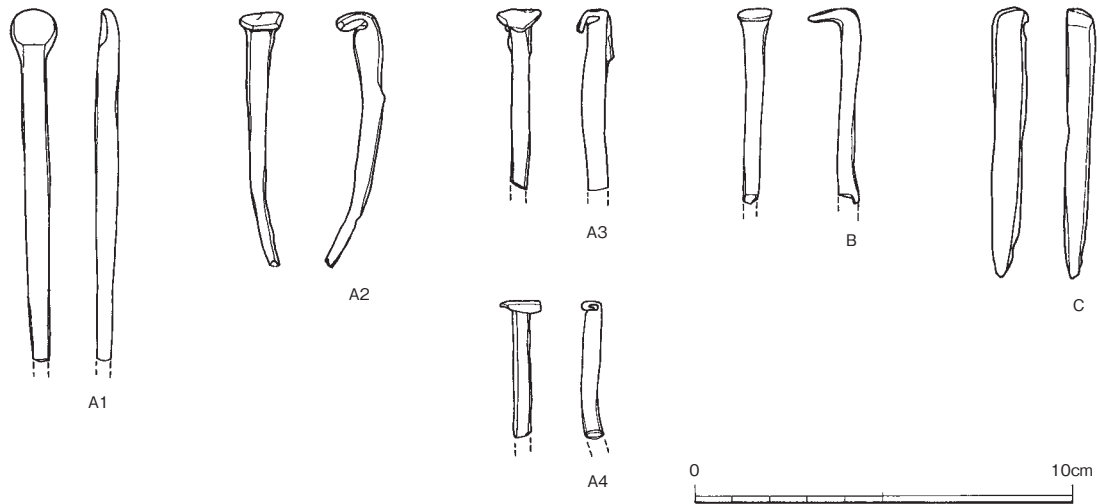
A1 類 平たい部分を折り曲げていないもの。未使用のものか、抜いた時に延びたもの。型式の判明するもののうち 6% を占める。

A2 類 平たい部分を横に折り曲げたもの。型式の判明するもののうち 54% を占める。

A3 類 平たい部分を横に折り曲げ、外に出た部分を下へ折り曲げたもの。型式の判明するもののうち 16% を占める。

A4 類 平たい部分を巻き込むように折り曲げたもの。型式の判明するもののうち 3% を占める。

B 類 頭部をそのタタキつぶさないで、折り曲げるもの。型式の判明するもののうち 10% を占める。



第147図 鉄釘の分類

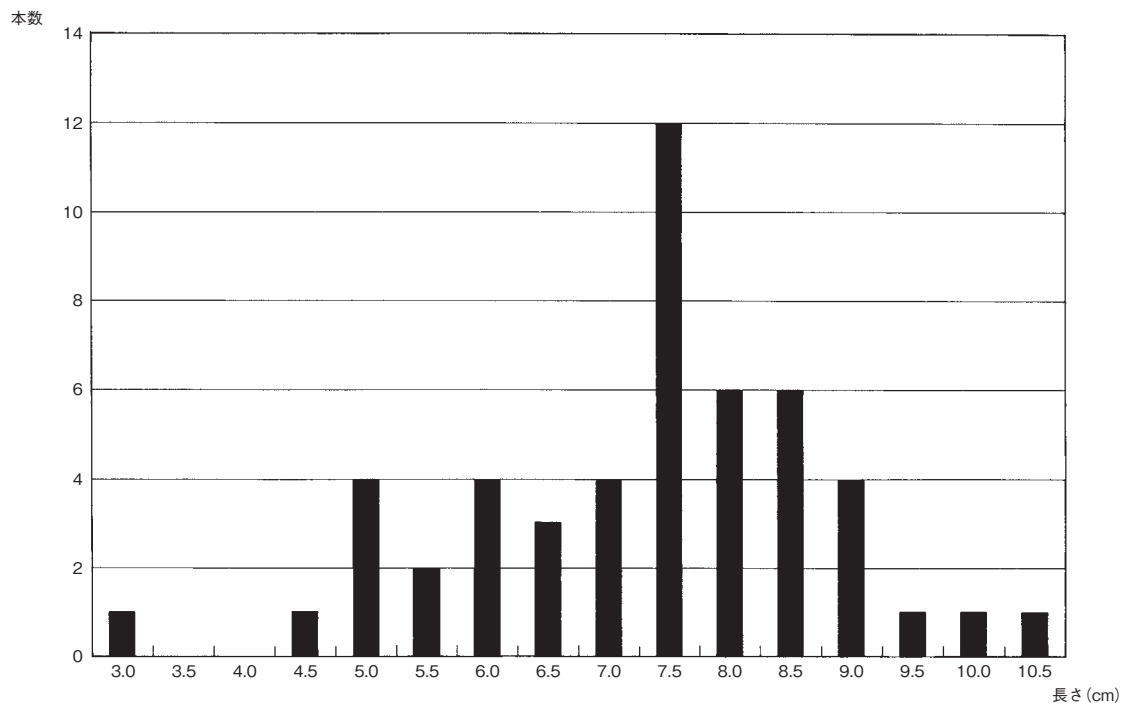
C類 頭部を加工しないもの。型式の判明するもののうち 11%を占める。

法量

長さは完形近いもので、10.5~2.9 cmと幅があり、7.5 cm（2寸半）前後のものが多い（第148図）。幅は15~2.5 mmのものがあり、6~5 mmのものが多い。厚さは9~2 mmのものがあり、5~4 mmのものが多い（第149図）。

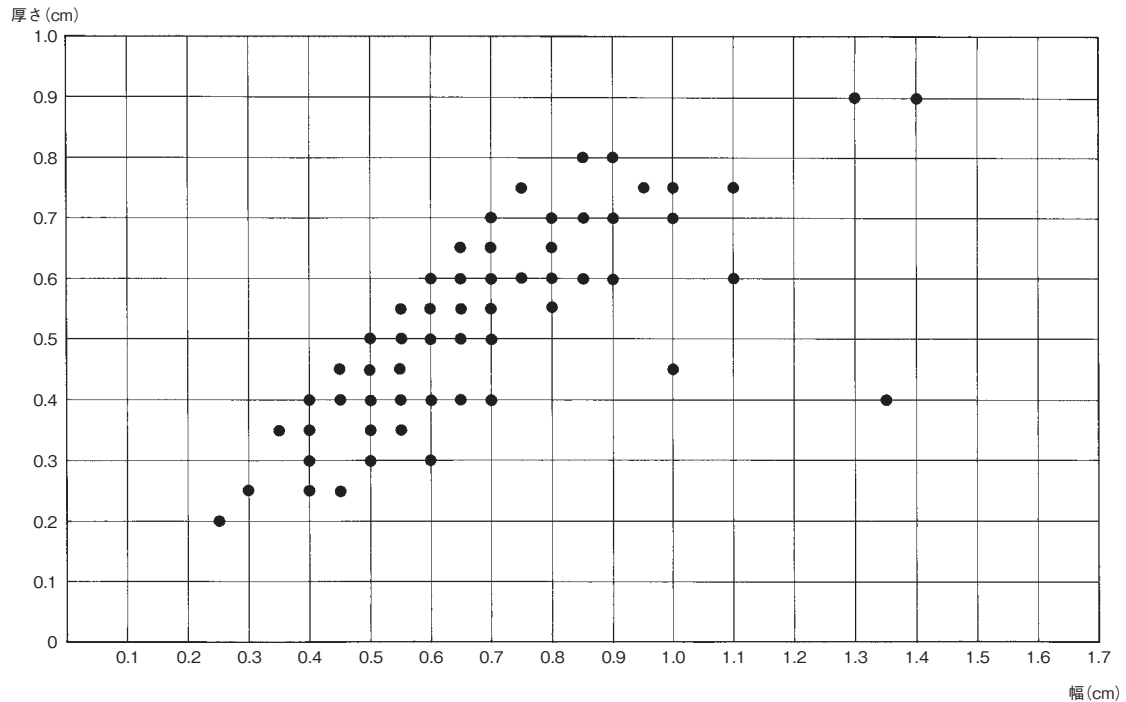
出土状況

帯曲輪5、西斜面以外の全ての地区から出土している（第31表）。主郭からの出土が多く 235点（55.2%）に及ぶ。続くのは土塁1から79点（18.5%）で、金属工房が存在することによる。その他



第148図 釘の長さ

第6章 まとめ



第149図 釘の断面

10 点以上出土しているのは土塁・空堀、堀切、帯曲輪 2、西曲輪 2、谷東の地区である。土器の地区別の出土比率と比較すると土塁・空堀では土器の割合に対して釘の割合が高く、堀切では釘の割合が低い。

個別の遺構で出土数が 20 点を超えるものを挙げると 5 号墳周溝から 74 点、SD01 から 34 点、金属工房 1 から 34 点、6 号墳周溝から 26 点、土塁 1 東側から 20 点出土している。溝状に窪んだ部分に土器などととも埋没していたものが多い。

釘が多いのは、主郭内で鍛冶炉が検出されていることから分かるように鉄器の生産が行われていたことにもよるが、主郭以外での釘の出土もそれなりにあることから、仮設的な構造物や楯などに用いられたことも考えられる。

第31表 釘の出土地区

地区	点数	割合
主郭	235	55.2
土塁1	79	18.5
土塁・空堀	25	5.9
帯曲輪3	6	1.4
帯曲輪2	17	4.0
帯曲輪1	5	1.2
東斜面	1	0.2
堀切	21	4.9
谷東	12	2.8
谷西	6	1.4
西曲輪1	1	0.2
西曲輪2	17	4.0
帯曲輪4	1	0.2
帯曲輪5	0	0.0
西斜面	0	0.0
合計	426	

(3) 銅銭

銅銭は 95 枚出土している。緡銭の接合や腐食により種類の分からないものを除き、種類が判明するのは 15 種 43 点である。

銅銭の種類と年代

江戸時代の寛永通寶 3 枚を除けば、全て宋銭である(第 32 表)。最古銭は 976 年初鑄の北宋銭である太平通寶、最新銭は 1174 年初鑄の南宋銭である淳熙元宝で、皇宋通寶と元豊通寶が多い。ただし、種類が特定できないもののなかにさらに新しい時期のもの

第32表 銅銭の種類

種類	初鑄年	枚数	備考
太平通寶	976	2	
淳化元宝	990	2	
咸平元宝	998	3	鳥銭を含む
景德元宝	1004	1	
祥符元宝	1009	2	
天禧通寶	1017	3	
天聖元宝	1023	1	
皇宋通寶	1038	10	
嘉祐通寶	1056	1	
熙寧元宝	1068	2	
元豊通寶	1078	9	折二銭を含む
元祐通寶	1086	2	
大觀通寶	1107	1	
淳熙元宝	1174	1	
寛永通寶	1636	3	

のが存在すると考えられる。M437 は右側に「元」の字がくることから慶元通寶（1195年初鑄）、景定元寶（1260年初鑄）、咸淳元寶（1265年初鑄）のいずれかと考えられ、上の字の左端がノの字状に見えることから、慶元通寶もしくは咸淳元寶の可能性が高い。また、M490 は背面しか確認できないが、孔の上に「三」の字が認められことから嘉泰通寶（1201年初鑄）以降の南宋銭と考えられる。したがって、最新銭の年代は1201年よりは遡らない。

銅銭の成分

地金の良好な初鑄年976年から1174年に及ぶ宋銭8種類15点について蛍光X線分析を実施した（第5章第11節）。その結果を佐々木稔氏などによって提示された銅・錫・鉛の主要三元素の三角ダイアグラムと比較すると（佐々木・西本2008）、その多くが中国公鑄銭とされるⅠ領域に含まれ、M422の天禧通寶とM420の咸平元寶の成分がほぼ純銅で、国内の模鑄銭とされる領域Ⅲに含まれることが判明した。

島銭

M420は咸平元寶であるが、銭文が独特の書体であることから「島銭」称される一群のものと考えられる。既往のものとは異なり新種と思われる。島銭は14世紀代の南北朝期に埋められた埋蔵銭に比較的多くみられる、日本の民間鑄造銭と評価されているものである（永井2002・2008）。

3. 金属製品生産について

城跡内から鍛冶炉などの金属製品生産に関わる遺構が検出され、鉄滓・鉄素材など鉄器生産に関わる遺物や銅素材・トリベなど銅製品生産に関わる遺物などが出土している（第150図）。

①遺構

金属製品生産に関わる遺構には単独で検出された鍛冶炉と平坦面を造り出して炉などの遺構が検出されている金属工房がある。

鍛冶炉

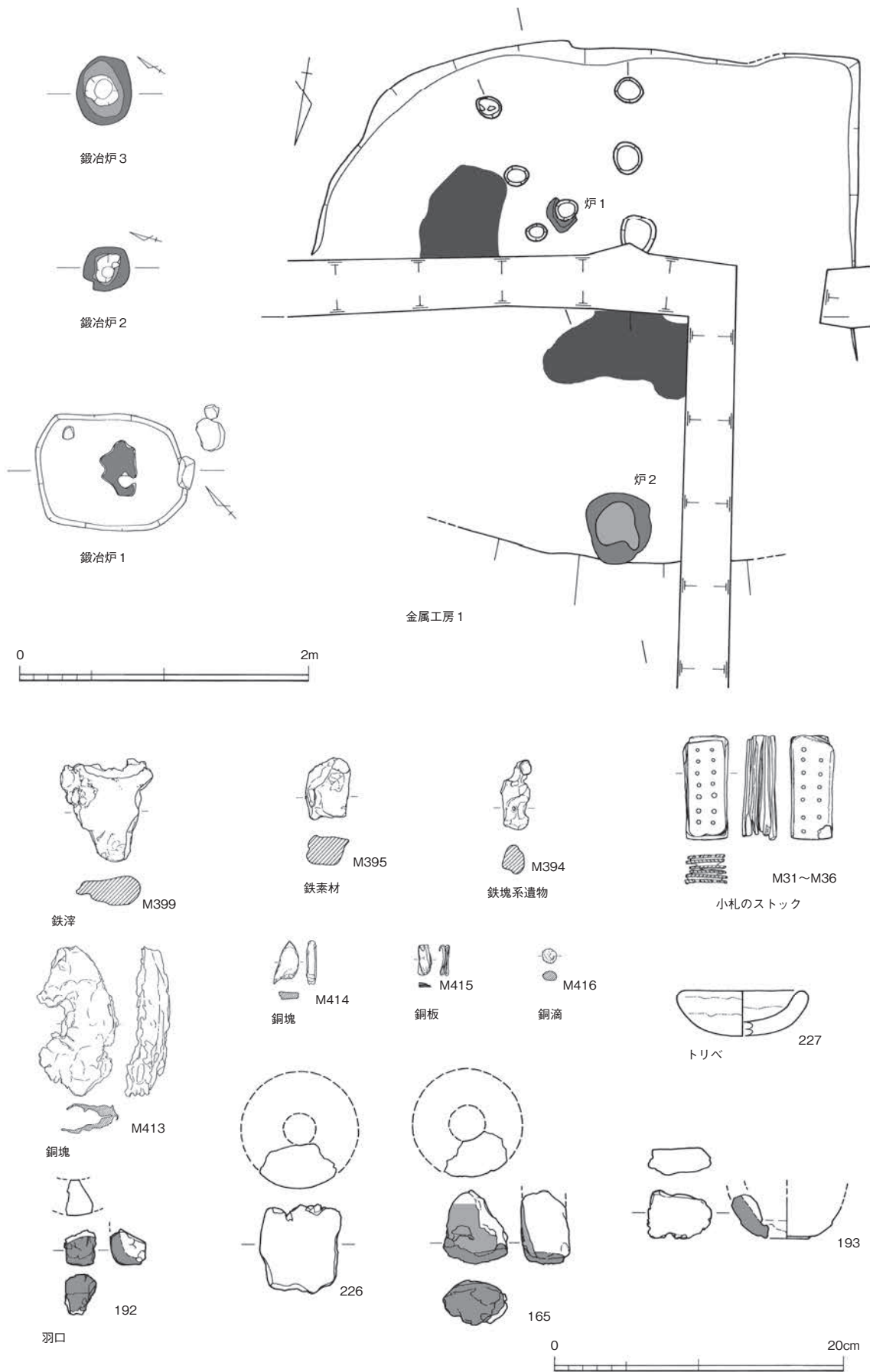
単独で検出された鍛冶炉は主郭の西南部で3基検出されている。鍛冶炉2・3は直径約20cmの椀形に数cm浅くくぼむ土坑で、周囲に貼り付けられた粘土が硬く還元している。炉内からは鉄滓が出土しているが、小片であるにすぎない。鍛冶炉1は浅く掘り下げた土坑の中央に焼土が残存するのみである。焼土及びその周辺から鉄滓、鉄釘、鉄片が出土しているが、鉄滓は小片にすぎない。

金属工房

金属工房は土塁1下層に属し、9号墳の墳丘を削り、北側に盛り出して、平坦面を造り出している。平坦面上では炉2基とピットが検出されている。

平坦面の南半中央には炉1が位置している。直径15cm、深さ4cmの円形土坑で、周囲が赤く酸化して焼けている。土坑の内部には炭と細片化した鉄滓が詰まっており、鉄釘、銅滴、羽口、トリベなどが出土している。鉄滓は金属学的分析により鍛錬鍛冶滓に分類されている。銅滴・トリベなどのように銅製品生産に関連する遺物も含まれているが、炉の形態から考えて鍛冶炉と思われる。

炉1の東西にはピットが3基ずつ南北に並んでいる。これらのピットは深いもので13cmと浅く、埋土には炭が多く含まれていた。炉1との位置関係からして金属生産に関わる遺構と思われるが用途は不明



第150図 金属製品生産関連の遺物

である。

炉2は平坦面北端中央に位置している。南北48cm、東西42cmの範囲が赤く酸化して焼けており、その中央の直径約30cm程度の範囲が青く還元している。削平を受けているのかもしれないが、底部が平坦であることから鑄造用の炉の炉床の可能性が考えられる（神崎2006）。

②遺物

鉄製品生産関連遺物としては鉄塊、鉄滓が、銅製品生産関連遺物としては銅塊、銅板、銅滴、トリベが挙げられ、どちらかは特定できないが鞆の羽口も出土している。

鉄製品生産関連遺物

鉄滓・鉄塊は堀切で鉄滓が1点出土している以外はすべて主郭内で出土していることから、鉄製品の生産は主郭内でのみ行われたと考えられる。

鉄滓は11点図化を行ったうち、7点について金属学的分析を行った（第5章第8節）。いずれも鍛錬鍛冶滓であることが判明した。鉄塊は4点図化を行ったうち、3点について金属学的分析を行った。M394が鉄塊系遺物、M392・M395が鉄素材であることが判明した。遺跡内から大量に出土している釘などが原料として利用されたと可能性も大きいですが、鉄素材が存在していることから単に古鉄を再利用しただけではなく、鉄素材も利用した鍛錬鍛冶による鉄製品の生産が行われていることが明らかとなった。

その他、小札（M29～M36）が束ねられた状態出土している。製作・補修用のストックと考えられるもので、少なくとも甲冑の補修が行われた可能性を示している。

銅製品生産関連遺物

銅塊、銅板、銅滴とトリベが出土している。M413の銅塊以外は金属工房1から出土していることから、銅製品の生産は主として金属工房1で行われた可能性が高い。成分分析の結果では錫・鉛があまり検出されず、鏡や容器などの鑄物よりは金具などの銅細工が行われた可能性が高いものと思われる。

M413の銅塊は右側縁が円弧状を呈し、左側面は気泡が大きく膨らんだかのように窪んでいる。重量は204.02gである。成分分析によると銅が93%で、ほぼ純銅である（第5章第9節）。形態及び銅純度が住友銅吹所跡出土の荒銅・間吹銅1類と似ており、精銅直後の銅素材の可能性もある（大阪市文化財協会1998）。

M414の銅塊はM413とは異なり、整った板状のもので、円形の板状のものを切り取って使用したような形状をしている。

M415は細長い銅板である。使用後の余りを、再利用のために折りたたんだものと考えられる。

M416の銅滴は成分分析の結果、銅が93%で、ほぼ純銅であることが判明した（第5章第11節）

226のトリベは浅い椀形の器形で、口径8.0cm、器高3.2cmである。口縁部内外面は融解し、体部外面上半が還元して灰色を、底部内面は還元してやや紫色を帯びた灰色を呈している。外面の表面には赤色の付着物がついている。融解部の蛍光X線分析の結果によると、銅が多く検出され、鉛は含まれているが微量であることから、純銅質の製品が鑄造されたことが推測される（第5章第11節）。

4. 遺構について

遺構については城跡以前のものと城跡に関するものに分かれる（第151図）。

①城跡以前

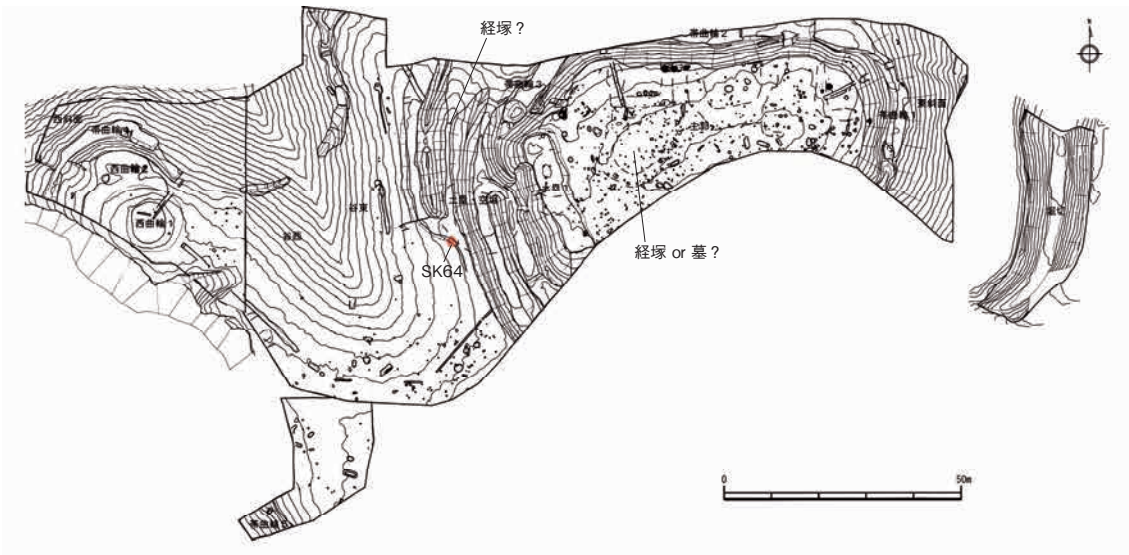
城跡以前の遺構として確実なのは土塁3の下層で検出されたSK64のみである。浅い土坑の上に炭層が広がり、12世紀後半頃の土師器皿が4点出土している。このほか、8号墳の南側で12世紀中葉の須恵器経筒（248）、2号墳の西側で12世紀頃の須恵器鉢（141）・甕（142）が出土していることから古墳の墳丘上にかつて経塚や墓などの遺構が存在した可能性が考えられる。

②城跡の遺構

城跡の概要

主郭を中心に西側には土塁1と4基の土塁（土塁2～5）・4基の空堀（空堀1～4）、主郭の北及び西には帯曲輪が廻らされている。帯曲輪1の東側には巨大な堀切が設けられている。土塁・空堀の西側

城跡以前の遺構



城跡

赤部分はⅡ期に確実に存在した部分



第151図 遺構の変遷

は細い尾根が谷を南から回り込むように延び、谷の斜面部では段状遺構や通路、尾根上では中世のピット・土坑がわずかに検出されている。谷を回り込んで北西方向へ延びる尾根の先端部では西曲輪1、西曲輪2、帯曲輪4と曲輪が3段に渡って設けられ、帯曲輪4は帯曲輪5とひと続きであった可能性がある。調査区外の北側には雛壇状の曲輪が広がっており、その西橋は堅堀で区切られている。

城跡の改変

ただし、城跡の構造については当初から全てがこのような状態ではなく、いくつかの箇所で大規模な改変を受けた痕跡が認められた。

主郭内の遺構についてはSB01、SK46、焼土4でⅡ期後半の土師器鍋Dが出土している以外は、おおむね14世紀中葉前後のものと思われ、明瞭にⅢ期の遺物を伴う遺構は存在しない。

土塁1は上層と下層に分かれることが判明した。主にⅡ期の土器は下層の部分から出土している。

土塁・空堀は空堀内から遺物がほとんど出土していないことから、改変時の新設か堀底の掘り直しが行われた可能性が考えられる。空堀1については土塁1が当初から存在したことは確実であることから、掘り直しが行われたと考えられる。

帯曲輪1～3では当初から帯曲輪であったわけではなく、帯曲輪2の土橋の断面から横堀の外側に土塁が存在したことが判明し、帯曲輪1・2では帯曲輪にした段階で横堀を埋めたと考えられる。帯曲輪3では水溜めの水はけのために横堀を掘り直しながら使用しているようである。また帯曲輪にして以降に土橋及び土堤が造られたと考えられる。Ⅱ期の遺物の多くは横堀の埋土から出土している。

堀切からはⅡ期の土器の良好な個体が多くに出土していることから、掘り直しは行われていないと思われる。

西曲輪2は確実にⅡ期に使用され、西曲輪1も裾部での遺物の出土状況からⅡ期に使用され、その後削平が行われたものと思われる。帯曲輪4・5についてはよく分からない。

以上のように、土塁1、土塁・空堀の改修及び新設と横堀の帯曲輪化が改変のおもなものである。北部の雛壇状の曲輪を含めて表面的に見える構造は改変後の可能性が高い。

改変の時期については決め手がなく、はっきりしない。土塁1については上限が土塁1下層の集石9・集石13から土師器鍋Dが出土していることから15世紀前半頃であり、下限についてはⅢ期の出土遺物から16世紀後半までと考え、三木城攻めの時期が含まれる。ただし、Ⅲ期の遺物は主郭のSK23の上層(18)、帯曲輪3の横堀(253)、西曲輪2の平坦部(385)で1点ずつ出土しているのみである。

城跡の特徴

主郭をあまり削平せず、帯曲輪を配するという点は一般的に言われている南北朝期の城の特徴と一致している(角田1990)。南北朝期の城跡については調査例が多くはないが、岡山県苫田郡奥津町で複数の城跡が調査されている(岡山県古代吉備文化財センター2003)。なかでも城峪城跡が構造的によく似ている。曲輪1(主郭)内はあまり削平されず、明瞭な遺構をもたない。周囲に横堀と土塁が廻り、尾根部を多重の堀切で切断している。段状遺構状の遺構(曲輪4・5)をもち、接続する尾根に小規模な曲輪を造っている。遺物も14世紀代で、量的には吉田住吉山遺跡ほどには出土していないが、土師器、陶磁器(備前焼・勝間田焼・白磁・青磁)、鉄器、石製品などが構成は似ているといえるだろう。特に鉄釘が多く見られる点が注目される。

第6章 まとめ

小都隆による西日本中世城館跡の分類によるとこのような遺跡は、低丘陵に位置し、生活感のない臨時施設である砦に分類されている（小都隆 2005）。ただし、明瞭な居住用の建物が存在しないという点では生活感のない臨時施設であるが、遺物は非常に多い点でややあてはまらない。

5. 中世の志染と吉田住吉山遺跡

①志染庄と志染保

古代においては美濃郡のうち志染郷と呼ばれ、さらに古くは縮見屯倉が置かれた。その後、中世にいたるまで記録にはみえない。中世においては志染庄と志染保とが記録上に見られる。両者の関係はよくわからないが、おそらく異なる領地であったと考えられる。

志染庄

志染庄は承元2年（1208）に藤原定家の弟である三位兵部卿藤原成家の領地として見える。その後、14世紀初頭には龜山天皇から昭慶門院に伝わり、14世紀中葉には春日社と大覚寺の間で、領家職をめぐって係争があったことが分かる。この係争ののち志染庄についての記録は途絶えている。

志染保と垂水繁昌

国衙領の志染保については永仁2年（1294）には垂水繁昌という人物が志染保雑掌であったことがわかる。志染保はその後貞和元年（1345）に創建された天龍寺の領地となる。

さて、この垂水繁昌という人物は東大寺領大部庄の雑掌を解任された直後、近隣の在地勢力（荘官）などと語らって大部庄に乱入した「悪党」として有名な人物である（高尾 1975）。繁昌は大村の名字で呼ばれることもあり、三木市大村周りにその根拠地があったことも推定されている。その後、繁昌は追捕されたようであるが（東大寺文書）、観応元年（1350）には一族と思われる垂水次郎兵衛が久我家領這田荘での狼藉に与同したことが見え、その勢力は15世紀初め頃までは依然として志染保にとどまっていたようである（天龍寺文書）。

時期的に考えると垂水氏は地元の有力武士であり、吉田住吉山遺跡の城跡の造営や改修に当たった可能性が考えられる。

②丹生山攻めと志染

鎌倉幕府の滅亡と南北朝時代の開始

鎌倉時代の終わり頃には鎌倉幕府の体制はゆらぎ、垂水繁昌のような幕府や諸権門に対して不満をもつ「悪党」の活動が活発にみられる。性海寺福智院の光王九郎が硯を入手した嘉暦2年（1327）はこのような時期である。そして、元弘元年（1331）の元弘の乱、元弘2年（1332）後醍醐天皇隠岐配流を経て、元弘3年5月の足利尊氏等の六波羅攻略、新田義貞の鎌倉攻略により鎌倉幕府は滅亡する。

鎌倉幕府の滅亡により成立した建武政権は安定せず、建武2年（1335）に起こった中先代の乱を契機に足利尊氏は政権から離反した。北条時行の討伐を行い、建武3年（1336）1月には反転して入京するが、北畠顕家の到着により、九州へ敗走することとなった。同年4月に尊氏は博多を出発し、5月の湊川の戦いを経て、6月に入京を果たした。10月には比叡山に籠もる後醍醐天皇が降伏することによって大勢は決することになった。

建武3年（1336）12月に後醍醐天皇が京都を脱出し、吉野で南朝が成立すると各地で南朝方の勢力が

第33表 中世の志染(1)

年代	西暦	事項	関連事項	出典
承元2年10月9日	1208	三位兵部卿成家領志深荘		明月記
天福元年1月	1233	庄民30名余が日吉神人と称す		明月記
正応5年6月29日	1292	大部庄地頭代、夜討ちにより殺害、地頭政所焼き 払われる		小野市史大部259
正応5年6月30日	1292	大部庄預所政所・近辺の在家焼失		小野市史大部259
正応5年	1292	大部庄地頭代左衛門某、雑掌石河玄観・雑掌代宗 円らの非法を訴える		小野市史大部262
永仁元年	1293	東大寺衆徒、大部庄地頭の非法を訴える 東大寺、大部庄地頭・地頭代の乱暴を主張 大部庄地頭代、雑掌(宗円)の非法を主張 大部庄雑掌讃岐公・河内楠入道・宗円坊等非法を 行う		小野市史大部266 小野市史大部261 小野市史大部262・263 小野市史大部268・269
永仁2年10月28日	1294	御使神人、大部庄荘家に到着		小野市史大部273
永仁2年10月29日 ～11月3日	1294	志染保雑掌垂水繁昌、大部庄へ乱入		小野市史大部268・269・273
永仁3年正月	1294	大部庄百姓等、志染保雑掌垂水繁昌の大部庄乱入 を寺家に訴える		小野市史大部268・269
永仁3年2月	1294	志染保雑掌垂水繁昌の大部庄乱入を訴える		小野市史大部272
永仁3年7月8日	1295	六波羅探題、久留美荘地頭に参洛を命じる		小野市史大部277
永仁3年	1295	東大寺、近隣六カ郷地頭代桑原左衛門尉の代官ら を訴える		小野市史大部278
永仁6年6月	1298	〔大村左衛門尉繁昌追捕之刻〕		小野市史大部286
嘉元3年7月26日	1305	志深庄の負担5000疋(50貫)		鎌倉遺文22288
嘉元4年6月12日	1306	志深庄は蓮華心院領(昭慶門院領)		鎌倉遺文22661
嘉暦2年3月19日	1327	吉田住吉山遺跡硯銘		
元弘元年	1331		元弘の乱	
元弘2年	1332		後醍醐天皇隠岐配流	
元弘3年5月	1333		足利尊氏等六波羅攻略、 新田義貞鎌倉攻略	
元弘3年6月	1333		後醍醐天皇入京	
建武2年7月	1335		中先代の乱	
建武2年7月	1335		足利尊氏北条時行を討伐	
建武3年1月	1336		足利尊氏入京	
建武3年2月	1336		足利尊氏九州に走る	
建武3年4月	1336		足利尊氏博多を出発、東 上	
建武3年5月	1336		湊川の戦い	
建武3年6月	1336		足利尊氏入京	
建武3年9月5日	1336	島津忠兼・下揖保忠政、下端城を攻め、次いで押 部・志深見で合戦する		県史料編中世9 越前島津 家文書8・9
建武3年10月20日	1336	島津忠兼・下揖保忠政、丹生寺合戦に参加		県史料編中世9 越前島津 家文書8・9
建武4年8月	1337	島津忠兼、丹生寺攻めに舎弟十郎忠範を遣わす		県史料編中世9 越前島津 家文書11
建武5年4月	1338	島津忠兼、丹生寺凶徒と三草山で合戦		県史料編中世9 越前島津 家文書14
建武5年閏7月27日	1338	島津忠兼、丹生寺凶徒と加爾坂で合戦		県史料編中世9 越前島津 家文書15
暦応2年7月13日	1339	島津忠兼、志染軍陣へ参陣		県史料編中世9 越前島津 家文書19
暦応2年8月1日	1339	大部庄公文性阿代官古世弥次郎助参陣		小野市史大部396
暦応2年8月4日	1339	島津忠兼、男神山へ向かう		県史料編中世9 越前島津 家文書19
暦応2年8月13日	1339	島津忠兼、押部神沢城へ向かう		県史料編中世9 越前島津 家文書19
暦応2年8月16日	1339		後醍醐天皇没	
暦応2年8月20日	1339	島津忠兼、志武礼陣にて合戦		県史料編中世9 越前島津 家文書19
暦応2年8月20日	1339	性阿代官古世弥次郎助、僧堯賢ら山田城山城を攻 める		小野市史大部397・398
暦応2年8月29日	1339	赤松円心、淡河・岩峰・三田城を破却する		県史料編中世9 越前島津 家文書19
暦応2年9月1日	1339	島津忠兼、櫛谷城にて合戦		県史料編中世9 越前島津 家文書19
暦応2年10月9日	1339	島津忠兼、山田軍陣に逗留		県史料編中世9 越前島津 家文書19
暦応2年10月	1339		亀山殿に天龍寺の造営を 決定	

第34表 中世の志染(2)

年代	西暦	事項	関連事項	出典
暦応2年11月	1339	島津忠兼・丹生寺合戦に参加		県史史料編中世9 越前島津家文書20 県史史料編中世2
暦応3年2月17日	1340	広峰長種・内藤孫七・後藤基景等山田庄城山城・柏尾谷御陣にて警固		県史史料編中世2
暦応3年3月26日	1340	内藤孫七等鼓筒で合戦		県史史料編中世2
暦応3年4月9日	1340	内藤孫七等谷上で合戦		県史史料編中世2
暦応3年6月5日	1340	広峰長種等多田蔵人城、岸城、迫城、鳥渡城、石桂城、同上城、諏訪峯城等を攻める		県史史料編中世2
暦応3年6月5日	1340	後藤基景等吉川八郎左衛門尉城を攻め落とす		
暦応3年6月5日	1340	大部庄預所馬太郎実長山田城へ参陣		小野市史大部401
暦応3年6月5日	1340	古世弥次郎助山田から柏尾谷へ向かう		小野市史大部405
暦応3年6月7日	1340	大部庄預所馬太郎実長柏尾谷へ向かう		小野市史大部403
暦応3年7月2日	1340	広峰長種等迫城を攻める		県史史料編中世2
暦応3年7月2日	1340	後藤基景等石桂城を攻め落とす		県史史料編中世2
暦応3年7月2日	1340	古世弥次郎助柏尾谷にて合戦する		小野市史大部407
暦応3年	1340		天龍寺造営開始 天龍寺落慶法要	
貞和元年	1345			
観応元年4月	1350	垂水次郎兵衛、久我家領這田荘での狼藉に与同		
文和4年10月3日	1355	春日社領志深庄雑掌源尊の申状に対し、沙汰を与える		県史中世7 興福寺文書(大乘院)5
文和4年10月8日	1355	春日社領志深庄雑掌源尊の申状に対し、沙汰を与える		県史中世7 興福寺文書(大乘院)5
文和4年11月8日	1355	春日社領志深庄雑掌源尊の申状に対し、沙汰を与える		県史中世7 興福寺文書(大乘院)5
文和4年11月13日	1355	春日社領志深庄雑掌源尊の申状に対し、沙汰を与える		県史中世7 興福寺文書(大乘院)5
延文3年	1358	志深庄領家職は大覚寺		
延文4年11月20日	1359	春日社領志深庄領家職について雑掌道全の申状に対し、沙汰を与える		県史中世7 興福寺文書(大乘院)7
延文5年卯月21日	1360	春日社領志深庄領家職について雑掌道全の申状に対し、沙汰を与える		県史中世7 興福寺文書(大乘院)7
応安6年12月	1373	天龍寺領志染保への守護使入部を差し止め		県史中世6 東寺文書(その他)20
応安6年12月	1373	天龍寺領志染保への守護使入部を差し止め		県史中世6 東寺文書(その他)21
至徳4年閏5月21日	1387	志染保は銭165貫268文の負担		県史中世7 天龍寺文書25
応永20年10月27日	1413	志染保大村一族跡を寺家雑掌に付す		県史中世7 天龍寺文書30
応永27年4月19日	1420	天龍寺領志染保の段銭以下の負役の免除を守護に命ずる		県史中世7 天龍寺文書31
応永29年10月9日	1422	志染保大村一族跡を寺家雑掌に付すことを守護代に命ず		県史中世7 天龍寺文書35
応永29年10月26日	1422	志染保大村一族跡を寺家雑掌に付すことを守護に命ず		県史中世7 天龍寺文書36
応永29年10月27日	1422	志染保大村一族跡を寺家雑掌に付すことを命ず		県史中世7 天龍寺文書37
文安4年2月24日	1447	天龍寺領志染保の段銭以下の負役の免除を守護に命ずる		県史中世7 天龍寺文書42
長享2年12月5日	1488	志深保四か名が八条遍照心院の如法仏灯油料を負担		蔭涼軒日録
延徳2年	1490	志染保福井左方巻分は守護赤松政則により押領		伺事記録
延徳2年	1490	志深保四か名は遍照心院内本覚寺分となる		蔭涼軒日録
延徳3年	1491	志深保四か名の年貢は天龍寺が遍照心院に納める		蔭涼軒日録

盛り返すこととなった。このあたりの状況は『太平記』諸国宮方蜂起事の条によく描かれている。そのなかに「金谷治部大輔経氏、播磨ノ東條ヨリ打出、吉河・高田ガ勢ヲ付ケテ、丹生ノ山陰ニ城郭ヲ構へ、山陰ノ中道ヲ差塞グ。」とあり、新田氏配下の金谷経氏が丹生山を拠点に挙兵したことが分かる(永島1975、市澤2010)。当時、丹生山上には丹生寺という山岳寺院が存在した。

丹生山攻めの推移

この丹生山を拠点とする南朝方に対する赤松円心を主将とした北朝方の攻撃の状況についても諸家に残る軍忠状などにより比較的詳しくその内容を知ることができる(第33、34表)。その前半の状況は特に越前島津家文書に見える島津忠兼の動向を追うとよく分かる。島津忠兼は下揖保庄(たつの市)に所領をもつ武士と考えられている(水藤1989)。

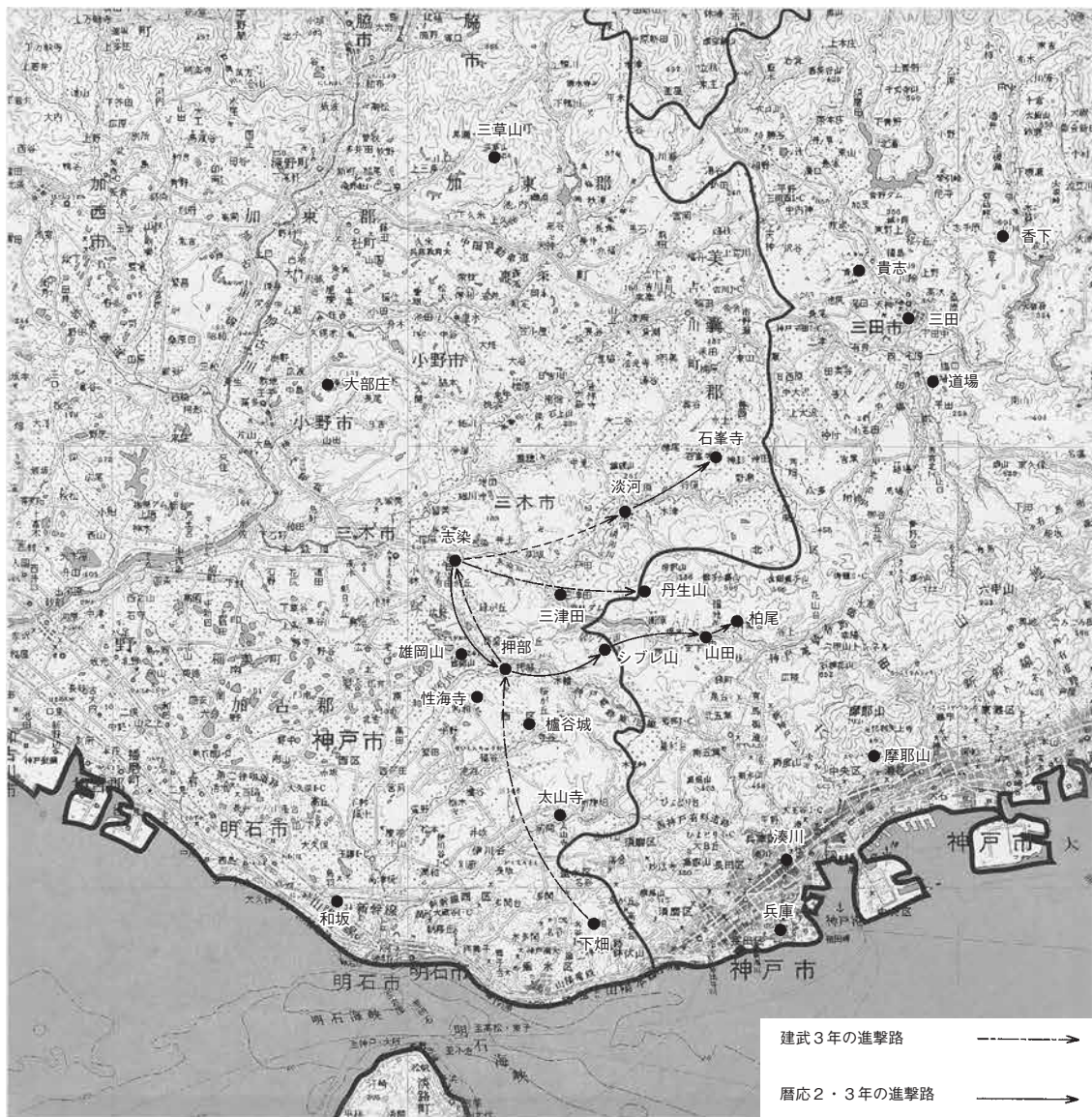
建武3年(1336)9月に島津忠兼とその同族と思われる下揖保忠政は下端城攻めに加わり、次いで押

部（神戸市西区）・志深見（志染）で合戦に加わっている（第152図）。その後、島津忠兼は10月には丹生寺を攻め、翌年8月にも丹生寺を攻めているが、結局攻め落とせなかったようである。建武5年（1338）8月には三草山（加東市）、閏7月には加爾坂（明石市）へと戦線が広がり、転戦をしている。

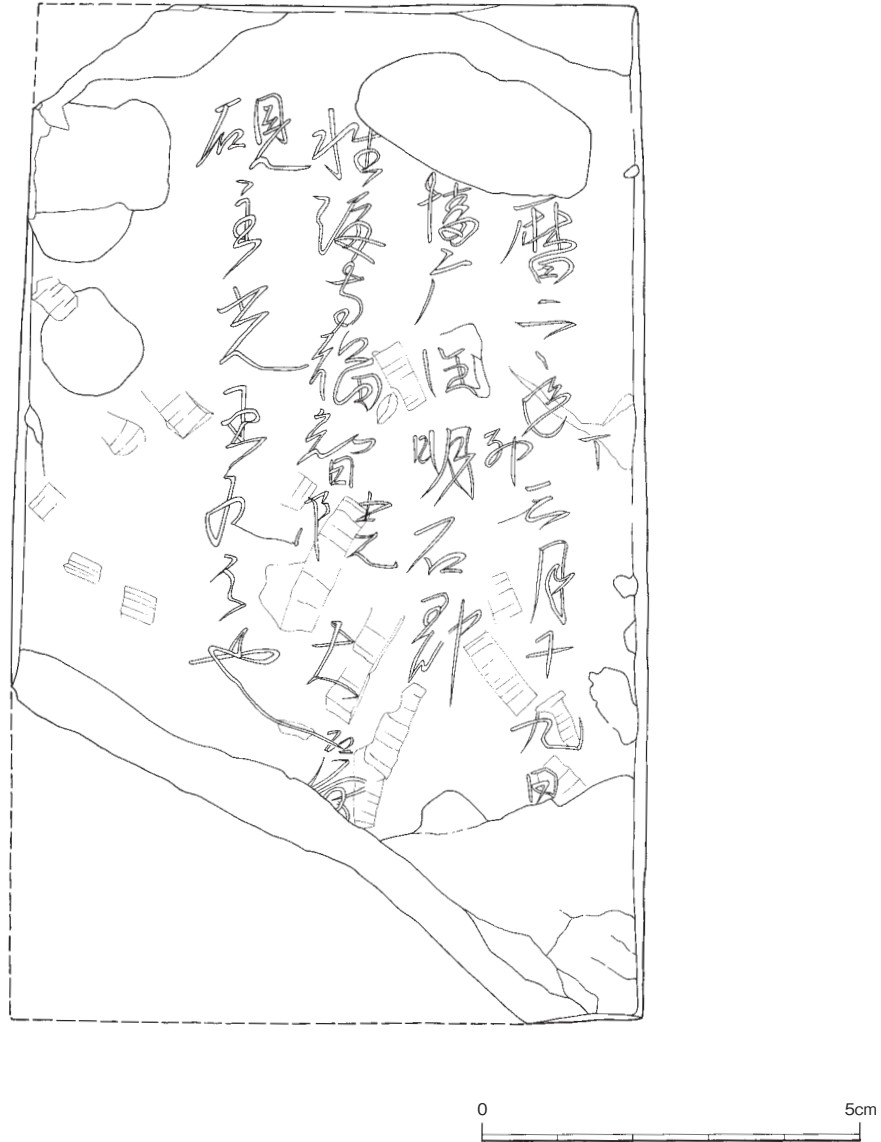
暦応2年（1339）7月13日には「志染軍陣」へ参陣し、丹生山を取り囲む地域に対する一連の攻撃がなされることになる。8月には男神山、押部神沢城、志武礼陣と軍を進め、丹生山近傍と思われる山田城山城を攻めるまでに至る。丹生山と対峙しつつ、さらに東側の淡河・岩峰・三田城を破却し、9月には西側でも一部反抗勢力が残る樋谷城でも合戦が行われた。

10月以降は「山田軍陣」に逗留しながら、丹生山攻めが行われたようである。しかしながら、丹生寺本体が落ちたかどうかはよく分からず、島津忠兼の動向もこれを最後に分からなくなる。

その後の戦局は広峰長種・内藤孫七・後藤基景などの西播磨・東播磨の武士による軍忠状によって知ることができる。おそらく、丹生寺本体の攻略は膠着状態で、山田城山城に陣を置きながら、暦応3年（1340）2月にはさらに東側の柏尾谷に陣を構えている。6月には多田蔵人城・岸城・迫城・鳥渡城・石桂城・同山城・諏訪峯城・吉川八郎左衛門尉城などに攻勢をかけ、7月2日に迫城・石桂城を攻め落



第152図 丹生山攻め関連地図



第153図 石硯の刻銘

としている。

これ以降の動向を示す史料はなく、建武3年（1336）から足かけ5年にわたる攻防戦は南朝方の退転という形で収束したと思われる。

丹生山攻めの意義

建武3年（1336）より暦応3年（1340）にわたる丹生山攻めには東播磨（内藤孫七・後藤基景など）・西播磨（島津忠兼・広峰長種など）の武士が動員された。寺院勢力も無関係ではいられず東大寺領大部庄の荘官である古世弥次郎助（公文尼性阿の代官）・僧堯賢・馬太郎実長なども徴発されている。また、性海寺は戦端の開始する建武3年（1336）9月5日に足利尊氏より禁制文書（性海寺文書）を受けており、北朝方に加わったものと見られ、硯銘（第153図）に見られる性海寺福智院の光王九郎についても、この戦いに加わった可能性が高いであろう。残念ながら地元の有力者と目される垂水氏の動向は分からないが、15世紀初め頃までは依然として志染保にとどまっていたことを考えるとやはり北朝方に加わっていたであろう。

建武3年(1336)より暦応3年(1340)にわたる丹生山攻めは当時方々で起こった局地戦のひとつにすぎないが、このような大規模な動員を行った長期戦であることから後の播磨・摂津地域の歴史を考える上で非常に重要な戦いであったと考えられる。

「志染軍陣」と吉田住吉山遺跡

建武3年(1336)時の丹生山攻撃時には志染での合戦を経て、丹生山に向い、暦応2年(1339)時の丹生山攻撃時には「志染軍陣」が置かれ、ここから丹生山包囲戦が開始されている。このように志染の地が丹生山の西側の正面に位置し、「道ヲ差塞グ」ことができる重要なポイントであったことがわかる。戦線が東へ移動するに従って、「山田軍陣」・「柏尾谷御陣」などが置かれ、「志染軍陣」が後方に位置することになるが、西側の要の位置である点は動かないことから何らかの利用がなされたものと思われる。



第154図 主郭より丹生山を望む

吉田住吉山遺跡は丹生山の西側正面に位置する(第154図)、当時としては大型の砦的な性格をもつ城跡である。出土土器からみると14世紀中葉をピークにしており、長期にわたる丹生山攻めと無関係とは考えられず、文献史料に見える「志染軍陣」である可能性が極めて高いものと思われる。

吉田住吉山遺跡では短刀、鉄鎌、小札・飾金具などの甲冑の部品といった武器・武具が多く出土している。このことは戦闘に関係のあることを示しているのであるが、鉄鎌の出土量が鉄釘の出土量に対してあまりにも少なく、太刀も欠片でさえ出土していないことから考えれば、この場所で直接戦闘が行われたことは考えにくい。鉄製品や銅製品の製作にあたった工房が見つまっていることや束ねられた小札が見つまっていることから武器の製作や補修が行われたことが伺え、兵站基地的な性格が想定できる。

城跡内からは大量の土師器皿が出土している点も通常の城跡とはやや異なっている。主郭内部にはこれといった建物もなく、居館的な要素はみられない。暦応3年7月の「内藤孫七軍忠状」に記されるような戦線の膠着による軍陣での「数月宿直」といった、長期間の駐屯が行われたと考えたほうがよいように思われる。

このように吉田住吉山遺跡が示すやや特殊な様相は「軍陣」として利用されたと考えるとよく理解することができ、その内容からは南北朝期の戦闘の状況を如実に知ることができる。

注1 明石市教育委員会稲原昭嘉氏のご教示による。

注2 香川県埋蔵文化財センター佐藤竜馬氏のご教示による。

注3 刀類については東京国立博物館酒井元樹氏のご教示を得た。

注4 鉄鎌についてはとちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター津野仁氏のご教示を得た。

注5 銅製飾金具については京都国立博物館久保智康氏、東京国立博物館酒井元樹氏のご教示を得た。

注6 豊原北島神社蔵色々威甲冑については岡山県立博物館佐藤寛介氏のご教示を得た。

注7 鹿児島神宮蔵紺糸威鎧については鹿児島県歴史資料センター黎明館東和幸氏のご教示を得た。

第6章 まとめ

参考文献

- 愛知県陶磁資料館・五島美術館 1988年 『日本陶磁絵巻 やきものに刻まれた絵画』
- 明石市教育委員会 2003年 『平成13年度明石市埋蔵文化財年報』
- 五十川 伸矢 1992年 「古代・中世の鑄鉄鑄物」『国立歴史民俗博物館研究報告』46号
- 市澤哲 2010年 「鎌倉幕府の滅亡・南北朝内乱期の神戸」『新修神戸市史』歴史編Ⅱ古代・中世
- 内川隆志 2001年 「暦應五年の紀年銘を有する古備前大甕について」『國學院大學考古学資料館紀要』第17輯
- 大阪市文化財協会 1998年 『住友銅吹所跡発掘調査報告』
- 小笠原信夫 1994年 『日本の美術』第332号
- 岡田賢治 2002年 「腰刀の時代ー刀剣からみた中世社会ー」『東海大学考古学教室開設20周年記念論文集 日々の考古学』
- 岡山県古代吉備文化財センター 2003年 『河内構遺跡 河内城跡 河内遺跡 ナル林遺跡 久田上原城跡 北条高下遺跡 峪畑遺跡 岡遺跡 比丘尼ヶ城跡 城峪城跡 札ノ尾遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告170
- 荻野繁春 1993年 「中世日本における貯蔵容器の生産」『考古学雑誌』第78巻第3号
- 小都隆 2005年 『中世城館跡の考古学的研究』
- 角田誠 1990年 「近畿地方における南北朝時代の山城」『中世城郭研究論集』
- 加東郡教育委員会 1990年 『山国・源ヶ坂遺跡』
- 金山順雄 2006年 『甲冑小札研究ノート』
- 神崎勝 2006年 『冶金考古学概説』
- 北野隆亮 2005年 「長寿寺境内出土の備前焼大甕」『日置川町史』第1巻中世編
- 木戸雅寿 1995年 「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』
- 京都国立博物館 1987年 『日本の甲冑』
- 神戸市教育委員会 2007年 『平成16年度神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会 2008年 『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』
- 国立歴史民俗博物館 1989年 『中世の武家文書』
- 小森俊寛・上村憲章 1996年 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第3号
- 佐々木稔・西本右子 2008年 「公鑄銭・模鑄銭の材料組成と理工学的分類」『出土銭貨研究』第2号
- 佐野美術館 2009年 『短刀の美ー鉄の煌き』
- 「重要文化財」編纂委員会 1982年 『解説版新指定重要文化財』6工芸品Ⅲ
- 水藤真 1989年 「越前島津氏の系図と文書」『中世の武家文書』
- 高尾一彦 1975年 「悪党の跳梁」『兵庫県史』第2巻
- 大宰府市教育委員会 2000年 『大宰府条坊跡XVー陶磁器分類編ー』
- 立石聖志 2009年 「奈良・京都における瓦質土器出現の様相」『中近世土器の基礎研究』22
- 津野仁 1990年 「古代・中世の鉄鏃」『物質文化』(54)
- 永井久美男 1996年 『日本出土銭総覧1996年版』
- 永井久美男 2002年 『新版中世出土銭の分類図版』

- 永井久美男 2008年 「「島銭」による埋蔵実年代の推定」『出土銭貨研究』第2号
- 永島福太郎 1975年 「南朝と北朝」『兵庫県史』第2巻
- 浪岡町教育委員会 1984年 『浪岡城跡VI』
- 植崎彰一 1988年 「中世陶器にみる刻画文の系譜とその展開」『日本陶磁絵巻 やきものに刻まれた絵画』
- 西口圭介 2000年 「まとめ」『三田城跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第194冊
- 乗岡実 2005年 「備前」『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
- 長谷川眞 2005年 「丹波」『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
- 長谷川眞 2007年 「播磨における中世土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研究』21
- 阪神文化財調査会 1999年 『東畑・南浦遺跡発掘調査報告書』
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998年 『神出窯跡群』兵庫県文化財調査報告書第171冊
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2004年 『兵庫津遺跡II』兵庫県文化財調査報告書第270冊
- 兵庫県立考古博物館 2009年 『宮内堀脇遺跡I』兵庫県文化財調査報告書第365冊
- 廣井雄一 2009年 「腰刀」『短刀の美—鉄の煌き』
- 藤澤良祐 2008年 『中世瀬戸窯の研究』
- 松平定信 1908年 『集古十種』4
- 水澤幸一 2009年 「瓦器の相貌」『中近世土器の基礎研究』22
- 妙見山麓遺跡調査会 1989年 『神出1986』
- 妙見山麓遺跡調査会 2006年 『神出IV』
- 三好孝一 2001年 「呑口形式から合口形式へ」『考古学論集』第5集
- 森内秀造 1992年 「経筒の形態からみた兵庫県の経塚」『兵庫の経塚』博物館普及資料第10集
- 森内秀造 1996年 「二塚古墳経塚」『加古川市史』第4巻
- 山岸素夫 1991年 『日本甲冑論集』
- 山岸素夫 1997年 『増補日本甲冑の実証的研究』
- 山岸素夫・宮崎眞澄 2006年 『日本甲冑の基礎知識』
- 森田勉・横田賢次朗 1978年 「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
- 渡邊妙子 2009年 「短刀の魅力」『短刀の美—鉄の煌き』

第4節 総括

本書は、吉田住吉山遺跡・吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・高男寺本丸遺跡の4遺跡に関する調査成果の報告である。高男寺本丸遺跡を除く3遺跡（吉田住吉山遺跡群）については、平面的に重複するものである。これらの遺跡の調査成果については、内容が多岐にわたるものである。そこで以下、各遺跡の概略を記し、本書のまとめとしたい。

1. 吉田住吉山遺跡

縄文時代・弥生時代・南北朝時代の遺構・遺物からなる。このなかで、中心となるのは、南北朝時代に遺構・遺物である。遺構は城跡に関するもので、主郭・帯曲輪・横堀・堀切・土塁・空堀などから構成されている。特に、主郭と堀切から多くの遺物が出土している。多くの土師器皿・鉄製品等が代表的なものであるが、刻銘のある石硯や飾金具が特に注目されるものである。遺構の特異から大型の砦的な性格をもつ城跡と考えられ、この石硯の刻銘から、丹生山攻めに関連する「志染軍陣」である可能性が考えられる城跡と考えられる。また、出土遺物から兵站基地的な性格を想定させるものである。

この他、弥生時代の遺構としては、後期の土坑が8基検出され、当該期の土器が出土している。この他、縄文時代を中心としたサヌカイト製打製石器が出土している。

2. 吉田住吉山古墳群

10基の古墳を検出した。いずれも吉田住吉山遺跡の山城造成時に大きく改変を受けている。方墳と円墳から構成される古墳群で、古墳時代前期から後期にかけて築造されている。大きく4期からなり、木棺・箱式石棺を埋葬主体としている。

3. 吉田古墳群

1号墳と32号墳の2基を調査した。2基とも円墳で、吉田1号墳は割竹形木棺を埋葬主体とする。吉田住吉山古墳群と一体の古墳群と考えられ、1号墳が第Ⅰ期に、32号墳が第Ⅲ期に位置付けられる。

4. 高男寺本丸遺跡

吉田住吉山遺跡群の東750mに位置する遺跡である。調査面積がわずかであったため、14世紀代の3条の溝を検出できなかったに過ぎない。

5. まとめ

吉田住吉山遺跡群の調査は、当初、三木城攻めに伴う付城として始まったものである。しかし、調査の結果、城跡であることは間違いないが、南北朝時代まで遡ることが明らかとなり、調査前の予想を大きく覆す結果となった。その位置付けは、先述した通りである。しかし、今回検出した城郭遺構は、三木城攻めと全く無関係なのであろうか。当該期の遺物を欠くことが大きな根拠となっているが、当該期に再利用された可能性を完全に否定することは困難である。この可能性を残して、本報告のまとめとしたい。

付表1 吉田住吉山遺跡(城跡)出土土器一覧表1

番号	種別	器種	地区	ブロッ ク	出土遺構	層位	法量 (c m)			残存	備考	図 版	写真 図版
							口径	器高	底径				
1	土師器	鍋	主郭	B-11	SB01P9		-	(3.1)	-	口縁わずか		85	82
2	土師器	ⅢA1a	主郭	B-09	SB01P14		(12.4)	2.2	-	口縁1/6		85	82
3	土師器	ⅢA1c	主郭	B-09	SB01P14		(11.8)	(2.7)	-	1/2弱		85	82
4	土師器	ⅢA1a	主郭	B-09	P012		11.8	2.6	-	口縁1/2弱、 底部3/4		85	82
5	土師器	ⅢA1b	主郭	C-10	P056		(12.3)	(2.5)	-	1/4		85	82
6	須恵器	鉢	主郭	B-09	SK04		(8.2)	5.1	(8.2)	口縁1/6		85	82
7	土師器	ⅢA1b	主郭	B-10	SK11		12.4	2.8	-	口縁1/10		85	82
8	備前焼	甕	主郭	B-10	SK11		51.0	(72.0)	-	口縁15/16	胎土分析	85	82
9	土師器	ⅢA1b	主郭	B-10	SK10		12.5	2.5	-	ほぼ完形		85	82
10	土師器	ⅢA2a	主郭	B-10	SK10		7.7	1.3	-	ほぼ完形		85	82
11	土師器	ⅢA2a	主郭	B-10	SK10		7.5	1.3	-	ほぼ完形		85	82
12	土師器	ⅢA2a	主郭	B-10	SK10		7.2	1.55	-	ほぼ完形		85	82
13	土師器	ⅢA1a	主郭	B-10	SK13		(12.6)	(2.0)	-	口縁1/6		85	82
14	須恵器	甕	主郭	B-10	SK10		45.4	73.0	-	ほぼ完形	胎土分析	86	83
15	土師器	ⅢA1b	主郭	D-10	SK21		11.8	2.8	-	口縁3/4、底 部ほぼ完形		86	83
16	土師器	鍋	主郭	D-10	SK21		(18.5)	(13.5)	-	口縁1/3		86	83
17	須恵器	鉢	主郭	D-10	SK21		(25.0)	(3.1)	-	口縁1/10		86	84
18	土師器	鍋	主郭	D-10	SK23		(27.0)	(3.7)	-	口縁わずか		86	84
19	土師器	ⅢA1b	主郭	D-10	SK23		(12.1)	2.5	-	口縁1/10		86	84
20	土師器	ⅢA1a	主郭	A-12	SK29	西あぜ	(12.6)	2.3	-	口縁1/6		86	84
21	土師器	不明	主郭	B-12	SK30		-	(3.9)	-	体部破片		86	84
22	土師器	ⅢA1a	主郭	C-12	SK32		(12.4)	2.3	-	口縁1/4強		86	84
23	土師器	ⅢA1a	主郭	C-12	SK32		(12.3)	2.9	-	口縁1/5		86	84
24	土師器	ⅢA2a	主郭	C-12	SK32		(7.3)	1.2	-	体部1/4強		86	84
25	土師器	ⅢA2a	主郭	C-12	SK32		(7.7)	1.2	-	体部1/3		86	84
26	土師器	ⅢB2	主郭	C-12	SK32	石の下	6.5	1.3	6.1	完形		86	83
27	土師器	ⅢA1a	主郭	A-13	SK33		(12.8)	2.5	-	口縁1/2弱		87	84
28	土師器	ⅢA1b	主郭	A-13	SK34		(12.1)	2.4	-	体部1/3		87	85
29	土師器	羽釜	主郭	B-13	SK35		(24.0)	(7.1)	-	口縁-体部わ ずか		87	84
30	土師器	ⅢA1a	主郭	B-13	SK41		(12.2)	(3.2)	-	体部1/2弱	胎土分析	87	85
31	土師器	ⅢA1a	主郭	B-13	SK41		(10.6)	3.2	-	口縁1/3		87	85
32	土師器	ⅢA1a	主郭	B-13	SK45		12.5	2.7	-	体部2/3		87	85
33	土師器	ⅢA1a	主郭	B-13	SK45		12.5	2.6	-	口縁2/3		87	85
34	土師器	鍋	主郭	C-13	SK46		(18.8)	(4.2)	-	口縁1/6		87	84
35	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK54		13.0	2.8	-	ほぼ完形		87	85
36	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK54		(12.4)	2.8	-	体部1/2弱		87	85

付表1 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器一覧表2

番号	種別	器種	地区	ブロッ ク	出土遺構	層位	法量 (c m)			残存	備考	図 版	写真 図版
							口径	器高	底径				
37	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK54		(12.6)	2.9	-	口縁1/2		87	85
38	土師器	ⅢA1b	主郭	C-13	SK54		(12.0)	2.8	-	口縁2/3		87	85
39	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		13.2	2.7	-	ほぼ完形		87	85
40	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		12.8	2.7	-	口縁11/12		87	85
41	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		(12.2)	2.7	-	口縁ー底部 2/3		87	85
42	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		(12.6)	2.7	-	口縁1/2		87	85
43	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		12.0	2.8	-	口縁4/5		87	85
44	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		12.2	3.0	-	口縁ー底部 2/3		87	86
45	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		12.2	2.65	-	口縁4/5		87	86
46	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		(12.3)	2.3	-	口ー底2/3	工具痕あ り	87	86
47	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		(12.0)	3.0	-	口縁1/2		87	86
48	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		12.6	2.9	-	口縁3/4		87	86
49	土師器	ⅢA1a	主郭	C-13	SK47		12.6	2.6	-	口縁3/4		87	86
50	土師器	ⅢA1b?	主郭	C-13	SK47		(13.8)	2.3	-	口縁1/4		87	86
51	土師器	ⅢA1b	主郭	C-13	SK47		12.6	2.3	9.2	完形		87	86
52	土師器	ⅢA1b	主郭	C-13	SK47		12.4	2.8	-	ほぼ完形		87	86
53	土師器	ⅢA1b	主郭	C-13	SK47		12.3	2.45	-	ほぼ完形		87	86
54	土師器	ⅢA2a	主郭	C-13	SK47		8.2	1.35	-	口縁4/5		87	87
55	土師器	ⅢA2a	主郭	C-13	SK47		7.8	1.1	-	口縁ー底部ほ ぼ完形		87	87
56	土師器	ⅢA2a	主郭	C-13	SK47		(7.4)	1.3	-	口縁ー底部 1/2		87	87
57	土師器	ⅢA2a	主郭	C-13	SK47		7.4	1.65	-	ほぼ完形		87	87
58	土師器	ⅢA2a	主郭	C-13	SK47		7.9	1.8	-	ほぼ完形		87	87
59	土師器	ⅢA2a	主郭	C-13	SK47		(8.4)	1.5	-	体部1/3		87	87
60	土師器	ⅢA2a	主郭	C-13	SK47		8.0	1.5	-	口縁ー底部ほ ぼ完形		87	87
61	土師器	ⅢA2c	主郭	C-13	SK47		(6.5)	1.4	-	口縁1/5	へそ皿	87	87
62	須恵器	鉢	主郭	C-13	SK47		(28.7)	(4.0)	-	口縁1/8		87	84
63	土師器	ⅢA1a	主郭	B-14	SK60	東半上層	(11.4)	(2.7)	-	口縁1/5		87	84
64	土師器	ⅢA1a	主郭	B-14	SK62		(12.0)	(2.5)	-	口縁1/4		87	84
65	土師器	ⅢA1a	主郭	B-14	SK61		(12.0)	(2.8)	-	口縁1/9強		87	84
66	土師器	ⅢA1a	主郭	B-14	SK57		12.3	2.7	-	口縁7/8		87	87
67	土師器	ⅢA1a	主郭	B-14	SK57		12.0	2.8	-	口縁11/12		87	87
68	土師器	ⅢA1a	主郭	B-14	SK57		11.8	2.7	-	口縁2/3		87	87
69	土師器	ⅢA1b	主郭	B-14	SK57		12.7	2.4	-	ほぼ完形		87	87
70	土師器	ⅢA1b	主郭	B-14	SK57		12.5	2.6	-	ほぼ完形		87	87
71	土師器	ⅢA2	主郭	B-14	SK57		(7.2)	1.5	-	口縁1/2		87	87
72	青磁	鉢	主郭	B-14	SK57		(22.0)	(2.3)	-	口縁1/2	龍泉窯系	87	84

付表1 吉田住吉山遺跡(城跡)出土土器一覧表3

番号	種別	器種	地区	ブロッ ク	出土遺構	層位	法量 (c m)			残存	備考	図 版	写真 図版
							口径	器高	底径				
73	土師器	ⅢA1a	主郭	B-08	集石1		(12.5)	(2.3)	-	口縁1/8		88	88
74	土師器	ⅢA2	主郭	B-08	集石1		(7.4)	1.0	-	体部1/6		88	88
75	土師器	鍋	主郭	B-08	集石1		(20.0)	(5.0)	-	口縁1/7		88	88
76	土師器	ⅢA1a	主郭	A-10・ 11	集石3		11.4	2.9	-	体部2/3		88	89
77	土師器	ⅢA1a	主郭	A-10・ 11	集石3		12.3	2.7	-	口縁3/4		88	89
78	土師器	ⅢA1b	主郭	A-10・ 11	集石3		(12.4)	2.7	-	体部3/4		88	89
79	土師器	ⅢA1b	主郭	A-10・ 11	集石3	下層	11.9	3.1	-	完形		88	89
80	土師器	ⅢA1b	主郭	A-10・ 11	集石3		(11.8)	2.7	-	体部1/3		88	88
81	土師器	ⅢA1b	主郭	A-10・ 11	集石3		11.7	2.9	-	ほぼ完形		88	89
82	土師器	ⅢA1b	主郭	A-10・ 11	集石3		12.2	2.7	-	体部1/2強		88	89
83	土師器	ⅢA1b	主郭	A-10・ 11	集石3		12.4	2.7	-	口縁3/4		88	89
84	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10・ 11	集石3		(7.2)	1.2	-	体部1/4強		88	88
85	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10・ 11	集石3		8.0	1.4	-	完形		88	89
86	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10・ 11	集石3		(7.8)	1.2	-	体部1/2弱		88	88
87	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10・ 11	集石3		(7.6)	1.0	-	体部1/3		88	88
88	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10・ 11	集石3		8.2	1.8	-	体部5/6		88	89
89	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10・ 11	集石3		(7.1)	1.4	-	体部1/4		88	88
90	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10・ 11	集石3		7.4	1.3	-	体部2/3		88	89
91	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10・ 11	集石3		8.0	1.8	-	ほぼ完形		88	89
92	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10・ 11	集石3		7.8	1.2	-	体部3/4		88	89
93	土師器	鍋	主郭	A-10・ 11	集石3		(19.8)	(13.4)	-	口縁7/8		88	89
94	土師器	ⅢA1b	主郭	A-10・ 11	集石3・2		12.3	2.6	-	口縁2/3		88	90
95	土師器	ⅢA1b	主郭	A-10・ 11	集石3・2		(12.0)	2.6	-	体部1/2弱		88	90
96	土師器	ⅢA1a	主郭	A-10	集石2		11.5	3.0	-	体部1/2強		88	90
97	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10	集石2		7.7	1.5	-	体部2/3		88	90
98	土師器	ⅢA2a	主郭	A-10	集石2		7.8	1.1	-	体部1/2強		88	90
99	土師器	ⅢA1a	主郭	A-14・ B-14	集石6		(12.0)	(2.6)	-	口縁1/6		88	88
100	土師器	ⅢA1c	主郭	A-14・ B-14	集石6		(12.5)	2.25	-	口縁1/4弱		88	88
101	土師器	ⅢA1b	主郭	A-14・ B-14	集石6	周辺	12.4	2.35	-	口縁3/5		88	90
102	土師器	ⅢA1a	主郭	B-14	集石7		(12.0)	(3.2)	-	口縁1/7強		88	88
103	備前焼	底部	主郭	B-08	焼土1		-	(3.5)	(22.0)	底部わずか		88	88
104	土師器	ⅢA1a	主郭	B-08	焼土2		(11.8)	2.5	-	口縁1/5		88	88
105	土師器	ⅢA2b	主郭	B-08	焼土2		(7.7)	0.9	-	口縁1/5		88	88
106	土師器	鍋	主郭	B-08	焼土2		22.0	(12.0)	-	口縁1/2		88	90
107	焼土塊	破片	主郭	E-09	焼土3		-	-	-			-	90
108	土師器	鍋	主郭	A-13	焼土4		(20.7)	(14.5)	-	口縁1/3		88	91

付表1 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器一覽表4

番号	種別	器種	地区	ブロッ ク	出土遺構	層位	法量 (c m)			残存	備考	図 版	写真 図版
							口径	器高	底径				
109	土師器	ⅢA1a	主郭	C-09	鍛冶炉1		(12.0)	2.5	-	口縁1/8		88	88
110	土師器	ⅢA1b	主郭	C-09	鍛冶炉1		(12.0)	2.5	-	口縁1/4		88	88
111	土師器	ⅢA1a	主郭	A-12	炉1		(12.4)	2.7	-	体部1/2弱		88	88
112	土師器	ⅢA1b	主郭	A-12	炉1		(12.4)	2.6	-	体部1/2弱		88	88
113	土師器	ⅢA2a	主郭	A-12	炉1		(7.3)	1.6	-	体部1/4		88	88
114	土師器	ⅢA1a	主郭	B-09	SD01		(12.2)	3.0	-	体部1/2弱		88	91
115	土師器	ⅢA1a	主郭	B-09	SD01		12.6	3.2	-	体部4/5		88	91
116	土師器	ⅢA1a	主郭	B-09	SD01		12.2	2.7	-	口縁5/6		88	91
117	土師器	ⅢA1b	主郭	B-09	SD01		13.0	2.8	-	底部1/3		88	91
118	土師器	ⅢA1b	主郭	B-09	SD01		(11.7)	2.6	-	体部1/4		88	91
119	土師器	ⅢA2a	主郭	B-09	SD01		8.1	1.7	-	ほぼ完形		88	91
120	土師器	ⅢA2a	主郭	B-09	SD01		(8.2)	1.7	-	体部1/2弱		88	91
121	土師器	ⅢA2a	主郭	B-09	SD01		(7.5)	1.2	-	体部1/2弱		88	91
122	土師器	ⅢA2a	主郭	B-09	SD01		(7.4)	1.5	-	体部1/2強		88	91
123	備前焼	播鉢	主郭	A-10	6号墳周溝 (東)		-	(5.1)		口縁わずか		89	91
124	土師器	ⅢA1a	主郭	B-10	6号墳周溝 (南)	上層	(12.5)	3.1	-	体部1/2弱		89	92
125	土師器	ⅢA1a	主郭		6号墳周溝 (南)	上層	13.0	3.0	-	ほぼ完形		89	92
126	土師器	ⅢA1a	主郭		6号墳周溝 (南)	上層	12.9	2.7	-	ほぼ完形		89	92
127	土師器	ⅢA1a	主郭		6号墳周溝 (南)	上層	11.9	2.9	-	ほぼ完形		89	92
128	土師器	ⅢA1a	主郭		6号墳周溝 (南)	上層	(11.7)	2.6	-	口縁1/4強		89	92
129	土師器	ⅢA1a	主郭	B-10	6号墳周溝 (南)	上層	(12.3)	2.4	-	体部1/4弱		89	92
130	土師器	ⅢA2a	主郭	B-10	6号墳周溝 (南)		(8.3)	1.4	-	体部1/2弱		89	92
131	土師器	ⅢA2a	主郭		6号墳周溝 (南)	西半	7.9	1.3	-	体部2/3		89	92
132	土師器	ⅢA2a	主郭		6号墳周溝 (南)	上層	8.2	1.6	-	ほぼ完形		89	92
133	土師器	ⅢA2a	主郭	B-10	6号墳周溝 (南)	上層	7.5	1.3	-	体部3/4		89	92
134	土師器	土錘	主郭	B-10	6号墳周溝 (南)	上層	長4.05	幅1.5	厚1.6	ほぼ完形		89	91
135	須恵器	碗	主郭		6号墳周溝 (南)		15.6	3.3	8.4	底部8/9		89	92
136	須恵器	鉢	主郭	B-09	2号墳周溝 (北)		(28.3)	(8.3)	-	口縁1/6弱		89	91
137	土師器	ⅢA1a	主郭	D-10	2号墳周溝 (南)		(11.7)	2.5	-	体部1/3		89	91
138	土師器	ⅢA1a	主郭	C-10	2号墳周溝 (南)		11.7	2.5	-	体部1/2弱		89	91
139	土師器	ⅢA2a	主郭	C-09	2号墳周溝 (西)		7.9	1.7	-	完形		89	92
140	須恵器	鉢	主郭	B-09	2号墳周溝 (西)		(16.4)	(3.8)	-	口縁1/12		89	91
141	須恵器	鉢	主郭	C-09	2号墳周溝 (西)		(29.5)	(8.3)	-	口縁/12		89	91
142	須恵器	甕	主郭	C-09	2号墳周溝 (西)		(22.1)	(40.3)	-	体部1/2弱	十瓶山窯、 胎土分析	89	92
143	土師器	ⅢA1a	主郭	B-11	5号墳周溝 (西)		10.8	2.8	-	ほぼ完形	ひずみ大	90	94
144	土師器	ⅢA1a	主郭		5号墳周溝 (西)		12.4	3.0	-	ほぼ完形		90	94

付表1 吉田住吉山遺跡(城跡)出土土器一覧表5

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量 (c m)			残存	備考	図版	写真図版
							口径	器高	底径				
145	土師器	皿B1	主郭		5号墳周溝(西)		12.2	3.3	7.7	ほぼ完形		90	94
146	土師器	皿B1	主郭		5号墳周溝(西)		11.7	3.3	7.8	ほぼ完形		90	94
147	青磁	碗	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		(17.8)	(2.0)	-	破片	龍泉窯系	90	93
148	土師器	皿A2a	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		7.7	1.7	-	体部3/4強		90	94
149	土師器	皿A2a	主郭		5号墳周溝(南)	東半上層	7.9	1.4	-	体部5/6		90	94
150	土師器	皿A2a	主郭		5号墳周溝(南)	東半上層	(7.7)	1.1	-	体部1/3		90	93
151	土師器	皿A2a	主郭		5号墳周溝(南)	東半上層	(7.4)	(1.5)	-	口縁1/3		90	93
152	須恵器	鉢	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		(29.4)	(5.0)	-	口縁1/5		90	93
153	須恵器	鉢	主郭		5号墳周溝(南)		(29.7)	10.7	(12.0)	底部1/2弱		90	94
154	青磁	碗	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		(18.0)	(2.8)	-	口縁1/2	龍泉窯系	90	93
155	青磁	碗	主郭		5号墳周溝(南)	東半上層	-	(4.4)	-	体部破片	龍泉窯系	90	93
156	土師器	皿B1	主郭	B-12	1号墳周溝(南)		(10.5)	3.4	7.0	ほぼ完形	胎土分析	90	94
157	土師器	皿A1a	主郭	B-14	4号墳周溝(南)		(12.2)	(2.7)	-	口縁1/3		90	93
158	土師器	鍋	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		21.4	(12.8)	-	口縁3/4	胎土分析	90	94
159	土師器	皿A1a	主郭	C-08	土塁1東側		(12.0)	2.8	-	ほぼ完形		90	95
160	土師器	皿A1c	主郭	B-08	土塁1東側		(11.6)	1.9	-	口縁1/4		90	93
161	土師器	皿B2	主郭	C-08	土塁1東側		7.55	1.6	-	体部1/2	口縁部にスス付着	90	95
162	土師器	皿B2	主郭	C-08	土塁1東側		(7.25)	1.8	(6.9)	体部1/4弱		90	93
163	土師器	鍋	主郭	C-08	土塁1東側		(21.2)	(11.1)	-	口縁1/3	胎土分析	90	95
164	土師器	鍋	主郭	D-08	土塁1東側		(19.4)	(12.3)	-	口縁1/2弱		90	95
165	土師器	羽口	主郭	C-08	土塁1東側		-	-	-	破片		90	93
166	須恵器	甕	主郭	D-08	土塁1東側		(20.8)	(3.1)	-	口縁1/3		90	93
167	備前焼	播鉢	主郭	D-09	土塁1東側		(29.7)	(14.2)	(12.5)	底部1/3		90	93
168	丹波焼	壺	主郭	D-08	土塁1東側		-	(2.7)	(14.1)	底部		90	93
169	瀬戸美濃焼	水注	主郭	C-08	土塁1東側		-	(4.25)		体部わずか		90	93
170	青磁	鉢	主郭	B-08	土塁1東側		-	(2.7)	(9.55)	高台1/5	龍泉窯系	90	93
171	土師器	皿A1a	主郭	B-13	包含層		12.6	2.9	-	口縁完形		91	95
172	土師器	皿A1a	主郭	C-13	包含層		11.9	3.1	-	完形	工具痕あり	91	95
173	土師器	皿A1a	主郭	B-13	包含層		12.5	2.5	-	体部4/5	工具痕あり	91	95
174	土師器	皿A1a	主郭	B-09	包含層		12.2	3.2	-	体部5/6		91	95
175	土師器	皿A1a	主郭	D-09	包含層		(12.2)	2.3	-	体部1/3	口縁部にスス付着	91	96
176	土師器	皿A1a	主郭	D-09	包含層		(12.2)	2.8	-	ほぼ完形		91	95
177	土師器	皿A1a	主郭	C-13	包含層		12.3	3.0	-	ほぼ完形		91	95
178	土師器	皿A1a	主郭	B-14	包含層		(11.8)	(2.8)	-	口縁1/3	胎土分析	91	96
179	土師器	皿A1b	主郭	C-07	包含層		12.0	2.8	-	口縁2/3		91	95
180	土師器	皿A1b	主郭	D-07	包含層		12.1	2.6	-	ほぼ完形		91	95

付表1 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器一覧表6

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量 (c m)			残存	備考	図版	写真図版
							口径	器高	底径				
181	土師器	ⅢA1b	主郭	D-09	包含層		12.1	2.8	-	体部3/4		91	96
182	土師器	ⅢA1b	主郭	C-13	包含層		12.4	2.8	-	ほぼ完形		91	96
183	土師器	ⅢA2a	主郭	B-09	包含層		(7.8)	1.45	-	体部3/4		91	96
184	土師器	ⅢA2a	主郭	B-10	包含層		7.6	1.8	-	体部1/2強		91	96
185	土師器	ⅢA2a	主郭	C-13	包含層		8.1	1.6	-	ほぼ完形		91	96
186	土師器	ⅢA2a	主郭	B-10	包含層		(9.4)	1.4	-	体部1/3		91	96
187	土師器	ⅢB1	主郭	C-09	包含層		(10.9)	2.9	(7.4)	底部1/4弱		91	96
188	土師器	ⅢB1	主郭	C-13	包含層		(10.8)	3.4	(8.1)	口縁1/4		91	96
189	土師器	Ⅲ	主郭	C-13	包含層		9.4	2.6	-	ほぼ完形	口縁部に突起	91	96
190	土師器	鍋	主郭	C-09	包含層		(23.2)	(7.4)	-	口縁1/6		91	96
191	土師器	土錘	主郭	C-14	包含層		長 (2.1)	幅1.5	孔径 (0.55)	破片		91	96
192	土師器	羽口	主郭	B-13	包含層		長 (2.5)	幅 (2.2)		破片		91	96
193	土師器	羽口	主郭	C-14	包含層		長 (3.7)	幅 (4.3)	孔径 (2.7)	破片		91	96
194	須恵器	鉢	主郭	A-09	包含層		(26.6)	(4.0)	-	口縁1/12		91	97
195	須恵器	鉢	主郭	A-09	包含層		(15.5)	(3.9)	-	口縁わずか		91	97
196	須恵器	碗	主郭	B-09	包含層		15.0	3.0	6.4	体部ほぼ完形		91	96
197	備前	甕	主郭	B-09	包含層		-	(3.1)	(22.0)	底部1/6		91	97
198	丹波焼	壺	主郭	D-10	包含層		-	(6.1)	-	体部破片	刻画あり	91	97
199	丹波焼	甕	主郭	A-13	包含層		(37.0)	(41.3)	-	口縁1/3		91	97
200	青磁	碗	主郭	B-09	包含層		-	(2.3)	-	体部破片	龍泉窯系	91	97
201	土師器	ⅢA1a	土塁1	C-07	土塁1	盛土	(12.2)	2.7	-	体部1/6		92	98
202	土師器	ⅢA1a	土塁1	C-07	土塁1	盛土	(12.2)	2.6	-	口縁1/4		92	98
203	土師器	ⅢA1a	土塁1	C-07	土塁1	盛土	(12.5)	2.6	-	口縁1/4		92	98
204	土師器	ⅢA1a	土塁1	C-07	土塁1	盛土	(12.4)	2.4	-	口縁1/2弱		92	98
205	土師器	ⅢA1a	土塁1	C-07	土塁1	盛土	12.5	3.0	-	ほぼ完形		92	99
206	土師器	ⅢA1a	土塁1	C-08	土塁1	盛土	(12.8)	2.4	-	ほぼ完形	胎土分析	92	98
207	土師器	ⅢA1a	土塁1	C-07	土塁1	盛土	(11.5)	1.8	-	口縁1/8		92	98
208	土師器	ⅢA2	土塁1	C-07	土塁1	盛土	(7.8)	1.3	-	口縁1/4		92	98
209	土師器	鍋	主郭	C-08	土塁1	盛土	(21.0)	(14.6)	-	口縁1/3強		92	99
210	須恵器	碗	土塁1	C-08	土塁1	盛土	16.5	5.1	6.4	口縁3/5		92	99
211	須恵器	鉢	土塁1	B-08・ C-08	土塁1	盛土	(28.0)	(5.0)	-	口縁1/5		92	98
212	須恵器	鉢	土塁1	C-08	土塁1	盛土	-	(6.3)	-	口縁わずか		92	98
213	須恵器	鉢	土塁1	B-08・ C-08	土塁1	盛土	(15.0)	5.4	(7.6)	底部1/2		92	99
214	丹波焼	甕	土塁1	D-08	土塁1	盛土		(4.0)	-	口縁わずか		92	98
215	土師器	ⅢB1	土塁1	B-08	集石9	下層	11.0	3.3	6.7	底部ほぼ完形		92	99
216	土師器	鍋	土塁1	B-08	集石9		22.6	(6.2)	-	口縁9/10		92	99

付表1 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器一覧表7

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量 (cm)			残存	備考	図版	写真図版
							口径	器高	底径				
217	土師器	鍋	土塁1	C-07	集石10		(22.1)	16.4	-	口縁ほぼ完形		92	99
218	須恵器	鉢	土塁1	D-08	集石13		(28.0)	(3.6)	-	口縁1/9		92	98
219	土師器	鍋	土塁1	D-08	集石13		(19.3)	(8.6)	-	口縁1/4強		92	98
220	土師器	羽釜	土塁1	D-08	集石13		(24.2)	(11.5)	-	口縁1/5		92	98
221	土師器	皿A1a	土塁1	E-08	集石14		(12.3)	(2.6)	-	体部1/3		92	99
222	須恵器	鉢	土塁1	E-08	集石14		28.0	10.4	11.7	口縁12/13	胎土分析	92	99
223	土師器	鍋	土塁1	B-07・08	焼土4		(18.7)	(13.8)	-	口縁1/2弱		92	99
224	土師器	皿A1a	土塁1	C-08	金属工房1	炭層上面	(12.7)	2.5	-	体部1/5		92	98
225	土師器	皿A1a	土塁1	C-08	金属工房1	炭層上面	(11.2)	2.3	(7.2)	体部1/6		92	98
226	土師器	羽口	土塁1	C-08	金属工房1	炉1	長 (6.2)	幅 (5.6)	厚 3.0	破片		92	98
227	土師器	とりべ	土塁1	C-08	金属工房1	炉1	(8.0)	3.2	-	口縁1/6		92	99
228	須恵器	鉢	土塁1	C-08	金属工房1		(15.2)	(5.2)	-	口縁1/3		92	98
229	土師器	皿A1a	土塁・空堀	E-07	土塁2 7号墳周溝		(12.0)	2.5	-	体部1/4		93	100
230	土師器	鉢	土塁・空堀	E-07	土塁2 7号墳周溝		(11.4)	8.5	11.2	口縁3/4		93	100
231	須恵器	鉢	土塁・空堀	E-07	土塁2 7号墳周溝		(26.2)	(11.2)	(8.7)	底部1/4強		93	100
232	須恵器	鉢	土塁・空堀	E-07	土塁2 7号墳周溝		(30.0)	(4.6)	-	口縁1/9	胎土分析	93	100
233	須恵器	碗	土塁・空堀	B-06・07	土塁2	北端盛土 最下層	(15.6)	(3.5)	-	口縁1/8	胎土分析	93	100
234	須恵器	甕	土塁・空堀	C-06	土塁3 8号墳南側		-	(28.6)	-	底部完形		93	101
235	須恵器	甕	土塁・空堀	C-06	土塁3 8号墳南側		(23.4)	(32.7)	-	体部3/4		93	101
236	土師器	鍋	土塁・空堀	C-06	空堀2 8号墳南側		(19.2)	15.2	-	体部1/3		93	100
237	土師器	皿A1a	土塁・空堀	D-06・E-06	SK64	土塁3下層	(11.0)	(2.7)	-	体部1/6		93	100
238	土師器	皿B2	土塁・空堀	D-06・E-06	SK64	土塁3下層	8.2	1.85	4.9	完形		93	100
239	土師器	皿B2	土塁・空堀	D-06・E-06	SK64	土塁3下層	8.5	1.5	5.7	完形		93	100
240	土師器	皿B2	土塁・空堀	D-06・E-06	SK64	土塁3下層	(8.4)	1.4	4.9	体部1/4		93	100
241	土師器	皿B2	土塁・空堀	D-06・E-06	SK64	土塁3下層	8.8	1.1	5.7	完形		93	100
242	土師器	皿A1a	土塁・空堀	B-05	土塁5		12.0	2.8	-	完形		94	102
243	土師器	皿A1b	土塁・空堀	C-05	土塁5		12.7	2.3	-	完形		94	102
244	土師器	鍋	土塁・空堀	D-05	土塁5		(20.0)	(12.2)	-	体部1/3		94	102
245	須恵器	碗	土塁・空堀		空堀1	北あぜ内	15.2	3.1	7.1	底部完形		94	102
246	土師器	鍋	土塁・空堀	B-07	空堀2		(19.2)	(4.5)	-	口縁1/6強		94	102
247	土師器	皿A1a	土塁・空堀	D-05	空堀3		(11.0)	3.0	-	体部1/4		94	102
248	須恵器	経筒	土塁・空堀	C-05	空堀3		(14.3)	(20.0)	(21.7)	底部1/7		94	102
249	土師器	皿B	帯曲輪3	A-06	斜面		-	(1.3)	(7.3)	底部1/2		94	103
250	土師器	皿A1a	帯曲輪3	B-07	横堀		(11.4)	2.5	-	体部1/3	胎土分析	94	103
251	土師器	皿A1c	帯曲輪3	B-07	横堀		(10.8)	(2.1)	-	体部1/6		94	103
252	土師器	鍋	帯曲輪3	B-07	横堀		(21.0)	(6.0)	-	口縁1/9		94	103

付表1 吉田住吉山遺跡(城跡)出土土器一覧表8

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量 (c m)			残存	備考	図版	写真図版
							口径	器高	底径				
253	土師器	羽釜	帯曲輪3	B-08	横堀		-	(3.9)	-	口縁破片		94	103
254	土師器	ⅢA1a	帯曲輪3	B-07	水溜		(11.7)	2.4	-	体部1/3		94	103
255	土師器	鍋	帯曲輪3	B-07	水溜		(18.2)	(4.6)	-	口縁1/7		94	103
256	瓦質土器	風炉	帯曲輪3	B-07	水溜		(27.0)	(5.1)	-	口縁わずか		94	103
257	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-12	斜面		12.6	2.8	-	ほぼ完形		94	103
258	土師器	ⅢB1	帯曲輪2	A-11	斜面		-	(1.4)	(7.6)	底部1/4強		94	103
259	土師器	ⅢB2	帯曲輪2	A-11	斜面		-	(1.1)	4.8	底部完形		94	103
260	土師器	ⅢB2	帯曲輪2	A-12	斜面		(8.4)	1.7	(5.0)	口縁1/6		94	103
261	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-10	横堀		12.3	2.3	-	体部1/2強		95	104
262	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-11	横堀		(12.2)	2.7	-	体部1/2強		95	104
263	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-12	横堀		12.2	3.2	-	口縁1/4		95	104
264	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-12	横堀		12.8	3.1	-	口縁1/2		95	104
265	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-12	横堀		(11.2)	2.4	-	底部5/6		95	104
266	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-12	横堀		(13.4)	2.35	-	底部4/5		95	104
267	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-11	横堀		(12.2)	2.9	-	体部1/3		95	104
268	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-11	横堀		11.5	2.5	-	ほぼ完形		95	104
269	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-12	横堀		(12.4)	2.7	-	口縁2/3		95	104
270	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-12	横堀		12.6	3.0	-	底部4/5		95	104
271	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-12	横堀		13.0	2.9	-	口縁5/6		95	104
272	土師器	ⅢA1b	帯曲輪2	A-12	横堀		12.0	2.4	-	ほぼ完形		95	104
273	土師器	ⅢA1b	帯曲輪2	A-12	横堀		(12.0)	2.9	-	底部1/3		95	104
274	土師器	ⅢA1b	帯曲輪2	A-12	横堀		11.7	3.25	-	底部2/3		95	104
275	土師器	ⅢA1b	帯曲輪2	A-11	横堀		12.0	2.8	-	ほぼ完形		95	104
276	土師器	ⅢB1	帯曲輪2	0-12	横堀		(11.5)	3.25	-	底部ほぼ完形		95	104
277	須恵器	甕	帯曲輪2	A-12	横堀		(59.0)	(19.6)	-	口縁1/5	胎土分析	95	105
278	土師器	ⅢA1a	帯曲輪2	A-11	平坦部		(12.5)	2.6	-	体部1/2弱	工具痕あり	95	105
279	須恵器	碗	帯曲輪2	0-11	平坦部		-	(2.7)	(5.9)	底部1/6		95	105
280	瀬戸美濃	卸皿	帯曲輪1	B-15	斜面		(15.4)	(2.2)	-	口縁部わずか		95	105
281	土師器	ⅢA1a	帯曲輪1	C-15	横堀		12.5	2.9	-	体部1/4		95	105
282	土師器	ⅢA1a	帯曲輪1	B-15	横堀		12.2	2.5	-	ほぼ完形		95	105
283	土師器	ⅢA1a	帯曲輪1	B-15	横堀		(12.1)	2.6	-	ほぼ完形		95	105
284	土師器	ⅢA1b	帯曲輪1	D-15	横堀		(12.7)	2.6	-	口縁1/3		95	105
285	土師器	ⅢA2a	帯曲輪1	B-15	横堀		(8.0)	1.5	-	口縁2/3		95	105
286	土師器	ⅢB1	帯曲輪1	A-15	横堀		-	(2.1)	(7.3)	底部1/2	胎土分析	95	105
287	土師器	ⅢB2	帯曲輪1	B-15	横堀		(12.1)	1.8	(6.8)	底部1/2		95	105
288	土師器	鍋	帯曲輪1	C-15	横堀		(20.0)	(4.4)	-	口縁1/4弱		95	106

付表1 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器一覧表9

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量 (cm)			残存	備考	図版	写真図版
							口径	器高	底径				
289	須恵器	鉢	帯曲輪1	B-15	横堀		(27.0)	(5.2)	-	口縁1/10		95	106
290	須恵器	鉢	帯曲輪1	C-15	横堀		(31.5)	(4.8)	-	口縁1/10		95	106
291	須恵器	鉢	東斜面	A-16	段状遺構1		-	(4.1)	(9.5)	底部4/5		95	106
292	土師器	ⅢA1a	東斜面	A-15	包含層		13.4	3.0	-	ほぼ完形		95	105
293	土師器	ⅢA2a	東斜面	D-16	包含層		7.6	1.3	-	ほぼ完形		95	105
294	須恵器	碗	東斜面	B-15	包含層		15.4	3.2	11.0	底部ほぼ完形		95	105
295	須恵器	鉢	東斜面	A-15・16	包含層		(27.0)	(9.0)	-	口縁1/5		95	106
296	土師器	ⅢA1a	堀切	C-18	堀切		12.1	3.0	-	口縁ほぼ完形		96	106
297	土師器	ⅢA1a	堀切	C-18	堀切		(12.3)	2.2	-	体部1/2強		96	106
298	土師器	ⅢA1a	堀切	C-18	堀切		12.3	3.0	-	ほぼ完形		96	106
299	土師器	ⅢA1a	堀切	C-18	堀切		12.1	2.9	-	口縁4/5		96	106
300	土師器	ⅢA1a	堀切	C-18	堀切		1.2	3.0	-	口縁3/4		96	106
301	土師器	ⅢA1a	堀切	C-19	堀切		12.6	2.6	-	口縁3/5		96	106
302	土師器	ⅢA1a	堀切	C-19	堀切		12.5	2.7	-	口縁3/4		96	106
303	土師器	ⅢA1a	堀切	C-19	堀切		13.0	2.7	-	口縁4/5		96	106
304	土師器	ⅢA1a	堀切	C-19	堀切		12.2	2.85	-	口縁5/6		96	106
305	土師器	ⅢA1a	堀切	C-19	堀切		12.2	2.6	-	ほぼ完形		96	106
306	土師器	ⅢA1a	堀切		堀切	上層	12.6	2.9	-	口縁3/4	工具痕あり	96	107
307	土師器	ⅢA1a	堀切		堀切	上層	(13.4)	2.7	-	体部2/3		96	107
308	土師器	ⅢA1a	堀切		堀切	上層	(12.2)	2.9	-	体部4/5		96	107
309	土師器	ⅢA1a	堀切	D-18	堀切		(12.0)	2.8	-	体部1/2		96	107
310	土師器	ⅢA1a	堀切		堀切	中層	12.0	3.15	-	口縁3/4		96	107
311	土師器	ⅢA1a	堀切	F-18	堀切		12.5	2.85	-	口縁ほぼ完形		96	107
312	土師器	ⅢA1a	堀切		堀切		12.8	2.6	-	底部7/9		96	107
313	土師器	ⅢA1a	堀切	C-19	堀切		12.6	2.8	-	ほぼ完形		96	107
314	土師器	ⅢA1a	堀切	D-18	堀切		(12.1)	2.6	(8.5)	ほぼ完形		96	107
315	土師器	ⅢA1b	堀切	C-18	堀切		12.9	3.4	-	口縁ほぼ完形		96	107
316	土師器	ⅢA1b	堀切	C-18	堀切		12.4	2.8	-	底部1/3		96	107
317	土師器	ⅢA1b	堀切	C-18	堀切		12.5	2.7	-	体部1/2強		96	107
318	土師器	ⅢA1b	堀切	C-19	堀切		12.0	2.6	-	ほぼ完形		96	107
319	土師器	ⅢA1b	堀切		堀切	中層	12.2	2.6	-	ほぼ完形		96	107
320	土師器	ⅢA1b	堀切	C-18	堀切		(12.6)	2.4	-	口縁3/4		96	107
321	土師器	ⅢA1b	堀切	B-16	堀切		11.9	2.1	-	体部1/2強		96	107
322	土師器	ⅢA1b	堀切	D-19	堀切		12.7	2.4	-	完形		96	108
323	土師器	ⅢA1b	堀切	D-19	堀切		(12.2)	2.6	-	体部1/2弱		96	108
324	土師器	ⅢA1b	堀切	F-18	堀切		13.3	2.8	-	口縁3/4		96	108

付表1 吉田住吉山遺跡(城跡)出土土器一覧表10

番号	種別	器種	地区	ブロッ ク	出土遺構	層位	法量 (c m)			残存	備考	図 版	写真 図版
							口径	器高	底径				
325	土師器	ⅢA1b	堀切		堀切	中層	12.0	2.5	-	底部1/2強		96	108
326	土師器	ⅢA1b	堀切		堀切		12.6	2.6	-	底部5/6		96	108
327	土師器	ⅢA2a	堀切	C-18	堀切		8.1	1.4	-	ほぼ完形		96	108
328	土師器	ⅢA2a	堀切	C-18	堀切		7.5	1.7	-	体部1/2強		96	108
329	土師器	ⅢA2a	堀切	C-18	堀切		8.4	1.5	-	口縁4/5		96	108
330	土師器	ⅢA2a	堀切	C-18	堀切		7.9	1.2	-	体部1/2強		96	108
331	土師器	ⅢA2a	堀切	F-18	堀切		7.8	1.4	-	体部1/2強		96	108
332	土師器	ⅢA2a	堀切	F-18	堀切		7.6	1.6	-	口縁2/3		96	108
333	土師器	ⅢA2a	堀切	D-19	堀切		8.1	1.5	-	口縁3/4		96	108
334	土師器	ⅢA2a	堀切	F-18	堀切		7.6	1.95	-	口縁7/8		96	108
335	土師器	ⅢB1	堀切		堀切	上層	(11.2)	3.3	(7.0)	体部2/3		96	108
336	土師器	鍋	堀切		堀切	中層	(20.7)	-	-	口縁1/2弱	胎土分析	96	109
337	土師器	鍋	堀切	D-18	堀切		(22.0)	(15.0)	-	体部1/4		96	109
338	瓦質土器	風炉	堀切		堀切	上層	(26.0)	(3.3)	-	口縁部わずか		96	109
339	瓦質土器	風炉	堀切		堀切	中層	-	(5.35)	-	体部わずか		96	109
340	須恵器	碗	堀切	C-19	堀切		(15.5)	4.4	(6.6)	底部完存		97	109
341	須恵器	碗	堀切		堀切		15.5	3.6	10.2	体部1/2強		97	109
342	須恵器	ⅢB2	堀切	C-19	堀切		(7.9)	1.4	5.2	底部4/5		97	109
343	須恵器	鉢	堀切		堀切	中層	(24.1)	(5.2)	-	口縁1/10		97	109
344	須恵器	鉢	堀切		堀切	中層	(31.5)	(5.8)	-	口縁1/8弱		97	109
345	須恵器	甕	堀切	C-18・ 19	堀切	中層	33.2	49.5	-	底部3/4		97	110
346	瀬戸美濃 焼	碗	堀切	C-18	堀切		(10.4)	(2.15)	-	口縁1/8		97	110
347	丹波焼	壺	堀切		堀切	中層		(3.1)	-	口縁1/9		97	110
348	丹波焼	壺	堀切		堀切	上層	-	(9.7)	-	体部わずか		97	110
349	肥前系施 釉陶器	椀	堀切		堀切		-	(4.7)	(9.0)	口縁1/10		97	110
350	白磁	皿	堀切	C-18	堀切		-	(2.6)	-	口縁わずか		97	110
351	青磁	碗	堀切		堀切	上層	(18.0)	(3.4)	-	口縁1/10	龍泉窯系	97	110
352	青磁	鉢	堀切	C-18	堀切		(21.0)	5.0	(9.5)	底部1/6	龍泉窯系	97	110
353	土師器	ⅢA1a	谷東	B-04	段状遺構 3		(11.0)	2.7	-	体部1/4		98	111
354	土師器	ⅢA1a	谷東	B-04	段状遺構 3		(11.4)	2.8	(8.6)	体部1/8		98	111
355	須恵器	鉢	谷東	B-04	段状遺構 3		-	(5.1)	-	口縁わずか		98	111
356	土師器	ⅢA2a	谷東		段状遺構 4		(8.5)	1.3	-	体部1/3		98	111
357	土師器	鍋	谷東		段状遺構 4		(22.9)	(3.7)	-	口縁1/4弱		98	111
358	須恵器	鉢	谷東		段状遺構 4		(32.0)	(8.6)	-	口縁1/10		98	111
359	土師器	ⅢA1a	谷東	G-06	SK67	北半	(11.4)	2.5	-	体部1/9		98	111
360	土師器	ⅢA2a	谷東	G-06	SK67	南半	(7.8)	1.5	-	体部1/8		98	111

付表1 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器一覧表11

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量 (c m)			残存	備考	図版	写真図版
							口径	器高	底径				
361	須恵器	鉢	谷東	G-06	SK67	北半	-	(4.1)	-	口縁わずか		98	111
362	土師器	蛸壺	谷東	G-06	SK68		-	(10.0)	(10.0)	底部1/3		98	111
363	須恵器	鉢	谷東	G-06	SK71		(27.4)	10.6	9.3	底部完形		98	112
364	土師器	皿A1a	谷東	B-03	通路1		(12.2)	2.3		体部1/9		98	111
365	土師器	鍋	谷東	B-03	通路1		-	(3.8)	-	口縁わずか		98	111
366	土師器	皿A1a	谷東	H-05	包含層		(12.4)	2.4		体部1/3		98	112
367	土師器	皿A1a	谷東	H-05	包含層		12.2	2.6		完形		98	112
368	土師器	皿A1a	谷東	H-05	包含層		(11.8)	2.8		体部1/2弱		98	112
369	土師器	皿A1a	谷東	H-05	包含層		(12.6)	2.5		体部1/2弱		98	112
370	土師器	皿A2a	谷東	H-05	包含層		7.9	1.5		ほぼ完形		98	112
371	土師器	蛸壺	谷東	G-06	包含層		(9.4)	(3.8)	-	口縁わずか		98	112
372	須恵器	鉢	谷東	E-04	包含層		(27.8)	(8.8)	-	口縁1/6		98	112
373	須恵器	鉢	谷東	D-04	包含層		-	(1.7)	(9.3)	底部2/3		98	112
374	備前焼	甕	谷東	F-04	包含層		-	(10.9)	(47.0)	底部わずか		98	112
375	丹波焼	甕	谷東		包含層		-	(3.9)	(22.0)	底部わずか		98	112
376	土師器	鍋	谷西	G-04	SK75		-	(2.3)	-	口縁わずか		99	113
377	土師器	皿A1b	谷西	G-04	SK78		(11.5)	2.4		体部1/4		99	113
378	土師器	鍋	谷西	K-03	包含層		(21.4)	(6.7)		口縁1/5		99	113
379	備前焼	甕	谷西	C-01	包含層			(7.3)	(36.6)	底部1/6弱		99	113
380	土師器	皿A1a	西曲輪2	C-21	SK80		(12.9)	(2.6)	(7.5)	底部2/3		99	112
381	土師器	皿B	西曲輪2	C-21	SK80			(0.8)	(7.2)	底部1/2弱		99	113
382	須恵器	鉢	西曲輪2	C-21	SK80	周辺	(28.0)	(9.2)		口縁5/8残		99	112
383	青磁	碗	西曲輪2	C-21	SK80	周辺		(3.0)	(3.6)	底部1/6	龍泉窯系	99	113
384	土師器	皿B2	西曲輪2	D-20	平坦部		(8.0)	(1.6)	(5.5)	底部完形		99	112
385	土師器	鉢	西曲輪2	C-20	平坦部		(29.6)	(3.7)		口縁1/16		99	113
386	須恵器	碗	西曲輪2	D-20	平坦部		(15.8)	(4.5)		口縁1/4		99	113
387	須恵器	鉢	西曲輪2	C-20	平坦部		(26.8)	(8.9)		口縁1/12残		99	113
388	須恵器	甕	西曲輪2	C-20	平坦部		(23.5)	(6.4)		口縁1/4		99	113
389	須恵器	甕	西曲輪2	D-20	平坦部		(54.4)	(14.5)		口縁1/8		99	114
390	土師器	皿B2	帯曲輪4	C-00	平坦部		(8.0)	(1.6)	(4.8)	口縁1/4		99	114
391	土師器	皿B2	帯曲輪4	C-21	平坦部		7.6	1.4	6.0	口縁1/6		99	114
392	土師器	皿B2	帯曲輪4	C-21	平坦部		(7.0)	(1.6)	(5.8)	口縁1/3		99	114
393	土師器	皿B2	帯曲輪4	C-21	平坦部		(6.3)	(1.5)	(6.0)	口縁1/3		99	114
394	須恵器	甕	帯曲輪4	C-21	平坦部		(33.9)	(8.9)		口縁2/3弱		99	114
395	土師器	羽釜	帯曲輪5	J-02・K-02	平坦部		(25.6)	(2.9)		1/18		99	114
396	丹波焼	搗鉢	不明		表採		-	(4.2)	-	体部わずか		99	114

付表2 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器個体度数数量表7

地区名	グリッド	遺構名	土師器					須恵器				陶磁器			その他		
			皿A	皿A1	皿A2	皿B	鍋	その他	碗	鉢	甕	その他	丹波甕	備前甕		その他	
主郭		4号墳周溝（西）		8		0	1										
主郭	B-13・14	4号墳周溝（西）	0														
主郭	A-14	4号墳周溝（西）		45	4	0	13				0		0				
主郭	B-14	4号墳周溝（西）		7							0						
主郭	B-14	4号墳周溝（南）		75	13	0	8	不明0	0	2							
主郭	B-13・14	4号墳周溝（南）		3			1										
主郭	B-08	土塁1東側		117	34		4	羽釜1 不明0								丹波壺0、 青磁鉢0	
主郭	C-08	土塁1東側		167	15	12	18	羽口0 不明0	0	2	0	壺0	0	0	丹波壺0		瓦質土 器風炉
主郭	C-09	土塁1東側		9	2		4			1							
主郭	D-08	土塁1東側		19	7	0	11		4	1	7			0	備前播鉢1・甕 0、丹波壺0		
主郭	D-09	土塁1東側		31	4		2			3	2				備前播鉢0		
主郭	E-09	土塁1東側		10			1			0	0						
主郭	A-08	包含層	0			0	1								0		
主郭	B-08	包含層		37	11	0	2	不明0		0	0				0		
主郭	B-08・09	包含層													0		
主郭	A-09	包含層		50			3		0	3	0			1	備前播鉢0		
主郭	B-09	包含層		51	29	0	2		6	1	0		3	0	青磁碗0		
主郭	C-09	包含層		87	37	0	6		4	4	0						
主郭	D-09	包含層		283	32	0	3	不明0	1	0	0						
主郭	E-09	包含層		2													
主郭	A-10	包含層		33	15		5										
主郭	B-10	包含層		32	28		4			0	0				0		
主郭	C-10	包含層		43		0	1	羽口0 不明0		0				0	丹波壺0		
主郭	D-10	包含層		16	2		1			0					丹波壺0		
主郭	A-11	包含層		25		0	1				0				0		
主郭	B-11	包含層		16	3	0	0								0	青磁碗2	
主郭	C-11	包含層		6		0				0							
主郭	A-12	包含層		33			5				0				0		
主郭	B-12	包含層		22	9	0	0			1	2						
主郭	C-12	包含層		15	10						0						
主郭	A-13	包含層		30	5	0	1	羽釜0			0	1		2			
主郭	B-13	包含層		140	15	0	10	羽口0 不明0	4		0			0			
主郭	C-13	包含層		206	164		0			3	0			0			
主郭	A-14	包含層		6							0						
主郭	B-14	包含層		120	10	0	2	不明0			0	0		0			
主郭	C-14	包含層		143	19	1	4		1	0				0			

付表2 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器個体度数数量表9

地区名	グリッド	遺構名	土師器					須恵器				陶磁器			その他		
			皿A	皿A1	皿A2	皿B	鍋	その他	碗	鉢	甕	その他	丹波甕	備前甕		その他	
土壘・空堀	B-06	土壘3 8号墳北側		43								0	不明0				
土壘・空堀	B-06	土壘3		16													
土壘・空堀	C-06	土壘3 8号墳南側						11		3		0					
土壘・空堀	D-06	土壘3 7号墳周溝（西）						0									
土壘・空堀	E-06	土壘3						1				0					
土壘・空堀	F-06	土壘3	0														
土壘・空堀	C-05	土壘3 8号墳南側						0		0		0					
土壘・空堀		土壘3						不明0				0					
土壘・空堀	A-05	土壘5						0									
土壘・空堀	B-05	土壘5		20				不明0				0					
土壘・空堀	C-05	土壘5		17			1					0					
土壘・空堀	D-05	土壘5	0					5				0					
土壘・空堀	E-05	土壘5						1									
土壘・空堀	D-06	土壘5 7号墳周溝（西）						0									
土壘・空堀		土壘5		5	4			0	不明0								
土壘・空堀	D-08	空堀1	0														
土壘・空堀	E-08	空堀1		5	2						0						
土壘・空堀	F-08	空堀1		3													
土壘・空堀		空堀1								7							
土壘・空堀	B-07	空堀1		2													
土壘・空堀	C-07	空堀1		2	2			0						0			
土壘・空堀	D-07	空堀4									0						
土壘・空堀	E-07	空堀4 7号墳周溝（南）		2					鉢2		1						
土壘・空堀	F-07	空堀4									1						
土壘・空堀	E-07	空堀2									0						
土壘・空堀	F-07	空堀2						0				0		0			
土壘・空堀	G-07	空堀2		1													
土壘・空堀	B-06	空堀2		26				1									
土壘・空堀	C-06	空堀2			8							経筒0					
土壘・空堀	D-06	空堀2	0								0						
土壘・空堀	E-06	空堀2									0						
土壘・空堀	D-06	空堀3						0									
土壘・空堀	B-05	空堀3						0				0					
土壘・空堀	C-05	空堀3						0				2	経筒2				
土壘・空堀	D-05	空堀3		6				1	不明0			0		0			
土壘・空堀		空堀3	0									0					

付表2 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器個体度数数量表11

地区名	グリッド	遺構名	土師器						須恵器				陶磁器			その他		
			皿A	皿A1	皿A2	皿B	鍋	その他	碗	鉢	甕	その他	丹波甕	備前甕	その他			
帯曲輪1	C-15	SK66		8														
帯曲輪1	B-15	集石15	0							2	0							
帯曲輪1	A-13	斜面		2														
帯曲輪1	A-14	斜面		10		0		鉢0										
帯曲輪1	B-14	斜面		3				0										
帯曲輪1	A-15	斜面		2								0						
帯曲輪1	B-15	斜面		157	22	0	1				1	2					瀬戸美濃卸皿2	瓦質土器0
帯曲輪1	C-15	斜面		31	7	0	1				1	0					瀬戸美濃卸皿1	
帯曲輪1	A-14	横堀		38				鉢0			1							
帯曲輪1	A-15	横堀		4		0												瓦質土器0
帯曲輪1	B-15	横堀		149	32	1	0				4	0						
帯曲輪1	C-15	横堀		265	53	2	6				5	0		0				
帯曲輪1	D-15	横堀		23	4	1	0											
帯曲輪1	O-14	平坦部		1														
帯曲輪1	A-15	平坦部		2														
帯曲輪1	B-15	平坦部								0								
東斜面	A-16	段状遺構1									0							
東斜面	A-15	焼土5		2														
東斜面	A-15	包含層		22			1			0	4							
東斜面	B-15	包含層					2			14								
東斜面	D-15	包含層	0															
東斜面	A-16	包含層		3	3		0			0	3	0						
東斜面	B-16	包含層		13	6		0			0	0	0						
東斜面	D-16	包含層		41	21	0	0							0				
堀切	C-18			492	208		0			5		4					瀬戸美濃碗2 青磁碗1・鉢1	
堀切	C-19	中層		51			3				0	0						
堀切	C-19			279	55					4		7	小皿2					
堀切	D-18・19	中層		12	14												丹波壺2	
堀切	D-18			154	30		5											
堀切	D-19			193	30		4					0						
堀切	E-18			646	103													
堀切	E-19			29	35		1					0						
堀切	F-18			190	213													
堀切		上層		306	27	10	13			5	2	0		0	0	青磁碗2	瓦質土器 風炉	
堀切		中層		576	163	0	19			0	0	0		0	0	瀬戸美濃0		
堀切				1105	204	0	6			3	7	0		0	0	瓦質土器0		

付表2 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器個体度数数量表12

地区名	グリッド	遺構名	土師器						須恵器				陶磁器			その他		
			皿A	皿A1	皿A2	皿B	鍋	その他	碗	鉢	甕	その他	丹波甕	備前甕	その他			
谷東	F-06	P114	0															
谷東	F-06	P116	0															
谷東	G-06	P122							不明0									
谷東	G-06	P120		2														
谷東	G-06	P119	0															
谷東	G-06	P121		2														
谷東	G-06	P118	0															
谷東	G-06	P115	0															
谷東	H-06	P123							不明0									
谷東	A-04・B-04	段状遺構3		15	5						1							
谷東	C-04・D-04・E-04	段状遺構4	0		16			3			2	0		0				
谷東	G-06	SK67		40	21			3			1							
谷東	G-06	SK68							蛸壺0									
谷東	G-06	SK69		2							2							
谷東	G-06	SK71		5							0							
谷東	H-06	SK70										0						
谷東	A-03	SK73	0					0										
谷東	O-03	通路	0											0				
谷東	A-03	通路	0					0										
谷東	B-03	通路		8				1			0	0						
谷東	C-03	通路		1														
谷東	F-06	包含層		1				3			0	0						
谷東	G-06	包含層		19	3			0	蛸壺1 不明0		0	0						
谷東	H-06	包含層						1										
谷東	A-05	包含層	0					1										
谷東	D-05	包含層						0				0		0				
谷東	E-05	包含層		2					不明0		0	0						
谷東	F-05	包含層						1										
谷東	G-05	包含層		5														
谷東	H-05	包含層		140	37													
谷東	O-04	包含層		5	3							0		0				
谷東	A-04	包含層		3				3			0	0	経筒0					
谷東	B-04	包含層		1														
谷東	C-04	包含層	0					0			0	0						
谷東	D-04	包含層		2				2			0	0						
谷東	E-04	包含層	0								4	0		0				

付表2 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器個体度数数量表13

地区名	グリッド	遺構名	土師器					須恵器				陶磁器			その他	
			皿A	皿A1	皿A2	皿B	鍋	その他	碗	鉢	甕	その他	丹波甕	備前甕		その他
谷東	F-04	包含層					0	不明0		0			0	0		
谷東	G-04	包含層		2							0					
谷東		包含層		17	6		0	不明0					0			
谷西	G-04	P125									0					
谷西	G-04	P124	0								0					
谷西	H-03	P126						不明0								
谷西	H-02	P127									0					
谷西	G-04・H-04	SK75	0				1						0			
谷西	G-04	SK76											0			
谷西	G-04	SK76P1											0			
谷西	G-04・H-04	SK77		3									0			
谷西	G-04	SK78		7							0					
谷西	G-04	SK78P1		1			0									
谷西	G-04	包含層			2								0			
谷西	F-03	包含層											0			
谷西	G-03	包含層		2									0			
谷西	H-03	包含層					0									
谷西	I-03	包含層	0				0				0					
谷西	K-03	包含層			3		3									
谷西	F-02	包含層									0		0			
谷西	G-02	包含層									0					
谷西	I-02	包含層					0				0					
谷西	B-01	包含層					2			0	0					
谷西	C-01	包含層		12						0	0			0		
谷西	D-01	包含層					0						0			
谷西	E-01	包含層					0				0					
谷西	B-00	包含層	0				2									
谷西	C-00	包含層		1		0	3			1	1		0			
谷西	D-00	包含層						鉢0			0					
谷西	E-20	包含層					0			0						
谷西		包含層	0				0			1	0		0			
西曲輪1	D-00	斜面	0								0		0	0		
西曲輪1	E-00	斜面		0			0	不明0						0		
西曲輪1	D-20	斜面				0	0									
西曲輪1	E-20	斜面					0									
西曲輪2	C-21	SK80		14		15	0	不明0	1	16	0			0		

付表2 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器個体度数数量表14

地区名	グリッド	遺構名	土師器						須恵器				陶磁器			その他	
			皿A	皿A1	皿A2	皿B	鍋	その他	碗	鉢	甕	その他	丹波甕	備前甕	その他		
西曲輪2	C-21	SK80周辺		2	3	0	1			2	0					青磁碗0	
西曲輪2	C-20	平坦部		12	1	10	0	鉢0、不明0	4	9	0				0		
西曲輪2	D-20	平坦部	0	4		37	0		11		2						
西曲輪2	C-21	平坦部				1					0						
西曲輪2	D-21	平坦部							0		0						
帯曲輪4	B-20・C-20	段状遺構5						鉢0			0	0					
帯曲輪4	C-22	横堀									0						
帯曲輪4	D-22	横堀				0	1				0						
帯曲輪4	C-00	平坦部				0					3						
帯曲輪4	B-20	平坦部		3			4				0						
帯曲輪4	C-20	平坦部						鉢0		0	1						
帯曲輪4	B-21	平坦部					3	鉢0									
帯曲輪4	C-21	平坦部				5				2	7						
帯曲輪4	D-22	平坦部					0										
帯曲輪5	J-02・K-02	平坦部						羽釜1									
西斜面	B-21	包含層					0		2								
西斜面	B-22	包含層					4				0						
西斜面	C-22	包含層								0	0						
不明	不明			34	30	0	1				0					丹波播鉢0	
合計			0	13923	4434	219	521	28	138	170	76	4	9	20		19	4
個体数			0	696.15	222	11	26.1	1.4	6.9	8.5	3.8	0.2	0.45	1		0.95	0.2

付表3 吉田住吉山遺跡（城跡）出土土器地区別個体度数数量表

地区名	土師器					須恵器				陶磁器			その他	合計
	皿A1	皿A2	皿B	鍋	その他	碗	鉢	甕	その他	丹波甕	備前甕	その他		
主郭	7045	2914	67	261	2	43	53	36	0	7	20	7	0	10455
土塁1	506	99	12	117	8	22	41	0	0	2	0	1	0	808
土塁・空堀	166	22	49	23	15	17	7	2	2	0	0	0	0	303
帯曲輪3	92	12	3	7	1	2	0	0	0	0	0	0	2	119
帯曲輪2	923	27	6	8	0	3	0	11	0	0	0	0	0	978
帯曲輪1	710	118	4	8	0	2	12	2	0	0	0	3	0	859
東斜面	81	30	0	3	0	14	7	0	0	0	0	0	0	135
堀切	4033	1082	10	51	0	17	9	11	2	0	0	8	2	5225
谷東	272	91	0	18	1	0	10	0	0	0	0	0	0	392
谷西	26	5	0	11	0	0	2	1	0	0	0	0	0	45
西曲輪1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
西曲輪2	32	4	63	1	0	16	27	2	0	0	0	0	0	145
帯曲輪4	3	0	5	8	1	0	2	11	0	0	0	0	0	30
西斜面	0	0	0	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0	6
不明	34	30	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	65
合計	13923	4434	219	521	28	138	170	76	4	9	20	19	4	19565

付表4 吉田住吉山遺跡(城跡)出土鉄製品一覧表1

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M001	武器・武具	短刀	谷東	E-04	包含層		(24.9)	2.7	0.55	刀身長19.4cm	100	115
M002	武器・武具	短刀	堀切	C-18	堀切		(22.7)	2.8	0.55	呑口式	100	115
M003	武器・武具	短刀	土塁1	C-08	金属工房1	炭層	(20.7)	2.7	0.9		100	115
M004	武器・武具	小刀	主郭		2号墳周溝	上層	(22.2)	1.8	0.4		100	115
M005	武器・武具	小刀	主郭		5号墳周溝(西)	上層	(15.95)	1.8	0.65		100	115
M006	武器・武具	小刀	堀切	C-19	堀切		(12.6)	1.8	0.5		100	115
M007	武器・武具	小刀	堀切	D-19	堀切		(17.4)	1.85	0.5	茎長10.7cm	100	115
M008	武器・武具	小刀	土塁1	D-08	9号墳周溝(南)		(10.5)	1.6	0.4		100	115
M009	武器・武具	小刀	主郭	C-08	土塁1東側		(7.85)	1.25	0.2		100	115
M010	武器・武具	鍔	主郭	A-10	6号墳周溝(東)	上層	(13.0)	0.8	0.7	鍔身長9.4cm、鑿形	101	116
M011	武器・武具	鍔	主郭	A-11	5号墳周溝(西)		(14.7)	0.8	0.5	鍔身長10.5cm、鑿形	101	116
M012	武器・武具	鍔	主郭		5号墳周溝(西)		(14.5)	0.65	0.35	鍔身長11.4cm、鑿形	101	116
M013	武器・武具	鍔	土塁1	C-08	金属工房1		(13.8)	0.9	0.75		101	116
M014	武器・武具	鍔	土塁1	C-08	P111		(15.1)	0.8	0.3	鍔身長11.2cm、鑿形	101	116
M015	武器・武具	鍔	堀切	C-19	堀切		15.5	0.7	0.5	鍔身長9.6cm、鑿形	101	116
M016	武器・武具	鍔	堀切	F-18	堀切		(10.5)	0.5	0.4	鍔身長9.8cm、鑿形	101	116
M017	武器・武具	鍔	堀切		堀切	上層	(16.0)	0.8	0.7	鑿形	101	116
M018	武器・武具	鍔	主郭		5号墳周溝(南)		(8.15)	1.2	0.5	鍔身長6.6cm、腸袂三角形	101	117
M019	武器・武具	鍔	主郭	B-09	SD01		14.05	1.4	0.55	鍔身長7.55cm、雁又	102	117
M020	武器・武具	鍔	土塁1	C-08	金属工房1		(6.2)	(3.55)	0.6	雁又	102	117
M021	武器・武具	小札	主郭	B-09	SD01		6.5	3.2	0.2	三ツ目本小札、漆付着	102	119
M022	武器・武具	小札	主郭	C-14	包含層		(3.8)	3.5	0.2		102	118
M023	武器・武具	小札	主郭	D-09	2号墳周溝(南)		(1.55)	2.15	0.2		102	118
M024	武器・武具	小札	主郭		5号墳周溝(南)	上層	(5.15)	2.5	0.2	三ツ目本小札	102	118
M025	武器・武具	小札	主郭		5号墳周溝(南)	上層	(4.6)	(1.3)	0.2	三ツ目札	102	118
M026	武器・武具	小札	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		6.75	3.0	0.35	碁石頭伊予札	102	118
M027	武器・武具	小札	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		(4.15)	2.9	0.2		102	118
M028	武器・武具	小札	主郭		5号墳周溝(南)		(3.45)	2.45	0.2		102	118
M029	武器・武具	小札	主郭	D-09	土塁1東側		6.75	2.7	0.8	碁石頭伊予札	102	119
M030	武器・武具	小札	主郭	D-09	土塁1東側		6.6	2.7	0.8	碁石頭伊予札	102	119
M031	武器・武具	小札	主郭	D-09	土塁1東側		6.6	2.55	2.0	碁石頭伊予札	102	119
M032	武器・武具	小札	主郭	D-09	土塁1東側		6.9	2.6		碁石頭伊予札	102	119
M033	武器・武具	小札	主郭	D-09	土塁1東側		6.95	2.7		碁石頭伊予札	102	119
M034	武器・武具	小札	主郭	D-09	土塁1東側		6.4	2.55		碁石頭伊予札	102	119
M035	武器・武具	小札	主郭	D-09	土塁1東側		6.6	2.9		本小札	102	119
M036	武器・武具	小札	主郭	D-09	土塁1東側		7.2	2.9		並孔本小札	102	119

付表4 吉田住吉山遺跡(城跡)出土鉄製品一覧表2

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M037	武器・武器	小札	主郭	D-09	土塁1東側		6.9	2.7	0.2	基石頭伊予札	102	118
M038	武器・武器	小札	堀切	D-18	堀切		6.9	2.45	0.2	基石頭伊予札	102	118
M039	武器・武器	小札	堀切	E-19	堀切		(3.45)	2.95	0.2		102	118
M040	武器・武器	小札	堀切		堀切		(3.7)	2.4	0.15	基石頭伊予札	102	118
M041	武器・武器	小札	谷西	G-04	P124		(3.0)	2.6	0.15	三ツ目札	102	118
M042	武器・武器	小札	谷西	G-04	SK76-P1		(6.95)	2.7	0.25	円頭伊予札	102	118
M043	武器・武器	小札	谷西	G-04	SK76-P1		(6.85)	2.7	0.2	円頭伊予札	102	118
M044	武器・武器	小札	谷西	G-04	SK76-P1		6.95	2.5	0.2	円頭伊予札	102	119
M045	武器・武器	不明	主郭	D-09	包含層		(7.15)	4.3	0.4	表面に漆、朱を塗布、 蛍光X線分析	102	119
M046	建築用具	釘A2	主郭	D-10	P072		2.9	0.45	0.45	完形	103	119
M047	建築用具	釘A4	主郭	D-10	P069		3.6	0.45	0.45		103	119
M048	建築用具	釘A1	主郭	B-10	SK14		8.4	0.5	0.5	完形	103	119
M049	建築用具	釘	主郭	D-10	SK23		2.85	0.45	0.4		103	119
M050	建築用具	釘	主郭	D-10	SK23		4.6	0.3	0.4		103	119
M051	建築用具	釘A4	主郭	B-12	SK29	南あぜ	3.5	0.45	0.5		103	119
M052	建築用具	釘A4	主郭	B-12	SK29	下層西あぜ	3.9	0.5	0.4		103	119
M053	建築用具	釘	主郭	B-12	SK29	西あぜ	4.6	0.3	0.4		103	119
M054	建築用具	釘	主郭	B-12	SK29	西あぜ	4.3	0.5	0.5		103	119
M055	建築用具	釘A1	主郭	C-13	SK47	下層	6.15	0.4	0.35		103	119
M056	建築用具	釘A1	主郭	C-13	SK47	下層	4.7	0.4	0.25		103	119
M057	建築用具	釘A2	主郭	C-13	SK47		5.0	0.6			103	119
M058	建築用具	釘A2	主郭	C-13	SK47		3.1	0.5	0.7		103	119
M059	建築用具	釘A3	主郭	C-13	SK47		2.8	0.4	0.4		103	119
M060	建築用具	釘A3	主郭	B-14	SK60	東半上層	6.1	0.4	0.45	ほぼ完存	103	119
M061	建築用具	釘A2	主郭	B-14+ C-14	SK62		7.4	0.6	0.6		103	119
M062	建築用具	釘A2	主郭	B-14	SK55		4.1	0.4	0.45		103	119
M063	建築用具	釘A2	主郭	B-08	集石1		3.9	0.45	0.4		103	119
M064	建築用具	釘A3	主郭	B-08	集石1		5.0	0.6	0.4		103	119
M065	建築用具	釘A2	主郭	A-10	集石3		6.6	0.5	0.5		103	119
M066	建築用具	釘A2	主郭	A-10	集石3		6.4	0.6	0.6		103	119
M067	建築用具	釘	主郭	B-08	焼土2		2.3	0.5	0.5		103	119
M068	建築用具	釘A2	主郭	B-08	焼土1		4.7	0.5	0.4	完形	103	119
M069	建築用具	釘B	主郭	B-08	焼土1		5.1	0.4	0.35		103	119
M070	建築用具	釘A1	主郭	C-09	鍛冶炉1		3.75	0.4	0.3		103	119
M071	建築用具	釘A2	主郭	C-09	鍛冶炉1		7.5	0.6	0.75		103	119
M072	建築用具	釘B	主郭	C-09	鍛冶炉1		7.5	0.4	0.35	完形	103	119

付表4 吉田住吉山遺跡(城跡)出土鉄製品一覧表3

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M073	建築用具	釘B	主郭	C-09	鍛冶炉1		3.05	0.45	0.5		103	119
M074	建築用具	釘B	主郭	C-09	鍛冶炉1		3.5	0.7	0.4		103	119
M075	建築用具	釘	主郭	C-09	鍛冶炉1		3.7	0.4	0.4		103	119
M076	建築用具	釘A2	主郭	A-12	炉2		1.8	0.6	0.55		103	119
M077	建築用具	釘A1	主郭	C-08	SD01		5.3	0.5	0.5		104	120
M078	建築用具	釘A2	主郭		SD01		4.95	0.4	0.55		104	120
M079	建築用具	釘	主郭	C-08	SD01		3.9	0.5	0.4		104	120
M080	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		4.0	0.65	0.6		104	120
M081	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		3.75	0.6	0.7		104	120
M082	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		2.7	0.5	0.5		104	120
M083	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		5.2	0.4	0.4		104	120
M084	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		8.1	0.6	0.5	ほぼ完形	104	120
M085	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		7.5	0.5	0.45		104	120
M086	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		6.5	0.6	0.6		104	120
M087	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		5.9	0.45	0.5		104	120
M088	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		5.4	0.5	0.45		104	120
M089	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		5.6	0.7	0.5		104	120
M090	建築用具	釘A2	主郭	C-08	SD01		4.85	0.6	0.6		104	120
M091	建築用具	釘	主郭	C-08	SD01		7.2	0.5	0.6		104	120
M092	建築用具	釘A3	主郭	C-08	SD01		7.8	0.6	0.55	ほぼ完形	104	120
M093	建築用具	釘	主郭	C-08	SD01		4.35	0.5	0.4		104	120
M094	建築用具	釘B	主郭	C-08	SD01		4.7	0.6	0.75	ほぼ完形	104	120
M095	建築用具	釘C	主郭	C-08	SD01		6.3	0.55	0.5		104	120
M096	建築用具	釘C	主郭	C-08	SD01		3.2	0.5	0.4		104	120
M097	建築用具	釘	主郭	C-08	SD01		7.4	0.5	0.55		104	120
M098	建築用具	釘	主郭	C-08	SD01		7.7	0.5	0.7		104	120
M099	建築用具	釘	主郭	C-08	SD01		5.0	0.6	0.6		104	120
M100	建築用具	釘	主郭	C-08	SD01		4.1	0.5	0.4		104	120
M101	建築用具	釘	主郭	C-08	SD01		3.6	0.5	0.45		104	120
M102	建築用具	釘A3	主郭	B-09	6号墳周溝(西)		3.95	0.65	0.6		105	120
M103	建築用具	釘A2	主郭	A-10	6号墳周溝(東)		8.0	0.7	0.9	ほぼ完形	105	120
M104	建築用具	釘A2	主郭		6号墳周溝(南)		3.7	0.5	0.65		105	120
M105	建築用具	釘A2	主郭	B-10	6号墳周溝(南)		3.5	0.5	0.4		105	120
M106	建築用具	釘A2	主郭	B-10	6号墳周溝(南)		5.7	0.5	0.55		105	120
M107	建築用具	釘A2	主郭		6号墳周溝(南)	上層	2.8	0.5	0.45		105	120
M108	建築用具	釘A3	主郭		6号墳周溝(南)		6.9	0.5	0.5	完形	105	120

付表4 吉田住吉山遺跡(城跡)出土鉄製品一覧表4

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M109	建築用具	釘A3	主郭	B-10	6号墳周溝(南)	上層	5.65	0.65	0.5		105	120
M110	建築用具	釘B	主郭	B-10	6号墳周溝(南)		3.45	0.45	0.55		105	120
M111	建築用具	釘C	主郭		6号墳周溝(南)		4.1	0.55	0.6		105	120
M112	建築用具	釘C	主郭		6号墳周溝(南)		4.4	0.5	0.45		105	120
M113	建築用具	釘C	主郭	B-10	6号墳周溝(南)		7.9	0.5	0.5		105	120
M114	建築用具	釘	主郭		6号墳周溝(南)		5.6	0.5	0.6		105	120
M115	建築用具	釘	主郭	B-10	6号墳周溝(南)		3.95	0.4	0.4		105	120
M116	建築用具	釘	主郭	B-10	6号墳周溝(南)		4.25	0.5	0.5		105	120
M117	建築用具	釘	主郭		6号墳周溝		4.1	0.5	0.5		105	120
M118	建築用具	釘	主郭	B-09	2号墳周溝(北)		3.4	0.6	0.5		105	120
M119	建築用具	釘	主郭	B-09	2号墳周溝(北)		2.8	0.4	0.5		105	120
M120	建築用具	釘A2	主郭	C-09	2号墳周溝(西)		4.5	0.5	0.6		105	120
M121	建築用具	釘B	主郭	C-09	2号墳周溝(西)		4.2	0.55	0.5		105	120
M122	建築用具	釘	主郭	D-10	2号墳周溝(南)		3.0	0.5	0.5		105	120
M123	建築用具	釘A2	主郭		2号墳周溝	上層	5.0	0.45	0.5		105	120
M124	建築用具	釘	主郭		2号墳周溝	上層	4.7	0.5	0.45		105	120
M125	建築用具	釘	主郭		2号墳周溝		3.6	0.7	0.6		105	120
M126	建築用具	釘	主郭		2号墳周溝		4.1	0.4	0.4	2点接合	105	120
M127	建築用具	釘A2	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		5.8	0.5	0.55		106	121
M128	建築用具	釘A2	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		4.1	0.45	0.55		106	121
M129	建築用具	釘A2	主郭		5号墳周溝(西)		4.2	0.6	0.55		106	121
M130	建築用具	釘A2	主郭		5号墳周溝(西)		4.3	0.5	0.5		106	121
M131	建築用具	釘A2	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		4.4	0.5	0.55	2点接合	106	121
M132	建築用具	釘A2	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		4.1	0.5	0.5		106	121
M133	建築用具	釘A2	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		3.5	0.4	0.4		106	121
M134	建築用具	釘A2	主郭		5号墳周溝(西)		7.0	0.5	0.65		106	121
M135	建築用具	釘A2	主郭		5号墳周溝(西)		7.3	0.5	0.5	完形	106	121
M136	建築用具	釘A2	主郭		5号墳周溝(西)	上層	7.6	0.5	0.6	ほぼ完存	106	121
M137	建築用具	釘A3	主郭		5号墳周溝(西)		6.45	0.7	0.7		106	121
M138	建築用具	釘A3	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		0.5	0.5	6.5		106	121
M139	建築用具	釘A3	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		3.0	0.45	0.5		106	121
M140	建築用具	釘A3	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		3.1	0.7	0.85		106	121
M141	建築用具	釘A4	主郭		5号墳周溝(西)	上層	5.2	0.4	0.6		106	121
M142	建築用具	釘A	主郭		5号墳周溝(西)		4.8	0.5	0.5		106	121
M143	建築用具	釘A	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		3.3	0.45	0.5		106	121
M144	建築用具	釘A	主郭		5号墳周溝(西)		7.3	0.5	0.55	完存	106	121

付表4 吉田住吉山遺跡(城跡)出土鉄製品一覧表5

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M145	建築用具	釘A	主郭		5号墳周溝(西)		6.35	0.4	0.45		106	121
M146	建築用具	釘A	主郭		5号墳周溝(西)		6.75	0.5	0.55		106	121
M147	建築用具	釘A	主郭		5号墳周溝(西)		6.1	0.5	0.55		106	121
M148	建築用具	釘A	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		4.3	0.5	0.6		106	121
M149	建築用具	釘A	主郭		5号墳周溝(西)		6.7	0.5	0.5		106	121
M150	建築用具	釘A	主郭		5号墳周溝(西)		5.85	0.45	0.4	ほぼ完形	106	121
M151	建築用具	釘B	主郭		5号墳周溝(西)		4.0	0.4	0.45		106	121
M152	建築用具	釘	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		4.35	0.6	0.7		106	121
M153	建築用具	釘	主郭		5号墳周溝(西)	上層	5.05	0.5	0.5		106	121
M154	建築用具	釘	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		4.2	0.4	0.6		106	121
M155	建築用具	釘	主郭		5号墳周溝(西)		2.65	0.5	0.4		106	121
M156	建築用具	釘A2	主郭	A-12	5号墳周溝(東)		8.8	0.55	0.6	ほぼ完形	107	121
M157	建築用具	釘A2	主郭	A-12	5号墳周溝(東)		8.3	0.7	0.8		107	121
M158	建築用具	釘A2	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		9.4	0.35	0.5	完形	107	121
M159	建築用具	釘A2	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		4.45	0.5	0.4		107	121
M160	建築用具	釘A2	主郭		5号墳周溝(南)	上層	4.25	0.4	0.3		107	121
M161	建築用具	釘A2	主郭		5号墳周溝(南)		7.4	0.65	0.65	完形	107	121
M162	建築用具	釘A2	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		4.0	0.4	0.55		107	121
M163	建築用具	釘A2	主郭		5号墳周溝(南)		2.95	0.6	0.6		107	121
M164	建築用具	釘A3	主郭		5号墳周溝(南)	上層	3.6	0.2	0.25		107	121
M165	建築用具	釘A3	主郭		5号墳周溝(南)	上層	4.8	0.45	0.5		107	121
M166	建築用具	釘A3	主郭		5号墳周溝(南)	上層	5.2	0.3	0.5	完形	107	121
M167	建築用具	釘A4	主郭		5号墳周溝(南)	上層	4.45	0.4	0.35		107	121
M168	建築用具	釘B	主郭		5号墳周溝(南)	上層	6.45	1.4	0.9		107	121
M169	建築用具	釘B	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		4.1	0.5	0.4		107	121
M170	建築用具	釘B	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		3.05	0.5	0.5		107	121
M171	建築用具	釘C	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		7.2	0.6	0.65		107	121
M172	建築用具	釘C	主郭		5号墳周溝(南)		8.9	1.0	0.75		107	121
M173	建築用具	釘C	主郭		5号墳周溝(南)	上層	5.1	0.4	0.5	完形	107	121
M174	建築用具	釘	主郭		5号墳周溝(南)		4.8	0.8	0.55		107	121
M175	建築用具	釘	主郭		5号墳周溝(南)	上層	9.3	0.5	0.55		107	121
M176	建築用具	釘	主郭		5号墳周溝(南)	上層	8.25	0.5	0.5		107	121
M177	建築用具	釘A	主郭		5号墳周溝(南)	上層	5.8	0.3	0.25		107	121
M178	建築用具	釘	主郭		5号墳周溝(南)		6.0	0.45	0.45		107	121
M179	建築用具	釘C	主郭		4号墳周溝(西)		5.9	0.55	0.5	ほぼ完形	107	121
M180	建築用具	釘A1	主郭	C-08	土塁1東側		2.9	0.4	0.4		108	122

付表4 吉田住吉山遺跡(城跡)出土鉄製品一覧表6

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M181	建築用具	釘A2	主郭	C-08	土塁1東側		7.4	0.5	0.6		108	122
M182	建築用具	釘A2	主郭	C-08	土塁1東側		6.6	0.65	0.5	完形	108	122
M183	建築用具	釘A2	主郭	C-08	土塁1東側		5.2	0.4	0.5		108	122
M184	建築用具	釘A2	主郭	C-08	土塁1東側		3.3	0.4	0.5		108	122
M185	建築用具	釘A2	主郭	B-08	土塁1東側		6.2	0.6	0.5	ほぼ完形	108	122
M186	建築用具	釘A2	主郭	C-08	土塁1東側		5.5	0.5	0.5		108	122
M187	建築用具	釘A2	主郭	C-08	土塁1東側		5.0	0.45	0.5		108	122
M188	建築用具	釘A2	主郭	C-08	土塁1東側		4.7	0.5	0.55		108	122
M189	建築用具	釘A3	主郭	C-08	土塁1東側		3.5	0.4	0.4		108	122
M190	建築用具	釘A3	主郭	D-08	土塁1東側		3.0	0.4	0.5		108	122
M191	建築用具	釘A3	主郭	C-08	土塁1東側		2.6	0.4	0.4		108	122
M192	建築用具	釘B	主郭	C-08	土塁1東側		3.6	0.85	0.6		108	122
M193	建築用具	釘C	主郭	B-08	土塁1東側		3.5	0.5	0.45		108	122
M194	建築用具	釘A2	主郭	B-08	包含層		3.0	0.5	0.7		108	122
M195	建築用具	釘A3	主郭	B-08	包含層		7.0	0.5	0.55	ほぼ完形	108	122
M196	建築用具	釘A2	主郭	A-09	包含層		7.4	0.45	0.5	ほぼ完存	108	122
M197	建築用具	釘A2	主郭	A-09	包含層		5.6	0.5	0.45		108	122
M198	建築用具	釘A2	主郭	D-10	包含層		2.6	0.6	0.55		108	122
M199	建築用具	釘A3	主郭	A-12	包含層		3.25	0.5	0.5		108	122
M200	建築用具	釘A3	主郭	A-12	包含層		2.8	0.4	0.5		108	122
M201	建築用具	釘A4	主郭	A-12	包含層		4.6	0.4	0.4	ほぼ完形	108	122
M202	建築用具	釘A1	主郭		包含層		4.4	0.4	0.3		108	122
M203	建築用具	釘B	主郭	C-13	包含層		5.7	0.6	0.6		108	122
M204	建築用具	釘C	主郭	C-13	包含層		7.6	0.7	0.7		108	122
M205	建築用具	釘A2	土塁1	B-08	土塁1		3.6	0.45	0.45		109	122
M206	建築用具	釘C	土塁1	B-08	土塁1	盛土	8.1	0.5	0.4	完形	109	122
M207	建築用具	釘A2	土塁1	B-08・ C-08	土塁1	盛土	4.5	0.6	0.5		109	122
M208	建築用具	釘	土塁1	B-08・ C-08	土塁1	盛土	5.5	0.7	0.7		109	122
M209	建築用具	釘C	土塁1	B-08・ C-08	土塁1	盛土	4.0	0.65	0.5		109	122
M210	建築用具	釘A2	土塁1	C-07	土塁1	盛土	6.6	0.6	0.55		109	122
M211	建築用具	釘A2	土塁1	C-07	土塁1	盛土	6.4	0.5	0.5		109	122
M212	建築用具	釘A2	土塁1	C-07	土塁1	盛土	4.6	0.45	0.5		109	122
M213	建築用具	釘A2	土塁1	C-07	土塁1	盛土	5.6	0.4	5.5		109	122
M214	建築用具	釘A2	土塁1	C-08	土塁1	盛土	5.75	0.35	0.55		109	122
M215	建築用具	釘A2	土塁1	C-08	土塁1	盛土	3.8	0.5	0.5		109	122
M216	建築用具	釘A2	土塁1	C-08	土塁1	盛土	2.75	0.7	0.7		109	122

付表4 吉田住吉山遺跡(城跡)出土鉄製品一覧表7

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M217	建築用具	釘C	土塁1	C-08	土塁1	盛土	3.6	0.7	0.7		109	122
M218	建築用具	釘C	土塁1	C-08	土塁1	盛土	7.3	0.5	0.55		109	122
M219	建築用具	釘	土塁1	C-08	土塁1	盛土	6.4	0.6	0.4		109	122
M220	建築用具	釘	土塁1	C-08	土塁1	盛土	7.05	0.55	0.55		109	122
M221	建築用具	釘A1	土塁1	D-08	土塁1	盛土	5.1	0.5	0.5		109	122
M222	建築用具	釘A2	土塁1	D-08	土塁1	盛土	5.15	0.5	0.45		109	122
M223	建築用具	釘A2	土塁1	D-08	土塁1	盛土	6.0	0.6	0.5		109	122
M224	建築用具	釘A2	土塁1	D-08	土塁1	盛土	3.5	0.7	0.8		109	122
M225	建築用具	釘A3	土塁1	D-08	土塁1	盛土	7.2	0.6	0.55	完形	109	122
M226	建築用具	釘	土塁1	D-08	土塁1	盛土	6.15	0.6	0.5		109	122
M227	建築用具	釘A2	土塁1	B-08	集石9	下層炭層	6.0	0.45	0.5		110	123
M228	建築用具	釘A2	土塁1	B-08	集石9		4.4	0.5	0.5	完形	110	123
M229	建築用具	釘C	土塁1	B-08	集石9		8.8	0.95	0.75	ほぼ完形	110	123
M230	建築用具	釘	土塁1	B-08	集石9		8.65	0.6	0.65		110	123
M231	建築用具	釘B	土塁1	C-07	集石10		8.2	0.45	0.4	ほぼ完形	110	123
M232	建築用具	釘	土塁1	C-07	集石10		8.6	0.4	0.4		110	123
M233	建築用具	釘A2	土塁1	D-08	集石13		2.5	0.45	0.5		110	123
M234	建築用具	釘A2	土塁1	D-08	集石13		5.0	0.5	0.6		110	123
M235	建築用具	釘A2	土塁1	B-07	焼土4	黄褐色層	8.8	0.5	0.3	ほぼ完存	110	123
M236	建築用具	釘A3	土塁1	B-07	焼土4	黄褐色層	5.9	0.55	0.65		110	123
M237	建築用具	釘A2	土塁1	B-07	焼土4	黄褐色層	2.9	0.3	0.4		110	123
M238	建築用具	釘A2	土塁1	B-07	焼土4	黄褐色層	4.0	0.5	0.6		110	123
M239	建築用具	釘A1	土塁1	C-08	金属工房1		9.25	0.6	0.55		110	123
M240	建築用具	釘A1	土塁1	C-08	金属工房1	炉675	5.75	0.55	0.4		110	123
M241	建築用具	釘C	土塁1	C-08	金属工房1	炉675	2.8	0.55	0.7		110	123
M242	建築用具	釘C	土塁1	C-08	金属工房1	炉675	2.95	0.65	0.4		110	123
M243	建築用具	釘C	土塁1	C-08	金属工房1	炉675	7.2	0.6	0.8	ほぼ完形	110	123
M244	建築用具	釘C	土塁1	C-08	金属工房1	炉675	3.05	0.35	0.35		110	123
M245	建築用具	釘	土塁1	C-08	金属工房1	炉675	3.4	1.1	0.6	金属学的分析	110	123
M246	建築用具	釘	土塁1	C-08	金属工房1		7.6	0.9	0.6		110	123
M247	建築用具	釘	土塁1	C-08	金属工房1		6.7	0.6	0.5		110	123
M248	建築用具	釘	土塁1	C-08	金属工房1		5.5	0.85	0.6		110	123
M249	建築用具	釘	土塁1	C-08	金属工房1	炉675	5.1	1.4	0.9	金属学的分析	110	123
M250	建築用具	釘	土塁1	C-08	金属工房1		3.95	0.8	0.6		110	123
M251	建築用具	釘	土塁1	C-08	金属工房1	炉675	4.7	0.7	0.7		110	123
M252	建築用具	釘	土塁1	C-08	金属工房1	炉675	3.75	0.85	0.8		110	123

付表4 吉田住吉山遺跡（城跡）出土鉄製品一覧表8

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M253	建築用具	釘	土塁1	C-08	金属工房1	炉1	4.3	1.6			110	123
M254	建築用具	釘A2	土塁・ 空堀	E-07	土塁2 7号墳周溝		6.5	0.4	0.6		111	123
M255	建築用具	釘A2	土塁・ 空堀		土塁2		7.5	0.5	0.4	完形	111	123
M256	建築用具	釘A2	土塁・ 空堀		土塁2		7.6	0.5	0.5	完形	111	123
M257	建築用具	釘A2	土塁・ 空堀		土塁2		6.0	0.55	0.5		111	123
M258	建築用具	釘	土塁・ 空堀		土塁2 7号墳周溝		9.4	0.5	0.55		111	123
M259	建築用具	釘	土塁・ 空堀	A-06	土塁3		7.45	0.65	0.6		111	123
M260	建築用具	釘A2	土塁・ 空堀	B-06	土塁3		3.1	0.6	0.6		111	123
M261	建築用具	釘A2	土塁・ 空堀	B-06	土塁3		2.2	0.6	0.5		111	123
M262	建築用具	釘A3	土塁・ 空堀	B-06	土塁3		2.2	0.4	0.5		111	123
M263	建築用具	釘B	土塁・ 空堀	C-06	土塁3		5.0	0.6	0.4	完形	111	123
M264	建築用具	釘B	土塁・ 空堀	C-06	土塁3		7.55	1.35	0.4		111	123
M265	建築用具	釘A2	土塁・ 空堀	D-06・ E-06	土塁3 SK64		7.8	0.55	0.5		111	123
M266	建築用具	釘A2	土塁・ 空堀	C-05	土塁5		5.6	0.5	0.4	ほぼ完形	111	123
M267	建築用具	釘B	土塁・ 空堀	C-05	土塁5		5.5	0.6	0.3		111	123
M268	建築用具	釘A3	土塁・ 空堀	C-05	土塁5		8.2	0.55	0.6	ほぼ完形	111	123
M269	建築用具	釘	土塁・ 空堀	C-05	土塁5		8.2	0.55	0.45		111	123
M270	建築用具	釘	土塁・ 空堀	D-05	空堀3		6.6	0.55	0.6		111	123
M271	建築用具	釘A2	帯曲輪3	B-07	横堀		8.3	0.5	0.6	ほぼ完存	112	123
M272	建築用具	釘A2	帯曲輪3	B-08	横堀		4.3	0.5	0.5		112	123
M273	建築用具	釘A3	帯曲輪3	B-07	横堀		4.4	0.5	0.45		112	123
M274	建築用具	釘A2	帯曲輪2	A-11	横堀		4.4	0.5	0.6		112	124
M275	建築用具	釘A2	帯曲輪2	A-11	横堀		3.25	0.65	0.7		112	124
M276	建築用具	釘A2	帯曲輪2	A-13	横堀		3.8	0.6	0.5		112	124
M277	建築用具	釘B	帯曲輪2	O-13	横堀		5.1	0.6	0.5		112	124
M278	建築用具	釘C	帯曲輪2	A-10	横堀		3.55	0.5	0.6		112	124
M279	建築用具	釘C	帯曲輪2	A-12	横堀		2.7	0.5	0.45		112	124
M280	建築用具	釘	帯曲輪2	A-10	横堀		4.85	0.7	1.0		112	124
M281	建築用具	釘A2	帯曲輪2	A-13	横堀	土橋下層 焼土層	8.6	0.4	0.5	完形	112	124
M282	建築用具	釘A2	帯曲輪2	A-13	横堀	土橋下層 焼土層	6.0	0.5	0.5	ほぼ完形	112	124
M283	建築用具	釘A2	帯曲輪2	A-13	横堀	土橋下層 焼土層	7.4	0.6	0.7	完形	112	124
M284	建築用具	釘A2	帯曲輪2	A-13	横堀	土橋下層 焼土層	7.2	0.5	0.45	完形	112	124
M285	建築用具	釘A2	帯曲輪2	A-13	横堀	土橋下層 焼土層	4.5	0.5	0.4		112	124
M286	建築用具	釘A2	帯曲輪2	A-13	横堀	土橋下層 焼土層	6.2	0.5	0.5	完形	112	124
M287	建築用具	釘A2	帯曲輪2	A-13	横堀	土橋下層 焼土層	6.4	0.4	0.5		112	124
M288	建築用具	釘A3	帯曲輪2	A-13	横堀	土橋下層 焼土層	4.8	0.5	0.45		112	124

付表4 吉田住吉山遺跡(城跡)出土鉄製品一覧表9

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M289	建築用具	釘C	帯曲輪2	A-13	横堀	土橋下層 焼土層	5.8	0.5	0.5		112	124
M290	建築用具	釘A2	帯曲輪1	B-15	斜面		5.2	0.5	0.5		112	124
M291	建築用具	釘A1	帯曲輪1	C-15	横堀		3.2	0.3	0.4		112	124
M292	建築用具	釘A2	帯曲輪1	C-15	横堀		1.9	0.5	0.6		112	124
M293	建築用具	釘	帯曲輪1	C-15	横堀		5.95	0.6	0.55		112	124
M294	建築用具	釘	東斜面	D-16	包含層		6.8	0.4	0.3		112	124
M295	建築用具	釘A3	堀切	C-18	堀切		4.8	0.4	0.4		113	124
M296	建築用具	釘A	堀切	C-19	堀切		6.3	0.5	0.35		113	124
M297	建築用具	釘A	堀切	D-18	堀切		6.7	0.5	0.5		113	124
M298	建築用具	釘A	堀切	D-19	堀切		4.65	0.4	0.5		113	124
M299	建築用具	釘A2	堀切		堀切		5.4	0.45	0.55		113	124
M300	建築用具	釘A2	堀切		堀切		5.45	0.6	0.7		113	124
M301	建築用具	釘A2	堀切	E-18	堀切		6.0	0.6	0.55		113	124
M302	建築用具	釘A	堀切	E-19	堀切			0.5	0.6		113	124
M303	建築用具	釘A2	堀切	E-19	堀切		5.6	0.3	0.4		113	124
M304	建築用具	釘A2	堀切	E-19	堀切		2.6	0.3	0.4		113	124
M305	建築用具	釘A3	堀切	E-19	堀切		5.6	0.3	0.5		113	124
M306	建築用具	釘	堀切	E-19	堀切		7.3	0.55	0.6		113	124
M307	建築用具	釘A2	堀切	E-18・19	堀切	中層	3.0	0.55	0.55		113	124
M308	建築用具	釘A3	堀切	E-18・19	堀切	中層	4.6	0.6	0.6		113	124
M309	建築用具	釘A3	谷東	G-06	P114		10.0	0.6	0.5	完形	113	124
M310	建築用具	釘A2	谷東	G-06	SK67	北半	5.0	0.4	0.3	ほぼ完形	113	124
M311	建築用具	釘A1	谷東	F-05	SK72		4.5	0.4	0.45		113	124
M312	建築用具	釘B	谷東	A-03	SK73		6.8	0.5	0.5		113	124
M313	建築用具	釘A2	谷東	D-04	包含層		6.7	0.5	0.6	ほぼ完形	113	124
M314	建築用具	釘A4	谷東	O-04	包含層		4.0	0.35	0.4		113	124
M315	建築用具	釘A2	谷東	D-05	包含層		4.9	0.55	0.4		113	124
M316	建築用具	釘A2	谷東	G-05	包含層		4.7	0.5	0.5		113	124
M317	建築用具	釘A3	谷東		包含層		5.8	0.25	0.45		113	124
M318	建築用具	釘A2	谷西	G-04・ H-04	SK77		8.0	0.6	0.6	完形	114	125
M319	建築用具	釘A2	谷西	G-04・ H-04	SK77		7.1	0.5	0.55	ほぼ完形	114	125
M320	建築用具	釘A3	谷西	H-04	包含層		5.2	0.55	0.5		114	125
M321	建築用具	釘A2	谷西	E-01	包含層		3.55	0.65	0.55		114	125
M322	建築用具	釘B	谷西		包含層		1.4	0.65	0.6		114	125
M323	建築用具	釘A2	西曲輪2	C-21	SK80		5.85	0.7	0.65		114	125
M324	建築用具	釘A2	西曲輪2	C-21	SK80		3.3	0.5	0.7		114	125

付表4 吉田住吉山遺跡(城跡)出土鉄製品一覧表10

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M325	建築用具	釘A2	西曲輪2	C-21	SK80		1.75	0.5	0.45		114	125
M326	建築用具	釘A3	西曲輪2	C-21	SK80		10.5	0.8	0.9	完形	114	125
M327	建築用具	釘C	西曲輪2	C-21	SK80		5.2	0.4	0.55		114	125
M328	建築用具	釘	西曲輪2	C-21	SK80		2.75	0.6	0.6		114	125
M329	建築用具	釘A1	西曲輪2	D-20	平坦部		4.3	0.55	0.55		114	125
M330	建築用具	釘	西曲輪2	D-20	平坦部		6.6	1.1	0.75		114	125
M331	建築用具	釘	西曲輪2	D-20	平坦部		7.1	1.3	0.9		114	125
M332	建築用具	釘A3	西曲輪2	C-20	平坦部		5.35	0.55	0.65		114	125
M333	建築用具	釘	西曲輪2	C-20	平坦部		8.05	0.7	0.65		114	125
M334	建築用具	釘B	西曲輪2	C-20	平坦部		8.8	0.7	0.55		114	125
M335	建築用具	釘B	西曲輪2	C-20	平坦部		1.5	0.8	0.65		114	125
M336	建築用具	釘	西曲輪2	C-20	平坦部		2.9	0.45	0.55		114	125
M337	建築用具	釘	西曲輪2	C-20	平坦部		3.8	0.55	0.5		114	125
M338	建築用具	釘	西曲輪2	C-20	平坦部		3.7	1.0	0.45		114	125
M339	建築用具	釘A2	帯曲輪4	C-00	平坦部		6.9	0.75	0.75		114	125
M340	建築用具	煽り止め	主郭	D-09	包含層		(9.0)	0.5	0.5		115	125
M341	建築用具	煽り止め	主郭	D-10	SK23		4.2	0.5	0.4		115	125
M342	建築用具	鍵	主郭	C-08	土塁1東側		8.0	3.8	0.8		115	125
M343	農工具	斧	主郭	C-09	P021		10.1	5.3	3.7		115	125
M344	農工具	鎌	主郭		2号墳周溝	上層	(9.3)	1.0	0.6		115	126
M345	農工具	鎌	堀切	D-19	堀切		8.9	10.8	1.15		115	126
M346	農工具	鎌	谷東	G-06	SK67		17.1	15.0	0.55		115	126
M347	農工具	鎌	堀切	E-18	堀切		7.5	1.3	0.5		115	126
M348	生活用具	鍋	主郭	B-11	SK23					口径49.2cm、器高13.15cm	116	126
M349	生活用具	鍋	主郭	B-13・14	4号墳周溝(西)					残存高1.9cm	116	127
M350	生活用具	鍋	土塁・空堀	C-07	空堀1					残存高3.0cm	116	127
M351	生活用具	五徳	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		23.5	27.2	16.8	環部復元径19.0cm	116	127
M352	生活用具	火打金	帯曲輪2	A-11	横堀		3.5	(6.6)	0.5		116	127
M353	その他	鋳留金具	谷東	E-04	包含層		3.85	2.4	1.9		117	127
M354	その他	鋳留金具	西曲輪2	C-20	平坦部		3.8	1.4	0.25		117	127
M355	その他	座金具	土塁1	C-08	金属工房1		1.8	1.9	0.2		117	127
M356	その他	板状製品	主郭	C-09	土塁1東側		3.3	2.1	0.2		117	127
M357	その他	板状製品	堀切	E-18	堀切		7.0	1.5	0.8		117	127
M358	その他	環状製品	主郭	C-10	2号墳周溝(南)		3.1	3.0	0.6		117	127
M359	その他	環状製品	主郭	A-13	5号墳周溝(東)		3.1	3.2	1.0		117	127
M360	その他	環状製品	主郭	C-09	包含層		5.4	5.3	0.8		117	127

付表4 吉田住吉山遺跡(城跡)出土鉄製品一覧表11

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M361	その他	環状製品	主郭	B-10	SK11		3.5	3.6	1.7		117	127
M362	その他	環状製品	土塁1	C-08	金属工房1		2.25	3.0	0.4		117	127
M363	その他	管状製品	主郭		5号墳周溝(東)		4.3	1.0	1.0		117	127
M364	その他	管状製品	土塁1	C-08	土塁1	盛土	4.2	0.55	0.55	孔径0.2cm	117	127
M365	その他	球状製品	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		3.0	2.7	2.6		117	127
M366	その他	板状製品	土塁1	C-08	金属工房1		17.9	1.65	0.5		117	128
M367	その他	板状製品	土塁・ 空堀	B-07	空堀1		4.65	1.4	0.4		117	128
M368	その他	板状製品	主郭	C-08	土塁1東側		7.35	1.3	0.5		117	128
M369	その他	板状製品	堀切	C-18	堀切		10.25	1.0	0.4		117	128
M370	その他	板状製品	堀切	E-18・ 19	堀切	中層	5.6	1.05	0.3		117	128
M371	その他	板状製品	堀切	C-18	堀切		6.2	0.5	0.2		117	128
M372	その他	板状製品	土塁・ 空堀	B-06	土塁2		12.5	2.0	0.4		117	128
M373	その他	板状製品	堀切	E-18	堀切		7.4	3.05	0.3		118	128
M374	その他	板状製品	堀切	E-18	堀切		3.8	2.8	0.2		118	128
M375	その他	棒状製品	土塁・ 空堀	D-06	空堀3 7号墳周溝		7.7	0.45	0.45		118	128
M376	その他	棒状製品	主郭	B-08	焼土1		10.7	0.5	0.6		118	128
M377	その他	鉄片	土塁1	E-08	集石14		5.7	3.6	0.4	金属学的分析	118	128
M378	その他	鉄片	主郭	A-12	炉1	焼土の下	5.2	7.05	0.5		118	128
M379	その他	鉄片	主郭	C-08	土塁1東側		5.7	3.6	0.4	金属学的分析	118	128
M380	その他	鉄片	主郭	A-09	包含層		2.0	2.3	0.5		118	128
M381	その他	鉄片	主郭	A-09	包含層		6.1	5.3	0.5		118	128
M382	その他	鉄片	主郭	A-09	包含層		4.45	3.3	0.6		118	128
M383	その他	鉄片	主郭	B-09	包含層		6.4	7.1	0.5		118	128
M384	その他	鉄片	帯曲輪3	A-09	斜面		3.55	2.4	0.4		118	128
M385	その他	鉄片	帯曲輪2	A-12	斜面		6.95	5.2	0.4		118	128
M386	その他	鉄片	帯曲輪1	A-14	斜面		6.1	2.65	0.5		118	128
M387	その他	鉄片	帯曲輪1	C-15	斜面		6.1	2.5	0.4		118	128
M388	その他	鉄片	堀切	C-18	堀切		4.95	1.2	0.4		118	128
M389	その他	鉄片	堀切	C-18	堀切		2.85	1.5	0.4		118	128
M390	その他	鉄片	堀切	E-18・ 19	堀切	中層	3.4	1.05	0.2		118	128
M391	その他	鉄片	西曲輪				3.65	2.75	3.05		118	128
M392	鍛冶関連遺物	鉄塊	主郭	B-09	6号墳周溝(西)		4.1	1.4	1.6	重量36.33g、金属学 的分析	119	129
M393	鍛冶関連遺物	鉄塊	主郭	B-11	5号墳周溝(西)		5.9	3.7	2.3	重量123.55g	119	129
M394	鍛冶関連遺物	鉄塊	主郭	B-12	包含層		4.8	2.1	2.1	重量26.87g、金属学 的分析	119	129
M395	鍛冶関連遺物	鉄塊	主郭	C-08	金属工房1	炭層	4.25	3.2	2.1	重量63.13g、金属学 的分析	119	129
M396	鍛冶関連遺物	鉄滓	主郭	A-12	SK29	下層	4.7	3.3	1.1	重量13.39g、金属学 的分析	119	129

付表4 吉田住吉山遺跡（城跡）出土鉄製品一覧表12

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M397	鍛冶関連遺物	鉄滓	主郭	B-14	SK56		4.6	7.2	1.45	重量19.45g、金属学 的分析	119	129
M398	鍛冶関連遺物	鉄滓	主郭	B-09	6号墳周溝(西)		6.1	4.9	3.4	重量74.40g	119	129
M399	鍛冶関連遺物	鉄滓	主郭	A-10	6号墳周溝(東)		7.1	6.4	2.0	重量87.55g、金属学 的分析	119	129
M400	鍛冶関連遺物	鉄滓	主郭	C-10	包含層		4.6	4.05	2.0	重量50.15g	119	129
M401	鍛冶関連遺物	鉄滓	土塁1	C-08	金属工房1	炭層	3.9	4.0	2.45	重量25.69g、金属学 的分析	119	129
M402	鍛冶関連遺物	鉄滓	土塁1	C-08	金属工房1	炉1	4.4	2.8	2.0	重量23.17g金属学 的分析	119	129
M403	鍛冶関連遺物	鉄滓	土塁1	C-08	金属工房1	炭層	3.1	2.2	1.6	重量9.10g、金属学 的分析	119	129
M404	鍛冶関連遺物	鉄滓	土塁1	C-08	金属工房1	炉1	3.6	2.1	1.4	重量9.19g、金属学 的分析	119	129
M405	鍛冶関連遺物	鉄滓	土塁1	C-08	金属工房1	炉1・炭層				細片多数	119	129
M406	鍛冶関連遺物	鉄滓	土塁1	C-07	土塁1		4.2	4.3	2.00	重量29.67g	119	129
M407	鍛冶関連遺物	鉄滓	堀切	C-18	堀切		5.3	5.05	2.8	重量45.83g	119	129

付表5 吉田住吉山遺跡（城跡）出土銅製品一覧表

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量 (cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
M408	武器・武具	飾金具	堀切		堀切	中層	4.8	8.6	2.1	蛍光X線分析	120	130 131
M409	武器・武具	覆輪	主郭	C-10	SK17		40.98mm	6.00mm	1.25mm	蛍光X線分析	120	132
M410	武器・武具	縁金具	主郭	B-08	焼土1		13.62mm	27.90mm	0.98mm	蛍光X線分析	120	132
M411	武器・武具	飾金具	堀切	C-19	堀切		39.83mm	6.72mm	2.11mm	蛍光X線分析	120	132
M412	生活用具	鍋	帯曲輪1	B-15	斜面		口径17.3	器高1.9	-	金属学的分析	120	132
M413	冶金関連遺物	銅塊	主郭	B-12	5号墳周溝(南)		104.20mm	57.00mm	21.40mm	重量 204.02g、金属学的分析	121	132
M414	冶金関連遺物	銅塊	土塁1	C-08	金属工房1	炭層	30.11mm	17.03mm	6.12mm	重量 11.33g	121	132
M415	冶金関連遺物	銅板	土塁1	C-08	金属工房1	炭層	20.63mm	9.93mm	3.62mm	重量 2.54g	121	132
M416	冶金関連遺物	銅滴	土塁1	C-08	金属工房1	炉1	10.33mm	10.05mm	6.88mm	重量 1.46g、蛍光X線分析	121	132

付表6 吉田住吉山遺跡（城跡）出土銅錢一覽表1

番号	種類	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(mm)				備考	図版	写真 図版
						縦	横	孔縦	孔横			
M417	天(禧)通宝	主郭		6号墳周溝		-	-	-	-		-	133
M418	太平通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.48	24.66	5.98	5.98	蛍光X線分析	122	133
M419	咸平元宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.92	24.62	5.81	5.86	蛍光X線分析	122	133
M420	咸平元宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		23.35	23.34	6.22	6.00	島銭、蛍光X線分析	122	133
M421	祥符元宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.40	23.97	5.56	5.75		122	133
M422	天(禧通)宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		23.71	(22.71)	6.00	5.92	蛍光X線分析	122	133
M423	天禧通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.70	(24.62)	5.97	6.26	蛍光X線分析	122	133
M424	皇宋通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		25.16	25.17	7.57	7.33	真書、蛍光X線分析	122	133
M425	皇宋通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.59	25.04	7.02	7.02	真書	122	133
M426	皇宋通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.40	24.51	6.63	6.23	真書、蛍光X線分析	122	133
M427	皇宋通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.75	24.75	6.50	6.23	篆書、蛍光X線分析	122	133
M428	皇宋通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.34	24.33	5.91	5.91	篆書、蛍光X線分析	122	133
M429	皇宋通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.66	-	7.04	6.91	篆書	122	134
M430	熙寧元宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		23.68	23.75	6.15	6.16	篆書、蛍光X線分析	122	134
M431	熙寧元宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.62	24.60	6.40	6.41	篆書、蛍光X線分析	122	134
M432	元豊通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.11	24.31	6.47	6.76	行書、蛍光X線分析	122	134
M433	元豊通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		-	24.85	6.28	6.32	篆書	122	134
M434	元祐通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.32	24.29	6.90	6.82	行書、蛍光X線分析	122	134
M435	元祐通宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		24.38	24.32	5.89	5.90	篆書、蛍光X線分析	122	134
M436	淳熙元宝	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		(23.76)	(24.21)	6.28	6.21	真書、背文「柒」蛍光X線	122	134
M437	●元●●	主郭	A-14	4号墳周溝(西)		-	-	-	-		-	134
M438	咸平元宝	主郭	E-09	土塁1東側		-	-	-	-		-	134
M439	皇宋通宝	主郭	E-09	土塁1東側		-	-	-	-		-	134
M440	寛永通宝	主郭	E-09	土塁1東側		23.81	23.80	6.00	6.33		122	134
M441	(皇)宋(通宝)	土塁1	C-07	土塁1	礫層	-	-	-	-		-	134
M442	大観通宝	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		36.72	26.80	-	-		123	135
M443	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M444	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M445	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M446	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M447	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M448	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M449	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M450	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M451	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M452	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135

付表6 吉田住吉山遺跡（城跡）出土銅錢一覽表2

番号	種類	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(mm)				備考	図版	写真 図版
						縦	横	孔縦	孔横			
M453	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M454	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M455	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M456	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M457	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M458	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M459	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M460	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M461	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M462	元豊通宝	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-	篆書	123	135
M463	元豊通宝	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		36.43	29.68	-	-	篆書	123	135
M464	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M465	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M466	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M467	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M468	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M469	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M470	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M471	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M472	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M473	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M474	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M475	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M476	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M477	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M478	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M479	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M480	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M481	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M482	太平通宝	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		25.42	25.30	-	-		123	135
M483	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M484	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M485	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M486	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M487	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M488	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M489	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-		123	135
M490	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	-	-	背文「三」	123	135

付表6 吉田住吉山遺跡（城跡）出土銅錢一覽表3

番号	種類	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(mm)				備考	図版	写真 図版
						縦	横	孔縦	孔横			
M491	淳化元宝	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		(24.60)	-	5.94	6.04	草書	123	136
M492	景德元宝	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		25.16	25.13	6.51	5.92		123	136
M493	不明(接合)	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		-	-	7.18	7.00		123	136
M494	祥符元宝	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		25.44	25.50	6.29	6.49		123	136
M495	皇宋通宝	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝						真書	-	136
M496	皇宋通宝	土塁1	D-08	土塁1、9号墳周溝		24.55	(24.37)	6.47	6.41	真書、蛍光X線分析	123	136
M497	嘉祐通宝	土塁1	E-08	土塁1		(22.65)	(22.77)	6.87	7.15	真書	123	136
M498	元豊通宝	土塁1	E-08	集石14		24.85	24.75	6.77	6.78	篆書	123	136
M499	元豊通宝	土塁1	E-08	集石14		(19.86)	-	5.66	-	折二、篆書	123	136
M500	不明(摩耗)	土塁1	B-07	焼土4周辺							-	136
M501	寛永通宝	土塁・空堀	D-07	空堀1		23.10	23.10	6.43	6.34		123	136
M502	元豊通宝	帯曲輪2	A-10	斜面		24.81	24.73	5.86	7.25	篆書	123	136
M503	天聖元宝	堀切		堀切	上層	24.00	23.72	6.82	6.78	篆書	123	136
M504	元豊通宝	堀切		堀切	上層					篆書	-	136
M505	不明(摩耗)	堀切	D-19	堀切							-	136
M506	淳化元宝	谷西	G-03	包含層		22.49	(22.14)	5.69	5.96	草書	123	136
M507	元豊通宝	谷西	G-03	包含層		24.53	23.35	6.96	7.12	行書	-	136
M508	不明(接合)	谷西	G-03	包含層		24.53	23.35	6.96	7.12		-	136
M509	不明(接合)	谷西	G-03	包含層		-	-	7.20	-		-	136
M510	不明(接合)	谷西	G-03	包含層		-	-	-	-		123	136
M511	寛永通宝	西曲輪1	D-20	斜面		22.63	22.37	6.29	6.09		123	136

付表7 吉田住吉山遺跡（城跡）出土石製品一覧表

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量(cm)			備考	図版	写真 図版
							長	幅	厚			
S01	石製品	硯	堀切		堀切	上層	13.4	8.5	2.1	刻銘あり	124	137
S02	石製品	硯	堀切	C-19	堀切		13.85	9.55	2.2	石材鑑定	124	137
S03	石製品	石鍋	谷西	K-03	包含層					鏝部径 32.8cm	125	138
S04	石製品	温石	主郭	C-09	2号墳周溝(西)		10.8	9.15	2.65	重量 550.1g、石材鑑定	125	138
S05	石製品	砥石	主郭		6号墳周溝(南)		(12.7)	3.05	1.2	石材鑑定	125	138
S06	石製品	砥石	堀切	B-18	堀切		(14.45)	4.4	2.25	石材鑑定	125	138
S07	石製品	砥石	谷東	E-04	包含層		(7.5)	(2.8)	0.8	石材鑑定	125	138
S08	石製品	砥石	主郭	A-12	炉2		(3.25)	(2.45)	0.4	石材鑑定	125	138
S09	石製品	金床石	土塁1	B-08	金属工房1		(11.15)	(6.45)	3.6		125	138

付表8 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・吉田住吉山遺跡(弥生)出土土器一覧表1

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	位置	法量(cm)			口縁 残存	備考	図版	写真 図版	挿図
							口径	器高	底径					
401	須恵器	甕	主郭	C-09	吉田住吉山2号墳	周溝(西)	23.6	40.9	41.0	1/4欠	三辻10	133	144	
402	土師器	壺	主郭	A-12	吉田住吉山5号墳	北棺	22.5	40.7	32.3		パリノ6	144	163	
403	土師器	椀	主郭		吉田住吉山5号墳	周溝(西)				わずか		144	-	
404	須恵器	坏H身	主郭	B-10	吉田住吉山6号墳	周溝(南)	(12.0)	4.6+		3/8		144	166	
405	須恵器	無蓋高坏		B-09	吉田住吉山6号墳	周溝(西)	(13.6)	5.5+	-	わずか		146	166	
406	須恵器	壺			吉田住吉山6号墳	周溝(南)	(11.2)	19.5+	-	わずか	三辻8	146	166	
407	須恵器	甕		B-10	吉田住吉山6号墳	周溝(西)	(30.9)	61.7+	-		三辻9	146	166	
408	須恵器	坏H蓋	土塁2	D-06	吉田住吉山7号墳	南棺枕	14.6	5.0	-	5/6		151 153	173 177	
409	須恵器	坏H身	土塁2	D-06	吉田住吉山7号墳	南棺枕	12.1	4.4	-			151 153	173 177	
410	須恵器	坏H蓋	土塁2	D-06	吉田住吉山7号墳	南棺枕	14.8	5.2		5/8		151 153	173 177	
411	須恵器	坏H身			吉田住吉山7号墳	南棺枕	(12.0)	4.6+		7/8		151	173	
412	須恵器	坏H身	土塁2	D-06	吉田住吉山7号墳	南棺枕	13.1	5.0	-	一部欠		151	173	
413	須恵器	坏H蓋		D-06	吉田住吉山7号墳	北棺枕	15.1	5.3				151 153	173 177	
414	須恵器	坏H身		D-06	吉田住吉山7号墳	北棺枕	13.0	4.7+				151 153	173 178	
415	須恵器	坏H蓋	土塁2	D-06	吉田住吉山7号墳	墳丘	(15.4)	4.3+		1/8弱		151	175	
416	須恵器	坏H身	土塁2	D-06	吉田住吉山7号墳	周溝(北)	-	4.4+	-			151	-	
417	須恵器	坏H蓋	土塁2	D-06	吉田住吉山7号墳	周溝(北)(東)	14.5	4.7		1/4		151	173	
418	須恵器	坏H身	土塁2		吉田住吉山7号墳	周溝(北東)	12.5	3.9		5/8		151 153	174 178	
419	須恵器	坏H蓋	土塁4	D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	(15.0)	5.0		1/8		151 153	175 178	
420	須恵器	坏H蓋	土塁4	D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	14.0	5.2		4/8		151 153	173 178	
421	須恵器	坏H蓋	土塁4	D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	14.0	4.6	-	2/3		151 153	173 178	
422	須恵器	坏H蓋	土塁4	D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	14.5	4.3+		3/4		151 153	173 178	
423	須恵器	坏H蓋	土塁4	D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	14.5	4.1		3/4	三辻20	151 153	173 179	
424	須恵器	坏H身	土塁4	D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	(13.2)	4.9		わずか		151 153	179	
425	須恵器	坏H身		D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	13.1	4.6	-	1/3		151	174	
426	須恵器	坏H身	土塁4	D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	(12.8)	4.7		わずか	三辻21	151 153	179	
427	須恵器	短頸壺		D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	-	7.7+	-			152	175	
428	須恵器	甕		D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	-	18.6+	-		三辻22	152	175	
429	須恵器	甕	土塁4	D-07	吉田住吉山7号墳	周溝(東)	(19.6)	5.7+		1/3	三辻23	152	175	
430	須恵器	坏H蓋	土塁2	E-07	吉田住吉山7号墳	周溝(南)	14.5	5.3	-	1/2		152	174	
431	須恵器	坏H蓋	土塁2		吉田住吉山7号墳	周溝(南)	14.8	4.3	-	1/2弱	三辻24	152	174	
432	須恵器	短頸壺	土塁2	E-07	吉田住吉山7号墳	周溝(南)	8.0	7.7		7/8		152 153	174 180	
433	須恵器	短頸壺	土塁2	D-06	吉田住吉山7号墳	周溝(南)	(8.2)	7.7		4/8弱		152 153	175 179	
434	須恵器	坏H蓋	空堀2	D-06	吉田住吉山7号墳	周溝(西)	(15.7)	5.1			三辻25	152	175	
435	須恵器	坏H蓋			吉田住吉山7号墳	周溝(西)	15.8	4.7		1/4		152 153	174 180	

付表8 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・吉田住吉山遺跡(弥生)出土土器一覧表2

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	位置	法量(cm)			口縁 残存	備考	図版	写真 図版	挿図
							口径	器高	底径					
436	須恵器	坏H蓋	土壘3		吉田住吉山7号墳	周溝(西)	(15.4)	5.5		1/8		152	-	
437	須恵器	坏H身	土壘3		吉田住吉山7号墳	周溝(西)	14.3	5.2		1/2弱		152 153	174 180	
438	須恵器	坏H身			吉田住吉山7号墳	周溝(西)	14.7	5.0		1/4		152 153	174 180	
439	須恵器	坏H身	土壘3	D-06	吉田住吉山7号墳	周溝(西)	14.8	5.3		6/8		152 153	174 180	
440	須恵器	坏H身	土壘3	D-06	吉田住吉山7号墳	周溝(西)	13.0	4.4+		2/8		152	175	
441	須恵器	坏H身	土壘3	D-06	吉田住吉山7号墳	周溝(西)	14.2	4.5+		2/8		152	175	
442	須恵器	坏H身	土壘5	D-06	吉田住吉山7号墳	周溝(西)	(13.2)	3.9+		1/8弱		152	175	
443	須恵器	坏H身	空堀2	D-06	吉田住吉山7号墳	周溝(西)	12.7	5.2		3/4		152	174 180	
444	須恵器	甗	土壘3	D-06	吉田住吉山7号墳	周溝(西)	-	6.2+				152	-	
445	須恵器	埴瓶		D-05	吉田住吉山7号墳	周溝(西)		19.9+			三辻26	152	175	
446	須恵器	坏H蓋	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	南棺	14.5	4.6	-	1/2		159 160	188 194	
447	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	南棺	13.5	5.7	-	1/2		159 160	188 194	
448	須恵器	坏H蓋		C-08	吉田住吉山9号墳	南棺	14.5	4.7	-	1/4		159 160	188 194	
449	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	南棺	13.5	4.3	-	1/2		159 160	188 194	
450	須恵器	高坏	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	南棺	10.3	15.4	8.5			159	188	
451	須恵器	高坏	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	南棺	10.6	17.4	8.9			159	188	
452	須恵器	埴瓶	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	南棺	5.2	19.0	10.4			159	189	
453	須恵器	坏H蓋	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	15.2	4.5				159 160	189 194	
454	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	13.0	4.8				159 160	189 194	
455	須恵器	坏H蓋	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	15.2	4.3				159 160	189 195	
456	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	13.4	5.0				159 160	189 195	
457	須恵器	坏H蓋	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	15.0	4.7				159 160	189 195	
458	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	14.0	4.6				159 160	189 195	
459	須恵器	坏H蓋	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	15.0	4.5	-	3/4		159 160	189 195	
460	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	13.6	4.7				159 160	189 195	
461	須恵器	坏H蓋	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	15.0	4.5	-	3/4		159 160	190 196	
462	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	13.8	4.5				159 160	190 196	
463	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	11.9	5.0				159 160	190 196	
464	須恵器	壺蓋	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	13.2	4.7				159 160	190 196	
465	須恵器	短頸壺	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 東	9.6	12.1		7/8		159 160	190 196	
466	須恵器	坏H蓋	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 西	14.2	4.6+				159 160	190 196	
467	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 西	12.4	4.9+				159	190	
468	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 西	15.4	4.8				159 160	190 197	
469	須恵器	坏H身	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺 西	12.8	4.8+				159 160	190 197	
470	須恵器	坏H蓋	不明		吉田住吉山9号墳	北棺 西	14.0	4.8				159	190 197	

付表8 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・吉田住吉山遺跡(弥生)出土土器一覧表3

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	位置	法量(cm)			口縁 残存	備考	図版	写真 図版	挿図
							口径	器高	底径					
471	須恵器	坏H身	不明		吉田住吉山9号墳	北棺 西	(12.4)	4.7+				159 160	190 197	
472	須恵器	坏H蓋			吉田住吉山9号墳	中央	14.9	4.8	-	1/2		159 160	193 197	
473	須恵器	坏H身	土塁1		吉田住吉山9号墳	中央	13.2	5.1				159 160	193 198	
474	須恵器	坏H蓋			吉田住吉山9号墳	中央	14.7	5.1	-	1/4		159	193 197	
475	須恵器	坏H蓋		C-08	吉田住吉山9号墳	中央	13.8	4.5+		1/3		159	-	
476	須恵器	坏H蓋	土塁1	C-08	吉田住吉山9号墳	周溝(北)	(14.7)	4.7		1/8弱		162	198	
477	須恵器	坏H蓋			吉田住吉山9号墳	周溝(北)	15.6	4.0		1/4		162	193	
478	須恵器	坏H身		C-08	吉田住吉山9号墳	周溝(北東)	(13.2)	4.7		1/7		162	193	
479	須恵器	短頸壺	土塁1		吉田住吉山9号墳	周溝(北西)	-	7.1+	(8.3)			162	193	
480	須恵器	壺			吉田住吉山9号墳	周溝(北)	11.3	13.4	腹径 15.0			162	192 198	
481	須恵器	壺			吉田住吉山9号墳	周溝(北)	12.3	14.1+	腹径 14.7	1/3弱	三辻12	162	192	
482	須恵器	壺	土塁1		吉田住吉山9号墳	周溝(北西)	-	11.7+	腹径 15.3		三辻13	162	192	
483	須恵器	壺			吉田住吉山9号墳	周溝(北)	-	15.5+	17.5		三辻14	162	192 198	
484	須恵器	横瓶	土塁1		吉田住吉山9号墳	周溝(北西)	8.5	22.4	-	2/3	三辻15	162	192	
485	須恵器	甕	土塁1		吉田住吉山9号墳	周溝(北西)	(22.9)	10.6+		1/18		162	193	
486	須恵器	甕			吉田住吉山9号墳	周溝(北)	(18.8)	12.8+	-	1/7	三辻16	162	193	
487	須恵器	坏H蓋			吉田住吉山9号墳		14.6	4.8		1/4	三辻17	162	193	
488	須恵器	坏身			吉田住吉山9号墳	墳頂	13.1	4.7			三辻18	162	193 198	
489	須恵器	坏身		C-08	吉田住吉山9号墳	墳頂	(12.7)	4.6+	-	1/7		162	-	
490	須恵器	短頸壺	土塁1	D-08	吉田住吉山9号墳	墳頂	7.5	8.4		5/8	三辻19	162	192	
491	土師器	皿			吉田住吉山9号墳		13.4	4.4+	-	1/4		162	193	
492	須恵器	坏H蓋	主郭	B-09	包含層	6号・9号・2号の間	(11.4)	5.0		1/18	三辻27	-	200	67
493	須恵器	坏H身	主郭	B-08	包含層	6号・9号・2号の間	(13.6)	4.1		わずか		-	200	67
494	須恵器	提瓶	主郭	B-09	包含層	6号・9号・2号の間	7.0	20.9	腹径 18.8			-	200	67
495	須恵器	坏H身	土塁3	E-06	包含層	7号の南	(13.2)	4.6+		1/16弱	三辻28	-	200	67
496	須恵器	短頸壺	土塁3	E-06	包含層	7号の南	(7.1)	3.9+		1/4		-	-	67
497	須恵器	小型甕	土塁1	E-09	包含層	2号の南・7号の東	-	8.4+			三辻29	-	200	67
498	土師器	椀	谷東	C-04	包含層	谷斜面	11.9	3.6	-	1/4強		-	200	67
499	土師器	皿	空堀3	C-05	包含層	谷斜面	(11.5)	2.6	-	1/8		-	-	67
500	須恵器	坏H身			包含層	不明	(15.0)	4.9	-	1/4弱		-	200	67
501	須恵器	無頸壺			包含層	不明	9.0	3.8+	-	1/4		-	200	67
502	須恵器	甕			包含層	不明	(22.3)	5.9+	-	1/7		-	-	67
601	土師器	小型丸底壺	谷西	C-00	包含層		10.8	5.9+		1/4残		166	203	
602	土師器	壺底部		D-20	吉田1号墳	墳裾		4.3+	7.8			166	203	
603	須恵器	壺類		D-20	包含層			3.9+	(5.3)			166	-	

付表8 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群・吉田住吉山遺跡(弥生)出土土器一覧表4

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	位置	法量(cm)			口縁 残存	備考	図版	写真 図版	挿図
							口径	器高	底径					
604	須恵器	高坏蓋	谷西	F-01・02	吉田32号墳	周溝(北)	(12.2)	6.1	-	わずか	三辻30	167	204	
605	須恵器	高坏(脚)	谷西	F-01・02	吉田32号墳	周溝(北)	-	1.4+	(10.5)			167	-	
606	須恵器	高坏(脚)	谷西	F-02・G-02	吉田32号墳	周溝(北)	-	1.6+	(9.3)			167	-	
607	須恵器	甕	谷西	G-02	吉田32号墳	周溝(南)	23.4	43.3		若干	三辻31	167	204	
608	須恵器	壺蓋	谷西		SX02		28.0	10.2+				170	208	
609	須恵器	壺蓋	谷西		SX02			5.4+				170	208	
610	須恵器	大甕	谷西		SX02		32.1	92.2			三辻32	170	208	
611	土師器	小壺						9.1+	(5.0)			170	208	
612	須恵器	坏 I					11.4	4.5	-	2/3		-	-	69
613	須恵器	坏 I					10.8	4.4	-			-	-	69
701	弥生土器	壺	主郭	B-14	SK95		-	24.4+	(5.2)		バリノ5	175	213	
702	弥生土器	高坏	主郭	B-14	SK95		(14.6)	4.6+	-	わずか	バリノ1	175	213	
703	弥生土器	壺	主郭	C-14	SK93		13.7	23.0+	-	6/7		175	213	
704	弥生土器	鉢(底)	主郭	C-14	SK93		-	2.0+	(4.4)			175	213	
705	弥生土器	壺	谷東	A-04	SK97		-	33.5+			バリノ4	175	214	
706	弥生土器	鉢(底)	主郭	B-14	SK90		-	4.9+	5.3			175	213	
707	弥生土器	(底)	主郭	B-14	SK90		-	5.6+	4.8			175	213	
708	弥生土器	鉢(底)	主郭	C-14	SK92		-	3.2+	6.1			175	213	
709	弥生土器	鉢(底)	主郭	C-13	包含層		-	3.0+	6.0			175	214	
710	弥生土器	壺(底)	土塁2	C-13	包含層		-	2.5+	6.2			175	214	
711	弥生土器	壺(底)	主郭	C-14	包含層		-	3.7+	5.5			175	214	
712	弥生土器	(底)	主郭	A-14・B-14	包含層		-	4.2+	(9.2)			175	214	
713	弥生土器	鉢(底)	主郭	B-14	包含層		-	3.4+	(5.0)			175	214	
714	弥生土器	(底)	帯曲輪1	B-15	包含層		-	2.6+	5.0			175	214	
715	弥生土器	鉢(底)	東斜面	A-15	包含層		-	4.4+	5.0			175	214	
716	弥生土器	甕(底)	主郭	B-12	吉田住吉山5号墳	周溝(南)	-	3.5+	4.3			175	-	
717	弥生土器	甕	堀切	B-18・19・C-18・ 19・D-18・19	包含層		-	2.7+				175	214	
718	弥生土器	鉢(底)	主郭	B-14	包含層		-	4.5+	5.4			175	214	
719	弥生土器	壺(底)	主郭	B-12	吉田住吉山5号墳	周溝(南)	-	3.7+	-			175	214	
720	弥生土器	壺(底)	主郭	B-12	吉田住吉山5号墳	周溝(南)	-	4.3+	4.5			175	214	
721	弥生土器	壺(口)	帯曲輪1	B-15	包含層		(31.7)	2.2+	-	わずか		175	214	
722	弥生土器	(片口付)鉢	主郭	C-14	包含層		(35.1)	6.4+	-	1/4弱	バリノ3	175	214	
723	弥生土器	鉢(口)	東斜面	B-15	包含層		(34.9)	6.0+	-	わずか		175	214	
724	弥生土器	(口)	主郭		吉田住吉山3号墳	南側盛土	(26.5)	2.6+	-	わずか	バリノ2	175	214	

付表9 吉田住吉山古墳群・吉田古墳群出土鉄器一覧表

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	位置	法量(cm)			残存	備考	図版	写真図版	挿図
							長	幅	厚					
M601	鉄	鍬	土壘2	D-06	吉田住吉山7号墳	北棺	4.3	2.8	0.2			151	176	
M602	鉄	鍬	土壘2	D-06	吉田住吉山7号墳	北棺		2.5				151	176	
M603	鉄	鍬	土壘2	D-06	吉田住吉山7号墳	北棺	5.8	2.8	0.2			151	176	
M604	鉄器	鍬	土壘2	D-06	吉田住吉山7号墳	北棺	9.2	1.1	0.3			151	176	
M605	鉄器	鍬	土壘2	D-06	吉田住吉山7号墳	北棺	8.8	1.1	0.4			151	176	
M606	鉄器	鍬	土壘2	D-06	吉田住吉山7号墳	北棺	10.4	0.6	0.5			151	176	
M607	鉄器	刀子	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺	7.8	1.1	0.4			161	191	
M608	鉄器	刀子	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺	14.9	1.7	0.5			161	191	
M609	鉄器	刀子	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺	17.3	1.1	0.4			161	191	
M610	鉄器	鍬	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳	北棺	12.7	3.4	0.4			161	191	
M611	鉄器	刀子	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳		11.2	1.0	0.5			161	191	
M612	鉄器	鍬	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳		11.3	2.8	0.3			161	191	
M613	鉄器	鍬	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳		8.5	2.8	0.4			161	191	
M614	鉄器	鍬	土壘1	C-08	吉田住吉山9号墳		7.1	2.4	0.3			161	191	
M701	鉄器	鉞		B-20	吉田1号墳	北方埋葬施設	16.6以上	1.35	0.4			166	203	
M702	鉄器	大刀		B-20	吉田1号墳	北方埋葬施設	81.5	最大3.5	最大1.9			166	203	
M703	鉄器	大刀		B-20	吉田1号墳	北方埋葬施設	68.6	最大5.5	最大0.8			166	203	

付表10 吉田住吉山古墳群出土玉類一覧表

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	位置	法量(cm)			残存	備考	図版	写真図版	挿図
							長	幅	厚					
J1	水晶	玉		C-08	吉田住吉山9号墳	南棺	2.0	1.6	1.3			151	176	
J2	埋木	玉		D-06	吉田住吉山7号墳	南棺	1.9	1.4				151	176	
J3	埋木	玉		D-06	吉田住吉山7号墳	南棺	19.5	1.3				151	176	
J4	埋木	玉		D-06	吉田住吉山7号墳	南棺	23.5	1.3				151	176	
J5	埋木	玉		D-06	吉田住吉山7号墳	南棺	22.5	1.5				151	176	
J6	埋木	玉		D-06	吉田住吉山7号墳	南棺	2.5	1.5				151	176	
J7	埋木	玉		D-06	吉田住吉山7号墳	南棺	2.3	1.5				151	176	
J8	ガラス	玉		D-06	吉田住吉山7号墳	南棺	0.4	0.4	0.4			161	191	

付表11 吉田住吉山遺跡出土石器一覧表

番号	種別	器種	地区	ブロック	出土遺構	層位	法量 (c m)			重量 (g)	備考	図版	写真図版
							長	幅	厚				
S11	石器	石鏃	主郭				2.23	1.8	0.35	1.1		176	215
S12	石器	削器	主郭				3.67	2.2	0.45	4.0		176	215
S13	石器	削器	主郭				2.45	1.8	0.33	1.3		176	215
S14	石器	削器	主郭	B-10			2.9	1.6	0.5	2.0		176	215
S15	石器	削器	主郭				1.85	1.38	0.23	0.5		176	216
S16	石器	削器	主郭	C-09			3.08	1.58	0.38	1.9		176	215
S17	石器	削器	主郭	A-12			4.0	2.13	0.6	6.3		176	215
S18	石器	削器	土塁1	E-08			3.9	3.65	0.68	9.5		176	215
S19	石器	削器					12.15	17.65	1.5	283.8		176	217
S20	石器	楔形石器	主郭				1.95	1.85	0.6	2.3		177	215
S21	石器	楔形石器	主郭				2.6	1.5	0.8	3.1		177	215
S22	石器	楔形石器	土塁1				3.5	3.55	0.8	10.2		177	215
S23	石器	微細な剥離痕のある剥片	主郭	C-12			2.48	1.63	0.35	1.6		177	216
S24	石器	微細な剥離痕のある剥片	主郭	C-12			2.2	2.45	0.4	1.7		177	216
S25	石器	微細な剥離痕のある剥片					1.88	3.08	0.58	3.6		177	216
S26	石器	微細な剥離痕のある剥片	土塁3				4.0	3.3	0.7	7.0		177	216
S27	石器	剥片	主郭				4.75	6.2	1.4	27.3		177	216
S28	石器	微細な剥離痕のある剥片		D-08			2.3	1.35	0.4	1.4	黒曜石	177	216
S29	石器	剥片	土塁1	C-08							分析資料		
S30	石器	剥片	土塁1	D-08							分析資料		
S31	石器	剥片	主郭								分析資料		
S32	石器	剥片	主郭								分析資料		
S33	石器	剥片	土塁1	D-08							分析資料		
S34	石器	剥片	主郭								分析資料		
S35	石器	剥片	主郭								分析資料		
S36	石器	剥片	主郭								分析資料		
S37	石器	剥片	主郭								分析資料		

報 告 書 抄 録

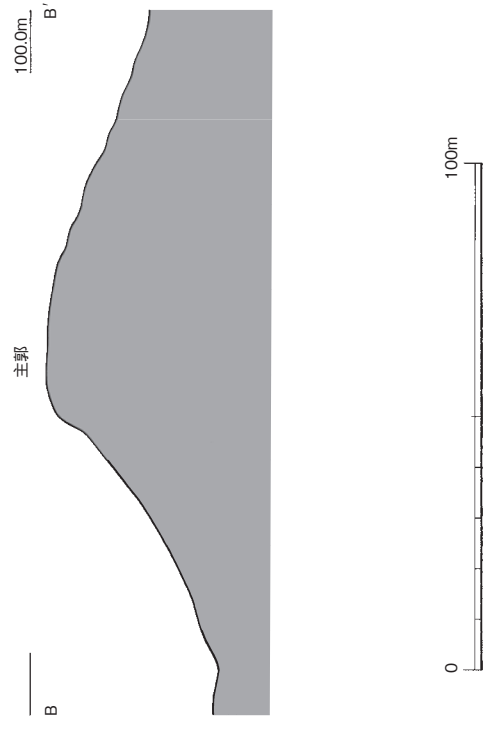
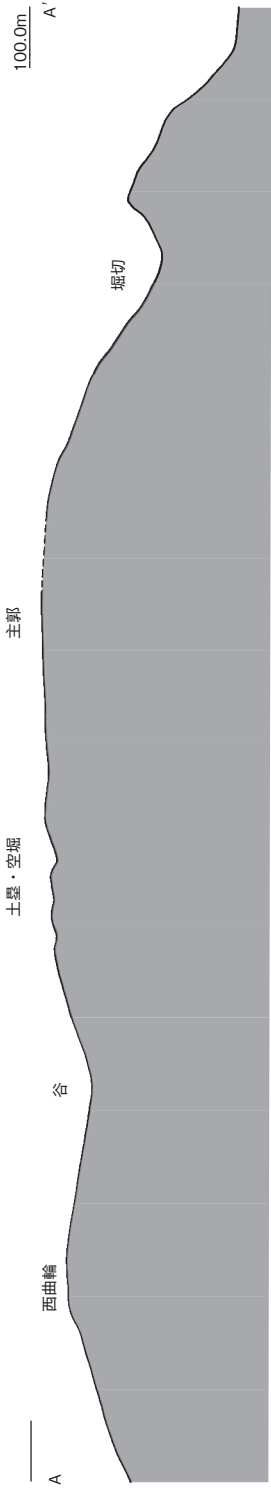
ふりがな	よしだすみよしやまいせきぐんはつくつちょうさほうこくしょ								
書 名	吉田住吉山遺跡群発掘調査報告書								
副 書 名	主要地方道三木三田線住宅宅地関連公共事業施設等総合整備促進事業に伴う発掘調査報告								
巻 次									
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告								
シリーズ番号	第409冊								
編 著 者 名	山田清朝・篠宮 正・池田征弘・藤田 淳								
編 集 機 関	兵庫県立考古博物館								
所 在 地	〒675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL079-437-5589								
発 行 機 関	兵庫県教育委員会								
所 在 地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL078-362-3784								
発行年月日	2011年(平成23年)3月24日								
所収遺跡名 (県遺跡番号)	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	調査番号						
吉田住吉山遺跡 (160614)	みきしじみちようよしだ 三木市志染町吉田 あざすみよしやま・ほそめあざ 字住吉山・細目字 にしわき 西脇	282154	2002169	34° 47' 36"	135° 1' 17"	平成14年12月19日～ 平成15年3月14日	1379㎡	(主) 三木 三田線住宅 宅地関連公 共施設等総 合整備促進 事業	
			2003007			平成15年6月23日 ～12月16日	7951㎡		
			2004099			平成16年9月1日 ～10月7日	463㎡		
			2003007			平成15年6月23日 ～12月16日	上記に 含む		
吉田住吉山古墳群 (160862～160871)	みきしじみちようよしだ 三木市志染町吉田 あざすみよしやま・ほそめあざ 字住吉山・細目字 にしわき 西脇	282154	2004099	34° 47' 35"	135° 1' 2"	平成16年9月1日 ～10月7日	463㎡		
			2002169			平成14年12月19日～ 平成15年3月14日	上記に 含む		
吉田1号墳 (160615)	みきしじみちようよしだ 三木市志染町吉田 あざすみよしやま・ほそめあざ 字住吉山・細目字 にしわき 西脇	282154	2003007	34° 47' 32"	135° 1' 47"	平成15年6月23日 ～12月16日	上記に 含む		
吉田32号墳 (160872)			2003008			平成15年10月20日 ～10月29日	119㎡		
高男寺本丸遺跡 (160655)	みきしじみちようこうなんじ 三木市志染町高男寺								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
よしだすみよしやま 吉田住吉山遺跡	集落跡 城跡	縄文時代		石器		姫島産黒曜石			
		弥生時代後期	土坑	弥生土器					
		南北朝時代	曲輪・土塁・堀・ 土杭・鍛冶炉	土師器・須恵器・陶磁器・ 鉄釘・鉄鎌・小札・飾金具		紀年銘石硯 刻画文丹波焼壺			
よしだすみよしやまこふんぐん 吉田住吉山古墳群	墳墓	古墳時代前期	方墳	土師器					
		古墳時代中期	方墳・円墳	須恵器					
		古墳時代後期	円墳	須恵器・玉・鉄鎌・鉄刀子					
よしだこふんぐん 吉田古墳群	墳墓	古墳時代前期	(円墳)	土師器・鉄刀・鉄製鉈					
		古墳時代後期	土器棺墓	須恵器					
こうなんじほんまる 高男寺本丸遺跡	集落跡	室町時代	溝	備前焼 土師器					
概要	<p>吉田住吉山遺跡の城跡は規模の大きい砦跡である。14世紀中頃の土器や鉄釘が大量に出土し、金属製品には鉄鎌や小札、甲冑の飾金具などの武器・武具も多く含まれている。建武・暦応期の丹生山攻めにおける「志染軍陣」の可能性が考えられる。</p> <p>吉田住吉山古墳群・吉田古墳群は古墳時代前期から後期にかけての古墳群で、12基の古墳の調査を行った。城跡の削平により墳丘が改変されていたが、埋葬施設は良好に残っていた。</p> <p>高男寺本丸遺跡は、14世紀代の3条の溝を検出した。</p>								

圖

版



全体図



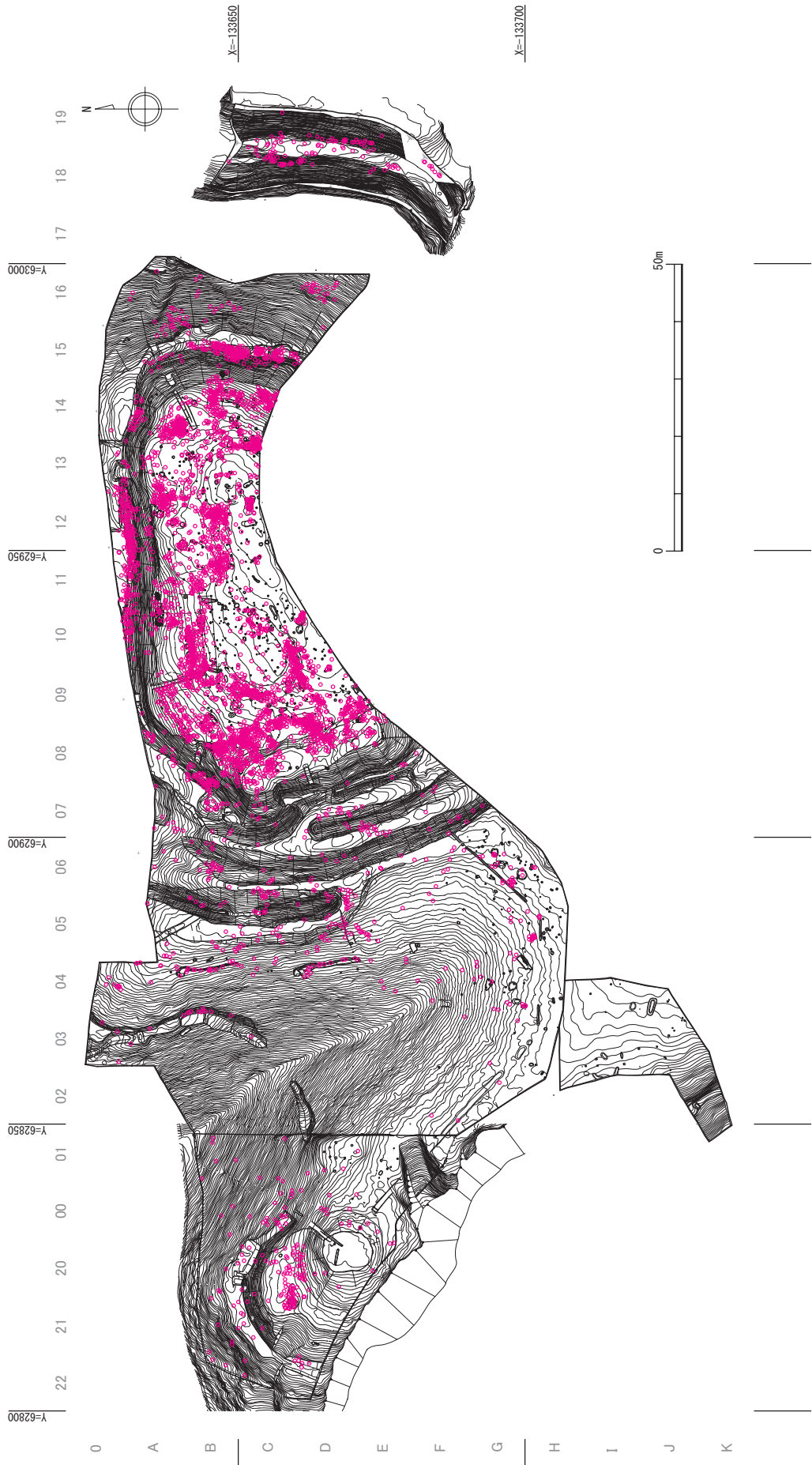
横断面



地区割図



全体図



中世遺物出土位置



全体図

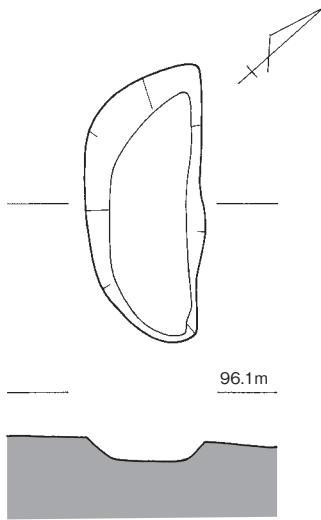


平面図 (西半部)

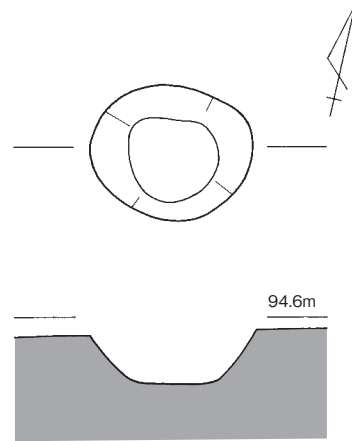


平面図 (東半部)

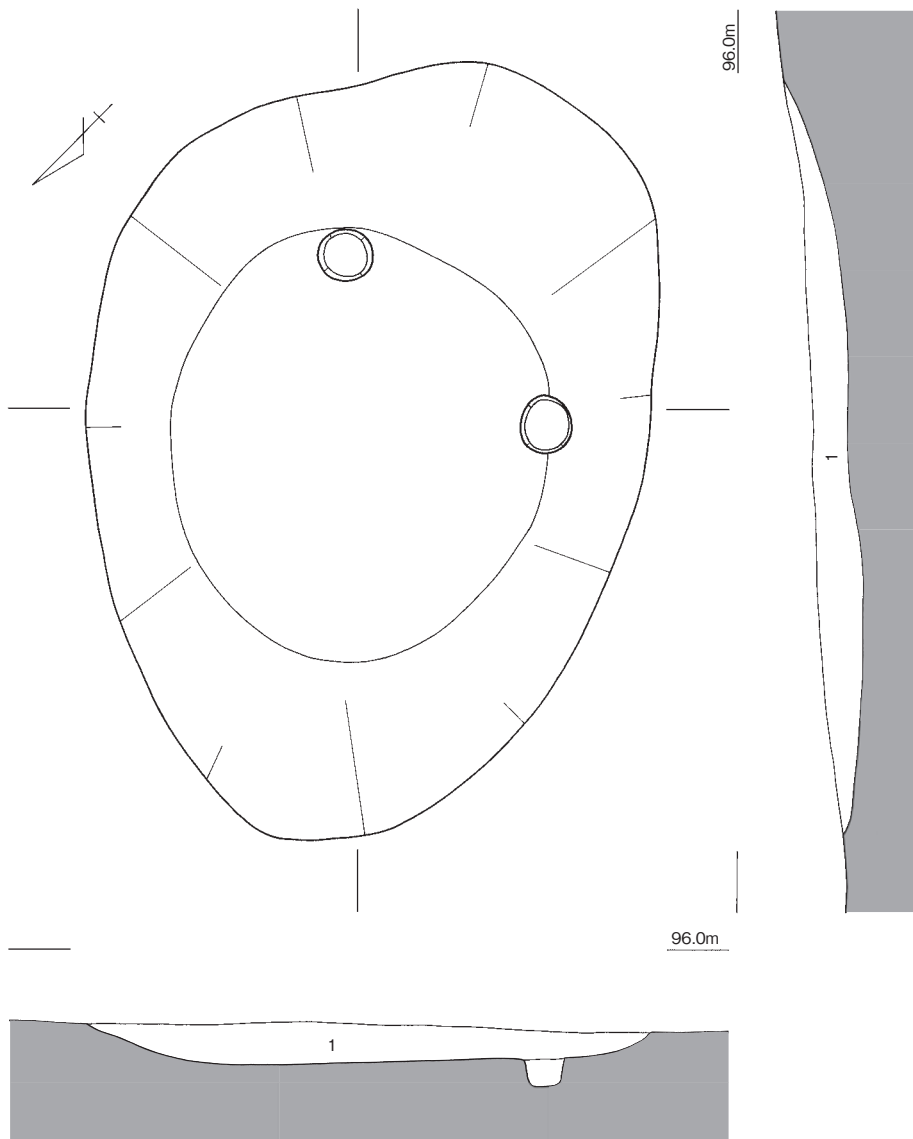
D-8 SK01



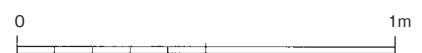
A-09 SK02



B-09 SK04



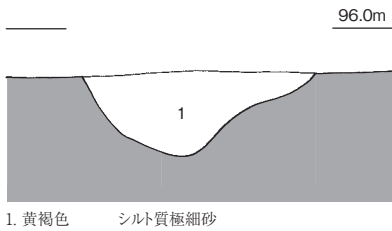
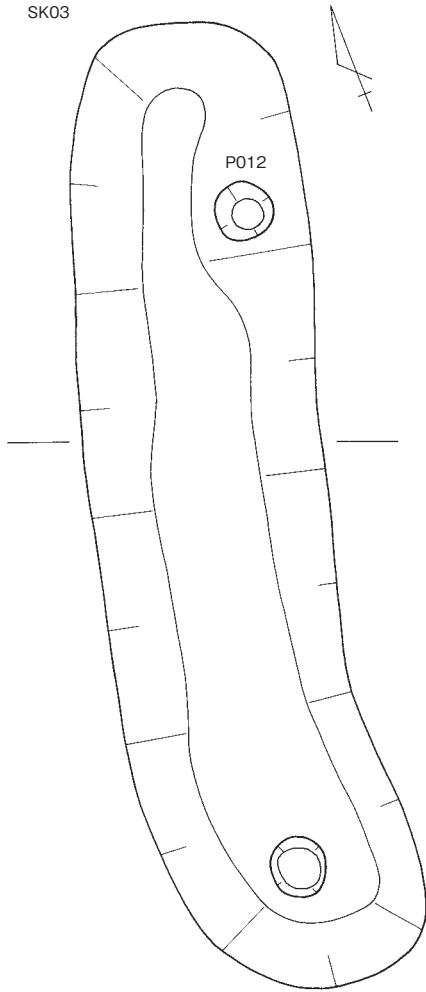
1. にぶい黄褐色 シルト質極細砂



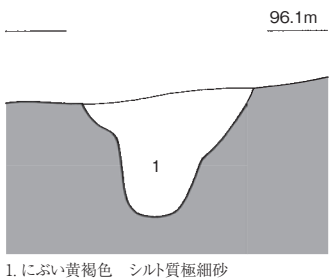
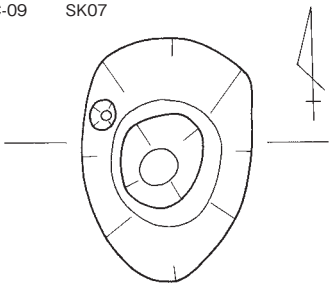
SK01・SK02・SK04

図版11 遺構 主郭

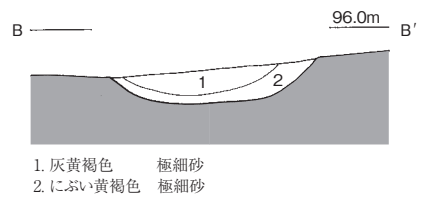
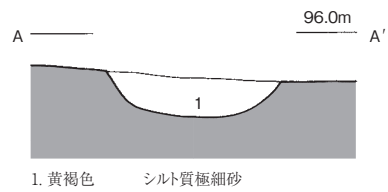
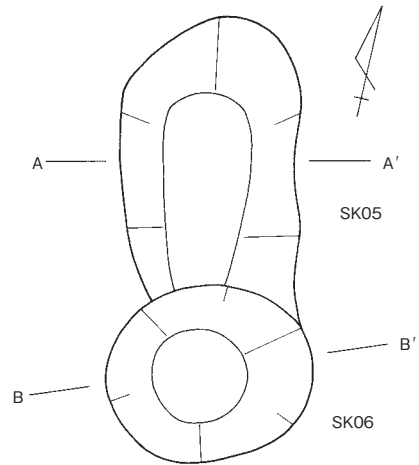
B-09 SK03



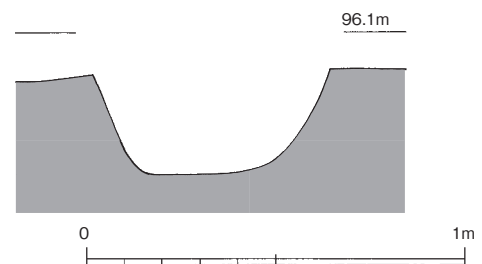
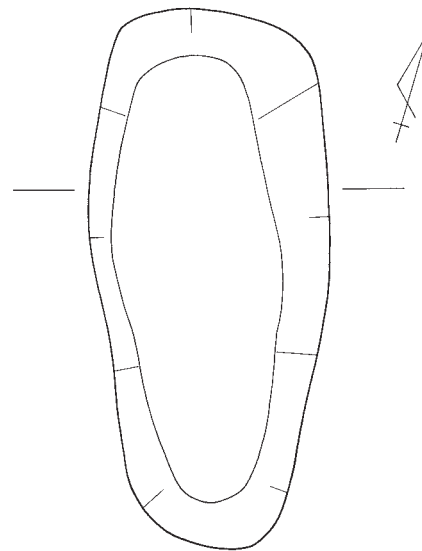
C-09 SK07



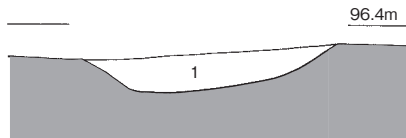
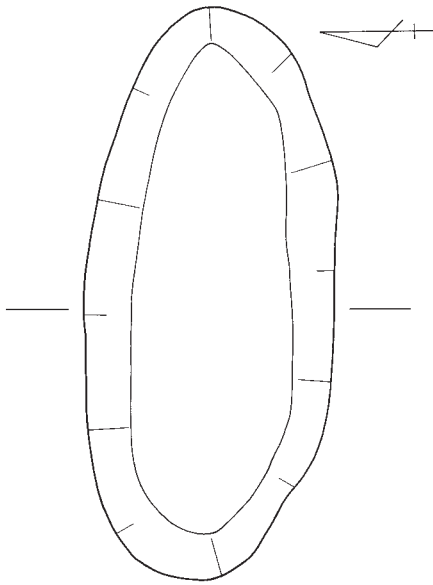
C-09 SK05・SK06



C-09 SK08

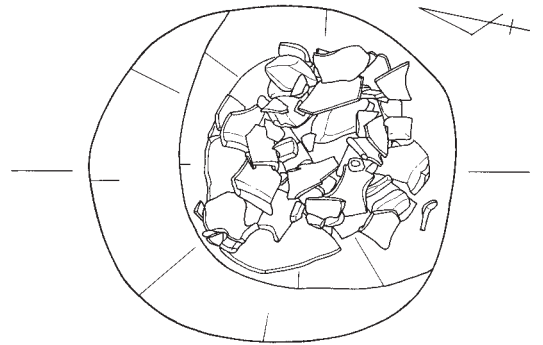
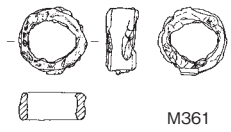
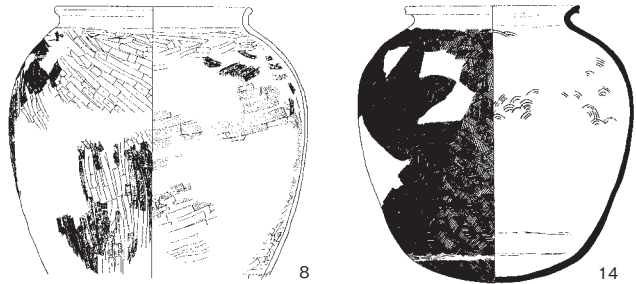


D-09 SK09

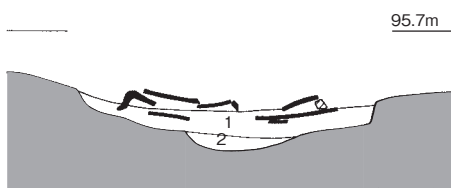
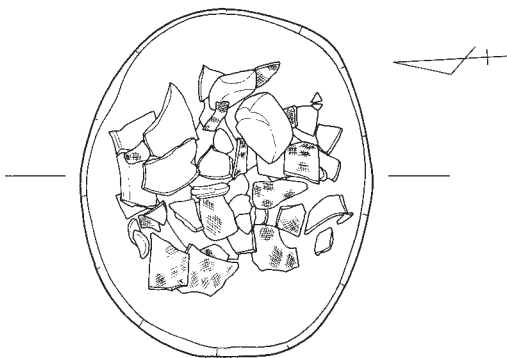
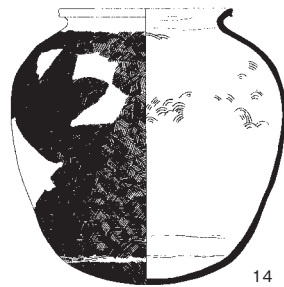


1. にぶい黄褐色 極細砂～シルト

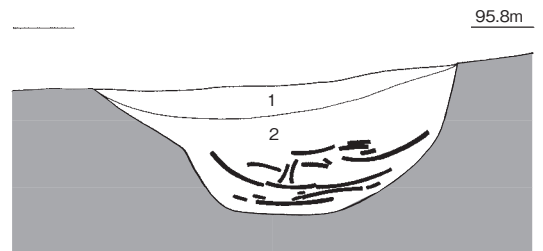
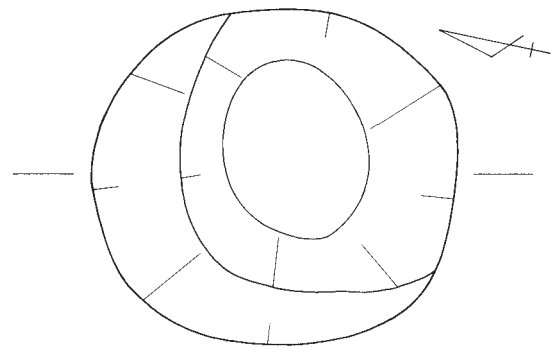
B-10 SK11



B-10 SK10



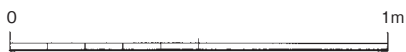
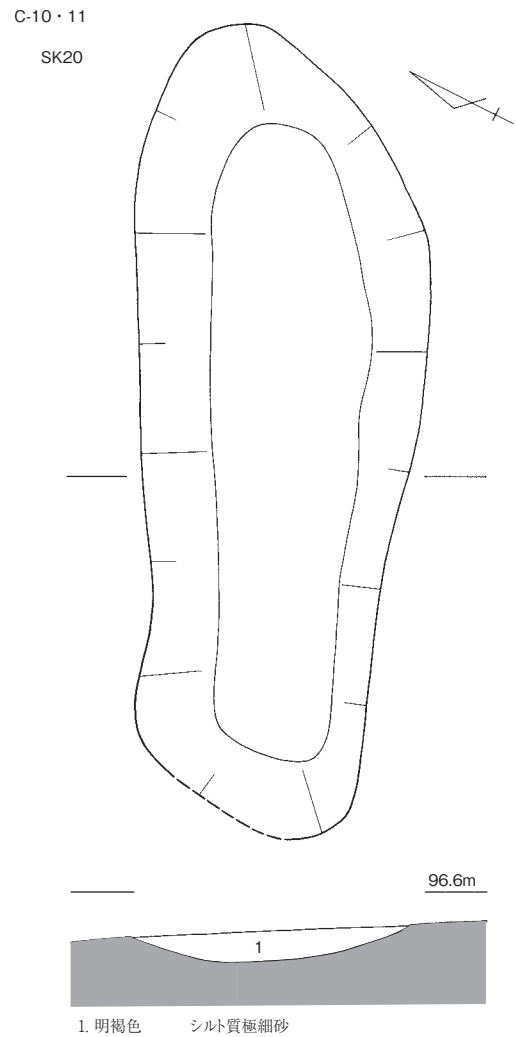
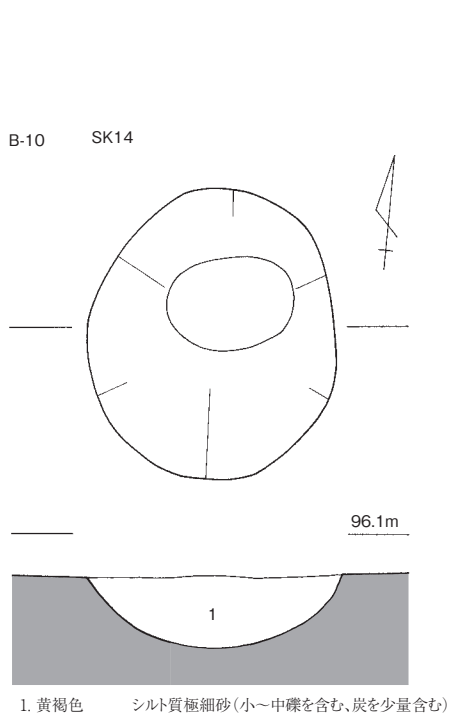
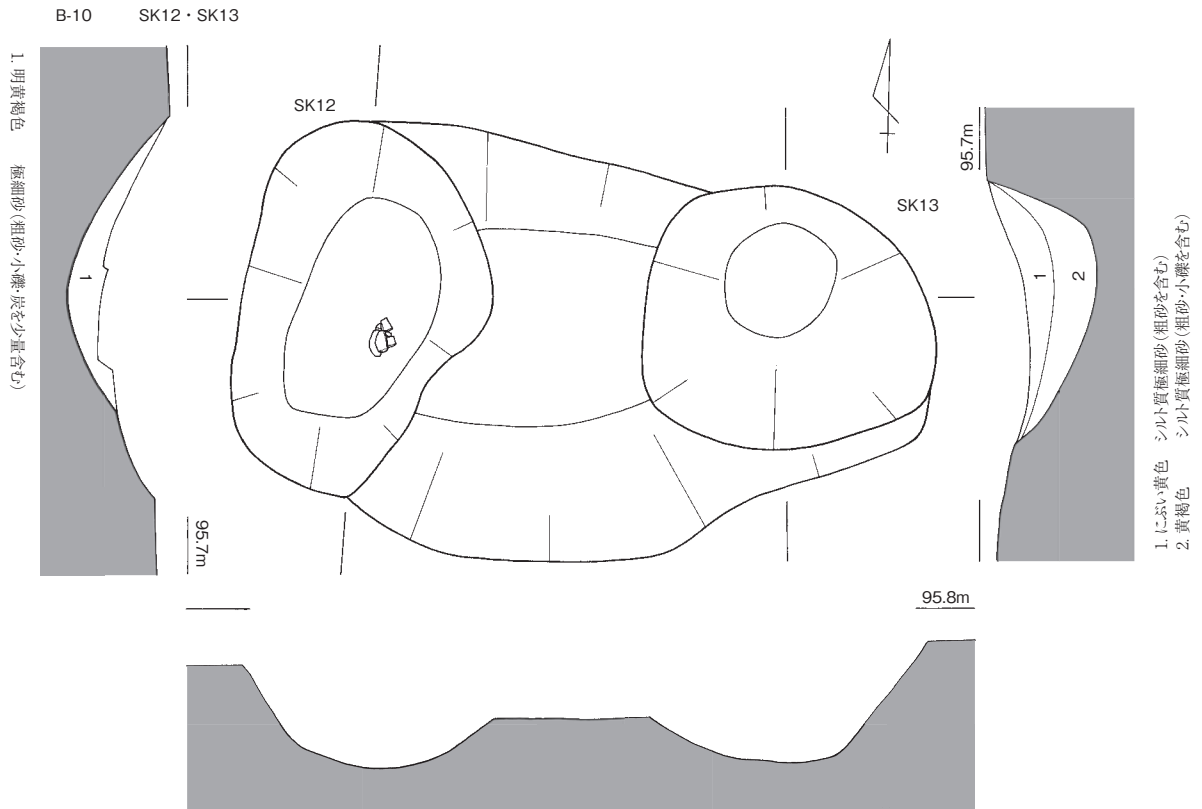
1. 黄褐色 シルト質極細砂(小礫を含む)
2. 黄褐色 シルト質極細砂(炭・焼土ブロックをわずかに含む)



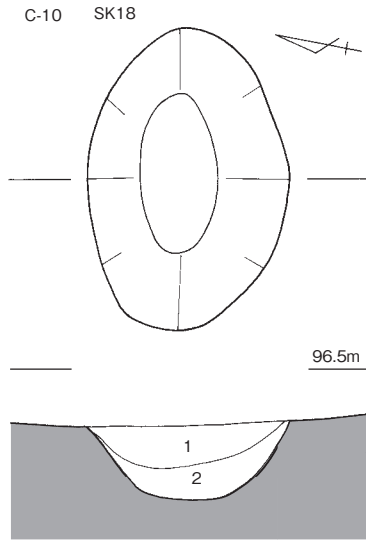
1. 黄褐色 シルト質極細砂(炭・小礫を少量含む)
2. 明黄褐色 シルト質極細砂(粗砂を少量含む)



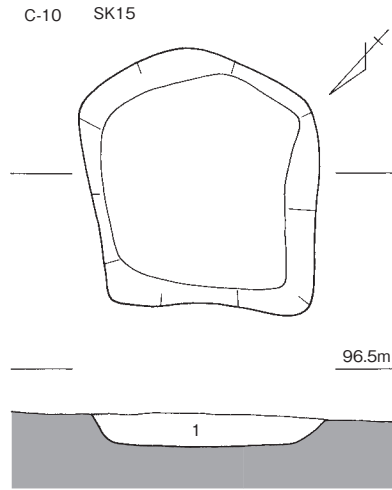
図版13 主郭



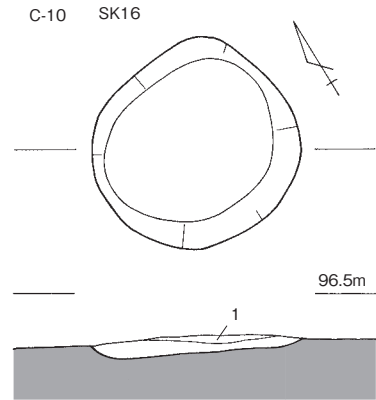
SK12・SK13・SK14・SK20



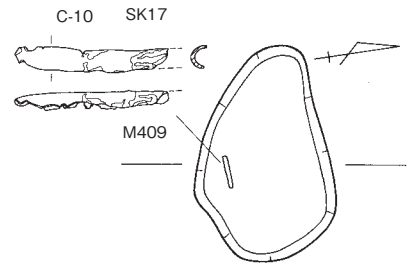
1. にぶい黄褐色 シルト(炭を含む)
2. 黄褐色 シルト(小礫を含む)



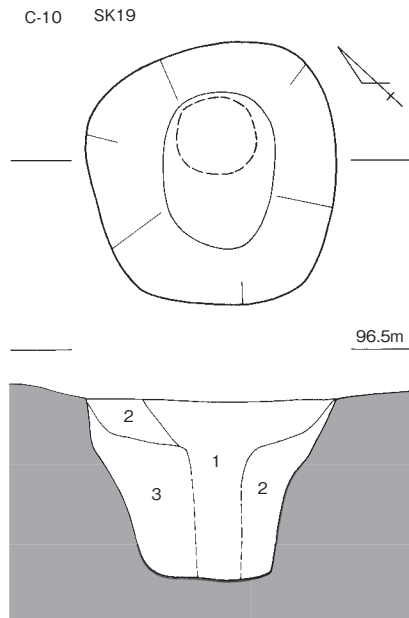
1. 明褐色 シルト質極細砂(炭を含む)



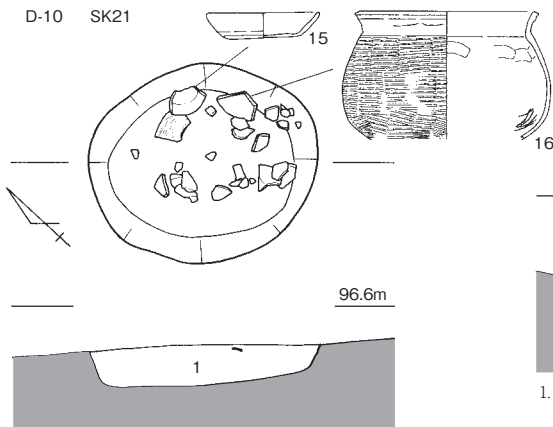
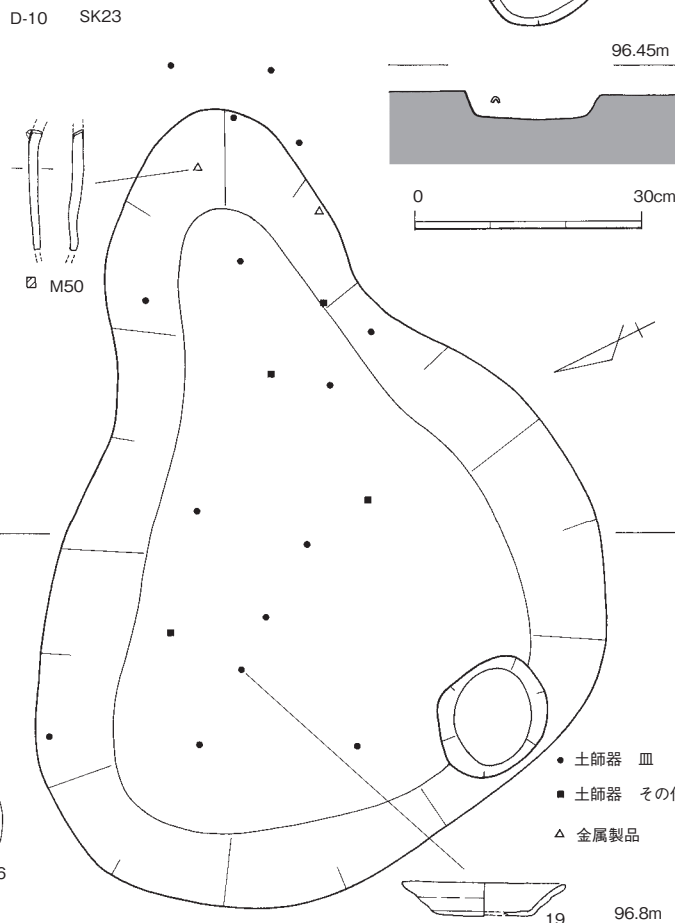
1. 炭(土器を含む)



M409

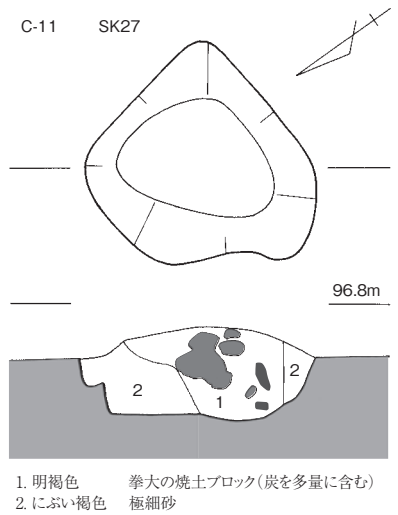
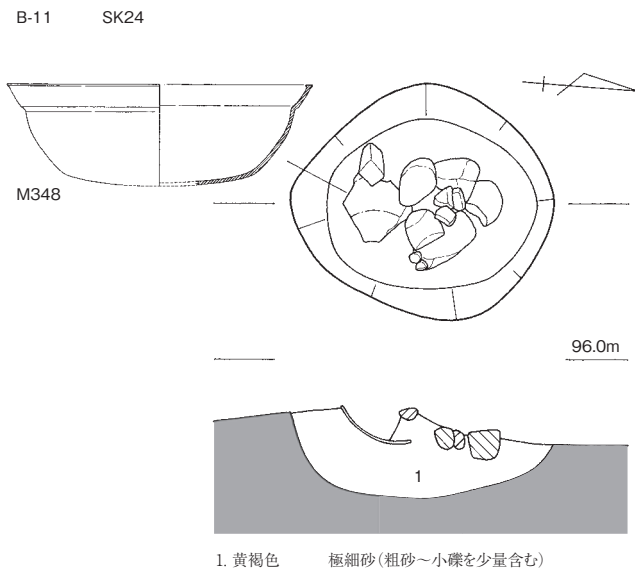
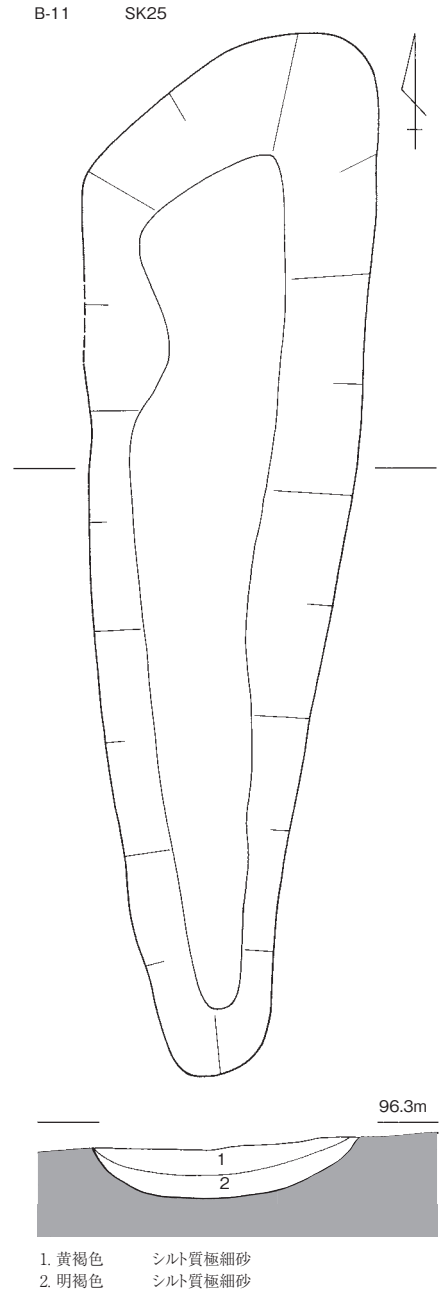
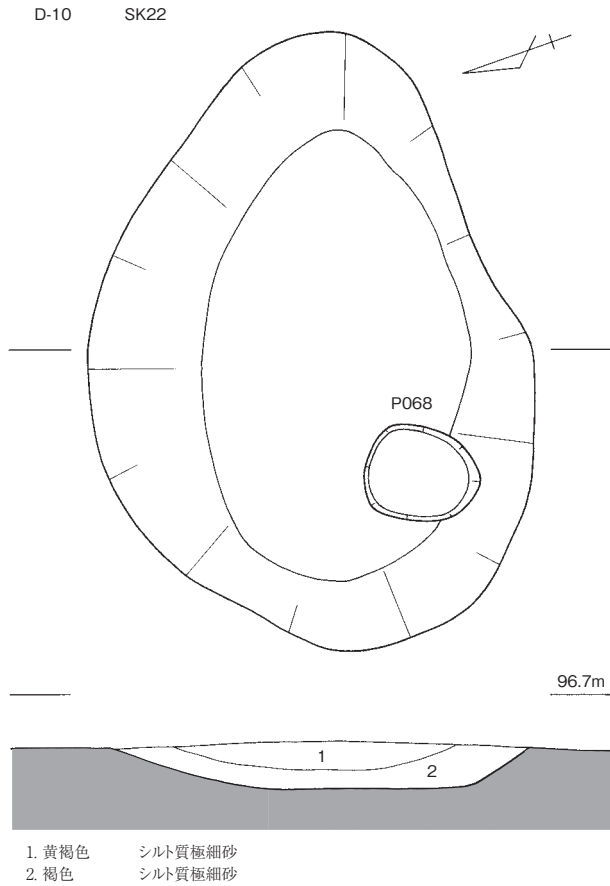


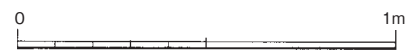
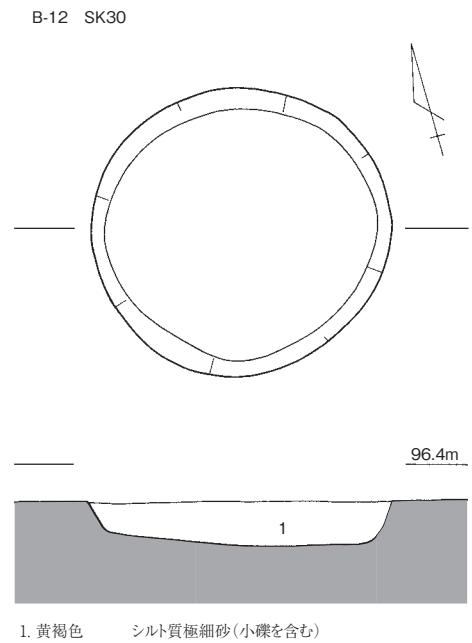
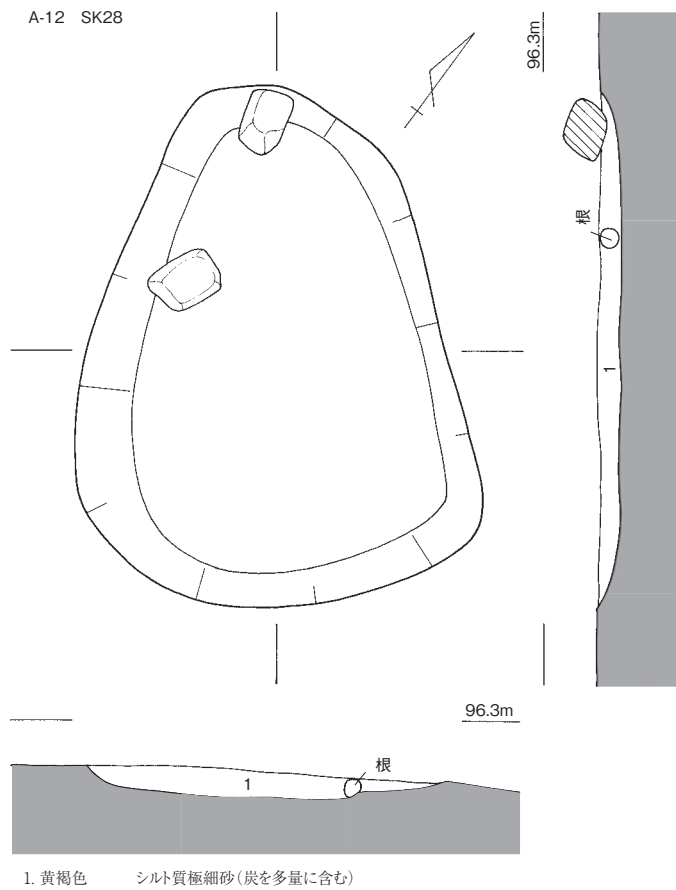
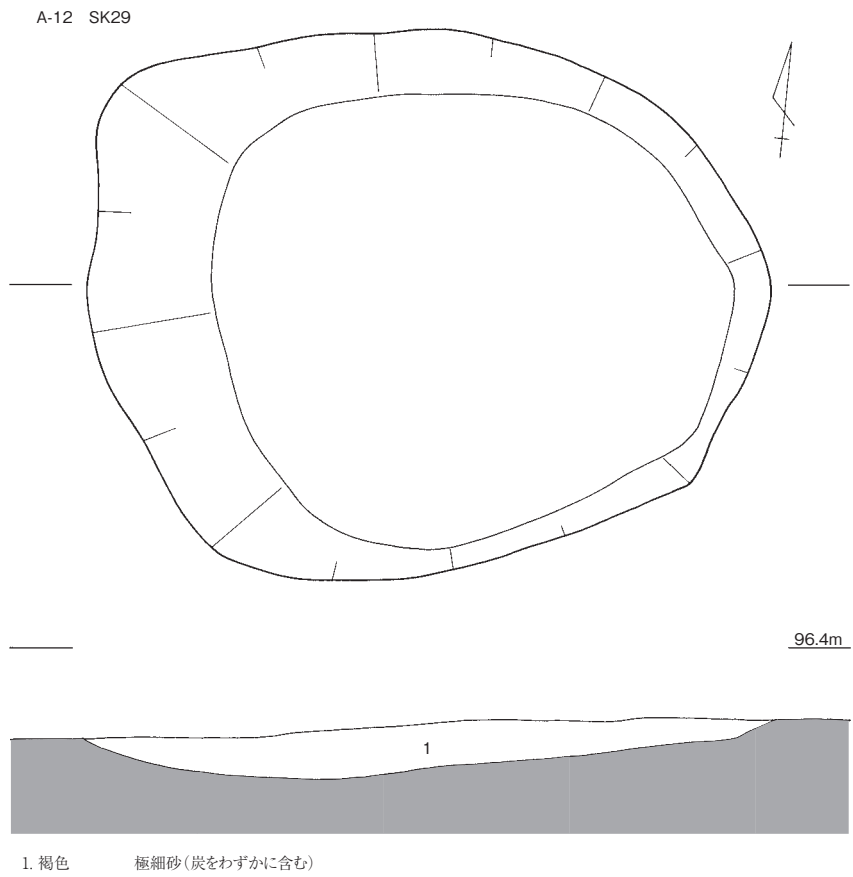
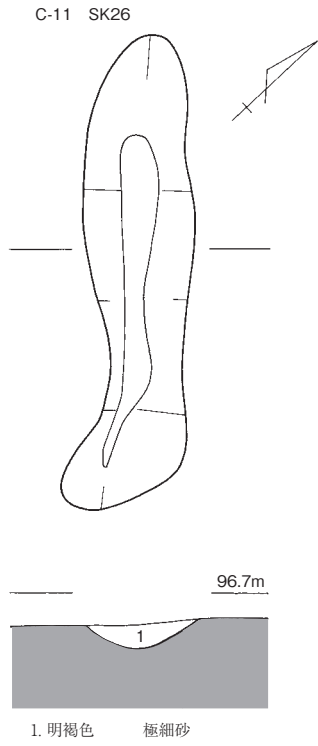
1. 褐色 シルト質極細砂(炭を含む)
2. 明褐色 シルト質極細砂
3. にぶい褐色 シルト質極細砂



1. 黄褐色 シルト質植物炭(炭を含む)

図版15 遺構 主郭



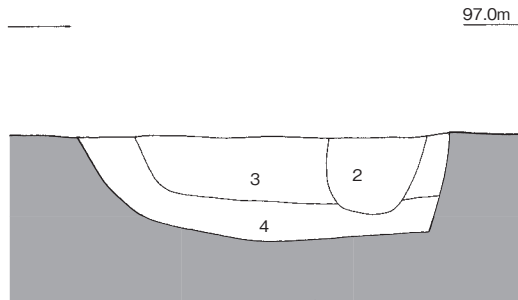
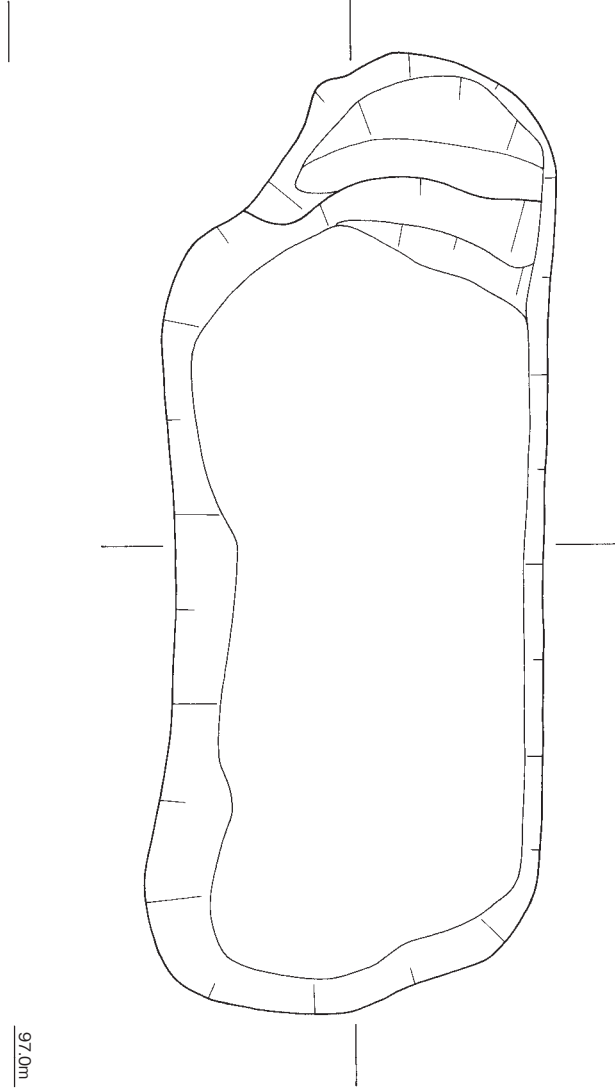
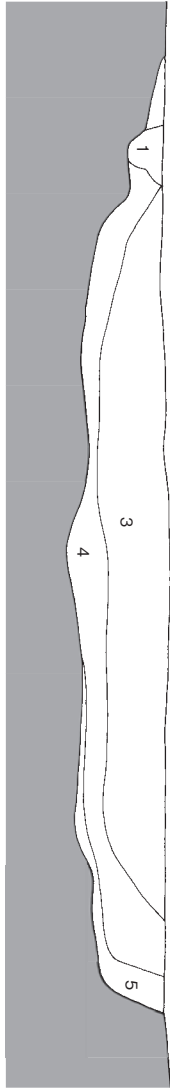


SK26・SK28・SK29・SK30

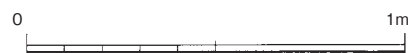
図版17 遺構 主郭

C-12 SK31

吉田住吉山遺跡

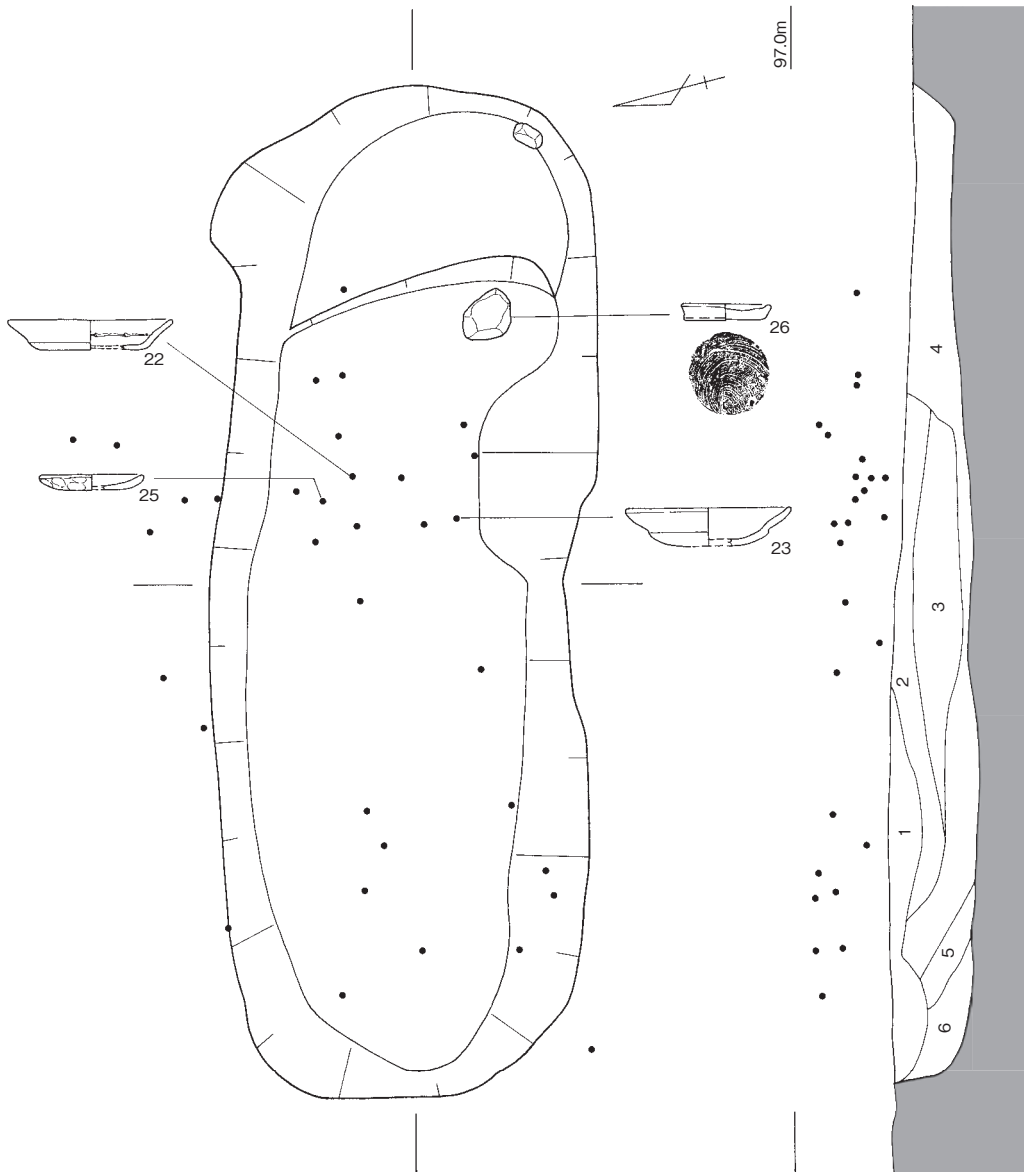


- 1. 木の根
- 2. 木の根
- 3. 黄褐色 極細砂
- 4. 明黄褐色 シルト質極細砂
- 5. 明褐色 砂礫



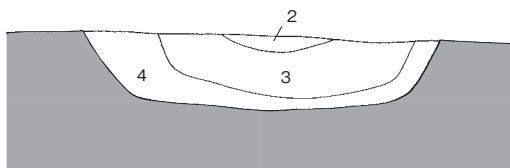
SK31

C-12 SK32



• 土師器 皿

97.0m



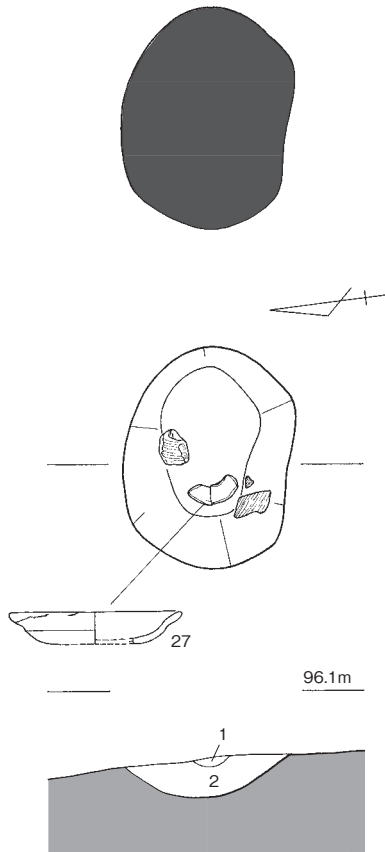
- 1. にぶい黄橙色 シルト質極細砂
- 2. 褐色 極細砂
- 3. にぶい黄褐色 極細砂
- 4. 明黄褐色 極細砂(炭を含む)
- 5. 明黄褐色 極細砂
- 6. にぶい黄褐色 極細砂



SK32

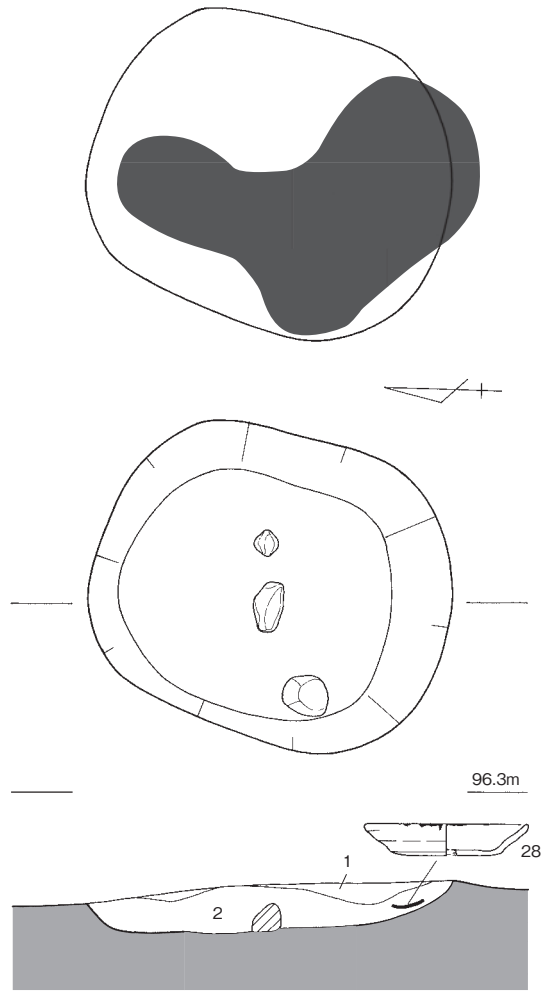
図版19 遺構 主郭

A-13 SK33



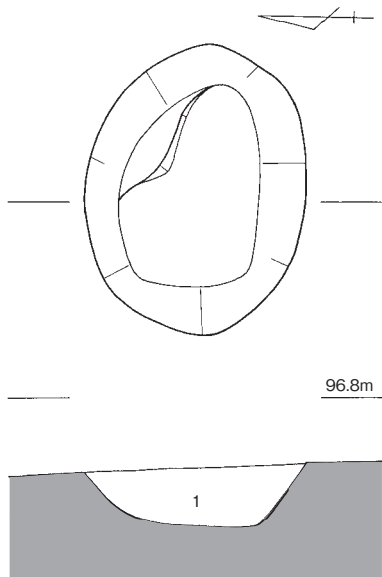
- 1. オリーブ黒色 極細砂(粗砂・炭・焼土を含む)
- 2. 炭

A-13 SK34



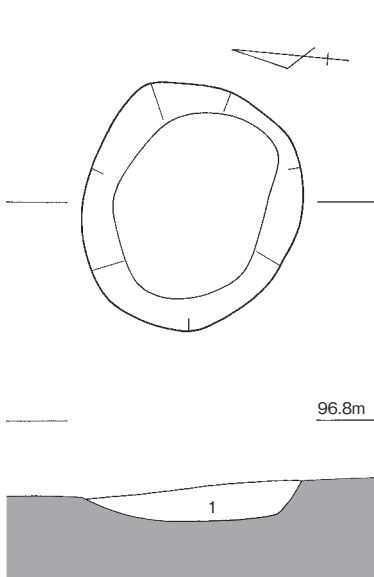
- 1. 灰オリーブ色 極細砂(粗砂・小礫・炭を含む)
- 2. 黄褐色 シルト質極細砂(小・中礫を含む)

B-13 SK39



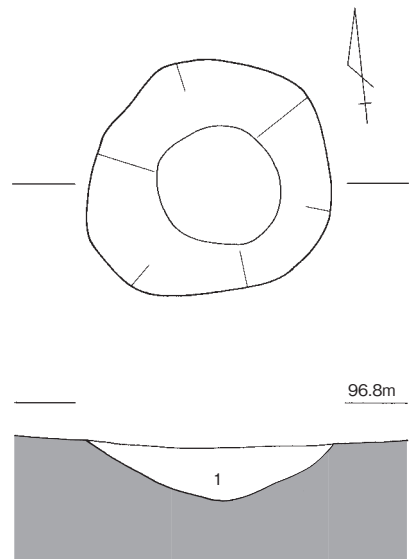
- 1. 黄褐色 極細砂(炭を少量含む)

B-13 SK40

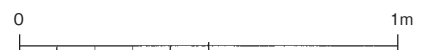


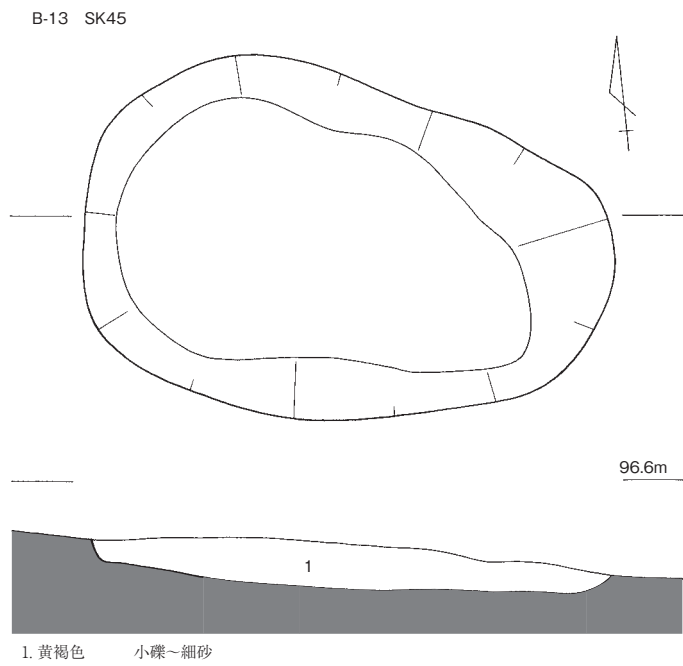
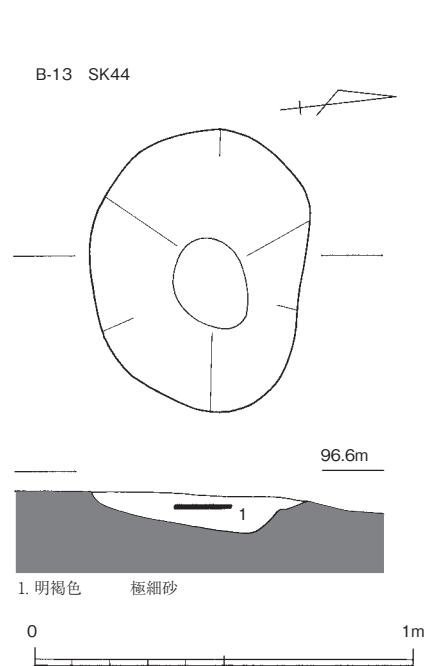
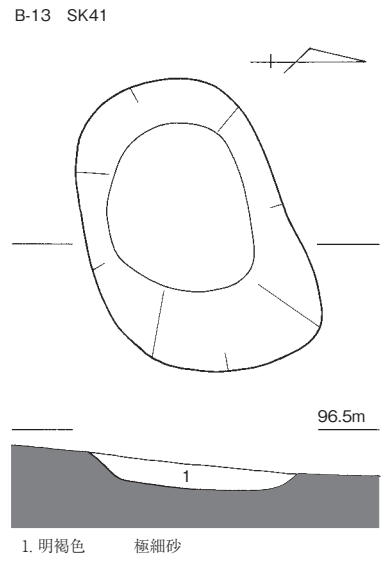
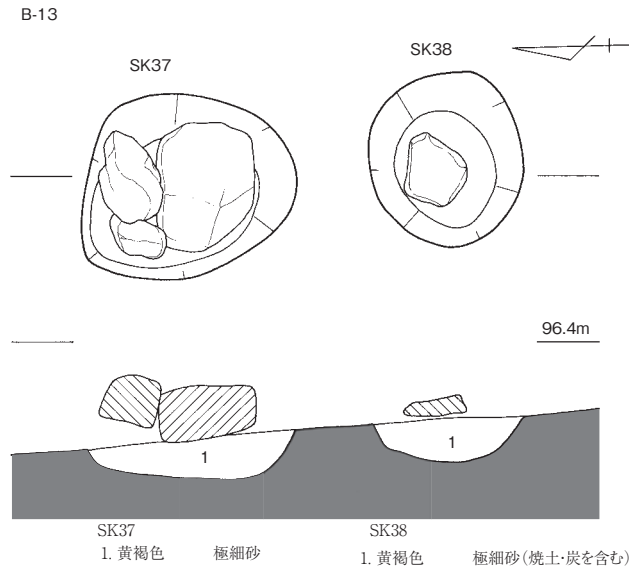
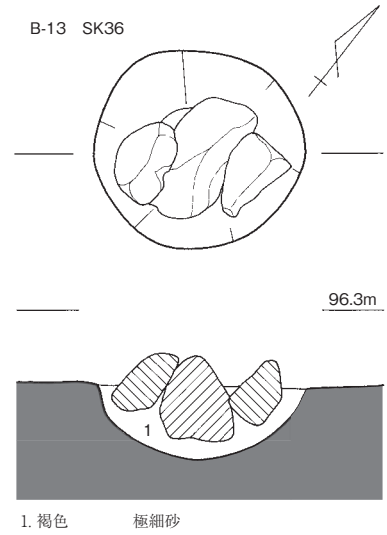
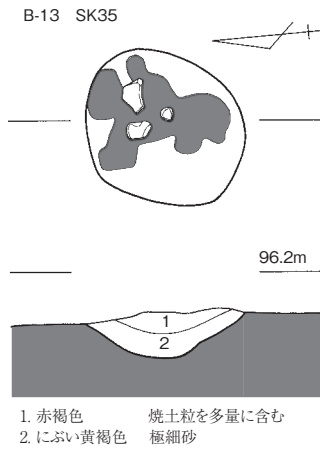
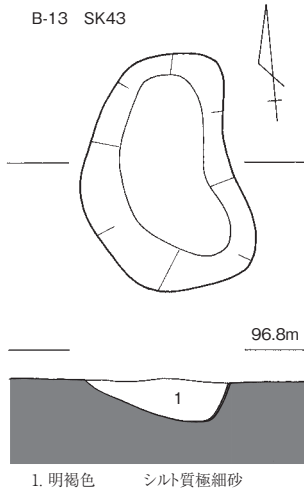
- 1. 黄褐色 極細砂

B-13 SK42



- 1. 明褐色 シルト質極細砂

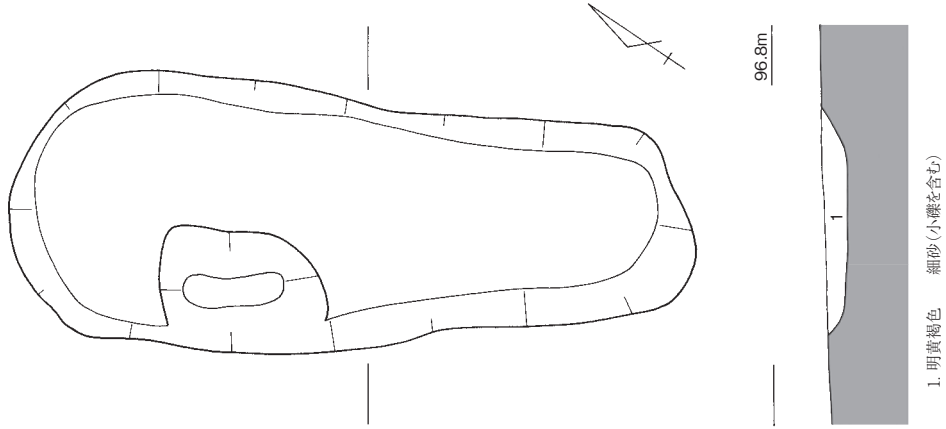




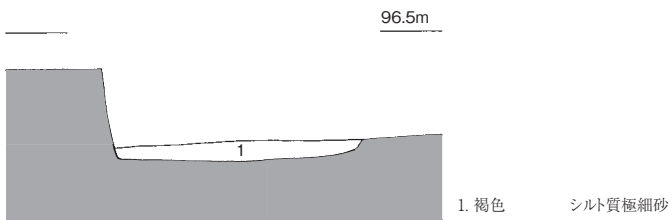
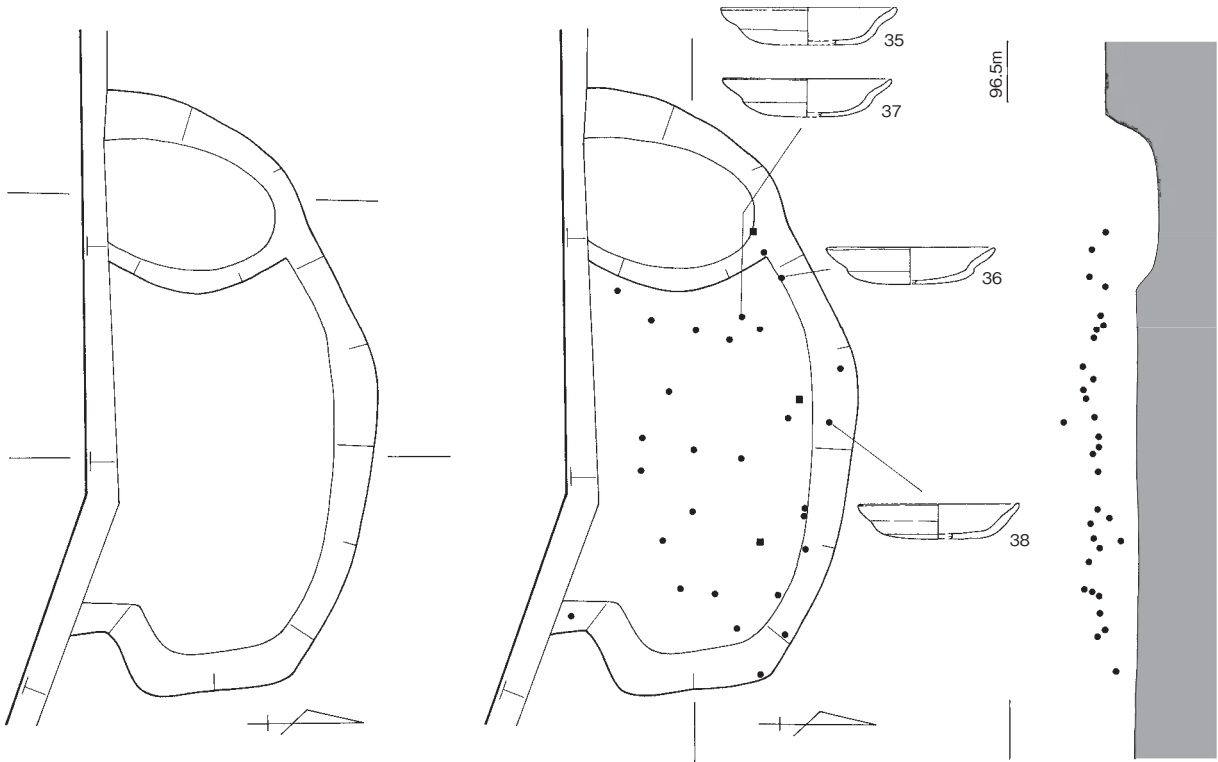
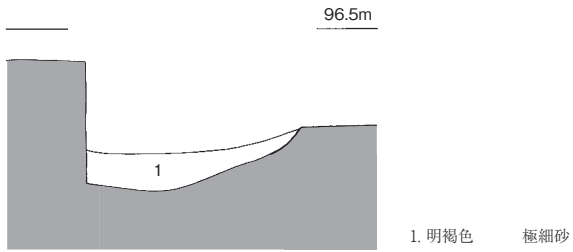
SK35・SK36・SK37・SK38・SK41・SK43・SK44・SK45

図版21 遺構 主郭

C-13 SK46

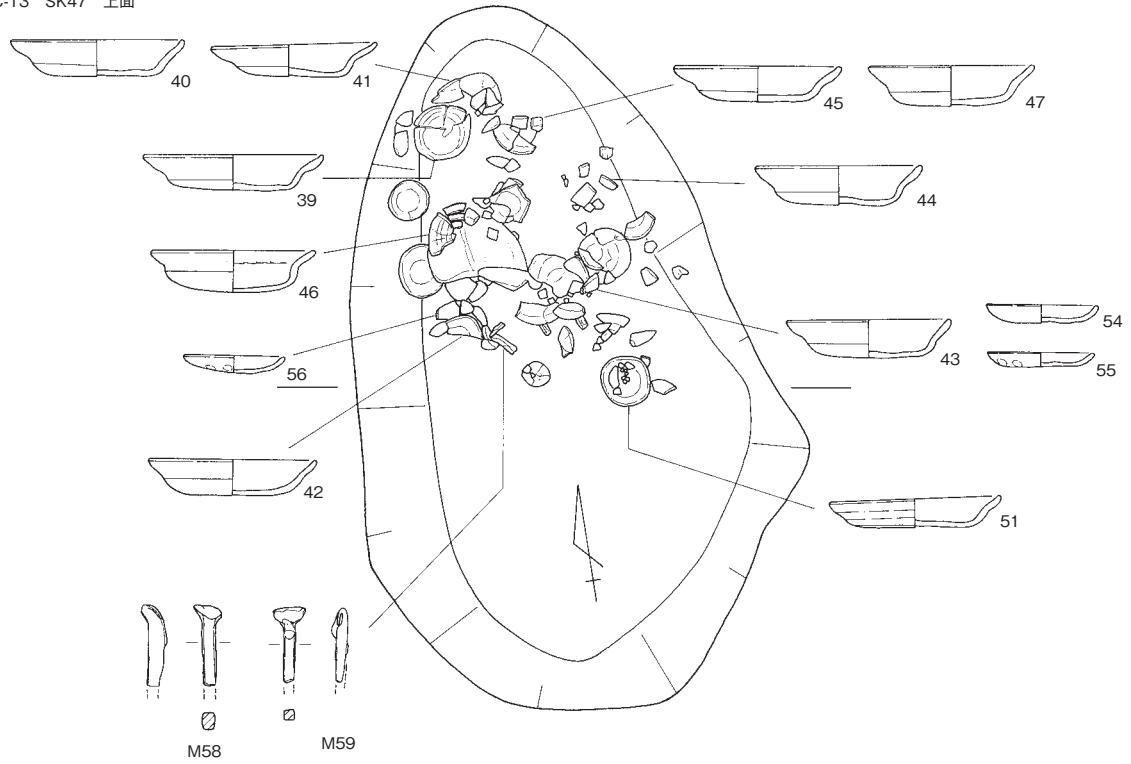


C-13 SK54

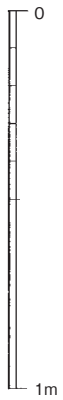
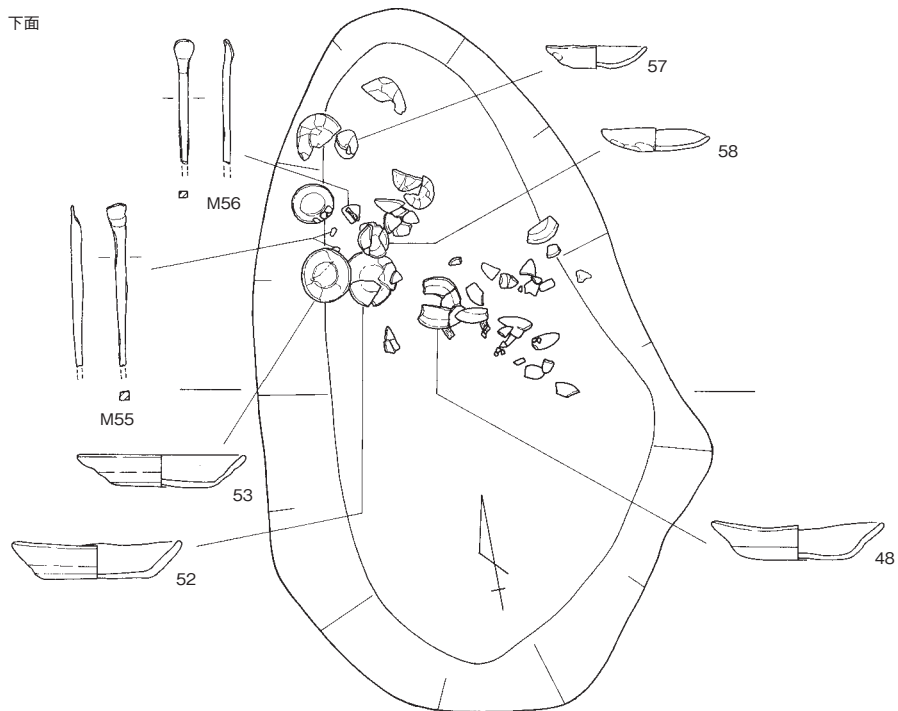


SK46・SK54

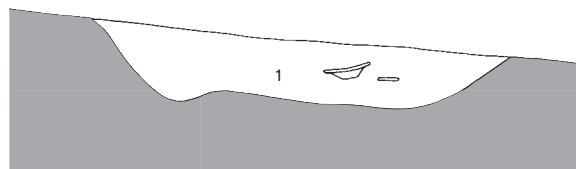
C-13 SK47 上面



下面



96.0m

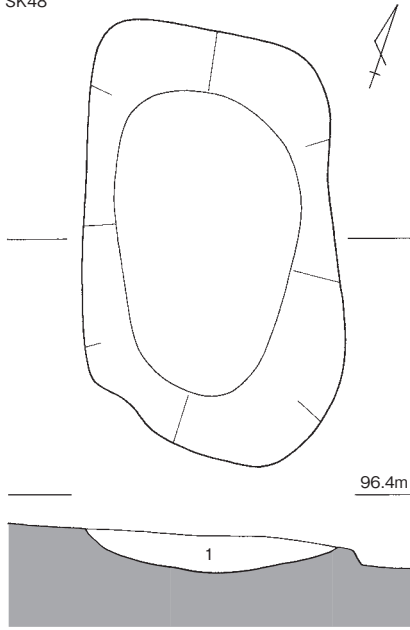


1. 褐色 極細砂(炭を含む)

SK47

図版23 遺構 主郭

C-13 SK48

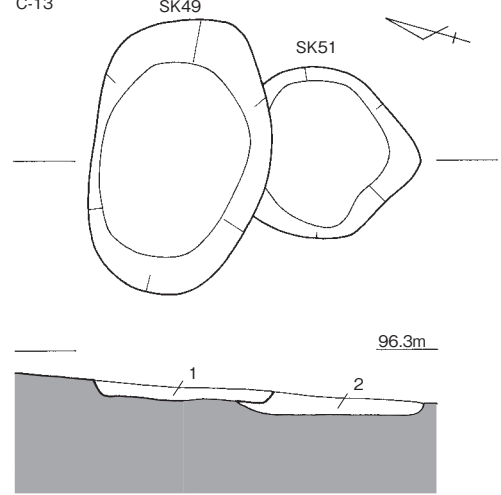


1. 明褐色 極細砂(小礫を含む)

C-13

SK49

SK51



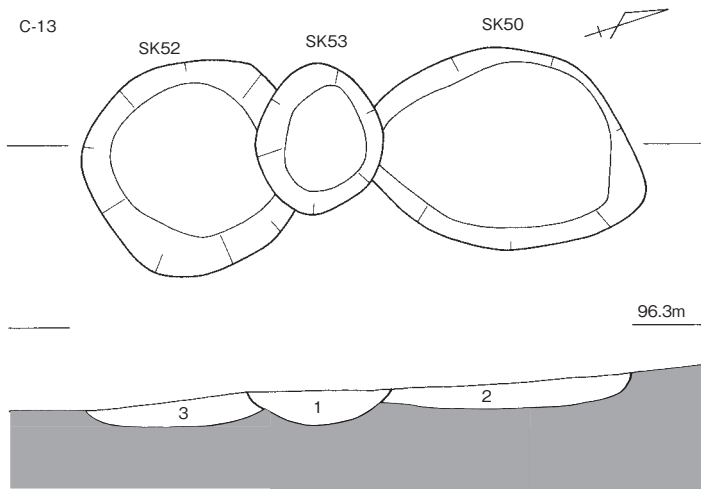
1. 黄褐色 極細砂:SK49
2. 褐色 極細砂:SK51

C-13

SK52

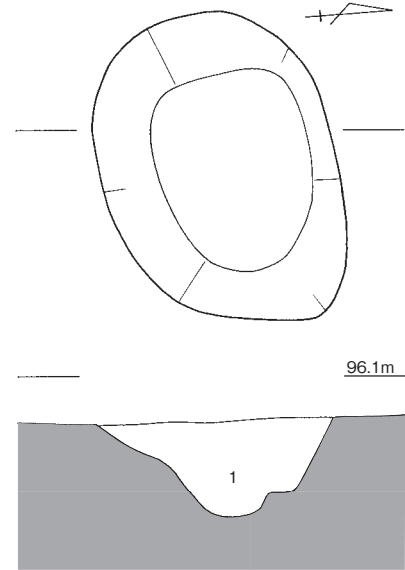
SK53

SK50



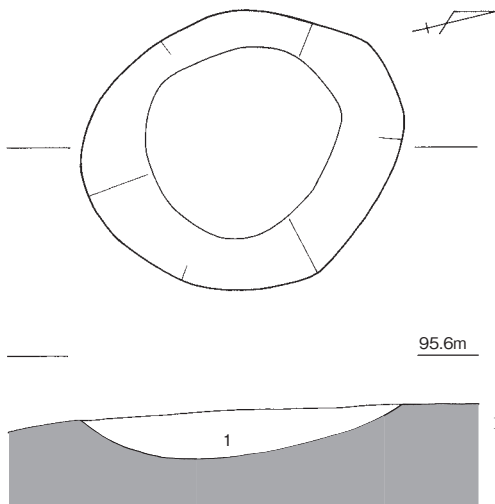
1. 褐色 極細砂:SK53
2. 褐色 極細砂:SK50
3. 黄褐色 極細砂:SK52

B-14 SK60



1. 黄褐色 細砂(小礫を含む)

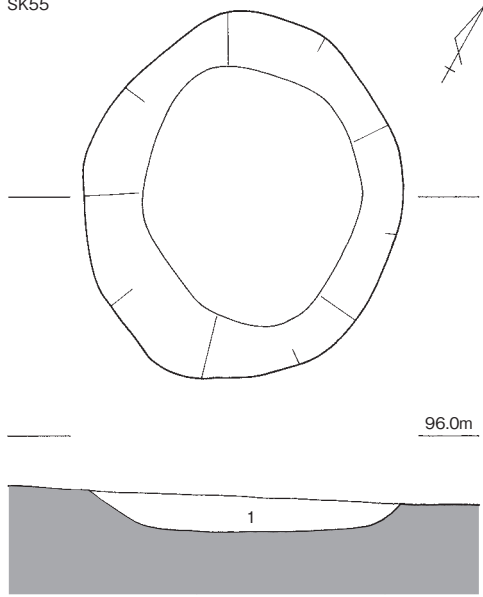
B-14 SK62



1. 明褐色 極細砂(小礫をわずかに含む)

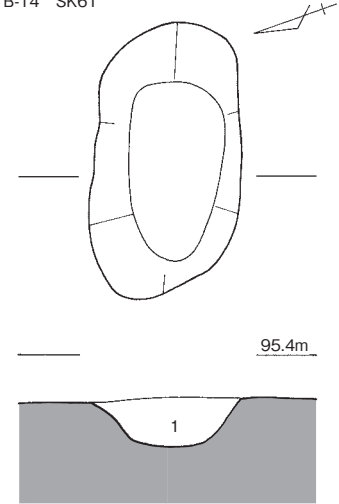


B-14 SK55



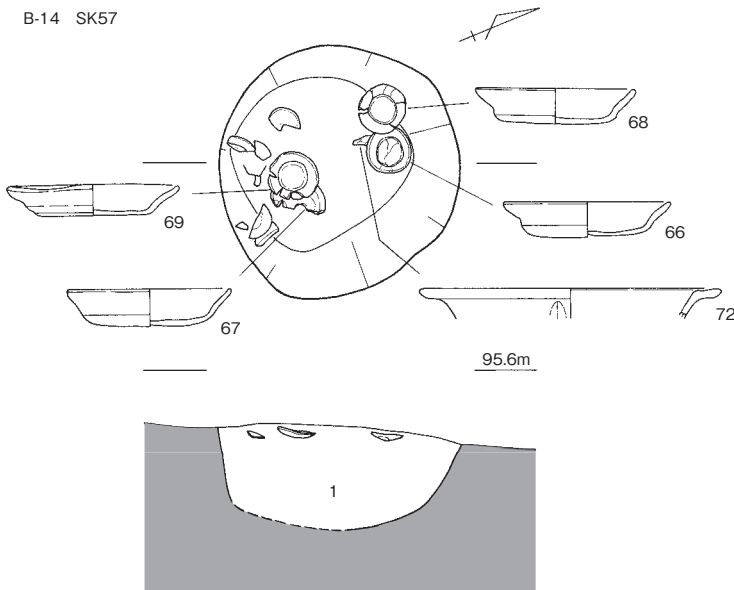
1. 明褐色 細砂(小礫をわずかに含む)

B-14 SK61



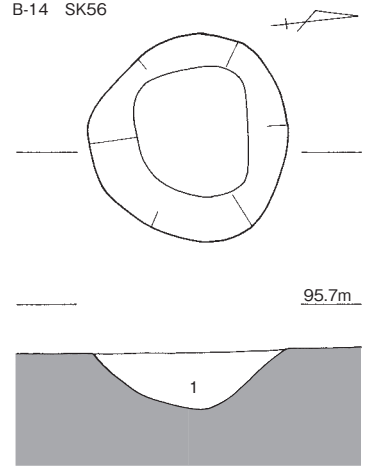
1. 黄褐色 極細砂(小礫を含む)

B-14 SK57



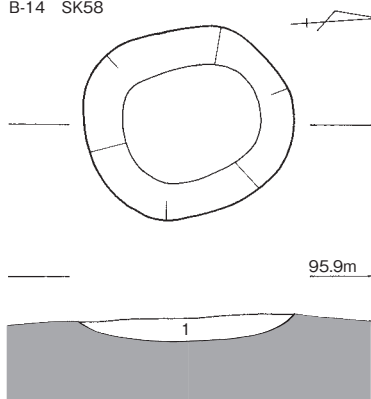
1. 明褐色 極細砂(小礫を含む)

B-14 SK56



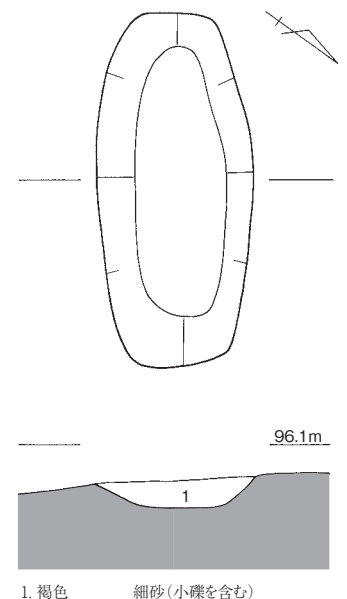
1. 黄褐色 シルト質極細砂(小礫を含む)

B-14 SK58

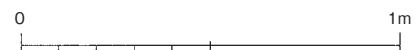


1. 明褐色 粗砂~細砂

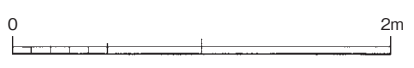
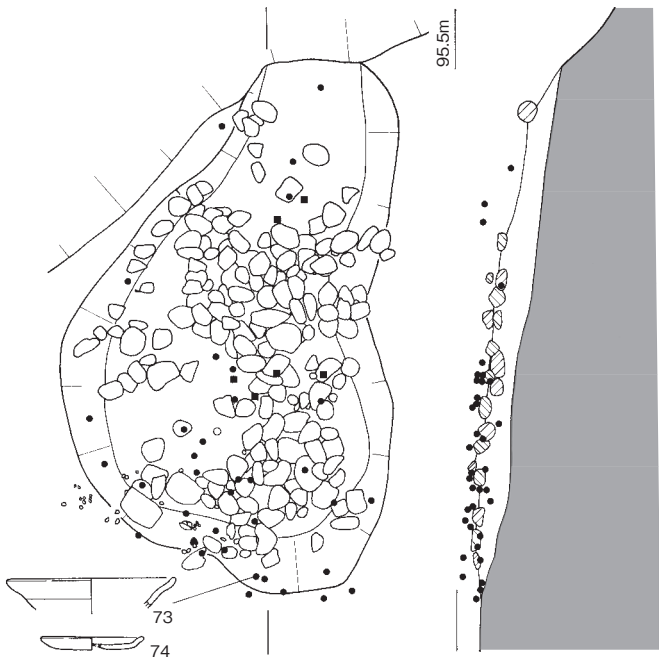
B-14 SK59



1. 褐色 細砂(小礫を含む)



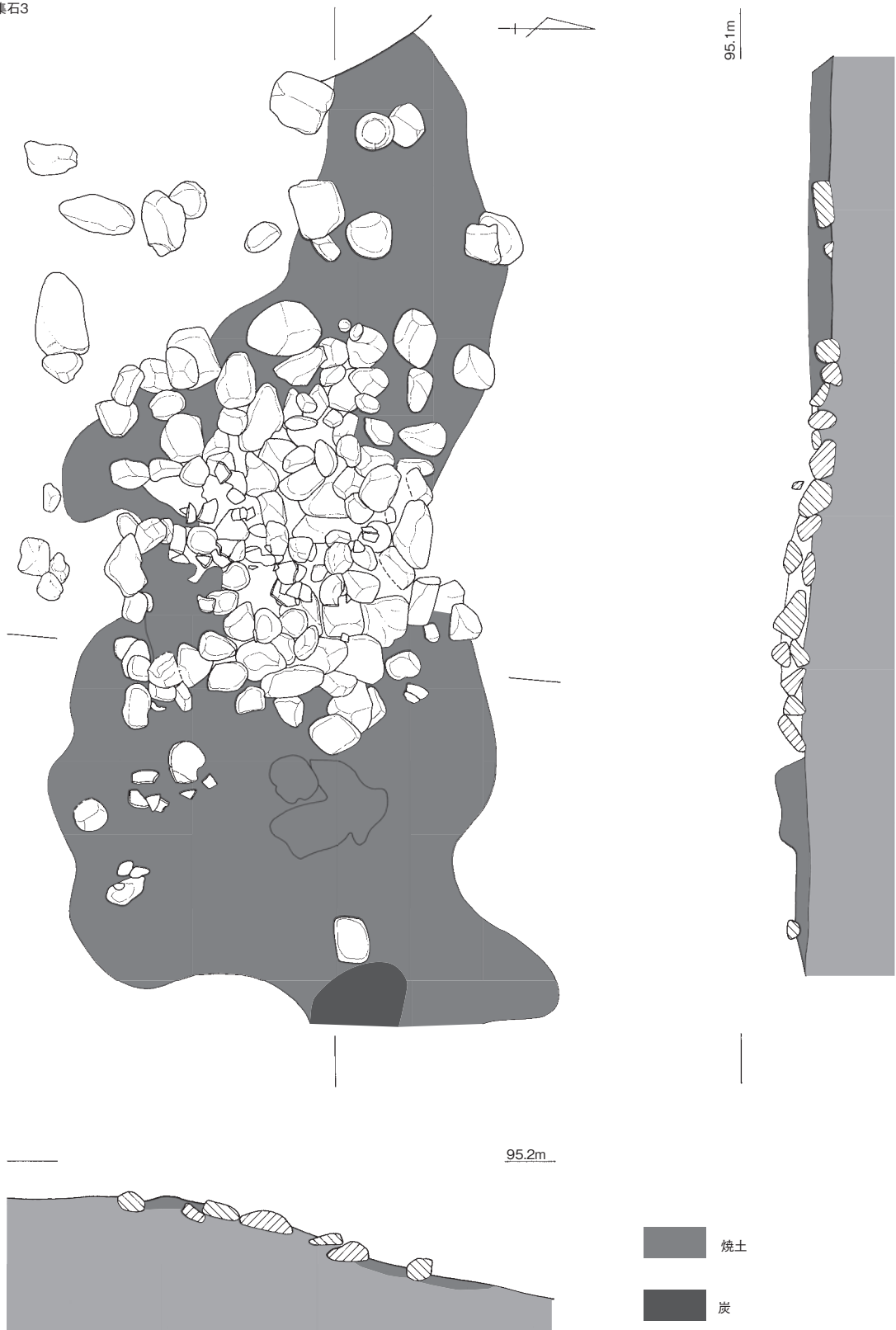
B-08 集石1



- 土師器 皿
- 土師器 その他

集石1

A-10・11 集石3



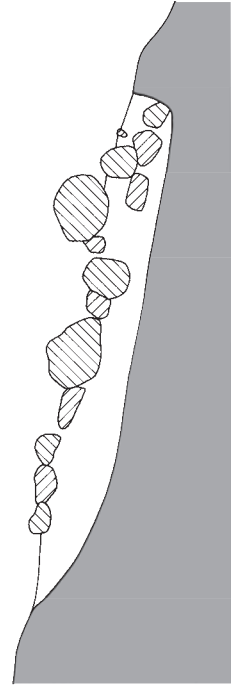
0 1m

集石3

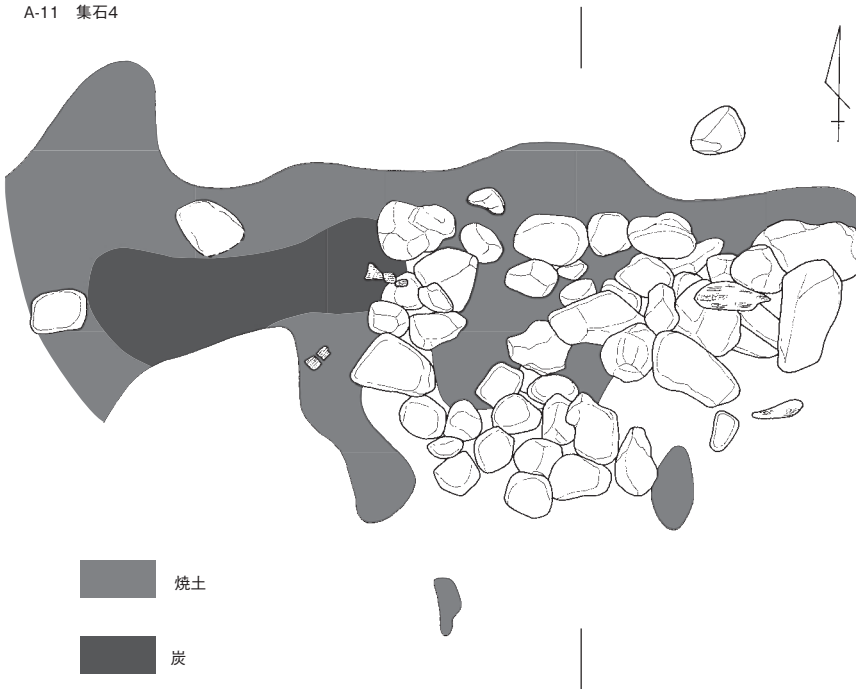
A-10 集石2



95.9m



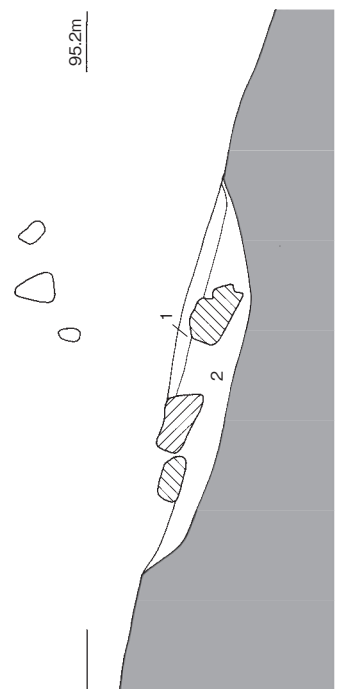
A-11 集石4



■ 焼土
■ 炭

0 1m

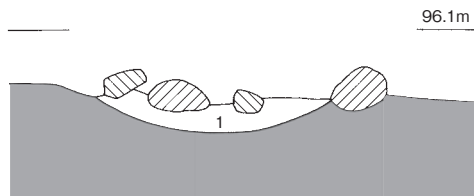
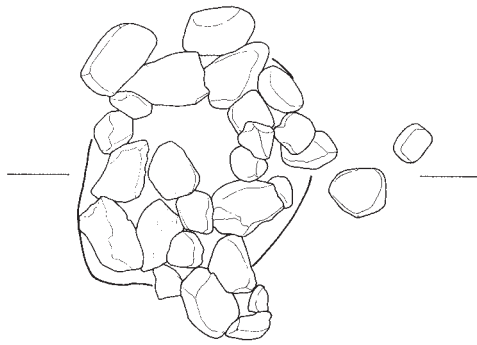
95.2m



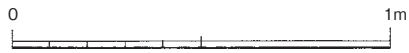
1. 明赤褐色 焼土
2. 明黄褐 シルト質極細砂

集石2・集石4

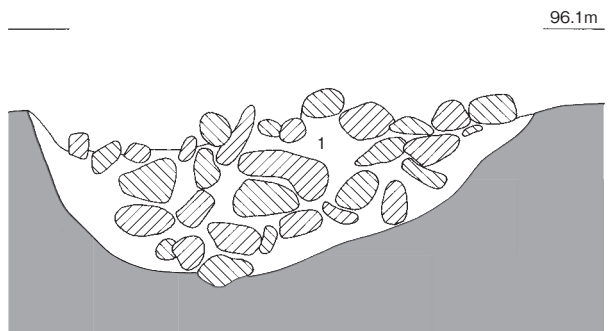
B-14 集石5



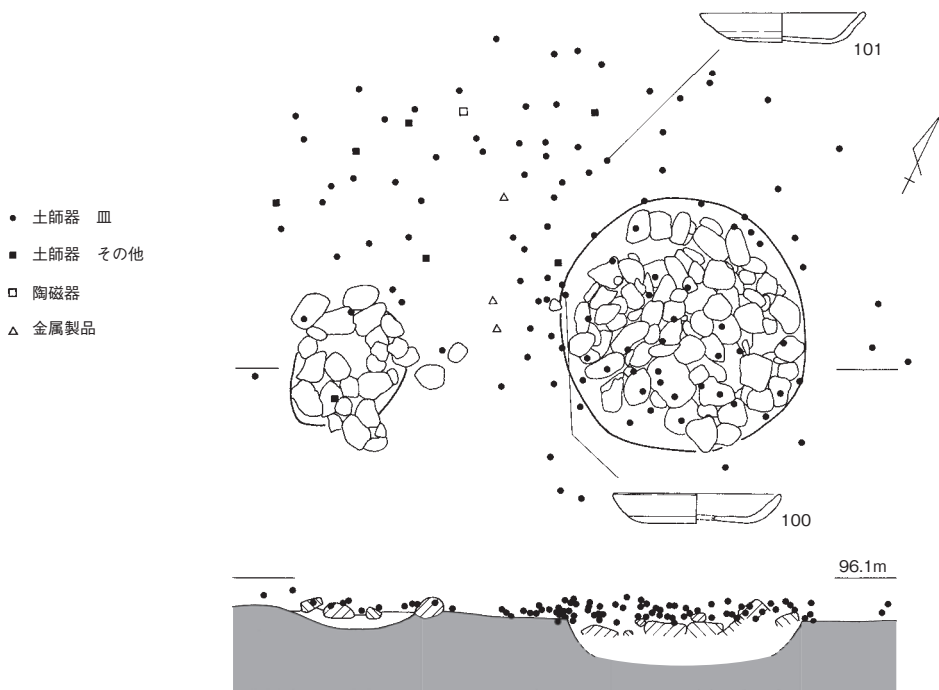
1. 黄褐色 シルト質極細砂(小・中礫を含む)



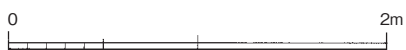
A-14・B-14 集石6



1. 黄褐色 極細砂



- 土師器 皿
- 土師器 その他
- 陶磁器
- △ 金属製品

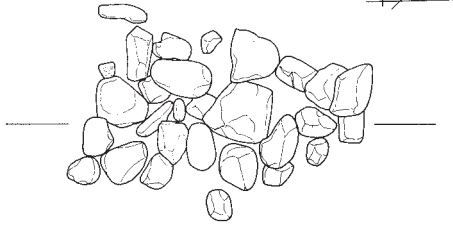


集石5・集石6

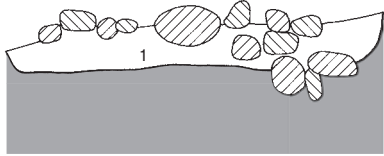
図版29 遺構 主郭

吉田住吉山遺跡

B-14 集石7

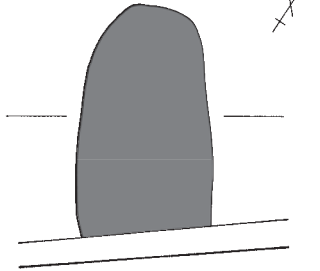


95.6m



1. 明黄褐色 極細砂(小礫を少量含む)

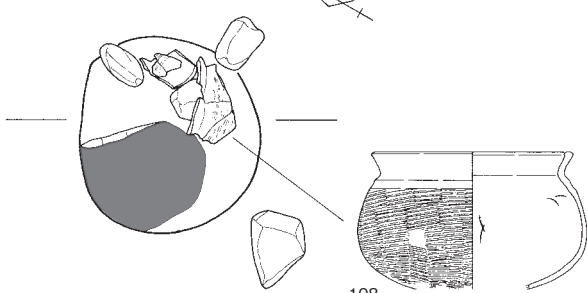
E-09 焼土3



96.5m

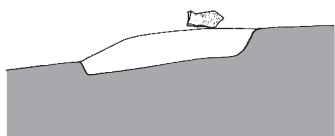


A-13 焼土4



108

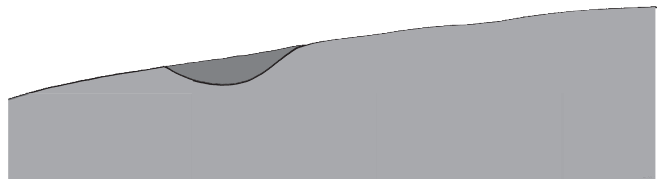
96.0m



B-08 焼土1

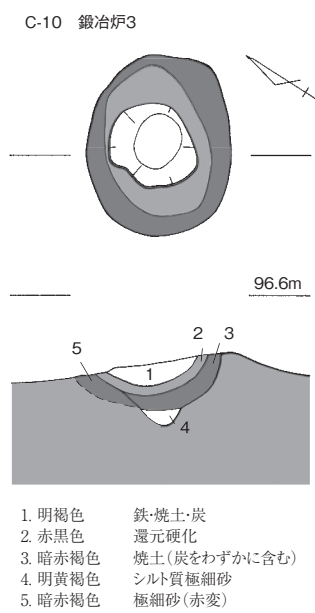
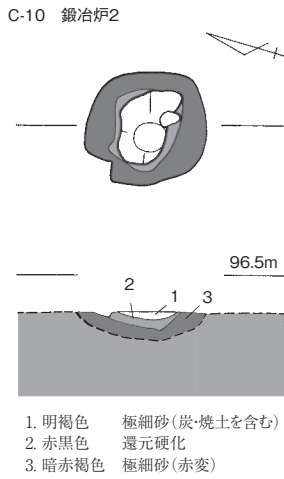
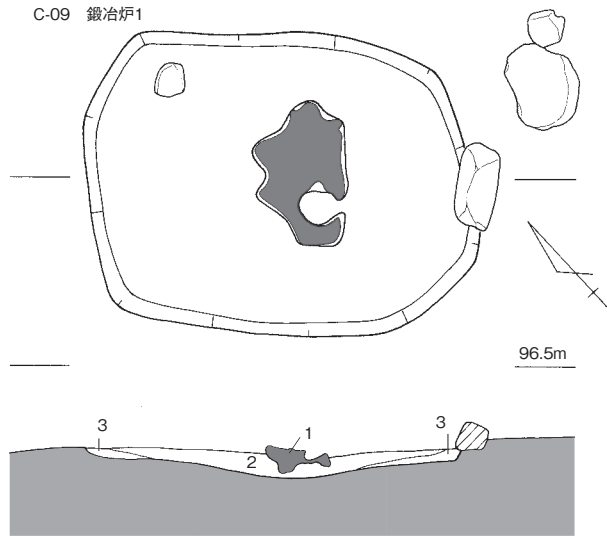


95.0m



焼土

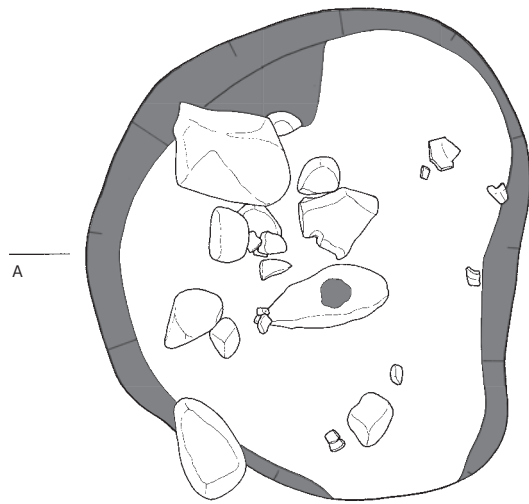
集石7・焼土1・焼土3・焼土4



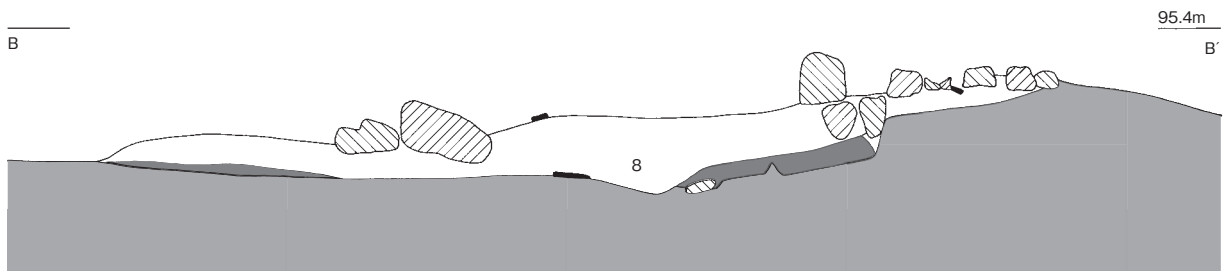
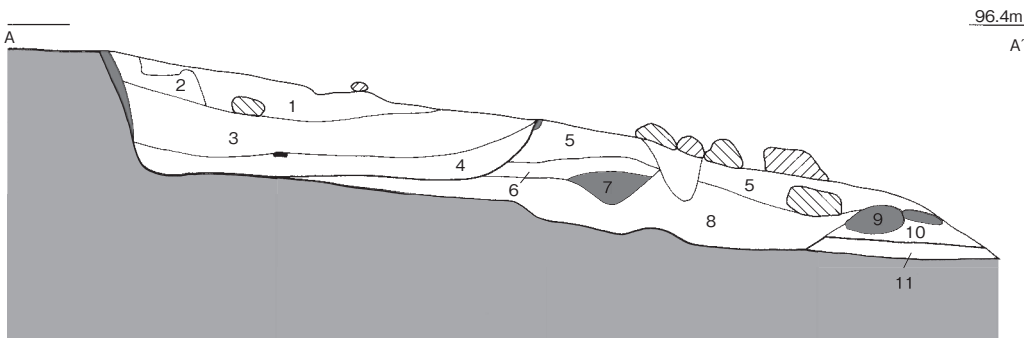
鍛冶炉1・鍛冶炉2・鍛冶炉3・SD01

図版31 遺構 主郭

A-12 炉1・炉2



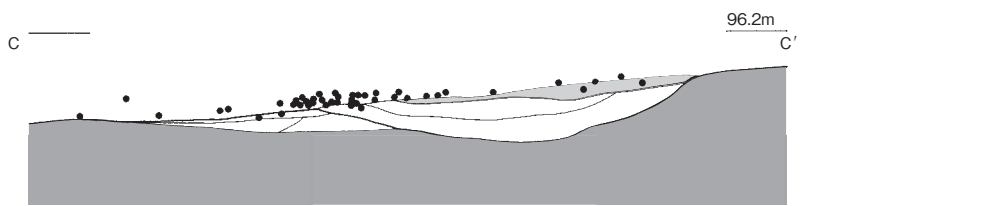
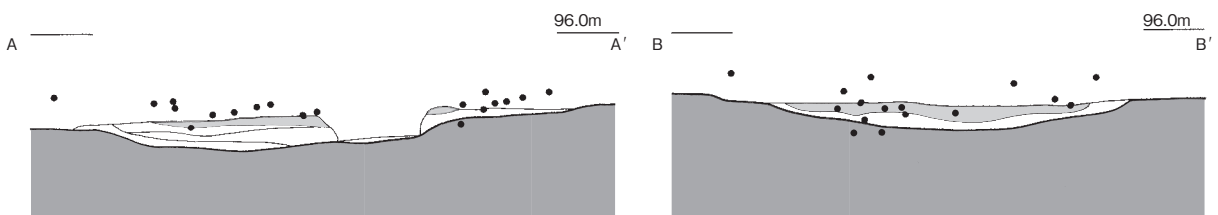
- 1. にぶい黄褐色 極細砂(炭を少量含む)
- 2. 褐色 シルト質極細砂(焼土塊・炭を含む)
- 3. 炭(焼土粒を含む)
- 4. にぶい黄褐色 極細砂(炭・焼土を含む)
- 5. にぶい黄褐色 極細砂(粗砂～大礫を多量に含む)
- 6. にぶい黄褐色 極細砂～細砂(炭・焼土を含む)
- 7. にぶい黄褐色 極細砂～細砂(炭・焼土を多量に含む)
- 8. にぶい黄褐色 極細砂(炭を少量含む)
- 9. 焼土塊
- 10. 炭
- 11. 黄褐色 シルト質極細砂:整地土



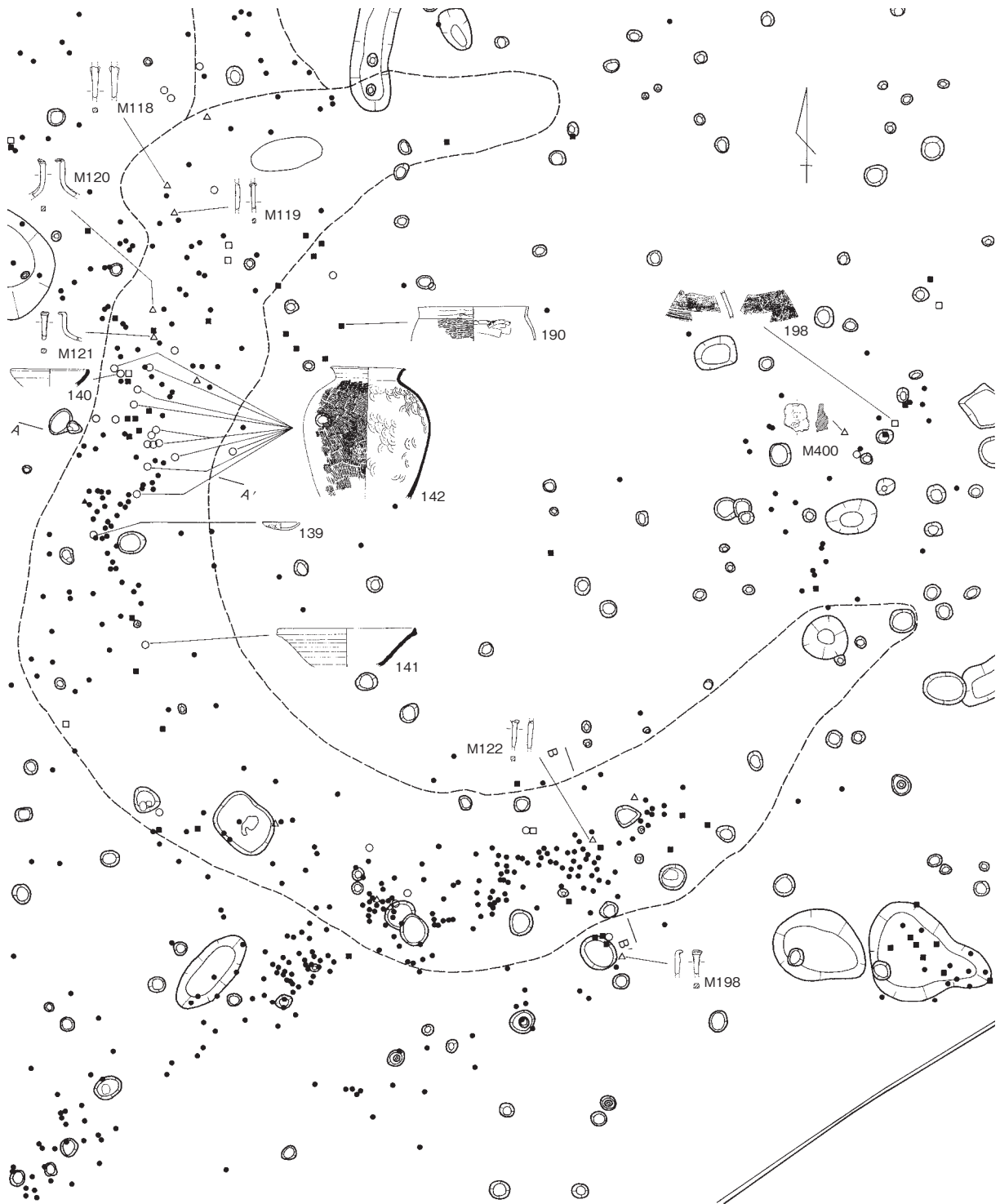
炉1・炉2



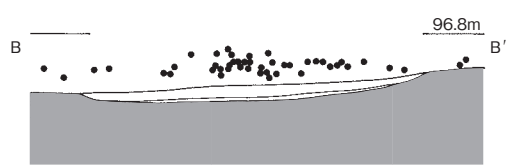
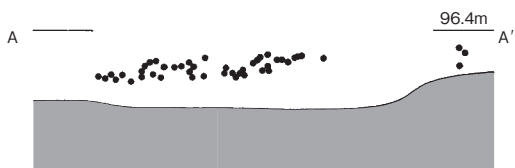
- 土師器 皿
- 須恵器
- 土師器 その他
- 陶磁器
- △ 金属製品



吉田住吉山6号墳周溝中世遺物出土位置



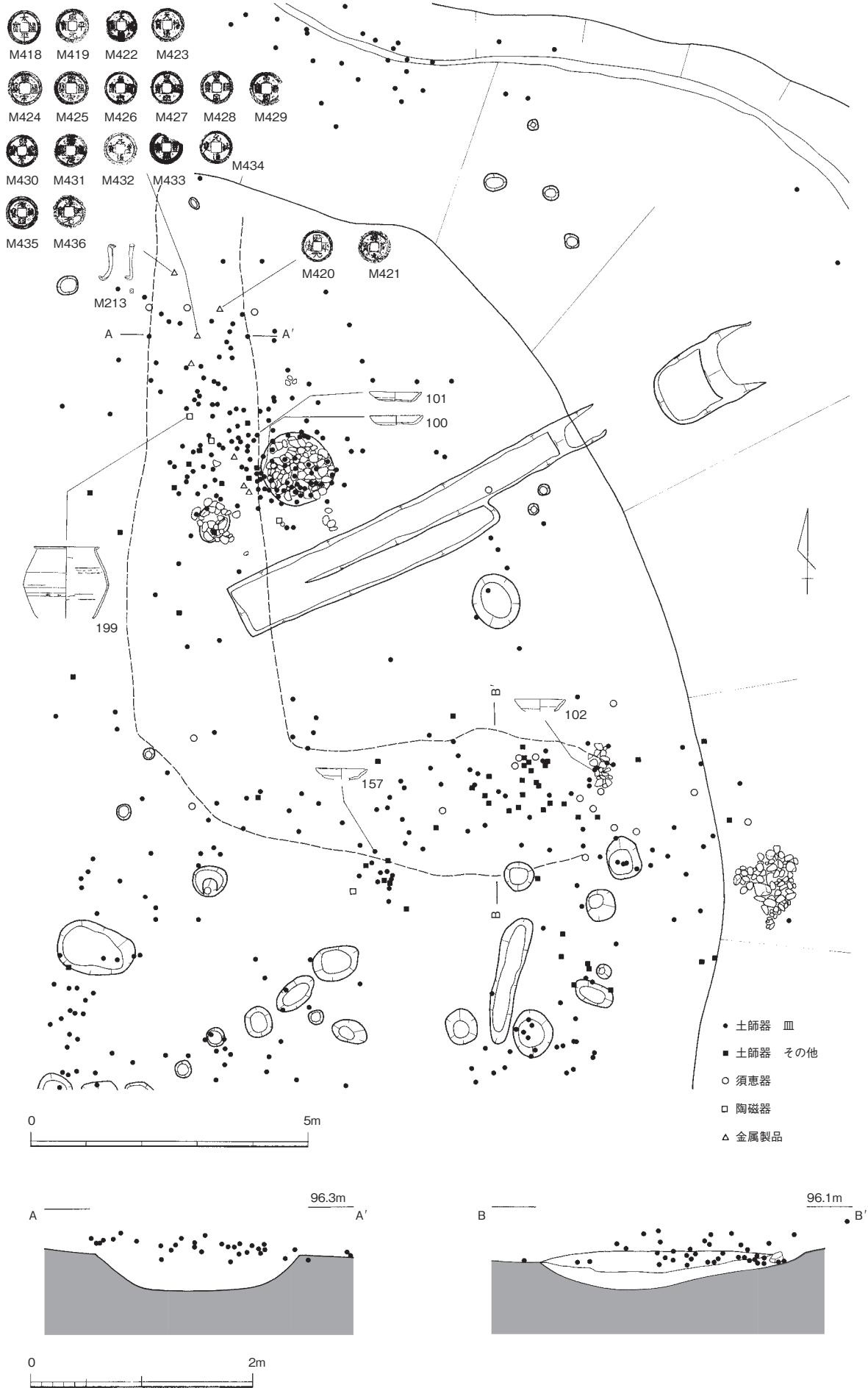
- 土師器 皿
- 須恵器
- 土師器 その他
- 陶磁器
- ▲ その他
- ▲ 金属製品



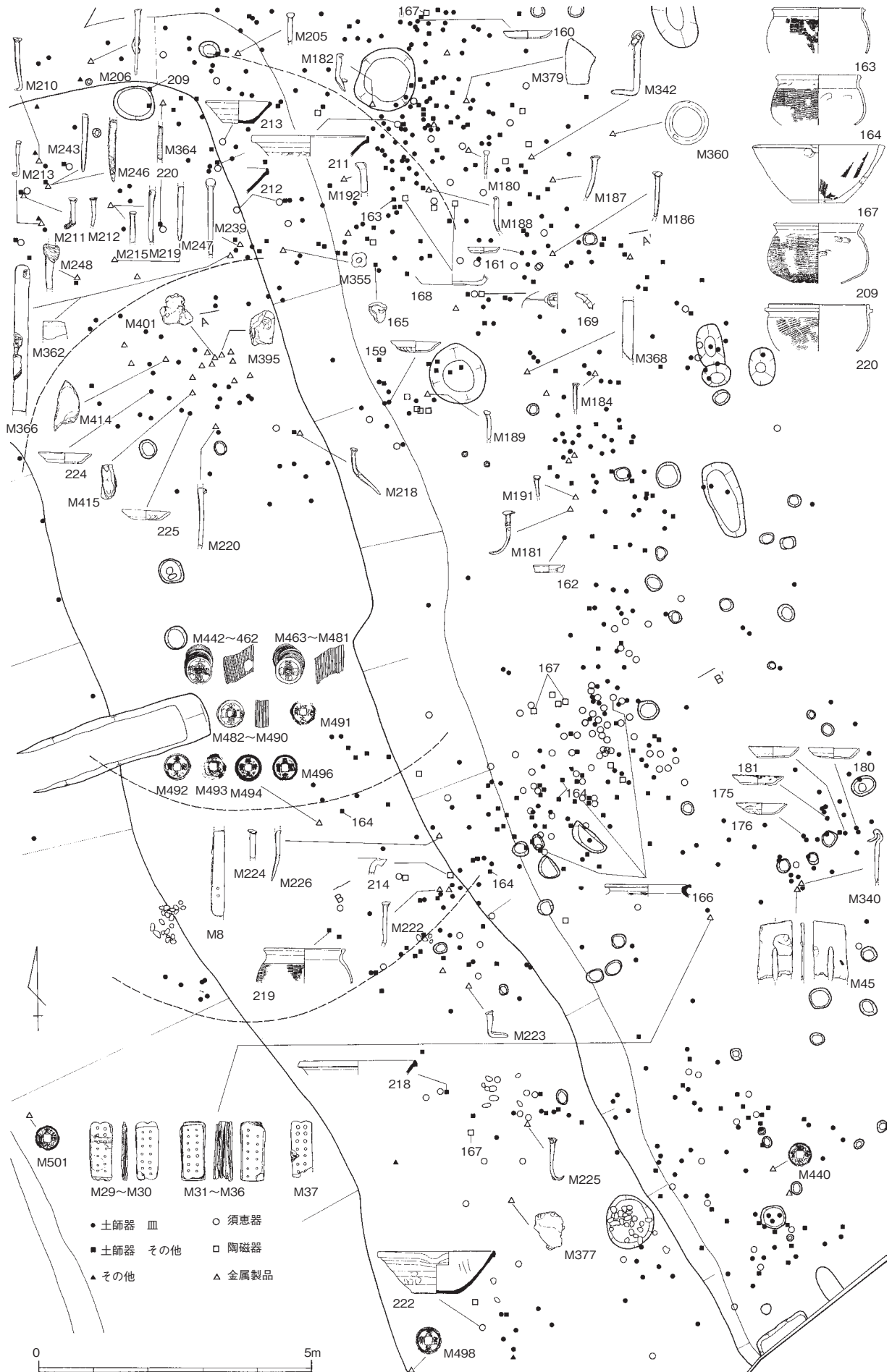
吉田住吉山2号墳周溝中世遺物出土位置



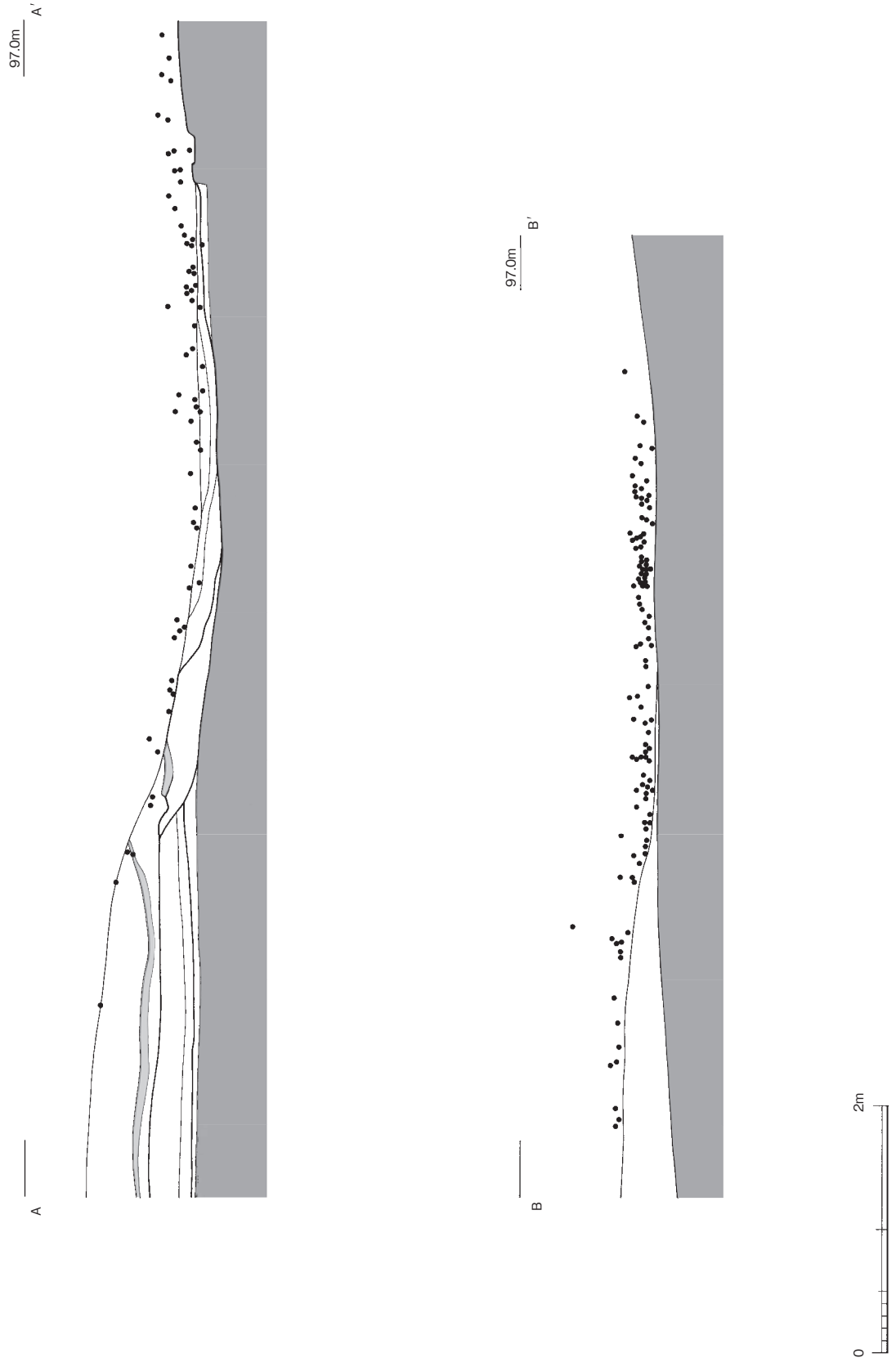
吉田住吉山5号墳周溝中世遺物出土位置



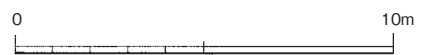
吉田住吉山4号墳周溝中世遺物出土位置



土壘1 東側中世遺物出土位置



土塁1 東側中世遺物出土位置断面



平面図 (上層)

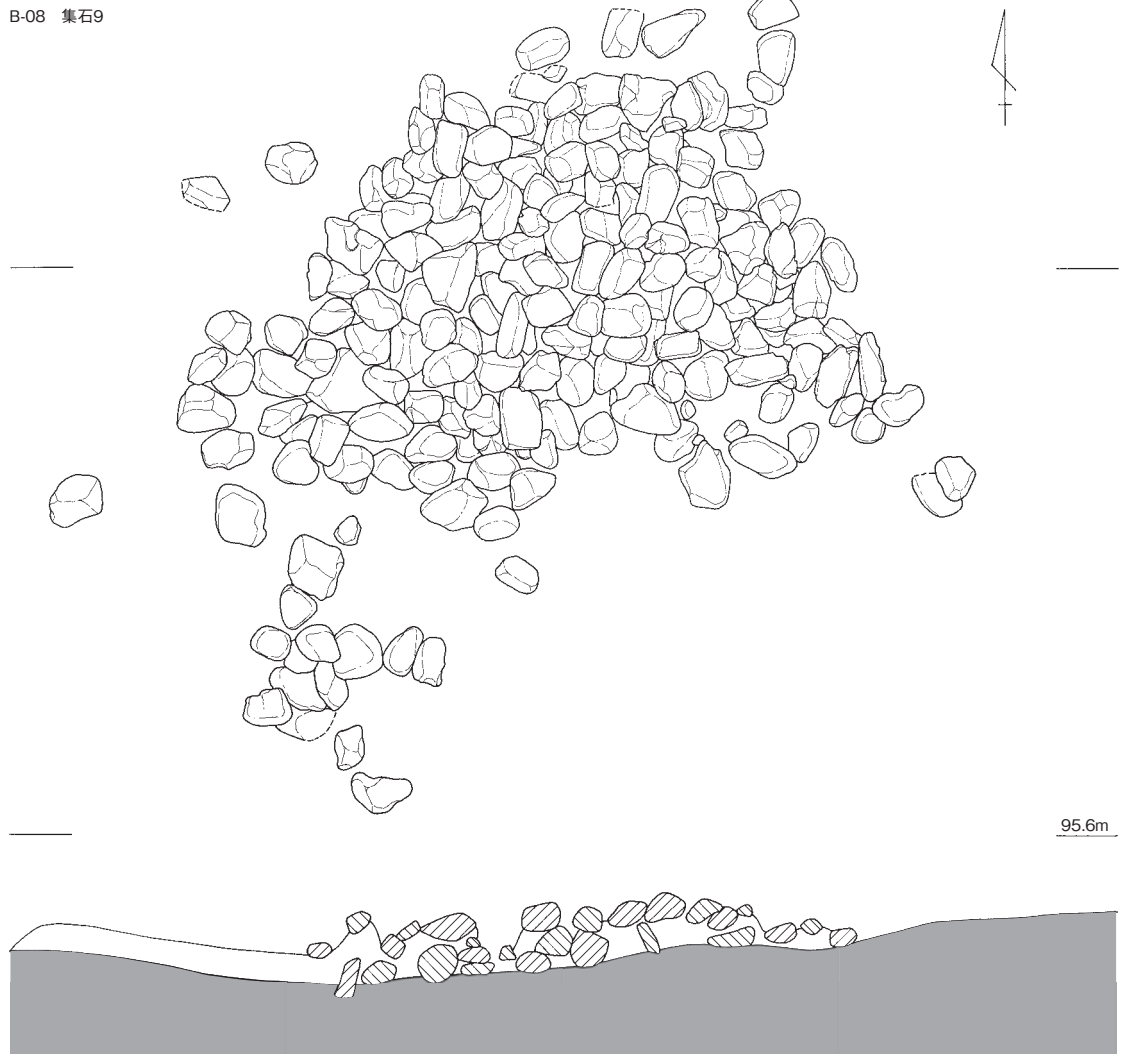
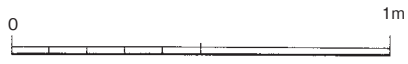
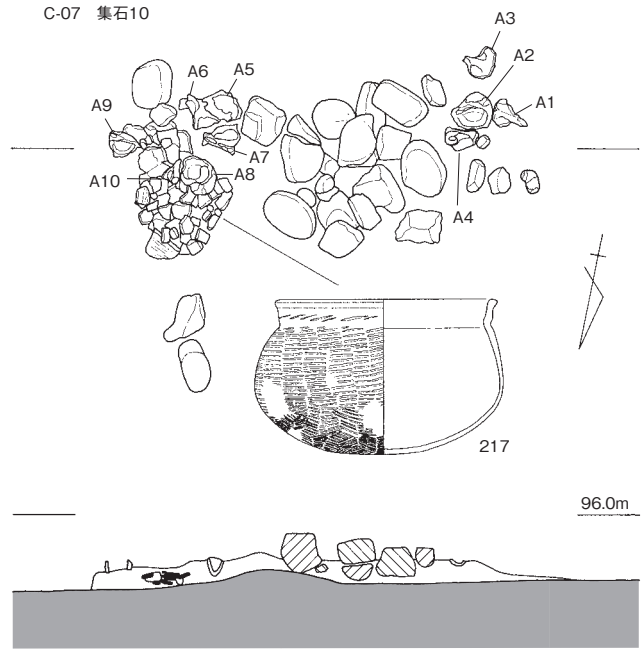
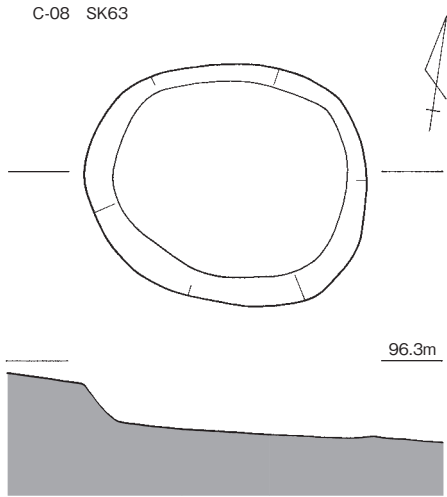


平面図 (下層)



土塁1 断面図

- | | | | |
|-------------|------------------------------|----------|------------------------------|
| 1. 橙色 | 極細砂・表土 | 16. 黄褐色 | シルト質極細砂・土塁1 |
| 2. 黄褐色 | シルト質極細砂(小礫を多量に含む)・土塁1東側 | 17. 黄褐色 | 極細砂(粗砂~小礫を少量含む)・土塁1 |
| 3. 褐色 | シルト質極細砂(小礫を少量に含む)・土塁1東側 | 18. 明黄褐色 | 極細砂(小~中礫を含む)・土塁1 |
| 4. 黄褐色 | シルト質極細砂・土塁1東側 | 19. 明黄褐色 | シルト質極細砂(小~中礫を含む)・土塁1 |
| 5. 土小 | 極細砂~細砂(小~中礫を多量に含む)・土塁1 | 20. 明黄褐色 | 極細砂(小礫を含む)・土塁1 |
| 6. 明黄褐色 | 極細砂~細砂(小~中礫を多量に含む)・土塁1 | 21. 黄褐色 | シルト質極細砂(粗砂~小礫を少量含む)・土塁1 |
| 7. 炭・金属工房 | シルト質極細砂(粗砂~小礫を少量含む)・土塁1 | 22. 明黄褐色 | 極細砂(粗砂~小礫を少量含む)・土塁1 |
| 8. 炭・金属工房 | シルト質極細砂(粗砂~小礫を少量含む)・土塁1 | 23. 黄褐色 | シルト質極細砂(粗砂を含む、小礫を少量含む)・土塁1 |
| 9. 炭・金属工房 | シルト質極細砂(粗砂を含む、小礫を少量含む)・土塁1 | 24. 明黄褐色 | 極細砂(小~中礫を含む)・土塁1 |
| 10. 黄褐色 | 極細砂(小礫・炭を少量含む) | 25. 黄褐色 | シルト質極細砂(粗砂を含む、小礫を少量含む)・土塁1 |
| 11. におい・黄褐色 | 極細砂(粗砂~小礫を含む)・土塁1 | 26. 黄褐色 | シルト質極細砂(粗砂~小礫を少量含む) |
| 12. 明黄褐色 | シルト質極細砂(粗砂~小礫を含む、炭を多く含む)・土塁1 | 27. 黄褐色 | シルト質極細砂(粗砂を含む、小礫を少量含む)・9号墳蓋土 |
| 13. 明黄褐色 | 極細砂~細砂(小~中礫を多量に含む)・土塁1 | 28. 褐色 | 極細砂(炭を多く含む)・旧表土 |
| 14. 明黄褐色 | 極細砂~細砂(小~中礫を多量に含む)・土塁1 | 29. 橙色 | 極細砂・地山 |
| 15. 明黄褐色 | 極細砂~細砂(粗砂~中礫を含む)・土塁1 | | |

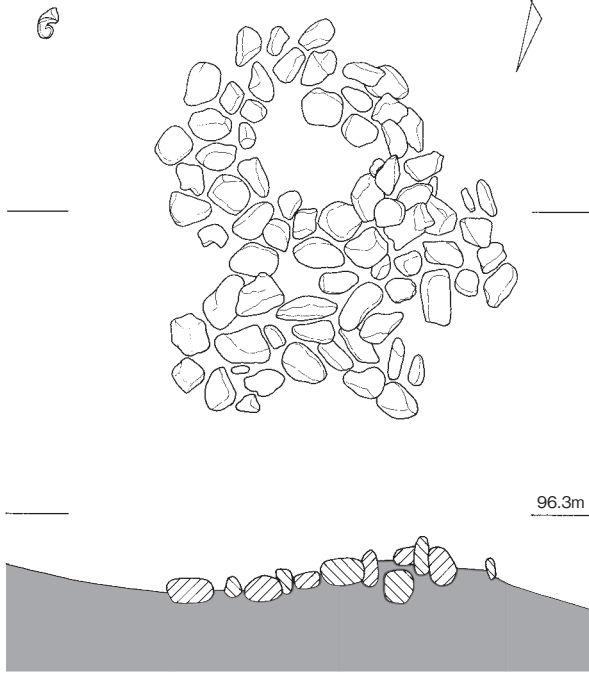


SK63・集石10・集石9

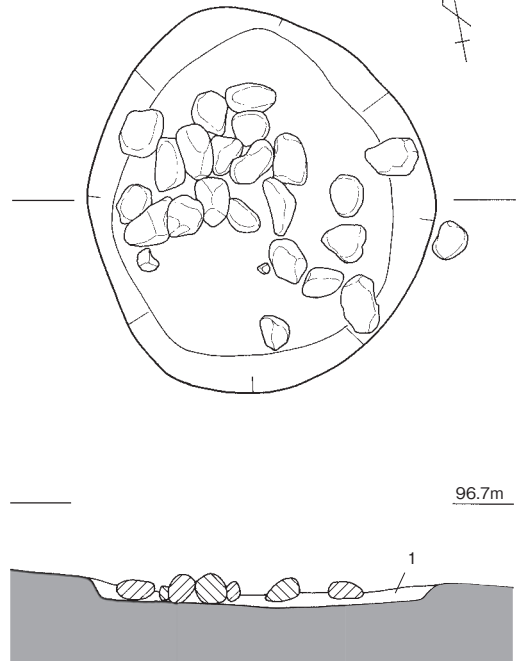
図版43 遺構 土塁1

吉田住吉山遺跡

D-08 集石12

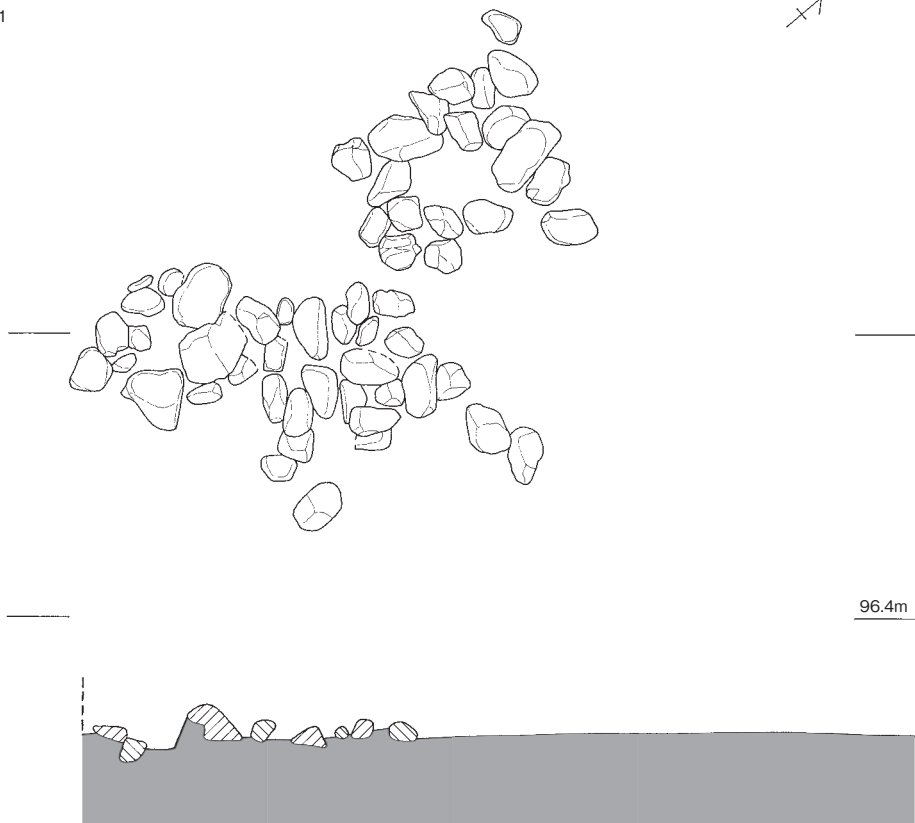


E-09 集石8



1. 黄褐色 シルト質極細砂

D-08 集石11



0 1m

集石8・集石12・集石11

D-08 集石13



1. にぶい黄褐色 シルト質極細砂(小・中礫を含む) 2. にぶい黄褐色 シルト質極細砂(小礫を少量含む) 3. 黄褐色 シルト質極細砂(粗砂・炭を少量含む) 4. 褐色 シルト質極細砂(粗砂・小礫を含む) 9号墳周溝埋土

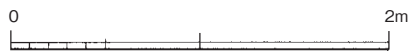
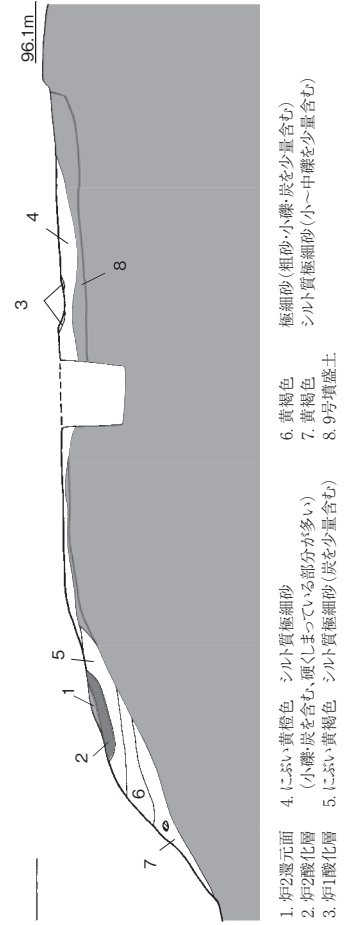
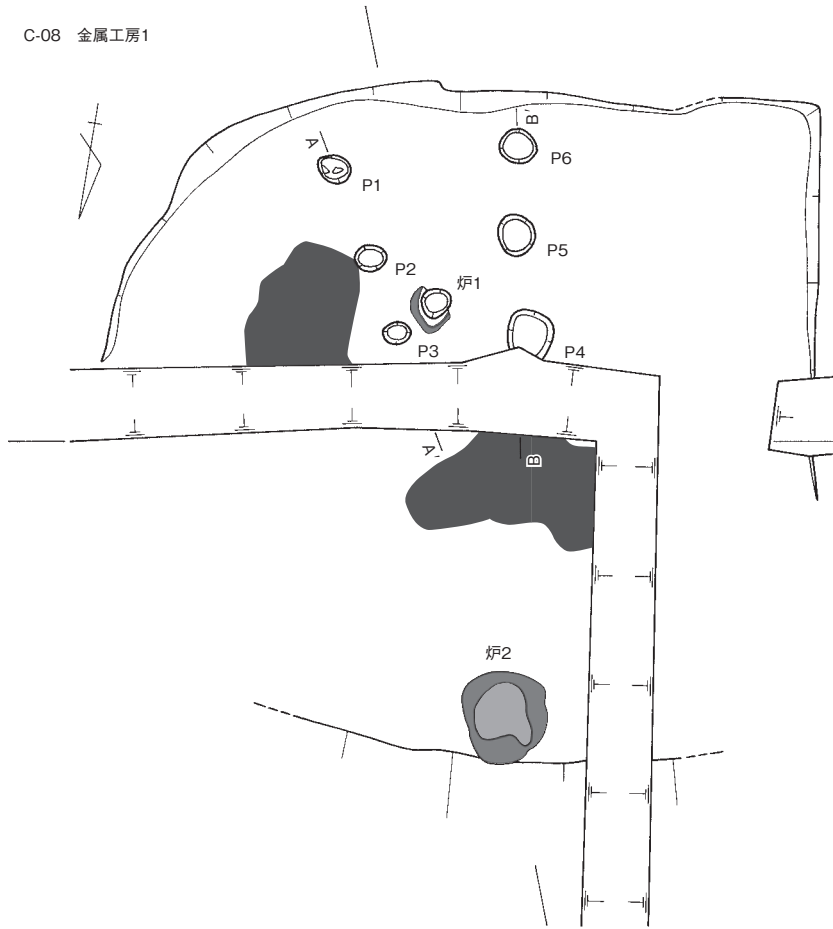
E-08 集石14



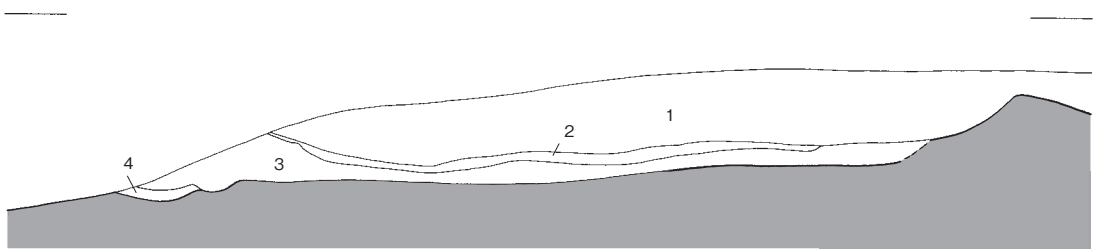
- 1. 黄褐色 小礫～極細砂・土塁盛土
- 2. にぶい黄褐色 シルト質極細砂
- 3. 明褐色 シルト質極細砂
- 4. 明褐色 シルト質極細砂(炭をわずかに含む)
- 5. 明褐色 シルト質極細砂(炭・礫をわずかに含む)
- 6. 黄褐色 粗砂～シルト質極細砂

0 1m

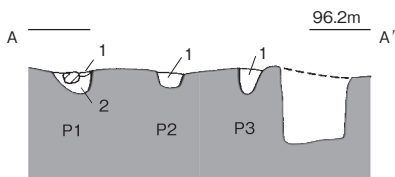
C-08 金属工房1



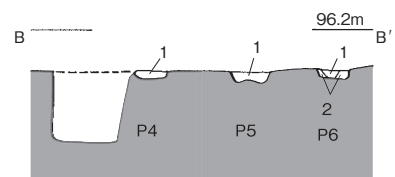
- 1. 炉2還元面 極細砂(粗砂・小礫・炭を少量含む)
- 2. 炉2酸化層 (小礫・炭を含む、硬くまとっている部分が多い)
- 3. 炉1酸化層 5. にぶい黄褐色 シルト質極細砂(炭を少量含む)
- 4. にぶい黄褐色 シルト質極細砂
- 6. 黄褐色 極細砂(粗砂・小礫・炭を少量含む)
- 7. 黄褐色 シルト質極細砂(炭を少量含む)
- 8. 9号墳盛土



- 1. 明黄褐色 極細砂～細砂(小～中礫を多量に含む):土塁1
- 2. 炭:金属工房1
- 3. 明黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む、炭を多量に含む):金属工房1
- 4. 炭:金属工房1

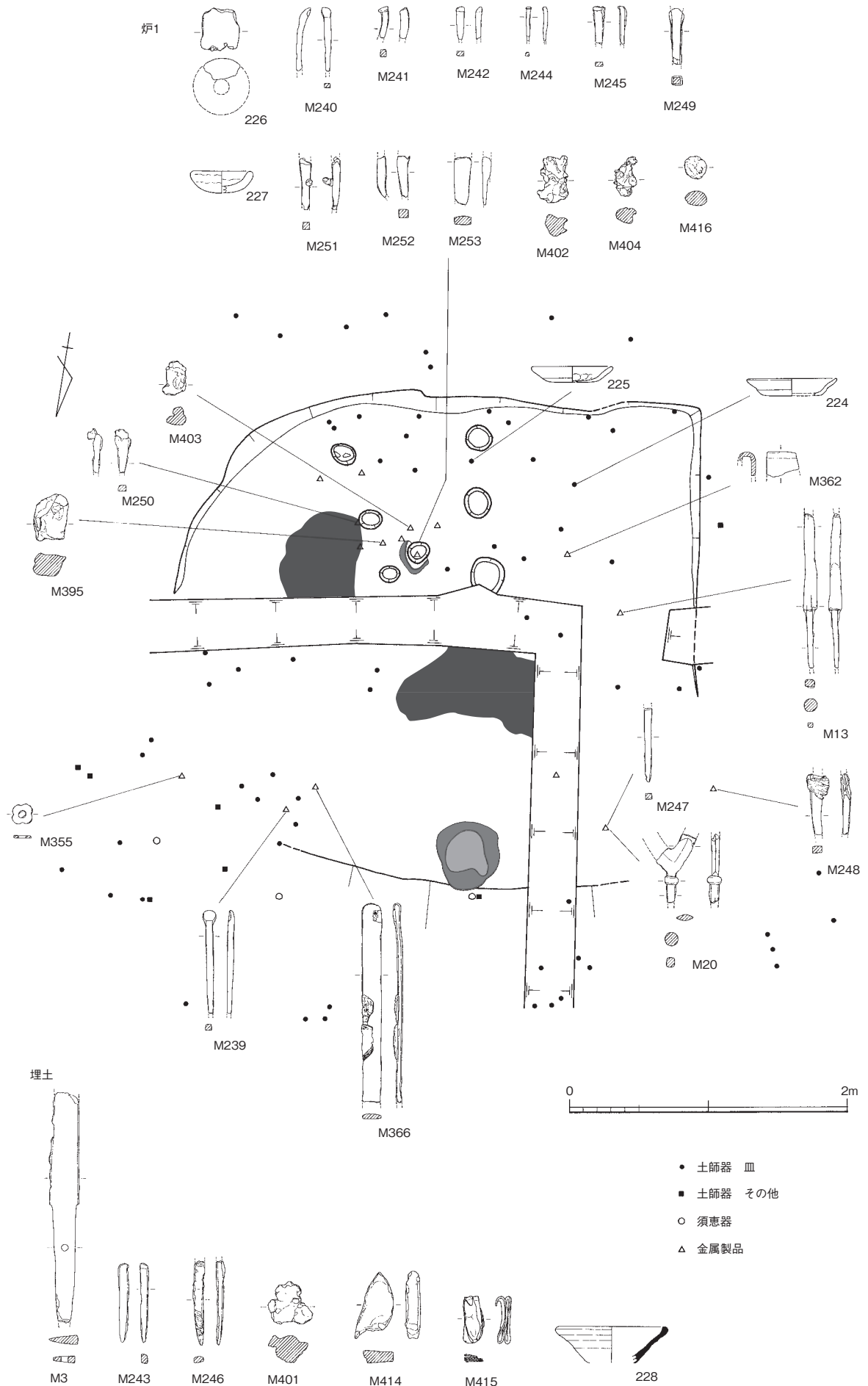


- P1 1. にぶい黄褐色 シルト質極細砂(炭を含む)
2. 黄褐色 極細砂
- P2 1. 暗灰黄色 シルト質極細砂(炭を多量に含む)
- P3 1. 暗灰黄色 シルト質極細砂(炭を多量に含む)



- P4 1. 黄褐色 シルト質極細砂(炭を含む)
- P5 1. 黄褐色 シルト質極細砂(炭を含む)
- P6 1. 黄褐色 シルト質極細砂(炭を多量に含む)
2. 黄褐色 極細砂

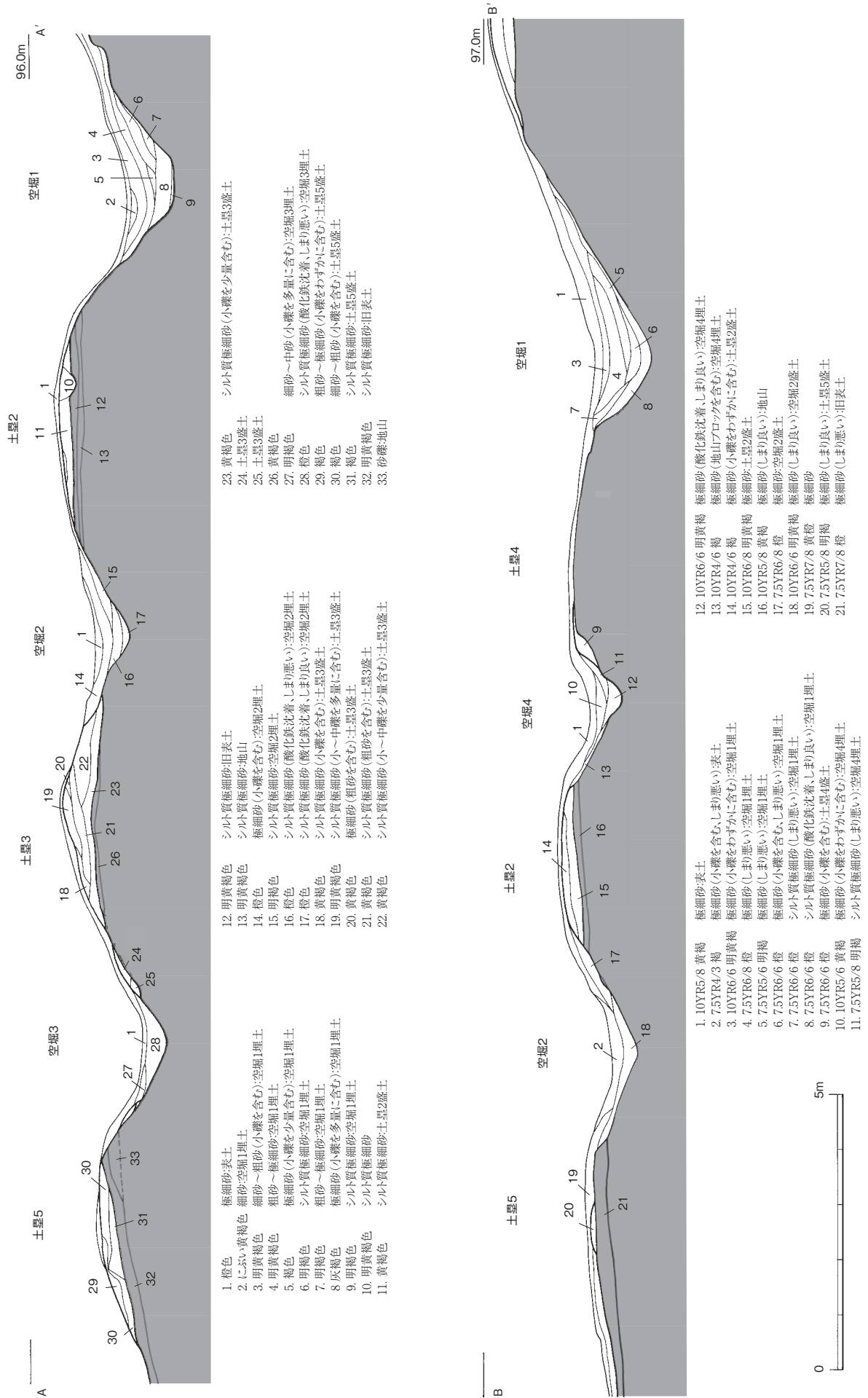
金属工房 1



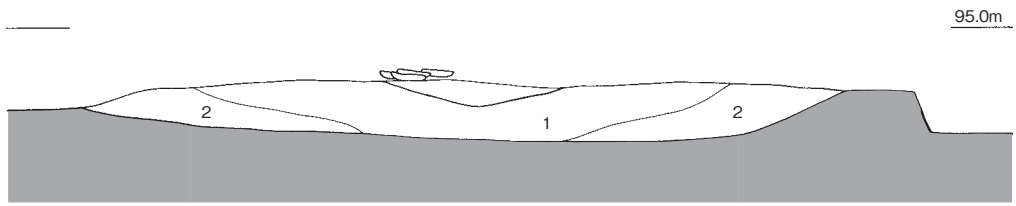
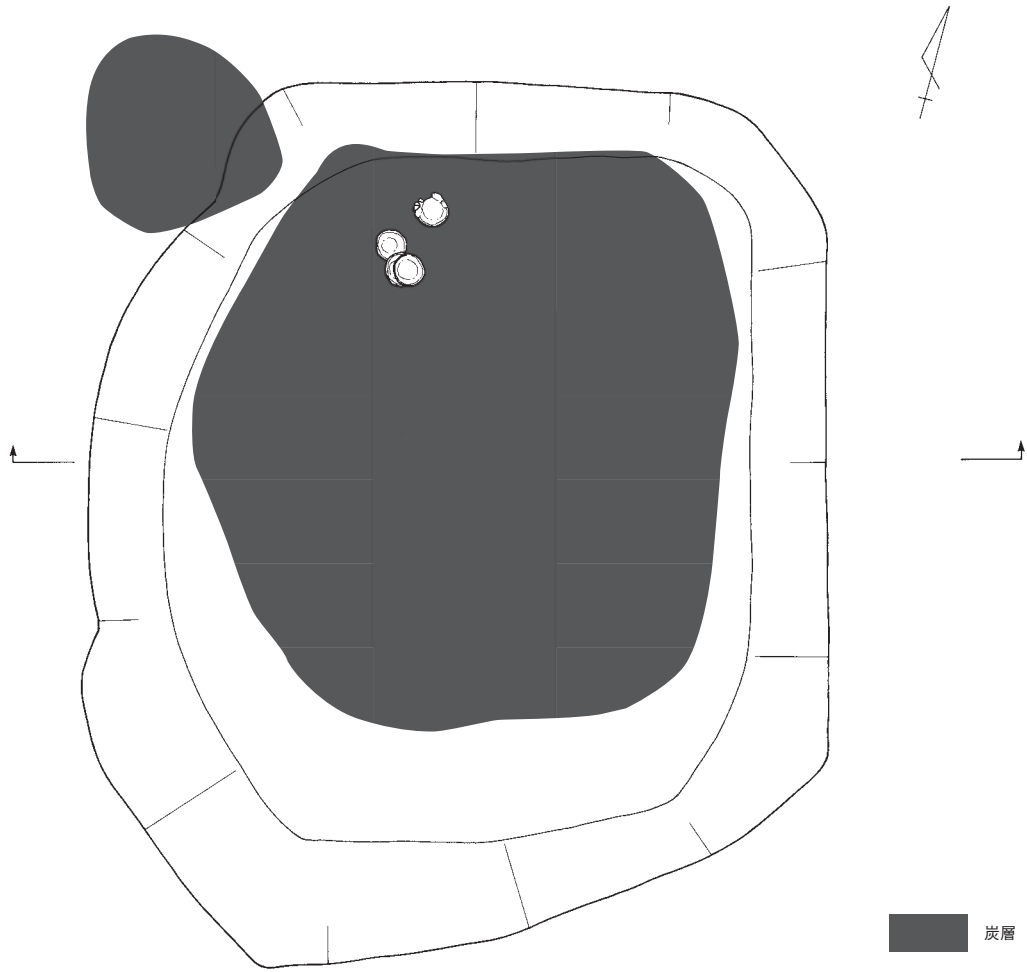
金属工房1 遺物出土位置



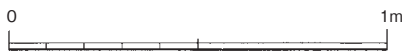
全体図

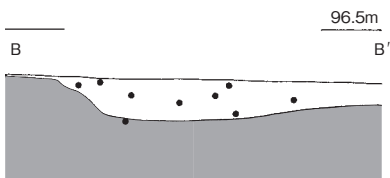
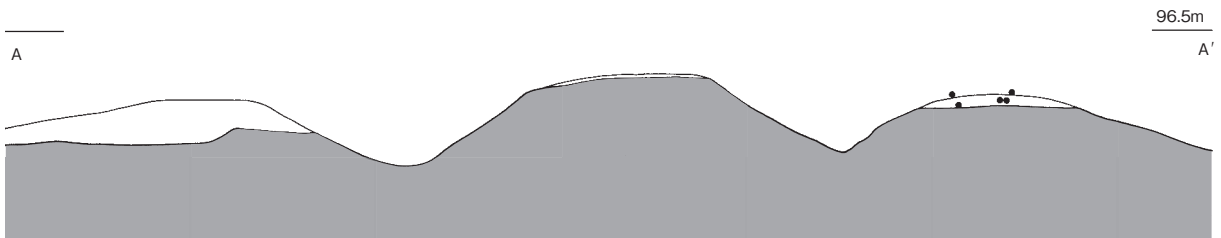
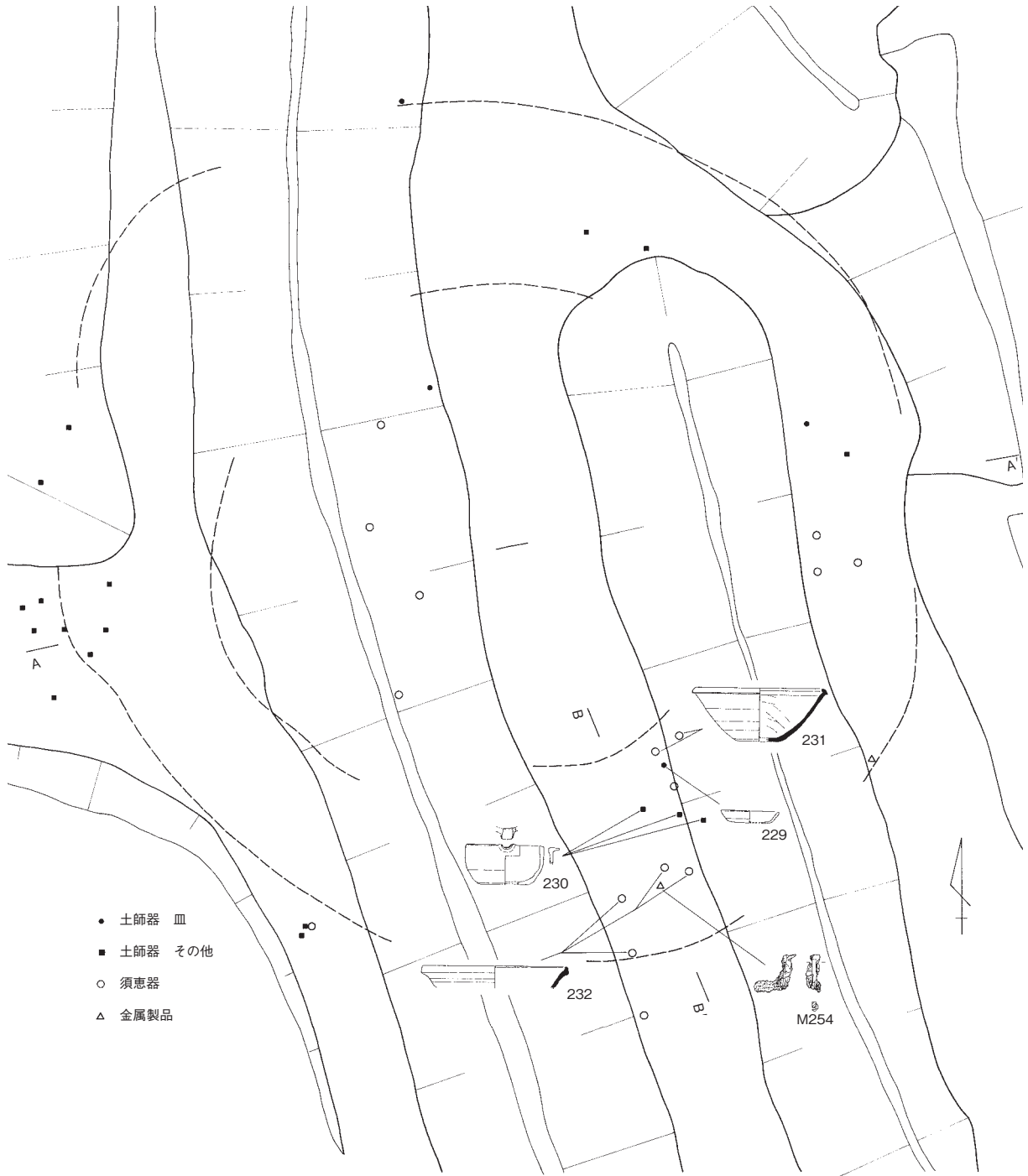


E-07 SK64

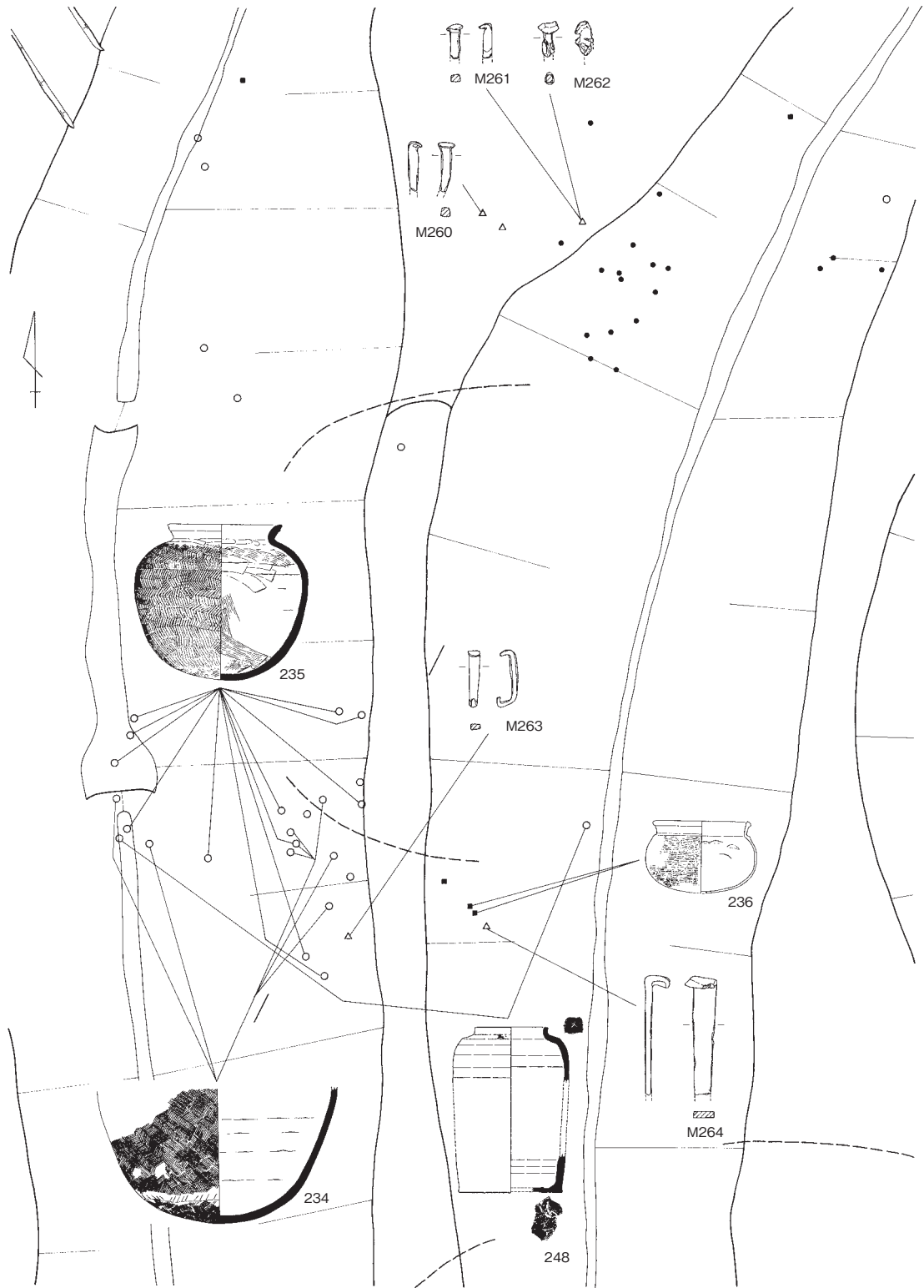


- 1. にぶい黄色 シルト質極細砂
- 2. 黄褐色 シルト質極細砂(小礫を含む)

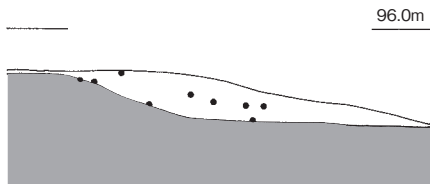




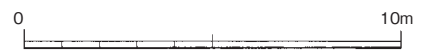
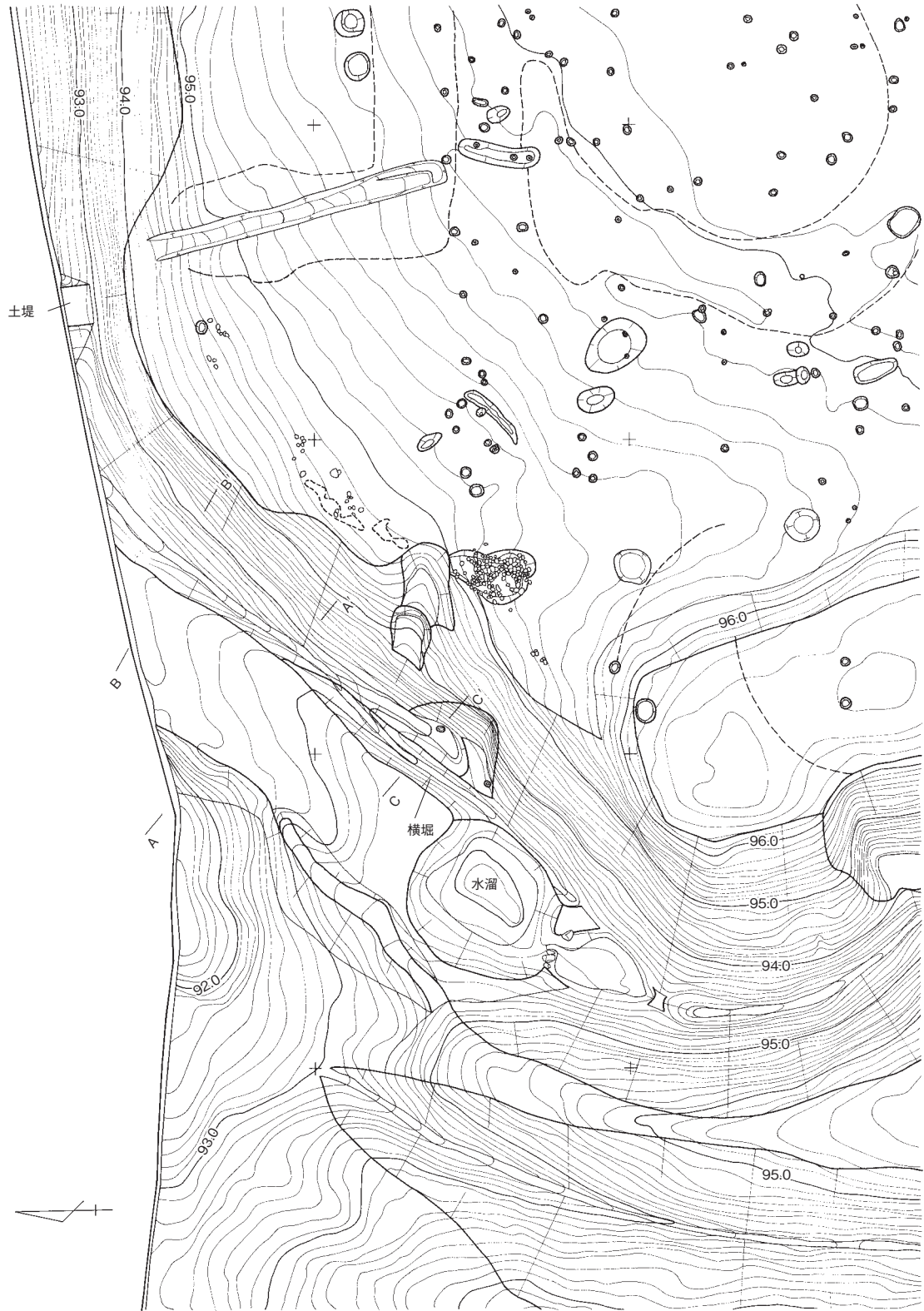
吉田住吉山7号墳周溝中世遺物出土位置



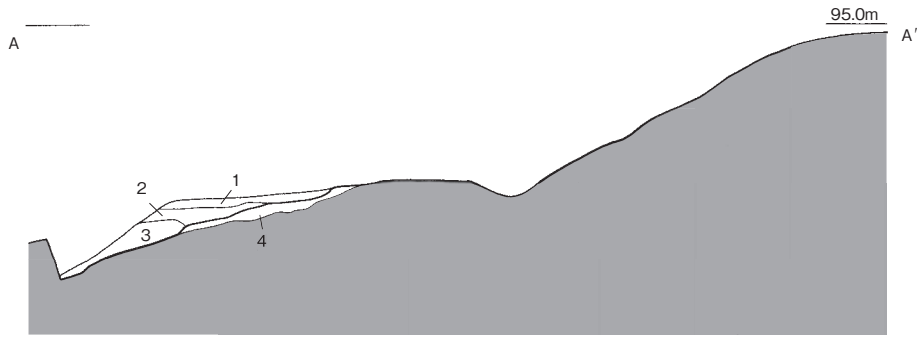
- 土師器 皿
- 土師器 その他
- 須恵器
- △ 金属製品



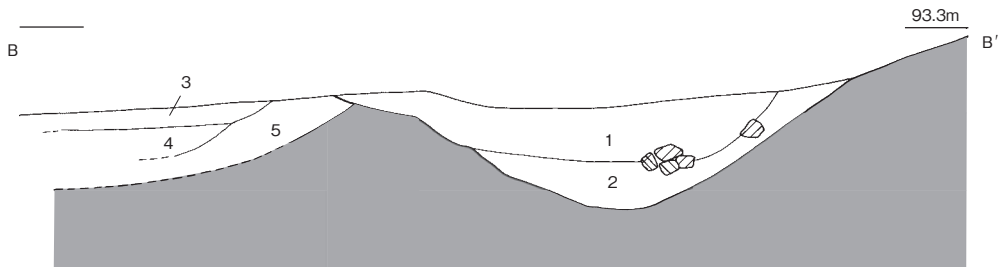
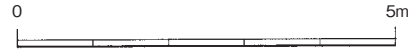
吉田住吉山8号墳周溝中世遺物出土位置



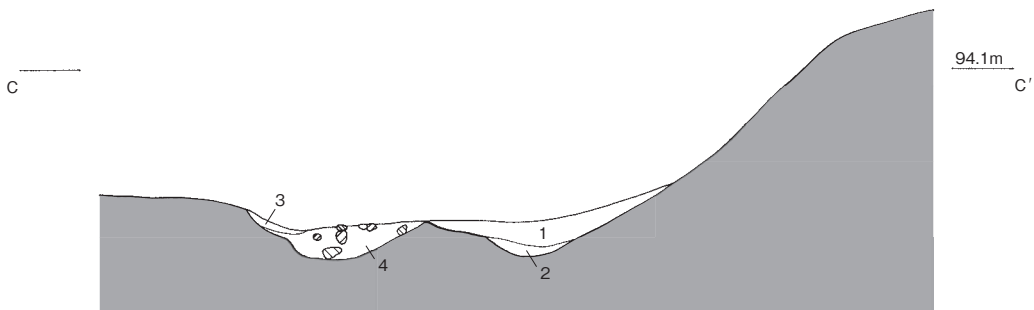
全体図



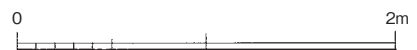
- 1. にぶい黄褐色 極細砂(小～中礫を含む):盛土
- 2. 黄褐色 シルト質極細砂(小礫を少量含む):盛土
- 3. にぶい黄褐色 シルト質極細砂(粗砂を含む,小～中礫を少量含む):盛土
- 4. にぶい黄褐色 シルト質極細砂(小～中礫を少量含む):旧表土



- 1. 黄褐色 シルト質極細砂(小～中礫を含む):横堀埋土
- 2. 黄褐色 細砂～中砂(粗砂を含む):横堀埋土
- 3. 黄褐色 極細砂(粗砂～小礫を含む):整地土
- 4. にぶい黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む):整地土
- 5. にぶい黄褐色 極細砂～細砂(小～中礫を含む):整地土or横堀外土塁



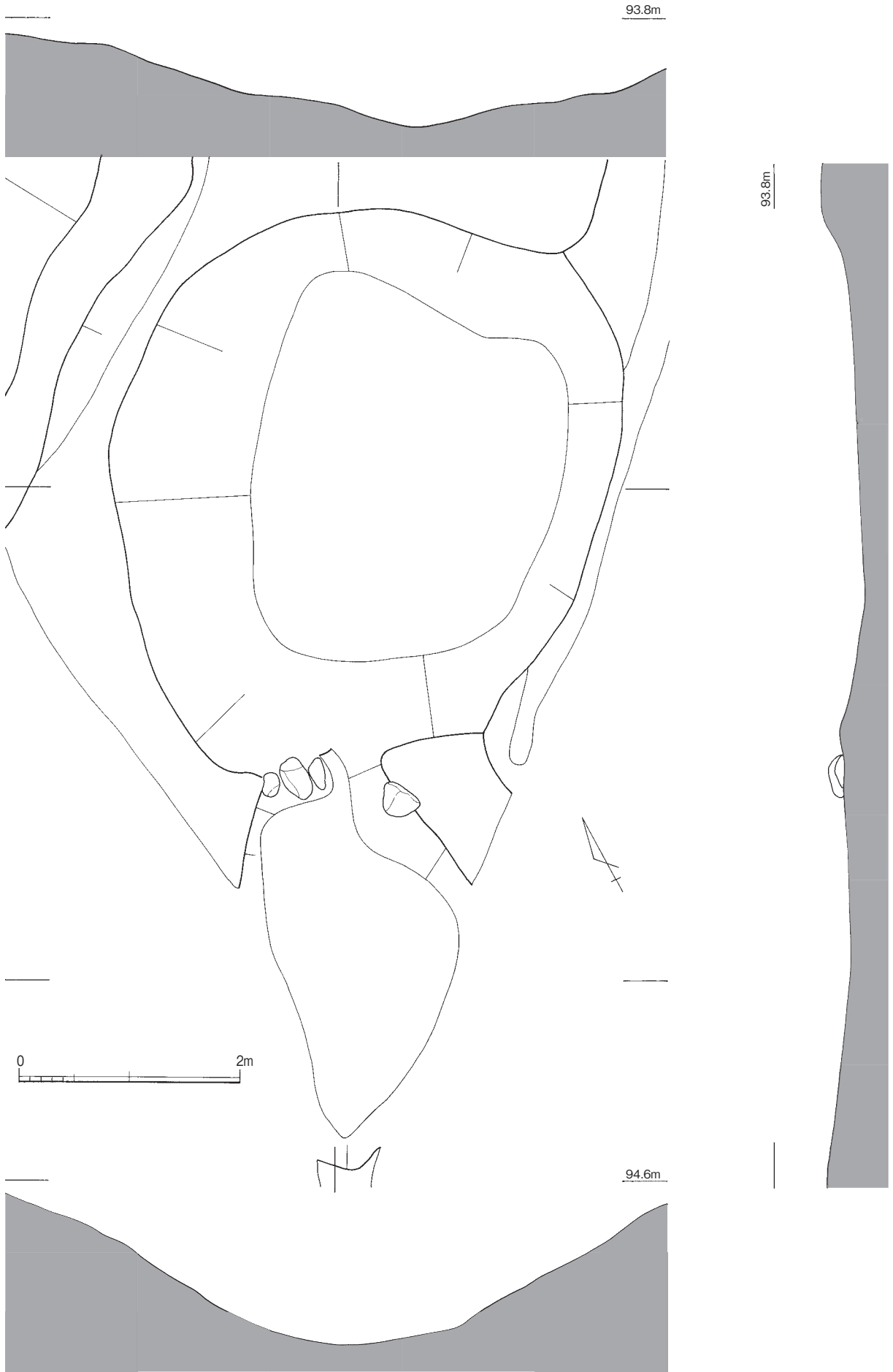
- 1. 黄褐色 極細砂(炭・小～中礫を多量に含む):横堀埋土
- 2. 明黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む):横堀埋土
- 3. 黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～中礫を含む):整地土
- 4. 黄褐色 シルト質極細砂(中～大礫を多量に含む,糸きり土師皿を含む):横堀埋土

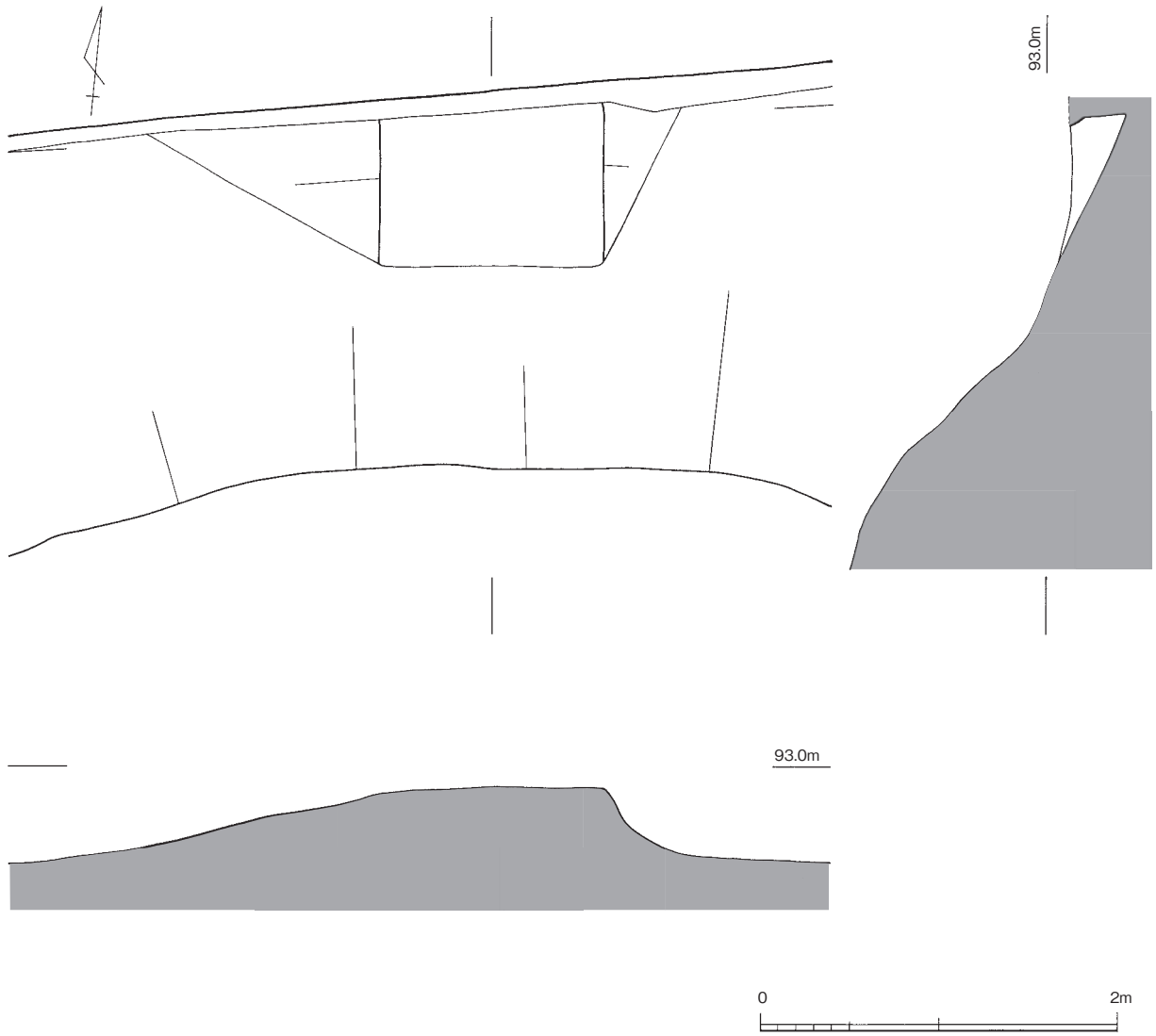


断面図

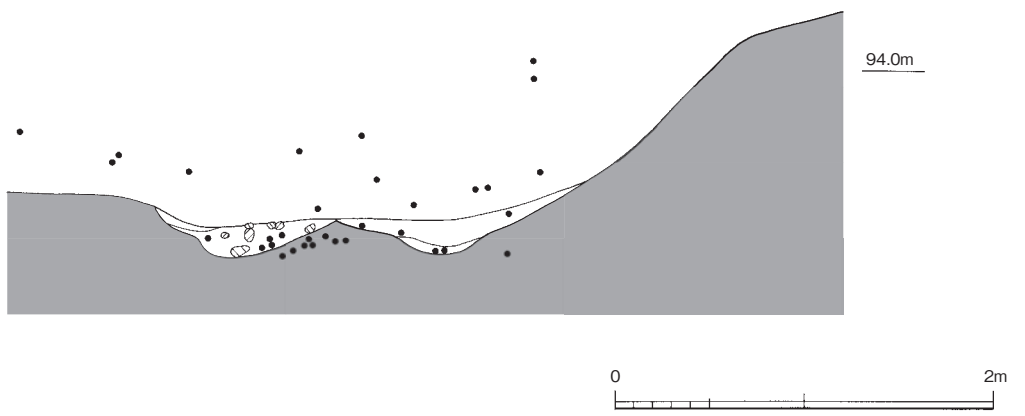
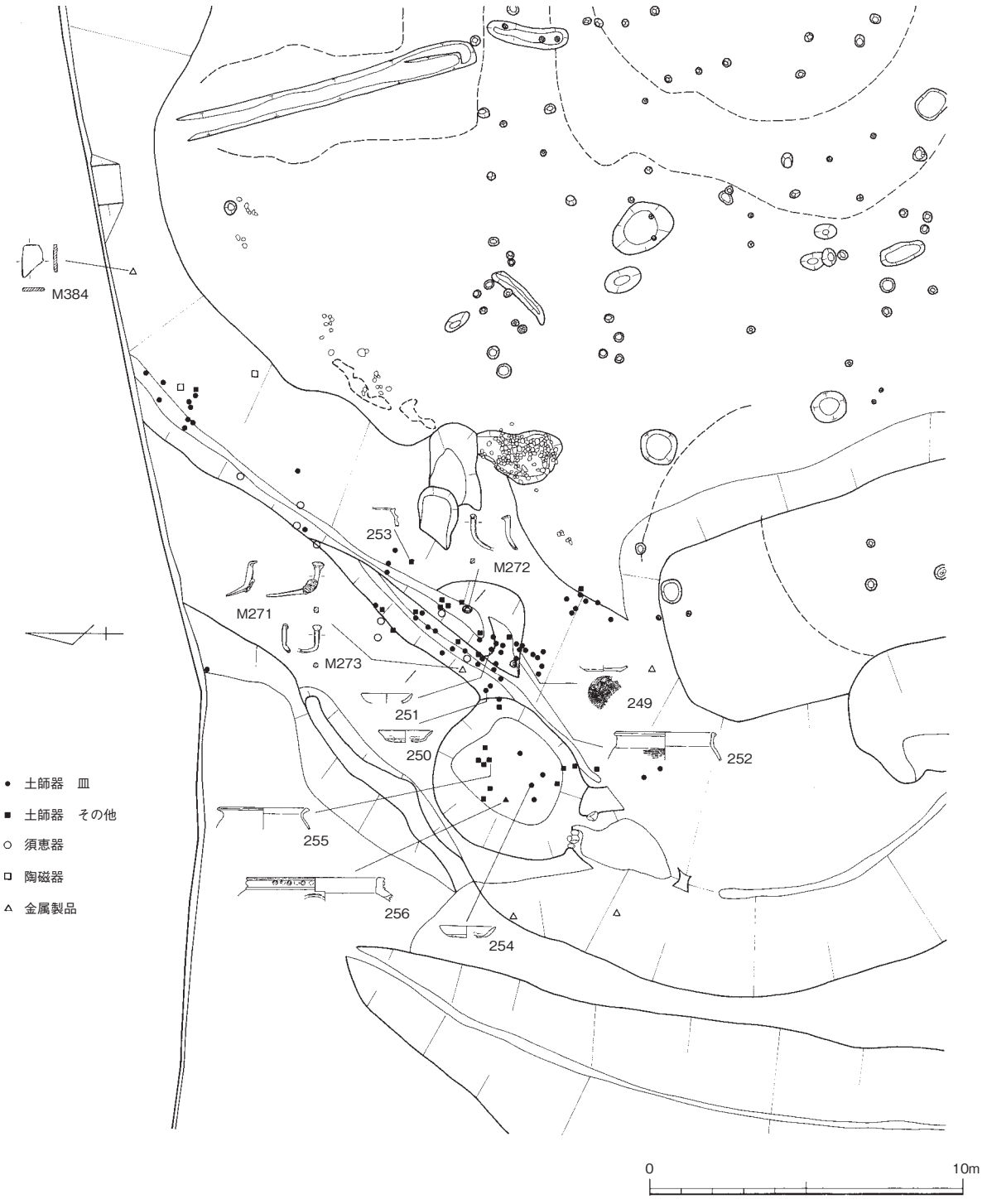
図版55 遺構 帯曲輪3

吉田住吉山遺跡

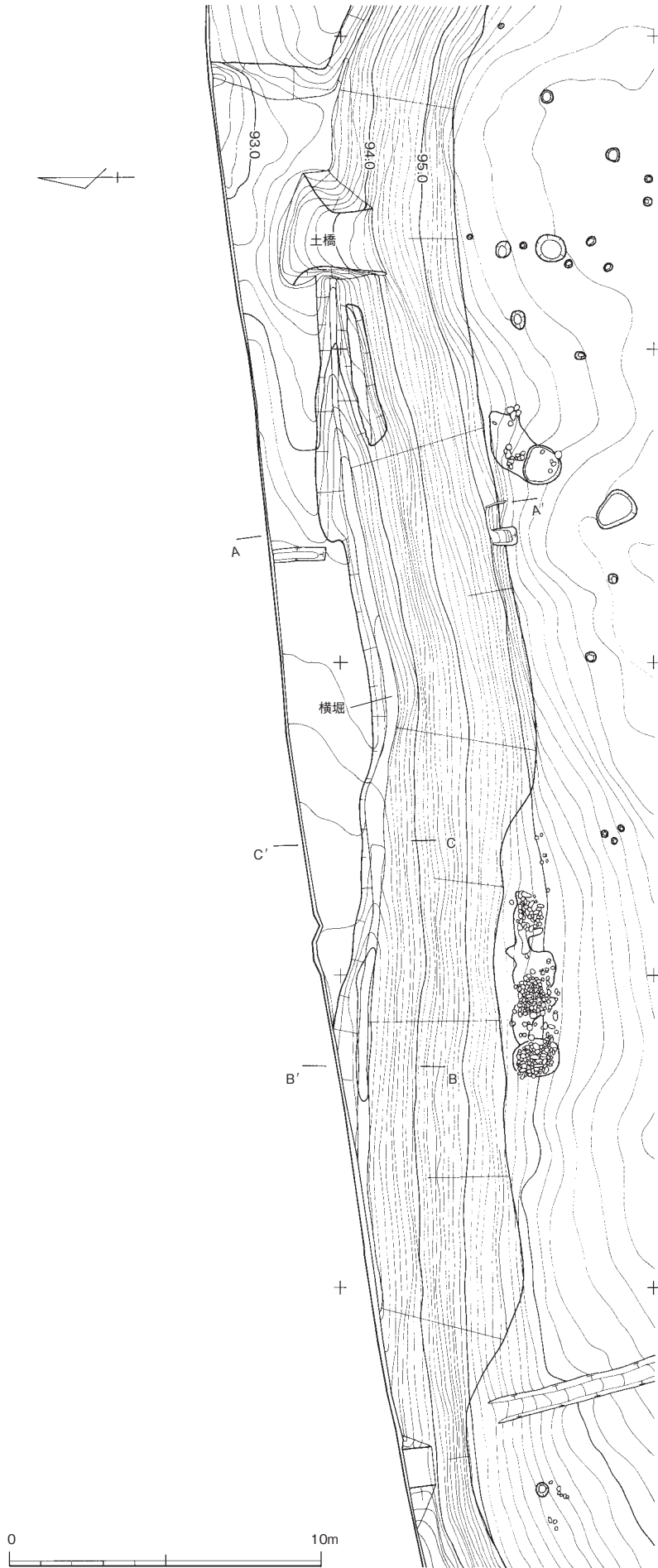




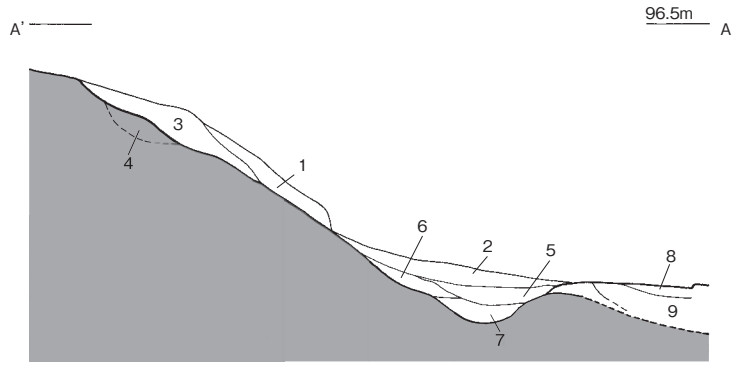
土堤



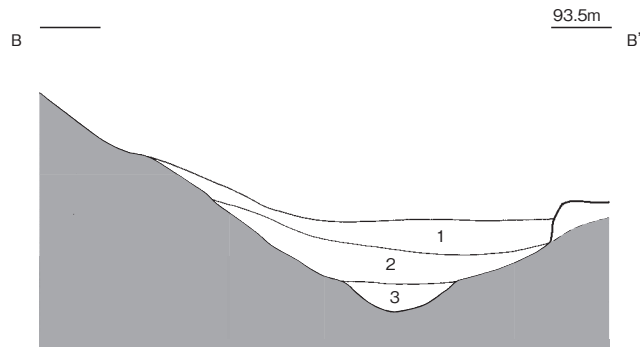
中世遺物出土位置



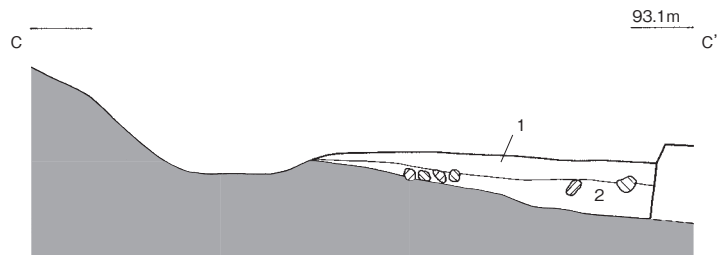
全体図



- 1. にぶい黄褐色 極細砂(小・中礫を含む):流土
- 2. にぶい黄褐色 極細砂(小・中礫を多量に含む):流土
- 3. 褐色 極細砂(小・中礫を含む):流土or盛土
- 4. にぶい黄褐色 極細砂(小・中礫を多量に含む):地山
- 5. 黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む、須恵器・土師器を多く含む)
:平坦面造成時の整地土
- 6. 黄褐色 極細砂(小礫を多量に含む):平坦面造成時の整地土
- 7. 黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～中礫を含む)
- 8. 黄褐色 極細砂～細砂(小・中礫を多量に含む):整地土
- 9. オリーブ褐色 極細砂(小礫を含む):整地土
- 10. オリーブ褐色 極細砂～細砂(粗砂を含む):土塁状盛土?



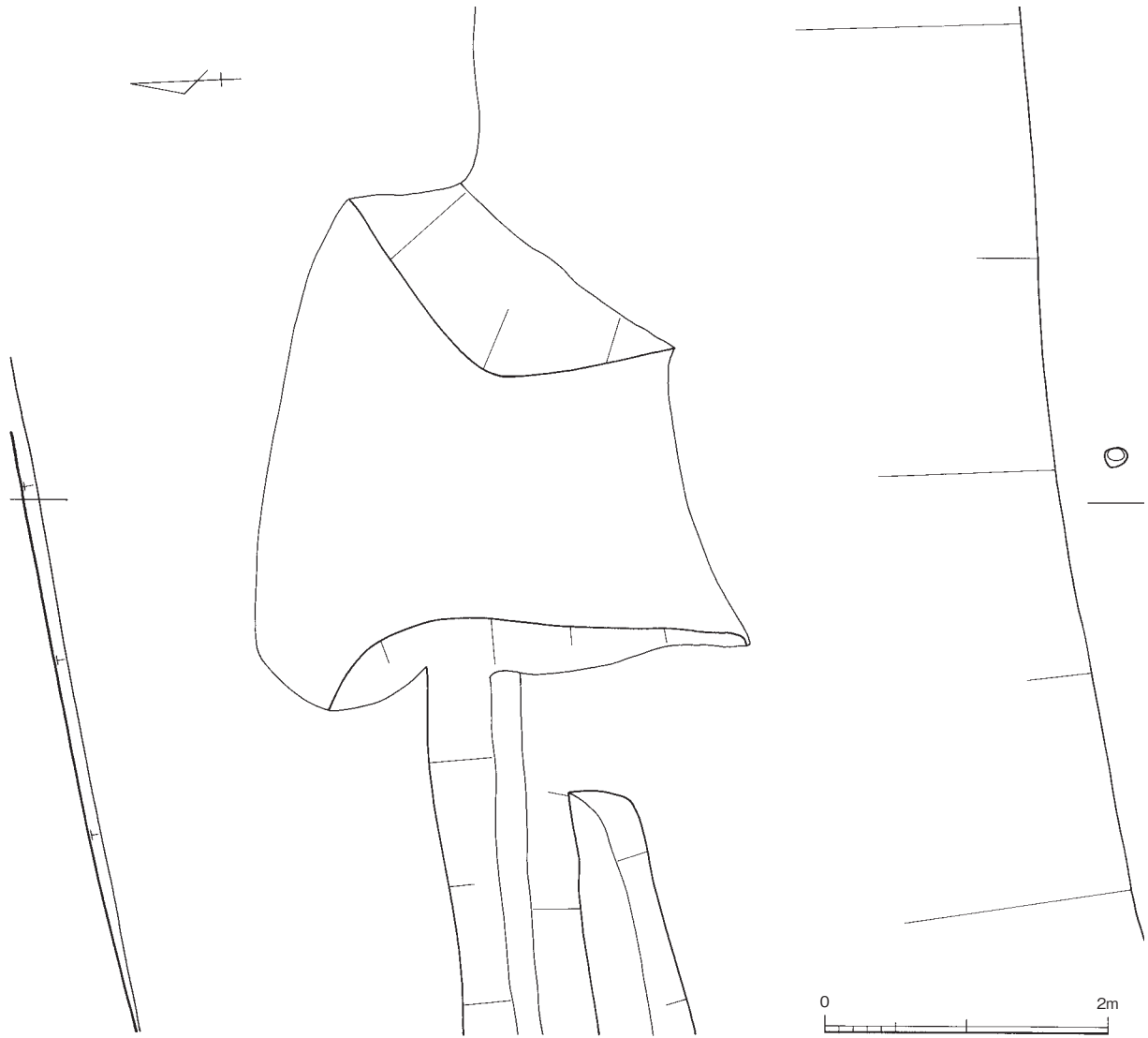
- 1. 黄褐色 極細砂(粗砂～大礫を多量に含む):改変時の整地土
- 2. にぶい黄褐色 極細砂(粗砂～小礫を含む)
- 3. にぶい黄色 シルト質極細砂(粗砂を含む)



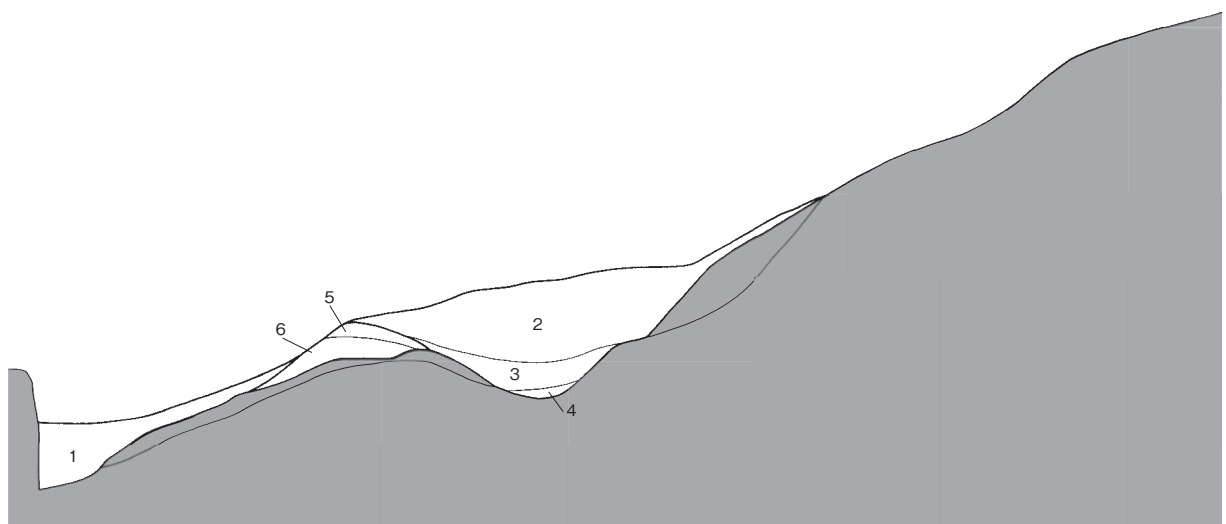
- 1. 黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む):盛土
- 2. 黄褐色 極細砂(小～中礫を含む):盛土



断面図

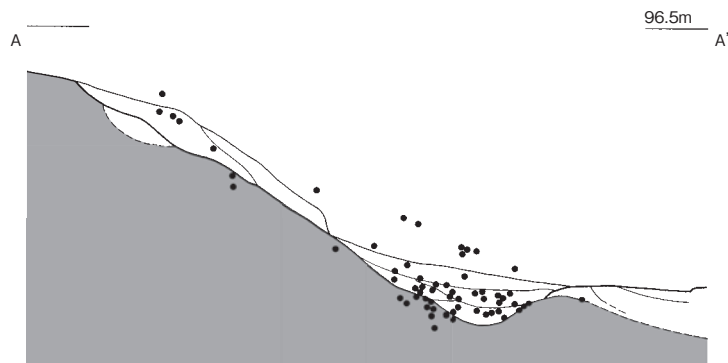
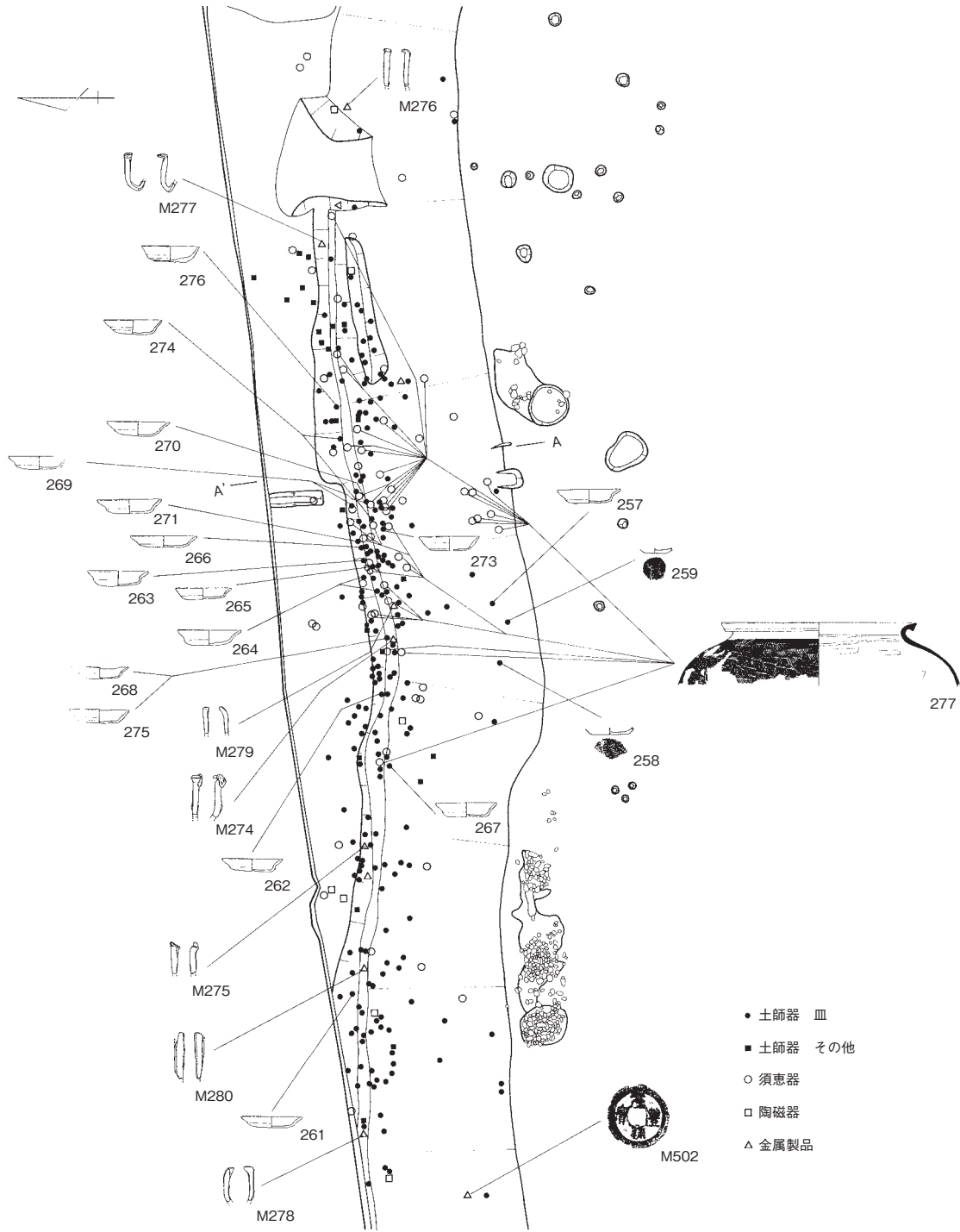


96.0m

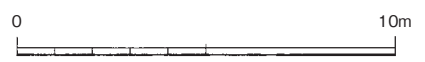


- | | |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. にぶい黄褐色 極細砂(粗砂～小礫を含む):土橋盛土 | 4. 褐色 極細砂(粗砂～小礫を含む、炭・焼土を多量に含む):横堀埋土 |
| 2. にぶい黄褐色 極細砂(粗砂～小礫を多量に含む):土橋盛土 | 5. 黄褐色 極細砂～細砂(粗砂～小礫を多量に含む):横堀外土塁 |
| 3. にぶい黄褐色 極細砂(粗砂～小礫を多量に含む、炭を含む):横堀埋土 | 6. 黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む):横堀外土塁 |

土橋

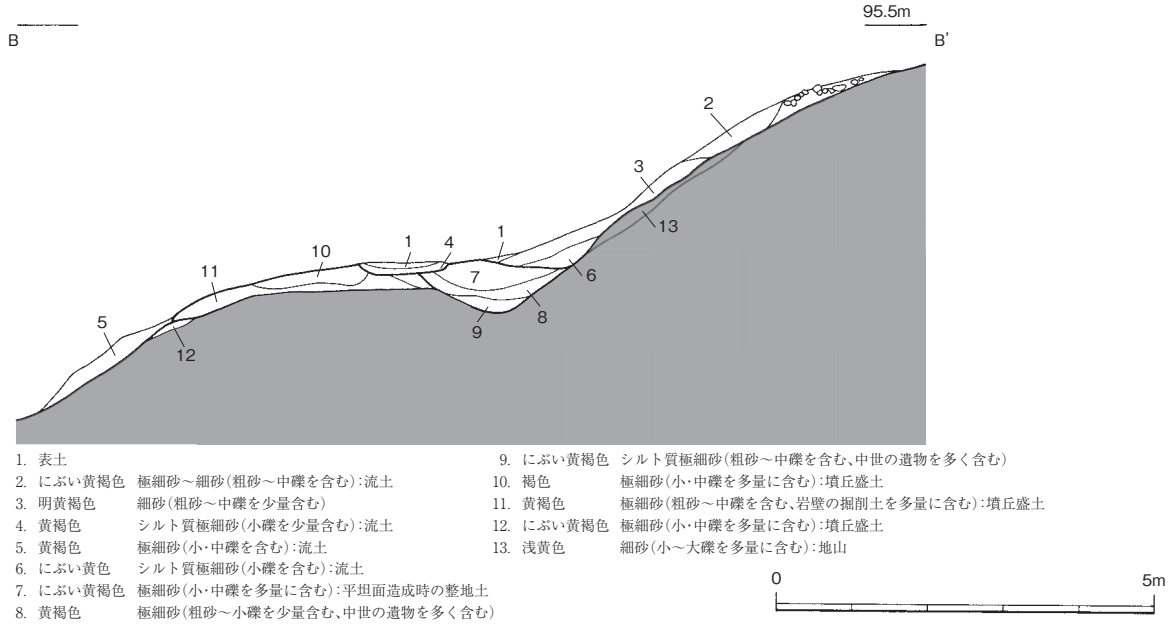
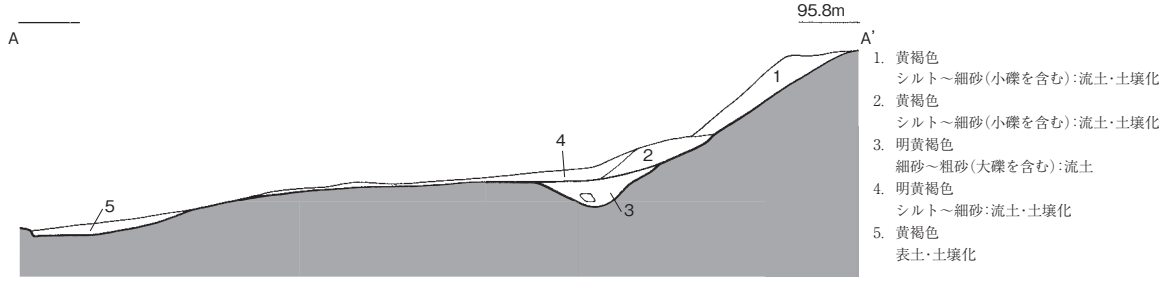


中世遺物出土位置

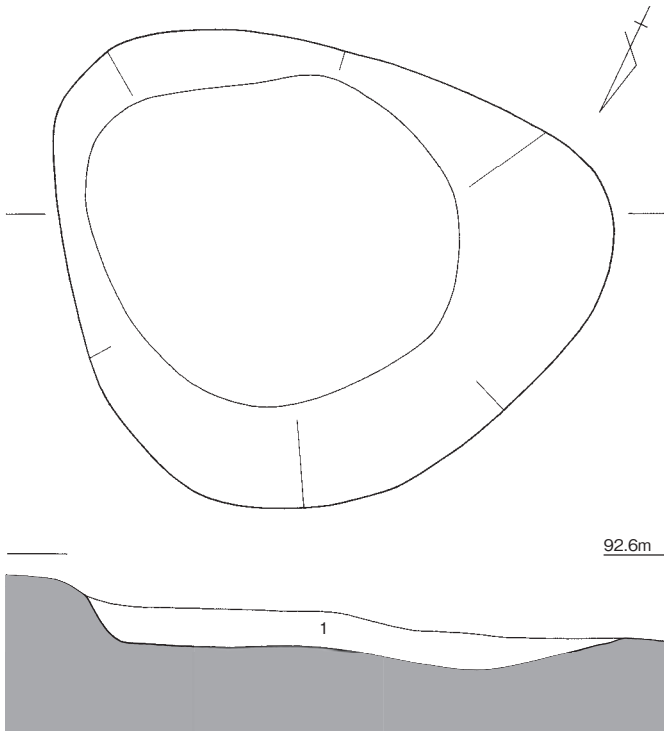


全体図

図版63 遺構 帯曲輪 1

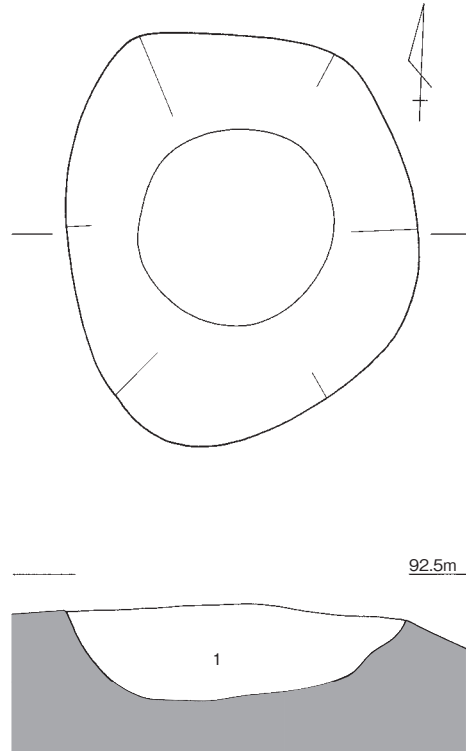


C-15 SK65



1. 黄褐色 極細砂(粗砂～中礫を含む)

C-15 SK66

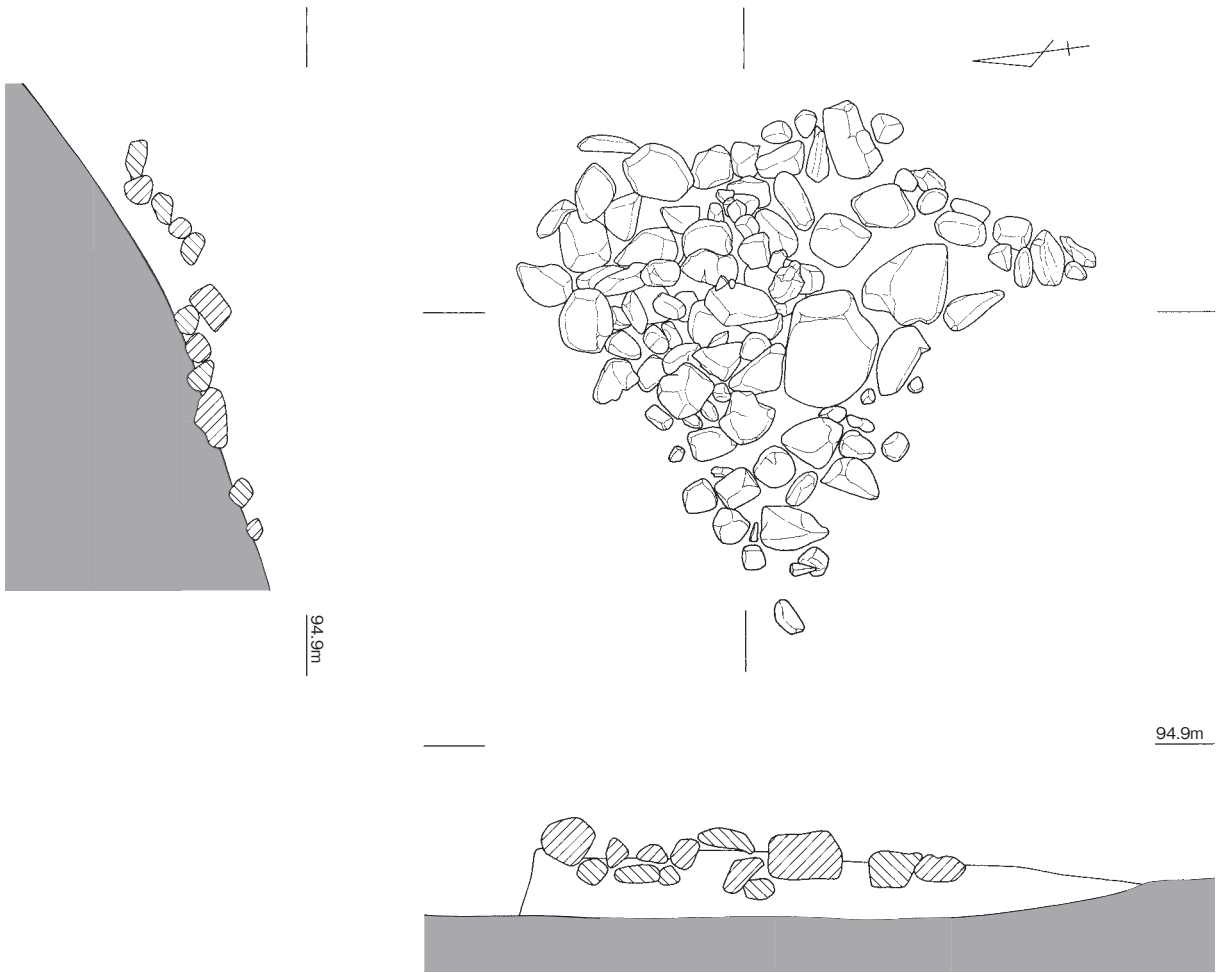


1. 黄褐色 極細砂(粗砂～中礫を含む)

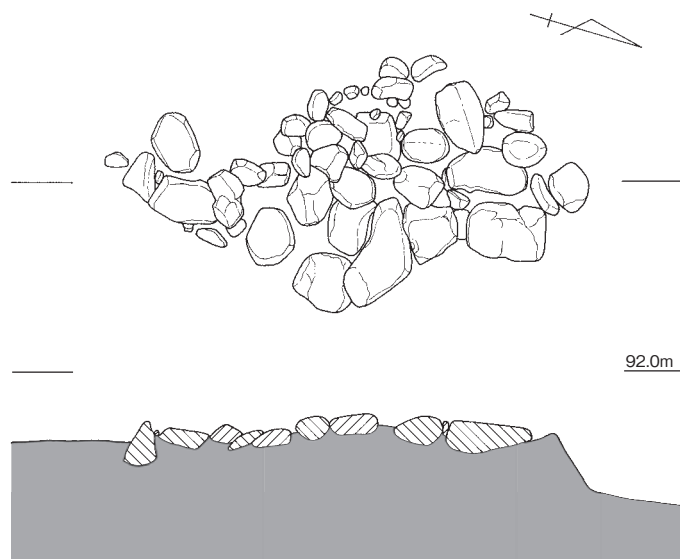


断面図・SK65・SK66

B-15 集石15



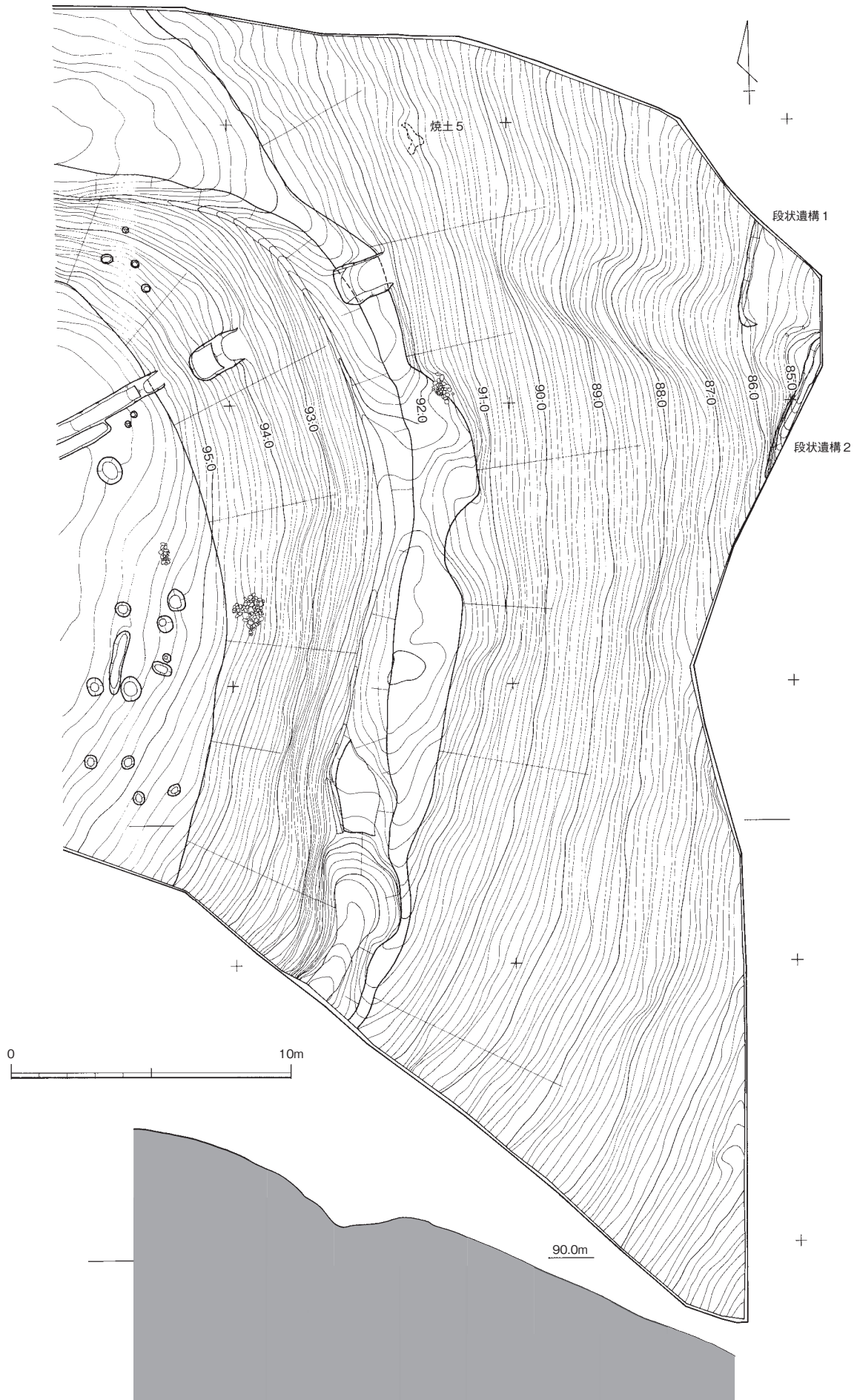
A-15 集石16



集石15・集石16



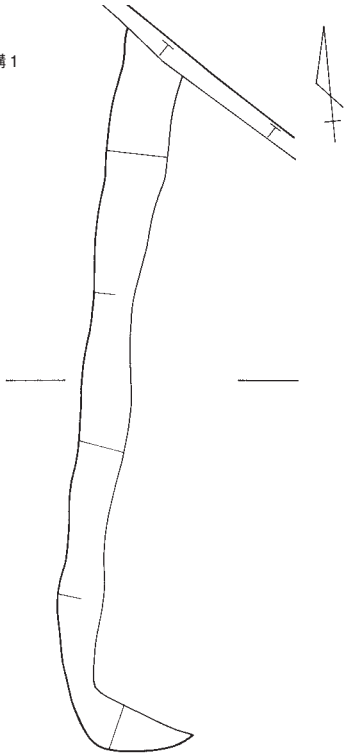
中世遺物出土位置



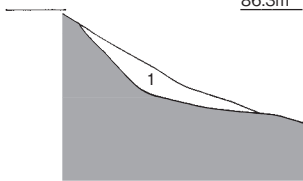
全体図

図版67 遺構 東斜面

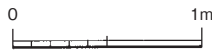
A-16
段状遺構 1



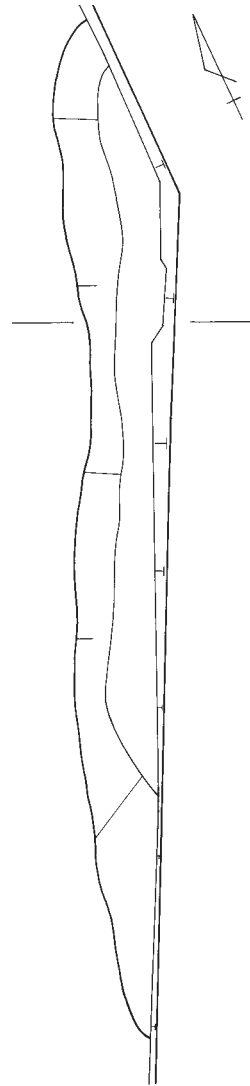
86.3m



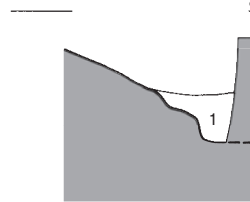
1. 黄褐色
極細砂(粗砂～小礫を含む、炭を少量含む)



A-0 B-0, 16
段状遺構 2



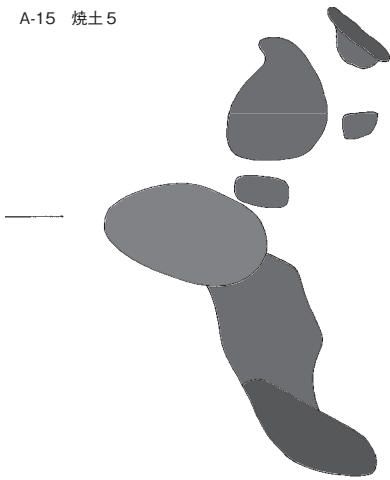
85.3m



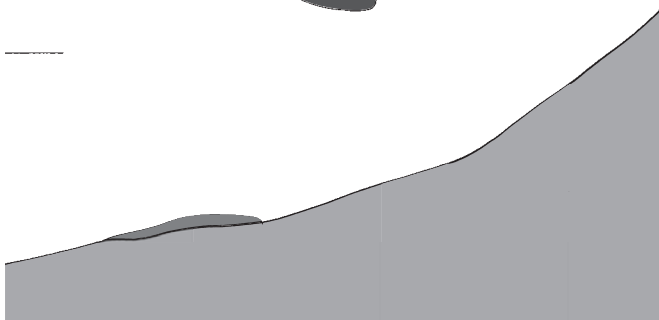
1. 黄褐色
シルト質極細砂(粗砂～中礫を含む)



A-15 焼土 5



91.5m



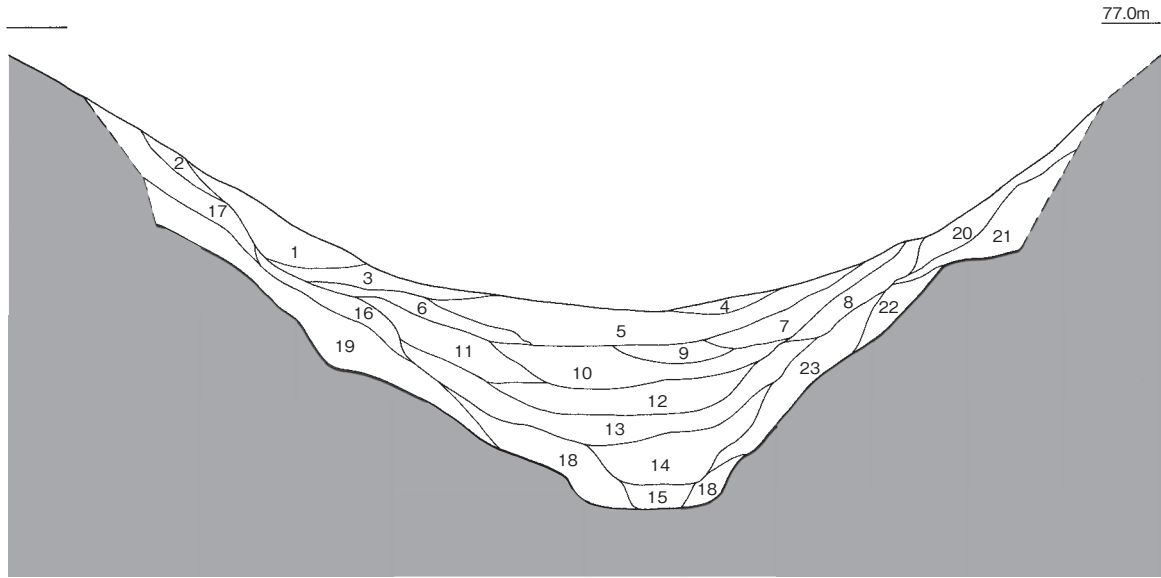
- 焼土
- 焼土・炭
- 炭



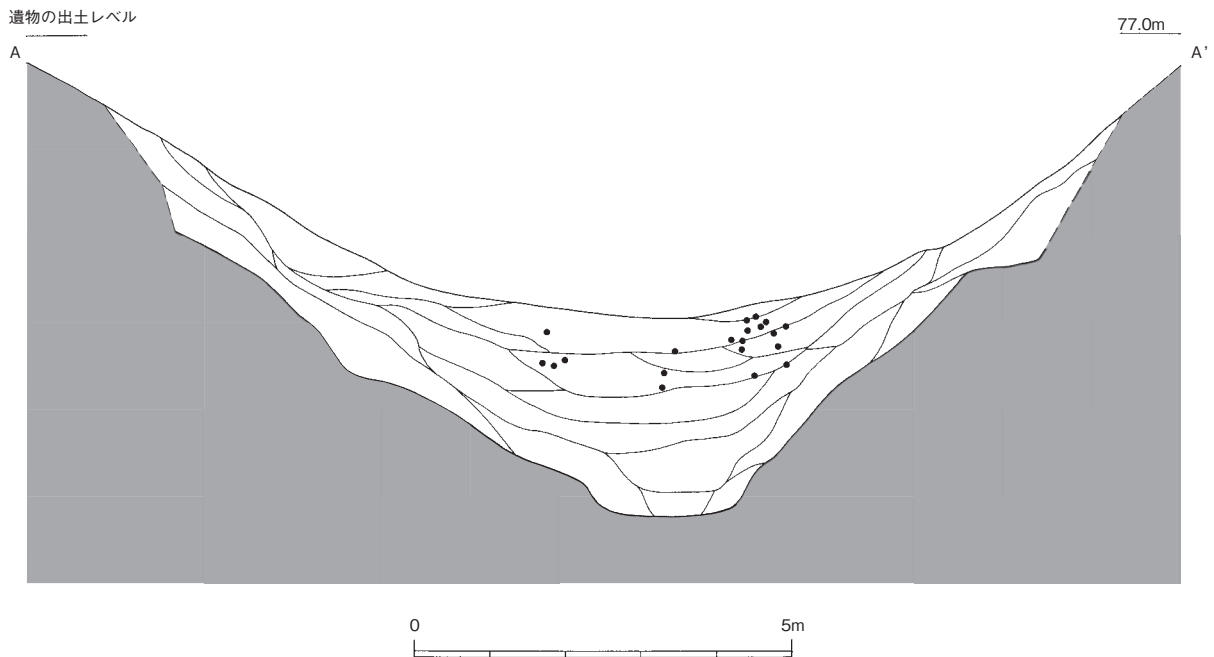
焼土 5・段状遺構 1・段状遺構 2



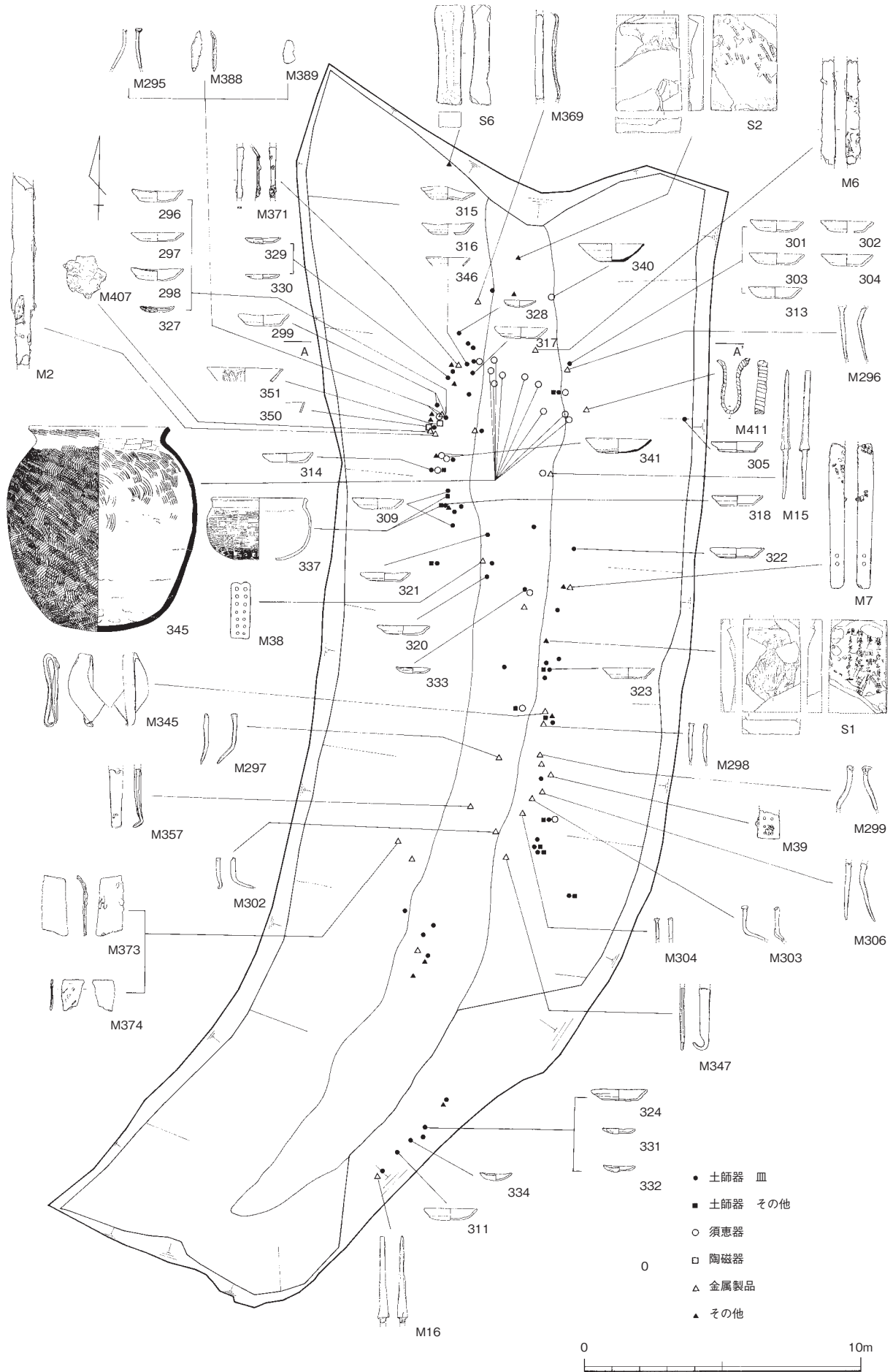
全体図



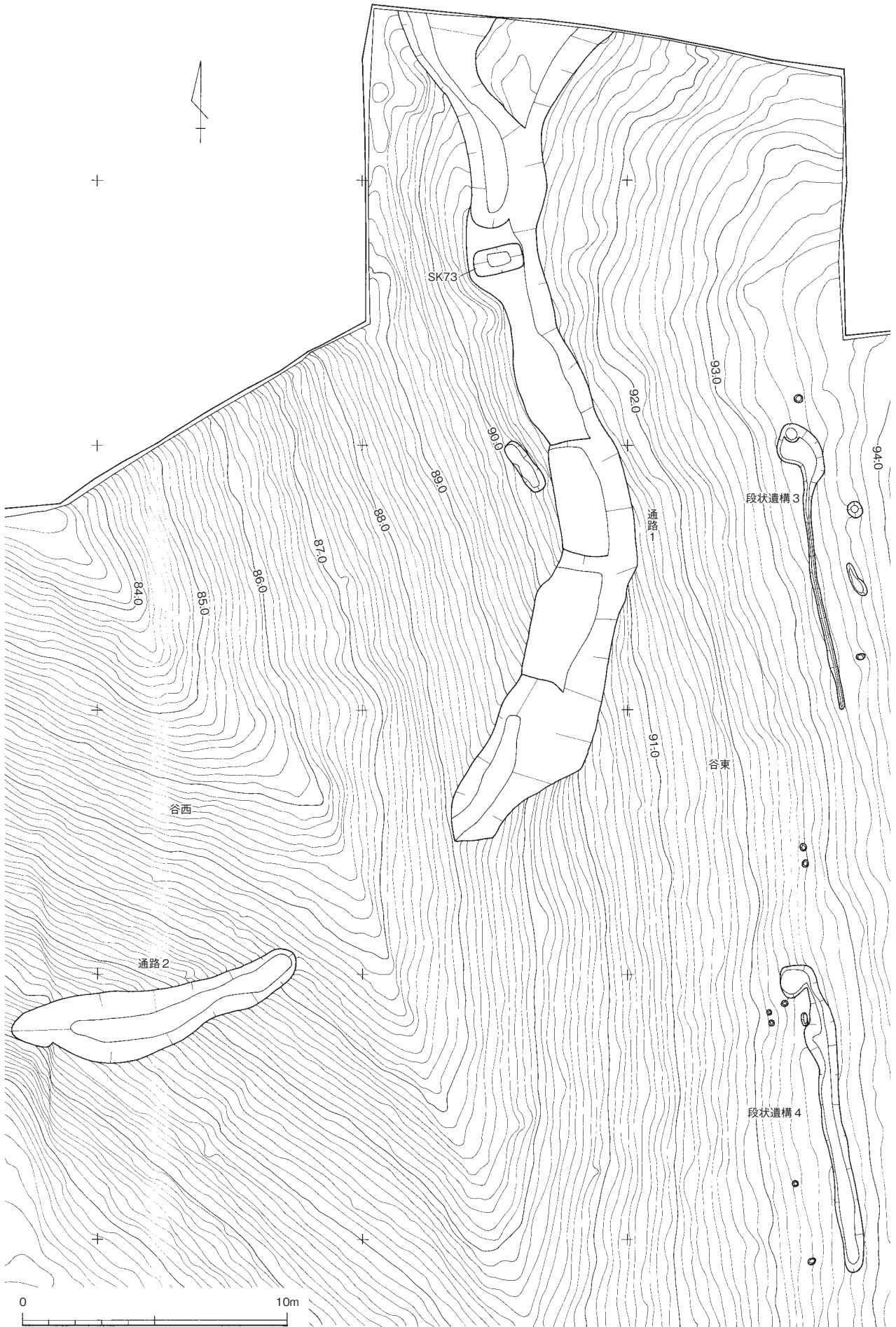
- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1. 明褐色中礫混じりシルト質細砂 | 13. 黄褐色小礫～大礫（土壤層） |
| 2. 明褐色小礫混じりシルト質細砂～中砂 | 14. 明褐色粗砂～大礫（土壤層） |
| 3. 明褐色中礫混じりシルト質細砂～中砂 | 15. 明褐色大礫混じり細砂～小礫（土壤層） |
| 4. 明褐色小礫混じり中砂 | 16. 黄褐色中礫混じりシルト質細砂～小礫（土壤層） |
| 5. 褐色小礫混じりシルト質細砂（土壤層） | 17. 明褐色中礫混じりシルト質細砂 |
| 6. 明褐色小礫混じりシルト質細砂（土壤層） | 18. 明褐色大礫混じり細砂～中礫（土壤層） |
| 7. 明褐色小礫混じりシルト質細砂～粗砂（土壤層） | 19. 明黄褐色細砂混じり中礫～大礫 |
| 8. 明褐色小礫混じりシルト質細砂（土壤層） | 20. 明褐色中礫混じりシルト質細砂 |
| 9. 褐色シルト混じり細砂～中礫（土壤層） | 21. 明褐色小礫混じりシルト質細砂（盛土：土塁） |
| 10. 褐色シルト混じり細砂～大礫（土壤層） | 22. 明褐色中礫混じり細砂（盛土：土塁） |
| 11. 明褐色中礫混じりシルト混じり細砂（土壤層） | 23. 黄褐色大礫混じりシルト質細砂（土壤層） |
| 12. 黄褐色小礫～大礫（土壤層） | 24. 黄褐色細砂～中礫 |



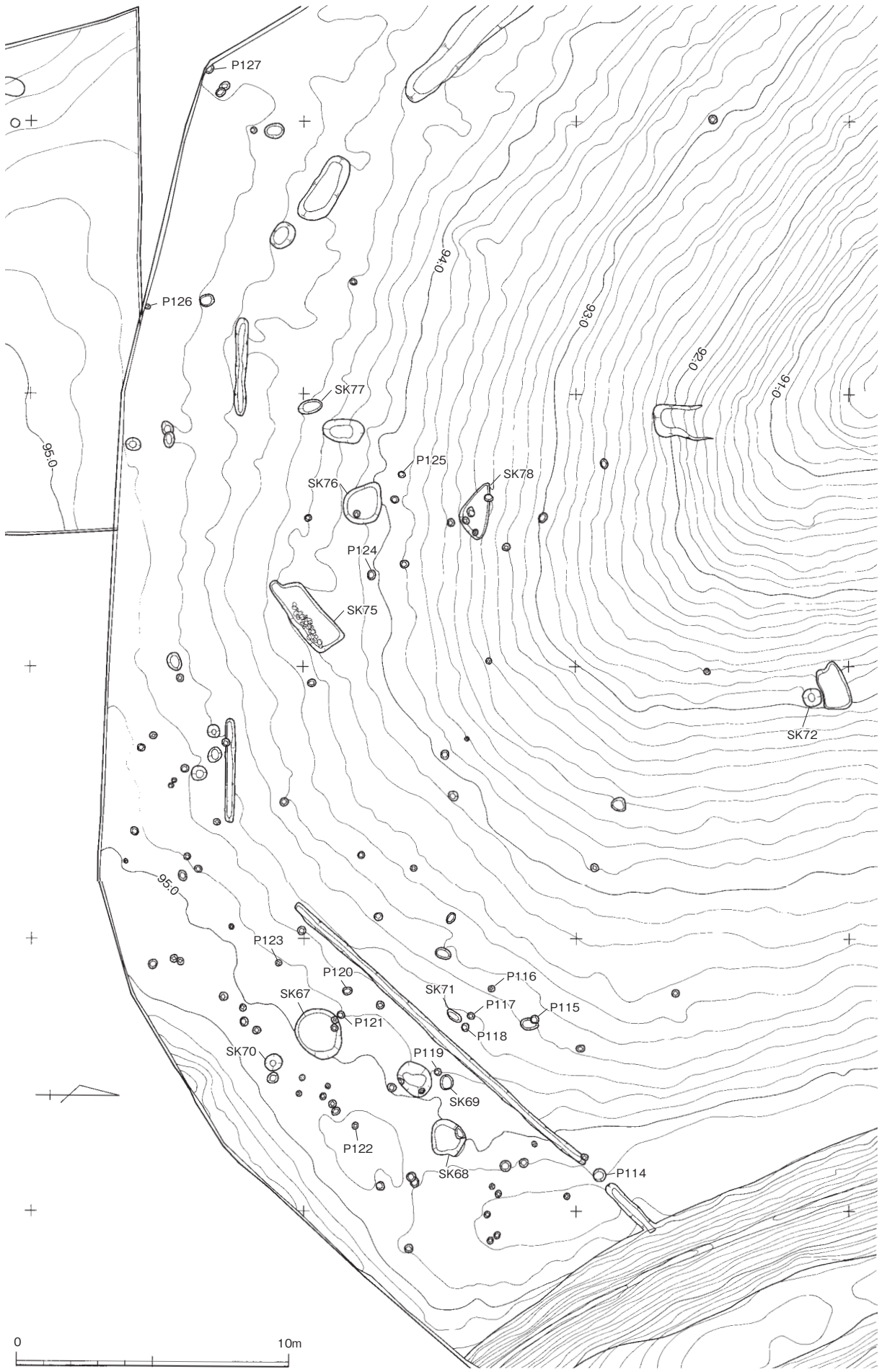
断面図



中世遺物出土位置



北部平面図

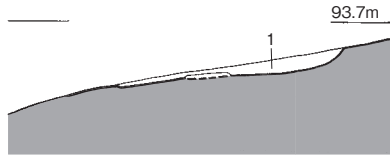


南部平面図

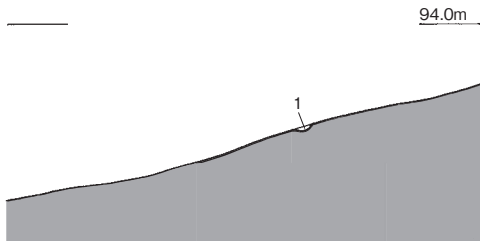
図版73 遺構 谷東

A-04, B-04 段状遺構3

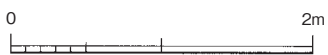
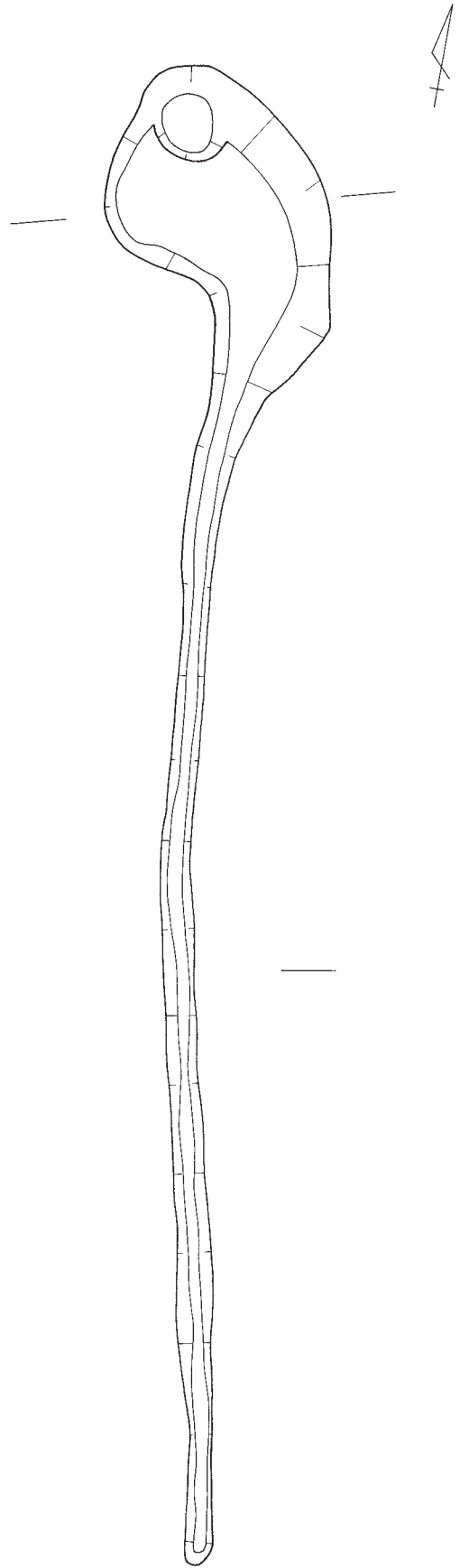
吉田住吉山遺跡



1. 黄褐色 極細砂 (粗砂～中礫を含む)

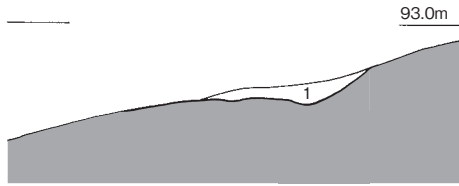


1. 黄褐色 極細砂 (粗砂・小礫を含む)

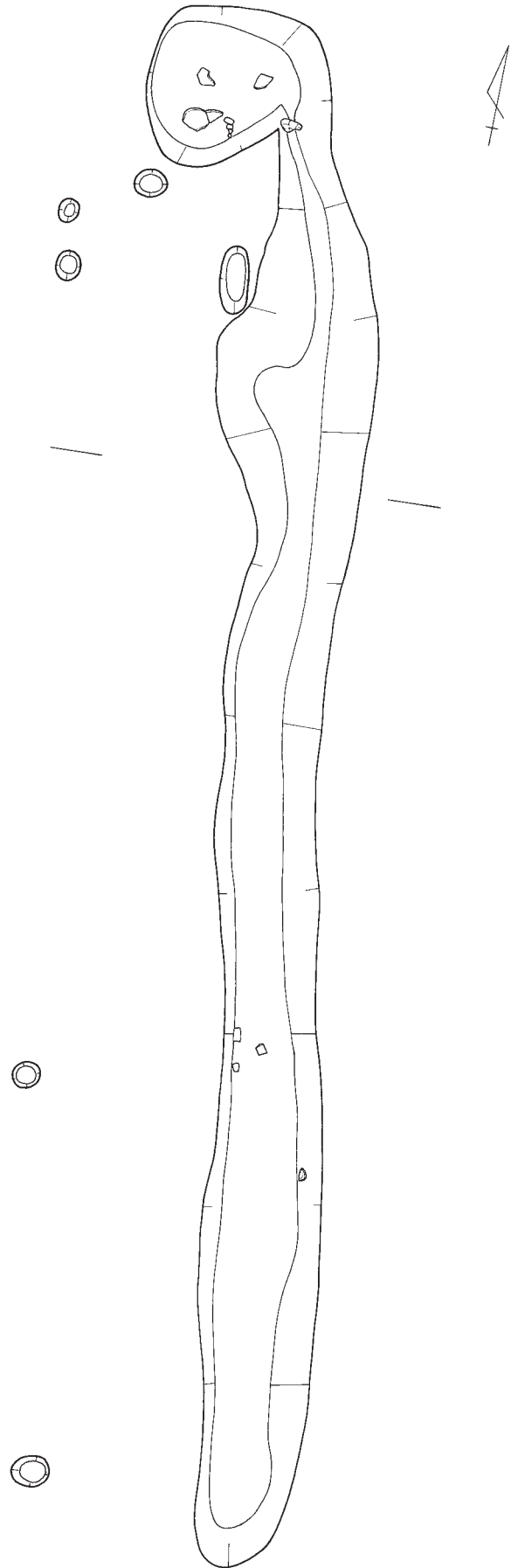
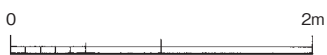


段状遺構3

C-04, D-04, E-04 段状遺構 4



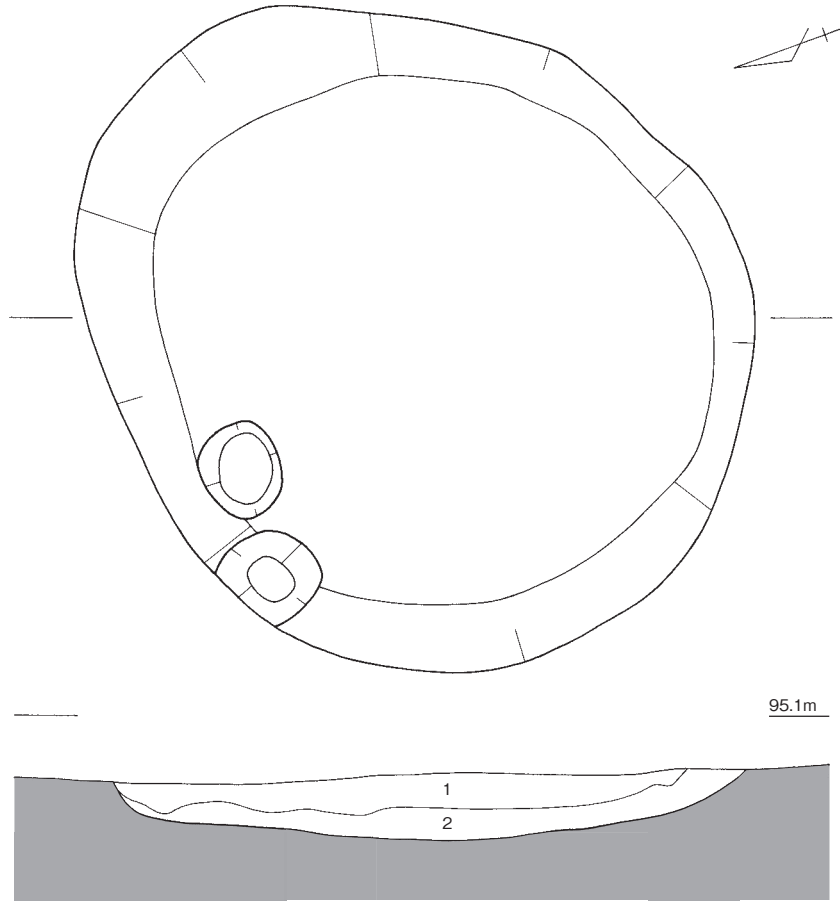
1. 黄褐色 シルト質極細砂 (粗砂・中礫を含む)



段状遺構 4

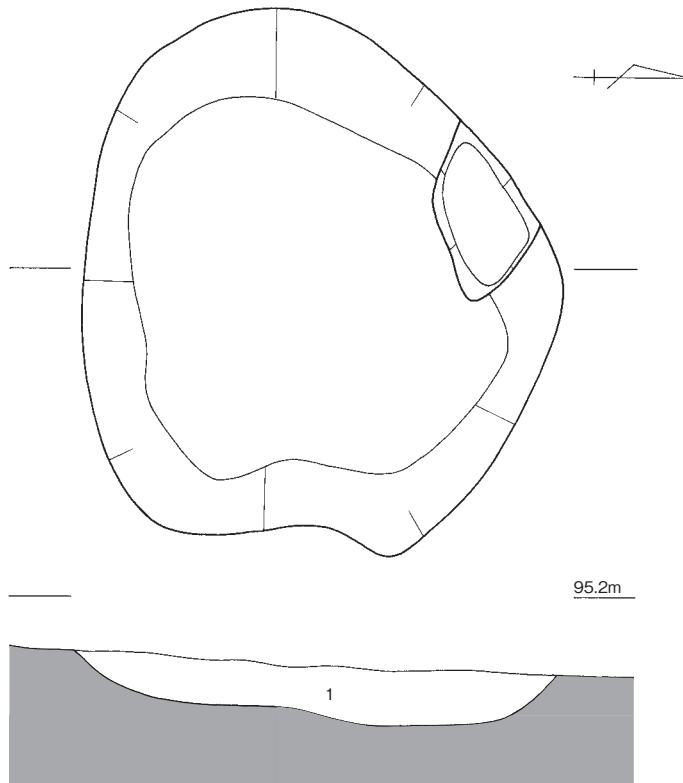
図版75 遺構 谷東

G-06, H-06 SK67

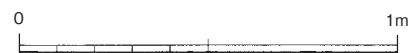


- 1. にぶい褐色 極細砂（焼土塊・炭塊を多量に含む）
- 2. 橙色 シルト質極細砂

G-06 SK68

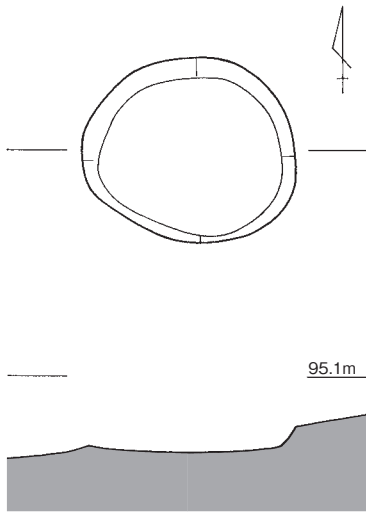


- 1. 明褐色 シルト質極細砂（炭をわずかに含む）

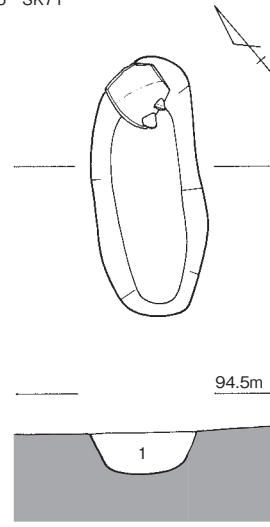


SK67・SK68

G-06 SK69

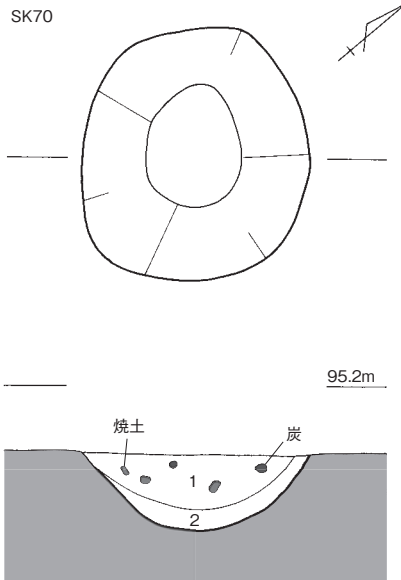


G-06 SK71



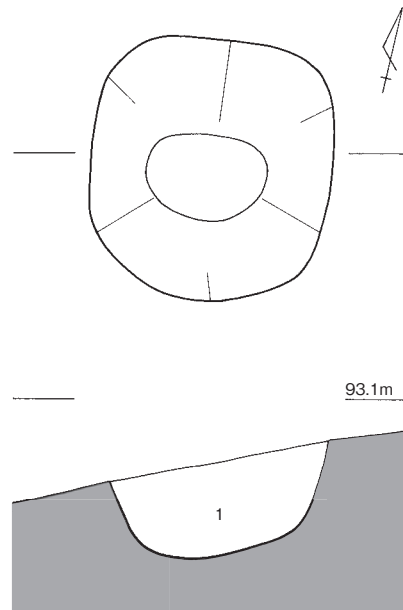
1. オリーブ褐色 シルト質極細砂 (小礫・炭を含む)

H-06 SK70

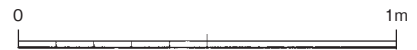


1. にぶい褐色 極細砂 (焼土塊・炭を多量に含む)
2. 橙色 シルト質極細砂

F-05 SK72



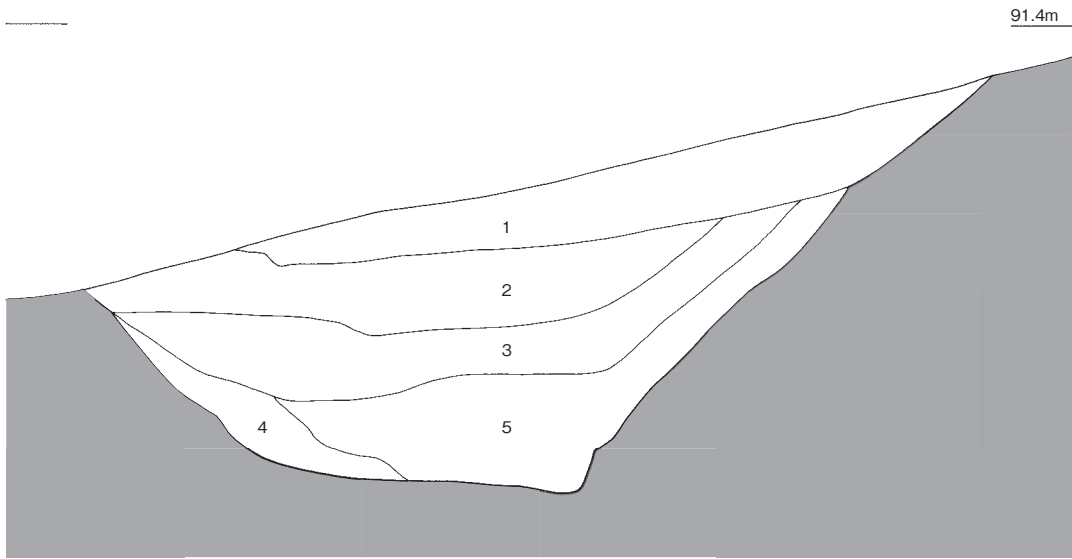
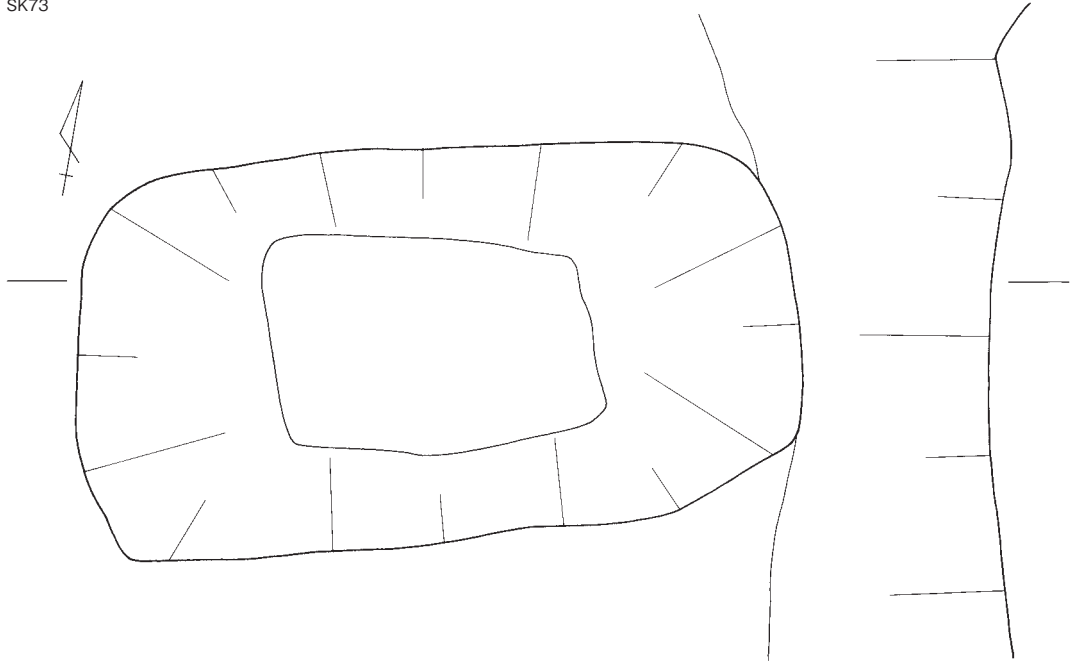
1. 黄褐色 シルト質極細砂 (中礫を含む)



図版77 遺構 谷東

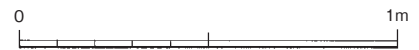
吉田住吉山遺跡

A-03 SK73

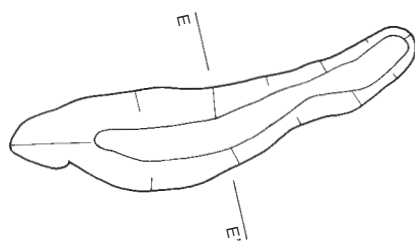
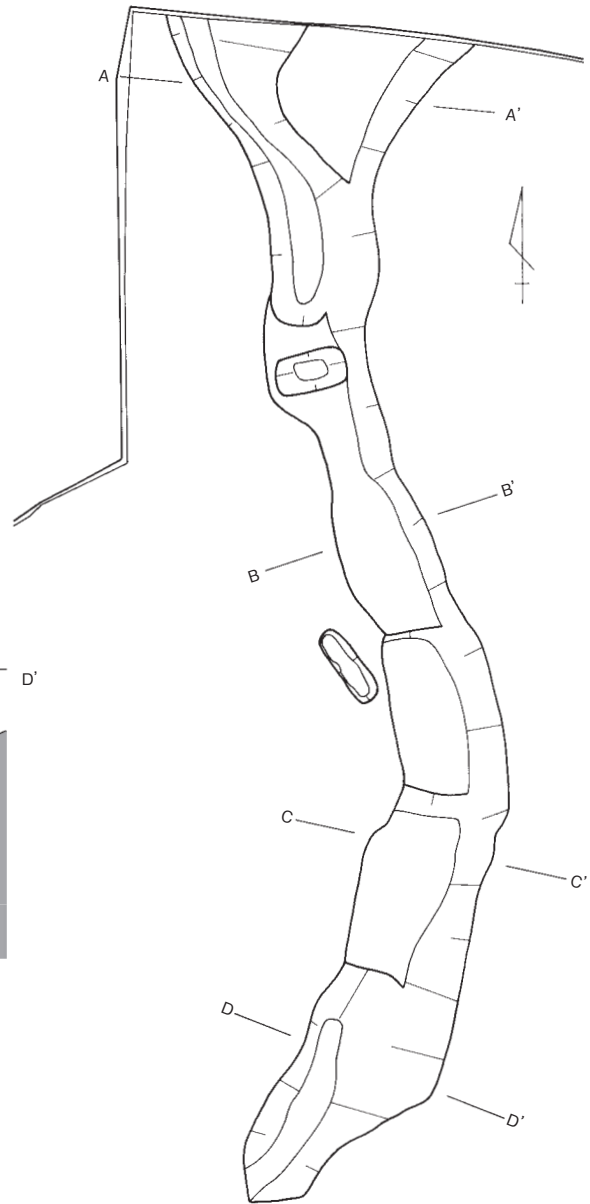
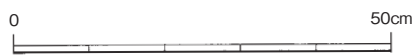
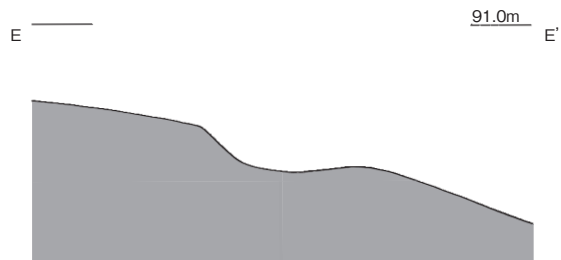
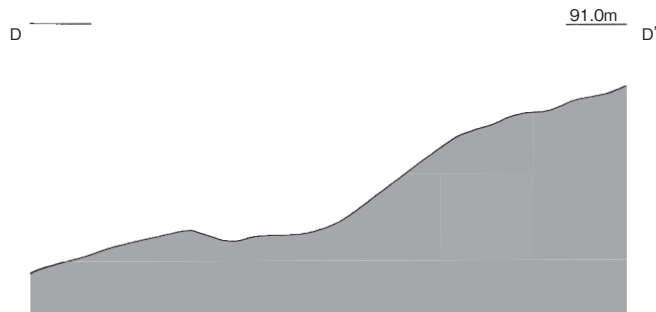
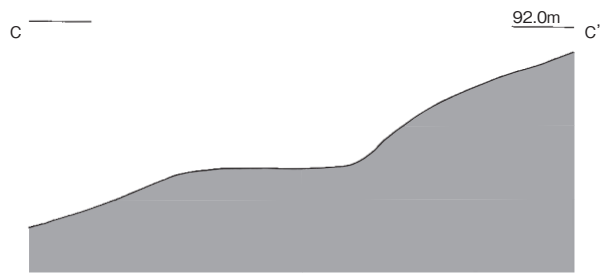
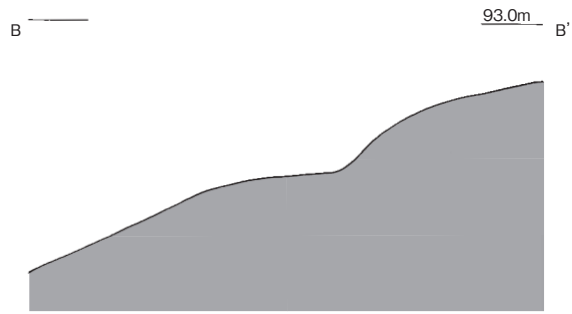
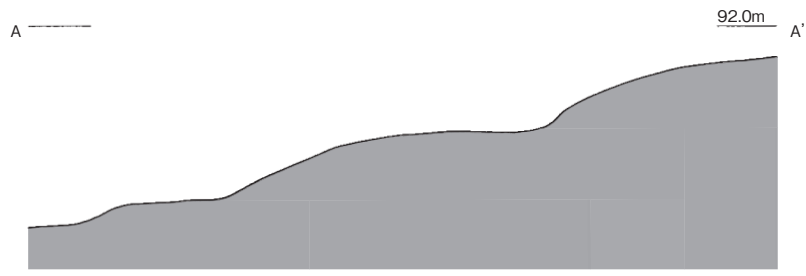


91.4m

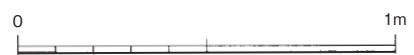
- | | |
|---------|--------------------|
| 1. 黄褐色 | 極細砂～細砂 (粗砂～小礫を含む) |
| 2. 黄褐色 | シルト質極細砂 (粗砂～小礫を含む) |
| 3. 黄褐色 | シルト質極細砂 (粗砂～中礫を含む) |
| 4. 明黄褐色 | 細砂 (粗砂～大礫を含む) |
| 5. 黄褐色 | シルト質極細砂 (粗砂を含む) |



SK73



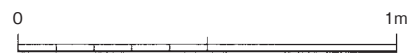
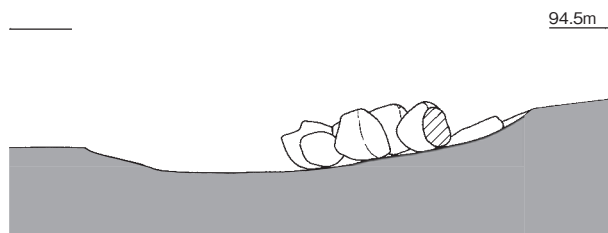
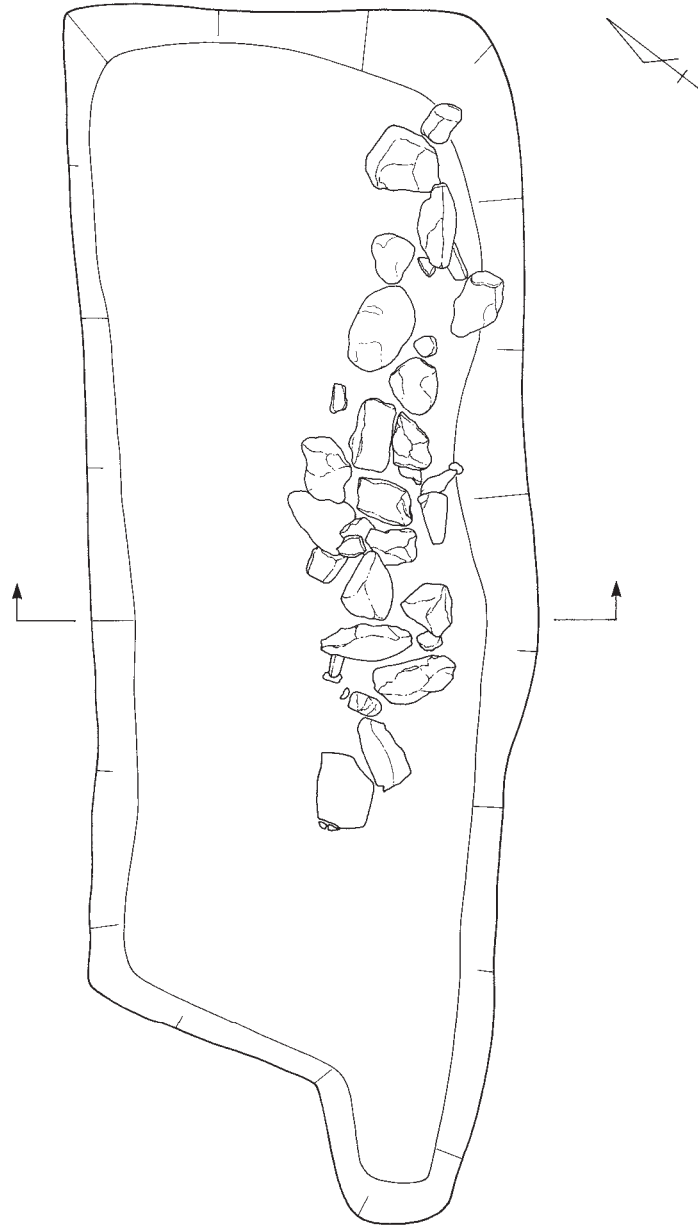
通路 1



図版79 遺構 谷西

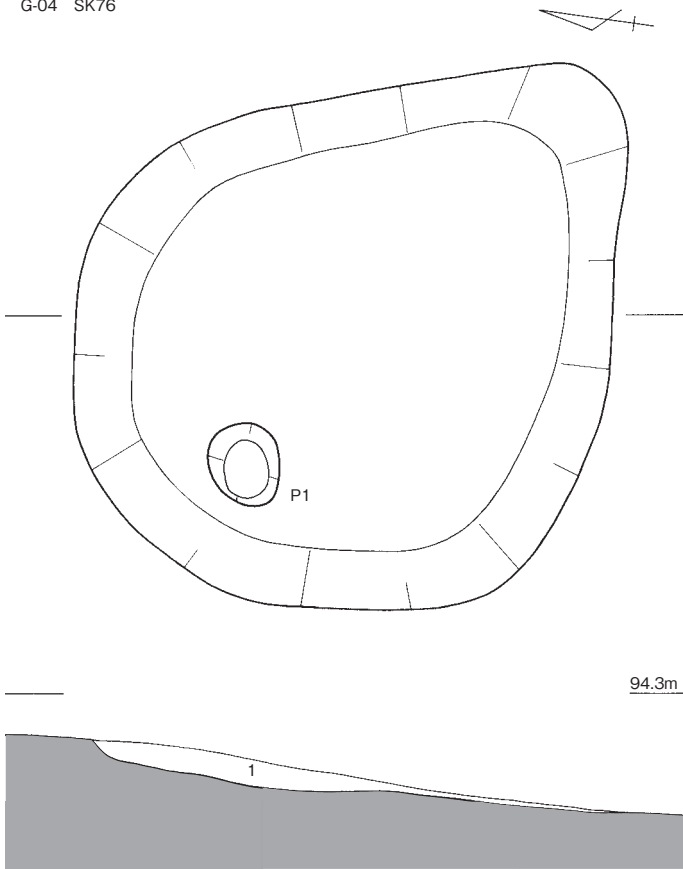
G-04, H-04 SK75

吉田住吉山遺跡



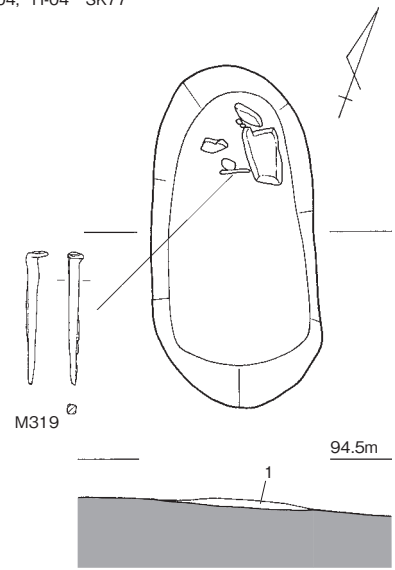
SK75

G-04 SK76



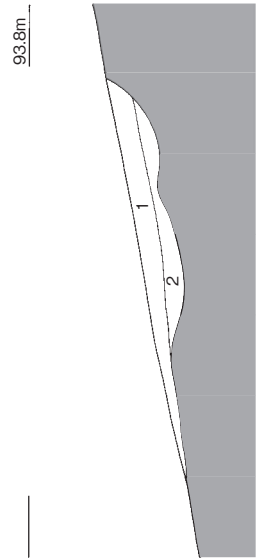
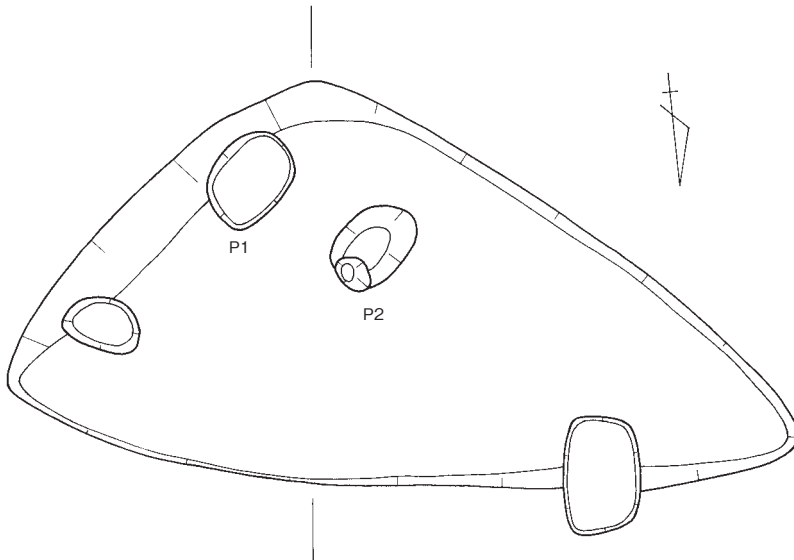
1. オリーブ褐色 細砂～小礫（地山よりに炭を多量に含む）

G-04, H-04 SK77



1. オリーブ褐色 極細砂（粗砂～小礫・炭を含む）

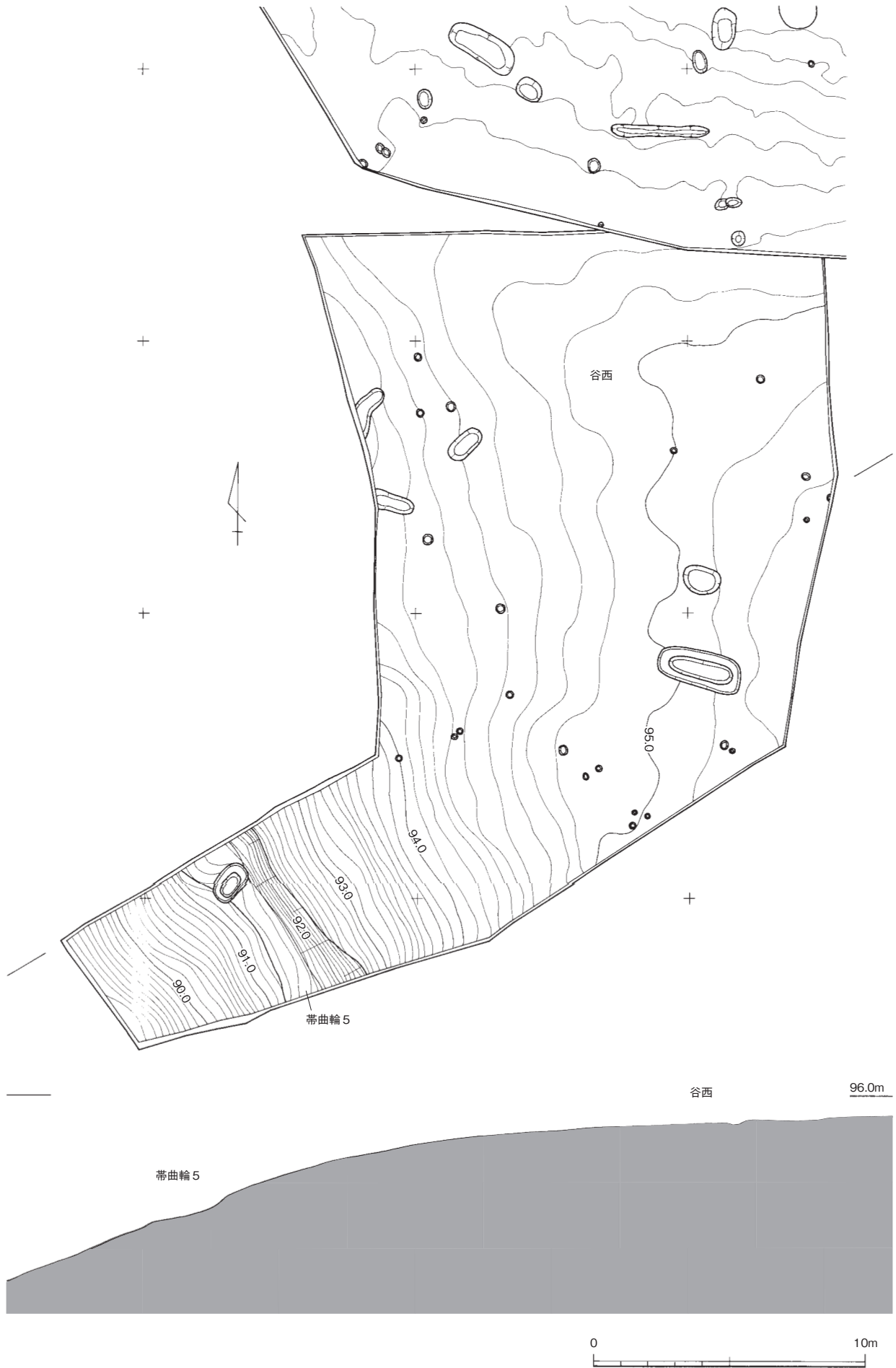
G-04 SK78



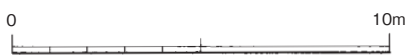
1. にぶい黄褐色 極細砂（粗砂～小礫を含む、炭を多量に含む）
2. 黄褐色 極細砂（粗砂を少量含む）



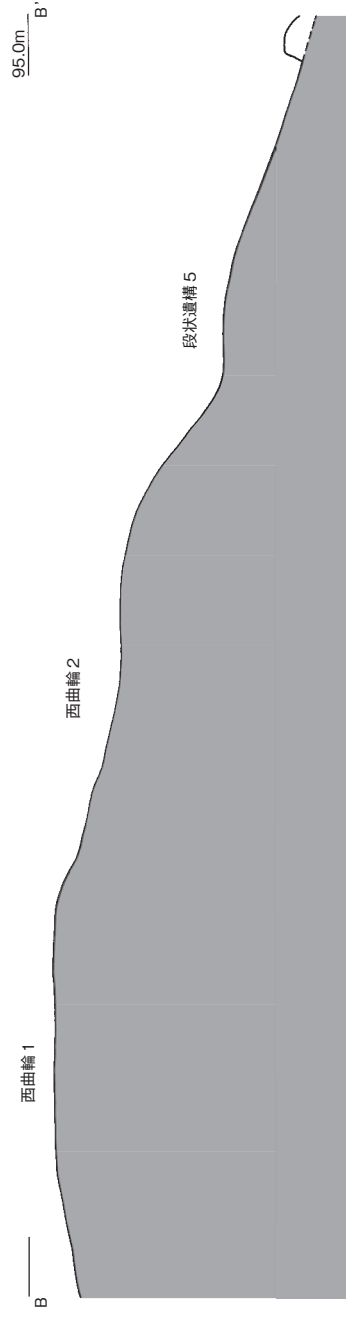
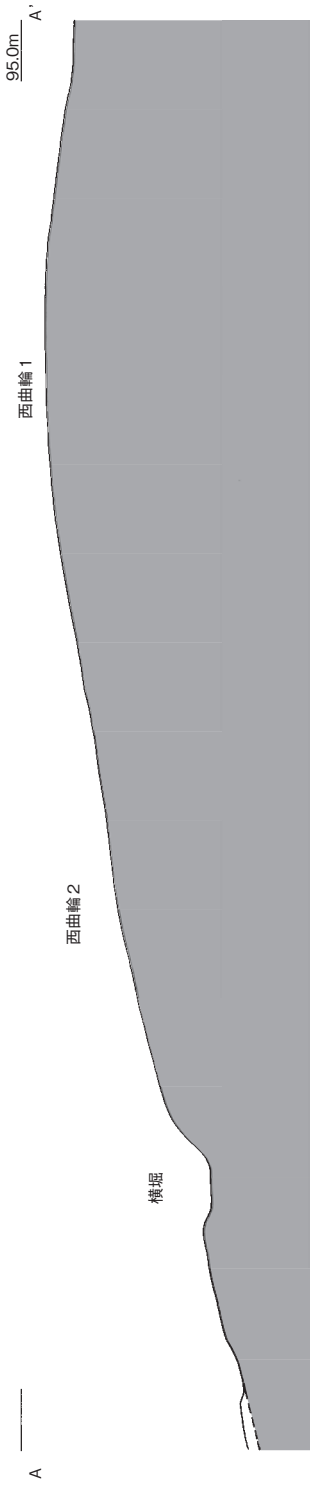
SK76・SK77・SK78



谷西南端部・帯曲輪5平面図 断面図

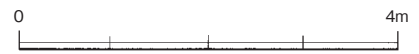
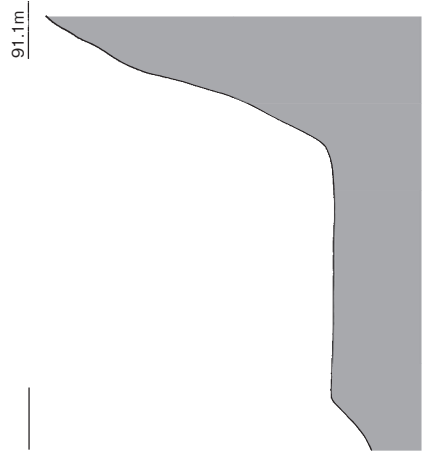
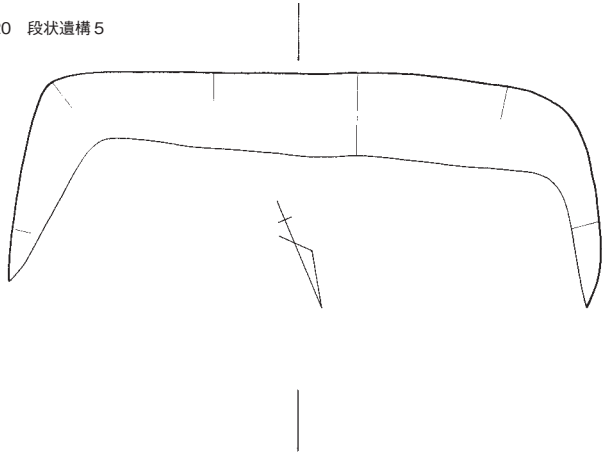


平面図

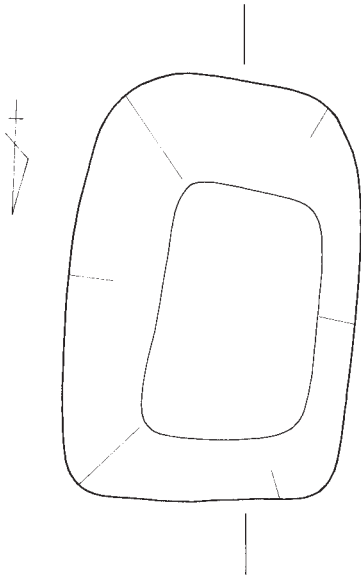


断面図

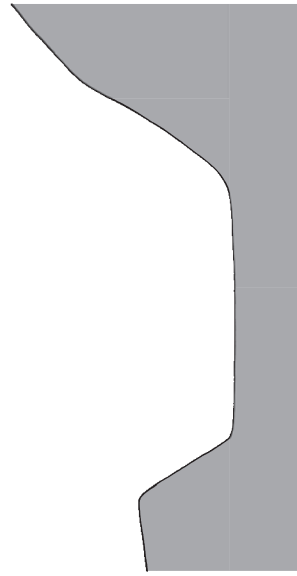
B-20, C-20 段状遺構5



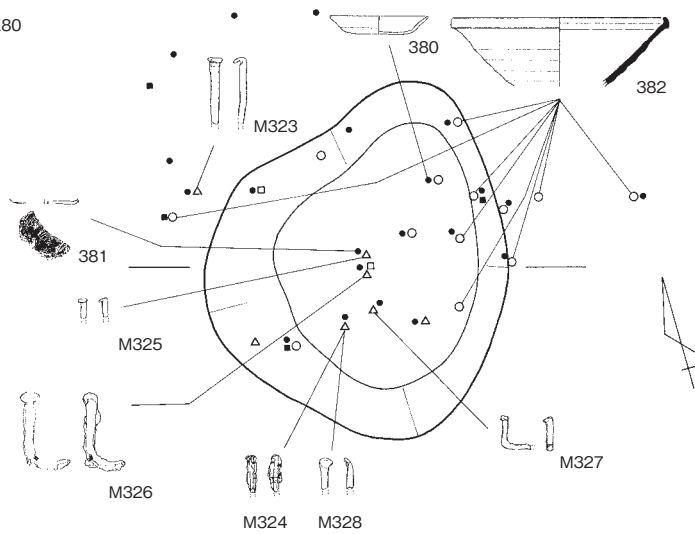
B-20, C-20 SK79



90.8m

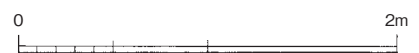


C-21, D-21 SK80



- 土師器 皿
- 土師器 その他
- 須恵器
- 陶磁器
- △ 金属製品

92.6m



段状遺構5・SK79・SK80

図版85 遺物 主郭

吉田住吉山遺跡

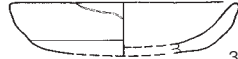
B-09~11 SB01



1



2



3

B-09 P012



4

C-10 P056



5

B-09 SK04

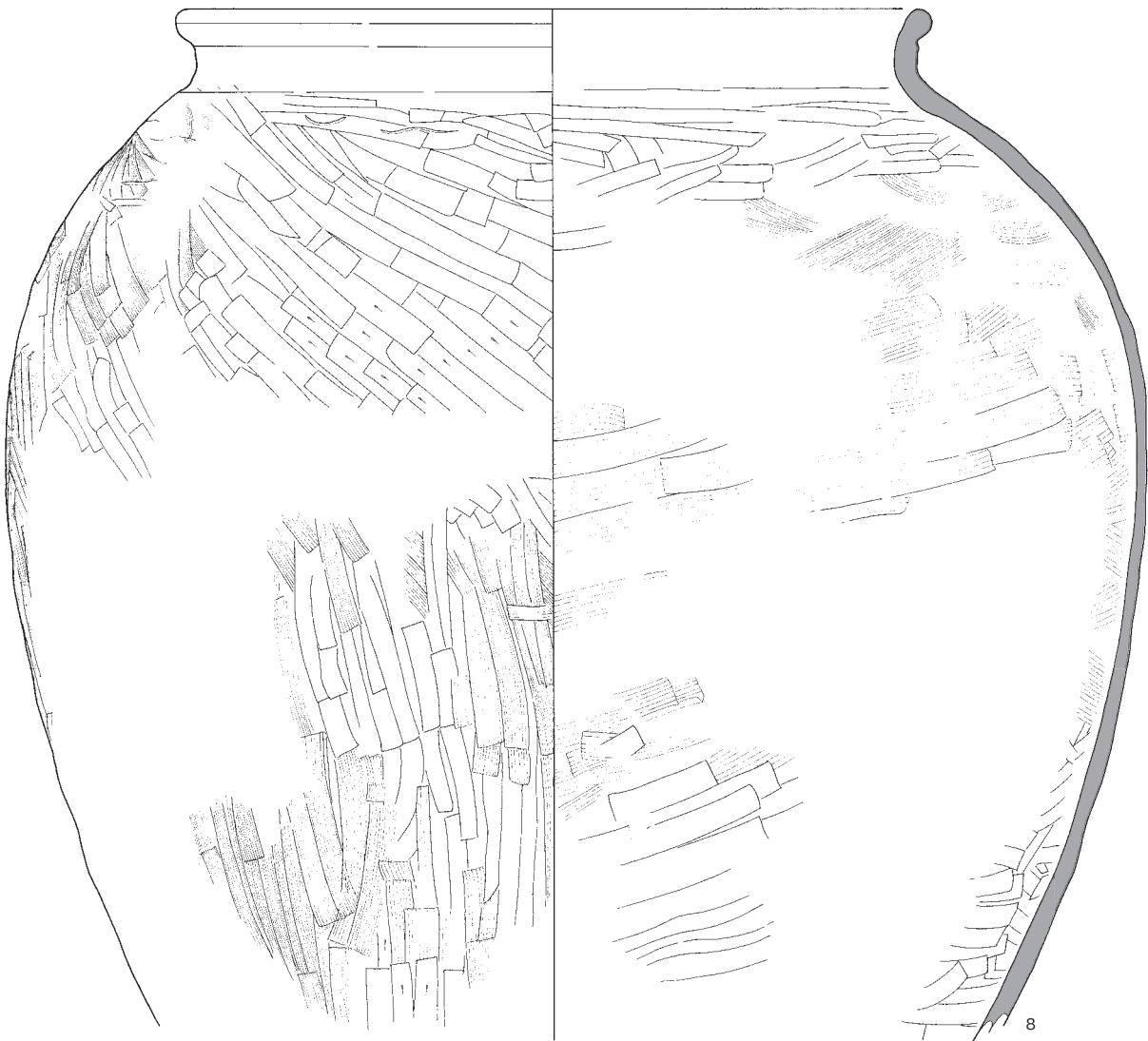


6

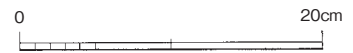
B-10 SK11



7



8



B-10 SK10



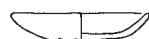
9



10

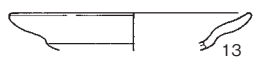


11



12

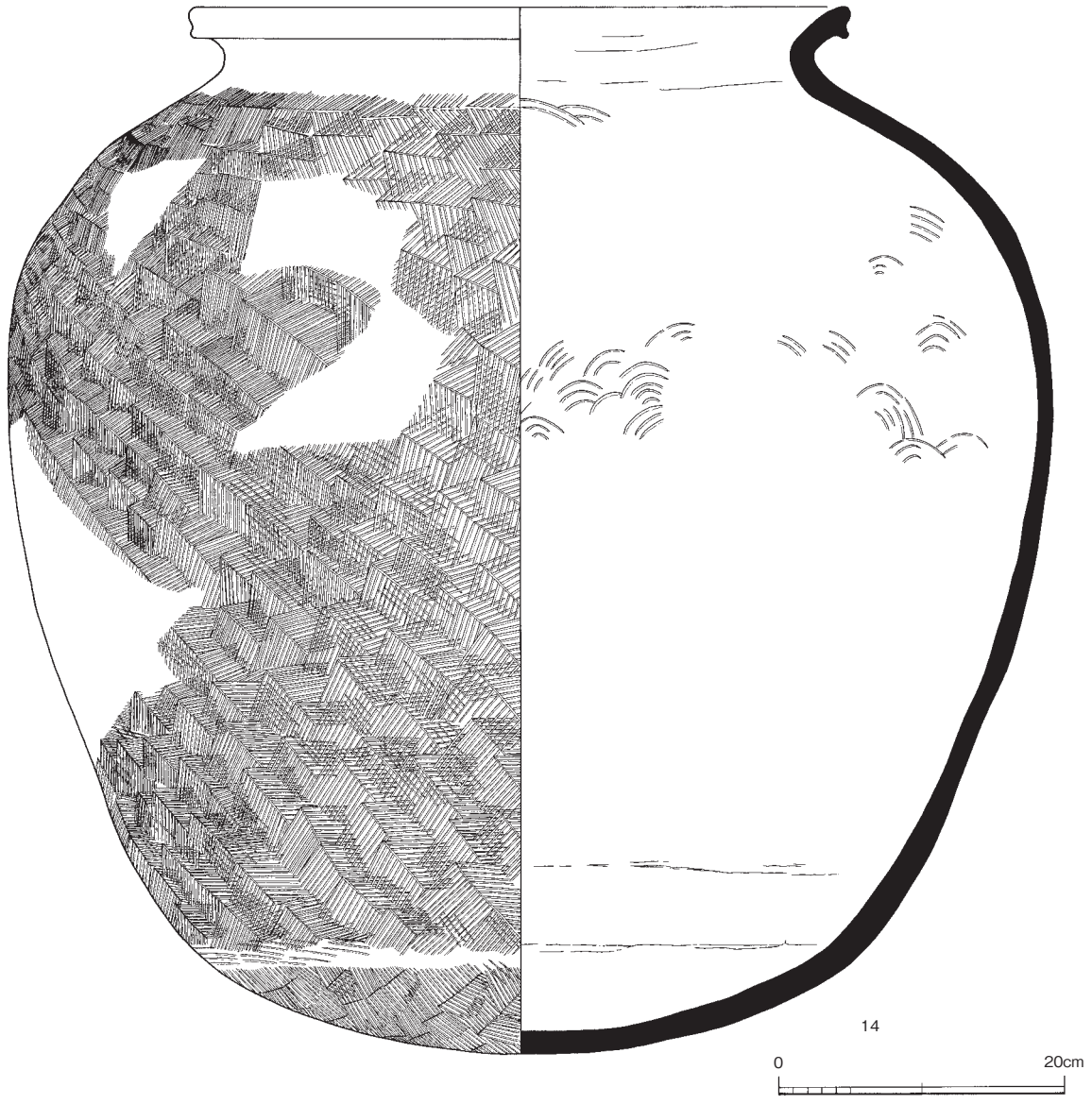
B-10 SK13



13



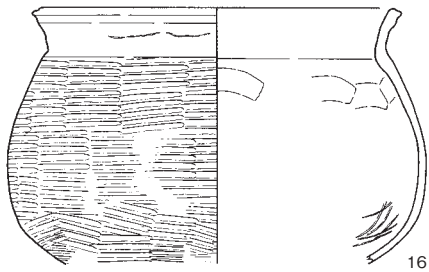
B-10 SK10



D-10 SK21



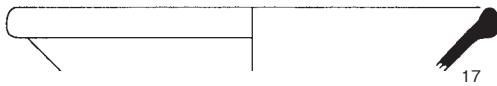
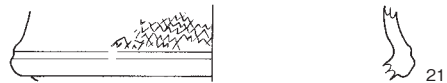
D-10 SK23



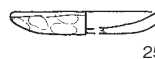
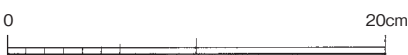
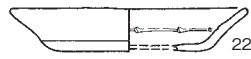
A-12 SK29



B-12 SK30



C-12 SK32

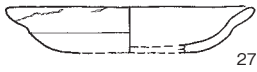


中世の土器2

図版87 遺物 主郭

吉田住吉山遺跡

A-13 SK33



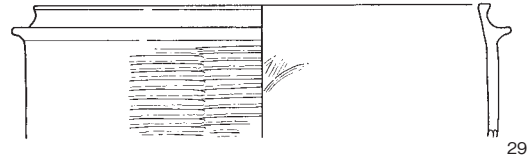
27

A-13 SK34



28

B-13 SK35

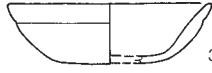


29

B-13 SK41

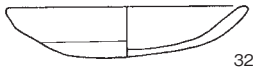


30

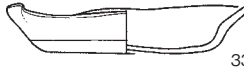


31

B-13 SK45

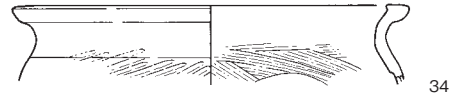


32



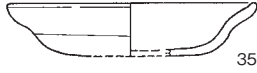
33

C-13 SK46

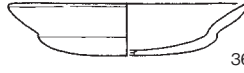


34

C-13 SK54



35



36



37

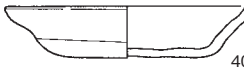


38

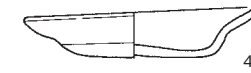
C-13 SK47



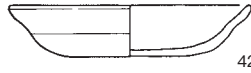
39



40



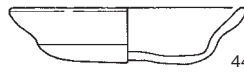
41



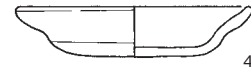
42



43



44



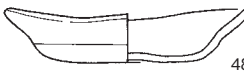
45



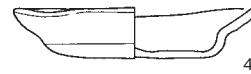
46



47



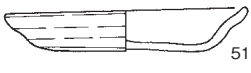
48



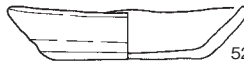
49



50



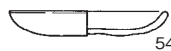
51



52



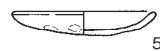
53



54



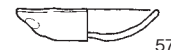
55



56



62



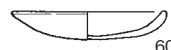
57



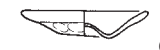
58



59

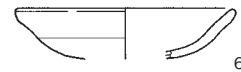


60



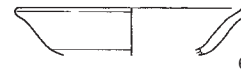
61

B-14 SK60



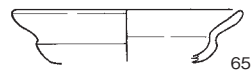
63

B-14 SK62



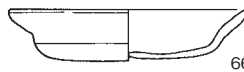
64

B-14 SK61

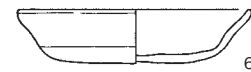


65

B-14 SK57



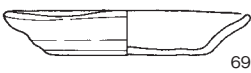
66



67



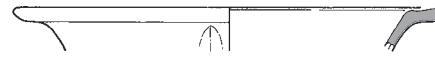
68



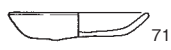
69



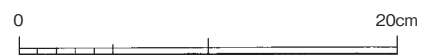
70



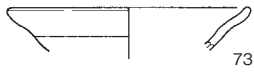
72



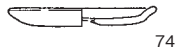
71



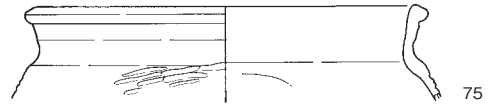
B-08 集石1



73

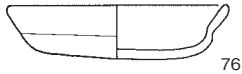


74



75

A-10・11 集石3



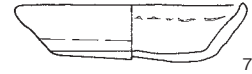
76



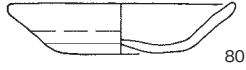
77



78



79



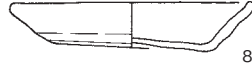
80



81



82



83



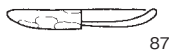
84



85



86



87



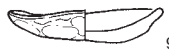
88



89



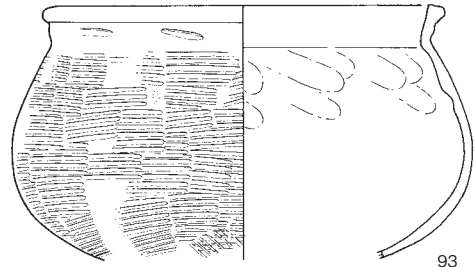
90



91

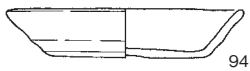


92



93

A-10・11 集石3・2



94



95



96

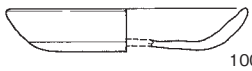


97

A-14・B-14 集石6



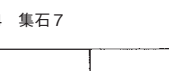
99



100



101



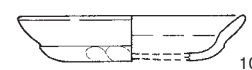
102

B-08 焼土1



103

B-08 焼土2



104



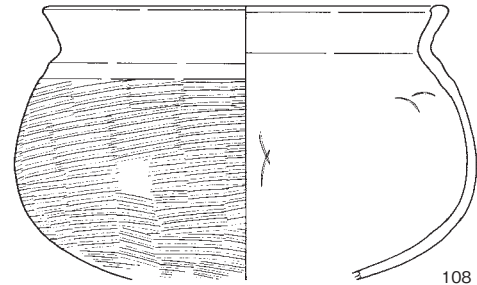
105

B-14 集石7



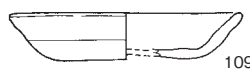
102

A-13 焼土4



108

C-09 鍛冶炉1



109

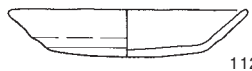


110

A-12 炉1



111

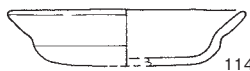


112



113

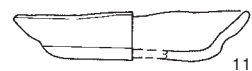
B-09 SD01



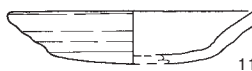
114



115



116



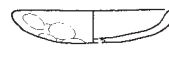
117



118



119



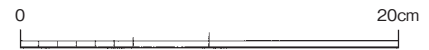
120



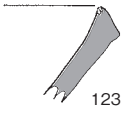
121



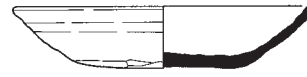
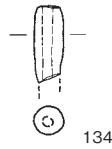
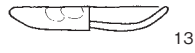
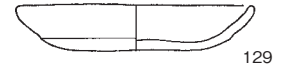
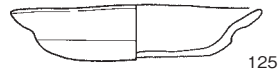
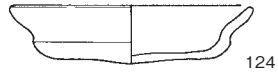
122



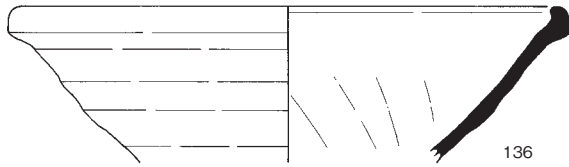
6号墳周溝 (東)



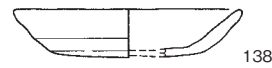
6号墳周溝 (南)



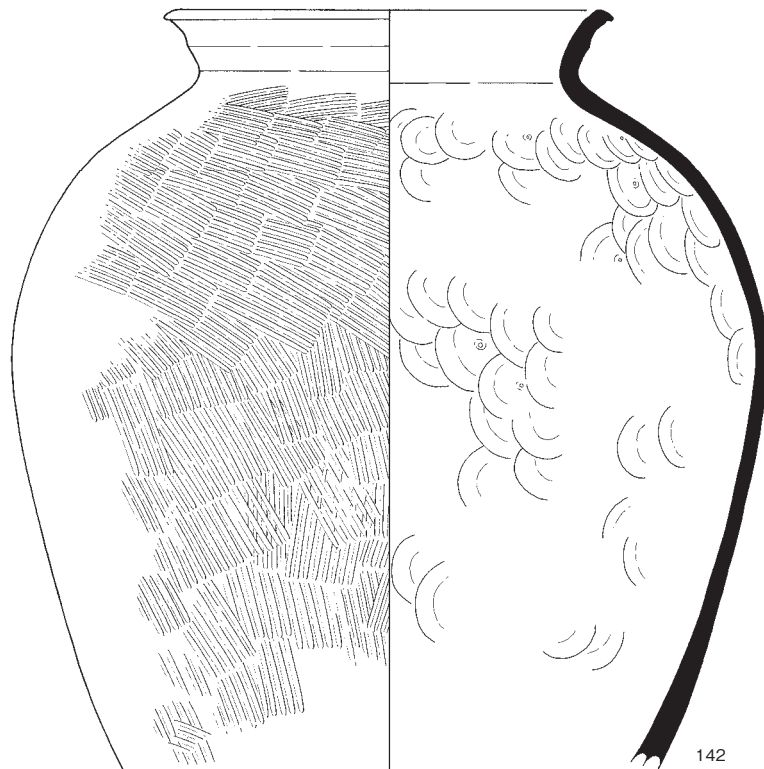
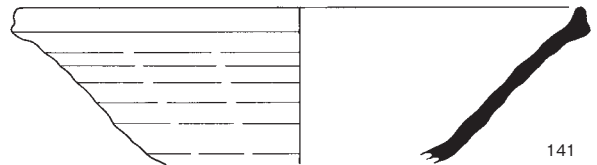
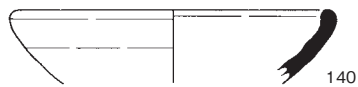
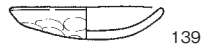
2号墳周溝 (北)



2号墳周溝 (南)



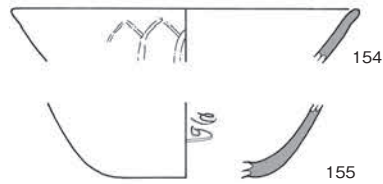
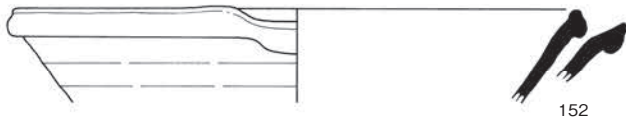
2号墳周溝 (西)



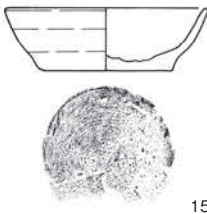
5号墳周溝 (西)



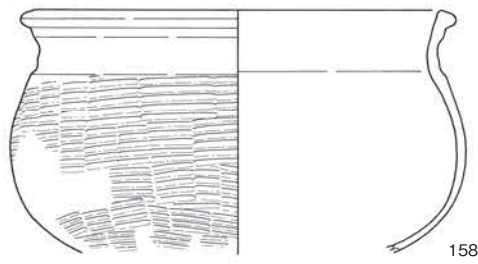
5号墳周溝 (南)



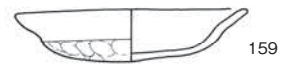
1号墳周溝 (南)



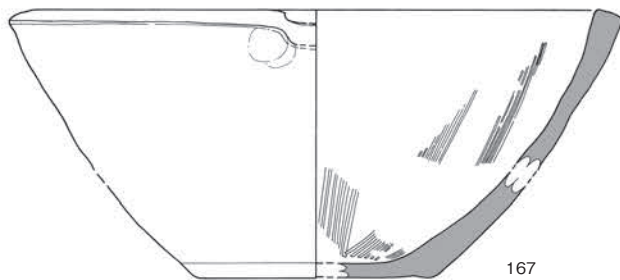
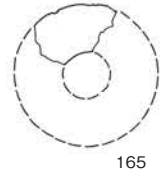
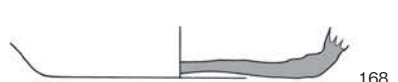
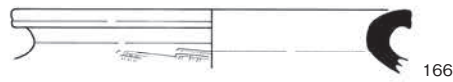
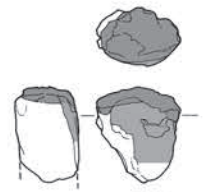
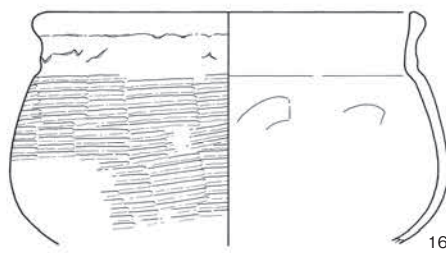
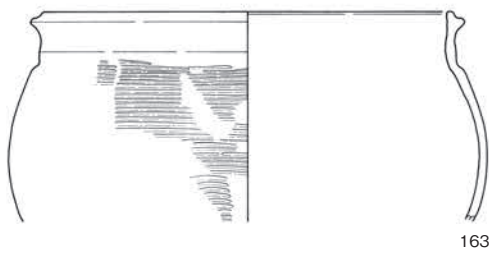
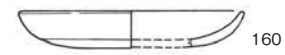
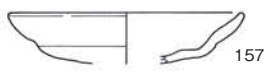
4号墳周溝 (西)



土壘1 東側



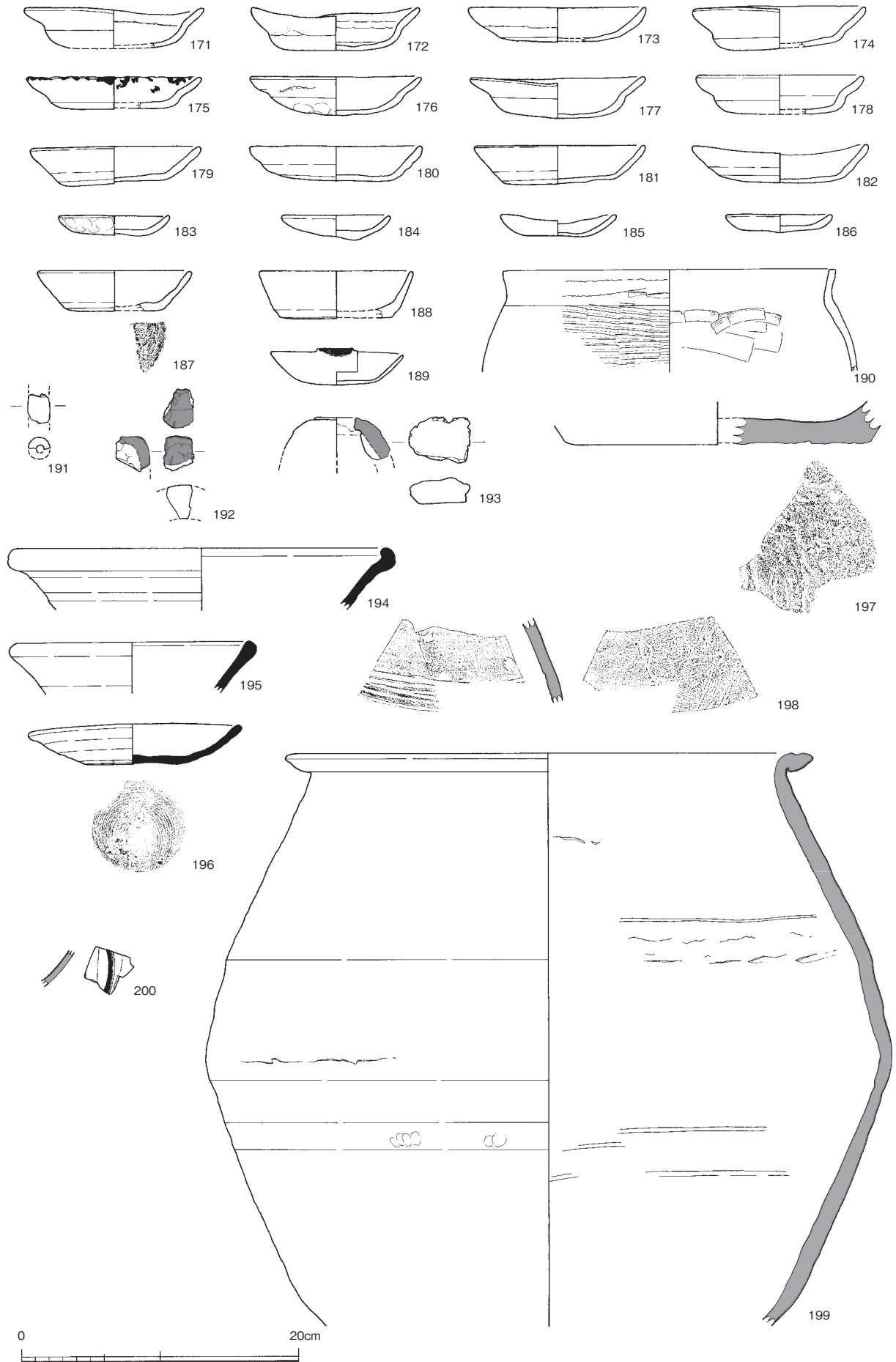
4号墳周溝 (南)



図版91 遺物 主郭

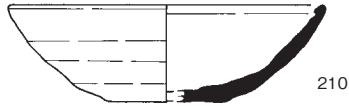
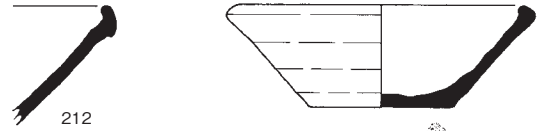
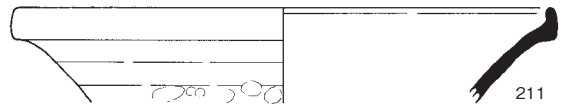
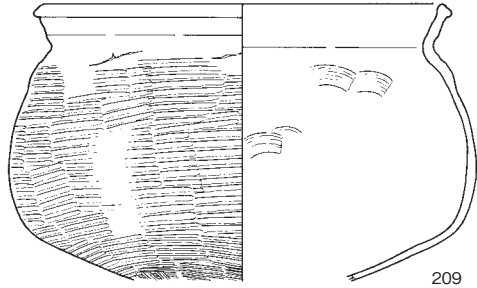
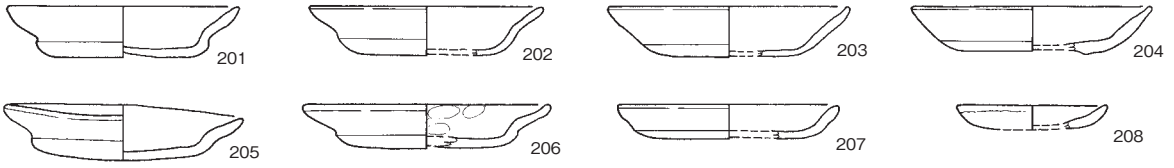
吉田住吉山遺跡

包含層

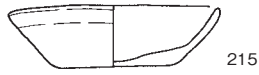


中世の土器7

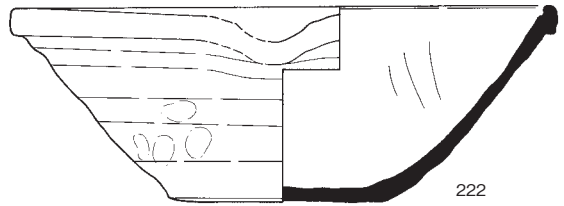
土壘1



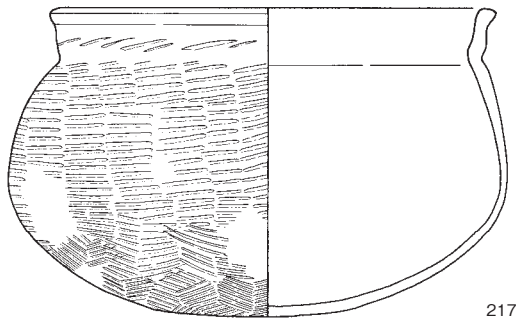
B-08 集石9



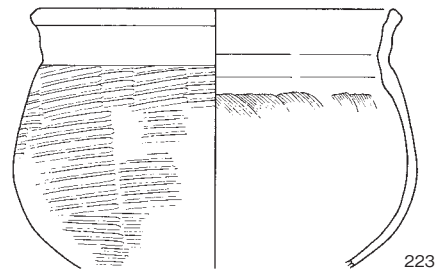
E-08 集石14



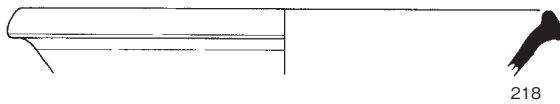
C-07 集石10



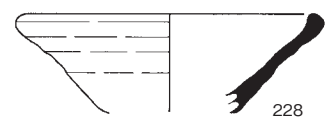
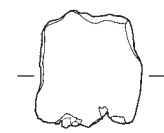
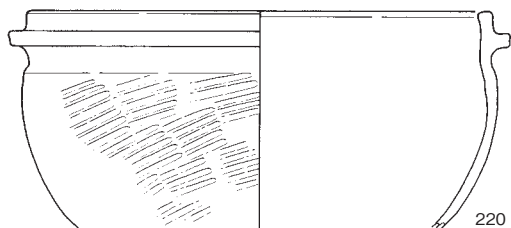
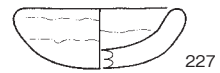
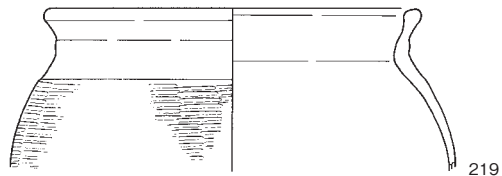
B-07-08 焼土4



D-08 集石13

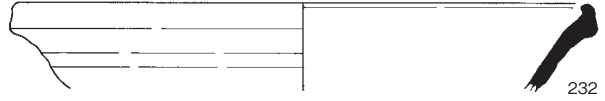
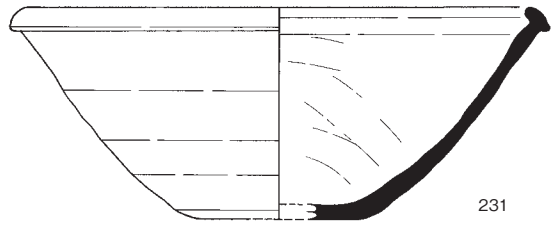
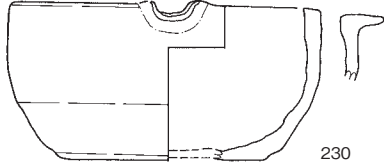


C-08 金属工房1

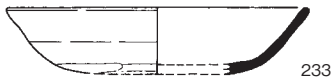


図版93 遺物 土器・空堀

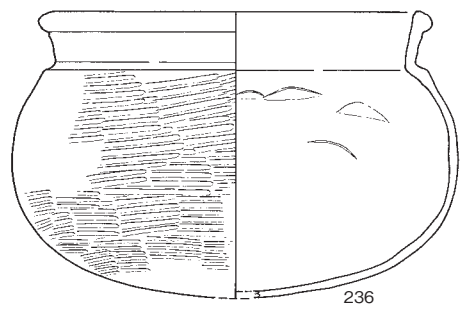
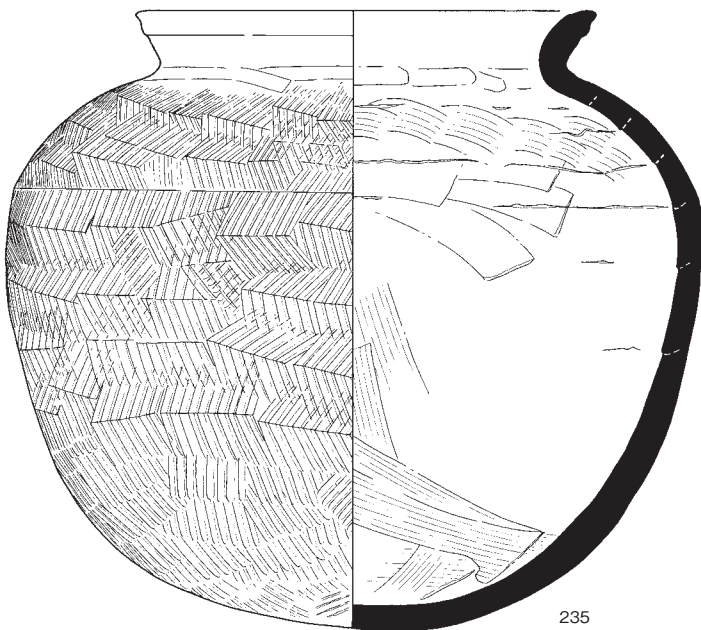
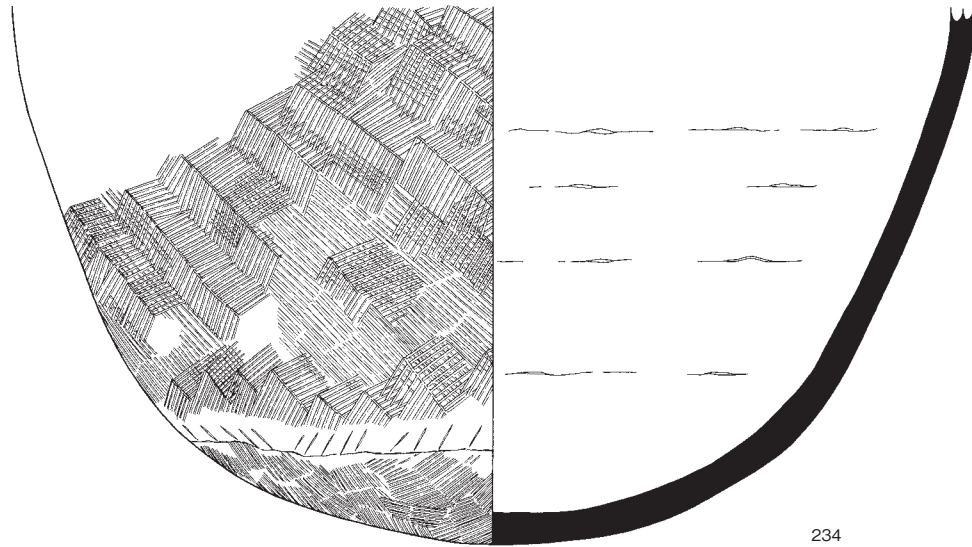
土壘2 7号墳周溝(南)



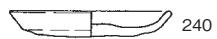
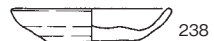
土壘2 盛土



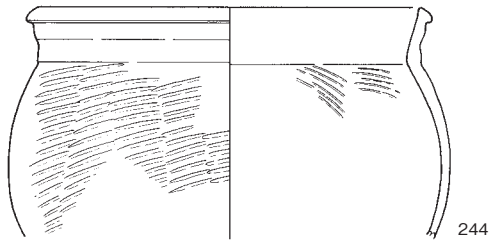
土壘3 8号墳南側



土壘3 SK64



土壘5



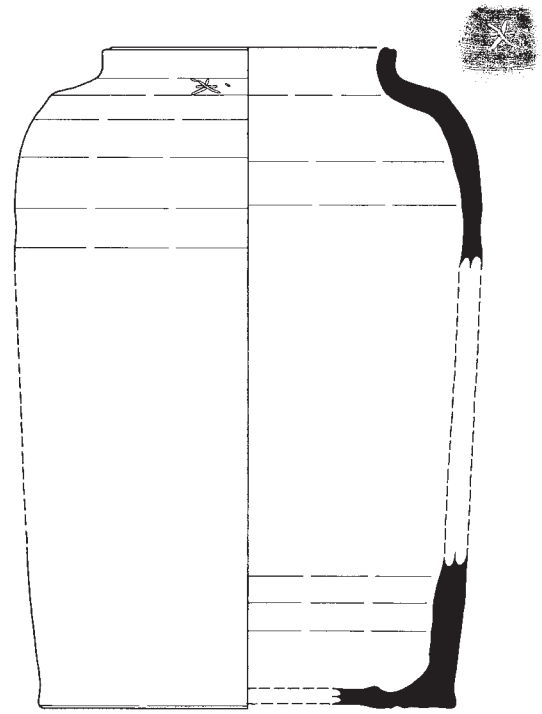
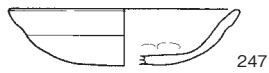
空堀1



空堀2



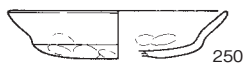
空堀3



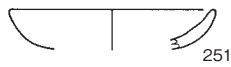
帯曲輪3 斜面



帯曲輪3 横堀

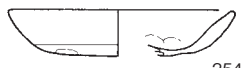


249



251

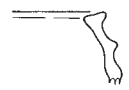
帯曲輪3 水留



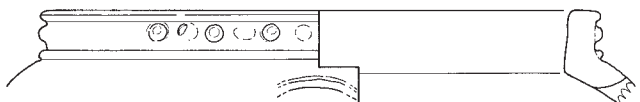
254



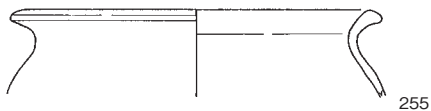
252



253



256



255

帯曲輪2 斜面



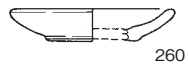
257



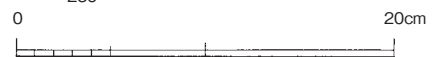
258



259



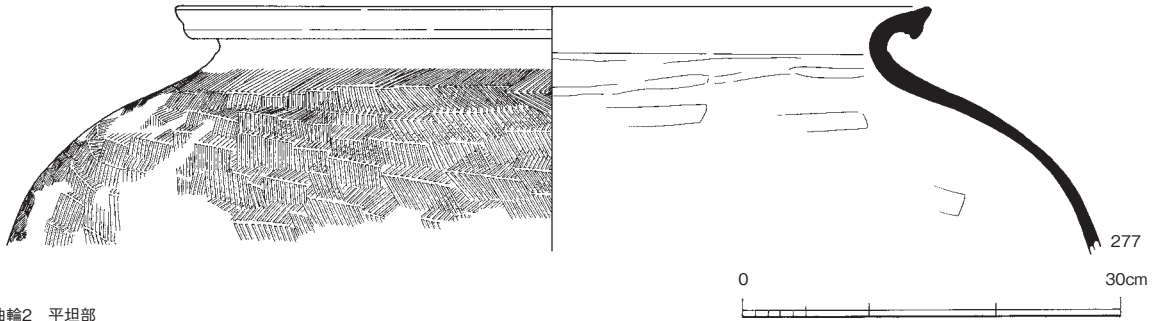
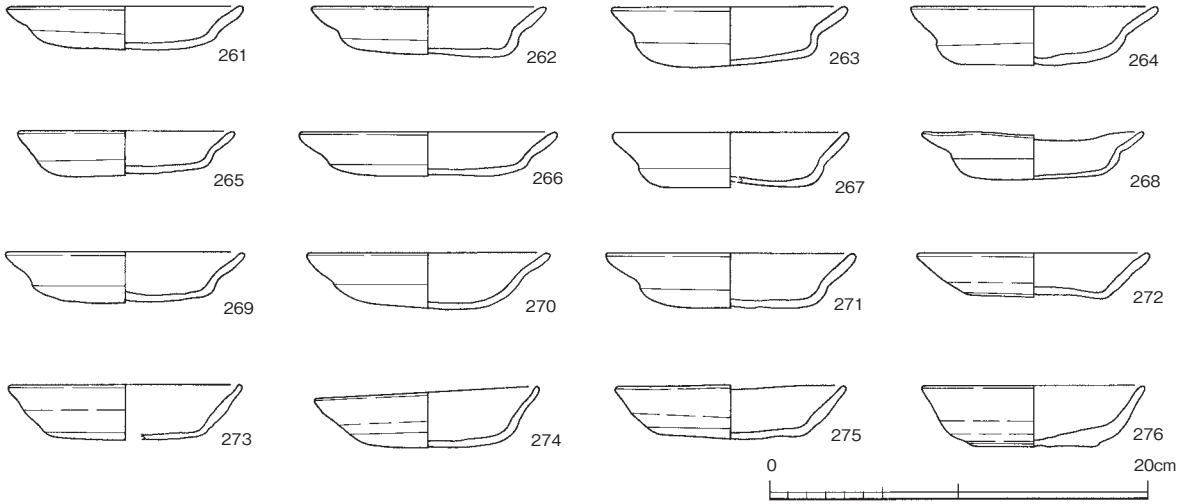
260



図版95 遺物 帯曲輪2・1 東斜面

吉田住吉山遺跡

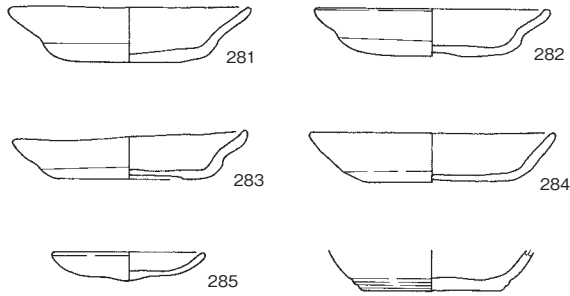
帯曲輪2 横堀



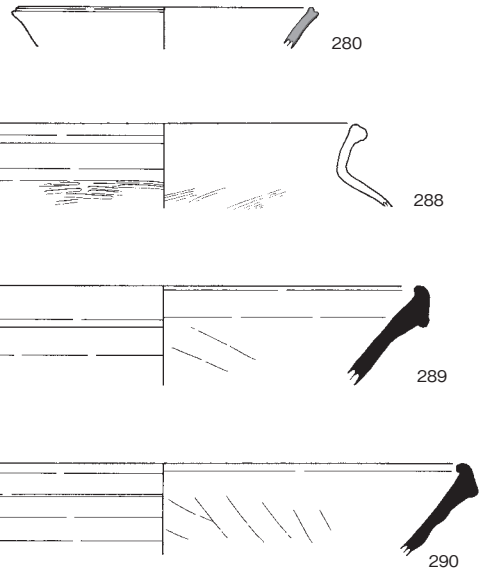
帯曲輪2 平坦部



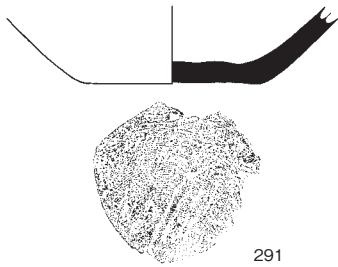
帯曲輪1 横堀



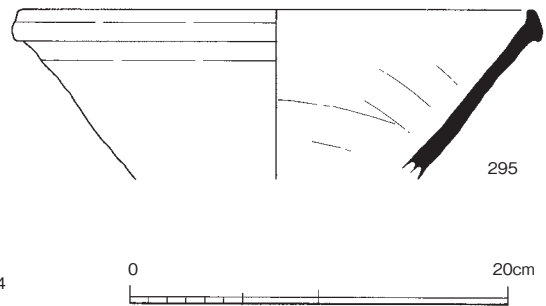
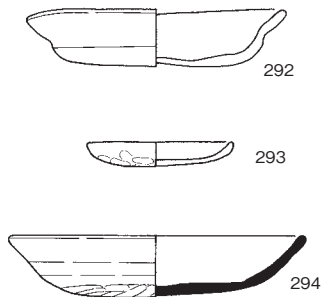
帯曲輪1 斜面



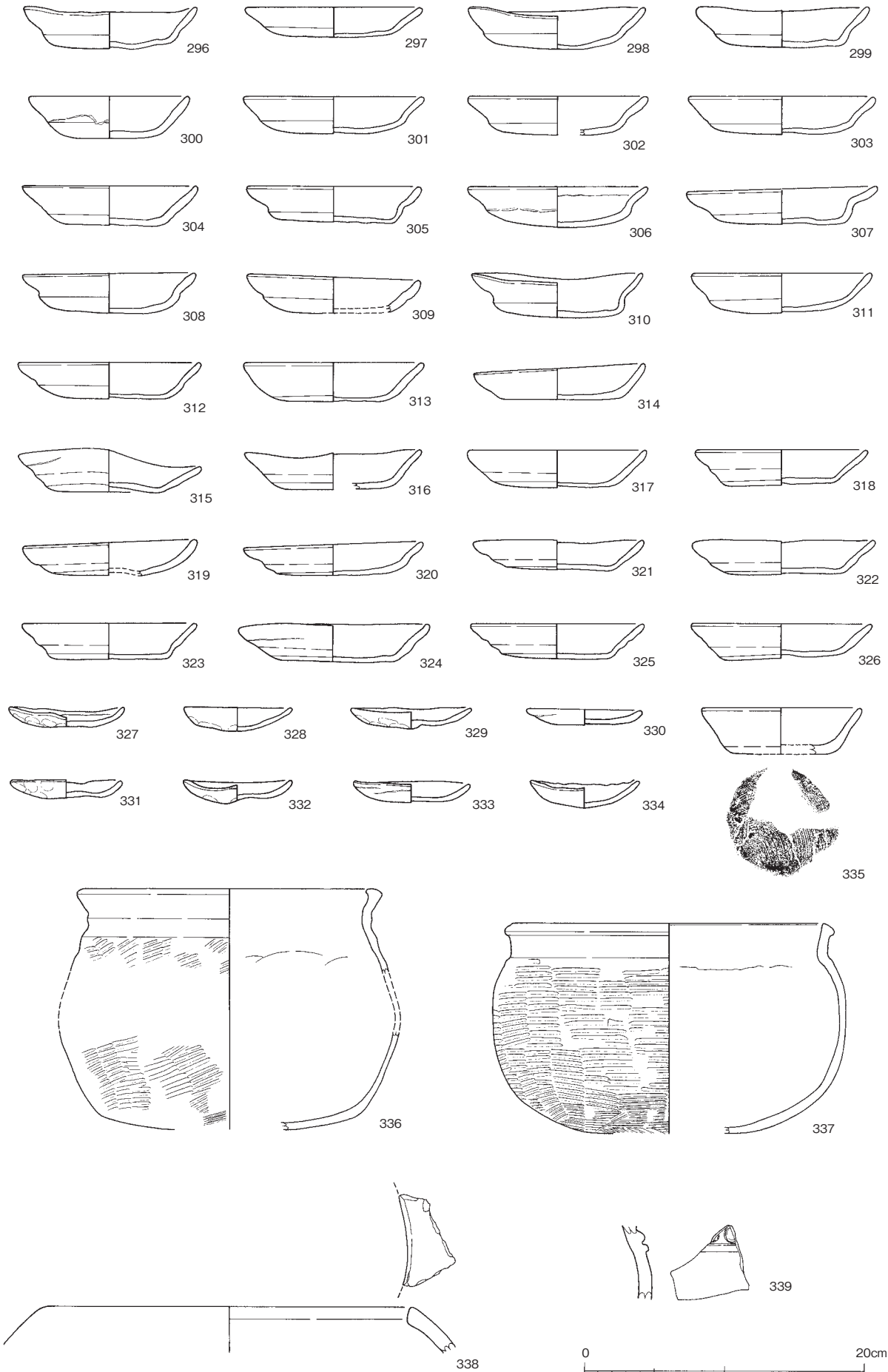
東斜面 A-16 段状遺構1

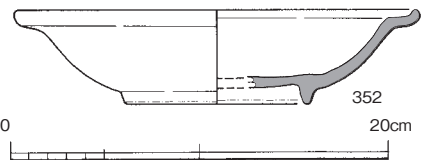
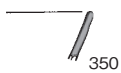
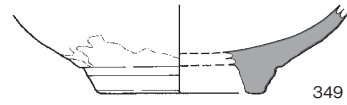
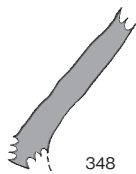
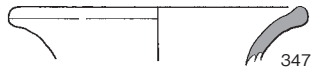
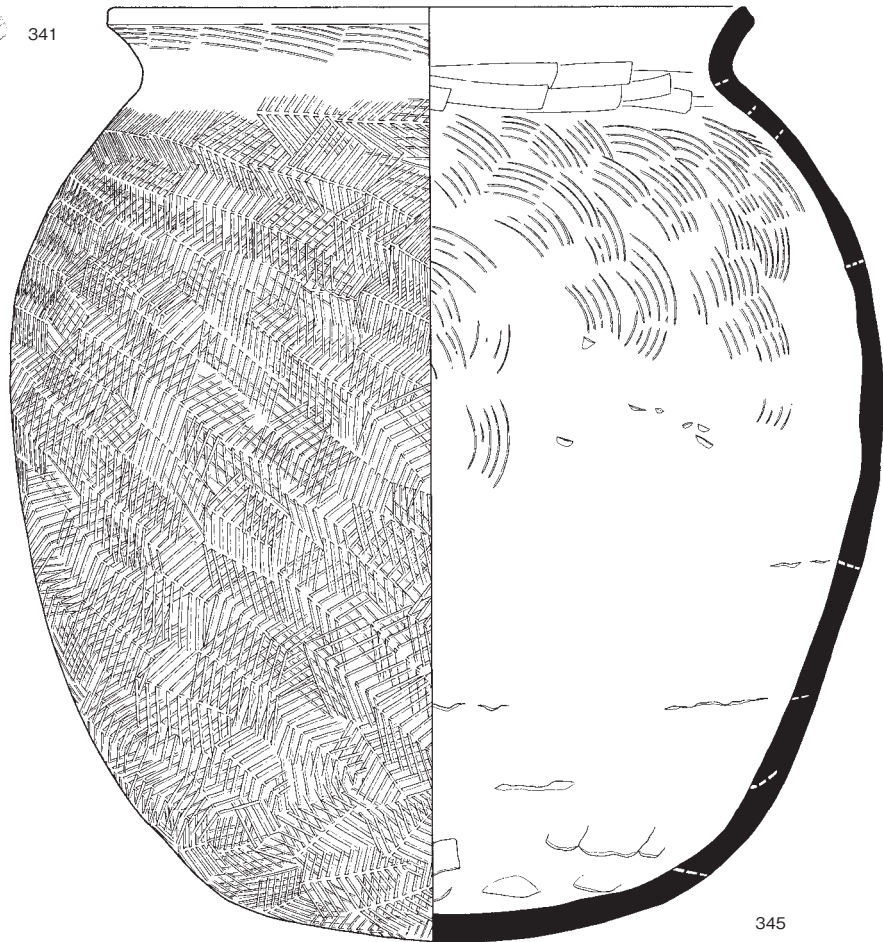
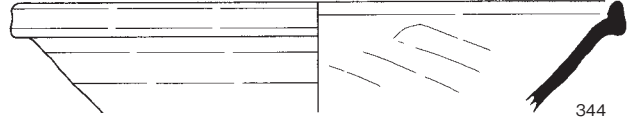
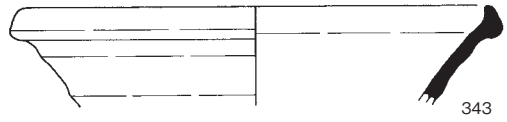
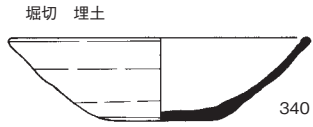


東斜面 包含層



堀切 埋土



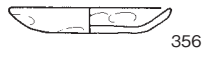


段状遺構3



353

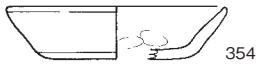
段状遺構4



356



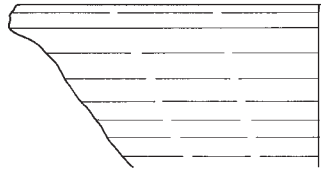
357



354

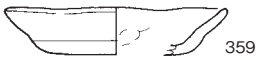


355



358

G-06 SK67



359

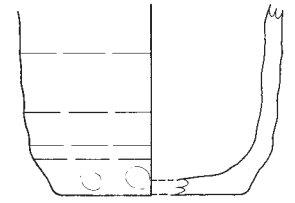


360



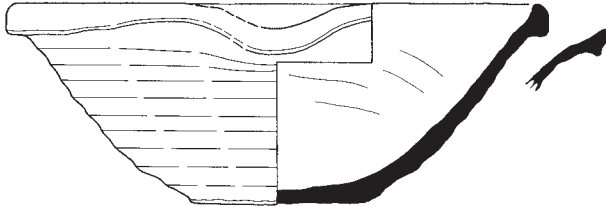
361

G-06 SK68



362

G-06 SK71

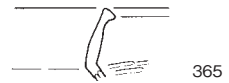


363

通路1

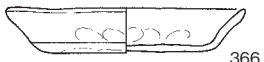


364



365

包含層



366



367



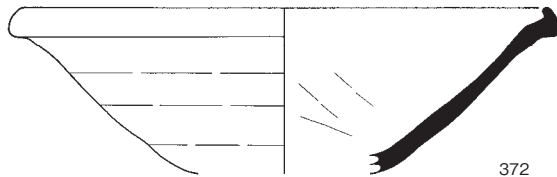
368



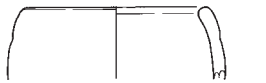
369



370



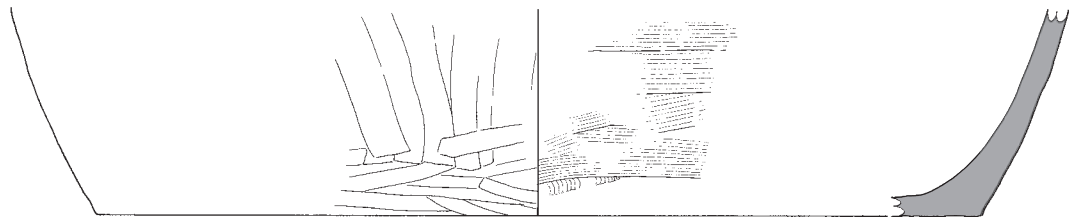
372



371



373



374



375



図版99 遺物 谷西 西帯曲輪2 帯曲輪4・5

吉田住吉山遺跡

谷西 G-04・H-04 SK75



376

谷西 G-04 SK78

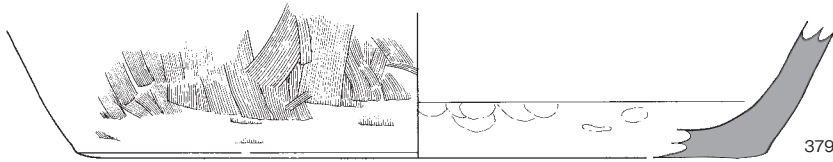


377

谷西 包含層



378



379

C-21 SK80



380

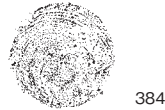


381

西曲輪2



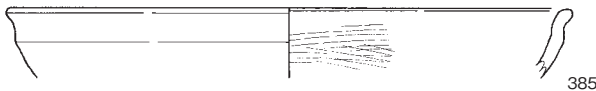
382



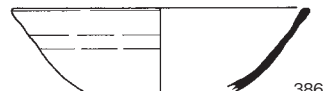
384



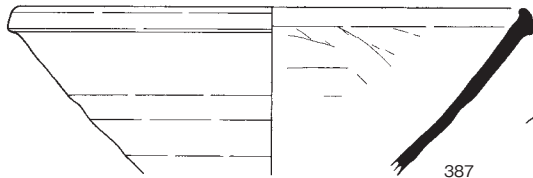
383



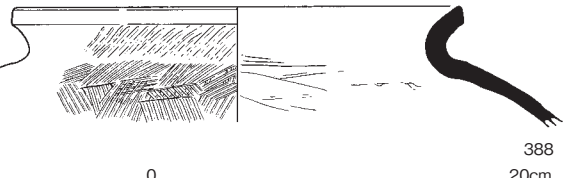
385



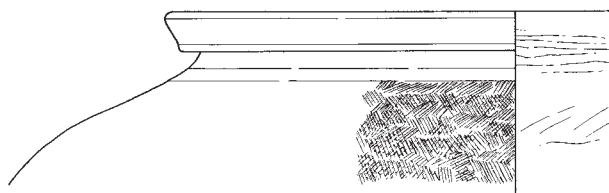
386



387



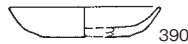
388



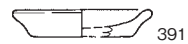
389



帯曲輪4



390



391



392



392

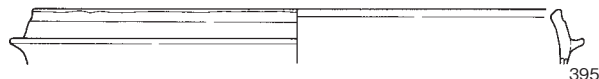


393

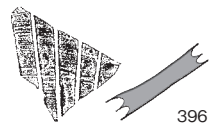


393

帯曲輪5

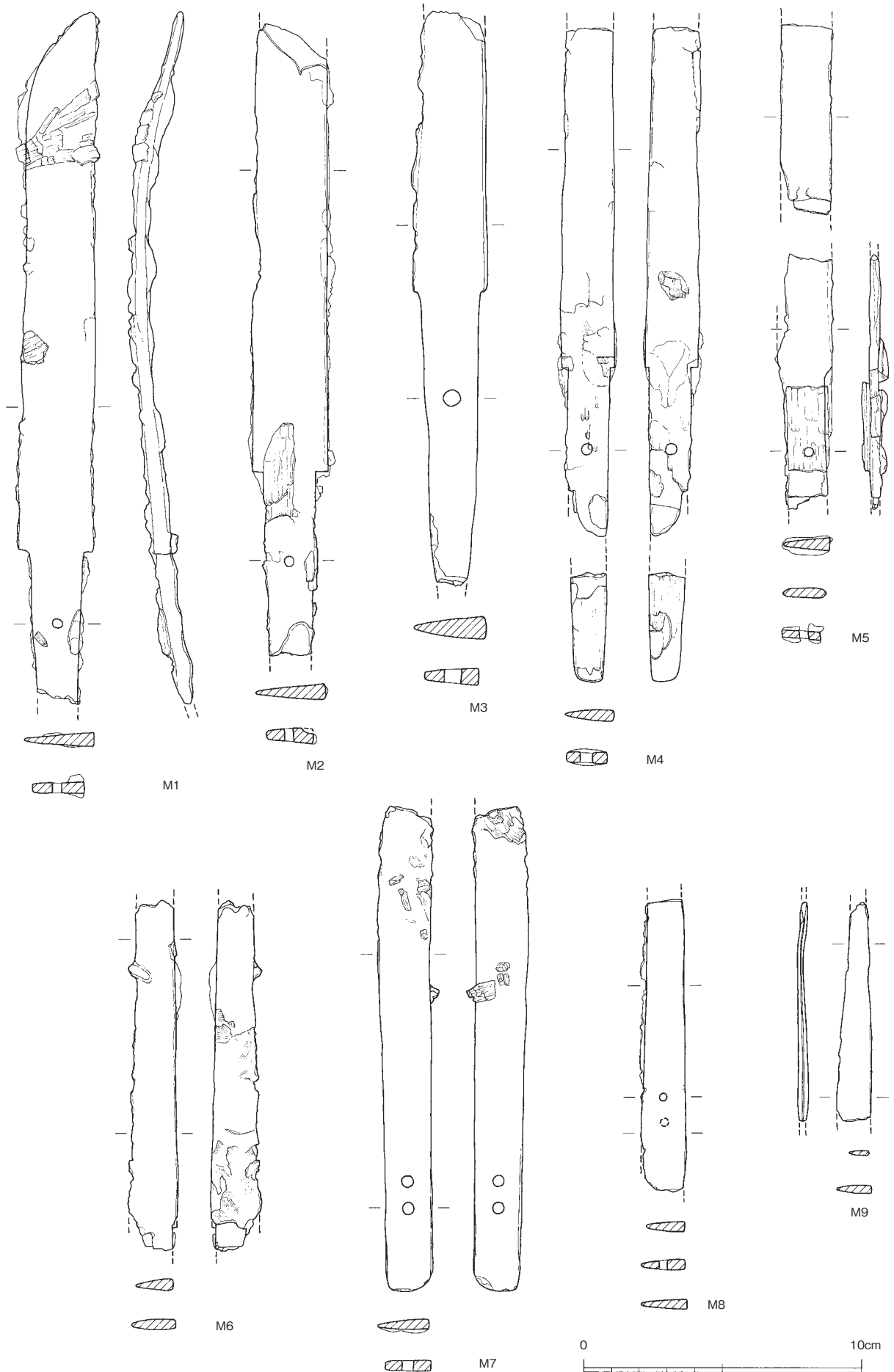


395

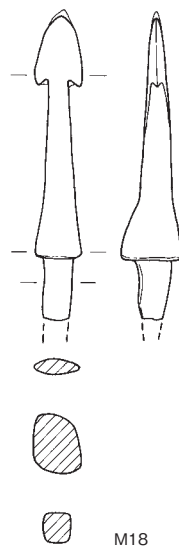
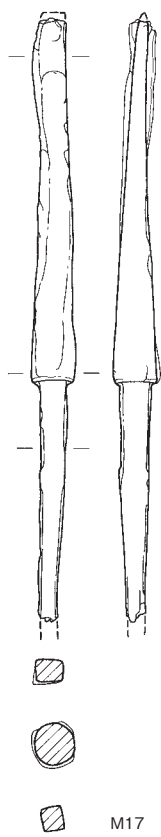
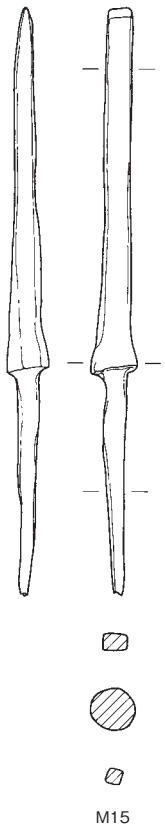
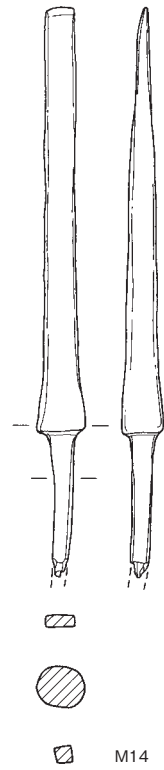
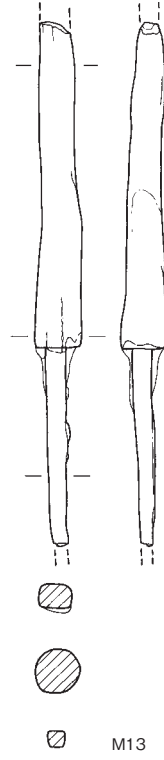
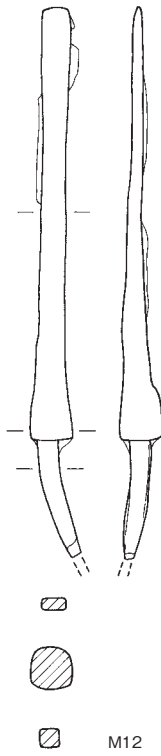
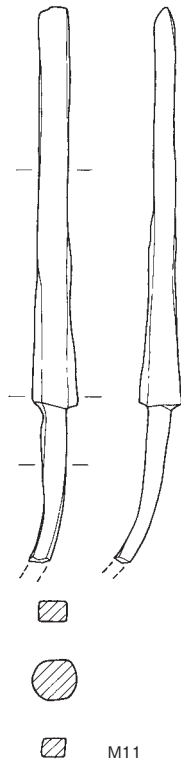
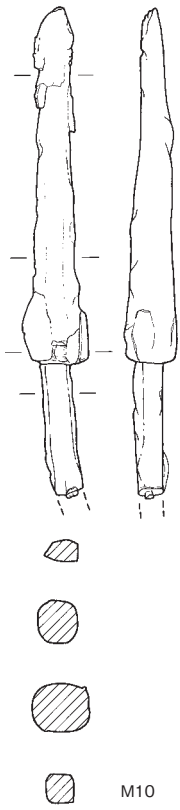


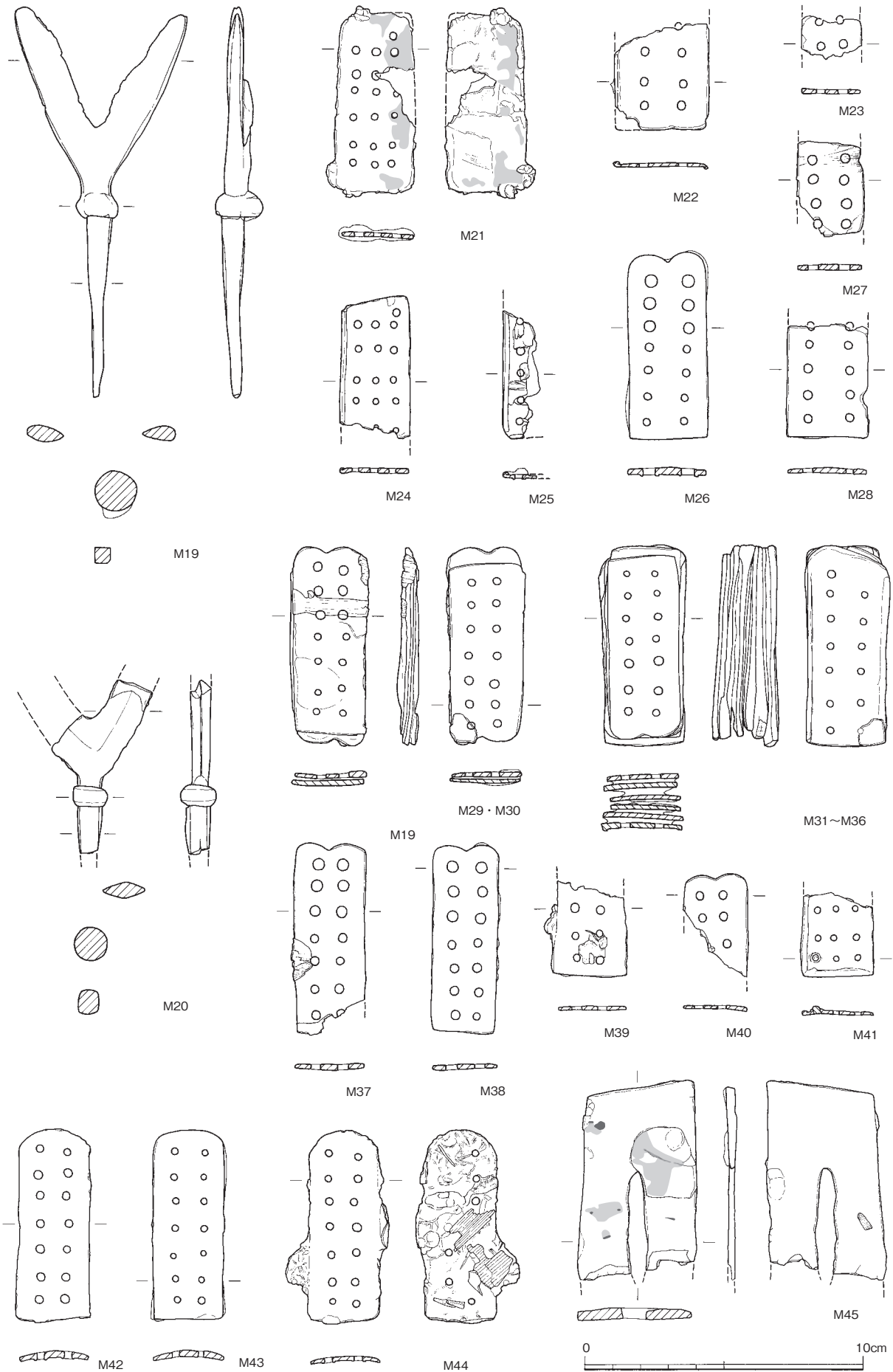
396



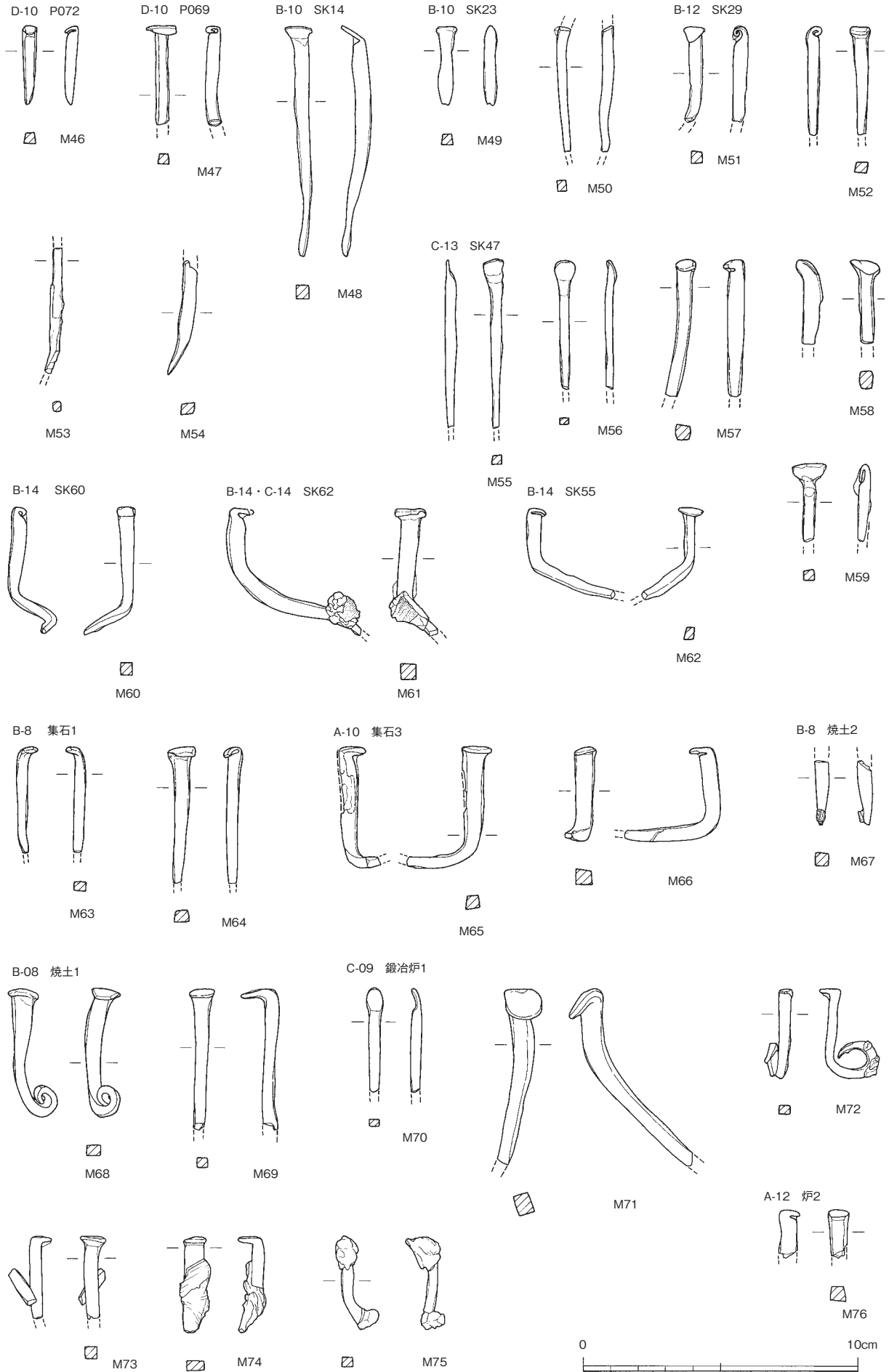


中世の鉄製品1 (刀類)



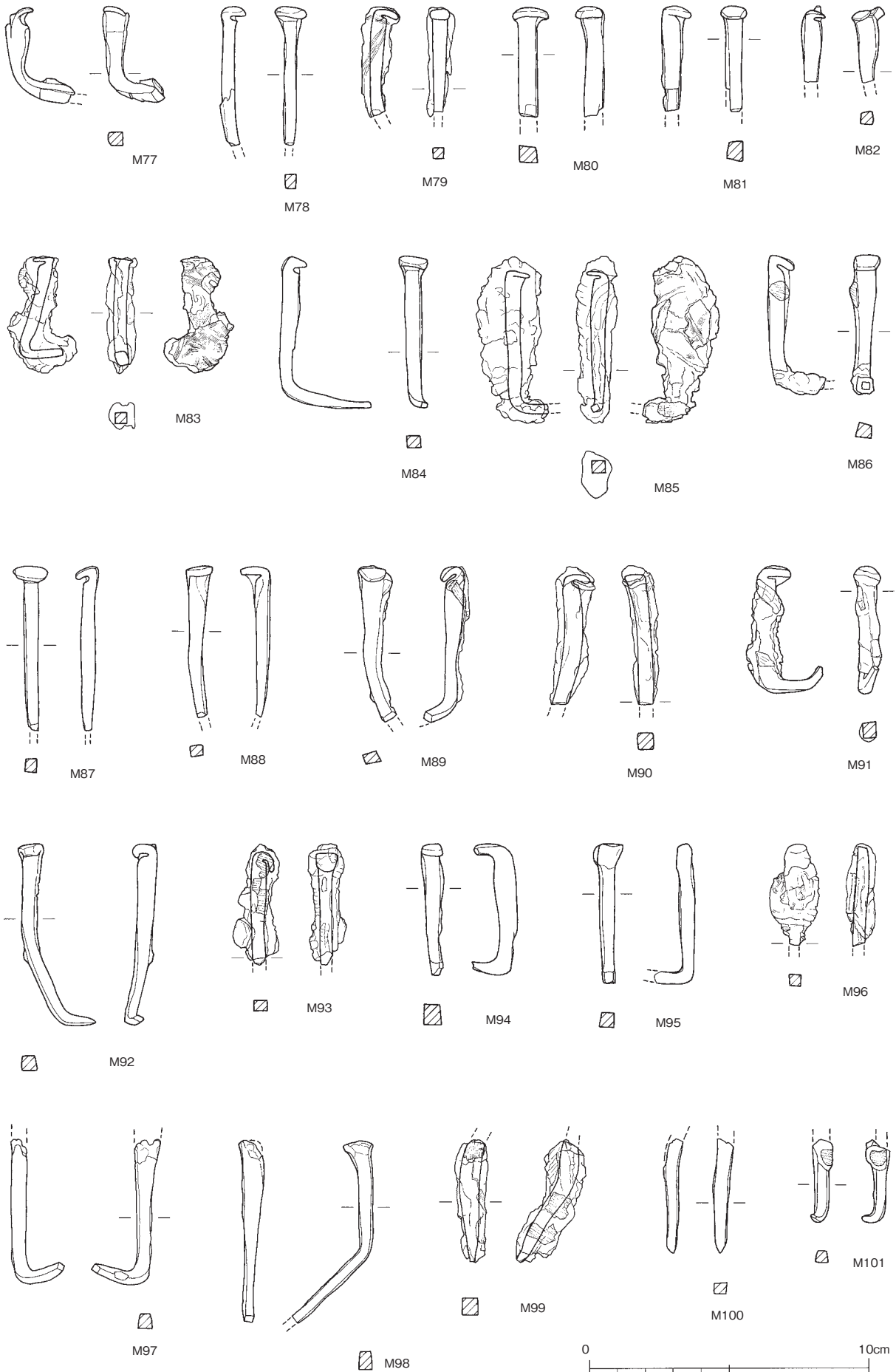


中世の鉄製品3 (鉄鎌・小札)



中世の鉄製品4 (鉄釘)

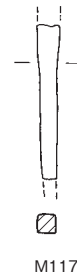
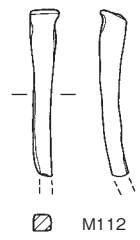
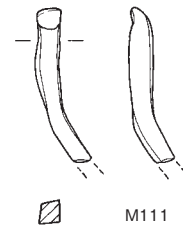
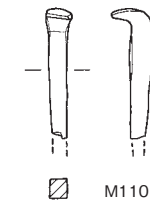
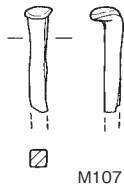
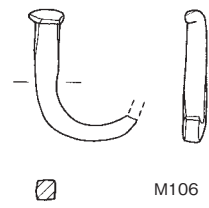
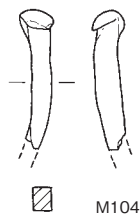
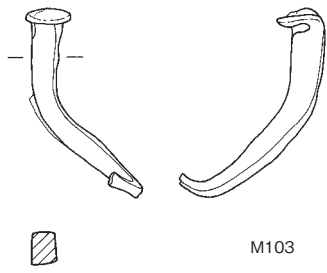
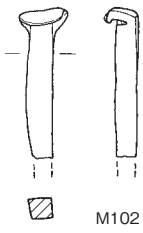
B-09 SD01



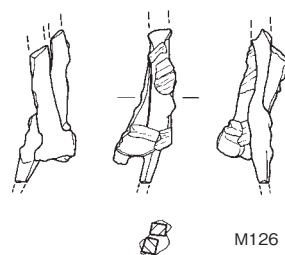
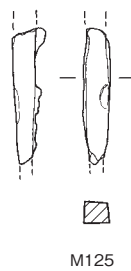
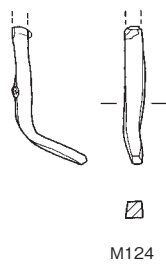
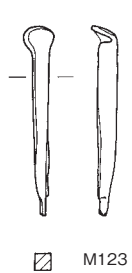
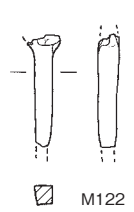
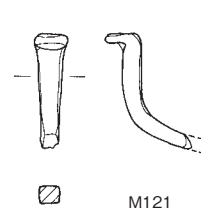
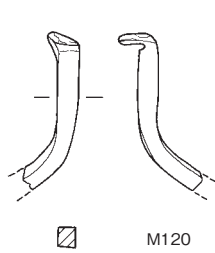
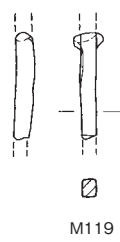
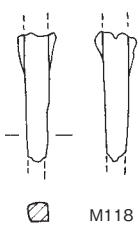
中世の鉄製品5 (鉄釘)

図版105 遺物

6号墳周溝

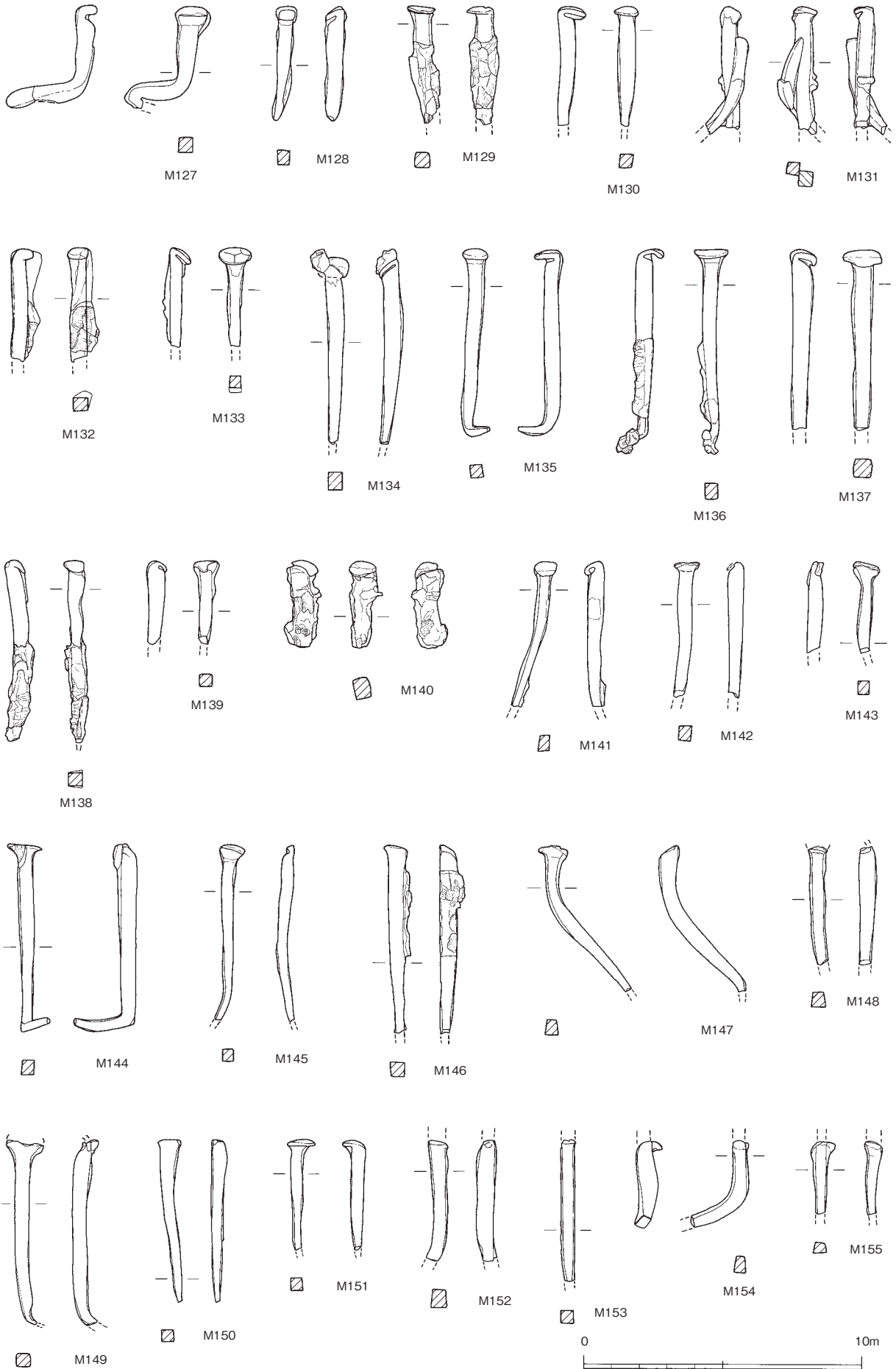


2号墳周溝

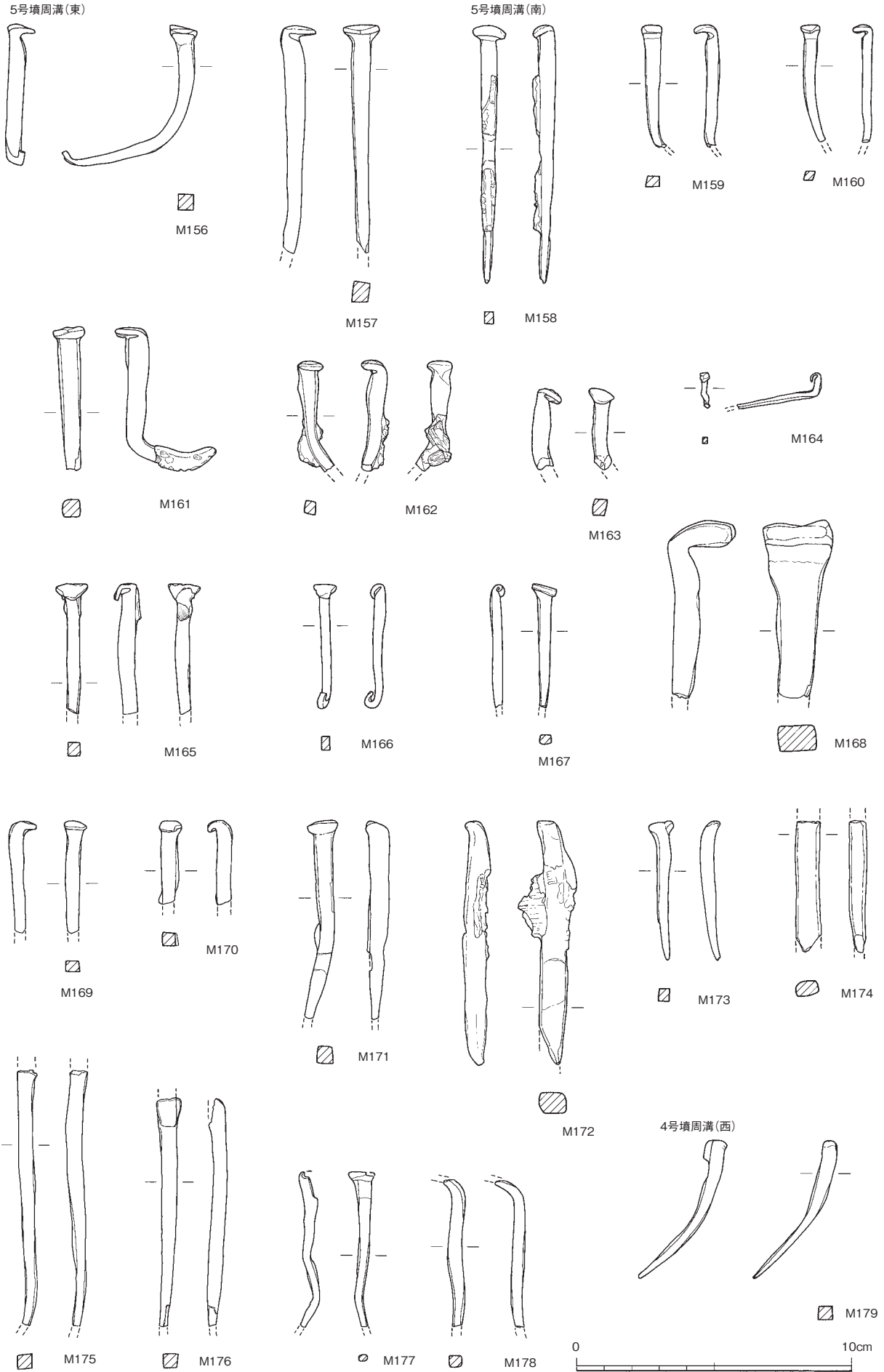


中世の鉄製品6 (鉄釘)

5号墳周溝(西)

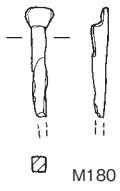


中世の鉄製品7 (鉄釘)

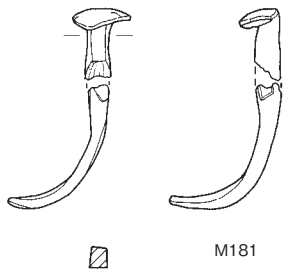


中世の鉄製品8 (鉄釘)

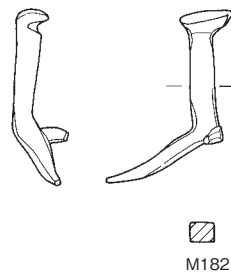
土壘1東側



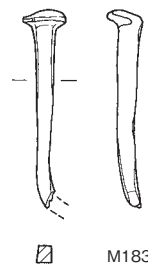
M180



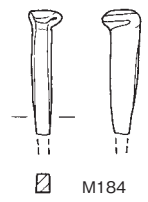
M181



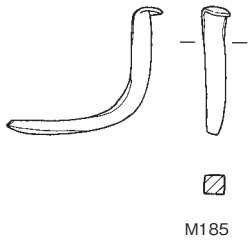
M182



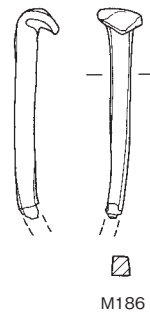
M183



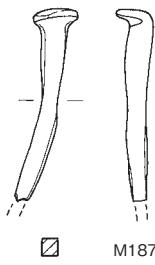
M184



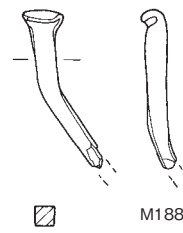
M185



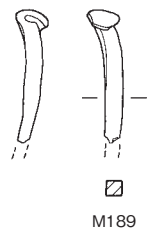
M186



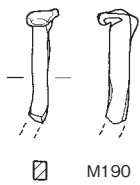
M187



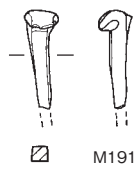
M188



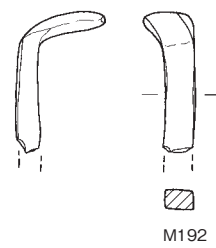
M189



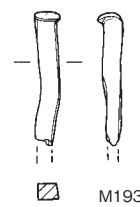
M190



M191

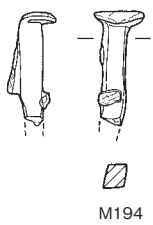


M192

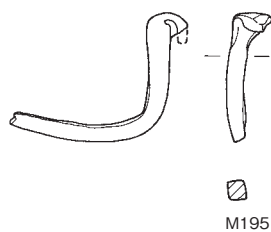


M193

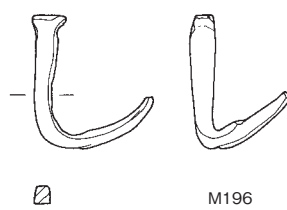
包含層



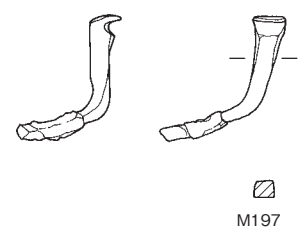
M194



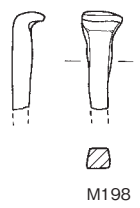
M195



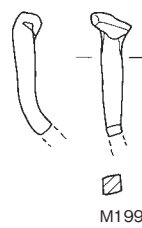
M196



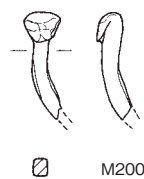
M197



M198



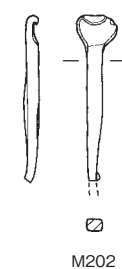
M199



M200



M201



M202



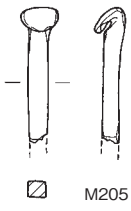
M203



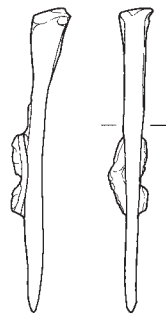
M204



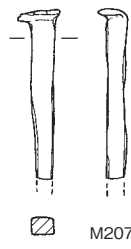
土壘1



M205



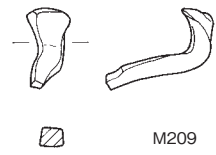
M206



M207



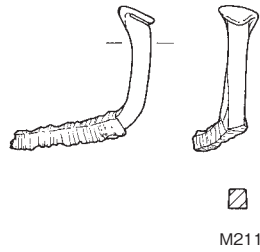
M208



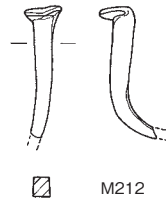
M209



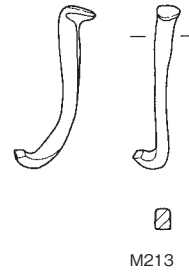
M210



M211



M212



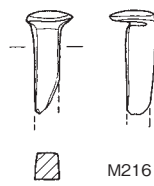
M213



M214



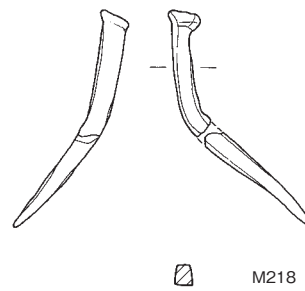
M215



M216



M217



M218



M219



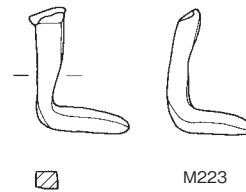
M220



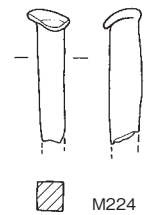
M221



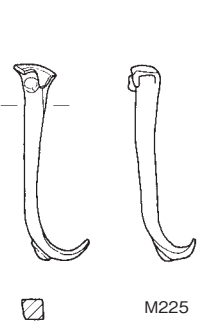
M222



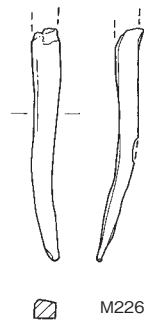
M223



M224

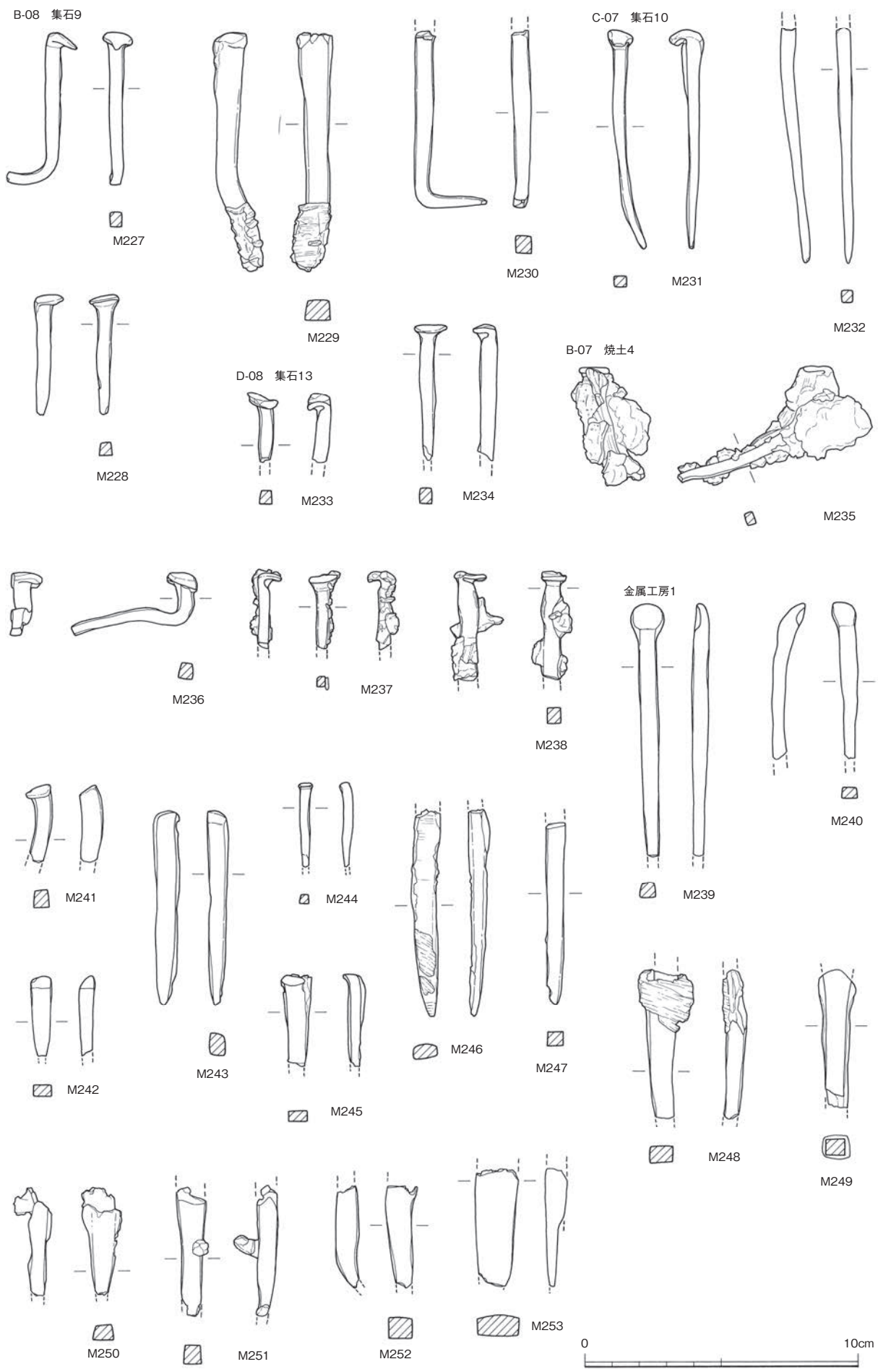


M225



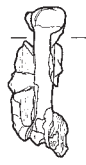
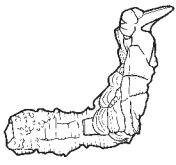
M226





中世の鉄製品11 (鉄釘)

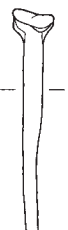
土壘2



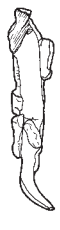
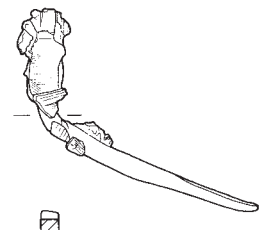
M254



M255



M256



M258



M257

土壘3



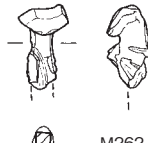
M259



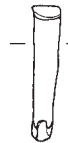
M260



M261



M262



M263



M264



M265

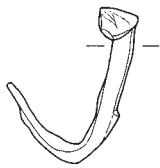
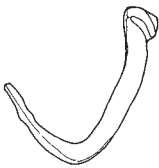
土壘5



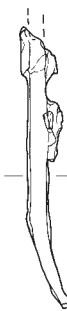
M266



M267



M268

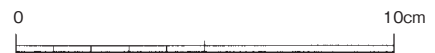


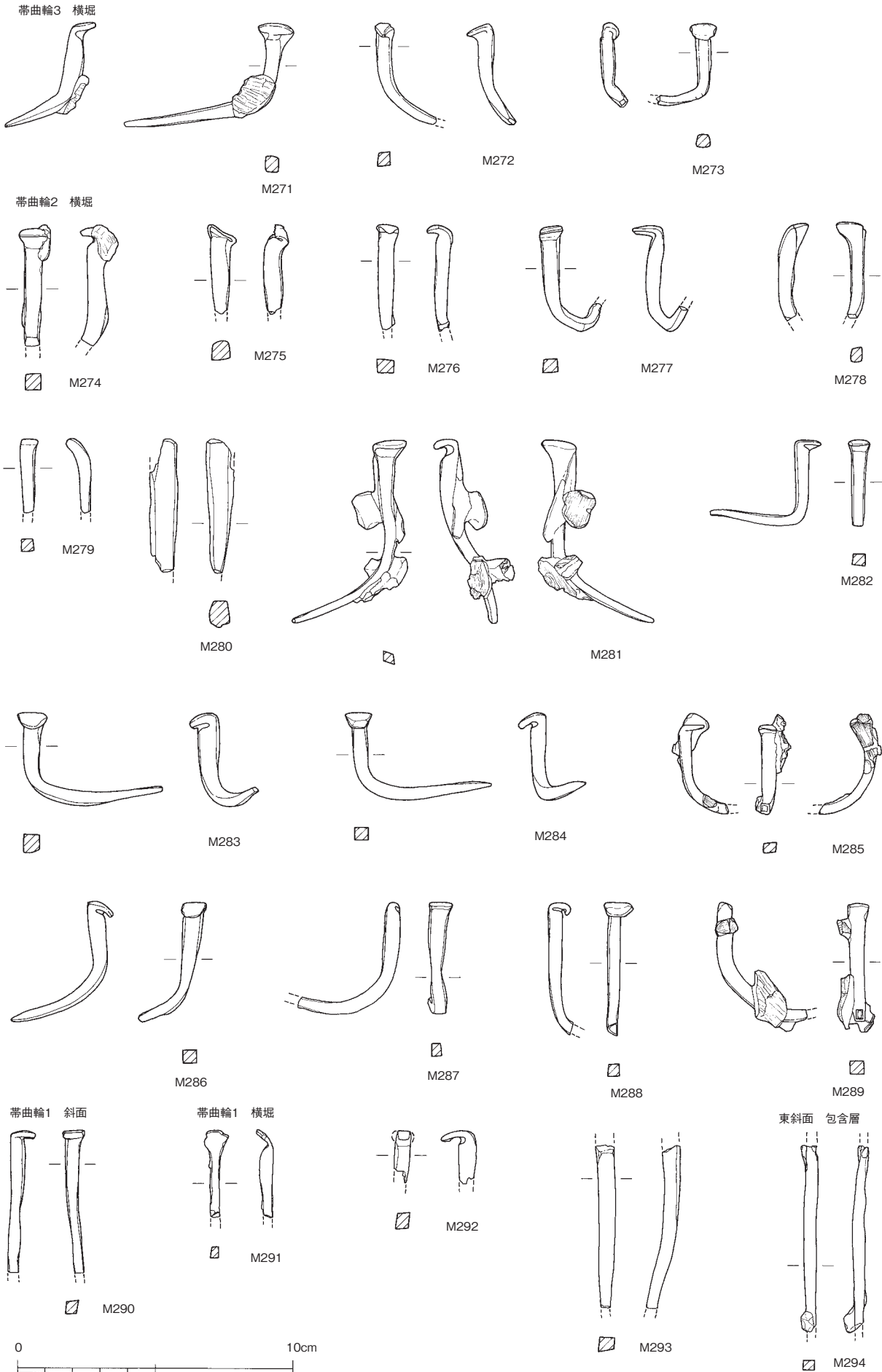
M269

空堀3

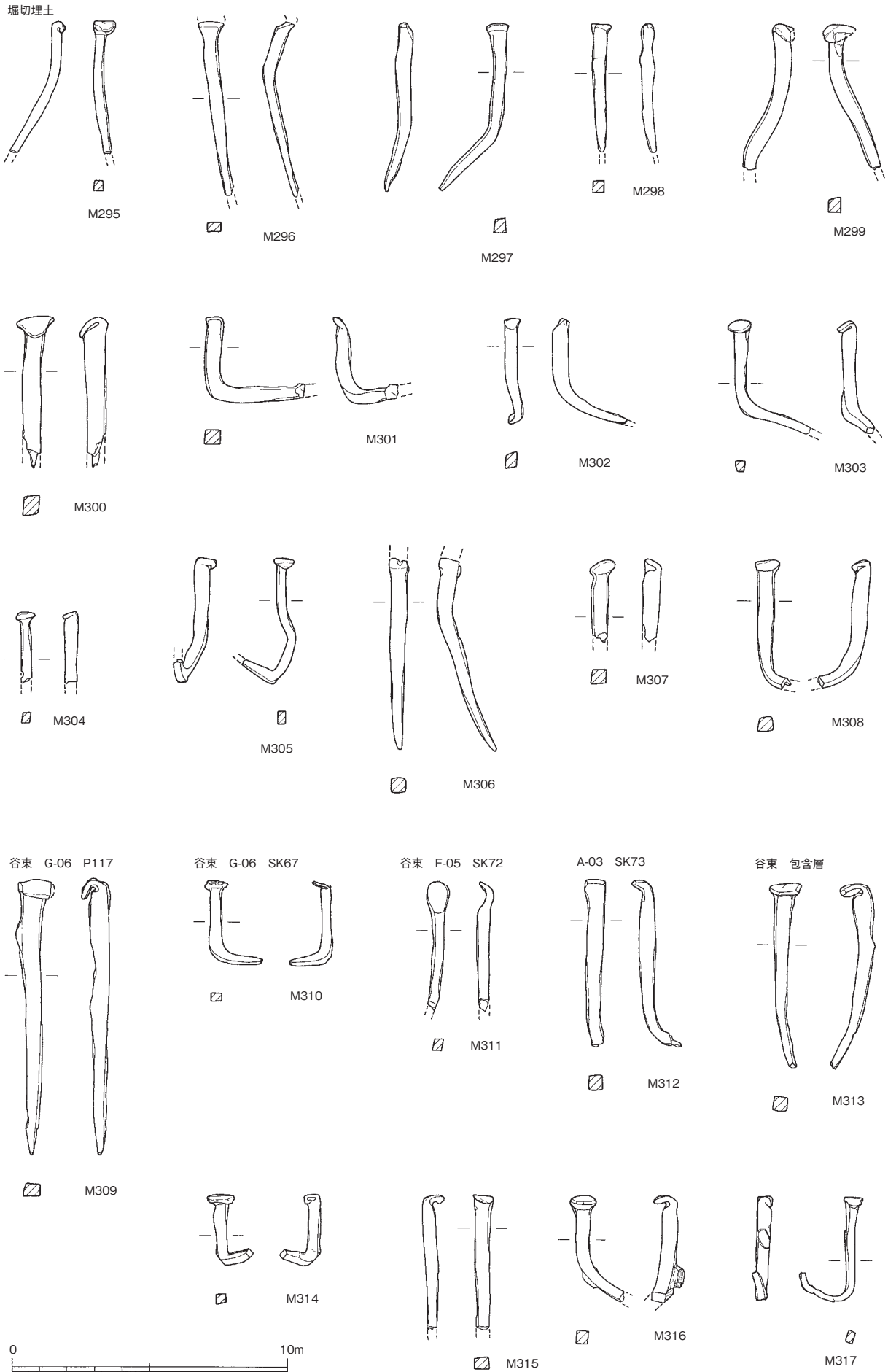


M270



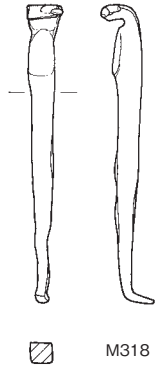


中世の鉄製品13 (鉄釘)



中世の鉄製品14 (鉄釘)

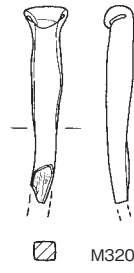
谷西 G-04・H-04 SK77



M318

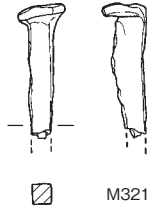


M319

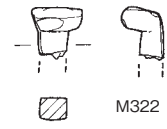


M320

谷西 包含層



M321

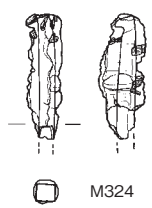


M322

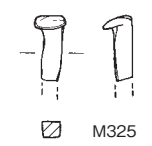
西曲輪2 C-21 SK80



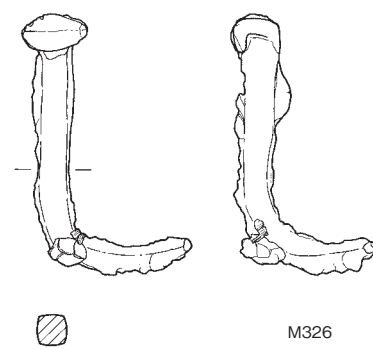
M323



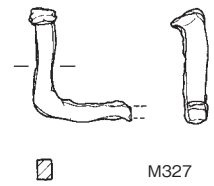
M324



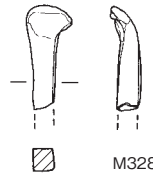
M325



M326

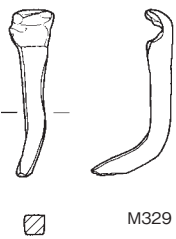


M327

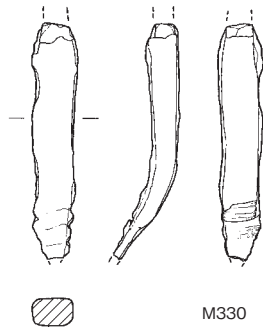


M328

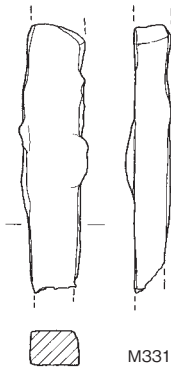
西曲輪2 平坦部



M329



M330

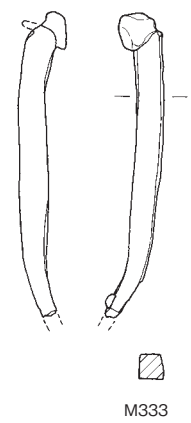


M331

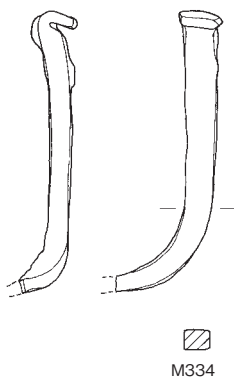
西曲輪2 平坦部



M332



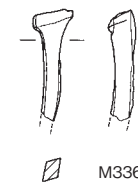
M333



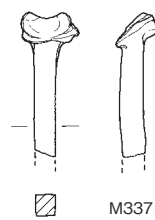
M334



M335



M336



M337



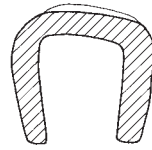
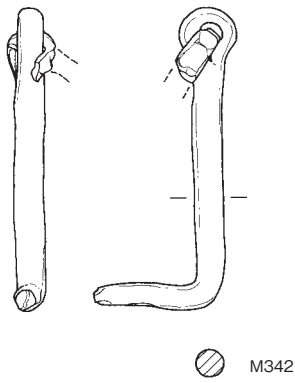
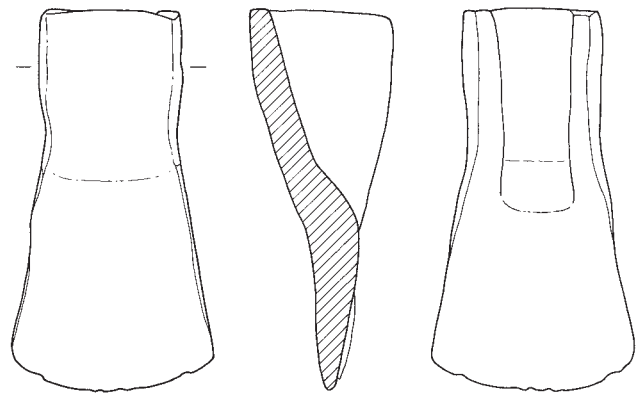
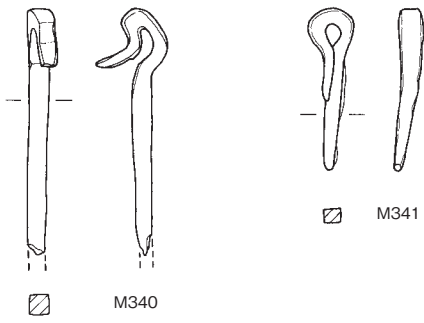
M338



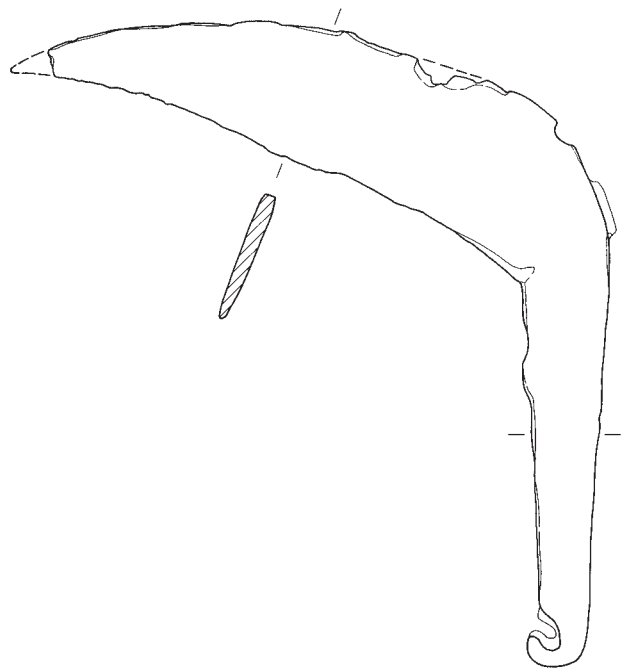
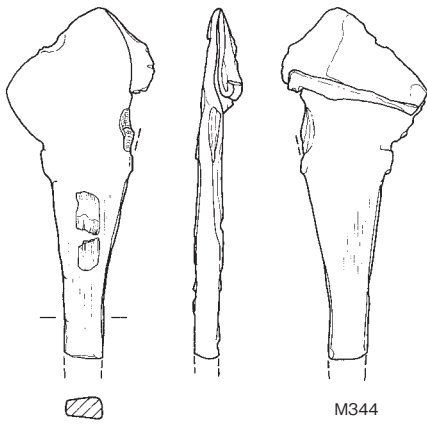
M339



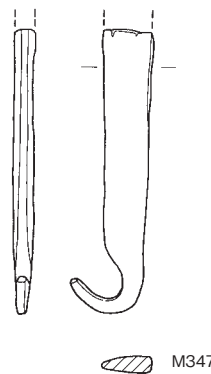
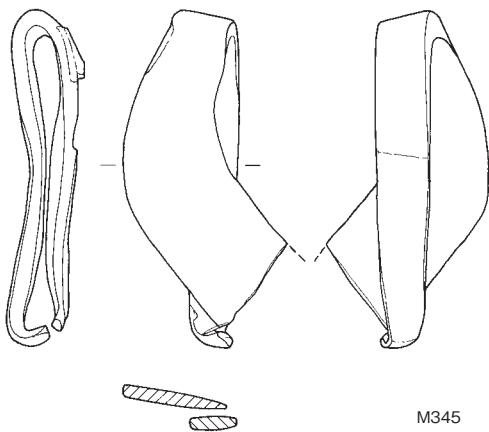
中世の鉄製品15 (鉄釘)



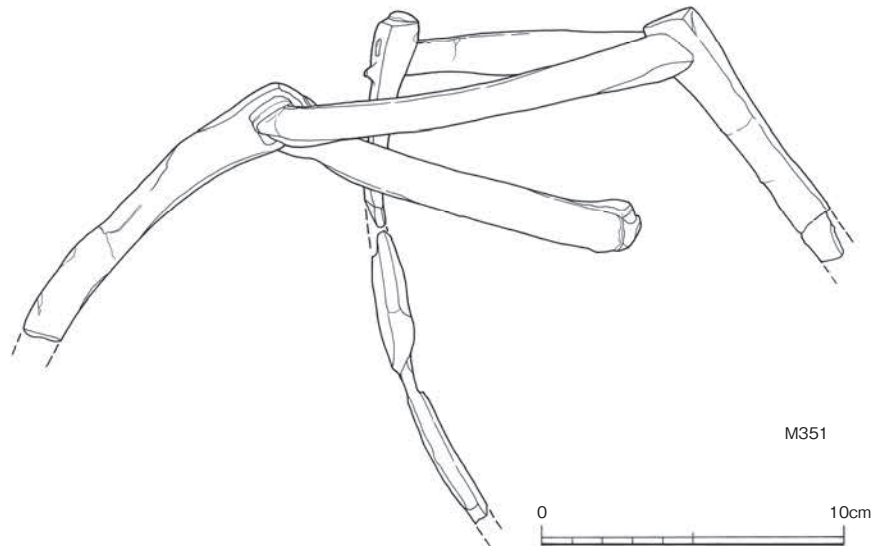
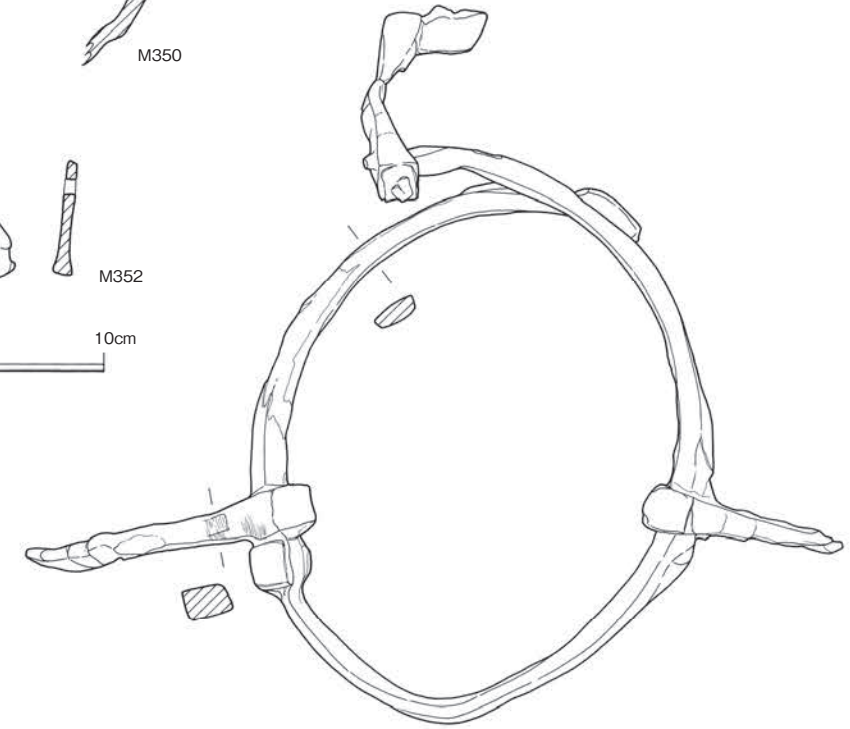
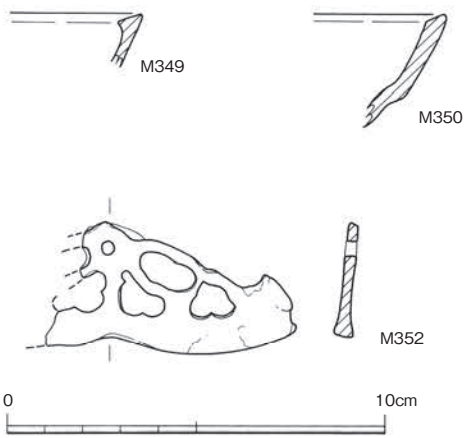
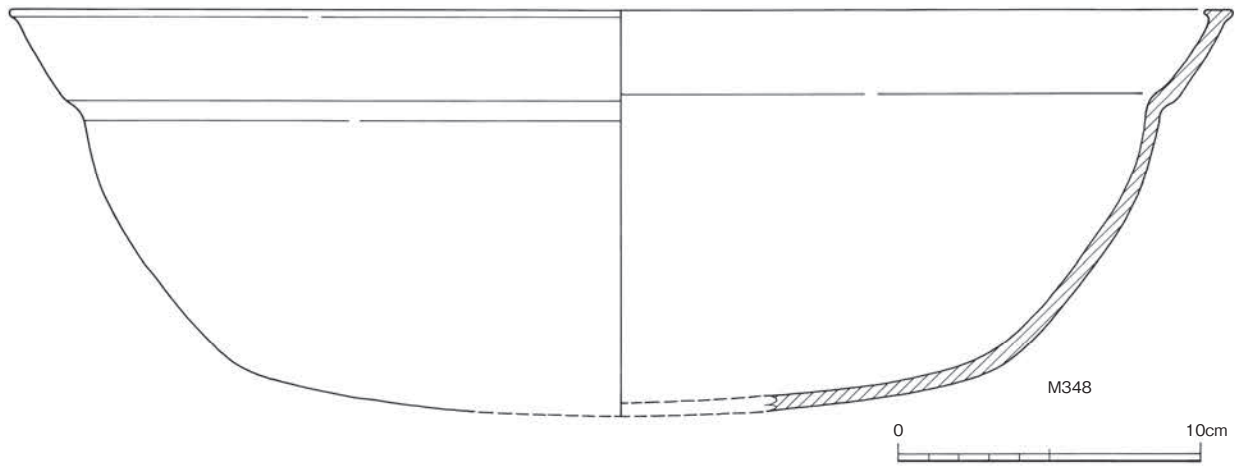
M343



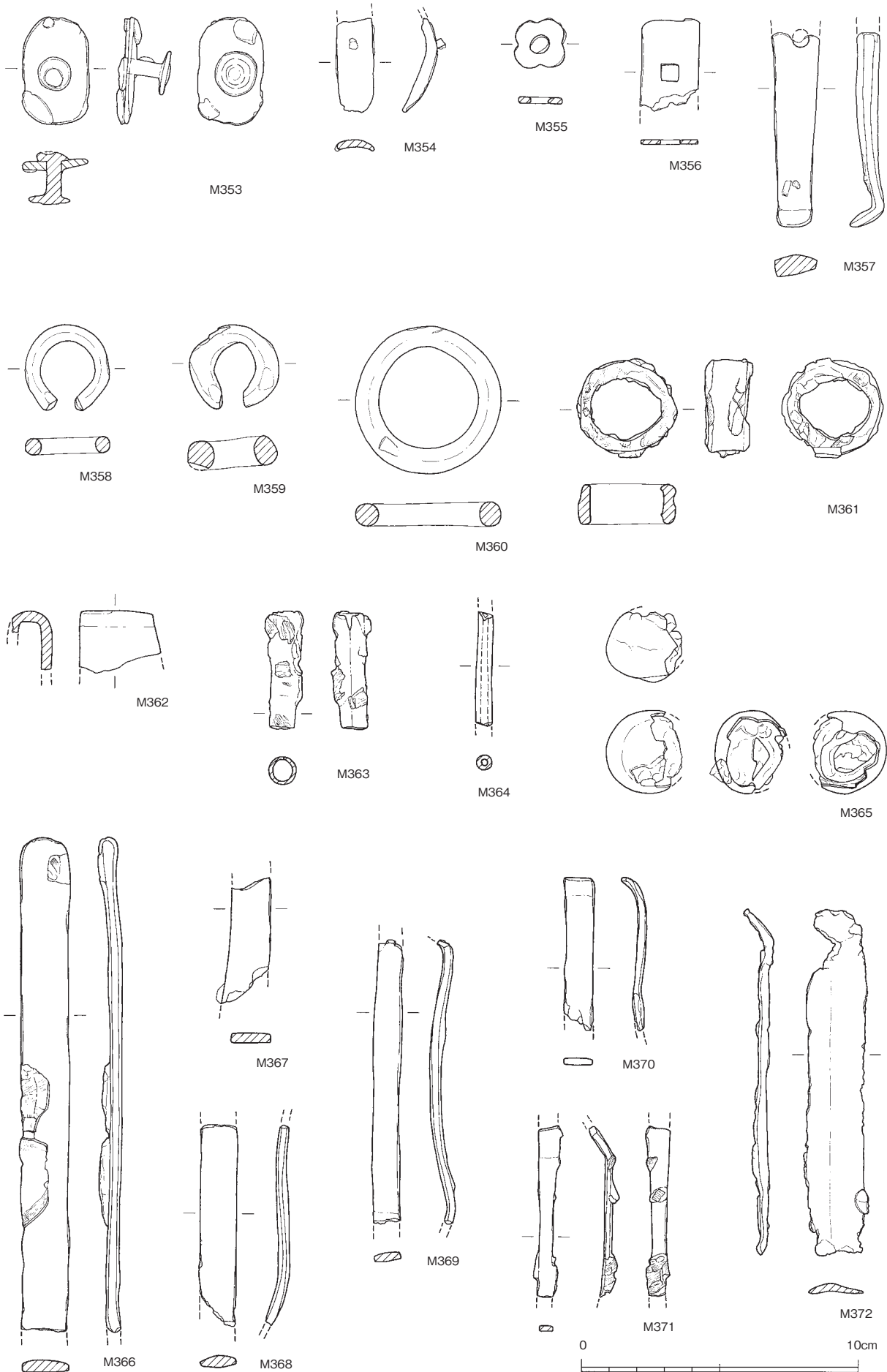
M346



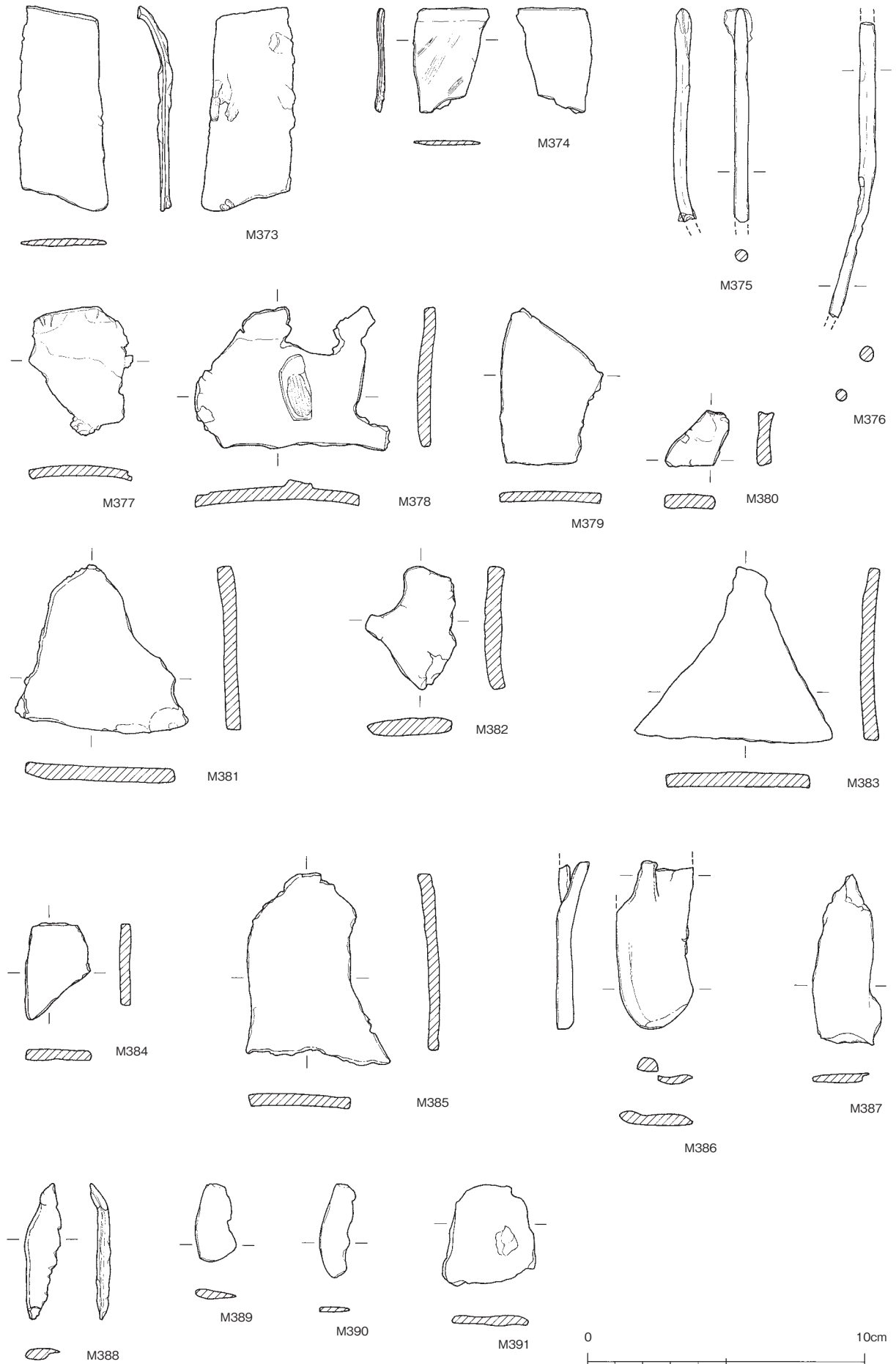
中世の鉄製品16 (建築用具・農耕具)



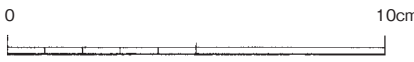
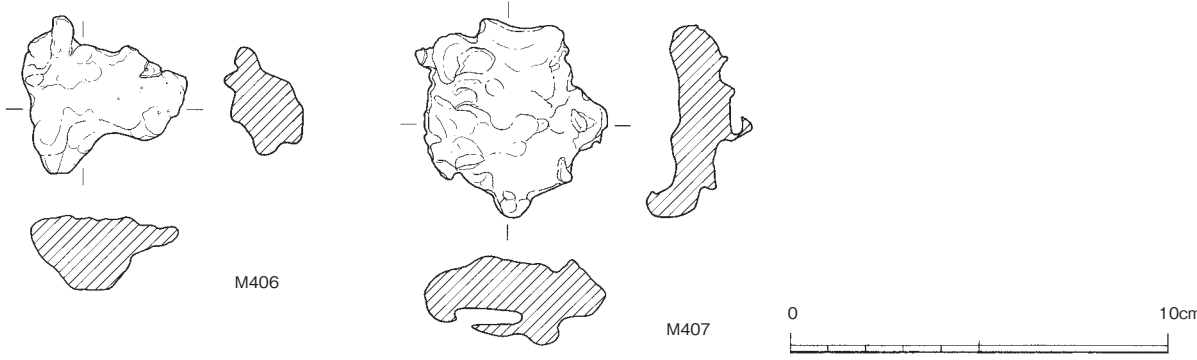
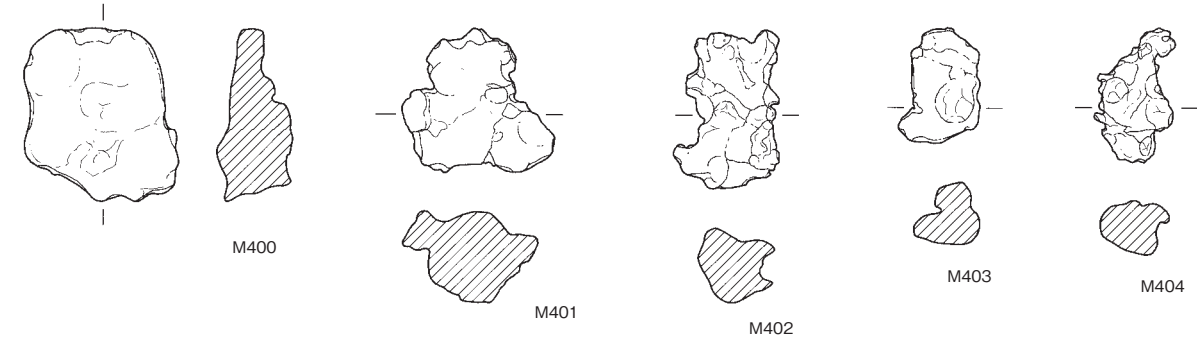
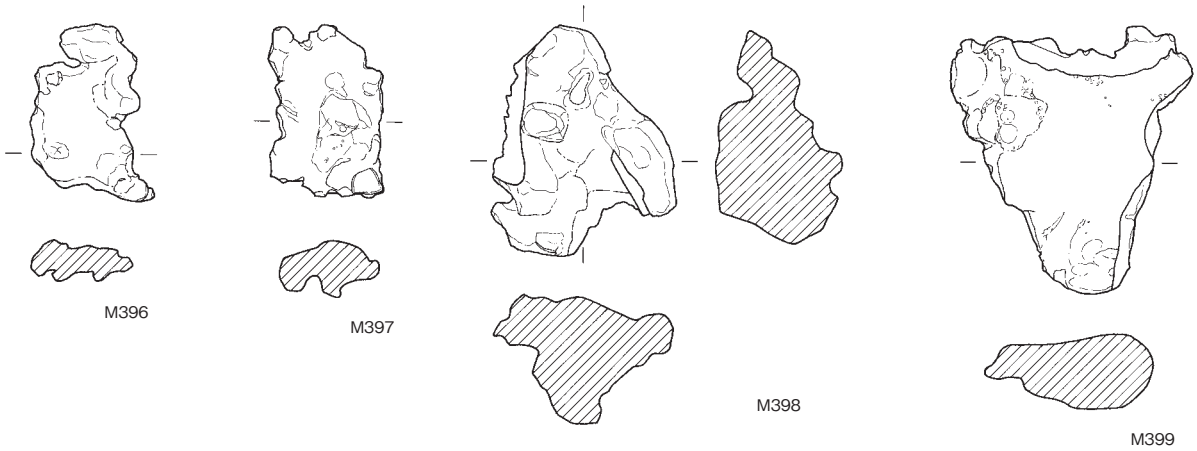
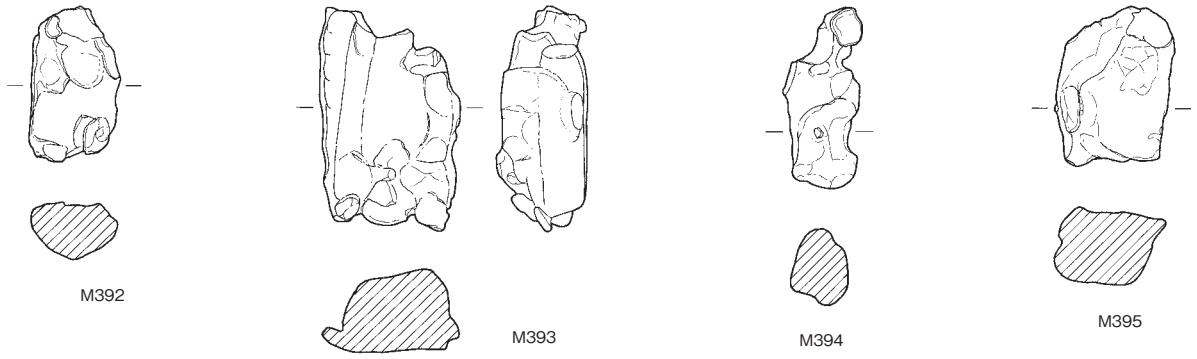
中世の鉄製品17 (生活用具)



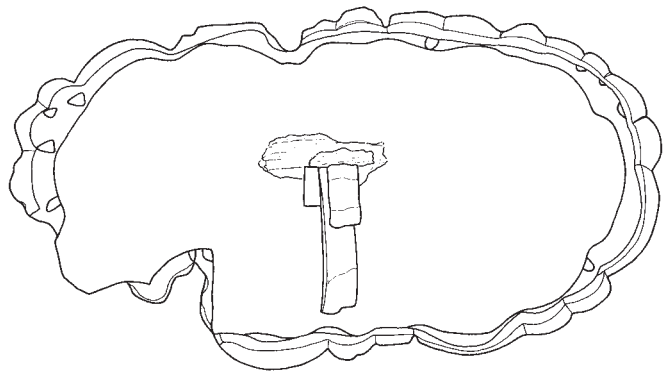
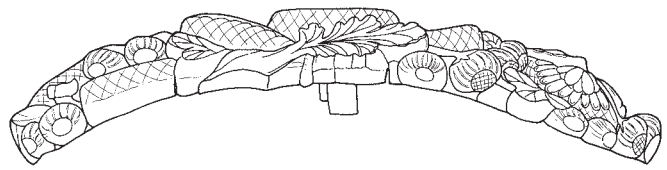
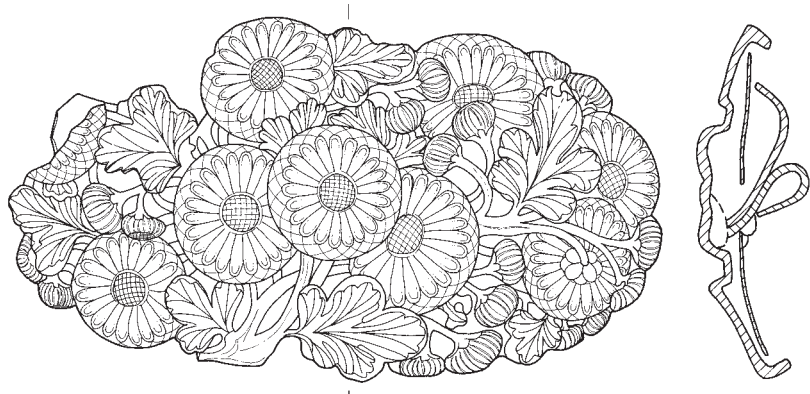
中世の鉄製品18 (その他の製品)



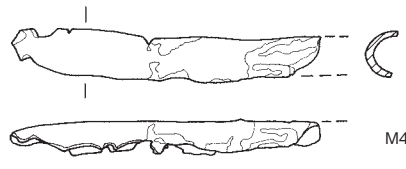
中世の鉄製品19（その他の製品）



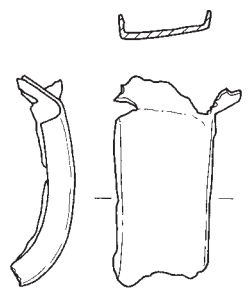
中世の鉄製品20（鍛冶関連遺物）



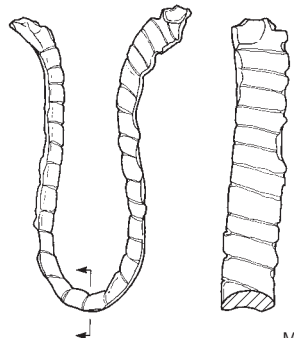
M408



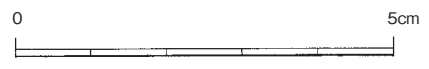
M409



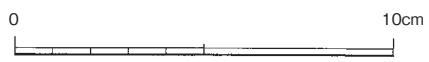
M410



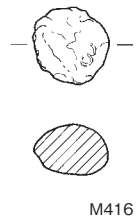
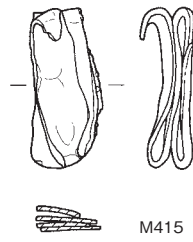
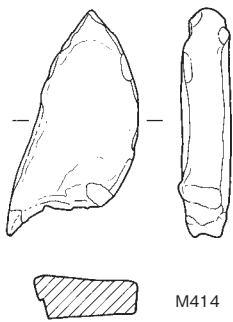
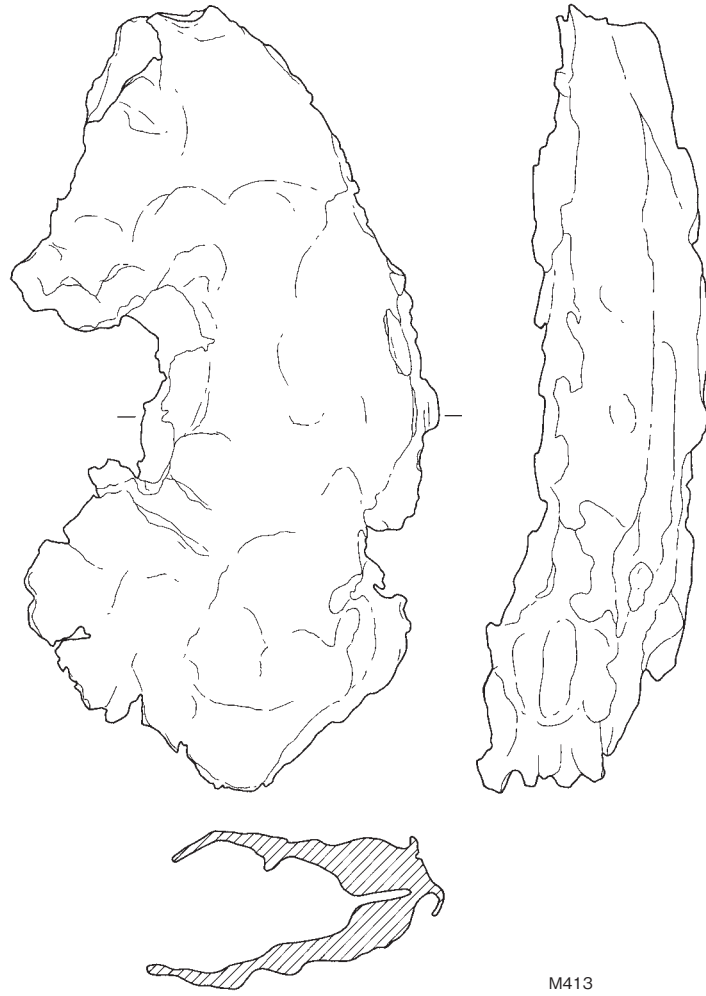
M411



M412



中世の銅製品 1





M418



M419



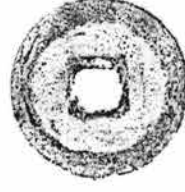
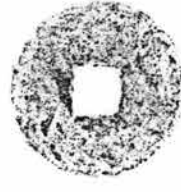
M420



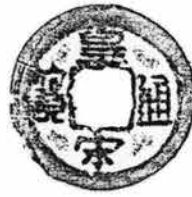
M421



M422



M423



M424



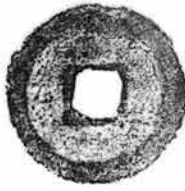
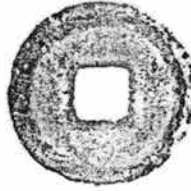
M425



M426



M427



M428



M429



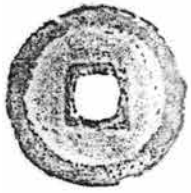
M430



M431



M432



M433



M434



M435

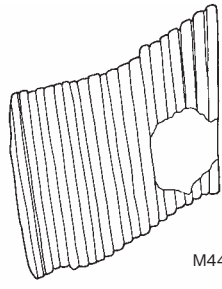
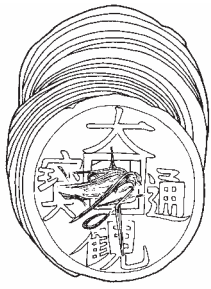


M436

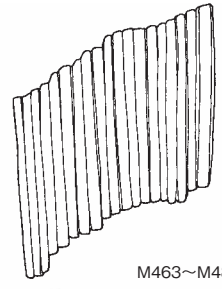
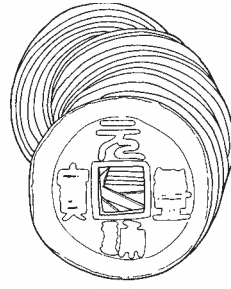


M440





M442~M462



M463~M481



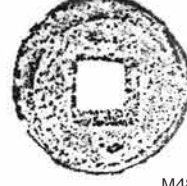
M442



M462



M463



M481



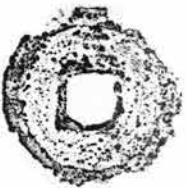
M482~M490



M492



M482



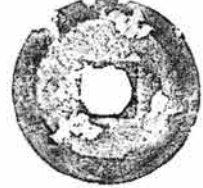
M490



M491



M493



M494



M496



M497



M498



M499



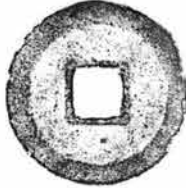
M501



M502



M503



M506



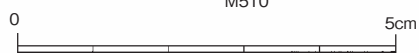
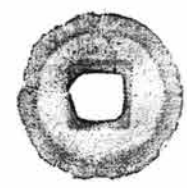
M507

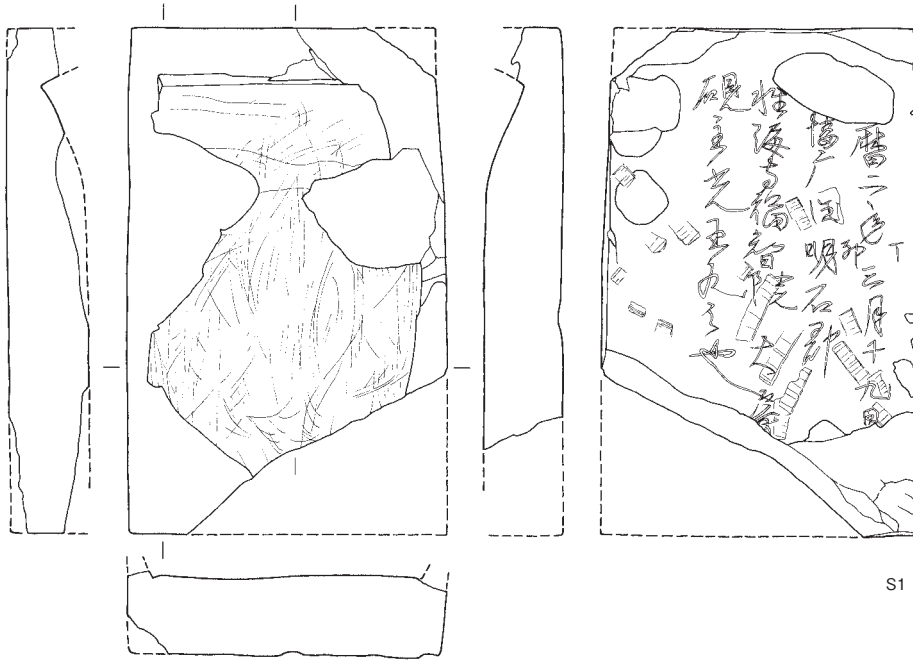


M511



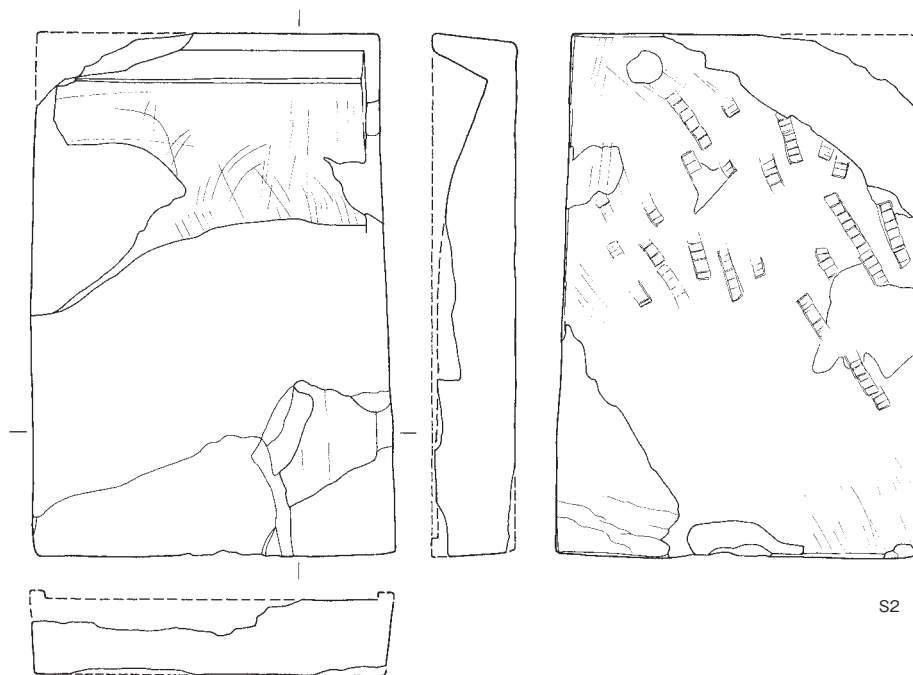
M510



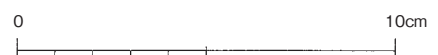


S1

(嘉)
 □ 曆二年丁卯三月十九日 □
 (磨)
 □ 播广國明石郡
 性海寺福智院大 □ □ □
 硯主光王九郎也

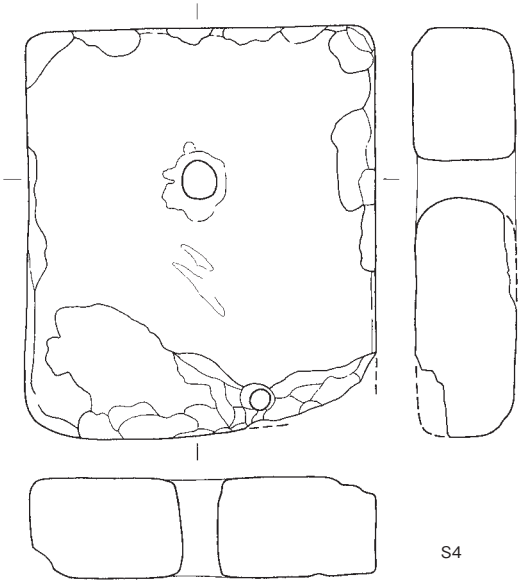


S2

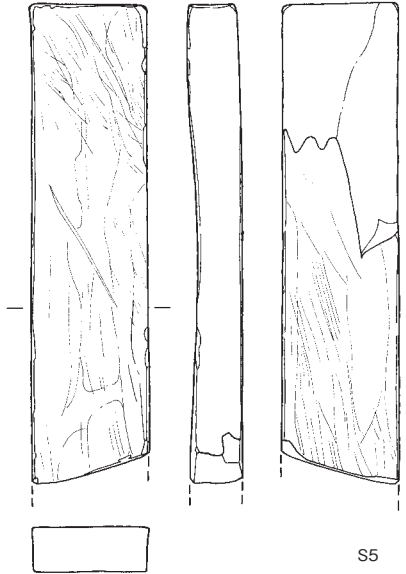




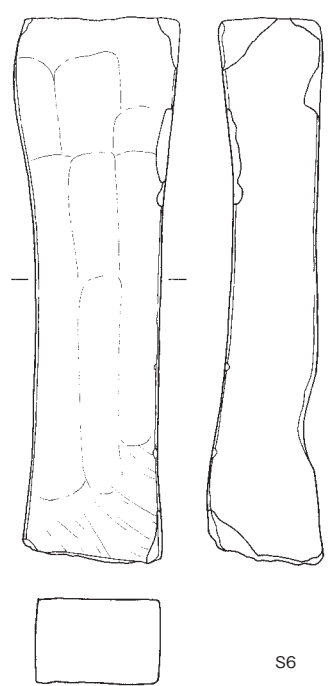
S3



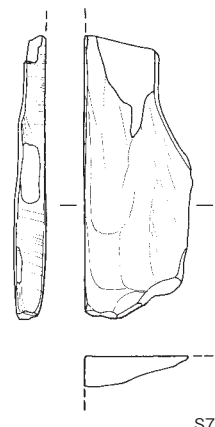
S4



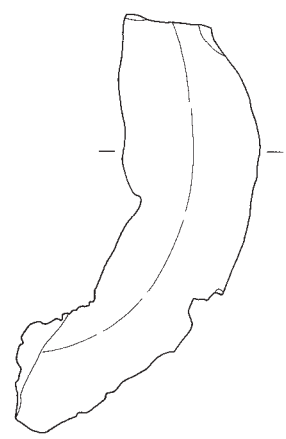
S5



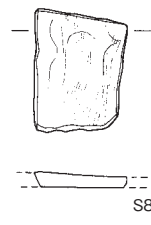
S6



S7

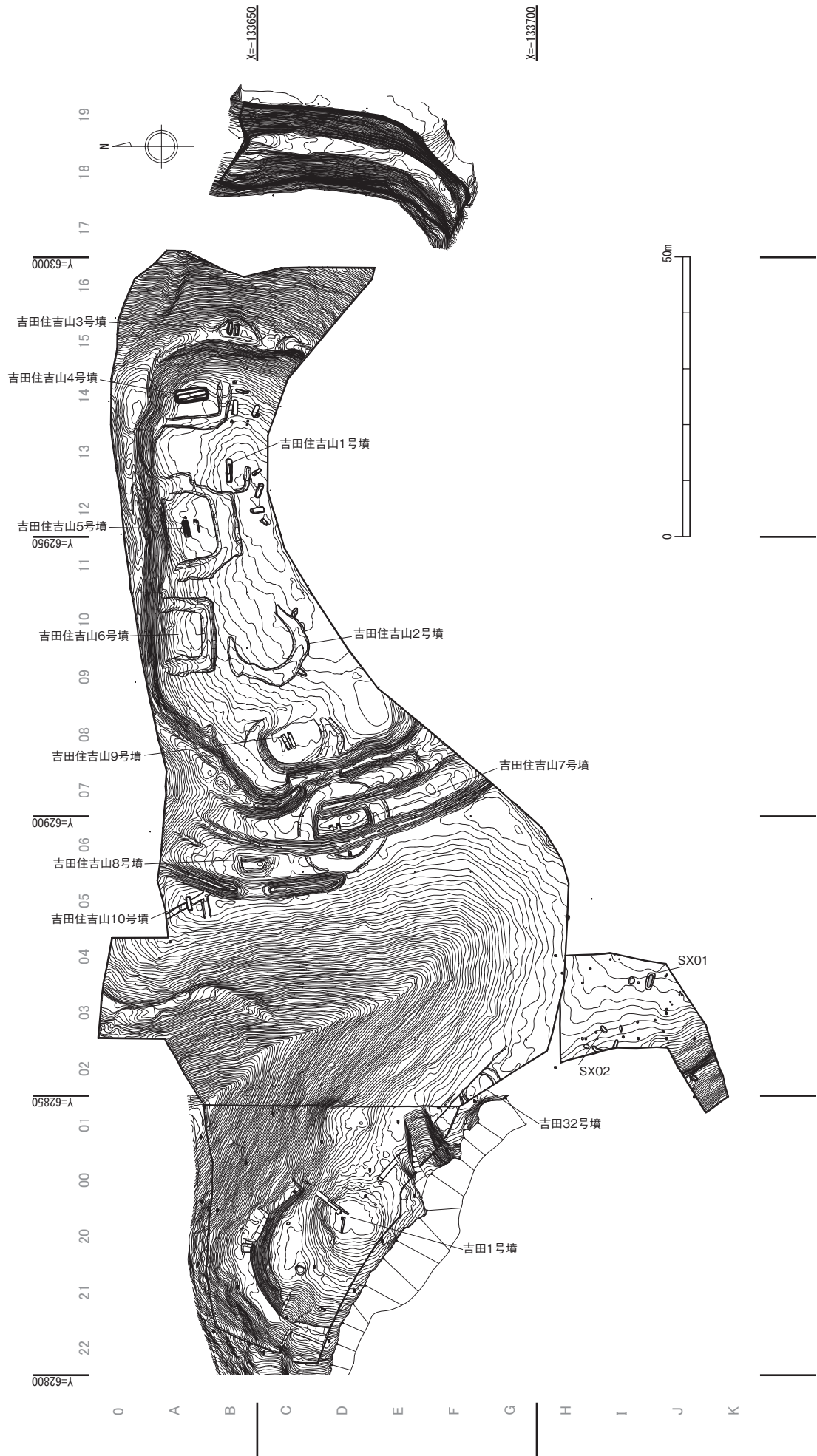


S9



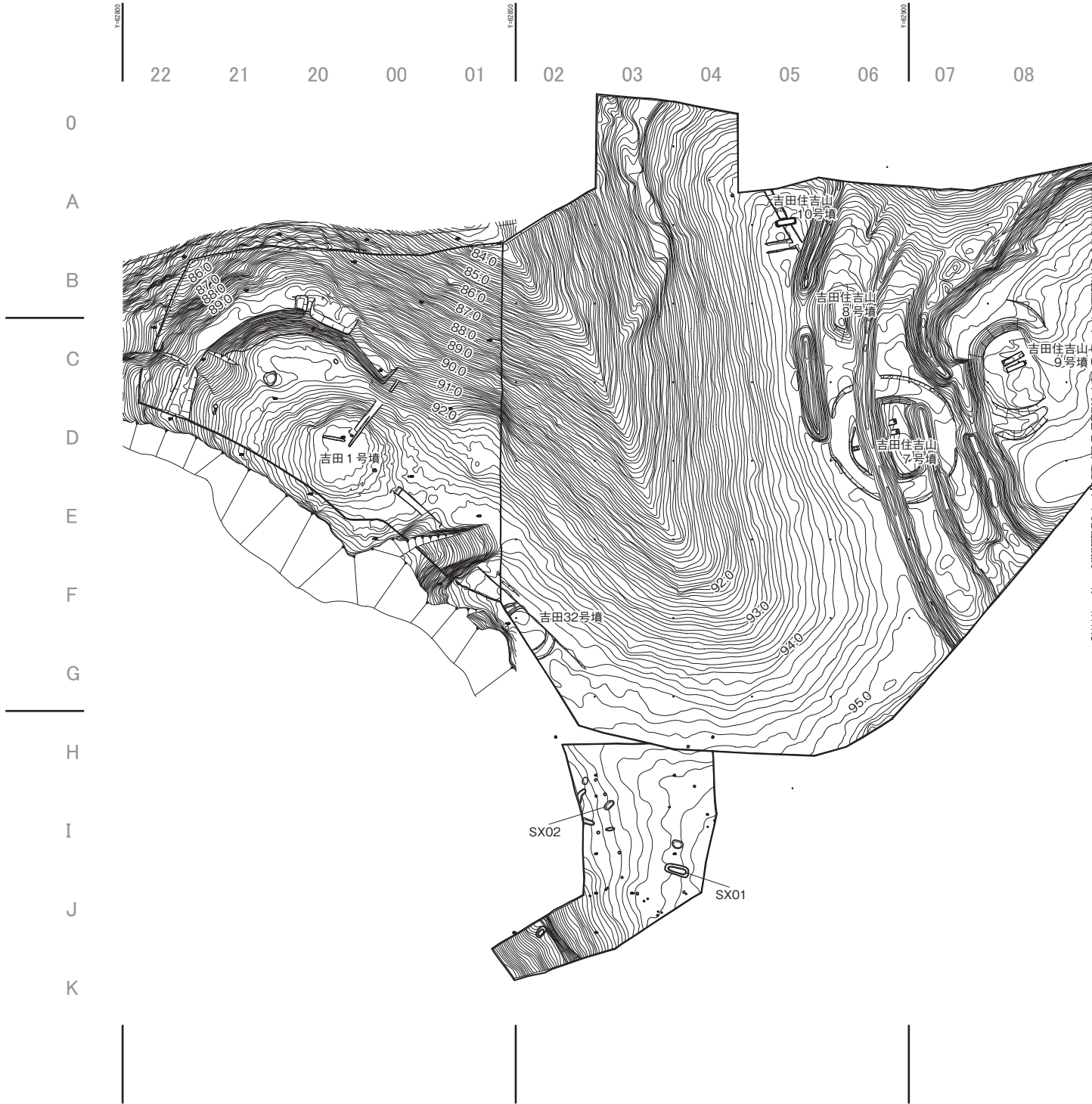
S8



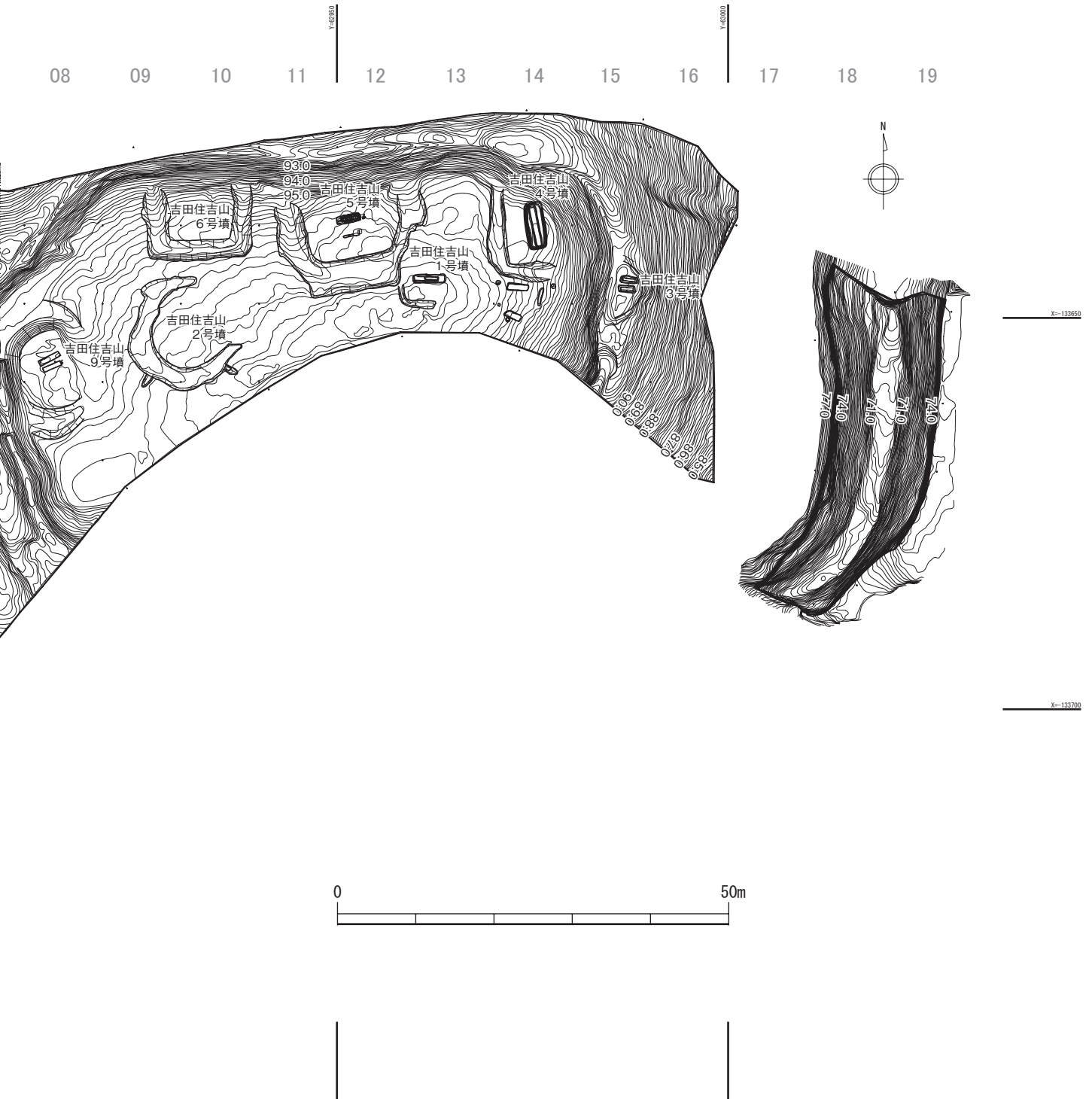


吉田住吉山古墳群
吉田古墳群

全体図

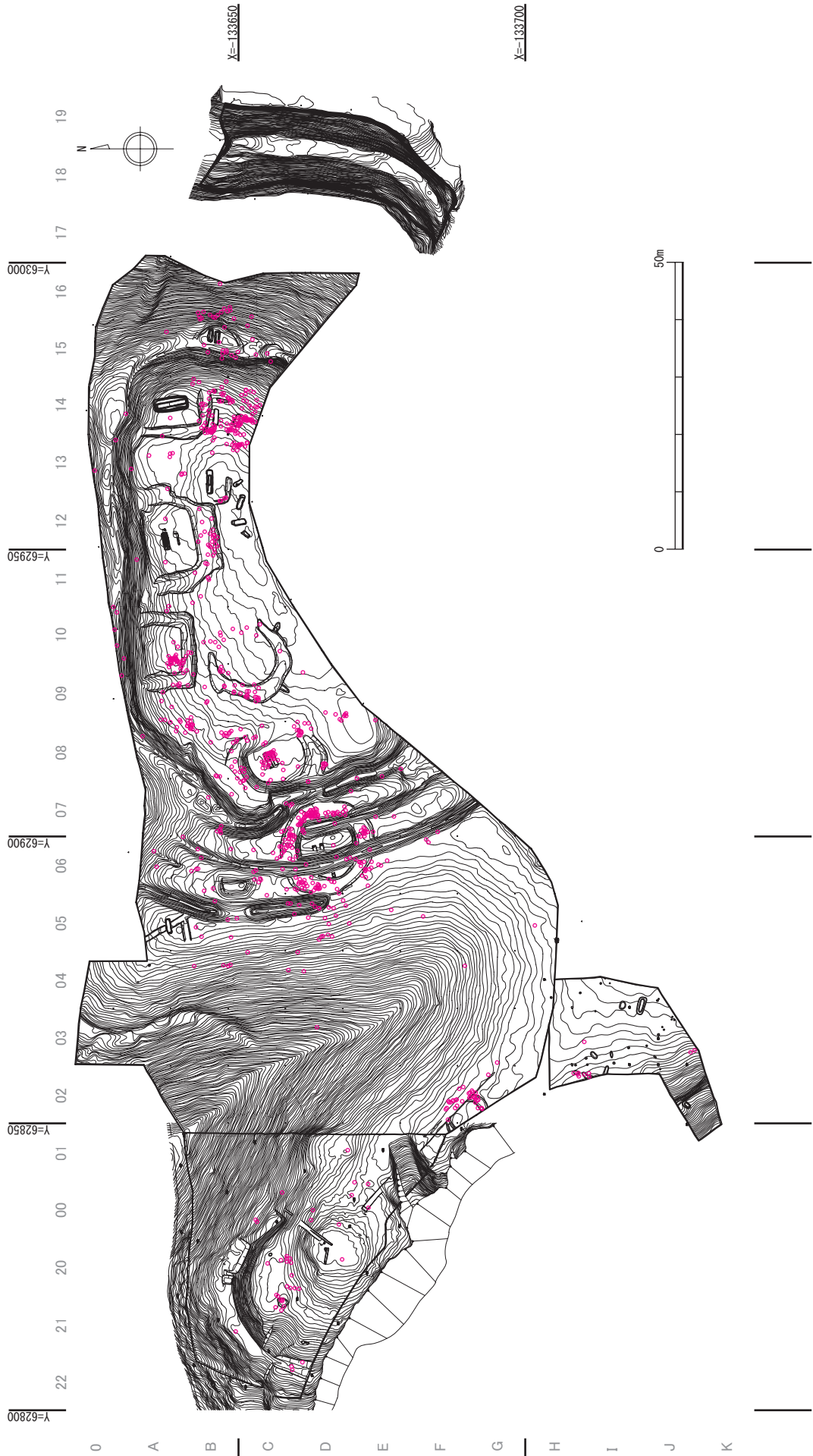


全体図（西半）



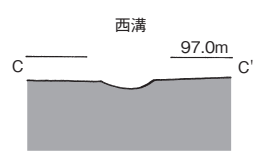
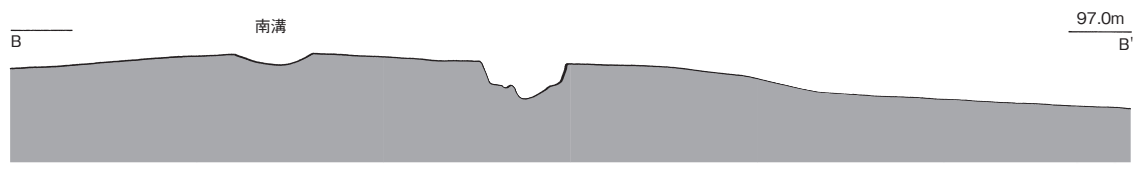
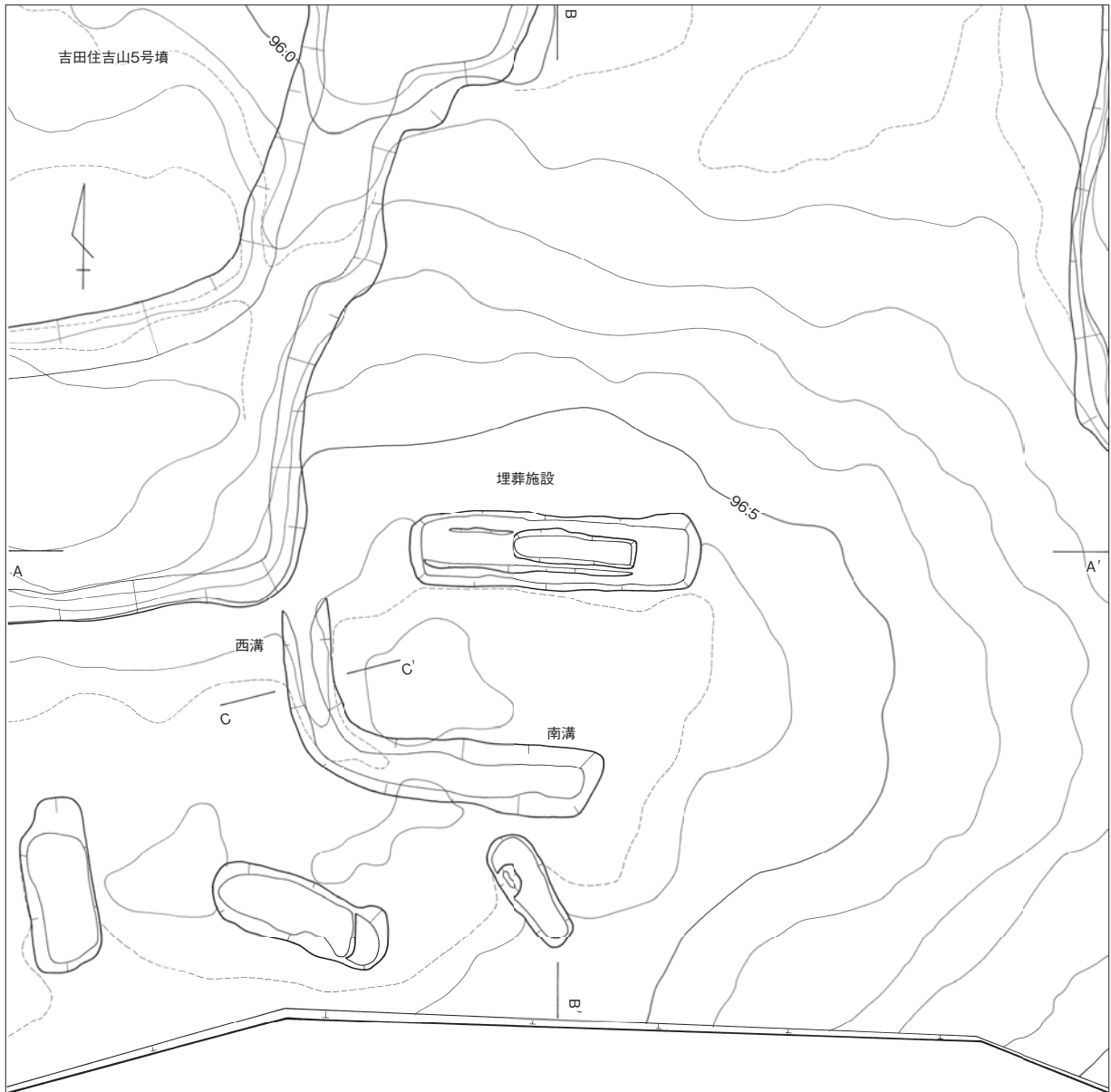
吉田住吉山古墳群
吉田古墳群

全体図（東半）



古墳時代・弥生時代出土土器分布

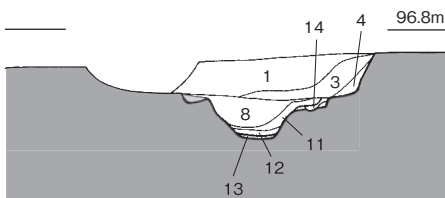
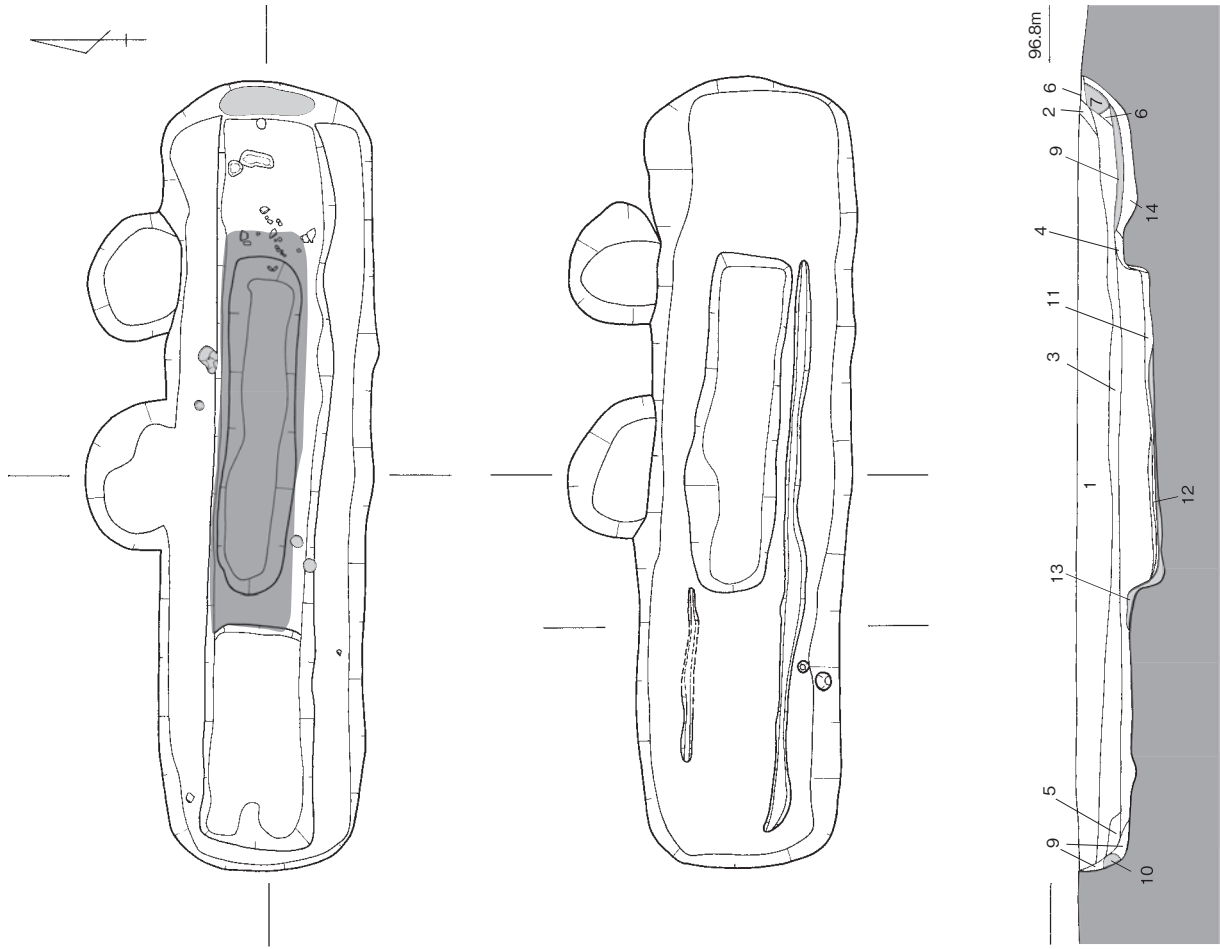
吉田住吉山古墳群
吉田古墳群



墳丘

図版131 吉田住吉山1号墳

吉田住吉山古墳群



- | | |
|---------|--------------------------|
| 1. 明褐色 | 極細砂 |
| 2. 明褐色 | シルト質極細砂(褐灰の粘土を含む) |
| 3. 明褐色 | シルト質極細砂(しまり悪い) |
| 4. 明黄褐色 | シルト質極細砂 |
| 5. 黄褐色 | シルト質極細砂 |
| 6. 黄褐色 | 極細砂(粗砂を含む) |
| 7. 灰白色 | シルト質極細砂(粘土ブロックを含む) |
| 8. 明黄褐色 | シルト質極細砂(粗砂を少量含む、赤色顔料を含む) |
| 9. 黄褐色 | 極細砂(粗砂を含む) |
| 10. 灰白色 | シルト質極細砂(粘土ブロックを含む) |
| 11. 赤色 | シルト質極細砂(赤色顔料を多量に含む) |
| 12. 赤褐色 | シルト質極細砂(赤色顔料を含む) |
| 13. 浅黄色 | シルト質極細砂(粗砂・上面に赤色顔料を含む) |
| 14. 黄褐色 | シルト質極細砂(小礫を含む) |

0 2m

埋葬施設

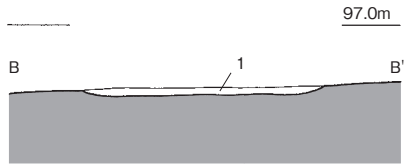


墳丘

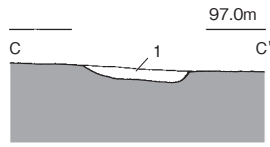
図版133 吉田住吉山2号墳



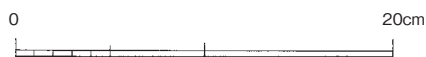
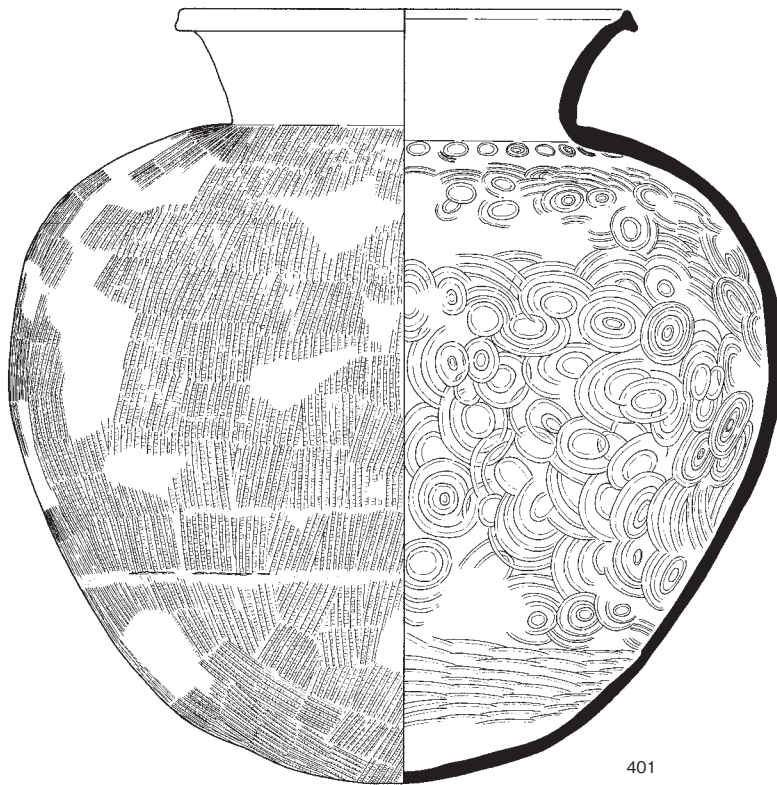
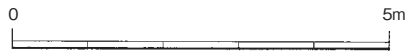
- 1. にぶい黄褐色 極細砂
- 2. にぶい黄褐色 極細砂



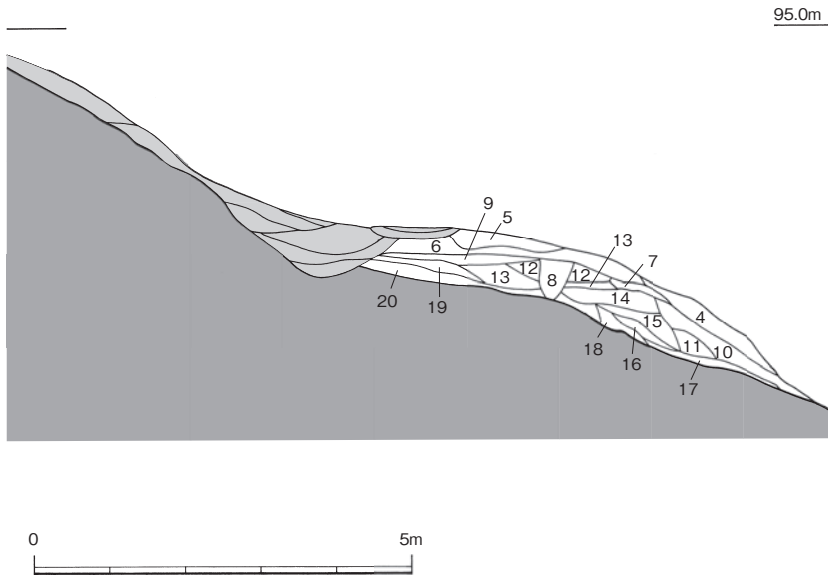
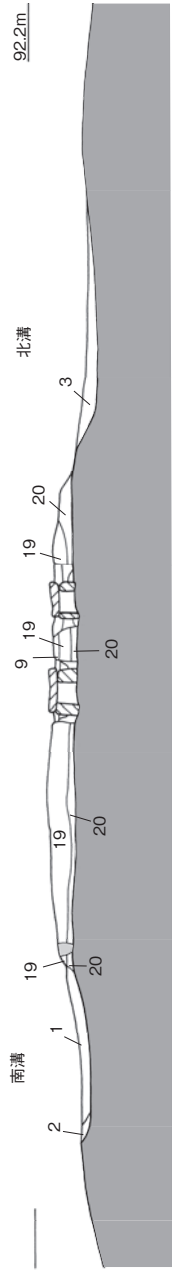
- 1. 黄褐色 シルト質極細砂



- 1. 黄褐色 シルト質極細砂



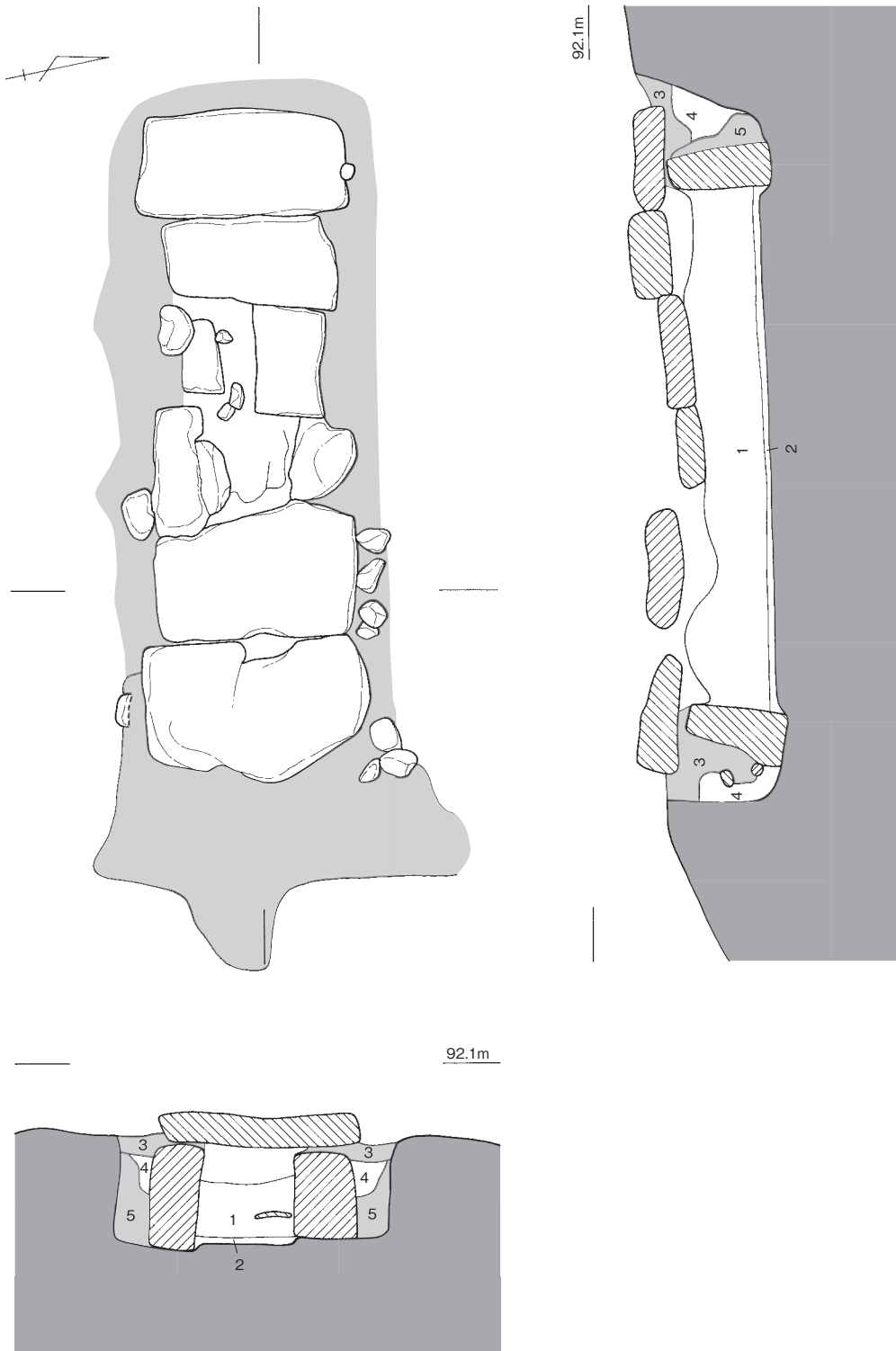
周溝土層断面・土器



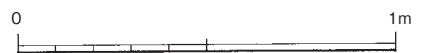
中世以降の遺構・盛土・包含層

- | | |
|-----------|---------------------------------|
| 1. 黄褐色 | 極細砂(粗砂・中礫を含む) |
| 2. 明褐色 | 極細砂(小礫を含む) |
| 3. 明黄褐色 | 粘土(小礫をわずかに含む) |
| 4. 黄褐色 | 極細砂(小・中礫を含む) |
| 5. 褐色 | 極細砂(小・中礫を多量に含む)墳丘盛土 |
| 6. 黄褐色 | 極細砂(粗砂・中礫を含む、基盤層の掘削土を多量に含む)墳丘盛土 |
| 7. にこい黄褐色 | 極細砂(小・中礫を多量に含む)墳丘盛土 |
| 8. 褐色 | 小礫・極細砂(炭をわずかに含む) |
| 9. 橙色 | 極細砂(小礫をわずかに含む)盛土 |
| 10. 黄褐色 | 極細砂 |
| 11. 明褐色 | 極細砂(炭をわずかに含む) |
| 12. 明褐色 | 小礫・極細砂 |
| 13. 褐色 | 極細砂(粗砂・細砂(小礫をわずかに含む)) |
| 14. 明褐色 | 極細砂(中礫を含む) |
| 15. 黄褐色 | 極細砂・細砂 |
| 16. 明褐色 | 極細砂 |
| 17. 明褐色 | 粗砂 |
| 18. 明褐色 | 小礫・極細砂 |
| 19. 橙色 | 極細砂(炭をわずかに含む)旧表土 |
| 20. 橙色 | 小礫・極細砂 |

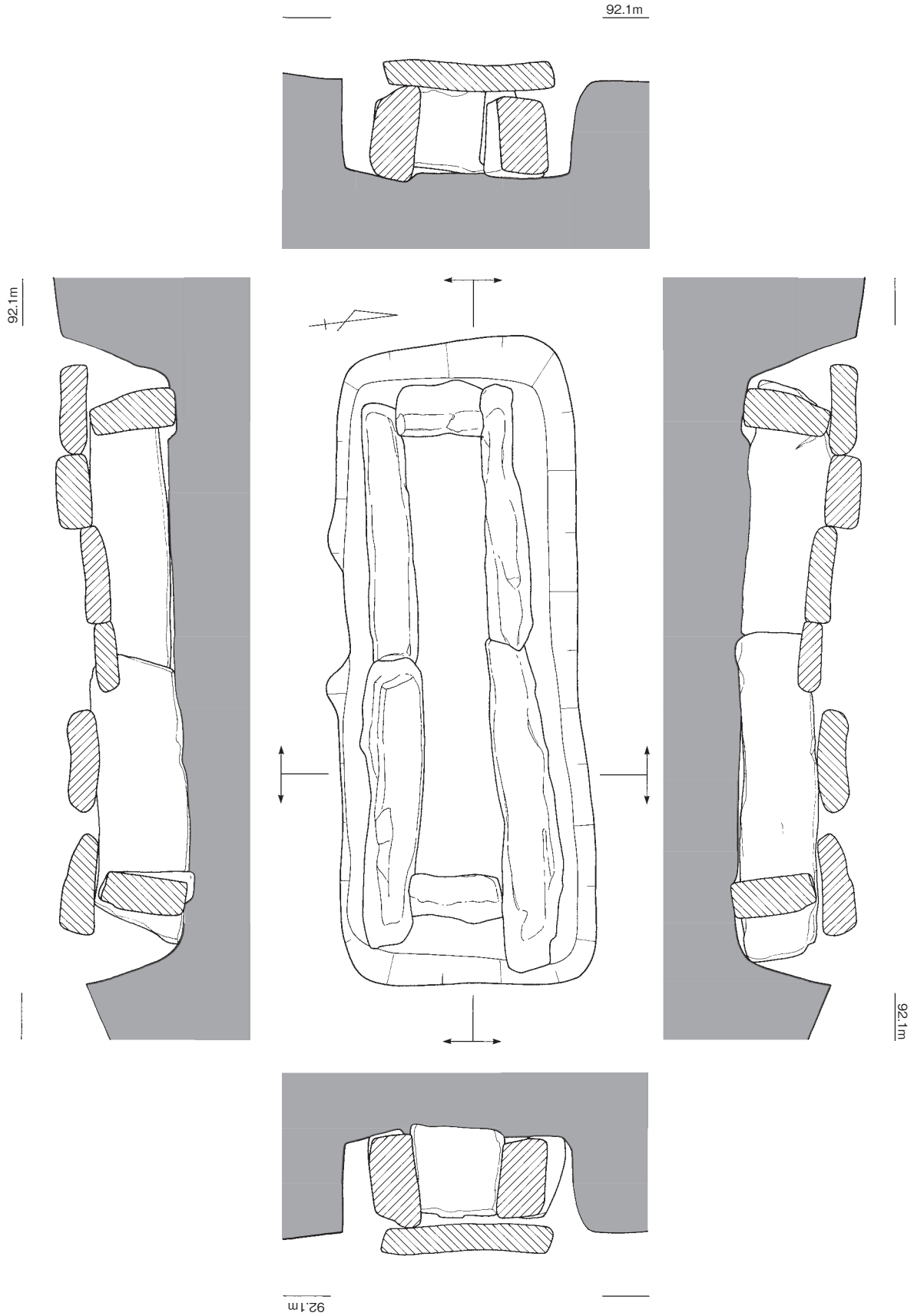
墳丘・周溝土層断面



- 1. 黄褐色 シルト質極細砂
- 2. 赤褐色 シルト質極細砂(赤色顔料を多量に含む)
- 3. にぶい黄橙色 粘土(小礫をわずかに含む)
- 4. 明褐色 粗砂~極細砂
- 5. 明黄褐色 粘土(小礫をわずかに含む)

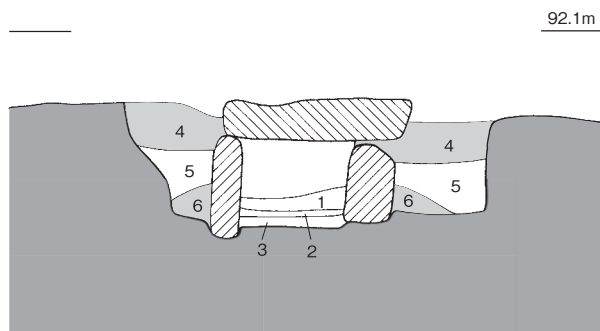
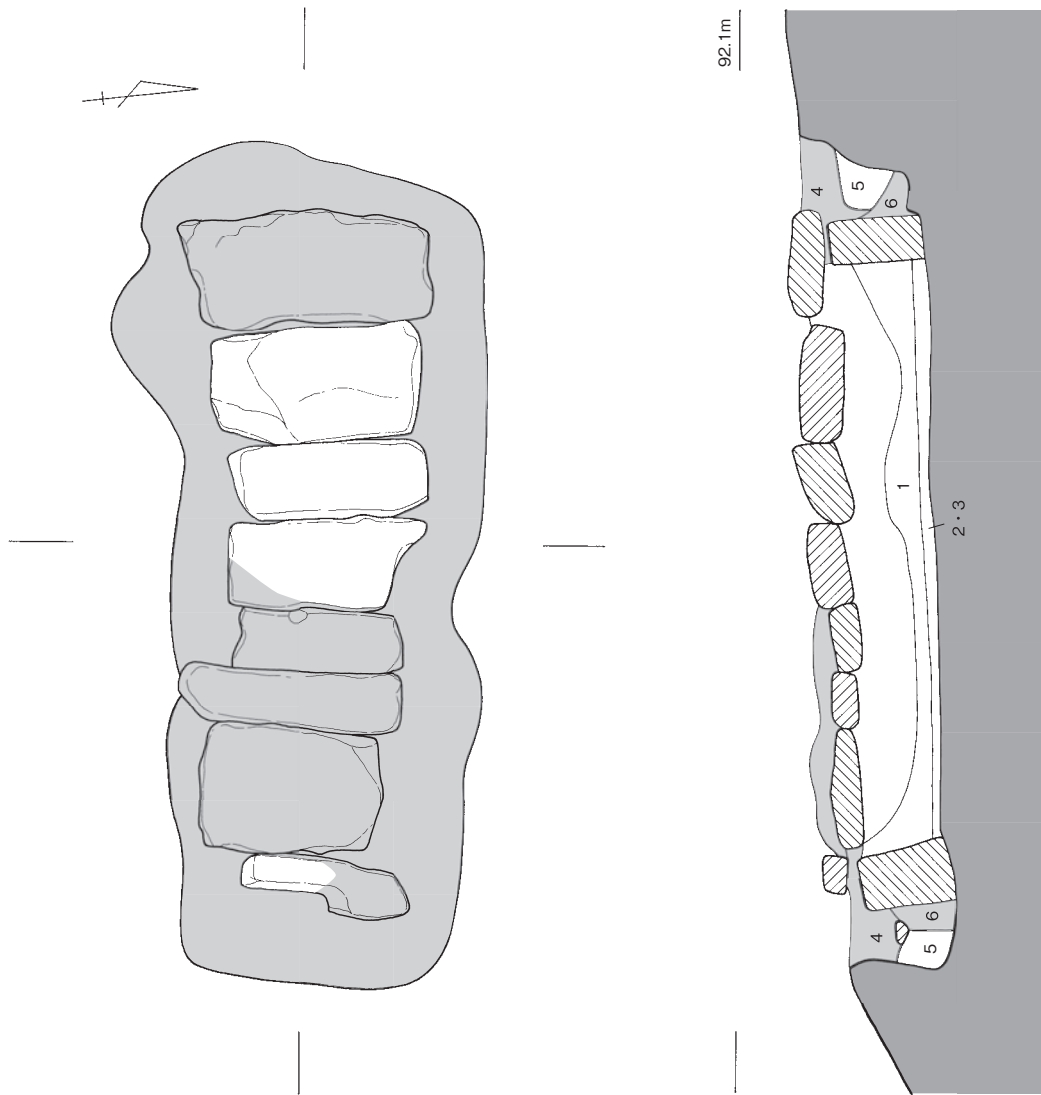


南石棺 蓋石検出状況



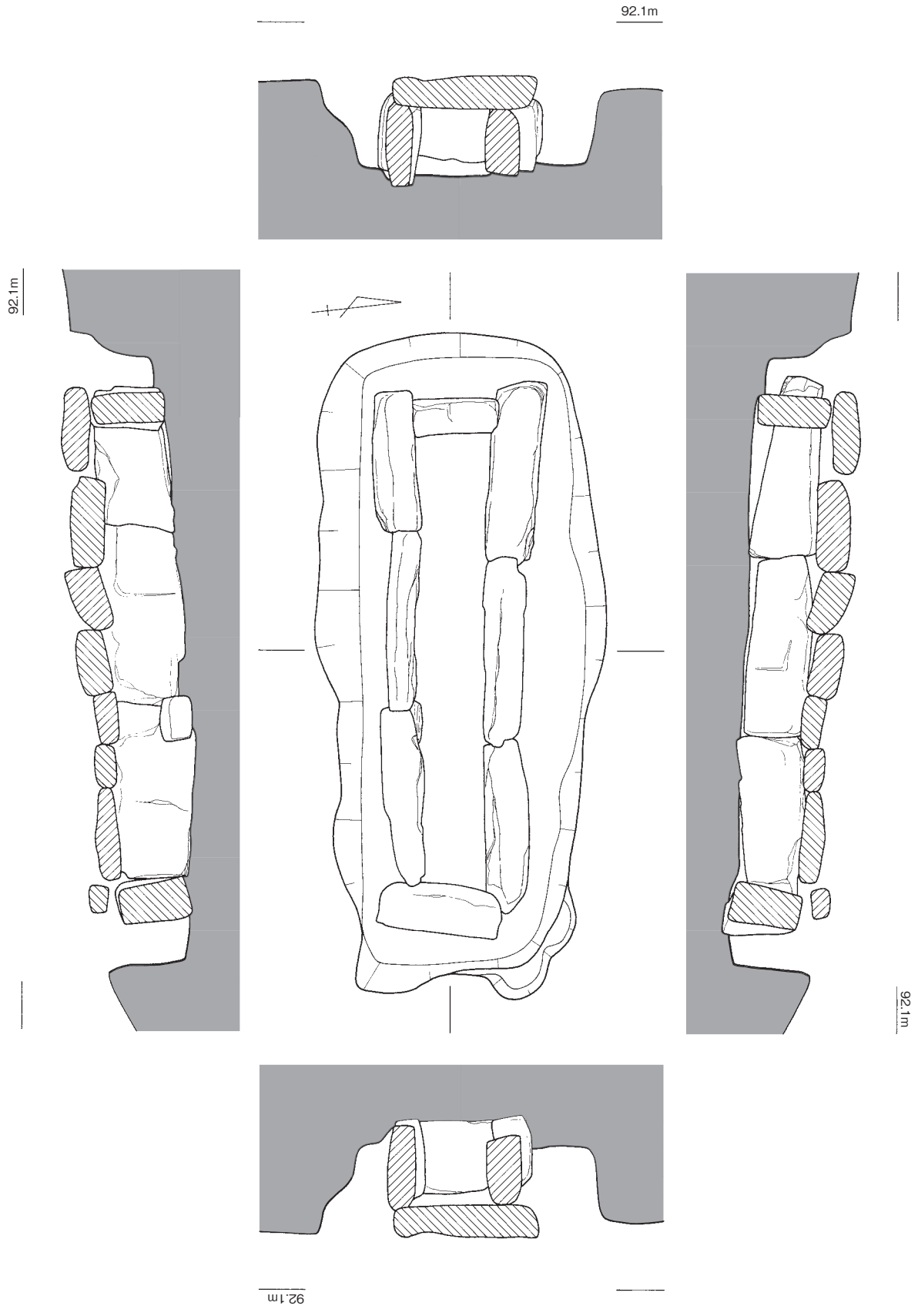
南石棺 埋葬施設

0 1m



- 1. にぶい黄褐色 シルト質極細砂
- 2. 赤褐色 シルト質極細砂(赤色顔料を少量含む)
- 3. 赤褐色 シルト質極細砂(赤色顔料を多量に含む)
- 4. にぶい黄橙色 粘土(小礫をわずかに含む)
- 5. 明褐色 粗砂～極細砂
- 6. 明黄褐色 粘土(小礫をわずかに含む)

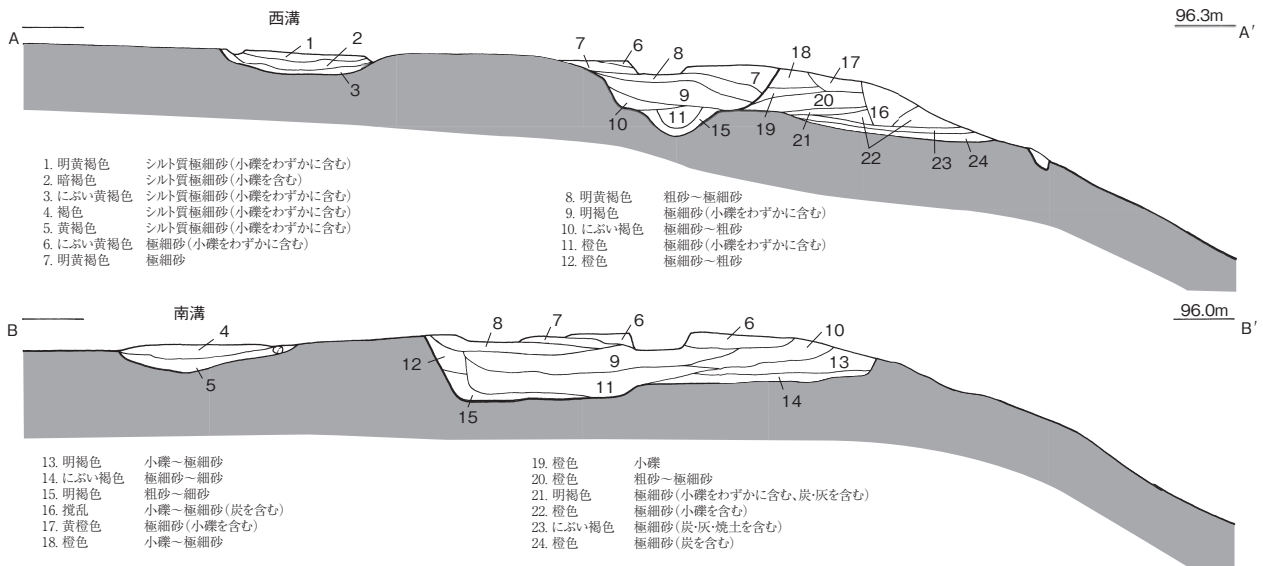
0 1m



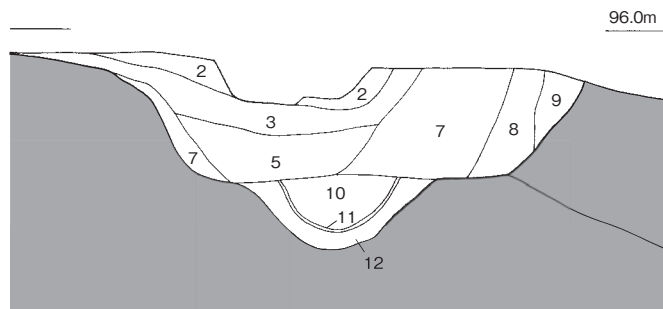
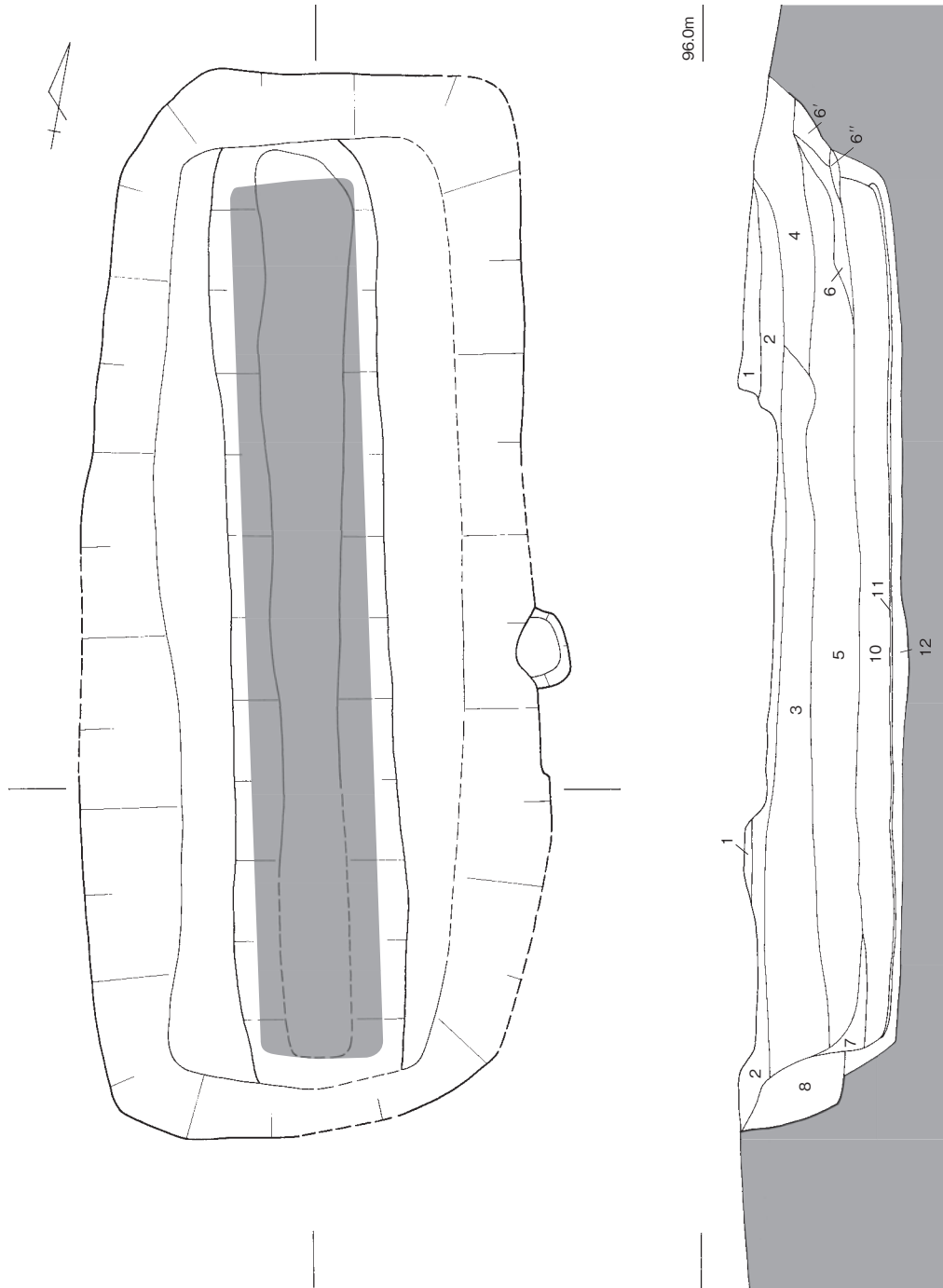
北石棺 埋葬施設

図版139 吉田住吉山4号墳

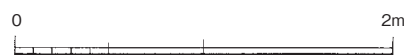
吉田住吉山古墳群



墳丘

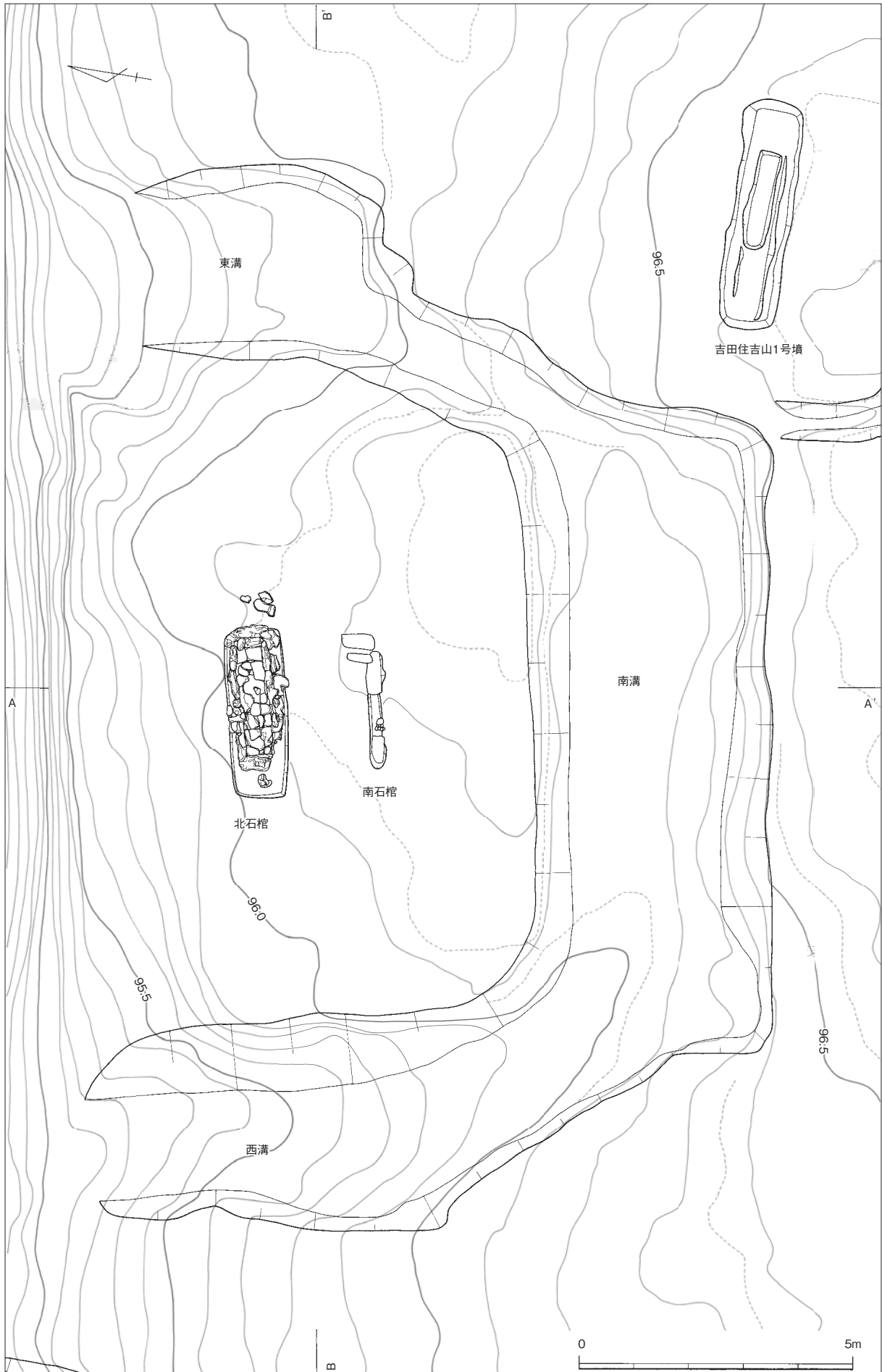


- | | |
|----------|----------------------------|
| 1. 明黄褐色 | 極細砂 |
| 2. 明黄褐色 | 極細砂～粗砂 |
| 3. 明褐色 | 極細砂(小礫をわずかに含む) |
| 4. 明褐色 | 極細砂～小礫 |
| 5. 橙色 | 極細砂(小礫をわずかに含む) |
| 6. にぶい褐色 | 極細砂～細砂 |
| 7. にぶい褐色 | 極細砂～粗砂 |
| 8. 橙色 | 極細砂～粗砂 |
| 9. にぶい褐色 | 極細砂(小礫をわずかに含む) |
| 10. 橙色 | 極細砂(小礫を含む) |
| 11. 赤褐色 | シルト質極細砂(赤色顔料を多量に含む、底部ほど濃い) |
| 12. 明褐色 | シルト質極細砂(極細砂～小礫混じる) |



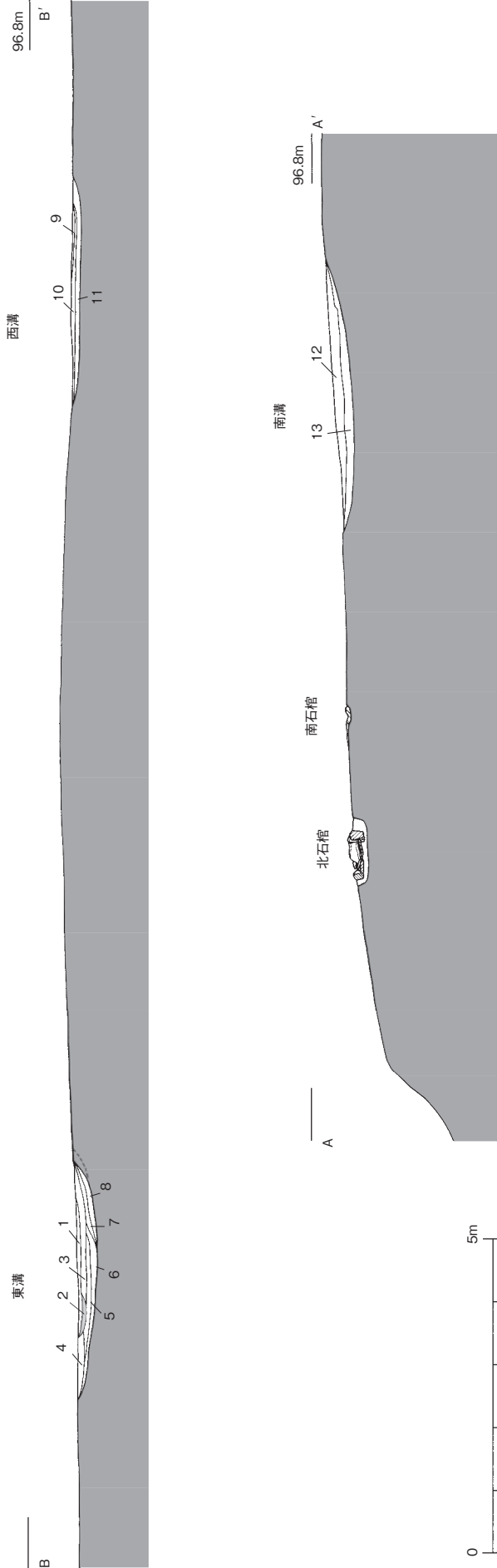
埋葬施設

図版141 吉田住吉山5号墳



吉田住吉山古墳群

墳丘

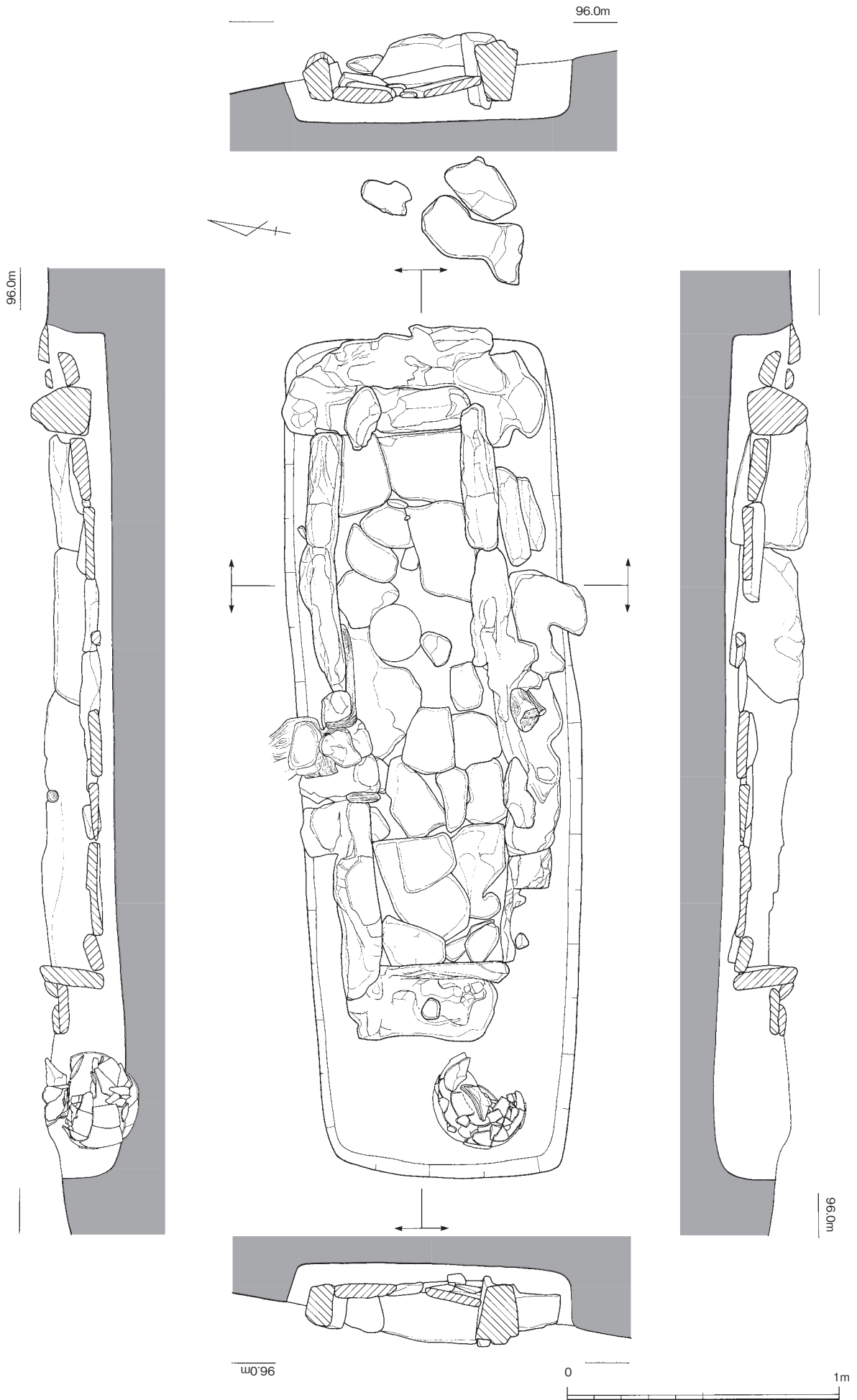


土層断面

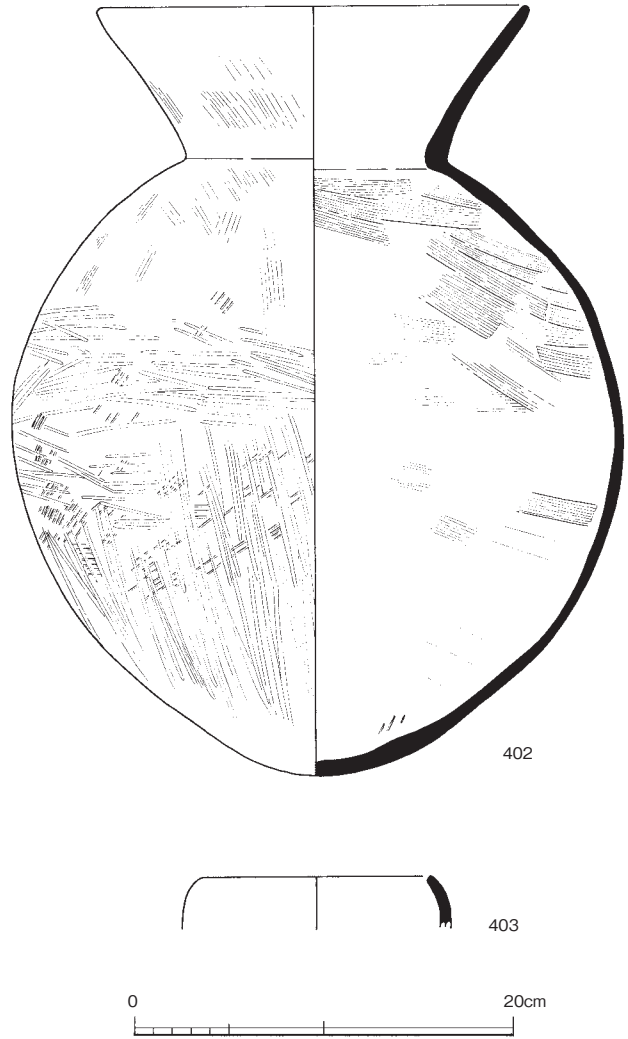
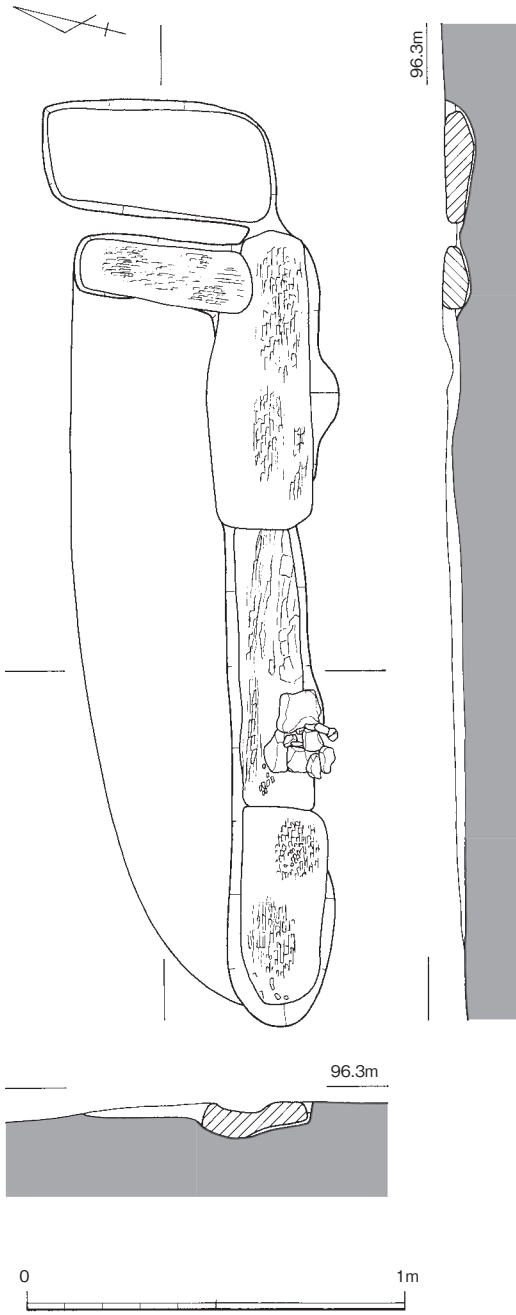
- | | |
|------------|-------------------------------|
| 1. 黄褐色 | シルト質極細砂(小礫・中礫を多量に含む) |
| 2. 焼土 | |
| 3. にぶい、黄色 | シルト質極細砂(小礫・中礫を含む) |
| 4. 明黄褐色 | シルト質極細砂(小礫を少量含む、炭を含む) |
| 5. 黄褐色 | シルト質極細砂(粗砂～小礫含む、焼土を少量含む) |
| 6. 黄褐色 | シルト質極細砂(小礫・中礫を少量含む) |
| 7. 黄褐色 | シルト質極細砂(小礫を含む) |
| 8. にぶい、黄色 | 極細砂～細砂(小礫を含む) |
| 9. 黄褐色 | 極細砂～細砂(小礫・中礫を多量に含む、炭を少量含む) |
| 10. 黄褐色 | 極細砂(粗砂を少量含む) |
| 11. 黄褐色 | シルト質極細砂(小礫を含む) |
| 12. にぶい、黄色 | 極細砂～細砂(小礫を含む、炭・焼土・中世土師器を多く含む) |
| 13. にぶい、黄色 | シルト質極細砂(小礫を含む) |

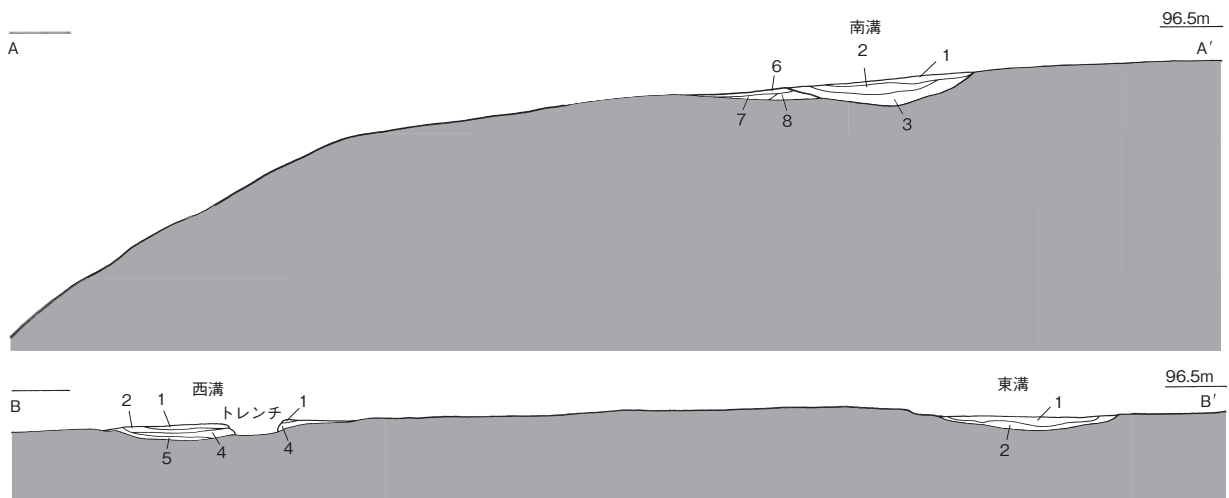
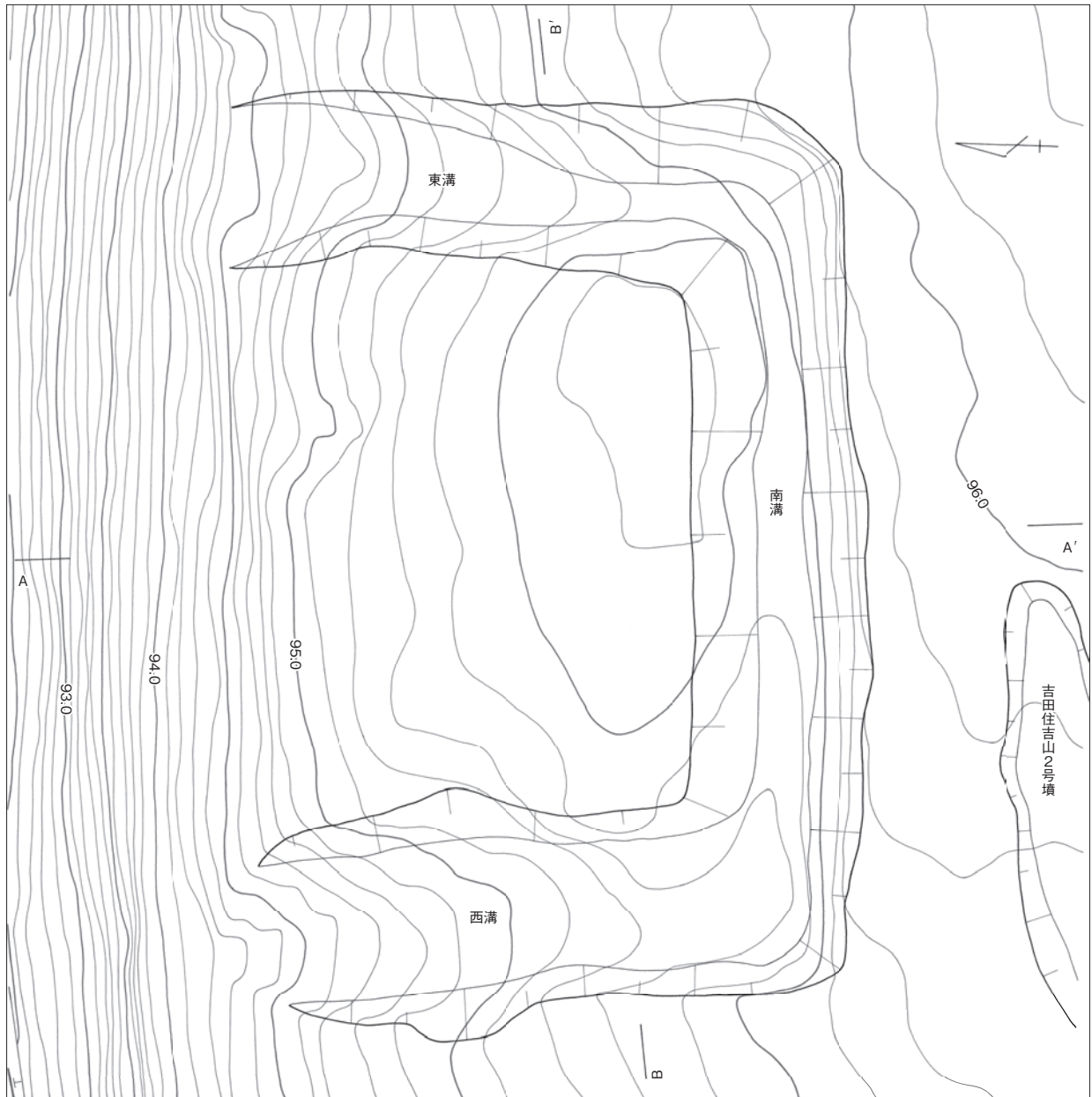
図版143 吉田住吉山5号墳

吉田住吉山古墳群



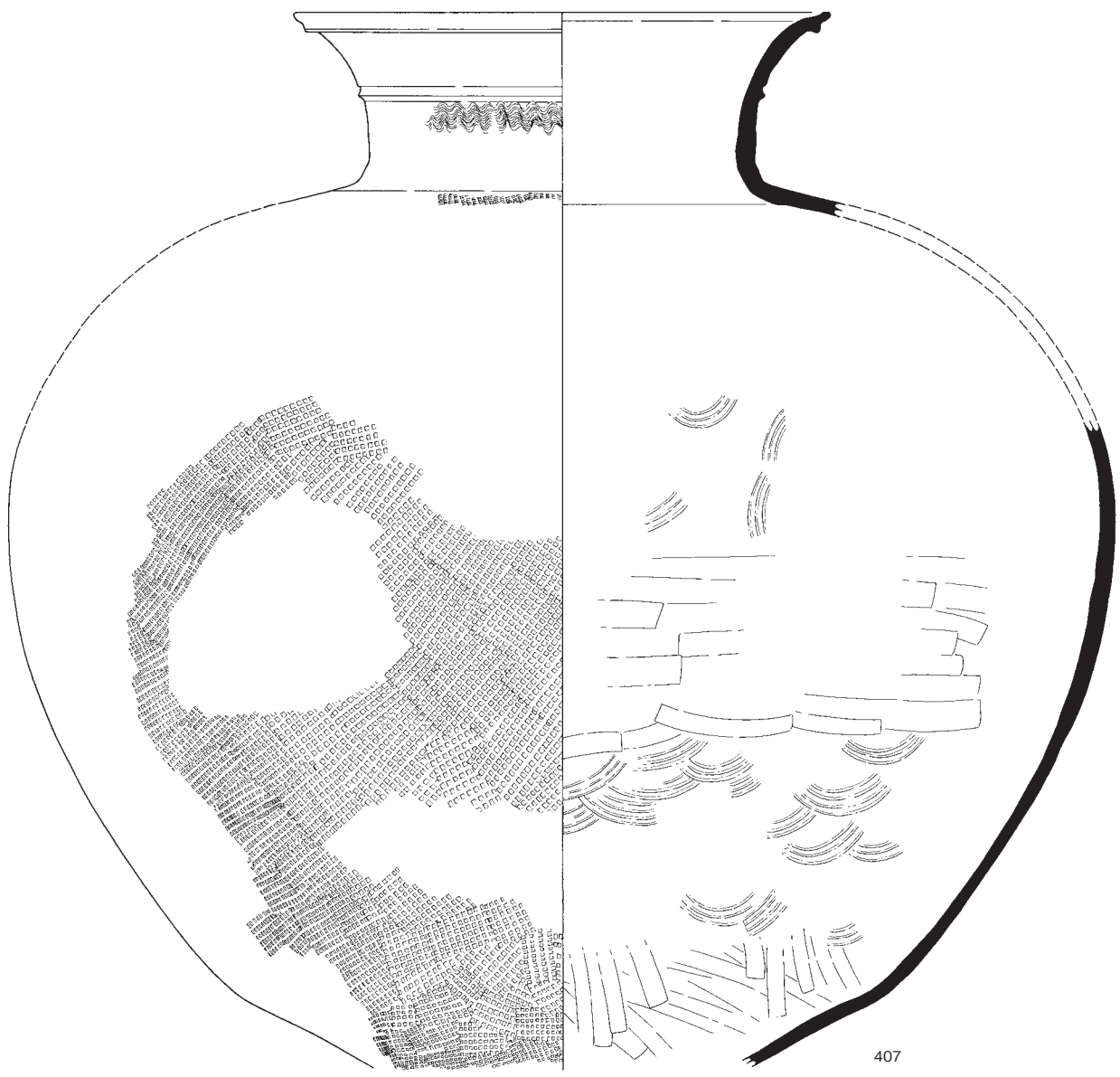
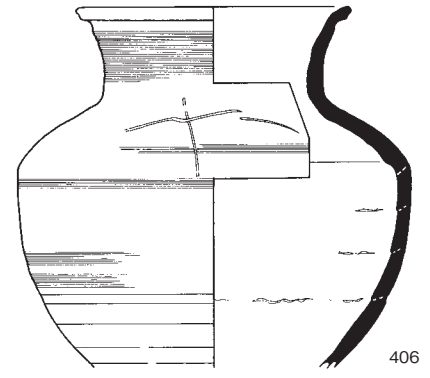
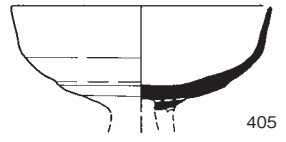
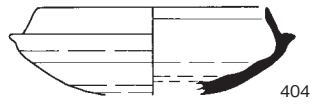
埋葬施設



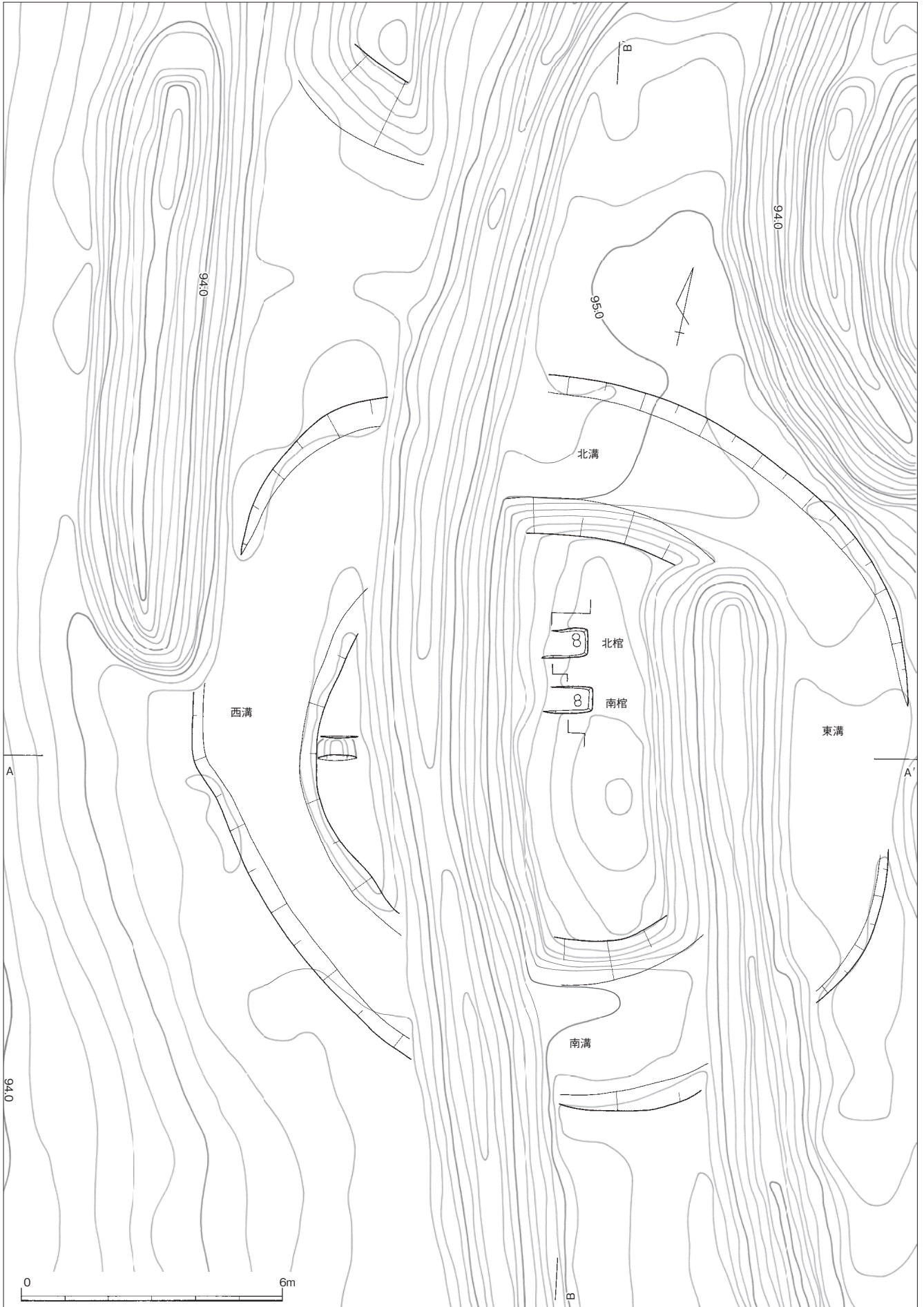


- | | | | |
|-----------|-------------------------|---------|--------------|
| 1. 明黄褐色 | シルト質極細砂(中世土器を含む) | 6. 黄褐色 | 極細砂・古墳盛土 |
| 2. にぶい黄褐色 | シルト質極細砂(小礫をわずかに含む)・古墳埋土 | 7. 明黄褐色 | 極細砂・古墳盛土 |
| 3. 褐色 | シルト質極細砂・古墳埋土 | 8. 黄褐色 | シルト質極細砂・古墳盛土 |
| 4. 明黄褐色 | シルト質極細砂(小礫を含む)・古墳埋土 | | |
| 5. にぶい黄橙色 | シルト質極細砂(小礫を含む)・古墳埋土 | | |

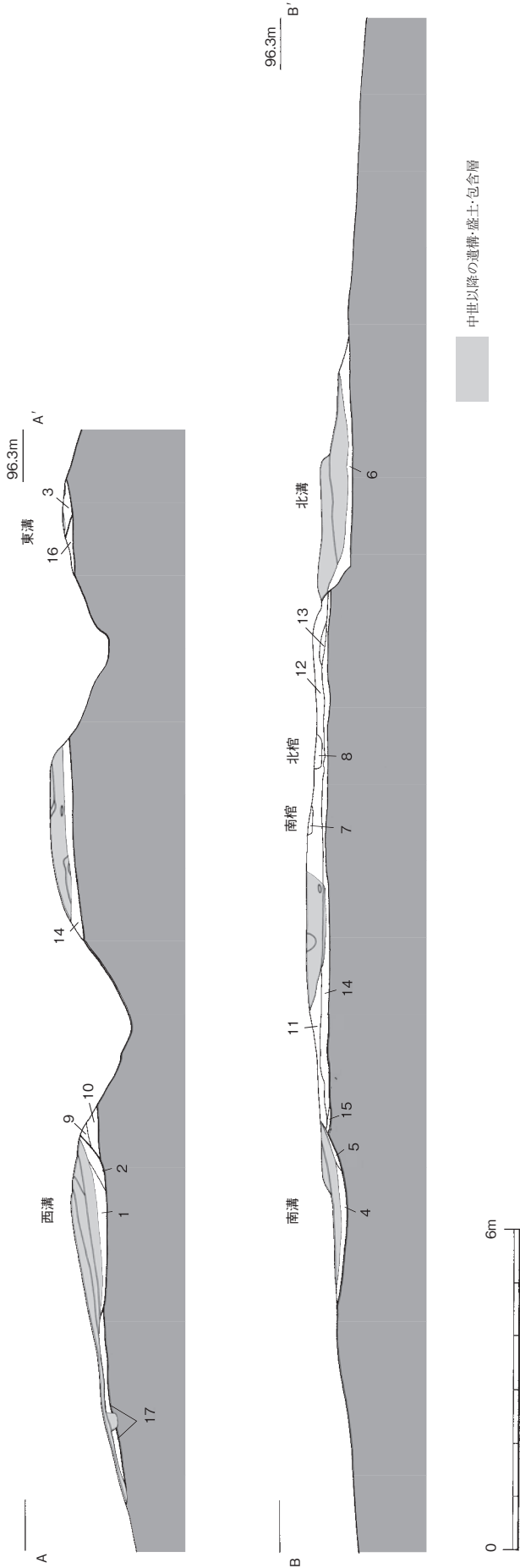
墳丘・周溝土層断面



出土土器 (404~407)



墳丘

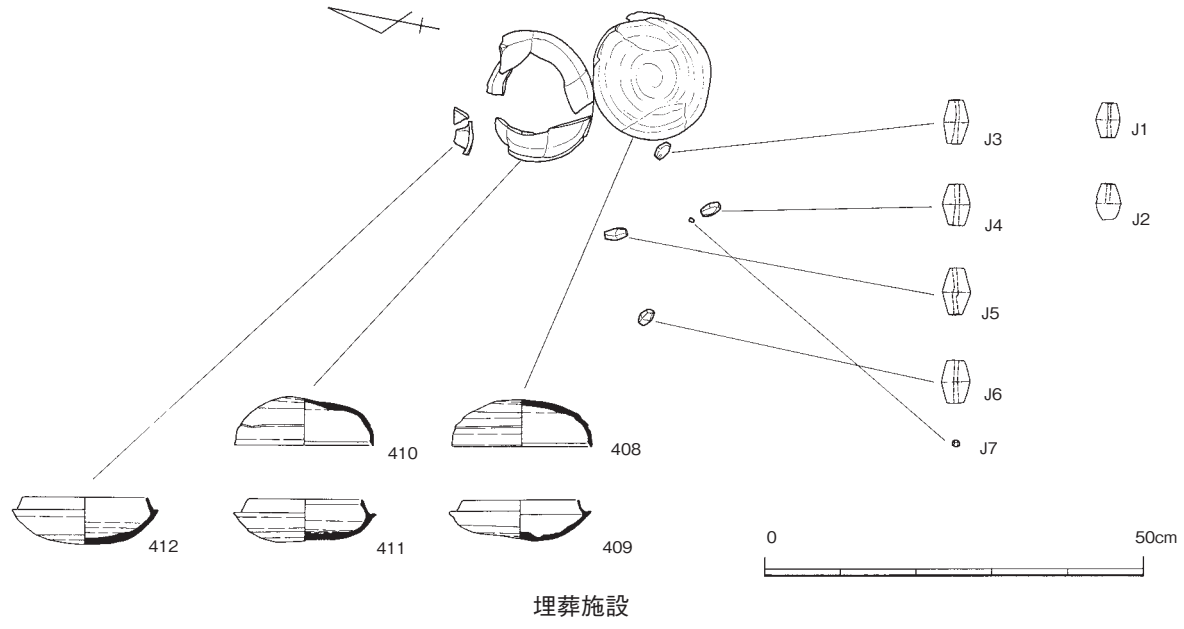
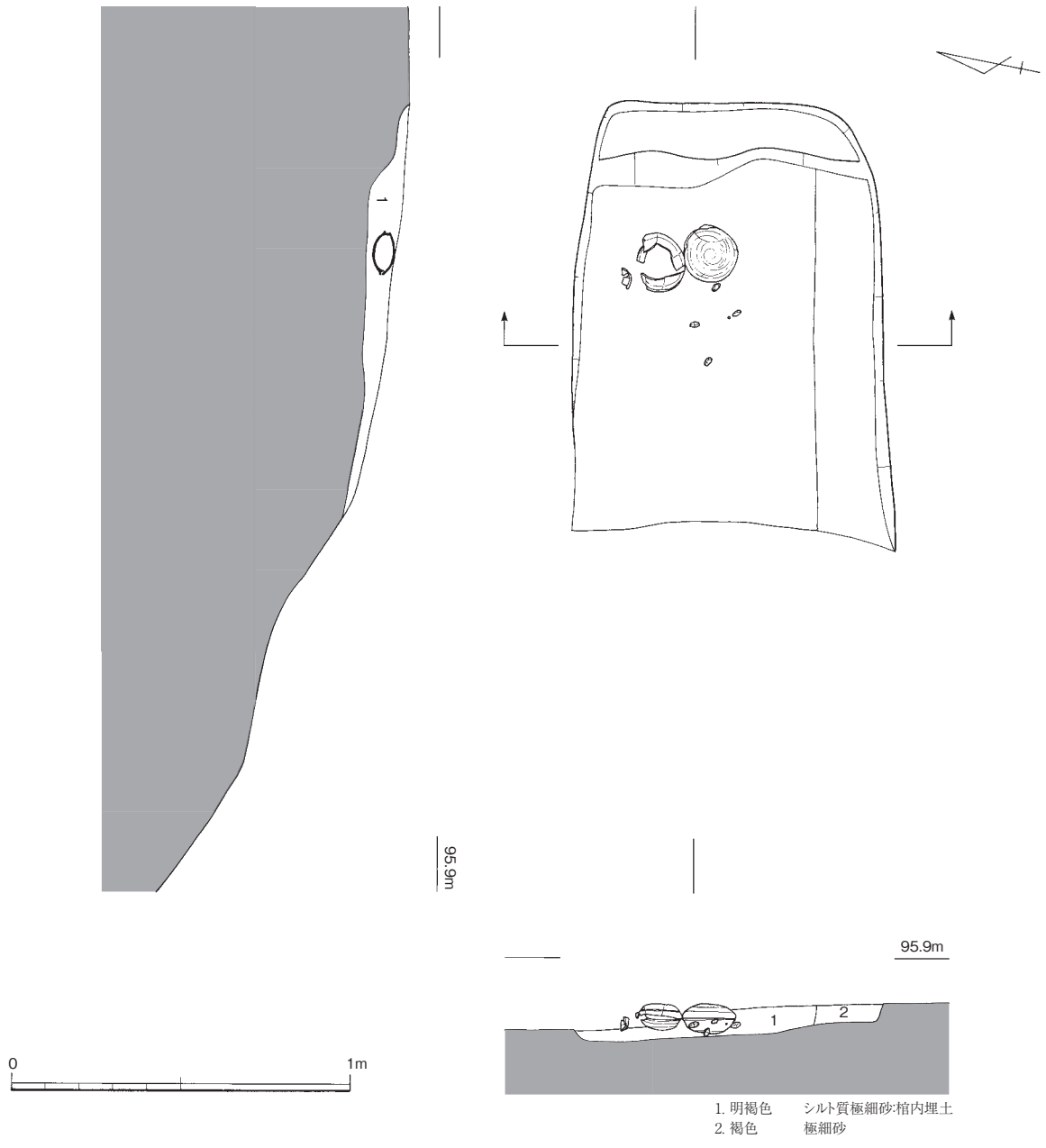


土層断面

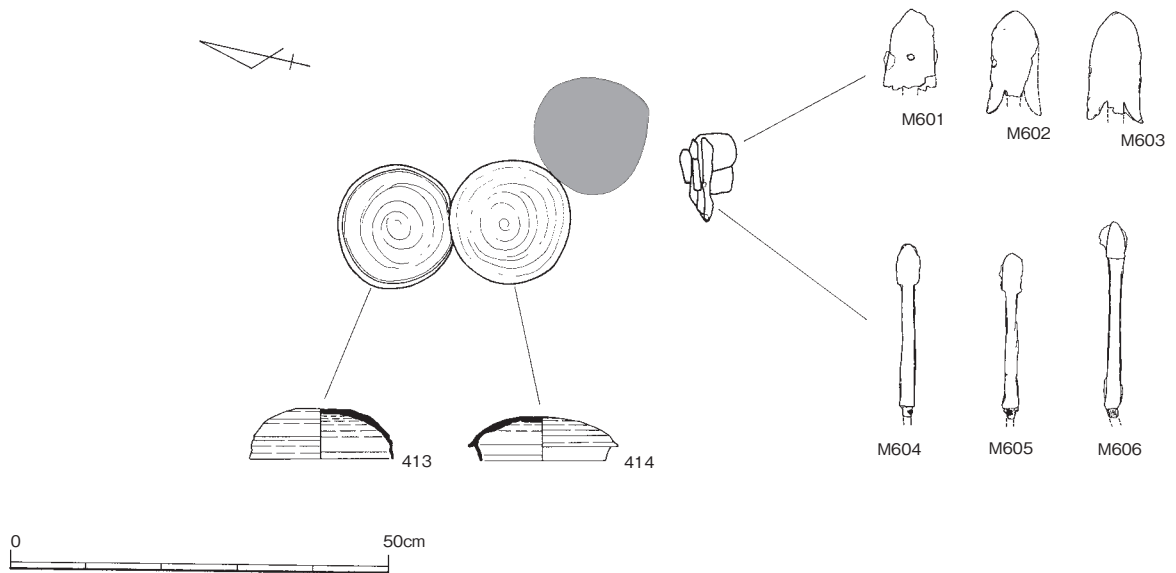
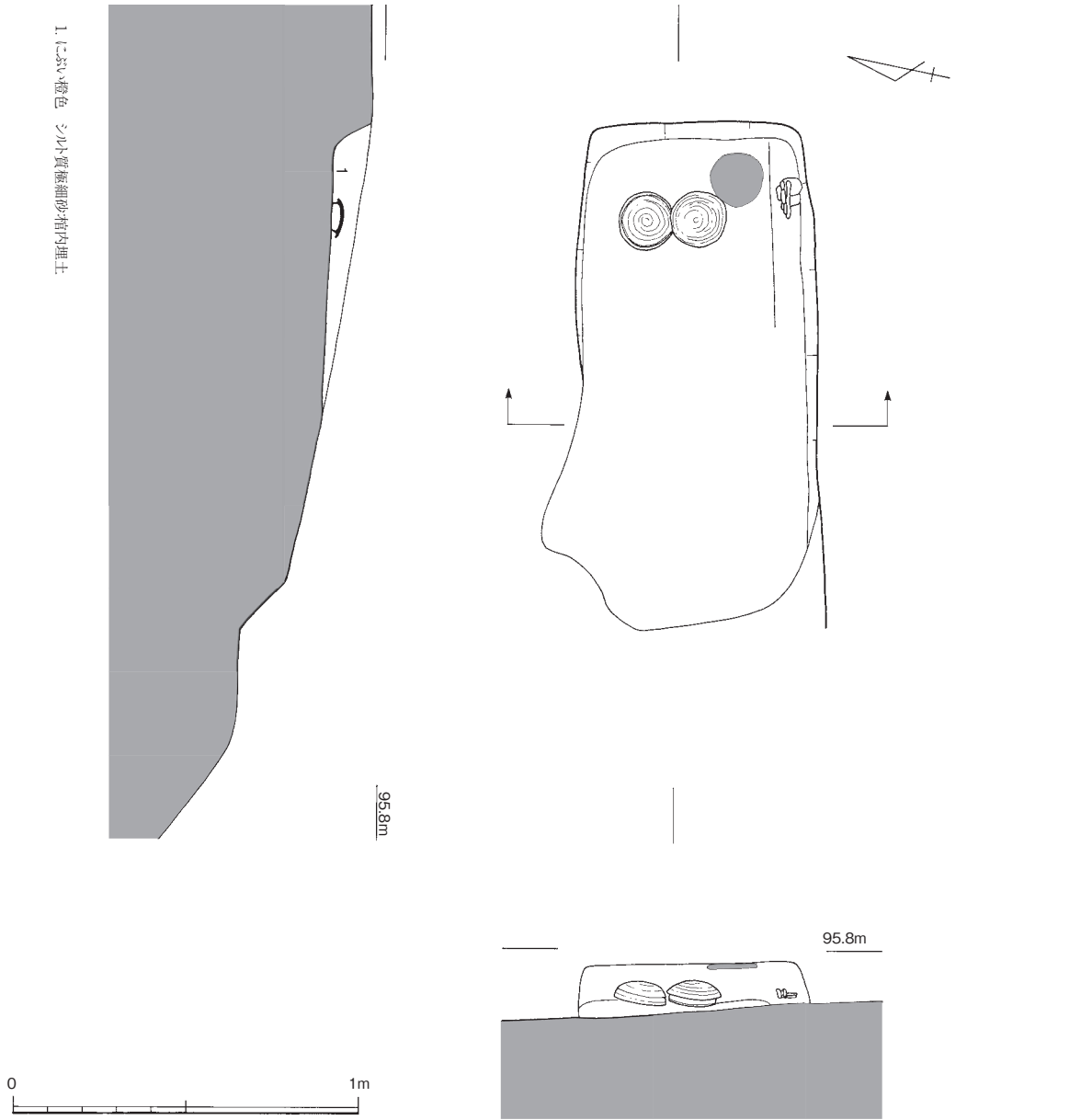
- 1. にぶい、黄褐色 シルト質極細砂(小礫を少量含む)古墳周溝
- 2. 黄褐色 シルト質極細砂(小礫を少量含む)古墳周溝
- 3. 黄褐色 シルト質極細砂(粗砂を含む)古墳周溝
- 4. 褐色 シルト質極細砂(小礫を含む)古墳周溝
- 5. にぶい、黄褐色 シルト質極細砂(小礫を含む)古墳周溝
- 6. 褐色 シルト質極細砂古墳周溝
- 7. 南棺
- 8. 北棺
- 9. 黄褐色 極細砂(小礫を少量含む)墳丘
- 10. 黄褐色 シルト質極細砂(小礫を少量含む)墳丘
- 11. 明黄褐色 シルト質極細砂墳丘
- 12. 明褐色 極細砂(小礫をわずかに含む)墳丘
- 13. 褐色 シルト質極細砂墳丘
- 14. 褐色 極細砂(マンガノ粒をわずかに含む)墳丘
- 15. 褐色 シルト質極細砂(小礫を少量含む)墳丘
- 16. 黄褐色 シルト質極細砂(小礫を少量含む)墳丘
- 17. 黄褐色 シルト質極細砂(小礫を含む)旧表土

図版149 吉田住吉山7号墳

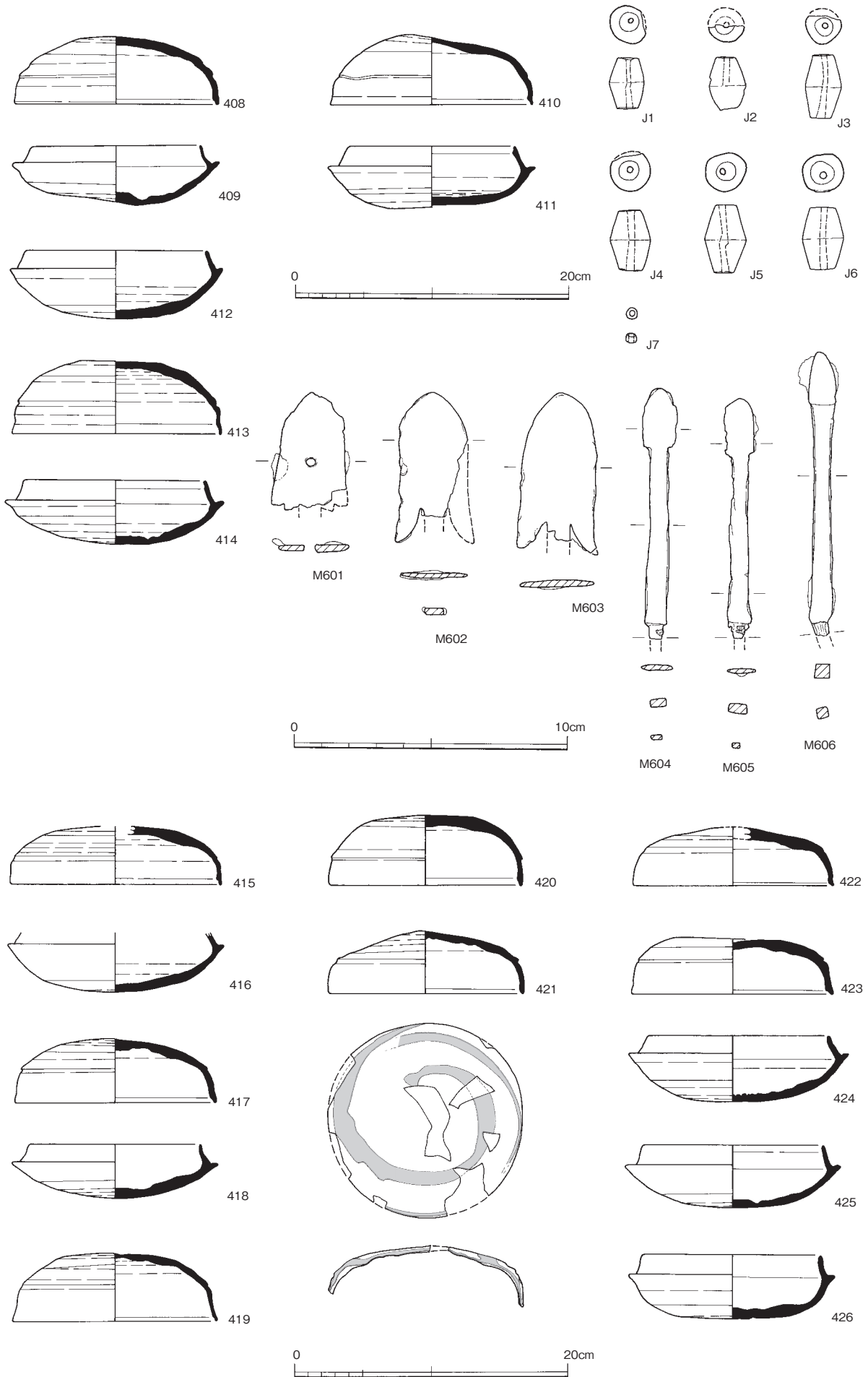
吉田住吉山古墳群



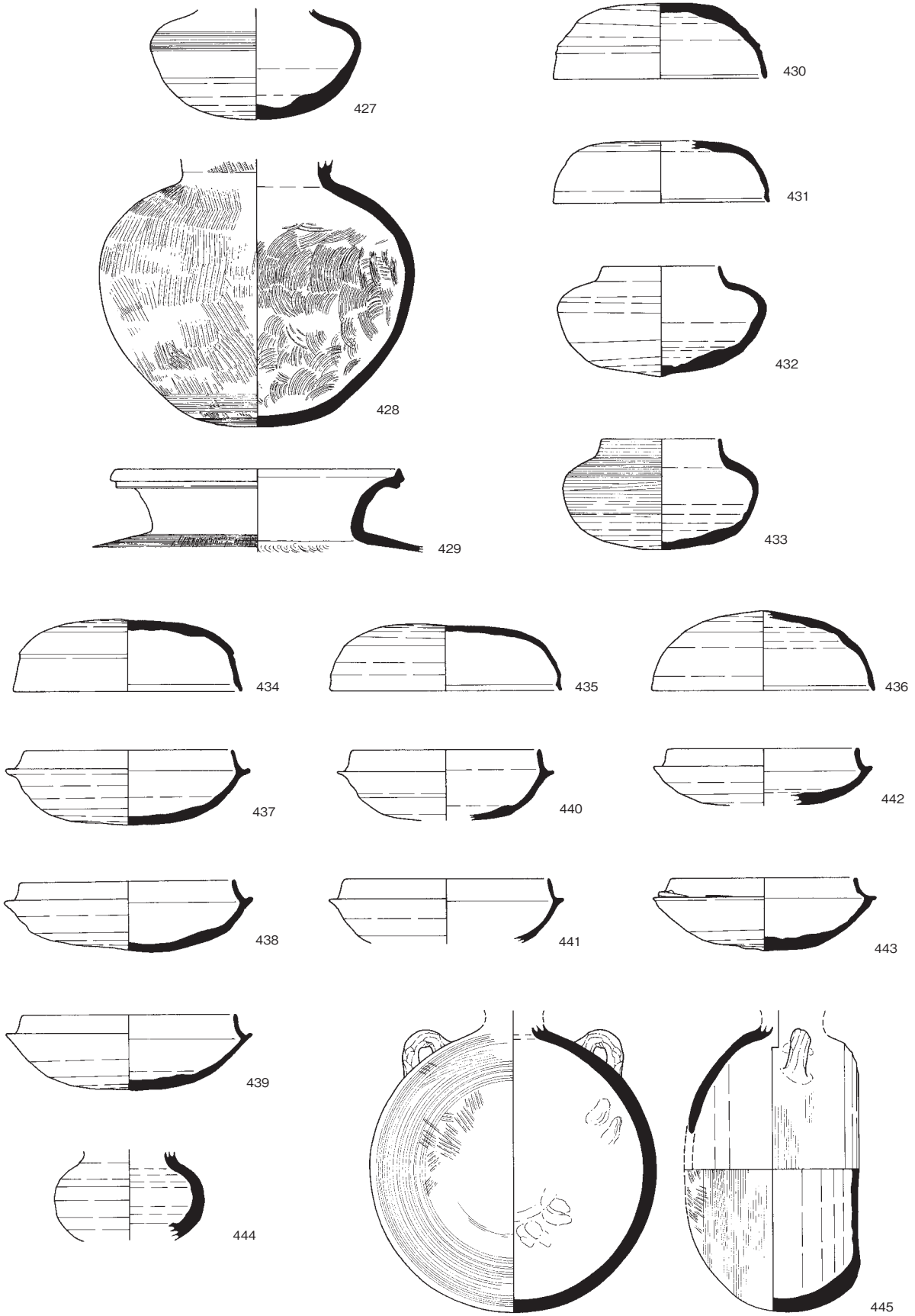
埋葬施設



埋葬施設

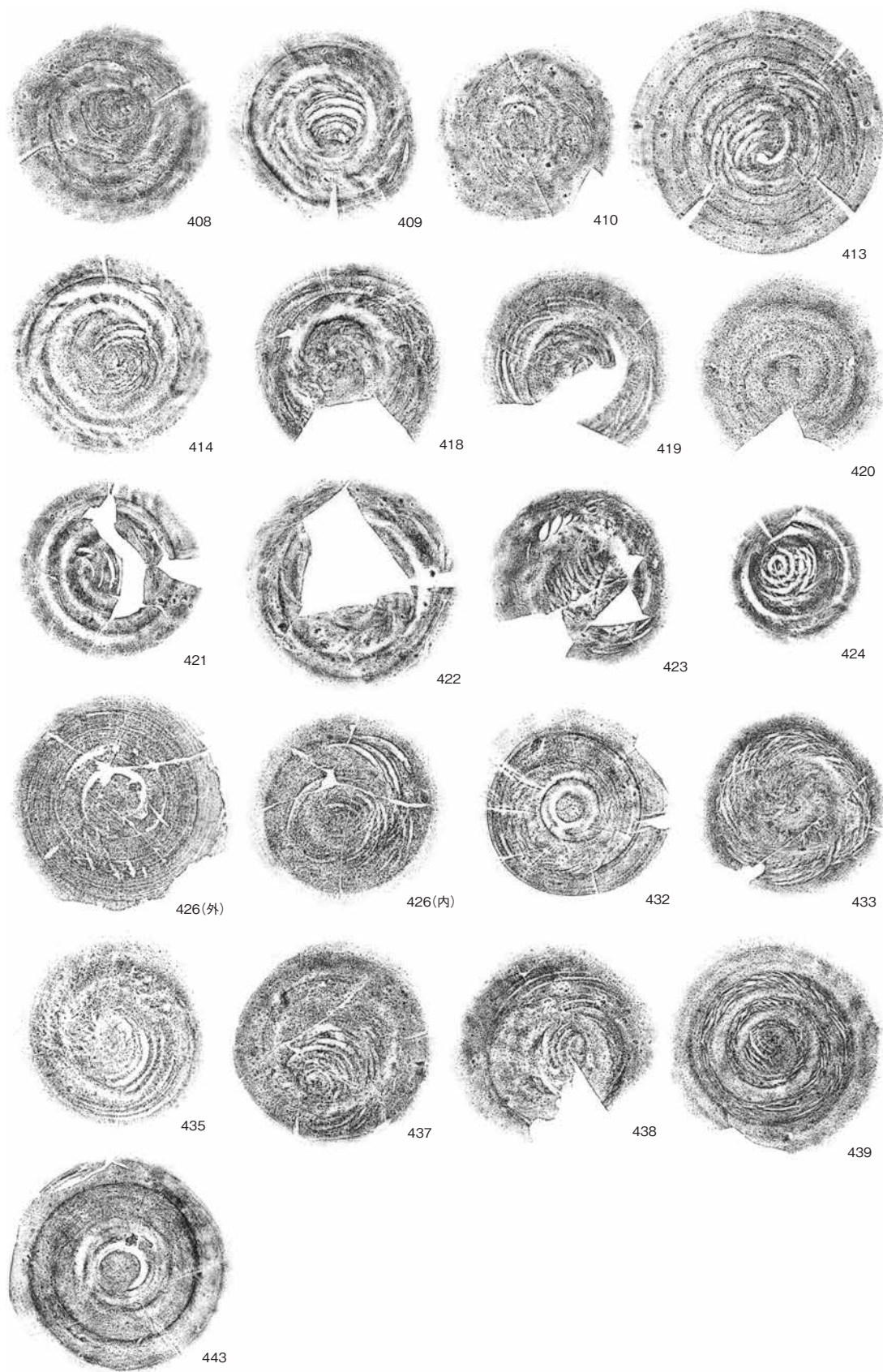


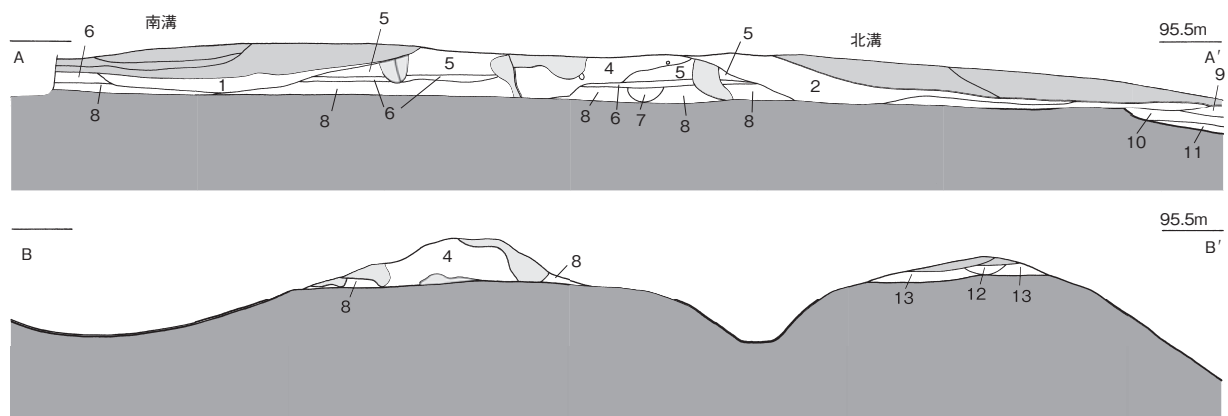
土器 (408~426)・鉄属器 (M601~M606)・玉 (J1~J7)



0 20cm

土器 (427~445)





- | | |
|--|---|
| <p>■ 中世以降の遺構・盛土・包含層</p> <p>1. 褐色 攪乱木の根</p> <p>2. 褐色 シルト質極細砂・古墳溝埋土</p> <p>3. 明黄褐色 シルト質極細砂</p> <p>4. にい黄褐色 極細砂～細砂(小礫を含む)</p> <p>5. 明黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む)墳丘盛土</p> <p>6. にい黄褐色 シルト質極細砂(粗砂を含む)旧表土</p> <p>7. 黄褐色 極細砂(小礫を少量含む)</p> | <p>8. 黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む)</p> <p>9. 褐色 シルト質極細砂</p> <p>10. 褐色 シルト質極細砂</p> <p>11. 明黄褐色 シルト質極細砂(小礫を含む)</p> <p>12. 黄褐色 シルト質極細砂(粗砂～小礫を含む)</p> <p>13. にい黄褐色 極細砂～細砂(粗砂～中礫を多量に含む)</p> |
|--|---|



墳丘・土層断面

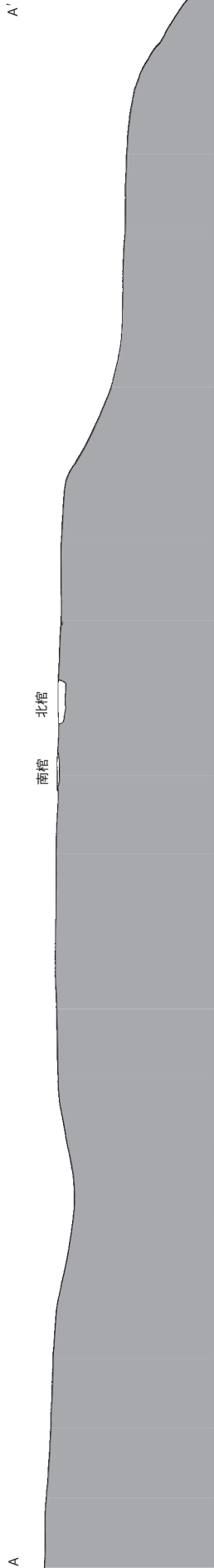
図版155 吉田住吉山9号墳



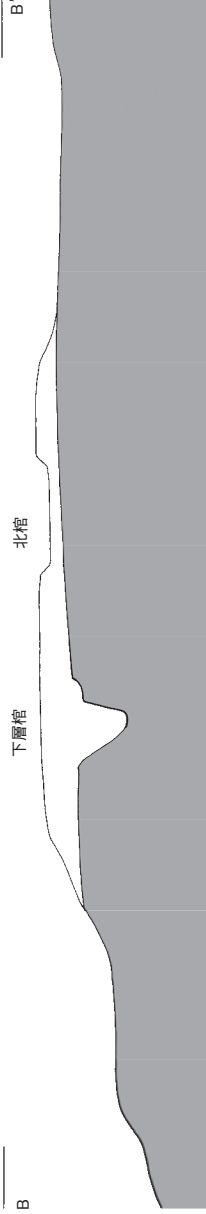
吉田住吉山古墳群

墳丘

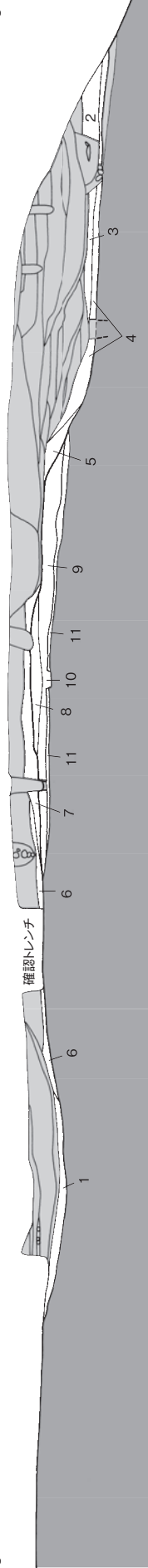
97.0m
A'



96.5m
B'



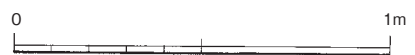
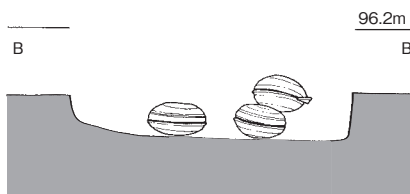
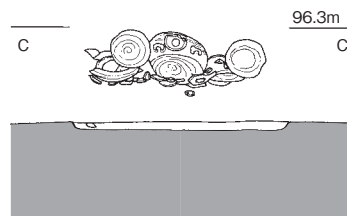
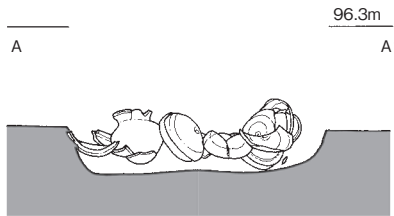
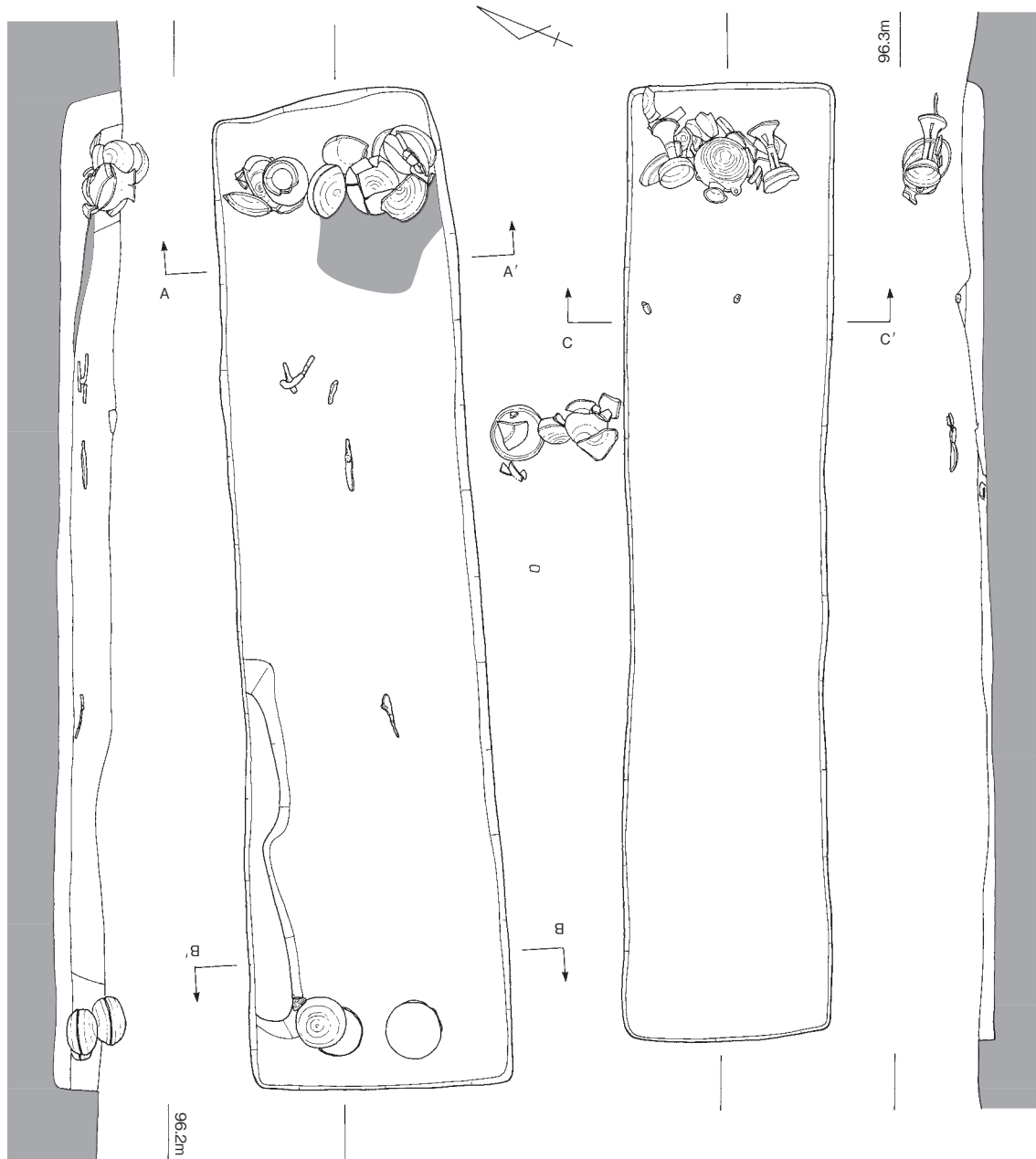
97.0m
C'

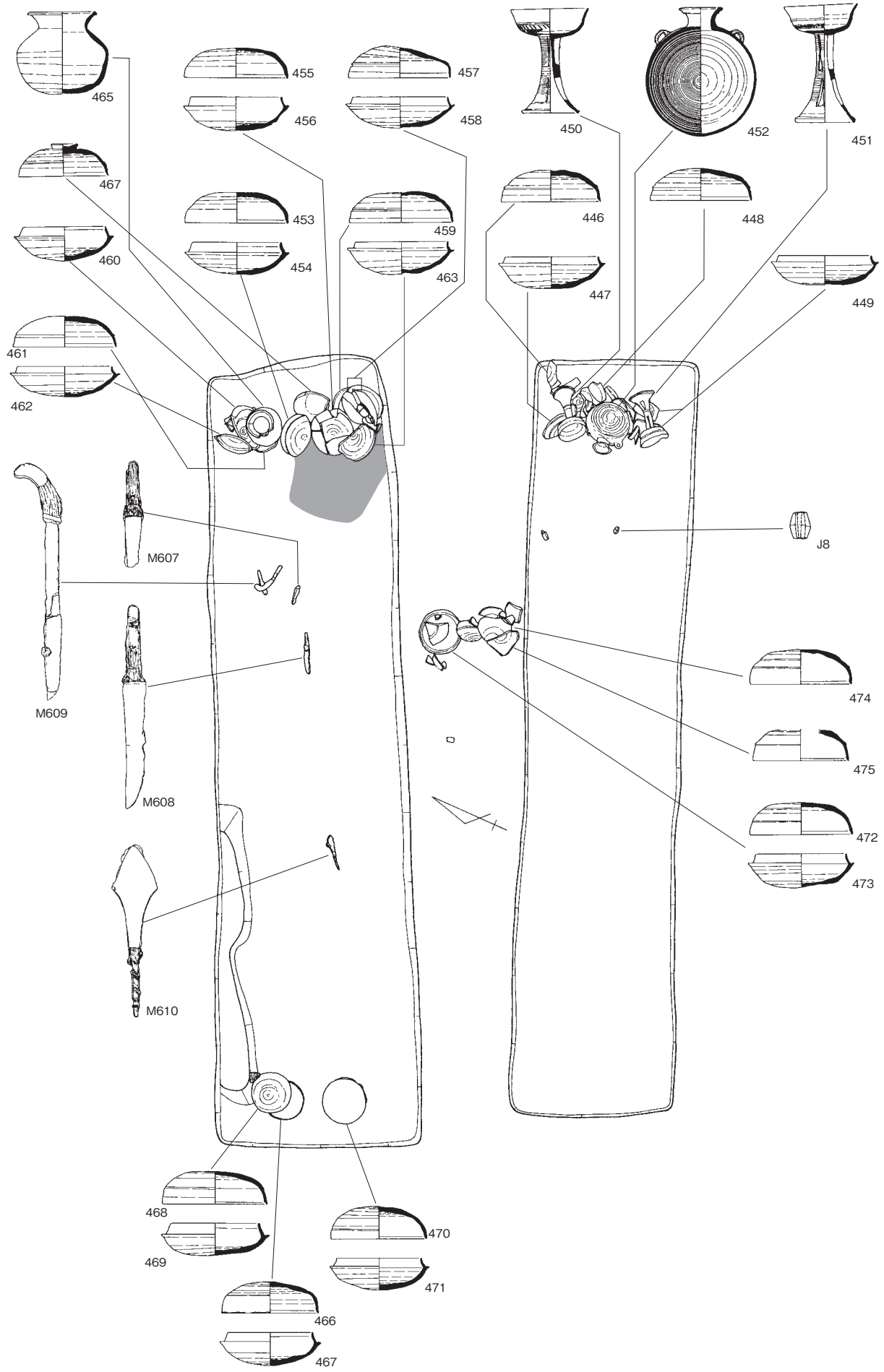


中世以降の遺構・盛土・包含層

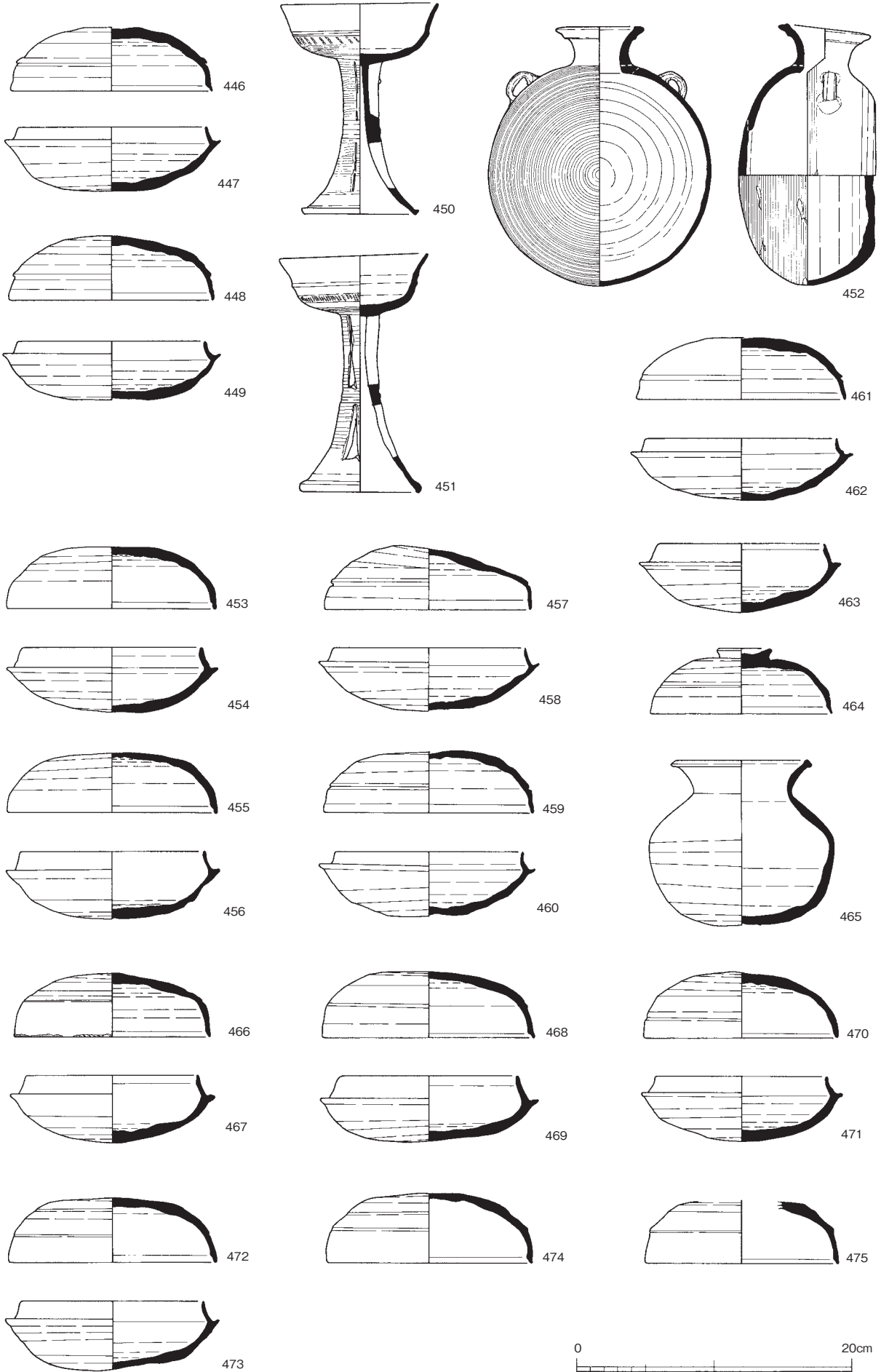
- 1. 濃い黄褐色 シルト質極細砂・古墳周溝埋土
- 2. 黄褐色 極細砂(小〜中礫を含む)・古墳周溝
- 3. 明黄褐色 極細砂(小礫を含む)・古墳周溝
- 4. 黄褐色 シルト質極細砂・古墳周溝
- 5. 明褐色 シルト質極細砂・墳丘
- 6. 濃い黄褐色 シルト質極細砂(小礫を少量含む)・墳丘
- 7. 黄褐色 極細砂(小礫を少量含む)・墳丘
- 8. 黄褐色 シルト質極細砂(小礫を少量含む)・墳丘
- 9. 黄褐色 シルト質極細砂(粗砂を含む、小礫を少量含む)・墳丘
- 10. 明褐色 極細砂・9号墳北柵埋土
- 11. 褐色 極細砂(炭灰を多量に含む)

土層断面

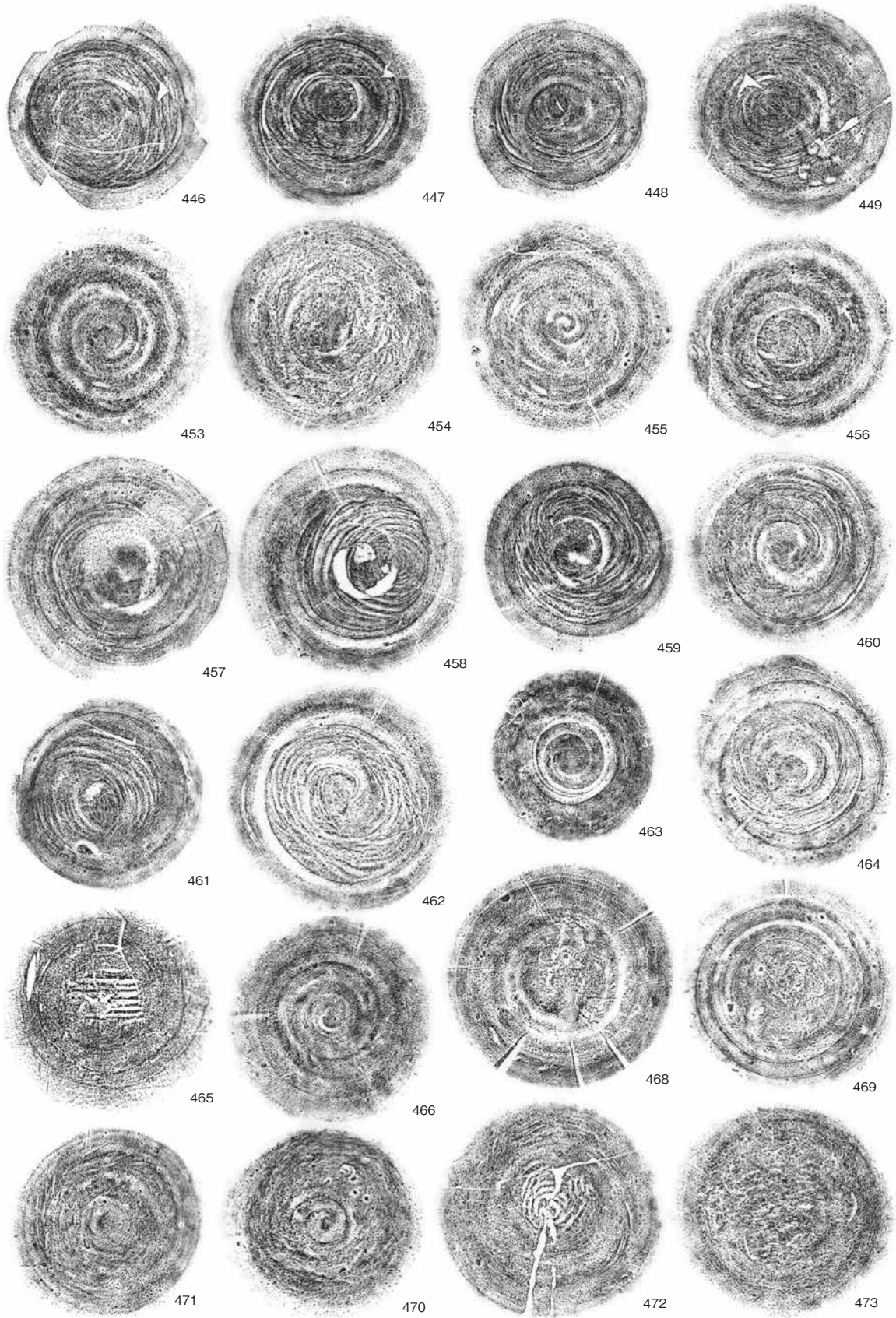




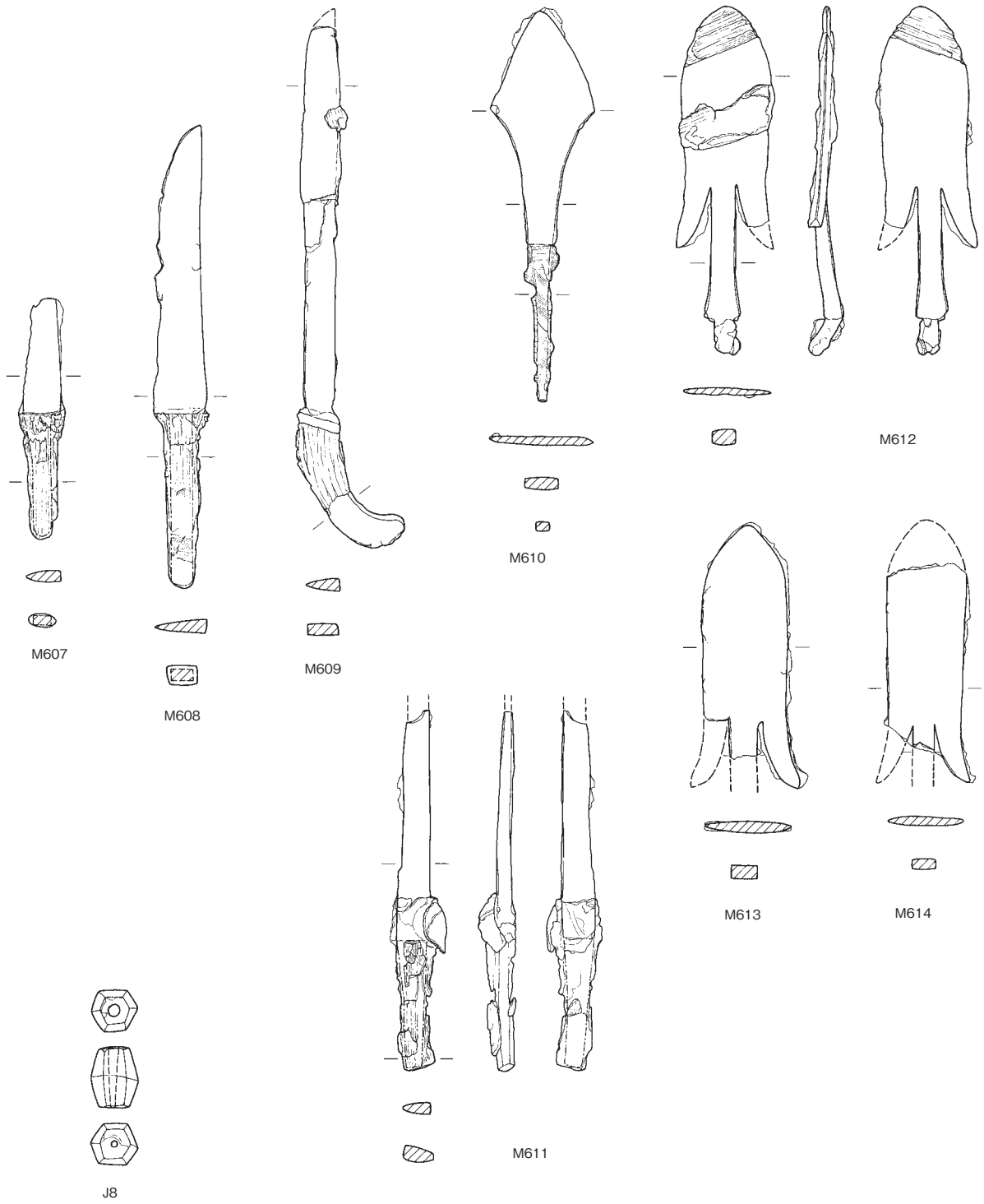
埋葬施設土器出土状況・下層埋葬施設



土器 (446~475)



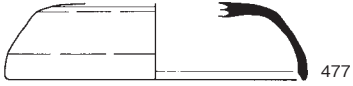
土器拓影 (446~449・453~466・468~473)



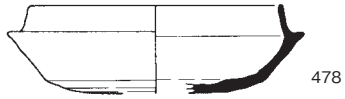
金属器 (M607~M614) · 玉 (J8)



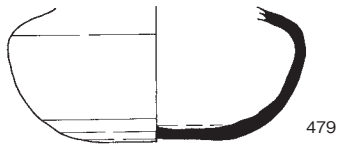
476



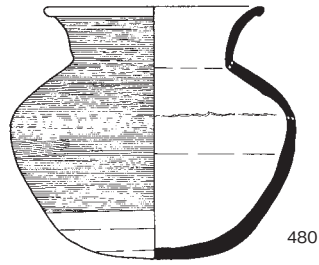
477



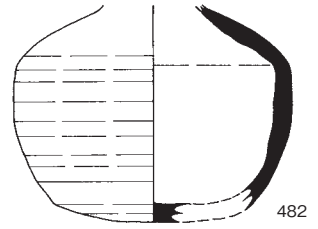
478



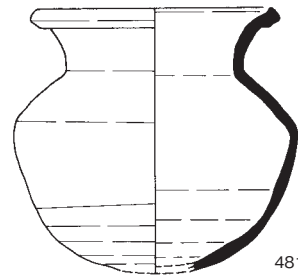
479



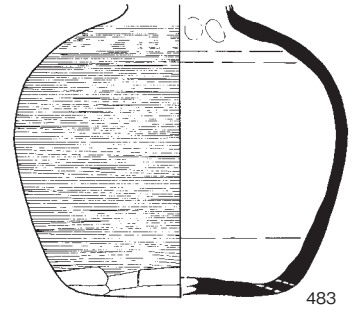
480



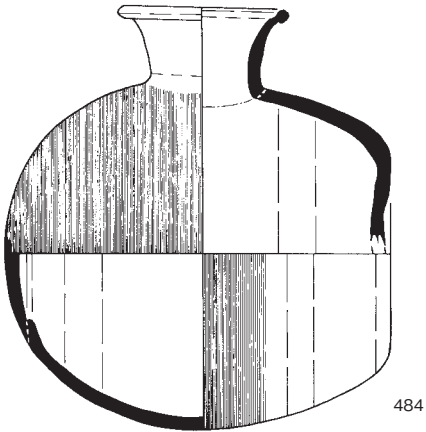
482



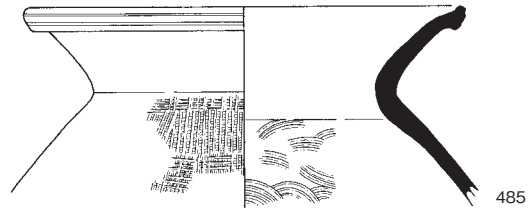
481



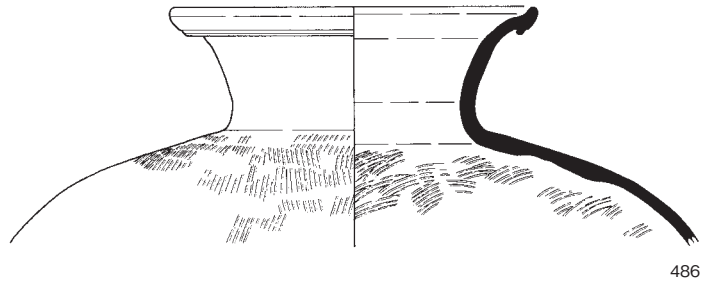
483



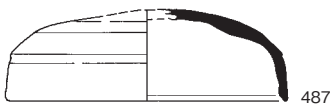
484



485



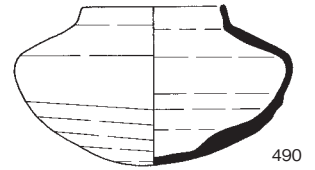
486



487



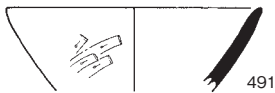
488



490



489



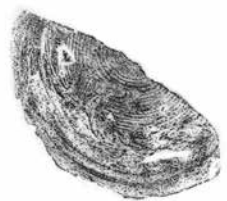
491



488

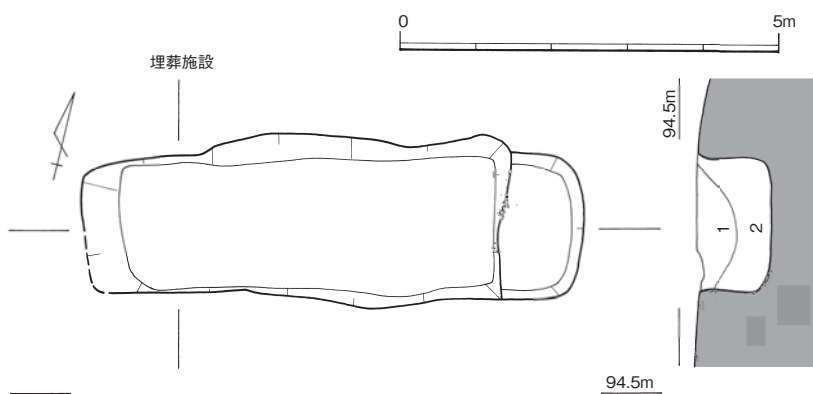
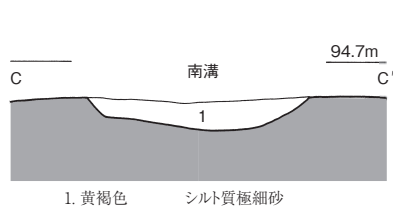
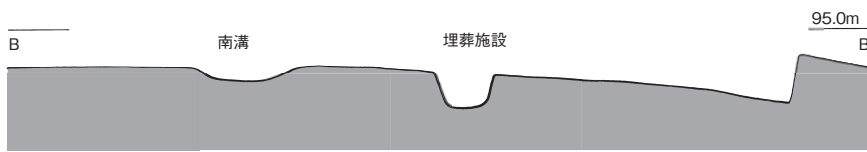
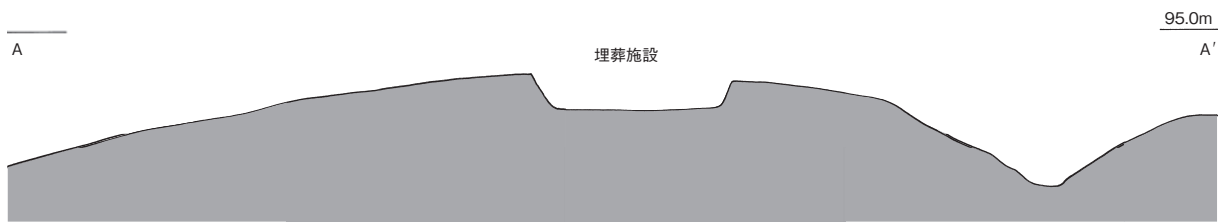
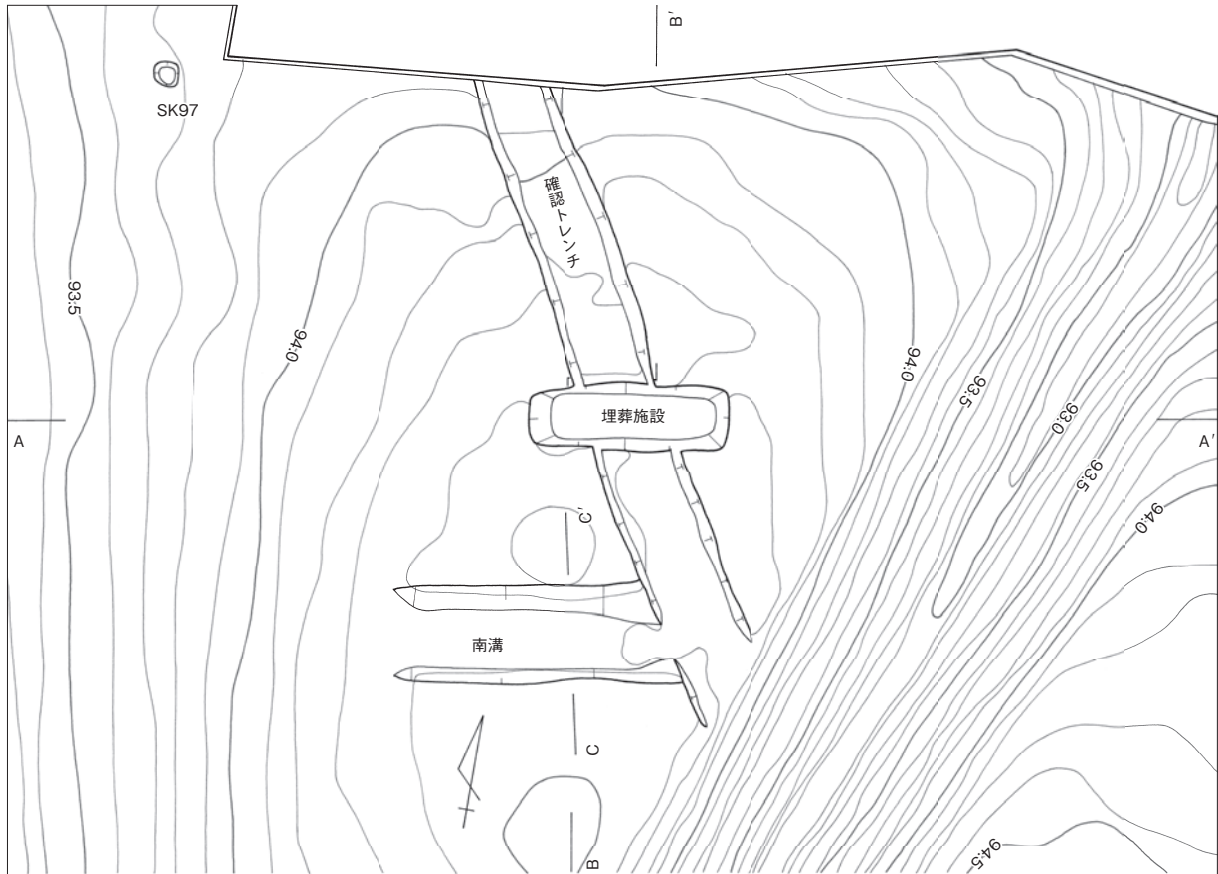


476

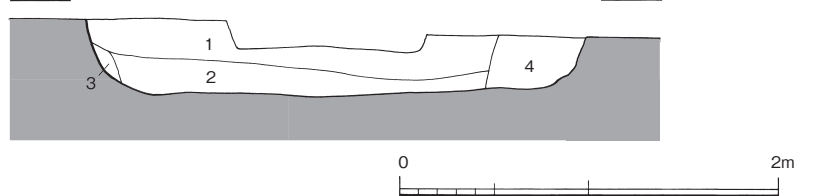


483

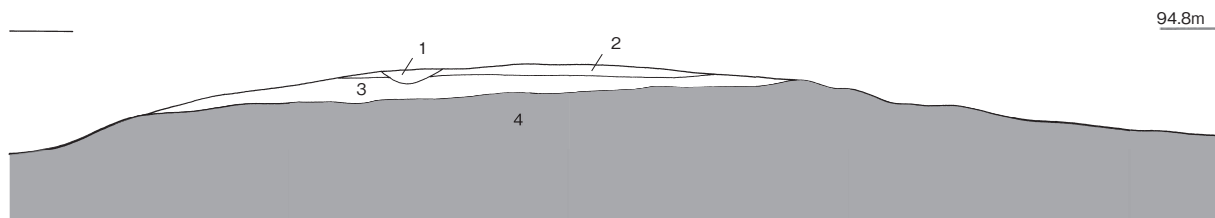
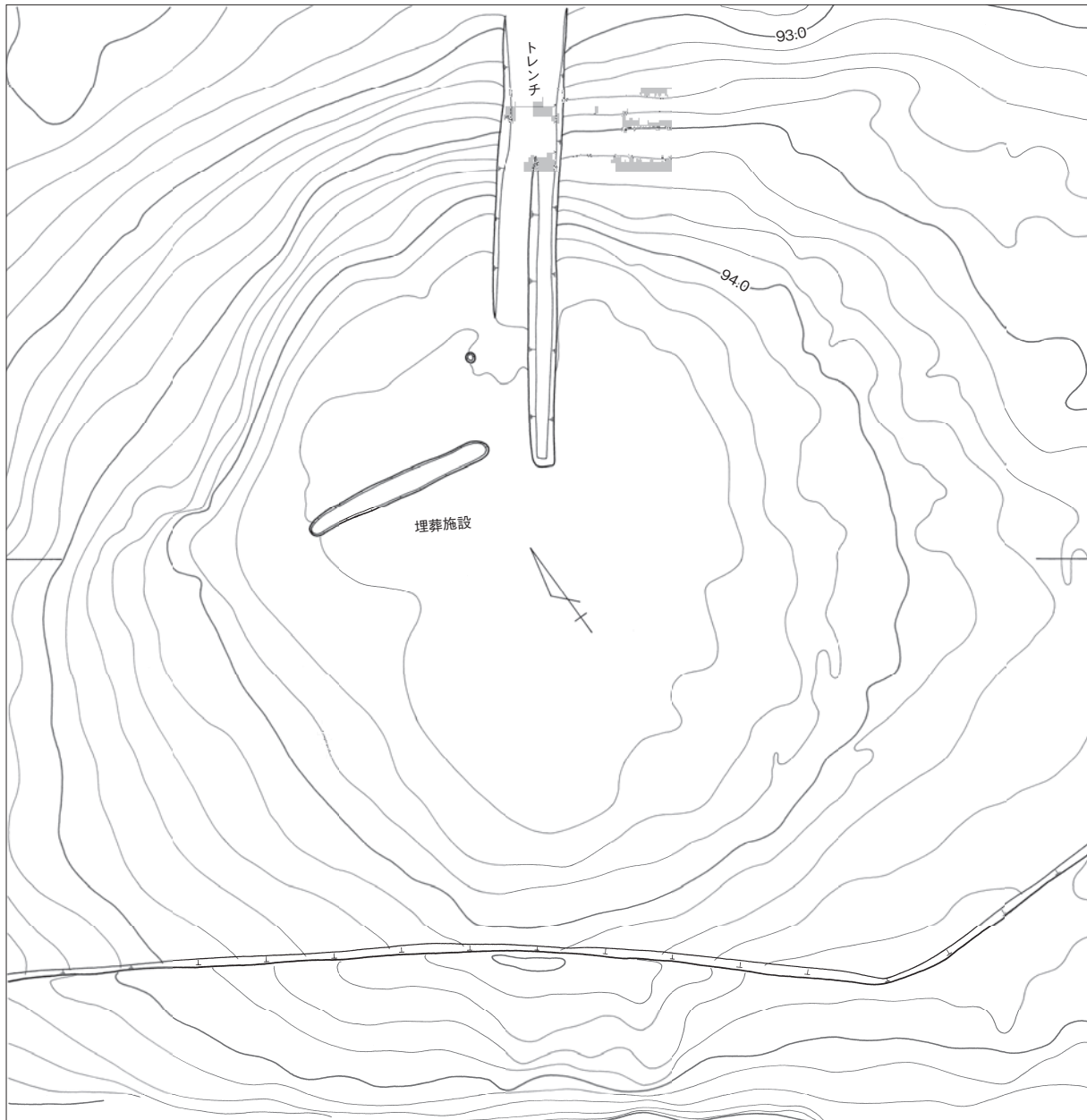
土器 (476~491) · 土器拓影 (476 · 483 · 488)



- 1. 明黄褐色 極細砂(小礫を含む)
- 2. 明黄褐色 シルト質極細砂(小礫を多量に含む)
- 3. にぶい黄橙色 極細砂~細砂(小礫を多量に含む)
- 4. にぶい黄褐色 シルト質極細砂(粘土質)堀形内埋土



墳丘・土層断面・埋葬施設



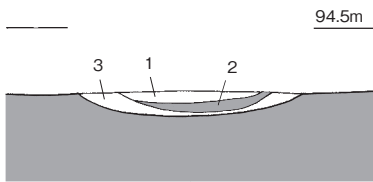
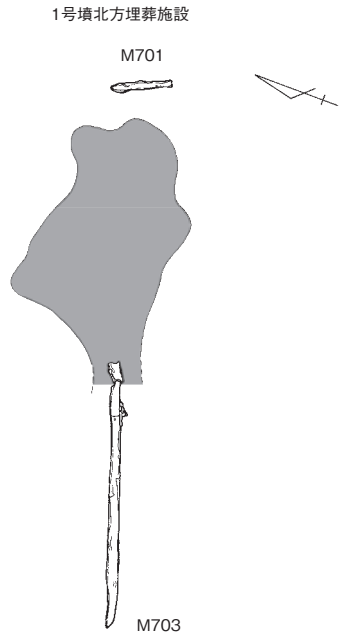
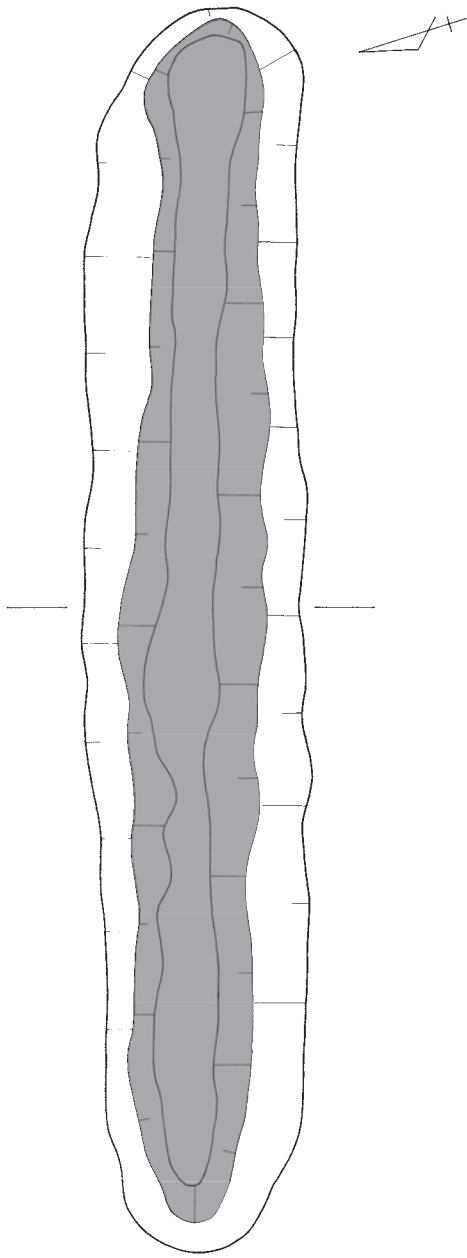
- 1. 淡黄色 中砂～細砂墳丘盛土
- 2. 明黄褐色 細砂～中砂墳丘盛土
- 3. にぶい黄橙色 細砂墳丘盛土
- 4. にぶい黄橙色 極細砂～細砂基盤層



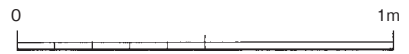
墳丘・土層断面

図版165 吉田1号墳

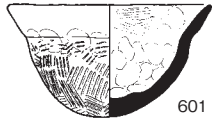
吉田古墳群



- 1. 橙色 細砂
- 2. 赤色 細砂(赤色顔料を多量に含む)
- 3. 明黄褐色 細砂



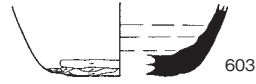
埋葬施設



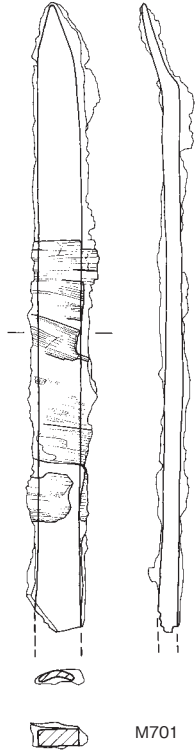
601



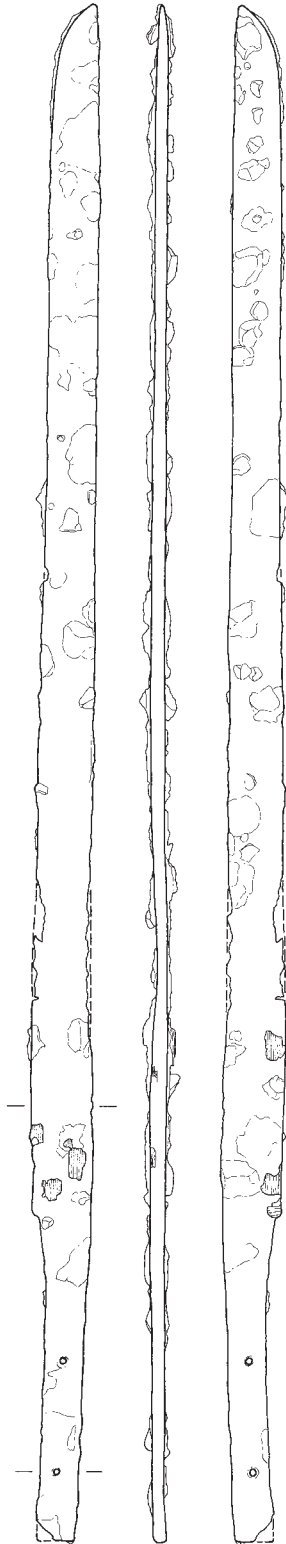
602



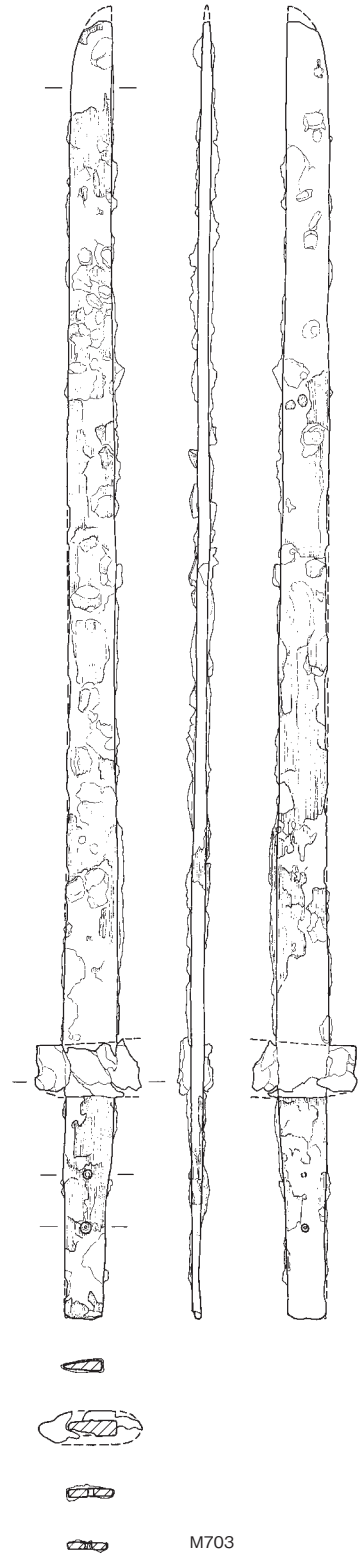
603



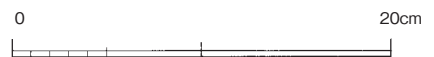
M701



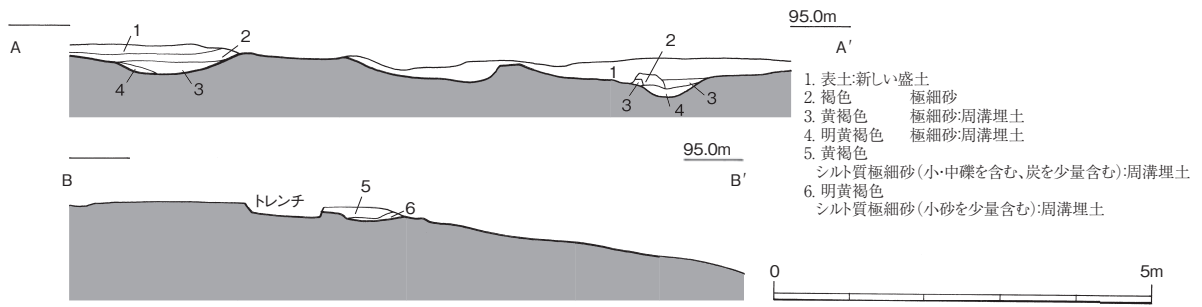
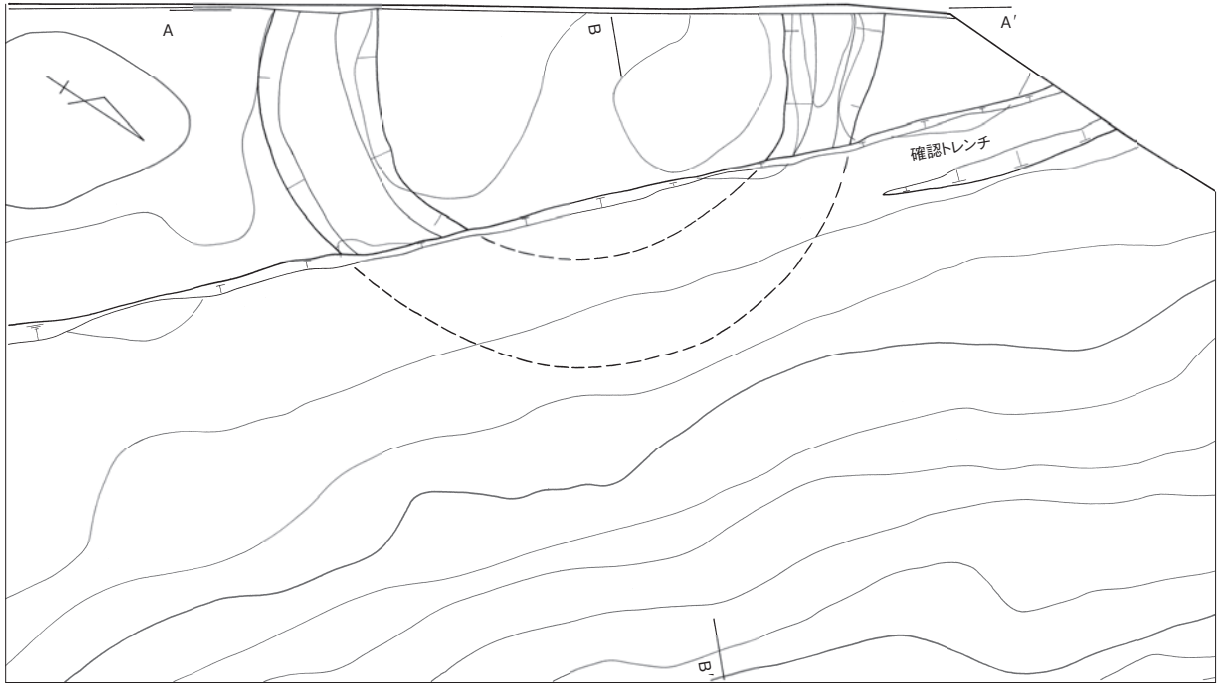
M702



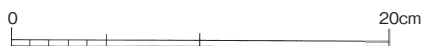
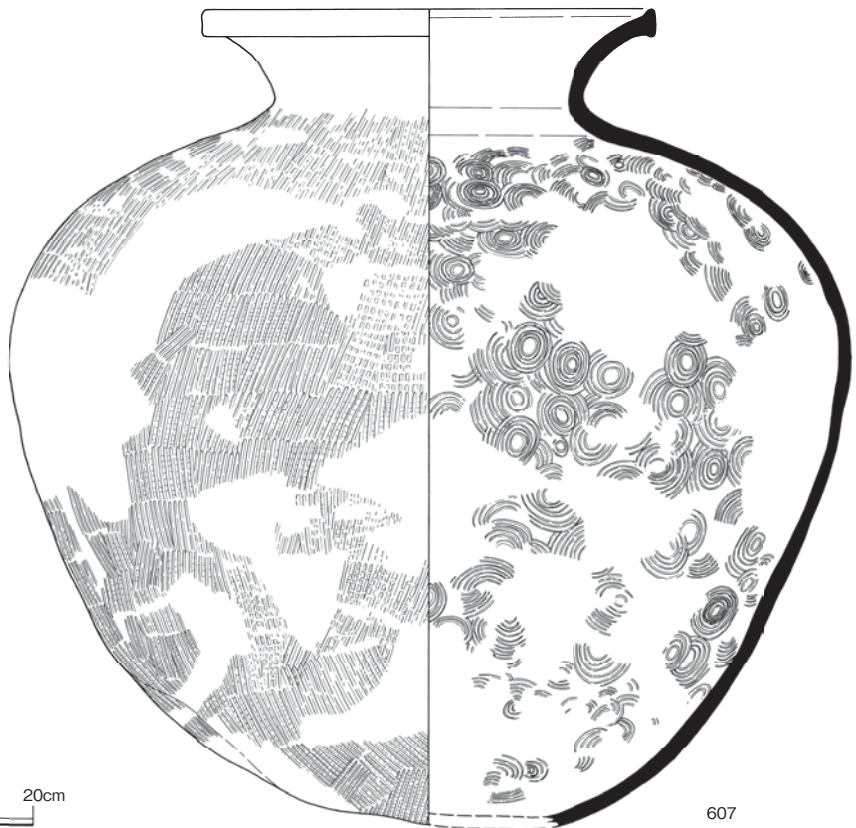
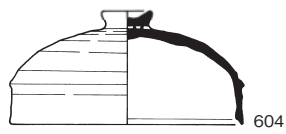
M703



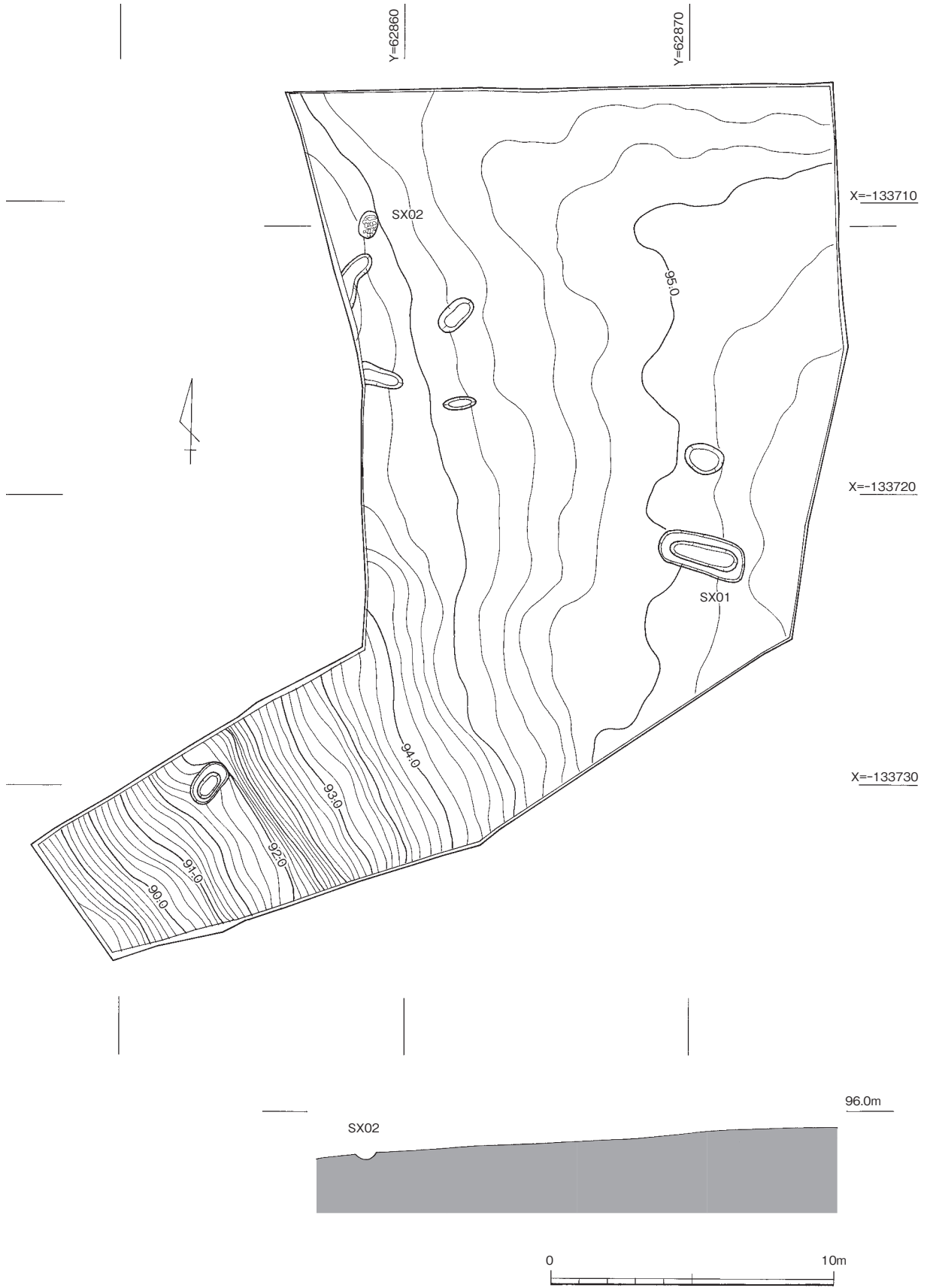
土器 (601~603) · 金属器 (M701~M703)



- 1. 表土:新しい盛土 極細砂
- 2. 褐色 極細砂:周溝埋土
- 3. 黄褐色 シルト質極細砂(小・中礫を含む、炭を少量含む):周溝埋土
- 4. 明黄褐色 極細砂:周溝埋土
- 5. 黄褐色 シルト質極細砂(小・中礫を含む、炭を少量含む):周溝埋土
- 6. 明黄褐色 シルト質極細砂(小砂を少量含む):周溝埋土

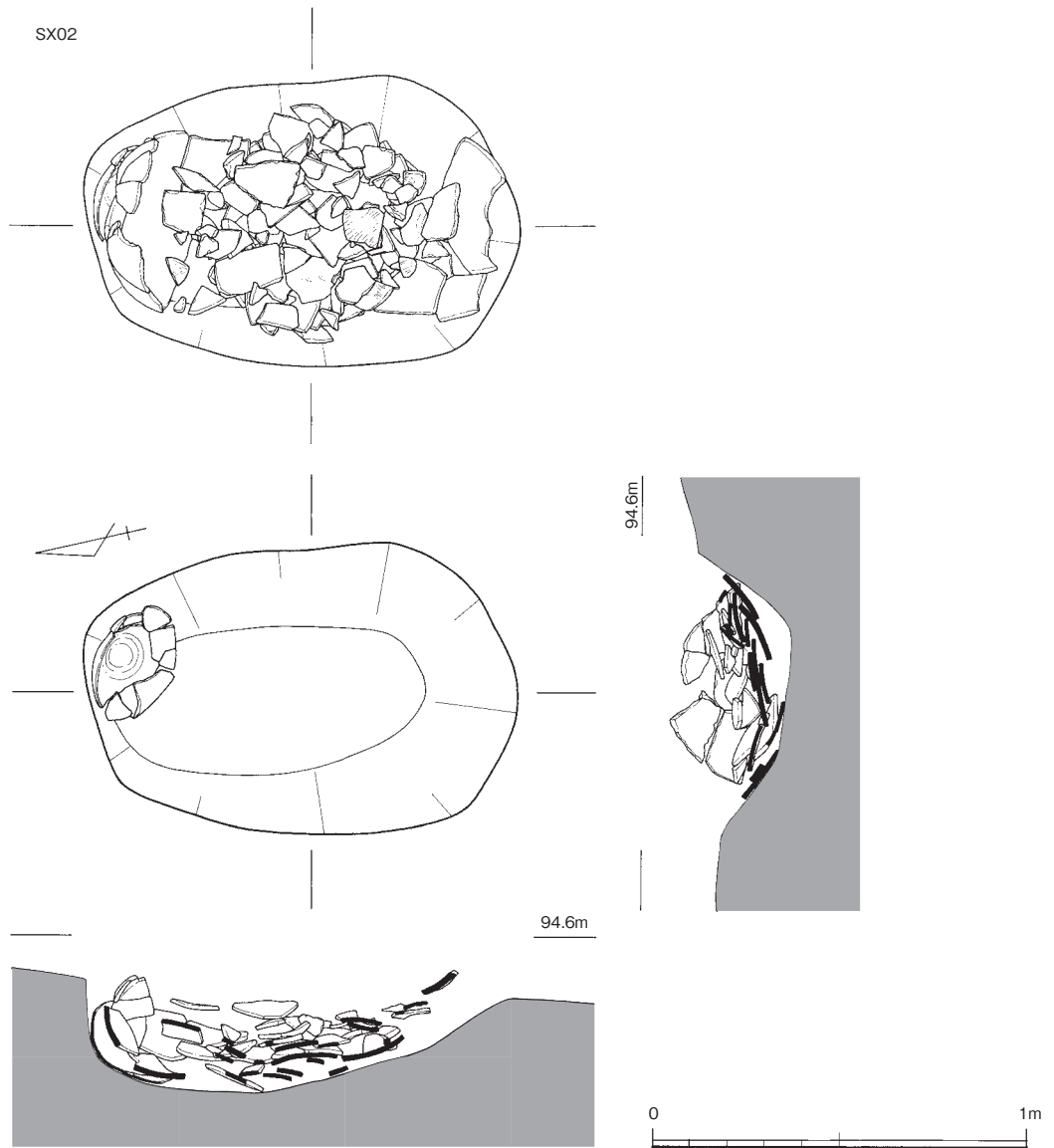
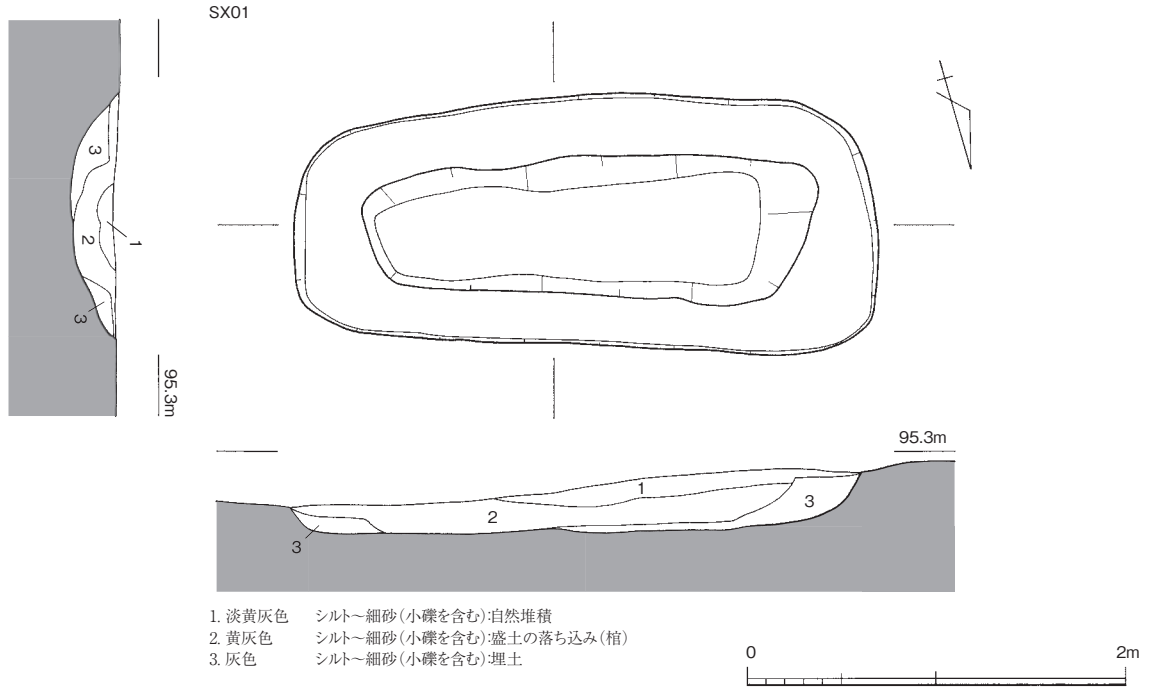


墳丘・土層断面 土器 (604~607)

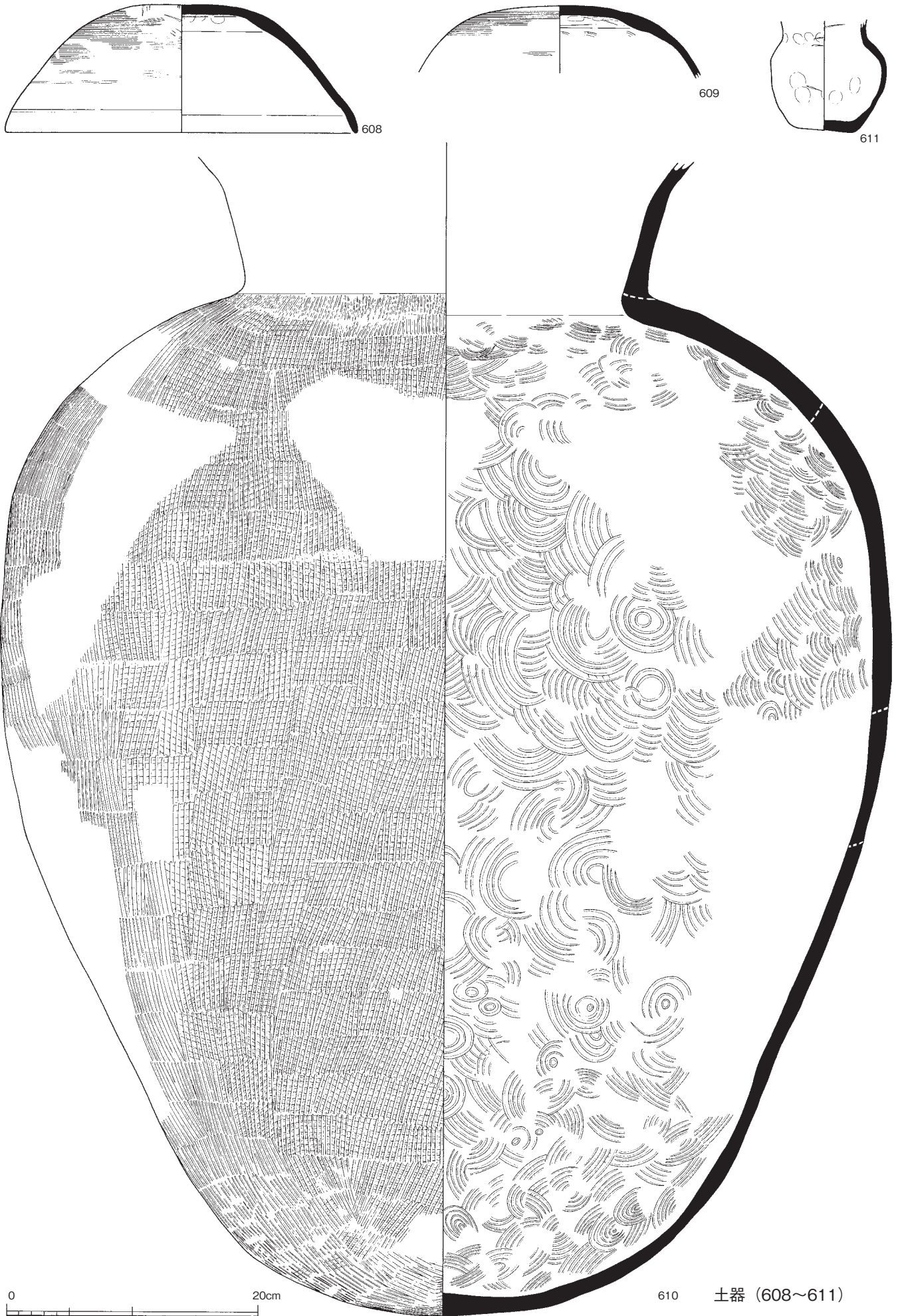


全体図

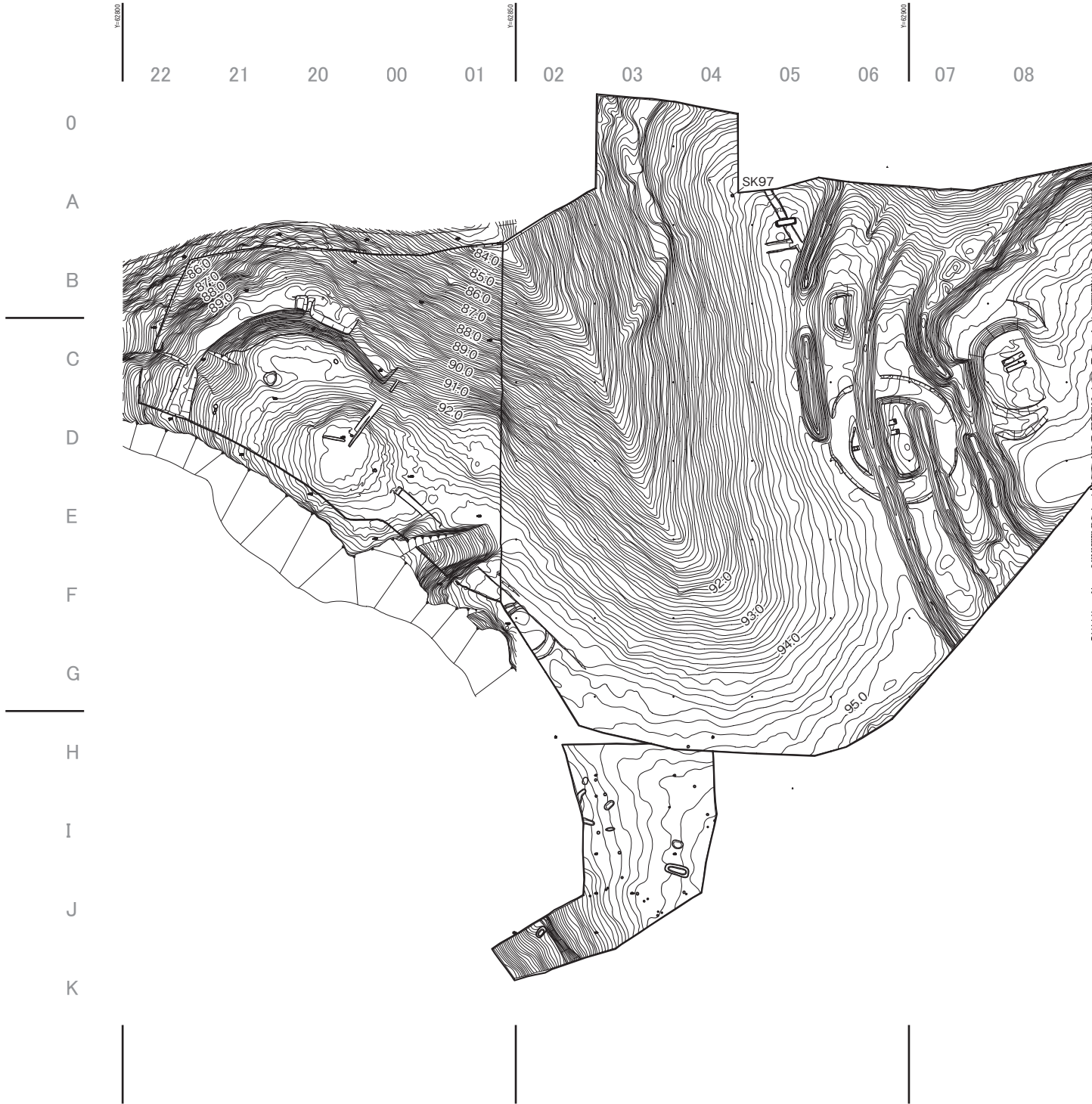
図版169 第3次調査区



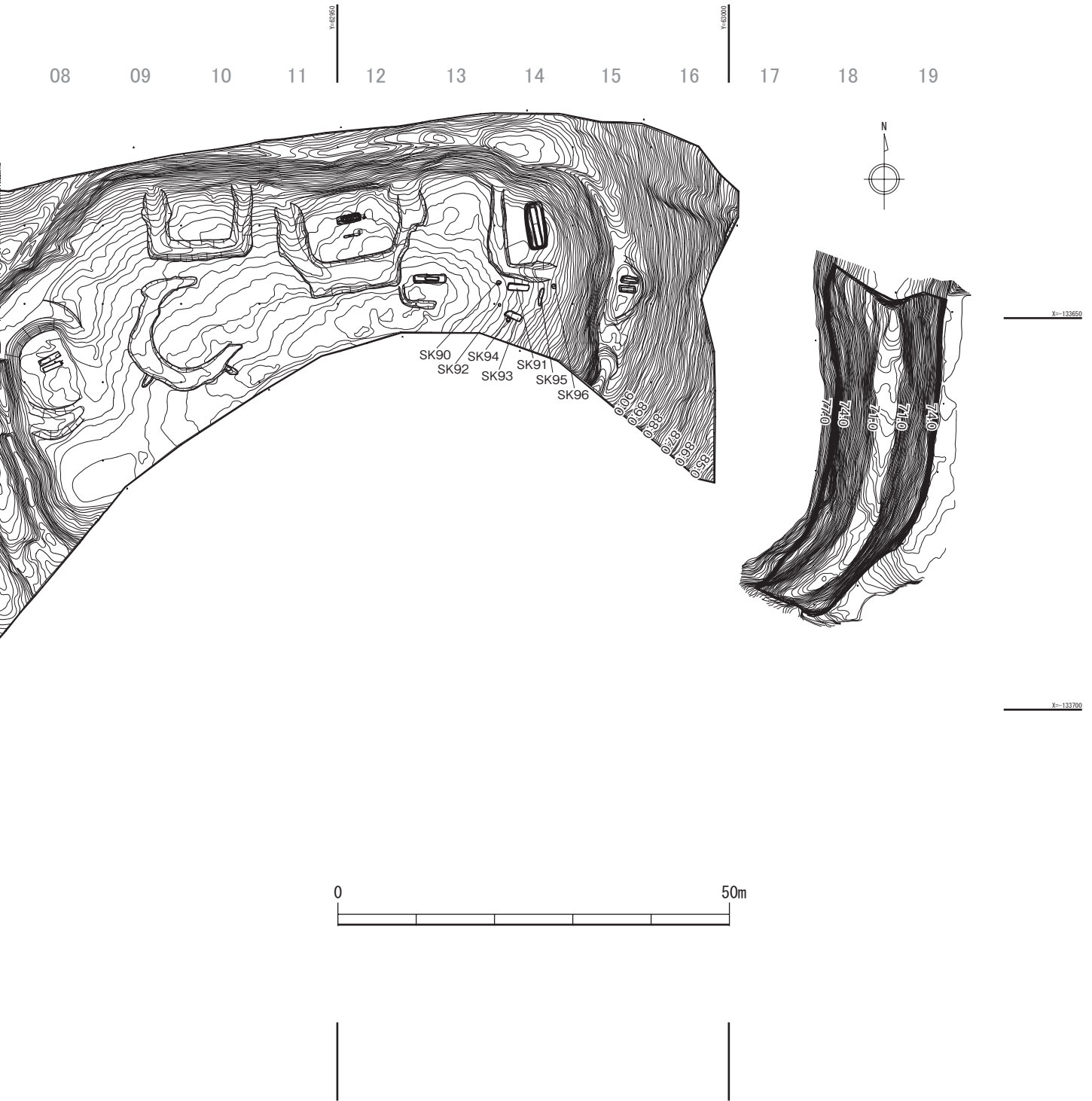
SX01・SX02



吉田古墳群



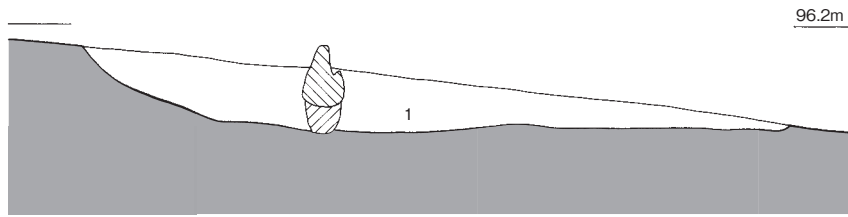
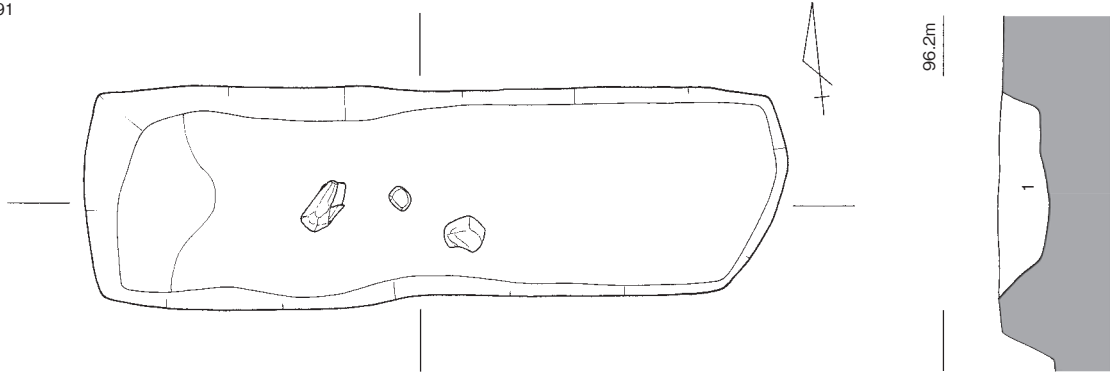
全体図 (西半)



全体図（東半）

図版173 弥生 遺構

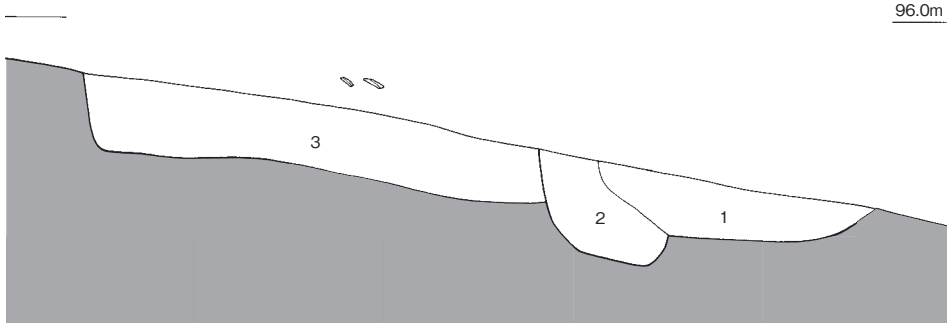
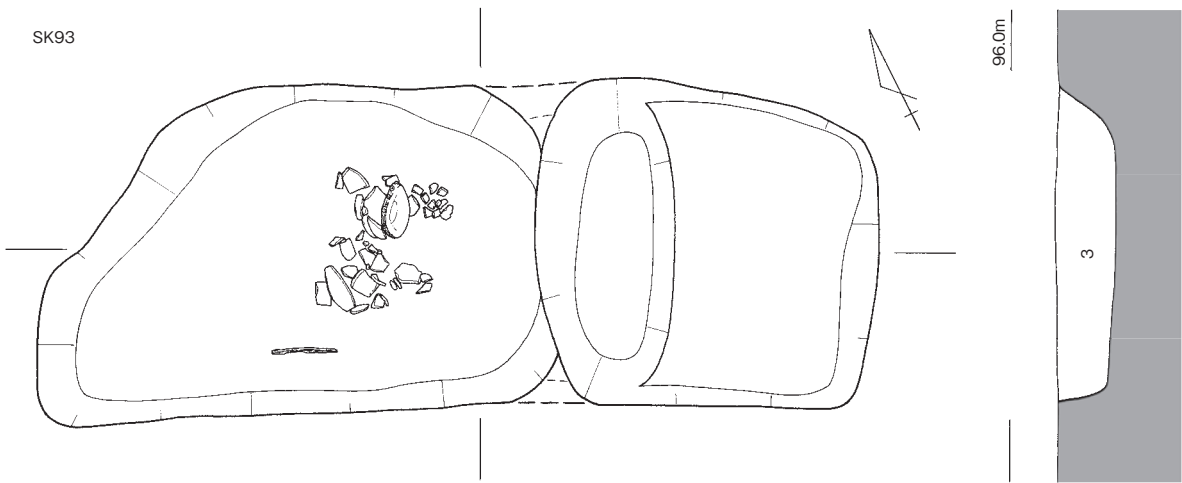
SK91



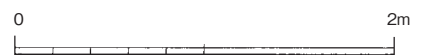
1. 褐色 極細砂(小礫含む)



SK93

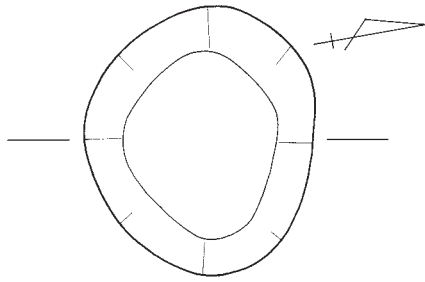


1. にふい黄褐色 細砂(粗砂~中礫・炭を含む)
 2. 明褐色 細砂~極細砂(粗砂~中礫・焼土を含む)
 3. 黄褐色 細砂~極細砂(小・中礫を多く含む、炭を含む)



SK91・SK93

SK96

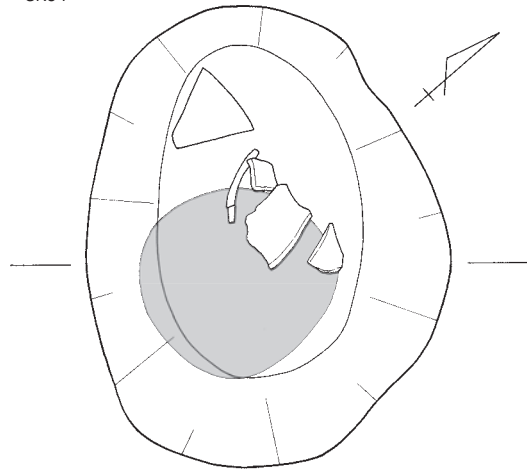


95.5m

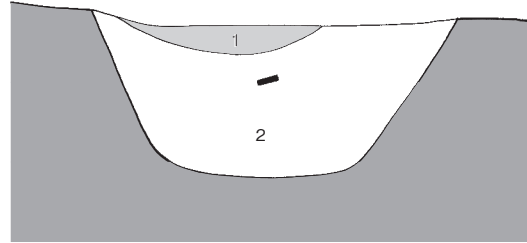


1. 明褐色 細砂(小礫を含む)

SK94

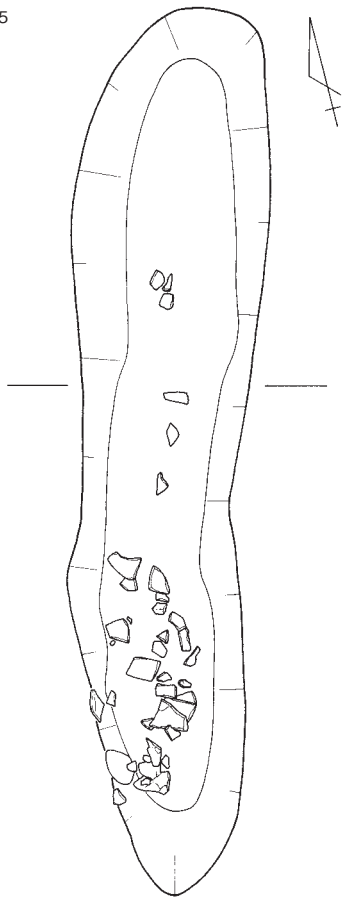


96.0m

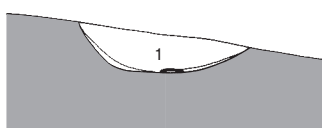


1. 灰黄褐色 粘土
2. 明褐色 細砂(小礫を含む)

SK95

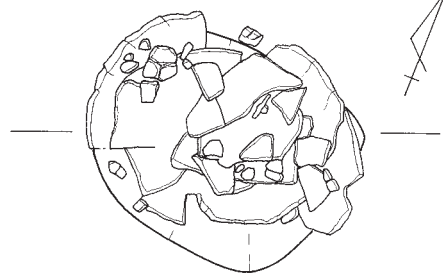


95.4m

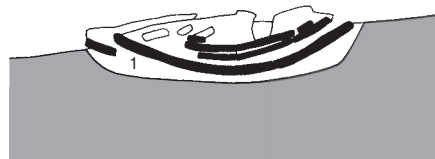


1. 明褐色 細砂(小礫を含む、土器を多量に含む)

SK97



93.8m

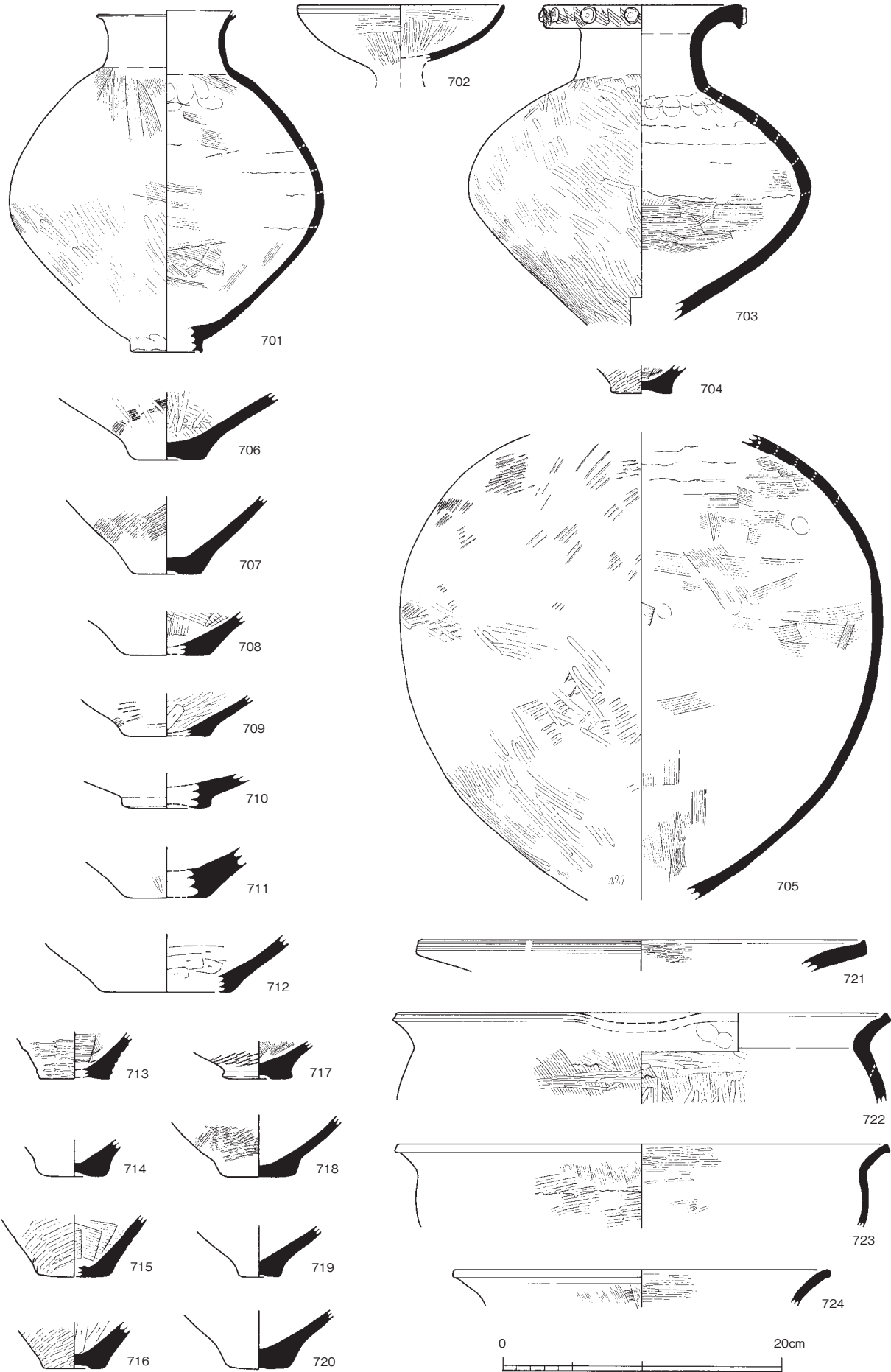


1. 褐色 シルト質極細砂

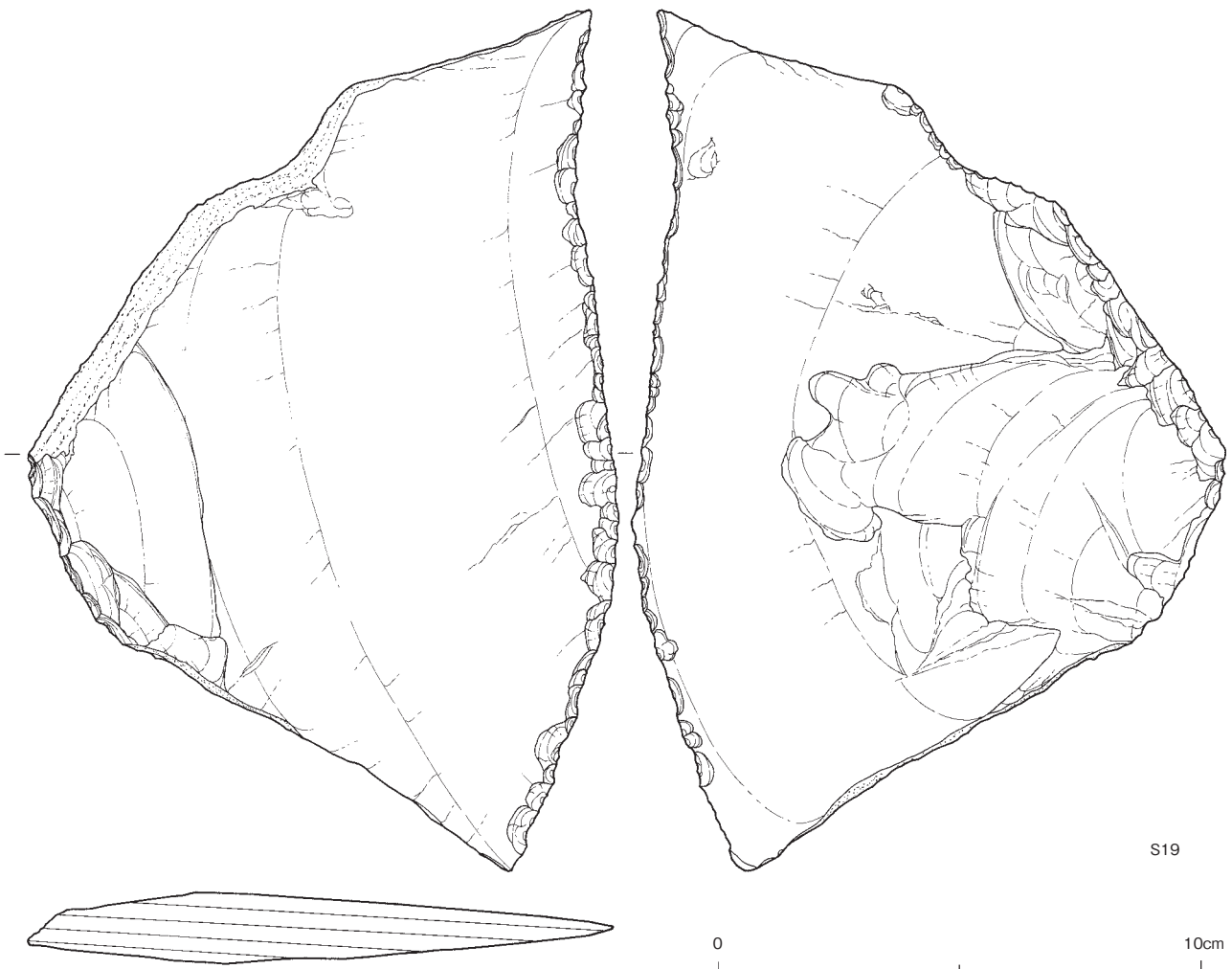
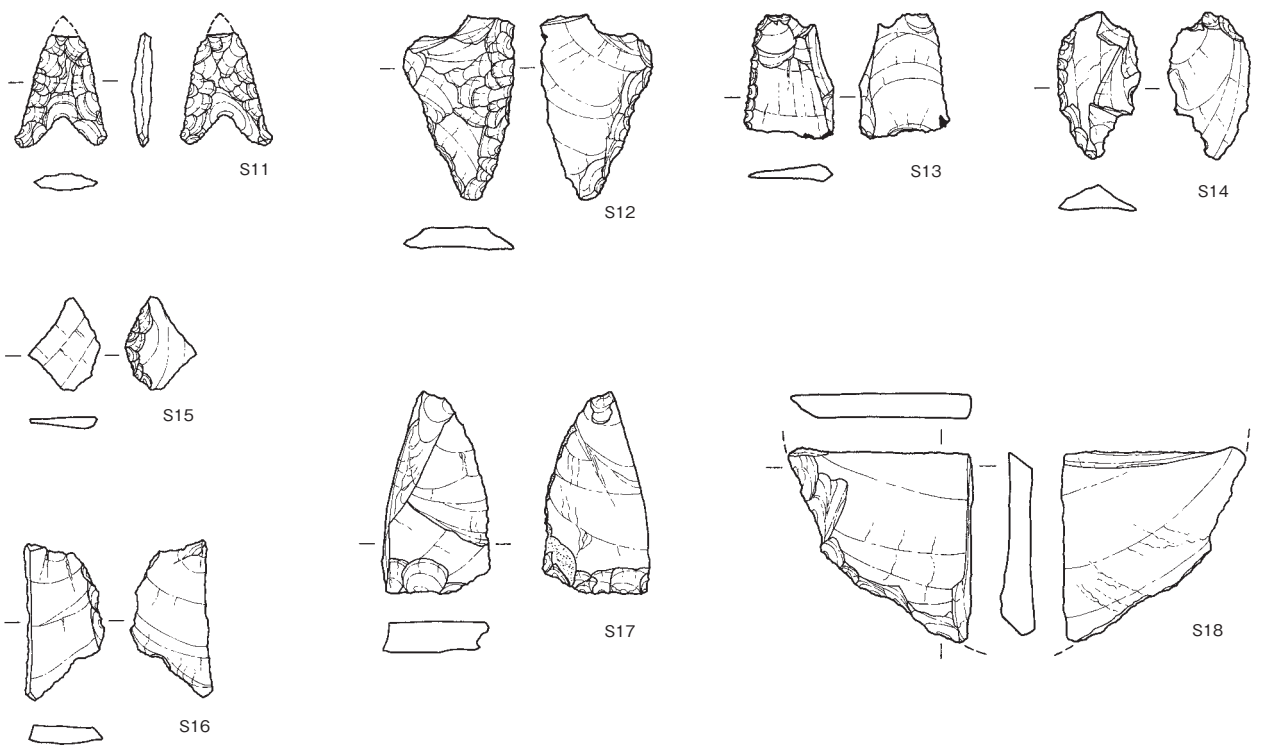


SK94・SK95・SK96・SK97

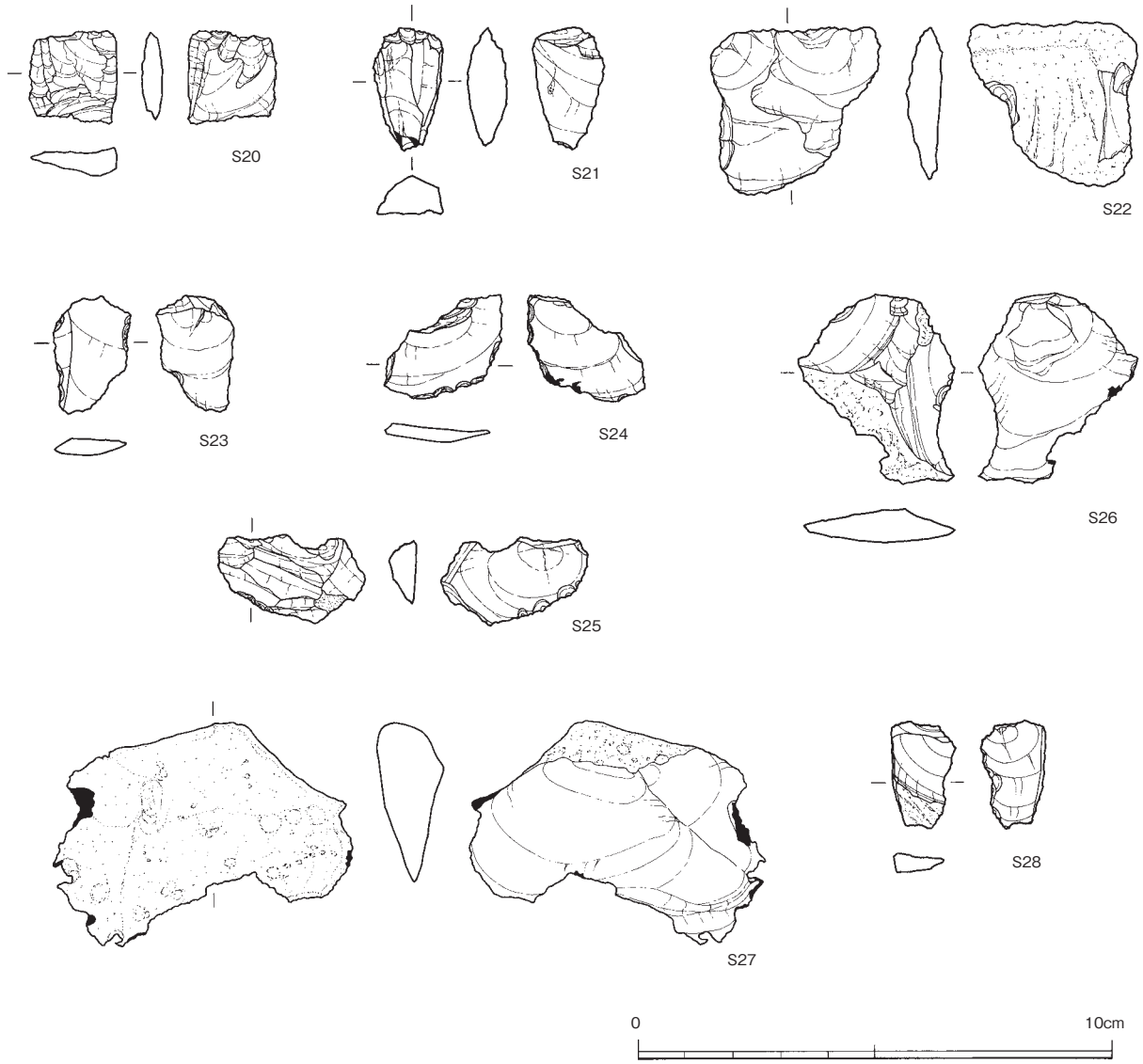
图版175 弥生 遺物



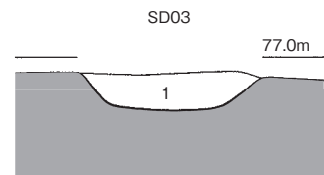
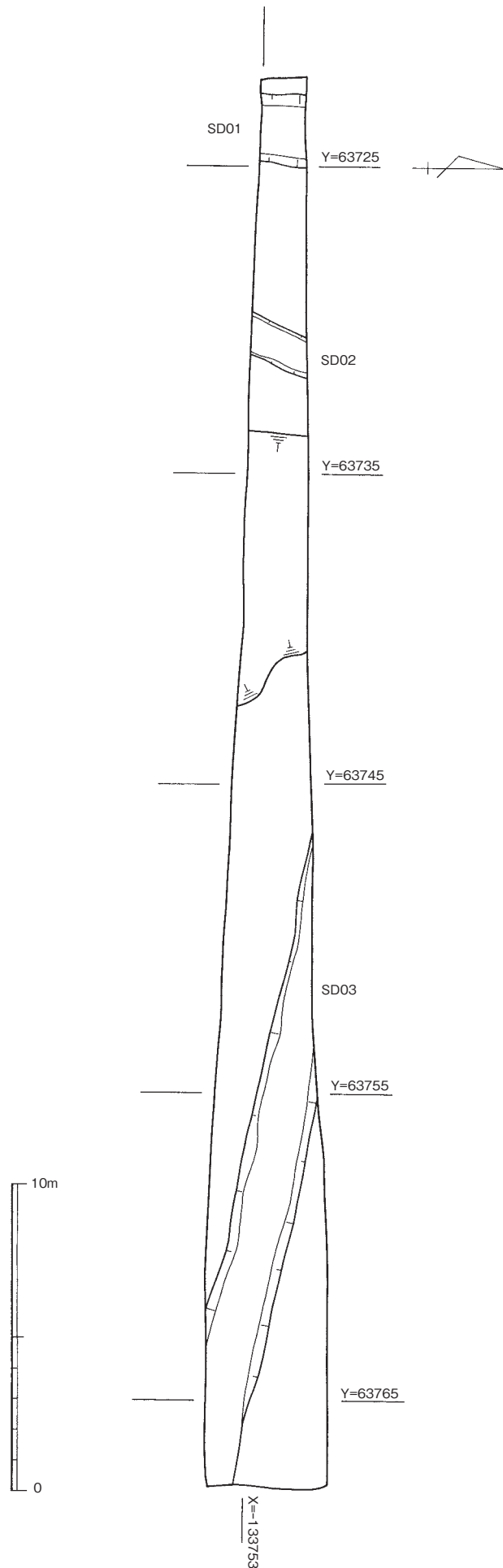
土器 (701~724)



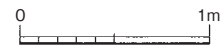
石器 (S11~S19)



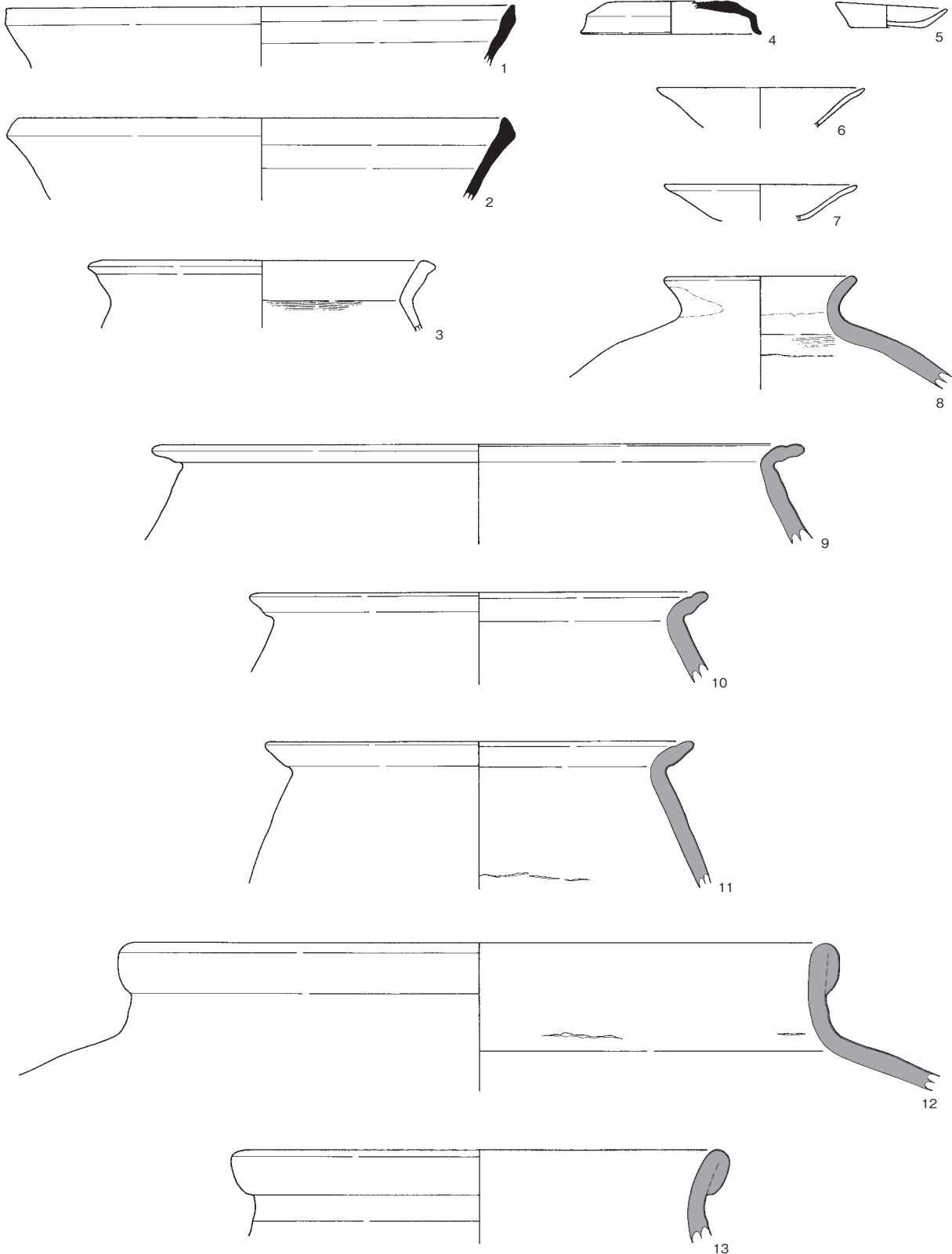
石器 (S20~S28)



1. 黄褐色シルト・灰色シルト混じり極細砂



平面図 SD03断面



高男寺本丸遺跡

兵庫県文化財調査報告 第409冊

三木市

吉田住吉山遺跡群

本文・図版編

主要地方道三木三田線住宅地関連公共事業施設等総合整備促進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年3月24日 発行

編 集 兵庫県立考古博物館
〒675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号

発 行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 株式会社 廣濟堂 神戸営業所
〒650-0044 神戸市中央区東川崎町1丁目5番7号 3F
